

三田市

か わ よ け ふ じ の き

川除・藤ノ木遺跡

—武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第 1 分冊



1992年3月

兵庫県教育委員会



三田盆地全景





遺跡遠景



住居跡群



S H06土層断面（焼失状況）



円形周溝墓群



SH34



SH52



SH52



掘立柱建物群B



SE10



S H34出土土器



S H52出土土器



S H76出土土器



出土中世土器

例 言

1. 本書は、三田市川除字藤ノ木・岸ノ上に所在する川除・藤ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一級河川武庫川河川改修に先立つもので、兵庫県北摂整備局の委託を受け、兵庫県教育委員会が昭和61年度に確認調査を、昭和62年度に全面調査を実施した。確認調査は、社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係 吉田 昇・村上泰樹・西口圭介が、全面調査は同吉田 昇・吉識雅仁・市橋重喜（故人）・山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉が担当した。
なお、全面調査については、新井組に作業委託を行った。
3. 遺構の実測・写真撮影は調査員及び補助員が行った。なお、空中写真撮影については、国際航業株式会社へ委託した。また、巻首図版2に使用した空中写真は、三田市広報広聴課の許可を得て掲載したもので、昭和62年に撮影したものである。
4. 整理作業は、昭和63年度は兵庫県教育委員会が兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて実施し、平成元～3年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。
5. 遺物の復元・実測・トレースは整理作業班で行い、遺物写真については吉田カメラ商会に委託した。また、金属製品の保存処理については兵庫県教育委員会 加古千恵子が兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて行い、木製品の保存処理については同 別府洋二が同所にて行った。
6. 弥生土器および土師器の胎土分析については武庫川女子大学薬学部 安田博幸教授、須恵器・丹波焼の胎土分析については奈良教育大学 三辻利一教授、植物遺体の鑑定については流通化学大学 南木隆彦助教授、木製品の樹種鑑定については京都大学 島地 謙名誉教授・京都大学木材研究所 林昭三教授に依頼し、サヌカイトおよび碧玉の産地同定については京都大学原子力実験所 藁科哲夫氏・東村武信氏に依頼し、それぞれ玉稿をいただいた。
サヌカイトを除く石器の石材については神戸大学教養部 後藤博彌教授に依頼し、鑑定していただいた。なお、その鑑定結果については、本文中に石器の報告とともに記してある。
また、木製品の鞣については、大阪大学の河野通明氏に鑑定して頂き、実測図の指導をはじめ、参考文献および類例の紹介をいただくなど多大な御教示を得た。
7. 調査は、兵庫県北摂整備局の武庫川河川改修計画に伴う多角点座標をもとに国土座標を求め、これを基準に実施した。なお、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は、座標北を示し、磁北はこれより6°40'西へ振っている。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・図版・挿図ともに統一している。
10. 本書の編集は山田・甲斐・高瀬が行った。
11. 本報告にかかる遺物は兵庫県教育委員会 魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
12. 最後に、発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

青木哲哉（立命館大学）・近藤義郎（岡山大学名誉教授）・高島信之（三田市教育委員会）・高橋 学

(立命館大学)・谷 雅俊(神戸市教育委員会)・千種 浩(神戸市教育委員会)・西村 康(奈良国立文化財研究所)・松井 章(奈良国立文化財研究所)・丸山 潔(神戸市教育委員会)・安田 滋(神戸市教育委員会)・山崎敏昭(三田市教育委員会)・山本雅和(神戸市教育委員会)

凡 例

1. 遺構については、竪穴住居跡をSH、掘立柱建物をSB、柵をSA、土塙をSK、井戸をSE、溝をSD、埋葬遺構をSX、柱穴をPと略称している。
2. 住居跡に関する記述のうち、床面の面積とは、周壁溝より内側の面積のことである。
3. 本文中の井戸の名称・分類については宇野隆夫論文(『井戸考』『史林』六十五巻五号 1982年)による。
4. 遺物は本報告書掲載順に通しの番号を付けている。ただし、石器にはS、木製品にはW、鉄器にはMをそれぞれ番号の頭に付け、土器と区別している。
5. 弥生時代～古墳時代の土器については、土師器・須恵器の区別なく断面を黒塗りしているが、平安時代以降の土器については、須恵器・陶磁器を塗りつぶし、黒色土器・瓦器はトーンを貼り、土師器と区別している。
6. 土器の観察表内の()付数値については、反転復元により得られた数値である。
7. 本書に用いた時期は、第5章第1節～第3節の検討結果にもとづくもので、おおよその年代観は以下のとおりである。

弥生時代	前期	(+)
	中期	川除1期
	後期 (庄内式)	川除2期 川除3期 川除4期 川除5期 川除6期
古墳時代	前期	川除7期
	後期	川除8期 (+) 川除9期
奈良時代		川除10期
平安時代	前期	(+)
	中期	川除11期 (中世I期) 川除12期 (中世II期)
	後期	川除13期 (中世III期) 川除14期 (中世IV期)
鎌倉時代		川除15期 (中世V期)

本文目次

第1章 調査の経緯	(山田清朝)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 発掘調査の経過		2
第3節 整理作業の経過		5
1. 整理作業		5
2. 保存処理作業		6
第2章 遺跡をとりまく環境	(山田)	9
第1節 地理的環境		9
第2節 歴史的環境		11
第3章 調査の結果	(山田)	29
第1節 調査地の概観		29
1. 微地形の復元		29
2. 微地形の変遷		34
3. 基本層序		45
4. 基本層序と遺構の検出		46
第2節 調査の概要		49
第3節 I区の調査		51
1. 概要	(甲斐昭光)	51
2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬一嘉)	53
3. 平安時代以降の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	203
第4節 II区の調査		235
1. 概要	(高瀬)	235
2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	237
3. 古墳時代後期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	350
4. 平安時代以降の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	352
第5節 III区の調査		367
1. 概要	(高瀬)	367
2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	369
3. 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	435
4. 平安時代以降の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	449
第6節 IV区の調査	(以下第2分冊)	497
1. 概要	(山田)	497
2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	499
3. 古墳時代後期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	519

4. 平安時代以降の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬)	585
第4章 自然科学的方法による調査・分析		771
第1節 川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種	(島地 謙・林 昭三)	771
第2節 川除・藤ノ木遺跡出土の碧玉製管玉・玉原材料の蛍光X線分析による原材産地分析	(藁科哲男・東村武信)	787
第3節 川除・藤ノ木遺跡出土のサヌカイト製石器の石材産地分析	(藁科哲男・東村武信)	799
第4節 川除・藤ノ木遺跡出土須恵器の産地推定	(三辻利一)	805
第5節 川除・藤ノ木遺跡出土土器の胎土の科学分析	(安田博幸・森 真由美)	811
第6節 川除・藤ノ木遺跡の大型植物化石	(南木睦彦)	815
第5章 遺物のまとめ		
第1節 弥生時代～古墳時代前期の上器	(高瀬)	825
第2節 古墳時代後期の上器	(甲斐)	845
第3節 平安時代から鎌倉時代にかけての土器	(山田)	853
第4節 木製品	(甲斐)	891
第5節 石器	(高瀬)	895
第6節 鉄製品	(山田)	897
第6章 遺構のまとめ		
第1節 弥生時代～古墳時代前期	(高瀬)	899
第2節 古墳時代後期	(甲斐)	904
第3節 平安～鎌倉時代	(山田)	906
第7章 遺跡の検討		
第1節 竪穴住居跡について	(甲斐)	911
第2節 円形周溝墓について	(甲斐)	929
第3節 溜池について	(山田)	935
第4節 井戸について	(山田)	939
第5節 平安時代～鎌倉時代にかけての掘立柱建物群について	(山田)	943
第8章 総括		
第1節 調査の成果	(山田)	965
第2節 三田盆地における遺跡の位置	(山田)	970

挿 図 目 次

第1図	河川改修と調査範囲……………	1	第31図	I区弥生時代	
第2図	第2次確認調査位置……………	2		～古墳時代前期の遺構……………	52
第3図	第3次確認調査位置……………	2	第32図	S H01……………	53
第4図	地区割り……………	3	第33図	S H01出土土器……………	54
第5図	I区地区割り……………	3	第34図	S H01出土石器……………	54
第6図	II区地区割り……………	4	第35図	S H02……………	56
第7図	深掘りトレンチの位置……………	4	第36図	S H02出土土器……………	57
第8図	遺跡の位置……………	8	第37図	S H03……………	59
第9図	周辺主要遺跡……………	10	第38図	S H03出土土器……………	59
第10図	遺跡の分布……………	13	第39図	S H03出土鉄器……………	60
第11図	弥生時代前期～中期の		第40図	S H03出土石器……………	60
	主要遺跡……………	16	第41図	S H04……………	61
第12図	弥生時代後期～古墳時代		第42図	S H04出土土器……………	62
	前期の主要遺跡……………	17	第43図	S H05……………	64
第13図	古墳時代後期の主要遺跡……………	19	第44図	S H06……………	65
第14図	平安時代中期～鎌倉時代後期の		第45図	S H06遺物出土位置……………	66
	主要遺跡……………	23	第46図	S H06 土器群A・B出土状況…	67
第15図	遺跡の立地(1)……………	28	第47図	S H06出土土器(1)……………	68
第16図	遺跡の立地(2)……………	29	第48図	S H06出土土器(2)……………	69
第17図	遺跡の立地(3)……………	30	第49図	S H06出土土器(3)……………	70
第18図	遺跡の立地(4)……………	31	第50図	S H06出土鉄器……………	71
第19図	遺跡内の微地形……………	32	第51図	S H06出土石器……………	71
第20図	復元微地形と遺構面の対応……………	33	第52図	S H07……………	74
第21図	土器群A出土土器(1)……………	35	第53図	S H07出土土器……………	75
第22図	土器群A出土土器(2)……………	36	第54図	S H07出土石器……………	75
第23図	土器群A出土土器(3)……………	37	第55図	S H07出土鉄器……………	75
第24図	土器群B出土土器(1)……………	38	第56図	S H08……………	76
第25図	土器群B出土土器(2)……………	39	第57図	S H08～S H11の切り合い関係…	77
第26図	土器群C出土土器……………	40	第58図	S H08出土土器……………	78
第27図	土層図……………	44	第59図	S H09……………	79
第28図	全体図……………	47・48	第60図	S H09出土土器……………	80
第29図	調査地周辺の小字……………	49	第61図	S H10……………	81
第30図	I区の遺構……………	50	第62図	S H11……………	82
			第63図	S H11出土土器……………	83

第64图	S H11出土石器	84	第102图	S H25	125
第65图	S H12	85	第103图	S H25出土土器	127
第66图	S H12出土土器	86	第104图	S H25出土管玉	128
第67图	S H12出土石器	87	第105图	S H25出土石器	128
第68图	S H13	89	第106图	S H26	130
第69图	S H13出土台石	90	第107图	S H27	131
第70图	S H13出土土器	91	第108图	S H27出土土器	133
第71图	S H13出土石器	92	第109图	S H27出土石器	133
第72图	S H14	93	第110图	S H28	135
第73图	S H14出土土器(1)	94	第111图	S H28出土土器	136
第74图	S H14出土土器(2)	95	第112图	S H28出土铁器	136
第75图	S H15	98	第113图	S H29	137
第76图	S H15出土土器	99	第114图	S H29土器出土位置	138
第77图	S H15出土石器	99	第115图	S H29出土土器(1)	139
第78图	S H16	101	第116图	S H29出土土器(2)	140
第79图	S H16出土土器	102	第117图	S H30	142
第80图	S H16出土石器	103	第118图	S H31	144
第81图	S H17	105	第119图	S H31出土土器(1)	145
第82图	S H18	106	第120图	S H31出土土器(2)	146
第83图	S H18出土土器	107	第121图	S H31出土土器(3)	147
第84图	S H19	108	第122图	S H32	150
第85图	S H19出土土器	109	第123图	S H32出土土器	151
第86图	S H20	110	第124图	S B04	152
第87图	S H21	112	第125图	S B05	153
第88图	S H21出土土器	113	第126图	S B06	153
第89图	S H21出土石器	113	第127图	S B07	154
第90图	S H22	114	第128图	S B08	154
第91图	S H22土器出土位置	115	第129图	S B09	155
第92图	S H22出土石器	115	第130图	S B10	156
第93图	S H22出土土器	116	第131图	S B11	156
第94图	S H23	118	第132图	S B12	157
第95图	S H23土器出土位置	119	第133图	S B14	158
第96图	S H23出土土器	120	第134图	P01出土石器	158
第97图	S H23出土铁器	121	第135图	S K08出土土器	159
第98图	S H23出土石器(1)	121	第136图	S K09出土土器	159
第99图	S H23出土石器(2)	121	第137图	S K10出土石器	160
第100图	S H24	123	第138图	S K11出土石器(1)	160
第101图	S H24出土土器	124	第139图	S K11出土石器(2)	160

第140図	S K 15	161	第178図	S X 03	201
第141図	S K 15出土土器 (1)	162	第179図	S X 03出土石器	201
第142図	S K 15出土土器 (2)	163	第180図	I 区平安時代	
第143図	S K 17	164		～鎌倉時代の遺構	202
第144図	S K 17出土土器	165	第181図	S B 01	203
第145図	S K 19出土土器	166	第182図	P 9・P 10・P 15の柱根	204
第146図	S K 21出土鉄器	166	第183図	S B 02出土土器	205
第147図	S K 22出土石器	167	第184図	S B 02	205
第148図	S K 23	168	第185図	S B 03	206
第149図	S K 24	169	第186図	S B 03出土土器	207
第150図	S K 24出土土器 (1)	170	第187図	S B 13	207
第151図	S K 24出土土器 (2)	171	第188図	S B 15	208
第152図	S K 24出土土器 (3)	172	第189図	S B 15出土土器	209
第153図	S K 24出土石器	173	第190図	S B 16	210
第154図	S K 25出土土器	175	第191図	S B 16出土土器	211
第155図	S K 26	176	第192図	S B 17 P 21柱根	211
第156図	S K 26出土土器 (1)	177	第193図	S B 17	212
第157図	S K 26出土土器 (2)	178	第194図	S B 18	213
第158図	S K 34	180	第195図	S B 19	214
第159図	S K 34出土土器	180	第196図	S B 20	214
第160図	S D 13横断面	181	第197図	P 02出土土器	215
第161図	S D 13出土土器	182	第198図	P 04出土土器	215
第162図	S D 13出土石器	182	第199図	P 03出土柱根	215
第163図	S D 14横断面	183	第200図	S K 01	216
第164図	S D 14出土土器 (1)	184	第201図	S K 01出土土器	217
第165図	S D 14出土土器 (2)	185	第202図	S K 06	218
第166図	S D 14出土土器 (3)	186	第203図	S D 24出土土器	223
第167図	S D 14出土石器 (1)	187	第204図	S X 01	224
第168図	S D 14出土石器 (2)	188	第205図	S X 02	225
第169図	S D 14出土石器 (3)	189	第206図	S X 02出土土器	225
第170図	S D 15出土土器 (1)	193	第207図	S E 01井戸材	226
第171図	S D 15出土土器 (2)	194	第208図	S E 01出土木製品	227
第172図	S D 16出土土器	196	第209図	S E 02井戸材	228
第173図	S D 18横断面	197	第210図	S E 02出土土器	229
第174図	S D 18出土土器	197	第211図	S E 03	230
第175図	S D 25出土土器	198	第212図	S E 04	231
第176図	S D 26出土土器	198	第213図	S E 04井戸材	232
第177図	S D 27出土土器	199	第214図	S E 04出土土器	232

第215図	II区の遺構	234	第252図	S H45出土土器	274
第216図	II区弥生時代 ～古墳時代前期の遺構	236	第253図	S H45出土石器	274
第217図	S H33	237	第254図	S H47	276
第218図	S H33出土土器	238	第255図	S H47土器出土位置	277
第219図	S H34	240	第256図	S H47出土土器(1)	278
第220図	S H34出土台石	241	第257図	S H47出土土器(2)	279
第221図	S H34土器出土位置	242	第258図	S H48	281
第222図	S H34出土土器(1)	243	第259図	S H48出土土器	282
第223図	S H34出土土器(2)	244	第260図	S H49	284
第224図	S H34出土土器(3)	245	第261図	S H49出土土器	285
第225図	S H34出土土器(4)	246	第262図	S H49出土石器	285
第226図	S H34出土土器(5)	247	第263図	S H50	287
第227図	S H34出土鳥形土製品	248	第264図	S H50出土土器	287
第228図	S H34出土石器	248	第265図	S H51出土土器	288
第229図	S H35	252	第266図	S H51	289
第230図	S H35出土土器	252	第267図	S B26	290
第231図	S H35出土石器	253	第268図	S K49	291
第232図	S H36	254	第269図	S K49出土土器	291
第233図	S H36 P2・P3	254	第270図	S K50出土土器	292
第234図	S H36 P2・P3の柱根	255	第271図	S K53	293
第235図	S H36出土土器	256	第272図	S K53出土土器	294
第236図	S H37	258	第273図	S K54	296
第237図	S H37出土土器	259	第274図	S K54出土土器(1)	297
第238図	S H38・39	260	第275図	S K54出土土器(2)	298
第239図	S H38出土土器	261	第276図	S K54出土土器(3)	299
第240図	S H40	262	第277図	S K54出土石器	300
第241図	S H41	263	第278図	S K55出土石器	302
第242図	S H41出土土器	264	第279図	S K55	303
第243図	S H42	265	第280図	S K56出土土器	303
第244図	S H42出土石器	266	第281図	S K56	304
第245図	S H43	267	第282図	S K63	305
第246図	S H43出土土器(1)	268	第283図	S K63出土土器(1)	306
第247図	S H43出土土器(2)	269	第284図	S K63出土土器(2)	307
第248図	S H44	270	第285図	S K63出土土器(3)	308
第249図	S H44土器出土位置	271	第286図	S K63出土土器(4)	309
第250図	S H44出土土器	272	第287図	S K64出土土器	311
第251図	S H45・46	273	第288図	S K65	312
			第289図	S K66	312

第290図	S K 67	312	第327図	S B 23	354
第291図	S D 27横断面	314	第328図	S B 23出土土器	355
第292図	S D 27出土土器	315	第329図	S B 24	356
第293図	S D 28出土土器	316	第330図	S B 25	357
第294図	S D 30横断面	317	第331図	S B 27出土土器	357
第295図	S D 32横断面	318	第332図	S B 27	358
第296図	S D 32出土土器	318	第333図	S B 28	359
第297図	S D 40横断面	321	第334図	S B 28出土土器	359
第298図	S D 40出土土器	322	第335図	P 05出土土器	360
第299図	S D 42	324	第336図	S K 51	361
第300図	S D 42出土矢板	324	第337図	S K 51出土土器	362
第301図	S D 42出土土器	325	第338図	S K 68	362
第302図	S D 43横断面	325	第339図	S K 68出土土器	363
第303図	S D 43出土土器 (1)	326	第340図	S K 71・72	364
第304図	S D 43出土土器 (2)	327	第341図	S K 71出土土器	364
第305図	S D 49出土石器	331	第342図	S K 72出土木製品	365
第306図	S D 50横断面	331	第343図	III区の遺構	366
第307図	S D 50出土土器	331	第344図	III区弥生時代	
第308図	S X 04・05の立地	334		～古墳時代前期の遺構	368
第309図	S X 04・05	335	第345図	S H 52	369
第310図	S X 04と05の切り合い	335	第346図	S H 52遺物出土位置	371
第311図	S X 04周溝横断面	336	第347図	S H 52出土土器 (1)	372
第312図	S X 04	337・338	第348図	S H 52出土土器 (2)	373
第313図	S X 04出土土器	339	第349図	S H 52出土土器 (3)	374
第314図	S X 05	341・342	第350図	S H 52出土土器 (4)	375
第315図	S X 05周溝横断面	343	第351図	S H 52出土土器 (5)	376
第316図	S X 05貼石	343	第352図	S H 52出土土器 (6)	377
第317図	S X 05出土土器	344	第353図	S H 52出土土器 (7)	378
第318図	S X 06	346	第354図	S H 52出土石器 (1)	379
第319図	S X 06土器棺	347	第355図	S H 52出土石器 (2)	379
第320図	水田址	349	第356図	S H 53	382
第321図	II区古墳時代後期の遺構	350	第357図	S H 54	384
第322図	S D 54出土土器	351	第358図	S H 54出土土器	385
第323図	S D 58出土土器	351	第359図	S H 55	387
第324図	II区平安時代		第360図	S H 55出土土器 (1)	388
	～鎌倉時代の遺構	352	第361図	S H 55出土土器 (2)	389
第325図	S B 21	353	第362図	S H 55出土石器	390
第326図	S B 22	354	第363図	S H 56・57	392

第364図	S H56出土鉄器	393	第402図	S K98出土土器(1)	426
第365図	S H57出土土器	394	第403図	S K98出土土器(2)	427
第366図	S H58	395	第404図	S K98出土石器	428
第367図	S H58出土土器	396	第405図	S K105出土土器	429
第368図	S H59・60	397	第406図	S D68出土土器	430
第369図	S H59出土土器	398	第407図	S D84横断面	432
第370図	S H60出土土器	399	第408図	S D84出土土器	432
第371図	S H61・62・63	400	第409図	S D85出土土器	433
第372図	S H61出土土器	400	第410図	Ⅲ区古墳時代後期	
第373図	S H61	401		～奈良時代の遺構	434
第374図	S H62出土土器	403	第411図	S D54横断面	435
第375図	S H64	405	第412図	S D54出土土器	435
第376図	S H64出土土器	406	第413図	S D73横断面	437
第377図	S H65	407	第414図	S D83横断面	438
第378図	S H65出土土器	407	第415図	S D83出土土器	438
第379図	S H66	408	第416図	S D83出土木製品	439
第380図	S H66出土石器	409	第417図	S D83・溜池・S D86	440
第381図	S H67	410	第418図	溜池	441
第382図	S H68	411	第419図	溜池出土土器	442
第383図	S H68土器出土位置	412	第420図	溜池出土木製品(1)	442
第384図	S H68出土土器	413	第421図	溜池出土木製品(2)	443
第385図	S H69	415	第422図	民具資料の犁と部分名称	444
第386図	S H69出土土器	416	第423図	S D86出土木製品	445
第387図	S H70	417	第424図	S D70出土土器	446
第388図	S H70出土土器	418	第425図	Ⅲ区平安時代	
第389図	S B29	418		～鎌倉時代の遺構	448
第390図	S B30	419	第426図	S B33	449
第391図	S B31	420	第427図	S B34	450
第392図	S B32	420	第428図	S B34出土土器	451
第393図	S K86	421	第429図	S B35	451
第394図	S K86出土土器	422	第430図	掘立柱建物群C	452
第395図	S K87出土土器	422	第431図	S B36	453
第396図	S K88	423	第432図	S B36出土土器	454
第397図	S K91	424	第433図	S B37出土土器	454
第398図	S K91出土土器	424	第434図	S B37	455
第399図	S K95	425	第435図	S B38	456
第400図	S K95出土石器	425	第436図	S B38出土土器	457
第401図	S K98	426	第437図	S B39	458

第438図	S B 40	458	第476図	S E 07出土土器	492
第439図	S B 40出土土器	459	第477図	S E 08	494
第440図	S B 41	459	第478図	S E 08水溜	495
第441図	S B 42	460	第479図	IV区の遺構	496
第442図	S B 43	461	第480図	IV区弥生時代	
第443図	S B 43出土土器	461		～古墳時代前期の遺構	498
第444図	S B 44	462	第481図	S H 81	499
第445図	S B 45	463	第482図	S H 81土器出土位置	500
第446図	S B 46	464	第483図	S H 81出土土器	501
第447図	S B 47	465	第484図	S H 82	503
第448図	S B 48	465	第485図	S H 82出土土器	504
第449図	P 06柱根	466	第486図	S B 76	505
第450図	柱穴出土土器	468	第487図	S B 77	506
第451図	S K 78	469	第488図	S B 78	507
第452図	S K 80出土土器	470	第489図	S B 80	508
第453図	S K 81出土土器 (1)	470	第490図	S B 83	509
第454図	S K 81出土土器 (2)	471	第491図	S K 126出土土器	510
第455図	S K 82	472	第492図	S K 127出土土器	511
第456図	S K 82出土土器	473	第493図	S K 129	512
第457図	S K 83	474	第494図	S K 129出土土器	513
第458図	S K 83出土土器	475	第495図	S K 131	513
第459図	S K 83出土木製品	476	第496図	S K 131出土土器	514
第460図	S K 84出土土器	477	第497図	S K 134出土土器	515
第461図	S K 96	477	第498図	S K 135出土石器	516
第462図	S K 97	478	第499図	S K 130出土土器	516
第463図	S K 100出土土器	478	第500図	IV区古墳時代後期の遺構	518
第464図	S K 103	479	第501図	S H 71	519
第465図	S K 103出土土器	479	第502図	S H 71竈	520
第466図	S D 62・63横断面	481	第503図	S H 71出土土器	520
第467図	S D 66横断面	482	第504図	S H 72	522
第468図	S D 66出土土器	483	第505図	S H 72竈	523
第469図	S D 81出土土器	486	第506図	S H 72出土土器 (1)	523
第470図	S E 06遺物出土状況	487	第507図	S H 72土器出土位置	524
第471図	S E 06井戸材	488	第508図	S H 72出土土器 (2)	525
第472図	S E 06出土土器	489	第509図	S H 73	527
第473図	S E 06出土木製品	490	第510図	S H 73出土土器	528
第474図	S E 07	491	第511図	S H 74	529
第475図	S E 07井戸側転用土器	492	第512図	S H 74出土土器	530

第513図	S H75	531	第551図	S D96出土土器 (1)	573
第514図	S H75竈	532	第552図	S D96出土土器 (2)	574
第515図	S H75土器出土位置	533	第553図	S D96出土土器 (3)	575
第516図	S H75出土土器 (1)	534	第554図	S D107横断面	577
第517図	S H75出土土器 (2)	535	第555図	S D107出土土器	578
第518図	S H76	538	第556図	S D129横断面	580
第519図	S H76竈	539	第557図	S D129出土土器 (1)	580
第520図	S H76遺物出土位置	540	第558図	S D129出土土器 (2)	581
第521図	S H76出土鉄器	540	第559図	IV区平安時代	
第522図	S H76出土石器	540		～鎌倉時代の遺構	584
第523図	S H76出土土器 (1)	541	第560図	S B49	585
第524図	S H76出土土器 (2)	542	第561図	S B50	586
第525図	S H76出土土器 (3)	543	第562図	S B51	586
第526図	S H77	545	第563図	掘立柱建物群A	587
第527図	S H77竈	546	第564図	S B52	588
第528図	S H77出土土器	546	第565図	S B52出土土器	588
第529図	S H78	548	第566図	S B53	589
第530図	S H78竈	549	第567図	S B53出土土器	590
第531図	S H78出土土器	549	第568図	S B54	590
第532図	S H79	550	第569図	S B54出土土器	591
第533図	S H79出土土器	551	第570図	S B55	591
第534図	S H80	553	第571図	S B55出土土器	592
第535図	S H80竈	554	第572図	S B56	593
第536図	S H80出土土器	555	第573図	S B56出土土器	594
第537図	S H83	556	第574図	S B57	595
第538図	S H83出土土器	558	第575図	S B57出土土器	595
第539図	S B79	559	第576図	S B58	596
第540図	S B81	560	第577図	S B59	597
第541図	S B82	560	第578図	S B60	598
第542図	S B84	561	第579図	S B61出土土器	598
第543図	S K120出土土器	562	第580図	S B61	599
第544図	S K121出土土器	562	第581図	S B62	600
第545図	S K123出土土器	563	第582図	S B63 P 4	600
第546図	S D86横断面	565	第583図	S B63	601
第547図	S D86出土土器	565	第584図	S B63 P 4 出土土器	602
第548図	S D86出土木製品 (1)	566	第585図	S B63出土土器	602
第549図	S D86出土木製品 (2)	567	第586図	S B64	603
第550図	S D92出土土器	570	第587図	S B64出土土器	604

第588图	掘立柱建物群B	604	第626图	S K115出土土器(2)	657
第589图	S B65	605	第627图	S K119出土土器	659
第590图	S B65出土土器	606	第628图	S K136	660
第591图	S B66	608	第629图	S K136出土土器	660
第592图	S B66出土土器	609	第630图	S D101出土土器	663
第593图	S B67	610	第631图	S D102出土土器	663
第594图	S B67出土土器	611	第632图	S D110出土土器	666
第595图	S B68	612	第633图	S D113地区割り	667
第596图	S B68出土土器	613	第634图	S D113 4区出土土器	668
第597图	S B69	615	第635图	S D113 4区出土铁器	669
第598图	S B69出土土器	616	第636图	S D113 3区出土土器(1)	670
第599图	S B69出土石器	617	第637图	S D113 3区出土土器(2)	671
第600图	S B70	618	第638图	S D115横断面	674
第601图	S B70 P11	619	第639图	S D115出土土器(1)	675
第602图	S B70出土石砚	619	第640图	S D115出土土器(2)	676
第603图	S B70出土土器	619	第641图	S D115出土土器(3)	677
第604图	S B71	621	第642图	S D115出土土器(4)	679
第605图	S B71出土土器	621	第643图	S D115出土土器(5)	680
第606图	S B72	623	第644图	S D115出土土器(6)	681
第607图	S B72出土土器	624	第645图	S D115出土土器法量分布	683
第608图	S B73	625	第646图	S D115出土铁器	683
第609图	S B73出土土器	625	第647图	S D117出土土器	690
第610图	S B74	627	第648图	S D119出土土器	691
第611图	S B74出土土器	628	第649图	S D121横断面	692
第612图	S B75	630	第650图	S D121北边出土土器(1)	693
第613图	S B75出土土器	631	第651图	S D121北边出土土器(2)	694
第614图	P23出土石器	634	第652图	S D121南边出土土器	695
第615图	P24出土土器	635	第653图	S D121西边出土土器(1)	696
第616图	P40出土土器	643	第654图	S D121西边出土土器(2)	697
第617图	IV区柱穴出土土器(1)	648	第655图	S D122出土土器	701
第618图	IV区柱穴出土土器(2)	649	第656图	S D123出土土器	702
第619图	S K107出土土器	651	第657图	S D124横断面	702
第620图	S K112	652	第658图	S D124出土土器	703
第621图	S K112出土铁器	652	第659图	S D126出土土器	705
第622图	S K112出土土器法量分布	652	第660图	S D127出土土器	706
第623图	S K112出土土器	653	第661图	S D136横断面	707
第624图	S K115	655	第662图	S D136出土土器	708
第625图	S K115出土土器(1)	656	第663图	S D138出土土器	709

第664図	S D139出土土器 (1)	710	第702図	S E12	759
第665図	S D139出土土器 (2)	711	第703図	S E12井戸材 (1)	760
第666図	S D139出土土器 (3)	712	第704図	S E12井戸材 (2)	761
第667図	S D139出土土器 (4)	713	第705図	S E12水溜	763
第668図	S D139出土土器法量分布	715	第706図	S E12出土土器 (1)	764
第669図	S X07	718	第707図	S E12出土土器 (2)	765
第670図	S X07出土土器	719	第708図	S E12出土土器 (3)	767
第671図	S X08	720	第709図	S E12出土土器法量分布	767
第672図	S X08出土鉄器	721	第710図	S E12出土木製品	768
第673図	S E09	722	第711図	S E12出土石器	768
第674図	S E09井戸材	723	第712図	樹種同定顕微鏡写真 (1)	781
第675図	S E09水溜	724	第713図	樹種同定顕微鏡写真 (2)	782
第676図	S E09出土土器	725	第714図	樹種同定顕微鏡写真 (3)	783
第677図	S E09出土木製品	725	第715図	樹種同定顕微鏡写真 (4)	784
第678図	S E10	727	第716図	樹種同定顕微鏡写真 (5)	785
第679図	S E10井戸材	728	第717図	樹種同定顕微鏡写真 (6)	786
第680図	S E10水溜	729	第718図	佐渡猿八産碧玉原石の 蛍光X線スペクトル	789
第681図	S E10遺物出土位置	730	第719図	川除・藤ノ木遺跡出土の 碧玉原石様遺物の 蛍光X線スペクトル	789
第682図	S E10出土土器 (1)	732	第720図	川除・藤ノ木遺跡出土の 碧玉製管玉の 蛍光X線スペクトル	789
第683図	S E10出土土器 (2)	733	第721図	碧玉の原産地	790
第684図	S E10出土土器 (3)	734	第722図	佐渡猿八産碧玉原石の 元素比組成パターン	791
第685図	S E10出土土器法量分布	735	第723図	出雲花仙山産碧玉原石の 元素比組成パターン	792
第686図	S E10出土木製品 (1)	736	第724図	兵庫県玉谷産碧玉原石の 元素比組成パターン	792
第687図	S E10出土木製品 (2)	738	第725図	富山県定座岩、石川県二俣産 碧玉原石の 元素比組成パターン	793
第688図	S E10出土木製品 (3)	739	第726図	川除・藤ノ木遺跡出土の 碧玉製遺物の 元素比組成パターン	794
第689図	S E10出土木製品 (4)	740			
第690図	S E10出土木製品 (5)	742			
第691図	S E10出土鉄器	743			
第692図	S E11	746			
第693図	S E11井戸材	747			
第694図	S E11水溜	748			
第695図	S E11出土土器 (1)	750			
第696図	S E11出土土器 (2)	751			
第697図	S E11出土土器 (3)	752			
第698図	S E11出土土器法量分布	753			
第699図	S E11出土木製品 (1)	754			
第700図	S E11出土木製品 (2)	755			
第701図	S E11出土石器	756			

第727図	平均値による規格化データの クラスタ分析	797	第758図	瓦器碗の分類	861
第728図	サヌカイトの原産地	800	第759図	瓦器皿の分類	862
第729図	川除・藤ノ木遺跡出土の 須恵器のRb-Sr分布図(1)	805	第760図	瓦器鉢・羽蓋の分類	862
第730図	川除・藤ノ木遺跡出土の 須恵器のRb-Sr分布図(2)	806	第761図	黒色土器碗の分類	862
第731図	川除・藤ノ木遺跡出土の 須恵器のRb-Sr分布図(3)	806	第762図	丹波焼壺の分類	863
第732図	川除・藤ノ木遺跡出土土器の 胎土の化学分析値分布図	813	第763図	丹波焼甕の分類	863
第733図	川除・藤ノ木遺跡の 大型植物化石 I	819	第764図	丹波焼鉢の分類	863
第734図	川除・藤ノ木遺跡の 大型植物化石 II	820	第765図	須恵器の編年案(1)	871
第735図	壺形土器の分類	828	第766図	須恵器の編年案(2)	872
第736図	甕形土器の分類	829	第767図	須恵器の編年案(3)	873
第737図	鉢形土器の分類	829	第768図	須恵器の編年案(4)	874
第738図	高坏形土器の分類	830	第769図	土師器の編年案(1)	875
第739図	器台形土器の分類	830	第770図	土師器の編年案(2)	876
第740図	壺形土器編年案	840	第771図	土師器の編年案(3)	877
第741図	甕形土器編年案	841	第772図	土師器の編年案(4)	878
第742図	鉢形土器編年案	842	第773図	黒色土器・瓦器の編年案	879
第743図	高坏形土器編年案	843	第774図	白磁・丹波焼の編年案	880
第744図	器台形土器編年案	844	第775図	須恵器碗の法量分布	881
第745図	高坏脚部の分類	846	第776図	中世 I・II期 須恵器碗の法量分布	881
第746図	古墳時代土師器の型式分類	849	第777図	中世III期須恵器碗の法量分布	882
第747図	甕・高坏の比較	851	第778図	中世IV期須恵器碗の法量分布	882
第748図	須恵器碗の分類	854	第779図	須恵器皿の法量分布	882
第749図	須恵器皿の分類	854	第780図	中世III期須恵器皿の法量分布	882
第750図	須恵器鉢の分類	855	第781図	中世IV期須恵器皿の法量分布	883
第751図	須恵器壺の分類	856	第782図	土師器皿法量分布	883
第752図	須恵器甕の分類	856	第783図	土師器皿 B法量分布	883
第753図	土師器皿の分類	857	第784図	土師器皿 C法量分布	883
第754図	土師器碗・托・杯の分類	858	第785図	土師器皿 D法量分布	884
第755図	土師器甕の分類	859	第786図	黒色土器・瓦器碗法量分布	884
第756図	土師器鍋の分類	860	第787図	瓦器皿法量分布	884
第757図	土師器羽蓋の分類	860	第788図	中世II期碗法量分布	885
			第789図	中世III期碗法量分布	885
			第790図	中世IV期碗法量分布	885
			第791図	中世III期皿法量分布	886
			第792図	中世IV期皿法量分布	886
			第793図	中世土器の器種構成	887
			第794図	中世の曲物の法量	894

第795図	弥生時代～古墳時代前期の 遺構（1）	900	第811図	S E 09・10の樹種	939
第796図	弥生時代～古墳時代前期の 遺構（2）	901	第812図	井戸の掘削深度	940
第797図	古墳時代後期の遺構（1）	904	第813図	I - 1期の建物	944
第798図	古墳時代後期の遺構（2）	905	第814図	I - 2期の建物	945
第799図	平安～鎌倉時代の遺構（1）	906	第815図	II - 1期の建物	946
第800図	平安～鎌倉時代の遺構（2）	907	第816図	II - 2期の建物	947
第801図	竪穴住居跡の平面形と床面積	911	第817図	II - 3期の建物	948
第802図	III・IV類竪穴住居跡の形態 と主柱配置	915	第818図	III - 1期の建物	949
第803図	竪穴住居跡の床面積と 主柱配置	916	第819図	III - 2期の建物	950
第804図	竪穴住居跡の形態分類	917	第820図	III - 3期の建物	951
第805図	竪穴住居跡の 時期別床面積分布図	920	第821図	III - 4期の建物	952
第806図	竪穴住居跡の変遷	923	第822図	IV - 1期の建物	953
第807図	時期別竪穴住居跡分布図	925	第823図	IV - 2期の建物	954
第808図	兵庫県下の円形周溝墓分布図	929	第824図	IV - 3期の建物	955
第809図	県下の円形周溝墓の規模	930	第825図	IV - 4期の建物	956
第810図	S D 83・溜池・S D 86の レベル	936	第826図	掘立柱建物群の 規模と方位（1）	958
			第827図	掘立柱建物群の 規模と方位（2）	959
			第828図	建物の規模と方位の変遷	961

表 目 次

第1表 主要周辺遺跡一覧表(1) …… 11	第35表 S H25出土土器観察表(1) … 128
第2表 主要周辺遺跡一覧表(2) …… 12	第36表 S H25出土土器観察表(2) … 129
第3表 包含層出土土器観察表(1) …… 40	第37表 S H27出土土器観察表 …… 134
第4表 包含層出土土器観察表(2) …… 41	第38表 S H28出土土器観察表 …… 136
第5表 包含層出土土器観察表(3) …… 42	第39表 S H29出土土器観察表(1) … 140
第6表 包含層出土土器観察表(4) …… 43	第40表 S H29出土土器観察表(2) … 141
第7表 S H01出土土器観察表 …… 55	第41表 S H31出土土器観察表(1) … 148
第8表 S H02出土土器観察表(1) …… 57	第42表 S H31出土土器観察表(2) … 149
第9表 S H02出土土器観察表(2) …… 58	第43表 S H32出土土器観察表 …… 151
第10表 S H03出土土器観察表 …… 60	第44表 S K08出土土器観察表 …… 159
第11表 S H04出土土器観察表(1) …… 62	第45表 S K09出土土器観察表 …… 159
第12表 S H04出土土器観察表(2) …… 63	第46表 S K15出土土器観察表 …… 163
第13表 S H06出土土器観察表(1) …… 71	第47表 S K17出土土器観察表 …… 165
第14表 S H06出土土器観察表(2) …… 72	第48表 S K19出土土器観察表 …… 166
第15表 S H06出土土器観察表(3) …… 73	第49表 S K24出土土器観察表(1) … 173
第16表 S H07出土土器観察表 …… 76	第50表 S K24出土土器観察表(2) … 174
第17表 S H08出土土器観察表 …… 78	第51表 S K25出土土器観察表 …… 175
第18表 S H09出土土器観察表 …… 80	第52表 S K26出土土器観察表 …… 179
第19表 S H11出土土器観察表(1) …… 84	第53表 S K34出土土器観察表 …… 180
第20表 S H11出土土器観察表(2) …… 85	第54表 I区 弥生時代～古墳時代前期の その他の土壙一覧表 …… 181
第21表 S H12出土土器観察表 …… 88	第55表 S D13出土土器観察表 …… 183
第22表 S H13出土土器観察表 …… 92	第56表 S D14出土土器観察表(1) … 190
第23表 S H14出土土器観察表(1) …… 96	第57表 S D14出土土器観察表(2) … 191
第24表 S H14出土土器観察表(2) …… 97	第58表 S D14出土土器観察表(3) … 192
第25表 S H15出土土器観察表 …… 100	第59表 S D15出土土器観察表(1) … 194
第26表 S H16出土土器観察表 …… 104	第60表 S D15出土土器観察表(2) … 195
第27表 S H18出土土器観察表 …… 107	第61表 S D16出土土器観察表 …… 196
第28表 S H19出土土器観察表(1) … 109	第62表 S D18出土土器観察表 …… 197
第29表 S H19出土土器観察表(2) … 110	第63表 S D25出土土器観察表 …… 198
第30表 S H21出土土器観察表 …… 113	第64表 S D26出土土器観察表 …… 199
第31表 S H22出土土器観察表 …… 117	第65表 S D27出土土器観察表 …… 200
第32表 S H23出土土器観察表(1) … 121	第66表 S B02出土土器観察表 …… 206
第33表 S H23出土土器観察表(2) … 122	第67表 S B03出土土器観察表 …… 207
第34表 S H24出土土器観察表 …… 124	

第68表	S B15出土土器観察表	209	第105表	S K63出土土器観察表(1)	309
第69表	S B16出土土器観察表	211	第106表	S K63出土土器観察表(2)	310
第70表	P02出土土器観察表	215	第107表	S K64出土土器観察表	311
第71表	P04出土土器観察表	215	第108表	II区 弥生時代～古墳時代前期	
第72表	S K01出土土器観察表	217		その他の土壌一覽表	313
第73表	I区 平安時代～鎌倉時代		第109表	S D27出土土器観察表(1)	315
	その他の土壌一覽表	219	第110表	S D27出土土器観察表(2)	316
第74表	S D24出土土器観察表	223	第111表	S D28出土土器観察表	317
第75表	S K02出土土器観察表	226	第112表	S D32出土土器観察表	319
第76表	S E02出土土器観察表	230	第113表	S D40出土土器観察表(1)	322
第77表	S E04出土土器観察表	233	第114表	S D40出土土器観察表(2)	323
第78表	S H33出土土器観察表	239	第115表	S D42出土土器観察表	325
第79表	S H34出土土器観察表(1)	248	第116表	S D43出土土器観察表(1)	328
第80表	S H34出土土器観察表(2)	249	第117表	S D43出土土器観察表(2)	329
第81表	S H34出土土器観察表(3)	250	第118表	S D50出土土器観察表	332
第82表	S H34出土土器観察表(4)	251	第119表	S X04出土土器観察表	340
第83表	S H35出土土器観察表	253	第120表	S X05出土土器観察表(1)	345
第84表	S H36出土土器観察表	257	第121表	S X05出土土器観察表(2)	346
第85表	S H37出土土器観察表(1)	259	第122表	S X06出土土器観察表	348
第86表	S H37出土土器観察表(2)	260	第123表	II区 水田址の区画別面積・	
第87表	S H38出土土器観察表	261		標高一覽表	348
第88表	S H41出土土器観察表	264	第124表	S D54出土土器観察表	351
第89表	S H43出土土器観察表(1)	269	第125表	S D58出土土器観察表	351
第90表	S H43出土土器観察表(2)	270	第126表	S B23出土土器観察表	355
第91表	S H44出土土器観察表	272	第127表	S B27出土土器観察表	358
第92表	S H45出土土器観察表	275	第128表	S B28出土土器観察表	360
第93表	S H47出土土器観察表	280	第129表	P05出土土器観察表	360
第94表	S H48出土土器観察表	283	第130表	S K51出土土器観察表	362
第95表	S H49出土土器観察表	286	第131表	S K68出土土器観察表	363
第96表	S H50出土土器観察表	288	第132表	S K72出土土器観察表	364
第97表	S H51出土土器観察表	289	第133表	II区 中世のその他の土壌	
第98表	S K49出土土器観察表	292		一覽表	365
第99表	S K50出土土器観察表	292	第134表	S H52出土土器観察表(1)	379
第100表	S K53出土土器観察表	295	第135表	S H52出土土器観察表(2)	380
第101表	S K54出土土器観察表(1)	300	第136表	S H52出土土器観察表(3)	381
第102表	S K54出土土器観察表(2)	301	第137表	S H54出土土器観察表	386
第103表	S K54出土土器観察表(3)	302	第138表	S H55出土土器観察表(1)	390
第104表	S K56出土土器観察表	304	第139表	S H55出土土器観察表(2)	391

第140表	S H57出土土器観察表	394	第178表	S D66出土土器観察表	484
第141表	S H58出土土器観察表	396	第179表	S D81出土土器観察表	486
第142表	S H59出土土器観察表	398	第180表	S E06出土土器観察表	490
第143表	S H60出土土器観察表	399	第181表	S E07出土土器観察表	493
第144表	S H61出土土器観察表	401	第182表	S H81出土土器観察表	502
第145表	S H62出土土器観察表	403	第183表	S H82出土土器観察表	505
第146表	S H64出土土器観察表	406	第184表	S K126出土土器観察表	510
第147表	S H65出土土器観察表	408	第185表	S K127出土土器観察表	511
第148表	S H68出土土器観察表	414	第186表	S K129出土土器観察表	513
第149表	S H69出土土器観察表	416	第187表	S K131出土土器観察表	514
第150表	S H70出土土器観察表	418	第188表	S K134出土土器観察表	516
第151表	S K86出土土器観察表	422	第189表	IV区 弥生時代	
第152表	S K87出土土器観察表	423		その他の土壙一覧表	517
第153表	S K91出土土器観察表	424	第190表	S K130出土土器観察表	517
第154表	S K98出土土器観察表	428	第191表	S H71出土土器観察表	521
第155表	S K105出土土器観察表	429	第192表	S H72出土土器観察表(1)	525
第156表	S D68出土土器観察表	430	第193表	S H72出土土器観察表(2)	526
第157表	S D84出土土器観察表	432	第194表	S H73出土土器観察表	528
第158表	S D85出土土器観察表	433	第195表	S H74出土土器観察表	530
第159表	S D54出土土器観察表	436	第196表	S H75出土土器観察表(1)	535
第160表	S D83出土土器観察表	440	第197表	S H75出土土器観察表(2)	536
第161表	溜池出土土器観察表	444	第198表	S H75出土土器観察表(3)	537
第162表	S D70出土土器観察表	447	第199表	S H76出土土器観察表(1)	543
第163表	S B34出土土器観察表	451	第200表	S H76出土土器観察表(2)	544
第164表	S B36出土土器観察表	454	第201表	S H77出土土器観察表	547
第165表	S B37出土土器観察表	455	第202表	S H78出土土器観察表	549
第166表	S B38出土土器観察表	457	第203表	S H79出土土器観察表	552
第167表	S B40出土土器観察表	459	第204表	S H80出土土器観察表	555
第168表	S B43出土土器観察表	461	第205表	S H83出土土器観察表	558
第169表	柱穴出土土器観察表	468	第206表	S K120出土土器観察表	562
第170表	S K80出土土器観察表	470	第207表	S K121出土土器観察表	563
第171表	S K81出土土器観察表	471	第208表	S K123出土土器観察表	563
第172表	S K82出土土器観察表	473	第209表	IV区 古墳時代後期	
第173表	S K83出土土器観察表	476		その他の土壙一覧表	564
第174表	S K84出土土器観察表	477	第210表	S D86出土土器観察表	568
第175表	S K100出土土器観察表	478	第211表	S D92出土土器観察表(1)	571
第176表	S K103出土土器観察表	479	第212表	S D92出土土器観察表(2)	572
第177表	III区 中世その他の土壙一覧表	480	第213表	S D96出土土器観察表(1)	575

第214表	S D96出土土器観察表(2) …	576	第252表	S D110出土土器観察表……………	666
第215表	S D107出土土器観察表……………	578	第253表	S D113出土土器観察表(1) ……	672
第216表	S D129出土土器観察表……………	582	第254表	S D113出土土器観察表(2) ……	673
第217表	S B52出土土器観察表 ……	588	第255表	S D115出土土器観察表(1) ……	684
第218表	S B53出土土器観察表 ……	590	第256表	S D115出土土器観察表(2) ……	685
第219表	S B54出土土器観察表 ……	591	第257表	S D115出土土器観察表(3) ……	686
第220表	S B55出土土器観察表 ……	592	第258表	S D115出土土器観察表(4) ……	687
第221表	S B56出土土器観察表 ……	594	第259表	S D115出土土器観察表(5) ……	688
第222表	S B57出土土器観察表 ……	595	第260表	S D115出土土器観察表(6) ……	689
第223表	S B61出土土器観察表 ……	599	第261表	S D117出土土器観察表……………	690
第224表	S B63出土土器観察表 ……	603	第262表	S D119出土土器観察表……………	691
第225表	S B64出土土器観察表 ……	604	第263表	S D121出土土器観察表(1) ……	698
第226表	S B65出土土器観察表(1) …	607	第264表	S D121出土土器観察表(2) ……	699
第227表	S B65出土土器観察表(2) …	608	第265表	S D121出土土器観察表(3) ……	700
第228表	S B66出土土器観察表 ……	609	第266表	S D122出土土器観察表……………	701
第229表	S B67出土土器観察表 ……	611	第267表	S D123出土土器観察表……………	702
第230表	S B68出土土器観察表(1) …	614	第268表	S D124出土土器観察表……………	704
第231表	S B68出土土器観察表(2) …	615	第269表	S D126出土土器観察表(1) ……	705
第232表	S B69出土土器観察表 ……	617	第270表	S D126出土土器観察表(2) ……	706
第233表	S B70出土土器観察表 ……	620	第271表	S D127出土土器観察表……………	706
第234表	S B71出土土器観察表 ……	622	第272表	S D136出土土器観察表……………	708
第235表	S B72出土土器観察表 ……	624	第273表	S D138出土土器観察表……………	709
第236表	S B73出土土器観察表 ……	626	第274表	S D139出土土器観察表(1) ……	715
第237表	S B74出土土器観察表(1) …	629	第275表	S D139出土土器観察表(2) ……	716
第238表	S B74出土土器観察表(2) …	630	第276表	S D139出土土器観察表(3) ……	717
第239表	S B75出土土器観察表 ……	631	第277表	S X07出土土器観察表 ……	719
第240表	P24出土土器観察表 ……	635	第278表	S E09出土土器観察表 ……	726
第241表	P40出土土器観察表 ……	643	第279表	S E10出土土器観察表(1)……………	744
第242表	IV区 柱穴出土土器観察表(1)…	649	第280表	S E10出土土器観察表(2)……………	745
第243表	IV区 柱穴出土土器観察表(2)…	650	第281表	S E11出土土器観察表(1)……………	757
第244表	S K107出土土器観察表……………	651	第282表	S E11出土土器観察表(2)……………	758
第245表	S K112出土土器観察表……………	654	第283表	S E12出土土器観察表(1)……………	769
第246表	S K115出土土器観察表……………	658	第284表	S E12出土土器観察表(2)……………	770
第247表	S K119出土土器観察表……………	659	第285表	川除・藤ノ木遺跡出土 木製品の樹種一覧表(1)……………	775
第248表	S K136出土土器観察表……………	660	第286表	川除・藤ノ木遺跡出土 木製品の樹種一覧表(2)……………	776
第249表	IV区 中世その他の土壙一覧表	660			
第250表	S D101出土土器観察表……………	663			
第251表	S D102出土土器観察表……………	664			

第287表	川除・藤ノ木遺跡出土 木製品の樹種一覧表(3)……………	777	第303表	川除・藤ノ木遺跡出土須恵器 の分析値(3)……………	809
第288表	川除・藤ノ木遺跡出土 木製品の樹種一覧表(4)……………	778	第304表	川除・藤ノ木遺跡出土須恵器 の分析値(4)……………	810
第289表	川除・藤ノ木遺跡出土 木製品の樹種一覧表(5)……………	779	第305表	川除・藤ノ木遺跡出土土器の胎土 の化学分析結果一覧表……………	812
第290表	樹種別製品一覧表……………	780	第306表	川除・藤ノ木遺跡の SE10遺構(井戸)から 産出した大型植物化石……………	816
第291表	製品別樹種一覧表……………	780	第307表	川除・藤ノ木遺跡の SE11遺構(井戸)ならびに SE12遺構(井戸)から 産出した大型植物化石……………	817
第292表	各碧玉の原産地における 原石群の元素比の平均値 と標準偏差値……………	793	第308表	川除・藤ノ木遺跡の 住居址(SH)および 溝遺構(SD)から 産出した大型植物化石……………	817
第293表	川除・藤ノ木遺跡出土の 碧玉製管玉の元素比值 および比重……………	794	第309表	川除・藤ノ木遺跡から 産出した大型植物化石 のまとめ……………	818
第294表	川除・藤ノ木遺跡出土の 碧玉製管玉の原材産地分析……………	796	第310表	イネ炭化胚乳計測値一覧表……………	821
第295表	各サヌカイトの原産地に おける原石群の元素比 の平均値と標準偏差値……………	800	第311表	イネ未炭化稈計測値一覧表……………	821
第296表	岩屋原産地からのサヌカイト 原石66個の分類結果……………	801	第312表	イネ炭化稈計測値一覧表……………	821
第297表	和泉・岸和田原産地からの サヌカイト原石72個の 分類結果……………	801	第313表	メロン仲間種子計測値一覧表……………	822
第298表	和歌山市梅原原産地からの サヌカイト原石21個の 分類結果……………	801	第314表	モモ核計測値一覧表……………	822
第299表	川除・藤ノ木遺跡出土の サヌカイト製石器、 石片分析結果……………	802	第315表	ウメ核計測値一覧表……………	822
第300表	川除・藤ノ木遺跡出土の サヌカイト製石器、石片の 原材産地推定結果……………	803	第316表	マノ科A炭化種子計測値 一覧表……………	823
第301表	川除・藤ノ木遺跡出土須恵器 の分析値(1)……………	807	第317表	カキノキ種子計測値一覧表……………	823
第302表	川除・藤ノ木遺跡出土須恵器 の分析値(2)……………	808	第318表	器種・時代別出土木製品 一覧表……………	891
			第319表	石材鑑定表……………	896
			第320表	掘立柱建物一覧表(1)……………	909
			第321表	掘立柱建物一覧表(2)……………	910
			第322表	竪穴住居跡の諸属性の変遷表……………	922
			第323表	兵庫県下の円形周溝墓一覧表……………	933
			第324表	中世掘立柱建物群一覧表……………	943

第325表	掘立柱建物群A・Bの変遷……………	957
第326表	主要遺構一覧表（1）……………	966
第327表	主要遺構一覧表（2）……………	967

第328表	川除・藤ノ木遺跡と 周辺遺跡（1）……………	970
第329表	川除・藤ノ木遺跡と 周辺遺跡（2）……………	971

図版目次

巻首図版1 遺跡

三田盆地全景

巻首図版2 遺跡

遺跡遠景

巻首図版3 I区遺構

上 住居跡群 下 SH06土層断面

巻首図版4 II区遺構

上 円形周溝墓群 下 SH34

巻首図版5 III区遺構

上 SH52 下 SH52

巻首図版6 IV区遺構

上 掘立柱建物群B 下 SE10

巻首図版7 遺物

上 SH34出土土器 下 SH52出土土器

巻首図版8 遺物

上 SH76出土土器 下 出土中世土器

図版1 I区遺構

1. I区全景 2. 調査風景

図版2 I区遺構

1. 小微高地a 2. 小微高地a

図版3 I区遺構

1. 小微高地a 2. 小微高地a
3. 小微高地a

図版4 I区遺構

1. SH01 2. SH07
3. SH07

図版5 I区遺構

1. SH02・03~05 2. SH02
3. SH02

図版6 I区遺構

1. SH03 2. SH04
3. SH04

図版7 I区遺構

1. SH06確認状況 2. SH06
3. SH06土器出土状況
4. SH06土器出土状況

図版8 I区遺構

1. SH08~13 2. SH08~11
3. SH11 柱穴内土器出土状況
4. SH11 粘土塊出土状況

図版9 I区遺構

1. SH12・13 2. SH12・13
3. SH13中央土壇
4. SH13台石出土状況

図版10 I区遺構

1. SH14~16 2. SH14
3. SH14

図版11 I区遺構

1. SH15(新) 2. SH15(古)
3. SH14土壇1内土器出土状況

図版12 I区遺構

1. SH16 2. SH17
3. SH18

図版13 I区遺構

1. SH19 2. SH19
3. SH20・21

図版14 I区遺構

1. SH22炭化材出土状況
2. SH22
3. SH22土器出土状況
4. SH22土器出土状況

図版15 I区遺構

1. SH23土器出土状況
2. SH23 3. SH24

图版16 I区遺構

1. S H25
2. S H26
3. S H25中央土壙
4. S H25管玉出土状況

图版17 I区遺構

1. S H27
2. S H27
3. S H27中央土壙

图版18. I区遺構

1. S H28
2. S H29
3. S H30・31

图版19 I区遺構

1. S B01~03
2. S B01・03
3. S B01 P 9 柱根
4. S B03 P 3 土器出土状況

图版20 I区遺構

1. S B02
2. S B02 P 9 土器出土状況
3. S B06 P 15柱根検出状況
4. S B13

图版21 I区遺構

1. I-4区全景
2. S B15~20
3. S K01
4. S K06

图版22 I区遺構

1. S K17
2. S K24
3. S K24

图版23 I区遺構

1. S K23
2. S X01
3. S X02

图版24 I区遺構

1. S X03
2. S E03
3. S E02

图版25 I区遺構

1. S D14土層断面
2. S D13土層断面
3. 土器群A

图版26 I区遺構

1. 小微高地 b 全景
2. 小微高地 b 東半
3. 小微高地 b 西半

图版27 I区遺構

1. S K26
2. S K26
3. S D27土層断面
4. S K34

图版28 I区遺構

1. S K29
2. S K42
3. S K30
4. S K31
5. S H32

图版29 I区遺物

- S H03出土土器 S H04出土土器
S H06出土土器

图版30 I区遺物

- S H06出土土器

图版31 I区遺物

- S H06出土土器

图版32 I区遺物

- S H06出土土器

图版33 I区遺物

- S H06出土土器 S H07出土土器
S H09出土土器 S H11出土土器

图版34 I区遺物

- S H11出土土器 S H12出土土器

图版35 I区遺物

- S H12出土土器 S H13出土土器

图版36 I区遺物

- S H13出土土器 S H14出土土器

图版37 I区遺物

- S H14出土土器

图版38 I区遺物

- S H15出土土器 S H16出土土器
S H21出土土器

图版39 I区遺物

- S H23出土土器 S H22出土土器

图版40 I区遺物

- S H23出土土器 S H24出土土器

图版41 I区遺物

- S H24出土土器 S H25出土土器
S H28出土土器 S H29出土土器

图版42	I区遗物		
	S H29出土石器		
图版43	I区遗物		
	S H29出土石器	S H31出土石器	
图版44	I区遗物		
	S H31出土石器		
图版45	I区遗物		
	S H31出土石器	S K15出土石器	
图版46	I区遗物		
	S K15出土石器	S K17出土石器	
	S K24出土石器		
图版47	I区遗物		
	S K24出土石器		
图版48	I区遗物		
	S K24出土石器	S K25出土石器	
	S K26出土石器		
图版49	I区遗物		
	S K26出土石器		
图版50	I区遗物		
	S D14出土石器	S D15出土石器	
	S D27出土石器	土器群A出土石器	
图版51	I区遗物		
	S B03出土石器	S K01出土石器	
	S X02出土石器	S E02出土石器	
	I区出土铁器		
图版52	I区遗物		
	S H03出土石器	S H06出土石器	
	S H15出土石器	S H23出土石器	
	S H27出土石器	S D13出土石器	
	S D14出土石器	S X03出土石器	
	包含层出土石器		
图版53	I区遗物		
	S H06出土石器	S H25出土石器	
	S K11出土石器	S D13出土石器	
	S D14出土石器	P01出土石器	
	S X03出土石器		
图版54	I区遗物		
	S K10出土石器	S K22出土石器	
	S D13出土石器	S D14出土石器	
图版55	I区遗物		
	S H25出土石器	S D14出土石器	
图版56	I区遗物		
	S H01出土石器	S H07出土石器	
	S H11出土石器	S H13出土石器	
	S H21出土石器	S H23出土石器	
	S H25出土石器	S K22出土石器	
	S D14出土石器		
图版57	I区遗物		
	S H11出土石器	S H16出土石器	
	S D14出土石器	S H22出土石器	
	S K24出土石器		
图版58	II区遺構		
	1. II区全景	2. 調査風景	
图版59	II区遺構		
	1. 小微高地b全景	2. 小微高地b全景	
图版60	II区遺構		
	1. S H33		
	2. S H33周壁部土層断面		
	3. S H33中央土壟内土層断面		
	4. S H33中央土壟		
图版61	II区遺構		
	1. S H34土器出土状况		
	2. S H34		
	3. S H34土器出土状况		
	4. S H34土器出土状况		
图版62	II区遺構		
	1. S H35炭化材検出状况		
	2. S H35	3. S H35	
图版63	II区遺構		
	1. S H36		
	2. S H36		
	3. S H36 P 2 断面		
	4. S H36 P 3 断面		

図版64 II区遺構

1. SH37
2. SH37
3. SH37中央土壁

図版65 II区遺構

1. SH38
2. SH39
3. SH40

図版66 II区遺構

1. SH41
2. SH42
3. SH42中央土壁

図版67 II区遺構

1. II-1区中世遺構群
2. SK51
3. SK53

図版68 II区遺構

1. SD43土層断面
2. SD40土層断面
3. SD42堰断ち割り断面
4. SD42土器出土状況

図版69 II区遺構

1. SK54
2. SK56
3. SD27土層断面

図版70 II区遺構

1. 小微高地c
2. 小微高地c

図版71 II区遺構

1. SH43
2. SH43土器出土状況
3. SH43土器出土状況
4. SH44

図版72 II区遺構

1. SH45・46
2. SH45・46
3. SH45砥石出土状況

図版73 II区遺構

1. SH47土器出土状況
2. SH47
3. SH47

図版74 II区遺構

1. SH48・49
2. SH50
3. SH51

図版75 II区遺構

1. SB24・25
2. SB27・28

3. SB27・28

図版76 II区遺構

1. SK68
2. SK63
3. SX06

図版77 II区遺構

1. SX04・05
2. SX04・05
3. SX04・05の周溝

図版78 II区遺構

1. SX04
2. SX04土層断面
3. SX04土器出土状況
4. SX04貼石

図版79 II区遺構

1. SX05
2. SX05貼石
3. SX05土器出土状況

図版80 II区遺物

SH34出土土器

図版81 II区遺物

SH34出土土器

図版82 II区遺物

SH34出土土器 SH36出土土器

図版83 II区遺物

SH36出土土器 SH37出土土器
SH38出土土器 SH43出土土器

図版84 II区遺物

SH44出土土器 SH47出土土器

図版85 II区遺物

SH48出土土器 SH49出土土器
SH50出土土器

図版86 II区遺物

SH50出土土器 SK50出土土器
SK53出土土器 SK54出土土器

図版87 II区遺物

SK54出土土器 SK63出土土器

図版88 II区遺物

SK63出土土器

図版89 II区遺物

- S K63出土土器 S D27出土土器
S X04出土土器 S X05出土土器
S X06土器棺

図版90 II区遺物

- S D54出土土器 S D58出土土器
S B28出土土器 S K51出土土器
S K68出土土器

図版91 II区遺物

- S H36柱根 S H34出土石器
S H35出土石器 S H42出土石器
S H45出土石器 S K54出土石器
S K55出土石器

図版92 III区遺構

1. III区全景 2. 調査風景

図版93 III区遺構

1. 小微高地b全景 2. 小微高地b全景
3. 小微高地d全景

図版94 III区遺構

1. S H52炭化材出土状況
2. S H52炭化材出土状況
3. S H52中央土塋

図版95 III区遺構

1. S H52北西張出し部土器出土状況
2. S H52西張出し部土器出土状況
3. S H52土器出土状況
4. S H52砥石出土状況

図版96 III区遺構

1. S H52 2. S H52
3. S H53

図版97 III区遺構

1. S H54 2. S H54
3. S H54中央土塋

図版98 III区遺構

1. S H55
2. S H55土塋1上面土器出土状況
3. S H55土塋1

図版99 III区遺構

1. S H56 2. S H57
3. S H57

図版100 III区遺構

1. S H58 2. S H59
3. S H59・60

図版101 III区遺構

1. S H61 2. S H62
3. S H63

図版102 III区遺構

1. S H64 2. S H65
3. S H66・67

図版103 III区遺構

1. S K82 2. S K83
3. S K83大足出土状況

図版104 III区遺構

1. S E06 2. S E06隅柱
3. S E06隅柱 4. S E06横棧
5. S E06縦板 6. S E07
7. S E07井戸側転用土器

図版105 III区遺構

- 1・2. S D83・86・溜池

図版106 III区遺構

1. 溜池 2. 溜池土層断面
3. S D83土層断面

図版107 III区遺構

1. S H68炭化材出土状況
2. S H68 3. S H68中央土塋
4. S H68土器出土状況

図版108 III区遺構

1. S H69 2. S H69
3. S H70

図版109 III区遺構

1. 掘立柱建物群C
2. S B45~47 3. S D54土層断

図版110 III区遺構

1. S E08 2. S E08
3. S E08横棧 4. S E08水溜

图版111	III区遗物		
	S H52出土土器		
图版112	III区遗物		
	S H52出土土器		
图版113	III区遗物		
	S H52出土土器	S H55出土土器	
图版114	III区遗物		
	S H55出土土器	S H57出土土器	
	S H58出土土器	S H59出土土器	
	S H61出土土器		
图版115	III区遗物		
	S H62出土土器	S H68出土土器	
	S H70出土土器		
图版116	III区遗物		
	S K98出土土器	S D83出土土器	
图版117	III区遗物		
	溜池出土土器		
图版118	III区遗物		
	S B38出土土器	P 09出土土器	
	S K80出土土器	S K81出土土器	
	S K82出土土器	S K83出土土器	
	S K103出土土器		
图版119	III区遗物		
	S K103出土土器	S D66出土土器	
图版120	III区遗物		
	S E06出土土器	S E07出土土器	
	S H56出土铁器		
图版121	III区遗物		
	S D83出土木製品	溜池出土木製品	
	S D86出土木製品		
图版122	III区遗物		
	S K83出土木製品	S E06出土木製品	
图版123	III区遗物		
	P06出土柱根	S H52出土石器	
图版124	IV区遺構		
	1. IV区全景	2. 調査風景	
图版125	IV区遺構		
	1. 小微高地d北半	2. 小微高地d南半	
图版126	IV区遺構		
	1. S H71	2. S H71竈	
	3. S H71土塋1	4. S H73	
图版127	IV区遺構		
	1. S H72		
	2. S H72土器出土状況		
	3. S H74		
图版128	IV区遺構		
	1. S H75		
	2. S H75土器出土状況		
	3. S H75竈		
图版129	IV区遺構		
	1. S H76焼失状況	2. S H76	
	3. S H76竈		
	4. S H76土器出土状況		
图版130	IV区遺構		
	1. S H77	2. S H77竈	
	3. S H78		
图版131	IV区遺構		
	1. S H79~83	2. S H79	
	3. S H83		
图版132	IV区遺構		
	1. S H80	2. S H80竈	
	3. S H82		
图版133	IV区遺構		
	1. S H81		
	2. S H81中央土塋・土塋1		
	3. S H81土器出土状況		
	4. S H81土器出土状況		
图版134	IV区遺構		
	1・2掘立柱建物群A・B		
图版135	IV区遺構		
	1. S B52・53	2. S B57~60	
	3. S B54 P 8内土器出土状況		
	4. S B63 P 4内土器出土状況		
图版136	IV区遺構		
	1. S B65~75	2. S B65~75	
	3. S B66 P 8内土器出土状況		

4. S B68 P22内土器出土状況		
図版137 IV区遺構		
1. S B70 P11	2. S B70 P11	
3. S B74埋土上層土器出土状況		
4. S B76		
5. S D115土器出土状況		
図版138 IV区遺構		
1. S B84	2. S D96上層断面	
3. S D92・96土層断面		
図版139 IV区遺構		
1. S D96土層断面	2. S D86土層断面	
3. S D107土層断面		
図版140 IV区遺構		
1. S K112	2. S K136	
3. S K115	4. S X07	
5. S X08		
図版141 IV区遺構		
1. S E09	2. S E09水溜横板	
3. S E09水溜横板	4. S E09縦板	
5. S E09隅柱	6. S E09水溜	
図版142 IV区遺構		
1. S E10		
2. S E10遺物出土状況		
3. S E10遺物出土状況		
4. S E10遺物出土状況		
5. S E10水溜		
図版143 IV区遺構		
1. S E10	2. S E10	
3. S E10隅柱と横棧		
4. S E10隅柱と横棧		
5. S E10木組		
図版144 IV区遺構		
1. S E10横棧	2. S E10横棧	
3. S E11横棧	4. S E10縦板	
5. S E10隅柱	6. S E10水溜	
図版145 IV区遺構		
1. S E11	2. S E11	
3. S E11水溜	4. S E11横棧	
図版146 IV区遺構		
1. S E12	2. S E12	
3. S E12	4. S E12隅柱	
図版147 IV区遺構		
1. S E12隅柱	2. S E12隅柱	
3. S E12隅柱	4. S E12横棧	
5. S E12縦板	6. S E12縦板	
7. S E10水溜		
図版148 IV区遺物		
S H81出土土器	S H82出土土器	
S H72出土土器		
図版149 IV区遺物		
S H74出土土器	S H75出土土器	
図版150 IV区遺物		
S H75出土土器	S H76出土土器	
図版151 IV区遺物		
S H76出土土器		
図版152 IV区遺物		
S H76出土土器		
図版153 IV区遺物		
S H77出土土器	S H79出土土器	
S D92出土土器		
図版154 IV区遺物		
S D96出土土器		
図版155 IV区遺物		
S D108出土土器	S D112出土土器	
S D129出土土器		
図版156 IV区遺物		
S B53出土土器	S B56出土土器	
S B63出土土器	S B65出土土器	
図版157 IV区遺物		
S B66出土土器	S B68出土土器	
S B69出土土器	S B70出土土器	
S B74出土土器		

図版158 IV区遺物
 S B 74出土土器 S B 75出土土器
 P 15出土土器 P 33出土土器
 図版159 IV区遺物
 P 22出土土器 P 24出土土器
 P 28出土土器 P 30出土土器
 P 31出土土器 P 32出土土器
 P 38出土土器 P 45出土土器
 P 42出土土器 P 51出土土器
 図版160 IV区遺物
 S K 112出土土器 S K 115出土土器
 図版161 IV区遺物
 S K 115出土土器
 図版162 IV区遺物
 S K 136出土土器 S D 113出土土器
 図版163 IV区遺物
 S D 113出土土器 S D 115出土土器
 図版164 IV区遺物
 S D 115出土土器
 図版165 IV区遺物
 S D 115出土土器
 図版166 IV区遺物
 S D 115出土土器 S D 121出土土器
 図版167 IV区遺物
 S D 121出土土器 S D 139出土土器
 図版168 IV区遺物
 S D 139出土土器
 図版169 IV区遺物
 S D 139出土土器
 図版170 IV区遺物
 S D 138出土土器 S X 07出土土器
 S E 10出土土器

図版171 IV区遺物
 S E 10出土土器
 図版172 IV区遺物
 S E 10出土土器 S E 11出土土器
 図版173 IV区遺物
 S E 11出土土器
 図版174 IV区遺物
 S E 11出土土器 S E 12出土土器
 図版175 IV区遺物
 S E 12出土土器
 図版176 IV区遺物
 S H 76出土鉄器 S K 112出土鉄器
 S D 113出土鉄器 S D 115出土鉄器
 S X 08出土鉄器 S E 10出土鉄器
 包含層出土鉄器
 図版177 IV区遺物
 S D 86出土木製品 S E 09出土木製品
 図版178 IV区遺物
 S E 10出土木製品
 図版179 IV区遺物
 S E 10出土木製品
 図版180 IV区遺物
 S E 11出土木製品
 図版181 IV区遺物
 S K 135出土石器 S H 76出土石器
 P 23出土石器 S E 11出土石器
 S E 12出土石器 S B 70出土石硯
 図版182 調査風景
 1. 重機掘削風景 2. 遺構検出風景
 3. 焼失住居検出風景
 4. 住居跡内土器検出風景
 5. 焼失住居検出風景

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

概要 川除・藤ノ木遺跡は三田盆地のほぼ中央部に位置する。三田盆地は武庫川水系の中流域にあたり、盆地の中心を武庫川が大きく蛇行しながら流れている。この大きな蛇行のため、大雨の際、蛇行部の堤防が決壊ないしその寸前の状態になることがしばしばであった。さらに、武庫川右岸の丘陵部では、北摂三田ニュータウンの建設が進められており、ニュータウンからの排水による増水が見込まれており、より大雨の際の決壊の危険性が増すものと予想されていた。

河川改修 以上のような状況から、水害を未然に防ぐため、武庫川の河川改修が計画されることになった。

遺跡の発見 ところで、川除・藤ノ木遺跡の位置する地域は、三田盆地のほぼ中心に位置するものの、圃場整備も及んでいないこともあって、遺跡の存在が全く周知されていない状況にあった。このため、昭和60年度に河川改修の計画にともない、分布調査を実施したところ、多くの遺物の散布が確認され、昭和61年度に確認調査を実施した。この結果、遺物包含層及び遺構を確認するに至り、昭和62年度に全面調査を実施した。



第1図 河川改修と調査範囲

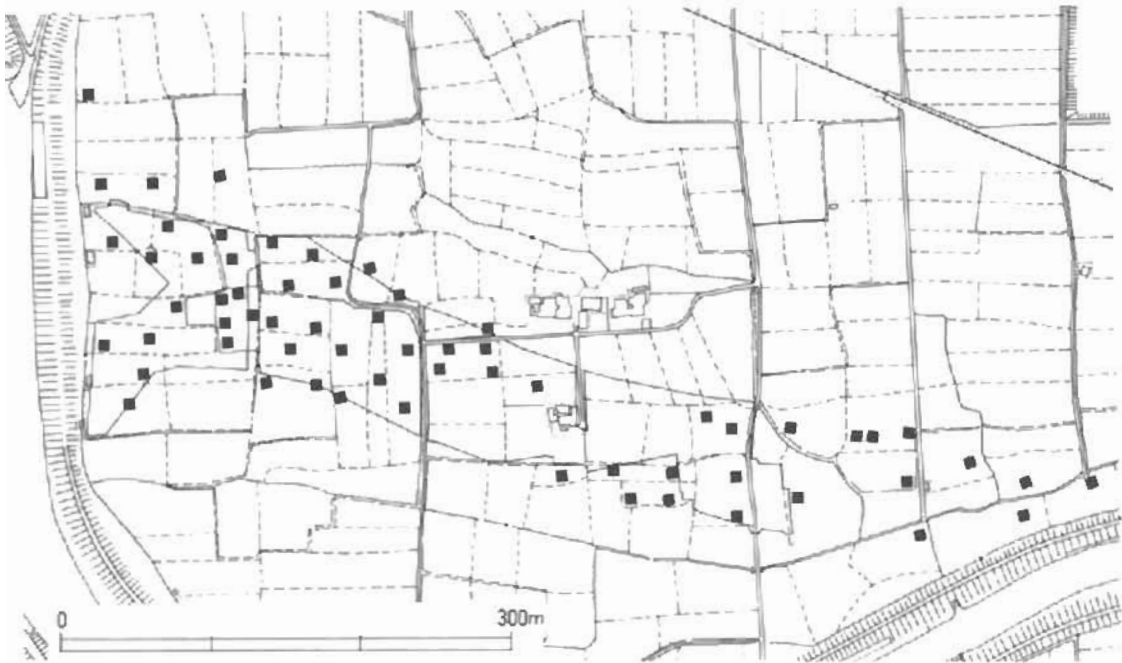
第2節 発掘調査の経過

分布調査 昭和60年度に実施した。

確認調査 第1次確認調査 昭和61年度に実施した。

第2次確認調査 昭和62年度に実施した。

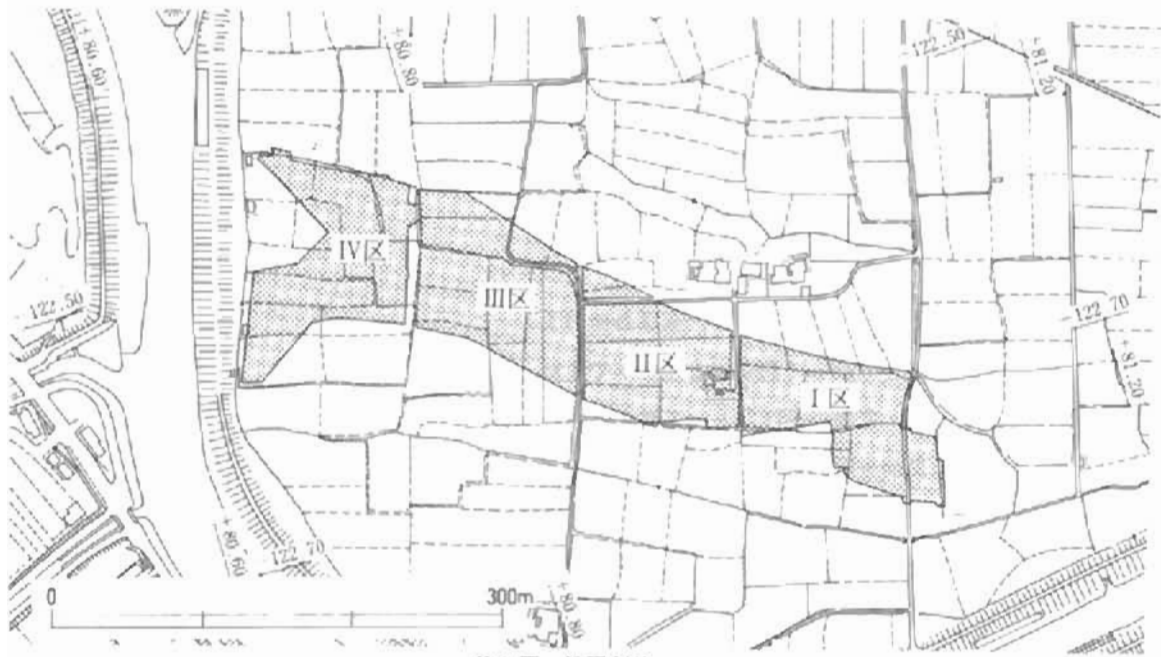
全面調査 昭和61年度に2次にわたって実施した確認調査の結果をもとに、全面調査を実施した。ただし、確認調査の際、作物の植付け等の条件により、確認のグリッド・トレンチを入れることが出来なかった地点が何ヶ所かあったため、トレンチによる確認調査を先行させ、



第2図 第2次確認調査位置



第3図 第3次確認調査位置



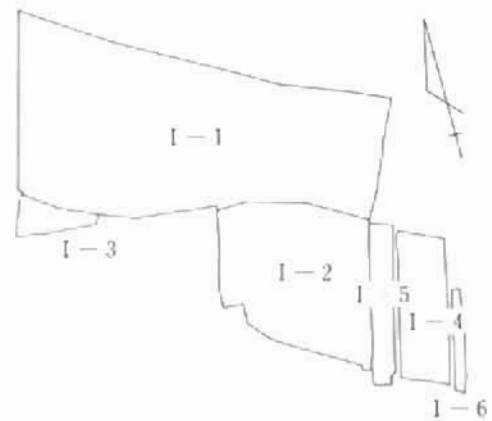
第4図 地区割り

この結果をもとに全面調査の範囲を確定した。調査期間は5月11日～1月9日までである。

調査体制	全面調査の体制は以下の通りである。
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当	吉田 昇・吉識雅仁・市橋重喜(故人)・山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉
補助員	奥野和宏・上田英則・畷田 節・中西 信・西本寿子・村上昌代・細川祐三・石本品義
室内作業	和田智子・東和田喜世子・新谷末子・奥田信子・大東栄美
調査方法	調査面積が約36,000㎡と広大なため、約1町ごとに走る最後まで撤去することのできない農道や用水路を大きな境として、大きく4地区(I区・II区・III区・IV区)に分け順次調査を実施した。また、各地区においても、調査の結果、調査地区を拡張したり、民家の立ち退き等の関係上、さらに分割して調査しなければならない地区もあり、全体的につきはぎ的な調査方法をとらざるを得ない結果となった。

I区 当初はI-1区のみが調査対象範囲であったが、さらに南側へも遺構が広がることが明らかとなったため、南側へ調査区を拡張した。(I-2)さらに、東側の道路以东(I-4)も調査対象外であったが、西側の調査の結果、当地区へも遺構が続くことが明らかとなり、IV区の調査終了後調査を行った。また、この地区と当初の調査区の境をなす道路部分(I-5)についても、遺構の存在することは明確なため、I-4地区の調査終了後、道路の迂回工事完成後、調査を行った。

II区 調査区の南側にある民家へ伸びる水道管が埋設されており、工事直前まで撤去することができなかったため、この水道管が埋設されている農道を境に2地区(II-1・II-2)に分けて



第5図 I区地区割り

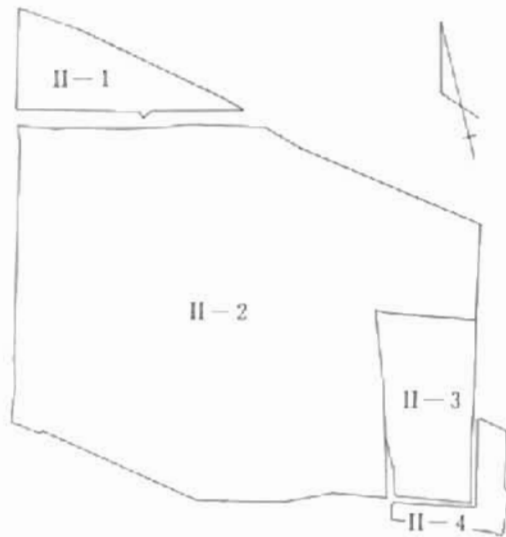
第2節 発掘調査の経過

調査を実施した。さらに、Ⅱ-2区においては、民家とその畑の地区(Ⅱ-3)が最後まで残り、Ⅳ区の調査と平行して実施した。

Ⅲ区 当初の予定どおり一括して調査をすることができた。

Ⅳ区 当地区についても、Ⅲ区同様当初の予定範囲を一括して調査することができた。しかし、北側の箇所において検出住居跡が一部調査区外へ広がること明らかとなったため、この地点のみ調査範囲を拡張した。また、翌年度に武庫川から新河川に取りつく地点にあたる堤防の箇所について、立会い調査をおこなった。

その他 8月1日には一般市民を対象とした現地説明会を開いた。また、7月25日には奈良国立文化財研究所一般調査課程研修一行の見学を受けた。さらに、8月2日には、兵庫県と中国陝西省との交流事業の一貫として、陝西省考古研究所 袁 伸一氏一行の見学があった。



第6図 Ⅱ区地区割り



第7図 深掘りトレンチの位置

第3節 整理作業の経過

1. 整理作業

概要 遺物は、コンテナにして計約350箱分出土した。これらの遺物の整理作業は、一部全面調査と平行して、現場事務所内にて、水洗をおこなった。

本格的な整理作業は、昭和62年度から開始した。昭和62年度・63年度は兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課が実施し、平成元年度・2年度・3年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

昭和62年度 土器のネーミングのみを行った。

整理担当 市橋重喜・山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉

整理補助 鈴木みゆき・岡崎輝子・二階堂康子・奥山由紀子

昭和63年度 本年度から、川除・藤ノ木遺跡の整理作業が本格化した。まず、前年度に実施したが未完成であったネーミング作業を完了させた。ひきつづいて接合・実測を開始した。接合・実測は接合班と実測班の2班に分け、遺構単位に接合を行い、接合終了後直ちに実測用土器を選び、これを実測するという流れで行っていった。また、鉄製品・石器および木製品の実測も土器の実測と平行して実施した。

以上の整理作業と平行して、井戸から採取した種子類の鑑定を流通科学大学の南木先生に、竪穴住居跡出土の管玉・碧玉原石の産地同定を京都大学原子力研究所の藁科先生に、それぞれ依頼した。

また、年度後半には、木製品の一部について写真撮影を行った。

整理担当 山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉・加古千恵子(金属器の保存処理)・別府洋二(木製品の保存処理)

整理補助 原 美津子・富 ひろみ・金山恵子・小川美奈・山口卓也・森本貴子・早川亜紀子・水戸美美子・岡崎輝子・奥山由紀子・来多村たかし

平成元年度 当年度の整理作業も昨年度とはほぼ同様な内容である。年度後半には、一部復元の完成した土器および石器・木製品・鉄製品についての写真撮影を行い、木製品・鉄製品については終了した。

石器については、サヌカイト製品の実測終了後、京都大学原子力研究所の藁科先生に産地同定を依頼した。

また、遺物の整理以外にも、遺構図の整図・レイアウトも平行して行っていった。

整理担当 山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉・加古千恵子(金属器の保存処理)・別府洋二(木製品の保存処理)

整理補助 原 美津子・富 ひろみ・金山恵子・小川美奈・山口卓也・古谷章子・河田有子・早川

亜紀子・水戸英美子・岡崎輝子・奥林由紀子・栗多村たかし・水谷幸子

平成2年度 当年度の前半は昨年度と同様接合・実測を中心におこなった。年度中頃に、土器の実測が終了し、引き続きレイアウト・トレースを実施した。また、一部遺構図面のトレースも実施した。接合作業も、土器の実測終了に先立ち終了し、写真撮影のための復元作業を行った。また、昭和62年度に一部行った石器の実測の残りについても完成させた。

土器の実測終了にともない、土師器・弥生土器については武庫川女子大学の安田先生に、須恵器・丹波焼については奈良教育大学の三辻先生に胎土分析による産地同定を依頼した。また、サヌカイト以外の石製品についても、神戸大学の後藤先生に産地同定を依頼した。

整理担当 山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉

整理補助 原 美津子・富 ひろみ・小川美奈・古谷章子・早川亜紀子・水戸英美子・奥林由紀子・坂本裕美・吉田優子・木村淑子

平成3年度 本報告書刊行年にあたり、レイアウト・トレースを中心におこなった。これと平行して原稿の執筆・編集作業をおこなった。

整理担当 山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉

整理補助 原 美津子・富 ひろみ・小川美奈・宮田麻子・早川亜紀子・水戸英美子・坂本裕美

2. 保存処理作業

概要 川除・藤ノ木遺跡出土遺物で保存処理の対象となったのは、鉄製品と木製品である。これらの保存処理作業については、鉄製品については加古千恵子、木製品については別府洋二を中心に進めていった。

(1) 鉄製品の保存処理

本遺跡出土の鉄製品は計20点で、全て保存処理の対象とした。保存処理は基本的には当事務所内にて実施したが、X線透過試験については奈良国立文化財研究所に依頼しておこなった。以下、具体的な保存処理工程を示す。

台帳作成	保存処理作業前の形状観察記録・写真撮影を行い、処理台帳を作る。
脱塩処理	泥を落とした後遺物内の塩化物を取り除くために、水酸化リチウムの0.2%アルコール溶液（エタノール・メタノール・イソプロパノールの混合液）に含浸。溶液を交換しながら3ヶ月後に引上げ、メタノールで洗浄したのち乾燥保管する。
X線透過	X線透過撮影を行い、内部構造を調べる。
仮強化	脱塩処理後、遺物が脆弱なため非水系のアクリル樹脂10%（商品名：バラロイドB72）トルエン溶液内で減圧含浸して仮強化を行う。
錆落とし	小型グラインダーにて錆の部分を削り落とす。細部については、噴射加工機にてアルミの微細粒を高圧で吹きつけ、その形状がわかるようにする。
減圧含浸	非水系のアクリル樹脂（商品名：バラロイドNAD10）内で鉄器を減圧含浸する。
強制乾燥	常温乾燥の後、熱風恒温乾燥機内に入れ70℃で1週間かけ強制乾燥させる。

接着補填 減圧含浸と強制乾燥を4回繰り返した後に折損部をエポキシ系接着剤（商品名：セメダインハイスーパー）にて接着し、欠損部分はエポキシ系補填剤（商品名：ボンドオール）にて補填する。

密閉保管 処理後の鉄製品はシリカゲルと共に密閉保管する。

（2）木製品の保存処理

処理工程 保存処理およびその前提としての実測・樹種鑑定を、①保存処理台帳の作成、②実測および樹種鑑定を行う木製品のリストアップ、③木製品の実測、④木製品の写真撮影、⑤樹種鑑定用プレパラートの作製、⑥保存処理の順で実施した。

②の実測の対象としたものは、明らかに製品と判断できるものについては、全てその対象とした。また、井戸材については、その点数が大変多く、全てを実測することは困難なため、井戸ごとに隅柱・棧木・縦板など各部材から1点を選び実測していった。また、柱根については、遺存状態の良いものに限って実測していった。

樹種鑑定 また、樹種鑑定の対象としたものは、製品は全てその対象とした。また、柱根については実測を行ったもののなかから、さらに遺存状況の良いものを選び出した。井戸材については、実測同様全てを対象とすることは困難なため、SE09・SE10については、全ての材について実施することにし、他の井戸の材については実測同様、各部材につき1点に限った。

⑤の樹種鑑定用のプレパラートの作製は、整理普及課の別府洋二の指導のもと、山田・甲斐・高瀬の3人で行った。

保存処理 ⑥の保存処理については、基本的には別府が兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所にて実施したが、一部の木製品については、財団法人 元興寺文化財研究所に委託しておこなった。

これらの作業は、昭和62年度から実施し、最終作業にあたる保存処理作業が平成2年度に完了した。保存処理された木製品は、当事務所にて保管されている。

なお、木製品については、この他年輪年代法による年代測定を希望したのであるが、奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に見ていただいたところ、年代測定が可能な木製品がないとのことで、断念した。



第8図 遺跡の位置

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

三田市 遺跡の所在する三田市は、兵庫県の南東部に位置する。旧摂津国の有馬郡と川辺郡とにまたがり、北摂地方と呼ばれる地域にあたり、武庫川の中流域に形成された三田盆地を中心に形成されてきた地方都市である。

三田盆地 三田盆地の中心部を流れる武庫川は、多紀郡丹南町に源を発し、南下し大阪湾に注ぐ一級河川である。摂津と丹波の旧国境を大きく蛇行しながら南下し、途中相野川・黒川・内神川と合流したあたりから平野部が開ける。そしてこの低地は、その南東部で山田川、長尾川と合流したあたりから狭まり、武庫川渓谷で収束する。また、長尾川が武庫川に合流するあたりから、長尾川がその支流である有馬川と八多川と合流した有野川が合流するあたりでひとつの小低地が形成されている。

以上が地形学的にみた三田盆地の範囲である。この広義の三田盆地は、中央の低地は僅かで、大半が奥深い山地である。また、遺跡の分布範囲についても、平地とその周辺に大半が集中している。そこで、本報告においては、対象とする範囲を平地とその周辺に限定することにする。

三田市は、以前は距離的には大阪・神戸と近接していたにもかかわらず、両地域との境が六甲山地を中心とした急峻な山地で隔てられていたために、ほとんど開発の手の届かない地域であった。ところが近年、大阪・神戸のベッドタウンとして注目され急速な発展を遂げつつある地域である。

まず、丘陵部においては、三田盆地の南西部で北摂三田ニュータウンの建設が進められている。三田市域の開発の中心をなすものである。そしてこの開発に伴い、幾つかの開発が進められている。

まず、このニュータウンに対する給水源として、武庫川を隔てた北東側丘陵部の末地区においては、青野ダムが建設されている。そして、この南東部を中心とした周辺山麓部においては、三田自然公園の建設が計画されている。

交通網の整備 さらに、以上のような開発を押し進めるため、神戸と北摂三田ニュータウンを結ぶ六甲北有料道路の建設など交通網の整備も急ピッチで進められ、平野部においてJR福知山線の複線電化がなされている。また、JR三田駅と北摂三田ニュータウンを結ぶ三田幹線の建設もなされている。加えて、大阪と丹後地方を結ぶ交通網の起点として、丘陵部においては近畿自動車道が開通している。

圃場整備 このような丘陵部の開発に対して、平野部においては、県営圃場整備等が進められている。



第9圖 周辺主要遺跡

第2節 歴史的環境

1. はじめに

前節でみてきたような急速な開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査も盛んに実施されてきている。兵庫県下でも、ひとつの地域単位としては最もまとまって調査がなされた地域のひとつといえよう。このため当地域の遺跡はかなりの密度で分布が認められる。そこで、現在の遺跡の分布状況をもとに、立地条件などを考慮に入れ、いくつかの地域単位に分け、歴史的環境について説明していくことにしたい。ただし、この区分はあまり深い意味を含むものではないことをことわっておく。

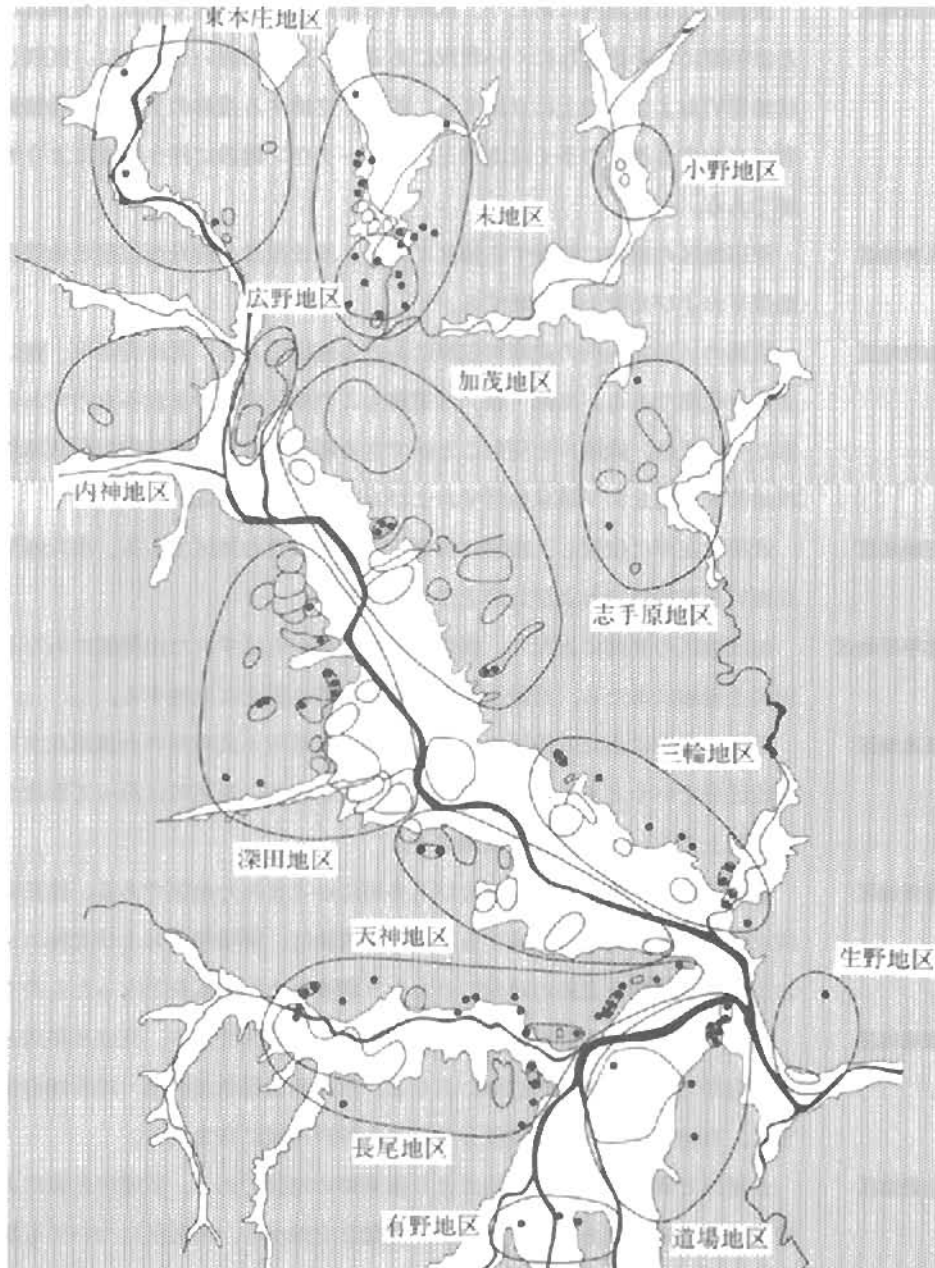
なお、立地にあたっての地形分類は、高橋 学氏の地形分類¹⁾にしたがっている。

第1表 主要周辺遺跡一覧表(1)

No	遺跡名	地区名	No	遺跡名	地区名	No	遺跡名	地区名
1	田中・一の坪	東本庄	21	地福窟跡	末	41	梅ノ木古墳群	志手原
2	沢山古墳群	東本庄	22	姪田	末	42	内神古墳群	内神
3	井ノ草・宮の谷	東本庄	23	庵ノ谷古墳	末	43	宮脇古墳群	広野
4	赤子谷古墳群	東本庄	24	求ノ塚古墳	末	44	上井沢・小屋垣内	広野
5	畑ノ谷古墳	東本庄	25	郡塚1・2号窟跡	末	45	加茂・六地藏	加茂
6	新坂古墳群	東本庄	26	道東古墳	末	46	加茂・吉田	加茂
7	角蓮寺古墳群	東本庄	27	双子塚2号墳	末	47	加茂古墳群	加茂
8	前ノ谷古墳	末	28	貝谷窟跡	末	48	青龍寺裏山古墳群	加茂
9	八木ノ谷古墳	末	29	落合窟跡	末	49	萬代古墳群	加茂
10	八木ノ谷中世墓	末	30	落合古墳	末	50	福島・長町	加茂
11	岡ノ谷	末	31	末古窟跡群	末	51	上龍王谷古墳群	加茂
12	北台	末	32	川端窟跡	末	52	福島古墳群	加茂
13	乾窟跡	末	33	川端	末	53	大原古墳群	加茂
14	乾	末	34	東仲古墳	末	54	千ヶ坂古墳群	加茂
15	溝ノ尾	末	35	伊勢貝	小野	55	川除古墳群	加茂
16	南台	末	36	下角古墳	志手原	56	川除・藤ノ木	加茂
17	溝向	末	37	辻之浦古墳群	志手原	57	中西山	深田
18	井ノ方窟跡	末	38	西ノ曾古墳群	志手原	58	平方	深田
19	井ノ方	末	39	富士山古墳群	加茂	59	平方西	深田
20	みどろ池窟跡	末	40	惣林古墳	加茂	60	下西山	深田

第2表 主要周辺遺跡一覧表(2)

No	遺跡名	地区名	No	遺跡名	地区名	No	遺跡名	地区名
61	西山西	深田	90	観音山古墳	三輪	119	北神ニュータウン内2・3号	長尾
62	西山古墳群	深田	91	桑原	三輪	120	北神ニュータウン内9号	長尾
63	西山	深田	92	大溝古墳群	三輪	121	北神ニュータウン内45号	長尾
64	奈良山	深田	93	川崎古墳群	三輪	122	川北古墳群	道場
65	奈良山古墳群	深田	94	桑原・平野古墳	三輪	123	上山南古墳群	天神
66	梶下ヶ谷	深田	95	鎗射山	生野	124	八幡神社裏山	道場
67	釜屋城跡	深田	96	下深田・坂ノ下	深田	125	八幡神社古墳群	道場
68	奈カリ与古墳	深田	97	三田谷古墳群	天神	126	遍明院裏山古墳	道場
69	奈カリ与	深田	98	天神	天神	127	昭願寺古墳	道場
70	五良谷古墳群	深田	99	古城	天神	128	尼崎学園内古墳	道場
71	貫志古墳群	深田	100	西山・芳ノ塚	天神	129	唐崎群集墳	道場
72	貫志・下所	深田	101	金心寺院寺跡	天神	130	南所古墳群	道場
73	貫志・樋戸	深田	102	村中	天神	131	塩田	道場
74	興元古墳群	深田	103	上山古墳群	天神	132	城谷古墳群	道場
75	矢ノ原古墳群	深田	104	寺谷群集墳	長尾	133	中野古墳群	生野
76	上丁田古墳	深田	105	熊野神社前	長尾	134	鯉口古墳群	道場
77	新林古墳	深田	106	熊野橋	長尾	135	日下部	道場
78	貫志	深田	107	宅原	長尾	136	オキダ古墳群	有野
79	稲田城居館跡	深田	108	豊浦古墳群	長尾	137	二郎古墳群	有野
80	下深田・城戸	深田	109	長尾小学校裏古墳	長尾	138	馬場下群集墳	有野
81	下深田	深田	110	奥田群集墳	長尾	139	下宅原	長尾
82	丸山古墳群	三輪	111	定塚墳集群	長尾	140	鹿の子	長尾
83	三輪古墳群	三輪	112	天皇山古墳	長尾	141	下深田大山	深田
84	土ノ谷古墳	三輪	113	炭焼群集墳	長尾	142	北神ニュータウン内13号	長尾
85	三輪・宮ノ脇	三輪	114	鉢屋群集墳	長尾	143	北神ニュータウン内20号	長尾
86	三輪・餅田	三輪	115	墓山古墳	長尾	144	北神ニュータウン内35号	長尾
87	池ノ谷古墳	三輪	116	尾張谷古墳	長尾	145	稲荷神社裏山古墳	長尾
88	高次・北ノ坪内	三輪	117	八景中学南古墳群	長尾			
89	高野越古墳	三輪	118	北神ニュータウン内4号	長尾			



第10図 遺跡の分布

- 東本庄地区** 武庫川左岸を中心とした地域で、東は東山、南は長坂まで含む地区である。武庫川によって形成された、中位ないし高位段丘面上に立地している。
- 末地区** 北浦・末西・末東地区を含む地区である。武庫川の支流をなす黒川と青野川によって形成された中位・高位段丘面上および丘陵斜面に立地する。当地区内の遺跡の大半は、青野ダム建設に伴う発掘調査によって明らかとなったものである。
- 広野地区** 武庫川と青野川の合流部にあたり、南北方向にのびる狭い地区である。段丘面II・段丘面III扇状地帯III・段丘面IV扇状地帯IV・段丘面VII自然堤防帯VIIに立地する。
- 内神地区** 武庫川右岸にあたり、北を武庫川の支流をなす相野川、南を同じく内神川によって囲まれた地区である。下内神と上内神の両地区を含んでいる。丘陵および高位段丘面上に立地している。

- 深田地区** 狭義の三田盆地内にあたり、武庫川右岸にあたる地区である。当地区は南側の天神地区とは明瞭に境を設定しにくい状況にあるが、立地の違いをもとに、区別した。段丘面VI扇状地帯VIおよび丘陵上に立地する。前者に立地する遺跡の多くは圃場整備に伴う調査、後者に立地する遺跡の多くは北摂三田ニュータウン建設に伴う調査により明らかとなった遺跡である。
- 天神地区** 深田地区の南側に隣接する地区である。段丘面II・段丘面III扇状地帯III・段丘面V扇状地帯Vおよび丘陵上に立地する。
- 加茂地区** 狭義の三田盆地内の武庫川左岸にあたる地区である。北は青野川、南は川除地区にかこまれた範囲である。川除・藤ノ木遺跡もこの地区内に含まれるものである。また東側丘陵部については、武庫川を望むことができる範囲とする。段丘面III扇状地帯III・段丘面IV扇状地帯IV・段丘面V扇状地帯Vおよび丘陵上に立地する。
- 三輪地区** 武庫川左岸に位置し、南側は山田川左岸まで含む地区である。段丘面V扇状地帯V・段丘面VI扇状地帯VIおよび丘陵上に立地する。
- 志手原地区** 加茂地区の東側にあたり、狭義の三田盆地からはずれた山間部にあたる地区である。山田川上流域にあたる。丘陵上あるいは高位段丘面上に立地する。
- 長尾地区** 長尾川兩岸にあたる地区である。東側は長尾川と武庫川の合流地点まで含む地区である。行政区分でいくとその大半は神戸市域に含まれる。長尾川に沿って形成された中位・高位段丘面上あるいは丘陵上に立地する。
- 有野地区** 北を長尾川、東を有野川および八多川にかこまれた地区である。段丘面III扇状地帯III・段丘面VII自然堤防帯に立地する。大半の遺跡は、圃場整備および北神ニュータウンの建設およびそれに伴う道路の建設にともなう調査により明らかとなったものである。
- 道場地区** 有野川・有馬川が合流する地点を中心とした地区である。東は長尾川と武庫川の合流地点の右岸である。長尾川右岸にあたる。段丘面III扇状地帯III・段丘VII自然堤防帯VIIに立地する。当地区は現在の行政区分でいくと神戸市域に含まれる。
- 生野地区** 長尾川と武庫川との合流地点より南東側の地区である。武庫川左岸にあたり、その南東側は武庫川峡谷にあたる。大半は丘陵部に立地する。当地区についても現在の行政区分においては神戸市域に含まれる。
- 小野地区** 黒川上流域に位置する、山間部の小盆地にあたる地区である。末地区とは峠を隔てた東側にあたる。

2. 歴史的環境

以上の地区割りをもとに、時代を追って三田盆地の歴史的環境についてみていくことにする。

(1) 旧石器時代

当時代の遺跡は末地区の溝向遺跡²⁾(17)に限られる。盆地内低地部にはなく、丘陵部なしい段丘面上に立地している。旧石器時代後期のナイフ形石器2点(チャートとサヌカイト製)が出土している。

(2) 縄文時代

この時代になると10遺跡と前時代に比べると多くの遺跡が知られている。その分布は、末地区・小野地区・深田地区・長尾地区・天神地区・三輪地区の6地区に分布が認められる。

- 末地区** 川端遺跡⁽³⁾ (33)・溝向遺跡・北台遺跡⁽⁴⁾ (12) の3遺跡が明らかとなっている。川端遺跡では、旧石器時代に近い石器、後期の埋甕が確認されている。溝向遺跡では、遺構には伴わないが早期の石鏃が出土している。北台遺跡においては、後期中葉の土壙76基と溝2本が検出されている。土器・石器（石鏃・有舌尖頭器）が出土している。
- 小野地区** 伊勢貝遺跡⁽⁵⁾ の1遺跡のみである。伊勢貝遺跡では、遺構は確認されていないが後期の深鉢が出土している。
- 加茂地区** 加茂・六地藏遺跡⁽⁶⁾ (45) で、土壙内より後期の土器片1点が出土している。
- 深田地区** 梶下ヶ谷遺跡⁽⁷⁾ (66) の1遺跡が調査で明らかとなっている。正確な時期は特定できないものの、落とし穴17基を検出している。
- 長尾地区** 宅原遺跡⁽⁸⁾ (107-豊浦地区) の1遺跡だけである。遺構は未確認であるが、サヌカイト製の有舌尖頭器・石鏃・石匙が出土している。
- 三輪地区** 桑原遺跡⁽⁹⁾ (91) において、包含層からの出土であるが、中期末の深鉢片1点が出土している。他の遺跡と異なり沖積地に立地した遺跡である。
- 天神地区** 対中遺跡⁽¹⁰⁾ (102) においては晩期の溝が確認され、長原式にあたる土器が出土している。

(3) 弥生時代

この時代になると遺跡の数が激増する。弥生時代を前期・中期・後期の3時期に分けてみていくことにする。

- 前期** 三輪地区の高次・北ノ垣内遺跡⁽¹¹⁾ (88)、三輪・餅田遺跡⁽¹²⁾ (86)、深田地区の貴志遺跡⁽¹³⁾ (78)・天神地区の対中遺跡の4遺跡に限られる。いずれも三田盆地域内の扇状地帯に立地している。

これら4遺跡の高次・北ノ垣内遺跡と貴志遺跡は土器片が出土しただけである。三輪・餅田遺跡においては、前期末から中期初頭にかけての土壙・溝が検出され、粘板岩製石庖丁の未製品などが出土している。また、対中遺跡においては、井堰を設けた溝が確認されている。

このように、前期の遺跡は前期でも新段階以降に限られ、前期の古段階のものは現在のところ見つかっていない。

- 中期** 中期全体としてみると遺跡の数が激増する。しかし、中期をさらに前半と後半に分けると、後半の遺跡が大半を占める。

- 中期前半** 前半にあたる遺跡としては、天神地区の古城遺跡⁽¹⁴⁾ (99) と道場地区の塩田遺跡⁽¹⁵⁾ (131) の2遺跡である。

古城遺跡では、中期中葉段階の溝が検出されている。また、塩田遺跡においても、ほぼ同時期と考えられる小形竪穴住居跡が1棟検出されている。そして当該遺跡においては、ほぼ同時期の包含層から石庖丁の製品・未製品が50点以上出土しており、他集落への供給

地の可能性を示唆する点で注目される。

中期後半 この段階になると、遺跡の数が急増する。その分布域は加茂地区・深田地区・三輪地区と長尾地区に分布が認められる。

加茂地区 福島・長町遺跡¹¹⁶⁾ (50) の1遺跡のみである。方形竪穴住居跡1棟と円形竪穴住居跡2棟をはじめとして土壘墓・焼土壘を検出している。

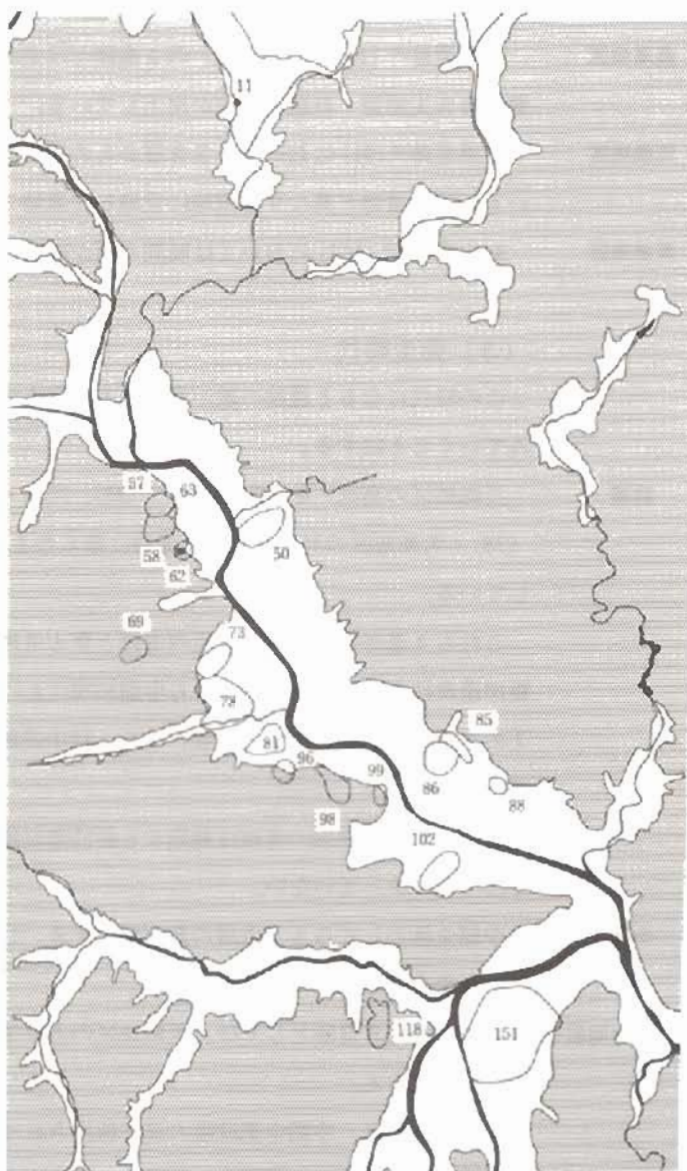
深田地区 当地区の遺跡については、立地の上から扇状地帯に分布する遺跡と丘陵上に分布する遺跡とに大きく分かれる。

まず扇状地帯に立地する遺跡としては、下深田遺跡¹¹⁷⁾ (81) と下深田大山遺跡¹¹⁸⁾ (141) がある。下深田遺跡においては、竪穴住居跡1棟と溝が検出されている。下深田大山遺跡においては、方形竪穴住居跡1棟と円形竪穴住居跡2棟が検出されている。

この他、貴志遺跡と貴志・樋戸遺跡¹¹⁹⁾ (73) において竪穴住居跡を検出しているが、中期のなかの具体的な時期に

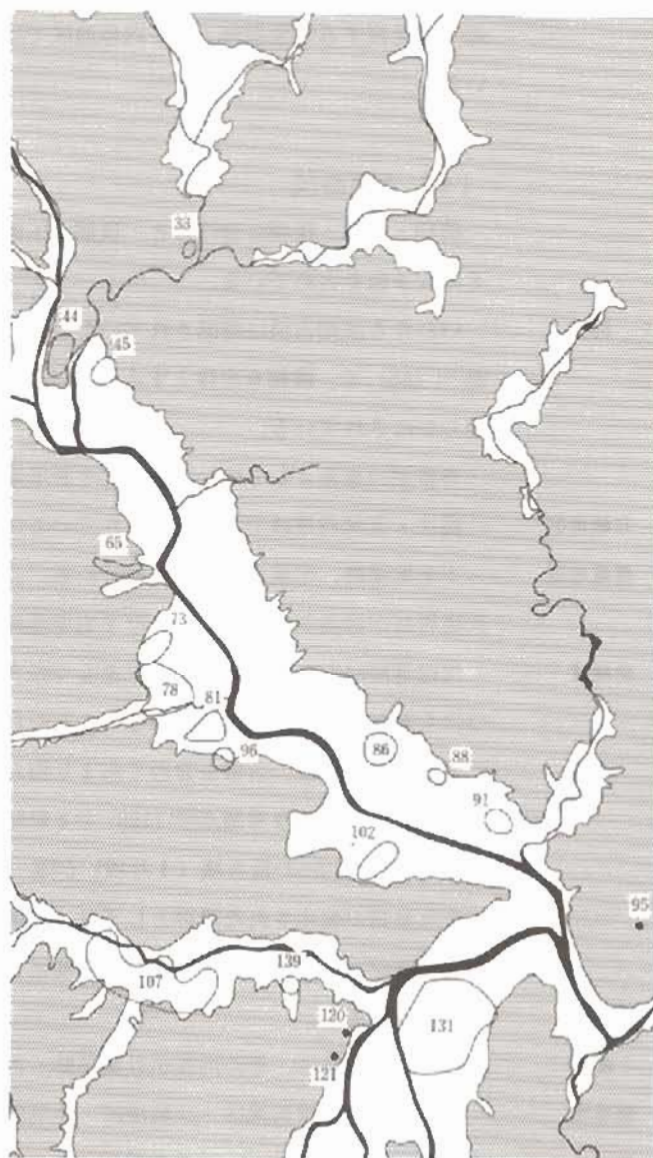
ついては不明である。この他、下深田・坂ノ下遺跡¹²⁰⁾ (96) においても中期の土器が出土している。

次に丘陵上に立地する遺跡としては、平方遺跡¹²¹⁾ (58)・中西山遺跡¹²²⁾ (57)・西山遺跡¹²³⁾ (63)・奈カリ与遺跡¹²⁴⁾ (69) がある。平方遺跡では、竪穴住居跡7棟をはじめとして土壘などが検出されている。そして、これらの住居跡の一つより小銅鐸の土製鋳型が出土し注目されている。中西山遺跡においても竪穴住居跡数棟と木棺墓が検出されている。西山遺跡においては、三田市内で唯一の方形周溝墓を検出している。奈カリ与遺跡は、内陸部に位置する高地性集落と考えられるもので、竪穴住居跡30棟をはじめとして溝・段状遺構・土器棺など多数の遺構が検出されている。



第11図 弥生時代前期～中期の主要遺跡

天神地区	天神遺跡 ¹²⁹ (98) がある。溝・土壇が検出されている。
三輪地区	三輪・餅田遺跡において、土壇2基が検出されている。また、土器だけであるが、三輪宮ノ越遺跡 ¹³⁰ (85) で確認されている。
道場地区	塩田遺跡において、前代から引き続き集落が営まれ、大型の竪穴住居跡2棟が検出され、内1棟からは鉄剣形石剣が出土している。
長尾地区	北神ニュータウン内第4号地点遺跡 ¹²⁷ (118) においても、竪穴住居跡が2棟検出され、鉄鏃・袋状鉄斧などが出土している。
末地区	岡ノ谷遺跡 ¹²⁸ (11) において、中期の土器片の出土が確認されているのみで、遺構は全く明らかとなっていない。
生野地区	鑛射山遺跡 ¹²⁹ (95) から銅剣形石剣が1点発見されている。発見当時、弥生土器も発見されたようで、高地性集落となる可能性も考えられる。
後期	遺跡の数としては当該期が最も多く、三田盆地内および周辺部の各地区に分布が認められる。扇状地などに立地する遺跡が目立つ。
加茂地区	加茂・六地藏遺跡 ¹³⁰ (45) があり、楕円形の住居跡1棟が検出されている。
深田地区	下深田・坂ノ下遺跡、下深田遺跡、貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡がある。 貴志・樋戸遺跡において住居跡・溝・土壇・方形周溝遺構が検出されているのが目を引く。このほか、貴志遺跡、下深田遺跡では土壇が、下深田・坂ノ下遺跡では土器片が確認されただけである。
天神地区	対中遺跡で、土壇・溝が検出されている。
三輪地区	高次・北ノ垣内遺跡、三輪・餅田遺跡、桑原遺跡の3遺跡がある。 高次・北垣内遺跡では、溝・土壇・掘立柱建物・住居跡状の落ち込みが検出されている。また、後期末（庄内平行期）



第12図 弥生時代後期～古墳時代前期の主要遺跡

の土器を多量に含んだ溝も検出されている。桑原遺跡では、後期末（庄内平行期）の住居跡1棟と溝（布留平行期）が検出されている。その他、三輪・餅田遺跡では落ち込みが検出されている。

- 道場地区** 塩田遺跡の1遺跡がある。後期末の住居跡1棟が検出されている。
- 広野地区** 上井沢・小屋垣内遺跡⁽³¹⁾ (44)の1遺跡が明らかとなっている。当遺跡では、住居跡3棟・土塀・溝・柱穴が検出されている。
- 末地区** 岡ノ谷遺跡が知られているが、土器片が確認されているにすぎない。
- 長尾地区** 当地区内の遺跡は、丘陵上と扇状地帯から出土している。
- まず、丘陵上に立地する遺跡であるが、北神ニュータウン内第4号地点遺跡の1遺跡のみである。後期初頭の住居跡3棟と台状墓1基が検出されている。また、定塚墳墓群⁽³²⁾ (111)において、2基の方形の墳丘墓が調査によって明らかとなっている。
- 次に扇状地帯に立地する遺跡としては、下宅原遺跡⁽³³⁾などが明らかとなっている。下宅原遺跡では、後期の柱穴と後期末（庄内平行期）の土塀が検出されている。そして、その近くに位置する宅原遺跡(107)内垣地区では、後期中葉・後期後葉の住居跡が検出されている。

(4) 古墳時代

前期・中期・後期に分けると、後期が圧倒的に多い。特に、後期においては、群集墳がその大多数を占めている。

- 前期** いわゆる前期古墳は確認されていない。これに近いものとして、深田地区の奈良山古墳群⁽³⁴⁾ (65)で、礫層を主体とする円墳（1号墳）と方形台状墓（2号墳）が調査によって明らかにされている。
- 当該期の集落としては、三輪地区と長尾地区に認められる。
- 三輪地区** 高次・北垣内遺跡で溝が検出されているにすぎない。
- 長尾地区** 下宅原遺跡、宅原遺跡が知られている。このうち宅原遺跡有井地区と宮ノ元地区では竪穴住居跡が検出されている。また下宅原遺跡でも竪穴住居跡が検出されている。
- 末地区** 川端遺跡において方形でカマドをもつ竪穴住居跡2棟が検出されているが、カマドをもつにもかかわらず須恵器を伴わないことから、古墳時代前期と考えられている。
- 中期** 当該期の遺跡は、古墳を含めてあまり明らかとなっていない。まず古墳としては、北神ニュータウン内第9号地点⁽³⁵⁾ (120)で4世紀初頭から5世紀初頭にかけての割竹形木棺を直葬した14×12mの長方墳（1号墳）が唯一検出されているだけである。
- また集落が検出された遺跡としては、深田地区の貴志・下所遺跡⁽³⁶⁾ (72)でカマドをもつ住居跡が、長尾地区の宅原遺跡豊浦地区で5世紀前半と考えられる住居跡が検出されているだけである。
- 後期** 当該期の遺跡は、その内容から集落跡・古墳・生産遺跡に分けることができる。
- 集落跡** 東本庄地区・深田地区・三輪地区・長尾地区・生野地区に分布が認められる。
- 東本庄地区** 田中・一の坪遺跡⁽³⁷⁾ (1)の1遺跡のみである。当遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物・土塀・溝などが検出されている。

深田地区

下深田遺跡、貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡、貴志・下所遺跡、奈良山遺跡³⁴⁰(64)、平方遺跡、平方西遺跡³⁴¹(59)の7遺跡が明らかとなっている。ただし、立地の違いにより扇状地帯に立地する遺跡と丘陵上に立地する遺跡とに大きく2つに分けることができる。

まず、扇状地帯に立地する遺跡としては、下深田遺跡、貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡、貴志・下所遺跡がある。

下深田遺跡では、溝が検出されたのみであるが、包含層からは円筒埴輪片が出土している。貴志遺跡でも溝が検出されているのみである。貴志・樋戸遺跡では、北西に所在する五良谷古墳群⁴⁰⁰(70)の集落と考えられ、住居跡や溝が検出されている。また円筒埴輪片と皮袋形土器が出土している⁴¹¹。貴志・下所遺跡でも住居跡が検出されている。住居跡の他に溝から多量の製塩土器が出土している点も注目される。

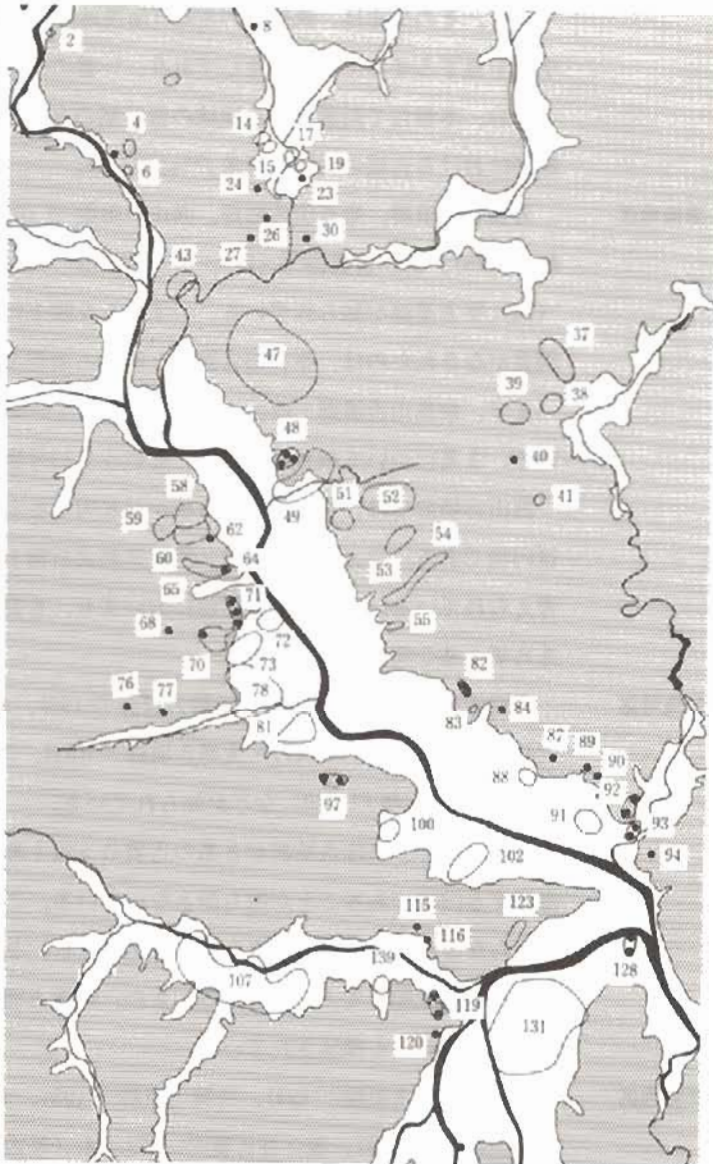
次に、丘陵上に立地する遺跡としては、奈良山遺跡、平方遺跡、平方西遺跡がある。

奈良山遺跡では、6世紀から7世紀にかけてのカマドをもつ住居跡が検出されている。平方遺跡においては、6世紀後半～7世紀初頭の住居跡4棟が検出されている。当遺跡においては、住居跡を中心とした集落跡に隣接して古墳と須恵器窯がセットで検出されている点が注目される。また、すぐ近くにある平方西遺跡でもカマドをもつ住居跡が検出されている。

末地区

井ノ方遺跡⁴²⁰(19)、溝ノ尾遺跡⁴²¹(15)、岡ノ谷遺跡の3遺跡が明らかとなっている。

溝ノ尾遺跡では、カマドをもつ住居跡が5棟検出されている。また、岡ノ谷遺跡でも6世紀前半と考えられる住居跡が検出されている。なお、井ノ方遺跡においては、6世紀代の土器が出土して



第13図 古墳時代後期の主要遺跡

いるのみである。

後述するように当地区においては、これらの集落と同時期の須恵器生産窯跡がいくつか明らかとなっており、当地区の集落は須恵器生産の主体となった集落と考えられている。

三輪地区

桑原遺跡と高次・北垣内遺跡の2遺跡が明らかとなっている。桑原遺跡においては、5世紀末～6世紀初頭の住居跡2棟、6世紀の掘立柱建物・土壇・溝などが検出されている。高次・北垣内遺跡では土壇・落ち込みが検出されている。

生野地区

生野遺跡の1遺跡のみである。6世紀後半の柱穴が検出されている。

長尾地区

下宅原遺跡と宅原遺跡の2遺跡が明らかとなっている。

下宅原遺跡では、6世紀中葉の住居跡2棟・土壇と6世紀末から7世紀初頭にかけての掘立柱建物2棟が検出されている。そして、宅原遺跡においては宮ノ元地区、豊浦地区、有井地区、岡下地区から当該期の遺構（住居跡・掘立柱建物）が検出されている。

古墳

後期から終末期にかけての古墳および古墳群は、未調査分も含めてかなりの数が知られている。その分布は、武庫川の左岸（加茂地区・三輪地区）・右岸（深田地区）の三田盆地中央を見下ろせる位置に密集しており、一番の分布域を形成している。

なお、本報告で対象とする地域の当該期の古墳の分布については、井守徳男の「畿内周縁部における古墳の展開と終末」⁴⁴⁾に詳しい。

深田地区

五良谷古墳群、奈良山古墳群、西山古墳群⁴⁵⁾ (62)、奈カリ与古墳⁴⁶⁾ (68)、矢ノ原古墳群⁴⁷⁾ (75)、新林古墳群⁴⁷⁾ (77)、上丁田古墳⁴⁷⁾ (76)、貴志古墳群⁴⁷⁾ (71)、興元古墳群⁴⁷⁾ (74)、平方遺跡が知られている。いずれも丘陵上に立地するものである。これらのなかで、調査がなされたのは、奈良山古墳群と西山古墳群及び奈カリ与古墳である。

まず、奈良山古墳群では、6世紀前半から7世紀中頃にかけての古墳が明らかとなっている。3基について調査がなされ、このうち12号墳の中心主体は横口式石棺である。

西山古墳群では、6世紀代の古墳が15基明らかとなっている。このうち、6号墳は前方後円墳である。奈カリ与古墳は、横口式箱式石棺を主体とする円墳である。7世紀前半と考えられている。この他平方遺跡においても、6世紀後葉とされる横穴式木室を主体とする古墳1基が検出されている。

加茂地区

青龍寺裏山古墳群⁴⁸⁾ (48)、川除古墳群⁴⁹⁾ (55)、上籠王谷古墳群⁴⁷⁾ (51)、萬代古墳群⁴⁷⁾ (49)、加茂古墳群⁴⁷⁾ (47)・大原古墳群⁴⁷⁾ (53)、千ヶ坂古墳群⁴⁷⁾ (54)、富士山古墳群⁴⁷⁾ (39)、惣林古墳⁴⁷⁾ (40)などが知られている。

このなかで、川除古墳群が8基の古墳のうち1基について調査がなされている。木棺を直葬する円墳であることが明らかとなっている。この他、青龍寺裏山古墳群は、2基の古墳からなるが、1号墳は特異な石室を主体とし、2号墳は横口式石槨を主体とするもので、いずれも終末期と考えられている。また、加茂古墳群中には、未調査ではあるが、石室内に棚をもつものも確認されている。

三輪地区

桑原・平野古墳群⁴⁷⁾ (94)、川崎古墳群⁴⁷⁾ (93)、大湊古墳群⁴⁷⁾ (92)、高野越古墳⁴⁷⁾ (89)、観音山古墳⁴⁷⁾ (90)、池ノ谷古墳⁴⁷⁾ (87)、土ノ谷古墳⁴⁷⁾ (84)、三輪古墳群⁴⁷⁾ (83)、丸山古墳群⁴⁷⁾ (82)があるが、調査がなされたものはなく、その具体的な内容は明らかではない。

- 末地区** 当地区については、広い意味では一つの古墳群ととらえることが可能と考えられる。おもなものとしては、前ノ谷古墳⁽⁶⁰⁾ (8)、八木ノ谷古墳群⁽⁶¹⁾ (9)、庵ノ谷古墳⁽⁶²⁾ (23)、道東古墳⁽⁶³⁾ (26)、双子塚2号墳⁽⁶⁴⁾ (27)、求メ塚古墳⁽⁶⁵⁾ (24)、落合古墳⁽⁶⁶⁾ (30) などがある。いずれも青野ダム建設に伴う調査によって明らかにされたものである。いずれも主体部は横穴式石室を主体とするものである。
- 他に、調査はなされていないが、石棚をもつ東伸古墳⁽⁶⁷⁾ (34) がある。
- 広野地区** 宮脇古墳群⁽⁶⁷⁾ (43) が調査により明らかとなっている。当古墳群は18基の古墳から構成されるが、うち12号墳と4号墳は前方後円墳である。特に12号墳は横穴式石室を主体とすることが調査で明らかとなっている。
- 東本庄地区** 沢山古墳群⁽⁶⁷⁾ (2)、角蓮寺古墳群⁽⁶⁷⁾ (7)、赤子谷古墳群⁽⁶⁷⁾ (4)、畑ノ谷古墳群⁽⁶⁷⁾ (5)、新坂古墳群⁽⁶⁷⁾ (6) の5古墳群が明らかとなっている。沢山古墳群が東本庄に所在する以外は、東山に所在する古墳群である。これらのなかで調査されたものはない。
- 天神地区** 三田谷古墳群⁽⁶⁷⁾ (97) が知られている。
- 道場地区** 尼崎学園内古墳群⁽⁶⁷⁾ (128)、オキダ古墳群⁽⁶⁸⁾ (136)、馬場下群集墳⁽⁶⁷⁾ (138) が知られている。これらのなかでオキダ古墳群が調査で確認されたもので、横穴式石室を主体とする6世紀後半の古墳であることが明らかとなっている。また、尼崎学園内古墳群については、6基の横穴式石室を主体とする円墳からなり、そのうち4号墳については、石棚をもつことが明らかとなっている。
- 有野地区** 二郎古墳群⁽⁶⁷⁾ (137) があるが、未調査である。
- 長尾地区** 当地区については、武庫川と長尾川の合流地点から、長尾川と八多川が合流する地点までの左岸地域と、それ以西の長尾川右岸地域とに分けることができる。
- まず前者の地域では、唐崎群集墳⁽⁶⁷⁾ (129)、南所古墳群⁽⁶⁷⁾ (130)、城谷古墳群⁽⁶⁷⁾ (132)、昭願寺古墳⁽⁶⁷⁾ (127)、遍明院裏山古墳群⁽⁶⁷⁾ (126)、八幡神社裏山古墳群⁽⁶⁷⁾ (124)、川北古墳群⁽⁶⁷⁾ (122)、鯉口古墳群⁽⁶⁷⁾ (134)、尾張谷古墳群⁽⁶⁷⁾ (116)、墓山古墳⁽⁶⁷⁾ (115)、八景中学校南古墳群⁽⁶⁷⁾ (117)、鉢屋群集墳⁽⁶⁷⁾ (114)、炭焼群集墳⁽⁶⁷⁾ (113)、天皇山古墳⁽⁶⁷⁾ (112)、奥田群集墳⁽⁶⁷⁾ (110)、長尾小学校裏古墳⁽⁶⁷⁾ (109)、寺谷群集墳⁽⁶⁷⁾ (104) など多くの古墳が分布している。これらのなかで、唯一墓山古墳について調査がおこなわれ、木棺直葬を主体とする6世紀前半の方墳であることが明らかとなっている。
- 次に、長尾川右岸地域であるが、北神ニュータウン内第2・3号地点遺跡⁽⁶⁷⁾ (119)、北神ニュータウン内第9号地点遺跡⁽⁶⁷⁾ (120)、稲荷神社裏山古墳群⁽⁶⁷⁾ (145)、北神ニュータウン内第13号地点遺跡⁽⁶⁷⁾ (142)、北神ニュータウン内第20号地点遺跡⁽⁶⁷⁾ (143)、北神ニュータウン内第35号地点遺跡⁽⁶⁷⁾ (144) がある。
- 以上のうち、北神ニュータウン内第9号地点遺跡、同第13号地点遺跡、同第20号地点遺跡、同第35号地点遺跡について、調査が行われている。
- この結果、北神ニュータウン内第20号地点遺跡は、横穴式石室を主体とする円墳であることが明らかとなっている。北神ニュータウン内第13号地点遺跡については、6世紀前半の河原石を積んだ縦穴式石室であり、特異な存在である。これに対して、北神ニュータウン内第9号地点遺跡では、6世紀前半の3基の箱式木棺を主体とする円墳であることが明

第2節 歴史的環境

らかとなっている。また、北神ニュータウン内第2・3号地点遺跡および稲荷神社裏山古墳群においても、横穴式石室を主体とする古墳であることが明らかとなっている。

志手原地区 以前は、辻之浦古墳群⁴⁷⁷(37)、西ノ曾古墳群⁴⁷⁷(38)などが知られるのみであったが、近年下角古墳⁴⁶⁹(36)の存在が明らかとなっている。6世紀後半の横穴式石室を主体とする古墳である。

中野古墳群⁴⁷⁷(133)がある。山麓部に構築された計21基の円墳からなる6世紀中頃を中心に築かれた古墳群で、横穴式石室を主体としている。

小野地区 西ノ曾古墳群⁴⁷⁷(38)・塚本古墳⁴⁷⁷があるが、いずれも調査がなされておらず、具体的な内容については明かとはなっていない。

以上、三田盆地に分布する古墳および古墳群について概観してきた。

横穴式石室を主体とするものが大半を占めるが、三田盆地中央部の武庫川右岸にあたる地域では、木棺直葬を主体とするものがほとんどで横穴式石室を築かない点は特異な点として指摘できる。

窯跡 当代の須恵器生産窯跡は末地区と深田地区に限られる。

末地区 当地区では、6世紀前半の郡塚1号窯跡⁴⁸¹(25)が調査によって明らかとなっている。平方西遺跡で6世紀後半の須恵器窯跡が3基検出されている。

(5) 奈良時代

当代になると、畿内中央では律令制が確立する時期である。当地域についても、「延喜式」によると有馬郡に編入されたようである。ただし、当地域については文献資料がほとんど残存していないため、その実体については不明な点が多い。

窯跡 当時代については、遺跡数としては多くはないが、各地域に平均して分布が認められる集落跡のほか須恵器の生産遺跡が末地区を中心に調査で明らかとなっている。

末地区 当地区は青野ダム建設に伴い広域的に調査が行われた地域で、7基の須恵器生産窯(13・21・29・32)の調査が行われている。⁴⁸²特に、当地区は「末」という地名からも推測できるように、古墳時代後期から平安時代後期まで続く窯業地帯であったところである。未調査の窯を含めると約15基ほどがあるものと推定されている。

集落跡 また、これらの窯業生産の主体となった工人たちの居住地と考えられる集落跡も一連の調査で明らかとなっている。南台遺跡⁴⁸³(16)、溝ノ尾遺跡、乾遺跡⁴⁸⁴(14)などである。南台遺跡では、掘立柱建物・土塙・土塙墓・溝・銭埋納遺構などの遺構が検出されている。土馬・円面硯などが出土している点も注目される。溝ノ尾遺跡は、古墳時代後期から続く遺跡であるが、掘立柱建物を検出している。乾遺跡においては、奈良時代を通して集落が営まれていたようで、掘立柱建物や土塙などの遺構が検出されている。

深田地区 いずれも集落跡で、真志・下所遺跡、深田遺跡、奈良山遺跡、梶下ヶ谷遺跡がある。

特筆すべきものとして、真志・下所遺跡では奈良時代後期と考えられる「溝」と刻まれた銅印が出土している⁴⁸⁵。奈良山遺跡で鍛冶工房跡3ヶ所が、梶下ヶ谷遺跡ではカマドをもつ竪穴住居跡をはじめとして掘立柱建物・井戸・溝などが検出されている。

天神地区 対中遺跡で掘立柱建物・溝・土塙・井戸などが検出されている。この他当地区内におい

ては、白鳳期創建と伝えられる金心寺廃寺跡⁶⁹⁾(101)が知られている。ただし、現在のところ創建時の明確な遺構は検出されていないが、昭和62年度の三田市教育委員会による調査で、溝内から複弁八葉軒丸瓦・軒平瓦が出土している。

三輪地区 桑原遺跡がある。掘立柱建物および土塙が検出されている。

道場地区 平田遺跡がある。

長尾地区 宅原遺跡などが調査によって明らかとなっている。

以上が奈良時代の主要な遺跡であるが、その立地が扇状地ないし段丘上である点が共通している。

(6) 平安時代

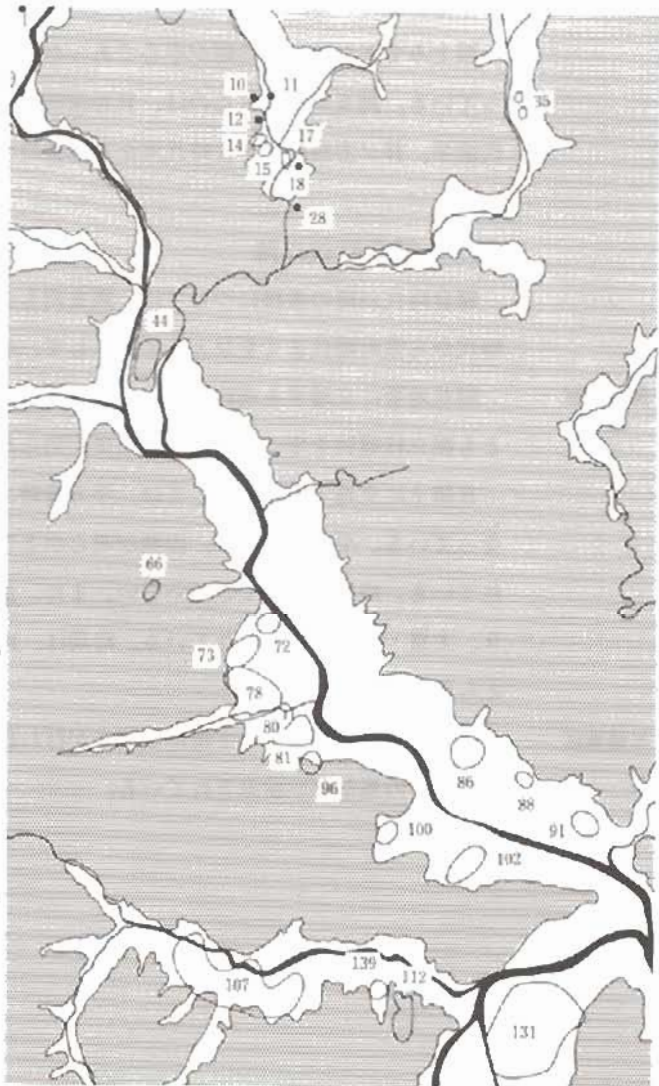
当該期の遺跡の大半は、平安時代でも後半から鎌倉時代初頭にかけての時期に属するものである。地域的には、東本庄地区・末地区・深田地区・天神地区・三輪地区・長尾地区・道場地区と、大半の地区に認められる。

東本庄地区 田中・一の坪遺跡の1遺跡のみである。平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての井戸が検出されている。

末地区 乾遺跡、岡ノ谷遺跡、井ノ方遺跡、溝向遺跡、溝ノ尾遺跡、南台遺跡、北台遺跡、蛭田遺跡、八木ノ谷中世墓がある。これらの遺跡は青野ダム建設に伴う発掘調査で明らかとなったものである。八木ノ谷中世墓を除いてはいずれも集落跡で、掘立柱建物・土塙・溝などを検出している。

深田地区 下深田遺跡、下深田・城戸遺跡、貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡、貴志・下所遺跡がある。これらの遺跡は扇状地帯に立地するもので、いずれも圃場整備にともない明らかとなった遺跡である。各遺跡とも集落跡で、掘立柱建物を中心に、井戸・溝・木棺墓などが検出されている。

また、当地区の丘陵部においては、梶下ヶ谷遺跡が調査によって明らかとなっており、



第14図 平安時代中期～鎌倉時代後期の主要遺跡

掘立柱建物が検出されている。

天神地区 対中遺跡が調査によって明らかとなっている。掘立柱建物・溝・井戸・木棺墓・土壘などが検出され、墨書土器の内容および建物の規模が大きいことなどから、地方官衙ないし荘園に関連する遺跡と考えられている。

三輪地区 桑原遺跡、三輪・餅田遺跡、高次・北ノ垣内遺跡の3遺跡が調査によって明らかとなっている。桑原遺跡では、土壘と溝が検出されている。三輪・餅田遺跡では、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物・井戸などが検出されている。

長尾地区 宅原遺跡、下宅原遺跡、鹿の子遺跡がある。宅原遺跡では、平安時代後半から鎌倉時代初頭にかけての集落跡が確認され、掘立柱建物・溝・井戸・木棺墓などが検出されている。下宅原遺跡においても宅原遺跡同様、掘立柱建物・土壘・溝などからなる集落跡が検出されている。鹿の子遺跡においても、掘立柱建物・土壘・溝・木棺墓などが検出されている。

道場地区 平田遺跡と塩田遺跡の2遺跡が調査によって明らかとなっている。平田遺跡は、平安時代でも他の遺跡に比べて古く、10世紀代の遺物および11世紀代の溝が検出されている。

塩田遺跡は、掘立柱建物・土壘・木棺墓などが検出されており、塩田荘の荘官層の居館と推定されている。

以上みてきたのは集落跡が中心であったが、末地区においては須恵器窯跡が明らかとなっている。調査がなされたのは、貝谷窯跡と井ノ方窯跡の2基である。貝谷窯跡は平安時代前半、井ノ方窯跡は平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられている。

(7) 鎌倉時代以降

鎌倉時代以降の遺跡については、調査例も少なく、あまり知られていない。以下、鎌倉時代から室町時代までをひとまとめにして、各地区ごとにみていきたい。

深田地区 扇状地帯に立地する遺跡としては、貴志遺跡と貴志・下所遺跡の2遺跡がある。両遺跡とも掘立柱建物を中心とした、集落跡が明らかとなっている。

丘陵上に立地する遺跡としては、平方遺跡、釜屋城跡⁽⁶⁶⁾ (67) が調査によって明らかとなっている。平方遺跡では、山城が明らかとなっており、堀切・土壘・虎口などが検出されている。時期は特定できていない。また、釜屋城跡についても山城が明らかとなっており、土壘・虎口が検出されている。時期は、出土遺物から15世紀後半から16世紀後半と考えられている。

三輪地区 高次・北ノ垣内遺跡の1遺跡が調査が行われ、鎌倉時代後半から室町時代前半の掘立柱建物などの集落跡が検出されている。

註

- (1) 高橋 学「三田盆地の地形分析」『対中』兵庫県教育委員会 1988
- (2) 吉田 昇・岸本一宏他『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書』(2) 1988
- (3) 前掲(2)
- (4) 前掲(2)
- (5) 櫃本誠一他『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書』(1) 1987
- (6) 國井和哉「加茂散布地」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員委員会 1988
- (7) 兵庫県教育委員会 岸本一宏氏による
- (8) 神戸市教育委員会『宅原遺跡豊浦地区 現地説明資料』 1988
- (9) 吉田 昇・深井明比古・岡田章一「桑原遺跡」兵庫県教育委員会 1986
- (10) 深井明比古他『対中』兵庫県教育委員会 1988
- (11) 現地説明会資料「高次・北ノ垣内遺跡」三田市教育委員会 1989
- (12) 現地説明会資料「三輪小学校の村-三輪・餅田遺跡 中間説明会資料-」三田市教育委員会 1987
- (13) 高島信之・山崎敏昭他『武庫川下土地改良区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査記録』(兵庫県三田市文化財調査報告 第5冊) 三田市教育委員会 1988
- (14) 高島信之「古城遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』兵庫県教育委員会 1984
- (15) 黒田恭正「塩田遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (16) 高島信之「歴史的環境」『天神遺跡』(兵庫県三田市文化財調査報告 第3冊) 三田市教育委員会 1987
- (17) 前掲(13)
島中 剛・山上雅弘・山崎敏昭「下深田散布地」『兵庫県文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988
- (18) 前掲(13)
- (19) 前掲(13)
- (20) 前掲(13)
- (21) 深井明比古・篠宮 正「兵庫県平方遺跡」『日本考古学年報 40 (1987年度版)』日本考古学協会 1989
- (22) 井守徳男「中西山遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』兵庫県教育委員会 1984
- (23) 高島信之・潮崎 誠「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」I (兵庫県三田市文化財調査報告書 第2冊) 三田市教育委員会 1983
- (24) 井守徳男他「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書」II 兵庫県教育委員会 1983
- (25) 高島信之・國井和哉・山崎敏昭『天神遺跡-公共下水道埋設にかかる発掘調査報告書(I)-』(兵庫県三田市文化財調査報告 第3冊) 三田市教育委員会 1987
- (26) 前掲(16)
- (27) 『新修 神戸市史 歴史編I 自然・考古』新修神戸市史編集委員会 1989
- (28) 前掲(2)
- (29) 神戸市立考古館『おおむかしの神戸』1976
- (30) 前掲(6)

第2節 歴史的環境

- (31) 三田市教育委員会の教示による
- (32) 前掲 (27)
- (33) 丸山 潔ほか「下宅原遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財調査年報』神戸市教育委員会 1986
- (34) 前掲 (23)
- (35) 丸山 潔「北神ニュータウン内遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (36) 前掲 (13)
- (37) 三田市教育委員会の教示による
- (38) 大平 茂「奈良山遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会 1985
- (39) 兵庫県教育委員会中川 渉氏の教示による
- (40) 前掲載 (24)
- (41) 高島信之「三田市貴志・貴志遺跡A地点出土の円筒埴輪及び皮袋形土器片」『三田考古』第2号 三田市教育委員会 1982
- (42) 前掲 (2)
- (43) 前掲 (2)
- (44) 井守徳男「畿内周縁部における古墳の展開と終末」『北山茂夫追悼日本史論集 歴史における政治と民衆』日本史論叢会 1986
- (45) 前掲 (23)
- (46) 前掲 (24)
- (47) 『三田市遺跡分布地図』(兵庫県三田市文化財調査報告書 第6冊) 三田市教育委員会 1989
- (48) 高島信之・畠中 剛「三田市青龍寺裏山1号墳出土の磚」『兵庫考古』第19号 兵庫考古研究会 1984
井守徳男 前掲 (44)
- (49) 高島信之「川除古墳群第8号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988
- (50) 前掲 (5)
- (51) 前掲 (5)
- (52) 前掲 (5)
- (53) 前掲 (5)
- (54) 前掲 (5)
- (55) 前掲 (5)
- (56) 前掲 (5)
- (57) 横本誠一・松下 勝「日本の古代遺跡3 兵庫南部」保育社 1984
- (58) 西岡巧次「オキダ古墳群発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1987
- (59) 深井明比古・別府洋二「墓山古墳」兵庫県教育委員会 1987
- (60) 三田市教育委員会山崎敏昭氏の教示による
- (61) 前掲 (5)
- (62) 前掲 (2・5)

(63) 前掲(2)

(64) 前掲(2)

(65) 高島信之「兵庫県三田市下所遺跡出土の印章について」『古代学研究』110号 1986

(66) 三田市教育委員会の教示による

(67) 前掲(5)



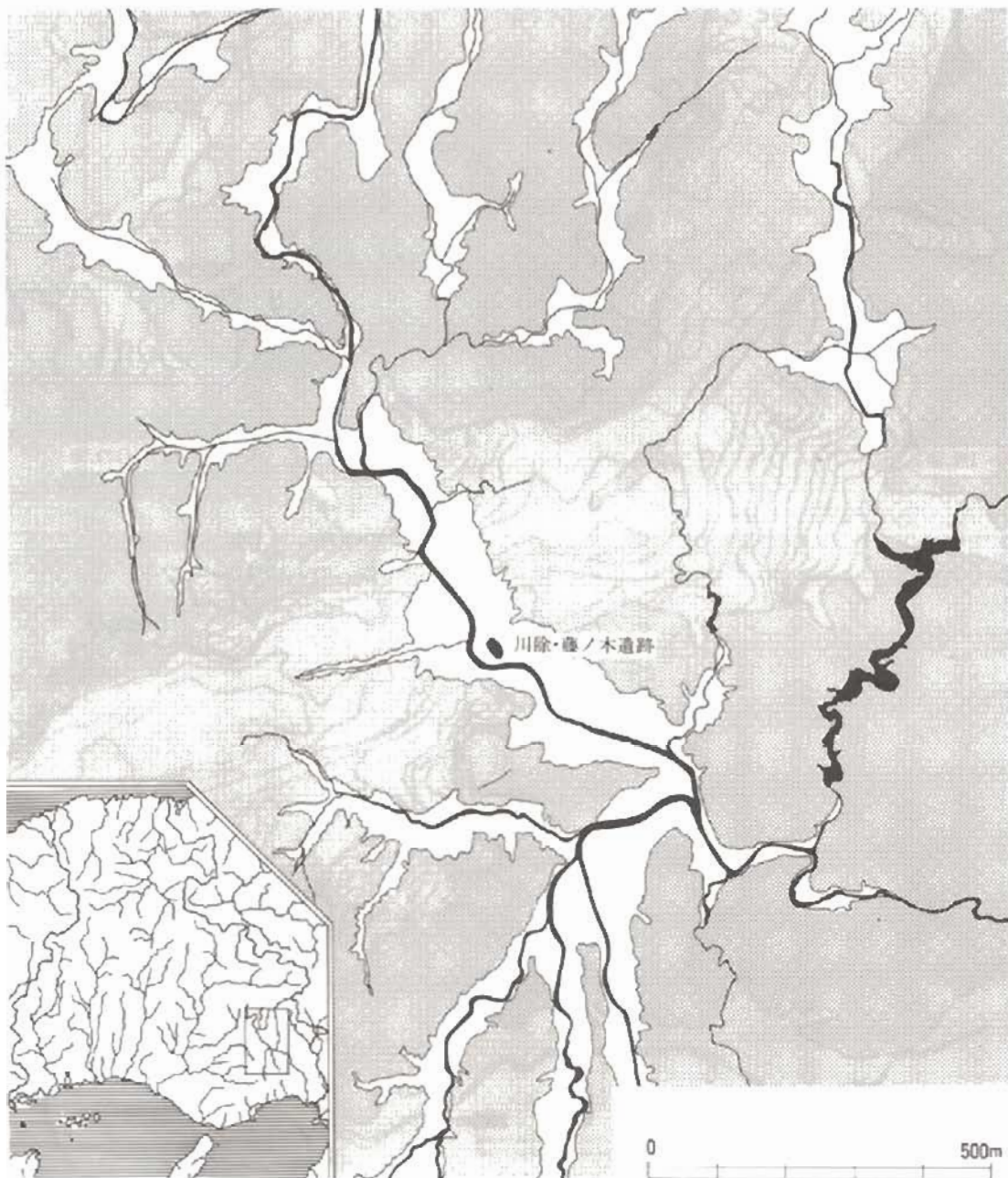
第15図 遺跡の立地(1)

第3章 調査の結果

第1節 調査地の概観

1. 微地形の復元

当遺跡は、約36,000㎡におよぶ面積を調査したのであるが、検出した遺構には、いくつ



第16図 遺跡の立地（2）

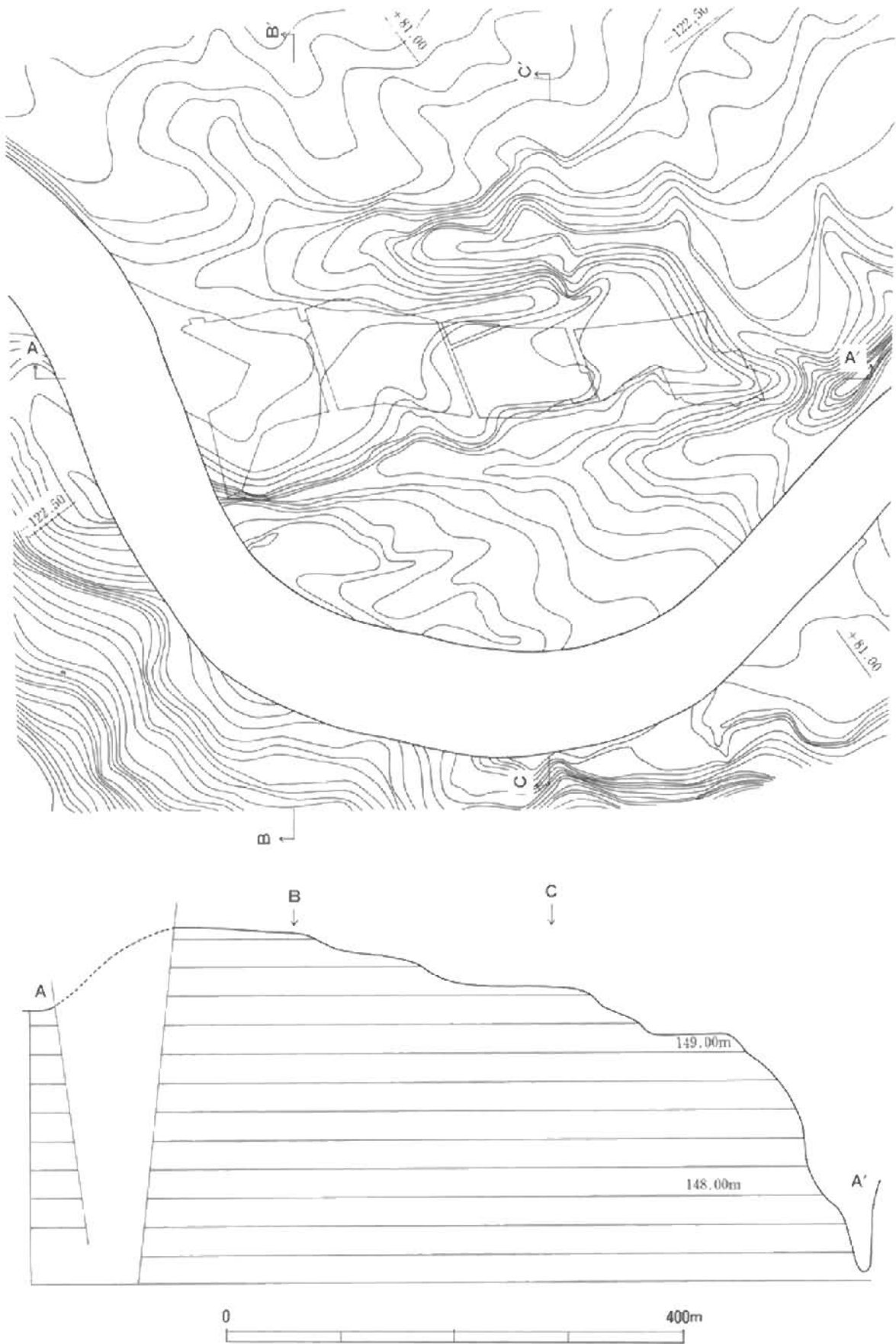
第1節 調査地の概観

かのまとまりが認められる。このまとまりは、微地形図および、土層断面の観察の結果、いくつかの微高地に対応することが明らかとなった。そこで、当遺跡について1/100,000スケールから1/1,000スケールへと、より微視的に観察していくことによって、当遺跡の地形環境を明らかにしていきたい。

スケール1 国土地理院発行1/50,000地形図をもとに、武庫川上・中流域を低地部と丘陵部にわけ、1/100,000に縮小した図である。これによると、三田盆地は武庫川中流域に形成された小盆地であることがわかる。三田盆地（低地部に限った狭義の盆地）は、北西から南東方向に



第17図 遺跡の立地（3）



第18図 遺跡の立地(4)

細長く広がり、南東部は武田尾峡谷で収束している。北西から南東方向で約8.50kmを測り、最大幅は1.50kmである。

この三田盆地内を武庫川は、大きく蛇行しながら流れている。そして、このようないくつもの蛇行部のひとつに川除・藤ノ木遺跡が所在する。

しかし、このスケールでは、川除・藤ノ木遺跡は三田盆地内に立地することが理解できるのみで、よりこまかな立地を読み取ることは困難である。そこで、次に三田盆地内をより詳しくみることにする。

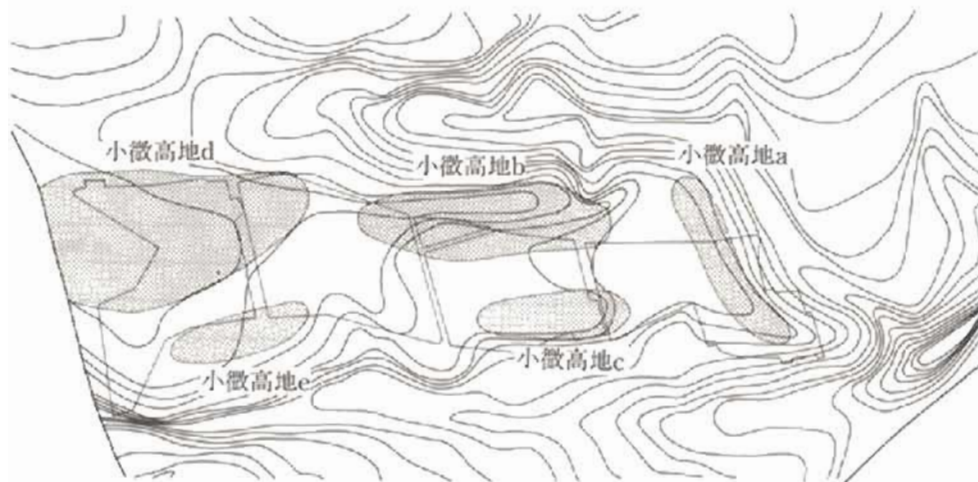
スケールII 三田市発行の1/2,500都市計画図(昭和44年)を基本とするものである。この都市計画図をベースに1m等高線を復元したのが第17図である。この第17図をみると、スケールI段階では単なる平坦地としてしか読み取ることが出来なかった低地部が、幾つかの扇状地形とそれに挟まれた谷地形とが浮かび上がってくる。しかし、この段階においても、川除・藤ノ木遺跡の周辺はまだ、単なる平坦地にしか読み取ることができない。そこで遺跡周辺の低地部について、さらにスケールアップしてみたい。

スケールIII 兵庫県北摂整備局発行(昭和51年)1/1,000武庫川下地域圃場整備事業平面図を基本とする。この図と1/10,000モノクロ空中写真及び現地踏査ををともに10cm等高線図を作製したのが第18図の微地形図である。この微地形図を見るとわかるように、川除・藤ノ木遺跡は、一つの大きな微高地上に立地していることが明確となる。

この微地形図によると、川除・藤ノ木遺跡の立地する微高地は、北西から南東へのびる紡錘形をなす。ただし、最北西部については一部現河道(武庫川)に切られており、完全な形態を復元することはできない。主軸方向で約560m、その直交方向で約100mと復元される。また周辺谷部と微高地頂上部との比高は約2.4mを測る。

ところで、第18図の微地形図をより詳細に観察すると、5つの小さな微高地(小微高地)とそれらの小微高地に挟まれた低地部からなることがわかる。これまで見てきた微高地を微高地と呼称するのに対して、これらの微高地を小微高地とし、東から小微高地a、小微高地b、小微高地c、小微高地d、小微高地eと呼称することにする。

小微高地a 微高地の最も東側に位置する。微高地の主軸方向とは方向を違え、ほぼ南北方向にとる。主軸方向で約130m、その直交方向で約25mと復元される。



第19図 遺跡内の微地形

小徴高地b 徴高地の最も西側に位置する小徴高地dから東方向に派生する2つの小徴高地の一つで、北側の小徴高地にあたる。主軸方向で約152m、その直交方向で約45mと他の小徴高地と比較して尾根状を呈する小徴高地である。

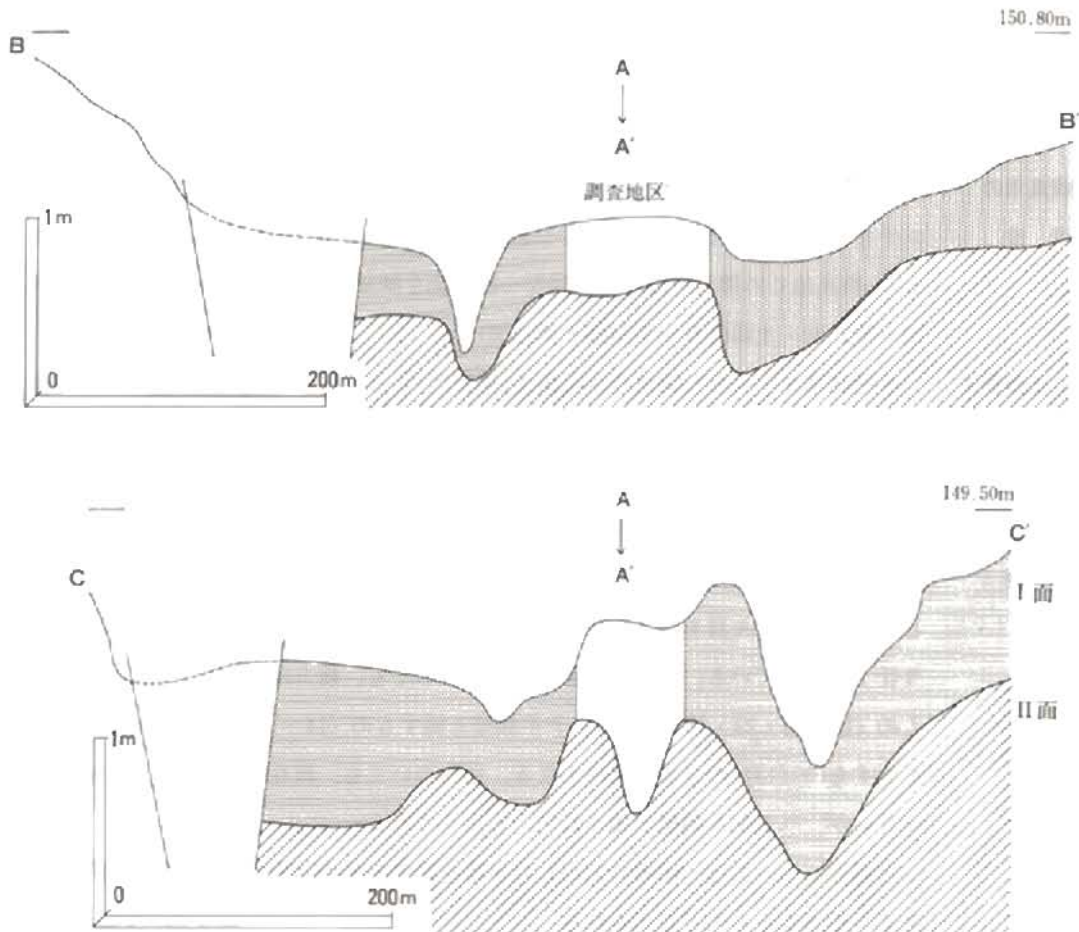
小徴高地c 小徴高地bと同じく小徴高地dから派生する2つの小徴高地の一つで、徴高地の南側にあたる。小徴高地bよりもさらに狭い小徴高地で、主軸方向で約100m、その直交方向で35mある。

小徴高地d 徴高地の最も西側に位置する。5つの小徴高地群のなかでは最も広い面積を有する。北西から南東方向に主軸をとり、主軸長は約200m、その直交方向は約95mである。

小徴高地e 小徴高地dの南側に位置する。今回の調査では明確に把握することはできなかったが、三田市教育委員会が主体となって行った果園圃場整備事業に伴う発掘調査のデータから、その存在が明らかとなったものである。主軸方向を東西方向にとり、その主軸方向の長さは約95m、その直交方向で約30mを測り、5つの小徴高地のなかでは最も小規模な小徴高地である。

以上、川除・藤ノ木遺跡は5つの小徴高地からなる徴高地上に立地する遺跡であることが明らかとなった。そこで次に、ここで分析した徴高地が川除・藤ノ木遺跡で検出した弥生時代から中世の遺構の立地についてどこまで有効であるかを検討してみたい。

まず第20図の断面図を見ていただきたい。第18図の徴地形図をもとにそのエレベーション



第20図 復元徴地形と遺構面の対応

ン（I面）をとり、そこに今回の発掘調査で確認した弥生時代の面のエレベーション（II面）を合成したものである。また、調査区外の地区については、三田市教育委員会が実施した圃場整備に伴う確認調査のデータから復元したものである。絶対高こそ異なるが、相対的な高低は両者ともほぼ一致することがわかる。現地表面より復元した微地形と比べてより高低差が強調された形となっている。

また、今回の発掘調査で検出した遺構の分布をみると、遺構の時代を問わずその平面的な分布が小微高地と見事に対応することがわかる。このことは、弥生時代の遺構についても中世の遺構についても、その面的な広がりにも多少の差はあるものの、微地形と対応しているといえよう。

以上のことから、第18図で示した微地形復元図が、弥生時代の地表面の微地形をよく反映しているものといえよう。

2. 微地形の変遷

当遺跡の微地形の復元の結果、当遺跡が5つの小微高地からなるひとつの微高地上に立地することが明らかとなった。そこで、調査の結果をもとに、この微地形の形成から現在の地形にいたるまでの過程を明らかにすることにする。

微高地の形成

各小微高地の断割り調査の結果、微高地内からは遺物を確認することはできなかった。しかし、調査の結果（第3章第3節・5節）、小微高地aと小微高地bにおいて当遺跡では最も古い弥生時代中期初頭の遺構を検出している。このため、少なくとも弥生時代中期初頭には、復元された微地形は形成されていたものと考えられる。

微高地の埋没

調査においては、低地部を完全に掘りさげることはできなかったが、各低地ごとにトレンチをあげ、その底部を確認することができた。この調査の結果、小微高地a・小微高地b・小微高地cの間の肩部から良好な一括遺物を確認することができた。（土器群A-第21図～第23図・土器群B-第24図・第25図）

土器群A

小微高地a中央部西側肩部から出土（第27図）した一群である。器種としては、壺・甕・高坏・鉢・甑が出土している。

壺

二重口縁・広口壺・底部が出土している。底部片については、丸底を指向するものも認められ、平底のものについても小型のものが大半を占めている。

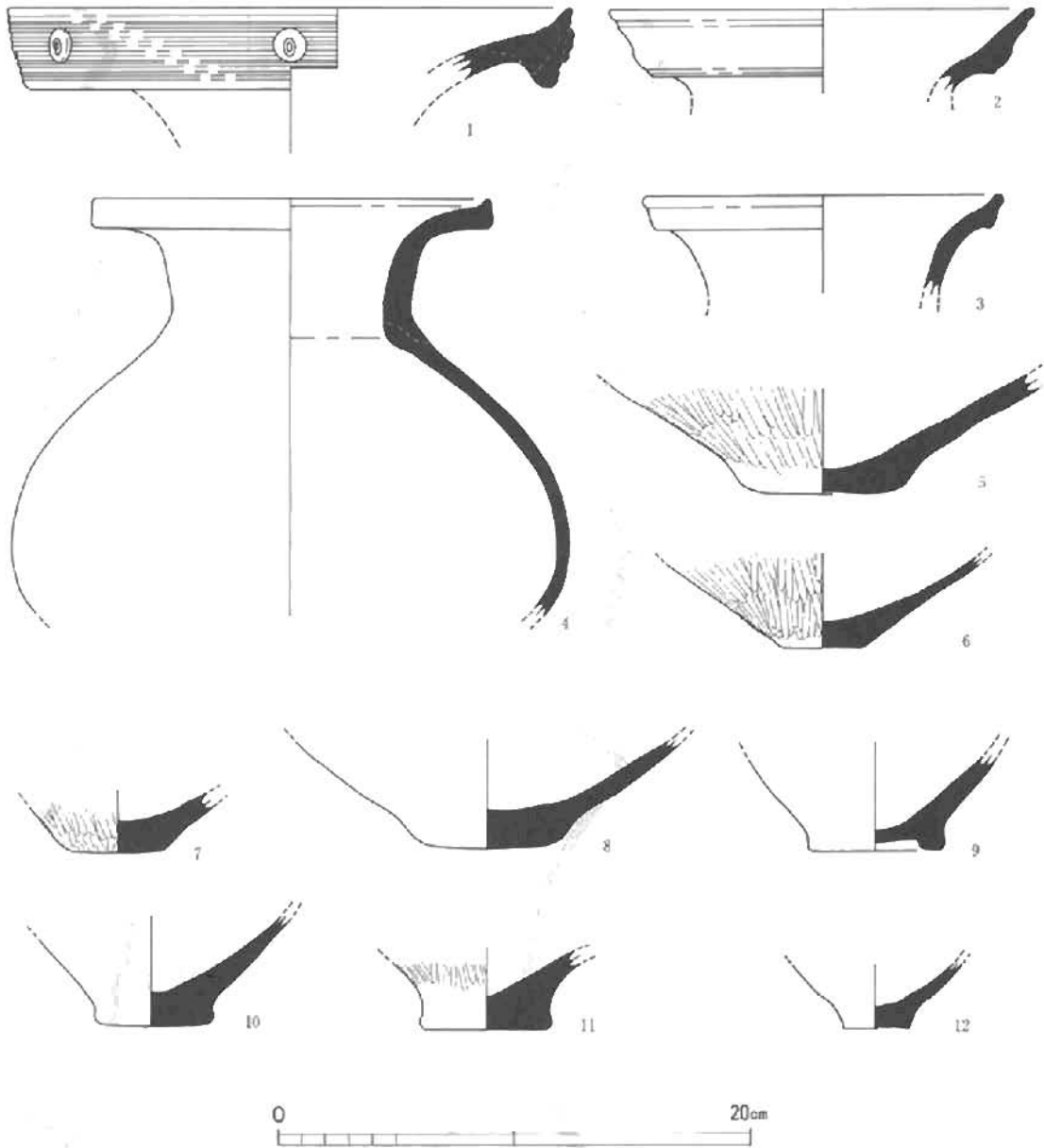
甕

土器群Aの中では量的に最も多く出土した器種である。全てV様式承の甕である。ただし、体部にタタキ目を残すものは少なく、タタキ成形後縦方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。また、内面の調整についても、横方向を主体としたハケ調整を施すもの（18・20・22・23・25）と、ナデ調整を施すもの（14～16・21）、そしてへら削り調整を施すもの（13）の3者が認められる。19についても、残存状況が良好でないため明確ではないが、へら削り調整が施されているようである。

底部片については、明確に突出した平底を呈するものは少なく、壺の底部同様、一部に丸底を指向するものも認められる。

高坏

坏部が残存するのは1個体のみである。受部に対して比較的短い口縁部が付くもので、



第21図 土器群A出土土器(1)

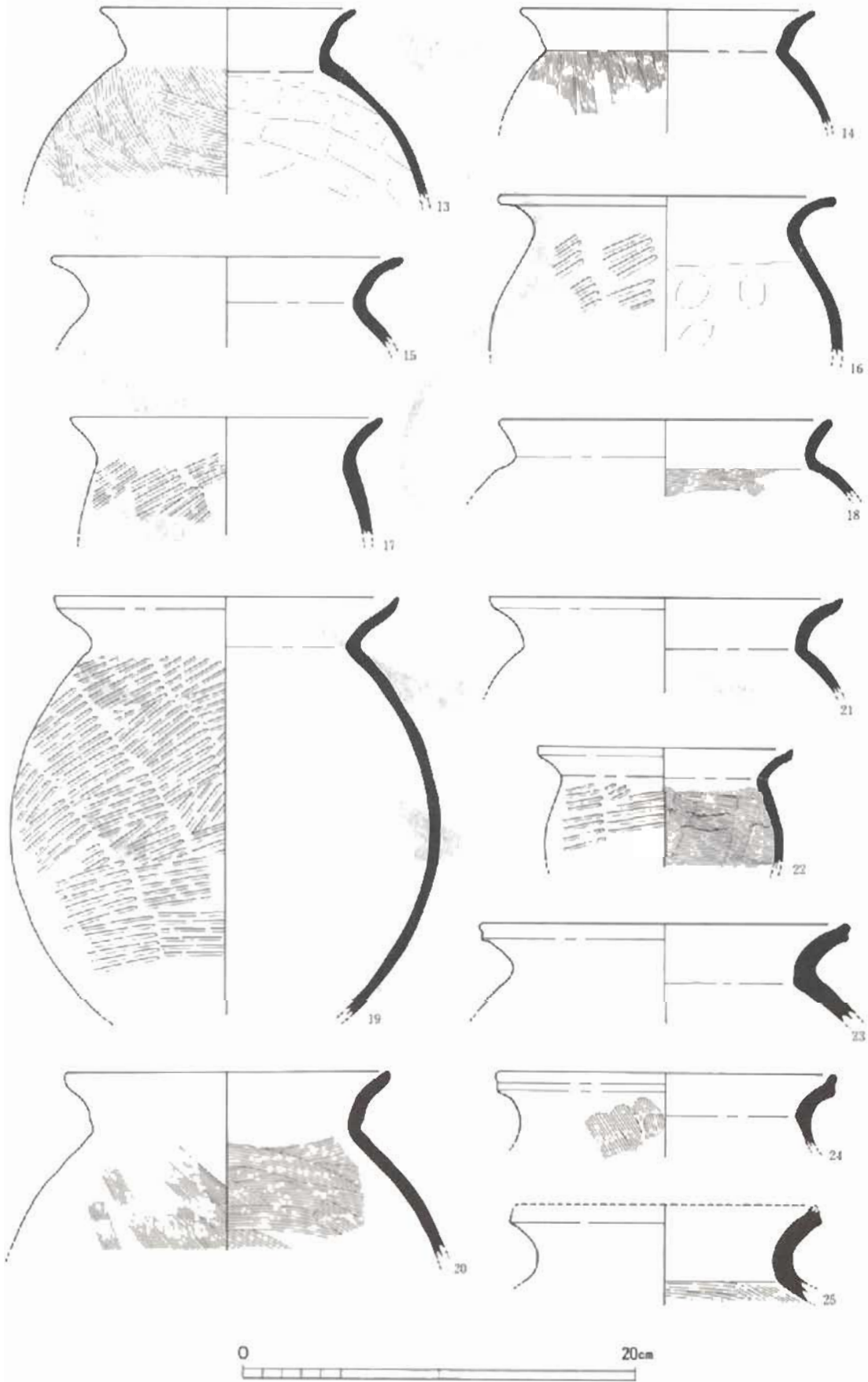
端部はナデ調整により明瞭な端面をなしている。当土器群の時期を判断する根拠となる資料と考えられる。

脚部は図化できたのは3個体である。その形態から、坏部が坏形を呈するもの(42・43)と碗形を呈するもの(44)とが認められる。また、42の脚部については比較的短い脚部であることも特徴的である。

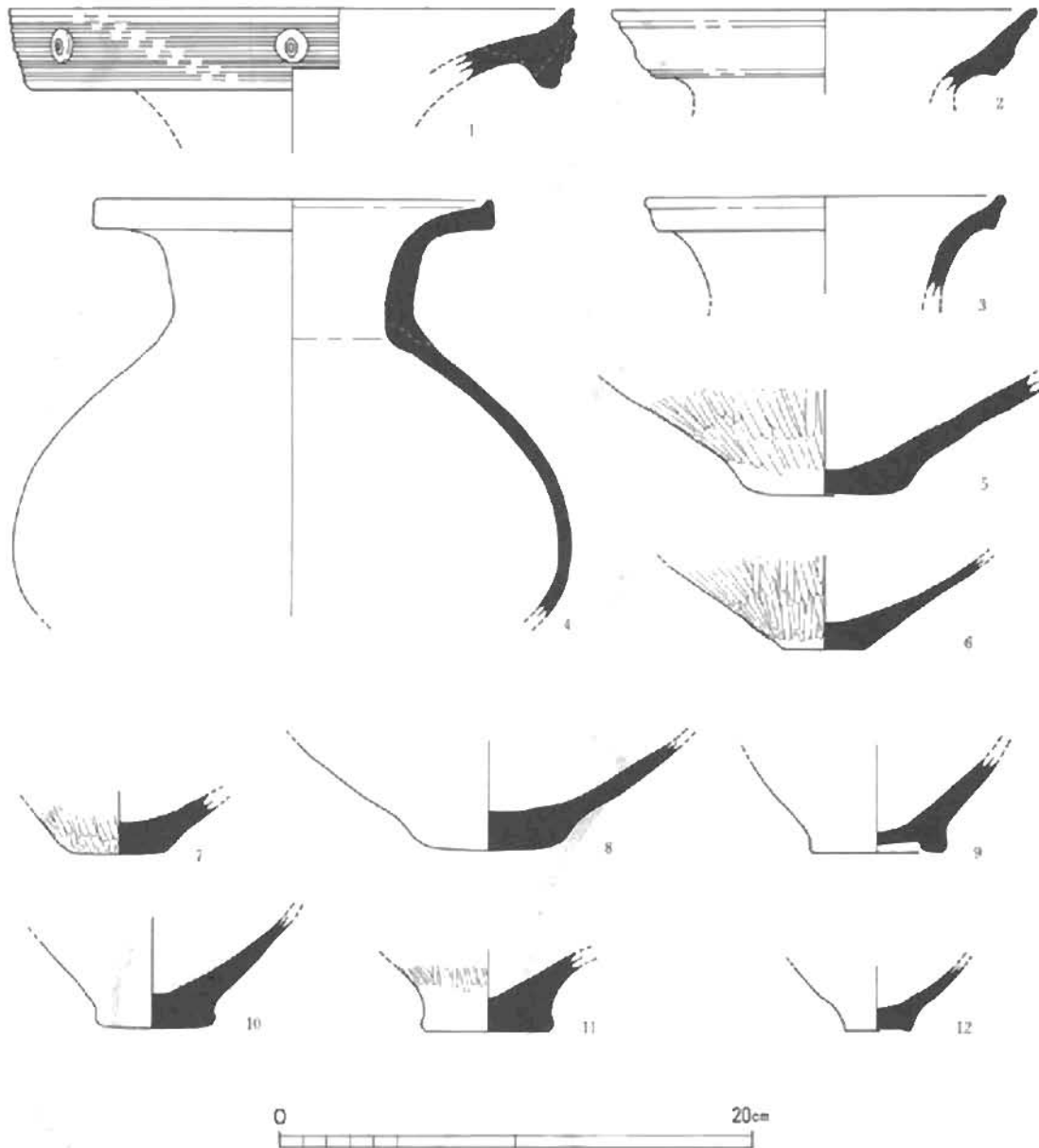
鉢 図化できたのは、口縁部片と底部片の2個体のみである。39は内外面とも比較的丁寧なミガキ調整で仕上げられている。

甌 図化できたのは3個体であるが、いずれも底部のみで口縁部を欠いている。底部中央部に径0.8~0.9cmの穴が1穴穿たれている。

土器群B 小碓高地南西端部肩部から出土(第27図)した土器群である。器種としては、壺・甕・高坏・器台・甌が出土している。



第22図 土器群A出土土器(2)



第21図 土器群A出土土器(1)

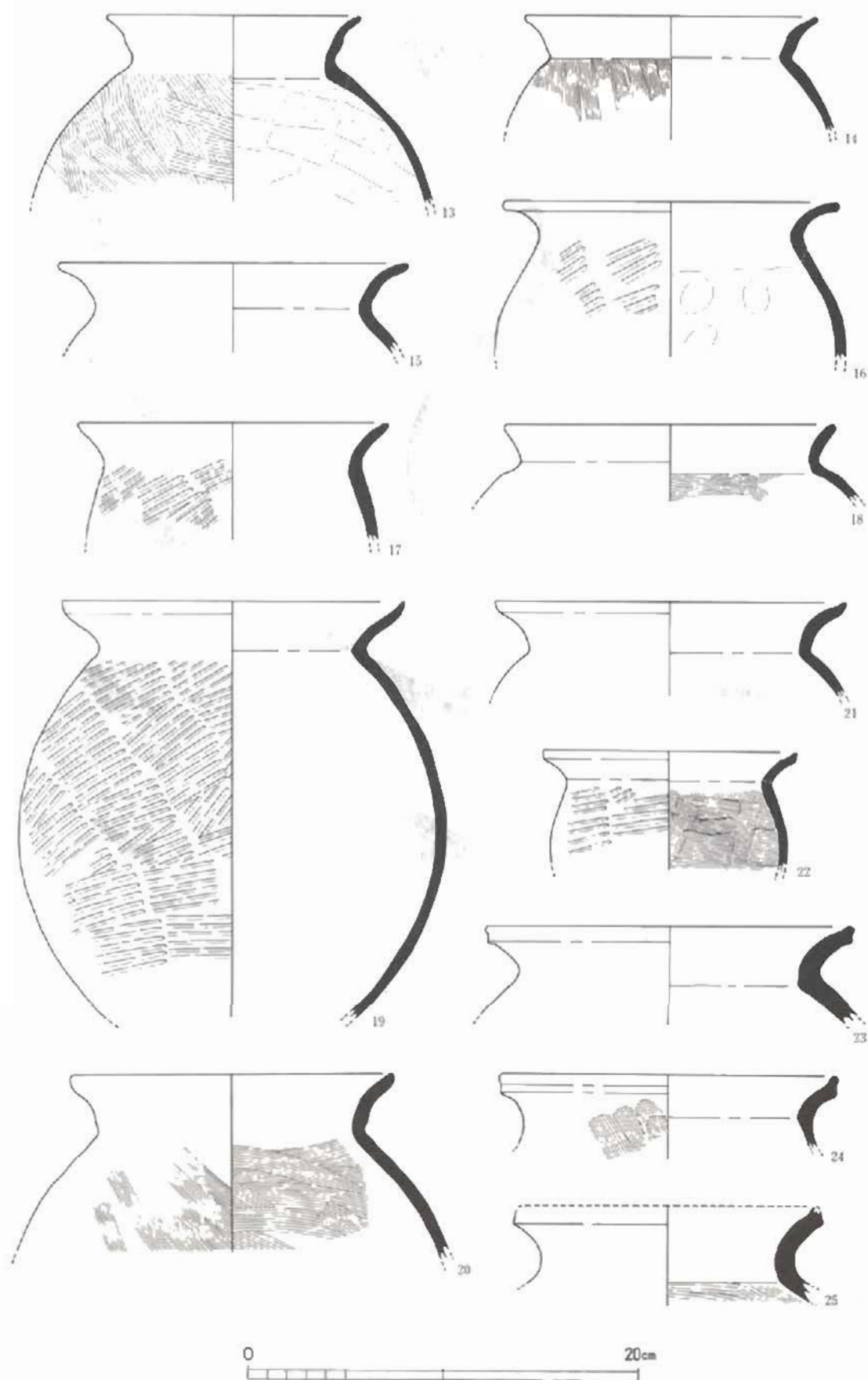
端部はナデ調整により明瞭な端面をなしている。当土器群の時期を判断する根拠となる資料と考えられる。

脚部は図化できたのは3個体である。その形態から、坏部が坏形を呈するもの(42・43)と碗形を呈するもの(44)とが認められる。また、42の脚部については比較的短い脚部であることも特徴的である。

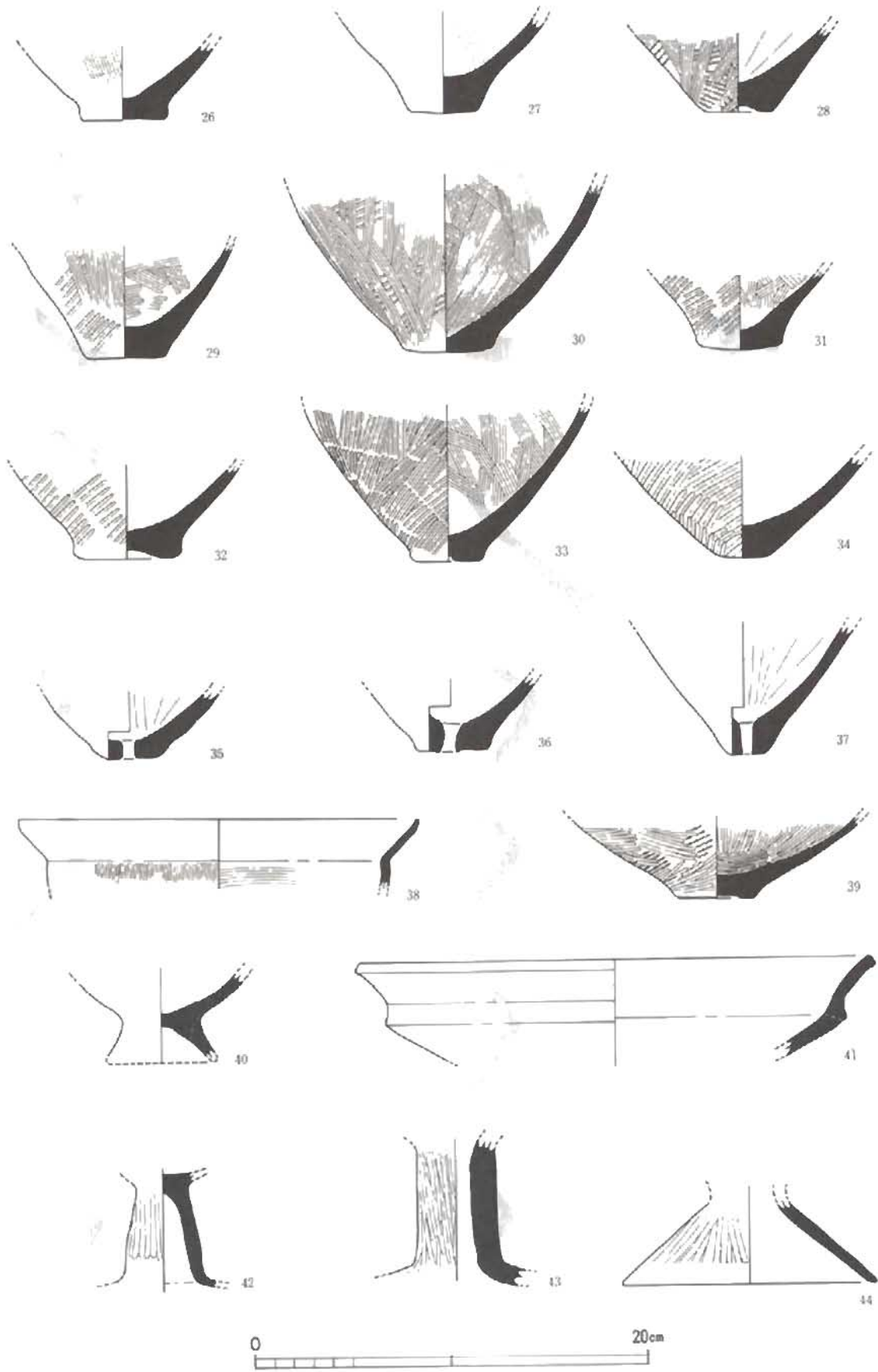
鉢 図化できたのは、口縁部片と底部片の2個体のみである。39は内外面とも比較的丁寧なミガキ調整で仕上げられている。

甌 図化できたのは3個体であるが、いずれも底部のみで口縁部を欠いている。底部中央部に径0.8~0.9cmの穴が1穴穿たれている。

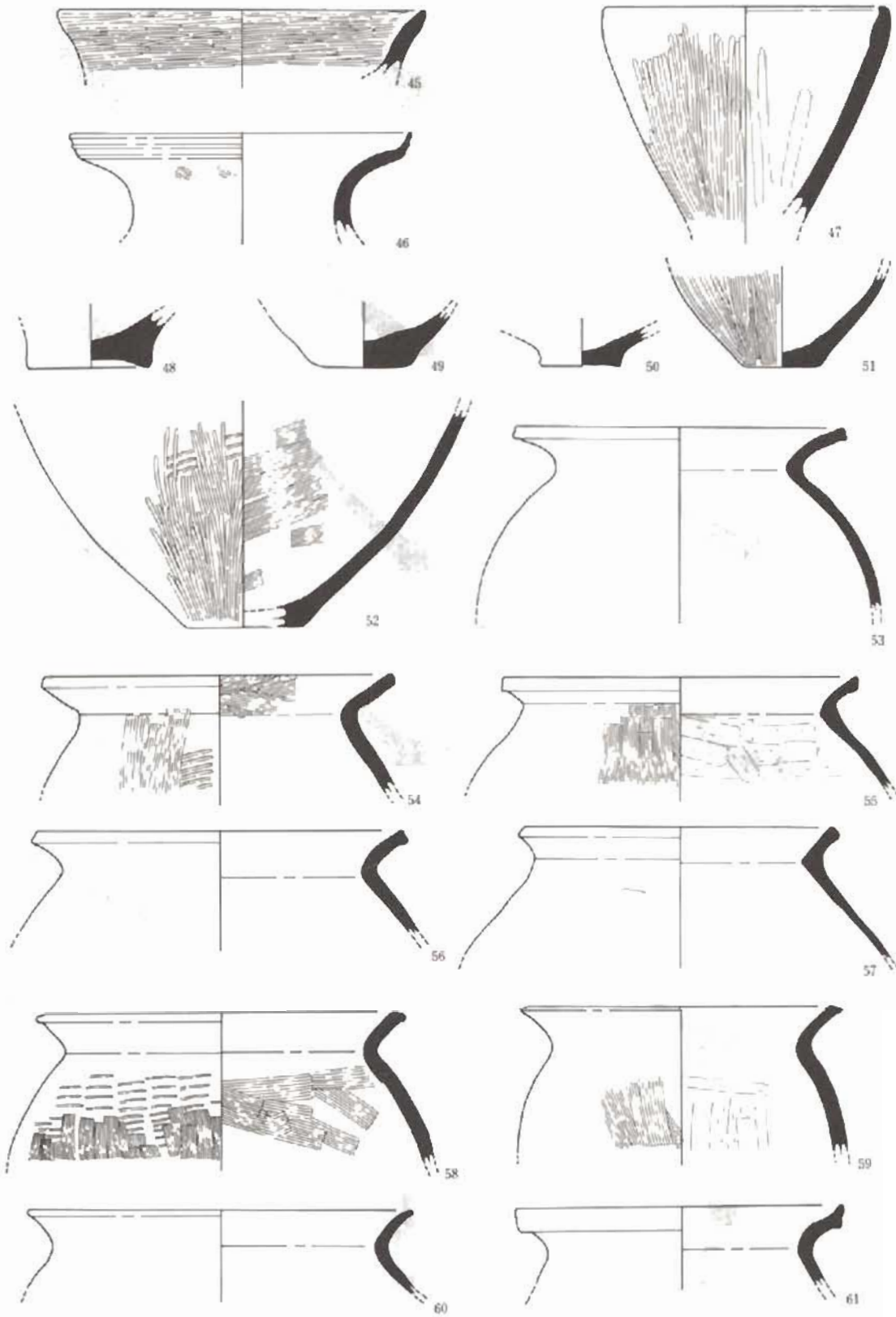
土器群B 小碓高地南西端部肩部から出土(第27図)した土器群である。器種としては、壺・甕・高坏・器台・甌が出土している。



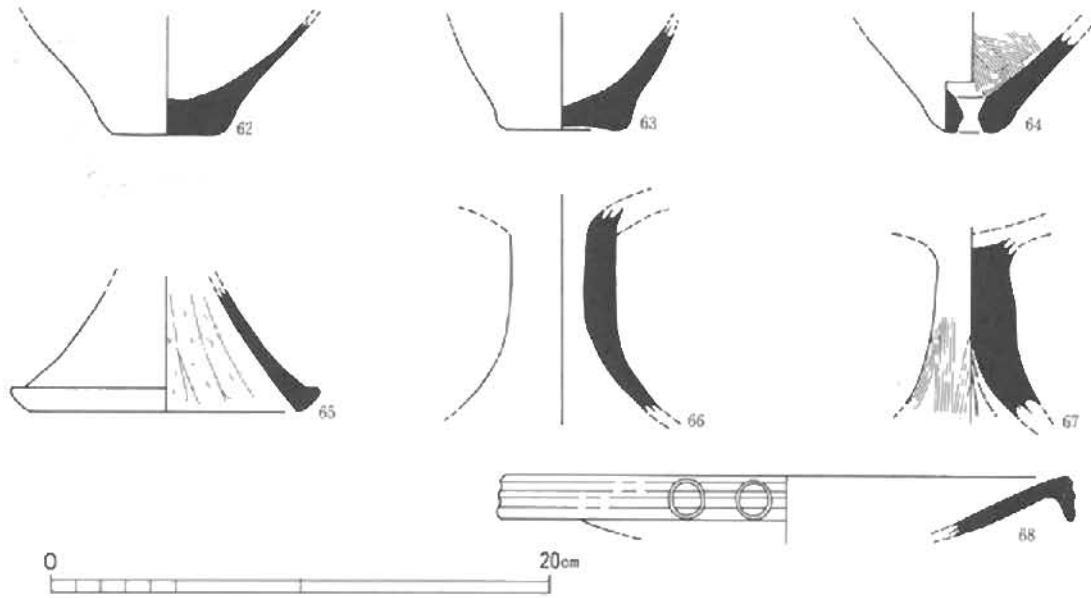
第22図 土器群A出土土器(2)



第23図 土器群A出土土器(3)



第24図 土器群B出土土器(1)



第25図 土器群B出土土器(2)

壺 二重口縁部壺(45)・広口壺(46)・細頸壺(47)・底部片が出土している。とくに47の細頸壺は、体部が玉葱形をなすものと推定される。口縁端部を内側へつまみ出すようなナデ調整を施し、上端面をなしている。

底部については、土器群A出土の壺底部と同様、明瞭な平底をなすものではなく、丸底化への指向が認められる。

甕 土器群Aとは異なり、典型的なV様式系甕に分類されるものはわずかである。口縁部を短く「く」字形に屈曲させ、端部はナデ調整により端面をもつものが目立つ。内面の調整について明らかなものについては、上半部については横方向を主体としたヘラ削り調整が施され、頸部内面が明瞭な稜をなしている。また、体部外面の調整についてもタクキ目を残すものは少なく、縦方向を主体としたハケ調整が施されている。

高坏 脚部片のみの出土で、いずれも端部を欠くため、時期を判断するにあたって特徴的なものは認められない。

器台 口縁部片と筒部片とが出土している。68は、端部を下方に拡張し端面を形成し、2条の擬凹線を施し、2個一対の竹管文を施している。ただし、全体の約1/6以下しか残存しないため、当初何対施されていたのかは不明である。

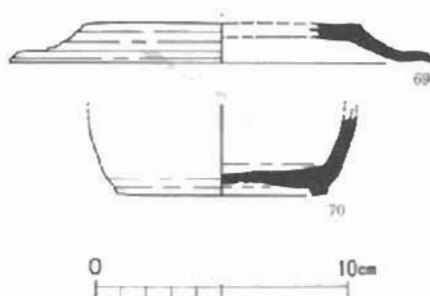
甗 1個体のみが出土している。形態的には土器群A出土の甗と同じものである。ただし、内面の調整については異なり、ハケ調整が施されている。

埋没時期 以上土器群Aと土器群Bについてみてきたが、両土器群はほぼ同じ時期の一括土器と考えられ、その時期は後期でも比較的新しい時期、庄内直前(川除5期)と考えられる。したがって、小微高地の埋没開始は、少なくともこれら土器群の示す時期以降であるといえよう。両土器群以外にも、同じ低地の底部から同時期とみて間違いないと考えられる土器片が何点か出土していることも、この埋没開始時期を指示するものといえよう。

次に、小微高地の埋没時期についてであるが、低地からの出土遺物がほとんど確認できず、明確な時期を押さえることは困難である。ただし、土器群Aと土器群Bが出土したと

第1節 調査地の概観

同じ低地の中間部で水田層が確認できたが、この上面から須恵器が出土している(第27図)。この須恵器は、坏蓋と坏Bであるが、いずれも図化できたのも小片のため、時期を特定することは困難である。しかし、奈良時代を前後する時期であることはほぼ間違いないと考えられる。したがって、小微高地はこの時期にはほぼ埋没したものと考えられる。



第26図 土器群C出土土器

さらに、この奈良時代の土器を包含する層のもう一つ上の層の上面が、中世における地表面となっていることから、この時期には小微高地が完全に埋没し平坦化したものと考えられる。

第3表 包含層出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1	壺	口径 : (23.6) 底径 : 器高 : 残3.3 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、口縁部面周縁、のち直径1.4cmの円形浮文を8ヶ所(復元)貼り付け 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部1/3	
2	壺	口径 (18.0) 底径 : 器高 : 残3.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ	外面 : 灰白 内面 : *	口縁部1/3	
3	壺	口径 (15.2) 底径 : 器高 : 残4.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ	外面 : 黄 内面 : 黄	口縁部1/3	
4	壺	口径 (16.5) 底径 : 器高 : 残17.5 胴径 : (10.3) 体部径 (23.6)	外面 : } 内面 : } 磨減のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部一体部約1/4	
5	壺	口径 底径 : 6.2 器高 : 残5.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部縦ヘラミダキ 内面 : ナテ	外面 : 灰黄 内面 : 暗灰黄	底部定存 体部わずか	
6	壺	口径 底径 : 3.3 器高 : 残3.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部縦ヘラミダキ 内面 : ナテ	外面 : 灰黄褐色 内面 : 暗灰	底部定存 体部わずか	
7	壺	口径 底径 : 4.0 器高 : 残2.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部縦ヘラミダキ 内面 : ヘラキナテ	外面 : 黒 内面 : 暗灰	底部定存 体部わずか	
8	壺	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残4.6 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨減のため調整不明 内面 : 底部ユビオサエ、他は磨減のため調整不明	外面 : 黄 内面 : 黄	底部定存 体部わずか	
9	壺	口径 : 底径 : 5.6 器高 : 残3.9 胴径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨減のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	底部定存 体部わずか	
10	壺	口径 底径 : 5.0 器高 : 残4.6 胴径 : 体部径 :	外面 : 底部ユビオサエ、他は磨減のため調整不明 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 黄褐色 内面 : 黄褐色	底部定存 体部わずか	
11	壺	口径 : 底径 : 5.6 器高 : 残2.9 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部タテキ、のち縦ヘラミダキ、底面木の葉痕 内面 : ナテ	外面 : 明褐色 内面 : 明褐色	底部約1/2 体部わずか	
12	壺	口径 底径 : 2.8 器高 : 残2.7 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部タテナテ、底部ユビオサエ 内面 : ナテ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	底部定存 体部わずか	
13	壺	口径 (12.8) 底径 : 器高 : 残9.4 胴径 : (10.3) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部4条/面タテハケ、のちヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部縦ヘラキナテ	外面 : 灰黄褐色 内面 : 暗灰	口縁部1/3 体部わずか	

第4表 包含層出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	保存率	備考
14	甕	口径 : 114.8 底径 : 70.4 器高 : 75.4 胴径 : 112.4 体部径 :	外面 : 体部タテハケ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 体部ナデ、他は磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄 内面 : 浅黄	口縁部1/6 体部わずか	
15	甕	口径 : 117.6 底径 : 74.6 器高 : 74.6 胴径 : 114.2 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部1/3 体部わずか	
16	甕	口径 : 115.8 底径 : 75.8 器高 : 74.8 胴径 : 113.5 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタテキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部スピオサエ、粘土結核	外面 : にぶい 黄橙 内面 : 〇	口縁部~体部約1/8	
17	甕	口径 : 116.0 底径 : 75.9 器高 : 75.9 胴径 : 113.4 体部径 :	外面 : 体部3条/cmタテキ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部~体部約1/5	
18	甕	口径 : 117.0 底径 : 73.8 器高 : 73.8 胴径 : 115.2 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部タテナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部~体部約1/8	
19	甕	口径 : 116.6 底径 : 72.1 器高 : 72.1 胴径 : 113.8 体部径 : 22.0	外面 : 体部4条/cmタテキ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 体部ケズリか、他は磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 浅黄橙	口縁部僅か 体部約1/2 底部欠	
20	甕	口径 : 116.4 底径 : 74.5 器高 : 74.5 胴径 : 113.8 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部9条/cm上上がりハケ 内面 : 口縁部ヨコナデか、体部5条/cmヨコハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄	口縁部~体部約1/8	
21	甕	口径 : 118.0 底径 : 74.8 器高 : 74.8 胴径 : 114.4 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 黄橙 内面 : 黄橙	口縁部1/4 体部わずか	
22	甕	口径 : 112.8 底径 : 76.0 器高 : 76.0 胴径 : 110.5 体部径 : 12.1	外面 : 体部3条/cmタテキ、のち口縁部ヨコナデ 内面 : 体部11条/cmタテハケ、のち口縁部ヨコナデ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部1/3 体部わずか	
23	甕	口径 : 118.8 底径 : 75.0 器高 : 75.0 胴径 : 115.4 体部径 :	外面 : 体部ナデ、のち口縁部ヨコナデ 内面 : 体部ヨコハケ、口縁部ヨコナデ	外面 : 浅黄 内面 : 浅黄	口縁部1/6 体部わずか	
24	甕	口径 : 117.1 底径 : 73.6 器高 : 73.6 胴径 : 111.8 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、胴部8条/cmタテハケ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰白	口縁部1/4 体部わずか	
25	甕	口径 : 115.0 底径 : 74.8 器高 : 74.8 胴径 : 113.0 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部4条/cmヨコハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白	口縁部1/8 体部わずか	
26	甕	口径 : 74.2 底径 : 43.5 器高 : 73.5 胴径 : 73.5 体部径 :	外面 : 体部一部タテハケ、のちナデ 内面 : ナデ	外面 : 橙 内面 : 橙	底部完存 体部わずか	
27	甕	口径 : 73.1 底径 : 41.9 器高 : 71.9 胴径 : 71.9 体部径 :	外面 : 体部ナデか 内面 : 体部ナデ	外面 : 橙 内面 : 橙	底部1/2 体部わずか	
28	甕	口径 : 73.4 底径 : 44.0 器高 : 74.0 胴径 : 74.0 体部径 :	外面 : 体部3条/cmタテキ、のち10条/cmタテハケ 内面 : 体部ヘラナデか	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
29	甕	口径 : 74.0 底径 : 45.5 器高 : 75.5 胴径 : 75.5 体部径 :	外面 : 体部3条/cmタテキ、のち10条/cmタテハケ、底部タテキ 内面 : 体部10条/cmハケ、底部スピオサエ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部完存 体部約1/8	
30	甕	口径 : 74.7 底径 : 47.5 器高 : 74.5 胴径 : 74.5 体部径 :	外面 : 体部2条/cmタテキ、のち8条/cmタテハケ 内面 : 体部10条/cmタテハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部~体部下半約1/2	
31	甕	口径 : 74.0 底径 : 43.8 器高 : 73.8 胴径 : 73.8 体部径 :	外面 : 体部4条/cmタテキ 内面 : 体部8条/cm不定方向ハケ、底部スピオサエ	外面 : 橙 内面 : 橙	底部約1/2 体部わずか	
32	甕	口径 : 75.0 底径 : 47.7 器高 : 74.7 胴径 : 74.7 体部径 :	外面 : 体部4条/cmタテキ 内面 : 体部ナデ	外面 : 浅黄 内面 : 浅黄	底部1/2 体部わずか	
33	甕	口径 : 73.4 底径 : 47.3 器高 : 77.3 胴径 : 77.3 体部径 :	外面 : 体部4条/cmタテキ 内面 : 体部10条/cm不定方向ハケ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	底部完存 体部下位約1/6	

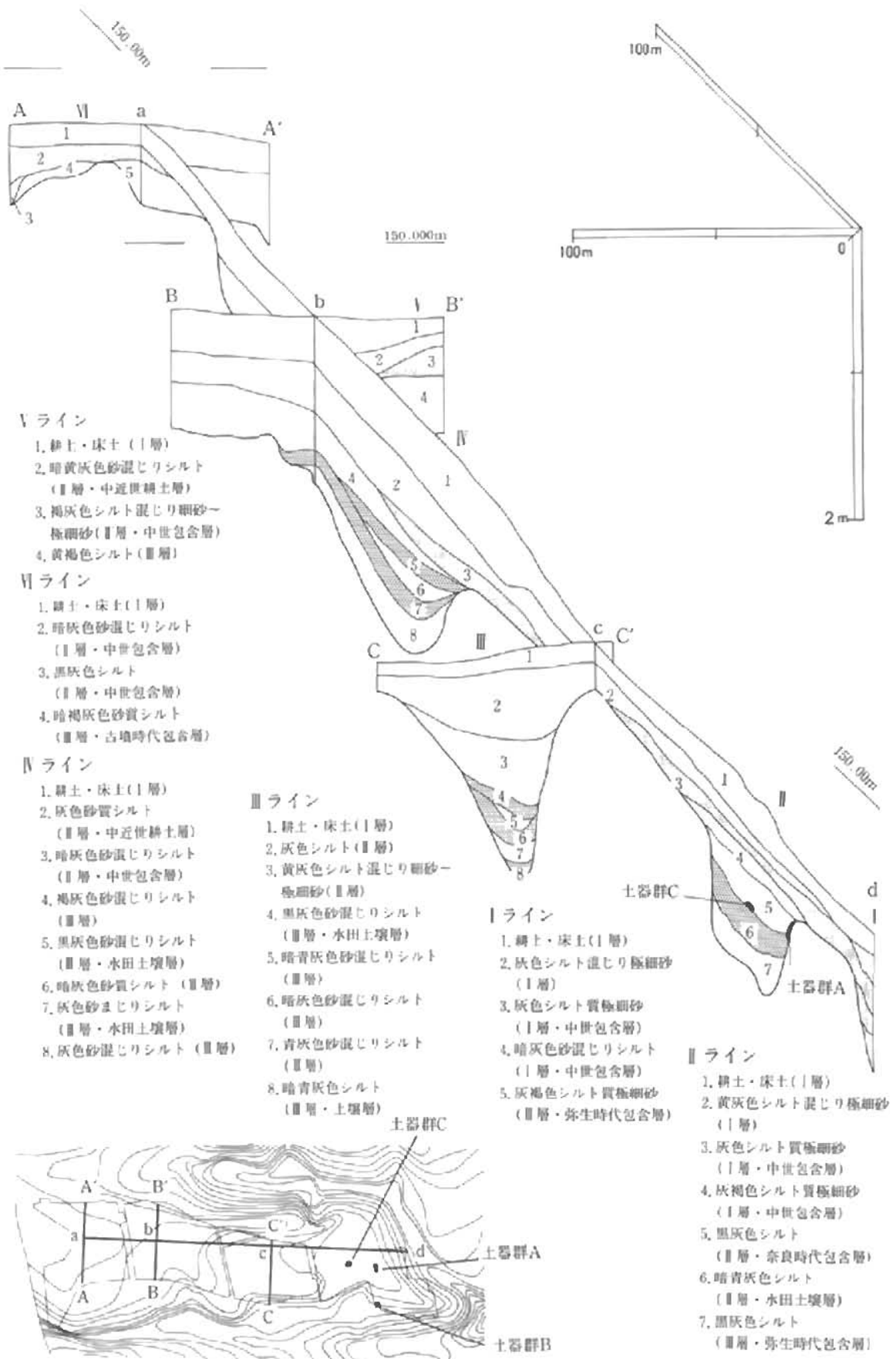
第5表 包含層出土土器観察表(3)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存中	備考
34	甕	口径 口径 2.7 器高 残5.2 胴径 体部径	外面:体部~底部3条/cmタテキ 内面:体部に一部タテキハケ残る	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	底部約1/2 体部下位の1/8	
35	瓶	口径: 口径 3.0 器高: 残3.0 胴径 体部径:	外面:体部ナア 内面:体部縦ヘラナア	外面:灰黄 内面:灰黄	底部完存 体部わずか	
36	瓶	口径: 口径 3.7 器高: 残1.8 胴径 体部径:	外面:体部縦ヘラナア 内面:体部わずかにハケ残る	外面:にぶい 内面:灰黄	底部完存 体部わずか	
37	瓶	口径 口径 1.8 器高: 残6.3 胴径: 体部径:	外面:磨減のため調整不明 内面:体部放射状にヘラナア	外面:磨 内面:磨	底部完存 体部わずか	
38	鉢	口径:(20.6) 口径: 器高: 残2.3 胴径: 体部径:	外面:口縁部ヨコナア、体部10条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナア、体部ヨコハケ	外面:磨 内面:磨	口縁部1/6	
39	鉢	口径: 口径 3.8 器高: 残4.0 胴径: 体部径:	外面:体部タテキ、のちヘラミダキ 内面:体部縦ヘラミダキ、底部横ヘラミダキ	外面:灰黄 内面:灰黄	底部約3/4 体部わずか	
40	鉢	口径: 口径: 器高: 残4.7 胴径: 4.6 体部径:	外面:体部~胴部ナア 内面:体部ナア、脚部粘土結核	外面:浅黄褐色 内面:灰白	底部~胴部 約1/4	
41	高坏	口径:(25.9) 口径: 器高: 残4.5 脚柱径: 坏部高:	外面:口縁部ヨコナア、体部縦ヘラミダキを磨減らしい 内面:口縁部ヨコナア	外面:灰白 内面:浅黄褐色	口縁部~体 部約1/8	
42	高坏	口径 口径 器高 残5.8 脚柱径 7.7 坏部高	外面:脚柱部縦ヘラミダキ 内面:脚柱部横エビオサ	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	脚柱部は完 存	
43	高坏	口径 口径: 器高: 残7.4 脚柱径: 4.4 坏部高	外面:脚柱部縦ヘラミダキ 内面:磨減のため調整不明	外面:浅黄 内面:灰白	脚柱部は完 存	
44	高坏	口径: 口径 (13.0) 器高: 残4.1 胴径 体部径	外面:底部縦ヘラミダキ 内面:底部横ヘラナア	外面:磨 内面:磨	底部は完 存約1/2文	
45	壺	口径 (17.7) 口径: 器高: 残3.0 胴径 体部径:	外面:口縁部縦ヘラミダキ、のち口縁部ヨコナア 内面:口縁部横ヘラミダキ、のち口縁部ヨコナア	外面:にぶい 内面:浅黄褐色	口縁部1/6	
46	壺	口径:(16.6) 口径: 器高: 残4.9 胴径 (10.6) 体部径:	外面:口縁部ヨコナア、口縁部縦ヘラミダキ、胴部タテハケのちヨコナア 内面:口縁部ヨコナア、以下は磨減のため調整不明	外面:赤灰 内面:赤灰	口縁部~胴 部約1/8	
47	壺	口径 (13.7) 口径: 器高: 残10.6 胴径 体部径:	外面:口縁部~胴部縦ヘラミダキ、のち口縁部ヨコナア 内面:口縁部ヨコナア、底部縦ヘラナア	外面:灰白 内面:灰	口縁部~胴 部約1/8	
48	壺	口径: 口径 6.2 器高: 残2.6 胴径: 体部径:	外面:底部エビオサ 内面:磨減のため調整不明	外面:灰黄 内面:灰白	底部完存	
49	壺	口径: 口径 4.8 器高: 残2.7 胴径 体部径:	外面:体部~底部ナア 内面:磨減のため調整不明	外面:明褐色 内面:にぶい 磨	底部完存 体部わずか	
50	壺	口径 口径 3.8 器高 残2.0 胴径 体部径	外面:体部ナア、底部エビオサ 内面:体部~底部ナア	外面:にぶい 内面:にぶい 磨	底部完存 体部わずか	
51	壺	口径: 口径 3.5 器高: 残4.6 胴径: 体部径:	外面:体部~底部タテキ、のち縦ヘラミダキ、底部9条/cmハケ 内面:体部ナア、底部エビオサ	外面:灰黄褐色 にぶい 磨 内面:褐色	底部~体部 下位	
52	壺	口径 口径 (5.7) 器高: 残10.4 胴径 体部径	外面:体部~底部タテキ、のち縦ヘラミダキ 内面:体部~底部ヨコナア、のちナア	外面:灰黄褐色 にぶい 磨 内面:灰黄褐色	体部~底部 約1/4	
53	甕	口径:(16.0) 口径:(12.2) 器高: 残8.8 胴径: 体部径:	外面: 内面: (磨減のため調整不明)	外面:磨 内面:灰	口縁部~体 部約1/2	

第6表 包含層出土土器観察表(4)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
54	甕	口径 : 116.9 器高 : 95.9 口径 : 113.8 体部径	外面 : 体部タタキ, のりタテハケ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部磨滅のため調整不明	外面 : 土色 内面 : 土色 黄帯	口縁部~体部約1/5	
55	甕	口径 : 117.3 器高 : 95.5 口径 : 115.4 体部径	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部タテハケ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部横ヘラケズリ	外面 : 土色 内面 : 土色 黄帯	口縁部~体部約1/3	
56	甕	口径 : 118.0 器高 : 95.0 口径 : 115.4 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 黄 内面 : 黄	口縁部~体部約1/3	
57	甕	口径 : 115.0 器高 : 96.3 口径 : 111.2 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 黄 内面 : 黄	口縁部~体部約1/4	
58	甕	口径 : 117.0 器高 : 97.4 口径 : 115.3 体部径	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部タタキのちヨコナデ, 体部1段を焼して10美/cmタテハケ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部10美/cmヨコナデ	外面 : 土色 内面 : 灰白	口縁部約1/8 体部約1/4	
59	甕	口径 : 114.8 器高 : 97.2 口径 : 112.8 体部径	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部8美/cmタテハケ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部横ヘラケズリ, 上段は横ヘラケズリ	外面 : 土色 黄帯 内面 : 灰白	口縁部~体部約1/4	
60	甕	口径 : 118.8 器高 : 94.2 口径 : 116.5 体部径	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 明赤褐 内面 : 浅黄帯 土色	口縁部1/4 体部わずか	
61	甕	口径 : 116.0 器高 : 93.7 口径 : 113.0 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 浅黄帯 内面 : 浅黄帯	口縁部1/2 体部わずか	
62	甕	口径 : 口径 : 4.2 器高 : 口径 : 4.1 口径 : 口径 : 4.1 体部径	外面 : 体部ナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 土色 黄帯 内面 : 灰	底部完存 体部わずか	
63	甕	口径 : 口径 : 5.0 器高 : 口径 : 4.1 口径 : 口径 : 4.1 体部径	外面 : 体部ナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 黄 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
64	甕	口径 : 口径 : 2.2 器高 : 口径 : 4.5 口径 : 口径 : 4.5 体部径	外面 : 体部~底部ナデ 内面 : 体部~底部8美/cmナデ	外面 : 黄 内面 : 黄	底部完存 体部わずか	
65	高杯	口径 : 口径 : 110.3 器高 : 口径 : 4.9 口径 : 口径 : 4.9 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 横ヘラケズリ	外面 : 灰 内面 : 土色 黄帯	脚部約1/6	
66	高杯	口径 : 口径 : 4.2 器高 : 口径 : 8.1 口径 : 口径 : 4.2 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 明褐 内面 : 土色 黄帯	脚部完存	
67	高杯	口径 : 口径 : 3.1 器高 : 口径 : 6.7 口径 : 口径 : 3.1 体部径	外面 : 5美/cmタテハケ, のりナデ 内面 : 縦リ目残る	外面 : 浅黄帯 内面 : 灰白	脚部完存	
68	器台	口径 : (22.2) 口径 : 器高 : 口径 : 2.4 口径 : 口径 : 2.4 体部径	外面 : 口縁部面割門扉, 竹管文2個, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰赤 内面 : 灰赤	口縁部1/6 以下	

第1節 調査地の概観



第27図 土層図

3. 基本層序

以上みてきた川除・藤ノ木遺跡の立地する微地形を考慮に入れながら、当遺跡の基本層序についてみていくことにする。

当遺跡の基本的な層序は、I層—上から現代の耕土およびそれに伴う床土層、II層—中近世の耕土層および中世の包含層、III層—弥生時代から中世にかけての層と、大きく3層に分けることができる。そして、I層とII層については、小微高地上あるいは低地の区別なく調査区全体に認められる。これに対してIII層については、低地部においては確実に認められるが、小微高地上の高地部において認められる所は僅かである。(B—B'間—小微高地d上)

I層 当遺跡の現地表面をなす層である。厳密に言うと、1986年以前まで耕作されていた層である。

II層 中近世の耕土層と中世包含層とからなるが、両者を明確に区別できない所が多い。基本的には、中世の遺構面の上に中世の遺物を多く包含する層(中世包含層)があり、その上に中近世の耕土層が認められる。

中近世の耕土層は、灰色シルトないし黄灰色シルト混じり極細砂層からなり、酸化鉄の集積する層(旧床土)と集積しない層(旧耕土)とが互層をなしている。この互層は多いところで6層にわたって重複しており、少なくとも旧地表面が3面あったことがわかる。少ないながらも中世の遺物を包含している。

中世包含層は、CラインからA'にかけては、暗灰色砂混じりシルト層ないし灰色シルト質極細砂層からなる。これに対して、B—B'ライン(小微高地d上)においては、暗灰色砂混じりシルト層ないし黒灰色シルト層からなり、顕著な土壌層となっている。これにともない、土器の包含量も他の地区を遙かに凌ぐものである。

II層については、小微高地上およびそれらの間の低地上においても、層の厚さには変化が認められるが、レベル的にはほぼ一定している。しかし、A'の小微高地縁辺部においては、2層に分かれ、大きく落ち込んでいる。

III層 小微高地d上を除き、ほとんどが低地部に認められる。このため、小微高地d上を除き、顕著に遺物を包含する層は認められない。各低地とも、シルト層からなり、大きな洪水の影響を直接受けることなく徐々に堆積していったものと考えられる。各低地とも幾つかの層に分かれるが、それらのなかに顕著な水田土壌層が認められる。低地が埋没していく過程で、水田として利用していったことが理解できる。ただし、この水田化の時期は各低地によって異なる。前節の検討を踏まえると、IIラインでは奈良時代、IIIラインでは弥生時代、IVラインでは弥生時代から水田化されたようである。

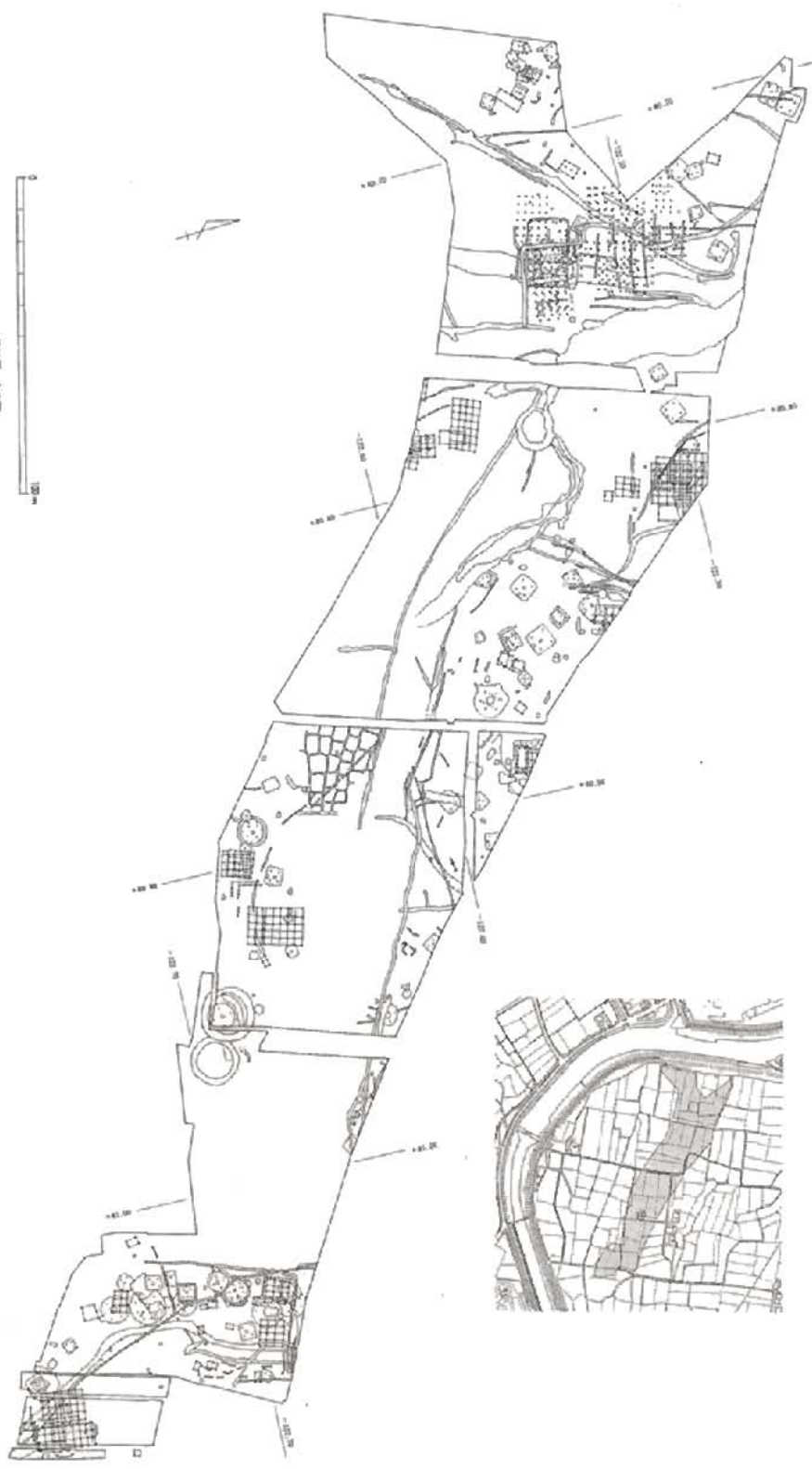
低地以外で認められる小微高地d上のIII層は、古墳時代の遺物包含層をなすものである。当遺跡では、この小微高地上のみに限定される。

基盤層 III層の下に存在する層である。弥生時代の表土層にあたる層である。この層は遺跡全体を通してほとんど同じもので、青灰色ないし灰色シルト層からなる。そしてこの層の下層約1.5mには、礫層が認められる。

4. 基本層序と遺構の検出

前節でみてきたように、Ⅱ層の下層で中世の、Ⅲ層の下層で弥生時代から古墳時代の遺構面が認められる。実際には、断面観察によると、中世面と弥生時代の面とは約10～15cmの差をもっている。また、古墳時代の面についても、部分的に弥生時代の面と約5cmの差が認められた。

しかし、実際の調査においては全てⅢ層を除去し、基盤層まで下げた段階で検出している。ただし、低地部については、下層まで掘ることはできず、調査終了段階でトレンチ調査（第7図）により断面を観察したにとどまる。



明长陵长陵寺

第2節 調査の概要

調査区全体を大きく4つの地区（I区～IV区）に分割して調査を進めていった。

- 遺構の時代** 調査で明らかとなった遺構は、大きく3つの時代からなる。
- 弥生時代** まず弥生時代中期～古墳時代前半にかけてである。この間、中期後半・後期初頭などいくつかの時期を欠く。当該期の検出した遺構のおもなものは、竪穴住居跡・掘立柱建物・土壇・溝・円形周溝墓・水田跡などである。
- 古墳時代** 次の時代は、古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初頭）である。検出した主な遺構は、竪穴住居跡群と土壇・溝などである。このあと、一時とだけ、7世紀前半～7世紀終末にかけての遺構が検出されている。
- 中世** 最後は、平安時代中期から鎌倉時代初頭にかけてである。主な遺構としては、掘立柱建物群・溝・土壇・井戸・墓など、掘立柱建物を中心とした屋敷地である。
- このように、川除・藤ノ木遺跡の調査において、各時代を通して住居跡を中心とした集落跡とそれをとりかこむ生産跡（水田跡）と埋葬遺構が明らかとなり、断続的ではあるが、弥生時代から続く複合集落であることが明らかとなった。
- 遺構の分布** 以上のように多くの時代の遺構を同一平面で検出したのであるが、これらの遺構の平面分布は、いくつかのブロックに分かれる。このブロックは、前節で述べた小微高地と対応するものである。また、平面的には一部でしか検出できなく、主な根拠を断面観察によるものであるが、小微高地間の低地部においては水田跡を確認した。
- 時代区分** 以上の調査結果をふまえ、本報告では、時代的には弥生時代～古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代中期～鎌倉時代初頭の3時期を大きな時期区分としていきたい。また、平面的には、小微高地a～eの5つの小微高地を重視していきたい。



第29図 調査地周辺の小字

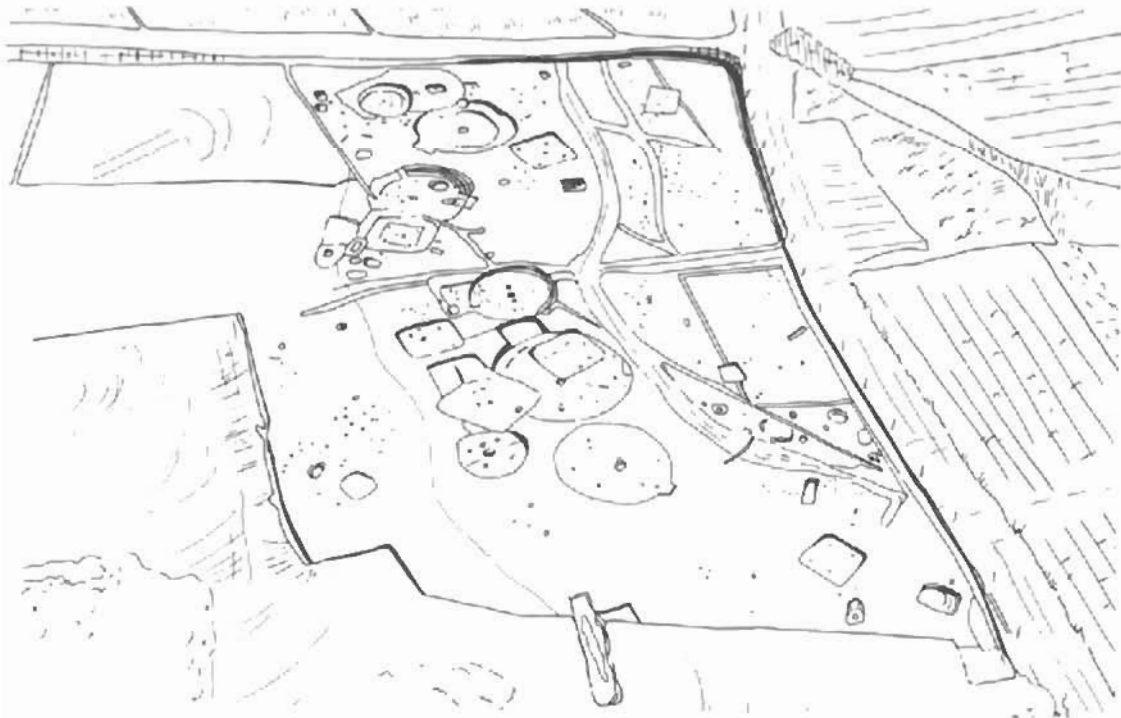


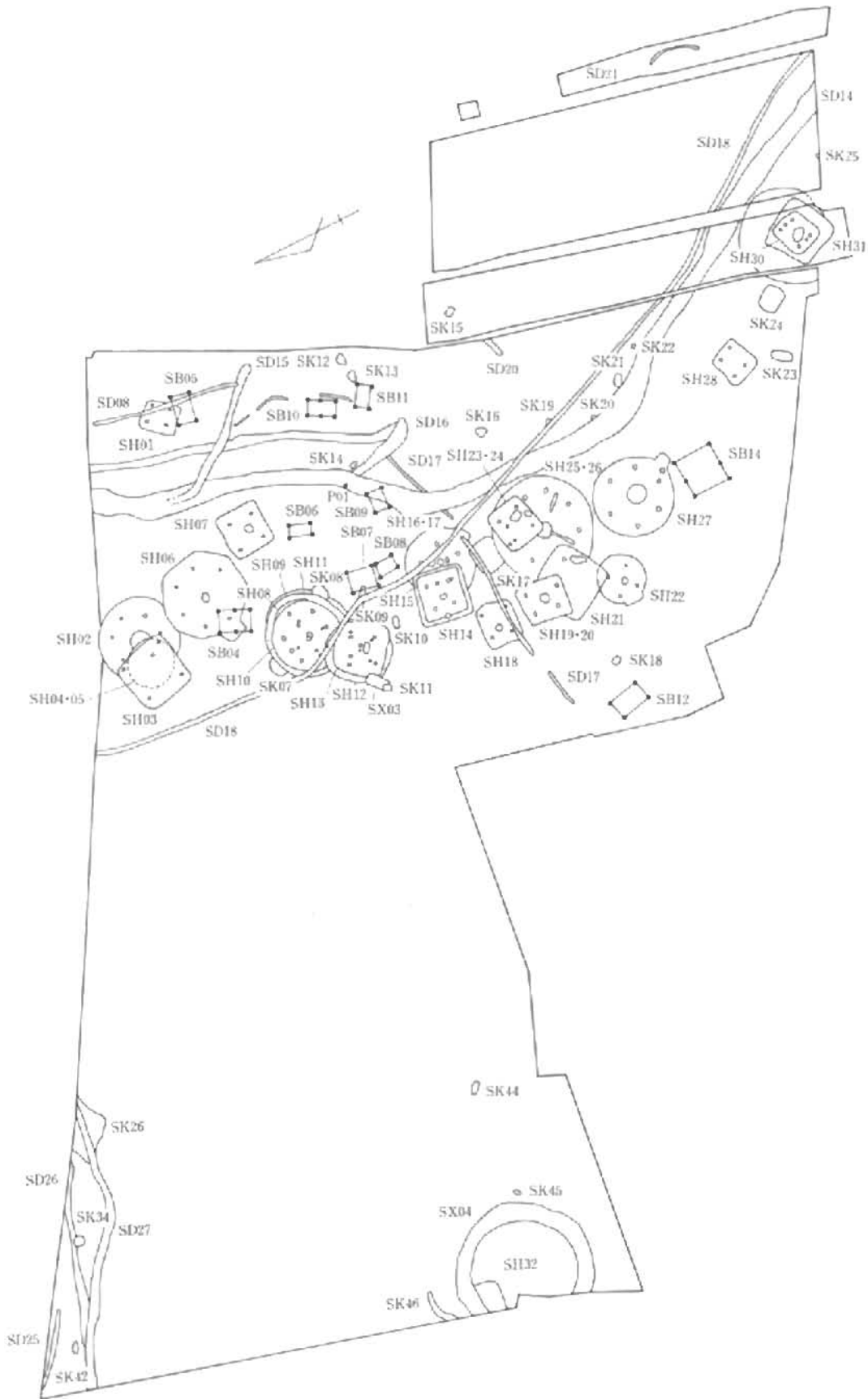
第30図 Ⅰ区の遺構

第3節 I 区の調査

1. 概要

- 位置** I区は、今回調査を行ったなかで最も南東に位置する。調査面積は約7700㎡である。
- 微地形** I区は、小微高地a・小微高地b・小微高地cという3つの小微高地と、その間の低地で構成されている。以下、各小微高地ごとに、検出された遺構の概要を記すこととする。
- 小微高地 a** I区の東半部で確認された微高地であり、調査区外の北方に若干続いている。この微高地は、弥生時代中期以前に形成されたもので、主に居住域として利用されていたことが判明した。最も古い遺構は弥生時代中期に掘削された溝である。続く弥生時代後期から古墳時代前期にかけては竪穴住居跡31棟、掘立柱建物10棟を始め、多くの遺構が確認された。この他、竪穴住居跡に近接して木棺墓が1基確認できた以外は、墓は存在しない。これ以降は、中世に再び居住域として利用されるまで遺構が確認できない。
- 中世** 中世の遺構は、微高地の北縁および南縁に集中しており、前者では建物3棟、土壘墓2基、井戸4基が検出され、後者では建物6棟が重複しながら存在することが分かった。
- 小微高地 b** I区の西北部に位置する微高地であり、II・III区およびそれ以北の調査区外に広がる。I区では、弥生時代後期、中世の遺構が若干認められたのみである。
- 小微高地 c** I区の西南部からII区の南方にかけて広がる微高地で、竪穴住居跡および円形周溝墓1基が確認された。円形周溝墓は、II区でもこれと隣接する形で1基が検出されたため、II区の項で一括して記述することとする。
- 低地** I区の中央部に存在する。弥生時代以降に堆積が進み、奈良時代にはほぼ埋没し、水田として利用されていることが断面観察によって判明した。





第31図 1区弥生時代～古墳時代前期の遺構

2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SH01 (図版4)

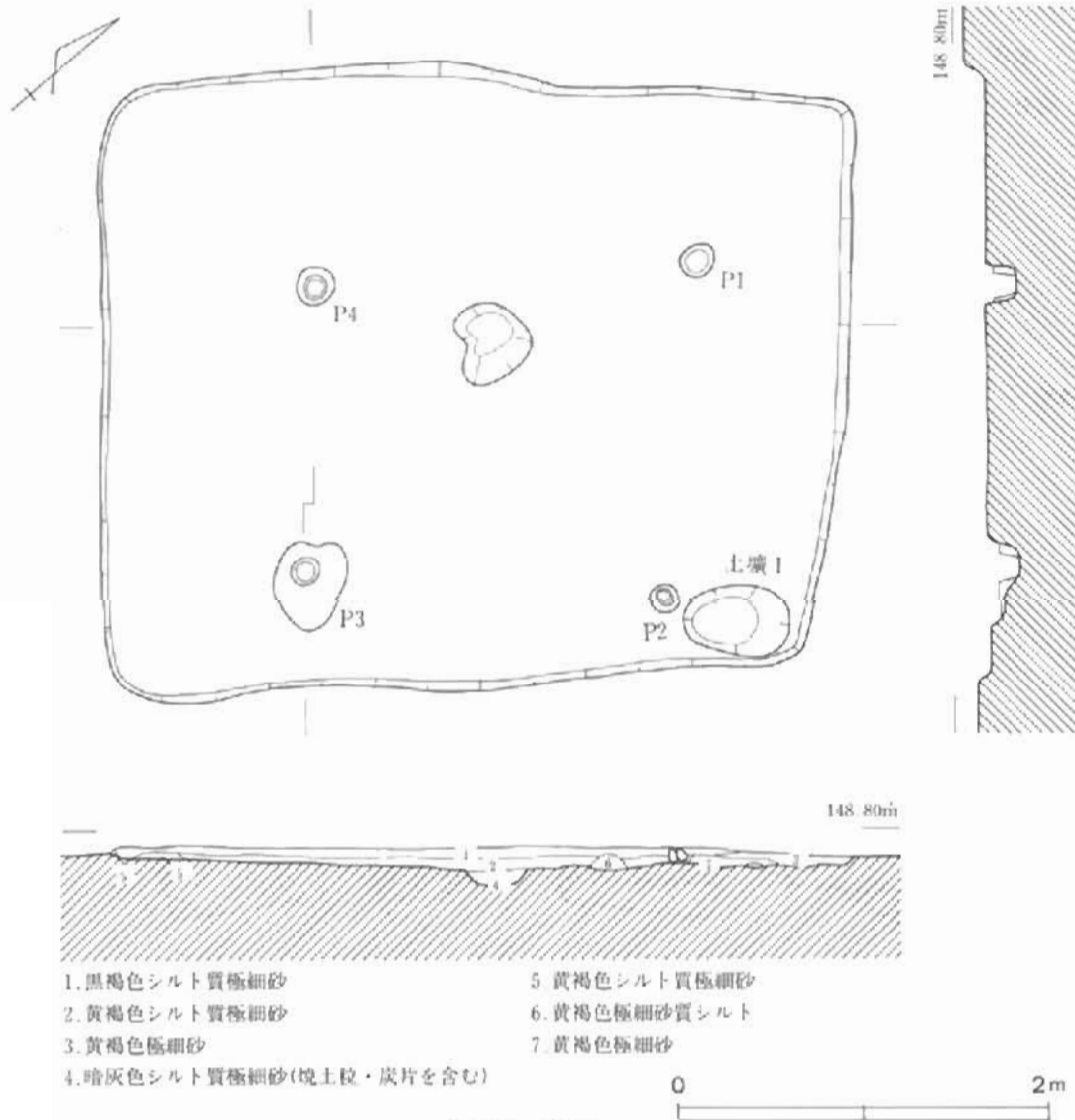
検出状況 1-1区の東北隅の、小微高地aの東端で検出された。1-2・4・5区の他の住居跡は、SD14の西側に南北方向に帯状に分布するのに対して、本住居跡だけは、溝よりも東方の小微高地縁辺に位置する。

形状・規模 平面形は隅円の長方形である。一辺の長さは不均一で、北西辺から時計回りに辺の長さを示せば、3.92m・2.90m・3.63m・3.15mとなる。検出面から床面までの深さは12cmを測り、床面の標高は148.60mである。床面積は12.2㎡と比較的小規模である。

埋土 黒褐色あるいは黄褐色のシルト質極細砂が堆積している。

屋内施設 ベッド・周壁溝は検出されず、中央土壇・貯蔵穴が各1、柱穴が4穴確認された。

柱穴 主柱穴は4穴検出している。P1は、掘り方直径17cmで、床面からの深さは19cmである。P2は、掘り方直径17cm、柱痕の直径8cmを測り、床面からの深さは23cmである。P3は、



第32図 SH01

第3節 Ⅰ区の調査

掘り方直径38cm、柱痕の直径15cmを測り、床面からの深さは16cmである。P4は、掘り方直径22cm、柱痕の直径14cmを測り、床面からの深さは31cmである。柱穴間の距離は、P1～P2間が1.81m、P2～P3間が1.95m、P3～P4間が1.52m、P4～P1間が2.05mである。

貯蔵穴 床面の東隅で検出された楕円形の土坑であり、柱穴および周壁に近接する。平面規模は38×58cmであり、深さは10cmを測る。

中央土壇 皿形の断面を呈する不整形の土壇であり、平面は30×40cm、深さは20cmを測る。土壇の面積は0.12㎡、対床面積比は1%である。埋土には炭片・焼土粒を含む。土壇壁は焼土化していない。

出土遺物 土器・砥石が出土している。

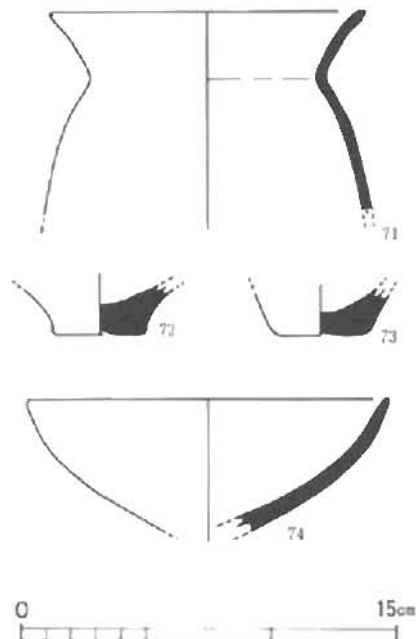
土器 二重口縁壺・小型丸底壺・V様式系の甕・高坏などが埋土より出土しているが、いずれも細片であり、図化できたのは4点のみである。

甕 底部の形状は、平底のもの他に尖底のものが含まれている。

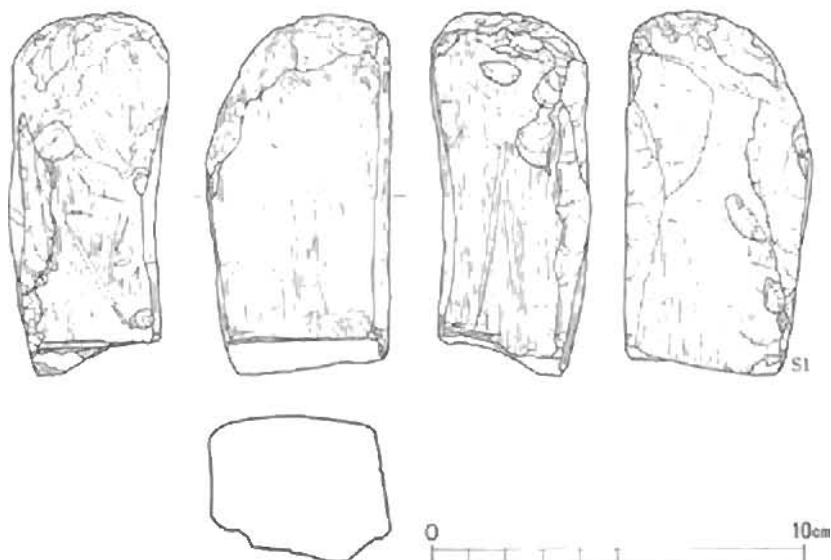
高坏 坏部は碗形を呈するものである。

砥石 直方体を呈しており、床面直上で出土した。石材は凝灰質泥岩であり、一面に整形のための擦痕がついていること、下端を割っていることから、砥石として使用していたものを二分割して何かに転用しようとしたことがうかがえる。残存長は9.8cm、幅2.5cm、厚さ2.1cmを測る。

時期 川除7期である。



第33図 SH01出土土器



第34図 SH01出土石器

第7表 SH01出土土器観察表

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
71	甕	口径 (12.4) 底径: 器高 残8.1 胴径 (9.5) 体部径	外面: 削滅のため調整不明 内面:	外面: 黒 内面: 黒い 黒	1/8	
72	甕	口径 底径: 3.5 器高 残1.9 胴径: 体部径	外面: 削滅のため調整不明 内面:	外面: 浅黄緑 内面: 浅黄緑	底部のみ	
73	甕	口径 底径: 3.8 器高 残1.9 胴径: 体部径	外面: 削滅のため調整不明 内面:	外面: 黒 内面: 黒	底部のみ 定存	
74	高杯	口径 (14.3) 底径: 器高 残5.3 胴径: 体部径	外面: 削滅のため調整不明 内面:	外面: 黒い 黒 内面: 黒い 黒	杯部約1/4 定存	

SH02 (図版5)

検出状況 1-1区の北東部の、小微高地aの中央で検出された。西半部をSH04・05に、南端部をSH06に切られ、またSB01等の中世の遺構にも切られている。

形状・規模 平面形は円形である。直径は9.1mを測り、検出面から床面までの深さは35cm、床面の標高は148.36mである。復元される床面積は62.2㎡である。

埋土 上層に灰色のシルト質極細砂が、下層に炭片や黄色の地山ブロックを含む黄灰色のシルトが堆積している。

屋内施設 柱穴・中央土壌が検出された。周壁溝は存在しない。

柱穴 主柱穴はほぼ同心円上に7穴が確認された。P2・5・7については、柱痕が確認されなかった。

P5・6・7についてはSH04・05に削平されているため、本来の形状・規模を示していない。P1は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは29cmである。P2は、掘り方の直径28cm、床面からの深さは6cmである。P3は、掘り方の直径20cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは10cmである。P4は、掘り方の直径50cm、柱痕の直径32cm、床面からの深さは80cmである。P5は、掘り方の直径25cm、床面からの深さは4cmである。P6は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは20cmである。P7は、掘り方の直径26cm、床面からの深さは32cmである。

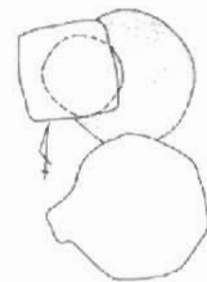
柱穴間の距離は、P1～P2間が2.85m、P2～P3間が2.25m、P3～P4間が2.57m、P4～P5間が2.42m、P5～P6間が2.85m、P6～P7間が2.72m、P7～P1間が2.52mとほぼ等間隔である。

中央土壌 床面中央に設けられた円形の土壌で、その規模は直径80cm、深さ63cmである。埋土は4層に分かれ、最下層には約10cmの炭層が堆積している。

この土壌を取り巻く形で地山を削り出して形成された土手が全周する。この土手は、中央土壌を中心として設置されているのではなく、やや南方向に膨らんだ楕円形を呈している。土手の規模は、短径2.3m、長径2.9mであり、幅は60～100cmを測る。床面からの高さは4cmである。土手を含む中央土壌の面積は5.6㎡であり、対床面積比は8.9%である。土壌壁、土手ともに焼土化している部分は認められない。



1. 灰色シルト質極細砂
2. 黄灰色シルト質極細砂(炭片含む)
3. 黄灰色シルト(黄色ブロック・炭片含む)
4. 青灰色シルト(炭片含む)
5. 炭層



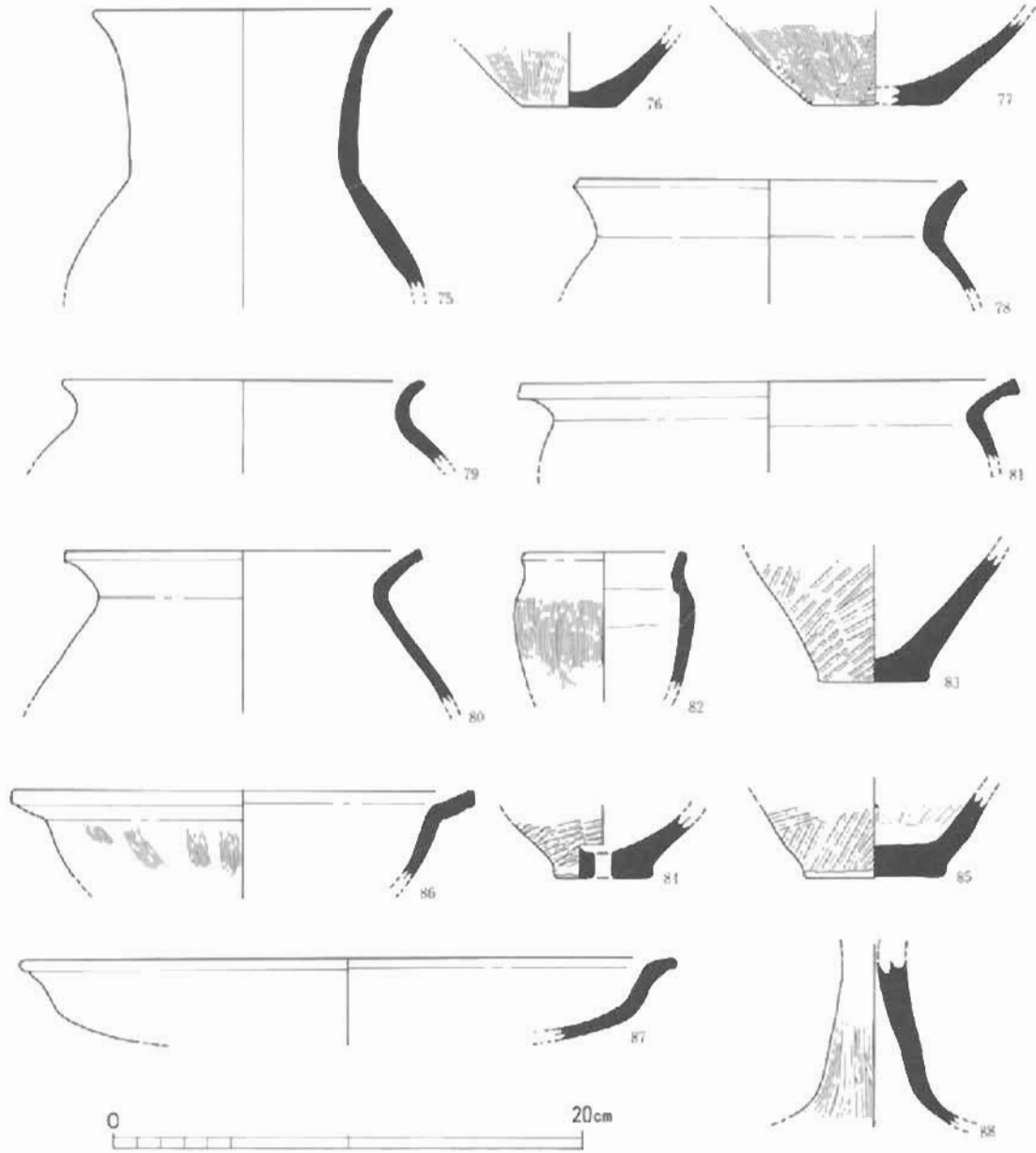
第35図 SH02

出土遺物 土器が埋土中より出土している。

壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している。

壺 広口壺・長頸壺があり、長頸壺は口縁部がやや外反し、頸部と体部の境が不明瞭なものである。

甕 V様式系のもので、体部外面はタタキののちハケメを施すものと施さないものの二者がある。体部内面には、ヘラケズリを行うものがある。



第36図 SH02出土土器

鉢 台付きのものが含まれる。
 時期 川除2期である。

第8表 SH02出土土器観察表(1)

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
75	壺	口径 : 12.3 底径 : 9.9 体高 : 12.0 胴径 : 9.9 体厚径 :	外面 : 口縁部凹凸ナシ。体部へラナシカ 内面 : 調整のための調整不明	外面 : 黒白 内面 : 黒白	口縁部一体部1/2	
76	罎	口径 : 4.0 底径 : 3.0 体高 :	外面 : 6.5cmズブナシ 内面 : ナシ	外面 : 黒 内面 : 黒	底部のみ残存	
77	罎	口径 : 5.4 底径 : 3.5 体高 :	外面 : 3.5cm横方向ズブナシの3.5cmト・上ナシ 内面 : へラナシ	外面 : 黒 内面 : 黒	式部のみ約1/2	

第9表 SH02出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
78	甕	口径 (16.2) 底径: 器高 残5.0 胴径 (11.7) 体部径	外面: 口縁端部ココナテ 内面: 磨滅のため調整不明	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部のみ 約1/5	
79	甕	口径 (15.0) 底径: 器高 残3.5 胴径 (11.0) 体部径	外面: 口縁端部ココナテ 内面: 口縁端部ココナテ	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	口縁部のみ 約1/8	
80	甕	口径 (15.0) 底径: 器高 残6.7 胴径 (12.2) 体部径	外面: 口縁端部ココナテ。体部磨滅のため調整不明 内面: 口縁端部ココナテ。体部不定方向ナテ	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	口縁部-体部 1/8	
81	甕	口径 (21.0) 底径: 器高 残3.4 胴径 (18.2) 体部径	外面: 口縁端部ココナテ 内面: 口縁端部ココナテ。体部不定方向ナテ	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	口縁部-体部 1/8	
82	甕	口径 (6.8) 底径: 器高 残5.9 胴径: 体部径 (7.6)	外面: 口縁端部ココナテ。体部10cmタテハケ 内面: 口縁端部ココナテ。体部不定方向ナテ。粘土継ぎ合痕	外面: 浅黄 内面: 浅黄	口縁部-体部 1/3	
83	甕	口径 底径: 4.6 器高 残5.4 胴径 体部径	外面: 3条/cmタタキ。底面木の葉状痕 内面: 不定方向ナテ	外面: 橙 内面: 橙	底部のみ定 存	
84	甕	口径 底径: 4.0 器高 残2.7 胴径 体部径	外面: 3条/cmタタキ。穿孔 内面: ヘラナゲガ	外面: 灰白 内面: 灰白	底部のみ約 1/3	
85	甕	口径 底径: 5.6 器高 残3.1 胴径 体部径	外面: 3条/cmタタキ 内面: 1cm巾下一トケズリ	外面: 浅黄 内面: 浅黄	底部のみ約 1/2	
86	鉢	口径 (19.4) 底径: 器高 残3.8 胴径 体部径	外面: 口縁端部ココナテ。体部面かいタテハケ 内面: 口縁端部ココナテ。体部ヘラナゲ	外面: 黄橙 内面: 黄橙	口縁部-体部 約1/8	
87	高坏	口径 (28.0) 底径: 器高 残3.5 胴径: 体部径:	外面: 口縁端部ココナテ。坏部廻ヘラナゲキ 内面: 口縁端部ココナテ。坏部廻ヘラナゲキ	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部-坏部 約1/3	
88	高坏	口径 底径: 器高 残7.0 胴径 体部径:	外面: 脚部廻ヘラナゲキ 内面: 調整不明	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	脚部のみ約 1/4	

SH03 (図版5・6・29)

検出状況 I-1区の北東部、小微高地aの中央で検出された。SH04・05・02を切り、SB01などの中世の遺構に切られている。

形状・規模 平面形は隅田方形である。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.60m、6.10m、5.80m、5.60mとなる。検出面から床面までの深さは28cm、床面の標高は148.40mである。床面積は36.5㎡である。

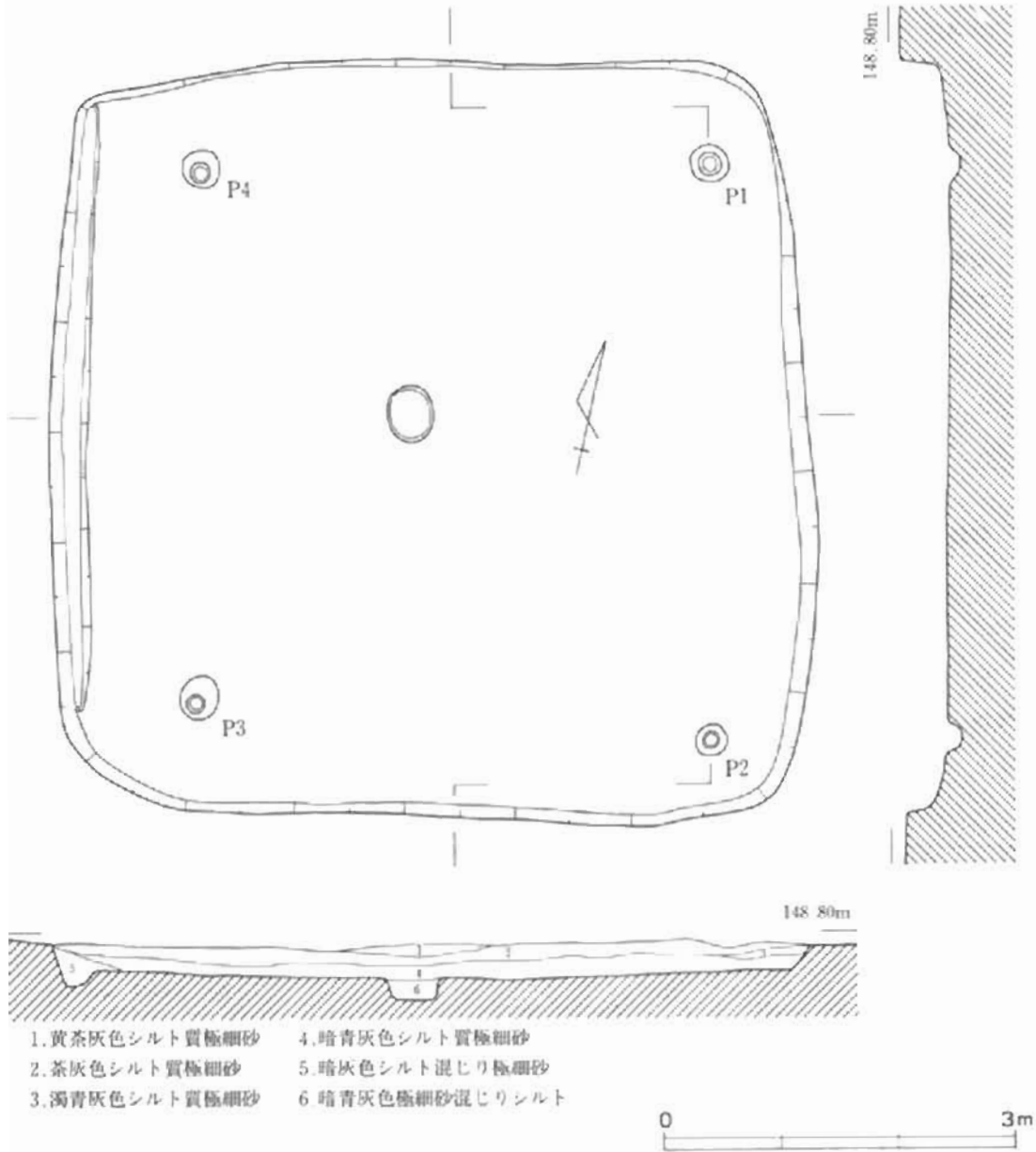
埋土 茶灰色ないしは青灰色のシルト質極細砂などの細粒の堆積物が認められた。

屋内施設 周壁溝・柱穴・中央土壇が検出された。周壁溝は西辺にのみ確認された。

周壁溝 床面での幅28cm、底部での幅15cm、床面から底部までの深さは12cmである。

柱穴 主柱穴は4穴が確認された。いずれも周壁に比較的近い場所に位置している。P1は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは22cmである。P2は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは23cmである。P3は、掘り方の直径37cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは27cmである。P4は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径17cm、床面からの深さは34cmである。

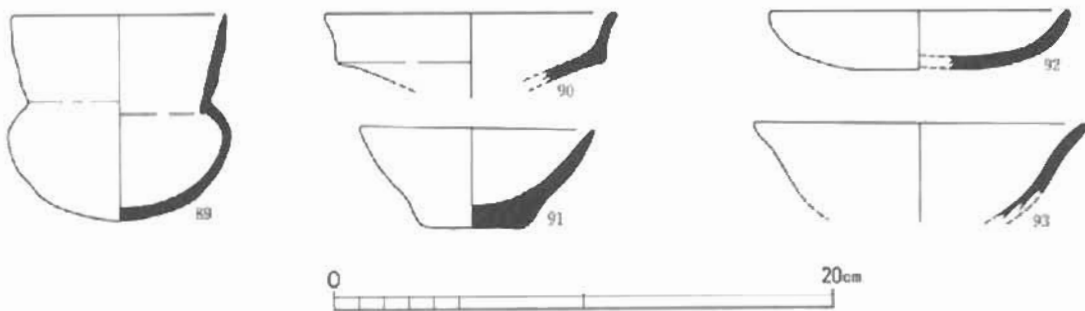
柱穴間の距離は、P1～P2間が4.86m、P2～P3間が4.44m、P3～P4間が4.47m、



第37図 SH03

P4～P1間が4.38mとなっている。

中央土壇 床面中央に設けられた円形の土壇であり、その直径は50cmである。床面から壇底までの深さは20cmである。中央土壇の面積は0.19㎡であり、対床面積比は0.5%である。埋上には



第38図 SH03出土土器

第3節 1区の調査

炭片を含んでいる。

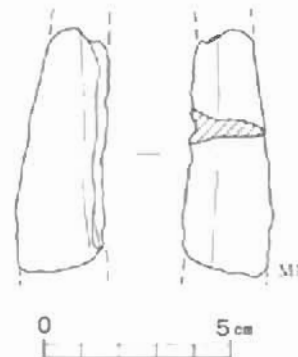
出土遺物 土器・鉄器・石器などの遺物は、すべて埋土中より出土している。

土器 壺・甕・高坏の各器種が出土している。土器には広口壺、甕体部の破片、高坏の脚部・坏部、小型丸底壺がある。坏部外面にヘラミガキを施す。

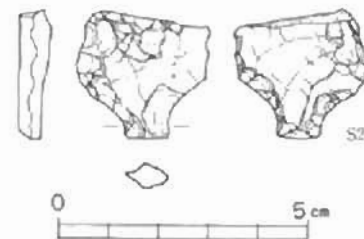
U字形の鉄製刃先 M1は、U字形の鋏あるいは鋤の鉄製刃先である。耳部の破片であり、残存長は6.5cm、幅は2.4cm、厚さは0.9cmである。U字形の刃先は古墳時代中期中葉に伝えられた大陸系の遺物とされている。これと本住居跡出土土器とは若干の時期のずれがあるが、埋土からの出土という状況で説明できると思われる。

石器 石錐が1点出土している。錐部は欠損しているが、つまみ部と錐部との境が明瞭なタイプに含まれる。つまみ部の幅は2.7cm、厚さは0.7cm、錐部の基部は幅0.9cm、厚さ0.5cmを測る。サヌカイト。

時期 川除7期である。



第39図 SH03出土鉄器



第40図 SH03出土石器

第10表 SH03出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調査	色調	残存率	備考
89	壺	口径 (8.3) 底径 (6.2) 器高 8.2 胴径 (7.1) 体部径 (8.9)	外面: 磨滅のため調整不明 内面:	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	1/4	小型丸底壺
90	壺	口径 (11.8) 底径 (7.2) 器高 残2.8 胴径: 体部径	外面: 磨滅のため調整不明 内面:	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	口縁部のみ 1/8	
91	高坏	口径 (9.2) 底径: 1.0 器高 残4.0 胴径: 体部径	外面: ヘラミガキ 内面: ナズ	外面: 浅黄橙 内面: 浅黄橙	底部欠存 口縁部1/3	
92	高坏	口径 (12.0) 底径 (7.2) 器高 残2.4 胴径: 体部径	外面: 口縁部ナズ、口縁部部からくユヒヤセ、坏底部ナズ 内面: ナズ	外面: 橙 内面: 橙	坏部のみ約 1/4	
93	高坏	口径 (13.2) 底径 (7.2) 器高: 残3.8 胴径: 体部径:	外面: 磨滅のため調整不明 内面:	外面: 濃い黄橙 内面: 濃い黄橙	口縁部のみ 1/3	

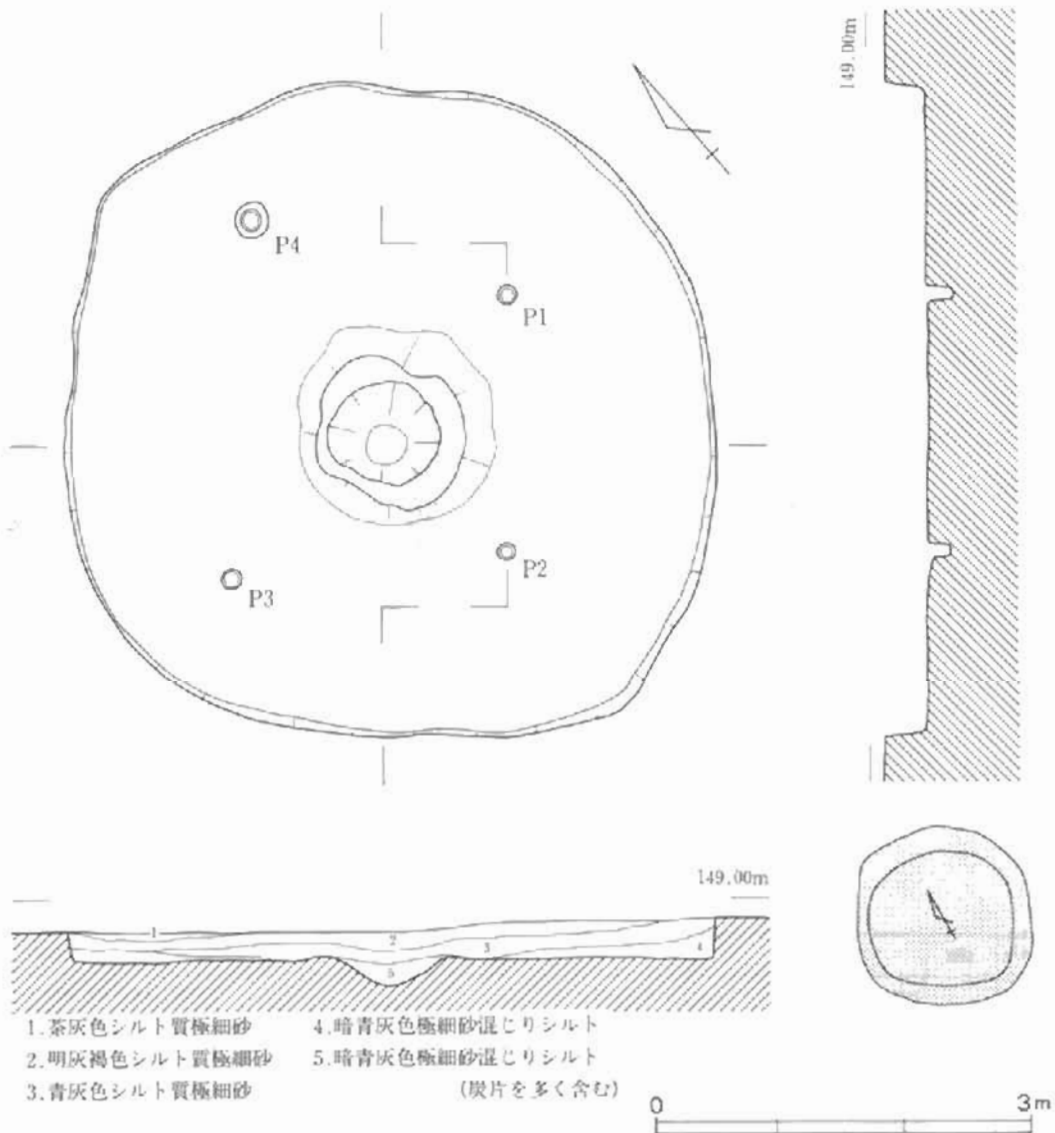
SH04 (図版5・6・29)

検出状況 1-1区の北東部、小微高地aの中央で検出された。SH05を拡張して構築している。SH03や中世の遺構に切られている。

形状・規模 平面形は円形である。直径5.3mを測る。検出面から床面までの深さは24cmであり、床面の標高は148.52mである。床面積は22.0㎡と小型である。

埋土 茶灰色ないしは青灰色のシルト質極細砂などの細粒の堆積物が認められ、中央土壌には暗青灰色の極細砂混じりシルトが堆積している。

- 屋内施設** 柱穴・中央土壇が検出された。ベッド・周壁溝は認められなかった。
- 柱穴** 主柱穴は4穴が確認された。P4のみが周壁際に位置している。P1は、掘り方の直径14cm、床面からの深さは12cmである。P2は、掘り方の直径14cm、床面からの深さは16cmである。P3は、掘り方の直径16cm、床面からの深さは14cmである。P4は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径17cm、床面からの深さは12cmである。
- 柱穴間の距離は、P1～P2間が2.04m、P2～P3間が2.21m、P3～P4間が2.84m、P4～P1間が2.15mとなっている。
- 中央土壇** 床面中央に設けられた円形の土壇である。直径は85cm、床面から壇底までの深さは25cmである。この土壇を取り巻く形で、地山削り出しによる土手が設けられている。土手は直径1.6mの円形であり、幅30～45cm、床面からの高さは5cmを測る。この土手を含めた中央土壇の面積は2.00㎡であり、対床面積比は9%と比較的大きい。埋土には炭片を多く含んでいる。



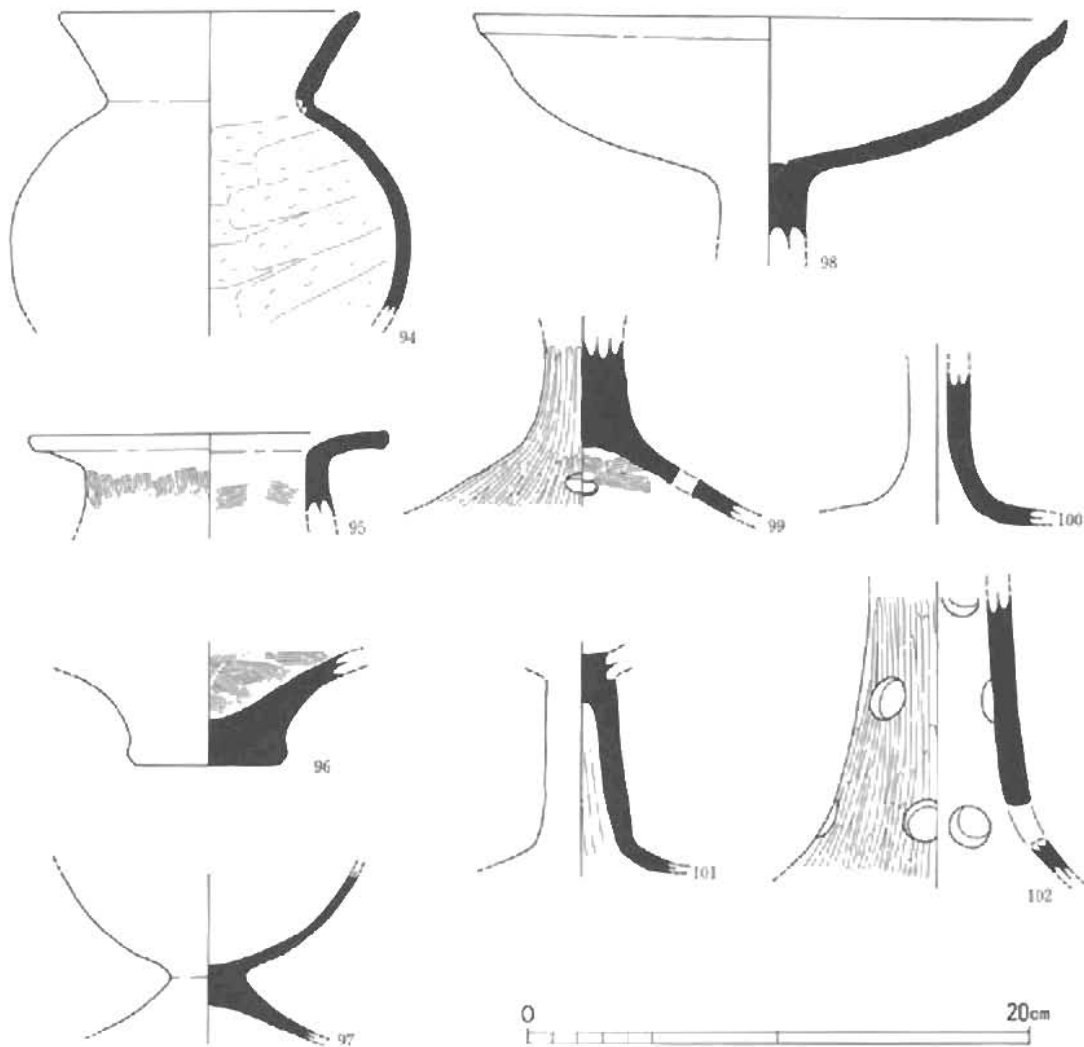
第41図 SH04

第3節 Ⅰ区の調査

出土遺物 遺物は土器のみである。床面直上より94・95・96・97・98が、中央土壌の最下層より102
 が出土しており、他は埋土からの出土である。

壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種がある。壺には直口壺・短頸壺・細頸壺があり、高坏
 には有段口縁のものが含まれる。

時期 川除5期である。



第42図 SH04出土土器

第11表 SH04出土土器観察表(1)

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
94	壺	口径 : 111.71 底径 : 器高 82.4 頸径 18.2 体部径 116.0	外面 ココナテ 内面 口縁部ココナテ、体部ヘラケズリ	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	口縁部7/8 体部1/2	
95	壺	口径 14.2 底径 器高 43.4 頸径 9.8 体部径	外面 口縁部ココナテ、のち底部13cmタテハケ 内面 口縁部ココナテ、底部13cmタテハケ	外面 浅黄橙 内面 灰白	口縁部のみ はは完全	
96	壺	口径 : 底径 15.81 器高 : 49.0 頸径 体部径	外面 底部部ヘラケズリ、底面ヘラケズリ 内面 10cmタテハケ	外面 灰白 内面 灰白	底部のみ完 全	

第12表 SH04出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
97	鉢	口径 底径 器高 残7.3' 胴径 3.0 体部径	外面 内面	外面 濃い 黄褐色 内面 橙	口縁部欠 坏部1/3 胴部1/2	
98	高坏	口径 23.6 底径 器高 残8.9 胴径 3.5 坏部高 6.2	外面 内面	外面 赤褐色 内面 赤褐色	坏部ほぼ完 存	
99	高坏	口径 底径 器高 残2.0 胴径 3.1 坏部高	外面 脚部部へラミダキ、4孔 内面 5条2cmハテ	外面 橙 内面 橙	脚部のみ 柱部完存 胴部わずか	
100	高坏	口径 底径 器高 残5.5 胴径 坏部高	外面 調整のため調整不明 内面 脚部部へラミダキ、胴部9条2cmハテ	外面 浅黄褐色 内面 浅黄褐色	脚部のみ 柱部完存 胴部わずか	
101	高坏	口径 底径 器高 残8.8 胴径 2.6 坏部高	外面 調整のため調整不明 内面 へラミダキ	外面 橙 内面 橙	脚部のみ 胴部欠	
102	部在	口径 底径 器高 残11.1 胴径 体部径	外面 脚部部へラミダキ、3段に4個ずつ円孔 内面 へラミダキによるチヂ	外面 灰白 内面 橙	残わずか ほとんどが 破欠	

SH05 (図版5)

検出状況 I-1区の北東部の、小微高地aの中央で検出された。SH02を切り、のちに拡張して構築されたSH04やSH03などに切られている。

形状・規模 平面形は東西にやや長い楕円形を呈し、短径4.0m、長径4.5mを測る。検出面から床面までの深さは15cmであり、床面の標高は148.44mである。床面積は14.0㎡とかなり小規模である。

埋土 暗青灰色極細砂混じりシルトが堆積し、中央土壌にも同様の堆積が認められた。

屋内施設 柱穴・中央土壌が検出された。ベッド・周壁溝は認められなかった。

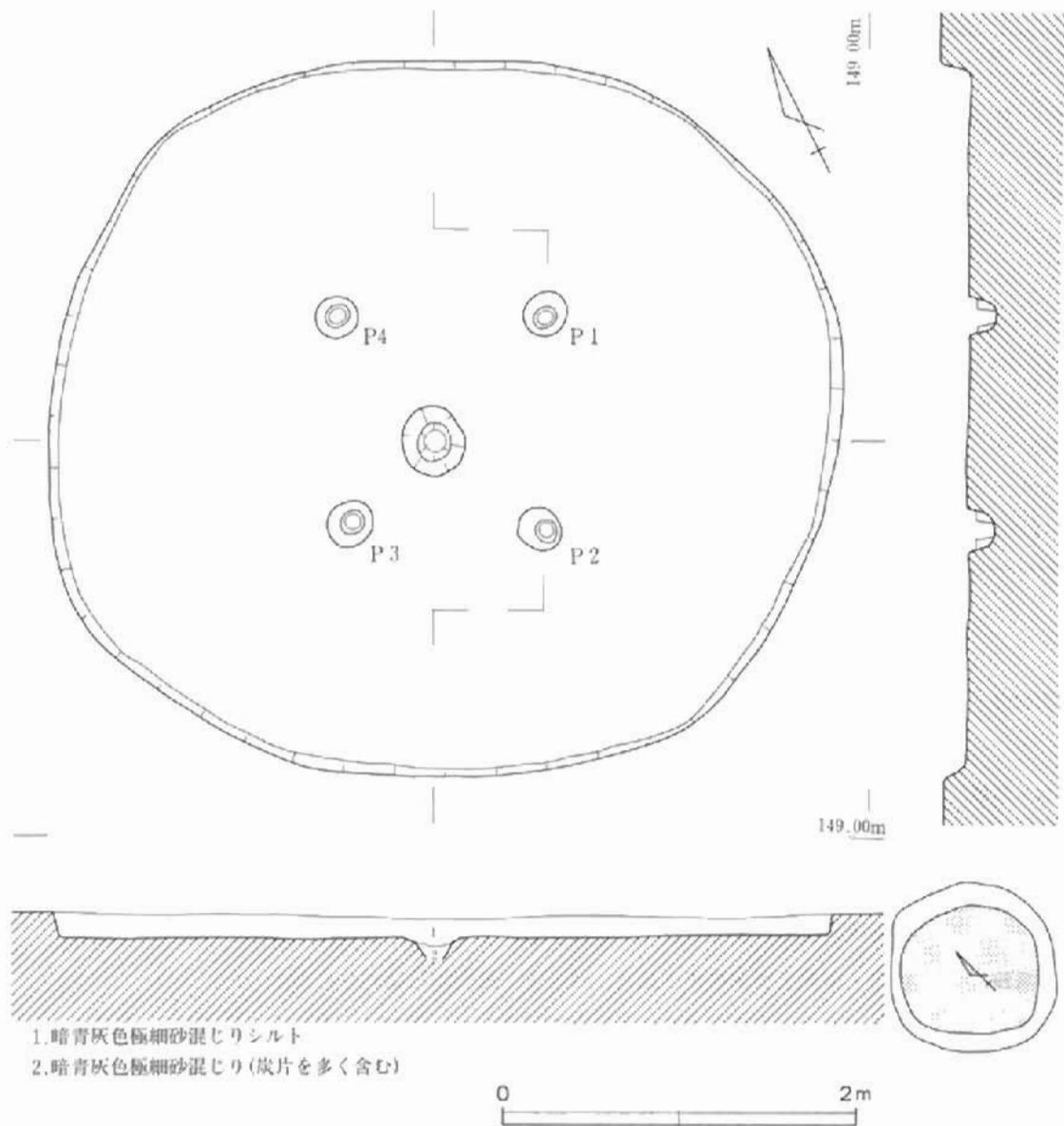
柱穴 主柱穴は中央土壌を中心に4穴が確認された。P1は、掘り方の直径24cm、柱痕の直径11cm、床面からの深さは30cmである。P2は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは30cmである。P3は、掘り方の直径26cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは22cmである。P4は、掘り方の直径24cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは24cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間が1.18m、P2～P3間が1.10m、P3～P4間が1.15m、P4～P1間が1.17mとなっている。

中央土壌 床面中央に設けられた円形の土壌であり、その直径は40cmである。床面から墳底までの深さは21cmである。中央土壌の面積は0.10㎡であり、対床面積比は0.7%である。埋土には炭片を多く含んでいる。

出土遺物 埋土から出土した土器は、細片のみであり、図化、詳細な時期決定は不可能である。

時期 川除5期である。



第43図 SH05

SH06 (図版7・29～33)

検出状況 1-1区の北東部の、小微高地aの中央で検出された。SH02を切り、中世の遺構であるSB01・02、SK03・04、SE03に切られている。焼失住居のため、焼土化した周壁が検出面で明瞭に観察された。

形状・規模 平面形は明確な七角形であり、西方向の一角に張出し部を付設している。張出し部基部から時計回りに各辺の長さを示せば、2.60m・3.35m・5.10m・4.60m・4.00m・3.70m・3.85mとなり、張出し部を除く平面形は比較的整った正七角形を呈する。検出面から床面までの深さは38cmで、床面の標高は148.40mである。検出した床面積は68.8㎡である。

埋土 本住居跡は焼失しており、炭化材は検出されなかったものの、多量の焼土や炭片が埋土中に含まれていた。埋土は灰色ないし褐色のシルト質極細砂である。

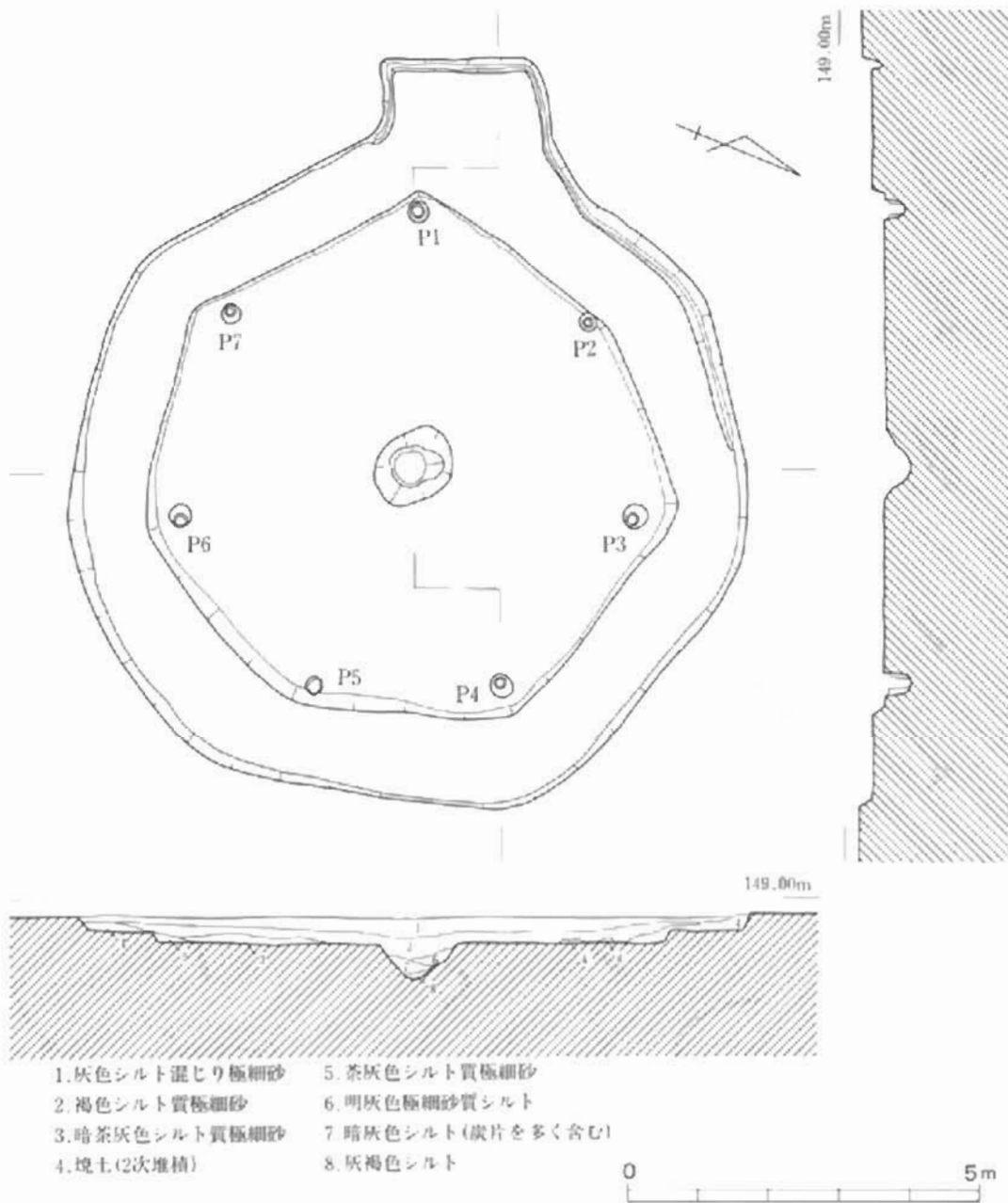
焼失状況 焼失の状況は巻首図版3(下)に示すように、北半のベッド付近にその状況がよくうか

がわれる。ベッドから周壁にかけて、黄褐色あるいは赤褐色に焼土化しており、そこから床面方向に多量の焼土粒・焼土塊が二次堆積していることから、かなり高温に達する条件にあったことが判る。

屋内施設 周壁溝・張出し部・ベッド・柱穴・中央土壇が検出された。

周壁溝 全周せず、張出し部から北西部にかけて部分的に確認できた。ベッドのレベルでの幅は10cmで、底での幅は5cmを測る。周壁検出面から底までの深さは28cmであり、ベッドからの深さは12cmである。

張出し部 一角からややずれた位置に設けられている。長さは1.0m、基部での幅2.6m、先端部での幅2.2m、検出面からの深さは15cmである。なお、張出し部は平坦に掘られ、ベッドと同一面を形成している。

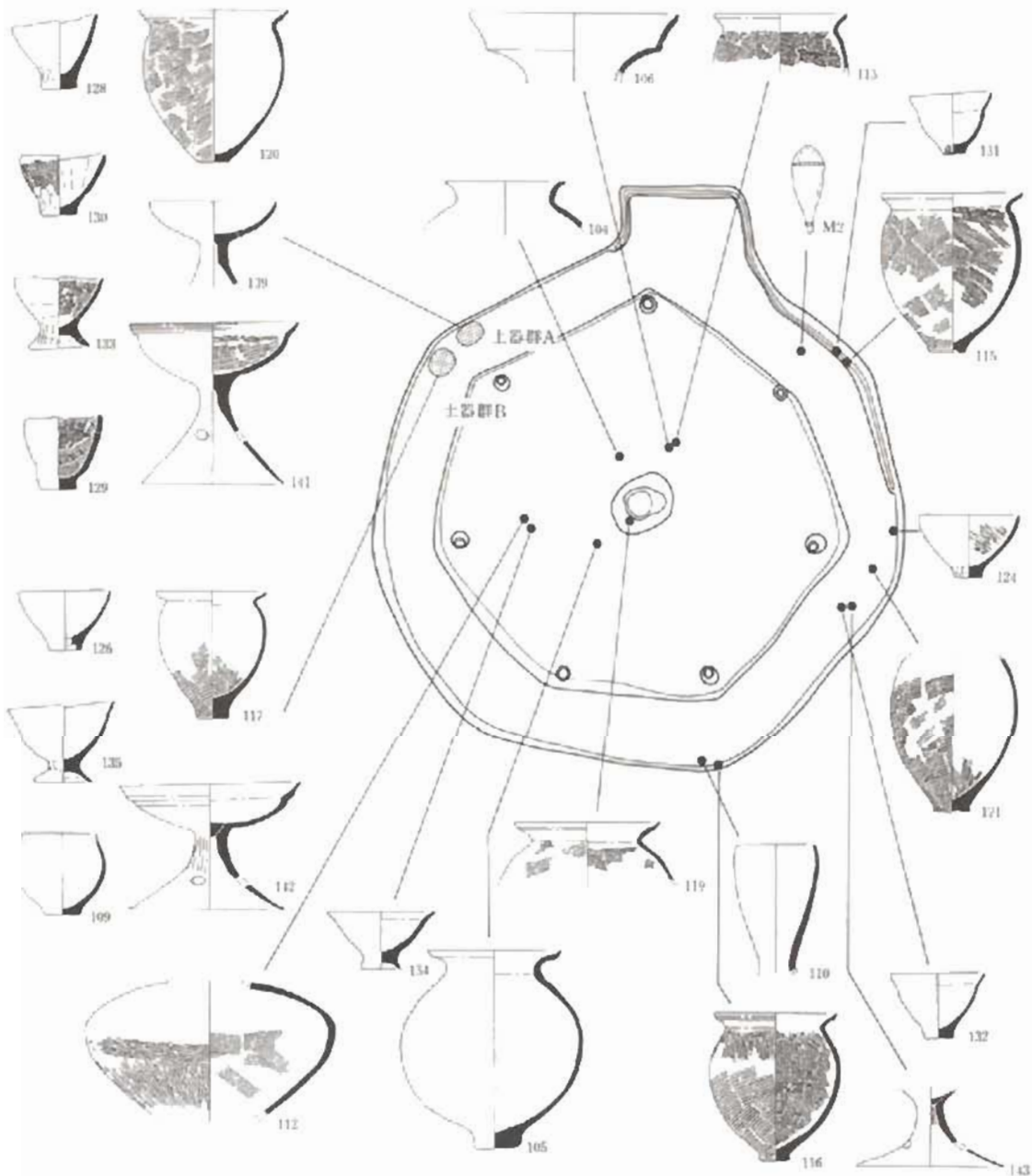


第44図 SH06

ベッド 周壁に沿って全周するベッドが確認された。ベッド内側の平面形は周壁の平面形と相似形の正七角形を呈する。各辺の長さは多少の長短があるが、その平均値は3.24mである。幅は1.0~1.1mであり、床面との比高差は18cm、検出面からの深さは12cmを測る。張り出し部を含めたベッドの面積は33.3㎡であり、全床面積の48%を占める。ベッドは主に削り出しにより構築されており、部分的に整地程度の盛土がなされている。

柱穴 支柱穴はベッドと床面の境にあり、ベッド内側ラインの屈曲部に7穴が確認できた。P 5では、柱痕が確認できなかった。

P 1は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは33cmである。P 2は、掘り方の直径26cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは36cmである。P 3は、掘り方の直径35cm、柱痕の直径17cm、床面からの深さは27cmである。P 4は、掘り方の直径36cm、柱



第45図 SH06遺物出土位置

痕の直径16cm、床面からの深さは37cmである。P 5は、掘り方の直径24cm、床面からの深さは63cmである。P 6は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径17cm、床面からの深さは27cmである。P 7は、掘り方の直径27cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは26cmである。

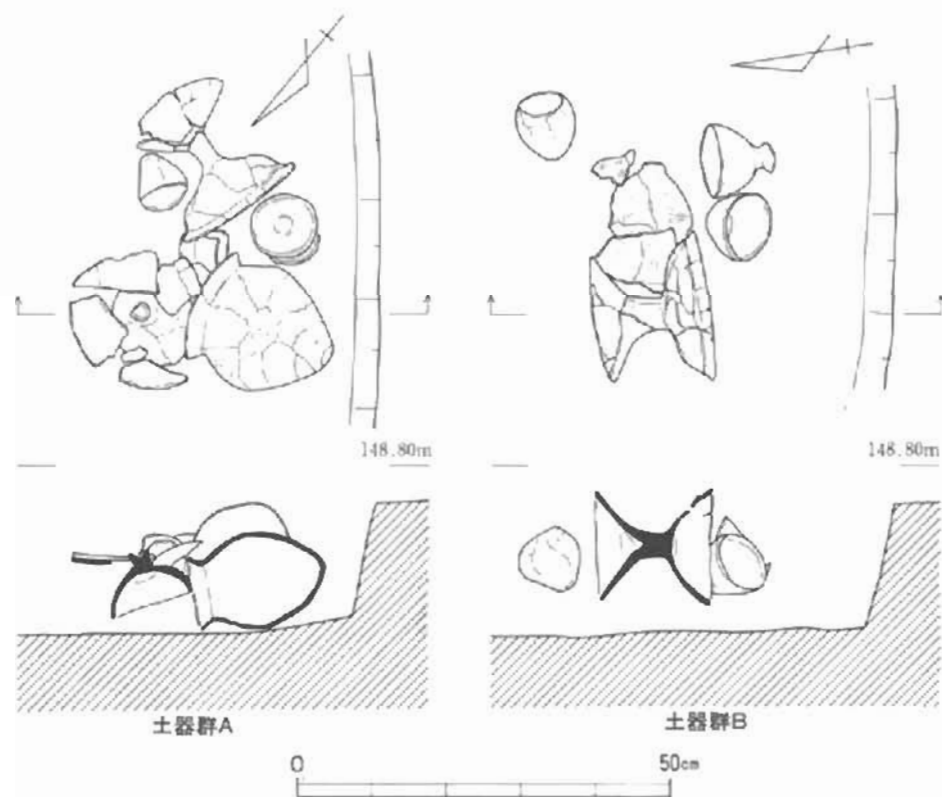
柱穴間の距離はP 1～P 2間が2.90m、P 2～P 3間が2.82m、P 3～P 4間が2.94m、P 4～P 5間が2.64m、P 5～P 6間が3.00m、P 6～P 7間が3.00m、P 7～P 1間が3.00mとなっている。

中央土壌 崩壊によるのかもしれないが、断面の傾斜角度が途中で変化しており、二段に掘られた可能性がある。上段の規模は95×115cmの楕円形であり、傾斜変化点までの深さは23cmを測る。下段は直径60cm程度の円形であり、床面から壙底までの深さは53cmである。土壌の面積は0.8㎡であり、対床面積比は1.1%である。埋土は炭片を多く含むシルトである。

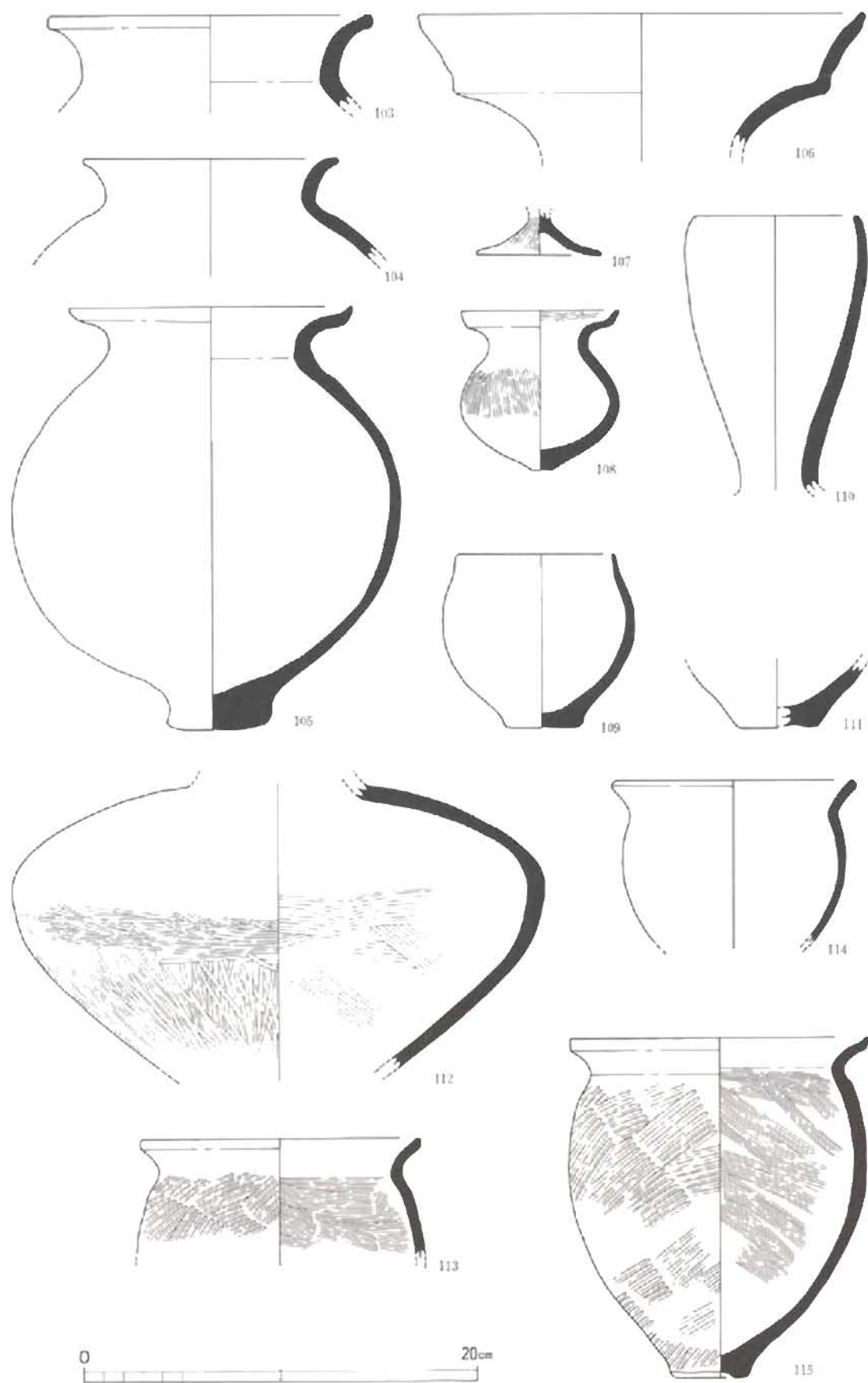
出土遺物 出土遺物には土器・鉄器・石器がある。
本住居跡は焼失しているため、多量の土器が原位置に近い形で検出された。また、作業台と考えられる台石が中央土壌西側の床面直上で認められた。遺物の出土位置は、第45図に示すとおりであり、これ以外の遺物はすべて埋土中からの出土である。

出土状況 土器は、ベッド上、特にP 3やP 7のベッド周壁際からの出土が多い点が注意される。P 7近くの周壁際の土器のまとまりは大きく二群に分けられ、各々壺1・高坏1ないし2・小型の鉢3ないし4個体のセットになっており、高坏はそれぞれ丹波系のものが1点含まれている。その他の床面直上の土器は、散漫な出土状況を示している。

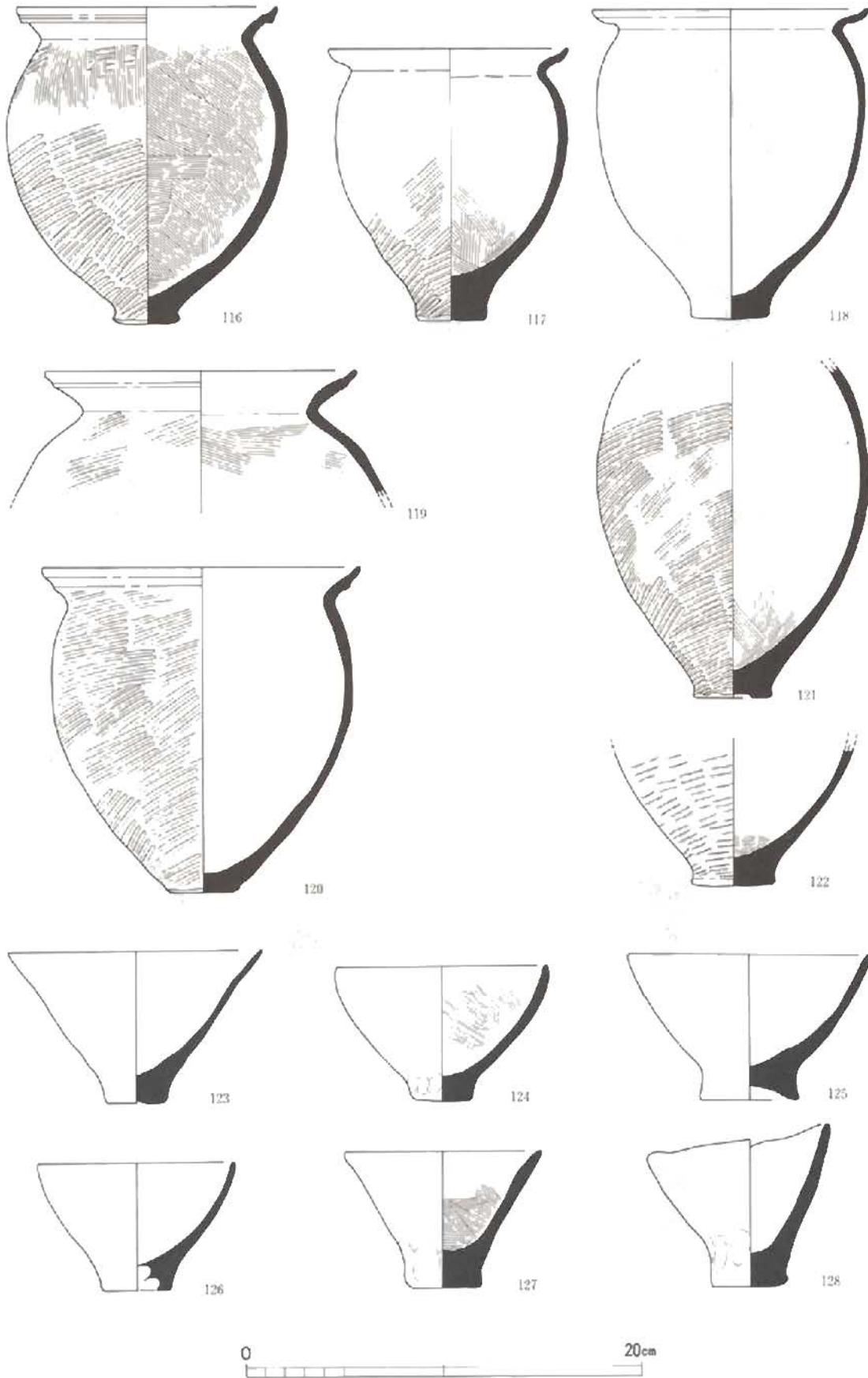
土器 壺・甕・鉢・高坏・器台の各種が出土している。
壺 広口壺・二重口縁壺・細頸壺がある。二重口縁壺は口縁部の加飾をもたないものである



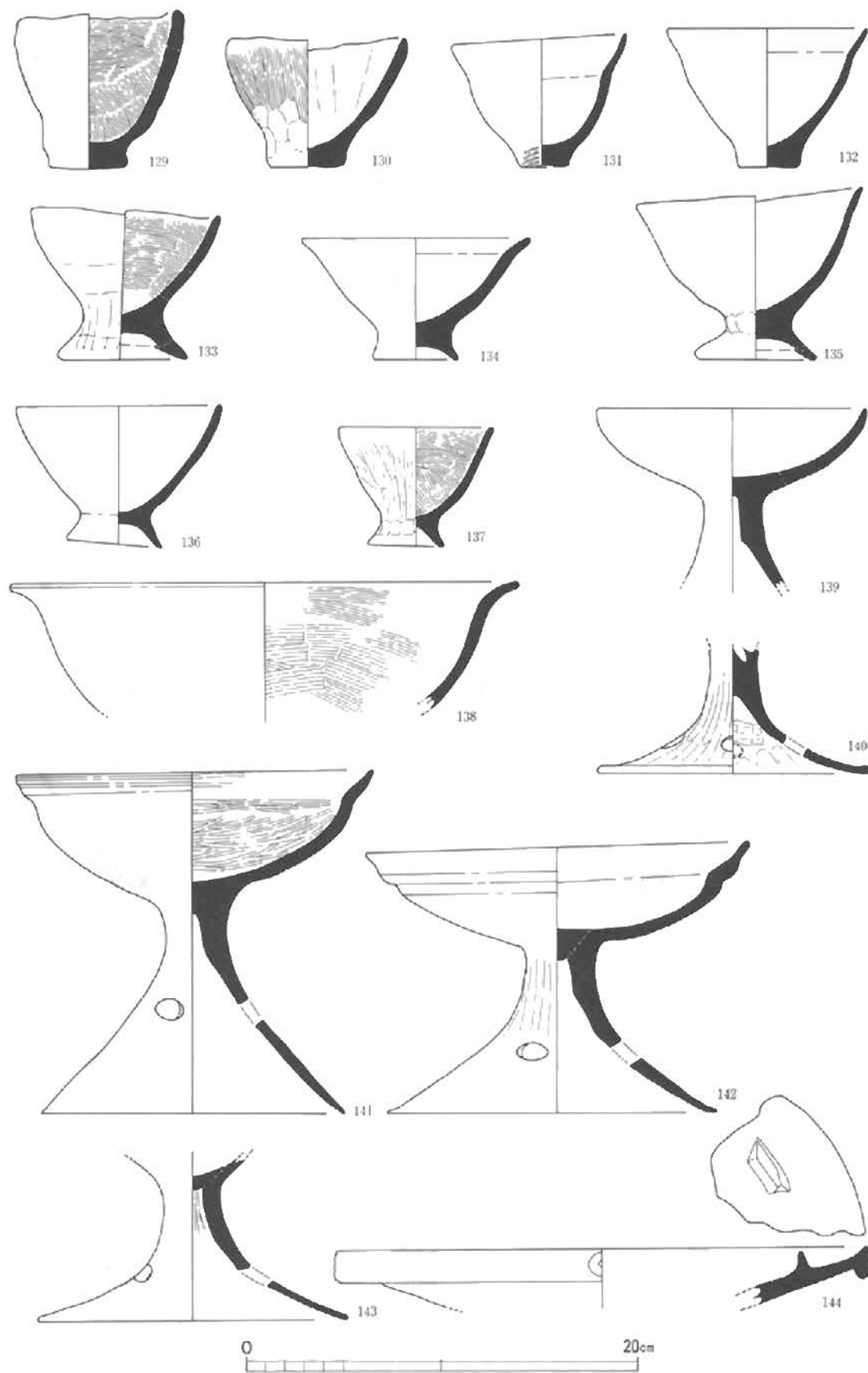
第46図 SH06土器群A・B出土状況



第47図 SH06出土土器(1)

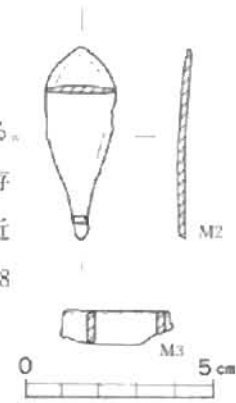


第48図 SH06出土土器(2)

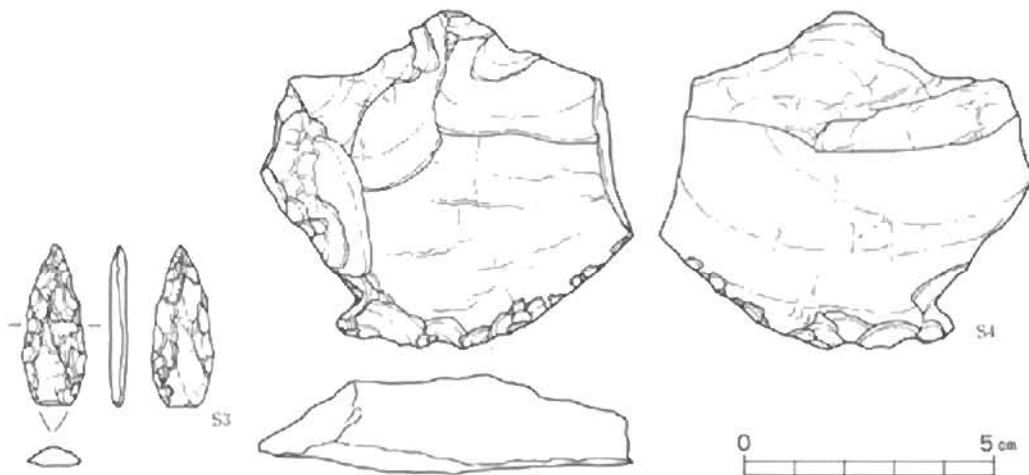


第49図 SH06出土土器(3)

- 甕** V様式系のもののみであり、口縁部には強い横方向のナデを施すことにより、外上方につまみ上げるものが殆どである。体部内面はヘラケズリを施すものがなく、全てハケメ仕上げである。
- 鉢** 大型のもの他に、成形第1段階の逆川錐台を利用した小型の鉢がある。小型のものの量が圧倒的に多く、このなかには口縁部が内湾するものと、外反したの内湾するものの二種がある。
- 高坏** 口縁部に段を有するものがあり、このタイプのは脚部が柱状部から裾部にかけて屈曲せずになだらかに開くものである。
- 器台** 口縁部内面に突起を貼りつけているが、突帯にはならない。
- 鉄器** 2点出土している。1点(M2)は鉄鉄と考えられ、ベッド直上から出土している。残存長は5.0cmで、最大幅は1.8cm、厚さ2mm、基の幅は0.4cmを測る。
他の1点(M3)の器種は不明であり、埋土中より出土している。長さ3.0cm、幅1.0cm、厚さ3mmである。
- 石器** 石器には、石鏃1点、削器1点があり、ともにサヌカイト製である。石鏃(S3)は、基部が欠損しているが、凸基無基式に属する。残存長3.2cm、最大幅1.3cm、厚さ4mmを測る。削器(S4)は、方形に近い肉厚の剥片を利用したもので、刃部は弧状を呈する。刃部の幅は6.8cmである。
- 時期** 川除4期である。



第50図 SH06出土鉄器



第51図 SH06出土石器

第13表 SH06出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調査	色調	残存率	備考
103	甕	口徑 (16.1) 底径 器高 4.6 胴径 13.0 体部径	外面 内面	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部約1/8	
104	甕	口徑 (13.0) 底径 器高 4.6 胴径 (10.6) 体部径	外面 内面	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	口縁部約1/6	

第14表 SH06出土土器観察表(2)

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
105	壺	口径 14.2 底径 5.0 器高 21.1 頸径 10.2 体部径 19.0	外面 内面 調整のための調整不明	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部 底部 定存 体 部の1/2	
106	壺	口径 12.6 底径 3.0 器高 16.7 頸径 6.7 体部径 14.0	外面 口縁部ヨコナテ 内面 口縁部ヨコナテ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部の1/2	内外面ともに磨減痕あり
107	壺	口径 16.3 底径 3.0 器高 22.0 頸径 7.0 体部径 14.0	外面 縦方向ヘラシゲキ 内面 不定方向ナテ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	約1/2	
108	壺	口径 7.9 底径 1.2 器高 8.0 頸径 5.0 体部径 8.0	外面 体部中央に縦方向ヘラシゲキ 内面 口縁部縦方向ヘラシゲキ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部の1/5, 他は定存	磨減痕あり 外面残存部
109	壺	口径 7.8 底径 3.6 器高 8.7 頸径 5.0 体部径 9.7	外面 内面 調整のための調整不明	外面：浅黄 内面：浅黄	口縁部定存	
110	壺	口径 8.1 底径 3.0 器高 13.8 頸径 13.9 体部径 13.0	外面 口縁部ヨコナテのちタテナテ, 以下はタテナテ 内面 口縁部ヨコナテのちタテナテ, 以下はタテナテ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	頸部のみ	長頸造頸部
111	壺	口径 14.0 底径 4.0 器高 13.0 頸径 10.0 体部径 13.0	外面 内面 調整のための調整不明	外面 赤橙 内面 赤橙	底部約1/2	
112	壺	口径 14.5 底径 3.0 器高 14.5 頸径 14.5 体部径 27.0	外面 体部中央縦方向ヘラシゲキ, 下位縦方向ヘラシゲキ 内面 6.5cmのハケ	外面 赤黒 内面 赤黒	体部の1/2	
113	甕	口径 14.0 底径 3.0 器高 15.9 頸径 12.1 体部径 14.0	外面 口縁部ヨコナテ, 10.5cmの横ハケ 内面 口縁部ヨコナテ, 4.5cmのタテキ	外面 赤橙 内面 赤橙	口縁部の1/2	
114	甕	口径 11.0 底径 3.0 器高 18.1 頸径 10.6 体部径 11.0	外面 内面 調整のための調整不明	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	約1/4	
115	甕	口径 15.0 底径 3.6 器高 17.0 頸径 12.6 体部径 15.1	外面 口縁部ヨコナテ, 10.5cmのハケ 内面 口縁部ヨコナテ, 4.5cmのタテキ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部の5/8, 他はほぼ定存	
116	甕	口径 13.2 底径 3.4 器高 15.8 頸径 10.6 体部径 14.2	外面 口縁部ヨコナテ 体部上位タテキの縦ハケ, 上位3.5cmのタテキに縁部に縦ハケ 内面 口縁部ヨコナテ, 8.5cmのハケ	外面 赤橙 内面 赤橙	底部定存, 口縁・体部の1/2	片渡あり
117	甕	口径 12.0 底径 3.2 器高 13.6 頸径 9.8 体部径 11.7	外面 口縁部ヨコナテ, 体部下位3.5cmのタテキ 内面 口縁部ヨコナテ, 体部下位6.5cmのハケ	外面 橙 内面 橙	口縁部の4/5, 他はほぼ定存	
118	甕	口径 14.0 底径 3.8 器高 15.5 頸径 11.2 体部径 13.5	外面 内面 調整のための調整不明	外面 橙 内面 橙	口縁部1/4 体部1/2 底部定存	
119	甕	口径 15.7 底径 3.6 器高 16.4 頸径 11.8 体部径 15.7	外面 口縁部ヨコナテ, 体部3.5cmのタテキ 内面 口縁部ヨコナテ, 体部7.5cmのハケ	外面 赤橙 内面 赤橙	口縁部約1/4	片渡あり
120	甕	口径 16.0 底径 3.6 器高 16.2 頸径 13.6 体部径 15.2	外面 口縁部ヨコナテ, 体部3.5cmのタテキ 内面 口縁部ヨコナテ, 体部は磨減のための調整不明	外面 赤橙 内面 赤橙	口縁部約1/4 他はほぼ定存	片渡あり
121	甕	口径 13.6 底径 3.6 器高 16.5 頸径 13.8 体部径 13.8	外面 体部3.5cmのタテキ 内面 体部下位3.5cmのハケ, 他は磨減のための調整不明	外面 浅黄 内面 浅黄	体部 底部約1/2	
122	甕	口径 14.2 底径 3.0 器高 17.0 頸径 7.0 体部径 14.0	外面 体部3.5cmのタテキ 内面 体部下位3.5cmのハケ	外面 オリーブ灰 内面 浅黄橙	底部定存 体部ハケあり	
123	甕	口径 12.8 底径 2.9 器高 7.6 頸径 7.6 体部径 12.8	外面 内面 調整のための調整不明	外面 浅橙 内面 浅橙	底部定存, 体部の1/4	
124	甕	口径 10.5 底径 3.1 器高 6.8 頸径 6.8 体部径 10.5	外面 体部不定方向ナテ, 底部スピオヤキ 内面 体部に8.5cmのハケ	外面 灰白 内面 浅黄橙	口縁部1/3 底部定存	

第15表 S H06出土土器観察表(3)

番号	器種	測量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
125	鉢	口径 : 12.1 底径 : 4.8 器高 : 7.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部定存 口縁部わずかに残る	
126	鉢	口径 : (10.0) 底径 : (3.4) 器高 : 6.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	1/2	
127	鉢	口径 : 9.9 底径 : 3.4 器高 : 6.9 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部不定方向ナテ、底部エヒオサエ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部8条/cmハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白	定存	
128	鉢	口径 : 9.3 底径 : 3.8 器高 : 7.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、底部エヒオサエ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 浅黄橙	ほぼ定存	
129	鉢	口径 : 8.0 底径 : 3.9 器高 : 7.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下半~底部エヒオサエ 内面 : 11条/cmのハケ	外面 : 灰褐 内面 : 灰褐	定存	
130	鉢	口径 : 8.9 底径 : 3.7 器高 : 6.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部10条/cmのタテハケ、のみ体部下半~底部エヒオサエ 内面 : 体部ヘラナテ	外面 : 浅橙 内面 : 浅黄橙	定存	
131	鉢	口径 : 8.8 底径 : 2.5 器高 : 6.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ナテ、体部タタミのちナテ、底部5条/cmのタタミ 内面 : ナテ	外面 : 灰白 内面 : 明褐色	定存	
132	鉢	口径 : (10.0) 底径 : 3.1 器高 : 7.1 頸径 : 体部径 :	外面 : ヘラナテか? 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部わずかに残 底部定存	
133	鉢	口径 : 9.5 底径 : 6.7 器高 : 7.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 脚部縦ヘラナテ 内面 : 9条/cmのヨコハケ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	ほぼ定存	
134	鉢	口径 : 11.6 底径 : 4.2 器高 : 6.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 内面 : 褐灰	定存	二次焼成
135	鉢	口径 : 11.5 底径 : 5.7 器高 : 8.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 脚部縦エヒオサエ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	ほぼ定存	二次焼成か
136	鉢	口径 : 10.4 底径 : 4.8 器高 : 7.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 割離のため調整不明 内面 : ナテ	外面 : 橙 内面 : 橙	定存	
137	鉢	口径 : 7.8 底径 : 3.7 器高 : 6.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部下半ヘラナテズリ、脚部縦エヒオサエ 内面 : 7条/cmのハケ	外面 : 灰白 内面 : にぶい 橙	ほぼ定存	
138	鉢	口径 : (25.6) 底径 : 器高 : 残6.5 頸径 : 体部径 :	外面 : ハケ 内面 : 4条/cmのヨコハケ	外面 : 橙 内面 : 灰白	口縁部わずかに残 体部1/6	
139	高坏	口径 : 13.5 底径 : 器高 : 残8.9 脚柱径 : 3.0 坏部高 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	脚部のみ 欠	
140	高坏	口径 : 底径 : (13.8) 器高 : 残6.3 脚柱径 : 2.4 坏部高 :	外面 : 脚部縦ヘラミダキ、底部4孔 内面 : 脚部ヨコナテ、ヘラ状工具痕	外面 : 橙 内面 : 橙	脚部1/3	
141	高坏	口径 : 18.2 底径 : 15.4 器高 : 17.3 脚柱径 : 3.2 坏部高 : 7.3	外面 : 坏部以下縦ヘラミダキわずかに残、口縁部縦凹線、底部3孔 内面 : 坏部縦ヘラミダキ	外面 : 赤橙 内面 : 赤橙	脚部のみ 一部欠	丹波系
142	高坏	口径 : 19.6 底径 : 16.8 器高 : 13.6 脚柱径 : 4.0 坏部高 : 5.0	外面 : 口縁部ヨコナテ、脚部縦ヘラミダキ、底部3孔 内面 : 口縁部ヨコナテ、脚部との接合部41粘土を充填	外面 : 橙 内面 : 橙	脚部のみ 一部欠	丹波系
143	高坏	口径 : 底径 : (15.8) 器高 : 残8.2 脚柱径 : 2.9 坏部高 :	外面 : 底部3孔 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	脚部1/2	
144	器台	口径 : (26.6) 底径 : 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部縦ヨコナテ、下半ヘラミダキ、凹形浮文4個? 内面 : ヨコナテ	外面 : 浅黄 内面 : 浅黄	口縁部1/8	

SH07 (図版4・33)

検出状況 1-1区の北東部の、小微高地aの中央で検出された。他の遺構との切り合い関係はない。

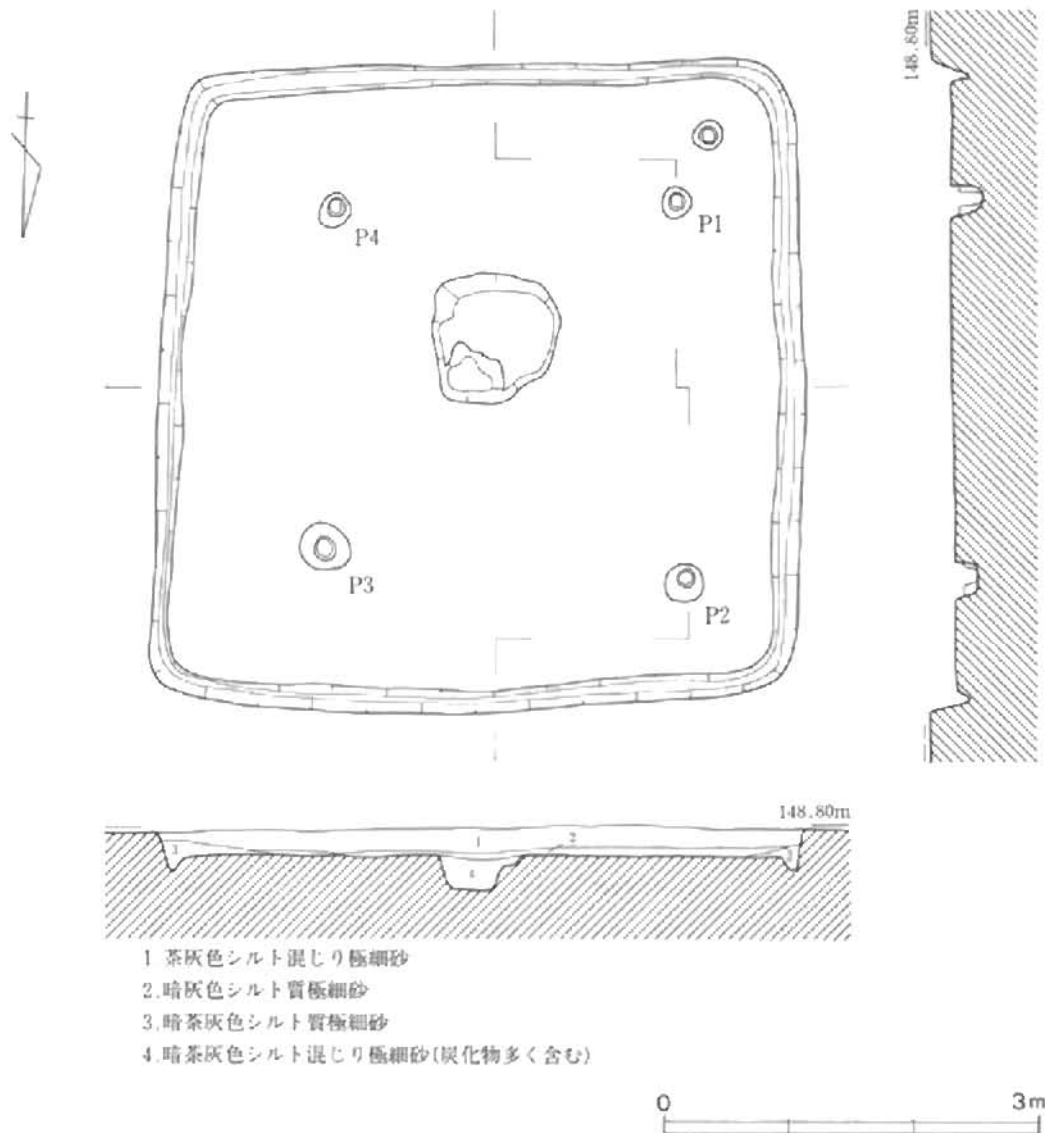
形状・規模 平面形は隅円の正方形である。北辺から時計回りに辺の長さを示せば4.68m・4.74m・5.00m・4.72mとなる。検出面から床面までの深さは23cmを測り、床面の標高は148.56mである。床面積は22.3㎡である。

埋土 茶褐色あるいは暗灰色のシルト質極細砂が堆積している。

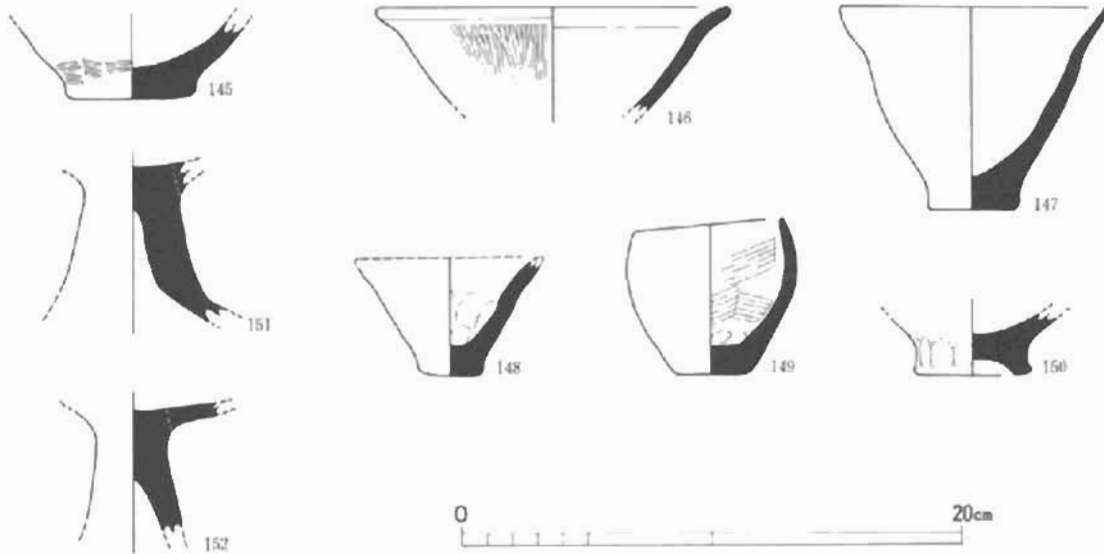
屋内施設 ベッドは検出されず、周壁溝・柱穴・中央土城が確認された。

周壁溝 周壁に沿って全周し、床面での幅は11cm、深さは8cm、底部での幅は8cmを測る。また、検出面からの深さは31cmである。

柱穴 主柱穴は4穴である。P1は、掘り方の直径24cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは40cmである。P2は、掘り方の直径29cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは29cmである。P3は、掘り方の直径42cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは35cmである。P4は、掘



第52図 SH07



第53図 SH07出土土器

り方の直径27cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは22cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が3.00m、P 2～P 3間が2.92m、P 3～P 4間が2.74m、P 4～P 1間が2.74mである。

南西隅に柱穴が1穴検出されたが、直立する柱が想定できるので、入口に設置される階段に伴う柱穴ではないことが判る。

中央土壌 逆台形の断面を呈する不整形の土壌であり、崩壊のためか直径1m、深さ11cmの窪みがあり、その中に直径50cm程度、深さ27cmの掘り込みが認められる。土壌の面積は0.8㎡であり、対床面積比は3.6%である。この土壌には炭化物を多く含むシルト混じり細砂が堆積していた。土壌壁は焼土化していない。

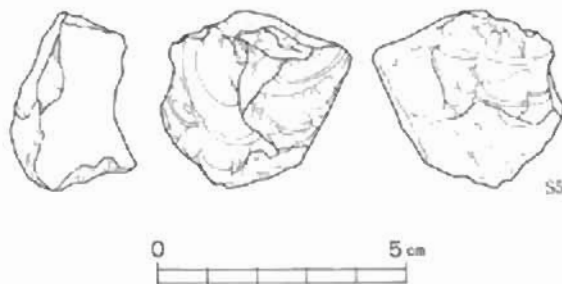
出土遺物 埋土中より土器・鉄器・石器が出土している。

土器 広口壺・V様式糸の甕・高坏・小型の鉢などがある。小型の鉢には、口縁部が外反するものと内湾するものの二種がある。

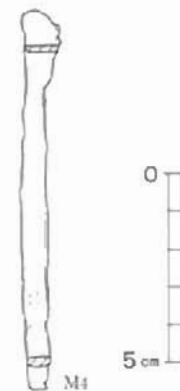
鉄器 埋土中より出土し、器種は不明である。棒状の製品であり、残存長は10.1cm、最大幅1.0cm、厚さは0.3cmを測る。

石器 石核が埋土中より出土した。石材は玉髓であり、亜角礫を素材としている。剥片剥離作業面は礫面である。

時期 川除5期である。



第54図 SH07出土石器



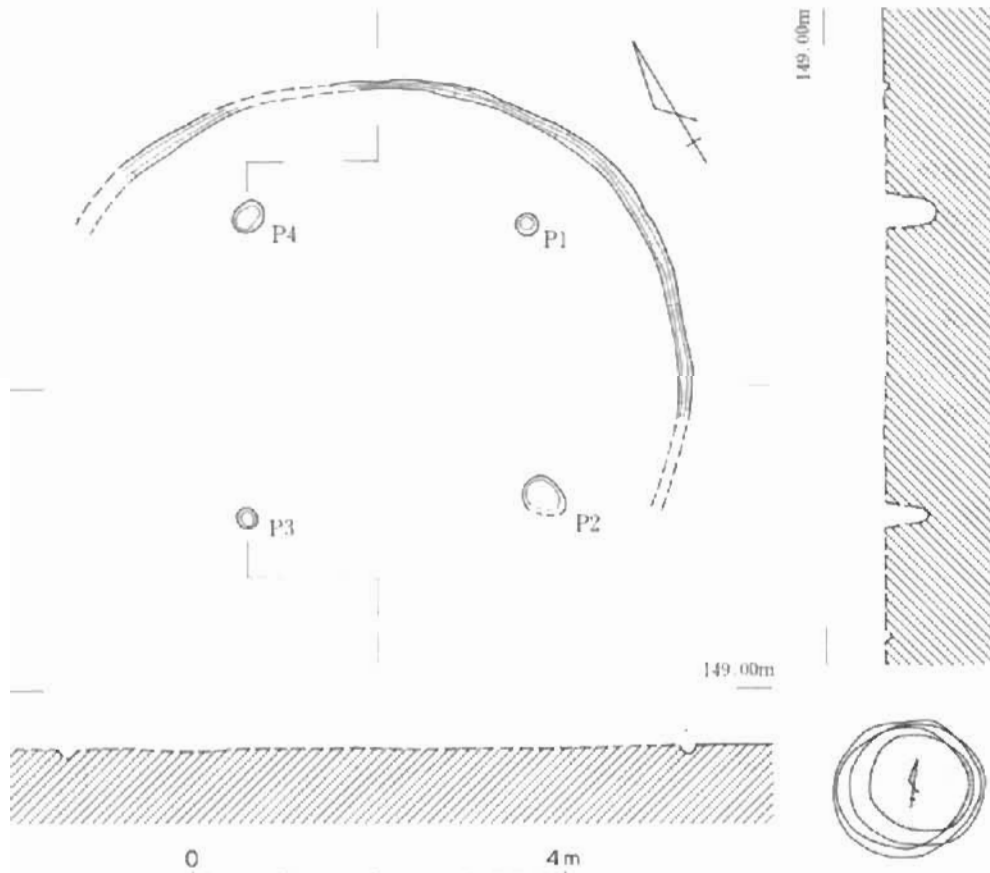
第55図 SH07出土鉄器

第16表 SH07出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
145	壺	口径 5.0 器高 残5.1 脚径 2.0 体部径	外面 体部下半だけ一部だけハケ、体部-底部間にタタキ 内面 磨滅のため調整不明	外面：灰褐色 内面：黒褐色	底部のみ残存	
146	鉢	口径 14.0 器高 残4.1 脚径 体部径	外面 縦へら、タタキ 内面 ココナダ	外面：黒褐色 内面：黒褐色	口縁部約1/3	
147	鉢	口径 10.5 器高 7.9 脚径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面：灰白 内面：灰白	口縁部1/6欠	
148	鉢	口径 残2.5 器高 残4.6 脚径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 底部スビイサキ	外面：土色 内面：土色	底部完全残存 体部約1/3	
149	鉢	口径 5.8 器高 6.0 脚径 体部径 6.8	外面 磨滅のため調整不明 内面 体部ハケ、底部工具痕	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	底部完全残存 体部約2/3	
150	鉢	口径 残4.6 器高 残2.5 脚径 体部径	外面 底部スビイサキ 内面 磨滅のため調整不明	外面：土色 内面：浅黄褐色	底部のみ残存	
151	高杯	口径 器高 残6.5 脚径 3.9 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面：赤褐色 内面：赤褐色	脚部のみ	次地成
152	高杯	口径 器高 残5.5 脚径 2.9 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面：赤褐色 内面：赤褐色	脚部のみ	

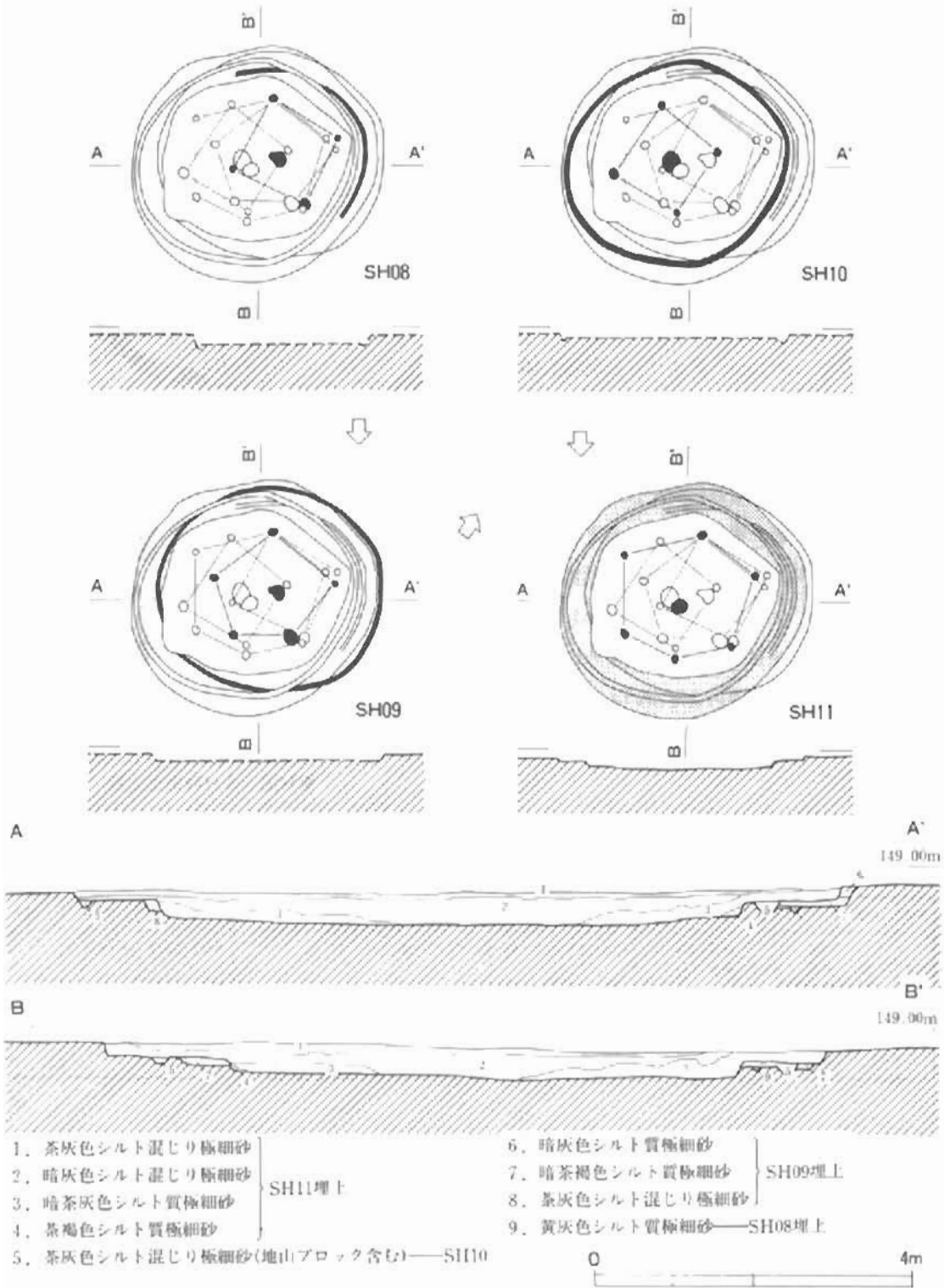
SH08 (図版8)

検出状況 1-1区の南東部、小微高地aの中央西寄りで検出された。南西端をSH12・13に切ら



第56図 SH08

れ、他にも土壌や溝との切り合い関係をもつことから、このいびつな形態の住居跡は把握が困難であったが、SH08・09・10・11の4棟の住居跡の存在を確認した。周壁や中央土壌の切り合い等から、第57図に示すとおり、SH08→SH09→SH10→SH11の順に構築されたことが判明した。また、この3回の変遷は、周壁輪郭の検討から、拡張→移動→拡張を示すことが判った。



第57図 SH08～SH11の切り合い関係

第3節 1区の調査

形状・規模 平面形は円形である。周壁溝の一部が、最終的に構築されたSH11のベッド上面で検出されたのみである。復元される直径は7.2mで、床面積は40㎡前後である。

埋土 のちに構築された住居跡に削平されているため、本住居跡の埋土は周壁溝付近にしか残存しない。黄褐色のシルト質極細砂が堆積している。

屋内施設 部分的な周壁溝・柱穴が検出されたのみである。中央土壇についてはのちのSH09のものと重複している可能性がある。

周壁溝 全体の1/3程度しか残存していない。検出面での幅は15cm、底部での幅は6cm、深さは8cm以上である。

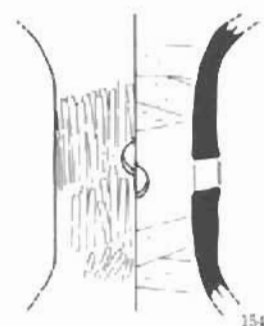
柱穴 床面が約15cm削平されているが、支柱穴は4穴が確認された。P1は、掘り方の直径は23cmである。P2は、掘り方の直径40cm、床面からの深さは28cmである。P3は、掘り方の直径21cm、床面からの深さは43cmである。P4は、掘り方の直径30cm、床面からの深さは35cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間は2.90m、P2～P3間は3.16m、P3～P4間は3.18m、P4～P1間は3.00mである。

中央土壇 SH09と相似関係にあるため、中央土壇の位置も大きく変わっていないと思われる。SH09の中央土壇は不整形であるため、本住居跡のものと切り合っている可能性がある。規模・形態は不明である。

出土遺物 土器が埋土中より出土しているが、細片が多く、図化できたのは、P1出土の甕・器台の各1点のみである。

時期 川除4期である。



0 10cm

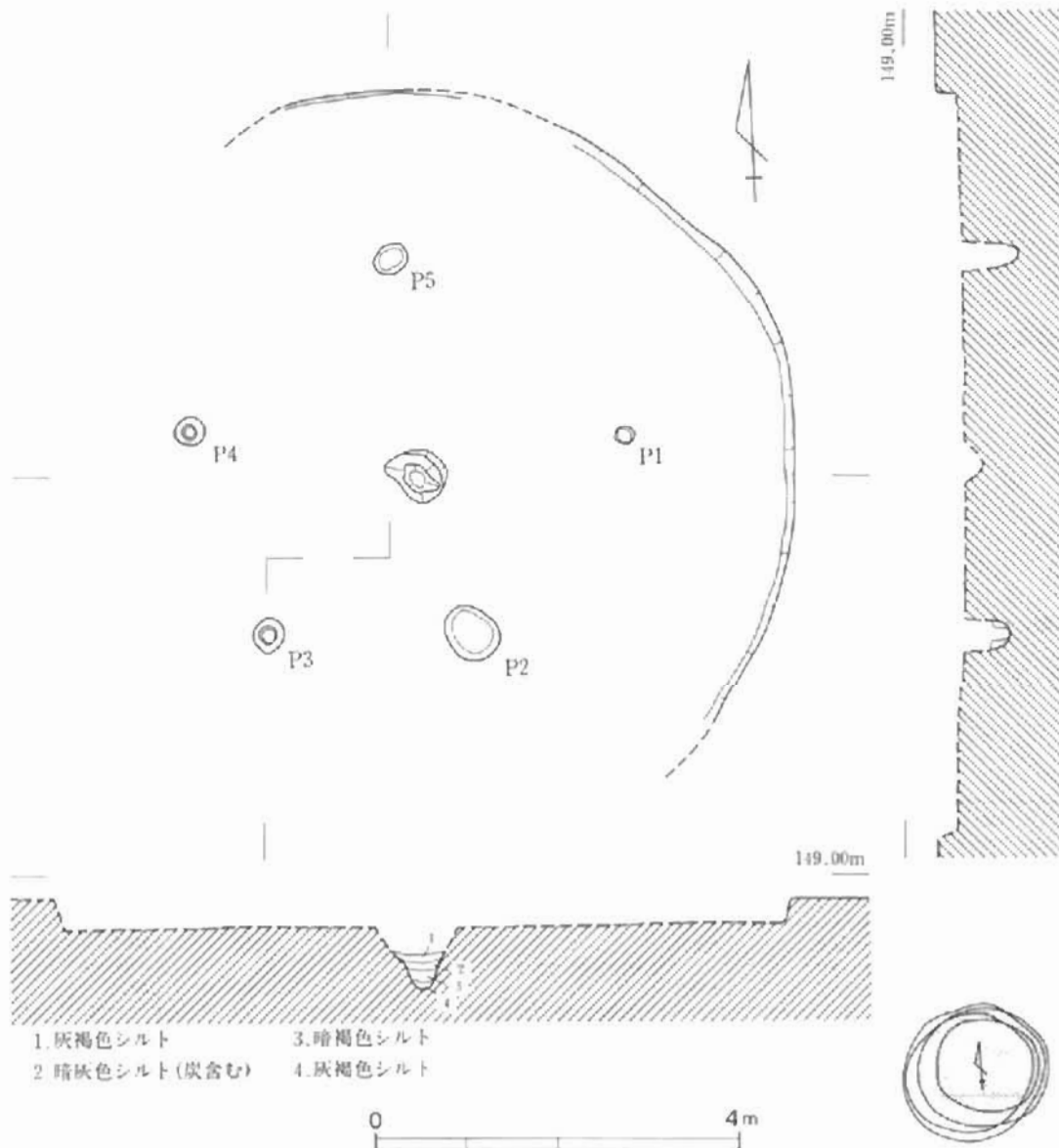
第58図 SH08出土土器

第17表 SH08出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
153	甕	口径 : 底径 : 4.6 器高 : 残5.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 3条/cmタタキ、横タテナデ(一部分) 内面 : 底部ニヒオサニ後ナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部宛存	
154	器台	口径 : 底径 : 器高 : 残10.6 胴径 : 体部径 : (8.8)	外面 : 体部縦ヘラミヅリ、口縁部、脚部との境は横ヘラミヅリ 体部に4孔 内面 : 横ヘラミヅリ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	体部のみ	

SH09 (図版8・33)

- 検出状況** 1-1区の南東部、小嶺高地aの中央やや西寄りで検出された。SH08廃絶ののち、これを拡張する形で構築されたものである。周壁のみの拡張ではなく、支柱穴も移動させ、かつ、4本柱から柱を1本増やして5本柱としている。
- 形状・規模** 平面形は円形である。SH10およびSH11に切られるため、周壁東北部分の約1/3が残存する。この部分で本来の床面がわずかに残存し、その標高は148.47mである。復元される直径は8.1mで、SH08よりも約90cm拡張している。床面積は50㎡前後である。
- 埋土** のちに構築された住居跡に削平されているため、本住居跡の埋土は周壁付近にしか残存しない。暗灰色のシルト質極細砂等が堆積している。中央土壌には、炭片を含むシルトが堆積するが、土壌の底および壁は焼土化していない。
- 屋内施設** 柱穴と中央土壌が検出されたのみである。周壁溝は存在しなかった。
- 柱穴** 支柱穴は4穴確認された。P1は、掘り方の直径21cm、床面からの深さは40cmである。



第59図 SH09

第3節 I区の調査

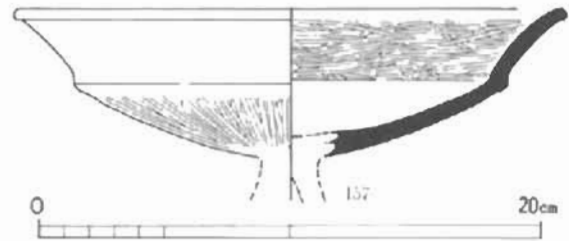
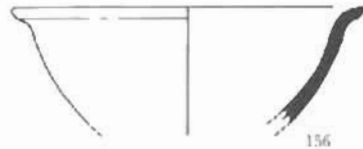
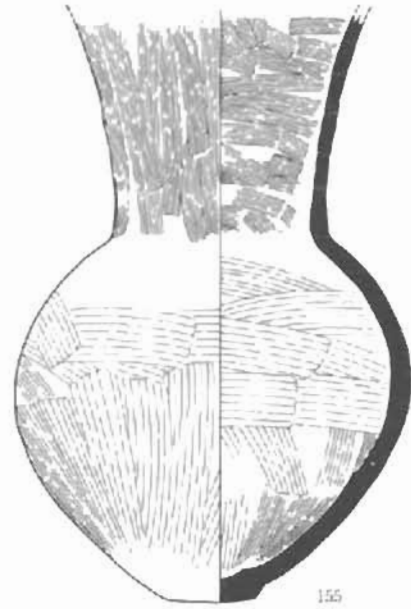
P 2は、掘り方の直径52cm、床面からの深さは27cmである。P 3は、掘り方の直径35cm、柱痕の直径は18cm、床面からの深さは30cmである。P 4は、掘り方の直径33cm、柱痕の直径は16cm、床面からの深さは61cmである。P 5は、掘り方の直径31cm、床面からの深さは36cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.78m、P 2～P 3間が2.30m、P 3～P 4間が2.37m、P 4～P 1間が2.90mである。

中央土壌 床面がのちの住居跡の構築により、15cm削平されており、また、SH08の中央土壌と切り合っている可能性もあるため、本来の形状や規模は不明である。推定復元できる深さは45cm程度である。埋土には炭片が多く含まれていた。

出土遺物 壺・鉢・高坏などが出土しており、P 4掘り方から出土した壺(155)を除けば、すべて埋土からの出土である。155は外面にハケを施すが、頸部と体部では異なるハケ原体を使用している。

時期 川除4期である。



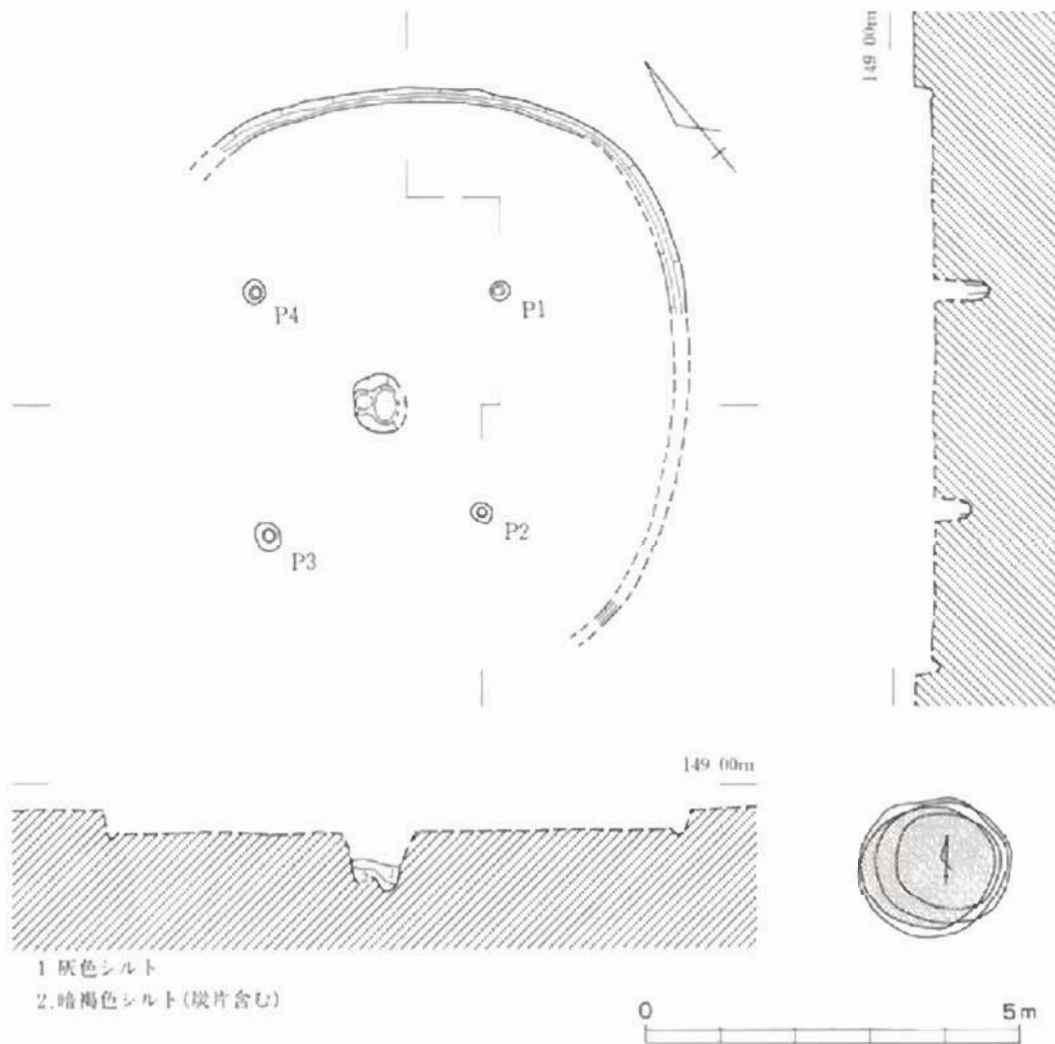
第60図 SH09出土土器

第18表 SH09出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調査	色調	残存率	備考
155	壺	口径 34 器高 42.2 口径 34 器高 42.2 口径 34 器高 42.2	外面 頸部14cm以下のタテハケ、体部14cm以下のタテハケ、下部14cm以下のタテハケ 内面 頸部14cm以下のタテハケ、体部14cm以下のタテハケ、下部14cm以下のタテハケ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部欠	後期壺
156	鉢	口径 14.0 器高 4.6 口径 14.0 器高 4.6 口径 14.0 器高 4.6	外面 磨減のため調査不明。 内面	外面 灰白 内面 灰白	底縁部欠 口縁部-体部1/4	
157	高坏	口径 21.5 器高 19.9 口径 21.5 器高 19.9 口径 21.5 器高 19.9	外面 口縁部コシナシ、耳部縦ハケ、タテハケ 内面 口縁部コシナシ、口縁部横ハケ、タテハケ、耳部不定方向ハケ、タテハケ	外面 橙 内面 橙	耳部1/2	

SH10 (図版8)

- 検出状況** I-1区の南東部、小微高地aの中央やや西寄りで見出された。SH09廃絶ののち、これから南西方向に約50cm平行移動した場所に建て替えを行っている。SH11に切られるため、そのベッド上面で周壁溝が部分的に見出され、輪郭が判明した。
- 形状・規模** 平面形は円形である。復元される直径は8.35mであり、SH09よりも25cm程度規模を大きくしている。床面積は55㎡前後である。一部で本来の床面が残存し、その標高は148.40mである。
- 埋土** 本住居跡も、のちに構築された住居跡に削平されているため、埋土は周壁溝付近にしか残存しない。茶褐色シルト混じり極細砂が堆積している。中央土壌には、炭片を含むシルトが堆積する。
- 屋内施設** 周壁溝・柱穴・中央土壌が見出された。
- 周壁溝** 床面での幅は14cm、底部の幅は7cmを測る。床面からの深さは7cmである。
- 柱穴** 主柱穴は4穴が確認された。P1は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径は14cm、床面からの深さは24cmである。P2は、掘り方の直径29cm、柱痕の直径は12cm、床面からの深さは18cmである。P3は、掘り方の直径34cm、柱痕の直径は18cm、床面からの深さは26cmである。



第61図 SH10

第3節 I区の調査

る。P4は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径は16cm、床面からの深さは42cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間が2.94m、P2～P3間が2.85m、P3～P4間が3.20m、P4～P1間が3.25mである。

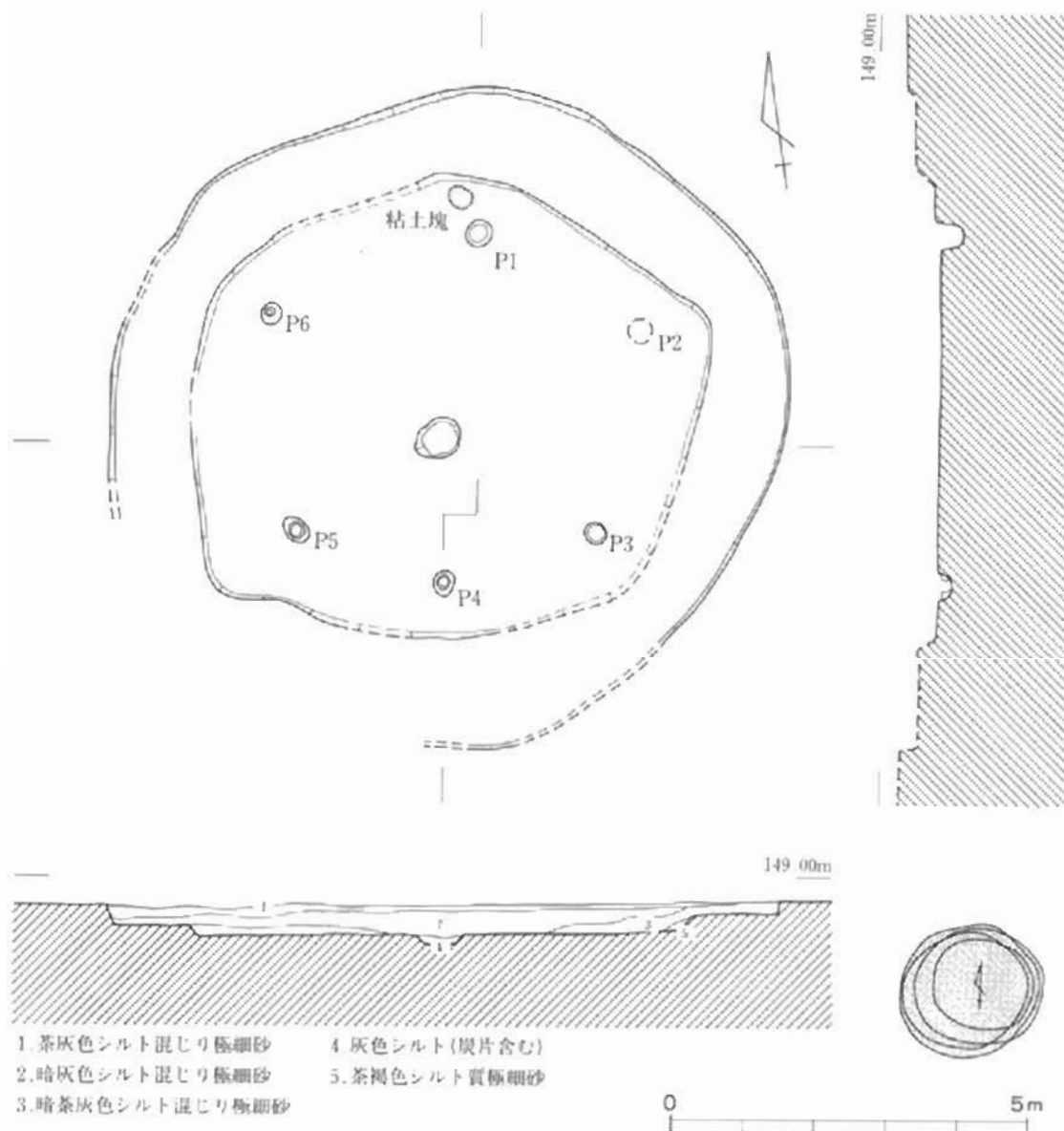
中央土塊 床面がのちの住居跡の構築により、18cm削平されているため、正確な形状や規模は不明であるが、直径80cm程度の円形の土塊であろう。残存した深さは40cmである。土塊の面積は0.4㎡、対床面積比は0.9%である。埋土には炭片を多く含む。

出土遺物 本住居跡に伴う遺物は確認できなかった。

時期 川除4期である。

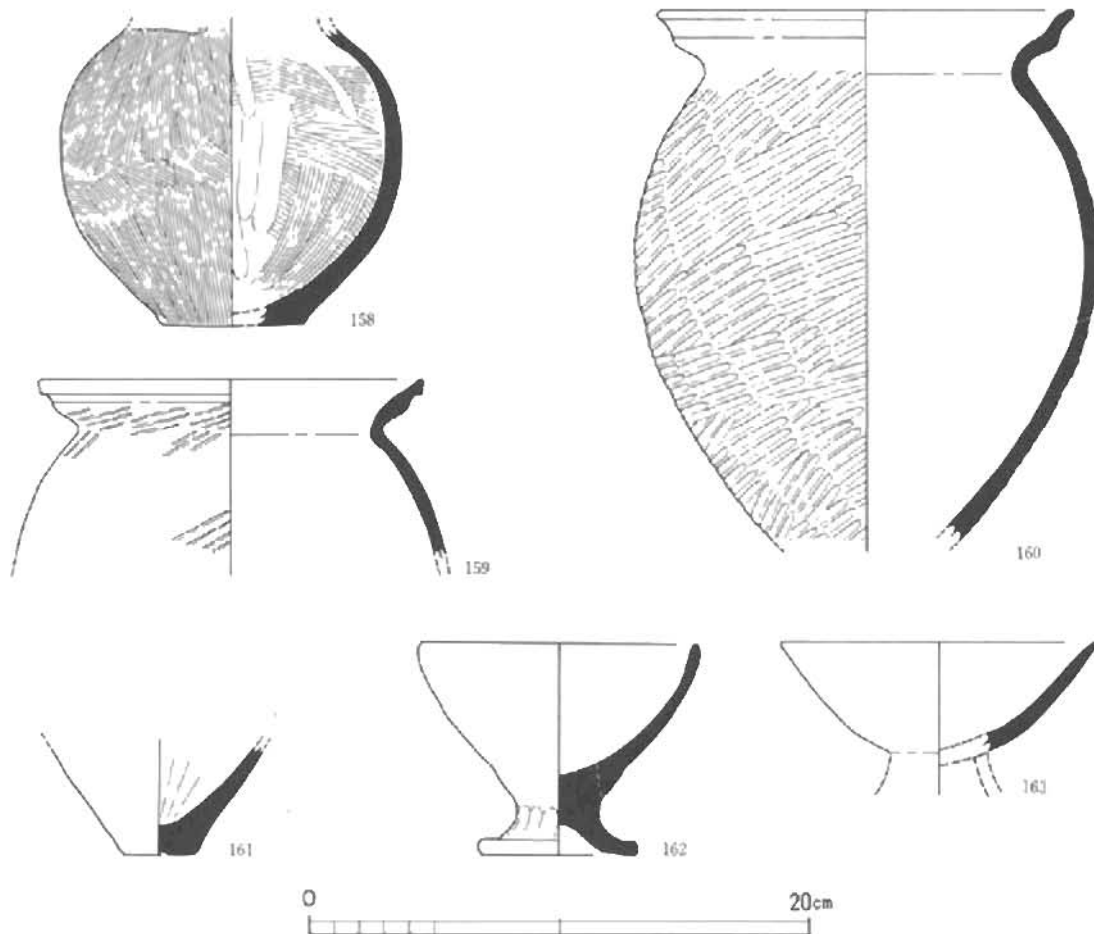
SH11 (図版8・33・34・57)

検出状況 I-1区の南東部、小微高地aの中央やや西寄りで検出された。SH10廃絶ののち、これを拡張したうえ、周壁溝に沿って全周するベッドを付設している。

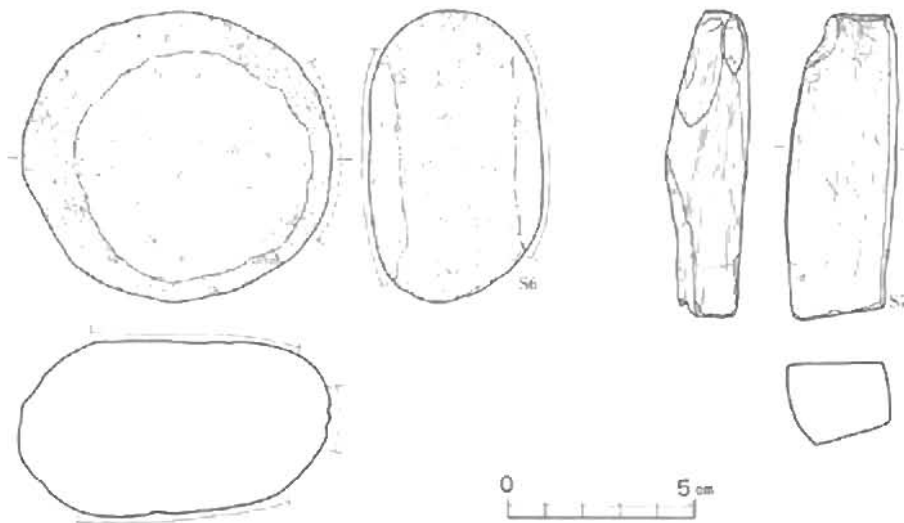


第62図 SH11

- 形状・規模** 平面形は円形であるが、周壁およびベッド内側のラインに直線的になる部分が認められるため、本来は五角形を呈していた可能性もある。直径は9.45mであり、検出面から床面までの深さは40cmを測る。SH10よりも直径で1.1m、面積で11㎡程度拡張している。床面の標高は148.20mであり、床面積は66㎡である。
- 埋土** 埋土は茶灰色あるいは暗灰色シルト混じり極細砂であり、中央土壌には、炭片を含むシルトが堆積する。
- 屋内施設** ベッド・柱穴・中央土壌が検出された。
- ベッド** 周壁に沿って全周するベッドがある。幅は1.0~1.3mで、床面との比高差は20cmである。ベッドの面積は30㎡であり、床面積に対する占有率は46%である。
- 柱穴** 主柱穴は6穴が確認された。P1は、掘り方の直径35cm、床面からの深さは35cmである。P2は、中世の井戸SE04の崩壊に伴って消滅したため、詳細は不明である。P3は、掘り方の直径30cm、床面からの深さは29cmである。P4は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径は18cm、床面からの深さは18cmである。P5は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径は20cm、床面からの深さは34cmである。P6は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径は14cm、床面からの深さは24cmである。
- 柱穴間の距離は、P1~P2間が2.65m、P2~P3間が2.88m、P3~P4間が2.18m、P4~P1間が3.08mである。



第63図 SH11出土土器



第64図 SH11出土石器

中央土塊 床面中央のやや南寄りに設けられている。平面は楕円形であり、短径53cm、長径68cmを測る。断面は皿形を呈し、床面からの深さは9cmである。土塊の面積は0.3㎡、対床面積比は0.4%である。埋土には炭片を含む。

粘土塊 本住居跡を特徴付けるものに粘土塊がある。P1とベッドとの間の床面に置かれたひとかたまりのもので、直径30cm、厚さ10cm程度の白色の粘土である。砂粒等の混入物は認められなかった。

出土遺物 埋土中より、壺・甕・鉢・高坏などの土器および石器が出土している。

土器 甕159は、口縁叩き出し手法を用いており、口縁部の形態は、159・160とも強いナデによる上方へのつまみ上げが認められる。

石器 すり石と砥石が各1点出土している。すり石は花崗岩の円礫を利用したもので、一端に敲打痕が認められる。平面は楕円形を呈しており、長径8.3cm、短径7.7cm、厚さ4.7cmを測る。砥石は、凝灰質泥岩を素材とした小型の仕上げ用のものである。4面を使用しており端部は欠損している。残存長は8.2cm、幅2.7cm、厚さ2.2cmを測る。

時期 川除4期である。

第19表 SH11出土土器観察表(1)

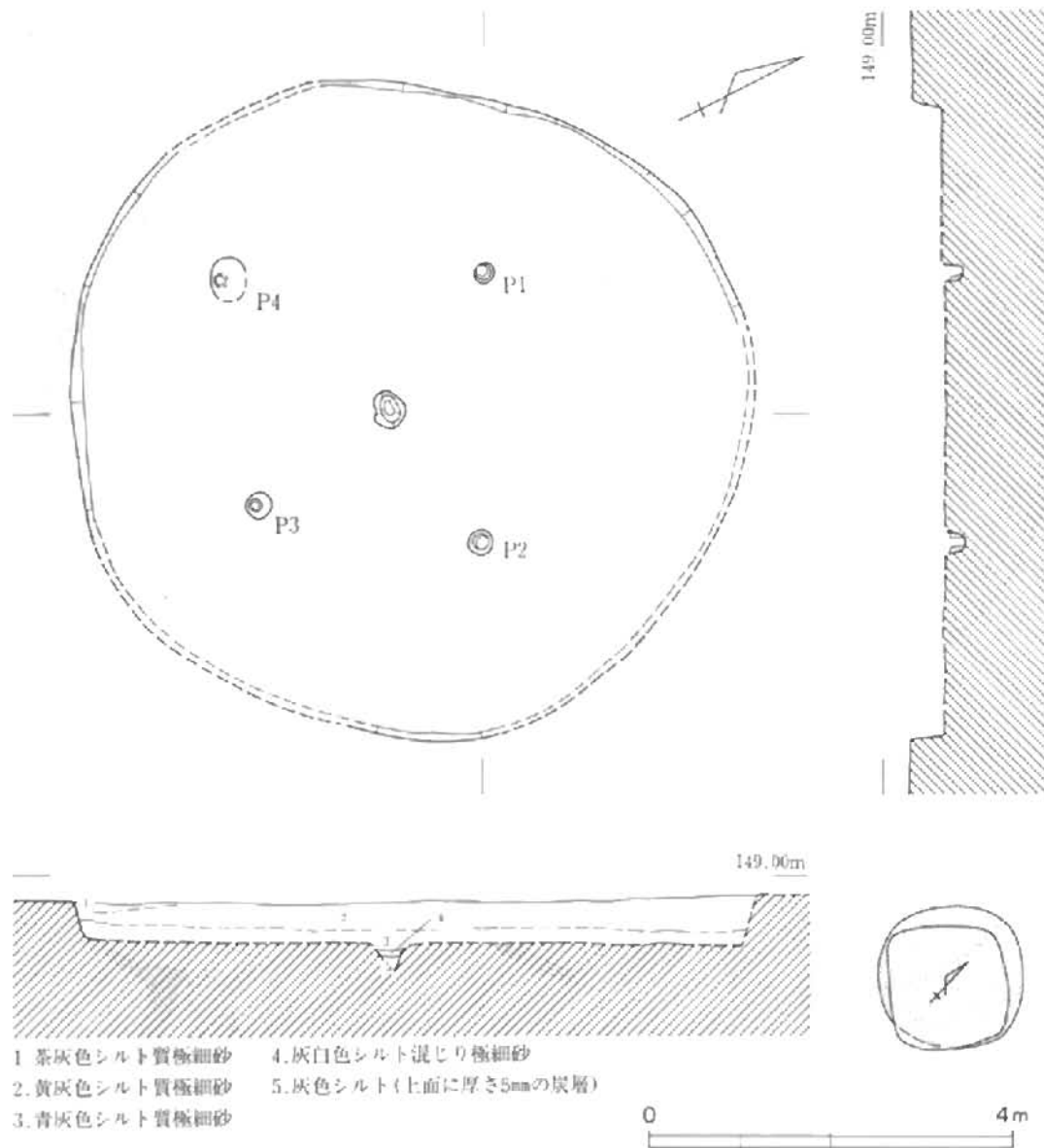
番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
158	壺	口径 残径 (5.6) 器高 残11.5 頸径 体部径 13.6	外面 6条/cmコナナ、のち上段と下段はタテナデ 内面 4条/cmコナナ、のち一部タテナデとムドナデ	外面 灰白 内面 黄灰	体部約1/2	
159	甕	口径 115.4 底径 器高 残7.0 頸径 (12.2) 体部径	外面 体部-頸部3条/cmタテナデ 内面 調整のための調整不明	外面 濃い黄橙 内面 黄	口縁部-体部約1/4	
160	壺	口径 116.3 底径 器高 残20.9 頸径 (12.0) 体部径 118.5	外面 口縁部コナナ、体部2条/cmタテナデ 内面 口縁部コナナ、体部不定方向ナデ	外面 橙 内面 浅黄橙	底部欠 口縁部-体部約1/4	スス付着
161	壺	口径 底径 3.0 器高 残4.2 頸径 体部径	外面 調整のための調整不明 内面 ヘラナデ	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	底部のみ欠 存	

第20表 SH11出土土器観察表(2)

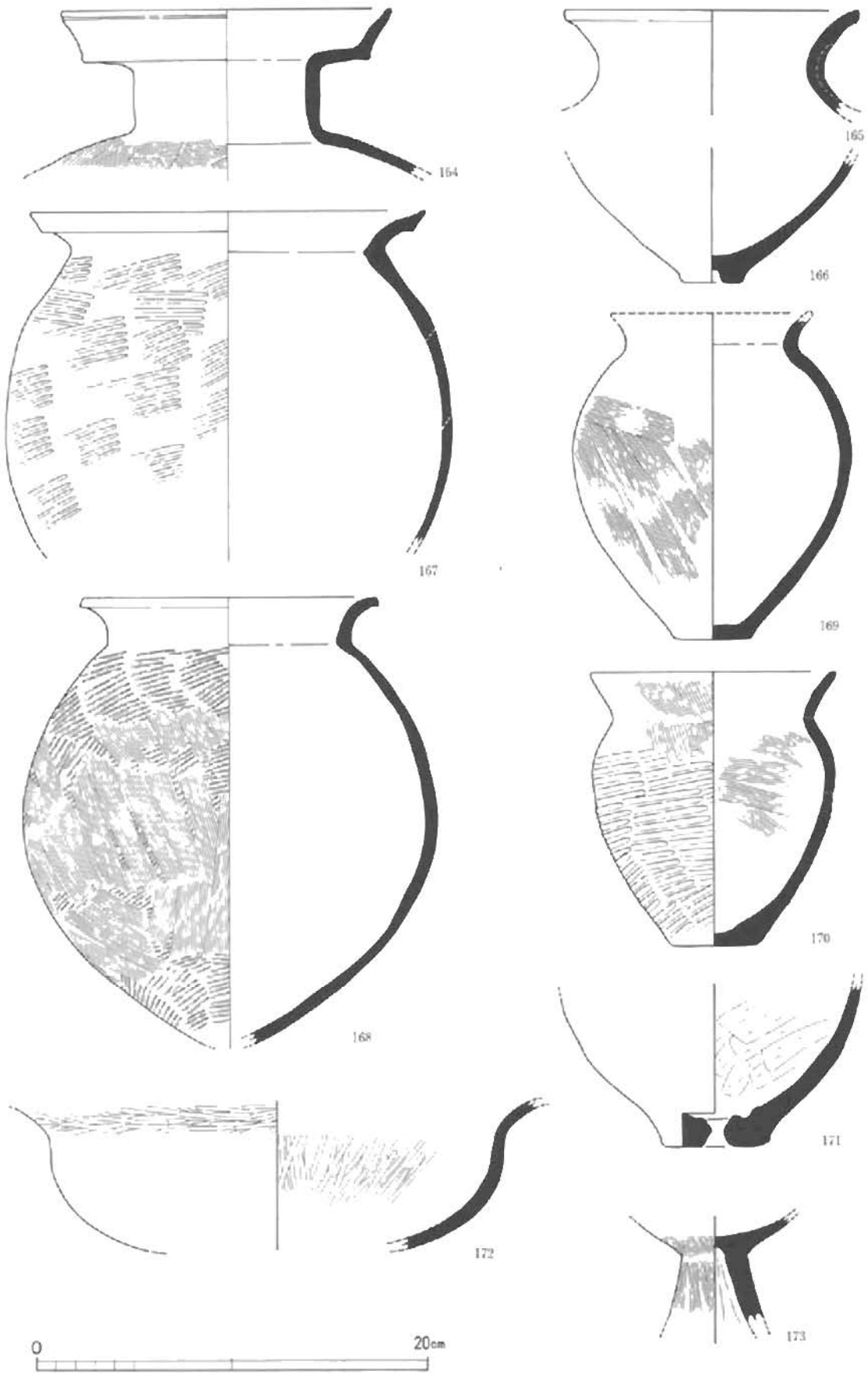
番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
162	鉢	口径 (11.0) 底径 (6.4) 器高 7.4 胎厚 体部径	外面 体部不定方向ナデ、脚部ユビオヤエ 内面 体部不定方向ナデ	外面：にじい 黄褐色 内面：*	約1/2	
163	高杯	口径 (12.6) 底径 器高 7.3 胎厚 体部径	外面： 内面： 調整のため調整ナシ	外面：橙 内面：橙	局部的1/2	

SH12 (図版9・34・35)

検出状況 1-1区の南東部、小磯高地aの中央やや西寄りで検出された。のちに構築されたSH13に切られており、周壁の半分程度が検出されたのみである。

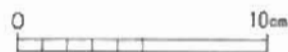
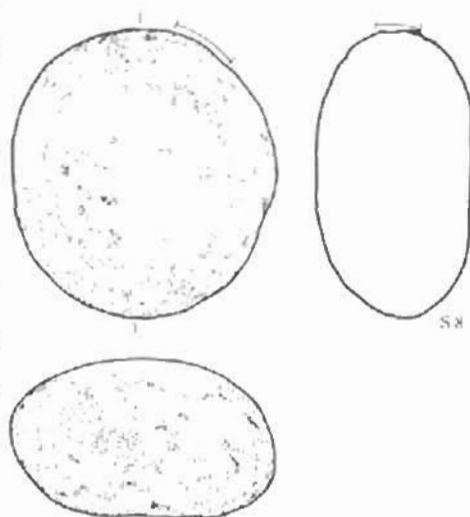


第65図 SH12



第66図 SH12出土土器

- 形状・規模** 平面形は円形である。復元される直径は7.1mを測る。検出面から床面までの深さは50cmで、床面の標高は148.25mである。推定される床面積は約41㎡である。
- 埋土** 黄灰色あるいは青灰色のシルト質極細砂が周壁際の一部で確認された。中央土壌にはシルトの堆積が認められた。
- 屋内施設** 柱穴・中央土壌が検出された。ベッド・周壁溝は確認されなかった。
- 柱穴** 主柱穴は4穴が確認された。これらは中央土壌を中心に配されているため、周壁輪郭から求めた中心点よりはやや南寄りに位置している。P1は、掘り方の直径22cm、柱痕の直径は16cm、床面からの深さは40cmである。P2は、掘り方の直径26cm、柱痕の直径は16cm、床面からの深さは40cmである。P3は、掘り方の直径29cm、柱痕の直径は12cm、床面からの深さは52cmである。P4は、掘り方の直径40cm、柱痕の直径は16cm、床面からの深さは33cmである。
- 柱穴間の距離は、P1～P2間が2.96m、P2～P3間が2.52m、P3～P4間が2.50m、P4～P1間が2.90mである。
- 中央土壌** 床面中央やや南寄りに設けられた円形の土壌であり、その直径は約40cmである。床面から墳底までの深さは42cmである。中央土壌の面積は0.11㎡であり、対床面積比は0.2%である。埋土は3層に分かれ、上層から順に灰白色シルト混じり極細砂、厚さ5mmの炭層、灰色シルトとなっている。
- 出土遺物** 土器・石器が埋土中より出土している。
- 土器** 壺・甕・鉢・高坏の各器種が出土している。
- 壺** 壺には二重口縁壺がある。164は1次口縁の受部が直角に近く外反し、2次口縁に隠れるものである。口縁端部外面には1条の凹線が巡っている。頸部は比較的長く直立している。
- 甕** 甕はV様式系のもので、平底のものと同底に近いものの二種があり、体部内面の調整はハケ仕上げのもの、ナデ仕上げのもの、板状工具でなでるもの、ヘラケズリを行ったままのものなどがある。167は、口縁部を斜め外上方へつまみ上げる。
- 鉢** 鉢には大型のものが認められる。
- 石器** 叩石が1点埋土より出土している。花崗岩の円礫を素材としたもので、一端に敲打痕が認められる。平面は楕円形を呈しており、長径は11.5cm、短径は10.7cm、厚さ6.22cmを測る。
- 時期** 川除6期である。



第67図 SH12出土石器

第21表 SH12出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調査	色調	残存率	備考
164	壺	口径 16.6 底径 9.5 器高 48.0 頸径 9.5 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、頸部タテナデ、体部細かいナデ 内面：口縁部ヨコナデ、以下は磨滅のため調査不明	外面：淡黄緑 内面：淡黄緑	口縁部約1/8 頸部定存	
165	壺	口径 14.8 底径 器高 44.2 頸径 体部径	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	外面：淡黄緑 内面：淡黄緑	口縁部約1/2	
166	壺	口径 底径 13.2 器高 46.1 頸径 体部径	外面 ナデ 内面：縦へらノケズ	外面 淡黄 内面 淡黄	底部のみ2/3	
167	壺	口径 20.2 底径 器高 46.7 頸径 16.0 体部径 22.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部3集/cmタテキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部縦状土肌によるヨコナデ	外面：淡黄緑 内面：淡黄緑	口縁部、体部約1/3	下位スズ付着
168	壺	口径 15.0 底径 器高 42.6 頸径 12.4 体部径 21.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部4集/cmタテキ、うち底部を残して7集/cmタテキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面 緑 内面 濃い緑	口縁部-体部約1/2 底部欠	
169	壺	口径 底径 14.0 器高 46.3 頸径 18.8 体部径 14.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部12集/cm下→上タテキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部1ヤ取及土肌によるナデ	外面：淡黄緑 内面：淡黄緑	口縁部底欠 体部1/5	
170	壺	口径 12.4 底径 11.6 器高 43.9 頸径 10.2 体部径 12.4	外面 体部2集/cmタテキ、うち上平8集/cmタテキ、口縁部8集/cmタテキ 内面 体部10集/cmナデ	外面：明褐色 内面：濃い緑	口縁部1/3 底部1/2 体部は定存	
171	壺	口径 底径 15.4 器高 48.0 頸径 体部径	外面 ナデ 内面 ド・ノケズ	外面 灰白 内面 灰白	体部1平- 底部のみ	
172	高杯	口径 底径 器高 47.6 頸径 体部径	外面 口縁部へ環部間横へら、タテキ 内面 縦へら、タテキ、口縁部へら(タテキ)方向不明	外面：淡緑 内面：淡緑	環部約1/8	
173	高杯	口径 底径 器高 45.7 頸径 体部径	外面 6集、タテキ 内面 脚部残り目	外面：淡緑 内面 淡緑	環一部 脚部3/4	

SH13 (図版9・35・36)

検出状況

I-1区の南東部の小高い地aの中央やや西寄りで見出された。ほぼ同位置の円形住居跡SH12を切り、複雑に切り合うSH08~11を切る。また、弥生時代の溝SD18や木棺墓SX03に切られている。

形状・規模

平面形は隅四方形である。北西の辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.00m、5.20m、5.10m、4.90mとなり、11は均一である。検出面から床面までの深さは54cm、床面の標高は148.20mである。復元される床面積は29.7㎡である。

埋土

黄灰色ないしは暗灰色シルト質極細砂などの細粒の堆積物が認められた。中央土壌、土壌1ともシルト質極細砂が堆積している。

屋内施設

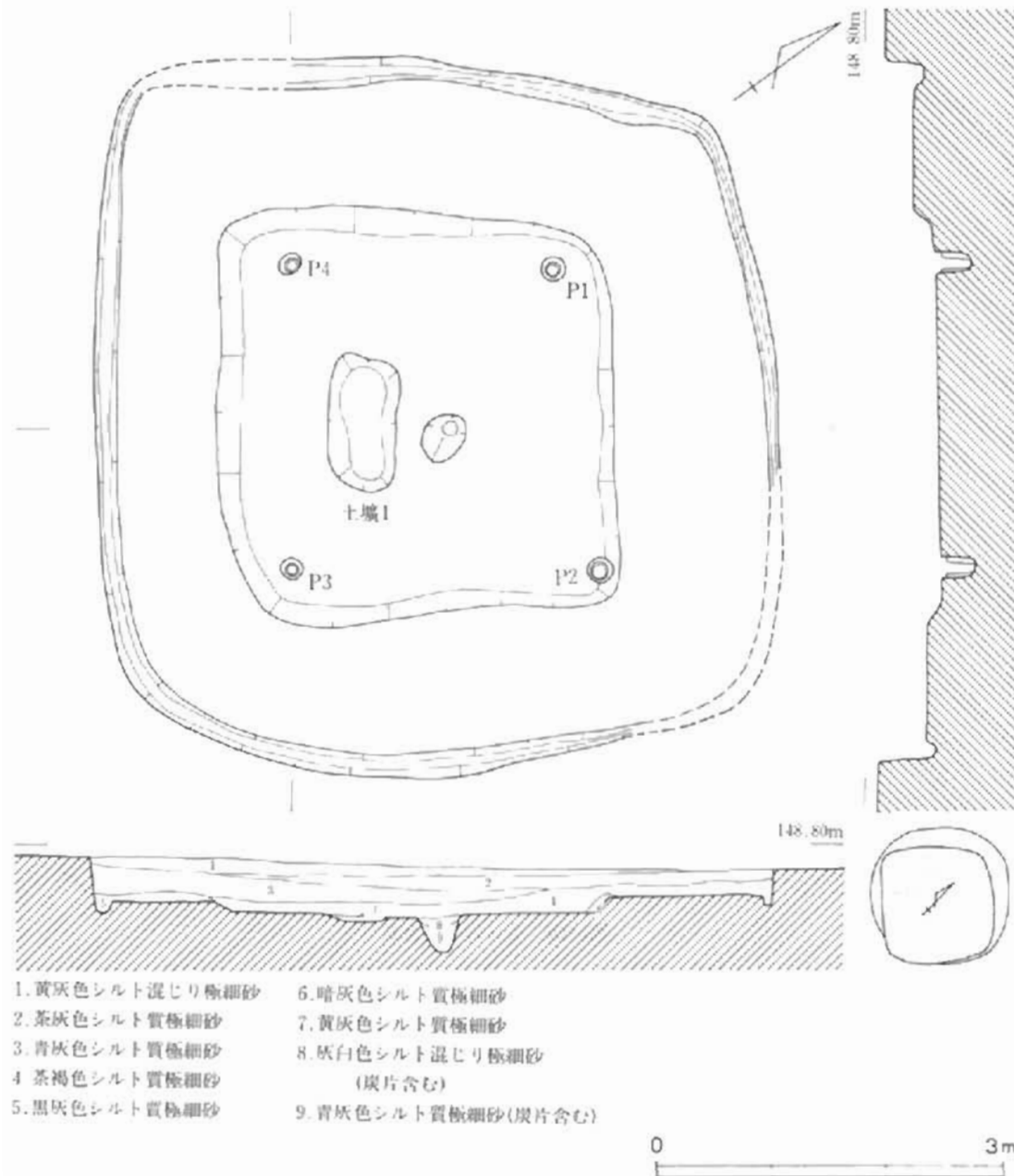
周壁溝・ベッド・柱穴・中央土壌・その横に近接して設けられた(土壌1)が見出された。なお、中央土壌と土壌1はセット関係にあるものと思われ、床面から求められた中心点はこの両者の中間に位置している。

周壁溝

周壁に沿って全周し、床面での幅10~15cm、底部での幅3~10cm、床面から底部までの深さは10cmである。

ベッド

周壁溝に沿って全周する幅85~130cmのベッドが見出された。床面との比高差は10cmである。復元されるベッドの面積は約18.0㎡であり、これの対床面積比は61%である。ベッドは盛土ではなく、地山の削り出しによって設置されている。

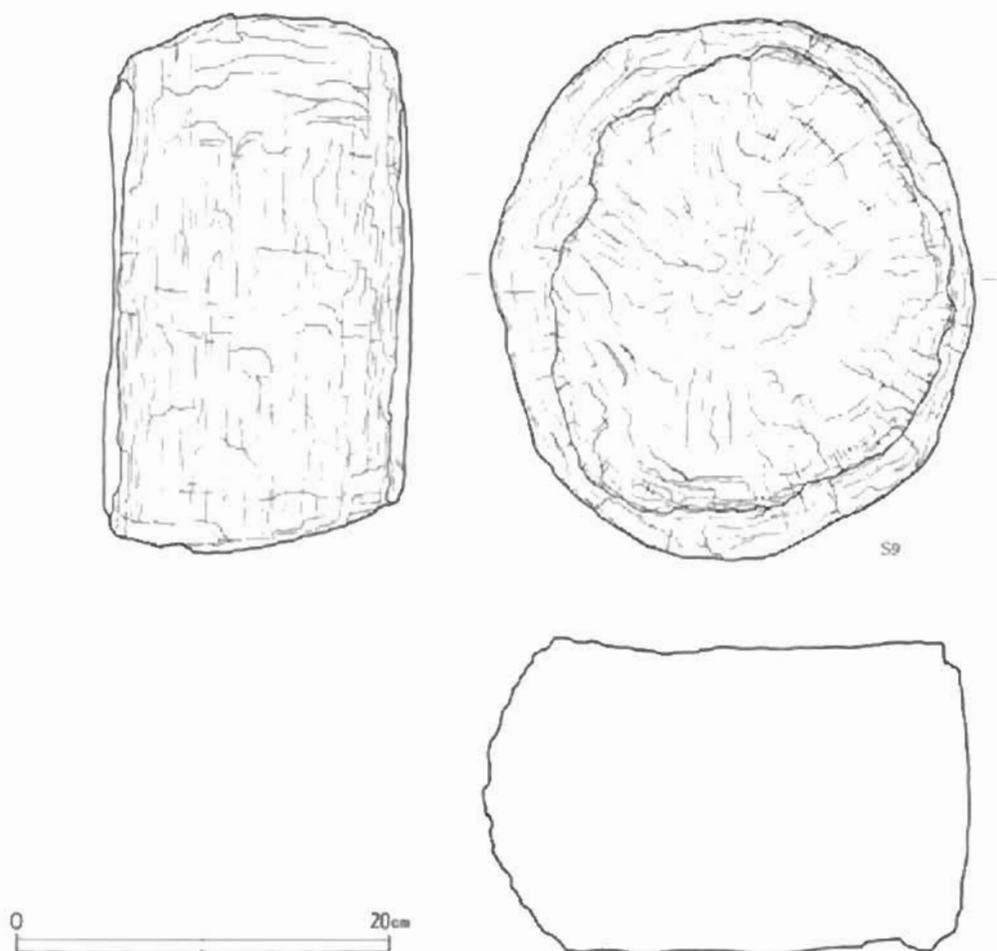


第68図 SH13

柱穴 主柱穴は4穴が確認された。いずれもベッド内側のラインの屈曲部あるいはそれに近い場所に位置している。P1は、掘り方の直径20cm、柱痕の直径は10cm、床面からの深さは41cmである。P2は、掘り方の直径22cm、柱痕の直径は12cm、床面からの深さは36cmである。P3は、掘り方の直径19cm、柱痕の直径は11cm、床面からの深さは30cmである。P4は、掘り方の直径18cm、柱痕の直径は9cm、床面からの深さは31cmである。

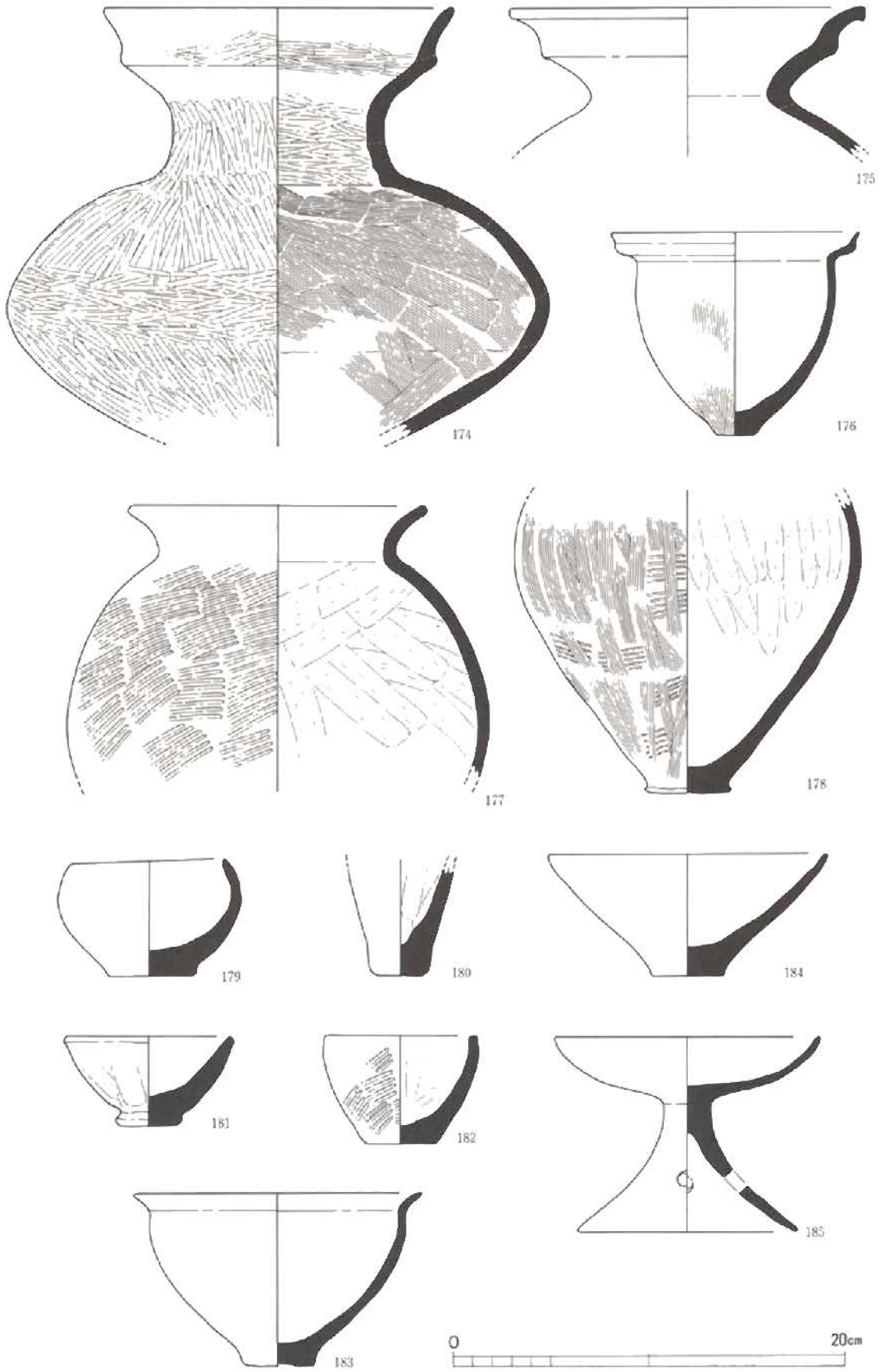
柱穴間の距離は、P1～P2間が2.60m、P2～P3間が2.70m、P3～P4間が2.60m、P4～P1間が2.30mである。

中央土壇 床面中央やや北東寄りに設けられた円形の土壇であり、その直径は40cmである。床面から壇底までの深さは34cmである。中央土壇の面積は 0.18m^2 であり、対床面積比は0.6%である。埋土には炭片を含んでいる。

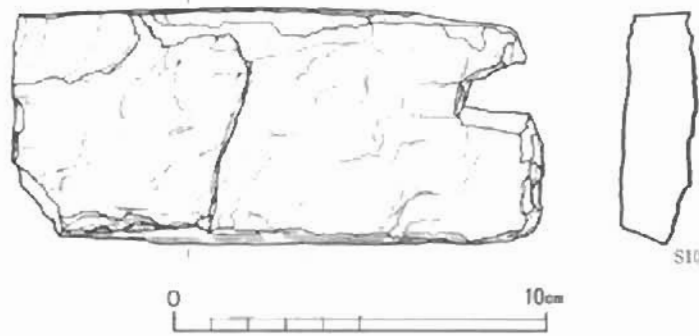


第69図 SH13出土台石

- 土壇1** 中央土壇の西隣に主軸に平行して長方形の浅い土壇が設けられている。規模は、長さ118cm、幅60cm、深さ8cmを測る。この土壇1の埋土には炭片や焼土は含まれず、土壇壁も焼土化していなかった。土壇1と中央土壇の組み合わせは当地方から播磨、吉備地方にかけてしばしば見受けられるものである。
- 台石** 当遺跡の焼失住居跡には、ほぼ例外なく作業台と思われる台石が1点認められるが、焼失していない本住居跡にも確認された。北西辺の周壁際のベッド上面で検出されたもので、長径28.5cm、短径25.8cm、高さ16.4cmの珪化木を利用している。大きな加工痕は認められない。
- 出土遺物** 土器、石器の未製品が出土している。176・179は床面直上の出土であり、他は埋土中からのものである。
- 土器** 壺・甕・鉢・高坏の各器種が出土している。壺には二重口縁壺があり、1次口縁は外反し、2次口縁も外反するタイプのものである。甕はV様式系のもの、鉢には小型・中型の二種がある。
- 石器** 石庖丁の未製品と考えられるものが1点出土している。石材は泥岩で、長さ14.3cm、幅6.2cm、厚さ2.0cmの長方形の板状を呈している。両側面には擦痕が認められる。
- 時期** 川除5期である。



第70図 SH13出土土器



第71図 SH13出土石器

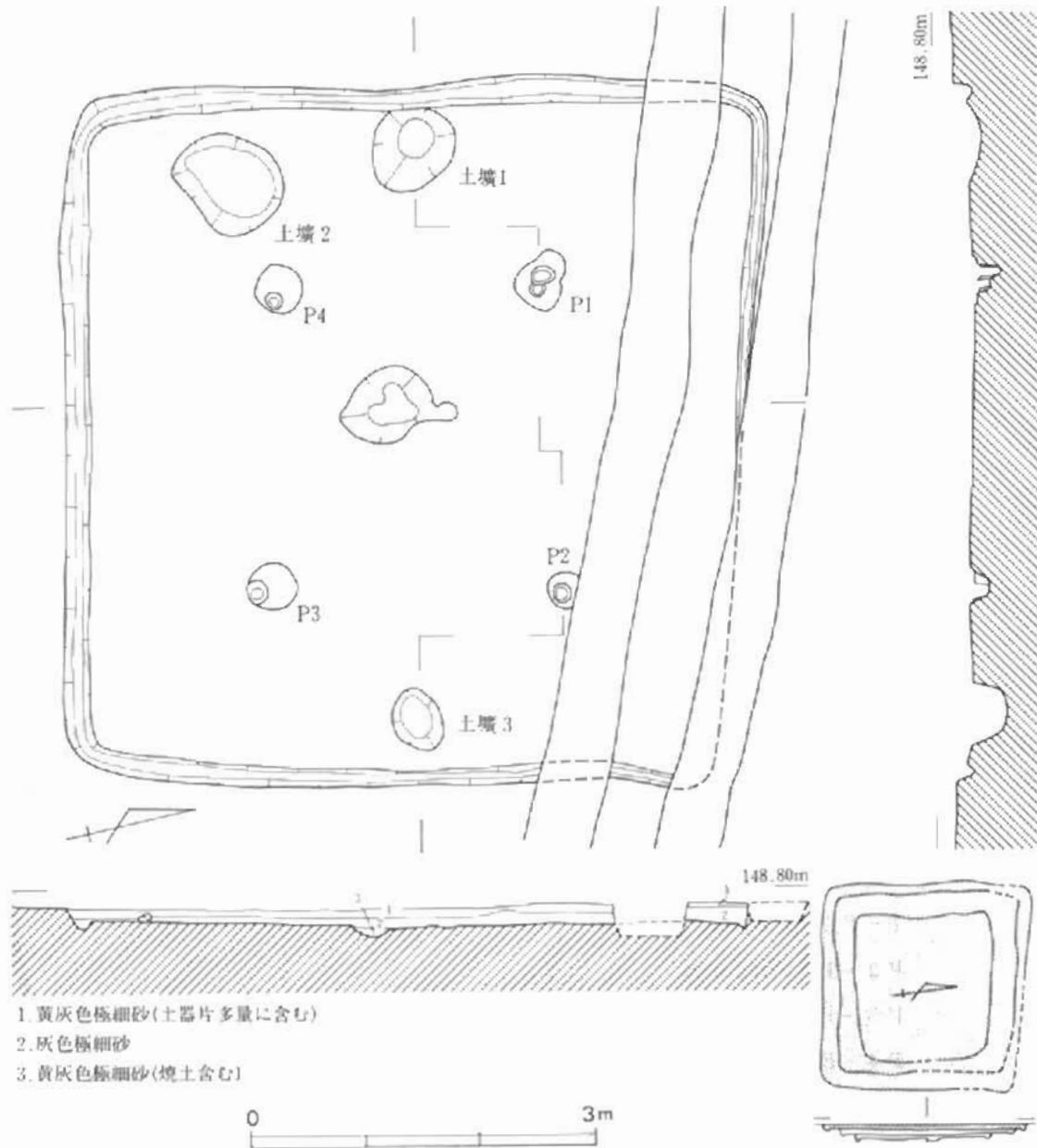
第22表 SH13出土石器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
174	凸	口径 17.8 底径 17.4 器高 21.4 胴径 19.8 体部径 27.8	外面：口縁部マコナテ、胴部-体部上段部へウレギキ、体部下段部へウレギキ、のり体部中央部へウレギキ 内面：口縁部-胴部へウレギキ、体部2部/cmハキ、粘上結痕	外面：橙 内面：こぶい、黄橙	体部1/4 口縁部のみ	
175	凸	口径 17.8 底径 17.5 器高 21.5 胴径 19.2 体部径 27.8	外面：口縁部マコナテ、体部へウレギキが、粘上結痕 内面：削滅のための調整不明	外面：灰白 内面：浅黄橙	口縁部のみ	
176	凸	口径 12.5 底径 2.9 器高 19.2 胴径 19.9 体部径 10.2	外面：口縁部マコナテ、2部/cmマコナテ 内面：口縁部マコナテ、削滅のための調整不明	外面：灰白 内面：灰白	約1/5	
177	凸	口径 14.8 底径 13.8 器高 21.8 胴径 12.2 体部径 21.6	外面：口縁部マコナテ、体部3部/cmマコナテ 内面：口縁部マコナテ、体部へウレギキ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	約1/4	
178	凹	口径 14.4 底径 14.9 器高 17.8 体部径 17.8	外面：体部3部/cmマコナテ、のり中1cmの縦のいアタリ 内面：体部1部/cmマコナテ、削滅のための調整不明、マコナテ	外面：明褐色 内面：明褐色	体部-底部 約1/2	
179	凹	口径 7.7 底径 4.6 器高 6.9 胴径 6.9 体部径 6.9	外面：削滅のための調整不明 内面：削滅のための調整不明	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	ほぼ完全	
180	凹	口径 2.1 底径 5.6 器高 5.6 胴径 5.6 体部径 5.6	外面：ナテ 内面：削滅による強いアタリ	外面：浅黄橙 内面：黒褐	口縁部のみ 体部約1/4 底部完全	
181	凹	口径 18.1 底径 3.9 器高 24.6 胴径 24.6 体部径 24.6	外面：体部1部/cmマコナテ 内面：ナテ	外面：灰白 内面：灰白	体部約1/3 底部完全	
182	凹	口径 7.8 底径 5.5 器高 13.5 胴径 13.5 体部径 13.5	外面：2部/cmマコナテ 内面：削滅へウレギキ	外面：灰白 内面：灰白	約1/2	
183	凹	口径 14.6 底径 8.8 器高 13.1 胴径 13.1 体部径 13.1	外面：削滅のための調整不明 内面：削滅のための調整不明	外面：浅黄橙 内面：こぶい、橙	口縁部のみ 体部3/4 底部完全	
184	凹	口径 14.2 底径 6.2 器高 3.6 胴径 3.6 体部径 3.6	外面：ナテ 内面：ナテ	外面：橙 内面：橙	体部1/2 底部完全	
185	凹	口径 13.6 底径 9.9 器高 2.4 胴径 2.4 体部径 3.4	外面：口縁部マコナテ、胴部へウレギキ、1孔 内面：口縁部マコナテ	外面：橙 内面：橙	約1/2	

SH14 (図版10・36・37)

検出状況

I-1区のはば中央部に存在している住居跡である。本住居跡の東側部分は弥生時代の住居跡である、SH16・17を切って造られている。北側については、現代の水田の水路で削平されており、検出面のレベルでの輪郭は検出することができなかったが、床面での輪



第72図 SH14

郭は確認されている。

形状・規模 平面形は基本的に方形を呈している。規模は南北辺が約5.6m、東西辺が約5.8～5.9mである。

検出面から、床面までの深さは約15cmで、床面の標高は148.50mである。検出した床面積は、溝によって切られているため正確な数値ではないが、推定でおよそ31.51㎡と考えられる。

埋土 2層に分層されている。上層に土器片を比較的多く含む黄灰色極細砂、下層に灰色極細砂が堆積し、中央の土壇内には焼土を含む黄灰色極細砂が堆積している。

屋内施設 柱穴・周壁溝・土壇を検出した。

周壁溝 住居跡を全周している。床面での幅は5～15cm、下端の幅は4cmを計り、このレベルからの深さは5cmである。検出面からの深さは約21cmである。

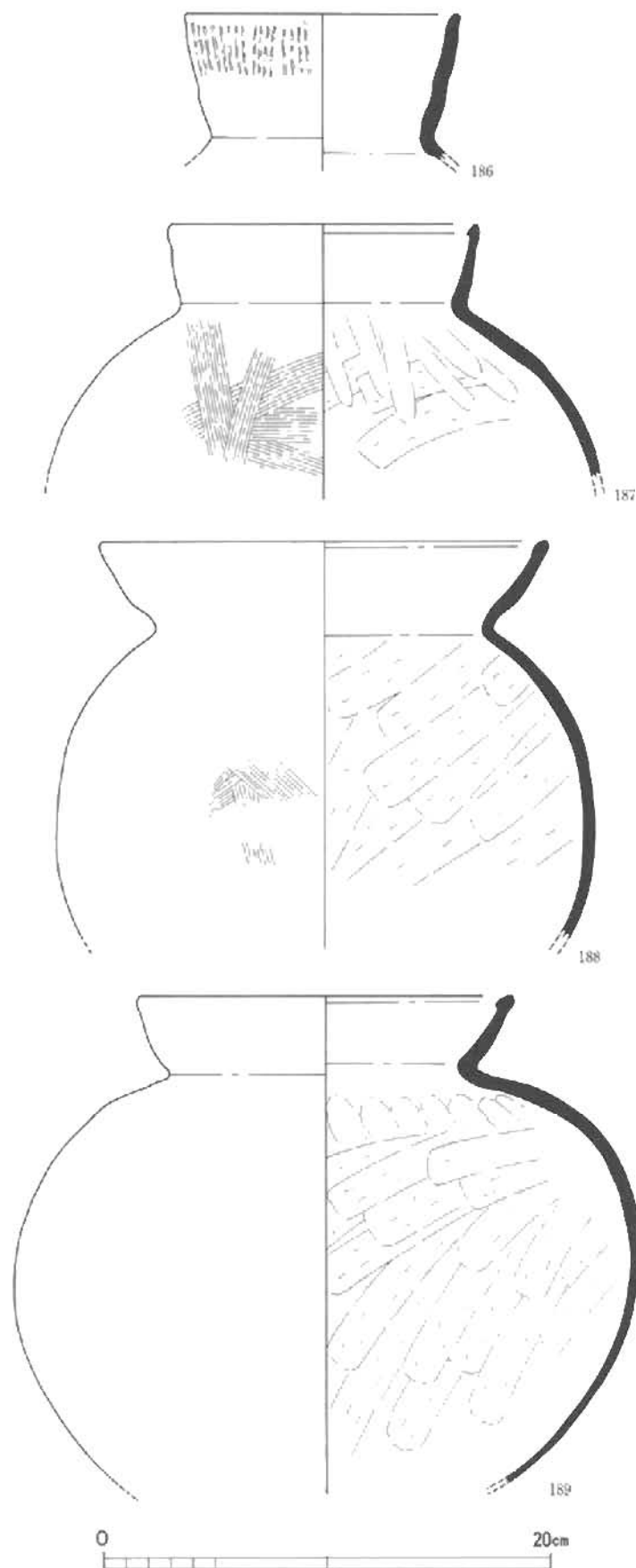
柱穴 柱穴は合計4穴検出している。柱穴はそれぞれの壁から約1.7～1.8m内側に入った場所に設定されている。

P 1は掘り方径28cm、柱痕径14cmを計り、床面からの深さは14cmである。P 2は掘り方径31cm、柱痕径14cmを計り、床面からの深さは15cmである。P 3は掘り方径44cm、柱痕径17cmを計り、床面からの深さは27cmである。P 4は掘り方径41cm、柱痕径16cmを計り、床面からの深さは15cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.74m、P 2～P 3間が2.65m、P 3～P 4間が2.53m、P 4～P 1間が2.29mである。

中央土壌 住居跡の中央やや西よりで中央土壌を検出している。位置は各柱穴の対角線の交差したところに存在している。

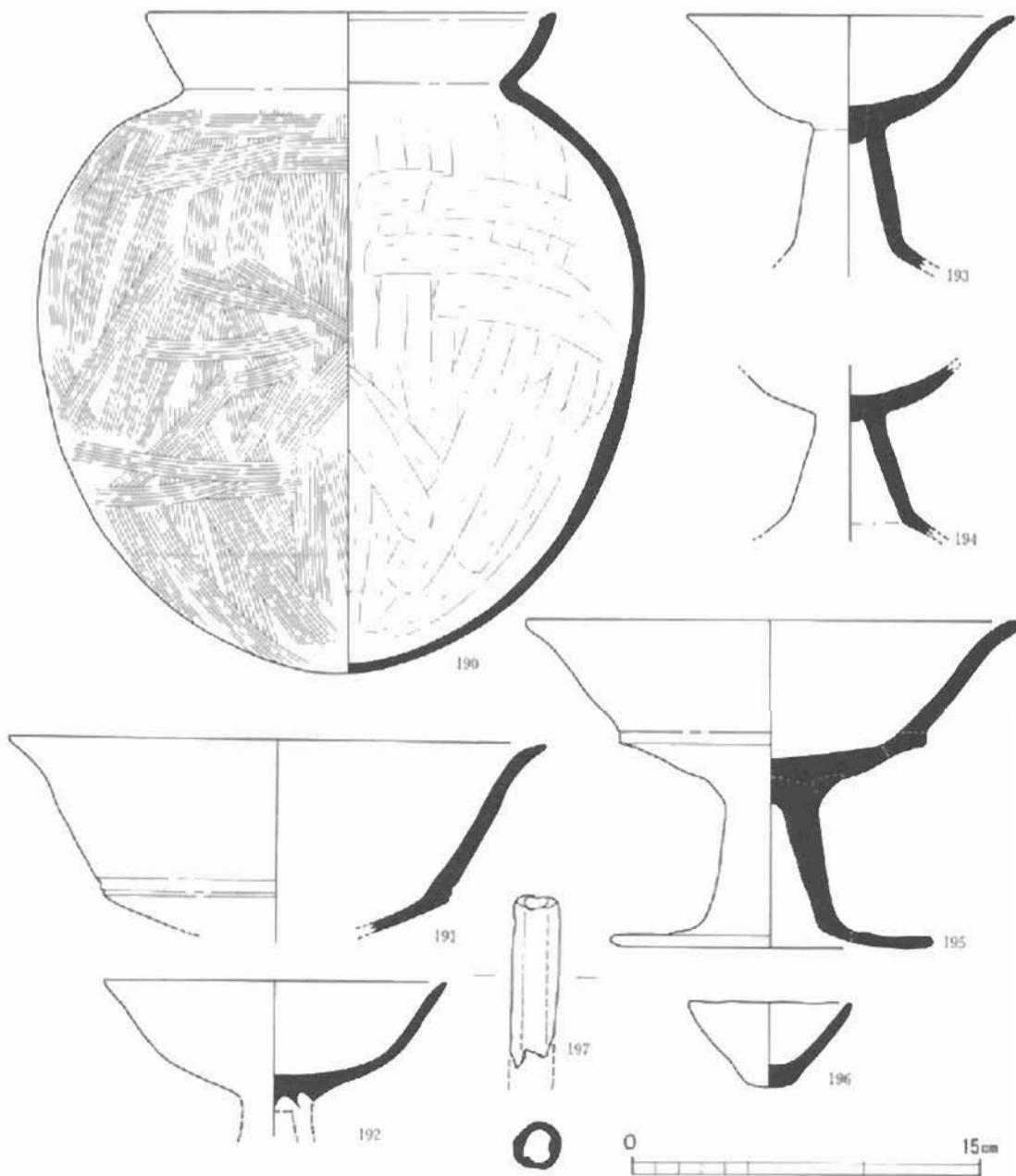
規模は長軸方向が0.76m、短軸方向が0.58mを測り平面形の形状は不整形を呈しているが、先端部をもつ楕円形に小さな突起部をもっている形状である。検出面からの深さ



第73図 SH14出土土器(1)

は0.14mを測る。埋土は前記したとおり焼土を含む黄灰色極細砂1層が堆積している。炭の堆積は見られなかった。

- 土壇 住居跡内には中央土壇以外にも、3ヶ所で土壇を検出している。
- 土壇1 住居跡の西壁に接するところの、ほぼ中央部で検出された。平面形は楕円ぎみの円形を呈している。規模は長軸方向に75cm、短軸方向に70cmを測る。検出面からの深さは12cmを測る。
- 土壇2 土壇1から南へ約1.5m離れて土壇2が検出された。土壇2は住居跡の壁面より約40cm内側に入ったところに位置している。平面形は不整形を呈している。規模は長軸方向に96cm、短軸方向に77cmを測る。検出面からの深さは35cmを測る。
- 土壇3 東壁のほぼ中央部で検出された。平面形は楕円形の部類に属すると思われる。規模は長



第74図 SH14出土土器(2)

第3節 I区の調査

軸方向に56cm、短軸方向に44cmを測り、検出面からの深さは29cmを測る。

出土遺物 土器のみが出土している。本住居跡の下層にはSH15が存在している。そのため両者の遺物が混じり合った状態で取り上げられている可能性がある。確実にSH14にともなう遺物であると指摘できるものは、西壁付近の土壌1の周辺で出土した一群である。SH14はSH15を拡張したかたちで造られている。上記した一群の土器はその拡張部分についてのみ原位置を保って出土している。

壺・甕・高坏・鉢・土錘の各器種が出土しており、主な器種は甕と高坏である。このうち190の甕は土壌1内より出土している。他の土器も土壌1の周辺より出土しているものが多い。

壺 1点を図化している。口縁部のみの出土である。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、外面は縦方向のタタキの後に横方向のナデを施している。外面にはタタキ痕がわずかに残っている。

甕 4点を図化している。いずれも口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部を内側に肥厚させている。体部内面は下方向から上に向かってのヘラ削り、外面はハケで仕上げている。

高坏 5点を図化している。坏部が深く、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部を外反させるものと、坏部が碗形のものが出土している。

鉢 鉢は小型のものである。

土錘 1点のみの出土である。完形ではなく上下ともに欠失している。直径2.10cm、長さは7.50cmを測る。穿孔の形状は円形ではなく、不整形を呈する。

時期 川除7期である。

第23表 SH14出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
186	壺	口径 (12.2) 底径 器高 残6.5 胴径 (10.0) 体部径	外面 3変/cm縦タタキ、のち口縁部マコナデ 内面 ココナデ	外面 淡黄橙 内面 淡黄橙	口縁部1/5	
187	甕	口径 (13.8) 底径 器高 残10.8 胴径 (12.8) 体部径	外面 体部6変/cmココナデ、のちタテハケ 内面 強い横方向ヘラケズリ、のちト→上の強いユビナデ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部+体部約1/8	
188	甕	口径 (19.8) 底径 器高 残17.7 胴径 (15.1) 体部径 (21.2)	外面 体部6変/cm右ナリハケ、のち左ナリハケ 内面 体部右ナリヘラケズリ	外面 褐色 内面 灰白	口縁部+体部約1/3	スズ付着
189	甕	口径 16.8 底径 器高 残21.5 胴径 13.6 体部径 22.8	外面 体部細かいハケ一部残 内面 体部右ナリヘラケズリ、体部上位はユビナデ	外面 灰白 内面 灰白	約1/2 底部欠	スズ付着
190	甕	口径 17.4 底径 器高 28.3 胴径 14.5 体部径 26.2	外面 体部6変/cmタテハケ、のちココナデ 内面 体部細ヘラケズリ、のち横ヘラケズリ、一部ユビナデ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部+体部約1/2	スズ付着
191	高坏	口径 (23.0) 底径 器高 残8.3 胴径 坏部高	外面 内面 磨滅のための調整不明	外面 淡橙 内面 淡橙	口縁部+坏部約1/4	
192	高坏	口径 14.8 底径 器高 残5.4 胴径 坏部高	外面 内面 磨滅のための調整不明	外面 橙 内面 橙	坏部約1/2	

第24表 SH14出土土器観察表(2)

番号	器種	寸法 (cm)	調査	色調	残存率	備考
193	高坏	口径 : (13.9) 口径 器高 : 残10.9 脚径径 3.1 坏部高 : 4.8	外面 : 磨滅のための調整不明 内面 : 16. 脚接合部円板欠損	外面 : 淡黄緑 内面 : 淡黄緑	坏部約1/3 脚柱部ほぼ 完存	
194	高坏	口径 : 口径 器高 : 残7.3 脚径径 3.0 坏部高 :	外面 : 磨滅のための調整不明 内面 :	外面 : 黄 内面 : ほぼ 黄緑	脚柱部約1/3 坏部約1/4	
195	高坏	口径 : (21.1) 口径 器高 : 14.0 脚径径 (4.1) 坏部高 : 6.8	外面 : 脚部下位ヨコナテ。他は磨滅のための調整不明 内面 : 横方向のヘラナテ	外面 : 淡黄緑 内面 : 淡黄緑	約1/2	
196	鉢	口径 : 7.0 口径 器高 : 3.7 脚径 体部径	外面 : ナテ 内面 : ナテ	外面 : 淡黄 内面 : ほぼ 黄	ほぼ完存	
197	土鉢	口径 : 2.1 口径 器高 : 残7.5 脚径 体部径 :	外面 : 内面 :	外面 : 灰白 内面 : 灰白	1/3以下	

SH15 (図版11・38)

検出状況 1-1区に存在している。SH14の調査終了後に検出された。SH14内におさまるように造られており、SH14はSH15を拡張した住居跡と考えられる。

本住居跡も北側と東側の壁のプランは現代の水田の溝によって擾乱をうけており、一部については検出が不可能であった。

形状・規模 平面形は擾乱のため全容が明らかではないが基本的には方形を呈していると思われる。各辺の長さは、東辺が推定で4.60m、南辺が5.00m、西辺が5.25m、北辺が推定で5.00mとなっている。

さらにこの住居跡(SH15)の内側に方形を呈する埋土のプランが確認され、調査の結果周壁溝が巡っており、さらに古い住居跡が検出された。(SH15古)この住居跡の平面形は、東側がやや隅円状を呈しているが基本的には方形を呈している。規模は、東辺が3.27m、南辺が4.06m、西辺が3.72m、北辺が4.11mとなっている。

検出した床面積はSH15については23.4㎡、SH15(古)については14.3㎡である。

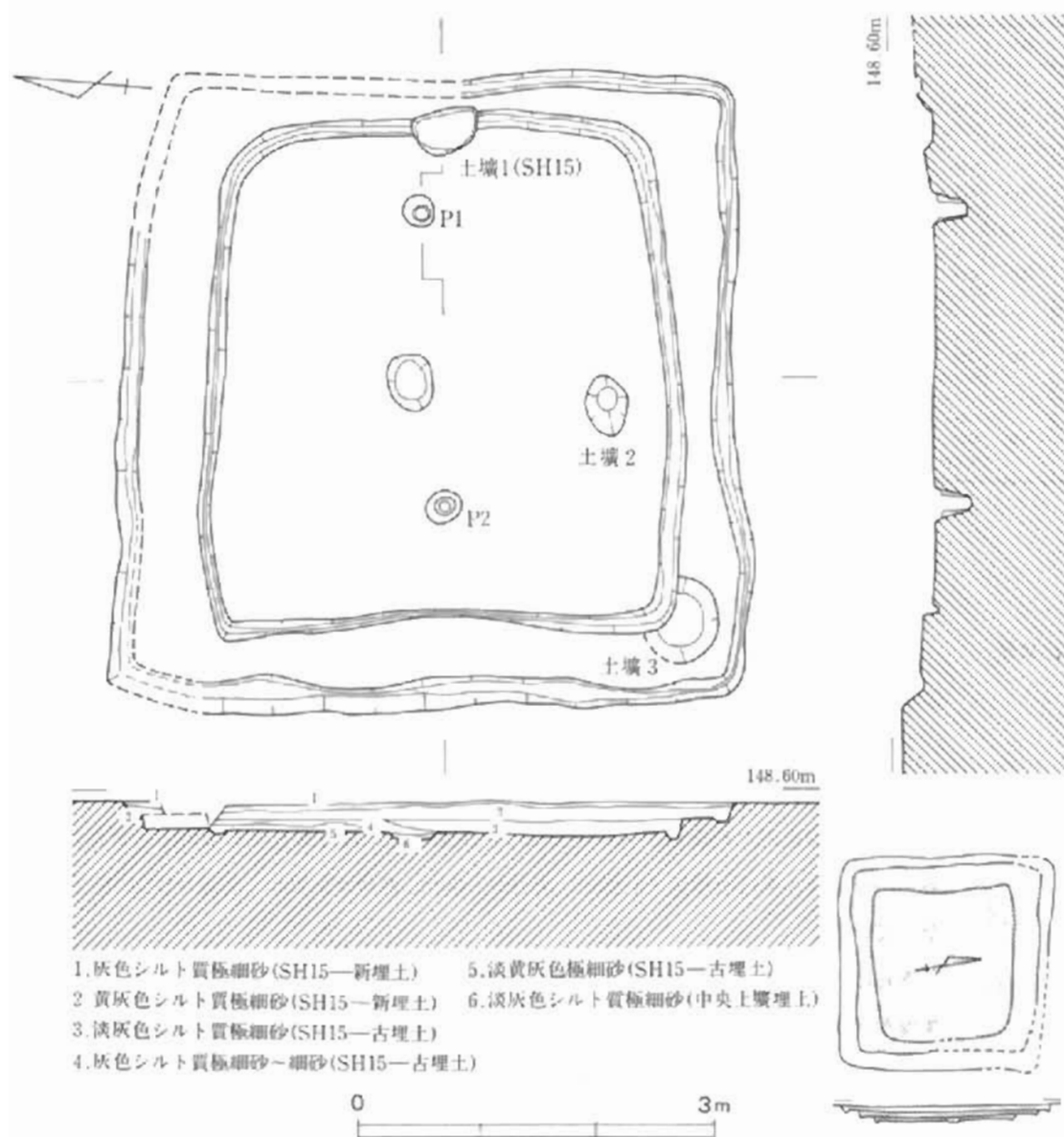
埋土 SH15については2層の堆積がみられ、上層の灰色シルト質極細砂と下層の黄灰色シルト質極細砂の堆積がみられる。

SH15(古)については3層の堆積がみられ、上層に淡灰色極細砂、中層に灰色シルト質極細砂～細砂、下層に淡黄灰色極細砂となっている。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土壇・土壇を検出している。このうち、柱穴は両住居跡で共有しているものと考えられる。

周壁溝 SH15については、床面からの幅10cmを測り、床面からの深さは約3cmで、底部の幅は9cmである。また、検出面からの深さは18cmである。SH15(古)については床面での幅10cmを測り、床面からの深さは約5cmで、底部の幅は6cmである。また、検出面からの深さは17cmである。

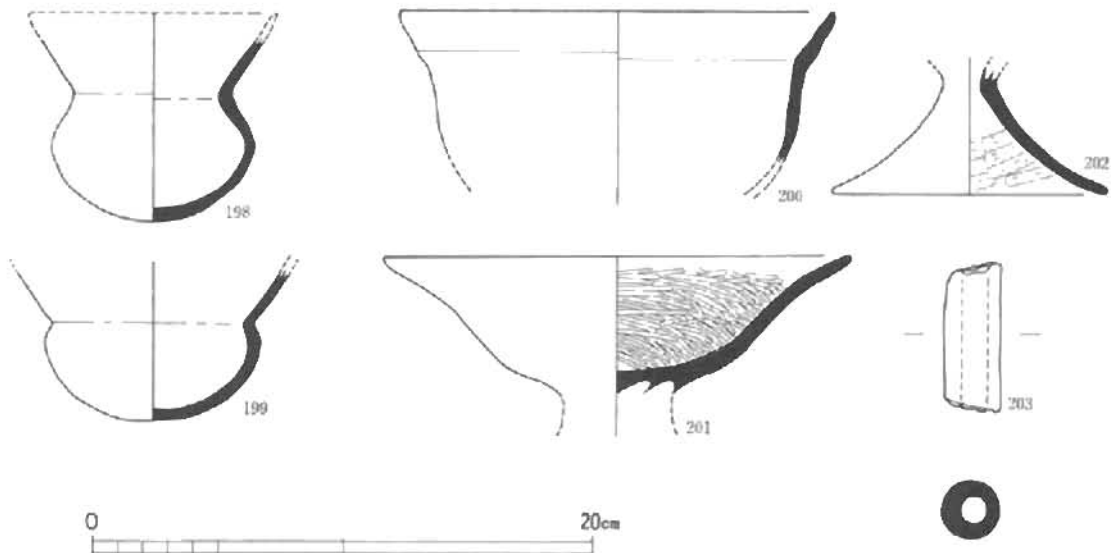
柱穴 2穴検出している。2穴とも住居跡のほぼ中央部に東西のライン上に中央土壇をはさんで存在している。P1は掘り方径26cm、柱径14cmを測り、床面からの深さは26cmである。



第75図 SH15

P2は掘り方径30cm、柱径17cmを測り、床面からの深さは29cmである。両柱穴間の距離は2.44mである。この2穴はSH15(古)の床面で検出している。このためこれらはSH15(古)にともなうものであることは確かである。SH15にともなう柱穴は本来ならば、その床面、つまりSH15(古)のプランを確認したレベルで検出されるはずであったが、床面がSH15(古)の埋土であることから検出は困難であった。SH15(古)の床面にはこの2穴以外に柱穴は検出されておらず、したがってこの2穴はSH15とSH15(古)との両住居跡に共有しているものと考えられる。この両柱穴の位置関係から当住居跡は2本柱構造の住居跡であると考えている。

中央土壇 当住居跡の中央部やや北よりに中央土壇を検出している。2本の柱穴を結んだラインよりは北側にずれている。規模は長軸方向に0.47m、短軸方向に0.37mで床面からの深さは約8cmを測る。面積は0.15㎡である。対床面積比は1%である。埋土中に炭層の堆積はみられず、また焼土も検出されなかった。



第76図 SH15出土土器

土壌1 3つの土壌を検出している。このうち東壁付近で検出した土壌1はSH15(古)の周壁溝を切って掘られているため、SH15にともなう土壌である。平面形は半円形を呈している。規模は長軸方向に55cm、短軸方向に36cmを測る。床面からの深さは約10cmである。

土壌2 共有している可能性のあるもので、規模は長軸方向に51cm、短軸方向に36cmを測る。床面からの深さは約30cmである。

土壌3 SH15の南西隅のコーナー部分で検出された。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸方向に74cm、短軸方向に65cmを測る。床面からの深さは40cmである。この土壌はSH15にともなうものである。

検出した3つの土壌はいずれも貯蔵穴と考えている。

出土遺物 土器と石器が出土している。床面直上で出土したものはなく、すべて掘削中に出土したものである。SH15とSH15(古)との遺物は混在している。

土器 小型丸底壺・鉢・高坏・土錘の各器種が出土している。そのうち図化しているものは6点である。

小型丸底壺 2点図化している。どちらも口縁部を欠失している。体部の深いものと、やや浅いものとがある。

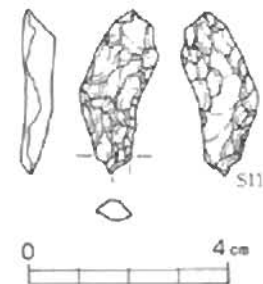
鉢 口縁部が外方に開く中型のものであるが磨滅が著しく調整の観察はできない。

高坏 2点、脚部と坏部が出土している。脚部は円錐状に開くもの、坏部は口縁部がゆるやかに外反するものである。

土錘 上下とも欠失している。直径2.3cm、長さ6.0cmを測り穿孔は円形を呈する。

石器 石錐が1点出土している。つまみ部と先端部の境は明瞭ではないタイプのものである。長さは3.2cm、幅1.2cm、厚さは0.7cmを測る。先端部は欠損している。サヌカイト。

時期 川除7期である。



第77図 SH15出土石器

第25表 SH15出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調査	色調	現在中	備考
198	壺	口径 口径 器高 口径 頸径 体部径	外面 口縁部コナナテ、体部不定方向ナテ 内面 口縁部コナナテ、体部不定方向ナテ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部欠 体部約1/2	小型丸底壺
199	壺	口径 口径 器高 口径 頸径 体部径	外面 口縁部コナナテ、体部不定方向ナテ 内面 口縁部コナナテ、体部上位傾ヘラナテ 下位不定方向ナテ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部1/6 器部欠・体 部はほぼ定有	小型丸底壺
200	杯	口径 口径 器高 口径 頸径 体部径	外面 既滅のため調査不明 内面	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	口縁部・体 部約1/2	
201	高杯	口径 口径 器高 口径 頸径 杯部高	外面 口縁部コナナテ、体部不定方向ナテ 内面 口縁部コナナテ、体部傾ヘラ、ナテ	外面 灰白 内面 灰白	杯部約1/2	
202	高杯	口径 口径 器高 口径 頸径 杯部高	外面 脚部アテハヤのナテナテ 内面 脚部ハラケスリ	外面 灰白 内面 灰白	脚部約1/4	
203	土鐘	直径 口径 器高 口径 体部径	外面 内面	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	上下欠損	

SH16 (図版12・38・57)

検出状況 I-1区で検出している。当住居跡のほぼ中央部から西側部分にかけてはSH14・15によって切られている。したがってこの部分の輪郭は検出することができなかった。しかも、SH14・15の床面は当住居跡の床面よりレベルが低いために、この部分の床も欠失している。さらに張出し部付近をSD17に、中央部をSD18に切られている。

形状・規模 平面形は円形を呈し、張出し部を南東側にもっている。
規模は径7.90mを測る。検出面から床面までの深さは約21cmで、床面の標高は148.38mである。

検出した床面積はSH14・15との切り合いのため正確ではないが、張出し部を含めて推定で45.1㎡である。

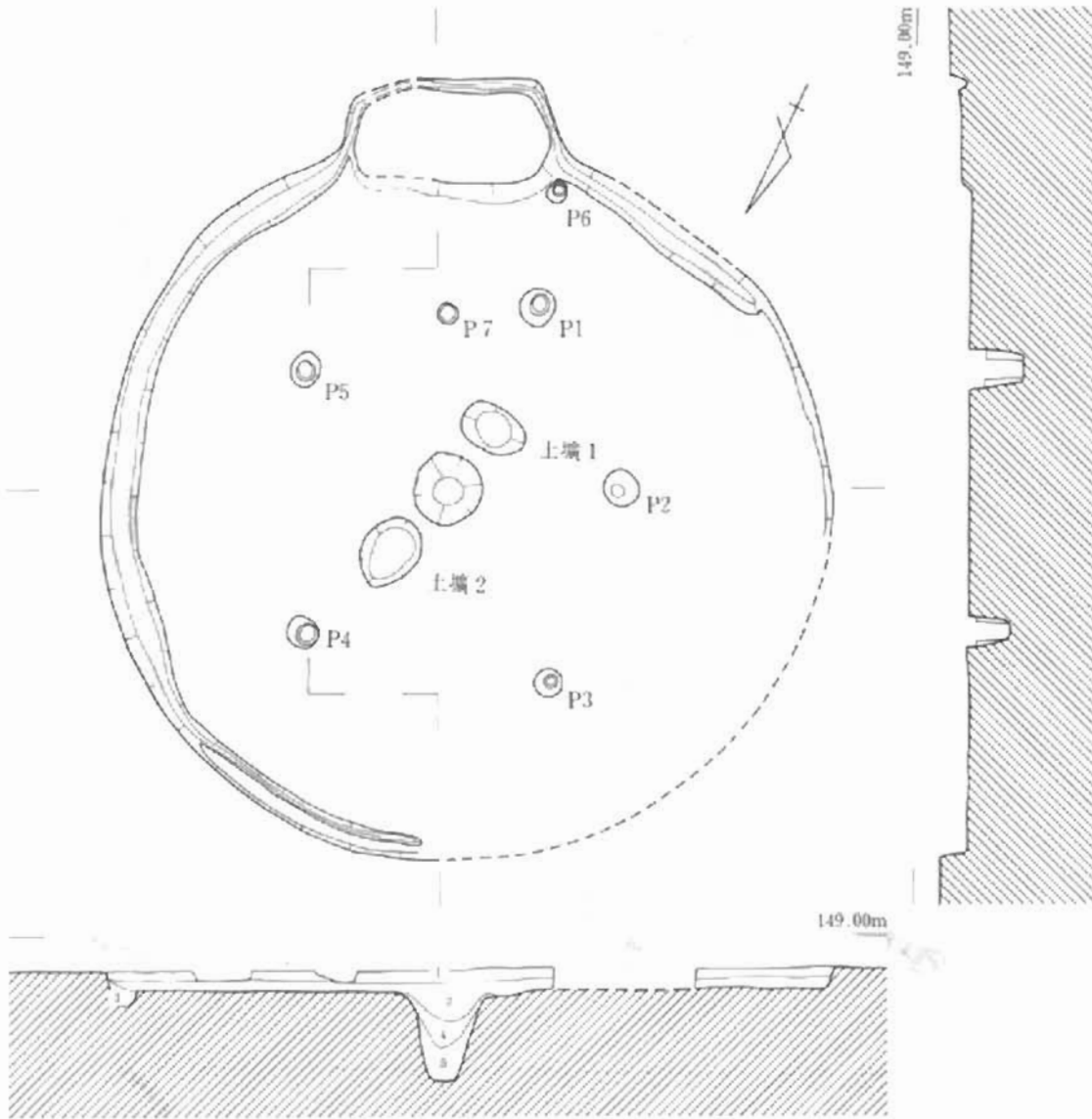
埋土 中央土壌部分の埋土を除いて3層にわたって堆積している。
上層に灰黄色極細砂、下層に灰褐色の土器・炭を含むシルト質極細砂が堆積し、周壁溝には淡褐色シルト質極細砂が堆積している。

屋内施設 張出し部・柱穴・周壁溝・中央土壌を検出している。

張出し部 当住居跡の南東部分に張出し部を検出している。
規模は長さ0.85m、幅は基部で2.50m、先端部で2.00m、床面へは比高差約12cmの段差をもってつながっている。周壁溝はこの部分で屈曲して張出し部に沿って巡っている。張出し部の左側の基部、周壁溝の内側に1ヶ所柱穴を検出している。柱穴の規模は掘り方径24cm、柱痕径13cm、床面からの深さ14cmである。

周壁溝 周壁溝はSH14・15と切りあっている部分をのぞいては、ほぼ全周している。
床面での幅27cmを測り、このレベルからの深さは16cmで、底部の幅は10cmである。また検出面からの深さは約38cmである。

柱穴 合計7穴検出しているが、主柱穴は5穴である。P1は掘り方径38cm、柱痕径22cm、床面からの深さ52cmである。P2は掘り方径37cm、床面からの深さ38cmである。P3は掘り



1. 灰黄色極細砂
2. 灰褐色シルト質極細砂(土器・炭多い)
3. 淡灰褐色シルト質極細砂
4. 灰黄色極細砂
5. 灰色シルト質極細砂(炭非常に多い)

0 4m

第78図 SH16

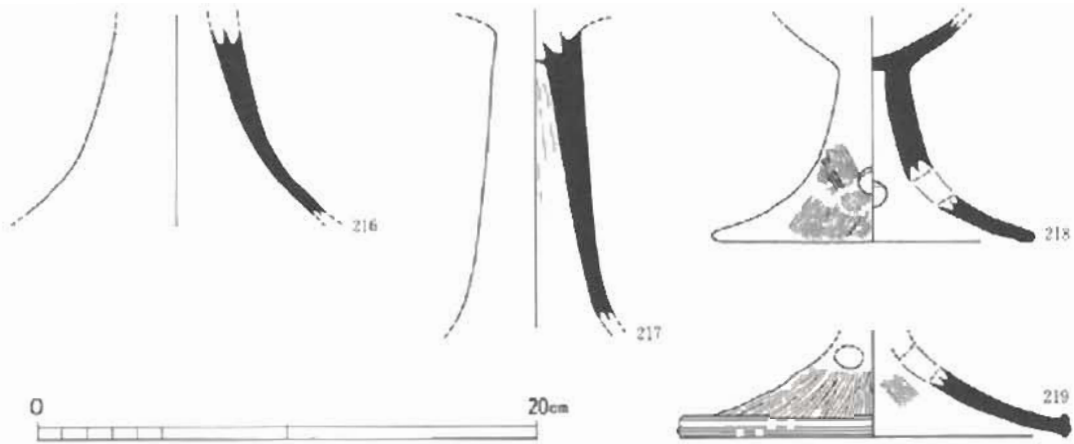
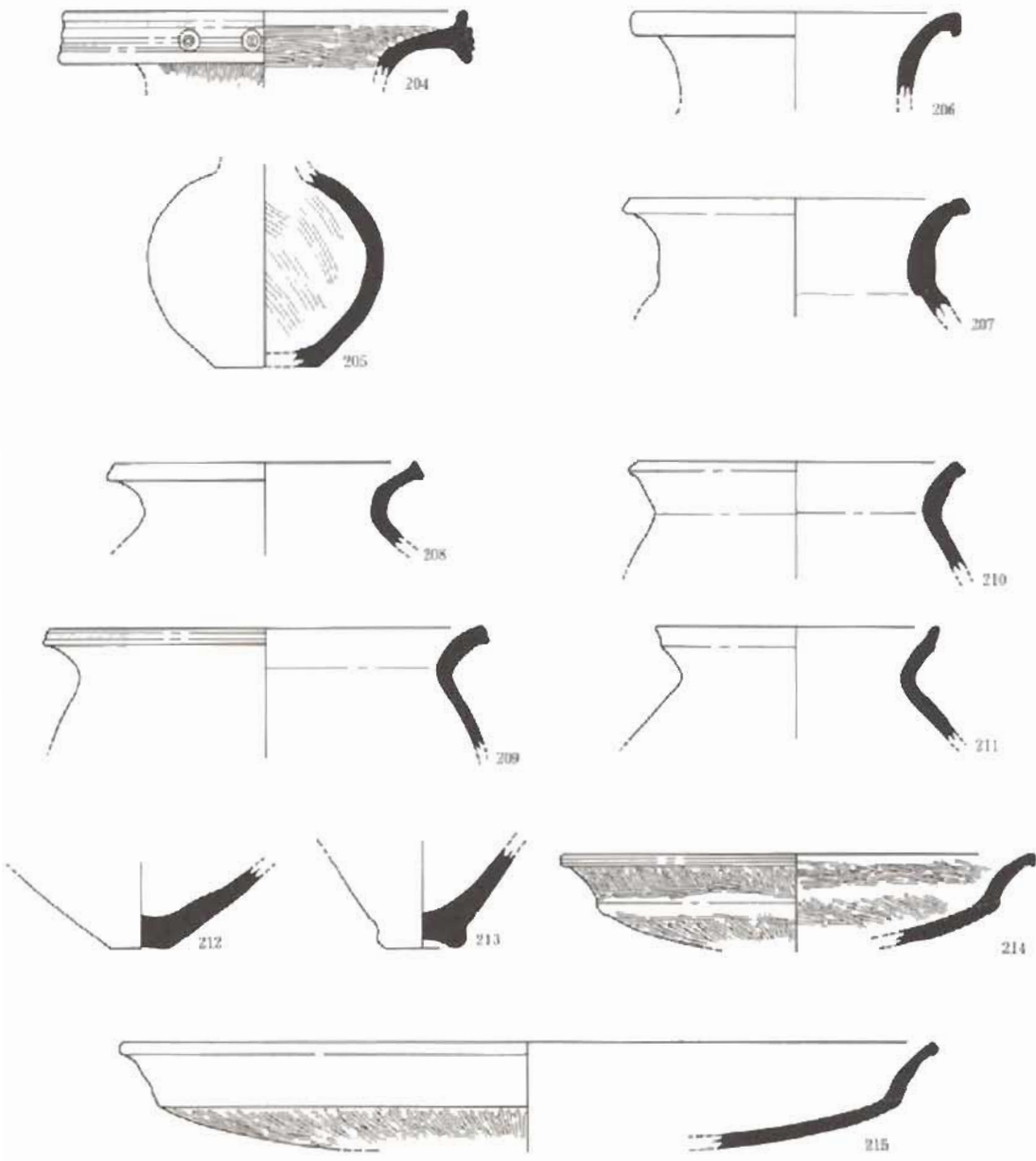
方径32cm、柱痕径16cm、床面からの深さ41cmである。P4は掘り方径36cm、柱痕径22cm、床面からの深さ19cmである。P5は掘り方径33cm、柱痕径19cm、床面からの深さ53cmである。以上の5穴が主柱穴を構成していると考えているものである。

主柱穴以外にも2穴の柱穴が検出されている。P6は張出し部の左側の基部に存在しているもので規模は前述したとおりである。P7はP1とP5との間の、P1から約1m離れて検出された。規模は掘り方径22cm、床面からの深さは24cmである。

柱間距離はP1～P2間が2.20m、P2～P3間が2.18m、P3～P4間が2.74m、P4～P5間が2.86m、P5～P1間が2.68mである。

中央土壇 中央土壇は、当住居跡のほぼ中心部に位置している。規模は径0.75mの円形で、床面から

第3節 1区の調査



第79図 SH16出土土器

の深さは72cmである。

埋土は2層に分かれて堆積している。上層は灰黄色極細砂、下層は炭を非常に多く含む灰色シルト質極細砂である。

面積は0.4㎡である。対床面積比は0.9%である。

- 土壌 中央土層をはさむように南側と北側に土壌が検出された。
- 土壌1 南側に検出されたものが土壌1である。土壌1は長軸方向74cm、短軸方向50cm、床面からの深さは40cmを測る。
- 土壌2 北側に検出されたものが土壌2である。土壌2は長軸方向83cm、短軸方向61cm、床面からの深さ43cmを測る。

土壌1は底部に炭層が約5cmの厚さで堆積し、土壌2は拳大の石が埋土中に7個混入していた。土壌1・土壌2ともに中央土層とは浅い窪みでつながっている。この意味においては3者は連続的である。いずれの土層も検出された位置関係から中央土層にともなう補助的な性格の土層と考えられる。

- 出土遺物 土器と石器が出土している。このうち図化できたものは17点である。いずれの土器も埋土の下層部分から出土していて、床面直上に原位置を保って検出されたものではない。

土器 壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している。このなかで、壺と高坏が比較的多く出土している。

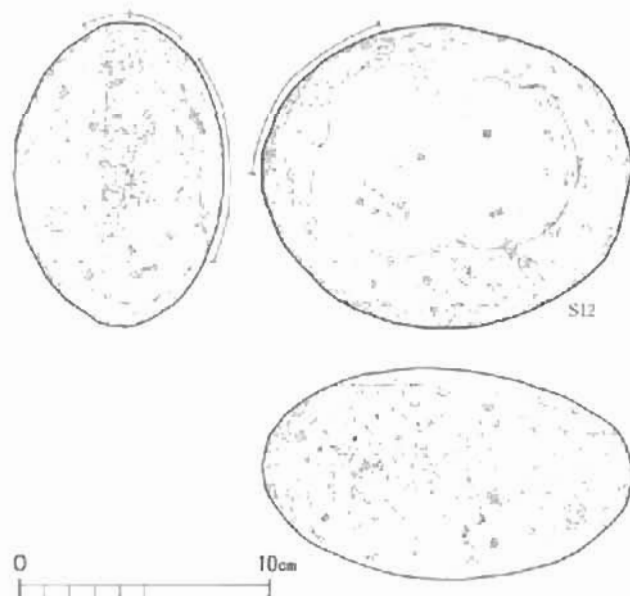
壺 5点を図化している。204は口縁端部を上下に拡張させ口縁端面には3条の擬凹線を施して、円形浮文を貼りつけている。他に下部に拡張させるものや、丸くおさめるものがみられる。205は体部のみ出土で小型の壺である。底部を欠失している。外面は磨滅が激しく、内面は粗いハケで仕上げている。

甕 口縁端部に面をもつもの、上部につまみあげるものがある。また口縁端面に擬凹線をもつものもみられる。

高坏 坏部2点、脚部4点を図化している。坏部は浅い体部に外反する口縁部を持つ。215は口縁部の直径が復元で34cmと大型のものである。214は口縁部の直径が復元で20cmと中型のものであるが、口縁端部に擬凹線を施している。脚部は脚柱部が比較的短く脚裾部がなだらかに広がるものと脚柱部が長いものが出土している。

器台 図化していないが脚端部が出土している。

石器 石器は叩石を1点図化している。形状は楕円形を呈し、長さ15cm、幅12.2cm、厚さ8.4cmである。左側面および上面



第80図 SH16出土石器

第3節 1区の調査

に敲打痕を残している。材質は花崗岩である。この他に図化していないが、サヌカイト製の剥片が2点出土している。

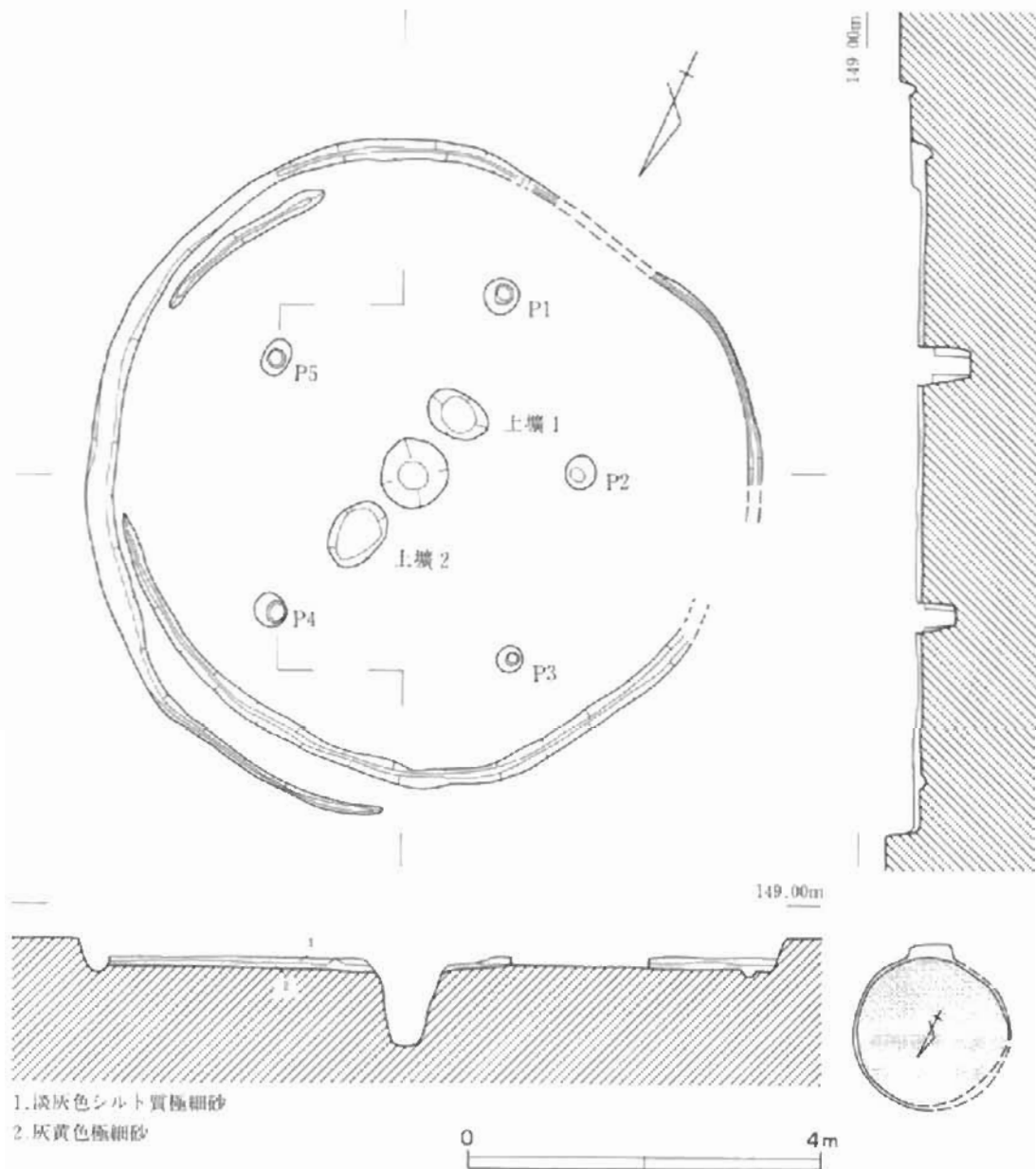
時期 川除2期である。

第26表 SH16出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
204	壺	口径 (16.8) 底径 器高 残2.8 頸径 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、口縁端面縦門線、2割単位円形浮文、頸部8条/ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、底部にかけて横ヘラミダキ	外面：灰白 内面：灰白	口縁部のみ 1/6	
205	壺	口径 底径 4.3 器高 残8.2 頸径 体部径 10.0	外面：磨減のため調整不明 内面：削いハケ	外面：淡橙 内面：淡橙	体部の約1/4 底部1/3	
206	壺	口径 (13.8) 底径 器高 残3.5 頸径 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部のみ 1/8	
207	壺	口径 (14.0) 底径 器高 残4.6 頸径 (12.0) 体部径	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	外面：淡橙 内面：灰白	口縁部1/8 体部わずか	
208	壺	口径 (12.6) 底径 器高 残3.2 頸径 (10.2) 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部のみ 1/4	
209	甕	口径 (18.1) 底径 器高 残5.5 頸径 (15.7) 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面	外面：橙 内面：淡橙	口縁部1/8 体部わずか	
210	甕	口径 (13.4) 底径 器高 残4.7 頸径 (12.0) 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、体部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部調整不明	外面：淡橙 内面：ふい 橙	口縁部1/8 体部わずか	
211	甕	口径 (12.0) 底径 器高 残4.5 頸径 (10.0) 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面	外面：橙 内面：橙	口縁部1/4 体部わずか	
212	甕	口径 底径 2.4 器高 残3.1 頸径 体部径	外面：わずかにタタキ残る 内面：ナデ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	底部のみの約 2/3	
213	鉢	口径 底径 3.0 器高 残4.0 頸径 体部径	外面：底部粘土層はりつけによる、体部～底部間に削いヨコナデ 内面：磨減のため調整不明	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	底部完存 体部わずか	
214	高坏	口径 (20.0) 底径 器高 残3.9 頸径 体部径	外面：口縁部縦ヘラミダキ、肩部縦ヘラミダキ、口縁部～坏部境ヨコナデ口縁端面縦門線 内面：口縁部縦ヘラミダキ、坏部横ヘラミダキ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部～坏 部の約1/8	
215	高坏	口径 (34.0) 底径 器高 残4.4 頸径 体部径	外面：口縁部横ヘラミダキ、肩部縦ヘラミダキ 内面：磨減のため調整不明	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	口縁部～坏 部の約1/8	
216	高坏	口径 底径 器高 残7.5 頸径 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面	外面：橙 内面：橙	脚柱部7/8	
217	高坏	口径 底径 器高 残11.7 脚柱径 3.4 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：シボリ肌	外面：灰白 内面：灰白	脚柱部1/4	
218	高坏	口径 底径 (12.0) 器高 残8.8 脚柱径 2.8 体部径	外面：脚部ハケわずかに残、脚端部ヨコナデ、4孔 内面：脚端部ヨコナデ	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	脚部～坏部 の約1/3	
219	高坏	口径 底径 (15.6) 器高 残3.2 頸径 体部径	外面：脚部縦ヘラミダキ、脚端面縦門線、凹孔割線不明 内面：ハケわずかに残、脚端部強いヨコナデ	外面：浅黄 内面：浅黄	脚部の約1/4	

SH17 (図版12)

- 検出状況** 1-1区で検出している。当住居跡はSH16を検出したあとに調査をおこなった。SH16の下に存在しているため周壁溝の底の部分のみの検出にとどまっている。
- 形状・規模** 平面径は円形を呈している。SH16のような張り出し部はともなっていない。径7.6mを測り、径6.7mの周壁溝が内側に部分的に残る。検出面から、床面までの深さは16cmで、床面の標高は148.28mである。検出した床面積は約41.2㎡である。
- 埋土** 埋土は上下2層に堆積している。上層が淡灰色シルト質極細砂、下層が灰黄色極細砂である。
- 屋内施設** 柱穴・周壁溝・中央土壇・土壇を検出した。このうち柱穴・中央土壇・土壇はSH16と共有している。
- 周壁溝** 床面での幅16cmで、このレベルからの深さは8cmで底部の幅は6cmである。また検出面



第81図 SH17

第3節 1区の調査

からの深さは20cmである。当住居跡の北～東部にかけては内側に周壁溝が一部巡っている。これによって当住居跡も拡張されていることが明らかである。さらに拡張して張出し部をもつSH16になったものと考えられる。

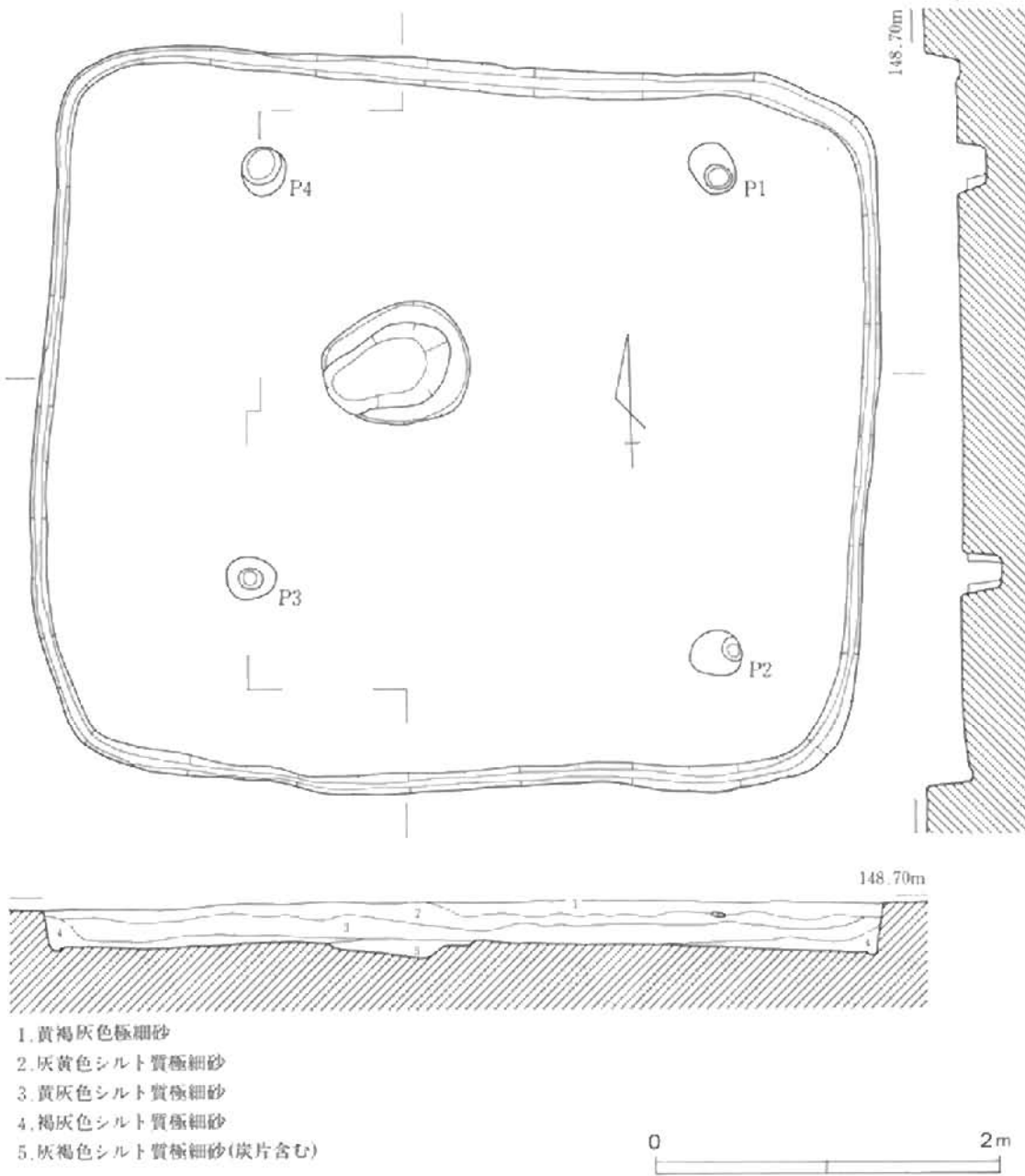
出土遺物 当遺構からは遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではない。しかしSH16が当住居跡の拡張であることを考えれば、SH16の直前の時期であろう。

SH18 (図版12)

検出状況 I-2区で検出している。SD22を切って造られている。

形状・規模 平面形は隅円の方角を呈している。北辺4.45m、東辺3.62m、南辺4.25m、西辺3.80mを



第02図 SH18

測る。検出面から、床面までの深さは約25cmで床面の標高は148.43mである。検出した床面積は17.85㎡である。

埋土 埋土は4層にわたって堆積している。上層から順に黄褐色極細砂、灰黄色シルト質極細砂、黄灰色極細砂、褐色シルト質極細砂である。焼土層、あるいは炭層は確認されていない。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土塊を検出した。

周壁溝 周壁溝は全周している。床面での幅8cmを測り、このレベルからの深さは5cmで、底部の幅は5cmである。また、検出面からの深さは30cmである。

柱穴 4穴検出している。P1は、掘り方径32cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは18cmである。P2は、掘り方径30cm、柱痕径14cmを測り、床面からの深さは40cmである。P3は、掘り方径28cm、柱痕径14cmを測り、床面からの深さは22cmである。P4は、掘り方径27cm、柱痕径20cmを測り、床面からの深さは17cmである。

柱間距離はP1～P2間が2.72m、P2～P3間が2.85m、P3～P4間が2.39m、P4～P1間が2.67mである。北辺側の柱穴であるP1とP4がやや北にかたよって掘られている。

中央土塊 当住居跡の中央やや北西寄りに検出している。平面形はいびつな楕円形で、2段に掘られている。上段の規模は長軸方向に0.90m、短軸方向に0.68m、下段は長軸方向に0.75m、短軸方向に0.48mで、床面からの深さは12cmである。面積は0.5㎡で、対床面積比は3%である。埋土には炭層は確認されていない。

出土遺物 土器のみが出土しているが、図化できたものは2点のみである。

底部の突出した甕と短い脚の付いた鉢の底部が出土している。



第83図 SH18出土土器

時期 川除5期である。

第27表 SH18出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存中	備考
220	甕	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残欠 脚径 : 体部径 :	外面 : 黒タタキ 内面 : ナテ	外面 淡黄緑 内面 淡黄緑	底部のみ残存	
221	鉢	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残欠 脚径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	底部のみ残存	

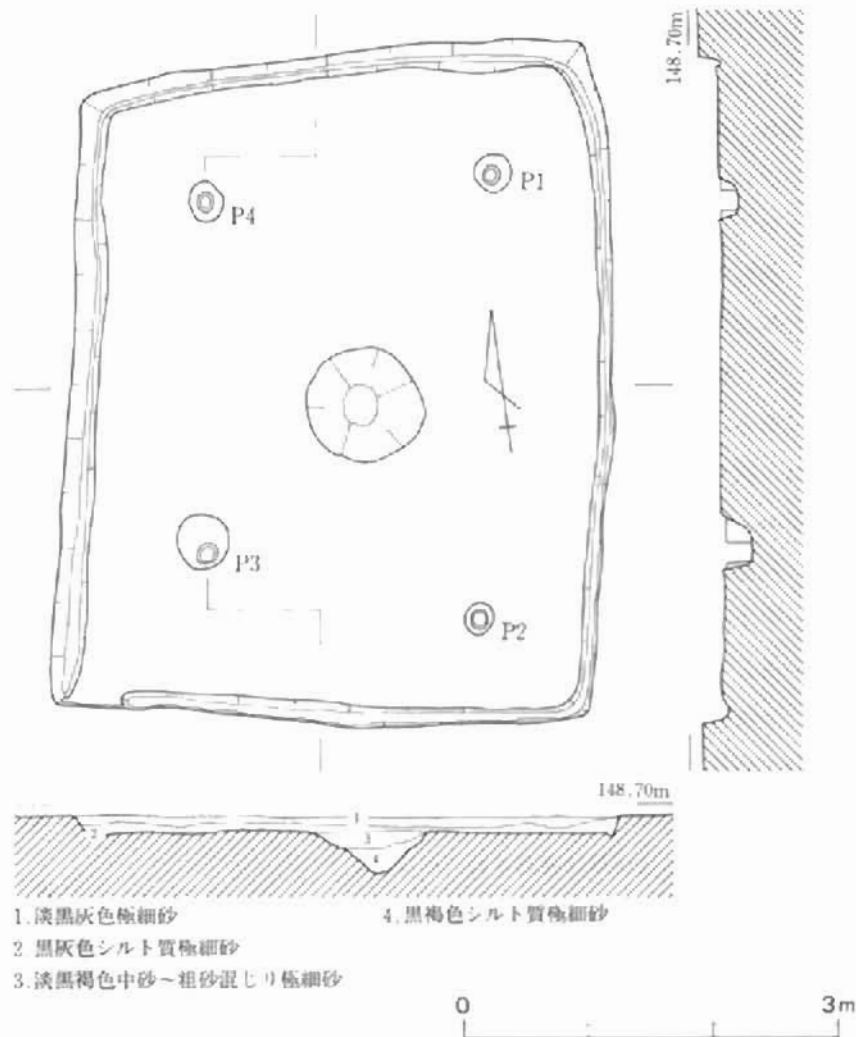
SH19 (図版13)

検出状況 1-2区で検出している。SH22を切って造られている。

形状・規模 平面形は基本的に長方形を呈している。

規模は北辺が4.05m、東辺が5.32m、南辺が4.30m、西辺が4.80mである。長軸方向である東辺と西辺を比較してみると53cmもの差があるようになりいびつな長方形である。床面の標高は148.48mである。検出した床面積は19.6㎡である。

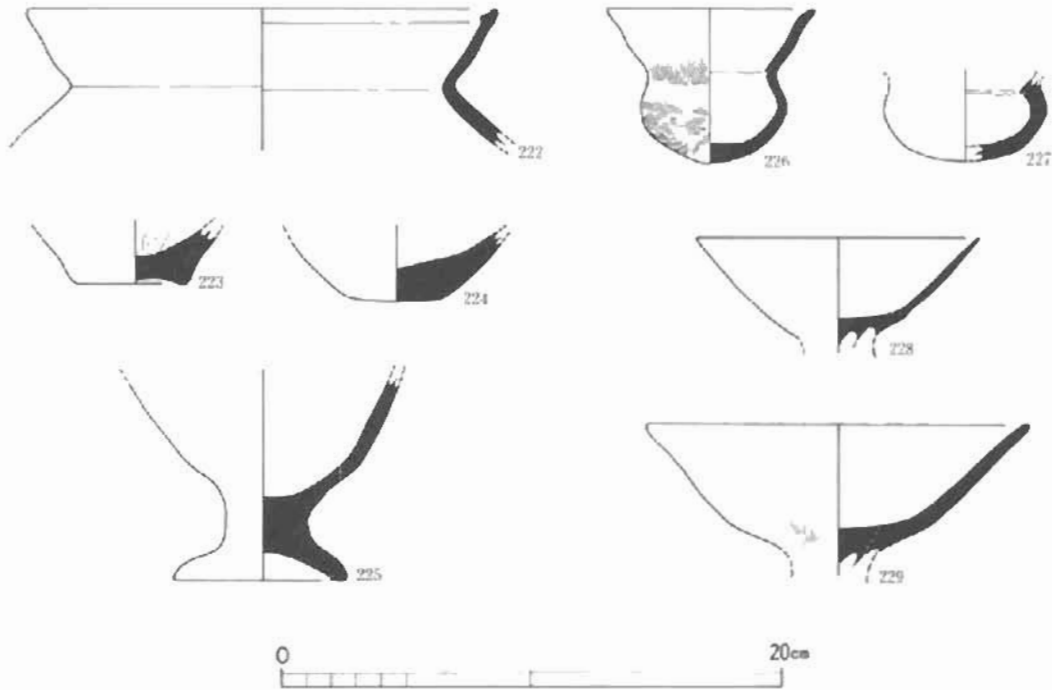
埋土 埋土は中央土塊の分を除いて2層が堆積している。上層は淡黒灰色極細砂、下層は黒灰



第84図 SH19

色シルト質極細砂である。

- 屋内施設** 柱穴・周壁溝・中央土壇を検出している。
- 周壁溝** 床面での幅約9cmを測り、このレベルからの深さは3cmで、底部の幅は2cmである。また検出面からの深さは16cmである。周壁溝は全周せずに南西隅の部分で途切れている。
- 柱穴** 4穴検出している。いびつな平面形に対応するように柱間の間隔も東辺のものの方が間隔が長い。P1は掘り方径30cm、柱痕径14cmを測り、床面からの深さは16cmである。P2は掘り方径26cm、柱痕径14cmを測り、床面からの深さは22cmである。P3は掘り方径42cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは21cmである。P4は掘り方径33cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは15cmである。柱間距離はP1～P2間が3.52m、P2～P3間が2.25m、P3～P4間が2.80m、P4～P1間が2.80mである。
- 中央土壇** 当住居跡のはば中央部で検出している。平面形は円形に近い楕円形である。規模は長軸方向に0.95m、短軸方向に0.88mで、床面からの深さは32cmである。面積は0.64㎡で、対床面積比は3%である。
- 出土遺物** 土器・石器が出土しており、そのうち図化できたものは8点である。埋土掘削中に出土したもので、床面に原位置を保って出土したものはない。



第85図 SH19出土土器

- 土器** 小型丸底壺・甕・鉢・高坏が出土している。
- 甕** 2点図化している。222は内湾して立ち上がり口縁端部は内面に肥厚させるものである。223は底部のみのものである。
- 鉢** 1点図化している。225は短い脚の付いた体部の比較的深いものである。
- 壺** 小型丸底壺を2点図化している。226は、口縁部が内湾気味に外傾し、口径は比較的大きい。
- 高坏** 2点図化している。228はやや小型、229は中型のものである。両者とも外傾する深い坏部をもつ。
- 石器** 図化していないが、サヌカイト製の剥片が1点出土している。
- 時期** 川除7期である。

第28表 SH19出土土器観察表(1)

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
222	甕	口径 : 18.6 底径 : 残5.5 器高 : 残15.4 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 体部ナシ。他は磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部~体部の約1/8	
223	甕	口径 : 残7.3 底径 : 残4.5 体部径	外面 : ナシ。底面ナシ 内面 : ナシ。上ナシ	外面 : 赤 内面 : 黒	底部のみの約1/2	
224	甕	口径 : 残3.7 底径 : 残2.7 器高 : 残4.5 体部径	外面 : ナシ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 赤黄 内面 : 灰	底部のみの約3/4	
225	鉢	口径 : 残7.0 底径 : 残3.3 器高 : 残8.0 器径 : 残3.3 体部径	外面 : ナシ 内面 : ナシ	外面 : 灰褐 内面 : 灰白	口縁部欠約1/2	脚付
226	壺	口径 : 18.3 底径 : 残6.1 器高 : 残5.2 体部径 : 5.9	外面 : 体部6~7cmの間の口縁部ナシ 内面 : 口縁部~体部ナシ。底部不定方向ナシ。粘土磨痕	外面 : 褐灰 内面 : 赤	体部欠存 口縁部ナシ	小型丸底壺

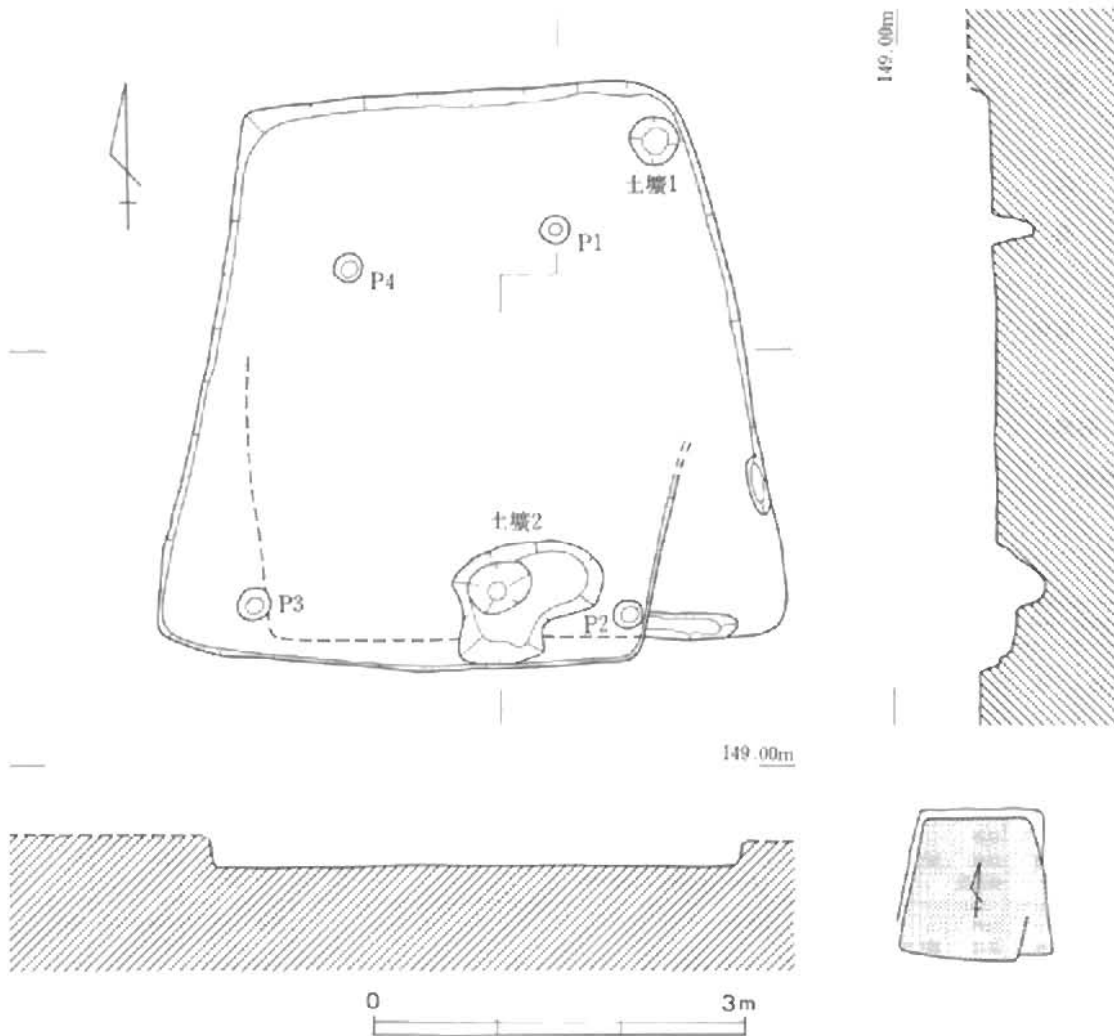
第29表 SH19出土土器観察表(2)

番号	器種	寸量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
227	壺	口径 11.2 器高 残3.2 体部径 (6.5)	体部径 調整 内面 粘土粒状	外面 濃い 褐色 内面 灰褐色	体部のみ約 1/4	小智丸地壺
228	高杯	口径 (11.4) 器高 残4.3 体部径	体部径 調整 内面 磨滅のため調整不明	外面 青 内面 青	杯部のみ約 1/4	
229	高杯	口径 (15.3) 器高 残5.5 体部径	体部径 調整 内面 磨滅のため調整不明 円板状	外面 赤褐色、 濃い 青 内面 青	杯部のみ約 1/4	

SH20 (図版13)

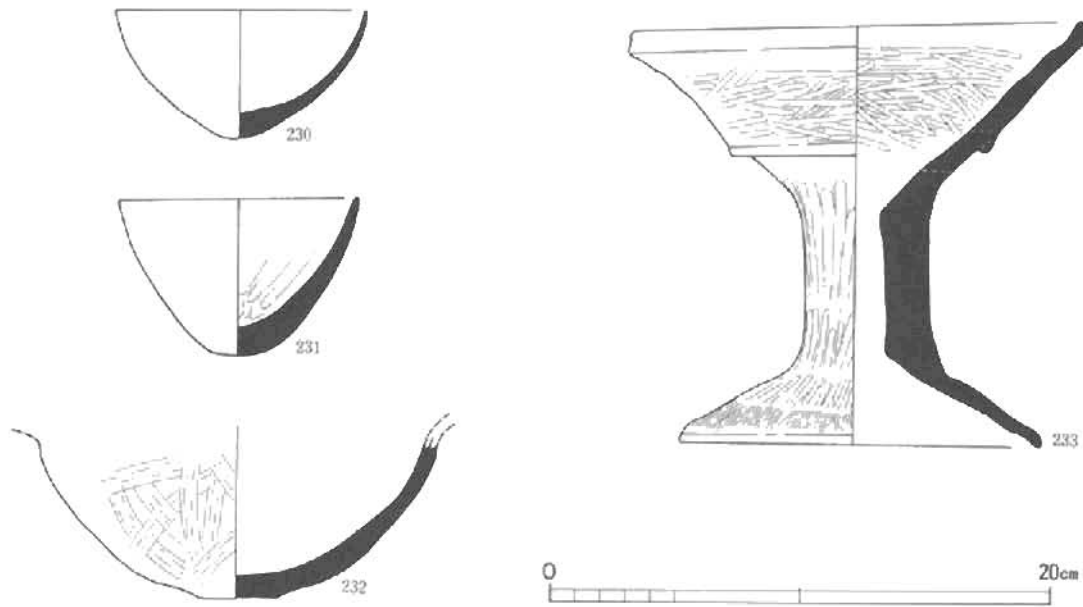
検出状況 1-2区で検出している。SH22を切って造られている。SH19の調査終了後に検出している。SH19に切られているため、それ以前の住居跡と考えられる。

形状・規模 平面形は基本的に長方形を呈している。しかし当住居跡は2軒の住居が切りあって造られている。このためいびつな台形状を呈している。規模は長軸方向に4.60m、上辺が3.30m、下辺が5.40mを測る。検出面から床面までの深さは約24cm、床面の標高は148.48mである。



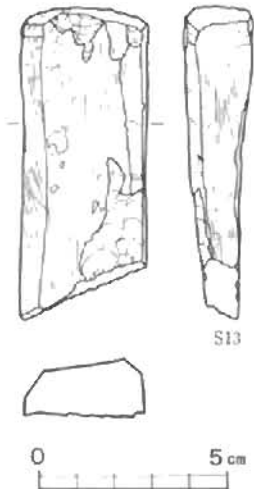
第86図 SH20

	検出した床面積は19.6㎡である。
屋内施設	柱穴・土壌を検出している。
柱穴	4穴検出している。いびつな平面形に対応するように柱間の間隔も一定ではない。P1は掘り方径22cm、床面からの深さは34cmである。P2は掘り方径24cm、床面からの深さは22cmである。P3は掘り方径26cm、床面からの深さは23cmである。P4は掘り方径33cm、床面からの深さは15cmである。柱間距離はP1～P2間が3.14m、P2～P3間が3.02m、P3～P4間が2.80m、P4～P1が1.68mである。P1とP4が壁より1.20～1.40m内側に、P2とP3が壁際に掘られている。
土壌	当住居跡の南壁中央部で検出している。平面形は不定形を呈している。規模は長軸方向に116cm、短軸方向に65cmで、床面からの深さは40cmである。壁際に位置していることや、その深さから貯蔵穴と考えられる。
出土遺物	土器のみが出土しているが、図化できたものはない。
時期	出土している土器がいずれも細片のため正確な時期は明らかではないが、SH19以前の住居跡であるが、時期的な差は少なく、連続的な建て替えである可能性が高い。
SH21 (図版13・38)	
検出状況	I-2区で検出している。本住居跡の北側部分はSH19・20によって切られている。また東側はSH19・20を切って造られている。このため北側では検出面での輪郭は明らかではない。
形状・規模	平面形は基本的に方形を呈している。 規模は北東辺が推定で約5.80m、南東辺が推定で約6.20m、南西辺が5.80m、北西辺が6.10mを測る。床面までの深さは約28cmで、床面の標高は148.25mである。 検出した床面積は、他の住居跡によって切られているため正確な数値ではないが、推定でおよそ39.6㎡と考えられる。
埋土	埋土は6層にわたって堆積している。 上層から順に土器片を含む灰色細砂、黒褐色シルト混じり細砂、褐灰色シルト質細砂、褐灰色細砂混じりシルト、黒褐色細砂混じりシルト、褐灰色下層に炭層のある細砂混じりシルトである。
屋内施設	ベッド・柱穴・周壁溝・土壌を検出している。
ベッド	西側において全体の約1/4の範囲で検出している。北側および東側は切り合いによって確認することができなかった。 住居跡の平面形と同様に方形を指向しているがコーナー部分は屈曲していない。むしろ緩やかに曲がっている。地山を削り出して整形したもので、幅は1.1～1.2mで床面との比高は5cmである。
周壁溝	周壁溝は住居跡の北東辺の一部で検出したにとどまる。 床面での幅は10～12cm、底部の幅は4cmを測り、このレベルからの深さは約4cmである。検出面からの深さは約28cmである。
柱穴	柱穴は合計3穴検出しているにとどまる。P1は掘り方径34cm、床面からの深さは30cm



第88図 SH21出土土器

- 高坏** 図化していない。碗形のものが出土している。
- 鉢** 3点図化している。小型の碗形のものが2点と中型のおそらく口縁部が外方に開いているであろうものが1点である。
- 器台** はほぼ完形のものである。体部と口縁部、裾部の境が屈曲して開いている。
- 石器** サマカイト片と砥石が出土している。砥石は、下部は欠損しており、裏面は割れているが3面を使用していたようで擦痕が観察される。擦痕の方向は一定方向を指している。石材は凝灰質泥岩で粒子は細かく仕上げ用の砥石と考えられる。
- 時期** 川除6期である。



第89図 SH21出土石器

第30表 SH21出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
230	鉢	口径 : 10.0 底径 : 9.8 器高 : 残5.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨部のため調整不明 内面 :	外面 : 磨 内面 : 磨	口縁部1/2 欠	
231	鉢	口径 : 9.4 底径 : 器高 : 残6.2 胴径 : 体部径 :	外面 : 不定方向ナテ 内面 : ヘラナテ	外面 : 浅黄橙 内面 : におい 橙	口縁部わず かに残 体部は完存	
232	鉢	口径 : 底径 : (3.0) 器高 : 残6.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部不定方向ヘラナテ 内面 : 不定方向ナテ	外面 : におい 黄褐 内面 : "	体部3/4 残部完存	
233	器台	口径 : 17.7 底径 : 14.5 器高 : 16.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、口縁部横ヘラミダテ、体部~裾部上半縦ヘ ラミダテ、裾部下半ハケ、ヘラミダテが後 内面 : 口縁部ヨコナテ、口縁部横ヘラミダテ、口縁部下位ナテ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	ほぼ完存	

第3節 I区の調査

SH22 (図版14・39)

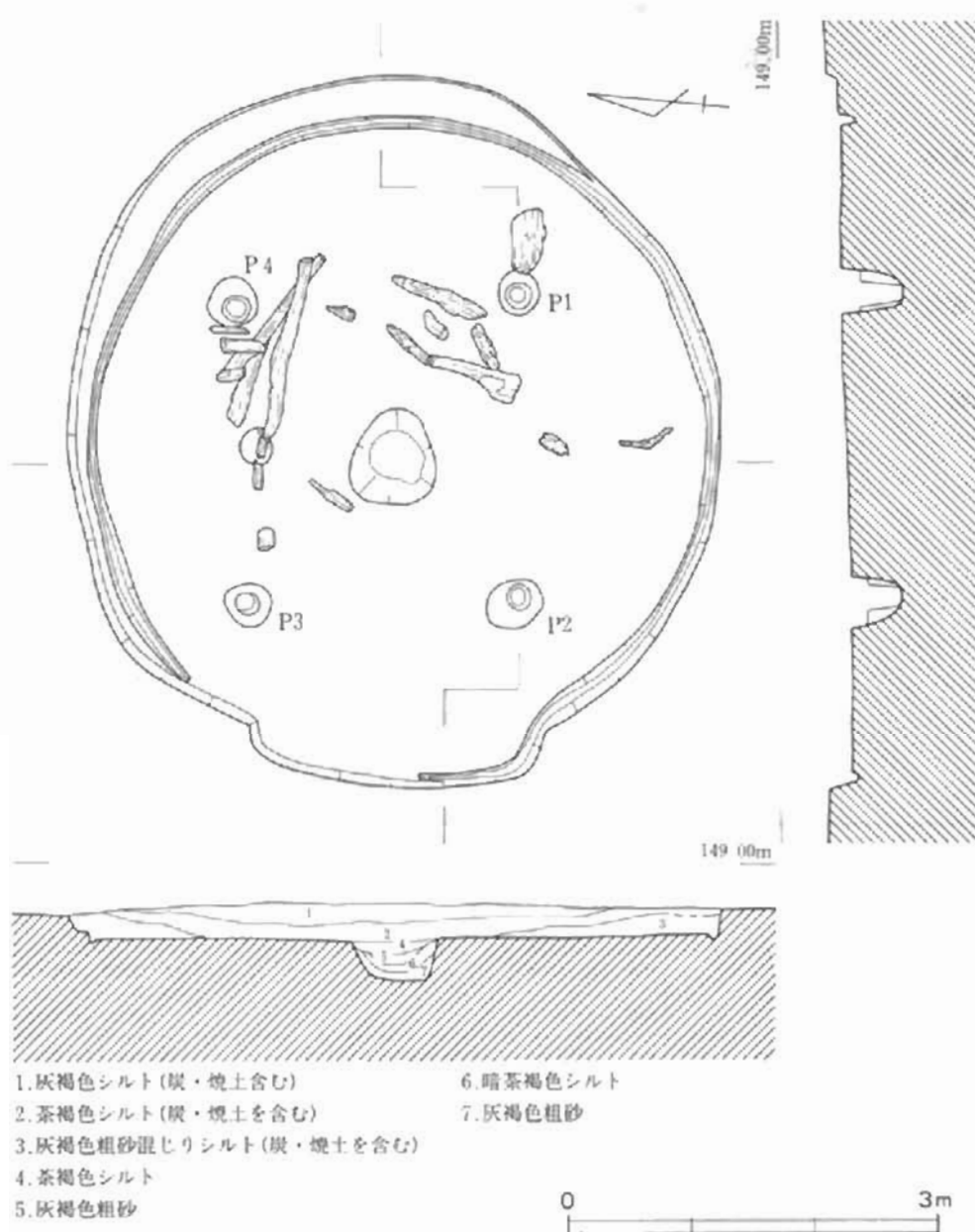
検出状況 I-2区で検出している。

形状・規模 平面形は円形を指向し、張出し部を西側に拡張部を東側にもっている。径5.2~5.7mを測る。

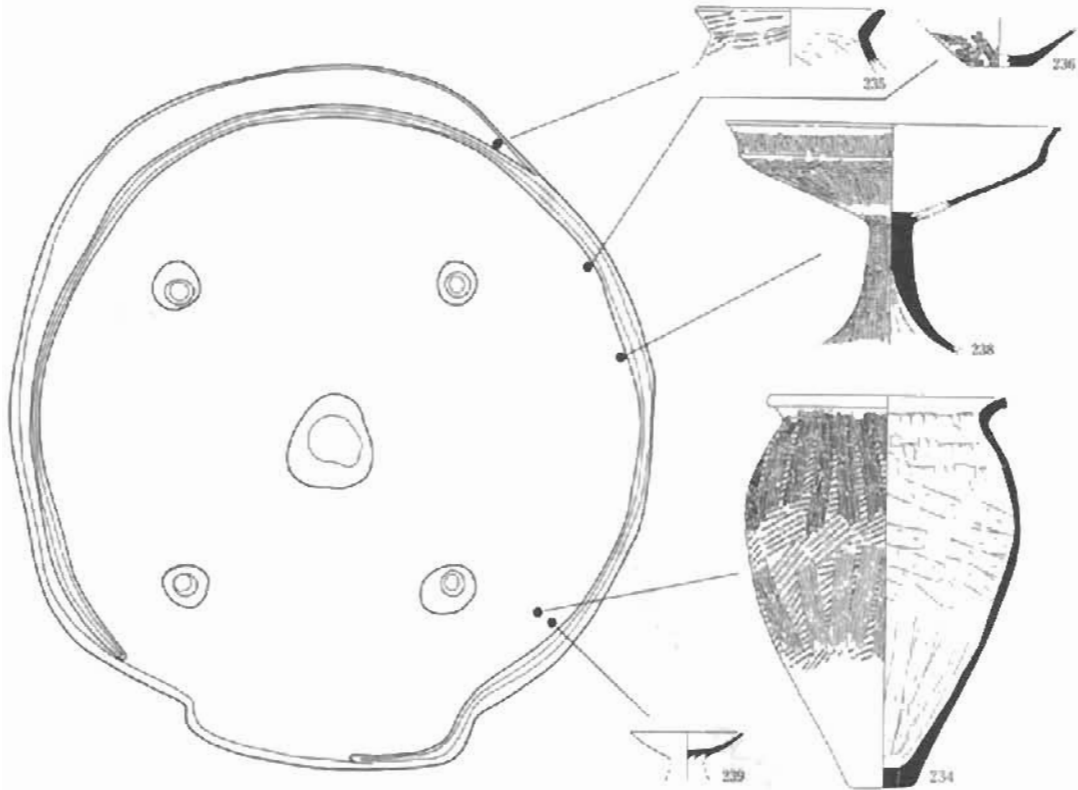
検出面から、床面までの深さは約20cmで、床面の標高は148.50mである。検出した床面積は21.2㎡である。

埋土 中央土壌部分の埋土を除いて3層にわたっている。上層に炭・焼土を含む灰褐色シルト、中層に炭・焼土を含む茶褐色シルト、下層に炭・焼土を含む灰褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

屋内施設 張出し部・柱穴・周壁溝・中央土壌・拡張部を検出している。さらに遺構掘削中に炭化



第90図 SH22



第91図 SH22土器出土位置

材を検出している。住居跡の上屋のものと思われ、焼失住居跡と思われる。

張出し部

当住居跡の西側部分に張出し部を検出している。

規模は長さ0.40m、幅は基部で2.40m、先端部で2.20m、床面への比高差はほとんどなく深さは18cmを測る。周壁溝はこの部分で屈曲して張出し部に沿って巡っているが途中で途切れている。

周壁溝

床面での幅7cmを測り、このレベルからの深さは4cmで、底部の幅は3cmである。また検出面からの深さは約22cmである。

柱穴

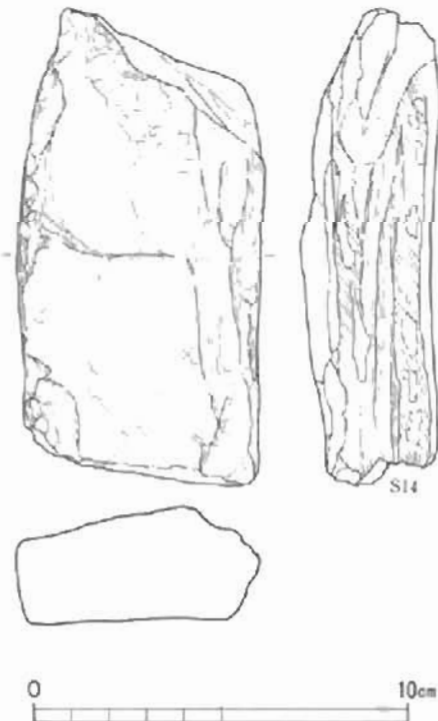
合計4穴検出している。

P1は掘り方径40cm、柱痕径20cm、床面からの深さ45cmである。P2は掘り方径35cm、柱痕径17cm、床面からの深さ50cmである。P3は掘り方径40cm、柱痕径20cm、床面からの深さ48cmである。P4は掘り方径35cm、柱痕径20cm、床面からの深さ35cmである。

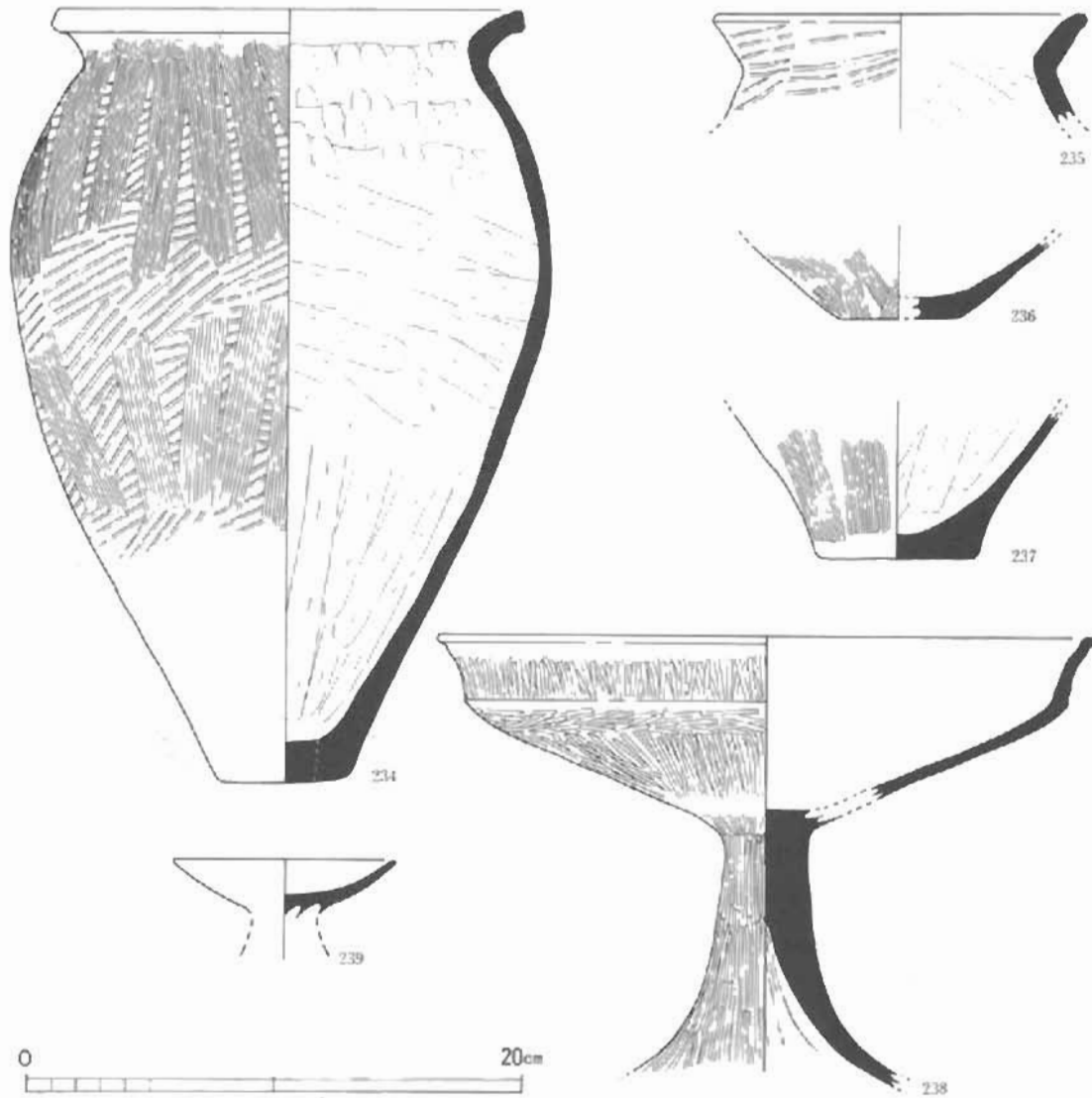
柱間距離はP1～P2間が2.30m、P2～P3間が2.17m、P3～P4間が2.42m、P4～P1間が2.27mである。

中央土壇

中央土壇は、当住居跡のほぼ中心部に位置し



第92図 SH22出土石器



第93図 SH22出土土器

ている。

形状は隅円の三角形で規模は長軸方向に75cm、短軸方向に65cmを測り、深さは51cmである。埋土は4層に分かれて堆積している。上層から茶褐色シルト、灰褐色粗砂、暗茶褐色シルト、灰褐色粗砂である。面積は0.4㎡、対床面積比は1.7%である。中央土壌の東側の約20cm離れたところに、長軸方向80cm、短軸方向に30cmの、平面形状が薬巻型の焼土面が検出されている。

拡張部

当住居跡の北側と東側は拡張されている。拡張部は最大で約25cm拡張されている。床面との比高約7cmをもって高まり、ベッド状を呈している。住居跡の土層断面の観察から住居跡の切り合いは確認できない。拡張部には周壁溝は巡っていない。

出土遺物

土器・石器が出土している。このうち図化できたものは7点である。

土器

壺・甕・高坏・器台が出土している。

甕

4点図化している。234は内面ヘラケズリ、外面ハケ仕上げを施している。体部上位に最大径をもつ。

- 高杯** やや深めの体部に緩く外反する口縁部をもつ。この高杯は、当遺跡の住居跡の中では古い様相を呈している。
- 石器** 2点出土している。サメカイト製の剥片と石斧の未製品である。石斧未製品を図化している。全長12.3cm、幅6.6cm、厚さ3.2cmである。材質は頁岩である。
- 時期** 川除2期である。

第31表 SH22出土土器観察表

番号	器種	度量 [cm]	調査	色調	現存中	備考
234	甕	口径 : 18.6 底径 : 3.4 器高 : 30.9 胴径 : 16.4 体部径 : 21.9	外面 体部3.5cm石トリナタリ、のり上10.5cmタテハ、中位以下5.5cmタテハ、口縁部タコナデカ 内面 体部上位エビオサニ、中位部ヘラツスリ、下位部ヘラツスリ	外面 : 土に近い黄褐色 内面 : *	口縁部約1/3、他はほぼ定存	
235	甕	口径 : 14.8 底径 : 残4.3 胴径 : 12.6 体部径 :	外面 口縁部-体部直上1.5cmタテハ、口縁部タコナデ 内面 口縁部タコナデ、体部直上1.5cmタテハ	外面 : 明褐色 内面 : 明褐色	口縁部-体部上約1/3	
236	甕	口径 : 残4.8 底径 : 残3.0 胴径 : 体部径 :	外面 底部-体部直上1.5cmタテハ、底面ヘラツスリ 内面 磨滅のための調整不明	外面 : 土に近い褐色 内面 : 土に近い褐色	底部約1/2 体部わずか	
237	甕	口径 : 残6.3 底径 : 残5.9 胴径 : 体部径 :	外面 体部下位1.5cm下→上タテハ 内面 体部下→上ヘラツスリ	外面 : 黒 内面 : 明褐色	底部定存 体部わずか	
238	高杯	口径 : 20.2 底径 : 残18.0 胴径 : 3.8 体部径 :	外面 口縁部直上ヘラツスリ、体部上位直上ヘラツスリ、以下直上ヘラツスリ 内面 口縁部-体部直上ヘラツスリ、脚部ノボリ目	外面 : 土に近い黄褐色 内面 : 土に近い黄褐色	口縁部-体部約1/2 脚部短欠	
239	器片	口径 : 9.0 底径 : 残7.2 胴径 : 体部径 :	外面 } 磨滅のための調整不明 内面 :	外面 : 土に近い黄褐色 内面 : *	口縁部わずか、体部1/3、脚部欠	

SH23 (図版15・39・40)

検出状況 1-2区で検出している。SD25・26を切って造られている。また、当住居跡の下層に重なってSH24が存在している。SH23はSH24の廃棄後に建て替えられたものと考えられる。

形状・規模 平面形は隅円の方角を呈している。

規模は北辺4.15m、東辺4.10m、南辺4.30m、西辺4.35mを測る。

検出面から床面までの深さは約30cmで、床面の標高は148.32mである。検出した床面積は20.52㎡である。

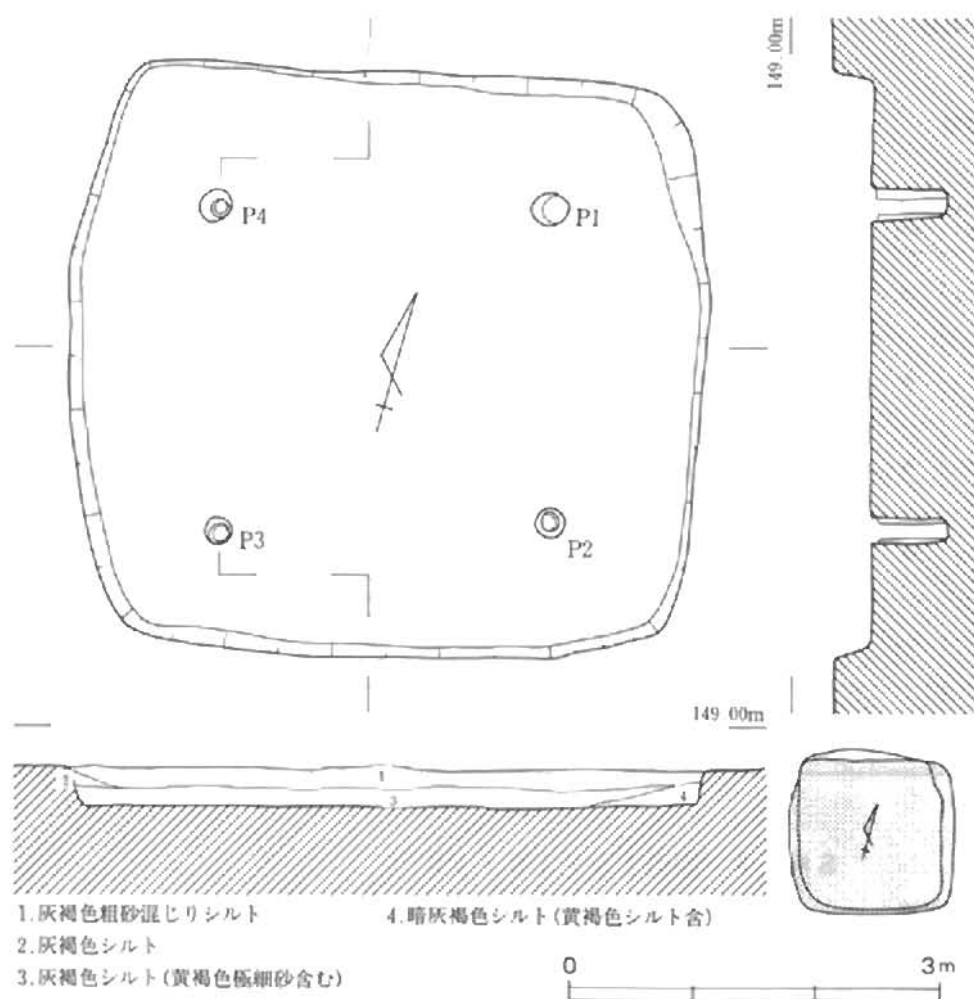
埋土 4層にわたって堆積している。

上層から順に灰褐色粗砂混じりシルト、灰褐色シルト、黄褐色極細砂を含む灰褐色シルト、黄褐色シルトを含む暗灰褐色シルトの堆積が認められている。埋土は大きく分けると上層の2層と下層の2層の二段階にわたっている。埋没の時期的な差を表しているものと考えられる。

屋内施設 柱穴のみを検出した。周壁溝、土壇等は検出していない。

柱穴 柱穴は4穴検出している。

P1は、掘り方径30cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは60cmである。P2は、掘り方径25cm、柱痕径16cmを測り、床面からの深さは60cmである。P3は、掘り方径25cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは57cmである。P4は、掘り方径25cm、柱痕径14cmを測り、床面からの深さは61cmである。



第94図 SH23

柱間距離はP1～P2間が2.45m、P2～P3間が2.65m、P3～P4間が2.68m、P4～P1間が2.61mである。北辺側の柱穴であるP1とP4は壁から約1.1～1.2m内側に、南辺側の柱穴であるP2とP3は壁から約0.9～1.1m内側に掘られている。柱間の距離も30cm内外の誤差で一定しており住居跡の平面形とはは相似形を成しており方形を呈している。

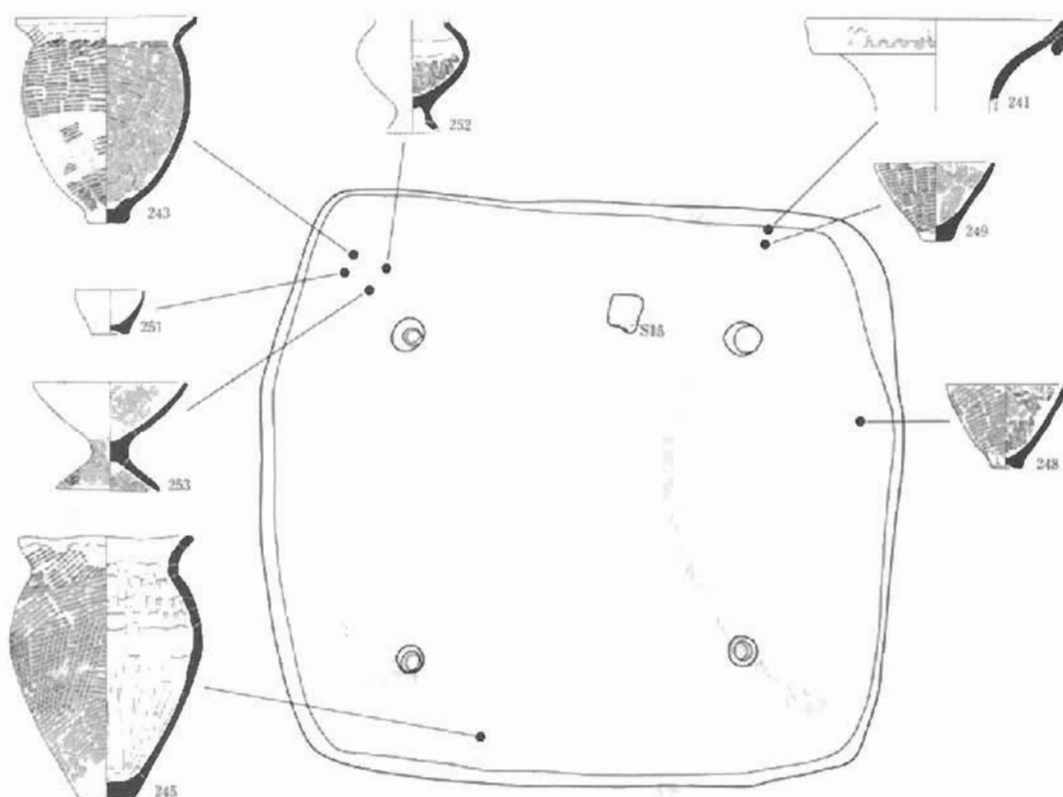
出土遺物 土器・石器・鉄器が出土している。そのうち図化しているものは18点である。土器が15点、石器が2点、鉄器が1点である。

土器 広口壺・台付壺・甕・鉢・ミニチュア鉢・高坏の各器種が出土しており、床面で出土したものが多く原位置を保っているものと考えられる。

出土位置 住居跡の北西隅では台付壺(252)、甕(243)、ミニチュア鉢(251)が、北東隅からは広口壺(241)、鉢(248・249)が、南部からは甕(245)が出土している。いずれの土器も、柱穴の外側の壁際で出土している。

甕 3点図化している。いずれも口縁部のみの出土である。

240は広口壺の口縁部である。口縁部を上方につまみあげている。調整は磨滅のため不明である。



第95図 SH23土器出土位置

242は広口壺の口縁部である。口縁部を下方に垂下させている。口縁部には横方向のナデ、頸部には縦方向のヘラミガキを施している。

241は広口壺の口縁部である。口縁端部は貼り付けによって垂下させ、比較的広い面をもっている。口縁端面にはわずかに波状文が残っている。

壺 5点図化している。反転復元により器形のわかるものが2点、体部上半から口縁部にかけてのものが1点、底部のみのものが2点である。

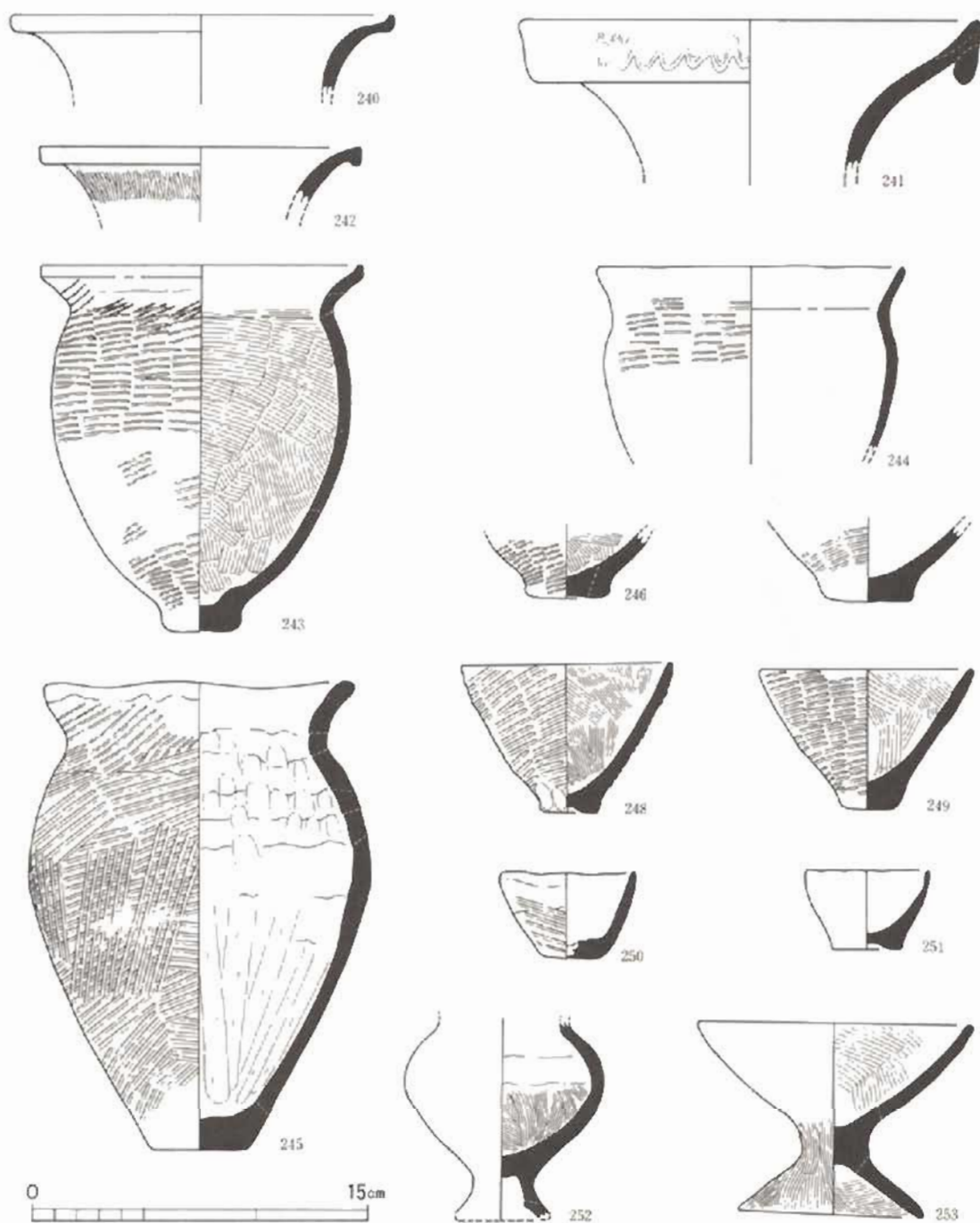
243は体部中位に最大径をもつものである。口縁端部は上方につまみあげている。体部外面は下半に右上がりのタタキ、上半は横方向のタタキを施している。体部内面は左上がりのハケで仕上げている。口縁部は最後に横方向のナデで仕上げる。245は体部上位に最大径をもつものである。口縁部はゆるやかに外反している。口縁端部は丸くおさめている。外面はタタキを施している。タタキは口縁部にまでみられる。内面は下半に縦方向のヘラケズリを施している。上半は粘土紐の接合痕が6条観察されている。ユビオサエの痕跡がみられ、縦方向にユビナデを施していたと思われる。比較的古い要素をもつ土器である。

鉢 4点図化している。

248と249はほぼ同じ形態をもつもので、小型のものである。外面はタタキを施し、内面はハケで仕上げている。248は底部にユビオサエの痕跡が認められる。

250と251はミニチュアの鉢である。250は外面にタタキ、251はナデを施している。

台付壺 1点図化している。短い脚台に体部中位に最大径をもつ。口縁部は欠失しているが、短く直立ぎみに立ち上がる形態のものか。

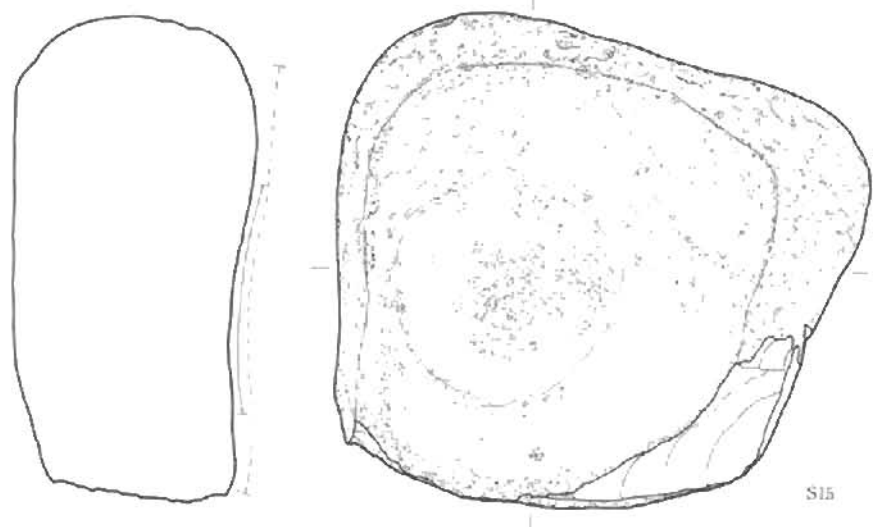


第96図 SH23出土土器

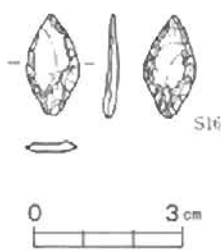
- 高坏 1点図化している。短い脚柱部に直線的に開く裾部をもっている。口縁部はやや内湾ぎみに開き、端部は丸くおさめている。
- 石器 石皿(S15)と石鏃(S16)が出土している。
- 石皿 長さ28.2cm、幅25.8cm、厚さ12.3cmである。上面は凹面をなしており、すり石あるいは叩石によるものと考えられる。
- 石鏃 凸基無基式のもので長さ2.00cm、幅1.05cm、厚さ0.25cmである。重さは0.5gである。石材はサヌカイトである。



第97図 SH23出土鉄器



第98図 SH23出土石器 (1)



第99図 SH23出土石器 (2)

鉄器 小型の鉄斧(M5)が出土している。基部幅2cm、先端部幅2.3cm、長さは5cmである。

時期 川除4期である。

第32表 SH23出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
240	甕	口径 (16.8) 底径: 器高 残3.5 胴径: 体部径:	外面 } 磨滅のため調整不明 内面:	外面 土に近い 黄褐色 内面: *	口縁部 1/8以下	
241	甕	口径 (20.2) 底径: 器高 残6.7 胴径: 体部径:	外面: 口縁部面波状文、胴部一部アテハケ 内面: 磨滅のため調整不明	外面: 淡黄褐色 内面: 灰褐色	口縁部 1/8以下	
242	甕	口径 (14.4) 底径: 器高 残2.1 胴径: 体部径:	外面 口縁部ヨコナデ、胴部縦ヘアミダキ 内面 口縁部ヨコナデ、以下は磨滅のため調整不明	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部1/4	
243	甕	口径 (14.2) 底径 (3.5) 器高 16.2 胴径 (11.8) 体部径 (13.5)	外面 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ下半は剥離痕しい 内面 口縁部ヨコナデ、体部上半右→左、下半下→上ヨコハケ5条/cm	外面 淡赤褐色 内面: 灰白	口縁部-体部 1/3、底部 完存	
244	甕	口径 (13.6) 底径: 器高 残8.1 胴径: 体部径 (13.1)	外面 口縁部ユビオサエ、体部3条/cmタタキ 内面 磨滅のため調整不明	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部-体部 にかけて 1/2	
245	甕	口径 13.4 底径 (4.0) 器高 20.8 胴径: 体部径 (15.3)	外面 右上り3条/cmタタキのち縦方向のタタキ 内面 体部下半ヘラケズリ、上半ユビオサエ、粘土組織顕著	外面: 土に近い 褐色 内面: 灰白	体部のみ1/2、他は完存	体部下半ス ズ付着
246	甕	口径: 底径 (3.6) 器高 残7.9 胴径: 体部径:	外面: 4条/cmタタキ 内面 7条/cmハケ、底部は粘土を充填	外面: 明赤褐色 内面: 褐灰	底部のみ1/2	

第33表 SH23出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
247	壺	口径 : 底径 3.8 器高 : 残3.4 頸径 体部径	外面 : 3条/cmタタキ 内面 : ナテ	外面 : 灰白 内面 : 浅黄橙	底部完存	
248	鉢	口径 : 9.3 底径 2.7 器高 6.5 頸径 体部径	外面 : 3条/cmタタキ、底部ユヒオサエ 内面 : 8条/cmハケ	外面 : 灰白 内面 : 濃い黄橙	口縁完存	
249	鉢	口径 : [9.2] 底径 2.4 器高 : 6.2 頸径 体部径 :	外面 : 3条/cmタタキ 内面 : 4条/cmハケ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁端部一部残、他は完存	
250	鉢	口径 : [5.9] 底径 2.5 器高 : 3.9 頸径 体部径 :	外面 : 一部のみ3条/cmタタキ、粘土結痕 内面 : ナテ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁完存	
251	鉢	口径 : [5.6] 底径 3.0 器高 : 3.5 頸径 体部径 :	外面 : 体部下→上ナテのち口縁部ヨコナテ 内面 : 体部下→上ナテのち口縁部ヨコナテ	外面 : 橙 内面 : 橙	底部完存 他は1/3	
252	台付壺	口径 : 底径 : 器高 : 9.8.5 脚柱径 : 2.8 体部径 : 8.9	外面 : ヘラミダキ一部残 内面 : 体部下半6条/cm下→上ハケ、のちヨコナテ、粘土結痕	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部、底部欠、他は口縁完存	
253	鉢	口径 12.4 底径 8.3 器高 8.6 頸径 3.0 体部径	外面 : 口縁端部ヨコナテ、体部タテナテ、舞部6条/cmタテハケ 内面 : 5条/cmタテハケ	外面 : 灰白、橙 内面 : 灰白、濃い橙	体部1/2 脚部1/8残	

SH24 (図版15・40・41)

検出状況 I-2区で検出している。SD25・26を切って造られている。SH23を調査したのちに検出した。

形状・規模 平面形は基本的に隅円の方角を呈している。

規模は北辺4.00m、東辺3.80m、南辺4.00m、西辺3.62mを測る。検出面つまりSH23の床面から、SH24の床面までの深さは約20cmで床面の標高は148.12mである。

検出した床面積は16.85㎡である。当住居跡の深さはSH23の検出面からの深さの30cmをSH24の検出面からの深さにプラスして50cmとなる。

埋土 埋土は4層にわたって堆積している。

上層から順に炭化物を多く含む暗灰褐色シルト、暗灰茶褐色シルト、黄褐色極細砂、黄褐色シルトを多く含む暗灰褐色シルトが堆積している。

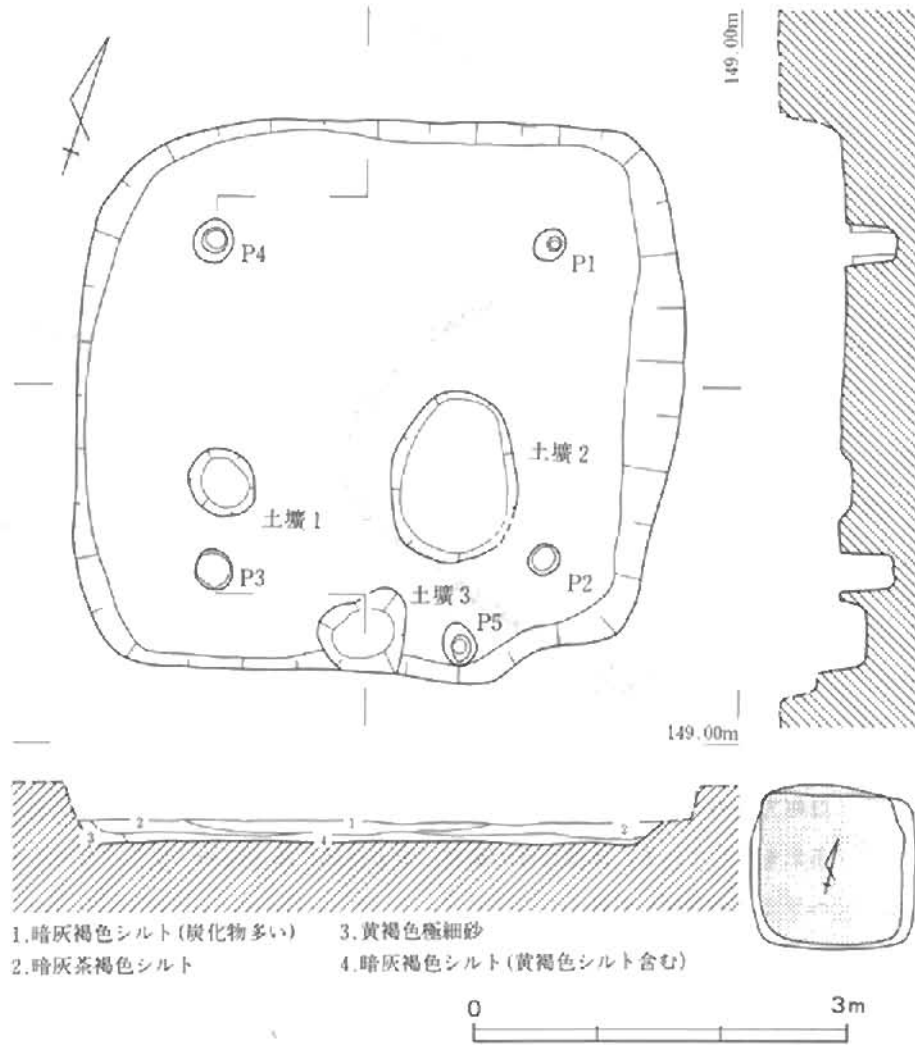
屋内施設 柱穴・土塙を検出した。

柱穴 4穴検出している。4穴とも支柱穴を構成している。

P1は、掘り方径28cm、柱痕径10cmを測り、床面からの深さは42cmである。P2は、掘り方径25cm、柱痕径17cmを測り、床面からの深さは34cmである。P3は、掘り方径29cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは44cmである。P4は、掘り方径32cm、柱痕径20cmを測り、床面からの深さは43cmである。

柱間距離はP1～P2間が2.50m、P2～P3間が2.68m、P3～P4間が2.68m、P4～P1間が2.71mである。北辺側の柱穴であるP1とP4は壁から約0.80～1.00m内側、南辺側の柱穴であるP2とP3は壁から約0.70～0.80m内側に掘られている。柱間の距離も20cm内外の誤差で一定しており方角を呈する。

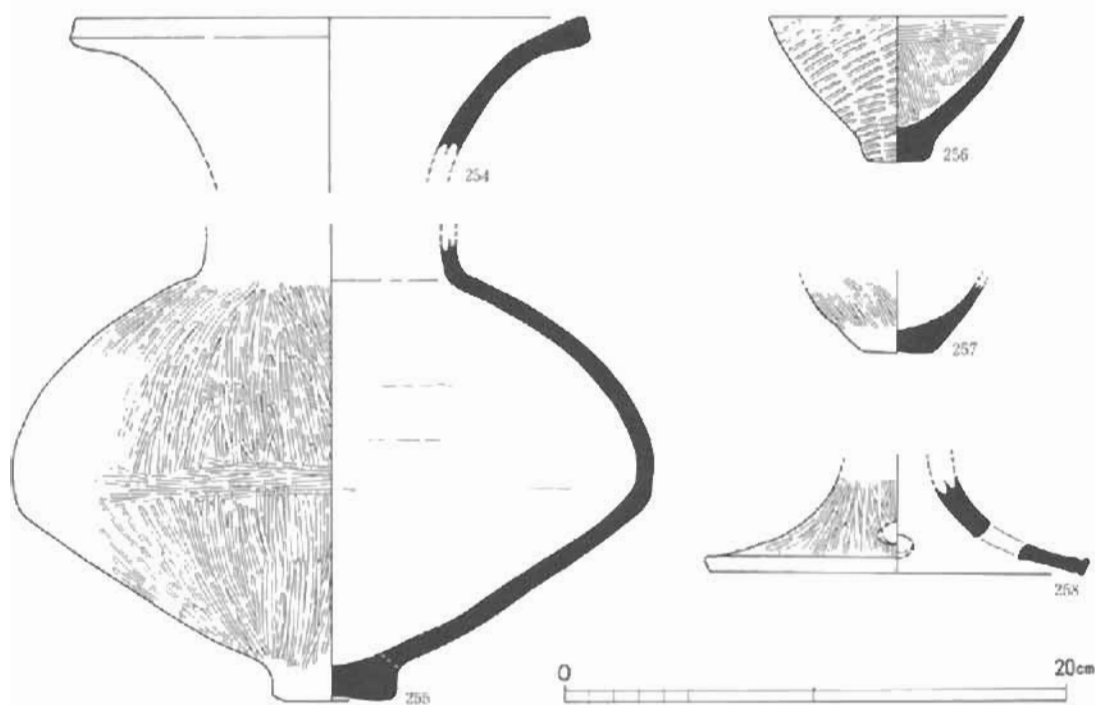
当住居跡の柱穴は、上層のSH23の柱穴とまったく同じ位置で検出している。このこと



第100図 SH24

からSH23は当住居跡の柱をそのまま使用したか、同じ位置で柱を据え換えて、床面を20cmかさあげして造られたものと考えられる。

- 土壌** 3ヶ所で土壌を検出している。
- 土壌1** 住居跡の南西部で検出された。形状は円形を呈している。規模は長軸方向に58cm、短軸方向に50cmを測り、床面からの深さは10cmである。
- 土壌2** 住居跡の南東部で検出された。形状は楕円形を呈している。規模は長軸方向に132cm、短軸方向に100cmを測り、床面からの深さは10cmである。
- 土壌3** 住居跡の南壁の壁際に接して検出された。形状は不定形を呈している。規模は長軸方向に75cm、短軸方向に65cmを測り、床面からの深さは21cmである。土壌3は検出された位置や形状、深さなどから貯蔵穴と考えている。
- 出土遺物** 土器のみが出土している。そのうち図化できたものは5点である。
- 出土状況** 壺・鉢・高環が出土している。鉢(256)のみが土壌3から出土状況がおさえられる形で出土している。他のものはすべて埋土を掘削中の出土である。
- 壺** 2点図化している。
- 254は広口壺か長頸壺の口縁部である。内外面ともに、口縁部には横方向のナデ、頸部に



第101図 SH24出土土器

は縦方向のナデで仕上げている。255は広口長頸壺の体部になると考えられる。形状は算盤玉形を呈している。体部外面の調整は最大径部に横方向のヘラミガキ、その他は縦方向のヘラミガキを施している。

鉢 2点図化している。

256は小型の鉢である。口縁部から底部にかけて外面は右上がりのタタキを施している。内面は底部から体部にかけて縦方向のハケ、口縁部にその後横方向のハケを施している。257はミニチュアの鉢である。体部には縦方向のヘラミガキを施している。

高坏 1点図化している。258は脚部である。大きく開いた裾部に裾端部を上下に拡張している。縦方向のヘラミガキを施し、4孔の穿孔が観察される。

時期 川除5期である。

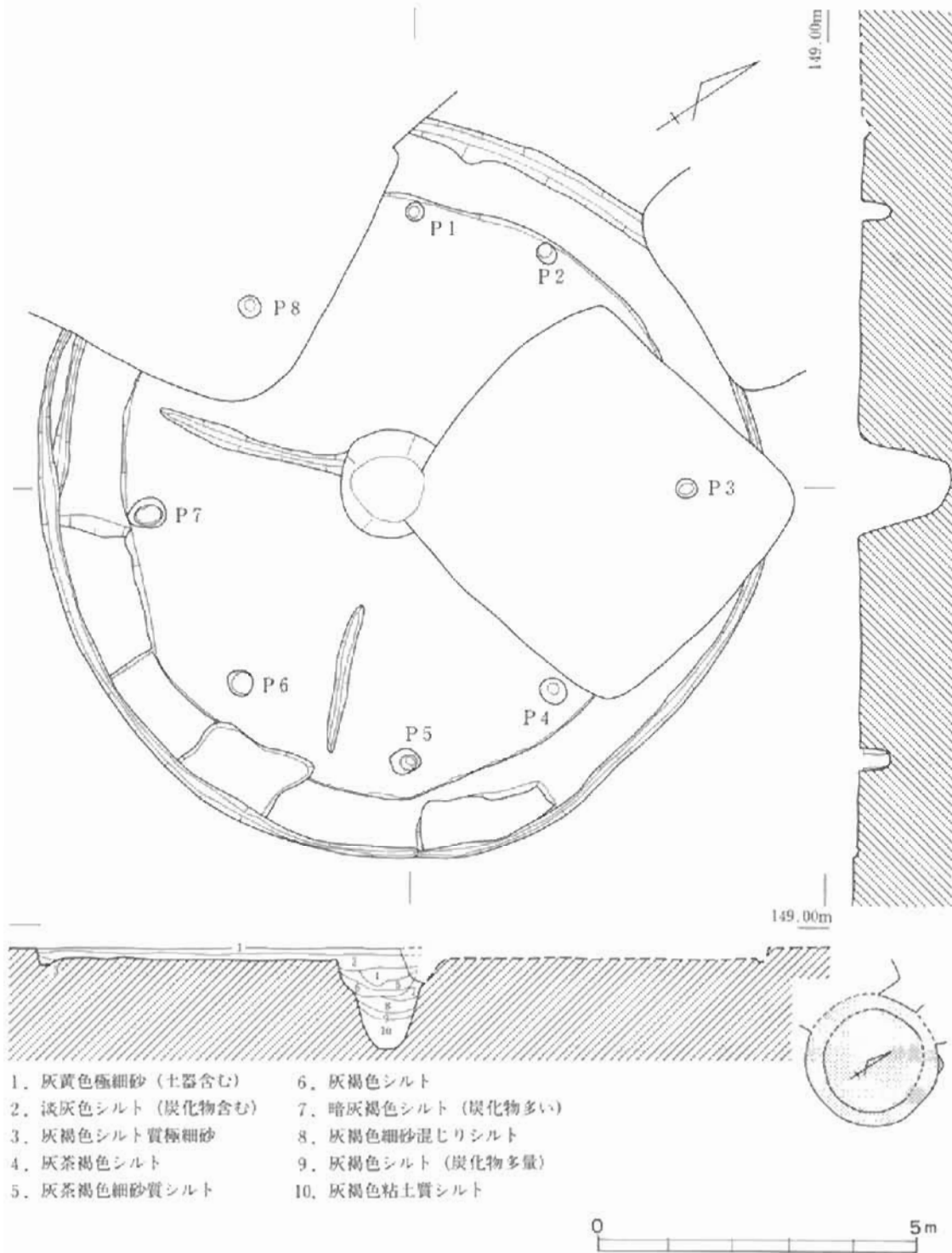
第34表 SH24出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
254	壺	口径 : 20.4 器高 : 残5.5 体部径	外面 : 口縁端部ココナデ、他は磨滅のための調整不明 内面 : 口縁部ココナデ、以下はタテナデ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁一部 約1/8	
255	壺	口径 : 5.0 器高 : 残18.5 体部径 : 25.6	外面 : 体部最大径部に横ヘラミガキ、体部上半ハケのち横ヘラミガキ 体部下半縦ヘラミガキ、底部木の磨滅 内面 : 磨滅のための調整不明、粘土結核あり	外面 : 淡褐色 内面 : 褐灰	体部1/2 底部完全	長頸壺
256	鉢	口径 : 10.0 器高 : 5.2 体部径 : 12.4	外面 : 3条/cmタタキ 内面 : 口縁部6条/cmココナデ、以下タテハケ	外面 : 明褐色 内面 : 灰黄褐色	底部のみ1/2欠	
257	鉢	口径 : 2.8 器高 : 残2.8 体部径 : 7.8	外面 : 縦ヘラミガキ 内面 : ナデ	外面 : 淡黄 内面 : 灰白	底部完全 体部わずか	
258	高坏	口径 : 15.2 器高 : 残4.0 体部径 :	外面 : 縦ヘラミガキ、円孔以下はココナデ、4孔 内面 : 円孔以下ココナデ	外面 : 濃い黄褐色 内面 : *	脚部約1/2	

SH25 (図版16・41・56)

検出状況 1-2区で検出している。当住居跡の北側部分はSH23・24によって切られている。また西側部分はSH21によって切られている。これら住居跡は当住居跡よりも深く掘り下げて造られているため、床面は欠失し、検出面での輪郭も失われている。

形状・規模 平面形は円形を呈している。
規模は径11.5mを測る。



第102図 SH25

第3節 Ⅰ区の調査

検出面から、床面までの深さは約20cmで、床面の標高は148.46mである。検出した床面積は切り合いのため正確ではないが、推定で95.7㎡である。

埋土

中央土壌部分の埋土を除いて3層が堆積している。

上層に土器を含む灰黄色極細砂、下層に淡灰色の炭化物を含むシルトが堆積し、周壁溝部分には褐灰色シルト質極細砂が堆積している。

屋内施設

ベッド・柱穴・周壁溝・中央土壌・溝を検出している。

ベッド

当住居跡と切り合いにあるSH21とSH23・24の部分においては確認することができなかったが、全体の約2/3の範囲にわたって検出した。住居跡の平面形同様円形を指向し、本来は全周していたであろう。地山を削り出して整形したもので、幅約0.8~0.9mで、床との比高は5cmである。ベッドの範囲内で部分的に高くなったところが3ヶ所検出されている。長さは1.50m、1.80m、2.00mで、ベッドからの高さは1~9cmである。ベッド部分の面積は約31.4㎡で、対床面積比は32.8%である。

周壁溝

ベッドのレベルでの幅25cmを測り、このレベルからの深さは10cmで、底部の幅は10cmである。また検出面からの深さは28cmである。

柱穴

柱穴は合計8穴検出している。

P1は掘り方径30cm、床面からの深さ8cmである。P2は掘り方径30cm、床面からの深さ15cmである。P3は掘り方径35cm、床面からの深さ15cmである。P4は掘り方径40cm、床面からの深さ52cmである。P5は掘り方径46cm、柱径24cm、床面からの深さ46cmである。P6は掘り方径40cm、床面からの深さ45cmである。P7は掘り方径60cm、柱径40cm、床面からの深さ21cmである。P8は掘り方径34cm、床面からの深さ33cmである。

柱間距離はP1~P2間が2.16m、P2~P3間が4.30m、P3~P4間が3.74m、P4~P5間が2.52m、P5~P6間が2.94m、P6~P7間が3.00m、P7~P8間が3.60m、P8~P1間が2.94mである。8穴ともベッド内側ラインの落ちたところに位置している。P3とP8はそれぞれ切り合っている住居跡の床面(SH23・24とSH21)で検出している。

中央土壌

中央土壌は、当住居跡のほぼ中心部に位置している。

規模は径1.6~1.7mの円形で、床面からの深さは1.4mである。埋土は7層に分かれて堆積している。基本的に炭化物を多く含むシルト層と細砂混じりシルト層の互層である。面積は2.1㎡、対床面積比は2.2%である。土手は確認されていない。

溝

中央土壌から周壁溝方向にのびる溝が2本検出された。このうち南西方向にのびるものは幅20~35cm、床面からの深さ6cm、南東方向にのびるものは幅20cm、床面からの深さ5cmである。

出土遺物

土器・石器・玉が出土している。

土器

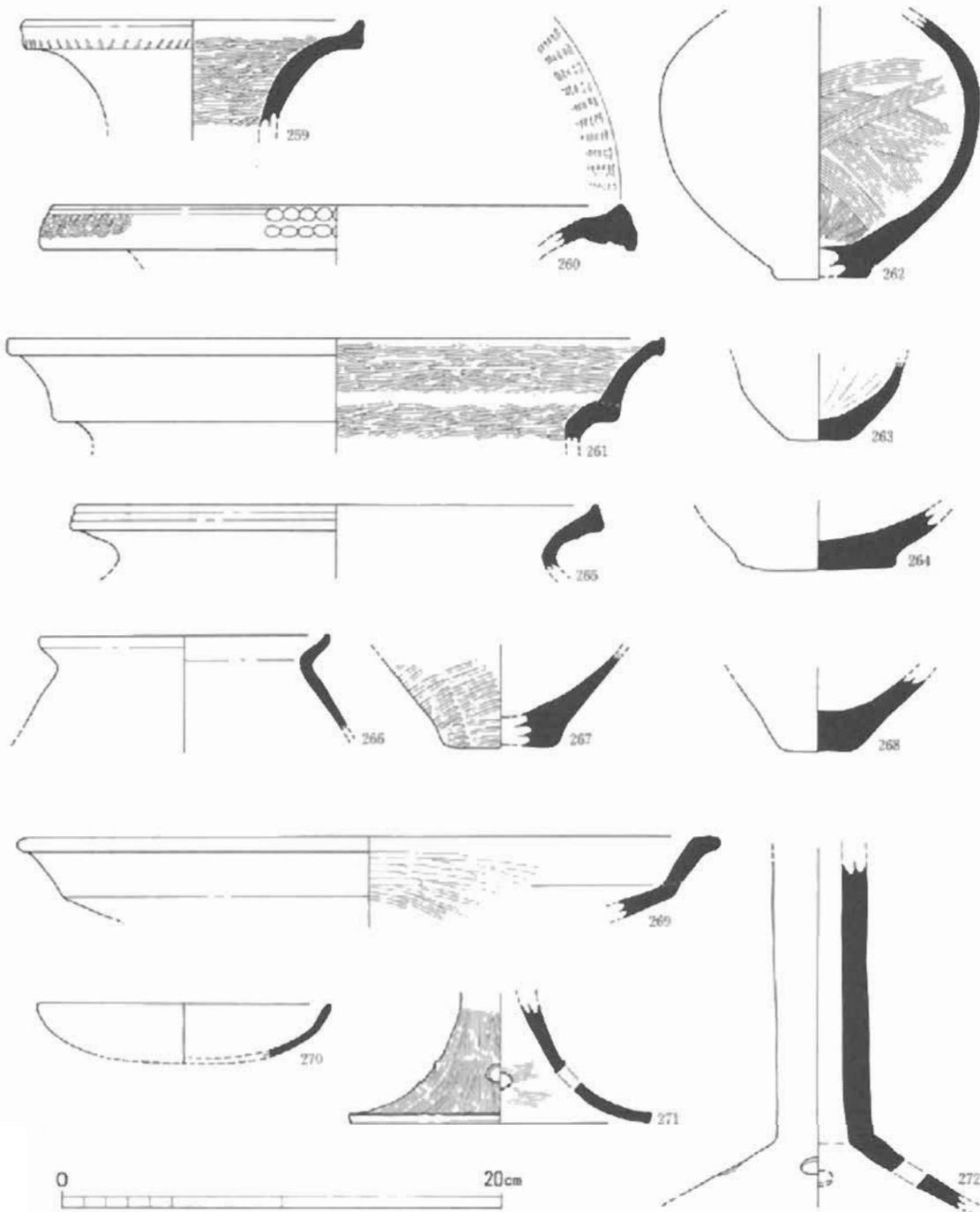
壺・甕・高坏・器台・鉢の各器種が出土している。このうち図化できたものは14点である。

壺

6点図化している。

259は広口壺である。口縁端部を上方につまみあげている。口縁部下部には刻み目を施している。

260は広口壺である。口縁端部下方に垂下させて端面を形成している。口縁端面には波状



第103図 SH25出土土器

文を施し、10個単位以上の円形浮文を貼りつけている。口縁端部内面には刺突文が観察される。

261は二重口縁部壺である。口縁端部を上方につまみ上げている。内面は横方向のヘラミガキを施している。外面は磨減が激しいが、ヘラミガキを施していたようである。

甕 4点図化している。口縁部が2点と底部が2点である。

265は口縁端部を上方につまみ上げた甕である。口縁端面には擬凹線を施している。

266は短く外半する口縁部にやや直線的な肩部をもつ甕である。

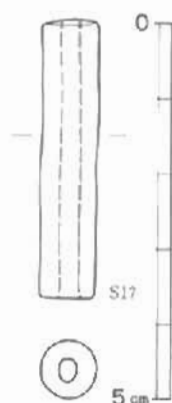
高坏 4点図化している。坏部が2点と脚部が2点である。

269は口縁部が外反するものである。口縁部と体部の境は明瞭である。調整は外面は磨滅のため不明である。内面には横方向のヘラミガキを施している。

270は小型のもので、碗形の高杯の坏部である。調整は磨滅のため不明である。

271は脚部である。なだらかに外反する裾部をもっている。裾端面は上下に拡張している。外面には縦方向のハケを施している。穿孔は4孔である。

272は脚部である。裾端部を欠失している。長い円柱状の脚柱部をもつもので、裾部は屈曲して外方に直線的に開いている。穿孔は4孔である。



第104図 SH25出土管玉

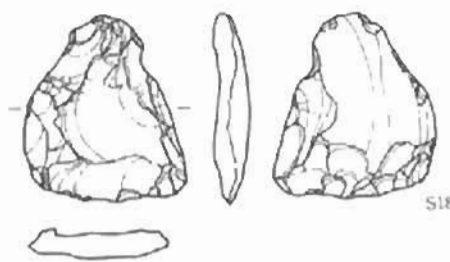
石器 2点図化している。

未製品 サヌカイトの未製品が出土している。

石庖丁 長さ4.45cm、幅2.65cm、厚さ0.50cmで破片である。

玉 碧玉製の管玉が1点出土している。長さは3.7cm、直径は0.75cm、穿孔の直径は0.25cmである。重さは3.4gである。

時期 川除2期である。



第105図 SH25出土石器

第35表 SH25出土土器観察表(1)

番号	器種	仏量 (cm)	調整	色調	穿孔率	備考
259	壺	口径 :15.4) 底径 : 器高 残3.5) 胴径 : 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、脚部ミダツカ 内面 口縁部ヨコナテ、脚部にかけて横ヘラミガキ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部のみ 約1/4	
260	壺	口径 (25.8) 底径 : 器高 残2.0) 胴径 : 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、端面成状文、内面浮文を2段に5個以上 内面 口縁部ヨコナテ、端面斜交文	外面 濃い黄 内面 濃い黄	口縁部のみ 約1/8	
261	壺	口径 (29.6) 底径 : 器高 残5.0) 胴径 : 体部径	外面 磨滅激しいがヘラミガキ 内面 横ヘラミガキ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部のみ 約1/4	
262	壺	口径 底径 : (4.0) 器高 残11.6) 胴径 : 体部径 (14.4)	外面 ヘラミガキ 内面 11度/cmハケ	外面 淡黄 内面 淡黄	体部1/2 底部1/3	
263	壺	口径 底径 : (2.6) 器高 残3.5) 胴径 : 体部径	外面 ナテ 内面 ヘラナテ	外面 淡黄 内面 淡黄	底部のみは 欠失	
264	壺	口径 底径 : 6.8 器高 残2.3) 胴径 : 体部径	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 淡黄 内面 橙	底部3/4	

第36表 SH25出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
265	甕	口径 (24.2) 底径 器高 残2.5 頸径 19.8 体部径	外面：口縁部ヨコナテ、口縁部裾内縁 内面：口縁部ヨコナテ	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	口縁部1/3	
266	甕	口径 (13.2) 底径 器高 残4.1 頸径 11.5 体部径	外面： 内面： 磨滅のための調整不明	外面：黄 内面：黄	口縁部-体部 約1/8	
267	甕	口径 底径 5.0 器高 残4.1 頸径 体部径	外面：3.5cmタタキ 内面：ナテ	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	底部のみの 1/3	
268	甕	口径 底径 3.3 器高 残3.4 頸径 体部径	外面：ヘラナテ 内面：ナテ	外面：赤灰 内面：赤灰	底部のみ完 存	
269	高坏	口径 (30.8) 底径 器高 残2.7 脚径 体部径	外面：磨滅のための調整不明 内面：口縁部横ヘラナテ	外面：赤黄 内面：灰白	口縁部1/16	
270	高坏	口径 (13.2) 底径 器高 残2.4 頸径 体部径	外面： 内面： 磨滅のための調整不明	外面：灰白 内面：灰白	口縁部1/3	
271	高坏	口径 底径 (11.5) 器高 残5.4 頸径 体部径	外面：面かいナテハケ、4孔 内面：3.5cmハケのら横ヘラナテ	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	脚部1/2	
272	高坏	口径 底径 器高 残15.1 脚径 4.2 体部径	外面：4孔 内面： 磨滅のための調整不明	外面：赤黄 内面：赤黄	脚部のみ	

SH26 (図版16)

検出状況 I-2区で検出している。当住居跡の北側部分はSH23・24によって切られている。また西側部分はSH21によって切られている。これらの住居跡は当住居跡よりも深く掘り下げて造られているため、床面は欠失し、検出面での輪郭も失われている。SH26はSH25の真下に位置していたため、SH25の調査終了後に掘削を開始した。

形状・規模 平面形は円形を呈している。
規模は径9.0mを測る。検出面から、つまりSH25の床面からSH26の床面までの深さは約5cmで、床面の標高は148.40mである。

検出した床面積はSH21・23・24との切り合いのため正確ではないが、復元すれば60.4㎡である。

埋土 中央土壇部分の埋土を除いて1層が堆積している。

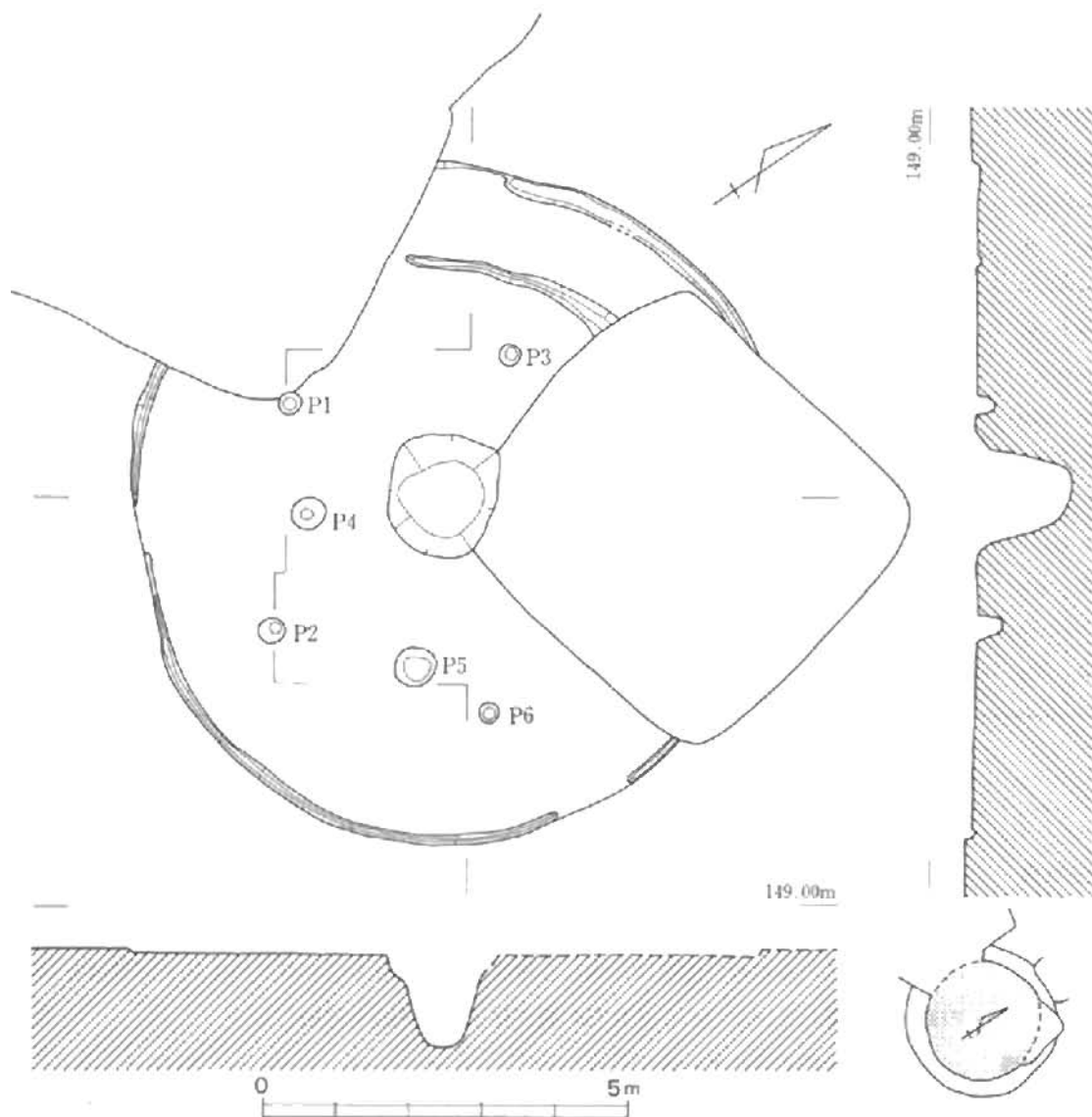
淡灰色シルト層で炭層・焼土層は確認できなかった。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土壇・溝を検出している。

周壁溝 床面でのレベルでの幅5~10cmを測り、このレベルからの深さは4cmで、底部の幅は4cmである。また検出面からの深さは14cmである。さらに当住居跡の北側で部分的に周壁溝が検出された。約1.2m内側で幅15~35cm、深さ14cmを測る。この周壁溝から推定できる円の直径は約6.5mである。

柱穴 柱穴は合計6穴検出している。このうちP1・P2・P3・P6の4穴が主柱穴を構成していると考えている。

P1は掘り方径30cm、床面からの深さ15cmである。P2は掘り方径38cm、床面からの深



第106図 SH26

さ47cmである。P3は掘り方径30cm、床面からの深さ28cmである。P4は掘り方径50cm、床面からの深さ45cmである。P5は掘り方径58cm、床面からの深さ21cmである。P6は掘り方径30cm、床面からの深さ13cmである。

柱間距離はP1～P2間が3.00m、P3～P4間が3.52m、P4～P5間が2.60m、P2～P6間が3.15mである。

中央土壇 中央土壇は、当住居跡のほぼ中心部に位置している。

規模は径1.45～1.65mの円形で、床面からの深さは1.3mである。面積は2.0㎡、対床面積比は3.3%である。土手は確認されていない。この中央土壇はSH25のものと共有である。

拡張 当住居跡(SH26)とSH25とは位置的に全く同じ所で検出している。さらにSH26のプランのラインとSH25のベッドの屈曲部が一致すること、中央土壇を共有していることなどから、SH25はSH26を拡張してベッド部分にしていることが明らかである。

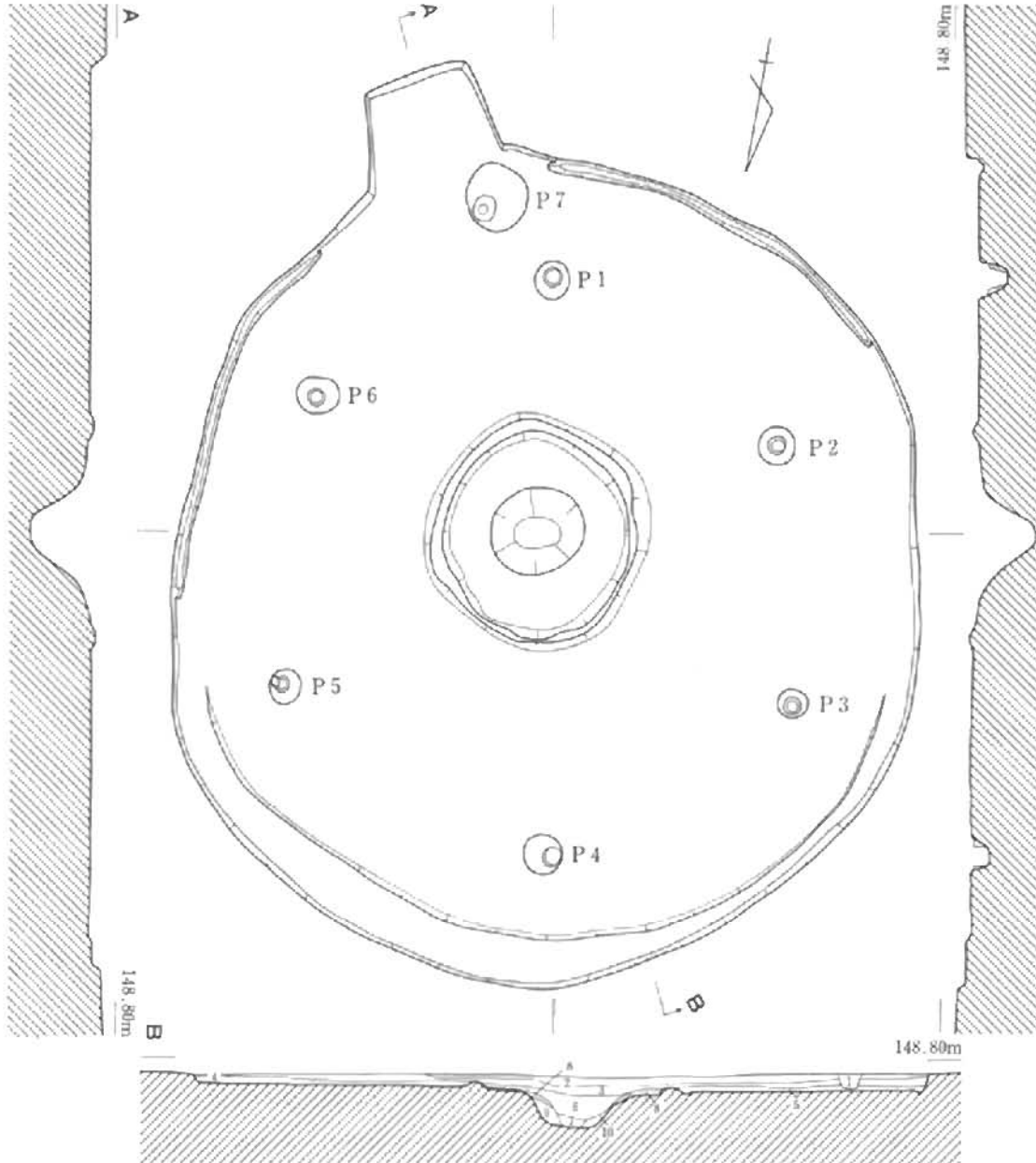
出土遺物 当住居跡からは遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため、正確な時期は明らかではない。SH25が当住居跡の拡張であることを考慮すれば、SH25の直前の時期が与えられる。

SH27 (図版17)

検出状況 1-2区で検出している。SB13によって切られている。

形状・規模 平面形は円形で張り出し部を南東側にもっている。径8.5mを測る。検出面から、床面まで



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 上層の柱穴 | 6. 暗灰褐色細混じりシルト |
| 2. 暗灰色細砂混じりシルト | 7. 灰褐色シルト |
| 3. 灰褐色粗砂混じりシルト | 8. 灰褐色シルト (炭化物多い) |
| 4. 灰色小礫-中礫 | 9. 褐色中砂混じりシルト |
| 5. 暗灰褐色シルト (炭化物多い) | 10. 黄褐色シルト (炭化物多い) |



第107図 SH27

第3節 I区の調査

の深さは約18cmで、床面の標高は148.44mである。検出した床面積は、張出し部を含めて63.5㎡である。

埋土 中央土塙部分の埋土を除いて4層にわたっている。

上層から順に暗灰色細砂混じりシルト、灰褐色粗砂混じりシルト、灰色小礫～中礫、炭化物を多く含む暗灰褐色シルトの堆積が認められる。

屋内施設 張出し部・柱穴・周壁溝・中央土塙を検出している。

張出し部 当住居跡の南東部分に張出し部を検出している。

規模は長さ1.1m、幅は基部で1.6m、先端部で1.2m、床面へは比高差約10cmの段差をもってつながっている。周壁溝はこの部分で途切れて無くなっている。張出し部の左側の基部に1ヶ所柱穴を検出している。

周壁溝 床面での幅10cmを測り、このレベルからの深さは3cmで、底部の幅は6cmである。また検出面からの深さは約20cmである。

柱穴 柱穴は合計7穴検出しているが、支柱穴はP7を除いた6穴である。

P1は掘り方径42cm、柱痕径24cm、床面からの深さ31cmである。P2は掘り方径42cm、柱痕径20cm、床面からの深さ47cmである。P3は掘り方径34cm、柱痕径20cm、床面からの深さ36cmである。P4は掘り方径46cm、柱痕径20cm、床面からの深さ34cmである。P5は掘り方径34cm、柱痕径16cm、床面からの深さ39cmである。P6は掘り方径42cm、柱痕径18cm、床面からの深さ43cmである。以上の6穴が支柱穴を構成しているものである。P7は張出し部の基部に存在しているもので、掘り方径74cm、柱痕径26cm、床面からの深さ52cmである。

柱間距離はP1～P2間が3.20m、P2～P3間が2.96m、P3～P4間が3.24m、P4～P5間が3.66m、P5～P6間が3.30m、P6～P1間が3.08mである。

中央土塙 中央土塙は、当住居跡のはほぼ中心部に位置している。

規模は径0.98～1.08mの円形で、床面からの深さは67cmである。

埋土は5層に分かれて堆積している。上層から暗灰色細砂混じりシルト、灰褐色シルト、炭化物を多く含む灰褐色シルト、褐色中砂混じりシルト、炭化物を多く含む黄褐色シルトの堆積が認められる。

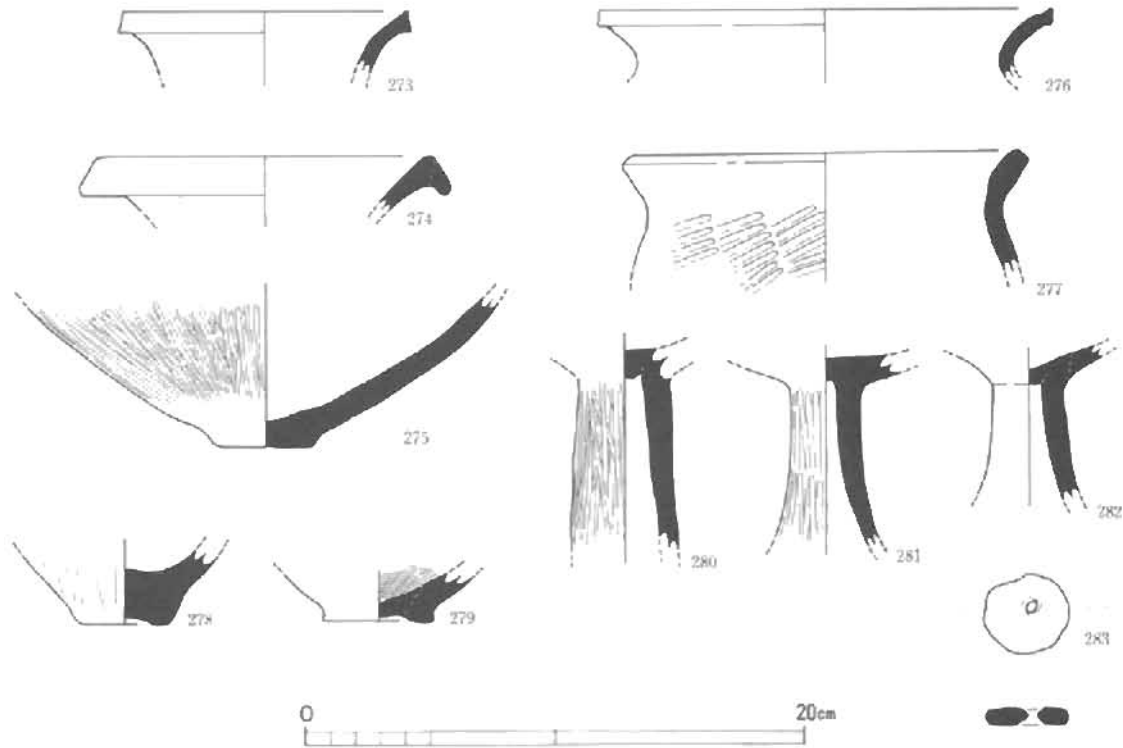
中央土塙の外側には幅32cm床面からの比高8cm、径2.6mの土手が巡っている。土手を含めた面積は5.3㎡、対床面積比は8.3%である。

拡張 住居跡の北側部分は外側に25～60cmの幅で拡張されている。住居跡の床面との比高は約7cmである。このため内側の住居跡のプランはベッドの屈曲部の様相を呈している。周壁溝はこの拡張部分にはのびてこない。平面プランは拡張のためやや楕円形に近づいている。拡張された住居跡はその部分をベッドとして利用していたと考えられる。

出土遺物 土器と石器が出土している。このうち図化できたものは12点である。いずれの土器も埋土の掘削途中に出土していて、床面直上に原位置を保って検出されたものではない。

土器 壺・甕・高環・土製紡錘車の各器種が出土している。いずれの土器も口縁部、底部、あるいは脚柱部のみ残存で、反転復元により図化している。

壺 3点図化している。口縁部のものが2点と、体部下半から底部にかけてのものが1点で



第108図 S H27出土土器

ある。

273は広口壺の口縁部である。口縁端部を少し上方につまみ上げている。横方向のナデを施している。

274は広口壺の口縁部である。口縁端部を下方に垂下させて口縁端面を形成している。磨滅のために調整は不明である。

甕 4点図化している。口縁部のものが2点と底部のものが2点である。

276は口縁部である。口縁端部を上方につまみ上げて口縁端面を形成している。横方向のナデで仕上げている。

277は口縁部から体部上位にかけてのものである。緩やかに外方に開く口縁端部は丸くおさめている。体部には右上がりのタタキを施し、口縁部には横方向のナデで仕上げている。内面はへら状の工具によるナデを体部に施し、口縁部は横方向のナデである。

高坏 3点図化している。いずれも脚部である。

円錐状の脚柱部をもつものでなだらかにひろがる裾部をもつと思われる。いずれも中空のものである。

石器 2点出土しているが、図化しているのは石鏃の1点のみである。

図化していないものはサヌカイト製の剝片である。

石鏃 サヌカイト製のもので長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmである。

重さは0.58gである。

時期 川除4期である。



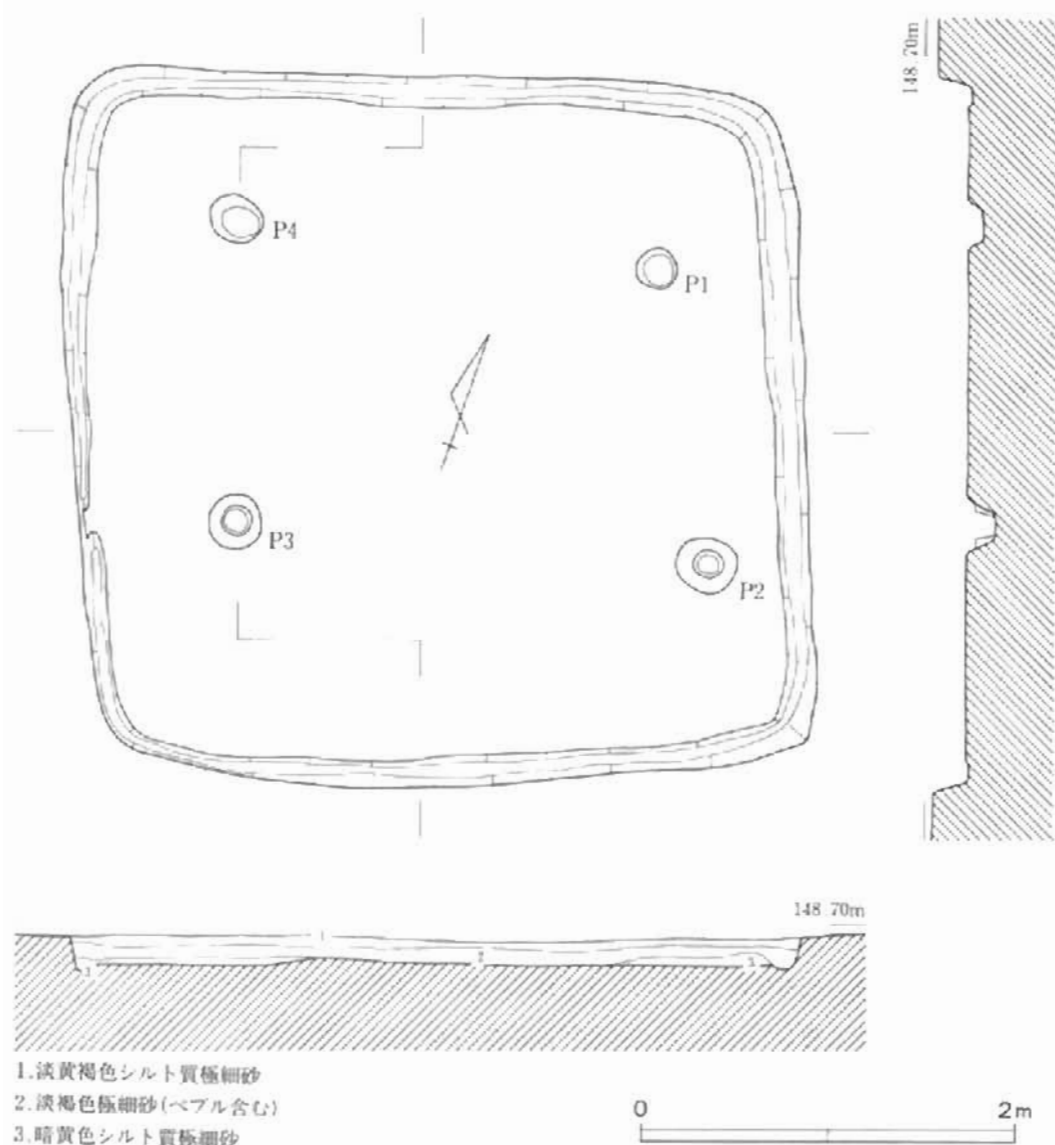
第109図 S H27出土石器

第37表 SH27出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
273	壺	口径 : (11.4) 底径 : 器高 : 残2.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部のみ 約1/4	
274	壺	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残2.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部のみ 約1/6	
275	壺	口径 : 底径 : 3.6 器高 : 残5.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨へらミダキ 内面 : ナデ	外面 : 橙 内面 : 橙	底部のみ完 存	
276	甕	口径 : (18.0) 底径 : 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 黄灰 内面 : 黄灰	口縁部1/6	
277	甕	口径 : (15.2) 底径 : 器高 : 残4.7 頸径 : (14.2) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、頸部はへら状工具によるナデ	外面 : 黄灰 内面 : 黄灰	口縁部1/2	
278	甕	口径 : 底径 : 3.5 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部強いへらナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄 内面 : 浅黄	底部のみ完 存	
279	甕	口径 : 底径 : (4.2) 器高 : 残2.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部ユヒオサエ 内面 : ハケ(工具痕)	外面 : 灰 内面 : 灰白	底部のみ約 2/3	
280	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残8.0 脚柱径 : 3.6 体部径 :	外面 : 磨へらミダキ 内面 :	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	脚柱部一部 欠	
281	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残7.7 脚柱径 : 2.9 体部径 :	外面 : 磨へらミダキ 内面 : へらケズリ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	脚柱部一部 欠	
282	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残6.1 脚柱径 : (2.8) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : におい 黄橙 内面 : *	脚柱部1/2 坏部わずか	
283	紡錘車	長径 : 3.4 厚 : 0.7 短径 : 3.2 孔径 : 0.5	外面 : 内面 :	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙		

SH28 (図版18・41)

- 検出状況** Ⅰ-Ⅱ区で検出している。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は基本的に方形を呈している。規模は北辺が3.50m、東辺が3.32m、南辺が3.64m、西辺が3.38mである。検出面から床面までの深さは15cmで、床面の標高は148.46mである。検出した床面積は12.21㎡である。
- 埋土** 埋土は3層の土層の堆積が見られる。
上層から順に淡黄褐色シルト質極細砂、淡褐色極細砂、暗黄色シルト質極細砂の堆積が認められる。
- 屋内施設** 柱穴・周壁溝を検出している。
- 周壁溝** 床面での幅約12cmを測り、このレベルからの深さは3cmで、底部の幅は6cmである。また検出面からの深さは18cmである。
周壁溝はほぼ全周しているが、西壁のごく一部分で途切れている。
- 柱穴** 4穴検出している。
P1は掘り方径22cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは15cmである。P2は掘り方径33cm、柱痕径16cmを測り、床面からの深さは11cmである。P3は掘り方径28cm、柱痕径



第110図 SH28

16cmを測り、床面からの深さは16cmである。P4は掘り方径30cm、床面からの深さは8cmである。

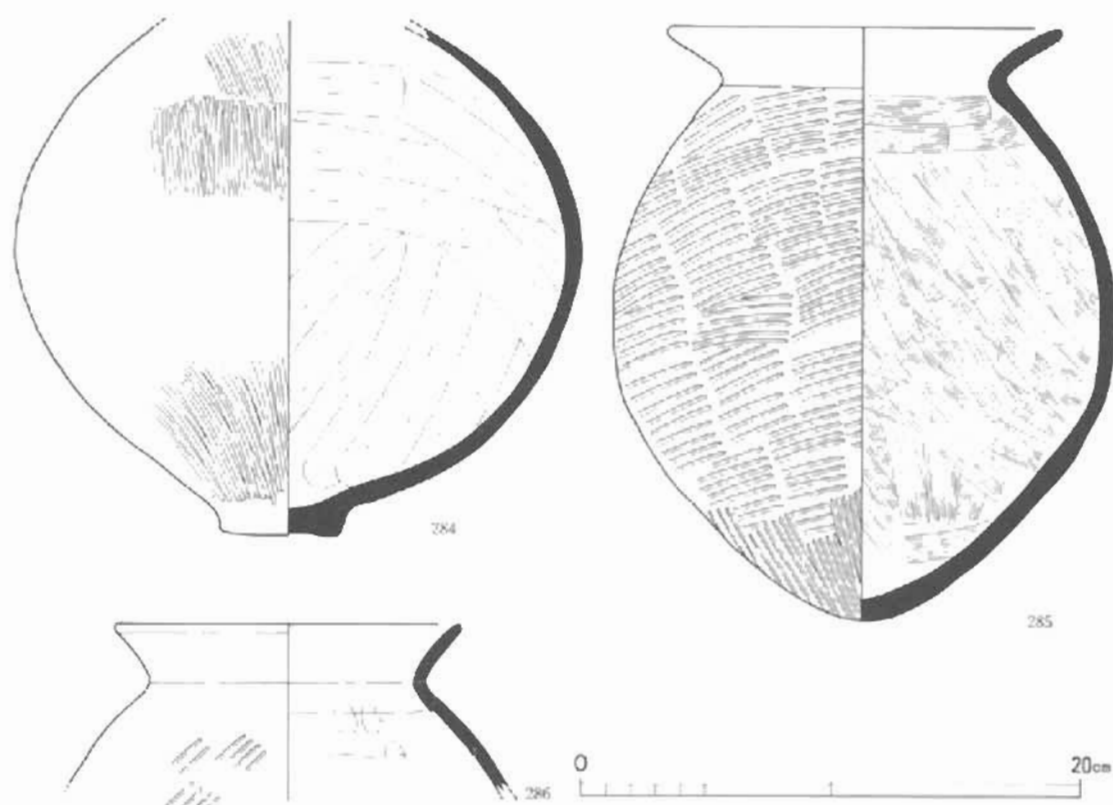
柱間距離はP1～P2間が1.58m、P2～P3間が2.55m、P3～P4間が1.58m、P4～P1間が2.26mである。

出土遺物 土器と鉄器が出土しており、そのうち図化できたものは4点である。埋土掘削中に出土したもので、床面に原位置を保って出土したものはない。

土器 小型丸底壺・甕が出土している。

壺 284は壺の体部から底部にかけてのものである。口縁部は欠失している。器形は球形に近い形状を呈している。調整は外面は細かい縦方向のヘラケズリを体部の上位と下位に施している。体部中位については磨滅のために観察は不可能である。内面は体部中位以下に下から上に向かっての比較的幅の広いヘラケズリを、体部上半には左上がりのヘラケズリを施している。

甕 285は残存率約1/2の甕である。体部から大きく外反する口縁部をもつ。体部中位に最大径をもっている。底部は丸底化の傾向を示している。調整は外面は体部全面に右上がりの



第111図 S H28出土土器

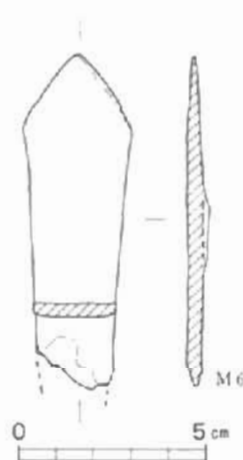
タタキを施し、底部には縦方向のタタキを施している。口縁部には横方向のナデで仕上げている。内面は左上がりのハケを体部に施し、上位には横方向のハケを施している。ハケの単位は非常に細かい。口縁部には横方向のナデで仕上げている。

286は甕の口縁部から体部上位にかけてのものである。調整は外面は体部に右上がりのタタキを施している。内面は肩部に粘土紐の接合痕が観察される。ユビオサエ痕が見られる。口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。

鉄器

1点図化している。

M6は鉄鏃であろうと考えている。長さ8.90cm、幅2.90cm、厚さ6.50mmである。比較的大型のものである。



第112図 S H28出土鉄器

時期

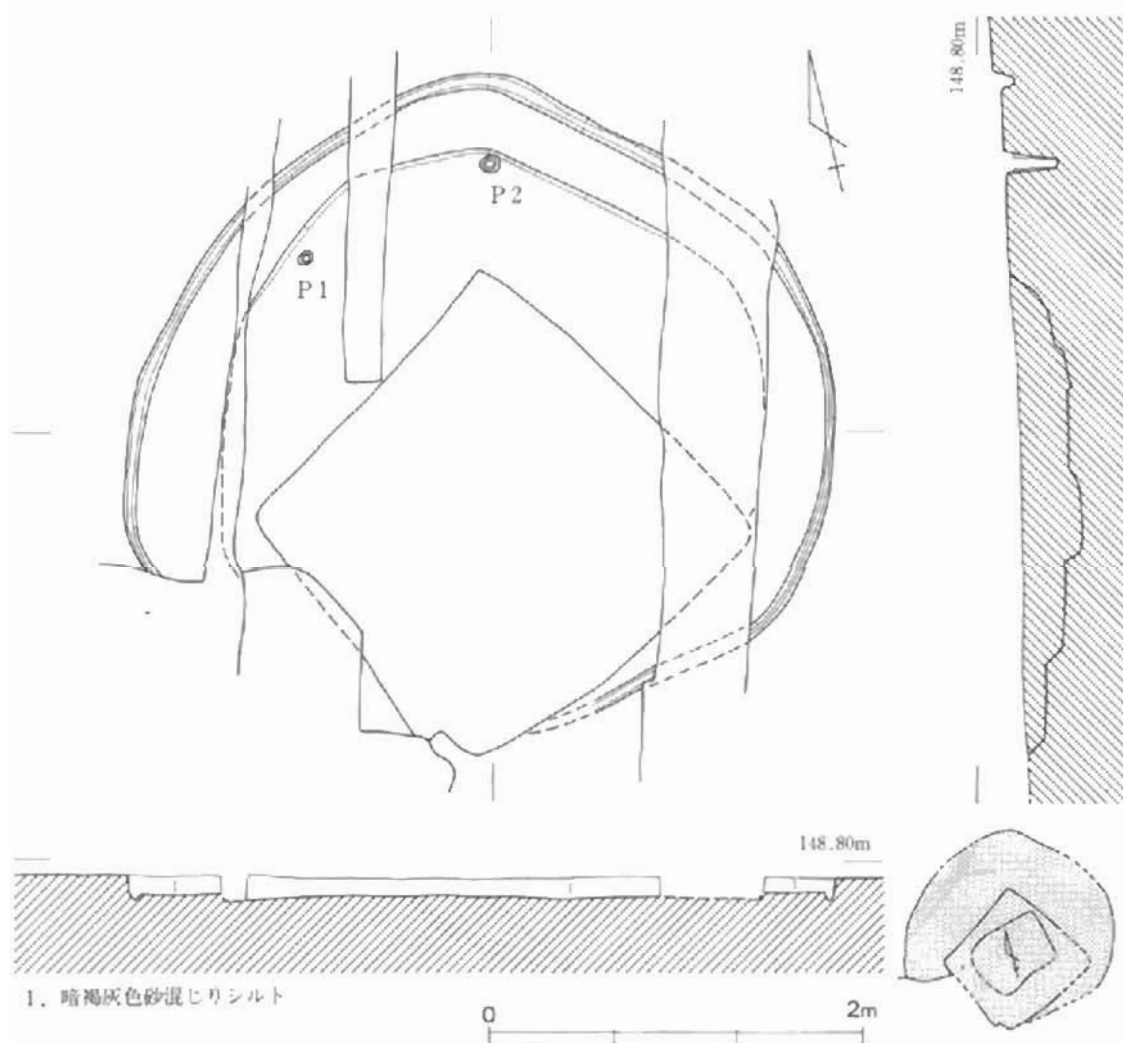
川除6期である。

第38表 S H28出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
284	甕	口径 125.61 胴径 113.00 器高 94.20.0 頸径 11.11 体部径 22.7	外面：体部上位ト下位間へうリタタキ、中位は磨滅のため調整不明 内面：体部ト下位間タタキ、ト下位間タタキ	外面 灰白 頸以下体部 暗灰青 内面 赤灰	頸部以下体部 3/4、底部 完全	
285	甕	口径 115.61 胴径 113.00 器高 23.4 頸径 11.11 体部径 120.11	外面：口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ、のち下位ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部細かハケ	外面 明赤褐 黒褐 内面 灰黄褐	約1/2	
286	甕	口径 113.81 胴径 113.00 器高 94.5 頸径 11.11 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ、のちナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、磨面圧痕、接合痕	外面 上赤褐 黒褐 内面 上赤褐	口縁部 約1/8	

SH29 (図版18・41~43)

- 検出状況** 小微高地aの南端部に立地する。I-1・4・5区の3地区にまたがり、3回におたる調査によって全容が明らかとなった。本住居跡のほぼ中央部から南寄りにかけて、SH30・31に切られている。さらにこの住居跡の南側の輪郭は、攪乱等で不明瞭である。
- 形状・規模** 平面形は、基本的には円形であるが、一部直線的な部分も認められ、多角形を指向する傾向にある。径5.7mを測る。検出面から、床面までの深さは15cmで、床面の標高は148.50mである。検出した床面積は21.5㎡である。
- 埋土** 暗褐色砂混じりシルトの1層で、炭層・焼土層等は確認できなかった。
- 屋内施設** ベッド・柱穴・周壁溝を検出した。住居跡内部の大半がSH30に切られているため、中央土壇・貯蔵穴等は確認できなかった。
- ベッド** 南側については、SH30との切り合いおよび攪乱のため確認することができなかったが、全体の約3/4の範囲にわたって検出した。住居跡の平面形同様直線的で、より多角形を指向している。地山を削り出して成形したもので、幅約0.3~0.7mで、床面との比高は6cmである。
- 周壁溝** ベッドのレベルでの幅6cmを測り、このレベルからの深さは6cmで、底部の幅は3cmで



第113図 SH29

ある。また、検出面からの深さは18cmである。

柱穴 2穴検出したにとどまる。2穴とも床部とベッドの境にあり、特にP1はベッド内側ラインの屈曲部に建てられている。P1は、掘り方径10cm、柱痕径7cmを測り、床面からの深さは20cmである。P2は、掘り方径15cm、柱痕径8cmを測り、深さは43cmである。両柱穴間の距離は1.65mである。

出土遺物 土器のみが出土している。埋土の上層を掘り下げていく段階で、SH30の存在が不明確であったため、両者の土器が混じり合った状態で取り上げられている。確実にSH29にともなうと指摘できる土器は、ベッド直上から出土した一群である。いずれも周壁溝に沿った位置での出土で、原位置を保っているものと考えられる。

壺・甕・鉢・鉢・高坏・手焙形土器の各器種が出土しており、甕が半数を占める。

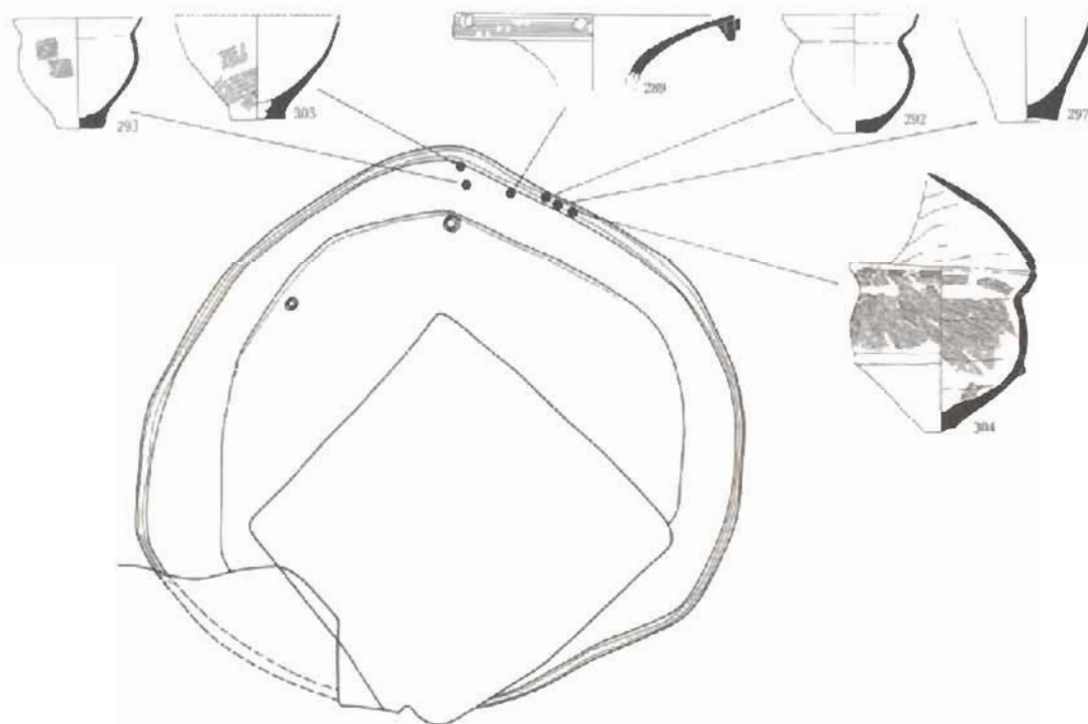
甕 このなかで、甕では大型と小型の両者が認められ、後者の方が多い。また、292は、口縁部が複合口縁状を呈するもので、丹波地方からの影響が認められる。

高坏 高坏においては、299と301は同一個体ではないが、両者で一つのタイプの高坏となるものと考えられる。なお、301の脚部の透しであるが、基本的に4方に穿たれているが、一ヶ所透しをわずか横にずらして穿ちなおしているのが観察できる。

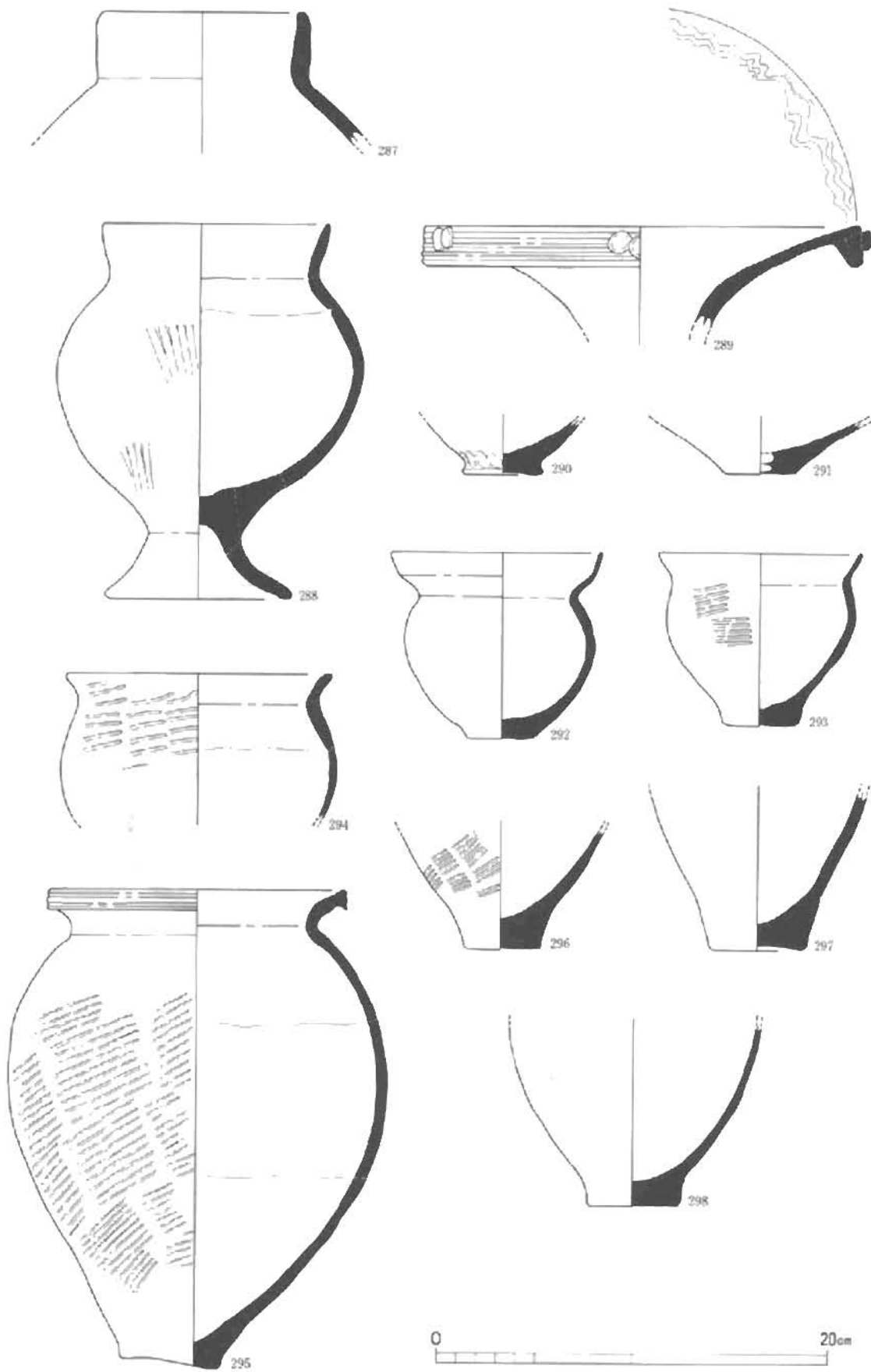
手焙形土器 304の手焙形土器は、本遺跡で出土した唯一のものである。深い鉢形の土器の口縁部を短く外反させ、その上に覆部を接合させている。他の遺跡出土の手焙形土器と比べて、覆部端部に面を持たない点、下半の鉢形土器の器高が高い点、全体的にハケ調整で仕上げているものの粘土紐の接合痕が顕著に残るなど雑なつくりである点などが特徴的である。

粘土塊 この他、土器ではないが、粘土塊が焼けたものも出土している。

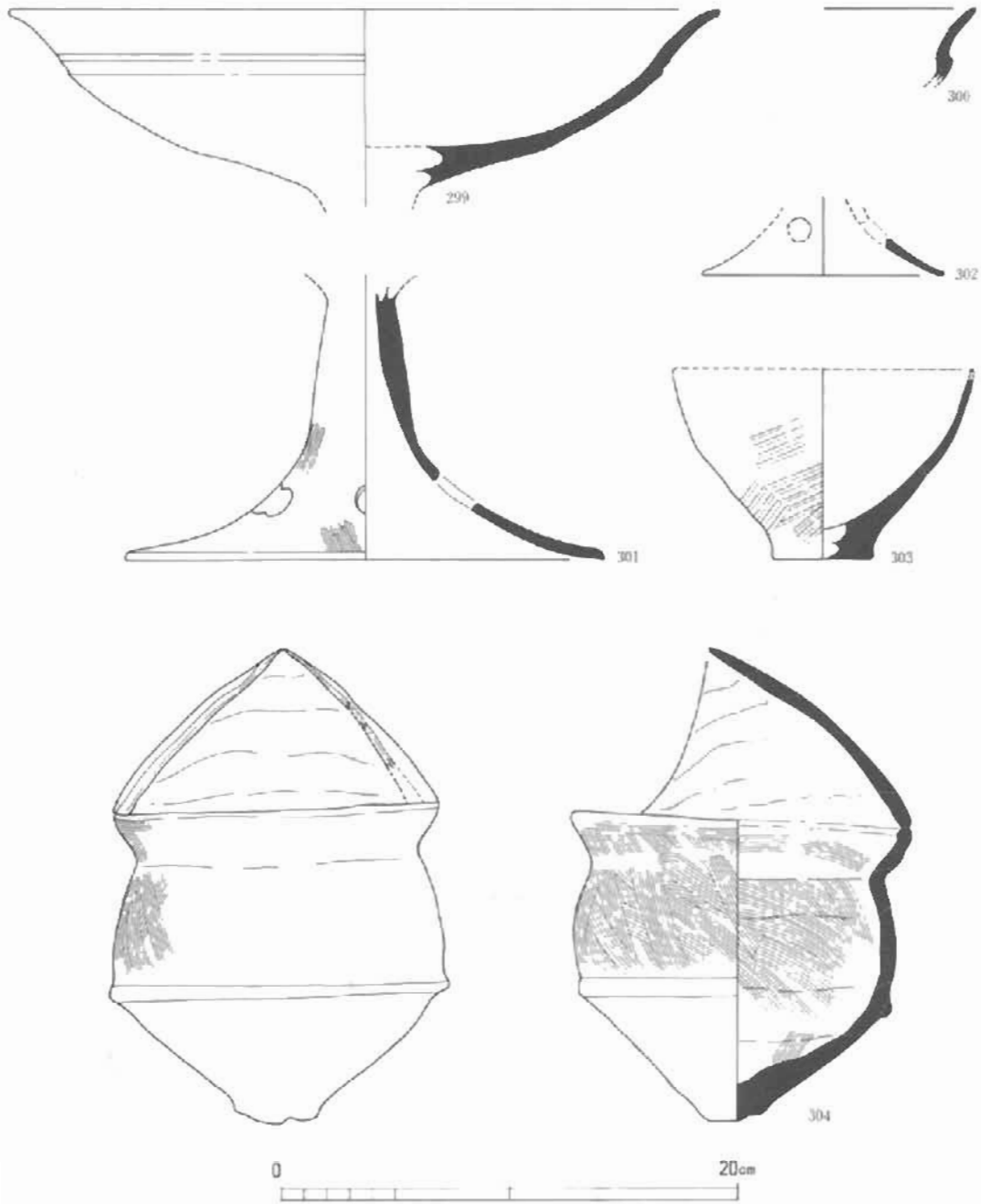
時期 川除3期である。



第114図 SH29土器出土位置



第115図 SH29出土土器(1)



第116図 SH29出土土器(2)

第39表 SH29出土土器観察表(1)

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
287	壺	口径 110.21 底径 8.9 器高 46.8 胴径 10.63 体部径	外面 調整のための調整不明 内面	外面 灰白 内面 灰白	口縁部ごくわずか	
288	壺	口径 113.41 底径 8.9 器高 49.19 胴径 10.7 体部径 15.7 胴高 3.0	外面 体部部へうしケラー部残 内面 調整のための調整不明	外面 淡黄緑 内面 橙	口縁部完存	台付壺
289	壺	口径 122.21 底径 器高 45.2 胴径 体部径	外面 口縁部面割付線、3箇の内割付文を6ヶ所、口縁部ヨコナデ 内面 口縁部面割付文、胴部にかけてへうしケラー	外面 灰白 内面 灰白	口縁部のみ	

第40表 SH29出土土器観察表(2)

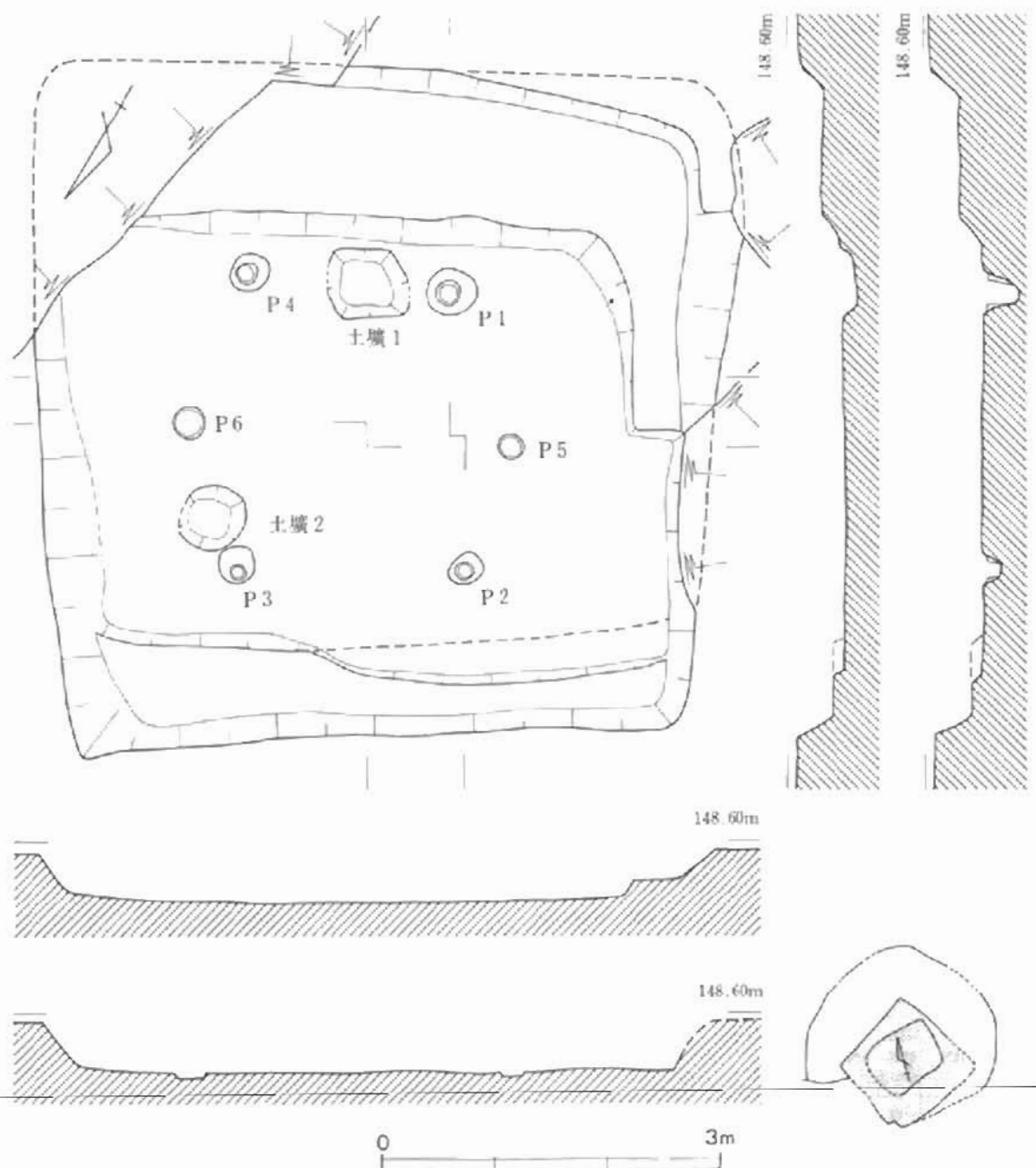
番号	器種	寸法 cm	調整	色調	残存率	備考
290	壺	口径 口径：14.0 器高 残2.6 胴径： 体部径	外面：底部コシオマエ 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	底部のみ	
291	壺	口径 口径：13.6 器高 残2.5 胴径： 体部径	外面： 磨滅のため調整不明 内面	外面：灰 内面：灰	底部1/2	
292	壺	口径 10.7 口径 3.5 器高 9.5 胴径 8.1 体部径 9.8	外面：口縁部コシオマエ、体部磨滅のため調整不明 内面：口縁部コシオマエ、体部磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	約1/2	
293	壺	口径 110.2 口径 3.6 器高 残8.8 胴径 9.2 体部径 9.6	外面：体部3.5cmアタキ 部残 内面：体部磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	口縁部1/3 体部の1/2 胴部完全	
294	壺	口径 113.6 口径 器高 残7.3 胴径 12.3 体部径 114.2	外面：口縁部・体部アタキ一部残 内面：磨滅のため調整不明、粘土結痕	外面：こまごま 内面：こまごま 黄褐色	口縁部・体 部の約1/4	
295	壺	口径 115.2 口径 5.2 器高 34.3 胴径 12.7 体部径 19.4	外面：口縁部面磨滅、体部2.5cmアタキ 内面：磨滅のため調整不明、粘土結痕	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	約1/2 底部完全	
296	壺	口径 口径 3.8 器高 残6.1 胴径 体部径	外面：体部4.5cmアタキ 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	底部完全 体部わずか	
297	壺	口径 口径 4.4 器高 残7.9 胴径 体部径	外面：アタキわずかに残 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	底部完全 体部わずか	
298	壺	口径 口径 4.8 器高 残9.0 胴径 体部径	外面： 磨滅のため調整不明 内面	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	底部完全 体部の約1/4	
299	高杯	口径 口径：13.0 口径 器高 残7.9 胴径 体部径	外面： 磨滅のため調整不明 内面	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	口縁部・身 部の約1/2	
300	高杯	口径 口径 器高 残3.2 胴径 体部径	外面：口縁部・ウツクミ 内面：磨滅のため調整不明	外面：黄 内面：灰白	口縁部のみ ごくわずか	
301	高杯	口径 口径：20.9 器高 残12.0 胴径 7.9 体部径	外面：磨滅、1ヶ所 部残へうき、4孔 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰	胴部は完全 底存	
302	高杯	口径 口径：10.4 器高 残2.4 胴径 体部径	外面：3孔 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	胴部の約1/4	
303	鉢	口径 口径：14.0 器高 残8.3 胴径 体部径	外面：体部3.5cmアタキ 内面：磨滅のため調整不明	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	口縁部完全 体部の約1/3	
304	不明な土器	口径 14.3 口径 2.3 器高 20.6 胴径 12.8 体部径 14.6 腹径 7.0	外面：口縁部コシオマエ、口縁部・胴部アタキ、体部アタキ、交番は面で見つけた痕残 内面：体部8.5cmアタキ、全体に粘土結痕	外面：灰 内面：灰	ほぼ完全	

SH30 (図版18)

検出状況 SH29を検出中、床面のレベルまで掘り下げた段階で確認された住居跡である。SH29内のセクション断面観察の結果、SH29検出面から切り込んでおり、SH29埋没後に構築された住居跡であることが明らかとなった。

住居跡のほぼ全体を検出することができたが、東側コーナーについては、I-4区とI-5区との境の側溝のため検出することはできなかった。また、SH29同様何ヶ所かで攪乱を受けていた。

形状・規模 平面形は方形であるが、全体的にやや歪な形状を呈している。主軸方向は、南東-北西



第117図 SH30

方向である。一辺の長さは、全体を検出できた北西壁で5.20mである。北東壁・南東壁・南西壁はそれぞれ推定で6.00m、5.70m、5.30mである。検出面(SH29の床面)から床面までの深さは44cmを測り、床面での標高は148.08mである。検出した床面積は、推定で約28㎡である。

埋土 黒褐色極細砂まじりシルト層が2層に分かれて堆積していた。そしてこの両層の間に炭を多く含む層が認められた。また、黒褐色極細砂混じりシルト層中にも多くの炭が認められた。

屋内施設 ベッド・土壙・柱穴を検出した。中央土壙は確認できなかった。

ベッド 北西壁側と南東壁から南西壁中央部までの2ヶ所で検出した。北西壁側の一部はSH31に切られている。また住居跡そのものの形が歪であることもあり、ベッド自体も全体的に

垂である。幅は0.65mから1.09mで、床面との比高は20cmである。ベッドの占める推定面積は約11㎡で、床面積に占める割合は約40%である。

土壇 2基検出した。土壇1は、P1とP2を結ぶライン上で、住居跡南東辺のほぼ中央に位置する。南東側はベッドの下端ラインとはば接している。平面形は62cm×71cmと方形に近く、住居跡床面からの深さは27cmである。主軸方向は住居跡とほぼ同じである。

土壇2は、P3のすぐ東側に位置する。平面形は55cm×58cmと方形であるが、土壇1より円形に近い形である。住居跡床面からの深さは10cmである。主軸方向は住居跡のそれとは一致しない。

柱穴 主柱穴4穴とその他の柱穴2穴を検出した。

主柱穴 主柱穴はそれぞれ四角形をなすよう配列されているが、全体的に住居跡の中央よりやや北東側にずれている。どちらかといえば、ベッドに囲まれた空間の中央部にあたるといえよう。P1の掘り方径・柱痕径・深さは、31cm、22cm、28cmである。P2は、31cm、16cm、16cmである。P3は、32cm、12cm、22cmである。P4は、31cm、18cm、33cmである。また各辺の柱間距離は、P1～P2間で2.44m、P2～P3間で2.00m、P3～P4間で2.62m、P4～P1間で1.82mである。

小柱穴 P2～P3間とP4～P1間のライン上中間部よりやや外側にそれぞれ小柱穴が検出された。棟柱を支えるものと考えられる。

出土遺物 埋土中よりかなりの土器が出土している。ただし、床面での出土遺物は確認できなかった。さらに、当住居跡の床面まで検出した段階で、さらにもう一つの住居跡（SH31）とも切りあっていることが明らかとなった。このような調査経過のため、SH30とSH31の土器を区別することはできなかった。ただし、SH31の方が新しいことから、SH30として取り上げた土器の多くはSH31に伴うものと考えられる。このため、出土遺物についてはSH31で述べることにしたい。

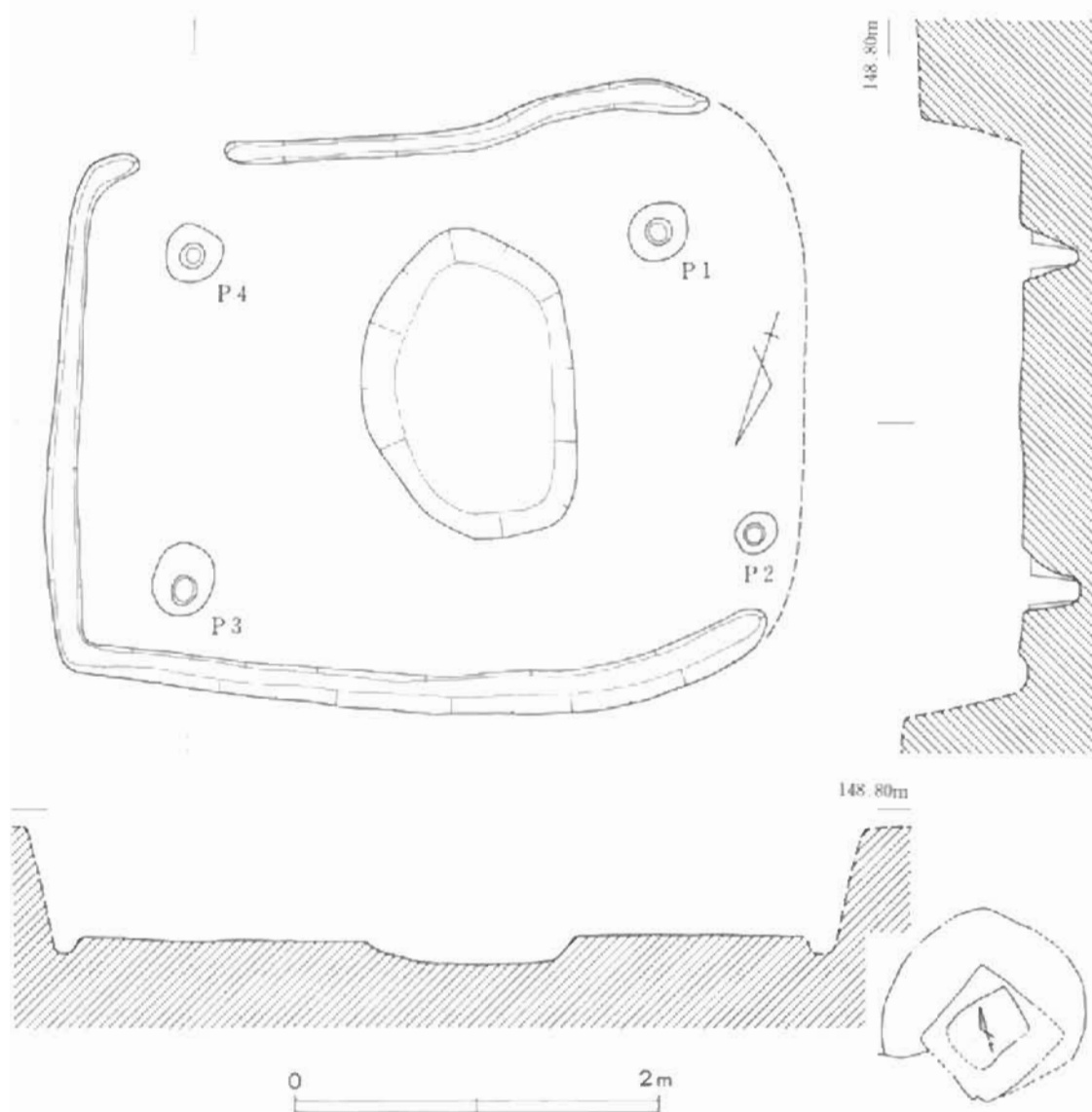
SH31（図版18・43～45）

検出状況 SH30の床面を検出した際に、SH30とは方向を異にし、「コ」の字形にめぐる溝を検出した。そして、これをもう一つの住居跡にともなう周壁溝と判断した。これが本住居跡である。このため、床面のみを幸うじて検出することができたにとどまり、周壁まで検出することはできなかった。

本住居跡の周壁溝がSH30の土壇1、主柱穴および南西側のベッドを切っていることから、SH30より新しいことが明らかとなった。

形状・規模 平面形は、「コ」の字形にめぐる周壁溝の形から、長方形と判断できる。周壁溝の規模から復元される住居跡の規模は、北辺で3.60m、東辺で2.75m、南辺で3.50mである。そして、西辺は2.95mと推定される。SH30の床面を検出するまで本住居跡の存在に気付かなかったため、本来の床面より掘りすぎていることも考えられるが、検出した床面の標高は148.08mである。また、検出した床面積は10.61㎡である。

埋土 SH30内の土層断面においても本住居跡の存在を確認できなかったため、本住居跡に伴う埋土を確認することはできなかった。ただし、本住居跡がSH30を切っていることから、



第118図 SH31

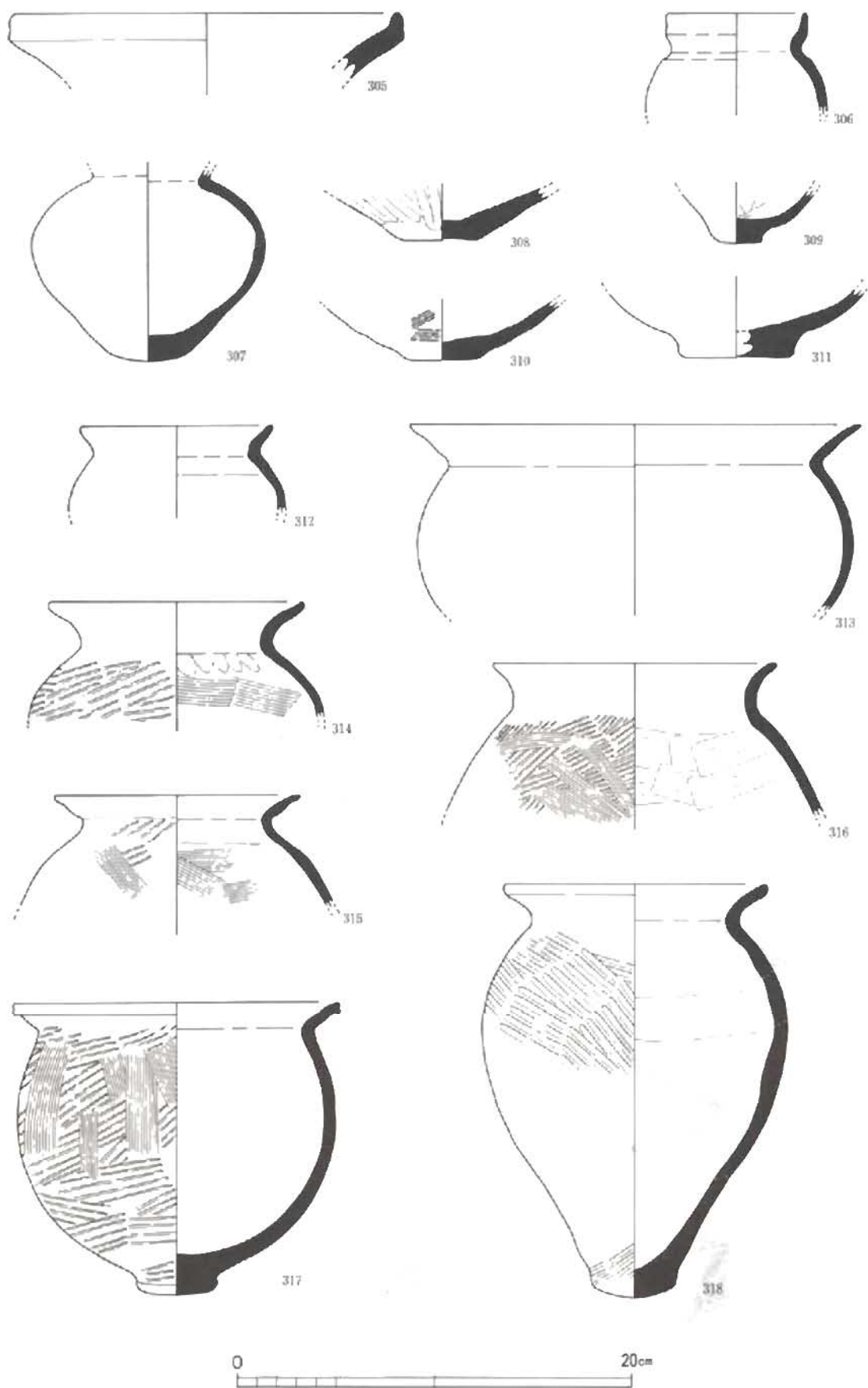
SH30の埋土として認識していた黒褐色極細砂混じりシルトが、実際は本住居跡の埋土ではないかと推定される。

屋内施設 周壁溝と中央土壇及び支柱穴を検出した。

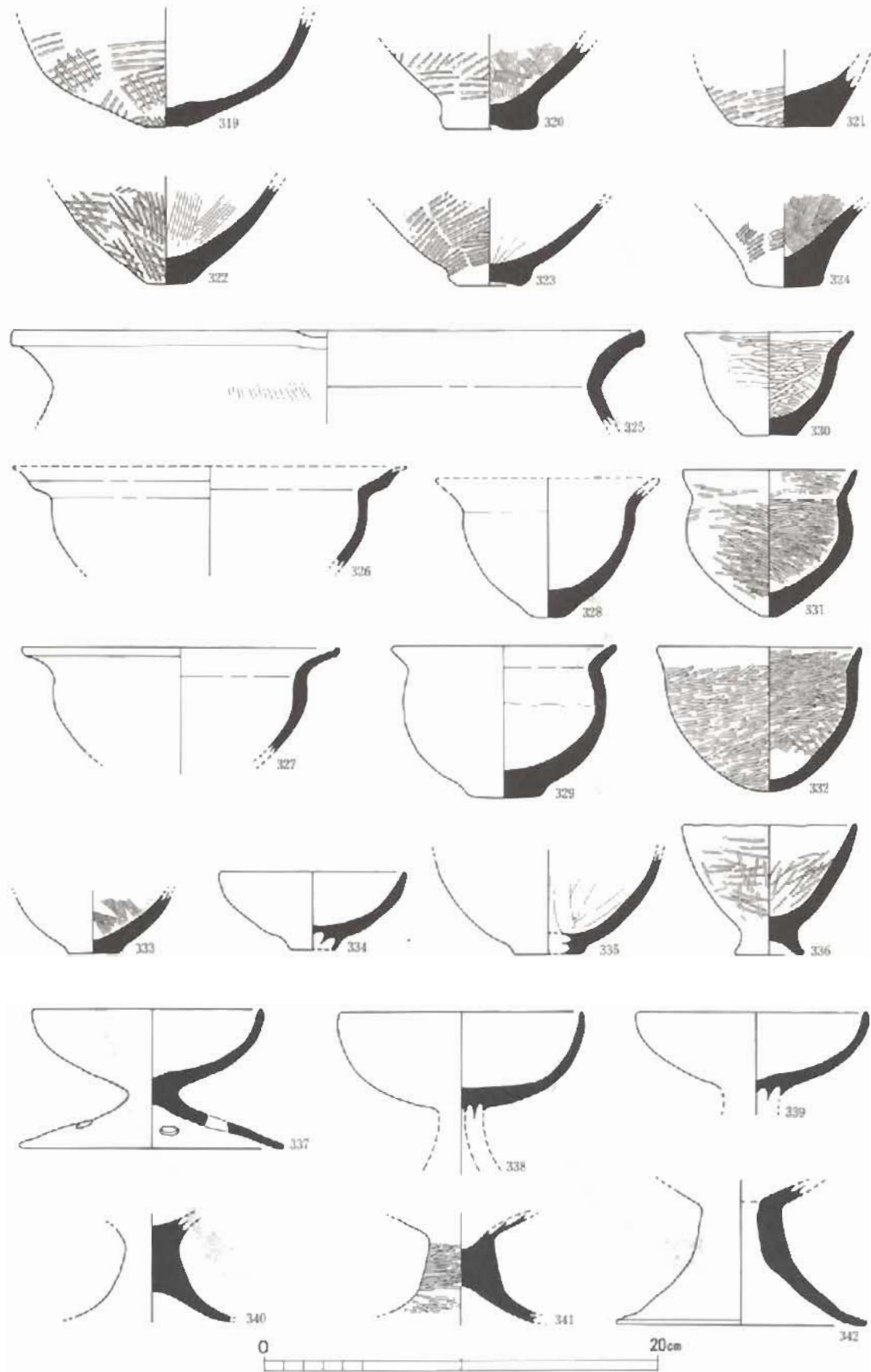
周壁溝 前述したように、「コ」の字形に巡っている。床面での幅15cm、底での幅7cmを測り、床面からの深さは8cmである。

中央土壇 住居跡内のほぼ中央部で検出した。平面形はやや不整形な長方形を呈するが、主軸方向は住居跡のそれとはほぼ一致している。長軸方向で1.70m、その直交方向で1.18mを測る。検出面からの深さは17cmである。埋土は、黒褐色シルト混じり砂礫層で、炭などの顕著な包含を認めることはできなかった。

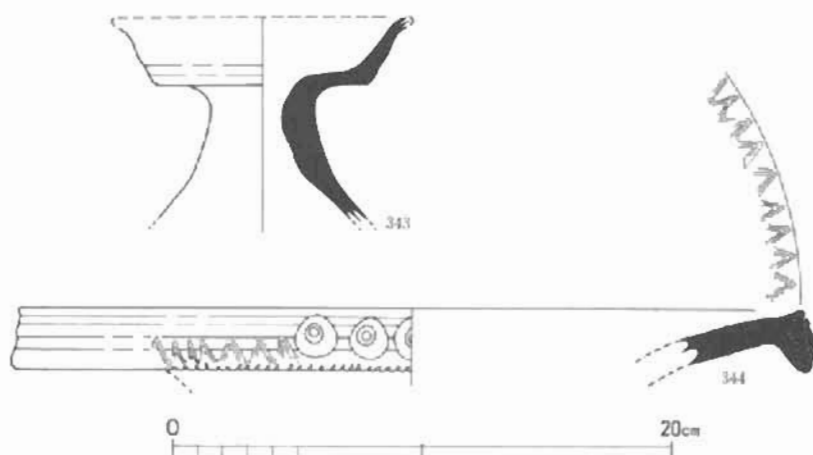
柱穴 4穴検出した。基本的には周壁溝のコーナーに位置しているが、P2のみがやや南側にずれた位置にある。P1の掘り方径、柱径、検出面からの深さは、30cm、15cm、4cmである。以下、P2のそれぞれの規模は22cm、12cm、12cm、P3は38cm、16cm、30cm、P4は30cm、14cm、30cmである。また各辺の柱穴間の距離は、P1～P2間で1.72m、P2～P



第119図 SH31出土土器(1)



第120図 SH31出土土器(2)



第121図 SH31出土土器(3)

3間で3.14m、P3～P4間で1.82m、P4～P1間で2.55mである。

出土遺物

床面での出土は認められず、確実に本住居跡に伴うと判断できる遺物はない。しかし、本住居跡がSH30より新しいものであることから、調査時にSH30の埋土として取り上げた遺物の大半が本住居跡に伴うものと推定される。したがって、SH30の遺物も含まれるという危険性を前提としたうえで、報告することにする。なお出土遺物は土器のみである。器種としては、壺・甕・鉢・高坏・器台が出土しており、甕と鉢が量的に多い。

壺

量的に少ない上に底部片が多く、器形のはっきりしたものは少ない。306の小型壺については、口縁部が複合口縁状を呈しており、丹波地方からの影響が少なからず認められる。

甕

図化できたのは全てV様式系の甕であるが、丹波系の甕も小片ながらも出土している。V様式系甕は、法量からみると大型・中型・小型の3タイプが認められる。また、調整技法からみると、内面の調整法においてハケ調整で仕上げるものと、ヘラケズリ調整で仕上げるものと、ナア調整により仕上げるものとが認められる。底部の形態においては、明確な平底をもつものと、タタキ整形により尖底化・丸底化を指向するものとが認められる。平底についても全体的に小型で、より新しい傾向を示すものである。

鉢

甕について量的に多く出土している。特に小型の鉢が目立つ。量的に少ないが大型・中型の鉢も出土している。小型の鉢は、底部が平底をなすもの、丸底をなすもの、脚をもつものの3タイプが認められる。特に、前2タイプは、残存状況の良好なものについては内外面とも細筋の丁寧なミガキ調整により仕上げられている。また、口縁端部を外方へ屈曲させる点も共通している。中型についても、口縁部は外方へ屈曲させている。この他図化できなかったが、丹波地方の特徴をもったものも出土している。

高坏

図化できたものはいずれも坏部が碗形を呈するものであるが、小片ながら坏形をなすものもわずかではあるが出土している。碗形をなすものは、脚部が短い点特徴的である。

器台

図化できたのは2個体のみである。2点ともあまり類例をみないタイプのものである。343の器台は、器台が小型化する傾向にのったものと考えられる。

時期

出土土器およびSH29・30との切り合い関係より、川除6期と考えられる。

第41表 S H31出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
305	壺	口径 : (19.3) 底径 : 器高 : 残3.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ	外面 : 橙 内面 : 灰白	口縁部約1/8以下	
306	壺	口径 : (6.8) 底径 : 器高 : 残5.0 頸径 : (6.6) 体部径 : (9.2)	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部ナテ、口縁部-体部黒斑あり 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部ナテ	外面 : 暗灰 内面 : 明褐色	口縁部-体部わずか	
307	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残12.0 頸径 : 6.0 体部径 : 12.0	外面 : 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 橙	体部約1/2	
308	壺	口径 : 底径 : 3.6 器高 : 残2.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下半縦ヘラコナテ 内面 : 体部ナテ	外面 : にぶい 橙 内面 : 褐灰	体部下半- 底部約1/8	
309	壺	口径 : 底径 : (2.4) 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下半-底部ヘラナテ、底部に黒斑あり 内面 : 体部下半-底部ヘラナテ	外面 : 淡黄橙 内面 : 灰白	底部約1/2 体部わずか	
310	壺	口径 : 底径 : 1.4 器高 : 残2.9 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下半の一部4条/cmタタキ 内面 : 体部下ナテ	外面 : にぶい 黄橙 内面 : 灰白	底部ほぼ完 存 体部わずか	
311	壺	口径 : 底径 : (5.6) 器高 : 残3.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 赤橙 内面 : 赤橙	体部-底部 約1/2	
312	甕	口径 : (9.6) 底径 : 器高 : 残4.3 頸径 : (8.5) 体部径 : (11.0)	外面 : 口縁部-体部ヨコナテ 内面 : 口縁部-体部ヨコナテ	外面 : 黄灰 内面 : 灰白	口縁部約1/4 体部わずか	
313	甕	口径 : (22.6) 底径 : 器高 : 残9.4 頸径 : (19.0) 体部径 : (22.0)	外面 : 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部1/8 体部わずか	
314	甕	口径 : 13.0 底径 : 器高 : 残5.8 頸径 : 9.8 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部3条/cmタタキ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部7条/cmヨコナテ、頸部エヒオサエ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部-体 部上位ほぼ 完存	
315	甕	口径 : (12.4) 底径 : 器高 : 残5.5 頸径 : (9.6) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部3条/cmタタキ、のちタテハケ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部ヨコナテ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部-体 部約1/8	
316	甕	口径 : (14.2) 底径 : 器高 : 残7.6 頸径 : (12.3) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部4条/cm右ナリタタキ、のち5条/cmハケ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部ナテ	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰白	口縁部-体 部わずか	
317	甕	口径 : (16.6) 底径 : 4.0 器高 : 14.6 頸径 : 14.0 体部径 : (16.1)	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部3条/cm横タタキのち右ナリタタキ、の ち体部上半8条/cmタテハケ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部板ナテか	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	口縁部1/4 体部約1/2 底部完存	
318	甕	口径 : (13.0) 底径 : (4.2) 器高 : 残20.8 頸径 : (10.6) 体部径 : (15.5)	外面 : 体部上位2条/cm右ナリタタキ、下位3条/cm右ナリタタキ 内面 : 磨滅のための調整不明、分割成形	外面 : にぶい 黄橙 内面 : *	約1/4	
319	甕	口径 : 底径 : 2.0 器高 : 残5.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部3条/cmタタキ 内面 : ナテ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	体部下位- 底部ほぼ完 存	
320	甕	口径 : 底径 : (4.8) 器高 : 残4.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下位3条/cm右ナリタタキ、のち横タタキ、底部本の葉文 内面 : 5条/cmタテハケ、のち10条/cmヨコナテ	外面 : 黄灰 内面 : 黄灰	体部-底部 約4/5	
321	甕	口径 : 底径 : 4.8 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部4条/cm右ナリタタキ 内面 : 底部エヒオサエ	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	底部ほぼ完 存	
322	甕	口径 : 底径 : 2.0 器高 : 残5.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 4条/cm縦タタキ、のち上ナリタタキ 内面 : タテハケ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部ほぼ完 存	
323	甕	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下位4条/cm右ナリタタキ 内面 : 縦ヘラナテ	外面 : 橙 内面 : 灰白	底部ほぼ完 存 体部わずか	
324	甕	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下位5条/cm右ナリタタキ 内面 : 8条/cm右ナリタタキ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部ほぼ完 存 体部わずか	

第42表 SH31出土土器観察表(2)

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
325	鉢	口径 : (31.7) 底径 器高 : 4.7 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデハケ	外面 橙 内面 浅黄橙	口縁部1/8	
326	鉢	口径 : (20.0) 底径 器高 : 残5.1 頸径 (16.0) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部磨減のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ	外面 : にぶい 赤橙 内面 赤橙	口縁部~体部1/8以下	
327	鉢	口径 (16.0) 底径 器高 残5.3 頸径 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 赤橙 内面 赤橙	口縁部~体部1/8以下	
328	鉢	口径 : 底径 器高 : 残6.4 頸径 : 8.8 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部~底部ヘラナデ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部~体部約1/2 底部完存	
329	鉢	口径 : (11.2) 底径 : 3.4 器高 : 2.7 頸径 (9.8) 体部径 : 10.3	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ヨコナデ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部径が 底部完存	底部スス付着
330	鉢	口径 : (8.6) 底径 : 2.6 器高 : 5.2 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部~体部中12.5mm横ヘラミダキ, 体部磨減のため調整不明 内面 : 中12.5mm横ヘラミダキ	外面 橙 内面 橙	口縁部1/2 体部約3/4	
331	鉢	口径 : (8.6) 底径 : 器高 : 残7.5 頸径 : (7.8) 体部径 : (8.4)	外面 : 口縁部~体部中12.5mm横ヘラミダキ 内面 : 口縁部~体部中12.5mm横ヘラミダキ	外面 灰白 内面 灰白	約1/2	
332	鉢	口径 : 10.2 底径 器高 : 2.3 頸径 : 8.8 体部径 :	外面 : 体部中1mm横ヘラミダキ 内面 : 中1mm横ヘラミダキ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部一部 欠損	
333	鉢	口径 : 底径 : (2.6) 器高 : 残2.9 頸径 体部径 :	外面 : 体部~底部ナデ 内面 : 体部4mm/5mmヘラトナ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	体部下半~ 底部約1/2	
334	鉢	口径 : (9.3) 底径 : (2.4) 器高 : 4.0 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ	外面 橙 内面 橙	1/8以下	
335	鉢	口径 : 底径 (3.4) 器高 : 残5.0 頸径 体部径 :	外面 : ナデ, 磨減激しい 内面 : 下へのヘラナデ	外面 灰褐 内面 灰褐	体部下半~ 底部約1/2	
336	鉢	口径 : 8.8 底径 : 3.4 器高 : 6.5 頸径 体部径 :	外面 : 体部横ヘラミダキ, のち縦ヘラミダキ 内面 : エビナデ, のち右1/4ヘラミダキ	外面 灰白 内面 灰白	ほぼ完存	
337	高坏	口径 : (11.5) 底径 : (3.2) 器高 : 2.0 脚柱径 : 2.5 体部径 :	外面 : 脚端部ヨコナデ, 他は磨減のため調整不明, 脚部5孔 内面 : 脚端部ヨコナデ, 他は磨減のため調整不明	外面 : 塊地 内面 : にぶい 橙	体部一部欠	
338	高坏	口径 : (12.0) 底径 器高 残5.2 頸径 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 橙 内面 橙	体部のみ 口縁部一部欠	
339	高坏	口径 : (11.5) 底径 : 器高 : 残4.2 頸径 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	体部のみ 口縁部1/3欠	
340	高坏	口径 : 底径 器高 : 残5.2 脚柱径 : 2.8 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	脚部のみ 端部欠	
341	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残5.6 脚柱径 : 3.3 体部径 :	外面 : 脚部ヨコナデ, 脚部中1mm横ヘラミダキ 内面 : 脚部ナデ	外面 浅橙 内面 灰白	脚柱部のみ 完存, 体部~ 脚部一部欠	
342	高坏	口径 : 底径 : (12.6) 器高 : 残7.1 頸径 体部径 : (4.1)	外面 : 脚端部ヨコナデ, 他は磨減のため調整不明 内面 : 口縁部ナデ, 体部ヘラナデ, 脚端部ヨコナデ	外面 橙 内面 橙	口縁部欠 他は1/2以下	
343	高坏	口径 : 底径 器高 : 残8.1 頸径 体部径 : (4.2)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 他は磨減のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	口縁部端部欠 脚端部欠 他は1/2	
344	蓋	口径 : (31.0) 底径 器高 : 残2.5 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部端部縦溝, 蓋状文, 3個単位円形浮文4ヶ所, 端部下 部に刻み目 内面 : 口縁部蓋状文	外面 : にぶい 黄褐 内面 : にぶい 黄褐	口縁部1/8	河内産

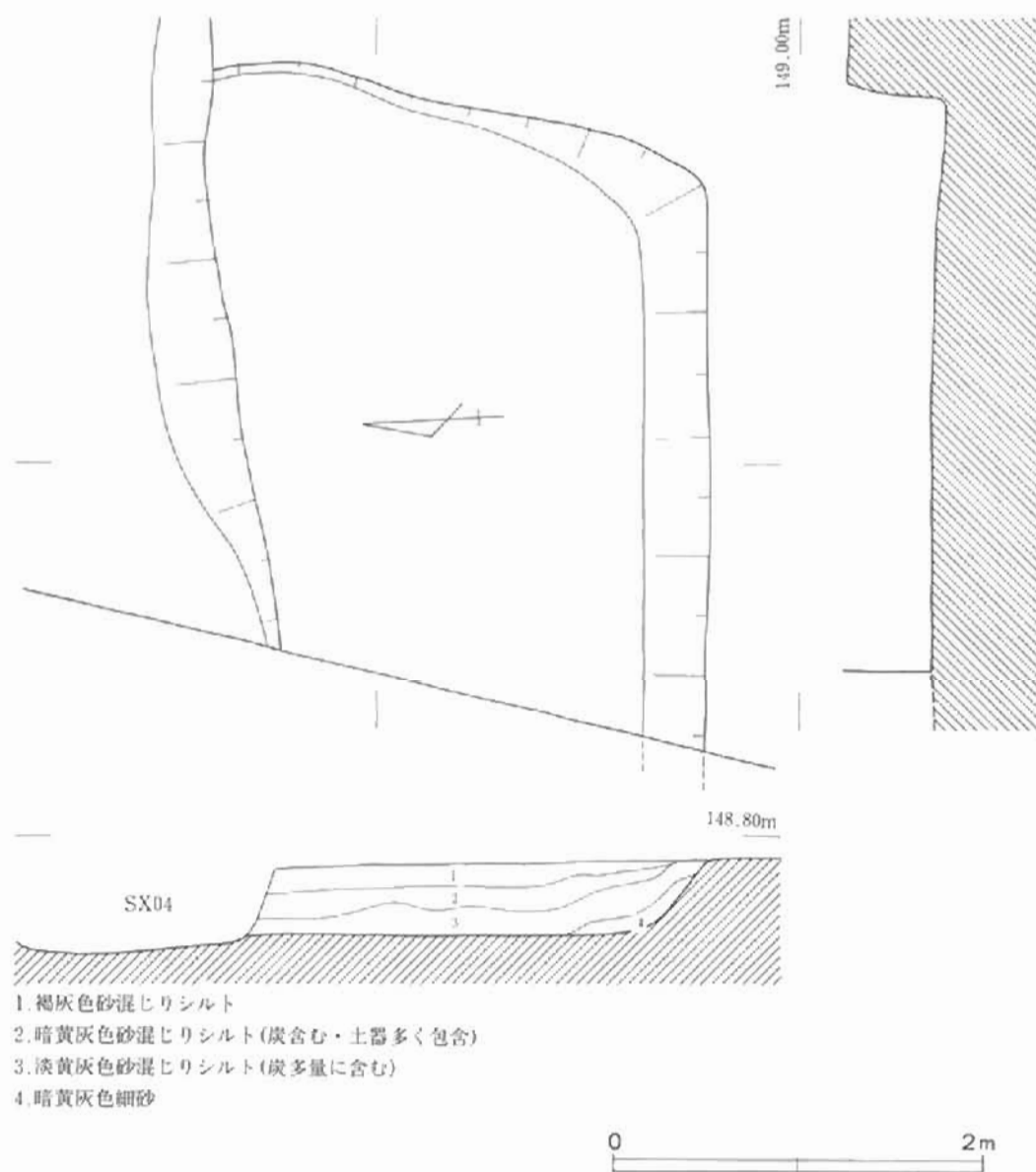
SH32 (図版28)

検出状況 本調査区の南西隅に位置し、小微高地bに立地する。円形周溝墓(SX04)に切られているため、全体の約1/2を検出したにとどまる。

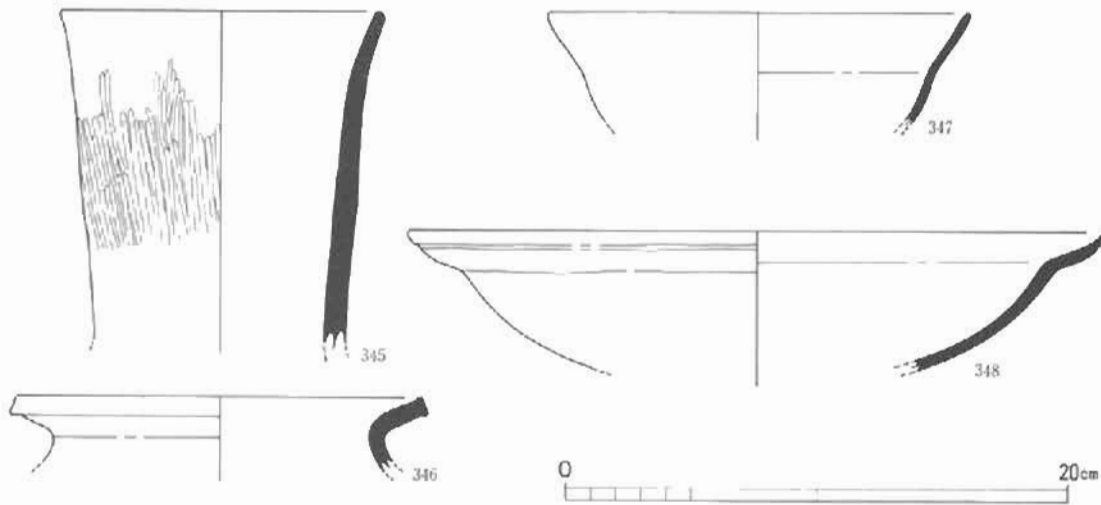
本遺構については住居跡として報告しているが、後述するとおり屋内施設が全く検出されなかったため、住居跡であると断定することは困難である。このため、本遺構については住居跡の可能性があるという意味合いも含めて、とりあえず住居跡として報告していくことにする。

形状・規模 平面形は方形と推定される。しかし、検出できた2辺とも全体を検出できなかったため、正確な規模は明らかにできない。東辺で2.75m、南辺で3.10mを検出した。検出面から床面までの深さは40cmと、当遺跡で検出した住居跡のなかでもよく遺存している住居跡である。床面における標高は148.27mである。

埋土 上から、褐灰色砂混じりシルト層、暗黄灰色砂混じりシルト層、淡黄灰色砂混じりシル



第122図 SH32



第123図 SH32出土土器

ト層、暗黄灰色細砂層の4層からなる。このうち、2・3層において多量の炭の包含が認められた。また、第2層において多くの土器が包含されていた。

屋内施設 周壁溝はおろか、中央土壇・支柱穴など一切の施設を検出することができなかった。

出土遺物 量的には比較的多く出土したが多くは細片で、図化できたものは4個体のみである。壺・甕・鉢・高環の4器種が出土している。壺を除いて、器表面の磨減が著しく、調整方法などはよく観察できなかった。

甕については、図化したものの他にタタキ目を有する体部片も出土している。

時期 川除5期である。

第43表 SH32出土土器観察表

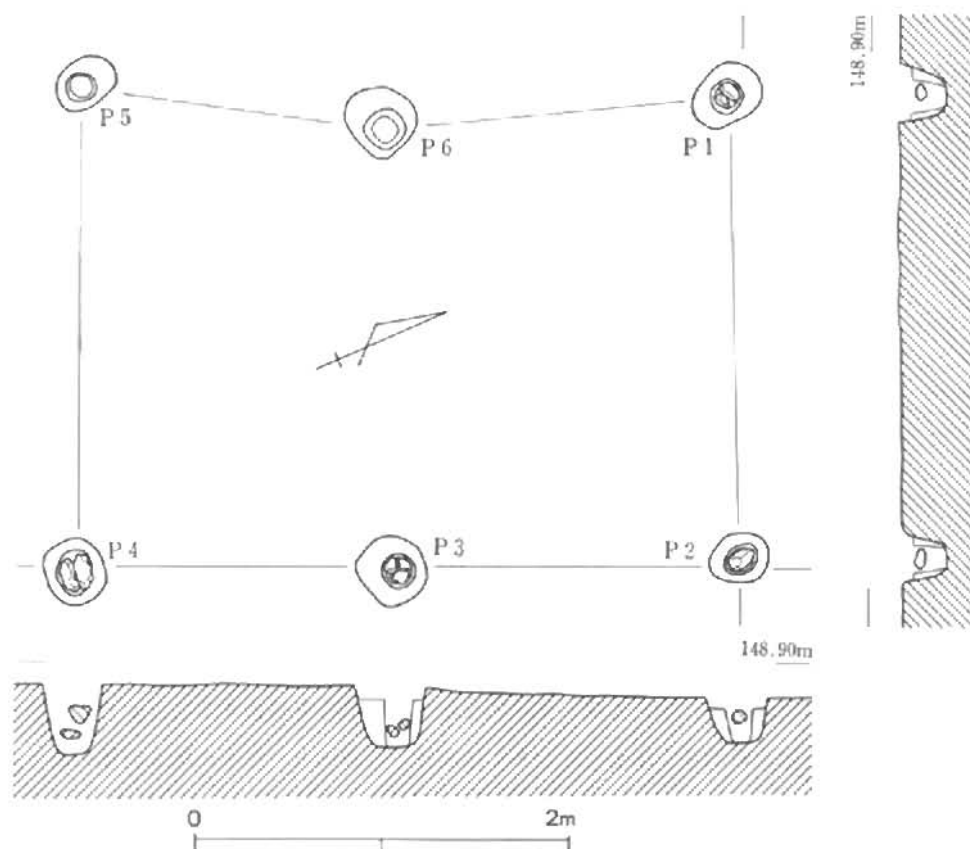
番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
345	壺	口径 : 12.7 底径 器高 : 残13.2 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、のち頸部縦ヘラミダキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、頸部ナデ	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	口縁部一頸部	
346	甕	口径 : (16.0) 底径 器高 : 残3.0 頸径 : (13.3) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 明褐色 内面 : 灰白	口縁部一 体部1/8以下	
347	鉢	口径 : (16.8) 底径 器高 : 残4.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 濃い 黄褐色	口縁部一 体部1/8	
348	高環	口径 : (27.7) 底径 器高 : 残5.6 頸径 環部高 :	外面 : 体部ヘラミダキか、他は磨減のため調整不明 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 褐色 内面 : 灰白	口縁部一 体部約1/4	

(2) 掘立柱建物

SB04

検出状況 I-1区の北東部、小微高地aの北半部で検出された。SH60に切られている。

形状・規模 N-24°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.45m、3.55m、梁行方向が2.43m、2.53mであり、面積は8.68㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.75m、梁行が2.48mである。



第124図 SB04

柱穴 掘り方の直径は25～38cm、柱痕あるいは柱の抜きとり痕跡の直径は15～20cmである。深さは25～30cmを測る。P1・2・3・6で、柱を抜いた後に投入あるいは混入したと思われる円礫が出土している。

出土遺物 P2・5より弥生土器細片が出土しているが、図化・時期決定は困難である。

時期 柱穴より出土した土器からは、詳細な時期が決定できないが、弥生時代後期～古墳時代前期（川除2期～7期）の範疇に含まれる。

SB05

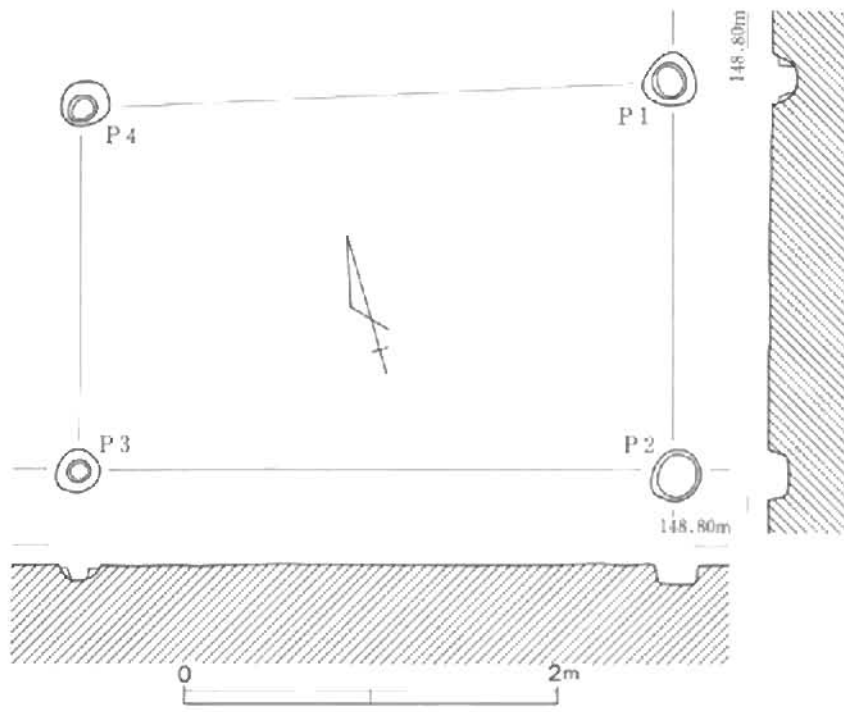
検出状況 I-1区北東隅の小微高地aの北東縁辺部で検出された。SH01に重なっているが、柱穴との切り合いが認められないため、先後関係は不明である。

形状・規模 N-76-Wに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.15m・3.20m、梁行方向が2.08m・1.90mであり、面積は6.30㎡である。

柱穴 掘り方の直径は23～37cm、柱痕の直径は12～18cmである。深さは10～15cmを測る。

出土遺物 P4より弥生土器細片が出土しているが、図化・時期決定は困難である。

時期 出土した土器からは詳細な時期の決定はできないが、弥生時代後期～古墳時代前期（川除2期～7期）の範疇に含まれる。



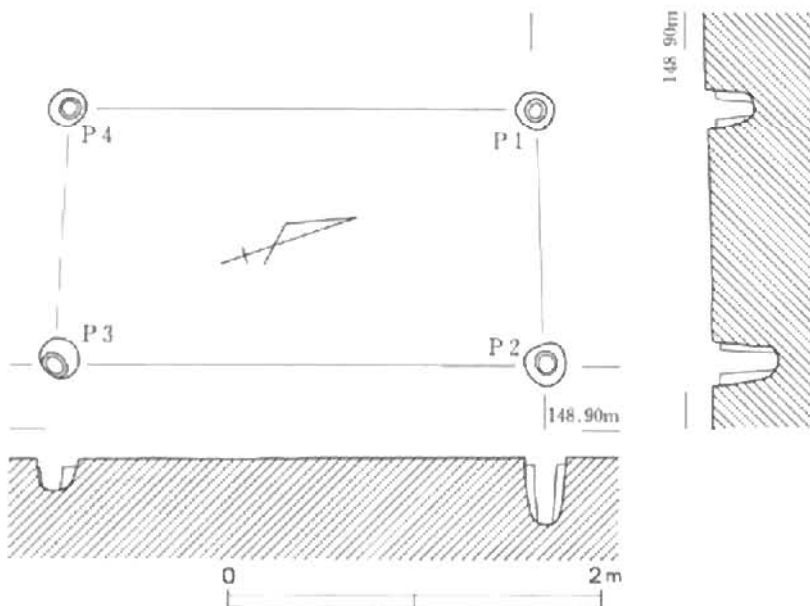
第125図 SB05

SB06

検出状況 I-1区南東部、小嶺高地aの中央北寄りで見出された。他の遺構との切り合いは認められない。

SB06から南東の一角には竪穴住居跡が認められず、SB07・SB08・SB09・SB10・SB11とともに掘立柱建物が集中して検出されているので、貯蔵を主目的とする集落の機能別利用がなされていたことを示している。

形状・規模 N-18°-Eに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方



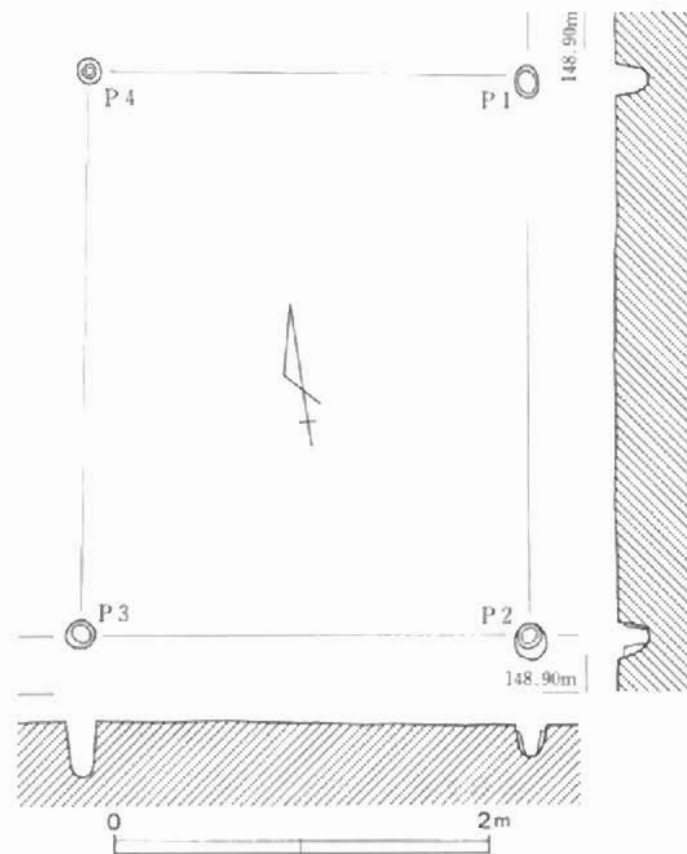
第126図 SB06

向が2.48m・2.60m、梁行方向が1.35mであり、面積は3.43㎡と小型である。

柱穴 掘り方の直径は25cm、柱痕の直径は12cmである。深さは17~35cmを測る。

出土遺物 全ての柱穴より弥生土器細片が出土しているが、図化・時期決定は不可能である。

時期 出土土器から、川除2期~7期と考えられる。



第127図 SB07

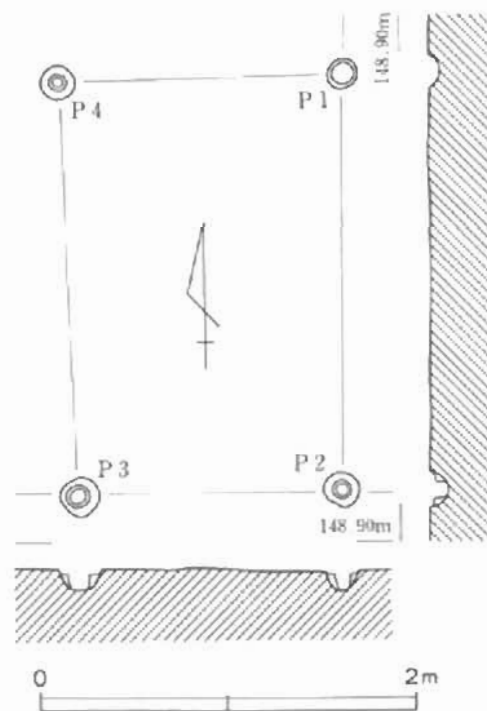
検出状況 I-1区南東部、小徴高地a中央北寄りで検出された。SK09に重なっているが、柱穴との切り合いが認められないため、先後関係は不明である。

形状・規模 N-9°-Eに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が2.92m・2.95m、梁行方向が2.32m・2.38mであり、面積は6.91㎡である。

柱穴 掘り方の直径は13~18cm、柱痕の直径は8~11cmである。深さは17~28cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 柱穴埋土の類似から川除2期~7期と考えられるが、詳細な時期は不明である。



第128図 SB08

検出状況 I-1区南東部、小徴高地a中央北寄りで検出された。SB07の南に接する位置にある。他の遺構との切り合いは認められない。

SB06~SB11などの掘立柱建物が集中する範囲に含まれている。

形状・規模 N-3°-Eに棟軸の方向をとる桁行1

間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が2.18m、梁行方向が1.40m・1.52mであり、面積は3.18㎡である。

柱穴

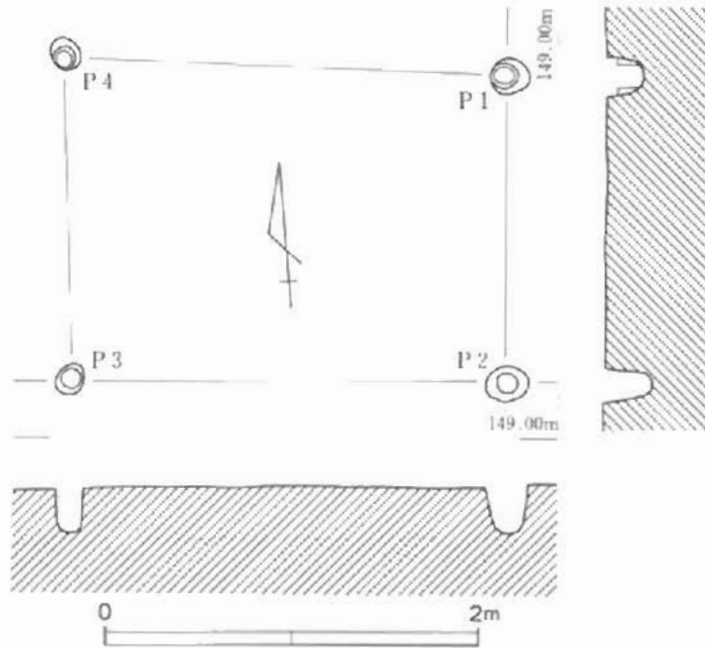
掘り方の直径は15～22cm、柱痕の直径は10～13cmである。深さは5～10cmを測る。

出土遺物

遺物は出土していない。

時期

柱穴埋土の類似から川除2期～7期と思われるが、詳細な時期は不明である。



第129図 SB09

SB09

検出状況

I-1区南東部、小微高地aの中央北寄りで検出された。SB08の東に位置し、棟軸方向はこれと直交する。SD14の埋没後に構築されている。

SB06～SB11は掘立柱建物の集中地域を形成していることが注目されるが、すべての建物がSD14が完全に埋まった段階に営まれているかどうかは判然としない。

形状・規模

N-87°-Eに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が2.32m・2.36m、梁行方向が1.62m・1.68mであり、面積は3.86㎡である。

柱穴

掘り方の直径は15～22cm、柱痕の直径は10～15cmである。深さは20～25cmを測る。

出土遺物

P2より弥生土器の細片が出土しているが、図化・時期決定は困難である。

時期

川除3期～7期のものであるが、詳細な時期は不明である。

SB10

検出状況

I-1区南東隅、小微高地aの東縁寄りで検出された。SB05・SB11同様、SD14の東に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模

N-87°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.07m・3.14m、梁行方向が1.60m・1.80mであり、面積は5.27㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.55m、梁行が1.70mである。

柱穴

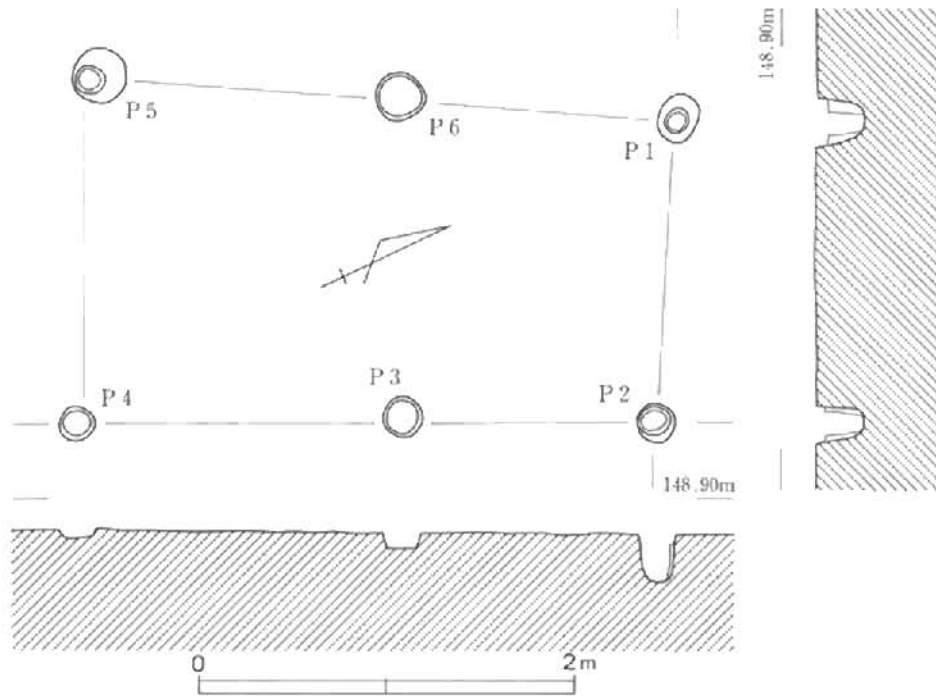
掘り方の直径は18～29cm、柱痕の直径は10～15cmである。深さは5～26cmを測る。

出土遺物

遺物は出土していない。

時期

柱穴埋土の類似から川除2期～7期のものであると思われるが、詳細な時期は不明である。



第130図 SB10

SB11

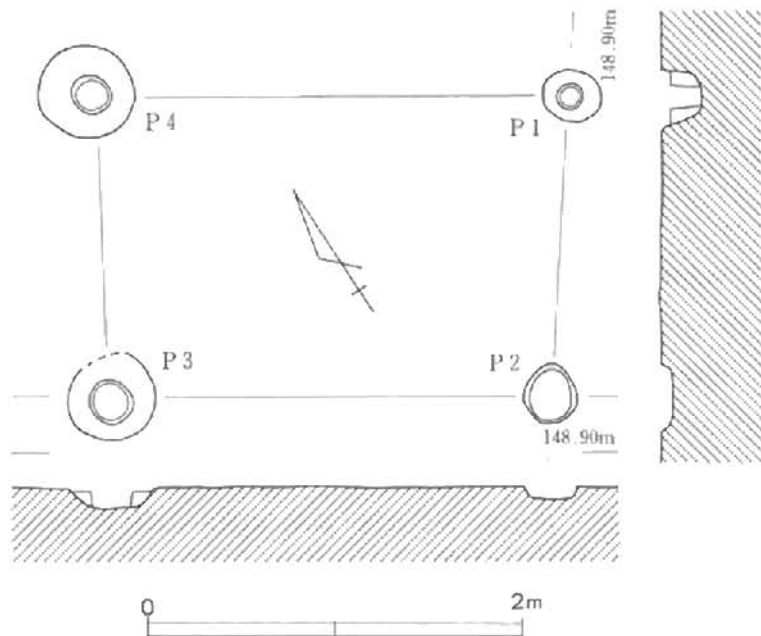
検出状況 I-1区南東隅、小微高地aの東縁寄りで検出された。SB10の南側に位置している。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 N-87-Eに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が2.35m・2.54m、梁行方向が1.60mであり、面積は3.92㎡である。

柱穴 掘り方の直径は30~50cmと比較的大きく、柱痕の直径は15~22cmである。深さは5~20cmを測る。

出土遺物 P4より弥生土器の細片が出土しているが、図化・時期決定は困難である。

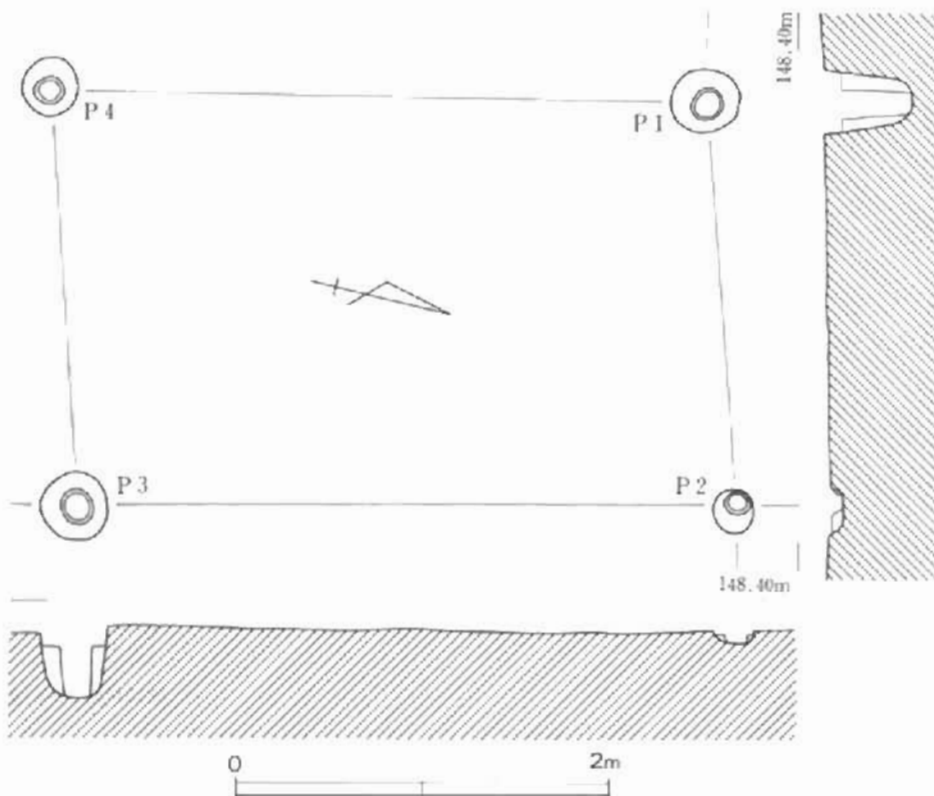
時期 川除2期~7期であるが、詳細な時期は不明である。



第131図 SB11

SB12

- 検出状況** I-2区の南西隅で検出された。I区の大部分の住居跡が存在する微高地の西側の落ち際に存在する。
- 形状・規模** N-15°-Wに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が2.10m・2.18m、梁行方向が3.50mである。面積は6.23㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.14m、梁行が3.50mである。
- 柱穴** 掘り方の直径は22~35cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は13~18cmである。深さは7~35cmを測る。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 柱穴埋土の類似から川除2期~7期と考えたい。



第132図 SB12

SB14

- 検出状況** I-2区の南隅で検出された。
- 形状・規模** N-3°-Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が4.40m・4.42m、梁行方向が4.10m・4.35mである。面積は18.75㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.20m、梁行が4.25mである。
- 柱穴** 掘り方の直径は15~50cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は15~25cmである。深さは5~28cmを測る。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 柱穴埋土の類似から川除2~7期と考えたい。

P 0 1

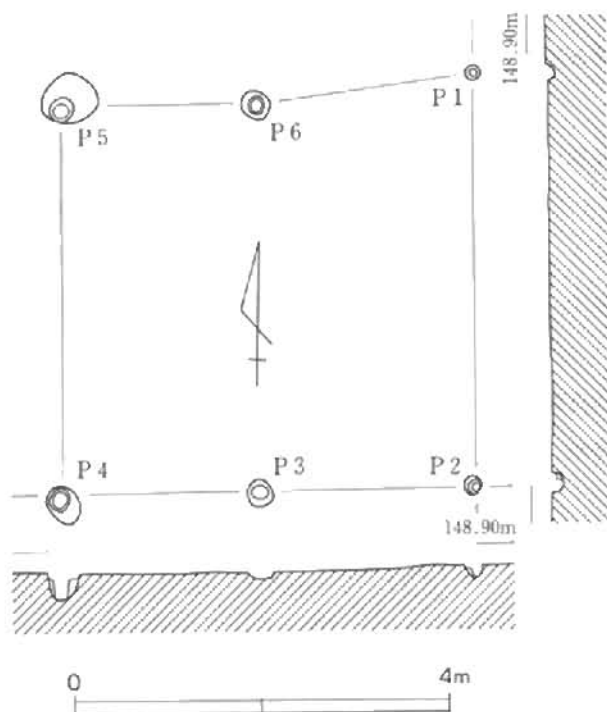
検出状況 I-1区の東半部で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。SD14に切られている。

形状・規模 円形の柱穴であり、掘り方の直径15cm、深さ39cmを測る。柱痕は確認できなかった。

出土遺物 土器の出土はみられなかったが、埋土より石器の未製品が出土している。

S21は、サヌカイトの剥片を素材とした石器未製品であり、形状から石鏃の未製品である可能性が高い。長さは3.3cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。

時期 SD14に切られることから川除1期～3期の所産であることが判る。



第133図 SB14



第134図 P01出土石器

(3) 土壇

SK 0 7

検出状況 I-1区の南東部、小微高地aの中央西寄りで検出された。SH08～11に土壇の南半部を切られている。

形状・規模 半分近くがSH08～11により削平されているため確かではないが、平面形は円形であろう。検出面での長さ260cm、幅120cm、土壇底での長さ210cm、幅95cmである。断面形は皿形であり、検出面から壇底までの深さは25cmである。

埋土 茶灰色のシルト混じり細砂～極細砂が堆積している。

出土遺物 10～20cm程度の円礫とともに、甕の破片が出土しているが、細片のため図化および時期の詳細な決定はできなかった。

時期 川除2期～7期である。

SK08

- 検出状況** I-1区の南東部で検出された。SH08を切り、SH10に切られている。
- 形状・規模** 半分近くがSH10により削平されているため確かではないが、平面形は楕円形かと思われる。計測できる残存値を示せば以下のとおりとなる。検出面での長さ155cm、幅95cm、土壌底での長さ150cm、幅90cmである。検出面からの深さは20cmである。
- 埋土** 明灰白色のシルト混じり
細砂～極細砂が堆積する。
- 出土遺物** 壺・甕・器台などが出土している。
- 時期** 川除4期である。



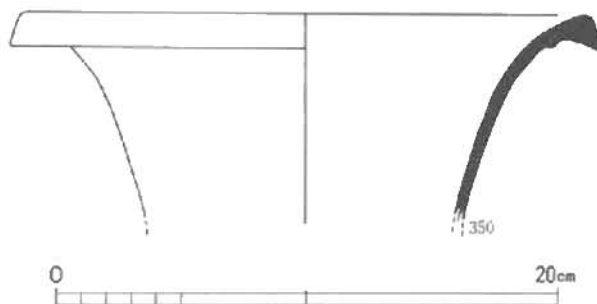
第135図 SK08出土土器

第44表 SK08出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
349	器台	口径 : 底径 : (24.8) 器高 : 残3.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白	胴部約1/4	

SK09

- 検出状況** I-1区の南東部で検出された。SD18に切られている。
- 形状・規模** 平面形は長さ350cm、幅30～75cmの溝状を呈する。検出面から底までの深さは5～17cmであり、土壌底における長さは340cm、幅13～40cmを測る。横断面形は逆台形である。
- 埋土** 埋土は3層に分かれ、シルト質極細砂などの細粒の堆積が認められる。いずれも炭片を含んでいる。
- 出土遺物** 2層より中期の壺の口縁部が出土している。
- 時期** 川除1期である。



第136図 SK09出土土器

第45表 SK09出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
350	壺	口径 : (22.3) 底径 : 器高 : 残8.2 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁端部エビオサユ。他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部約1/4	

SK10 (図版54)

- 検出状況** I-1区の南東部で検出された。SH12・13の南に位置している。
- 形状・規模** 平面形は、長さ154cm、幅73cmの隅円長方形を呈する。検出面から底までの深さは24～31

cmであり、土壌底における長さは123cm、幅46cmを測る。横断面形は逆台形であるが、中央部が幅25cm、深さ4cmにわたって窪む部分がある。

埋土

埋土は1層であり、茶灰色のシルト質極細砂である。

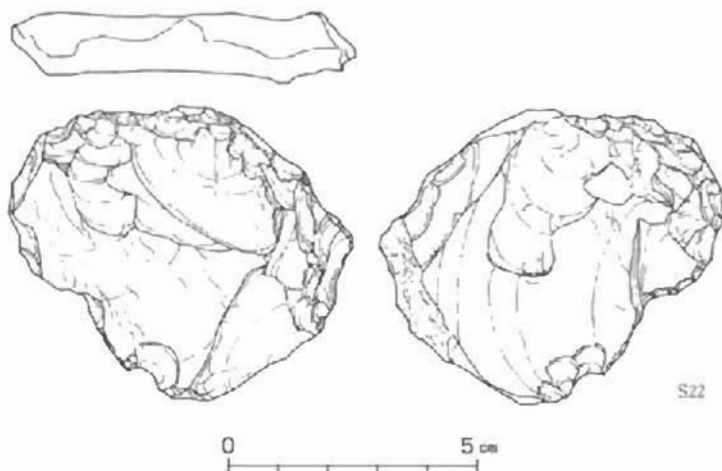
出土遺物

土器は含まれて

いないが、楔形石器が1点出土している。サヌカイト製であり、厚手の剥片を素材にしている。上下両端、特に上端には階段状剥離の著しい二次加工が認められる。

時期

川除1期である。



第137図 SK10出土石器

SK11 (図版53)

検出状況

I-1区の東半で検出された。SX03の西端部を切る。

形状・規模

平面形は、一辺100cm程度の隅円の正方形を呈する。検出面から底までの深さは10cmであり、土壌底における規模は一辺70cmを測る。横断面形は逆台形である。

埋土

埋土は1層であり、茶灰色のシルト質極細砂である。

出土遺物

土器は含まれていないが、石器が出土している。

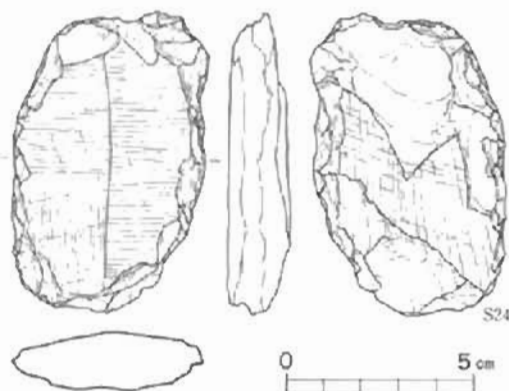
石器には、石剣片を石庖丁に転用しようとしたもの1点、石器の未製品が1点ある。

S24は、頁岩を素材とするもので、表裏両面の中央に鑄が認められることから石剣片であることが判る。樋の有無などの石剣の詳細は不明であるが、推定できる身の幅は約7cm、厚さ1.6cmとかなり大型の部類に属する。この石剣片の四周に施された調整痕からは、楕円形の形状を意識した石器を作成する意図がうかがえる。小規模であるものの、石庖丁への転用が想定されるが、製作途中に廃棄されたものである。

S23は、サヌカイト製の石器未製品



第138図 SK11出土石器(1)



第139図 SK11出土石器(2)

である。

時期 川除1期である。

SK15 (図版45・46)

検出状況 1-4区北端部で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で144cm、その直行方向で110cmを測る。土壌の断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは、土壌中央部で35cmである。

埋土 4層に分かれ、上から灰褐色シルト、灰茶褐色シルト、暗灰褐色シルト、暗灰茶褐色シルトが堆積している。

出土遺物 第3層・4層から土器が出土している。いずれも破片での出土で、完形のもの認められなかった。

土器は、壺・甕・高坏・器台の各器種が出土しており、甕が大半を占めている。

壺 図化できた土器は351の一個体である。他に長頸壺や底部片などが出土している。また、生駒西陵産と認められる土器片も出土している。

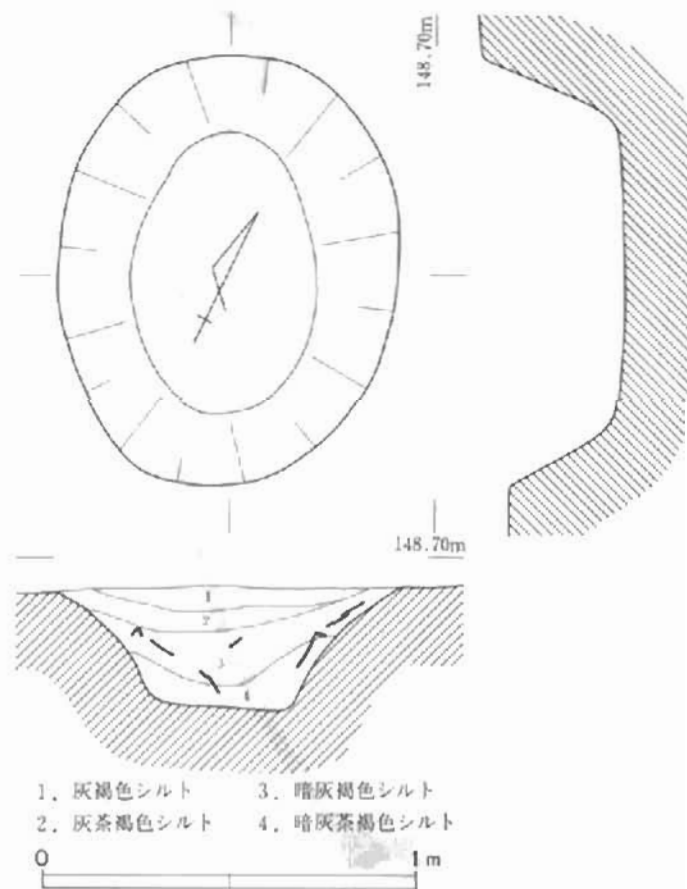
甕 いずれも口縁部を「く」字形に外反させ平底の底部をもつ、いわゆるV様式に特徴的な甕である。ただし、353・354のように外面調整においてタタキ整形後縦方向のハケ調整を施すものと、355・357のようにタタキ整形のままのものに分けることができる。また、内面の調整においても、359のように縦方向(下から上)のヘラケズリ調整を施すものと、施さないものに分ける

ことができる。なお、356の土器についても内面をヘラケズリ調整した痕跡が認められる。この他、361については、二次焼成を受けている可能性もある。

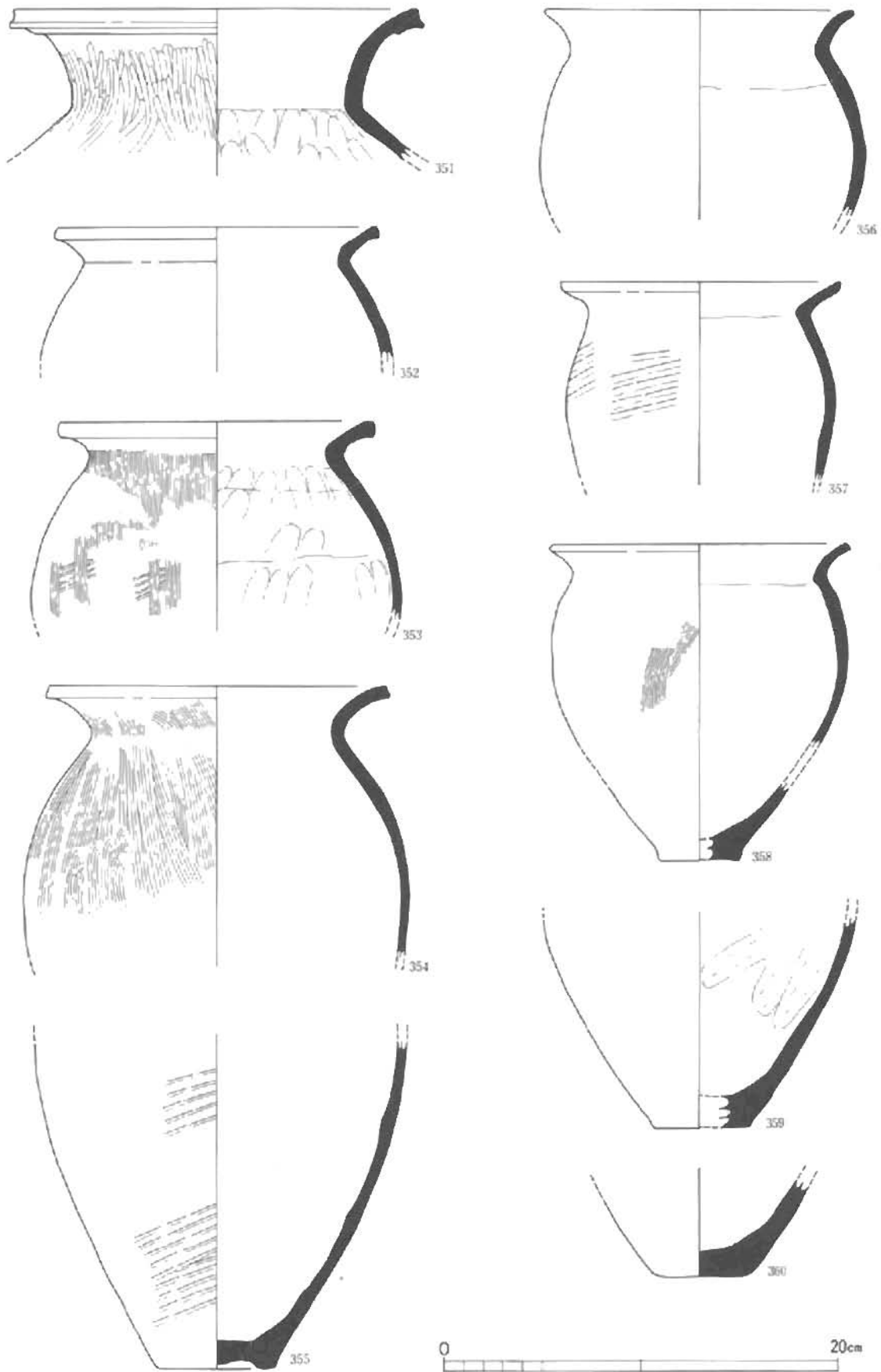
高坏 図化できたのは2個体である。この2個体は、別のタイプのものと考えられる。

器台 最後に、器台についてであるが、裾部が残存しているだけである。したがって、透かし穴の数などについては推測できない。透かし穴の径(推定)は、1.4cmである。

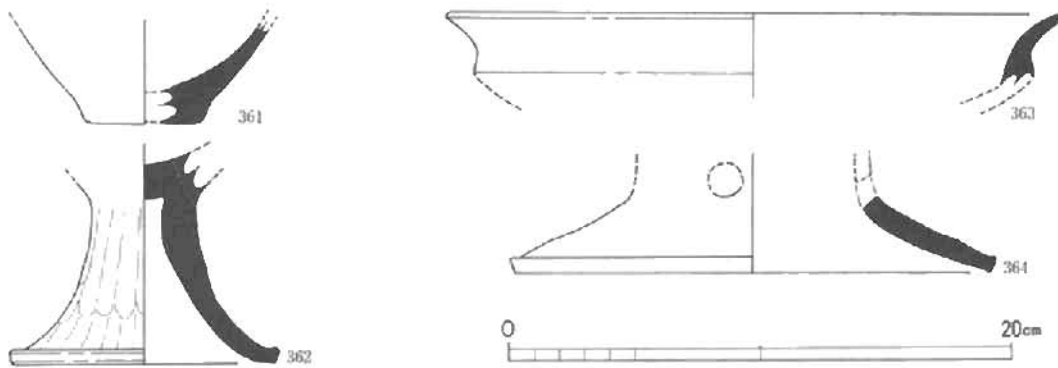
時期 川除3期である。



第140図 SK15



第141図 SK15出土土器(1)



第142図 SK15出土土器(2)

第46表 SK15出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
351	壺	口径 : (20.6) 底径 : 器高 : 残12.6 頸径 : (14.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 頸部-体部縦ヘラミギキ 内面 : 口縁部~頸部ヨコナデ, 体部エヒオサエ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部-体部約1/3	
352	壺	口径 : (16.2) 底径 : 器高 : 残6.8 頸径 : (13.6) 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のための調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	口縁部-体部約1/2	
353	壺	口径 : 16.0 底径 : 器高 : 残10.0 頸径 : (13.0) 体部径 : (18.9)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部3変/cmクテハキ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部上半エヒオサエ	外面 : にふい 内面 : にふい	口縁部3/4 体部1/2	スス付着
354	壺	口径 : (17.2) 底径 : 器高 : 残13.6 頸径 : (12.8) 体部径 : (19.6)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 頸部-体部6変/cmクテハキ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 頸部磨滅のための調整不明, 体部エヒオサエ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部-体部約4/7	
355	壺	口径 : 底径 : 6.0 器高 : 残16.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部3変/cmクテハキ一部残る 内面 : 体部エヒナデ, 底部円板充填	外面 : 赤橙 内面 : 赤橙	体部-底部 完全	
356	壺	口径 : 15.8 底径 : 器高 : 残11.3 頸径 : 13.2 体部径 : (16.8)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部磨滅のための調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ, 磨滅のための調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部-体部3/4	
357	壺	口径 : 14.2 底径 : 器高 : 残10.0 頸径 : 11.4 体部径 : (13.8)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部一部短いヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部上位横ヘラケズリ, 中位以下縦ヘラケズリ	外面 : 灰茶 内面 : 灰茶	口縁部41% 完全, 体部 わずか	スス付着
358	壺	口径 : (15.4) 底径 : (4.0) 器高 : (16.0) 頸径 : (13.0) 体部径 : (15.0)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部一部クテハキ残る 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部磨滅のための調整不明	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	口縁部1/2 底部1/2	
359	壺	口径 : 底径 : (5.0) 器高 : 残10.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のための調整不明 内面 : 体部縦ヘラケズリ	外面 : にふい 内面 : にふい	体部1/8 底部1/2	
360	壺	口径 : 底径 : 5.0 器高 : 残4.9 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部ナデ, 底部クテハキ 内面 : 体部-底部ナデ, 体部エヒオサエ	外面 : 橙 内面 : 灰白	底部完全 体部わずか	
361	壺	口径 : 底径 : 4.6 器高 : 残3.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のための調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	底部~3/4 体部わずか	
362	高坏	口径 : 底径 : (10.4) 器高 : 残8.4 脚柱径 : 4.2 坏部高 :	外面 : 脚柱縦ヘタのちヘラミギキ, 根端部ヨコナデ 内面 : ナデ	外面 : 灰黄 内面 : 灰黄	脚柱部完全 根端部1/6	
363	高坏	口径 : (24.2) 底径 : 器高 : 残2.8 脚柱径 : 坏部高 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 黒褐 内面 : 灰白	口縁部1/6	
364	器台	口径 : 底径 : (10.0) 器高 : 残3.5 体部径 :	外面 : 根端部ヨコナデ, 円孔 内面 : 根端部ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	根端部1/4	

SK17 (図版22・46)

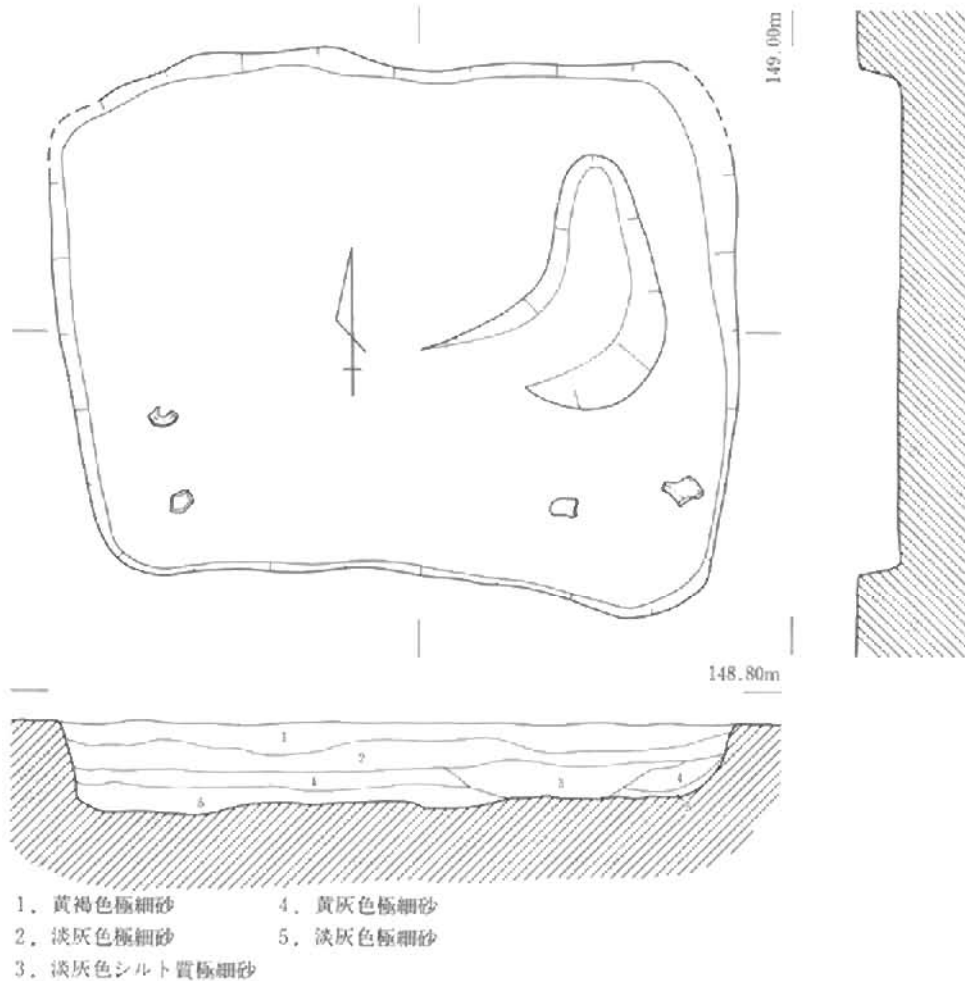
検出状況 I-2区の南半で検出された。SH16・17とSH25・26の間に位置しており、SD17によって切られている。

形状・規模 一部分がSD17によって切られているが形状はほぼ確定している。平面形はやや不定形であるが隅円の長方形を指向している。規模は検出面では長軸方向に360cm、短軸方向に280cm、土壌底では長軸方向に350cm、短軸方向に258cmを測る。検出面から土壌底までの深さは40~50cmである。

埋土 埋土は5層にわたって堆積している。上層から黄褐色極細砂、淡灰色極細砂、淡灰色シルト質極細砂、黄灰色極細砂、淡灰色極細砂の順に堆積している。

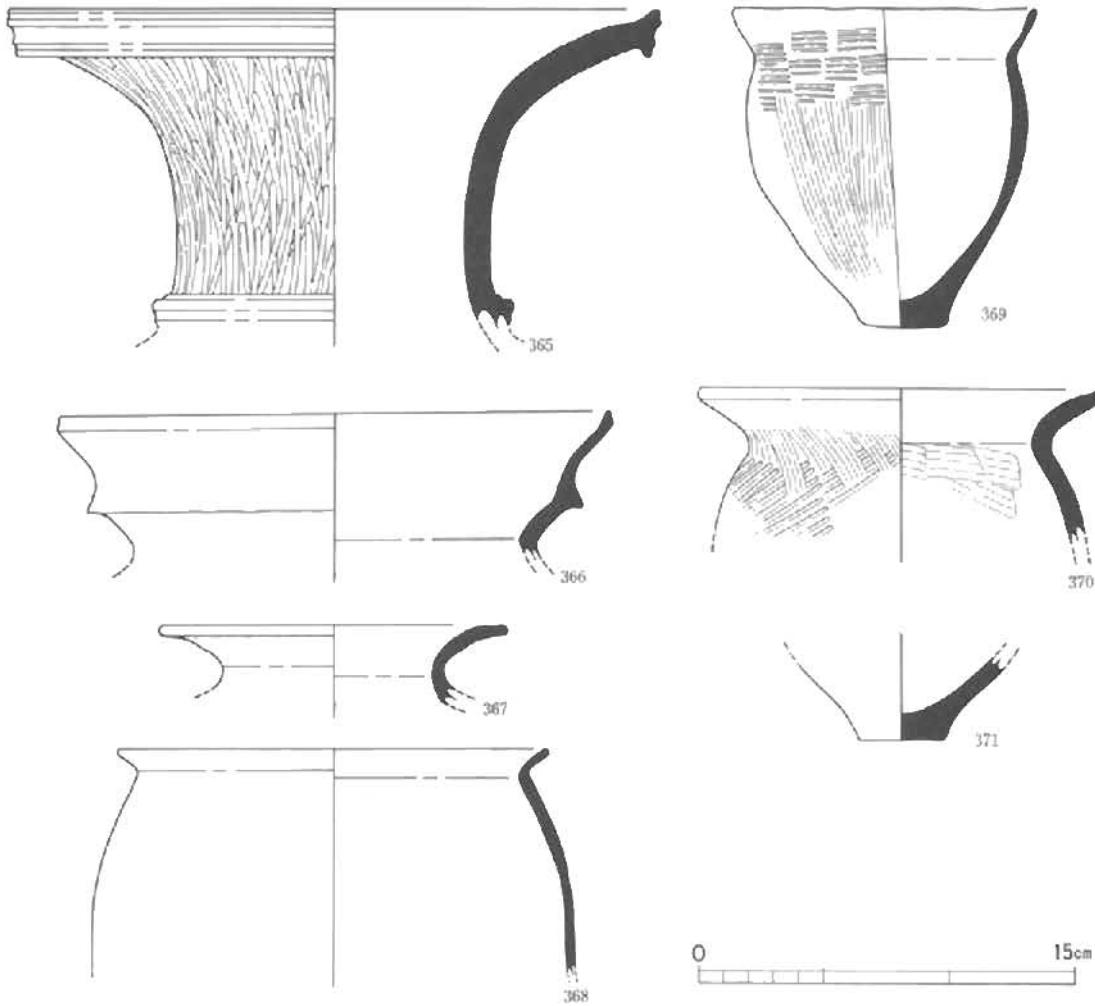
出土遺物 壺・甕が出土している。図化できたものは7点である。365の壺は頸部にヘラミガキを施した広口壺、366は二重口縁壺である。甕はハケでタタキ痕を消している。

時期 川除5期である。



0 2m

第143図 SK17



第144図 SK17出土土器

第47表 SK17出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
365	壺	口径：(25.8) 底径： 器高：残12.5 胴径：(12.6) 体部径：	外面 口縁端面掘凹線、口縁部ヨコナデ、口縁部-胴部緩へうしぎ、 胴-体部間凸帯 内面 口縁部ヨコナデ、他磨滅のため調整不明	外面：浅黄橙 内面：灰白	口縁部-胴部 1/4	
366	壺	口径：(21.8) 底径： 器高：残5.9 胴径：(16.1) 体部径：	外面 } 内面 } 磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：灰白	口縁部1/8	
367	壺	口径：(13.6) 底径： 器高：残3.2 胴径：(8.9) 体部径：	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	口縁部3/4 胴部1/4	
368	壺	口径：(16.9) 底径： 器高：残8.8 胴径：(15.6) 体部径：(19.3)	外面 } 内面 } 磨滅のため調整不明	外面：黄灰 内面：灰白	口縁部-体部 約1/2	
369	壺	口径：(11.8) 底径：3.5 器高：残12.6 胴径：(10.4) 体部径：(11.2)	外面 口縁部タタミ、のちユビナデ、体部中位以下タタミ、のちタテハ ケのちナデ 内面 ユビナデ	外面：にぶい 黄橙 内面：灰白	口縁部1/4 体部1/2 底部完存	
370	壺	口径：(16.2) 底径： 器高：残6.2 胴径：(12.0) 体部径：	外面 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタミ、のち胴部にかけて4条/ cmタテハケ 内面 口縁部ヨコナデ、体部4条/cmハケ	外面：にぶい 橙 内面：浅黄橙	口縁部-体部 約1/4	
371	壺	口径： 底径：3.4 器高：残3.4 胴径： 体部径：	外面 } 内面 } 磨滅のため調整不明	外面：にぶい 橙 内面：にぶい 橙	底部完存 体部わずか	

SK19

検出状況 I-2区の南半で検出された。SD18に切られている。

形状・規模 半分近くがSD18に削平されているため確かではないが、平面形は円形または楕円形かと思われる。計測できる残存値を示せば以下のとおりとなる。検

出された部分の長さ50cm、幅30cm、土壇底では長さ45cm、幅20cmである。検出面からの深さは27~32cmである。

出土遺物 甕の口縁部が1点出土している。磨滅が著しく調整は不明である。

時期 川除6期である。



第145図 SK19出土土器

第48表 SK19出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
372	甕	口径 113.9 口径 器高 44.1 胴径 (10.4) 体部径:	外面 } 磨滅のための調整不明 内面 }	外面 明赤褐色 内面 明赤褐色	口縁部一体 約1/4	

SK21

検出状況 I-2区の南半で検出された。SD18とSD14にはさまれたところに位置している。

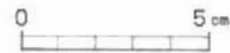
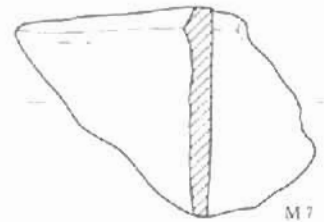
形状・規模 平面形は不整形であるが隅円の長方形を指向しているかと思われる。規模は以下のとおりとなる。検出された部分の長さ145cm、幅85~90cm、土壇底では長さ119cm、幅50~56cmである。検出面からの深さは25~30cmで、断面形は皿形を呈している。

出土遺物 土器と鉄器が出土している。

土器 細片が多く図化できるものはなかったが弥生時代後期と考えられる甕の口縁部と壺の体部が出土している。

鉄器 器種は不明であるが1点出土している。長さ5.5cm、幅6.2cmである。

時期 川除2~6期である。



第146図 SK21出土鉄器

SK22

検出状況 I-2区の南半で検出された。SD18とSD14にはさまれたところに位置している。SK21の南東4mで検出している。SD14で西側が削平されている。

形状・規模 平面形は不整形であるが楕円形を指向しているかと思われる。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分の長さ82cm、幅45cm、土壇底では長さ67cm、幅20cmである。検出面からの深さは22~34cmで、断面形はU字形を呈している。

出土遺物 石器が出土している。S25は石庖丁の未製品である。長さ6.6cm、幅6cm、厚さ1.3cmである。全体の約1/3程の破片となって出土している。製作途中で割れたと考えられる。硬質



第147図 SK22出土石器

頁岩である。S26は打製円板である。直径5.2cm、幅0.6cmである。凝灰質砂岩である。

時期 川除1期である。

SK23 (図版23)

検出状況 1-2区の南端で検出された。SH28の南側約2mのところに位置している。

形状・規模 平面形はややいびつながら隅円長方形を指向している。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸方向に237cm、短軸方向に112cm、土壌底では長軸方向に172cm、短軸方向に36~48cmである。検出面からの深さは53~60cmで、断面形は逆台形を呈している。

埋土 埋土は10層にわたって堆積している。大きく分けて2つのグループに分層することができる。上層のグループは第1層~第7層までで、上から土器片を含む褐色極細砂、黒褐色シルト質極細砂、淡黄色細砂、炭・土器片を含む淡褐色シルト質極細砂~細砂、黄褐色極細砂~細砂、淡褐色シルト質極細砂、淡黄褐色細砂が堆積している。下層のグループは第8層~第10層までで、上から淡褐色~黄褐色極細砂~細砂、黒褐色シルト質細砂、地山ブロックが堆積している。第8層までは比較的早い段階で土層の堆積が行われたようである。その後徐々に第7層以後の土層が堆積している。遺物の混入は上層グループの堆積の中に認められる。

出土遺物 土器のみが出土している。いずれも細片のため図化することはできなかった。壺・甕・鉢が出土しており、弥生時代後期の遺物と考えられる。

時期 川除2~6期である。

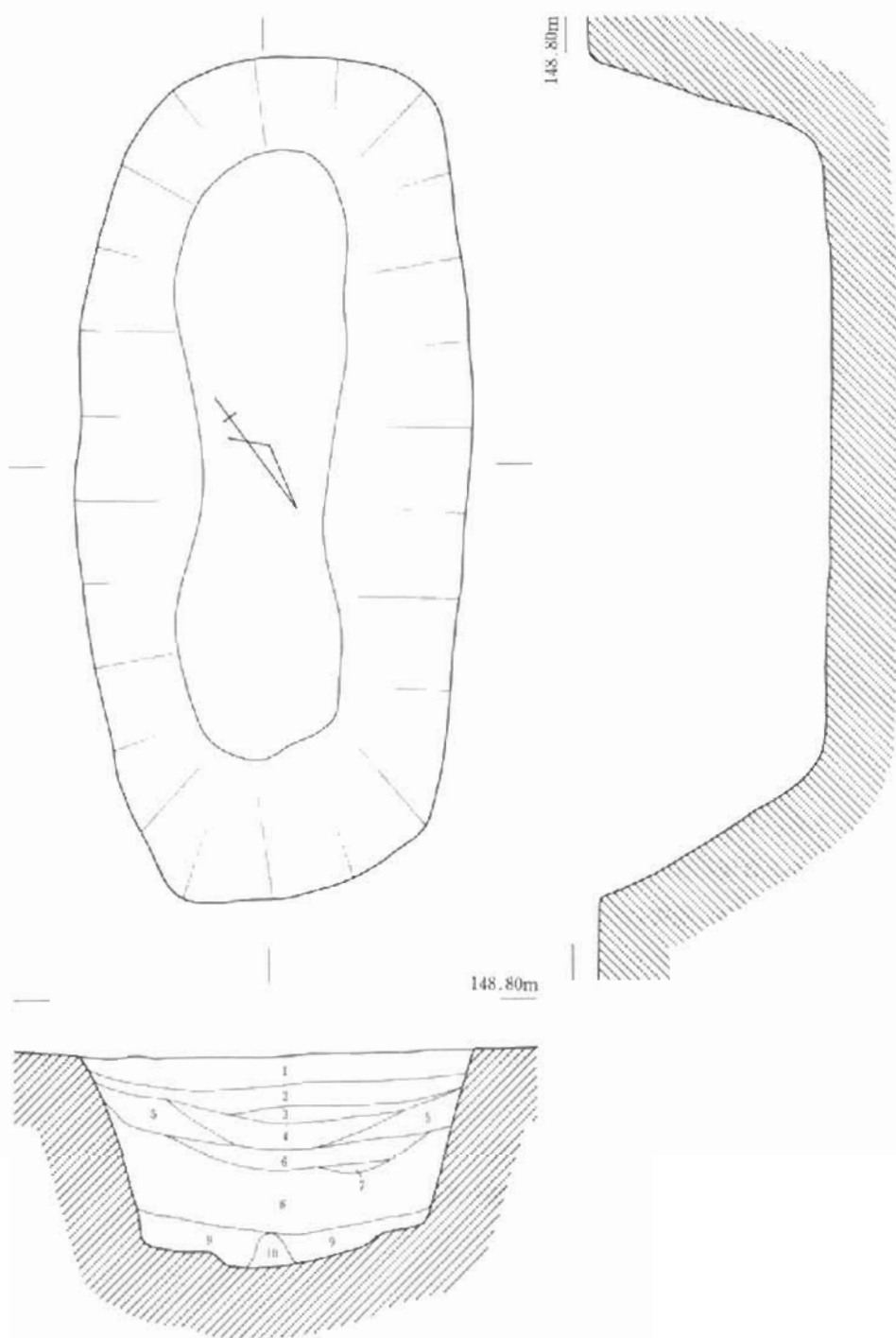
SK24 (図版22・46~48)

検出状況 1-2区の南東端で検出された。

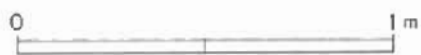
形状・規模 平面形はややいびつながら隅円長方形を呈している。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸方向に298cm、短軸方向に215~245cm、土壌底では長軸方向に148cm、短軸方向に125cmである。検出面からの深さは59~66cmで、断面形は基本的に逆台形を呈しているが北東辺は段を有している。

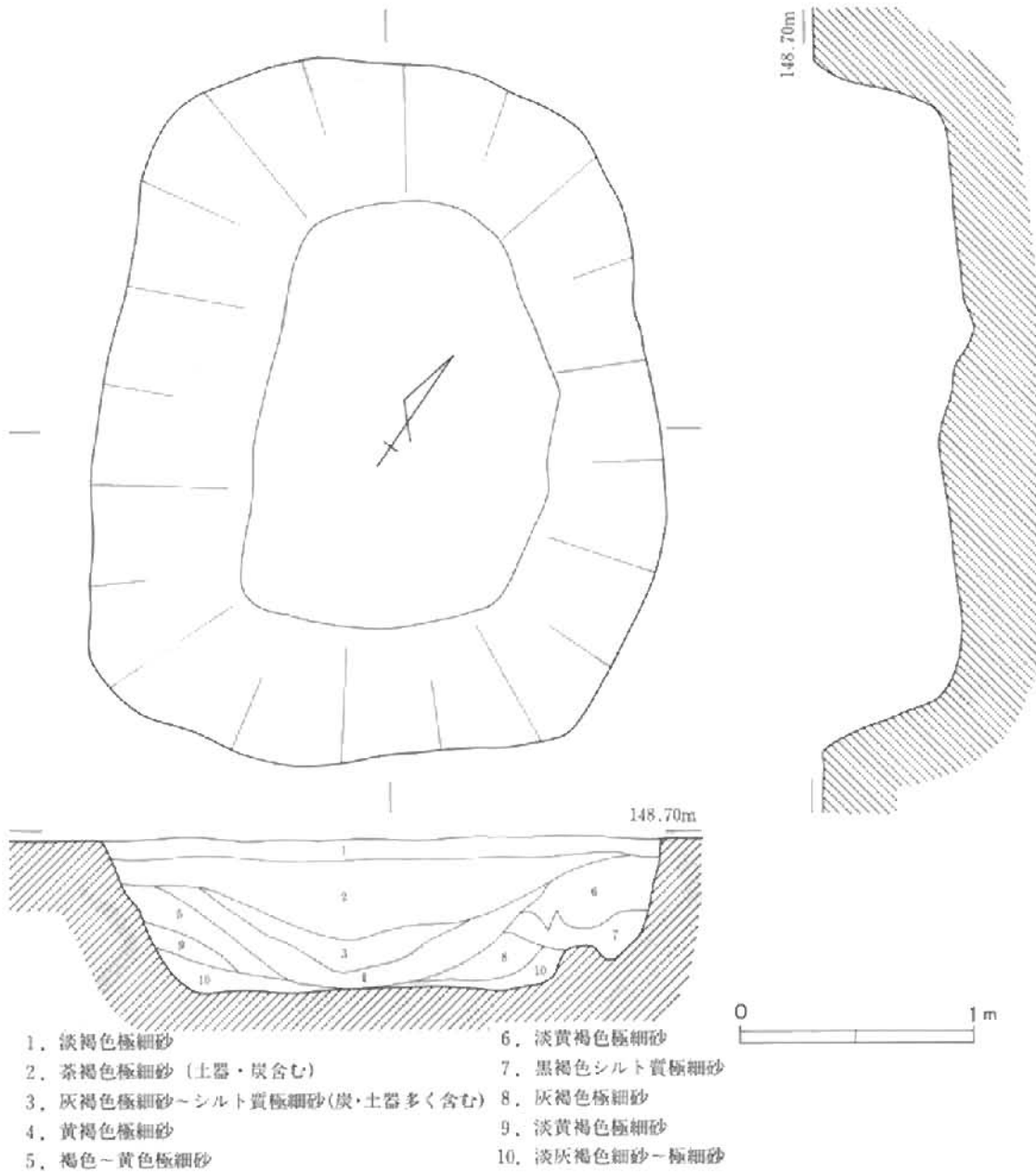
埋土 埋土は10層にわたって堆積している。第10層~第5層までの土層は比較的短期間に堆積したものと考えられる。第4層以降の土層中には土器・炭化物の混入が著しい。



- | | |
|--------------------------------|------------------|
| 1. 褐色極細砂 (土器片含む) | 6. 淡褐色シルト質極細砂 |
| 2. 黒褐色シルト質極細砂 | 7. 淡黄褐色細砂 |
| 3. 淡黄褐色細砂 | 8. 淡褐色～黄褐色極細砂～細砂 |
| 4. 淡褐色シルト質極細砂～細砂
(木炭・土器片含む) | 9. 黒褐色シルト質細砂 |
| 5. 黄褐色極細砂 | 10. 地山ブロック |



第148図 SK23



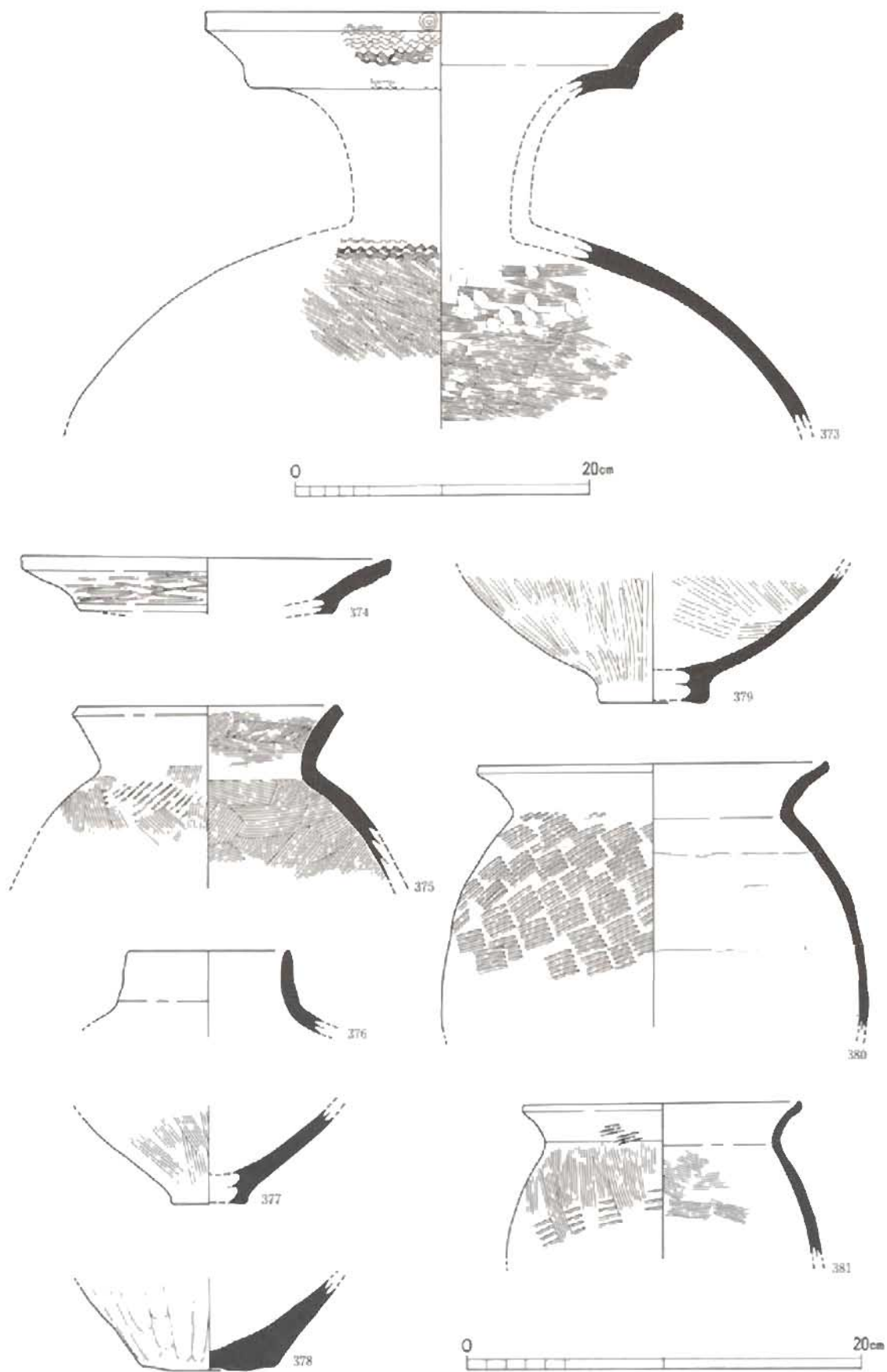
第149図 SK24

出土遺物 土器と石器が出土している。

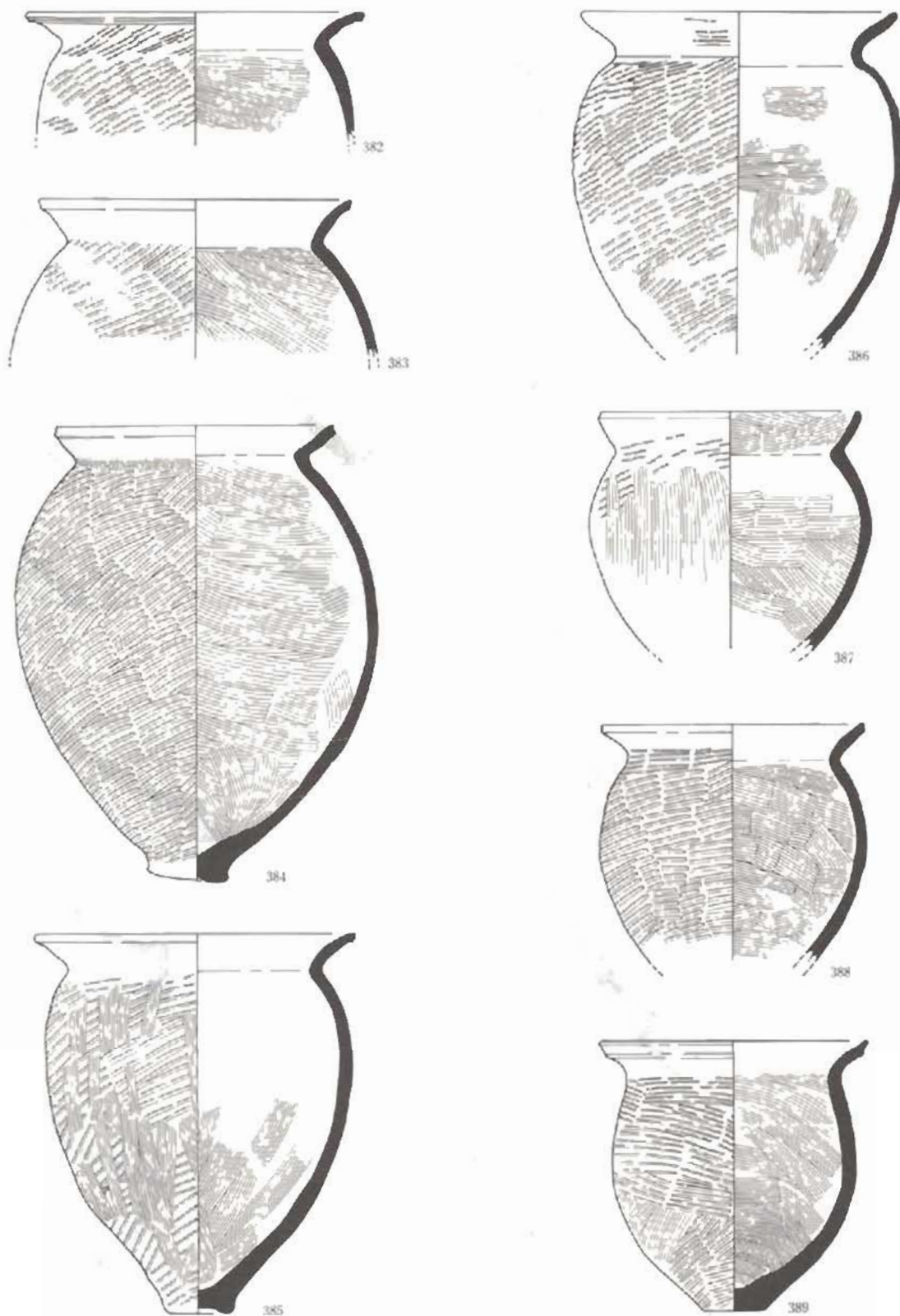
土器 壺・甕・高坏・甔の各器種が出土している。

壺 7点を図化している。二重口縁壺・短頸壺・短頸直口壺などが出土している。373の二重口縁壺は大型のもので、口縁部に波状文を施し、円形浮文を貼り付けている。底部のみの残存は3点である。それぞれ外面の調整はハケで行っているもの、ケズリで行っているもの、ヘラミガキで行っているものがある。

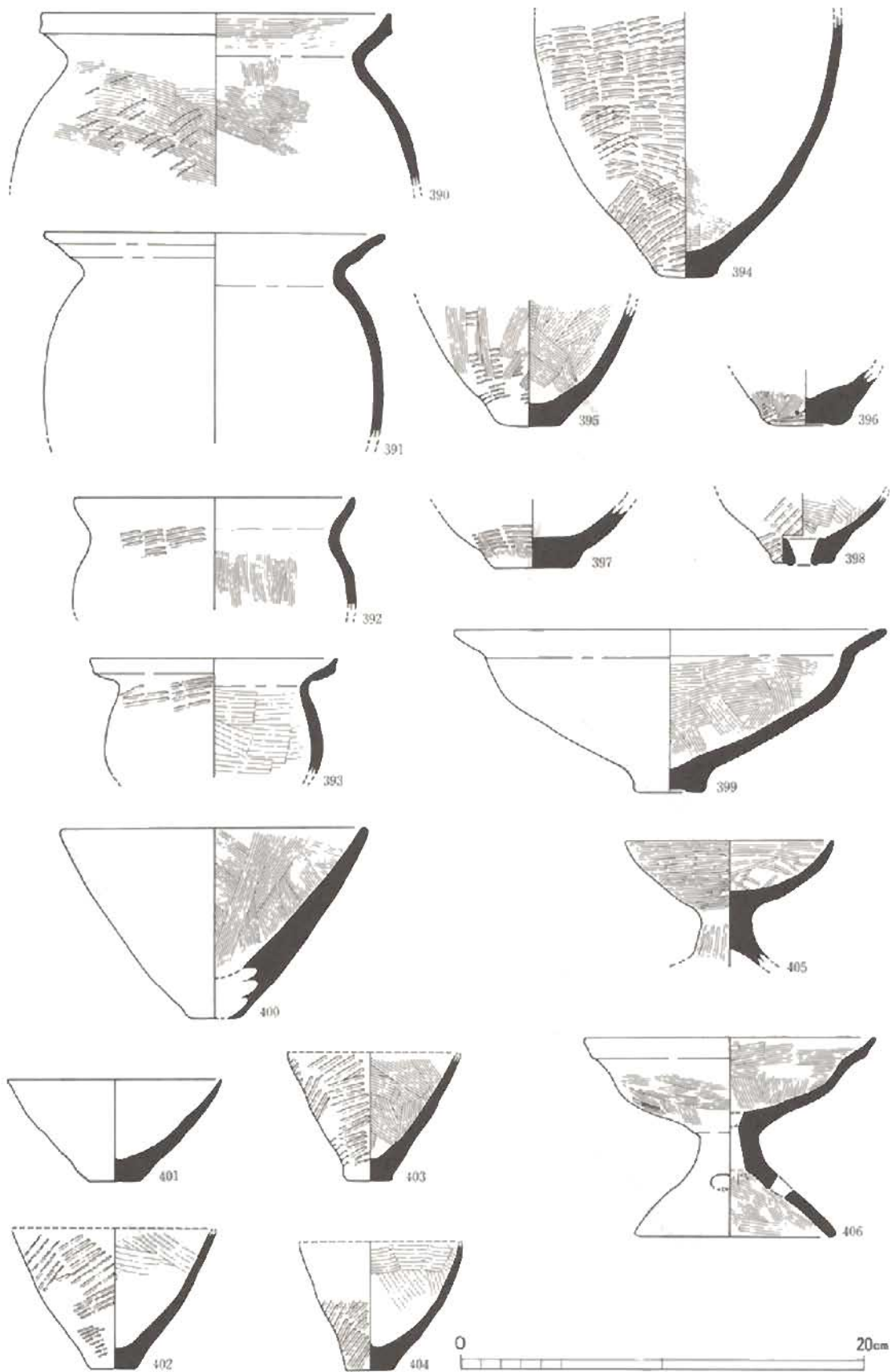
甕 18点を図化している。中型から小型の製品が多い。口縁部の形態は「く」の字状を呈するものが多いが、口縁端部を上方につまみ上げているものもみられる。調整は、外面のほとんどにタタキを施している。一部にその後ハケを施しているものが存在する。内面はハ



第150図 SK 24出土土器 (1)



第151図 SK24出土土器(2)



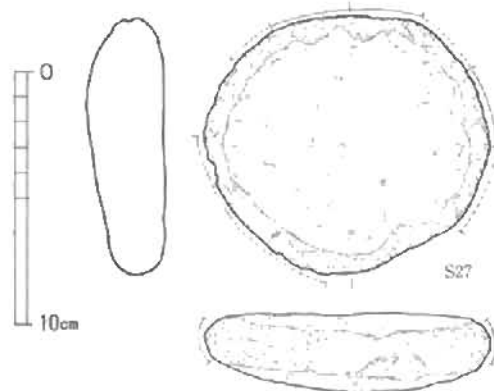
第152図 SK24出土土器(3)

ケで調整しているものが多い。

鉢 6点を図化している。小型の鉢と体部が内湾し口縁部が外反している鉢がある。

高坏 2点を図化している。碗形の坏部のもと、丹波地方の影響を受けているものが出土している。いずれも小型である。

石器 叩石を図化している。楕円形を呈し、比較的偏平である。側面に敲打痕がある。石材は花崗岩である。



第153図 S K 24出土石器

時期 川除5期である。

第49表 S K 24出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
373	壺	口径 (32.0) 底径: 器高 頸径 体部径	外面 口縁部面円形浮文、口縁部流状文、刷目目、体部ヘラミダキ、上位流状文 内面 口縁部横ヘラミダキ、体部12条/cmヨコハケ 上位ユヒナデ	外面 土に近い 内面 土に近い	口縁部1/10 体部1/3 頸部欠	
374	壺	口径 (18.8) 底径: 器高 残2.8 頸径: 体部径	外面 口縁部横ヘラミダキ、のち口縁部部ヨコナデ 内面	外面 鉄褐色 内面 鉄褐色	口縁部1/8	
375	壺	口径 (13.2) 底径: 器高 残5.2 頸径 11.0 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、体部4条/cmタタキ、のち7条/cmタテハケ 内面 口縁部7条/cmタテハケ、のち口縁部部のみヨコハケ、体部7条/cmヨコハケ	外面 浅黄褐色 内面 土に近い	口縁部一部 欠、体部わ ずか	
376	壺	口径 (8.0) 底径: 器高 残4.4 頸径 体部径	外面 口縁部横ヘラミダキ、体部タテハケのみナデ 内面 口縁部ナデ	外面 土色 内面 灰白	口縁部1/4 体部わずか	
377	壺	口径 底径 (13.6) 器高 残4.7 頸径 体部径	外面 体部一底部タテハケ 内面 左上がりナデ	外面 土色 内面 土色	底部1/2 体部わずか	
378	壺	口径 底径 (6.8) 器高 残4.6 頸径: 体部径	外面 体部一底部横ヘラミダキ 内面 ナデ	外面 黒褐色 内面 灰白	底部1/4 体部わずか	
379	壺	口径 底径 (5.3) 器高 残6.5 頸径: 体部径:	外面 体部一底部横ヘラミダキ 内面 体部5条/cm左上リハケ	外面 灰褐色 内面 灰褐色	体部一底部 約1/4	
380	壺	口径 (17.5) 底径: 器高 残13.4 頸径 (14.2) 体部径 (21.7)	外面 口縁部タテハケのちヨコナデ、体部4条/cmタタキ 内面 口縁部ヨコナデ、体部8条/cmハナニく一部残る	外面 土に近い 内面 浅黄褐色	口縁部一部 欠、体部約 1/3	
381	壺	口径 (13.9) 底径: 器高 残7.8 頸径 (112.0) 体部径:	外面 口縁部前めハケのちヨコナデ、体部タタキのち10条/cmタテハケ 内面 口縁部ヨコナデ、体部10条/cmヨコハケ	外面 土に近い 内面 浅黄褐色	口縁部一 部約1/4	
382	壺	口径 (16.0) 底径: 器高 残6.2 頸径 (113.0) 体部径:	外面 口縁部面円形1条、口縁部タタキのちヨコナデ、体部4条/cm タタキ 内面 口縁部ヨコナデ、体部8条/cmヨコハケ	外面 灰白 内面 浅黄褐色 に土色	口縁部1/8 体部約3/5	
383	壺	口径 (15.1) 底径: 器高 残7.5 頸径 (112.5) 体部径:	外面 体部4条/cmタタキ、他は磨滅のため調整不明 内面 体部7条/cm左上リハケ、のち頸部のみヨコハケ	外面 鉄褐色 内面 明褐色	口縁部1/10 体部わずか	
384	壺	口径 (13.4) 底径: 器高 残21.9 頸径: 11.4 体部径 17.8	外面 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ、頸部のみタテハケ 内面 口縁部ヨコナデ、体部7条/cmヨコハケ	外面 灰褐色 内面 土色	体部一部 欠	
385	壺	口径 (15.4) 底径: 器高 残18.2 頸径: 12.4 体部径 14.9	外面 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキのち9条/cmタテハケ、此 面木の炭染 内面 口縁部ヨコナデ、体部5条/cmタテハケ	外面 土に近い 赤褐色 内面 土に近い 赤褐色	体部一部 欠	
386	壺	口径 (15.2) 底径: 器高 残16.2 頸径: (112.0) 体部径 (16.2)	外面 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ 内面 体部8条/cm上半ヨコハケ、下半タテハケ	外面 浅黄褐色 内面 浅黄褐色	口縁部一 部約1/4	

第50表 S K24出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
387	甕	口径 : (12.4) 底径 : 器高 : 残11.4 胴径 : (11.2) 体部径 : (13.7)	外面 : 口縁部タタキのみココナテ、体部タタキのみタナハテ 内面 : 口縁部-体部6.5cmココハテ	外面 : 橙 浅黄橙 内面 : *	口縁部-体部約1/3	
388	甕	口径 : 12.6 底径 : 器高 : 残11.1 胴径 : 10.4 体部径 : 13.0	外面 : 口縁部ココナテ、体部4.5cmタタキ 内面 : 体部2.5cmココハテ、口縁部磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 淡黄	体部下半以下欠	
389	甕	口径 : (13.0) 底径 : 3.0 器高 : 12.5 胴径 : 10.4 体部径 : 11.8	外面 : 口縁部ココナテ、体部下1.5cm上半右上がりタタキ上半横タタキ 内面 : 口縁部ココナテ、体部3.5cmココハテ	外面 : によしい 黄橙 内面 : *	口縁部-体部上半1/2欠	スズ付着
390	甕	口径 : (17.2) 底径 : 器高 : 残8.5 胴径 : (14.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、体部2.5cmタタキのみ7.5cmココハテ 内面 : 口縁部10.5cmココハテ、体部12.5cmココハテ	外面 : によしい 黄橙 内面 : 灰白	口縁部-体部約1/3	
391	甕	口径 : (16.0) 底径 : 器高 : 残10.0 胴径 : (13.0) 体部径 : (16.9)	外面 : 口縁部ココナテ、体部ナテ 内面 : 口縁部ココナテ、体部ナテ	外面 : によしい 黄橙 内面 : *	口縁部-体部約1/5	
392	甕	口径 : (14.0) 底径 : 器高 : 残5.5 胴径 : (12.5) 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、体部タタキ 内面 : 口縁部ココナテ、体部タナハテ	外面 : 橙 内面 : 淡黄	口縁部-体部約1/8	
393	甕	口径 : (12.2) 底径 : 器高 : 残5.7 胴径 : (9.4) 体部径 : (10.8)	外面 : 口縁部ココナテ、体部タタキ 内面 : 口縁部ココナテ、4.5cmココハテ	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	口縁部-体部約1/4	
394	甕	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残13.2 胴径 : 体部径 : (15.3)	外面 : 体部3.5cmタタキ、底面木の葉痕 内面 : 体部タナハテのみナテ	外面 : によしい 橙 内面 : 灰褐	底部定存 体部約1/6	
395	甕	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残6.2 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部タタキのみタナハテ 内面 : 体部2.5cmココハテ	外面 : 灰白 黒 内面 : 橙	底部定存 体部わずか	
396	甕	口径 : 底径 : 4.0 器高 : 残1.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部タタキのみ1.0cmココハテ 内面 : 体部ナテ	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部定存 ごくわずか	
397	甕	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残2.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部4.5cmタタキのみ底部のみ1.6cmココハテ 内面 : ナテ	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	底部定存 体部わずか	
398	甕	口径 : 底径 : 3.0 器高 : 残3.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部タタキ 内面 : 体部6.5cmココハテ	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	底部定存 体部わずか	
399	鉢	口径 : (20.6) 底径 : 3.2 器高 : 8.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、体部ナテ、底面木の葉痕 内面 : 口縁部ココナテ、体部6.5cmココハテ	外面 : 淡黄橙 橙 内面 : *	口縁部-体部約1/4 底部定存	
400	鉢	口径 : (15.0) 底径 : (12.6) 器高 : 9.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 体部ココハテわずかに残る	外面 : によしい 黄橙 内面 : *	口縁部僅か 体部約1/3 底部約1/2	
401	鉢	口径 : (10.8) 底径 : 2.7 器高 : 5.0 胴径 : 体部径 :	外面 : ナテ 内面 : ココナテ	外面 : 灰白 橙 内面 : *	ほぼ定存	
402	鉢	口径 : 底径 : 2.2 器高 : 6.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 4.5cmタタキ 内面 : 体部下半ナテ、のち上半4.5cmココハテ	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	底部定存 体部1/4 口縁部欠	
403	鉢	口径 : 底径 : 2.2 器高 : 6.2 胴径 : 体部径 :	外面 : 4.5cmタタキ 内面 : 6.5cmココハテ	外面 : 橙 内面 : 橙	底部定存 体部1/3 口縁部欠	
404	鉢	口径 : (8.0) 底径 : 2.4 器高 : 6.2 胴径 : 体部径 :	外面 : 4.5cmタタキ、のち上半ハテ 内面 : 5.5cmココハテ、下半は磨滅のため調整不明	外面 : によしい 橙 内面 : によしい 橙	ほぼ定存	
405	高坏	口径 : (10.4) 底径 : 器高 : 残6.1 胴柱径 : 2.5 坏部高 : 3.5	外面 : 坏部横へうらミダキ、胴柱部縦へうらミダキ 内面 : 坏部横へうらミダキ、のち口縁部残ココナテ	外面 : によしい 橙 内面 : によしい 橙	坏部定存 胴部欠	
406	高坏	口径 : 14.4 底径 : 10.0 器高 : 9.8 胴柱径 : 2.9 坏部高 : 4.7	外面 : 体部10.5cmココハテ、口縁部ココナテ、胴部ナテ 内面 : 体部上半7.5cmココハテ、下半タナハテ、口縁部ココナテ、胴部上半タナハテ、のち下半ココナテ、3孔、円板充填	外面 : によしい 橙 内面 : によしい 黄橙	口縁部、胴部約1/3欠	

SK25 (図版48)

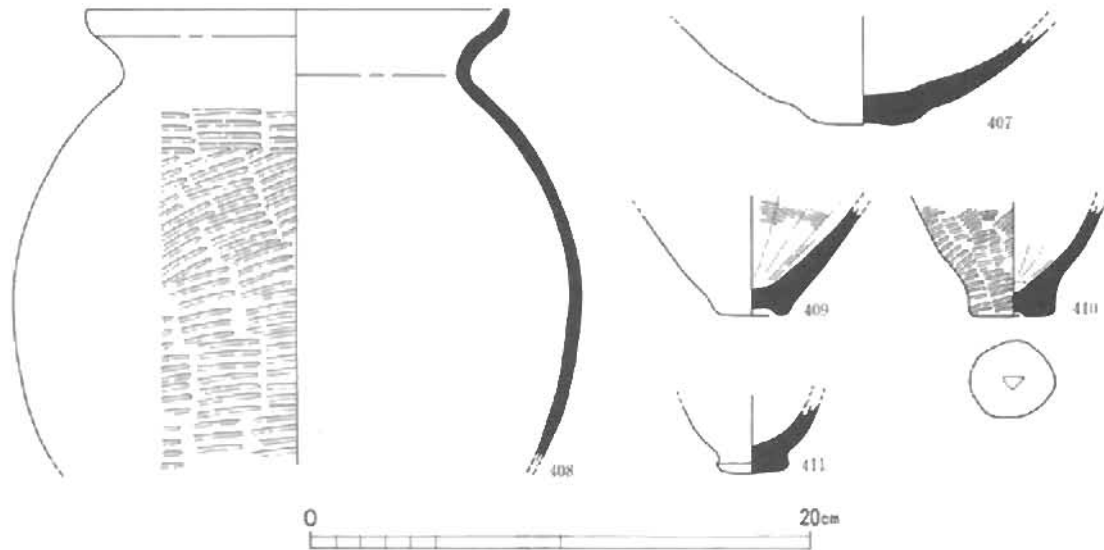
検出状況 I-4区の南端で検出された。遺構の大部分は調査区の南側に伸びており、調査区内の部分についても断面観察用の側溝部分にあたっているため平面的な検出はできなかった。調査区南壁の断面観察によると、SD14を切っている。

形状・規模 平面的な検出は行っていない。断面形による土壌の規模は上端で310cm、土壌底で180cmである。

埋土 土器を多く含んだ暗灰褐色の細砂混じりシルトが堆積している。断面形は皿形を呈している。

出土遺物 土器のみが出土している。このうち図化できたものは5点である。
壺・甕・鉢・ミニチュア土器の各器種が出土している。408の甕は口縁部を上方につまみ上げてヨコナデを施している。体部に横方向のタタキを施している。410はタタキを施した小型の鉢である。411は手づくねのミニチュア土器である。

時期 川除5期である。



第154図 SK25出土土器

第51表 SK25出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
407	壺	口径 3.8 器高 残4.1 底径 残4.1 体部径	外面：磨滅のための調整不明 内面：ナデ	外面：淡黄 内面：灰	底部完全 体部わずか	
408	甕	口径 (16.8) 器高 残17.9 体部径 (22.7)	外面：口縁部ヨコナデ、体部2条/cmタタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部は磨滅のための調整不明	外面：にぶい 橙 内面：灰白	口縁部-体 部の約1/4	
409	甕	口径 2.8 器高 残4.3 体部径	外面：体部タタキのヨコナデか 内面：体部へラ状工具痕顕著	外面：灰白 内面：淡黄	底部完全 体部の約1/6	
410	鉢	口径 3.2 器高 残4.4 体部径	外面：体部-底部6条/cmタタキ 内面：ナデ、へら状工具痕かすかに残る	外面：にぶい 淡黄橙 内面：にぶい 橙	底部完全 体部わずか	
411	ミニチュア	口径 2.6 器高 残2.8 体部径	外面：ナデ、手づくね 内面：ナデ	外面：淡黄橙 内面：橙	底部完全 体部わずか	

SK26 (図版27・48・49)

検出状況 小微高地bの東端部で検出された。SD27に切られる。また、遺構の北東側は調査区外まで延びており、遺構全体を検出することはできなかった。

形状・規模 全体を検出できなかったが、平面形は方形ないし長方形を呈するものと推定される。西辺で3.60m、南辺で5.00mを検出しており、比較的大型の土壇である。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは、土壇中央部で51cmである。

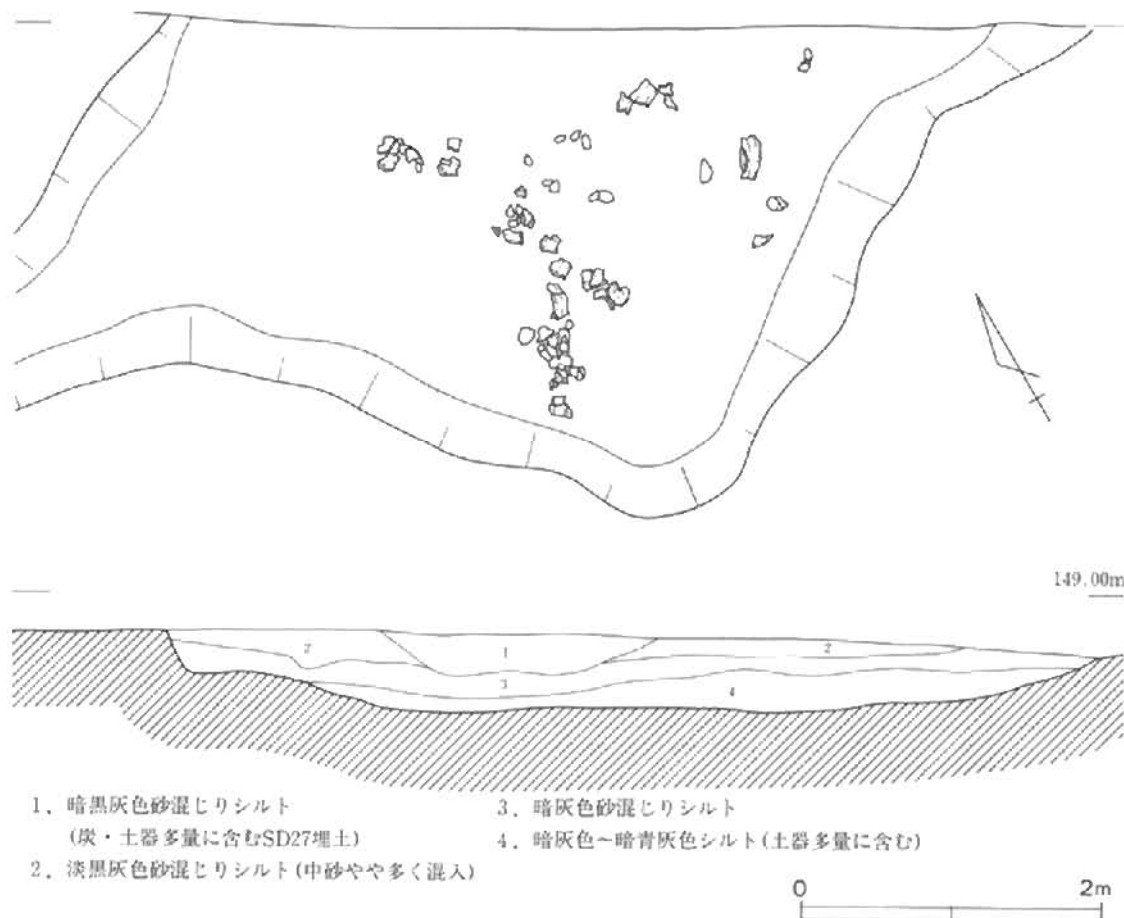
埋土 3層に分けられ、いずれも黒灰色シルトなどの有機質を多く含んだシルト層で、砂を若干含んでいる。

出土遺物 土器のみが出土している。埋土上層からも出土しているが、大半が細片での出土である。これに対して、土壇底からは比較的大型の破片がまとめて出土している。図化した土器の大半もここから出土したものである。

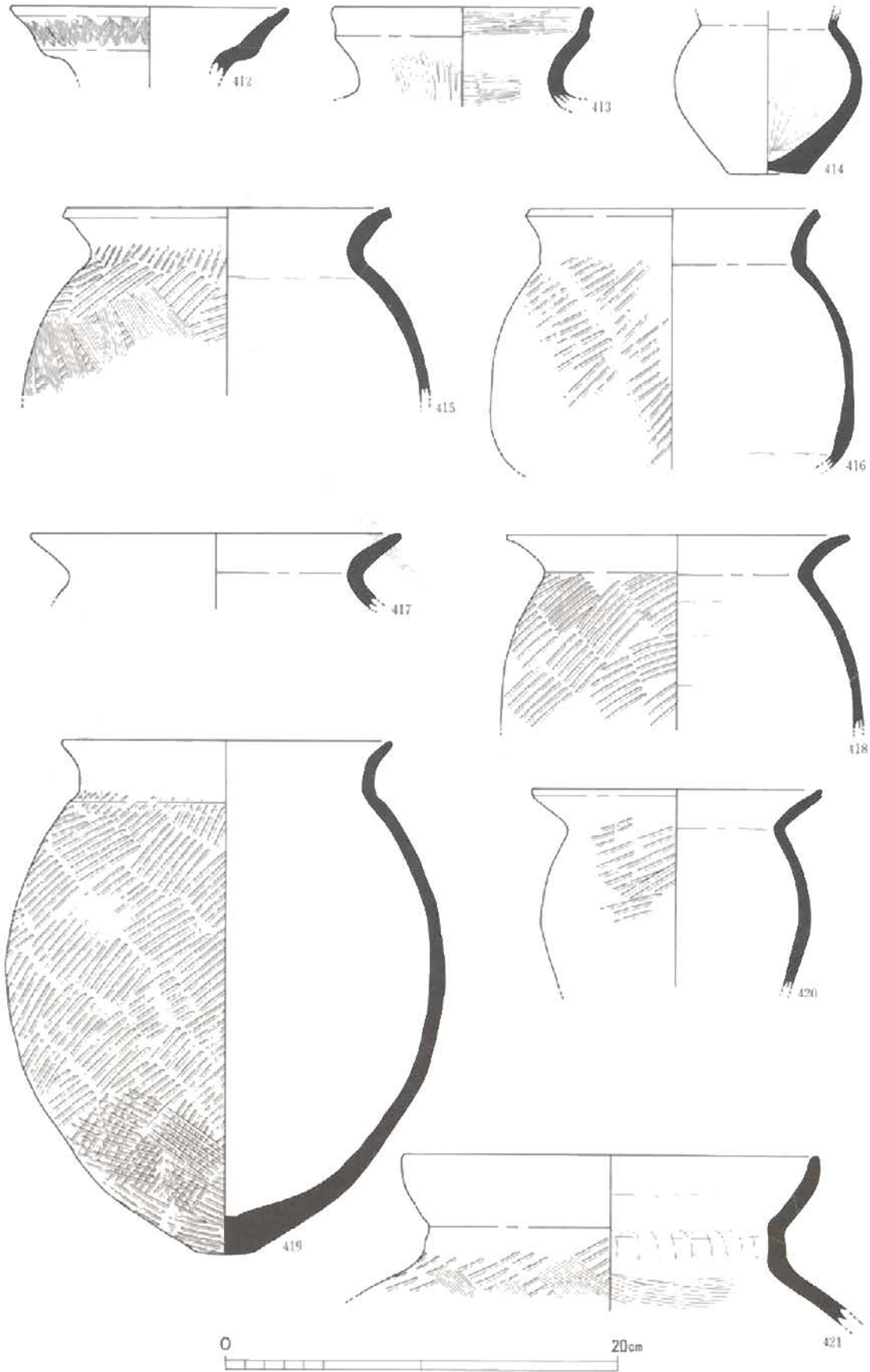
出土した土器は、壺・甕・鉢・高坏の各器種が出土しているが、甕が大半を占める。

壺 二重口縁壺2個体(412・413)と、口縁端部を欠く比較的小型の壺が出土している。なお413については、口縁部の形態などの特徴は丹波地方に多く認められるものであることから、当該地方からの影響も考えられる。

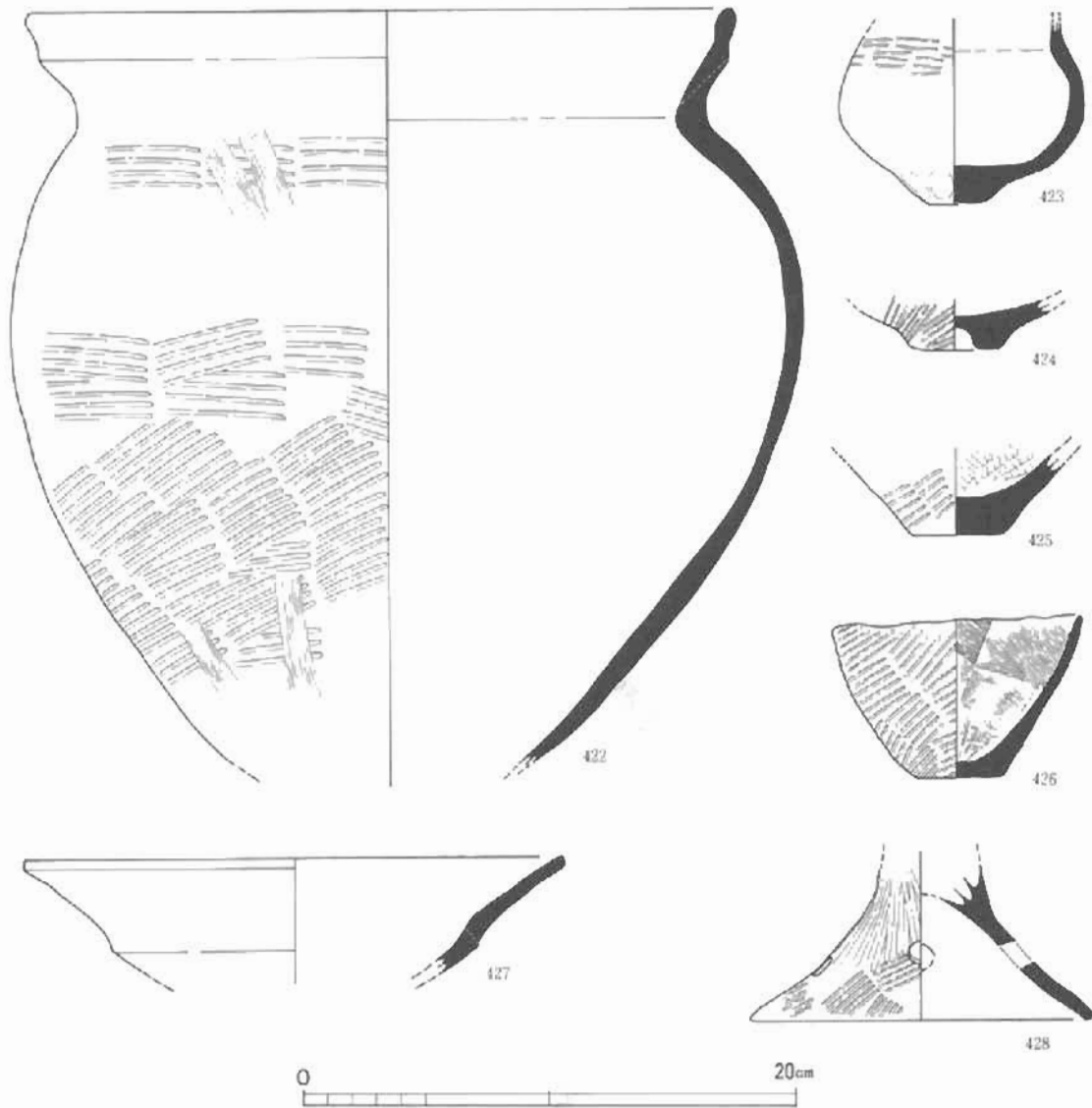
甕 大型・中型・小型のものがある。図化したものの大半は、口縁部を「く」字形に外反させる畿内型のものであるが、422については、口縁部が複合口縁となっており、丹波地方か



第155図 SK26



第156図 SK26出土土器(1)



第157図 SK28出土土器(2)

らの影響が考えられる。ただし、体部の整形・調整法についてはタタキ整形を主体としており、総体としては巖內的といえる。底部の形態については、419がタタキ整形により底部を尖底あるいは丸底を指向している以外は、平底である。なお内面の調整については、ナデないしハケ調整によって仕上げられており、ヘラケズリによって仕上げられているものは認められない。

- 鉢** 426の1個体のみである。
- 高坏** 427・428の2個体が出土している。428については、高坏としてはめずらしく脚裾部にタタキ整形の痕が明瞭に観察される。
- 時期** 川除6期である。

第52表 SK26出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
412	壺	口径 14.2 底径: 器高 残3.7 頸径 体部径	外面:口縁部ヨコナデ、のち底状文 内面:口縁部ヨコナデ	外面:浅黄橙 内面:浅黄橙	口縁部完存	
413	壺	口径 (13.0) 底径: 器高 残4.9 頸径 (10.4) 体部径	外面:口縁部ヨコナデ、のち頸部縦ヘラミダキ 内面:口縁部-頸部縦ヘラミダキ	外面:灰白 内面:灰白	口縁部-頸部1/8以下	
414	壺	口径 底径 3.8 器高 残8.2 頸径 (7.0) 体部径 (9.4)	外面:体部ナデ 内面:体部ヘラナデ、底部工具痕	外面:灰黄 内面:浅黄橙	底部完存 体部約1/2	
415	壺	口径 16.4 底径: 器高 残9.9 頸径 13.8 体部径	外面:口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ、のち6条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部磨滅のため調整不明、頸部粘上結痕	外面:浅黄橙 内面:浅黄橙	口縁部3/4 体部わずか	
416	壺	口径 (14.4) 底径: 器高 残13.1 頸径 (13.6) 体部径 (16.4)	外面:口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキのちナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面:にじい 黄橙 内面:灰黄	口縁部-体部約1/3	スズ付着
417	壺	口径 (18.6) 底径: 器高 残3.5 頸径 (15.0) 体部径	外面:口縁部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ	外面:浅黄橙 内面:浅黄橙	口縁部1/4	
418	壺	口径 (17.1) 底径: 器高 残9.9 頸径 (13.6) 体部径	外面:口縁部ヨコナデ、体部4条/cmタタキ 内面:磨滅のため調整不明	外面:橙 浅黄橙 内面:浅黄橙	口縁部1/8 体部約1/4	
419	壺	口径 16.6 底径 3.2 器高 26.0 頸径 15.1 体部径 22.4	外面:口縁部ヨコナデ、体部3条/cm右上がりタタキ、のち底部左、 がりタタキ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデか、底部エビオサエ、粘上結痕	外面:灰白 内面:浅黄橙	口縁部-体部約1/2、底部完存	スズ付着
420	壺	口径 (14.6) 底径: 器高 残10.0 頸径 (11.0) 体部径 (13.8)	外面:口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面:灰黄 内面:黄	口縁部-体部約1/8	
421	壺	口径 21.0 底径: 器高 残8.0 頸径 18.0 体部径	外面:口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ、のち6条/cmハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部5条/cmヨコハケ、頸部エビオサエ	外面:にじい 黄橙 内面:→	口縁部完存 体部わずか	
422	壺	口径 28.5 底径: 器高 残30.5 頸径 28.7 体部径 (32.0)	外面:口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ、のち、部タテハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面:にじい 黄橙 内面:→	口縁部完存 体部約1/2	
423	壺	口径 底径 2.0 器高 残7.3 頸径: 体部径 10.0	外面:体部上げタタキ残る、以下は磨滅のため調整不明 内面:磨滅のため調整不明、粘上結痕	外面:にじい 赤橙 内面:にじい 橙	体部-底部完存	
424	壺	口径 底径 3.8 器高 : 残2.0 頸径 体部径	外面:体部-底部3条/cmタタキ 内面:体部-底部ナデ	外面:灰白 内面:灰白	底部完存 体部わずか	
425	壺	口径 : 底径 3.4 器高 残3.2 頸径 体部径:	外面:体部-底部タタキわずかに残る 内面:体部-底部ハケのちナデか	外面:灰白 内面:灰白	底部完存 体部わずか	
426	鉢	口径 : 10.0 底径 3.5 器高 残6.5 頸径 体部径	外面:3条/cmタタキ 内面:10条/cmハケ、底部にハケ1具痕	外面:灰白 内面:灰白	口縁部完存	
427	高杯	口径 (22.2) 底径 器高 残4.7 脚柱径 杯部高:	外面: 内面: 磨滅のため調整不明	外面:褐色 内面:浅黄橙	口縁部1/4	
428	高杯	口径 底径 14.0 器高 : 残6.3 脚柱径 杯部高:	外面:脚部縦ヘラミダキ、裾部ヨコナデ 内面:4条/cmタタキのち縦ヘラミダキ、裾部ヨコナデ	外面:浅黄橙 内面:浅黄橙	脚部約2/3	

SK34 (図版27)

検出状況 SK26と同じ小高台bに立地し、SK26の西側に位置する。SD26を切り、中世遺構と同じ埋土をもつ土壙状の落ち込みに切られている。

形状・規模 長軸方向で115cm、その直交方向で106cmの方形を呈する。底部では、一辺50cmの方形を

呈する。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは、土壌中央で22cmである。

埋土

3層に分かれ、いずれも有機質を多く含んだシルト層である。第2層の下面では炭の集積が認められた。

出土遺物

土器のみが出土しており、壺・甕・器台の各器種が出土している。いずれも小片で、図化できたのは器台の1個体のみである。

壺

底部片が出土している。

甕

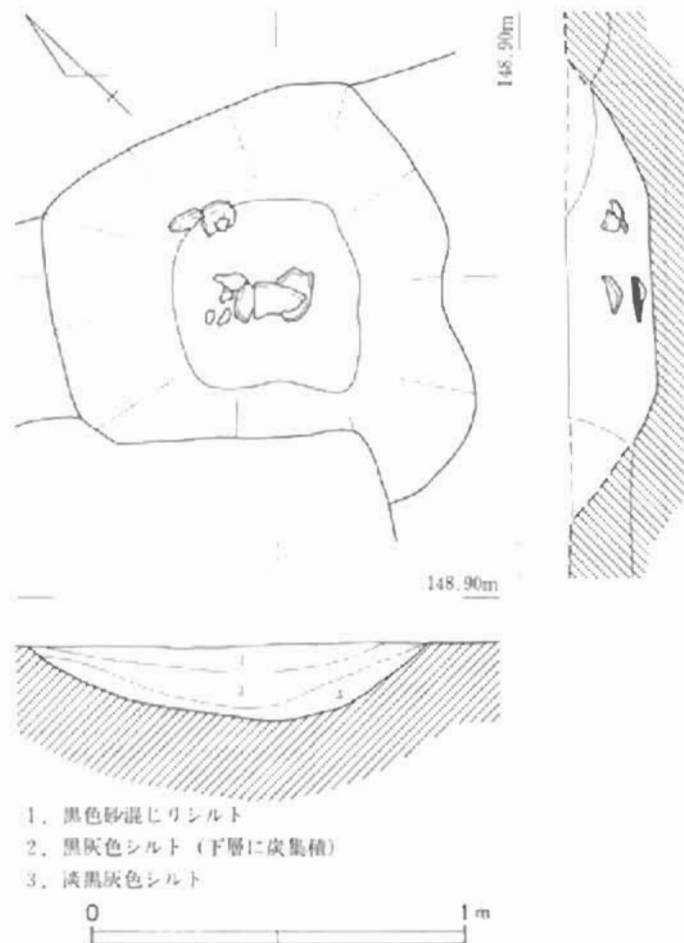
口縁部片と体部片が出土している。

器台

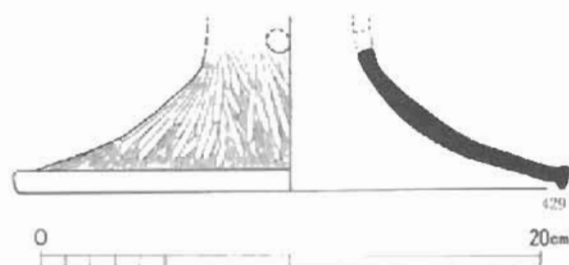
中層から下層にかけて出土している。基部が若干残存するのみで、透かしも1ヶ所残存するだけである。

時期

川除6期である。



第158図 SK34



第159図 SK34出土土器

第53表 SK34出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調査	色調	残存率	備考
429	器台	口徑 21.6 器高 残5.5 脚徑 体部径	外面 基部タナハハのみ残存、ケキ、のみ基部部ヨコナサ 内面 基部ヘラナサ、基部部ヨコナサ	外面 灰褐色 内面 黄灰	基部約3/5	

その他の土壌

以上に掲載しなかったⅠ区の土壌のうち、弥生時代から古墳時代前期に属することが判明したものの概略を一覧表にまとめることとする。

第54表 1区 弥生時代～古墳時代前期のその他の土壌一覧表（単位：cm）

遺構名	規模（検出面）		規模（土壌底）		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK12	95	68	45	20	15	楕円形	U字形	後期	壺
SK13	105	64	82	46	10	不整形	逆台形	不明	小片
SK14	97	75	74	58	15	不整形	U字形	後期	壺・甕
SK16	115	90	90	50	27	不整形	U字形	後期	壺・高杯
SK18	98	83	62	50	28	長方形	U字形	後期	壺
SK42	137	85	115	70	12	楕円形	逆台形	後期	小片
SK44	145	75	140	65	4	不整形	皿形	不明	なし
SK45	107	43	73	23	13	楕円形	U字形	後期	甕
SK46	460	95	390	30	40	溝状	U字形	不明	なし

(4) 溝

SD08

検出状況 1-1区の北東隅の微高地縁辺部で検出された。調査区内で完結する溝である。溝の方向は北よりわずかに東に振っており、等高線にはほぼ沿っている。SH01を切る。

形状・規模 長さは16.4mが確認された。幅は、検出面で30～70cm、溝底で10～30cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは2～11cmであり、溝底の標高は北端で148.42m、南端で148.67mであることから、北流する溝であったことが判る。

出土遺物 蓋・高杯・壺などの土器の細片が出土している。

時期 川除2～5期である。

SD11

検出状況 1-1区の南東隅で検出された。削平を受けており、深い部分が断続的に検出された。溝の北半は西方向に屈曲するが、南半はSD08などと平行して、等高線に平行する。

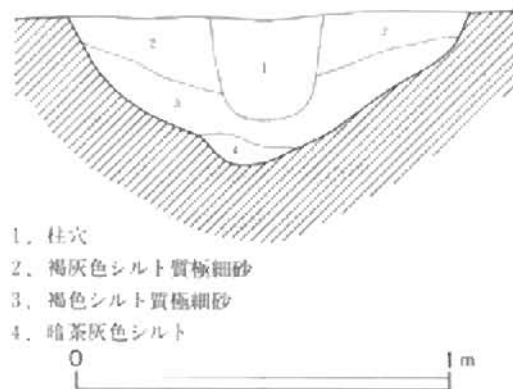
形状・規模 長さは15.6mが確認された。幅は、検出面で10cm、溝底で4～10cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは2～5cmであり、溝底の標高は北端で148.67m、南端で148.70mと差がない。

出土遺物 土器の細片が出土している。

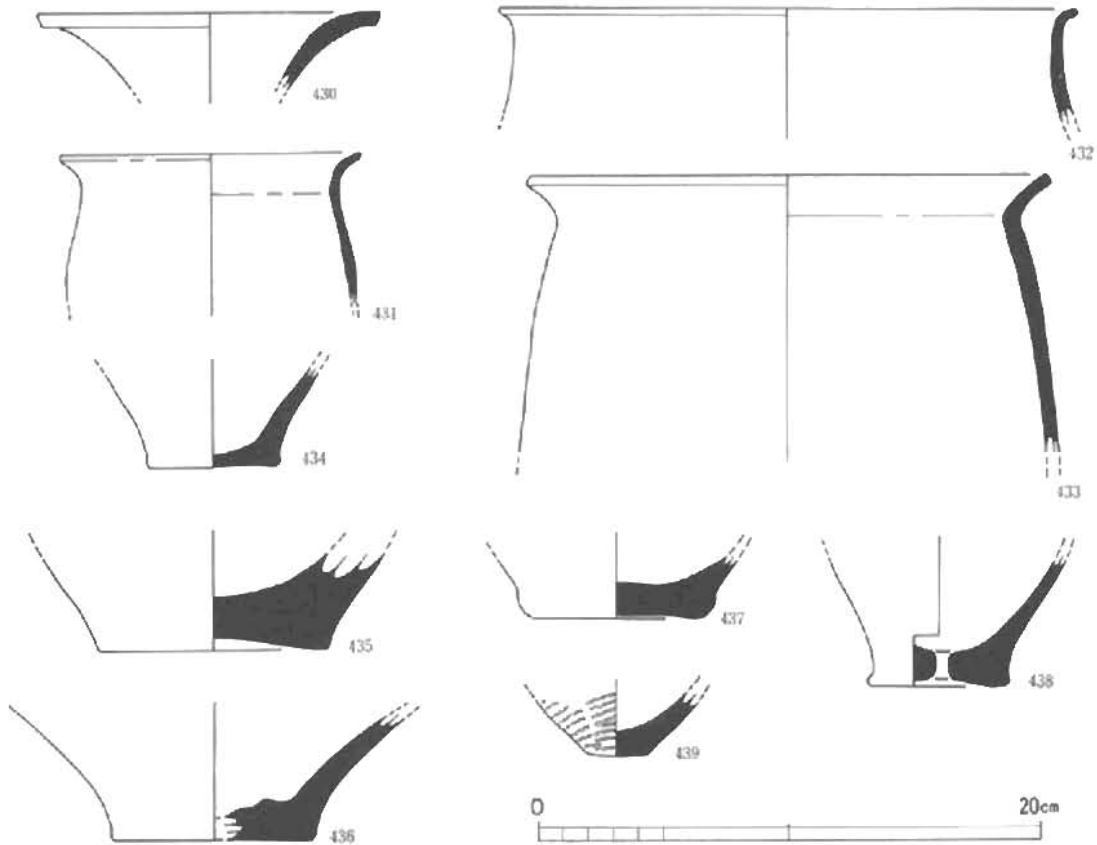
時期 川除2～5期である。

SD13（図版25）

検出状況 1-1区の東で検出された。溝の方向はSD08などと平行して、北北東から南南西の方向をとる。中程をSD15に切られ、南端はSD16に切られて消滅している。1-2区には続かない。



第160図 SD13横断面



第161図 SD13出土土器

形状・規模 長さは34.5mが確認された。幅は、検出面で60～130cm、溝底で30～35cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは25～45cmであり、溝底の標高は北端で148.42m、南端で148.41mと大差ない。

埋土 大きく2層に分かれ、上層には茶灰色シルト質極細砂が、下層には灰白色の比較的粗い砂が堆積している。

出土遺物 上層より、壺・甕・高環などの後期の土器が、下層より壺・甕などの口様式の土器、石器が出土している。

石器 すべてサヌカイト製であり、石鏃、楔形石器および石器の未製品がある。石鏃は、凹基無茎式に属するもので、長さ2.3cm、厚さ2mmを測る。楔形石器はやや厚手の剥片を素材としたもので、上下端に階段状剥離の著しい二次加工が認められる。S30は石器の未製品である。



第162図 SD13出土石器

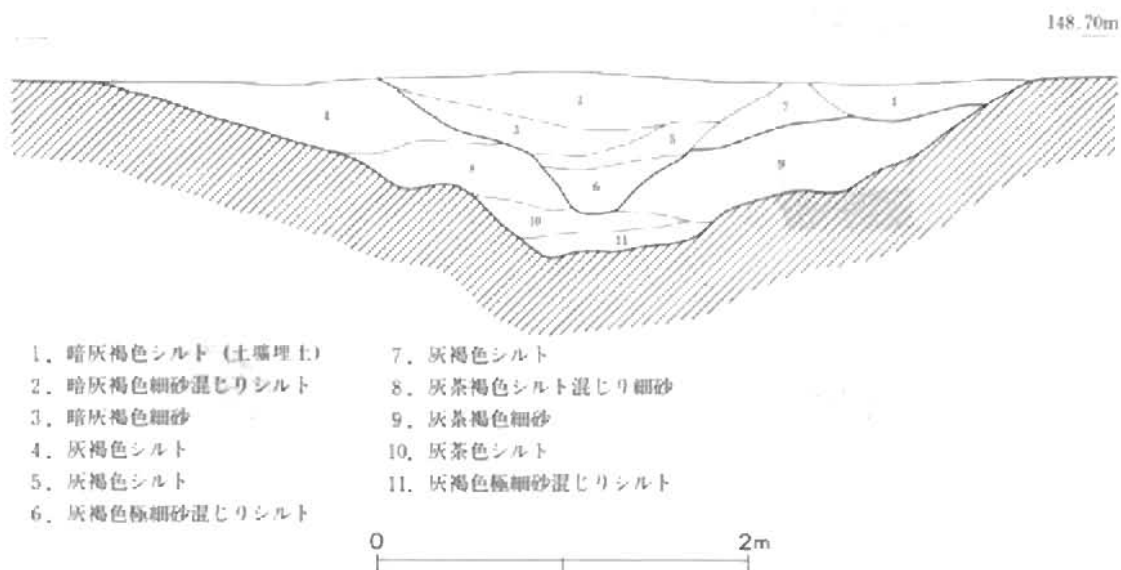
時期 川除1期と3期である。

第55表 SD13出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
430	壺	口径 (13.5) 底径 器高 残3.0 胴径 体部径	外面 } 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 土色 内面 土色	口縁部-胴部約1/4	
431	壺	口径 (12.0) 底径 器高 残5.8 胴径 体部径	外面: 口縁部ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明 内面: 口縁部ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明	外面 灰褐色 内面 土色	口縁部-体部約1/8	
432	壺	口径 (22.9) 底径 器高 残4.5 胴径 体部径	外面: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ 内面: 口縁部ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明	外面 灰 内面 土色	口縁部1/8	
433	壺	口径 (20.4) 底径 器高 残11.0 胴径 (18.4) 体部径	外面: 口縁部ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明 内面: 口縁部ヨコナデ。他は磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	口縁部僅か 体部約1/6	
434	壺	口径 底径 (15.2) 器高 残3.8 胴径 体部径	外面 体部-底部廻ヘラ: ウキカ 内面 体部ナデ。底部エヒオサエ	外面 土色 内面 褐色	底部約1/2 体部わずか	
435	壺	口径 底径 (9.0) 器高 残4.0 胴径 体部径	外面 体部-底部廻ヘラ: ウキカ 内面 磨滅のため調整不明	外面 褐色 内面 土色	底部 部欠 体部わずか	
436	壺	口径 底径 (8.0) 器高 残4.7 胴径 体部径	外面 } 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 土色 内面 土色	底部約1/2 体部わずか	
437	壺	口径 底径 (6.8) 器高 残2.3 胴径 体部径	外面 } 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 土色 内面 土色	底部完全	
438	瓶	口径 底径 (5.4) 器高 残4.9 胴径 体部径	外面 底部エヒオサエ。他は磨滅のため調整不明 内面 磨滅のため調整不明	外面 土色 内面 灰白	底部完全 体部わずか	
439	壺	口径 底径 (7.3) 器高 残2.6 胴径 体部径	外面 体部-底部3重のヒオサエ 内面: ナデ	外面 灰白 内面 土色	底部完全 体部わずか	

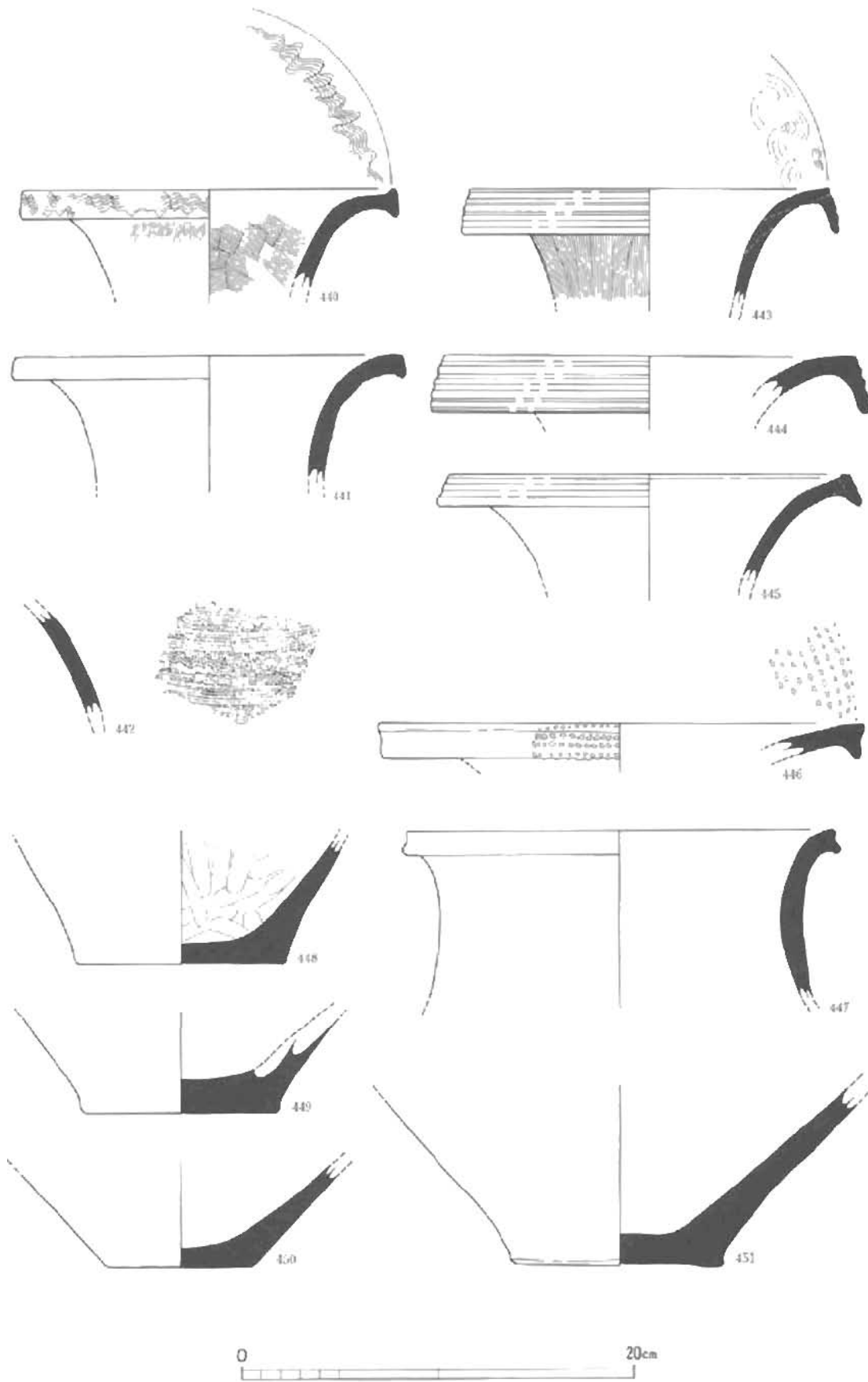
SD14 (図版25・50・53~57)

検出状況 I-1区、I-2区、I-4区、I-5区で検出された。I区を縦断するように流れており両端はそれぞれ調査区外にのびている。溝の方向はI-1区では、北北東から南南西

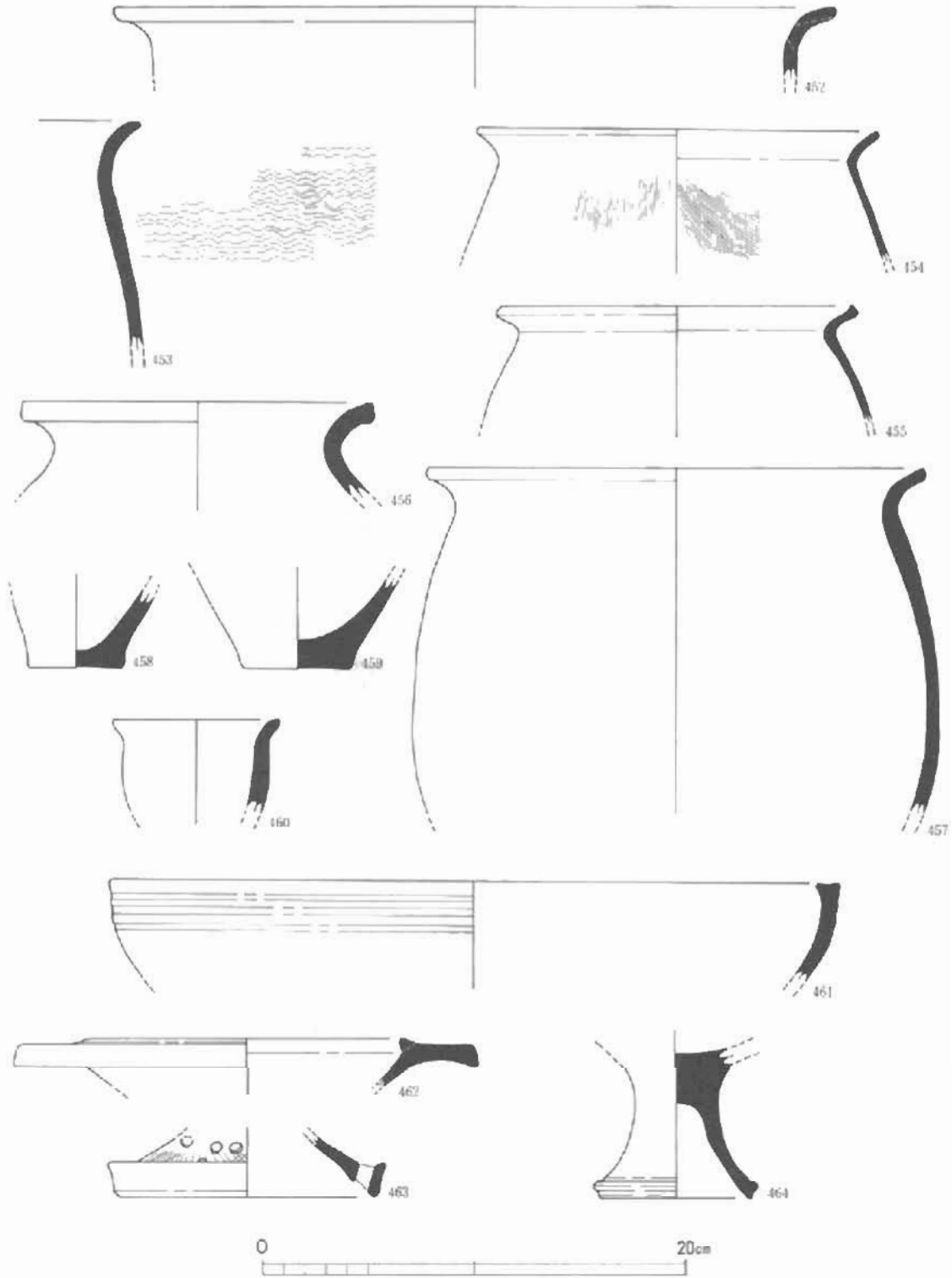


- 1. 暗灰褐色シルト (土壌埋土)
- 2. 暗灰褐色細砂混じりシルト
- 3. 暗灰褐色細砂
- 4. 灰褐色シルト
- 5. 灰褐色シルト
- 6. 灰褐色極細砂混じりシルト
- 7. 灰褐色シルト
- 8. 灰茶褐色シルト混じり細砂
- 9. 灰茶褐色細砂
- 10. 灰茶褐色シルト
- 11. 灰褐色極細砂混じりシルト

第163図 SD14横断面



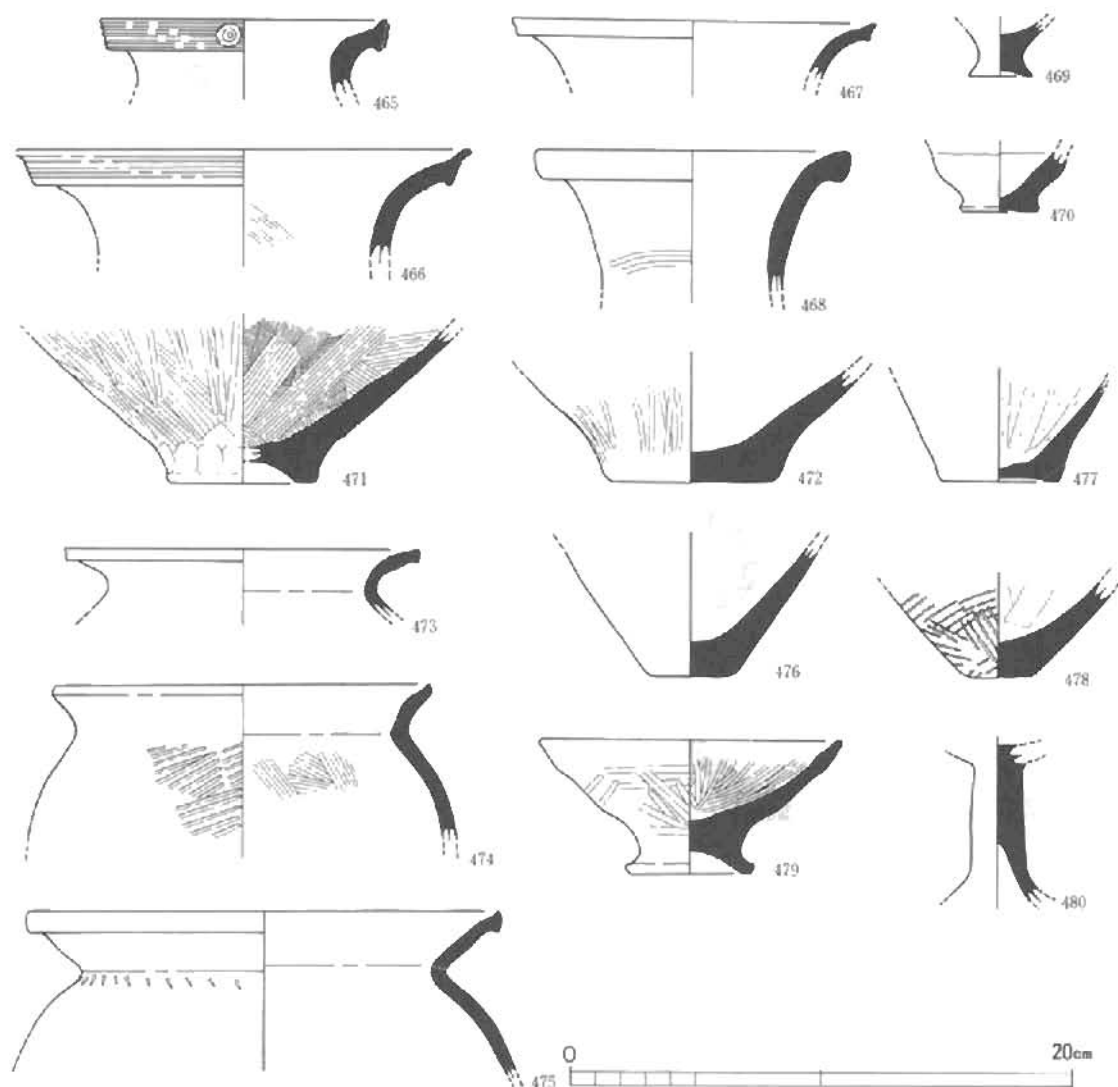
第164図 SD14出土土器(1)



第165図 SD14出土土器(2)

に向かい、I-1区とI-2区の境付近では南北に、そしてI-2区からI-4区、I-5区方向では北北西から南南東に向きを変えている。

形状・規模 長さは105mが確認された。幅は、検出面で1.80~3.40m、溝底で0.30~1.50mを測る。横断面はU字形またはV字形を呈している。検出面からの深さは75cm~103cmであり、溝底の標高はI-1区の北端で148.30m、I-4区の南端で148.20mと大差ないが全体として



第166図 SD14出土土器(3)

北から南に向かって流れていたと考えられる。

埋土 埋土は10層にわたって堆積しているが、大きく分けて上下の2グループに分けることができる。上層の灰褐色系の土層と下層の茶褐色系の土層である。この上下の堆積の間には時間的な差が存在していると考えられる。

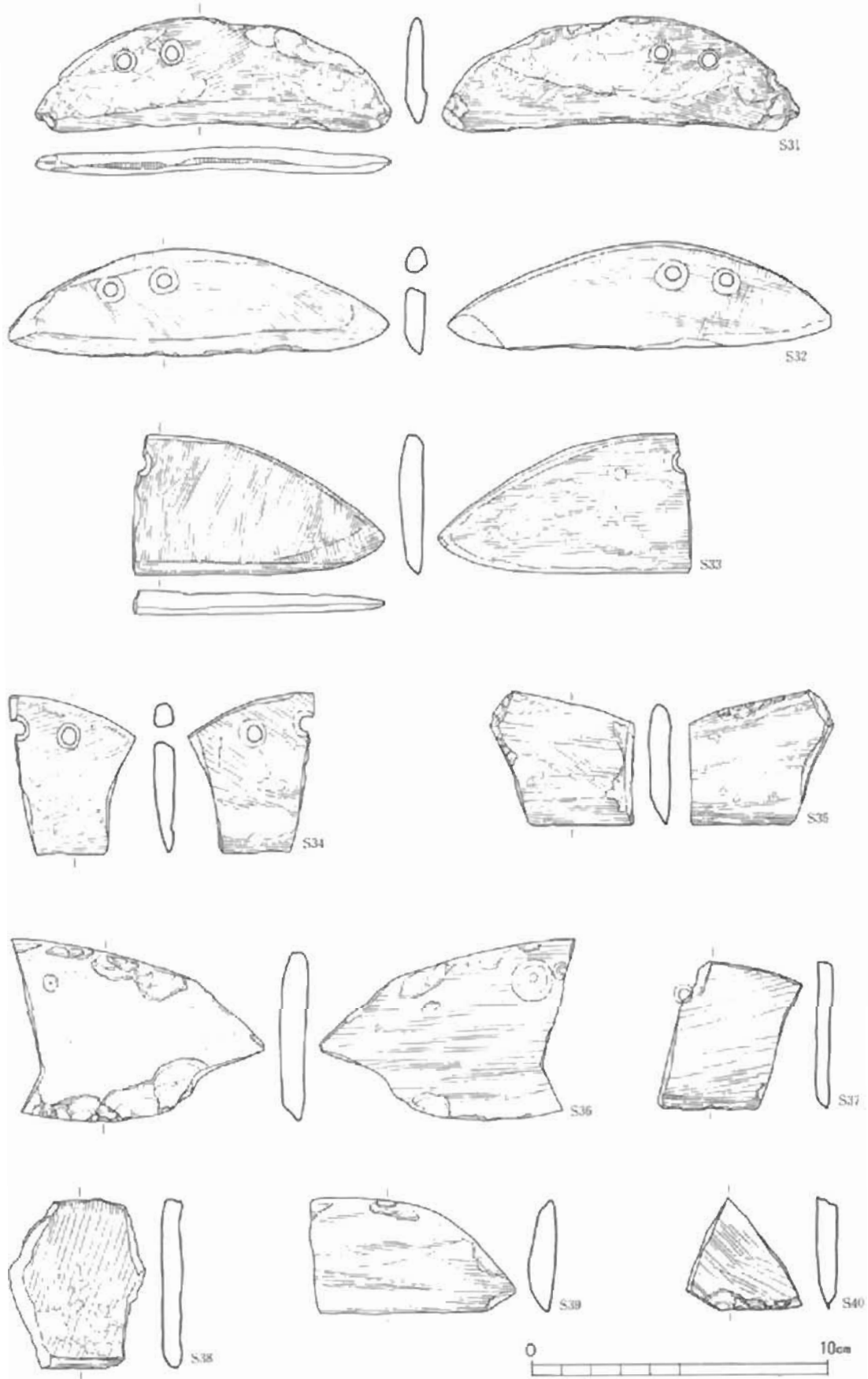
出土遺物 土器は上層より壺・甕・鉢・高坏などの弥生時代後期の土器が、下層より壺・甕・高坏などの弥生時代中期の土器が出土している。石器は下層から出土している。

土器 図化されたものが41点である。

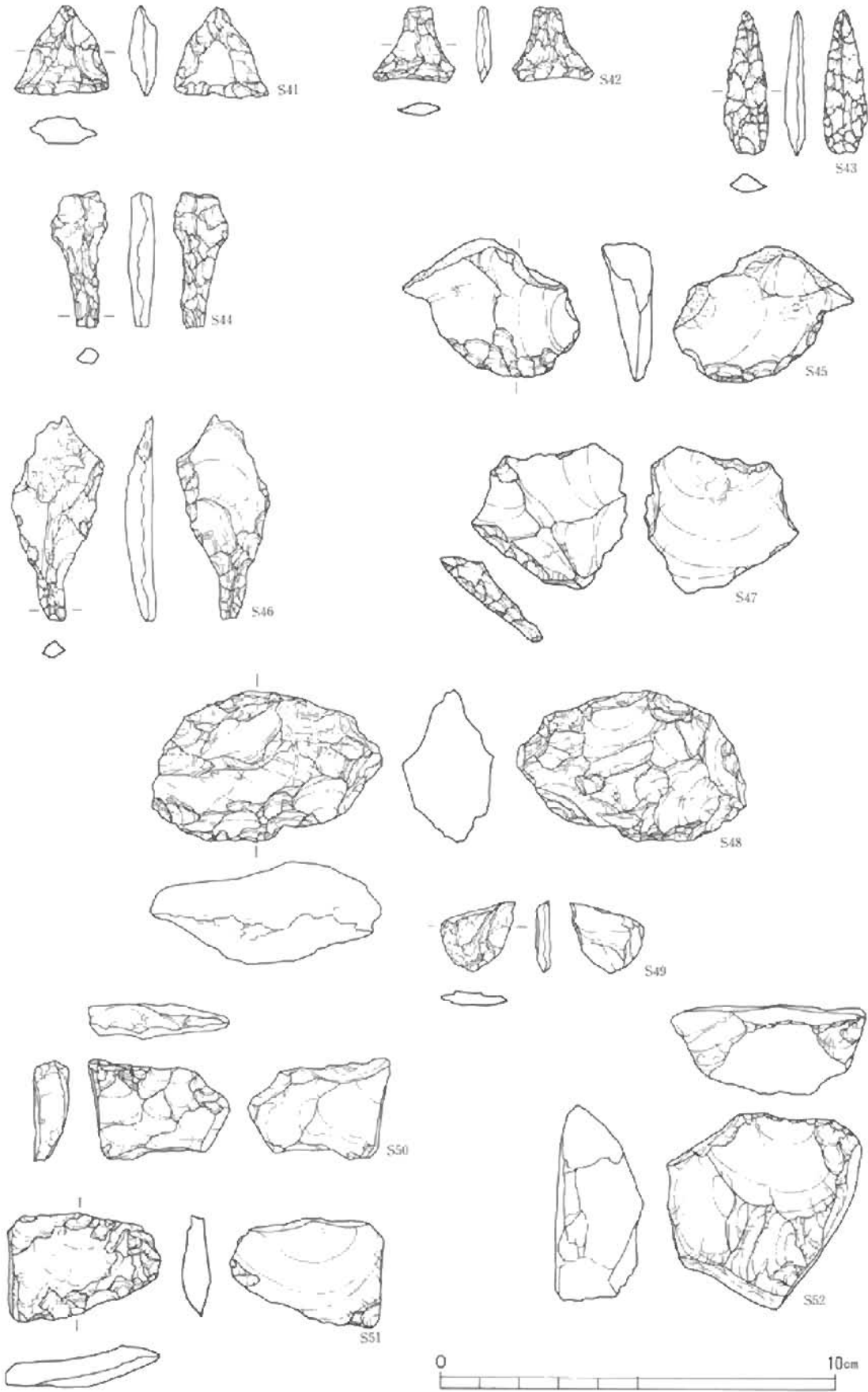
石器 28点が図化されている。打製石器では石鏃が3点出土している。平基無茎式が2点と凹基無茎式が1点である。石錐は2点出土している。削器が2点、楔形石器が3点、石核が1点、石器未製品が1点出土している。磨製石器では石庖丁が未製品とあわせて15点出土している。このうち完形のもは2点、破片になったものが6点、未製品が7点である。このほか叩石が1点出土している。

弥生中期 25点を図化している。

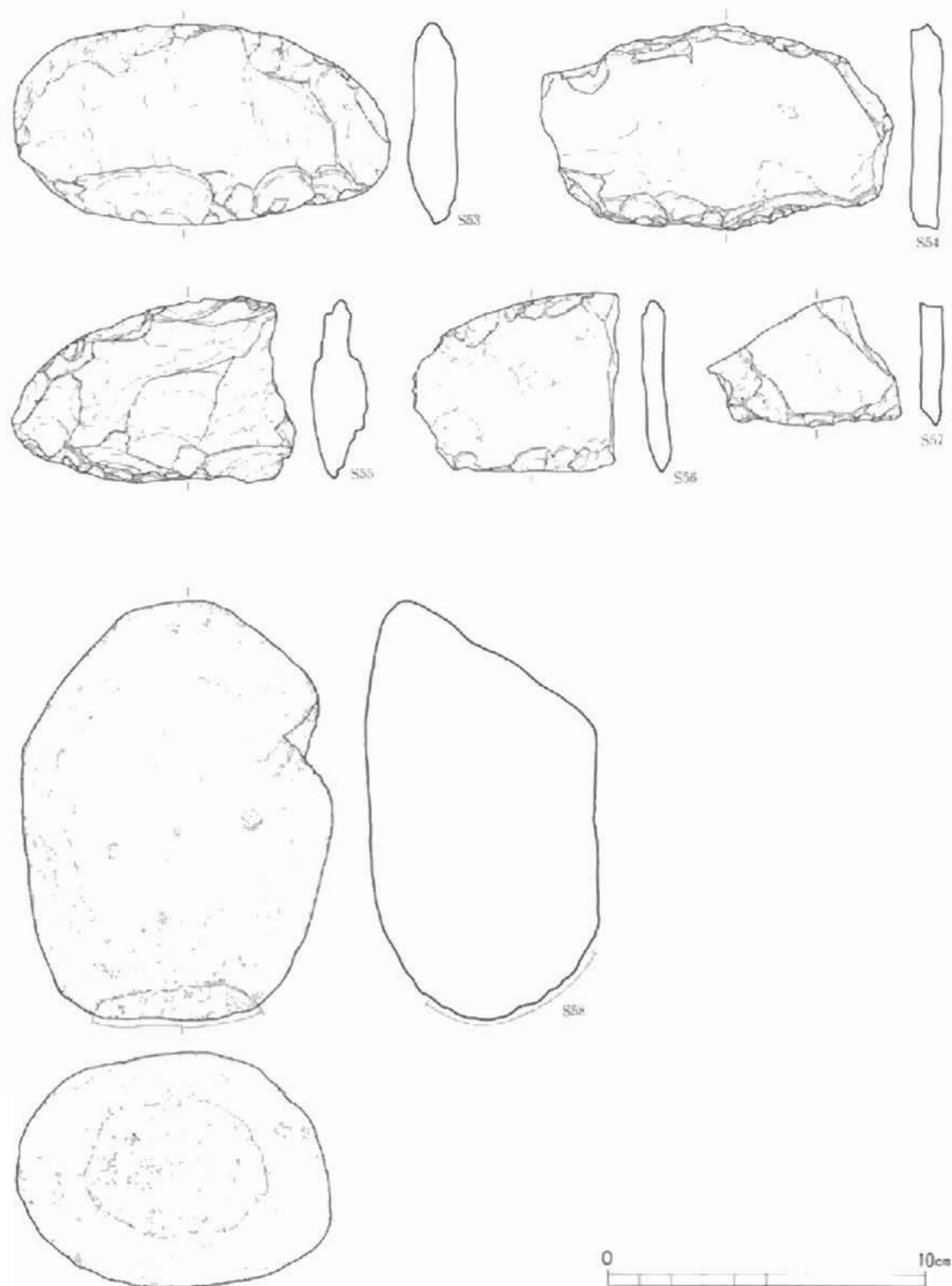
壺 12点を図化している。



第167図 SD14出土石器(1)



第168図 S D14出土石器(2)



第169図 SD14出土石器(3)

口縁部から頸部にかけてのものは、2つの形態に分けられる。比較的細い筒状の頸部に大きく外反する口縁部をもつものと、太い頸部に直立気味に開く口縁部をもつものである。口縁端面の形態はいずれも端面をもっているが、端部は、上下に拡張しているもの、下方に垂下させているものに分けられる。端面は上下に拡張しているものには波状文あるいは4個単位の刺突文を施している。下方に垂下させているものは例外なく4条あるいは2条

の凹線文を施す。このほか図化していないが、頸部に三角凸帯、櫛描直線文、櫛描波状文、指頭瓦痕文凸帯などを施している壺が出土している。

甕 9点を図化している。

口縁部は水平に開くものと、「く」の字状に短く外反するものが存在する。口縁端部の形態は丸くおさめるもの、上方につまみ上げるもの、端面をもつものに分けられる。大型・中型のものが一般的であるが、小型の甕もみられる。

高坏 4点を図化している。口縁部のものが2点と、脚部のものが2点である。461は半球状の坏部をもつものである。調整は磨滅のために不明であるが、口縁部に3条の凹線文を施している。口縁端部はやや拡張している。462は水平口縁をもつものである。口縁端部はわずかに下方に拡張している。調整は不明である。脚部の463は外面に格子状にヘラ描きを施している。円孔は不規則に穿孔している。

弥生後期 16点図化している。

壺 6点図化している。口縁部のものが4点、底部のものが2点である。

口縁部の形態は上下に拡張して端面を形成している。口縁端面には擬凹線を施しているものと、調整を加えないものがある。円形浮文を貼り付けているものもみられる。底部の外面の調整は縦方向のヘラミガキを施す。

甕 6点を図化している。口縁部は「く」の字状の形態をもつものと大きく外方に開くものがある。外面の調整は主にタタキで行っているが、頸部に刺突文のみられるものもある。底部は外面にタタキを施し、内面はヘラケズリを施す。後期のなかでも比較的古い形態のものである。

鉢 1点の図化である。脚を有するものである。調整は、内外面ともに口縁部と脚部には横方向のナデ、体部にはヘラミガキを施す。

石器 石鎌は3点を図化している。S41は長さ2.2cm、幅2.4cm、厚さ0.7cmで、重さは3.4gである。S42は先端部が欠失しているが、長さ1.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmで、重さは1.0gである。S43は長さ3.6cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmで、重さは1.8gである。

石錐 2点の図化である。いずれも先端部を欠失している。錐部とつまみ部の境は明瞭ではなく連続的に形成されているタイプである。

石庖丁 15点を図化している。完形のもの2点である。S31は長さ12.1cm、幅3.5cm、厚さ0.7cmである。S32は長さ13.0cm、幅3.6cm、厚さ0.7cmである。未製品を除いた10点の刃部の形態はすべて片刃である。

叩石 1点を図化している。流紋岩質凝灰岩を使用したもので、下側に敲打痕が観察される。

時期 川除1期と川除3期である。

第56表 S D14出土土器観察表(1)

番号	器種	流量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
440	壺	口径 (18.8) 底径 器高 25.0 頸径 体部径:	外面: 口縁部波状文, 口縁部ヨコナデ, 頸部8条/cmタタキのち ナデ 内面: 口縁部ヨコナデ, のち波状文, 頸部8条/cmヨコナデ	外面: 灰白 内面: 灰青	口縁部-頸 部約1/4	

第57表 SD14出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	図 型	色調	残存率	備考
441	壺	口径 : (19.8) 底径 : 器高 : 残6.3 頸径 : (11.6) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 黄橙 内面 : 灰白	口縁部~ 底部約1/4	
442	壺	口径 : 底径 器高 : 残 頸径 体部径 :	外面 : 6条の帯幅直線文間に6条の点状文を施す 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 黄橙	胴部	
443	壺	口径 : (18.2) 底径 : 器高 : 残5.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁端面4条四線、頸部10条/cmナメハケ、のち口縁部ヨコナ ナ 内面 : 口縁部帯幅直線文、磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白	口縁部~ 底部約1/5	
444	壺	口径 : (20.8) 底径 : 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁端面5条四線、頸部4条/cmナメハケ、のち口縁部ヨコナ ナ 内面 : 頸部ヨコナ、磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部5/ 11 底部わず か	
445	壺	口径 : (20.2) 底径 : 器高 : 残5.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁端面3条四線、頸部10条/cmナメハケ、のち口縁部ヨコナ ナ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 灰白	口縁部1/5 底部わず か	
446	壺	口径 : (24.8) 底径 : 器高 : 残1.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁端面斜交文、下部に刻み目 内面 : 口縁部斜交文	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/16 以下	
447	壺	口径 : (21.6) 底径 : 器高 : 残8.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁端面スピオサエ、頸部ナメハケのちヘラナメ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰白	口縁部~ 底部約1/8	
448	壺	口径 : 底径 : (10.4) 器高 : 残6.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部周ヘラケズリのちナメ、底面ハケ 内面 : 体部6条/cmヨコナ、底部スピオサエ	外面 : 灰白 内面 : 灰	底部約1/4 体部わず か	
449	壺	口径 : 底径 : 9.6 器高 : 残4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部ヘラナメ 内面 : 利用、磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部わず かに欠 体部わず か	
450	壺	口径 : 底径 : 7.4 器高 : 残5.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部ナメ、底面ナメ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 黄灰	底部約1/2 体部わず か	
451	壺	口径 : 底径 : 10.6 器高 : 残9.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 頸部ナメハケおろかに有る、他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 淡黄	底部完存 体部わず か	
452	甕	口径 : (34.0) 底径 : 器高 : 残3.3 頸径 : (30.6) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡橙 内面 : 淡橙	口縁部 わず か	
453	甕	口径 : 底径 器高 : 残10.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 頸部~体部帯幅直線文 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部~ 体部 わず か	
454	甕	口径 : (18.7) 底径 : 器高 : 残6.0 頸径 : (16.9) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナ、体部ナメハケ 内面 : 口縁部ヨコナ、体部6条/cmナメハケ	外面 : 明黄灰 内面 : にぶい 黄橙	口縁部1/8 体部 わず か	
455	甕	口径 : (16.4) 底径 : 器高 : 残5.4 頸径 : (15.4) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 赤橙、 灰橙 内面 : "	口縁部~ 体部 1/8以下	
456	甕	口径 : (16.4) 底径 : 器高 : 残4.3 頸径 : (13.5) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	口縁部~ 体部 約1/8	
457	甕	口径 : (23.2) 底径 : 器高 : 残16.2 頸径 : (20.8) 体部径 :	外面 : 頸部~体部ナメハケ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 体部ヨコナ、他は磨滅のため調整不明	外面 : 灰黄橙 内面 : 灰白	口縁部~ 体部 約1/12	
458	甕	口径 : 底径 : 4.4 器高 : 残3.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 底部スピオサエ、他は磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰白	底部完存 体部 わず か	
459	甕	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ナメ、底部スピオサエ 内面 : 体部ナメ、底部スピオサエ	外面 : 橙 内面 : 灰赤	底部完存 体部 わず か	
460	甕	口径 : (7.8) 底径 : 器高 : 残4.6 頸径 : 体部径 : (7.0)	外面 : 口縁部スピオサエ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 黄 内面 : 浅黄橙	口縁部~ 体部 約1/4	

第58表 SD14出土土器観察表(3)

番号	器種	寸量 (cm)	調 型	色調	残存率	備考
461	高杯	口径 134.6 底径 器高 残4.6 脚柱径 杯部高	外面 口縁部1/4の凹溝、他は磨滅のため調整不明 内面 磨滅のため調整不明	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部1/8 以下	
462	高杯	口径 114.5 底径 器高 残2.3 脚柱径 杯部高	外面 ココナテ 内面 ココナテ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部1/2	
463	高杯	口径 底径 12.4 器高 残2.7 脚柱径 杯部高	外面 脚座部に格子状にヘラ掻き(凹孔5ヶ所) 内面 磨滅のため調整不明	外面 淡黄 内面 淡黄	脚座部1/4	
464	高杯	口径 底径 7.0 器高 残7.0 脚柱径 4.1 杯部高	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 浅黄褐色 内面 浅黄褐色	脚座部ほぼ完 存	
465	壺	口径 111.4 底径 器高 残2.9 脚柱径 8.5 体部径	外面 口縁端部3条縦凹溝、のり凹形竹管挿文、口縁部ココナテ 内面 口縁部ココナテ	外面 黄灰 内面 黄灰	口縁部1/8 以下	
466	壺	口径 117.8 底径 器高 残4.3 脚柱 体部径	外面 口縁端部3条縦凹溝、口縁部ココナテ 内面 口縁部ココナテ	外面 明赤褐 内面 によい 黄褐	口縁部一 体部の1/8	
467	壺	口径 114.6 底径 器高 残2.3 脚柱 体部径	外面 口縁部ココナテのち口縁端部4個の横凹形の帯挿文 内面 口縁部ココナテ	外面 橙 内面 灰	口縁部1/7	
468	壺	口径 112.6 底径 器高 残5.6 脚柱 7.2 体部径	外面 口縁端部ニドオサエ、頸部帯挿文 内面 磨滅のため調整不明	外面 によい 橙 内面 橙	口縁部一 体部の1/4	
469	コノテ	口径 底径 2.5 器高 残2.2 脚柱 体部径	外面 底部平すくむ。 内面 磨滅のため調整不明	外面 淡黄 内面 淡黄	脚座部は完 存	
470	コノテ	口径 底径 3.0 器高 残2.3 脚柱 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 灰白 内面 灰白	脚座部は完 存	
471	壺	口径 底径 15.8 器高 残6.1 脚柱 体部径	外面 体部5条/cmタテハケのち口縁ヘラミダキ、底部ニドオサエ 内面 底部6条/cmタテハケ、体部10条/cmタテハケ	外面 淡黄褐 内面 淡黄褐	体部一底部 約1/3	
472	壺	口径 底径 6.6 器高 残4.5 脚柱 体部径	外面 底部輪ヘラミダキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 によい 橙 内面 灰	底部約1/4 体部わずか	
473	壺	口径 111.0 底径 器高 残2.5 脚柱 110.5 体部径	外面 口縁部ココナテ 内面 口縁部ココナテ	外面 によい 黄褐 内面 淡黄	口縁部1/6	
474	壺	口径 114.8 底径 器高 残6.2 脚柱 113.2 体部径	外面 口縁部ココナテ、体部4条/cmタテハケ 内面 口縁部ココナテ、体部5条/cmタテハケ	外面 によい 橙 内面 灰白	口縁部一 体部の1/8	
475	壺	口径 118.8 底径 器高 残6.6 脚柱 114.5 体部径	外面 口縁部ココナテ、明赤褐挿文、他は磨滅のため調整不明 内面 口縁部ココナテ、磨滅のため調整不明	外面 浅黄褐色 内面 によい 橙	口縁部一 体部の1/4	
476	壺	口径 底径 3.4 器高 残5.0 脚柱 体部径	外面 体部一底部ココナテ 内面 体部一底部ニドオサエ	外面 赤灰 内面 橙	底部一 体部のわずか	
477	壺	口径 底径 4.8 器高 残3.9 脚柱 体部径	外面 体部一底部ココナテ 内面 体部輪ヘラミダキ	外面 灰褐 内面 褐、明 褐	底部完 存 体部わずか	
478	壺	口径 底径 2.8 器高 残3.9 脚柱 体部径	外面 体部一底部アダキ 内面 体部一底部ココナテ	外面 明赤 灰黄褐 内面 赤灰	底部完 存 体部わずか	
479	鉢	口径 111.6 底径 15.0 器高 5.3 脚柱 体部径	外面 口縁部ココナテ、体部ヘラミダキ、脚座ココナテ 内面 口縁部ココナテ、体部輪ヘラミダキ、脚座ココナテ	外面 灰白 内面 灰白	口縁部僅 か 体部一脚座 約2/3	
480	高杯	口径 底径 器高 残6.1 脚柱径 2.0 杯部高	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 淡黄 内面 淡黄褐	脚座部ほぼ 完 存	

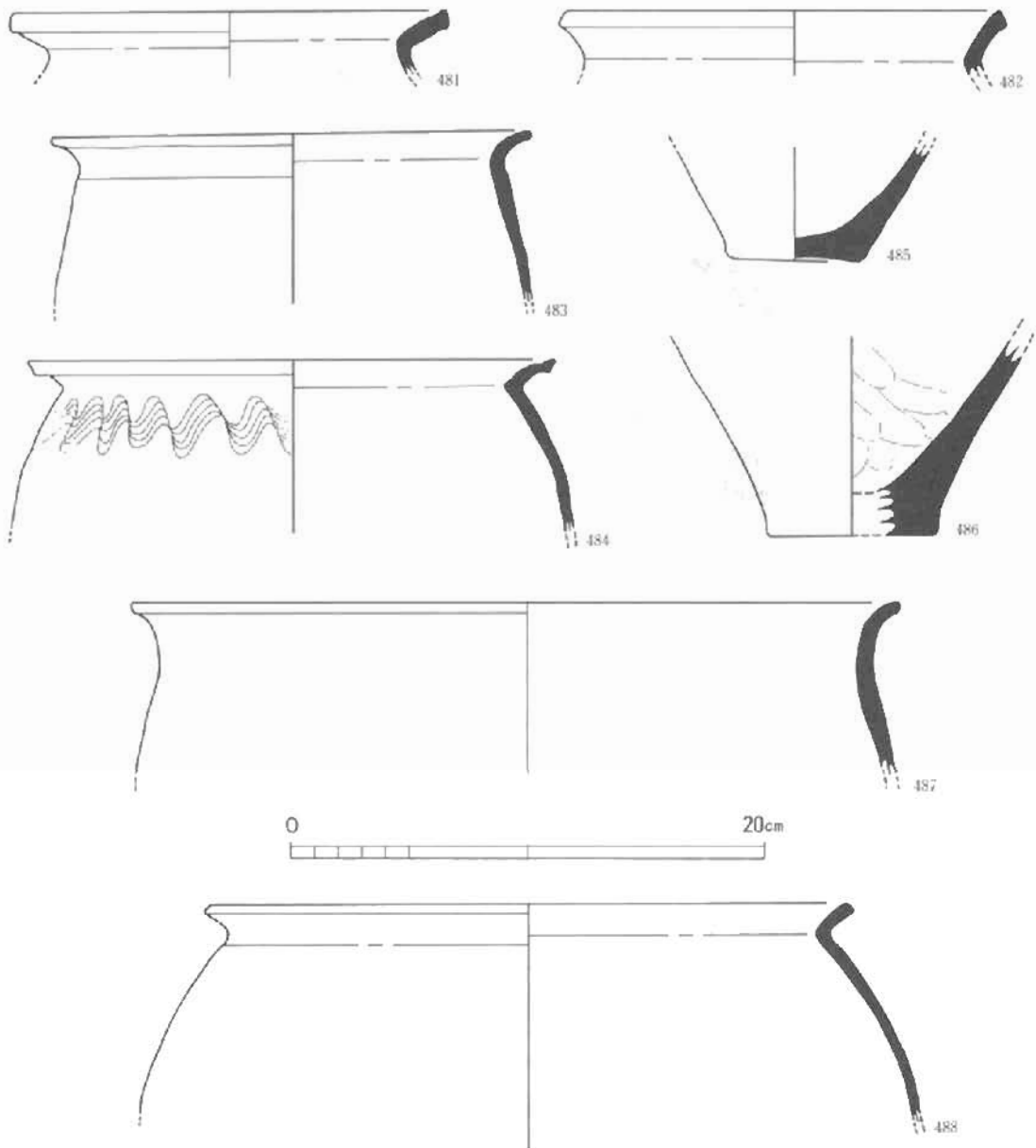
SD15 (図版50)

検出状況 I-1区の東隅で検出された。溝の方向は北西から南東方向をとり、北西端はSD14に重なってこれに切られている。

形状・規模 長さは14.0mが確認された。幅は、検出面で60~90cm、溝底で50~80cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは10~20cmであり、溝底の標高は北端で148.49m、南端で148.63mを測る。

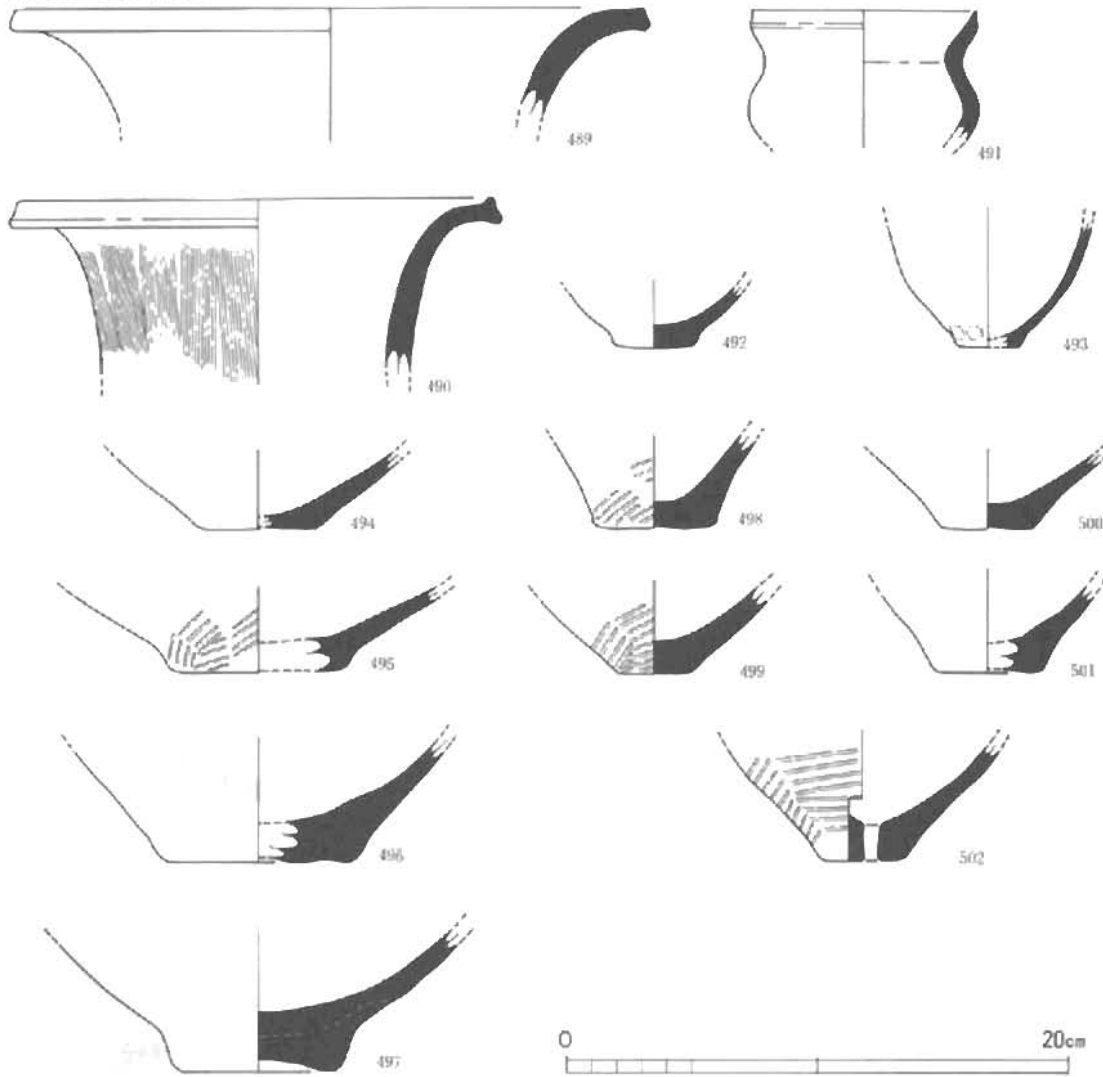
出土遺物 下層より、壺・甕などの弥生中期の土器、サヌカイト片などが、上層より、壺・甕・高坏などの弥生後期の土器が出土している。

中期土器 壺・甕が出土している。甕の口縁部には体部からなだらかに開くものと、屈曲が認めら



第170図 SD15出土土器(1)

第3節 I区の調査



第171図 S D15出土土器(2)

れるものの二者があり、口縁端部をつまみあげるものも存在する。484は肩部に櫛描きの波状文を施文している。

後期土器 壺・甕などがあるが、全形のうかがわれるものはない。甕の底部には丸底のものではなく、平底あるいはドーナツ状の上げ底を呈するものがある。

時期 川除1期と3～6期である。

第59表 S D15出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
481	壺	口径 (18.0) 底径 15.2 器高 2.8 胴径	外面: 口縁部コロナデ 内面: 口縁部コロナデ	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部1/8以下	
482	甕	口径 (17.6) 底径 16.7 器高 2.2 胴径	外面: 口縁部コロナデ 内面: 口縁部コロナデ	外面: 灰白 内面: 灰	口縁部1/8以下	
483	甕	口径 (19.9) 底径 17.9 器高 7.0 胴径	外面: 肩幅のため調整不明 内面:	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部一底部約1/4	
484	壺	口径 (22.2) 底径 19.1 器高 7.1 胴径	外面: 口縁部コロナデ 体部ナデ、内面上位に波状文 内面: ナデ	外面: 灰青褐色 内面: 灰白	口縁部後の体部約1/6	
485	甕	口径 5.2 器高 4.8 胴径	外面: 体部ナデ 内面: 体部ナデ、底部にドーナツ	外面: 灰 内面: 褐色	底部定存 体部わずか	
486	甕	口径 7.0 器高 胴径	外面: 体部ヘラナデ 内面: 体部ヘラナデ	外面: 灰黄 内面: 灰	底部～体部約1/4	

第60表 SD15出土土器観察表(2)

番号	器種	寸量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
487	壺	口径 : (32.4) 底径 器高 : 47.2 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨減のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨減のため調整不明	外面 灰黄 内面 : にふい 黄	口縁部~体 部の1/4以 下	
488	壺	口径 : (35.4) 底径 器高 残12.7 頸径 (34.0) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨減のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨減のため調整不明	外面 : にふい 黄橙 内面 : *	口縁部~体 部の1/4	
489	壺	口径 : (25.0) 底径 器高 残4.5 頸径 体部径 :	外面 } 内面 } 磨減のため調整不明	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部1/6	
490	壺	口径 : (18.8) 底径 器高 : 残6.4 頸径 体部径 :	外面 : 底部1.5cmタテハケ。内面口縁部ヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ。底部ナテ	外面 : にふい 黄橙 内面 : 灰白	口縁部~頸 部の1/8	
491	壺	口径 : (8.9) 底径 器高 残5.2 頸径 (7.9) 体部径 (9.2)	外面 : 口縁部ヨコナテ。底部エビオサス。体部磨減のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ。体部磨減のため調整不明	外面 : 褐色 灰白 内面 灰白	口縁部~体 部の1/4 底部欠	
492	小型壺	口径 : 底径 3.0 器高 : 残2.4 頸径 体部径 :	外面 : 体部ナテ 内面 : 磨減のため調整不明	外面 灰白 内面 : 橙	底部完全 体部わずか	
493	小型壺	口径 : 底径 (2.5) 器高 残4.8 頸径 体部径 :	外面 : 体部ナテ。底部エビオサス 内面 : 体部ナテ	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	体部~底部 約1/4以下	
494	壺	口径 : 底径 (4.6) 器高 残3.1 頸径 体部径 :	外面 : 体部ヘラナテ 内面 : 磨減のため調整不明	外面 淡黄 内面 : にふい 黄橙	底部約1/3 体部わずか	
495	壺	口径 底径 (7.0) 器高 残3.3 頸径 体部径 :	外面 : 体部~底部1.5cmタキのちナテ 内面 : ナテ	外面 淡黄橙 内面 : 橙	底部約1/4 体部わずか	
496	壺	口径 底径 (7.0) 器高 残4.9 頸径 体部径 :	外面 } 内面 } 磨減のため調整不明	外面 : にふい 赤橙 内面 : 淡黄	底部約1/2 体部わずか	中絶の可能 性あり
497	壺	口径 底径 6.0 器高 残5.0 頸径 体部径 :	外面 } 内面 } 磨減のため調整不明	外面 淡黄橙 内面 淡黄橙	底部完全 体部わずか	
498	壺	口径 : 底径 : 4.6 器高 : 残3.7 頸径 体部径 :	外面 : 体部~底部1.5cmタキのちナテ 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : にふい 橙 内面 : 淡黄	底部完全 体部わずか	
499	壺	口径 底径 2.8 器高 残3.0 頸径 体部径 :	外面 : 体部~底部1.5cmタキ 内面 : 体部ナテ	外面 灰黄 内面 灰黄	底部完全 体部わずか	
500	壺	口径 底径 : 3.7 器高 残2.9 頸径 体部径 :	外面 : 体部~底部ナテ 内面 : 磨減のため調整不明	外面 灰白 内面 : にふい 黄	底部1/3完 存 体部わずか	
501	壺	口径 底径 : (4.6) 器高 残3.5 頸径 体部径 :	外面 : 体部~底部ナテ 内面 : ナテか。磨減のため調整不明	外面 : にふい 黄橙 内面 : *	底部約1/2 体部わずか	
502	壺	口径 底径 3.8 器高 残4.5 頸径 体部径 :	外面 : 体部1.5cmタキ 内面 : 体部端をヘラナテ	外面 橙 内面 橙	底部約3/4 体部わずか	

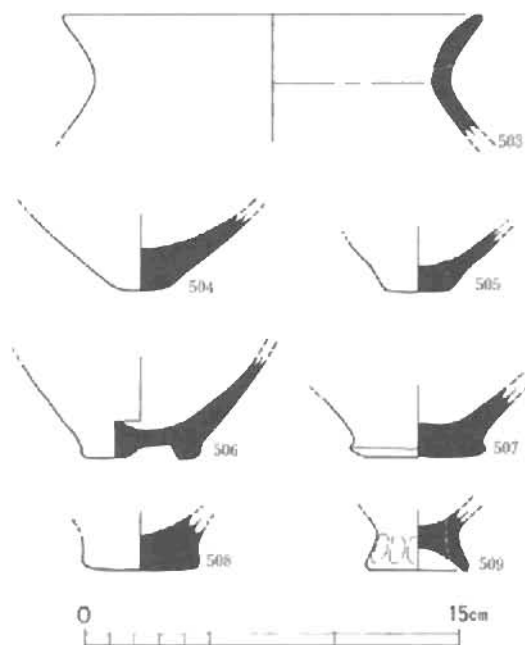
SD16

検出状況 I-1区の南東部で検出された。溝の方向は南北を示す。北端はSD14に切れ、SD13を切っている。I-2区には続かない。

形状・規模 長さは7.0mが確認された。幅は、検出面で80~180cm、溝底で60~90cmを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは14~17cmである。溝底の標高は北端は148.52m、南端は148.56mである。

出土遺物 壺・甕・高坏などの土器が出土している。509は、製塩土器の可能性がある。

時期 川除5~6期である。



第172図 SD16出土土器

第61表 SD16出土土器観察表

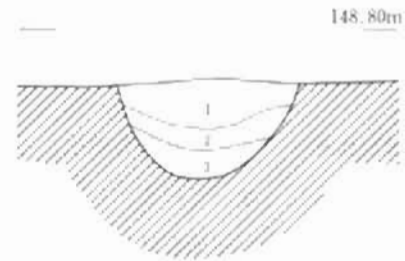
番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
503	甕	口径 : 17.1 底径 : 14.8 器高 : 4.8 頸径 : (11.3) 体部径	外面 調整のため調整不明 内面	外面 土色 内面 土色	口縁部-体部約1/16	
504	甕	口径 : 1.8 器高 : 3.0 頸径 : 体部径	外面 体部-底部タタキおぼけに残る 内面 調整のため調整不明	外面 土色 内面 褐色	底部約1/2 体部おぼけ	
505	甕	口径 : 2.5 器高 : 2.5 頸径 : 体部径	外面 体部-底部ナシ 内面 ナシ	外面 褐色 内面 灰白	底部ほぼ定存 体部おぼけ	
506	甕	口径 : 4.5 器高 : 4.0 頸径 : 体部径	外面 体部タタキおぼけに残る 内面 底部ニヒイサエ	外面 灰白 内面 灰	底部定存 体部おぼけ	
507	甕	口径 : 5.0 器高 : 2.3 頸径 : 体部径	外面 体部-底部ナシ 内面 底部ニヒイサエ	外面 灰 内面 灰白	底部約3/4 体部おぼけ	
508	壺	口径 : 1.5 器高 : 2.2 頸径 : 体部径	外面 底部ナシ 内面 調整のため調整不明	外面 灰白 内面 土色	底部定存	
509	鉢	口径 : 3.8 器高 : 2.4 頸径 : 体部径	外面 脚部ニヒイサエ 内面 脚部ニヒイサエ	外面 褐色 内面 土色	脚部定存	

SD17

検出状況 I-1区、I-2区で検出している。溝の方向は微高地から西側の落ちにむかって東南東から西南西の方向をとる。非常に浅い溝で途中で2ヶ所途切れている。SD14を横切りSH16・SK17を切っている。

形状・規模 長さは約34mが確認された。幅は検出面で0.3~0.4m、溝底で0.1~0.2mを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは5~7cmであり、溝底の標高は東端で148.56m、西端で148.39mである。このことから東南東から西南西に向かって流れていたことが確認され

た。
出土遺物 土器とサヌカイト片が出土している。
土器 高坏の脚部と坏部、鉢の底部が出土した。いずれも細片であるため図化は不可能である。
時期 川除2～6期と考えられる。



- 1. 灰褐色砂混じりシルト
- 2. 灰褐色砂シルト
- 3. 黄灰褐色シルト

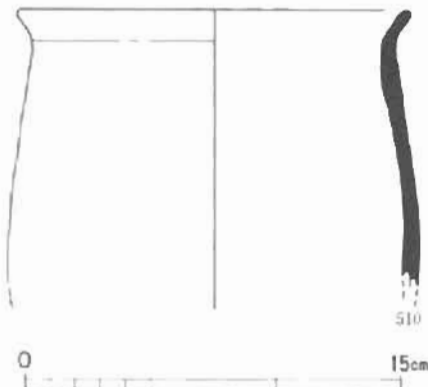


第173図 SD18横断面

検出状況 I-1区からI-2・4・5・6区にかけて検出された。溝の方向は北端から約30mまでは南北方向をとるが、それ以南は北北西から南南東方向へ流れを変えている。SH08～13・16・17を切り、I-4・5・6区のSB15～17に切られている。溝との切り合いは3ヶ所で認められ、SD19およびSB17に伴うと思われるSD24に切れ、SD14を切っている。

形状・規模 長さは115.0mが確認された。幅は検出面で50～60cm、溝底で15～20cmを測る。横断面はU字形を呈し、検出面からの深さは30～35cmである。溝底の標高は北端は148.40m、南端は148.40mと差がないが、南南東方向に流れることが判る。

出土遺物 埋土より甕・高坏などの土器が出土している。
時期 川除2～6期である。



第174図 SD18出土土器

第62表 SD18出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	割合率	備考
510	甕	口径 (15.4) 底径 器高 約11.0 胴径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 体部サナカイト	外面 灰褐色 内面 灰褐色	口縁部僅かな 体部の1/8	

検出状況 I-2区の東端で検出している。溝の方向は東から西の方向をとっている。東端はI-2区内でおさまりI-4区までは続かない。このため当遺構は上堀になる可能性が指摘できる。

形状・規模 長さは2.5mが確認された。幅は検出面で0.55～1.60m、溝底で0.30～1.10mを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは18～25cmであり、溝底の標高は東端で148.53m、西端で148.59mと大差ない。

出土遺物 上器のみが出土している。
 土器は甕の底部・体部・口縁部が出土しているが、いずれも細片であるため図化は不可能である。弥生時代後期の遺物と考えられる。

第3節 I区の調査

時期 川除2～6期である。

SD21

検出状況 I-6区で検出している。溝の方向は北から南の方向をとっている。I-6区内でおさまっている。

形状・規模 平面形は弓状を呈している。長さは8.0mが確認された。幅は検出面で0.20～0.25m、溝底で0.10～0.20mを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは5～8cmであり、溝底の標高は148.57mである。

出土遺物 土器のみが出土している。

土器は細片であるため図化は不可能である。弥生時代後期の遺物と考えられる。

時期 川除2～6期である。

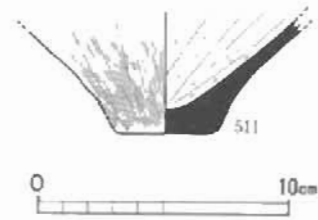
SD25

検出状況 本調査区の北西隅で検出された。溝は北西から南東方向にはしり、北西側は調査区外にのび、南東側はSK40に切られている。

形状・規模 検出した長さは11.5mである。幅は、検出面で0.3～0.6m、底部で0.2mを測る。横断面はU字形を呈し、検出面からの深さは15cmである。溝底のレベルはほぼ一定しており、標高は148.60mである。

埋土 2層に分けられ、上から黒灰色シルト層・黒色シルト層が堆積している。第2層には炭が含まれていた。

出土遺物 第2層から出土している。甕（口縁部・体部・底部）と高杯が出土している。いずれも細片で、図化できたのは甕の底部のみである。



第175図 SD25出土土器

時期 川除2期である。

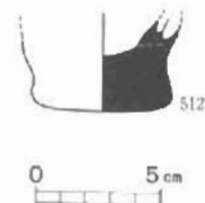
第63表 SD25出土土器観察表

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	保存率	備考
511	甕	口径 瓶径 4.2 器高 残4.6 瓶径 体部径	外面 体部・底部クナハケ、底面木の葉痕 内面 体部・底部磨へラツテリ	外面：灰白 に少し黒 内面：褐灰	底部完好 体部わずか	

SD26

検出状況 SD25の南東部で検出された。溝の方向はSD25とは方向を若干異にし、西北西から東南東方向を指向している。西北西側はSD27に切られ、東南東側は調査区外までのびている。

形状・規模 検出した長さは26mである。溝の幅は、検出面で0.60～1.00m、底部で0.50mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さはほぼ一定しており15cmである。底部の標高は148.60mである。



第176図 SD26出土土器

埋土 2層に分けられる。第1層は黄灰色シルトをブロックで含み、

埋土 2層に分けられる。第1層は黄灰色シルトをブロックで含み、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物 第2層より甕の底部1個体が出土している。胎土から生駒西麓産と考えられる。

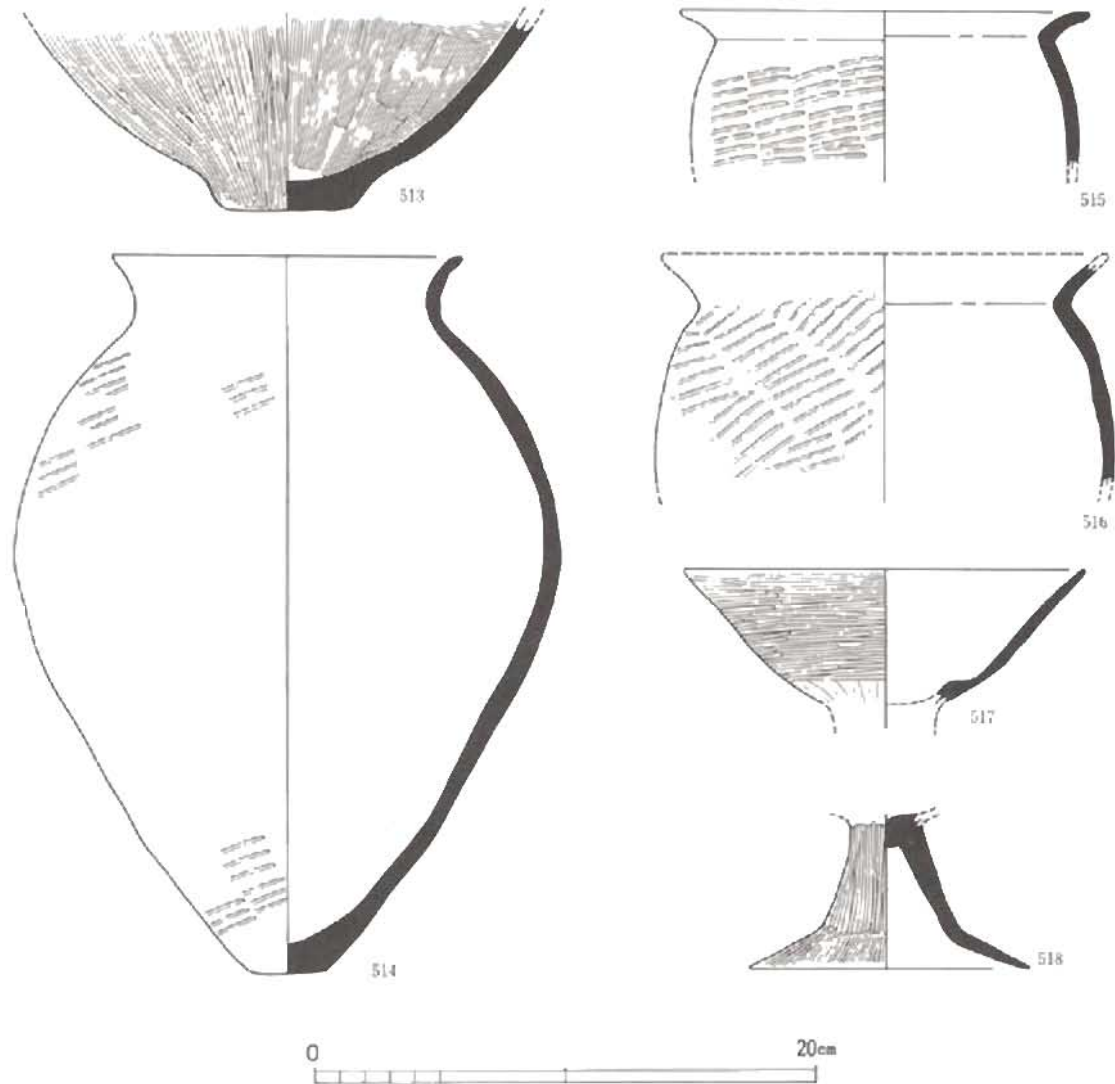
時期 川除2～6期である。

第64表 SD26出土土器観察表

番号	器種	数量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
512	甕	11個 器高 残3.6 体部破	底径 5.4 口径 胎土のため調整不明	外面：赤褐 内面：黒褐	破部定有	河内産

SD27 (図版27・50)

検出状況 I区の北西部、小徴高地bの縁辺部に位置する。溝の方向は東南東から西北西を指向する。東南東側はSK26を切り調査区外までのび、西北西側はII区・III区までのびている。小徴高地bに立地する集落の周囲をめぐるものと考えられる。



第177図 SD27出土土器

第3節 1区の調査

- 形状・規模** 本調査区内で検出した長さは37mである。検出面での幅は0.80~1.00mで、底部における幅は0.30mである。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは30cmである。底部における標高は148.45mである。
- 埋土** 3層に分かれるが、いずれも有機質を多く含んだシルト層である。
- 出土遺物** 第1~第3の各層から壺・甕・高坏が出土している。
- 壺** 図化したものは513の1個体のみであるが、他に二重口縁壺・直口壺なども出土している。なお、513は図化した土器のなかで唯一第3層から出土した土器である。
- 甕** 図化したものはいずれも畿内系である。ただし図化できなかった土器のなかに、丹波系と考えられる口縁部片が認められる。
- 高坏** 517と518の2個体が出土している。両者は接合することができなかったが、同一タイプのもと考えられる。
- 時期** 出土土器から川除2~5期と考えられる。

第65表 S D27出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
513	壺	口径 口径 5.4 器高 残7.6 肩径 体部径	外面：体部一部縮減のうレタキ、底面木の葉痕 内面：体部一部縮減のうレタキ	外面 灰白 内面 灰白	体部一部約1/2	
514	壺	口径 13.8 口径 3.0 器高 28.3 肩径 (32.2) 体部径 21.8	外面：体部一部タキ残る、他は磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：黒い層	口縁部1/2 体部約1/2 底部完存	
515	壺	口径 16.2 口径 器高 残6.1 肩径 (13.5) 体部径 15.4	外面：体部2部縮減のうレタキ、他は磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	口縁部一部約1/4	
516	壺	口径 口径 器高 残9.0 肩径 (14.8) 体部径 (12.2)	外面：口縁部タコナデ、体部縮減のうレタキ、のレタキ 内面：口縁部タコナデ、他は磨滅のため調整不明	外面：明褐色 内面：黒い層	口縁部欠体部にかけて約1/8	
517	高坏	口径 115.9 口径 器高 残8.7 脚柱径 体部径	外面：坏部タコナデ、脚柱との接合部縦方向の強いタコナデ 内面：磨滅のため調整不明	外面 淡黄 内面 灰白	坏部約1/8	
518	高坏	口径 口径 (11.2) 器高 残6.1 脚柱径 2.9 坏部高	外面：脚柱部へうレタキ、のレタキ脚柱部タコナデ 内面：脚柱部タコナデ、脚柱部タコナデ	外面 橙 内面 灰白	脚柱部完存 脚柱部1/8	

(5) 墓

SX03 (図版24・52・53)

- 検出状況** J-1区の南東部で検出された木棺墓である。SH12・13を切り、西半をSK11に切られている。主軸の方向はN-45-Eである。
- 墓壇** 墓壇の平面形は、長さ265cm、幅130cmの長方形を呈する。横断面形は箱形である。墓壇底は平坦であり、高低差は認められない。長さ250cm、幅120cmを測る。検出面から墓壇底までの深さは45cmである。
- 木棺** 木棺は、墓壇底に直接埋置される。規模は、長さ150cm、幅61cmであり、残存する木棺の深さは22cmである。棺内埋土の最下層には厚さ2cmの、底板の痕跡と考えられる暗灰色層が認められたが、木口板および側板の痕跡は確認できなかった。また、木口穴は存在しない。
- なお、西半部の本来の形状が不明であるため、木棺の幅が両端部で異なるかどうかとい

埋土

った細部については観察できなかった。頭位方向も不明である。
 棺外埋土には、4層以上の水平堆積が認められた。いずれもシルト質極細砂などの細粒の堆積物である。棺内には流入したと思われる細粒の堆積物が認められた。

出土遺物

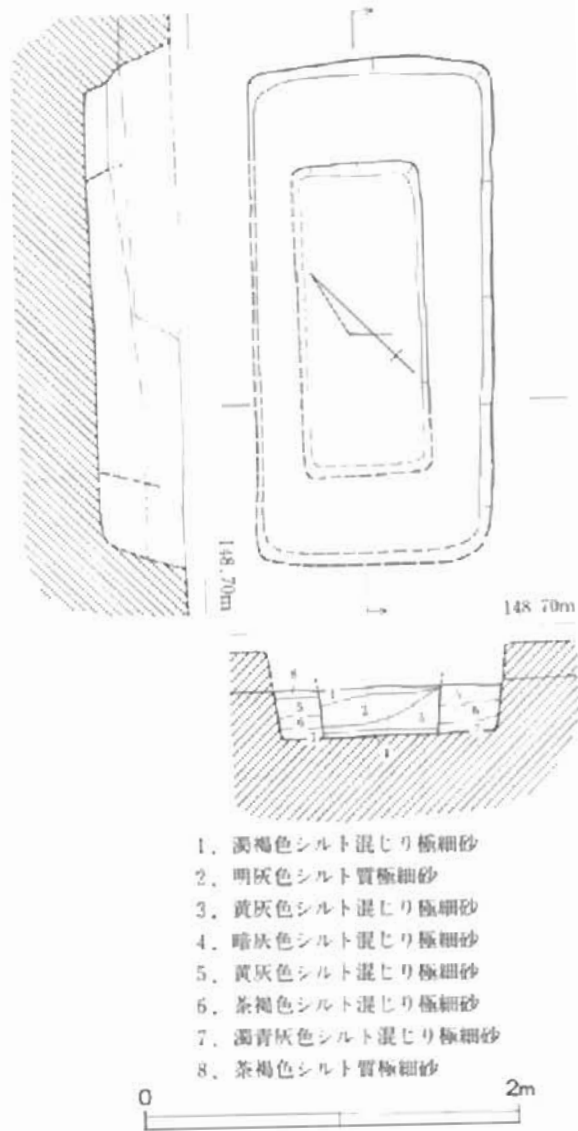
棺外埋土より弥生土器の細片および石器が出土しているが、棺内あるいは棺上の副葬品・着装品・人骨は一切認められなかった。

石器

石錐・剥片が出土している。ともに石材はサメカイトである。
 石錐は、つまみ部と錐部との境が不明瞭なタイプである。他に剥片が1点出土している。

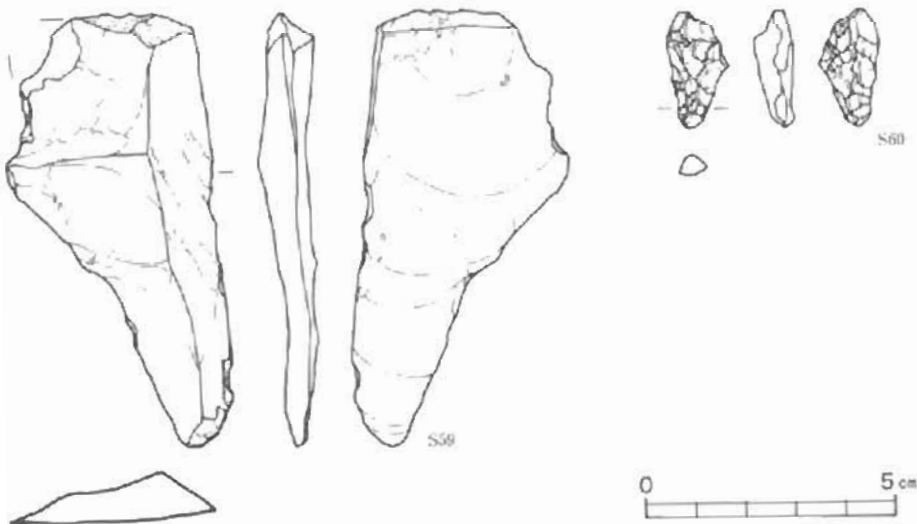
時期

SH12・13とSK11との切り合い関係より、川除6～7期と考えられる。

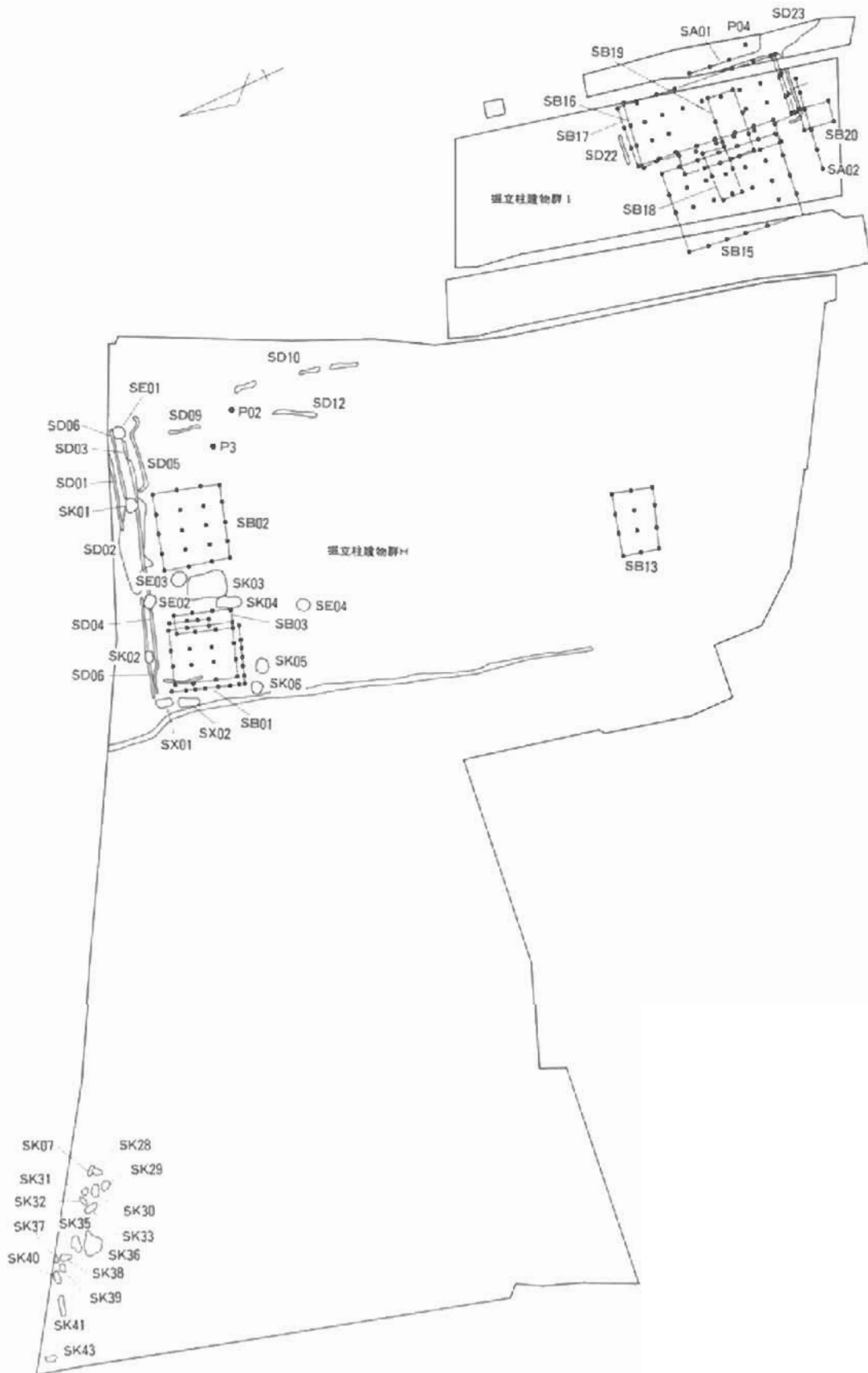


1. 濁褐色シルト混じり極細砂
2. 明灰色シルト質極細砂
3. 黄灰色シルト混じり極細砂
4. 暗灰色シルト混じり極細砂
5. 黄灰色シルト混じり極細砂
6. 茶褐色シルト混じり極細砂
7. 濁青灰色シルト混じり極細砂
8. 茶褐色シルト質極細砂

第178図 S X 03



第179図 S X 03出土石器



第180図 I区平安時代～鎌倉時代の遺構

3. 平安時代以降の遺構と遺物

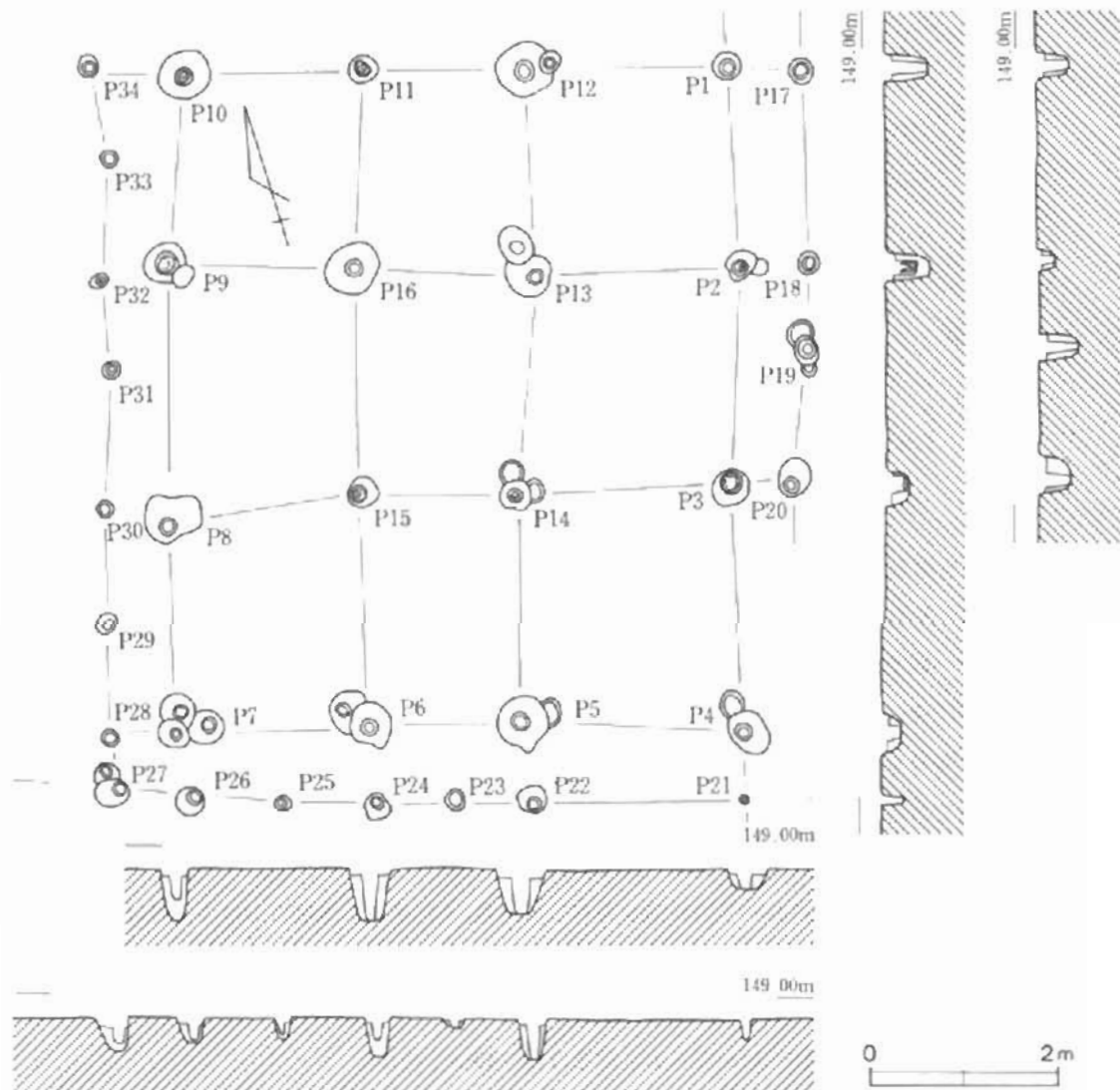
(1) 掘立柱建物

SB01 (図版19)

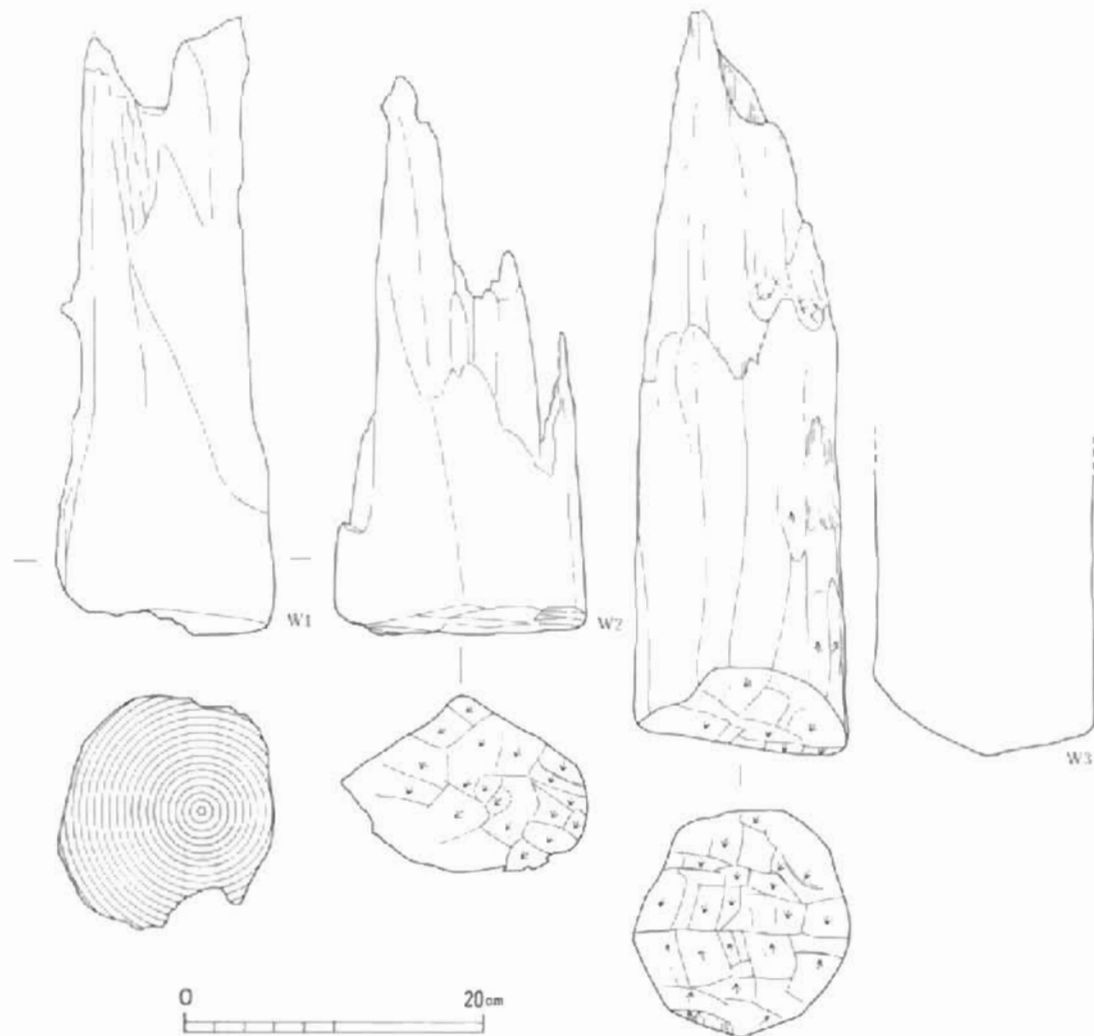
検出状況 1-1区の北東部で検出された。弥生時代の住居跡SH02-06を切っている。中世の掘立柱建物SB02と棟軸が平行で、南北の柱筋が揃っていることから、ひとつの計画に基づく建物配置があったことが想定できる。なお、SB03とは棟軸方向を同じくするが、重なりが認められるため、先後関係にあったことが判る。

形状・規模 N-20°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が7.00m、梁行方向が5.80m・6.05mであり、面積は41.5㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.33mとほぼ等間隔であるのに対し、梁行は不揃いであり、西側の一間が2.00m、中央が1.60m、東側の一間が2.30mを測る。

庇 東・南・西の三方向に庇が確認された。東向きの庇は北から2間分であり、長さは4.36



第181図 SB01



第182図 P 9・P10・P15の柱根

mを測る。南向き、西向き、のそれは各々3間分の規模であり、長さはそれぞれ6.70m、7.60mである。これらの底の柱穴間の距離は身舎と同一の間隔ではなく、東向きの底は北側が一間で他は半間間隔、南向きの底は東端が一間で他は半間間隔、西向きのそれはすべて半間間隔となっている。

柱穴 身舎を構成する柱穴の掘り方は円形であり、その直径は30～60cm、柱底の直径は15～25cmである。深さは35～52cmを測る。掘り方底部まで柱根基部が達していないものもあり、柱痕の深さは25～32cmとなっている。

柱根 P 9・10・15においては柱根が遺存していた。それぞれの基部における直径は14.5cm(W 3)・14.8cm(W1)・17.3cm(W 2)である。残りのよいものについては、底面の加工痕が明瞭に観察できる。底を構成する柱はこれよりも小さいもので、掘り方の直径は10～35cm、柱痕跡の直径は10～15cmである。深さは22～40cmを測る。

出土遺物 身舎の柱穴であるP 5の掘り方より須恵器の椀、土師器の鍋が出土している。

時期 川除14期である。

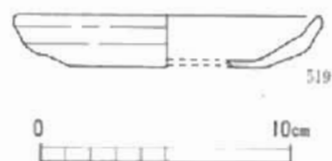
SB02 (図版19・20)

検出状況 T-1区の北東部で検出された。弥生時代のSH06・SD14を切っている。中世の掘立柱建物SB01と棟軸が平行で、南北の柱筋が揃っていることから、ひとつの計画に基づく建物配置があったことが想定できる。

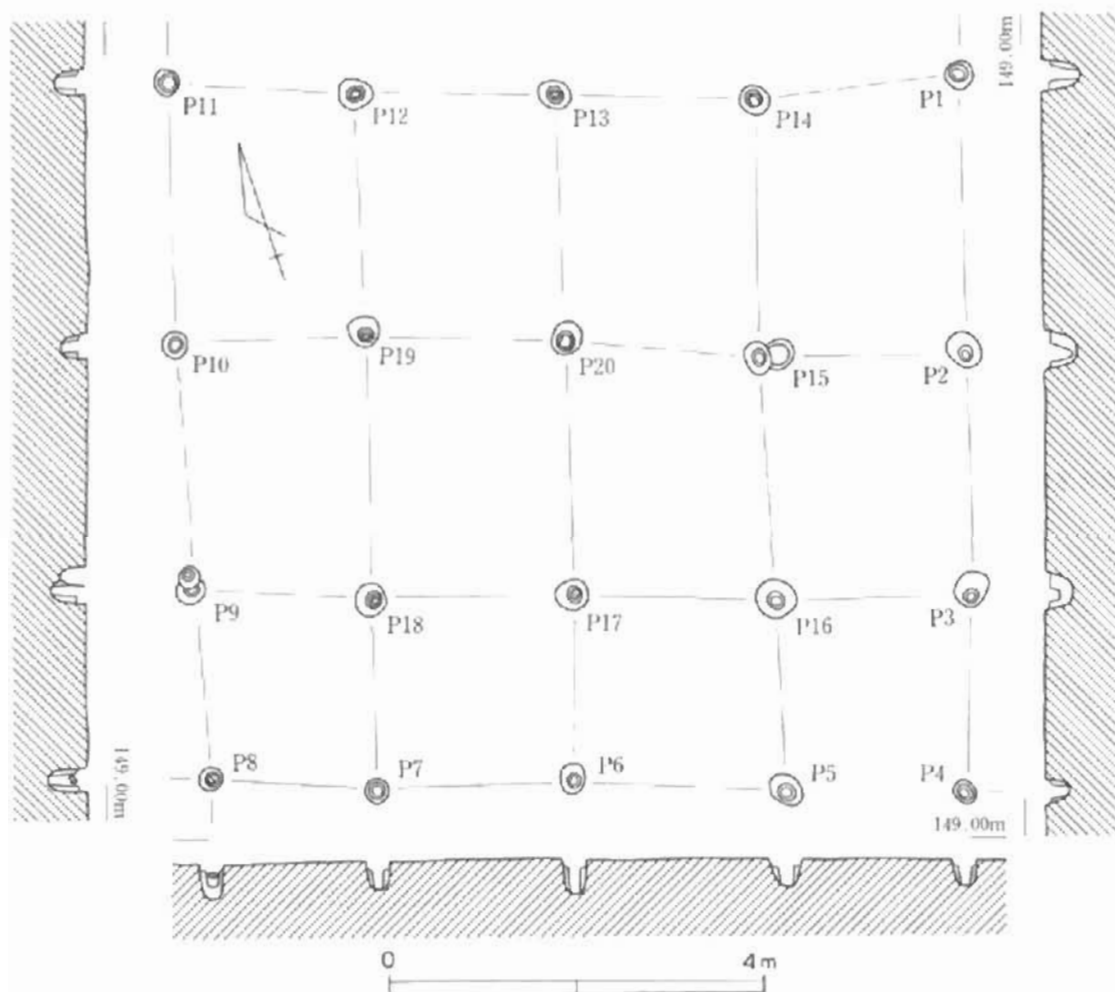
形状・規模 N-20-Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行3間の掘立柱建物である。庇は認められない。規模は桁行方向が8.00m・8.45m、梁行方向が7.30m・7.55mであり、面積は61.3㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.10mとはほぼ等間隔であるのに対し、梁行は中央および北側の1間が2.68mと同一であるのに対し、南側の1間は2.08mと短くなっている。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25~40cm、柱痕の直径は15cmである。深さは30~40cmを測る。P8・12・14・18・19・20では根石が確認されている。

出土遺物 P9柱痕内より、土師器の皿が1点出土している。整形は手捏ねによるが、口縁部から内面にかけてはヨコナデを施している。内面には煤が付着している。



第183図 SB02出土土器



第184図 SB02

第3節 Ⅰ区の調査

また、P2からも上師器の細片が出土している。

時期 川除14期である。

第66表 SB02出土土器観察表

番号	器種	寸法・cm						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	胎数			
519	土師器・甕	(12.2)	2.1	(7.6)	—	—	30	にじい黄褐色	口縁部1/4	内面に黒付着ノ粘土に近い胎土 P9柱頭出土

SB03 (図版19・51)

検出状況 Ⅰ-Ⅰ区の北東部で検出された。弥生時代の住居跡SH02~06を切っている。中世の掘立柱建物SB01・02と棟軸が平行である。

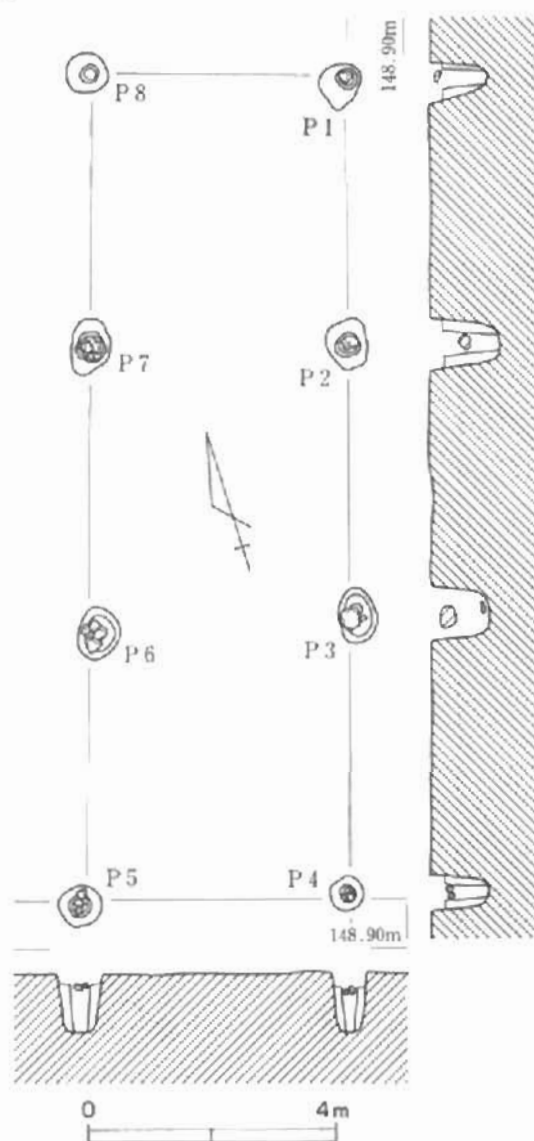
形状・規模 N-18°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が6.45m・6.55m、梁行方向が2.05m・2.12mであり、面積は13.6㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.17m、梁行は2.09mを測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25~40cm、柱痕あるいは柱の抜き取り跡の直径は12~20cmである。深さは45~55cmを測る。P8を除くすべての柱穴に柱を抜いたあとに投入あるいは混入したと思われる円礫が出土している。

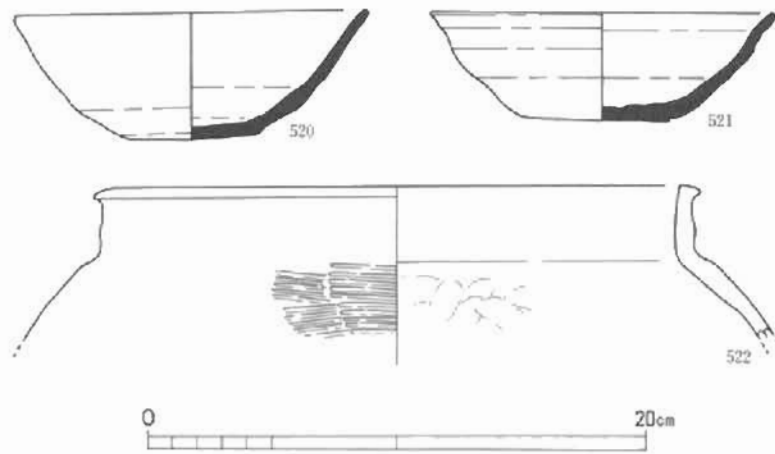
出土遺物 P2より須恵器の椀が、P3より須恵器の椀・土師器の鍋が出土している。いずれも掘り方内から出土したものである。

520・521は、須恵器の椀である。底部の切離しには回転糸切り手法を用いている。522は、体部外面に横方向のタキが、内面にはユビオサエが認められる。

時期 川除14期である。



第185図 SB03



第186図 SB03出土土器

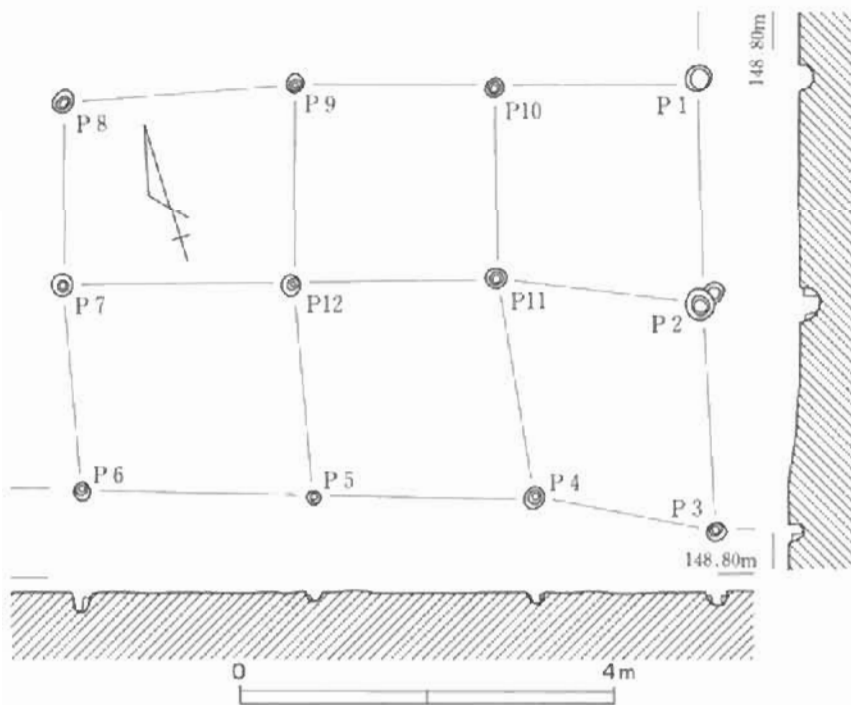
第67表 SB03出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他	
		口径	器高	底径	頸径	最大径				
520	明恵器・碗	14.0	5.2	5.2	—	—	37	灰白	口縁部1/3・底部完全	P2掘り方出土
521	明恵器・碗	13.6	4.3	6.9	—	—	31	灰	口縁部4/5	口縁部が全体に歪んでいる P3掘り方出土
522	土師器・鉢	(22.6)	残6.1	—	(23.6)	—	—	におい・滑	口縁部1/10	P3掘り方出土

SB13 (図版20)

検出状況 I-2区のはほぼ中央部で検出された。SH22とSH27の上面に存在している。

形状・規模 N-73-Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が6.85m、梁行方向が4.10m、4.40mである。面積は29.1㎡である。柱穴間の心々距離の



第187図 SB13

第3節 I区の調査

平均値は、桁行が2.28m、梁行が2.12mである。

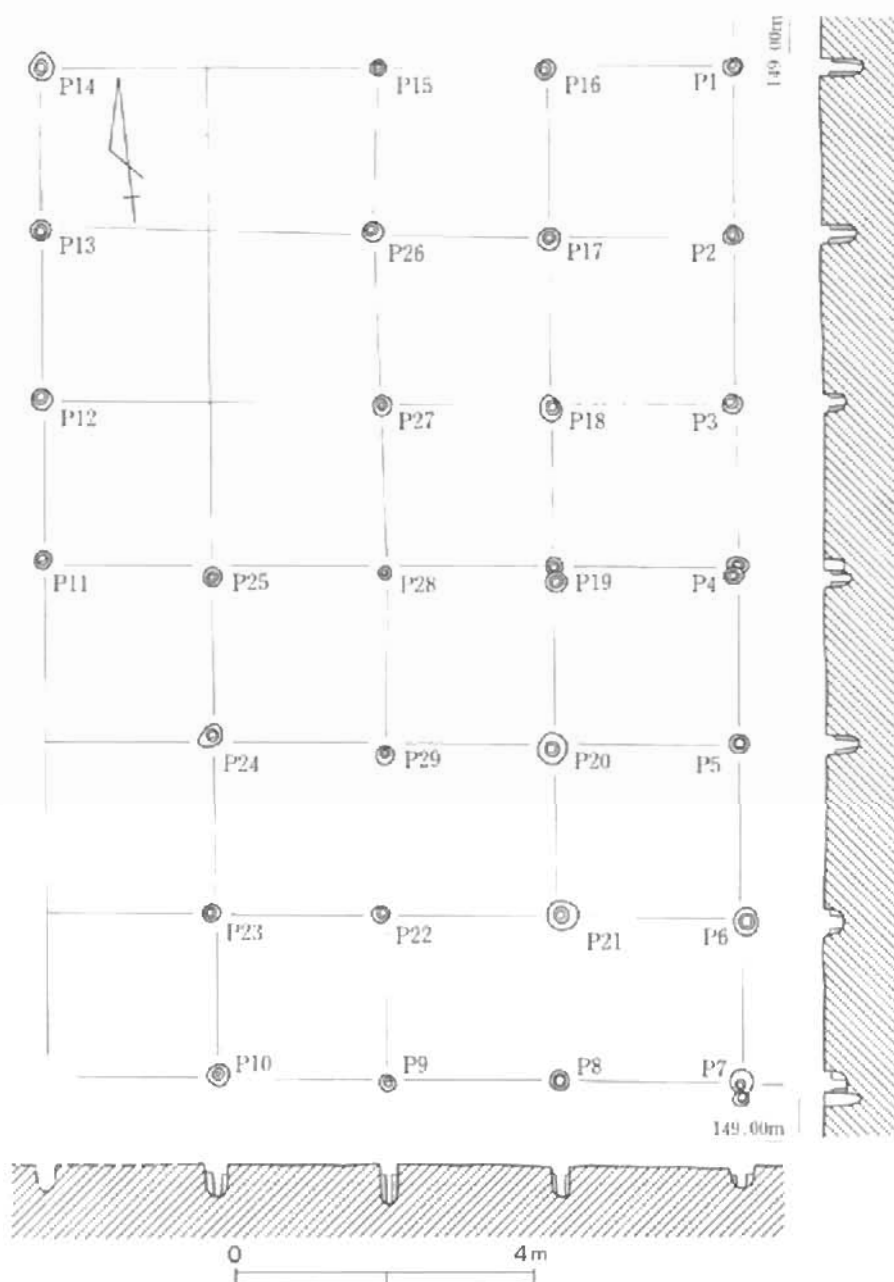
柱穴 掘り方の形状は円形で、直径は15～28cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10～15cmである。深さは10～22cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため明確な時期が決定できないが、棟軸方向から川除13～14期と考えられる。

SB15 (図版21)

検出状況 I-5区とI-4区で検出された。SH29・SD14等の上面に存在している。西筋第1列の南からの3穴と第2列の北からの2穴を欠失している。



第188図 SB15

形状・規模 N-7°-Eに棟軸の方向をとる桁行6間、梁行4間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が13.6m、梁行方向が9.28mである。面積は126.2㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.27m、梁行が2.30mであるが、東端の間は2.45mを測る。



第189図 SB15出土土器

柱穴 掘り方の形状は円形を呈し、直径は18-40cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10-20cmである。深さは30-50cmを測る。P6には柱根がわずかに残っている。

出土遺物 遺物は柱穴の掘り方より須恵器の碗が出土している。図化しているものは1点である。P5の柱痕より出土している。底部は平高台で、内面の見込みが1段落ちている。

時期 川除12期である。

第68表 SB15出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)					色澤	残存状況	特徴・その他	
		口径	器高	底径	胴径	取手径				
523	須恵器・碗	—	残3.7	4.8		—	—	灰白	底部には定存 底部が切り、他の須恵器と動土が異なる	P5出土

SB16 (図版21)

検出状況 1-2区の南東部で検出された。東筋の5穴分は調査区の上層観察用に掘削した側溝のため検出することができなかった。

形状・規模 N-7°-Eに棟軸の方向をとる桁行8間、梁行3間の掘立柱建物である。東柱は検出されていない。

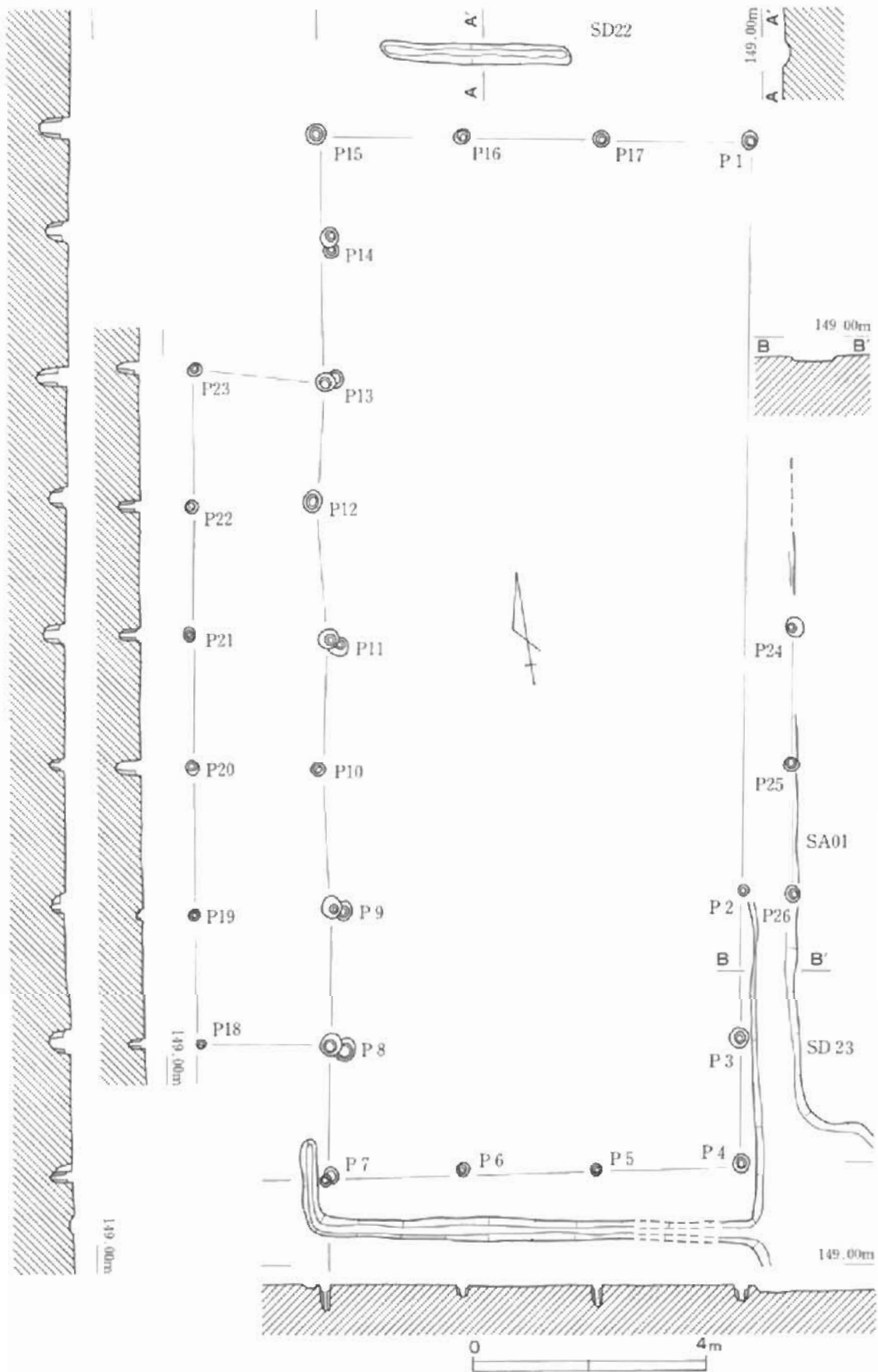
規模は桁行方向が17.36m・17.75m、梁行方向が7.10m、7.40mである。面積は127.30㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.19m、梁行が2.41mである。

西側には一間分拡張して柱穴が5間分の6穴検出されている。方向は桁行方向に平行に検出されている。柱穴間の心々距離は心舎のそれとはほぼ同じ距離である。庇あるいは縁側等の存在が想定できる。

雨落ち溝 当建物跡の四方向に雨落ち溝を検出した。

北側の溝は身舎より1.50m離れて検出された。梁行方向に平行に検出されている。全長約3.30m、検出幅約35cmを測る。東側の溝は身舎のすぐ脇で検出されたが、調査区の側溝によって欠失している部分が多い。全長は約18.50m残存しているが、それ以上に続いている可能性が高い。検出幅は約75cmを測る。南側の溝は身舎より約1m離れて検出された。梁行分の長さが検出され約7.50m、検出幅約40cmを測る。この溝はその後直角に屈曲して西側の雨落ち溝につながっている。西側の溝は全長約1.5m、検出幅約30cmを測る。東側の溝と、南側の溝は建物跡の南東コーナー部分で合流してその幅を拡大しており、そのまま南側方向に伸びているものと思われるが、調査区範囲外にあり確認はできていない。ただこれらの雨落ち溝はこの後に記述するSB17とどちらの遺構に伴うかは定かではない。

柱穴 掘り方の直径は20-35cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10-20cmである。

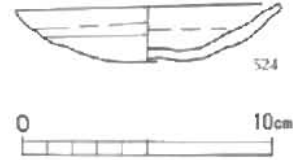


第190図 SB16

深さは20～40cmを測る。P 8・P 16・P 17の柱穴には柱を抜いたあとに礎を投入している。

出土遺物

遺物は柱穴の掘り方、あるいは柱痕より須恵器・土師器が出土している。このうち図化できたものは土師器の小皿が1点である。図化しているものは、P 9の柱痕部分より



第191図 SB16出土土器

出土したもので、他に図化していないが台付皿が同時に出土している。ほぼ完形のもので、口縁部は2段のナデを施している。

時期

川除12期である。

第69表 SB16出土土器観察表

器号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	胎数			
524	土師器・小皿	10.5	2.3	2.2	—	—	21	浅黄緑	ほぼ完存	全体に蓋んでいゝる P9柱痕出土

SB17 (図版21)

検出状況

I-2区の南東部で検出された。東筋の2穴分は調査区の上層観察用に掘削した側溝のため検出することができなかった。

形状・規模

N-8'-Eに棟軸の方向をとる桁行8間、梁行3間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が18.2m・18.5m、梁行方向が6.85m・6.92mである。面積は126.6㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.30m、梁行が2.30mである。

雨落ち溝

当建物跡の四方向に雨落ち溝を検出した。ただこの雨落ち溝はSB16で検出したものと同じものであり、どちらの遺構に伴うかは定かではない。

柱穴

掘り方の直径は20～45cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は12～20cmである。深さは5～50cmを測る。P 3・P 19・P 21の柱穴には柱根が残っている。第192図に載せているものは、P 21の柱根である。

庇

東向に2間分の庇を検出した。長さは4.50m、柱穴間の平均距離は2.25mであり、身舎の柱穴とはほぼ同規模である。掘り方の直径は15～25cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は5～16cmである。深さは6～45cmを測る。この庇もSB16とどちらに伴うものかは定かではない。

出土遺物

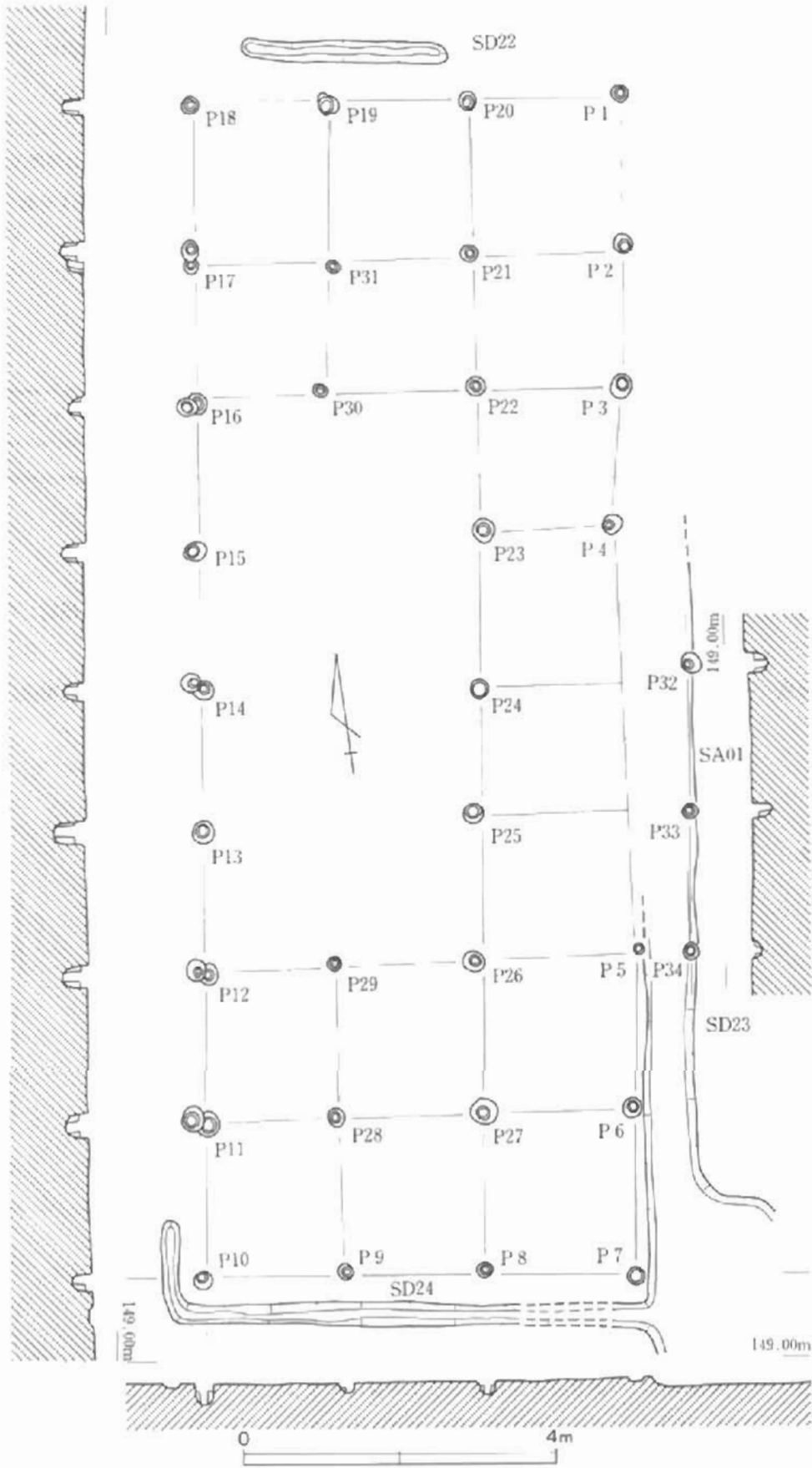
遺物は柱穴の掘り方より須恵器・土師器が出土している。しかしいずれも細片で図化はできなかった。

時期

川除12期である。



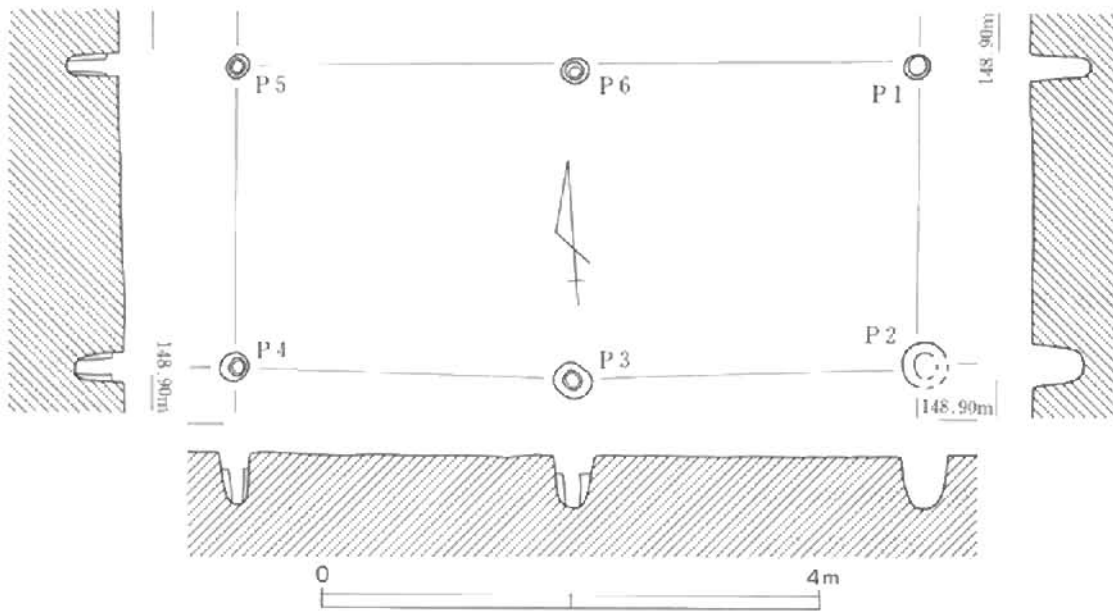
第192図 SB17 P21柱根



第193図 SB17

SB18 (図版21)

- 検出状況** 1-4区で検出された。
- 形状・規模** N-85°-Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が5.50m、梁行方向が2.35mである。面積は12.9㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.75mである。
- 柱穴** 掘り方の形状は円形を呈し、直径は20~40cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~12cmである。深さは40~45cmを測る。P6には柱根がわずかに残っている。
- 出土遺物** 遺物は柱穴の掘り方より土師器が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。
- 時期** 川除12期である。



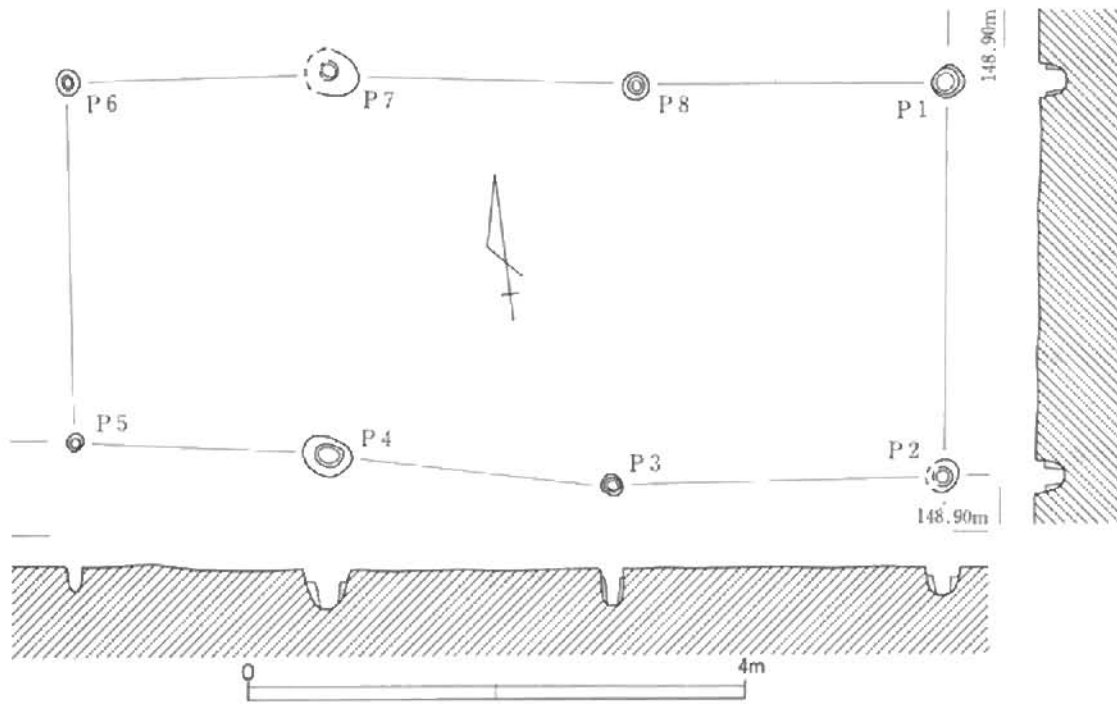
第194図 SB18

SB19 (図版21)

- 検出状況** 1-4区で検出された。
- 形状・規模** N-85°-Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が7.00m、7.10m、梁行方向が2.88m、3.12mである。面積は21.1㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が西端一間は2.10m、他は2.50mで平均2.35m、梁行が3.00mである。
- 柱穴** 掘り方の形状は円形を呈し、直径は18~40cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~20cmである。深さは20~30cmを測る。
- 出土遺物** 掘り方より土師器が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。
- 時期** 川除12期である。

SB20 (図版21)

- 検出状況** 1-4区で検出された。



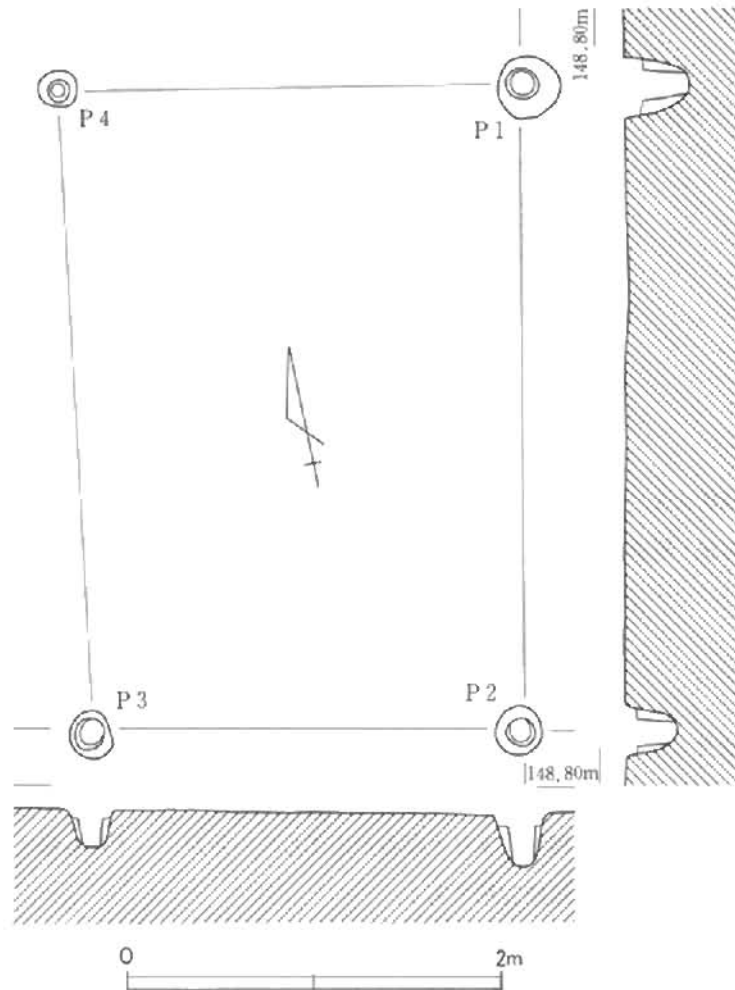
第195図 SB19

形状・規模 N-9°-Eに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.45m、梁行方向が2.30m、2.45mである。面積は8.20㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、梁行が2.38mである。

柱穴 掘り方の形状は円形を呈し、直径は20~33cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は12~17cmである。深さは20~35cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 川除12期である。



第196図 SB20

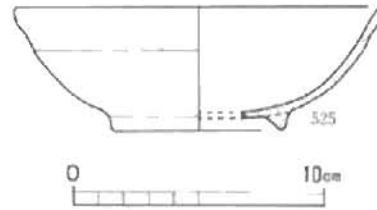
P 0 2

検出状況 1-1区の東半部で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。

形状・規模 円形の柱穴であり、掘り方の直径36cm、柱痕の直径13cm、深さ21cmを測る。

出土遺物 掘り方より黒色土器A類の碗が出土している。

時期 川除12期である。



第197図 P02出土土器

第70表 P02出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	胎厚			
525	黒色土器・碗	(14.4)	4.9	(6.8)			34	黒~灰白	1/6	

P 0 3

検出状況 1-1区の東半部で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。

形状・規模 円形の柱穴であり、掘り方の直径36cm、深さ21cmを測る。柱痕は確認できなかった。

出土遺物 土器は出土していないが、柱根が認められた。残存状況は極めて悪い。復元される直径は20cmである。

時期 土器の出土をみないため不確定だが、柱根の遺存状況から判断して、中世以降のものと考えられる。



P 0 4

検出状況 1-6区で検出している。S D23の東側に位置している。

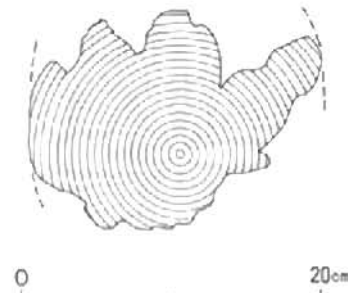
規模・形状 掘り方の形状は円形を呈し、直径は24cm、柱痕の直径は12cm、深さは57.4cmを測る。

出土遺物 掘り方内より灰釉の碗526が出土している。

時期 川除12期である。



第198図 P04出土土器



第199図 P03出土柱根

第71表 P04出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	胎厚			
526	灰釉・碗	—	腹3.1	6.9	—	—	—	灰白	底部2/3・体部僅か	底部内面に重焼き痕あり

(3) 土壙

SK01 (図版21・51)

検出状況 Ⅰ-Ⅰ区の北東部、SB02東辺部の北約2.5mに位置する。主軸方向はこのSB02とほぼ一致する。

形状・規模 平面形は長軸140cm、短軸124cmとほぼ方形に近い。土壙底では、長軸106cm、短軸95cmを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは21cm~25cmである。

埋土 3層に分かれ、上2層はシルト質極細砂、最下層はシルト層の堆積が認められた。

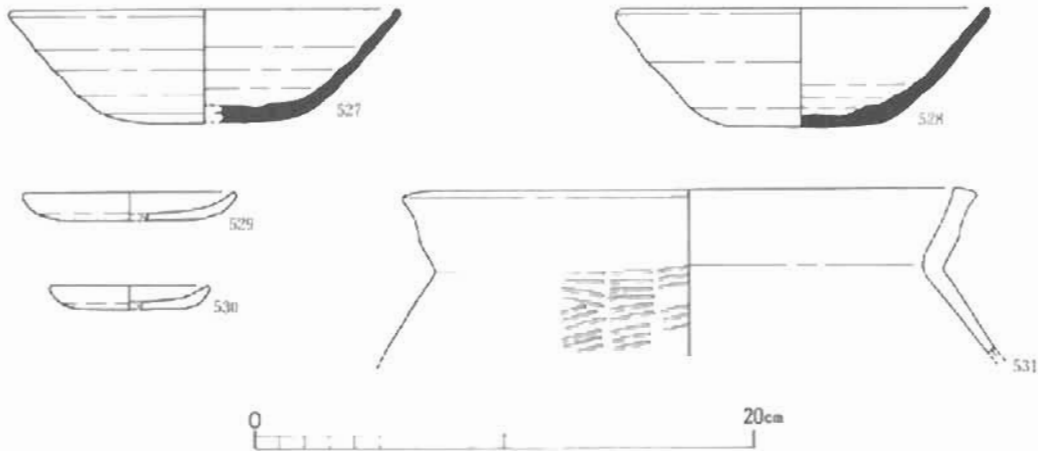
出土遺物 第3層より出土している。土器量は多くはないが、20cm大の河原石(垂角礫)とともに出土しており、あたかも廃棄されたかのような状況を示している。しかし、土壙中央部では須恵器の碗(528)が完形で出土しており、土壙底に据え置かれたような出土状況を示している。

出土遺物は、土器のみで、須恵器と土師器が出土している。須恵器は、図化した碗以外に捏鉢の小片も出土している。土師器は、小皿2個体と鍋が出土している。

鍋 口縁部が「く」字形に屈折するもので、端部は外方へわずかにつまみ出すようなナデ調



第200図 SK01



第201図 SK01出土土器

整が施され、端面を形成している。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により、体部外面は水平方向のタタキ整形、体部内面はナデ調整によりそれぞれ仕上げられている。

時期 出土遺物より、川除14期と考えられる。

第72表 SK01出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他	
		口径	器高	底径	口径	底径				
527	皿形器・碗	115.1	4.5	18.2	—	—	29	灰白・灰	1/1	底部へり起こし
528	皿形器・碗	11.5	4.7	6.1	—	—	32	灰白	完全	
529	土師器・小皿	18.1	1.1	—	—	—	13	灰白	1/1	口は軽々な折し、底部手摺ね
530	土師器・小皿	16.3	1.0	14.0	—	—	15	灰白・黄褐色	1/4	底部手摺ね
531	土師器・碗	121.2	45.6	—	120.3	—	—	灰白	口縁部1/8	

SK02

検出状況 I-1区の北東部で検出された。平安時代以降の掘立柱建物S B01の北方に位置し、弥生時代の住居跡S H04を切っている。

形状・規模 平面形は長さ120cm、幅72cmの隅田長方形を呈する。検出面から底までの深さは33cmであり、土壌底における長さは74cm、幅46cmを測る。横断面形は皿形である。

埋土 3層に分かれ、シルト質極細砂などの細粒の堆積が認められる。

出土遺物 青磁の小片が出土しているが、出土層位は不明である。

時期 川除13～15期である。

SK03

検出状況 I-1区の北東部で検出された。中世の掘立柱建物S B01とS B02の中間に位置し、弥生時代の住居跡S H06を切っている。

形状・規模 平面形は長さ455cm、幅276cmの隅田長方形を呈する。検出面から底までの深さは30～40cmであり、土壌底における長さは395cm、幅240cmを測る。横断面形は皿形である。

埋土 1層であり、灰白色のシルト質極細砂である。

第3節 I区の調査

出土遺物 須恵器の椀・捏鉢、土師器の鍋、丹波焼の甕などが出土している。
 時期 川除15期である。

SK05

検出状況 I-1区の北東部で検出された。他の遺構との切り合いはない。
 形状・規模 平面形は長径158cm、短径140cmの円形を呈する。検出面から底までの深さは115cmと深い。土壌底における規模は長径140cm、短径119cmである。土壌壁面はほぼ垂直に立ち上がる。
 埋土 灰白色のシルト質極細砂が堆積する。
 出土遺物 須恵器の椀・捏鉢、土師器の大皿、丹波焼の甕などが出土している。
 時期 川除15期である。

SK06

検出状況 I-1区の北東部、小微高地aの西縁部にあたる位置で検出された。SB01の南西隅の南西約2mに位置する。SD18を切っている。

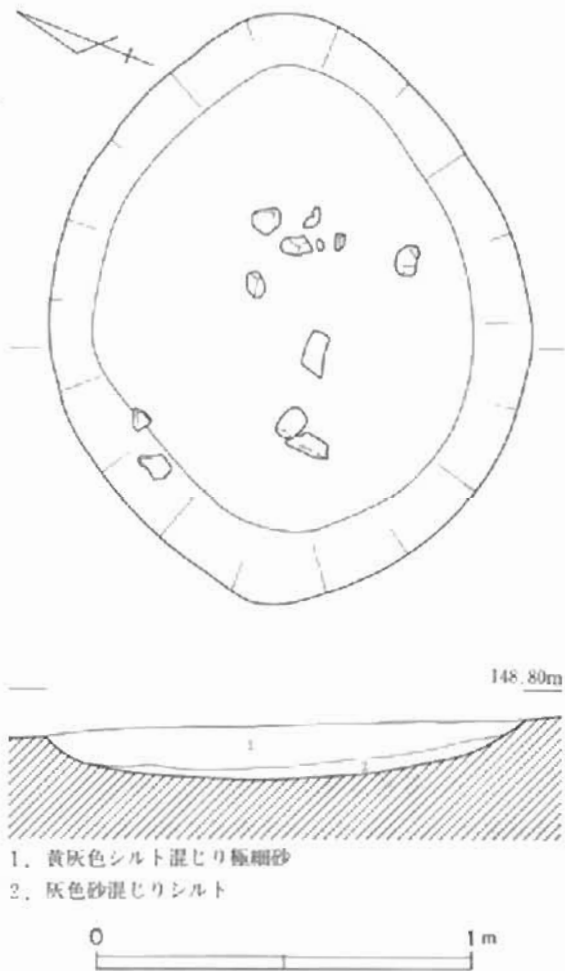
形状・規模 平面は、東西方向を長軸とする楕円形を呈する。検出面での長軸の長さは156cm、短軸の長さは130cmである。また、土壌底での長軸・短軸の長さは、それぞれ125cm・103cmである。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは土壌中央部で14cmと浅い土壌である。土壌中央部における標高は、148.56mである。

埋土 2層からなる。第1層のシルト混じり極細砂が大半を占め、下層にわずか4cmの厚さで砂混じりシルト層が堆積している。

出土遺物 下層より、須恵器と土師器の小片が出土しているが、図化できるものはなかった。土師器については、器種を特定することはできないが、須恵器は甕の体部片が出土している。

時期 出土遺物が小片のため、時期を特定することはできない。ただし埋土が他の平安時代以降の遺構と同じであること、須恵器の甕が他の当該期の遺構に伴うものと同じであることから、川除13~15期と考えられる。

遺構の性格 本遺構は、SB01と近接する位置



第202図 SK06

にあり、時期もほぼ同じである。このため、S B01を中心とした屋敷地に伴う遺構ではないかと考えられる。

その他の土壌

以上に掲載しなかったI区の土壌のうち、平安～鎌倉時代に属することが判明したものの概略を一覧表にまとめることとする。

第73表 I区 平安時代～鎌倉時代その他の土壌一覧表（単位：cm）

遺構名	規模（検出面）		規模（土壌底）		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK03	455	276	395	240	40	長方形	皿形	15期	須恵器・土師器・丹波焼
SK27	105	60	98	55	15	不整形	逆台形		須恵器・土師器
SK28	110	73	100	58	14	不整形	U字形		須恵器・土師器
SK29	115	85	110	78	15	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK30	135	93	117	65	20	不整形	皿形	15期	須恵器・丹波焼
SK31	95	65	75	50	19	楕円形	逆台形	11～12期	須恵器・土師器・黒色土器
SK32	114	55	100	48	18	不整形	逆台形		須恵器・土師器
SK33	150	73	145	55	15	楕円形	逆台形		須恵器・土師器
SK35	190	125	175	100	13	不整形	逆台形		須恵器・土師器
SK36	285	140	270	120	19	不整形	逆台形	15期	須恵器・丹波焼・土師器
SK37	110	70～	95	55～	13	不整形	逆台形		須恵器
SK38	165	100	150	80	16	長方形	逆台形	15期	須恵器・丹波焼
SK39	90	70	80	60	13	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK40	175	90	160	70	15	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK41	225	70	200	50	15	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK43	116	60	103	43	8	長方形	皿形		

（4）溝

SD01

検出状況 I-1区の北東部で検出された。溝の方向はS B01・02の桁行方向およびこの建物の北に位置するSD06・09と平行している。西端はSD02を切り、東端は調査区外である。

形状・規模 長さは11.0mが確認された。幅は、検出面で25～30cm、溝底で15～20cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは3～5cmと浅く、溝底の標高は東端で148.80m、西端で148.70mと大差ない。

埋土 灰白色のシルト質極細砂が堆積する。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD02

検出状況 I-1区の北東部で検出された。溝の方向はS B01・02の桁行方向、およびこの建物の北に位置するSD04・06と概ね平行する。SK01に切られる。西端はSD04との切り合いが認められず、東端はSE01までのびている。

第3節 1区の調査

- 形状・規模** 長さは17.5mが確認された。検出面における幅は、西半で260cm、東半で120～150cmである。溝底の幅は、西半で100cm、東半で50cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは12～15cmであり、溝底の標高は西端で148.67m、東端で148.58mと東方の微高地縁辺に向かうようである。
- 埋土** 灰白色のシルトの堆積が認められた。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD03

- 検出状況** I-1区の北東部で検出された。溝の方向はSD01・04・06と平行する。他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 長さは2.5mが確認された。幅は、検出面で30cm、溝底で20cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは2cm前後と浅い。溝底の標高は西端で148.66m、東端で148.60mである。
- 埋土** 灰白色のシルトの堆積が認められた。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD04

- 検出状況** I-1区の北東部で検出された。SB01の北側に位置し、その桁行方向と平行する。西端はやや屈曲しながら消滅し、東端はSD02と接続する。SK02・SE02に切られる。
- 形状・規模** 長さは11.0mが確認された。幅は、検出面で25～50cm、溝底で10cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは5cm前後と浅い。溝底の標高は西端で148.68m、東端で148.69mと大差ない。
- 埋土** 灰白色のシルトの堆積が認められた。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD05

- 検出状況** I-1区の北東部で検出された。西端は、SD02の中央付近に接続し、屈曲してSD02などの溝に平行する。東端は、南へ折れて消滅する。弥生時代の溝SD13・14を切る。
- 形状・規模** 長さは9.0mが確認された。幅は、検出面で15～50cm、溝底で10～20cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは4～6cm前後と浅い。溝底の標高は東端で148.72m、西端で148.70mと大差ない。
- 埋土** 灰白色のシルトの堆積が認められた。
- 出土遺物** 須恵器の椀、土師器の細片が出土している。
- 時期** 溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD06

検出状況	I-1区の北東部で検出された。SB01の北側に位置し、その桁行方向と平行する。SD04とは約70cmの間隔をもって平行している。両端は調査区内で消滅する。
形状・規模	長さは12.3mが確認された。幅は、検出面で20～30cm、溝底で5～10cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは3～8cmと浅い。溝底の標高は東端で148.75m、西端で148.68mである。
埋土	灰白色のシルトの堆積が認められた。
出土遺物	遺物は出土していない。
時期	溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD07

検出状況	I-1区の北東部で検出された。SB01と重なって検出された緩く弧を描く南北方向の溝である。両端は調査区内で消滅する。
形状・規模	長さは6.2mが確認された。幅は、検出面で20～25cm、溝底で10～20cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは2cmと浅い。溝底の標高は南端で148.74m、北端で148.70mと大差ない。
埋土	灰白色のシルトの堆積が認められた。
出土遺物	遺物は出土していない。
時期	溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD09

検出状況	I-1区の北東部で検出された。弥生時代の溝SD13の東に位置し、SB01・02の梁行方向に平行する。SD12と同一の溝であるかもしれない。他の遺構との切り合いは認められない。
形状・規模	長さは4.0mが確認された。幅は、検出面で30cm、溝底で10cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは3cmと浅い。溝底の標高は南端で148.73m、北端で148.70mと大差ない。
埋土	灰白色のシルトの堆積が認められた。
出土遺物	遺物は出土していない。
時期	溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD10

検出状況	I-1区の東端で検出された。SD09の東側に位置する。弥生時代の溝SD15を切る。削平を受けているため、深い部分のみが断続的に検出された。
形状・規模	長さは8.0mが確認された。幅は、検出面で25～70cm、溝底で20～45cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは6～10cmと浅い。溝底の標高は南端で148.70m、北端で148.54mである。
埋土	灰白色のシルトの堆積が認められた。

第3節 I区の調査

出土遺物 遺物は出土していない。
時期 埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD12

検出状況 I-1区の北東部で検出された。弥生時代の溝SD13の東側に位置する。SD09と同一の溝の可能性はある。
形状・規模 長さは5.0mが確認された。幅は、検出面で40cm、溝底で12～20cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは5cmと浅い。溝底の標高はほぼ均一で148.65mである。
埋土 灰白色のシルトの堆積が認められた。
出土遺物 須恵器の椀が出土している。
時期 川除13～15期である。

SD19

検出状況 I-1区東半の微高地西縁に沿って検出された南北方向の溝である。SB01の梁行方向に平行し、弥生時代の溝SD18を切っている。
形状・規模 SB01以北は西方に屈曲するが、それ以南はN-20°-Eの方向で直線的にのびる。長さは55.0mが確認された。幅は、検出面で60～90cm、溝底で60～90cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは30cmである。溝底の標高は北端で148.58m、南端で148.49mと高低差は10cm程度である。
埋土 灰白色のシルトの堆積が認められた。
出土遺物 須恵器の椀、土師器が出土している。
時期 溝の方向性および埋土の類似から、川除13～15期と考えられる。

SD22

検出状況 I-4区のはほぼ中央部で検出している。溝の方向は西から東の方向をとる。SB16・17の梁行と同じ方向をとっている。
形状・規模 長さは4.2mが検出された。幅は、検出面で30～40cm、溝底で10～20cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは2.50～5.00cmで、溝底の標高は東西同一で148.57mである。この溝はSB16かSB17いずれかの雨落ち溝になると考えているものである。
出土遺物 遺物は出土していない。
時期 溝の方向性および埋土の類似から、川除12期と考えられる。

SD23

検出状況 I-6区の中央部から南部にかけて検出している。溝の方向は北から南の方向をとる。SB16・17の桁行と同じ方向をとっている。溝の北側は調査区の土層観察のための側溝によって削平を受け検出されていない。
形状・規模 長さは17.0mが検出された。幅は、検出面で0.70～2.60m、溝底で0.50～2.40mを測るよう北側は狭く、南側になると広がっている。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さ

は5.00～6.00cmであり、溝底の標高は北側が148.60m、南側が158.47mと北から南に向かっていたようである。

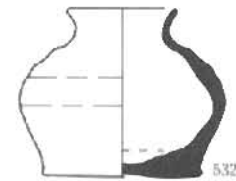
出土遺物 埋土より須恵器の碗・捏鉢・甕、土師器の坏・小皿・鍋、黒色土器の碗が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。

時期 出土遺物から、川除12期と考えられる。

S D 2 4

検出状況 I-4区の南東部からI-6区の南部にかけて検出している。溝の方向は北から南へそして直角に曲がって西から東の方向をとっている。溝の一部は調査区の土層観察のための側溝によって削平を受け検出されていない。

形状・規模 長さは南北方向に1.40m、東西方向に7.50mが検出された。幅は検出面で0.25～0.45m、溝底で0.10～0.20mを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは3.5～6.0cmであり、溝底の標高は148.57mと同一である。この溝もS B 16・17のいずれかの雨落ち溝になると考えているものである。



第203図 S D 24出土土器

出土遺物 埋土より須恵器の碗・小型壺、土師器の坏・小皿・鍋、黒色土器の碗が出土している。須恵器の小型壺以外は細片のため図化できなかった。

時期 出土土器から川除12期と考えられる。

第74表 S D 24出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他	
		口径	器高	口径	最大径	指数				
532	須恵器・小壺	(4.2)	6.7	6.6	3.8	8.2	—	灰白	2/3	底部へラ起こし

(5) 墓

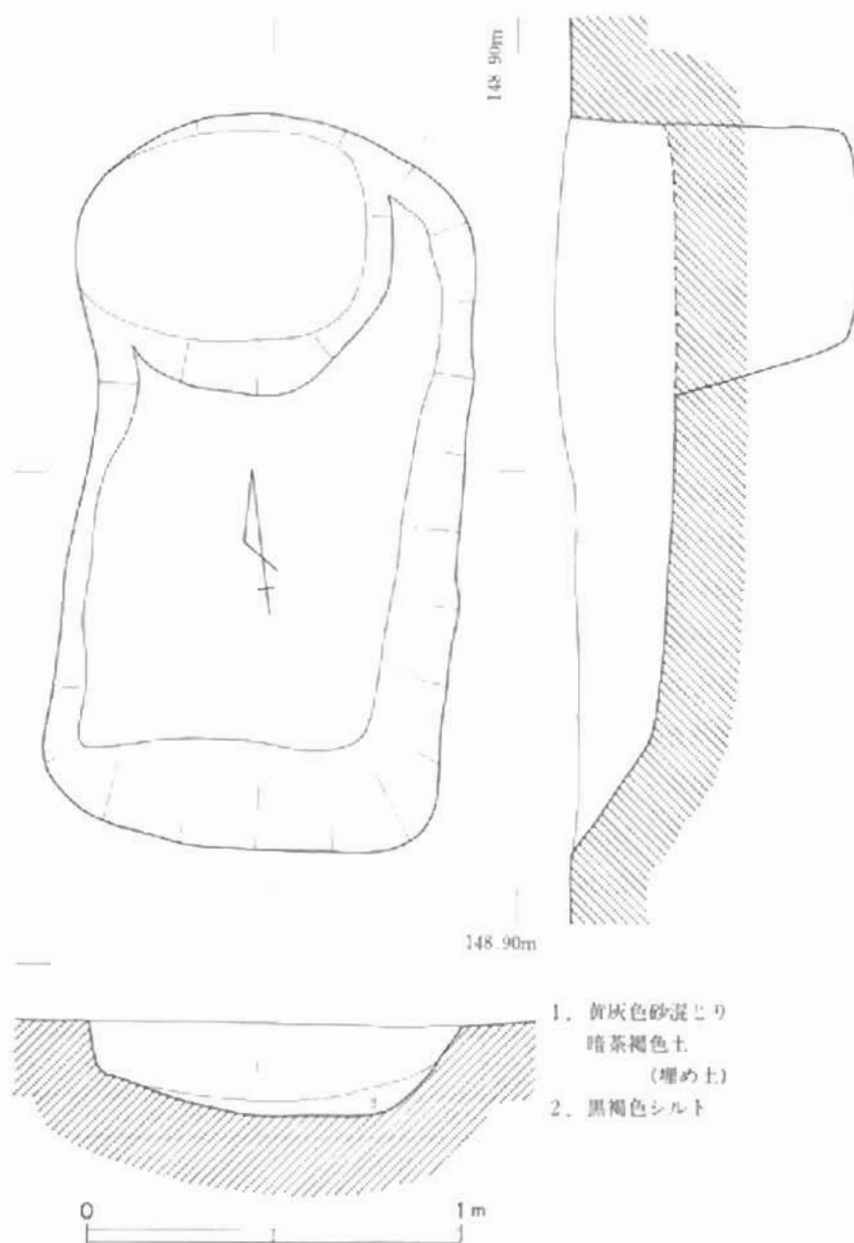
S X 0 1 (図版 2 3)

検出状況 I-1区の北東部、小塚高地aの西縁辺部にあたる位置で検出した。S B 01の北西約2mに位置し、主軸方向もS B 01とはほぼ一致している。本土墳の北端部は近世以降の攪乱を受けている。

形状・規模 平面形は、南北方向に主軸をとる隅円長方形である。検出面における主軸長は196cm、その直角方向で105cmを測る。また、土墳底での主軸長は160cm、その直角方向で79cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは土墳中央部で25cmである。土墳底における標高は148.48mである。

埋土 2層に分けられる。このうち、上層は明らかに人為的に埋められた土である。

出土遺物 須恵器の碗・土師器の鍋・丹波焼の摺鉢が出土しているが、いずれも小片で、図化できなかった。量的にも少ない。



第204図 SX01

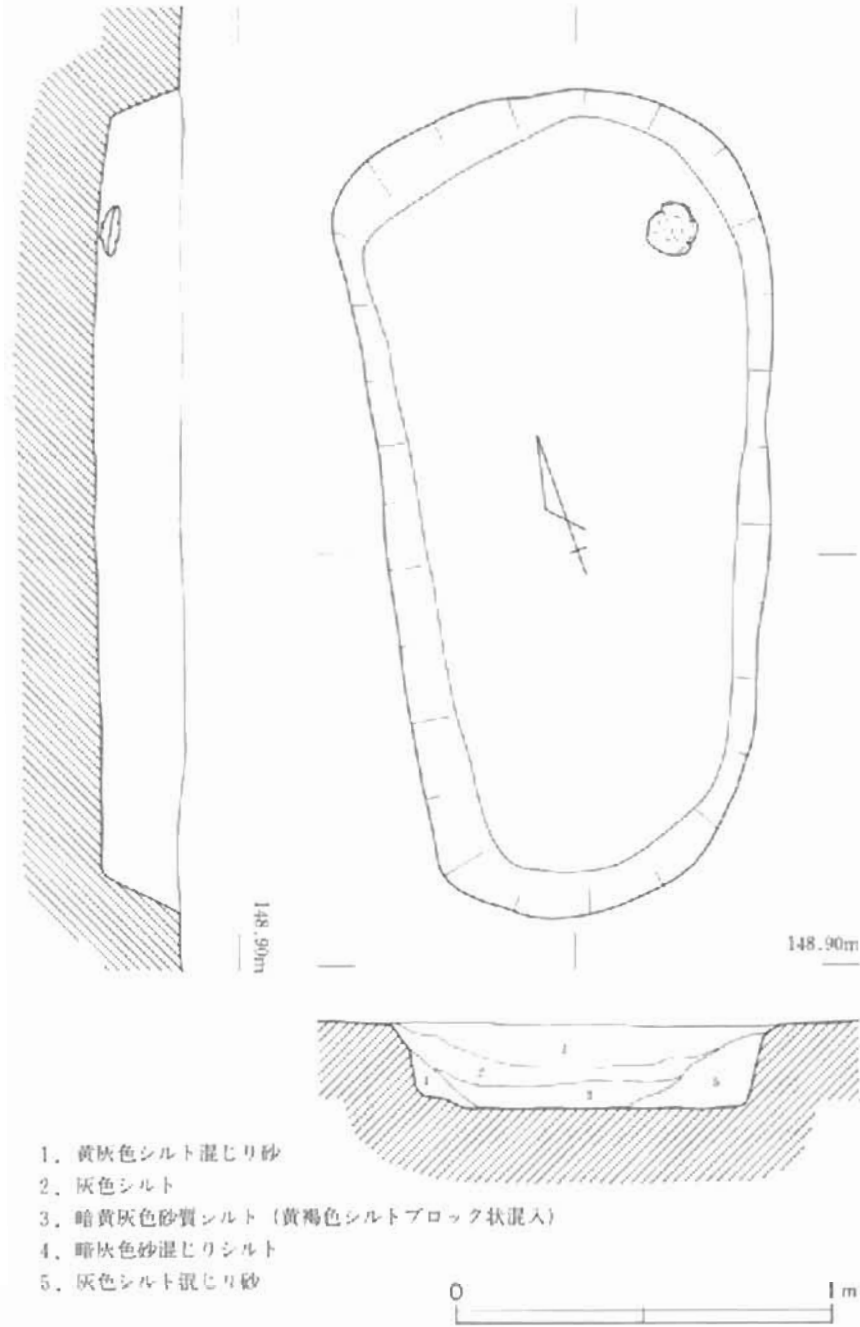
時期 出土遺物から判断して、川除15期と考えられる。

遺構の性格 本遺構は、その平面形・規模から墓と考えられる。また、土壌横断面の観察によると木棺の痕跡は認められず、土壇墓と考えられる。加えて、本遺構はSB01に隣接する位置にあり、しかも主軸方向をほぼ同じくすることから、SB01を中心とする屋敷地に伴うものと考えられる。

SX02 (図版23・51)

検出状況 SX01の約1m南に位置し、SB01の西側にあたる。

形状・規模 平面形は、主軸方向を南北方向にとる不整形気味の隅円長方形を呈する。検出面における主軸方向の長さは220cmを測る。またその直交方向は、北側ほど広くなる傾向にあり、南辺で70cm、北辺で115cmを測る。土壇底部においてもその平面形は検出面と変化なく、主軸



1. 黄灰色シルト混じり砂
2. 灰色シルト
3. 暗黄灰色砂質シルト (黄褐色シルトブロック状混入)
4. 暗灰色砂混じりシルト
5. 灰色シルト混じり砂

第205図 S X 02

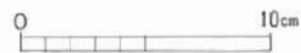
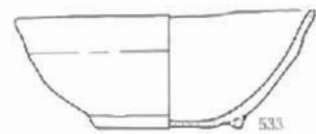
方向で202cm、南辺で55cm、北辺で100cmを測る。横断面は箱形を呈し、検出面からの深さは土壙中央部で23cmである。土壙底における標高は148.50mである。

埋土

5層に分かれる。特に第3層については、黄褐色シルトをブロック状に含む層で、人為的に埋められた層と考えられる。これに対して、第4・5層は自然に流れこんだ層と考えられる。

出土遺物

埋土中と土壙底から出土している。埋土中からは、須恵器の碗と土師器の小皿が出土している。これらの土器は小片のため図化できなかった。土壙底からはほぼ完形に近い瓦器碗が据え置かれた状況で出土している。



第206図 S X 02出土土器

この瓦器碗は、遺存状況がよくなく、内外面に暗文があるかどうかなどについては観察できない。また、全体的に歪みが顕著な土器である。

時期 墓壇底から出土した瓦器碗から、川除13～14期と考えられる。

遺構の性格 本遺構は、その平面形・規模及び瓦器碗の出土状況から判断して墓と考えられる。また、上層断面の観察から、木棺墓ではなく土壇墓と判断できる。本土壇墓は、主軸方向をSB01とほぼ一致させていることから、SX01同様SB01を中心とした屋敷に伴うものと考えられる。

第75表 SX02出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	胎数			
333	丸器・碗	11.8	4.7	(5.7)	—	—	39	灰	ほぼ完存	全体的に歪みが顕著／暗文の有無観察不可能

(6) 井戸

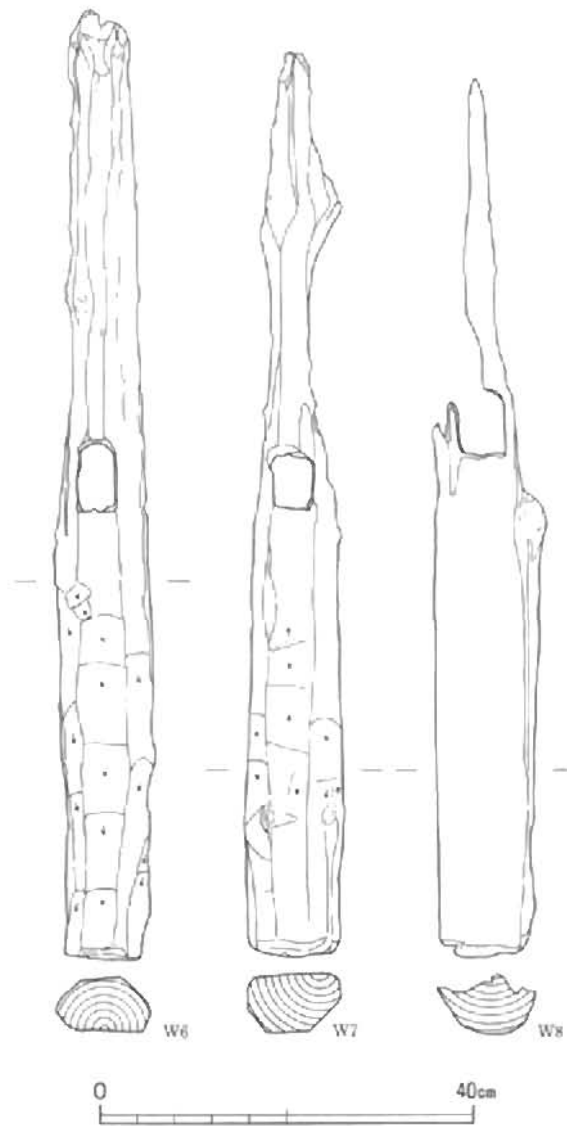
SE01

検出状況 I-1区の北東隅、SB02の北東約8mに位置している。西方より延びるSD02が接続するが、切り合い関係は確認できなかった。当遺構は、調査途中で崩落したため、詳細については不明とせざるをえない。

掘り方 掘り方は、短径126cm、長径147cmのいびつな円形を呈する。検出面からの深さは1.2mであり、砂礫層に達している。

井戸側 掘り方内に組まれた井戸側は、隅柱に固定した棧で縦板井戸側を支持するものであり、規模は一辺55cmである。棧は、隅柱に穿たれたほぞ穴の位置から、底より51～56cmの場所にあったことが判る。また、これに隣り合う辺のほぞ穴は確認できないため、さらに上方に存在したと思われる。

棧 極めて遺存状況の悪い棧が出土しているが、詳細の観察は行えず、また図化等も不可能であった。お



第207図 SE01井戸材

そらくより上方に位置していた棧であろう。

隅柱

遺存状況の悪い1点を除く3点を図化することができた。

ともに、直径約11cmの比較的小振りの心持ち丸太材を縦方向に二分したものを利用している。井戸の底に近い方は遺存状況が良好であったため、隅柱への加工方法が確認できた。二分した丸太材の内側すなわち芯側は割り面のままで大きな加工は施されていないが、樹皮に近い外側には先から元方向へ大きな単位で手斧による削りの痕跡があり、粗い加工のままである。

ほぞ穴は底より51~56cmの位置に確認されている。形は長方形であり、大きさは4×6cm程度を測る。

水溜

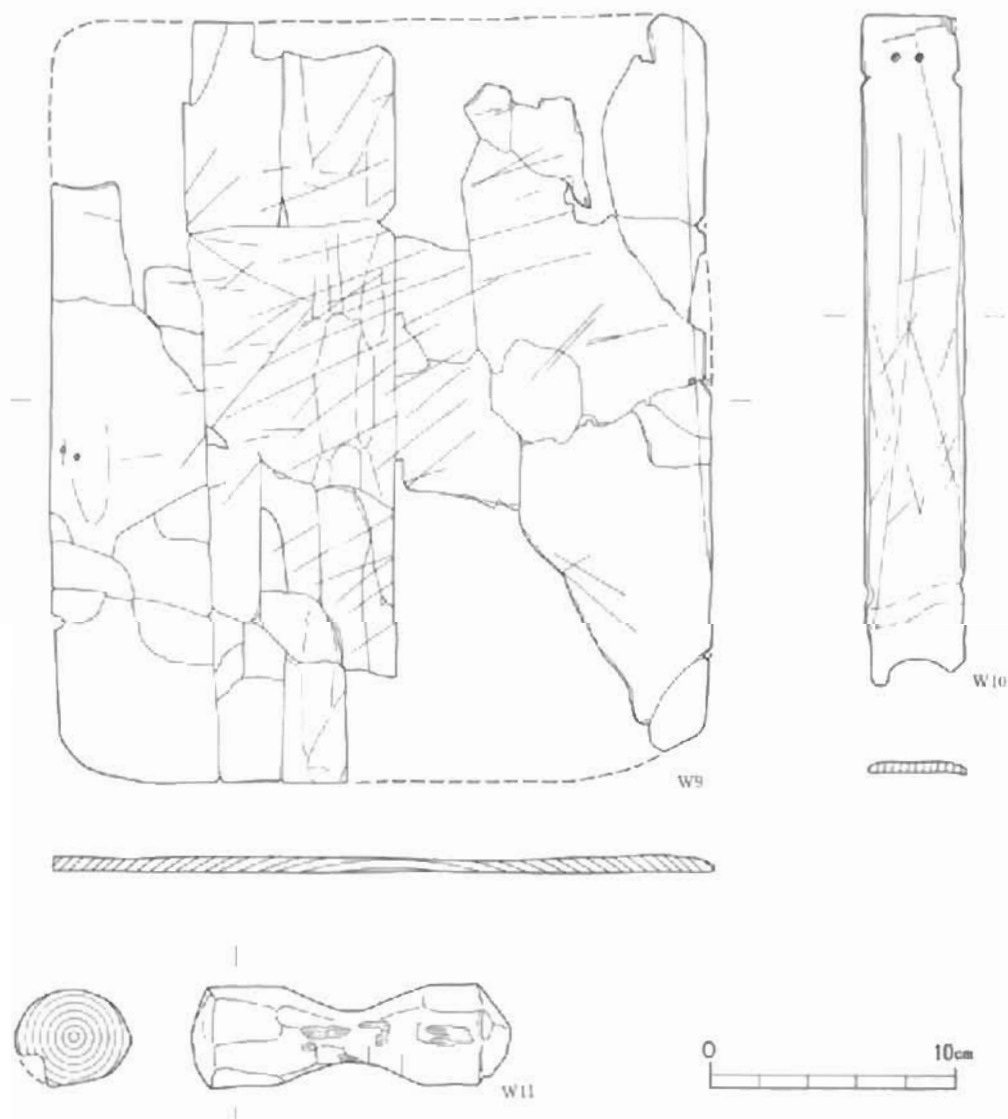
崩落のため、確認できなかった。

埋土

井戸側内の埋土については、下層の検討ができなかったが、上層は人為的に埋められたことが、地山のブロックの存在から判明した。

出土遺物

土器は確認できなかったが、折敷・木製鎌などの木製品が数点出土している。



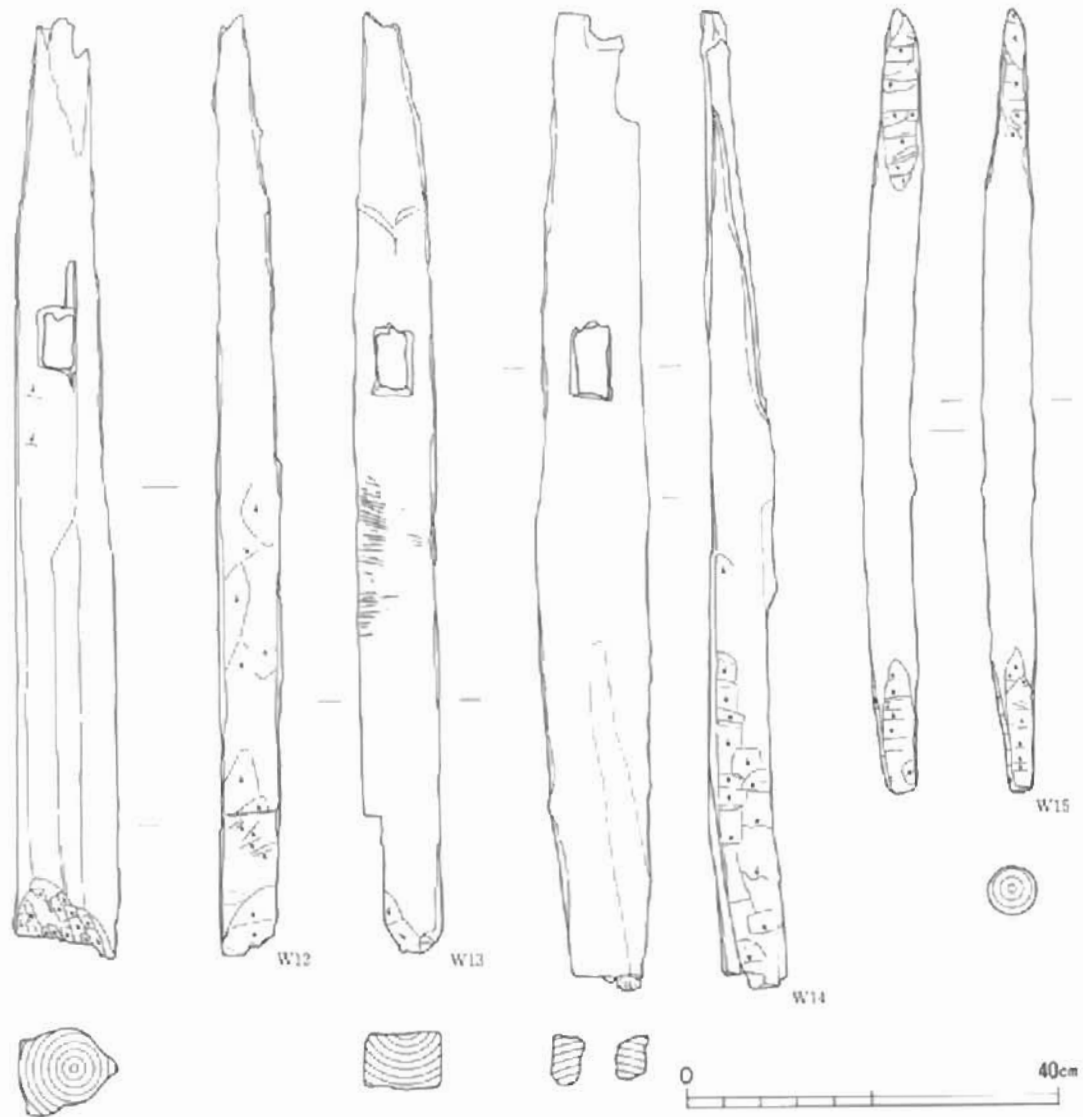
第208図 SE01出土木製品

第3節 1区の調査

- 折敷** 折敷の底板は、取り上げ時に細かく破損している。二葉マツの板目材を利用している。25.8×30.2cmの大きさであり、各辺の中央付近に、側板の接合のための小穴が設けられている。片面にのみ細かい刃の痕跡が多数認められる。
- 木製鏃** W11は、イスノキの心持ち材を利用しており、側面の周囲に樹皮が部分的に残存している。長さは13.0cmである。
- その他** W10は木札状の木製品である。上端に近い場所に切り込みを設け、その上方に2ヶ所の小穴を穿っている。一面には細かい刃あたりの痕跡が確認できる。残存する長さは26.9cmである。ヒノキの柾目板を利用したものである。
- 時期** 埋土の類似およびSE04との類似から、川除13～15期と考えられる。

SE02 (図版24・51)

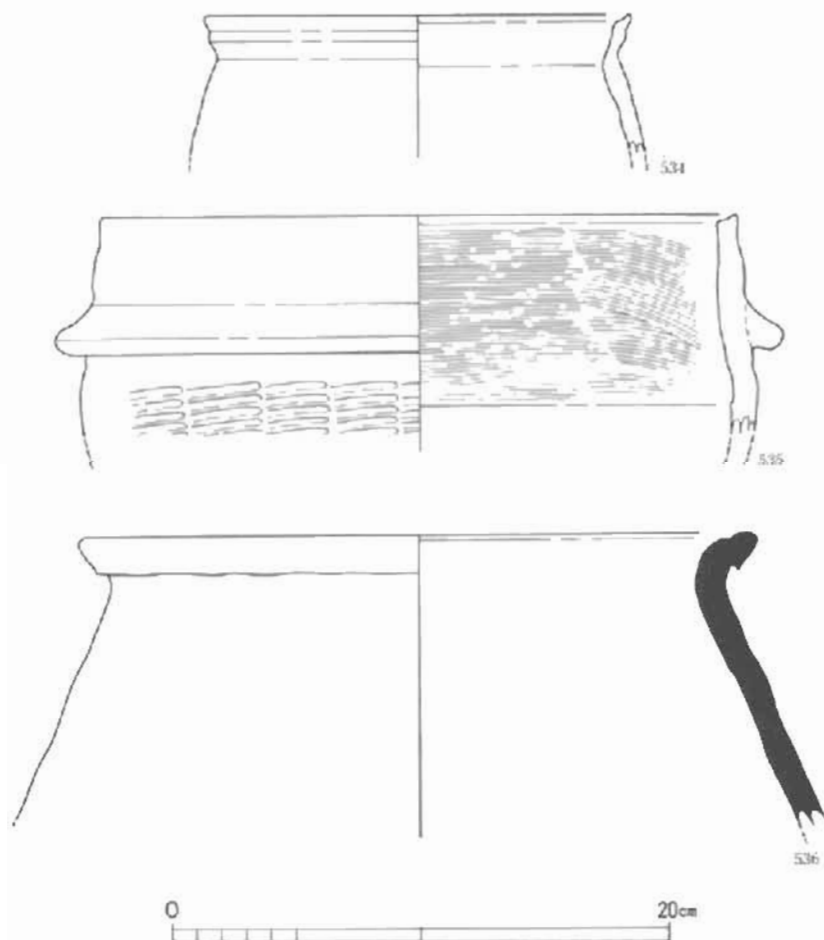
- 検出状況** 1-1区の北東部、SB01・02の中間北側に位置している。両建物からの距離はほぼ同じで、約3mを測る。SD04・SH02を切っている。当遺構は、調査途中に崩落したため、



第209図 SE02井戸材

詳細については不明である。

- 掘り方** 短径128cm、長径160cmの楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは1.48mであり、砂層に達している。
- 井戸側** 掘り方内に組まれた井戸側は、隅柱に固定した棧で縦板を支持するものであり、規模は一辺60cmである。棧は、両端を方形に削った心持ち材であり、隅柱に穿たれたほぞ穴の位置から、底より65cmの場所にあったことが判る。また、これに隣り合う辺のほぞ穴は確認できないため、さらに上方に存在したと思われる。
- 棧** 1点のみを図化した。心持ちの二葉マツの丸太材を利用したもので、隅柱のほぞ穴に挿入する部分は先端方向に向けて手斧で削り、横断面が長方形になるように加工が施されている。
- 隅柱** 残りの良い3点のみを図化した。木取りについては、心持ち材と、それを縦方向に二分したもの二者がある。ほぞ穴付近での横断面形は整った長方形を呈しているが、井戸の底に近い方は、大きな手斧痕の残る比較的粗い加工のままであり、横断面形の整わないものも含まれている。樹種はW12・W14がモミ、W13がヒノキである。
- 水溜** 崩落のため、確認できなかった。
- 埋土** 井戸側内の埋土は、下層の検討ができなかったが、上層は灰白色シルト質極細砂などの細粒の堆積物である。掘り方内の埋土には、部分的に拳大の礫を含んでいる。



第210図 SE02出土土器

第3節 1区の調査

出土遺物 井戸側内より、須恵器の甕、土師器の羽釜・鍋、丹波焼の甕などが出土している。土師器の甕(534)は体部外面に横方向のタタキを施したあと、ヨコナデを行っている。土師器の羽釜(535)の体部外面には横方向のタタキ、内面には横方向のハケメが認められる。丹波焼の甕(536)は、口縁端部直下内面に1条の凹線が巡っている。

時期 出土土器から川除15期と考えられる。

第76表 SE02出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	口径	口径	口径	口径	口径			
534	土師器・甕	116.8	口径5.5	—	116.0	—	—	褐灰～灰白	口縁部僅か	口縁部の一部に僅付着
535	土師器・羽釜	125.4	口径5.5	—	—	29.2	—	にじい色	1/2	外面以下に僅付着
536	丹波焼・甕	126.2	口径10.8	—	25.2	—	—	暗赤褐～赤褐	口縁部1/5	

SE03 (図版24)

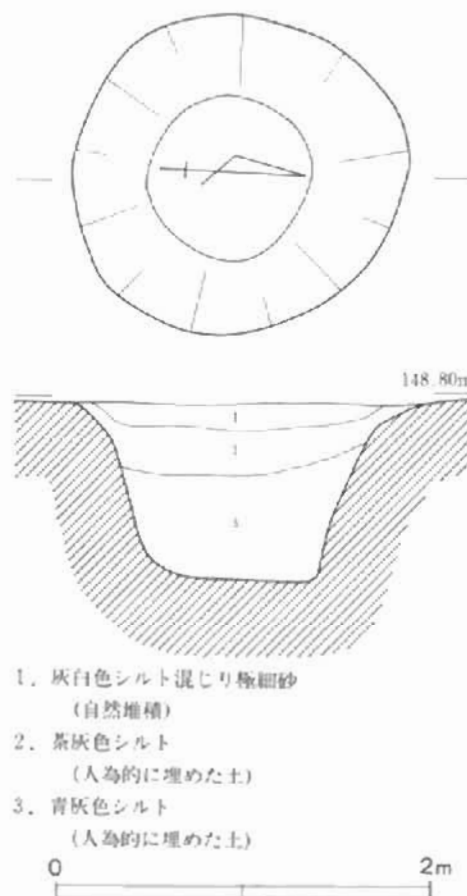
検出状況 1-1区の北東部、SB01・02の中間東寄りに位置している。SB01からの距離は約4mで、SB02からの距離は50cmである。SH02・06を切っている。

形状・規模 素掘りの井戸である。平面形は、直径175cmの円形である。検出面から底面までの深さは94cmを測る。崩壊している可能性があるが、断面形は逆台形である。

埋土 3層に分かれる。1層は自然堆積であり、2・3層は人為的に埋めた土であることが判った。

出土遺物 須恵器の椀が出土しているが小片であり、凶化等は不可能である。

時期 出土土器から川除13～15期と考えられる。



第211図 SE03

SE04

検出状況 1-1区の北東部、SB01の南約7mに位置する。SH08～SH11を切っている。本遺構も調査途中で崩壊したため、詳細は不明である。

掘り方 直径145cmの円形を呈する。検出面から底面までの深さは1.35mであり、砂礫層に達している。

井戸側 掘り方内に組まれた井戸側は、隅柱に固定した棧で縦板を支持するものであり、4本の隅柱を結ぶ範囲は一辺70cmの正方形を呈する。

隅柱

隅柱は心持ちのモミの丸太材を利用したものである。表面全体を削らず、棧を固定するほぞ穴を穿つ場所のみ平坦な面を削り出している。ほぞ穴には棧の端部が遺存する。

棧

南北両辺の棧は、底面から25cmと60cmの位置に2段確認でき、東西両辺の棧は、底面から36cmの場所に認められた。これらの棧は、心持ち材を方形に整形してこれを2分したもので、両端を横断面形が長方形になるように加工している。W18の樹種はモミである。

水溜

崩落のため確認できなかったが、当初より存在しなかった可能性が大きい。

埋土

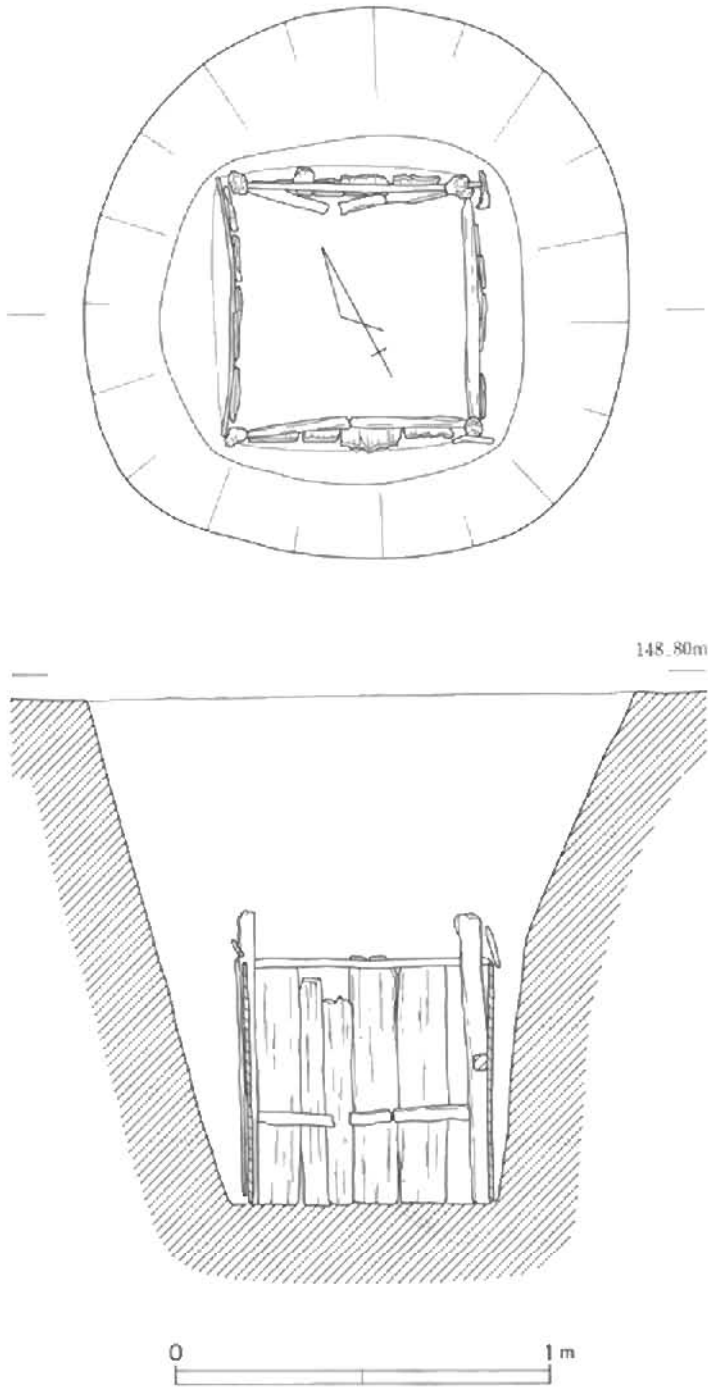
井戸側内の埋土は、人為的に埋めた土であり、掘り方内の埋土は、崩壊のため確認できなかった。

出土遺物

井戸側内の埋土より須恵器の椀、土師器の鍋などが出土している。

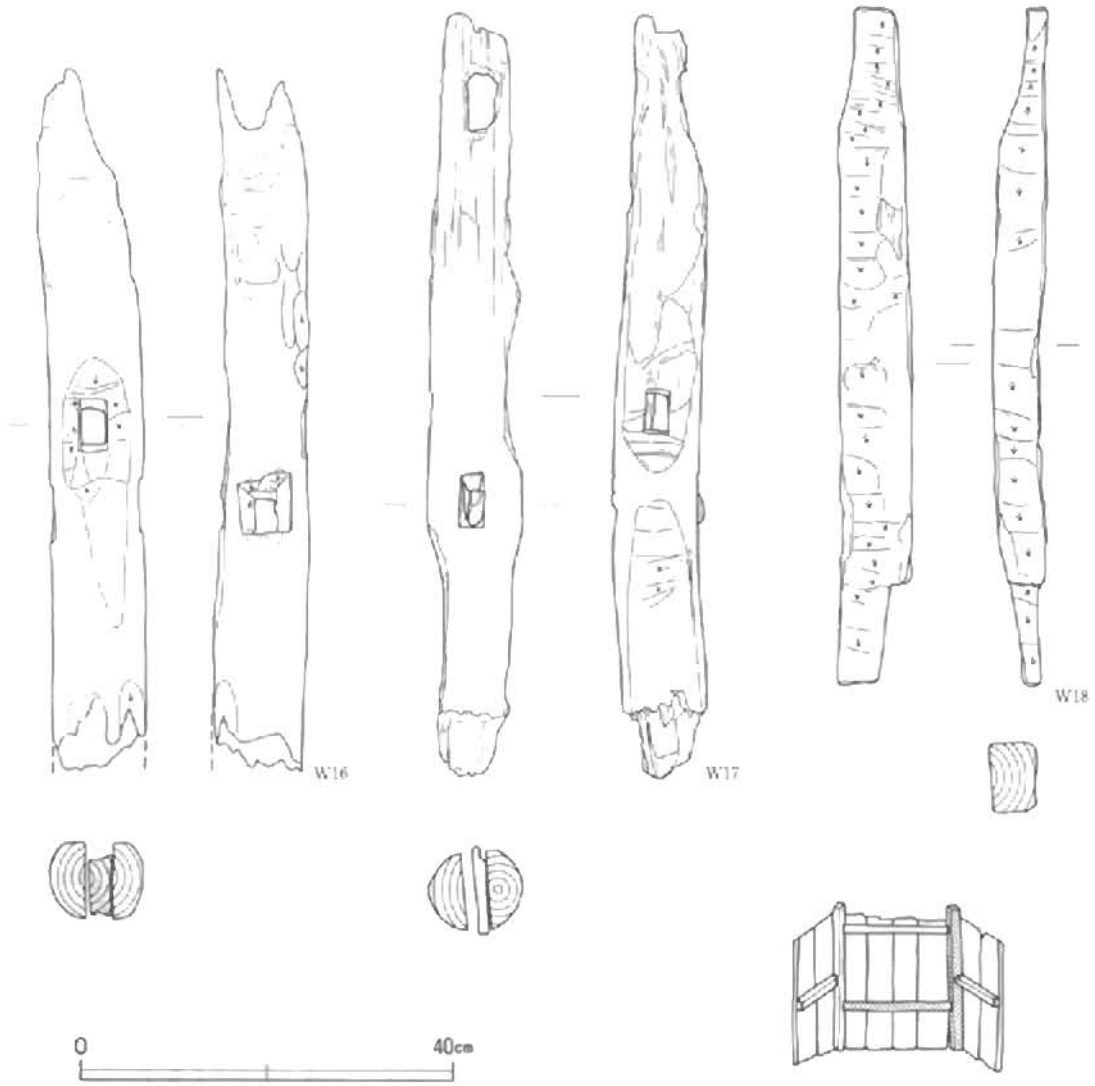
時期

出土土器から川除14期と考えられる。

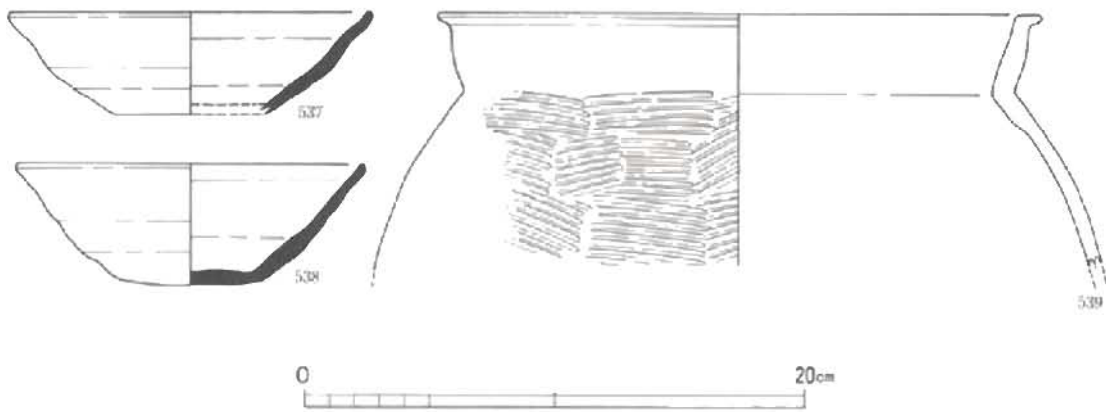


第212図 SE04

537は底部が欠失するが、538は底部の切離しには回転糸切りの手法が用いられていることが確認された。539は土師器の鍋である。体部の調整は、外面に水平方向のタキが、内面には同心円文の内面当て具の痕跡を丁寧にナデ消しており、口縁部との境付近には横方向のヘラナデが認められた。



第213図 SE04井戸材



第214図 SE04出土土器

第77表 SE04出土土器観察表

番号	部 種	容量 (ml)						色 調	残存状況	特 徴 ・ そ の 他
		口 径	器 高	底 径	胎 径	最大径	胎 数			
527	胴部 - 柄	114.4	5.0	15.8	—	—	34	灰	口縁部～体部1/2	砂粒を多く含む
528	胴部 - 柄	113.7	4.8	15.8	—	—	35	灰	完存	砂粒を多く含む
529	上部部 - 胎	124.0	幅10.0	—	122.0	—	—	黒黄	口縁部～体部1/6	内面に煮こぼれ付着・外面に煤付着



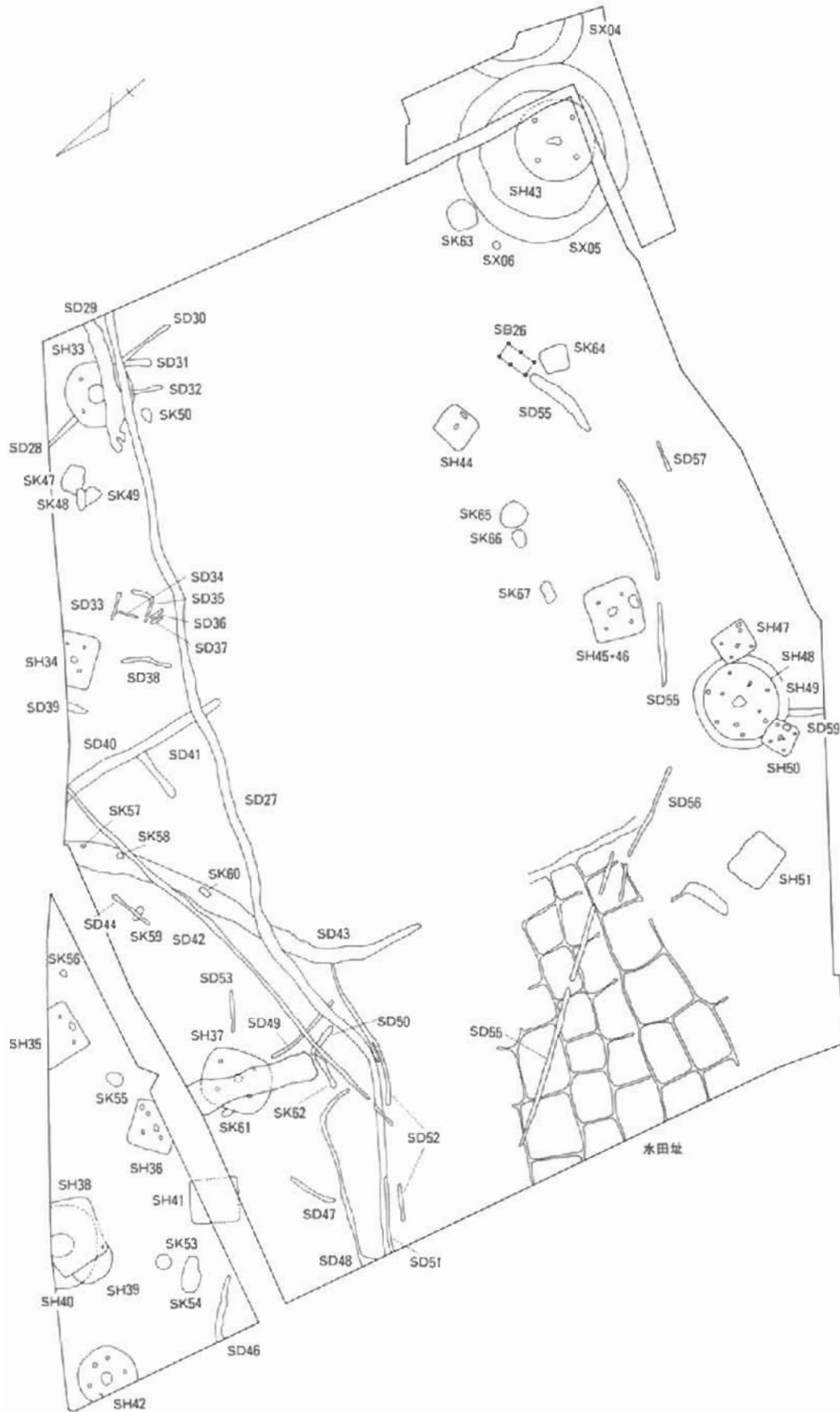
第215図 II区の遺構

第4節 II区の調査

1. 概要

- 位置** II区はI区とIII区にはさまれている調査区である。調査面積は約8000㎡である。
- 地形** II区は、その北側に存在する小微高地b、南側に存在する小微高地cという2つの小微高地とその間の低地で構成されている。
- 小微高地b**
- 弥生時代** この小微高地には弥生時代後期以前に遡る遺構は存在しない。しかし当小微高地の西端に当たるIII区の調査区内で、弥生時代中期の遺構が検出されている。弥生時代後期になると当小微高地は居住域として利用されるようになる。この時期の遺構としては竪穴住居跡10棟をはじめ溝・土壇等の多くの遺構が検出されている。
- 中世** 中世に居住域として利用されるまで遺構の存在は確認できない。中世の遺構は、小微高地の北西部に集中している。掘立柱建物3棟、土壇1基、井戸1基が検出されている。
- 小微高地c**
- 弥生時代** 当小微高地では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡8棟、円形周溝墓1基をはじめ溝、土壇等の遺構が検出されている。
- 中世** 中世になると掘立柱建物4棟をはじめ溝・土壇等が検出されている。
- 低地** 小微高地bと小微高地cとはさまれた低地は弥生時代後期以降に堆積が始まる。弥生時代に水田として利用されていたことが平面的に確認された。これ以降も水田として利用されていたようである。





第216図 II区弥生時代～古墳時代前期の遺構

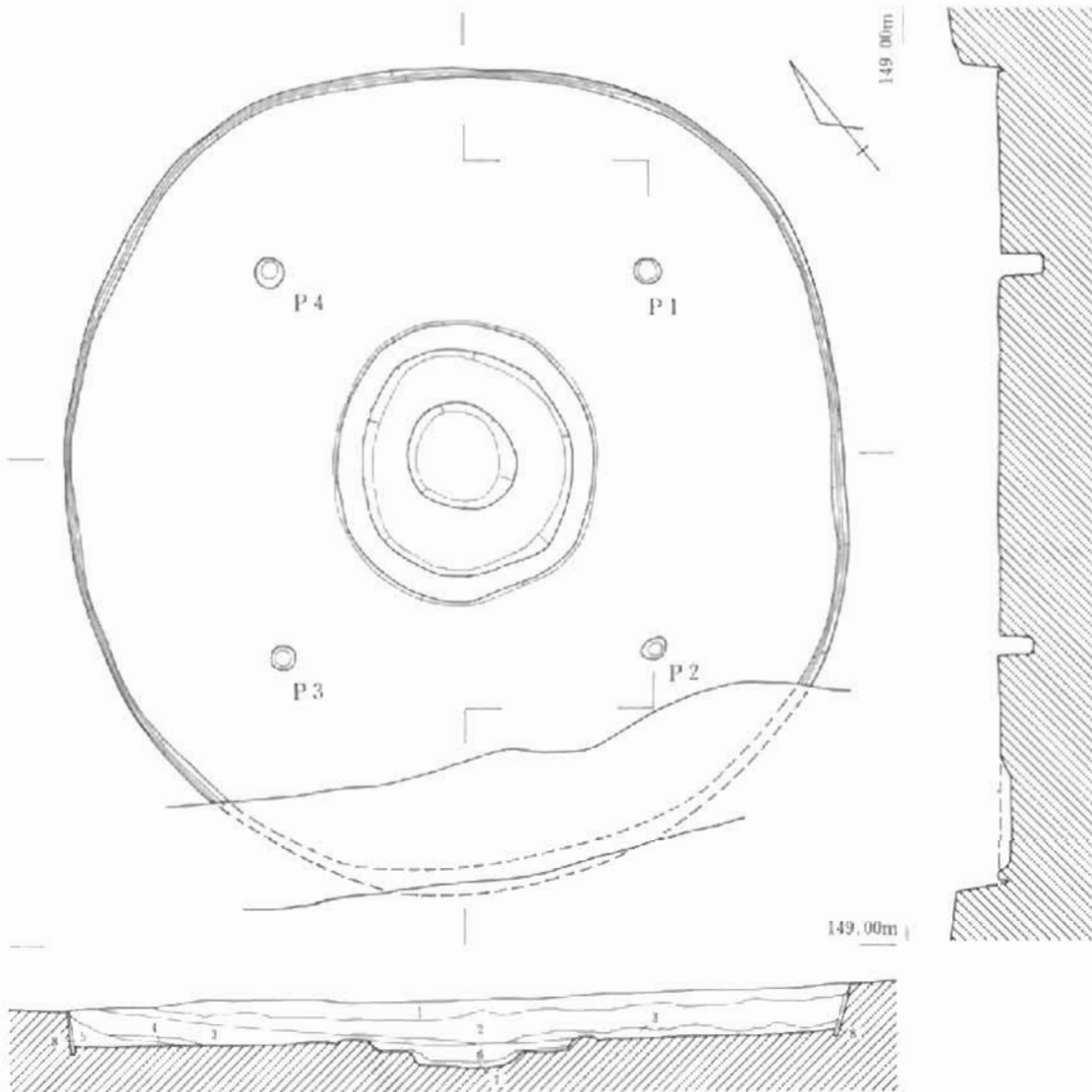
2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SH33 (図版60)

検出状況 II-2区の北東隅で検出された。SD27・SD29に切られている。

形状・規模 平面形は円形であるが、隅円長方形を指向する傾向も部分的に認められる。検出面における長径は6.40m、短径は6.70mを測る。検出面から床面までの深さは38cmで、床面の標高



- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 黄灰色砂混じりシルト | 5. 青灰色砂質シルト |
| 2. 淡青灰色シルト混じり砂質シルト
(下層に炭多量に集積) | 6. 淡黒灰色シルト混じり青灰色シルト
(炭若干含む) |
| 3. 青灰色シルト混じり砂質シルト
(下層に炭多量に集積) | 7. 炭層 |
| 4. 炭層 | 8. 黒灰色シルト (板壁炭) |

0 3m

第217図 SH33

は148.18mである。検出した床面積は32.7m²である。

埋土 5層に分けられるが、いずれもシルト層からなる。各層とも炭を多く包含しており、第4層については基本的に炭層であった他、第2層と第3層の下層に炭が多量に集積していた。

屋内施設 周壁溝・支柱穴・中央土壙を検出した。

周壁溝 S D27・S D29に切られている箇所以外は、周壁に沿って検出された。床面での幅4cmを測り、床面からの深さは5cmである。また溝底部における幅は3cmである。

なお、本住居跡内の土層断面の観察において、周壁溝からその上層部分にかけて、周壁に沿うようにより多くの有機質を含んだ幅約3cmのシルト層となっているのが観察できた。このシルト層は、一般の沖積地に立地する遺跡で木棺墓の木質部が腐朽した現象と同じものと考えられる。したがって、本住居跡で確認できたシルト層は、周壁溝が板壁を埋め込むためのものであったことの証左となるものと考えられる。

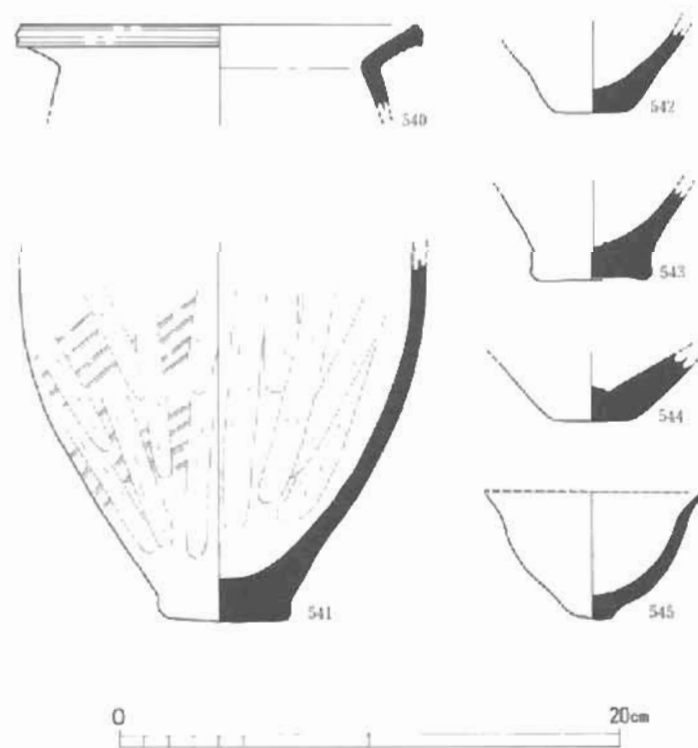
支柱穴 中央土壙の中央部が対角線の中心部になる位置で、4本の支柱穴を検出した。4本の支柱穴とも、掘り方内における柱の痕跡は確認できなかった。P1の掘り方の径は20cm、床面からの深さは33cmを測る。そしてP2はそれぞれ18cm、28cm、P3は19cm、46cm、P4は24cm、45cmである。また、支柱穴間の距離は、P1～P2間で3.00m、P2～P3間で3.05m、P3～P4間で3.12m、P4～P1間で3.10mである。

なおP3の底部から、下半部がほぼ完形の甕(541)が正立した状態で出土している。柱を抜いた後に掘り方内に置かれたものと考えられ、当時の地鎮の存在を示す資料と考えられる。

中央土壙 本住居跡のほぼ中央部で検出した。中央土壙は、周囲に土手を持ち、それに囲まれた中央部に二段に掘り

こまれている。土手は、地山を削り出して造ったもので、断面は蒲鉾形を呈する。基底部の幅24～32cmで、外縁部で径2.20mを測る。床面からの比高は約1～3cmである。

中央部の土壙は、0.84×0.92mとほぼ円形を呈し、土手内側のレベルからの深さは26cmである。本土壙内に



第218図 SH33出土土器

は土手内側から土壌底部にかけて約2cmの厚さで多量に炭の堆積が認められた。

土手を含めた中央土壌の面積は3.90㎡で、床面積に占める割合は12.1%である。

出土遺物 土器のみが出土している。器種としては、壺・甕・高坏・鉢が出土しており、甕が大半を占める。このなかで図化できたのは、甕と鉢の2器種だけである。

甕 図化したなかでは541がP3から出土しているのを除いて、全て埋土からの出土である。第2層・第3層と下層から出土している。

壺 広口壺の口縁部と底部が出土している。

高坏 坏部と脚部がそれぞれ出土している。坏部は、口縁部が短く外反するもので、本住居跡の時期を考えるうえで指標となるものと考えられる。

鉢 図化した土器は、埋土上層から出土したものである。

時期 主に出土遺物から、川除3期と考えられる。

第78表 SH33出土土器観察表

番号	器種	容量 (ml)	器 型	色調	残存率	備考
540	甕	口径 : (16.2) 底径 : 器高 : 残3.4 胴径 : 12.9 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、口縁部曲線内縁 内面 : 口縁部ココナテ	外面 : 黒褐 内面 : 浅黄褐	口縁部1/9	
541	甕	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残14.2 胴径 : 体部径 : 16.1	外面 : 体部2cmタナキ、内外面一様ヘラナテ 内面 : 体部曲ヘラナテ	外面 : 黒褐 内面 : 浅黄褐	底部定存 体部約1/3	
542	甕	口径 : 底径 : 7.8 器高 : 残3.3 胴径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 増減のための調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部定存 体部わずか	
543	甕	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残3.6 胴径 : 体部径 :	外面 : 底部ユビヤサス、ヘラナテ、ハケ 内面 : ヘラナテ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部定存	
544	甕	口径 : 底径 : 3.4 器高 : 残2.7 胴径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 増減のための調整不明	外面 : 赤灰 内面 : 灰黄	底部定存	
545	鉢	口径 : (8.4) 底径 : 1.6 器高 : 5.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、体部雑な不定方向ナテ 内面 : 口縁部ココナテ、体部雑な不定方向ナテ	外面 : 浅黄 内面 : 浅黄	口縁部1/6 他は元存	

SH34 (図版61・80～82・89)

検出状況 SH33の西約21mに位置し、小段高地bに立地する。本住居跡の北側の一部は調査区外となり、検出できたのは全体の約1/2強である。他の遺構との切り合い関係はない。

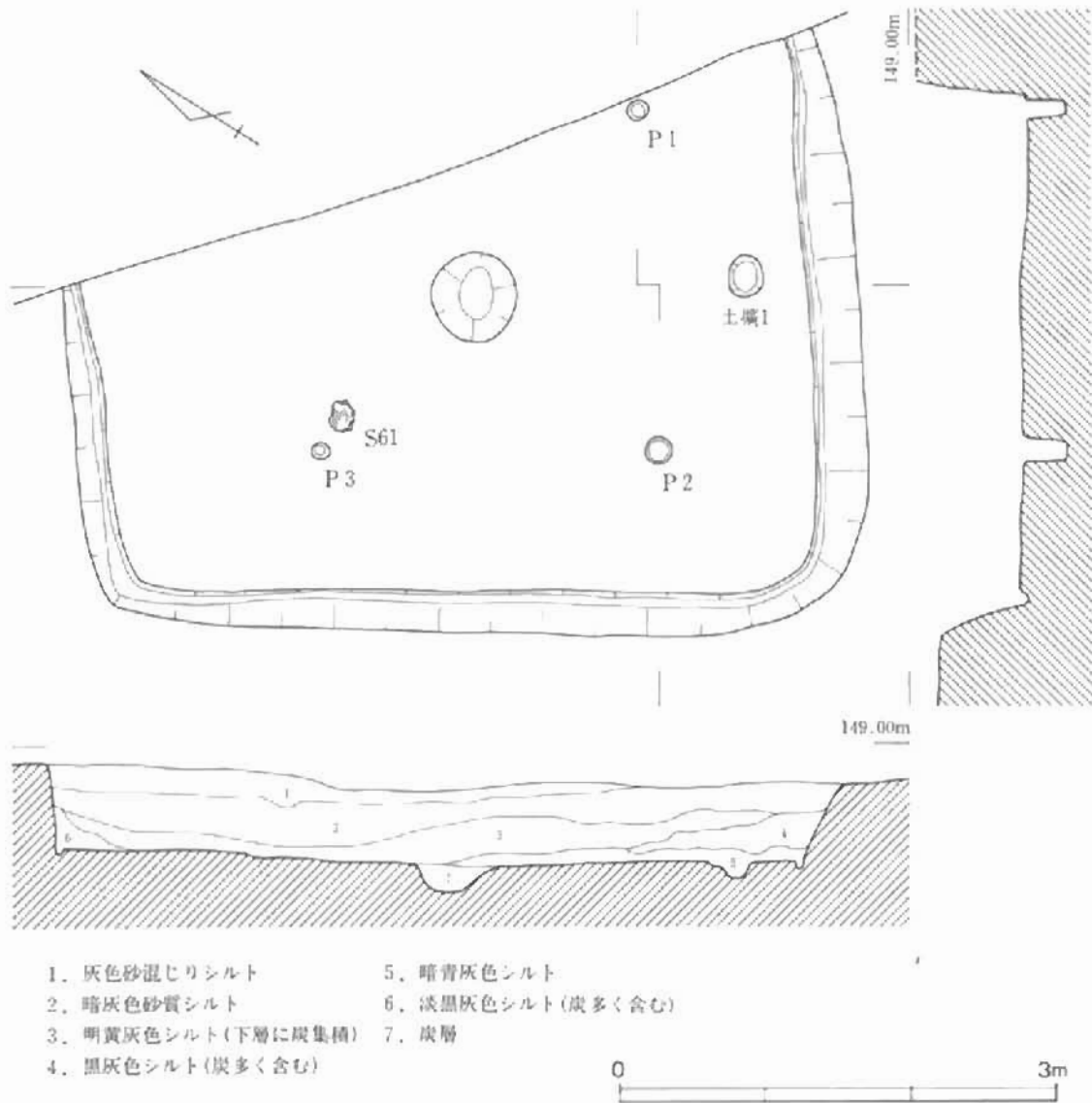
形状・規模 一辺約5mの方形と推定される。検出面からの深さは50cmであるが、北側の調査区壁での断面観察によると約70cmを測り、本遺跡で検出した住居跡のなかで最も良好に遺存していた住居跡である。床面での標高は148.20mである。検出した床面積は13.29㎡である。

埋土 6層に分けられる。基本的にシルト層からなる。第3層の下層に炭の集積が認められた他、第4層と第6層に多量に炭片が包含していた。

屋内施設 周壁溝・支柱穴・土壌・中央土壌を検出した。

周壁溝 床面における幅は5cmで、床面からの深さは8cmを測る。周壁溝の底における幅は3cmである。

中央土壌 住居跡のほぼ中央部で検出した。径0.6mのほぼ円形を呈し、床面からの深さは18cmである。床面における面積は0.28㎡である。土壌内には多量の炭が含まれていた。



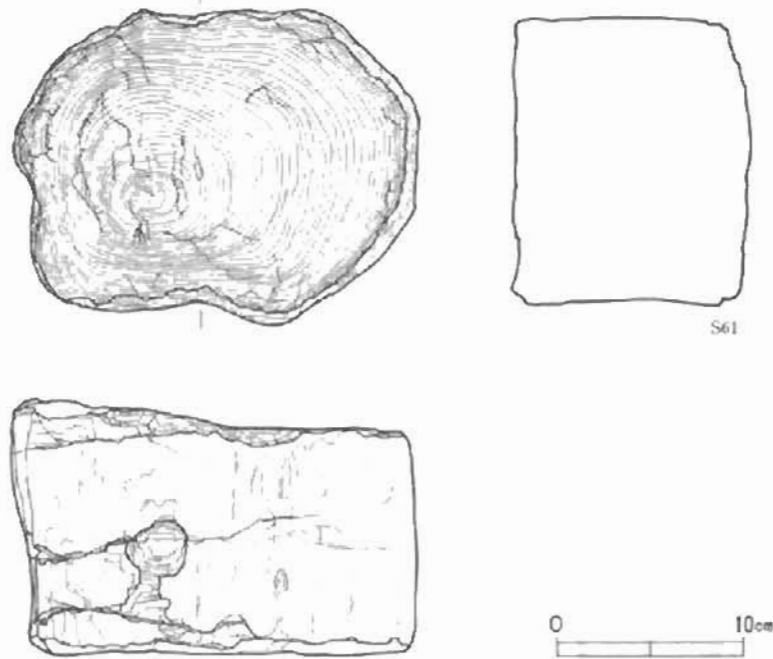
第219図 SH34

主柱穴 3穴検出した。住居跡の規模からして、本来は4穴あったものと推定される。各柱穴とも、掘り方内において柱痕を確認することはできなかった。P1は、掘り方の径は13cm、床面からの深さは22cmを測る。P2はそれぞれ18cm・23cm、P3は14cm・22cmである。また、P1～P2間の距離は2.32m、P2～P3間の距離は2.37mである。

土溝1 P1とP2を結ぶラインのほぼ中間部の周壁側で検出した。平面形は楕円形を呈し、床面における長径は30cm、短径は25cmを測る。床面からの深さは10cmである。中央土溝同様、大量の炭が含まれていた。

台石 P3の東約25cmの位置で、床面直上から出土している。珪化木を輪切りにして転用したものである。上面周縁部には、珪化木本体を叩き割ろうとした痕跡が認められる。また、側面においても、叩き割る際の割り付け痕が認められる。そして、上面は広範囲に使用したようで、全面に光沢が認められる。この使用痕から、台石として使用したものと考えている。

平面はやや不整形な楕円形を呈し、長径で20cm、短径で14cmを測り、厚さは12cmである。



第220図 S H34出土台石

三田盆地南西丘陵部の神戸層群より産出される珪化木と推定される。

出土遺物 土器・鳥形土製品・石器が出土している。

出土状況 土器は、他の住居跡と比べて多く出土しており、壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している。量的には甕が最も多く出土している。多くは床面直上からは原位置を保った状態で出土している。(第221図)特に、中央土壇・P3周辺・土壇1の東側周壁溝周辺の3ヶ所に集中して出土が認められる。また、下層・中層出土として取り上げた土器片についても、床面直上出土の土器片と接合した例も少なからず認められたことから、基本的には本住居跡にともなう土器と考えられる。

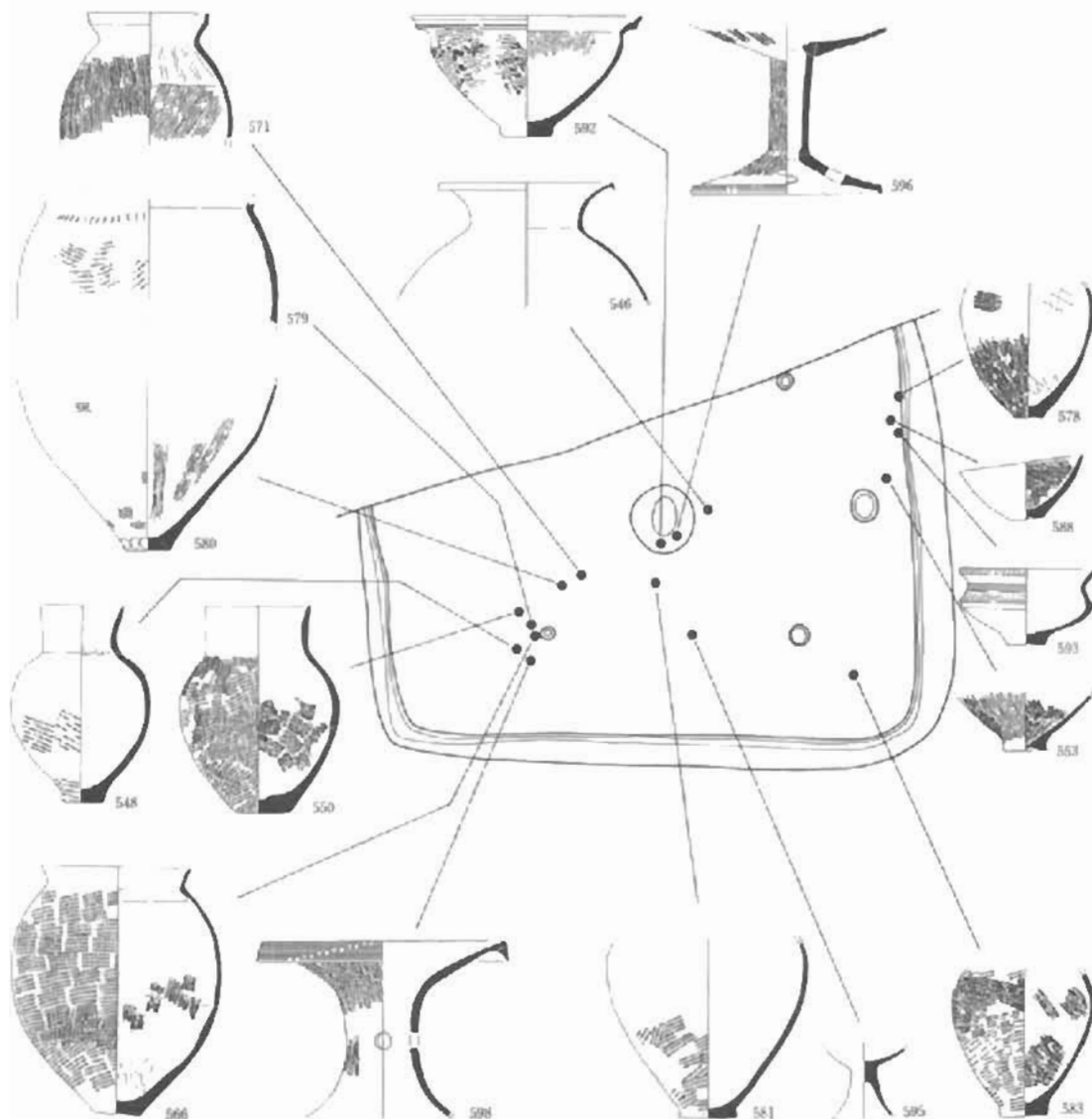
壺 広口壺・直口壺・長頸壺・無頸壺・底部などが出土している。特に、直口壺・長頸壺が目立つ。いずれもタタキ成形を基本としているが、仕上げは丁寧とはいえず、タタキ目が多く残存している。

この他に、二条の凸帯を持ち凸帯に刻み目を施す体部片も出土している。547・554・555・557・558を除いては床面直上から出土している。

甕 口縁部の形態から2つに分類できる。

ひとつは、口縁部を「く」字状に外反させるV様式系甕で、体部外面はタタキ成形後ハケ調整を基本としている。ただし、内面の調整についてはハケ調整で仕上げるものと、ヘラ削り調整で仕上げるものとが認められる。なお566は、外面調整において、横方向を主体としたタタキ成形後部分的に縦方向のタタキも施されている。

もう一つのタイプは、複合口縁を有するもので、丹波地方によくみられる形態のものである。外面はハケ調整、内面はヘラ削り調整を基本としている。ただし、直接当該地方か



第221図 SH34土器出土位置

ら搬入されたと考えられる土器はほとんど認められない。

561・574は柱穴から出土している。この他563・564・567・570・575・576・583・584・585は中層～上層にかけて出土しているが、他の土器は全て床面直上からの出土である。

鉢 小型と中型のものが出土している。また、図化できなかった大型の破片も出土している。これらの鉢のなかで最も注目されるのが、593の近江系の鉢が床面直上で出土していることである。本遺跡はもちろんのこと、当地域においても初めて出土である。胎土分析（第4章第5節）によると産地は特定できないが、在地とは異なる特徴を示している。

592が上層で出土している以外は、全て床面直上での出土である。

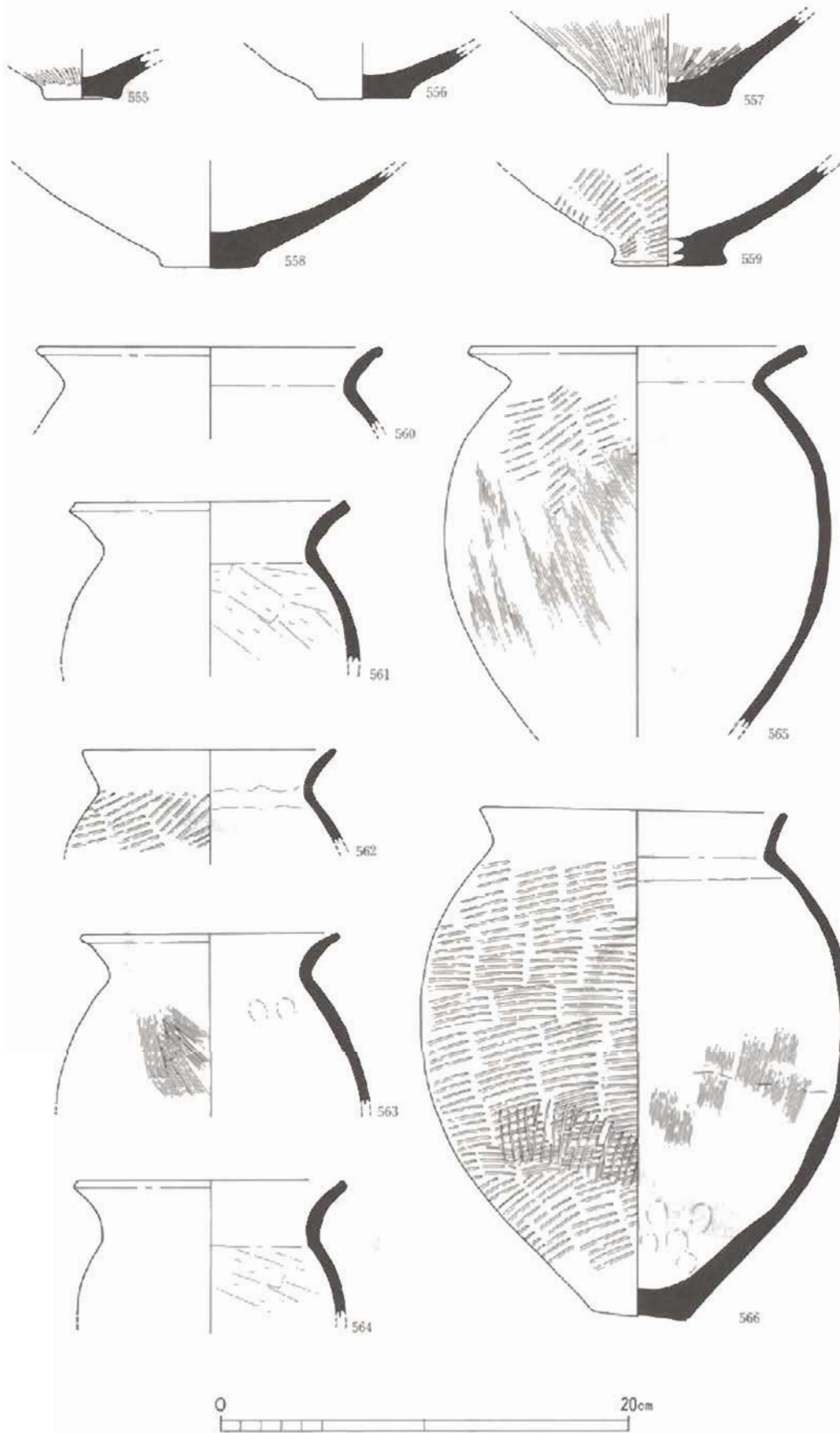
高坏 図化できたのは4個体である。坏部が坏形となるもの（594）と、碗形になるもの（595）の2タイプが認められる。597をのぞいては床面直上からの出土である。

器台 図化できたのは2個体分であるが、他に数個体分の破片も出土している。598は床面直上から出土しているが、599は埋土下層からの出土である。

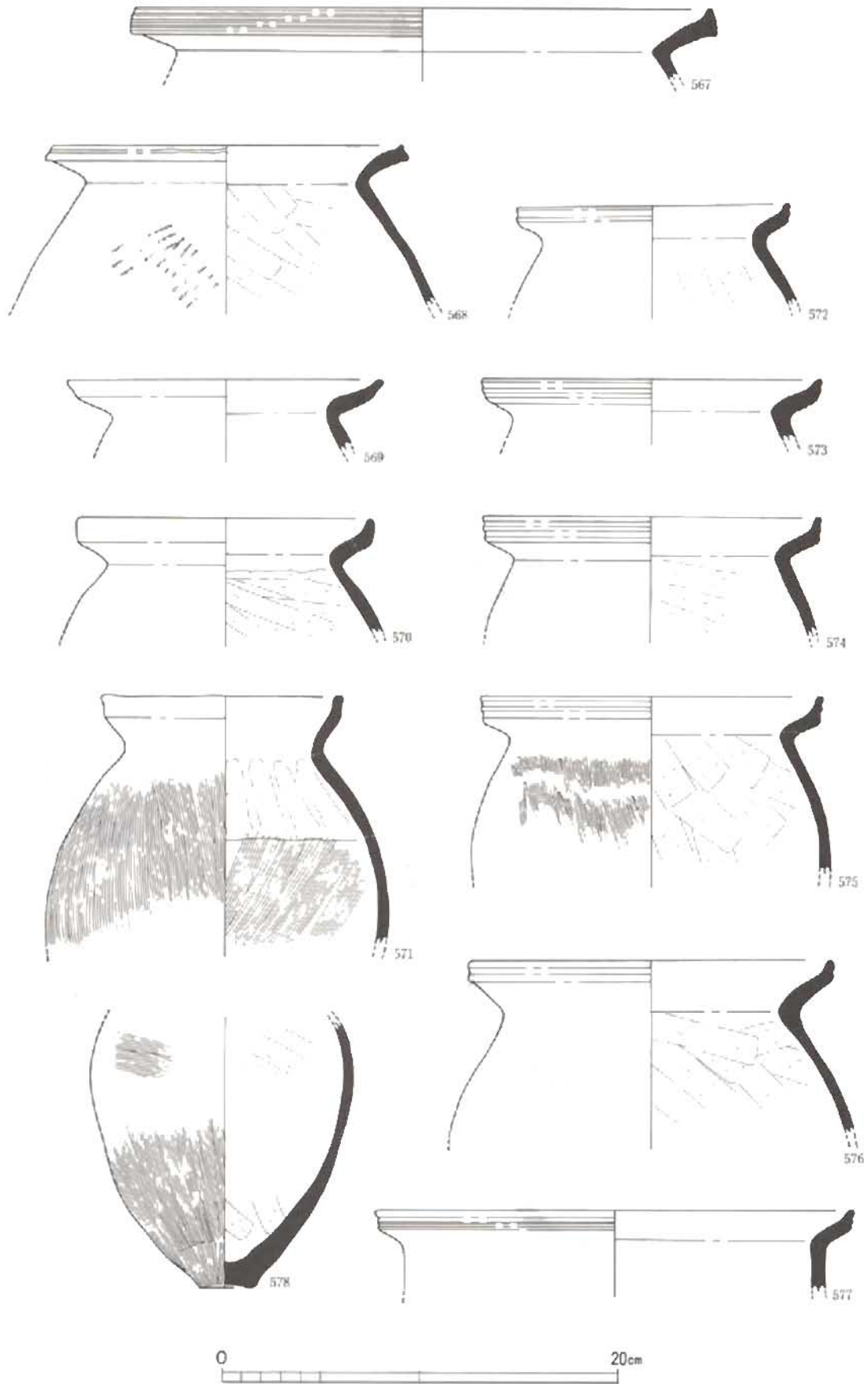


第222図 SH34出土土器(1)

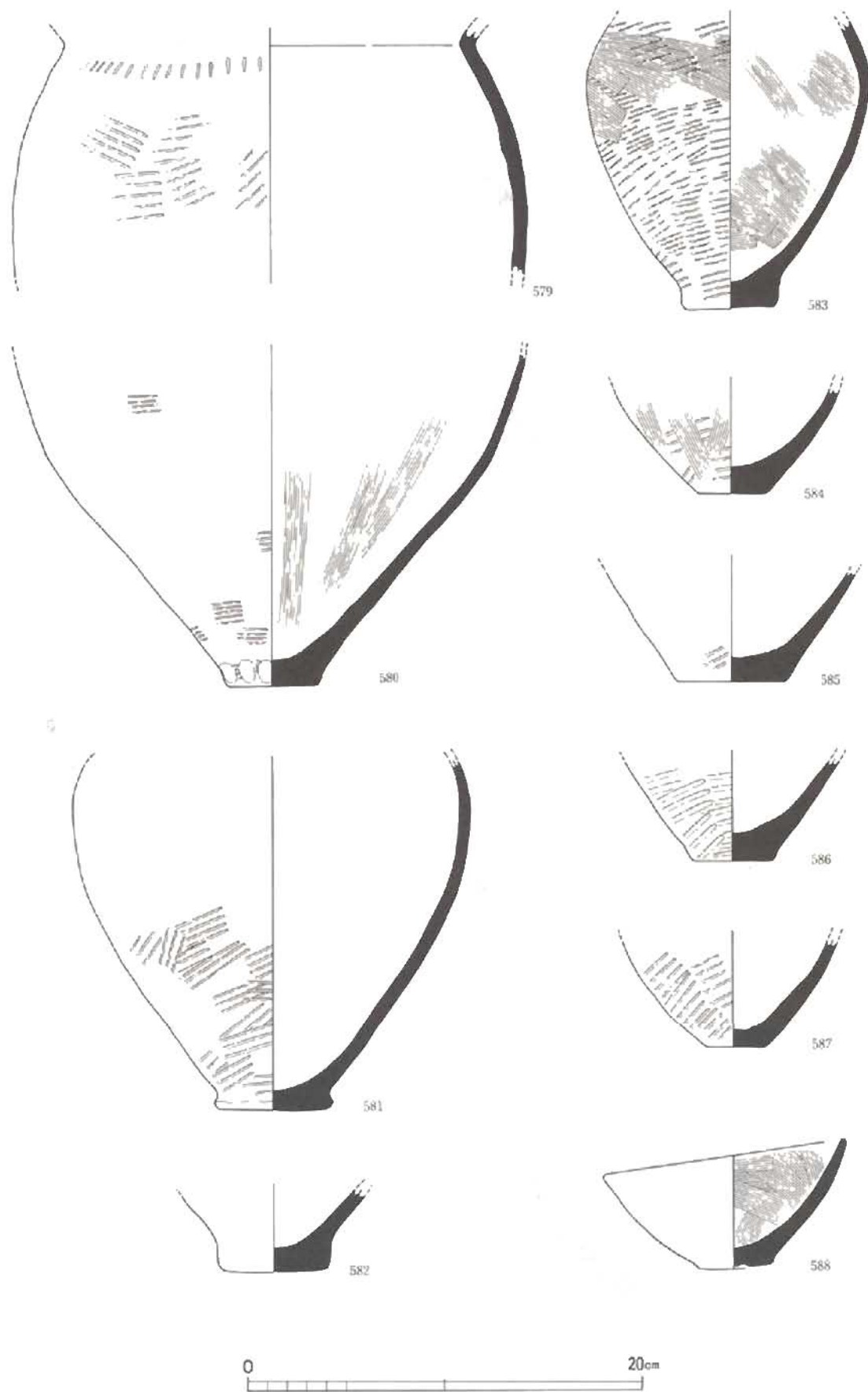
第4節 II区の調査



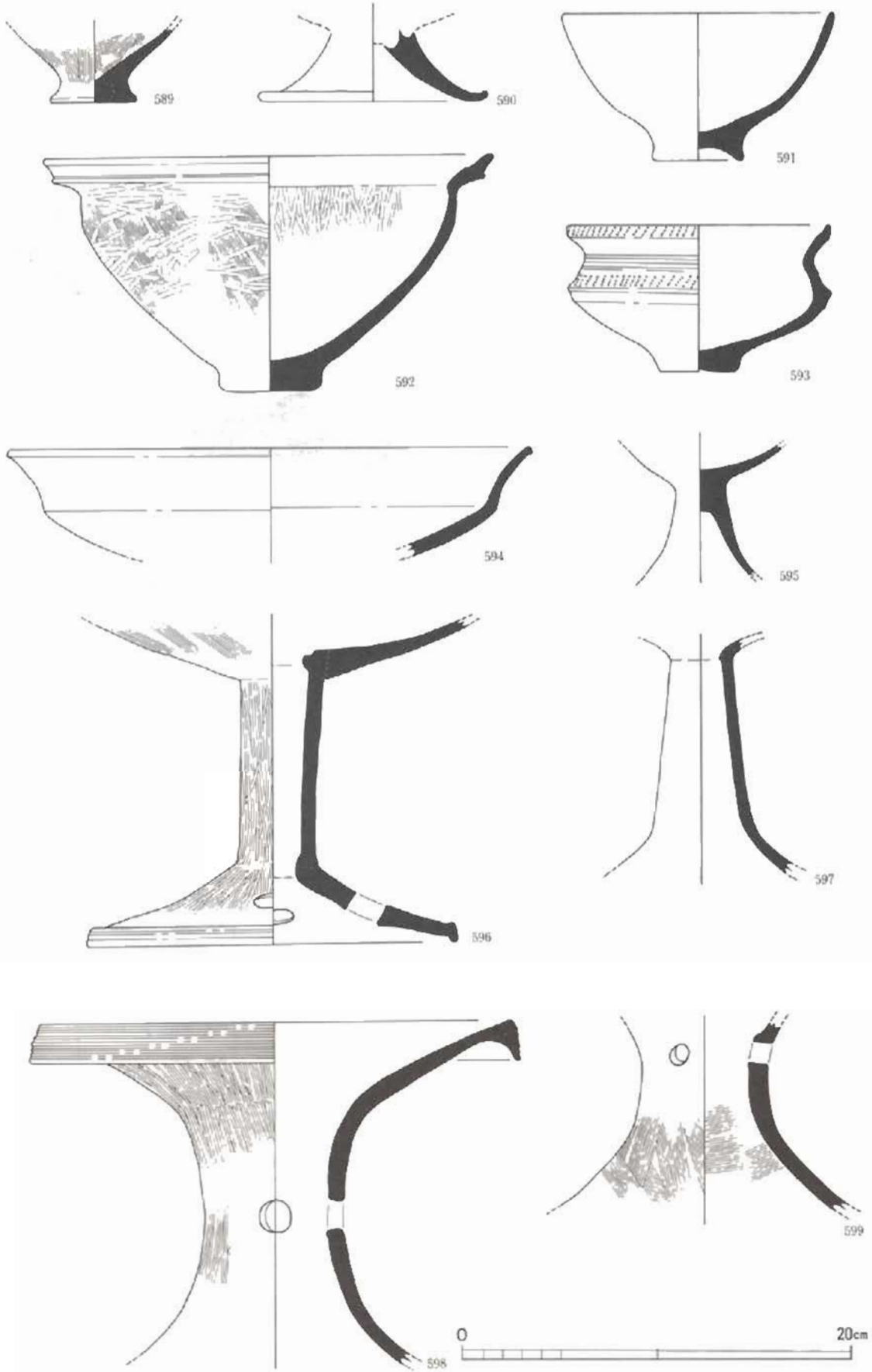
第223図 SH34出土土器(2)



第224図 SH34出土土器(3)



第225図 SH34出土土器(4)



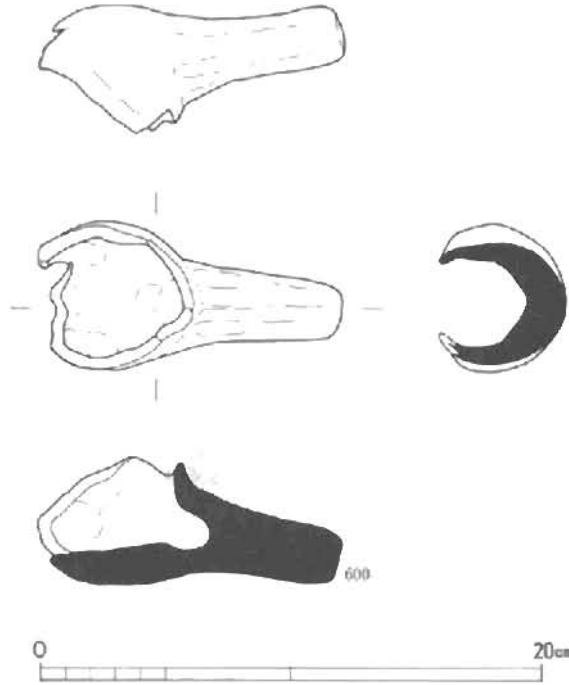
第226図 SH34出土土器(5)

第4節 II区の調査

鳥形土製品 床面直上より出土している。

尾部は完存しているが、体部から頭部にかけて欠損しており、全体を押し量ることは困難である。尾部は中実で円筒形を呈し、径は2.40cmである。体部は手捏ねにより成形され、容器状に仕上げられている。このことから当土製品は、鳥形土製品というより鳥形容器とすべきかもしれない。

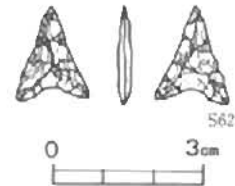
体部における最大幅は6.00cm、高さは5.10cmである。残存長は12.20cmである。



第227図 S H34出土鳥形土製品

石器 石鏃が1点出土している。円基式に分類されるもので、鏃長1.9cm、基幅1.5cmを測り、厚みは中央鏃部で0.2cmである。重さは0.5gである。サヌカイト製。

時期 床面直上出土土器を中心に考えると、川除3期と考えられる。



第228図 S H34出土石器

第79表 S H34出土土器観察表(1)

番号	器種	注記 [cm]	調査	色調	残存率	備考
546	壺	口径 17.2 底径 11.8 器高 11.8 胴径 11.2 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、体部上位一部破ヘラシケキ残る 内面 口縁部ヨコナデ、他は磨滅のため調整不明	外面：淡橙 内面：灰白	口縁部～体部約3/4	
547	壺	口径 19.0 底径 14.5 器高 19.0 胴径 15.1 体部径	外面 全面に巾3mm破ヘラシケキ、のち口縁部ヨコナデ 内面 体部粗いヨコナデ、頸部タテナデ、のち口縁部ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	口縁部～体部約1/6	
548	壺	口径 8.2 底径 4.4 器高 19.6 胴径 7.9 体部径 14.0	外面 口縁部～頸部ヨコナデ、体部3条/cmタテキ、のち底部ナデ 頸部接合痕 内面 口縁部～頸部ヨコナデ、頸部、体部接合部エビオサエ	外面：黄橙 内面：黄橙	ほぼ完存	
549	壺	口径 11.3 底径 4.8 器高 24.5 胴径 8.9 体部径 16.6	外面 口縁部粗いヨコナデ、頸部～体部破ヘラシケキ、高部エビオサエ、部分的にタテハケのちシケキ残る 内面 口縁部粗いヨコナデ、頸部エビオサエ、体部右ムヘラシケキ	外面：にじい 黄橙 内面：淡黄	体部一部欠損はほぼ完存	ミス付属
550	壺	口径 10.4 底径 5.7 器高 20.6 胴径 10.2 体部径 16.1	外面 口縁部～頸部ヨコナデ、体部～底面2条/cmタテキ、のち7条/cmタテハケ 内面 口縁部～頸部ヨコナデ、体部8条/cm立リハケ	外面：灰白 黒 内面：灰白	ほぼ完存	
551	壺	口径 11.4 底径 7.5 器高 17.5 胴径 10.8 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、頸部7条/cmタテキ、のち7条/cmタテハケ 内面 口縁部ヨコナデ、頸部7条/cmヨコハケ	外面：灰白 内面：淡黄	口縁部～体部約2/5	
552	壺	口径 4.6 底径 4.6 器高 4.6 胴径 4.6 体部径	外面 体部に2段の突帯を貼り付ける。周み目文 内面 磨滅のため調整不明	外面：灰白 内面：灰白	わずか	

第80表 SH34出土土器観察表(2)

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
553	壺	口径 底径:4.2 器高 残5.5 頸径 体部径	外面:体部5条/cmタテハケ 内面:底部7条/cmヨコハケ, のち体部10条/cmタテハケ	外面:淡黄 内面:灰白	底部~体部 下位はほぼ 完存	
554	壺	口径 底径:4.5 器高 残3.5 頸径 体部径	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 }	外面:橙 内面:灰黄褐	底部完存 体部わずか	
555	壺	口径 底径:3.7 器高 残2.1 頸径 体部径	外面:体部巾2mm縦ヘラミダキ, 底部エビオサエ 内面:底部ナデ	外面:灰白 内面:灰白	底部完存 体部わずか	
556	壺	口径 底径:4.6 器高 残2.5 頸径 体部径	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 }	外面:にふい 赤橙 内面:灰白	底部完存 体部わずか	二次焼成
557	壺	口径 底径:6.0 器高 残4.4 頸径 体部径	外面:体部~底部巾2mm縦方向ヘラミダキ 内面:9条/cm縦方向のち縦方向ハケ	外面:灰白 内面:黄灰	底部完存 体部わずか	
558	壺	口径 底径:5.0 器高 残4.7 頸径 体部径	外面:体部~底部ヘラミダキ 内面:磨滅のため調整不明	外面:暗灰橙 内面:淡黄	底部完存 体部わずか	
559	壺	口径 底径:3.6 器高 残4.6 頸径 体部径	外面:体部~底部3条/cmタテキ 内面:ナデ	外面:灰 内面:灰黄	底部2/3 体部わずか	
560	甕	口径:(16.5) 底径: 器高 残4.0 頸径:(14.3) 体部径:	外面:口縁部ヨコナデ, 以下は磨滅のため調整不明 内面:口縁部ヨコナデ, 以下は磨滅のため調整不明	外面:灰白 内面:灰白	口縁部~体 部の1/8	
561	甕	口径:(13.2) 底径: 器高 残7.8 頸径:(10.4) 体部径:(11.6)	外面:口縁部ヨコナデ, 体部一部ハケ残る 内面:口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミダキ	外面:灰白 内面:灰白	口縁部~体 部の1/3	
562	甕	口径:12.2 底径: 器高 残4.8 頸径:10.5 体部径:	外面:口縁部フコナデ, 体部3条/cmタテキ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部ナデ	外面:淡黄 内面:淡黄	口縁部3/4 体部わずか	
563	甕	口径:(12.4) 底径: 器高 残8.3 頸径:9.9 体部径:	外面:口縁部ヨコナデ, 体部10条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部ナデ	外面:灰白 内面:灰白	口縁部~体 部の1/8	
564	甕	口径:(13.0) 底径: 器高 残6.5 頸径:(10.6) 体部径:	外面:口縁部ヨコナデ, 他は磨滅のため調整不明 内面:口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミダキ	外面:灰白 内面:灰白	口縁部~体 部の1/4	
565	甕	口径:(16.2) 底径: 器高 残18.4 頸径:(12.4) 体部径:18.8	外面:口縁部ヨコナデ, 体部3条/cmタテキ, のち細かいナデ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部ナデ	外面:明褐 内面:淡黄	口縁部1/6 体部1/2	
566	甕	口径:(14.6) 底径:4.7 器高 残25.1 頸径:(13.8) 体部径:(21.1)	外面:口縁部ヨコナデ, 体部3条/cmタテキ, 底部ヘラミダキ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部 部9条/cmタテハケ, 底部エビオサエ	外面:にふい 橙 内面:黒褐	口縁部1/8 体部1/2 底部完存	
567	甕	口径:(28.9) 底径: 器高 残3.7 頸径:(24.9) 体部径:	外面:口縁部巾1cmの縦割線, 他は磨滅のため調整不明 内面:磨滅のため調整不明	外面:淡黄橙 内面:にふい 橙	口縁部1/8 以下	
568	甕	口径:(17.5) 底径: 器高 残8.1 頸径:(14.3) 体部径:	外面:口縁部縦割線, 口縁部ヨコナデ, 体部タテキのちナデ 内面:口縁部ヨコナデ, 右へラミダキ	外面:灰白 内面:灰白	口縁部~体 部の1/8	
569	甕	口径:(15.7) 底径: 器高 残3.7 頸径:(11.4) 体部径:	外面:口縁部ヨコナデ, 他は磨滅のため調整不明 内面:口縁部ヨコナデ, 磨滅のため調整不明	外面:明褐 内面:灰白	口縁部~体 部の1/4	スス付着
570	甕	口径:(14.7) 底径: 器高 残5.8 頸径:(11.9) 体部径:	外面:口縁部ヨコナデ, 他は磨滅のため調整不明 内面:口縁部ヨコナデ, 右へラミダキ	外面:淡黄 内面:灰白	口縁部~体 部の1/4	
571	甕	口径:12.1 底径: 器高 残12.5 頸径:10.0 体部径:(17.3)	外面:口縁部ヨコナデ, 体部8条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部上段エビオサエ, 中位以下8条/cmタテハケ	外面:灰白 内面:にふい 橙	口縁部~体 部の3/4	スス付着
572	甕	口径:13.6 底径: 器高 残5.1 頸径:(11.2) 体部径:	外面:口縁部縦割線, 口縁部ヨコナデ, 体部不定方向ナデ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部縦割線	外面:灰白 内面:灰白	口縁部5/11 完存 体部わずか	スス付着

第81表 SH34出土土器観察表(3)

番号	器種	法量 (cm)	調査	色調	残存率	備考
573	甕	口径 : (17.0) 底径 : 器高 : 残3.0 胴径 : (14.1) 体部径 :	外面 : 口縁端部割附, 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 赤灰 内面 : 淡黄	口縁部1/4	スズ付着
574	甕	口径 : (16.8) 底径 : 器高 : 残6.0 胴径 : (14.0) 体部径 :	外面 : 口縁端部割附, 口縁部ヨコナデ, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部右→左横ヘラケズ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部~体部約1/8	
575	甕	口径 : (17.0) 底径 : 器高 : 残8.8 胴径 : (14.3) 体部径 : (18.1)	外面 : 口縁端部割附, 口縁部ヨコナデ, 体部8条/cmタテハツ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ト→上横ヘラケズ	外面 : 黄灰 内面 : 灰白	口縁部1/4 体部わずか	スズ付着
576	甕	口径 : (18.0) 底径 : 器高 : 残8.8 胴径 : (15.1) 体部径 :	外面 : 口縁端部割附, 口縁部ヨコナデ, 胴部におすかにタテハツ, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ヘラケズ	外面 : 灰白 内面 : 淡黄	口縁部1/4 体部わずか	
577	甕	口径 : (24.0) 底径 : 器高 : 残4.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁端部2条の割附線, 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/4	
578	甕	口径 : 底径 : 2.6 器高 : 残13.4 胴径 : 体部径 : (13.4)	外面 : 体部タタキの下半10条/cmタテハツ, 上半ヨコハツ, 底部エビオサユ 内面 : 体部下半縦, 上半横ヘラケズ	外面 : 暗灰 内面 : 暗灰	底部完存 体部1/2	スズ付着
579	甕	口径 : 底径 : 器高 : 残12.4 胴径 : (20.8) 体部径 : (26.0)	外面 : 胴部ヨコナデ, 体部タタキ, 体部上位に刻み目文 内面 : 胴部ヨコナデ, 体部下タテハツ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	胴部~体部 わずか	
580	甕	口径 : 底径 : 4.7 器高 : 残16.9 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部タタキ, 底部エビオサユ 内面 : 体部タテハツ	外面 : 明褐色 内面 : 灰白	底部約3/4 体部約1/2	スズ付着
581	甕	口径 : 底径 : 5.7 器高 : 残17.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部4条/cmタタキ 内面 : 体部横ヘラケ	外面 : 黄灰 内面 : 灰	体部~底部 約1/2	スズ付着
582	甕	口径 : 底径 : 4.8 器高 : 残4.7 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部ナデ, 表面木の彫痕 内面 : 体部~底部ナデ	外面 : 淡黄 内面 : 灰白	底部約1/2 体部わずか	
583	甕	口径 : 底径 : 4.4 器高 : 残14.5 胴径 : 体部径 : (14.3)	外面 : 体部タタキ, のち上半7条/cmハツ, 底面ナデ 内面 : 体部9条/cmハツ	外面 : 黒褐色 内面 : 明褐色	底部完存 体部約1/4	スズ付着
584	甕	口径 : 底径 : 3.6 器高 : 残5.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部タタキ, のち3条/cmハツ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	底部完存	
585	甕	口径 : 底径 : 5.3 器高 : 残5.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 底面わずかにタタキ残る, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 明褐色 内面 : 黒灰	底部完存 体部わずか	
586	甕	口径 : 底径 : 4.0 器高 : 残5.1 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部7条/cmタタキ 内面 : 底部横いエビオサユ	外面 : 黒褐色 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
587	甕	口径 : 底径 : 3.8 器高 : 残5.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3条/cmタタキ 内面 : ハツカ	外面 : 黒褐色 内面 : 黄灰	底部完存 体部わずか	
588	鉢	口径 : 12.4 底径 : 3.6 器高 : 5.7 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部ナデ, 底部エビオサユ 内面 : 体部8条/cmハツ	外面 : 濃い 黄褐色 内面 : 灰	口縁完存	
589	鉢	口径 : 底径 : 4.4 器高 : 残3.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部8条/cmタテハツ 内面 : 体部8条/cmヨコハツのちタテハツ	外面 : 灰白 内面 : 黄褐色	体部~底部 約1/2	
590	鉢	口径 : 底径 : (11.8) 器高 : 残4.5 白径 : (4.3) 体部径 :	外面 : 脚端部ヨコナデ, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 脚端部ヨコナデ, 脚部ナデ	外面 : 灰白 内面 : 濃い 黄褐色	脚部1/2	白付鉢
591	鉢	口径 : (13.8) 底径 : 4.4 器高 : 7.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 底面粘土跡取り付, エビオサユ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部完存 体部約1/4	
592	鉢	口径 : 22.8 底径 : 5.2 器高 : 22.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁端部割附, 口縁部ヨコナデ, 体部8条/cmタテハツのち横ヘラケ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部縦ヘラケ	外面 : 濃い 黄褐色 内面 : 淡黄褐色	底部完存 体部約1/3 口縁部1/2	

第02表 SH34出土土器観察表(4)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色澤	残存率	備考
593	鉢	口径 13.2 底径 3.9 器高 7.5 胴径 11.9 体部径: 13.5	外面: 口縁端面列点文, 頸部縦線横文, 体部列点文, 他は磨滅のため調整不明 内面: 磨滅のため調整不明	外面: 浅黄褐色 内面: 浅黄	1/12 定存	盗江単
594	高杯	口径 (26.8) 底径 器高 残5.6 胴径 杯部高:	外面 口縁部ヨコナデ, 体部縦ヘラミダキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	口縁部-体部約2/3	
595	高杯	口径 底径 器高 残6.5 胴径 2.7 杯部高:	外面 内面: 磨滅のため調整不明	外面: 灰白 内面: 灰白	胴部約1/4 定存 体部約1/4	
596	高杯	口径 底径 19.0 器高 残16.4 胴径 4.1 杯部高:	外面 体部クマハク, 胴柱部-腹面上半縦ヘラミダキ, 腹端部ヨコナデ腹端面縦四線, 4孔 内面 体部ヘラミダキ, 胴柱部縦目, 腹部ヨコナデ, 円板光景	外面: 浅黄褐色 内面: 浅黄褐色	胴部3/4 胴柱部定存 体部1/6	
597	高杯	口径 底径 器高 残17.0 胴径 3.2 杯部高:	外面 胴柱部縦ヘラミダキ 内面 胴柱部ヘラミダキ, 腹部クマハク, 円板光景	外面: 灰白 内面: 灰白	胴柱部-腹部1/12 定存	
598	器台	口径 24.0 底径 器高 残17.5 胴径 体部径: 7.3	外面 口縁端面縦四線, 口縁部ヨコナデ, 口縁部中央-体部縦ヘラミダキ, 体部に4孔 内面 磨滅のため調整不明	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部-体部上半1/12 定存	
599	器台	口径 底径 器高 残10.0 胴径 体部径: 16.4	外面 体部クマハク/クマハク, 3孔 内面 体部クマハク/クマハク	外面: 灰白 内面 灰白	体部1/12 定存 腹部約1/6	
600	鳥形土製品	長さ 112.2 巾 6.0 高さ 15.1	外面 全体に粗いナデ 内面 粗いユビオサエ残る	外面 灰白 内面 灰白	不明	

SH35 (図版62・89)

検出状況 II-1区の北東部に位置し、小微高地bに立地する。住居跡の一部が調査区外にあたり、検出できたのは全体の約3/4である。他の遺構との切り合い関係は認められない。また、本住居跡は焼失住居で、建築材が焼けそのまま倒れた状態が確認できた。

形状・規模 平面形は方形である。完全に検出できた辺は南側の一边だけで4.90mを測る。また、西側の辺については、平面的には調査区側壁に沿って巡る側溝によって検出できなかったが、調査区側壁でそのコーナー部分が確認でき、その長さは、5.10mである。したがって、本住居跡はやや長方形気味といえる。

検出面から床面までの深さは15cmで、床面における標高は148.70mである。

埋土 2層に分かれる。特に、第2層において多くの炭片が含まれていた。

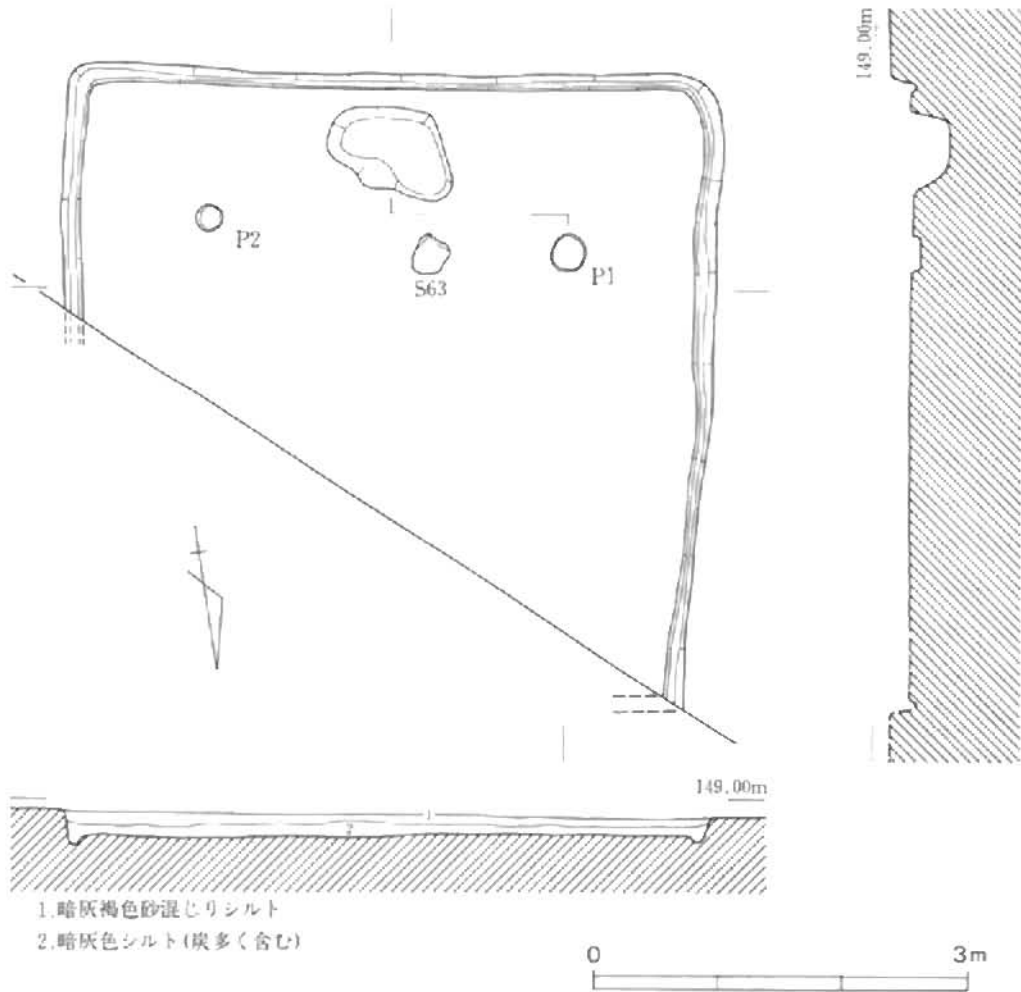
屋内施設 周壁溝・支柱穴・土壇を検出した。

周壁溝 床面を検出した範囲では全周している。床面における幅は12cmを測り、床面からの深さは4cmである。溝底部における幅は5cmである。

支柱穴 2穴検出した。いずれも掘り方のみで、柱痕を確認することはできなかった。P1は、掘り方の径30cm、検出面からの深さ2cmを測る。P2は、掘り方の径21cm、検出面からの深さ2cmである。P1～P2間の距離は2.88mである。

貯蔵穴 P1とP2を結ぶラインの中間部で、そのラインと南側周壁との間で検出された。不整形な平面形を呈し、床面における規模は、65×109cmである。また、床面からの深さは30cmである。

出土遺物 土器と石器が出土している。



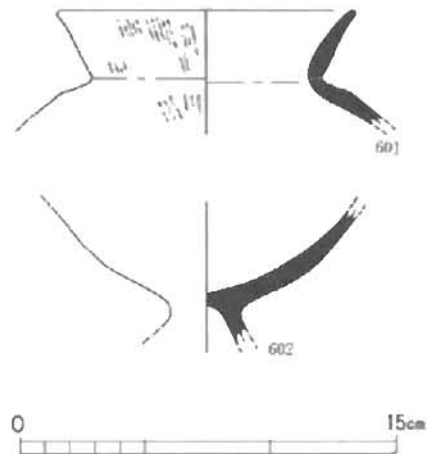
第229図 SH35

土器 量的には多くないが、壺・甕・高環・ミニチュア土器が出土している。このうち図化できたのは壺と高環の2個体である。いずれも、埋土中からの出土で、床面直上での出土は認められなかった。

壺は、図化した土器の他に平底の底部片が、甕はV様式系甕が出土している。

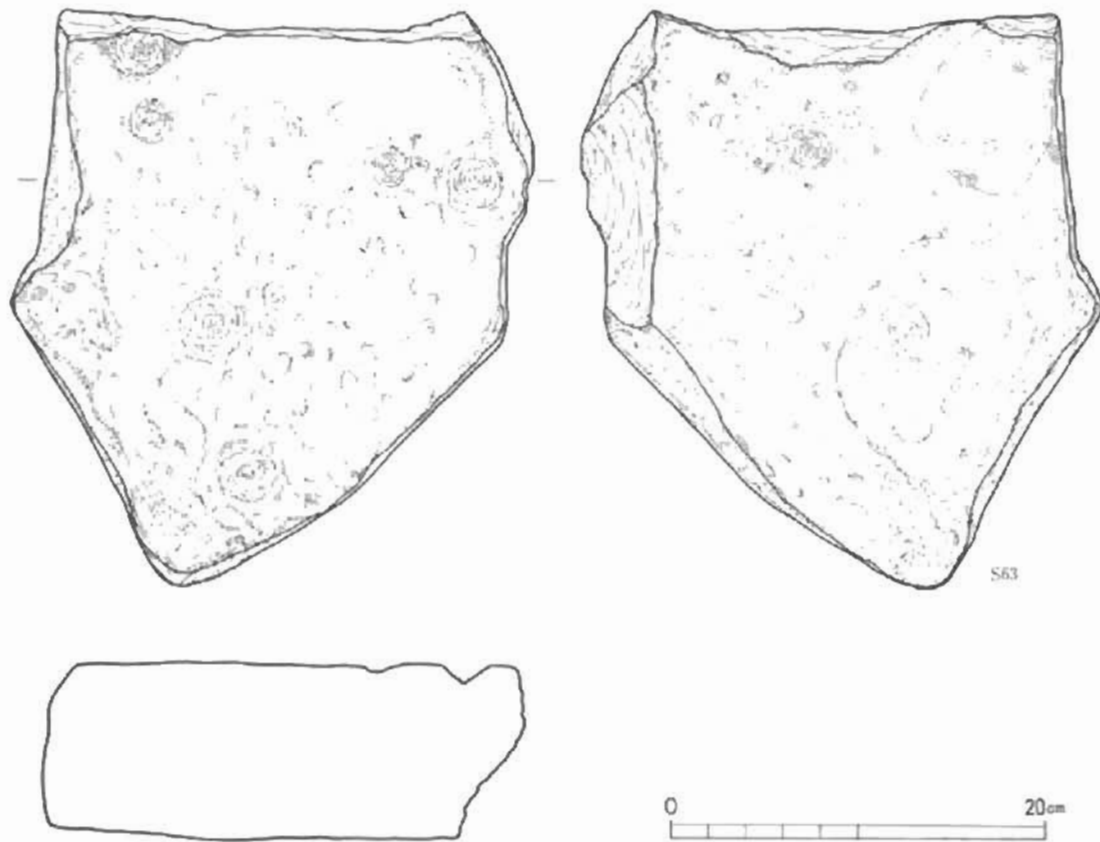
石皿 土壇の北側、支柱穴間のライン上で、床面直上で検出された。ほぼ原位置を保っているものと推定される。石材は砂岩である。

平面形はやや歪な五角形をなし、長軸で30cm、短軸で25cmを測る。厚さは10cmである。石の表面は平坦であるが、径2～3cm、深さ0.5～1cm程の円錐状の凹みが6ヶ所認められる。また裏面にも、表面同様の凹みが認められるが、表面ほど深くはない。この凹みは、木の実などを砕く際あるいは磨り潰す際に石皿として使用したものと考えられる。



第230図 SH35出土土器

時期 出土土器から川除6期と考えられる。



第231図 SH35出土石器

第83表 SH35出土石器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
601	壺	口径：(11.7) 底径： 部高：残4.5 胴径：9.1 体部径：	外面 口縁部タタキのちヨコナデ、体部6条/cmのちナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部不定方向ナデ、一部ヘラナデ	外面：橙 肌色 内面：灰白	口縁部一体 部約1/2	
602	高杯	口径： 底径： 部高 残5.1 脚径 2.8 体部径	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 }	外面：橙 内面：褐色	杯部約1/4	

SH36 (図版63・82・83・89)

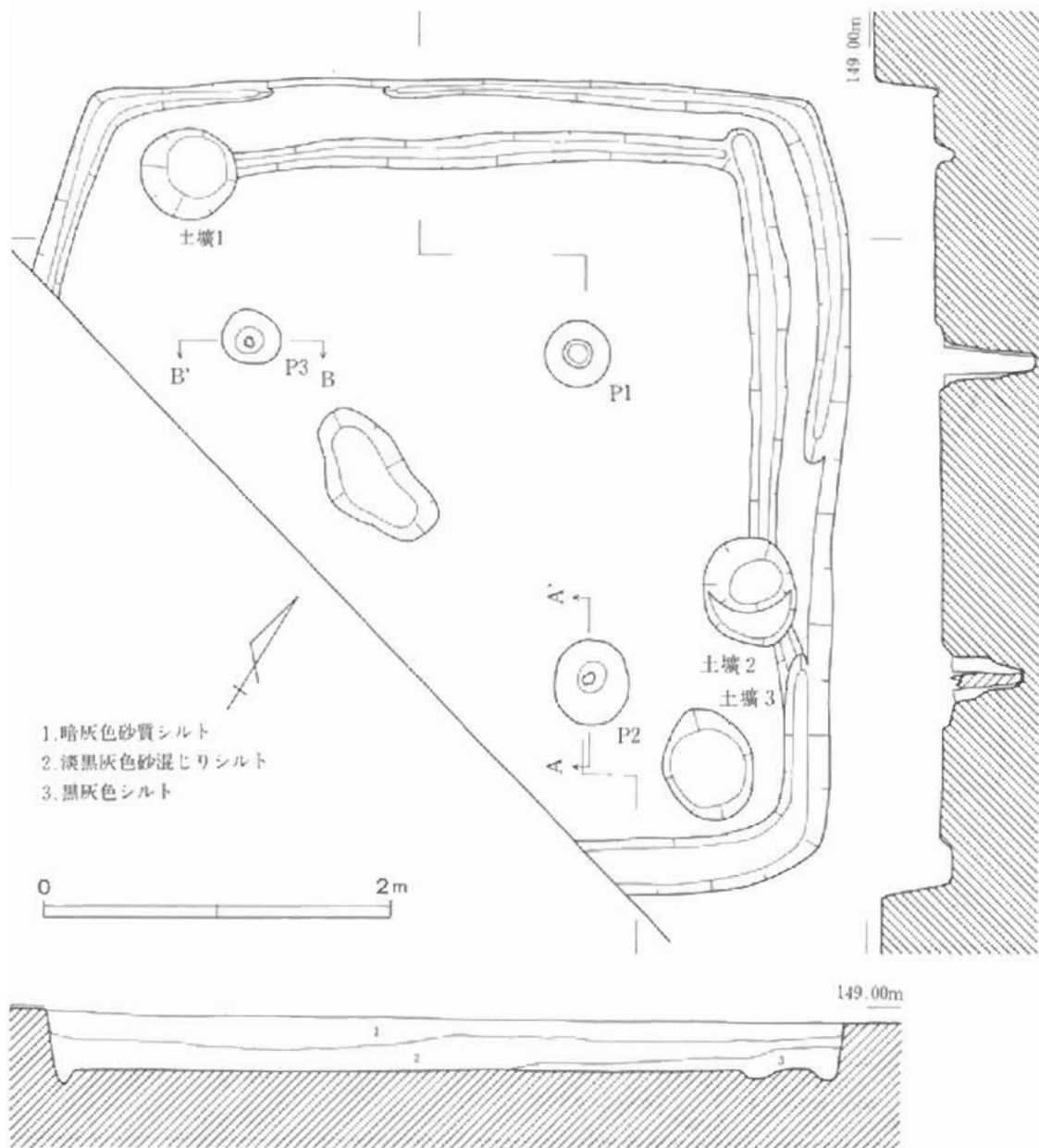
検出状況 II-1区の南側に位置し、小微高地bの南側に立地する。住居跡の南側コーナーはII-2区との境までのび、全体を検出することはできなかった。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面形は方形である。完全に検出できた周壁は北西壁と北東壁の2辺で、それぞれの長さが4.15m・4.32mであり、ほぼ正方形に近いものと推定される。検出面から床面までの深さは30cmで、床面における標高は148.63mである。推定される床面積は18.1㎡である。

埋土 3層に分けられる。各層とも有機質を多く含むシルト層である。

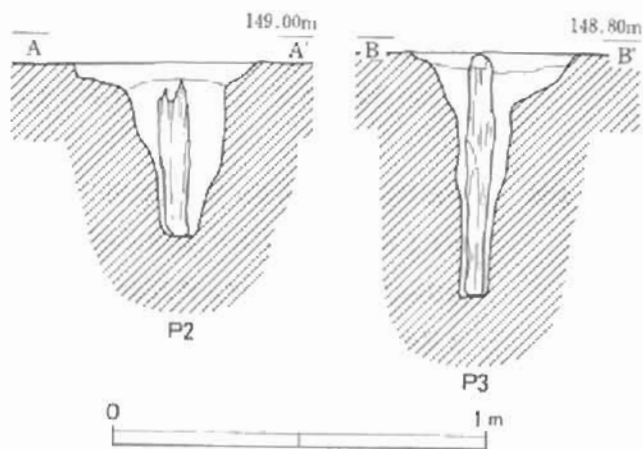
屋内施設 周壁溝・支柱穴・中央土壇・土壇を検出した。

周壁溝 建て替えが行われたようで、二重にめぐっている。土壇1・土壇2に切られていることなどから、内側の周壁溝が古いものと考えられる。

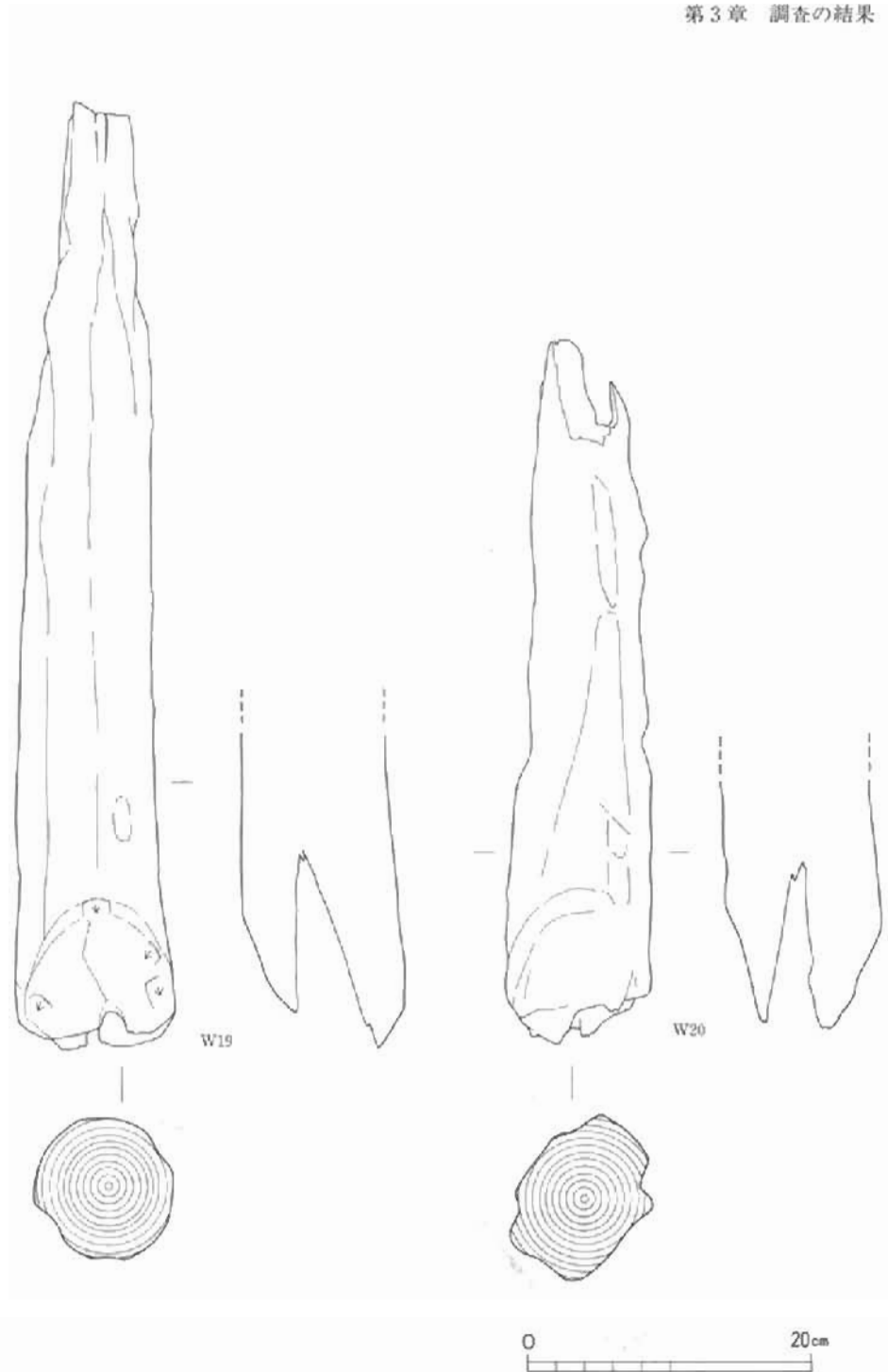


第232図 SH36

まず内側の周壁溝であるが、
 検出されたのは、北西側と北
 東側の2辺である。北西側の
 周壁溝は土城1に切られた位
 置で切れ、南西側においては
 これに続く周壁溝は確認でき
 なかった。また北東側の周壁
 溝は、東側コーナーの手前で
 新しい周壁溝に切られている。
 このことから、東側コーナー
 から南東側にかけては新しい



第233図 SH36 P2・P3



第234図 SH38 P2・P3の柱根

周壁溝とはほぼ同じ位置にあったものと考えられる。床面での幅20cm、床面からの深さ5cmを測り、底における幅は7cmである。

次に外側の周壁溝であるが、北西側と北東側で一部切れるものの、周壁を検出した範囲については、ほぼ全体にわたって検出することができた。床面における幅10～15cmを測り、床面からの深さは5cmである。また、底における幅は5cmである。

主柱穴

3穴検出した。平面形からすると当初は4穴あったものと推定される。P1は、掘り方の径38cm、柱痕の径16cm、検出面からの深さ55cmを測る。またP2については、掘り方の径49cm、柱痕の径17cm、検出面からの深さ47cmである。P3についても、それぞれ34cm、

16cm、65cmである。また、P1～P2間の距離は1.84m、P3～P1間の距離は1.88mを測りほぼ同距離である。

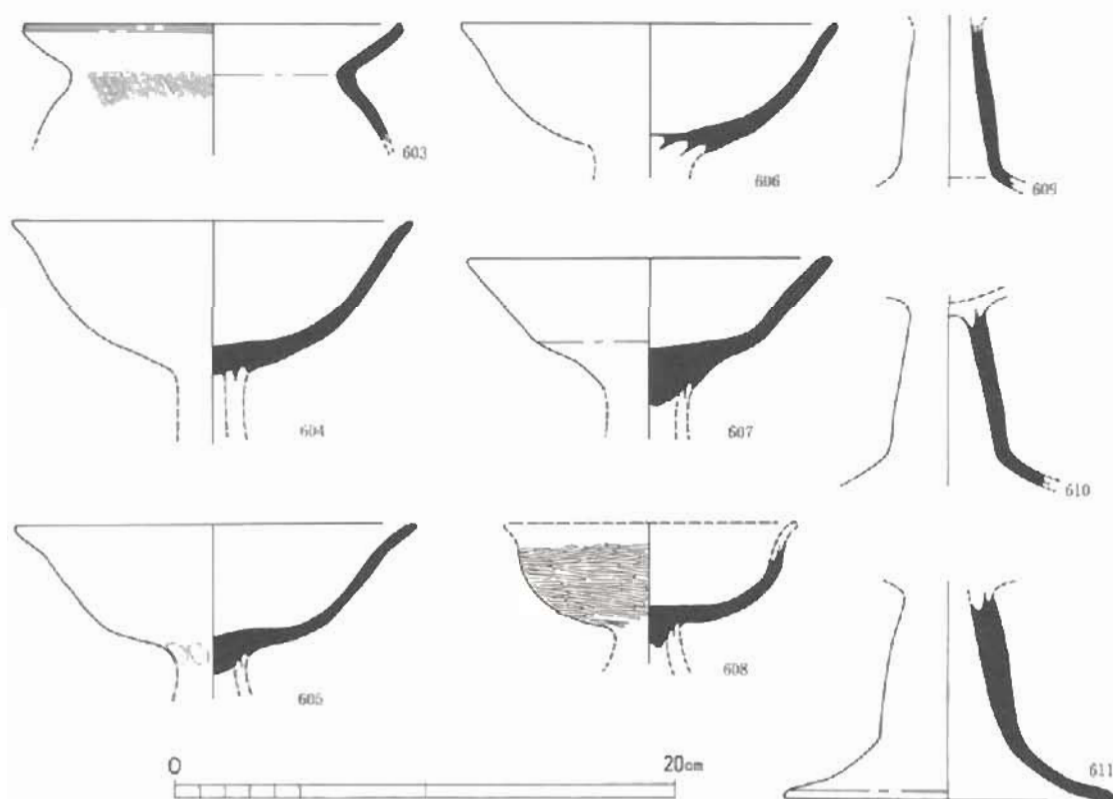
柱材 P2とP3については、柱材が遺存しており、深さについては確実におさえることができ、掘り方の大きさに比べてかなり深く掘られていることが明らかとなった。P2の柱材は、下方ほどよく遺存しており径11cmを測る。残存長は49cmである。P3は、P2より遺存状態がよく、残存長66cmを測る。最もよく遺存している部分の径は10cmを測る。材の種類は、樹種同定の結果（第4章第1節）P2・P3ともにクスギ類である。

中央土壇 本住居跡の中央部よりやや西側に位置する。平面形は不整形な楕円形で、長軸で0.87m、短軸で0.50mを測る。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは6cmである。床面における面積は0.30㎡である。

土壇 計3基検出した。このなかで、土壇1と土壇2は内側の周壁溝を切っていることから、外側の周壁溝に伴う貯蔵穴、つまり建て替え後の住居跡に伴うものと考えられる。これに対して、土壇3については東側コーナーで検出したのであるが、この部分の周壁溝は古い周壁溝と新しい周壁溝が重複している所であるため、新旧どちらの住居跡に伴うものなのか明確にできない。

土壇1 52×55cmとほぼ円形を呈する。横断面は逆台形をなし、床面からの深さは36cmである。

土壇2 土壇1同様ほぼ円形を呈するが、一部2段掘りとなっている。床面における規模は53×64cmである。横断面は逆台形をなし、検出面からの深さは43cmである。



第235図 SH36出土土器

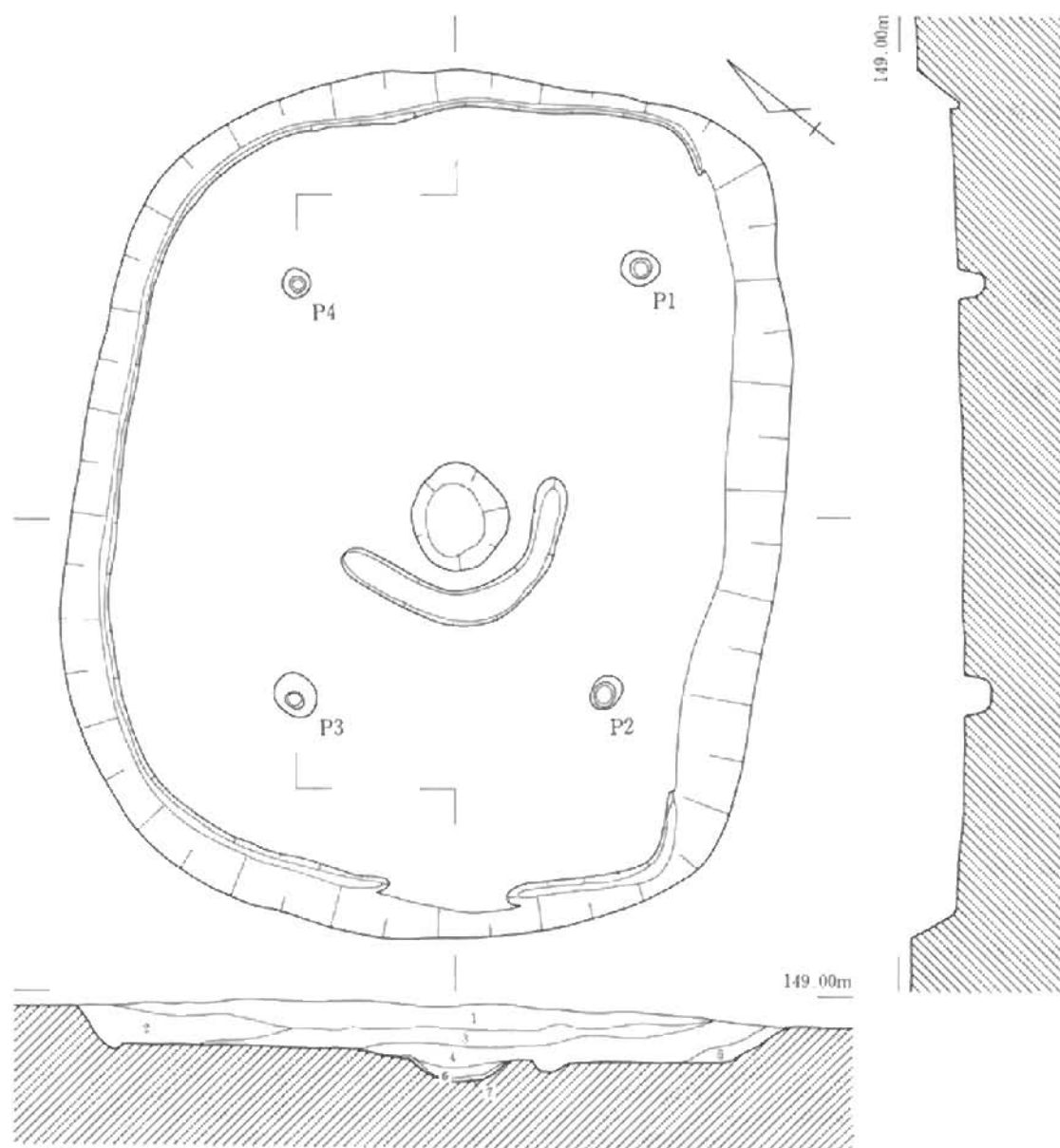
- 土壌3** やや楕円形気味で、長軸で66cm、短軸で51cmである。横断面は逆台形をなし、床面からの深さは49cmと3基の土壌のなかでは最も深い。
- 出土遺物** 土器が出土している。器種としては、壺・甕・高坏・小型丸底壺が出土している。高坏が他の住居跡出土資料と比較して多く出土している。このなかで、図化できたのは甕と高坏である。608が土壌2から出土し、605・606が床面直上から出土した以外は、埋土中からの出土である。
- 甕** 甕はタタキ目を有する体部片と布留式の特徴をもつ口縁部片が出土しており、図化した603は後者の部類に属するものである。
- 高坏** 高坏は、量的に多く出土しているが、坏部から脚部まで残存するものはない。坏部については、深い坏形を呈するもので、外面の屈曲部が明確ではない。坏部中央部が残存するものはいずれも円板充填法によっている。脚部については、坏部よりも残存状況はよくないが、坏部と同じタイプの高坏と考えられる。
- 時期** 出土土器から、川除7期と考えられる。

第84表 SH36出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
603	甕	口径 (14.8) 底径 器高 残4.7 脚径 (11.4) 体部径	外面 体部丁染/cmタナハヤ、口縁部ヨコナデ、口縁部内面 内面 口縁部ヨコナデ	外面 灰黄褐 灰白 内面 灰白	口縁部～体部約1/4	
604	高坏	口径 16.0 底径 器高 残6.2 脚径 体部径	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部～坏部ヨコナデ、円板充填	外面 灰白 内面 灰白	坏部1/2定存	
605	高坏	口径 (15.7) 底径 器高 残5.6 脚径 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、坏部下半ハヤ、脚部との接合部にユヒオサユ 内面 口縁部ヨコナデ、坏部不定方向ナデ、円板充填	外面 灰白 にふい 褐 内面 灰白	坏部約1/2	
606	高坏	口径 14.8 底径 器高 残5.2 脚径 体部径	外面 磨減のため調整不明 内面 口縁部～坏部ヨコナデ	外面 灰白 にふい 黄褐 内面 灰白	坏部1/2定存	
607	高坏	口径 (14.1) 底径 器高 残5.8 脚径 体部径	外面 口縁部ヨコナデ 内面 口縁部～坏部ヨコナデ、円板充填	外面 灰白 にふい 内面 灰白	坏部約1/4	
608	高坏	口径 底径 器高 残4.4 脚径 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、のち坏部横ヘラノキ 内面 ノキか、円板充填	外面 灰白 内面 灰白 浅黄褐	坏部約1/2 口縁部欠	
609	高坏	口径 底径 器高 残6.6 脚径 2.6 体部径	外面 磨減のため調整不明 内面 ヘラナデ	外面 灰白 内面 明黄褐	脚部約1/2 定存	
610	高坏	口径 底径 器高 残7.2 脚径 3.0 体部径	外面 坏部との接合部ヨコナデ、脚部縦ヘラ、ノキ 内面 脚部縦ヘラナデ	外面 灰白 内面 灰白	脚部約1/2 定存	
611	高坏	口径 底径 13.2 器高 残8.3 脚径 3.5 体部径	外面 磨減のため調整不明 内面 脚部縦ヘラナデ、脚部ヨコナデ	外面 灰白 内面 灰白	脚部約1/2 定存 器部約1/4	

SH37 (図版64・83)

- 検出状況** II-2区の北西部、小嶺高地bの南縁で検出された。SD45に切られている。
- 形状・規模** 平面形は隅円長方形である。崩落のため南東辺の位置が不明瞭であったが、周壁溝の屈曲が認められる部分があったため確定できた。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.95m・6.00m・4.95m・5.38mとなる。検出面から床面までの深さは35cm、床面の標高は



- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 灰色極細砂質シルト | 5. 灰色極細砂混じりシルト |
| 2. 暗灰色極細砂質シルト | 6. 灰白色シルト |
| 3. 黄灰色極細砂混じりシルト | 7. 炭層 |
| 4. 灰色シルト | |

0 3m

第236図 SH37

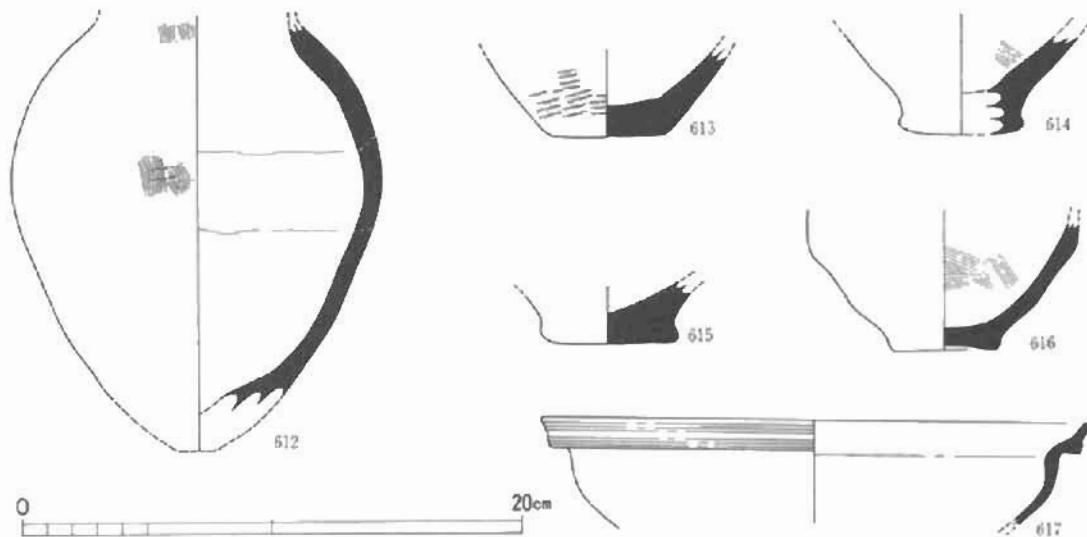
148.56mである。床面積は29.7㎡である。

埋土 暗灰色ないしは灰色の極細砂質シルトなどの細粒の堆積物が認められる。南東から北西方向へ流れ込んだような堆積が観察でき、南東辺の周壁が崩落していることと矛盾しない。これは南東辺に周壁溝が存在しないことと関連するのかもしれない。

屋内施設 周壁溝・柱穴・中央土壇が検出された。

周壁溝 周壁溝は南東辺を除き全周する。床面での幅10cm、底部での幅4cm、床面から底部までの深さは3cmである。

柱穴 支柱穴は4穴が確認された。4つの支柱穴を結ぶ範囲は、周壁の平面形と相似形の長方



第237図 SH37出土土器

形を呈している。P 1は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは48cmである。P 2は、掘り方の直径32cm、掘り方の直径18cm、床面からの深さは17cmである。P 3は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは19cmである。P 4は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは16cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が3.56m、P 2～P 3間が2.62m、P 3～P 4間が3.48m、P 4～P 1間が2.90mとなっている。

中央土壇 床面中央に設けられた円形の上壇であり、その規模は長径92cm、短径82cm、床面から壇底までの深さは12cmを測る。中央土壇の面積は0.60㎡であり、対床面積比は1.9%である。中央土壇の底には1cm程度の炭層が堆積している。

また、この中央土壇の周囲の西から南にかけて幅28cm、深さ8cmの溝が半周しており、中央土壇に付属する施設と考えられる。

出土遺物 遺物の量は少なく、土器のみが出土している。612は床面直上の出土であり、他は埋土からの出土である。

壺・甕・高坏・鉢の各器種が出土している。壺には広口壺、甕の体部から底部の破片、高坏の脚部・坏部、丹波系の鉢が出土している。

時期 出土土器から川除3期と考えられる。

第85表 SH37出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
612	甕	口径 口径: 器高 残15.7 口径: 体部径 14.9	外面: 体部アタシの1/1 内面: 磨滅のため調整不明	外面: 灰白 内面: 濃い黄緑	体部1/4	
613	甕	口径 口径: 4.3 器高 残3.5 口径: 体部径	外面: 体部-底部1cmアタシ 内面: ナデ、底部ユビサエ	外面: 灰白 内面: 黒	底部約1/2	
614	甕	口径 口径: (4.6) 器高 残4.0 口径: 体部径	外面: 磨滅のため調整不明 内面: おどかにツツ	外面: 濃い赤褐 内面: 灰白	体部-底部 約1/3	

第86表 SH37出土土器観察表(2)

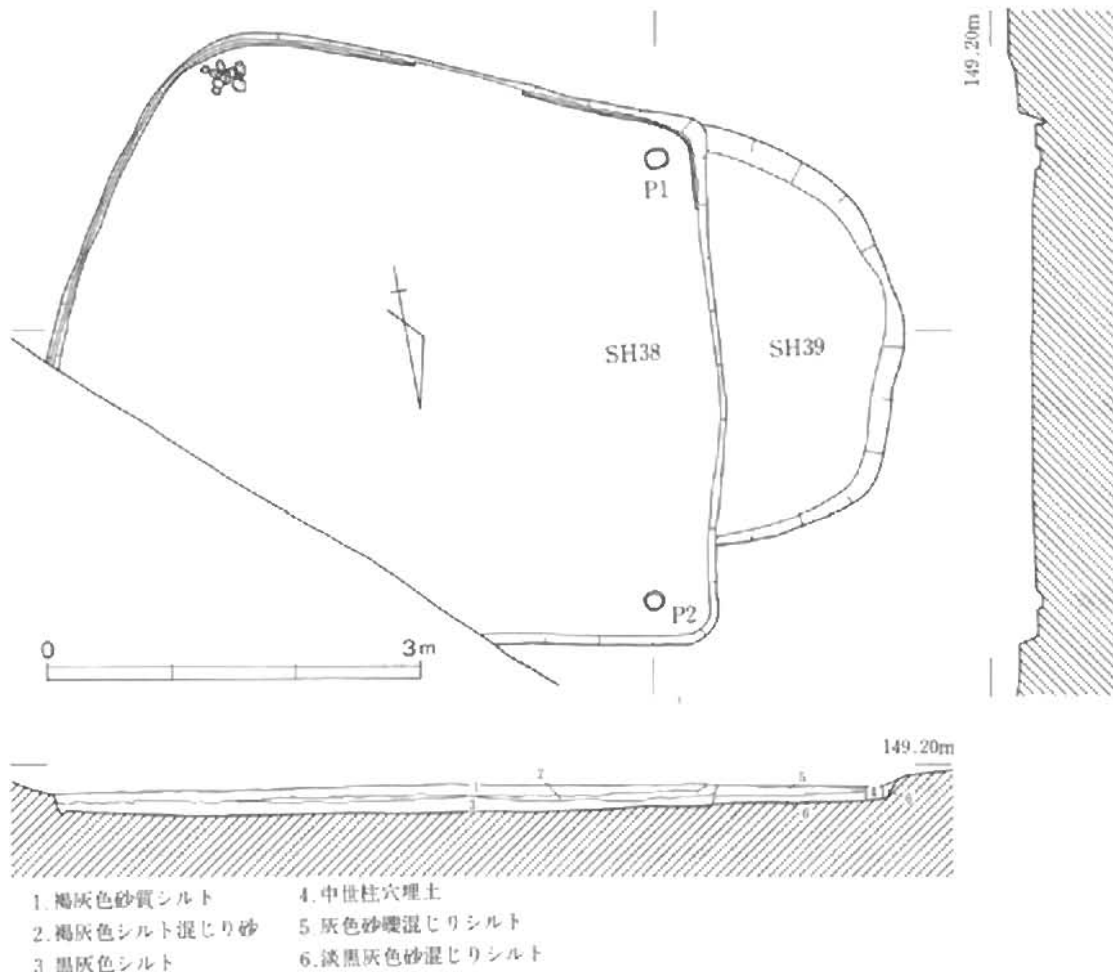
番号	器種	寸量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
615	甕	口径 21.6 器高 22.4 体部径 3.5	外面：底部までイサエ、のちゴツゴツア 内面 トナ	外面 灰褐 内面 灰白	底部は定存	
616	甕	口径 21.6 器高 25.0 体部径 4.0	外面 磨滅のため調整不明、表面木の葉痕 内面 体部一底部までイサエアツク	外面 濃い黄橙 内面 浅黄橙	体部一底部は定存	
617	鉢	口径 (21.6) 器高 24.1 体部径 (19.6)	外面 口縁部周3cmの範囲磨滅、口縁部ゴツゴツア、体部磨滅のため調整不明 内面 口縁部までイサエ、体部磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	口縁部一底部のみ	

SH38 (図版65・83)

検出状況 II-1区の北側で検出された。北東部が調査区外にあたり、全体を明らかにすることはできなかった。SH39を切る。また、中世のSK51に切られている。

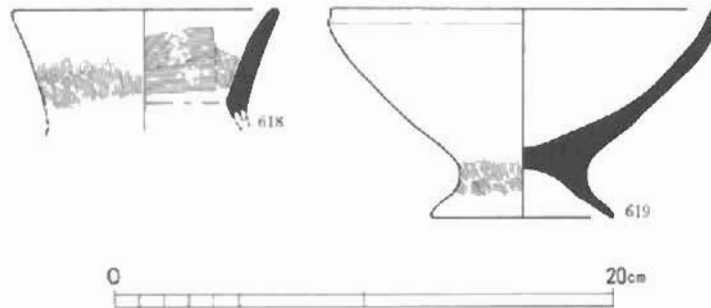
形状・規模 基本的には方形であるが、東辺と西辺が平行しておらず、やや不整形である。西辺で2.70m、南辺で2.68mを測る。検出面からの深さは30cmで、床面における標高は148.70mである。

埋土 3層に分けられる。上から褐灰色砂質シルト、褐灰色シルト混じり砂、黒灰色シルト層が堆積していた。



第238図 SH38・39

- 屋内施設** 周壁溝・主柱穴を検出した。
- 周壁溝** 本住居跡の南西コーナーから東壁に沿って検出されたが、南壁のほぼ中央部で途切れている。検出した溝の床面における幅は15cmを測り、床面からの深さは24cmである。底部における幅は6cmである。
- 主柱穴** 北西コーナーと南西コーナーで2穴検出した。いずれも床面からの深さ5cmと浅いもので、掘り方内の柱痕についても確認することはできなかった。P1の掘り方の径は20cm、P2の掘り方の径は16cmである。
- なお南東部コーナーにおいて、主柱穴があるべき位置で拳大の礫の集積を確認した。根固めに用いられた可能性も考えられる。
- 出土遺物** 土器のみが出土しているが、量的に少なくしかも全体的に小片である。器種としては、壺・甕・高坏・鉢が出土している。このなかで図化できたのは、壺と鉢の各1個体である。図化できなかった甕では、タタキ目を有する体部・底部片が出土している。また高坏については、脚端部と、脚部と坏部の接合部が出土しているが、接合部については円板充填法によるものである。
- 時期** 出土遺物から川除5期と考えられる。



第239図 SH38出土土器

第87表 SH38出土土器観察表

番号	器種	質量 (g)	図 型	色調	残存率	備考
618	壺 体部片	口径 (10.4) 底径 (7.2) 器高 4.5 幅後 (8.0)	外面：口縁部7.5cm径のハマのちし、キヨクナデ 内面：口縁部7.5cm径のハマのちし、キヨクナデ	外面：濃い黄褐色 内面：*	口縁部1/4	
619	鉢 体部片	口径 (15.2) 底径 (7.2) 器高 8.3 口径 (5.1)	外面：口部上7.5cm径のハマ、他は磨滅のため調整不明 内面：体部キヨクナデ、口部ハナデ	外面：明褐色 内面：明褐色	約1/4	

SH39 (図版65)

- 検出状況** SH38に切られているため、検出できたのは全体の約1/2である。またSH40を切っている。
- 形状・規模** 平面形は円形と推定される。推定される径は約4.6mである。検出面からの深さは20cmを測り、床面における標高は148.80mと、SH38より約10cm高くなっている。
- 埋土** 2層に分かれるが、いずれも砂混じりシルト層である。
- 屋内施設** 全く確認されなかった。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しただけである。器種も特定できず、わずかに弥生時代後期の土器であることがわかる程度である。
- 時期** 出土土器とSH38・40との切り合い関係から、川除5期以前と考えられる。

SH40 (図版65)

検出状況 SH38と39に切られている。さらに北側が調査区外にのびているため、検出できたのは全体の約1/12程である。

形状・規模 平面形は円形と推定される。また、推定される径は8.6mである。検出面からの深さは30cmで、床面における標高は148.68mである。

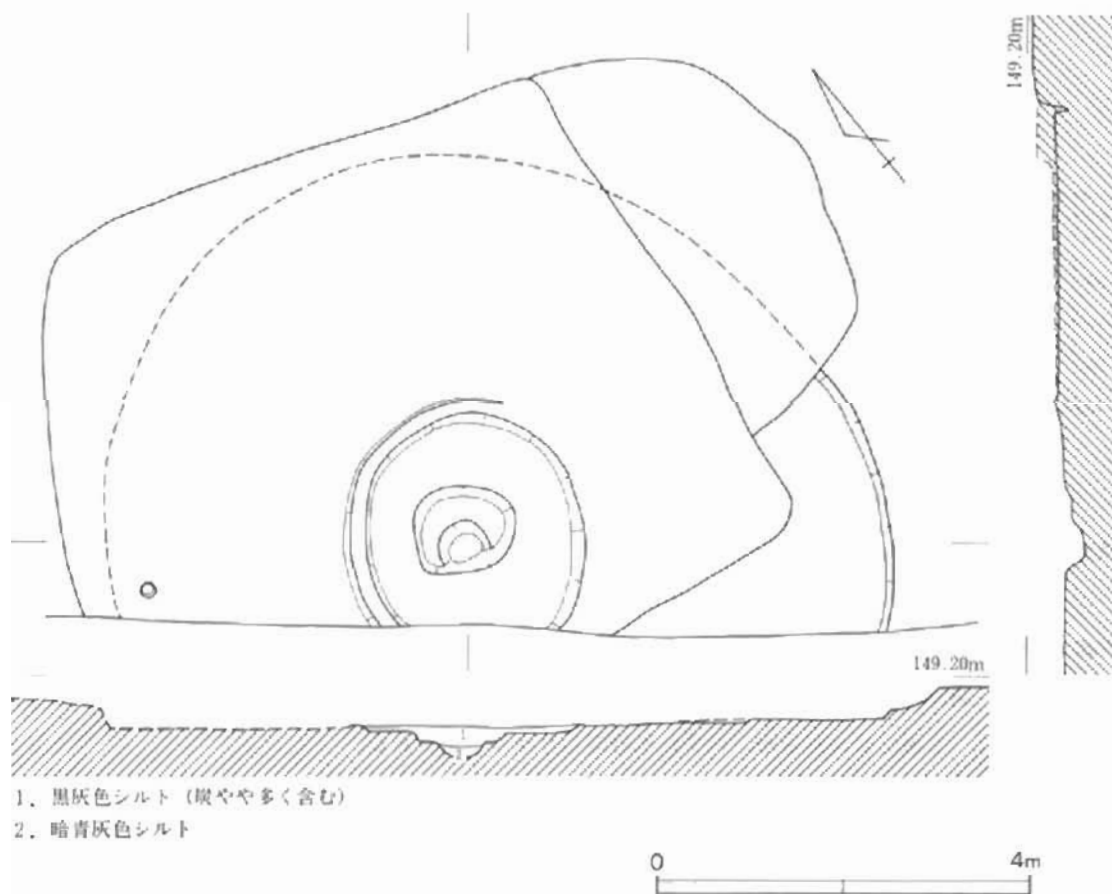
埋土 褐灰色砂混じりシルトが堆積していた。

屋内施設 明確に本住居跡に伴うものは、中央土壌のみで、他に支柱穴の可能性も考えられる柱穴を1穴検出した。

中央土壌 残存する周壁から推定される本住居跡のほぼ中央部に位置する。北東側が一部調査区外にのびるが、ほぼ全体を明かにすることができた。土壌は二段に掘られており、上段・下段ともほぼ円形を呈する。その規模は上段で1.08×0.90m、下段で径0.60mである。この土壌内は2層に分かれ、上層は炭をやや多く含む黒灰色シルト層、下層は暗青灰色シルト層が堆積していた。

そして、この土壌を同心円状にとりまくように地山を削り出して上手がめぐっている。短径2.80m、長径3.00mを測り、基底部での幅は32cmである。また、断面は蒲鉾形を呈し、床面との比高は5cmである。ただし、西側においてはほとんど床面との比高が認められなくなっていた。なお、土壌底部と土手上面との比高は30cmである。

柱穴 径16cmで、床面からの深さ5cmの柱穴である。確実に本住居跡に伴うのかどうかについ



第240図 SH40

ては明確にしがたい。

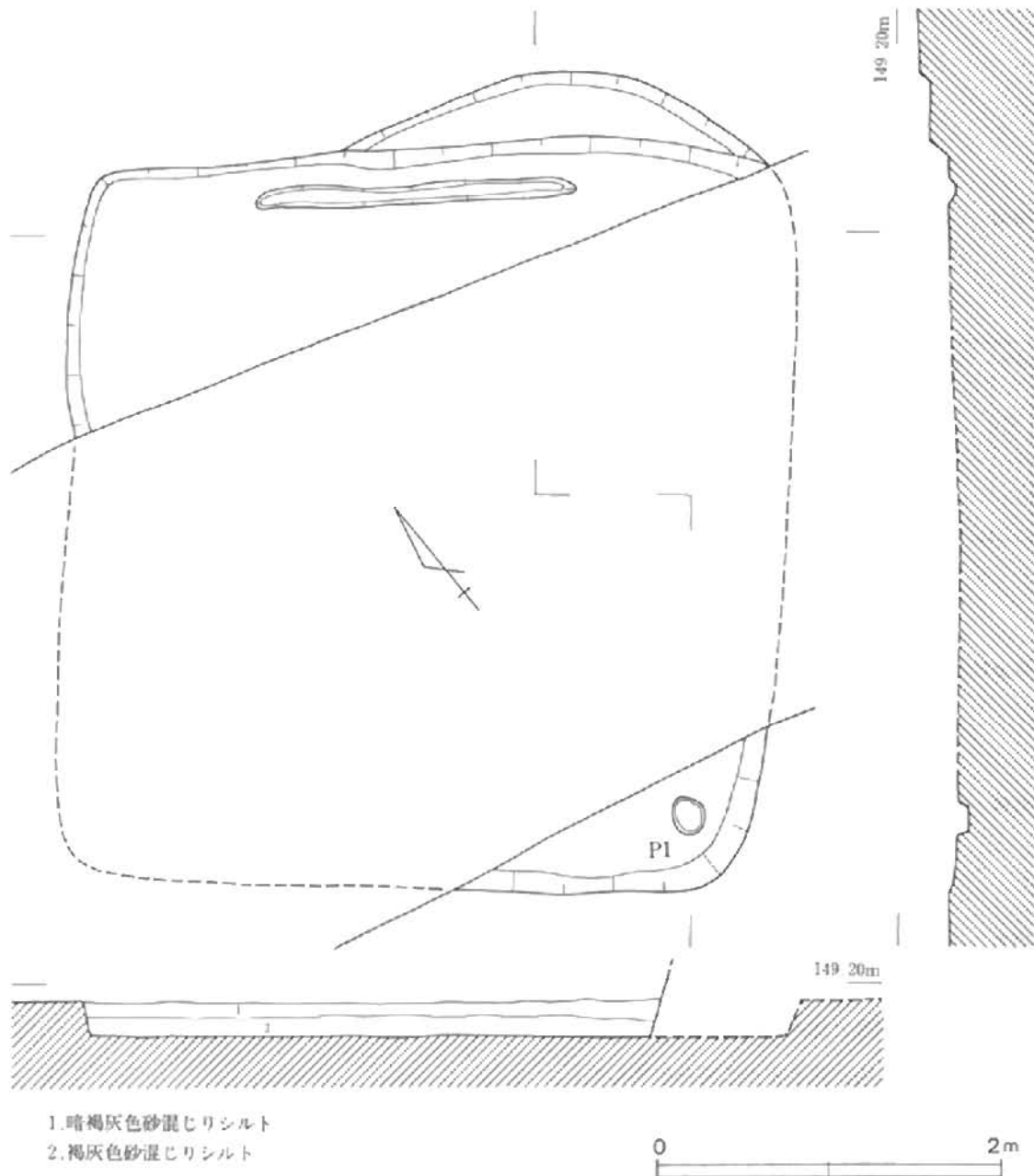
出土遺物 土器片がわずかに出土している。弥生後期の土器片であることはわかるが、器種などは明確にしえない。

時期 SH38・39との切り合い関係より、川除5期以前と考えられる。

SH41 (図版66)

検出状況 II-1区とII-2区にまたがって検出された住居跡である。II-1区とII-2区の間中部は都合により調査することができなかった。SH36の西4mに位置する。

形状・規模 平面形は方形と推定される。どの周壁についても全体を検出することができなかった。このため、確実な規模は明らかにしえないが、北東辺で3.95m、南東辺で3.97m、南西辺で



第241図 SH41

第4節 II区の調査

3.80m、北西辺で3.85mと推定される。

検出面からの深さは20cmで、床面における標高は148.90mである。推定される床面積は15.80㎡である。

埋土 上から暗褐色砂混じりシルト、褐色砂混じりシルトが堆積していた。

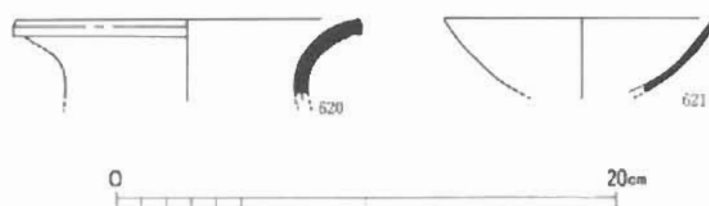
屋内施設 周壁溝と柱穴を検出した。

周壁溝 北東壁に沿って検出されたが、北東辺の中央部だけで、両サイドのコーナーまではのびていなかった。検出した長さは1.87mである。床面における幅は14cmで、床面からの深さは4cmである。また、溝底部における幅は4cmである。

柱穴 南側コーナーで1穴検出された。掘り方の径20cm、床面からの深さ5cmを測る。掘り方内において、柱痕は確認できなかった。

出土遺物 出土遺物は土器のみで、壺・甕・鉢が出土している。このうち図化できたのは壺と鉢の2個体のみである。

図化できなかった甕は、V様式系甕の口縁部である。



第242図 SH41出土土器

時期 出土土器から川除7期と考えられる。

第88表 SH41出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
620	壺	口径 14.0 底径 器高 3.2 胴径 9.8 体部径	外面 口縁端部凹陥、コーナー 内面 調整のための調整不明	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部1/8	
621	鉢	口径 11.0 底径 器高 3.0 胴径 体部径	外面 内面 調整のための調整不明	外面 土褐色、灰白色 内面 土褐色	口縁部1/4	

SH42 (図版66・89)

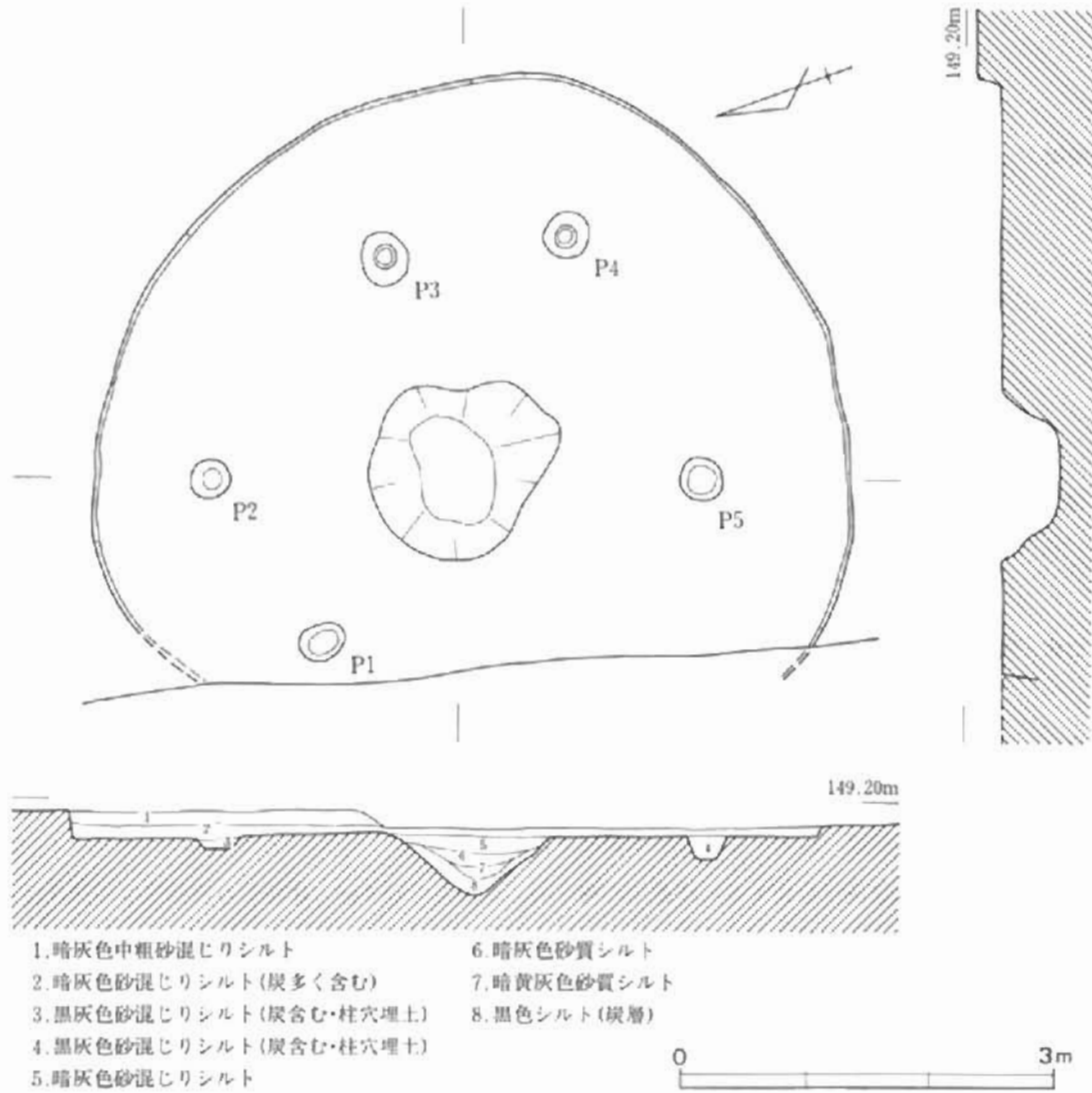
検出状況 II-1区の北西隅で検出された。西側の一部については調査ができず、検出されたのは全体の約3/4である。また、本住居跡の大半は中世における整地に伴う掘削をうけ、西側半分については、周壁の残存はわずかであった。

形状・規模 平面形はやや不整形な円形である。径は約6mと推定される。検出面からの深さは、中世の削平を受けていないところで22cmを測る。床面の標高は148.90mである。また、推定される床面積は約26㎡である。

埋土 上から、暗灰色粗砂混じりシルト、黒灰色砂混じりシルトの2層からなり、下層に多くの炭の包含が認められた。特に中央土壌からP1・P2にかけての範囲の床面上で、炭が顕著に認められた。

屋内施設 支柱穴と中央土壌を検出した。

柱穴 支柱穴は5穴検出したが、本来は6穴あったものと推定される。P1は掘り方の径28cm、床面からの深さ13cmを測る。P2は、掘り方の径32cm、床面からの深さ17cmである。P3は、掘り方の径37cm、柱痕の径19cm、床面からの深さ21cmである。P4は、掘り方の径37



第243図 SH42

cm、柱痕の径18cm、床面からの深さ22cmである。そしてP5は、掘り方の径50cm、床面からの深さは5cmである。なおP1・2・5については、柱痕は確認できなかった。

P1～P2間の距離は1.56m、P2～P3間の距離は2.26m、P3～P4間の距離は1.48m、P4～P5間の距離は2.23mを測り、間隔は一定していない。

中央土壇 本住居跡のほぼ中央部で検出した。平面形は、やや不整形ではあるが、楕円形である。横断面はU字形を呈し、床面からの深さは38cmを測る。土壇内は4層に分かれるが、上3層は砂混じりシルトが堆積しており、最下層には炭層が堆積していた。

規模は、長軸で1.40m、短軸で1.30mを測る。床面における本土壇の面積は1.60㎡で、推定される床面積に占める割合は6.2%である。

出土遺物 埋土中より土器が、床面直上より石器が出土している。

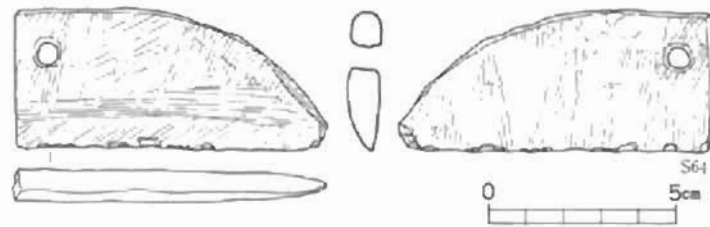
土器 壺と甕が出土しているが、いずれも小片で図化できるものはなかった。壺は底部片で、甕はタタキ目を有する体部片である。

石器 約1/2残存する石庖丁が1点出土している。刃部は直線的で、片刃である。孔は1穴残存している。刃部の残存長は8.40cmで、幅は3.60cmである。また、孔の径は6mmを測り、そ

の周辺部の厚さは9mmである。石材は凝灰岩である。

時期

出土遺物がわずかであるため具体的な時期は特定できないが、川除3～5期と考えられる。



第244図 SH42出土石器

SH43 (図版71・83)

検出状況

II-3区南東隅の、小徴高地cの南縁で検出された。本住居跡埋没後、その上に若干の盛土を施すことによって円形周溝墓SX05を築造している。本住居跡の東および南方の周壁はサブトレンチによって切られている。

形状・規模

平面形は、直径が約8mの円形を呈している。検出面から床面までの深さは37cm、床面の標高は148.40mを測る。床面積は44.5㎡程度である。

埋土

暗灰色ないし灰褐色のシルト混じり細砂などの細粒の堆積物が認められる。P3・4間の床面直上には炭層が観察された。

屋内施設

周壁溝・柱穴・中央土壌が検出された。

周壁溝

周壁溝は全周する。床面での幅8cm、底部での幅4cm、床面から底部までの深さは8cmである。周壁の断面形は、上方が崩落のためか緩傾斜になっているが、本来は垂直に近い形状であったと思われる。

柱穴

主柱穴は4穴が確認された。

柱の掘り方の平面形は円形であり、すべて比較的大規模である。柱穴の規模を順に示せば以下のとおりとなる。P1は、掘り方の直径42cm、柱痕の直径19cm、床面からの深さは47cmを測る。P2は、掘り方の直径43cm、柱痕の直径21cm、床面からの深さは24cmを測る。P3は、掘り方の直径48cm、柱痕の直径21cm、床面からの深さは31cmである。P4は、掘り方の直径48cm、柱痕の直径22cm、床面からの深さは30cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間が3.85m、P2～P3間が3.94m、P3～P4間が3.92m、P4～P1間が3.92mとなっており、主柱穴を結ぶ範囲はほぼ正方形を呈している。

中央土壌

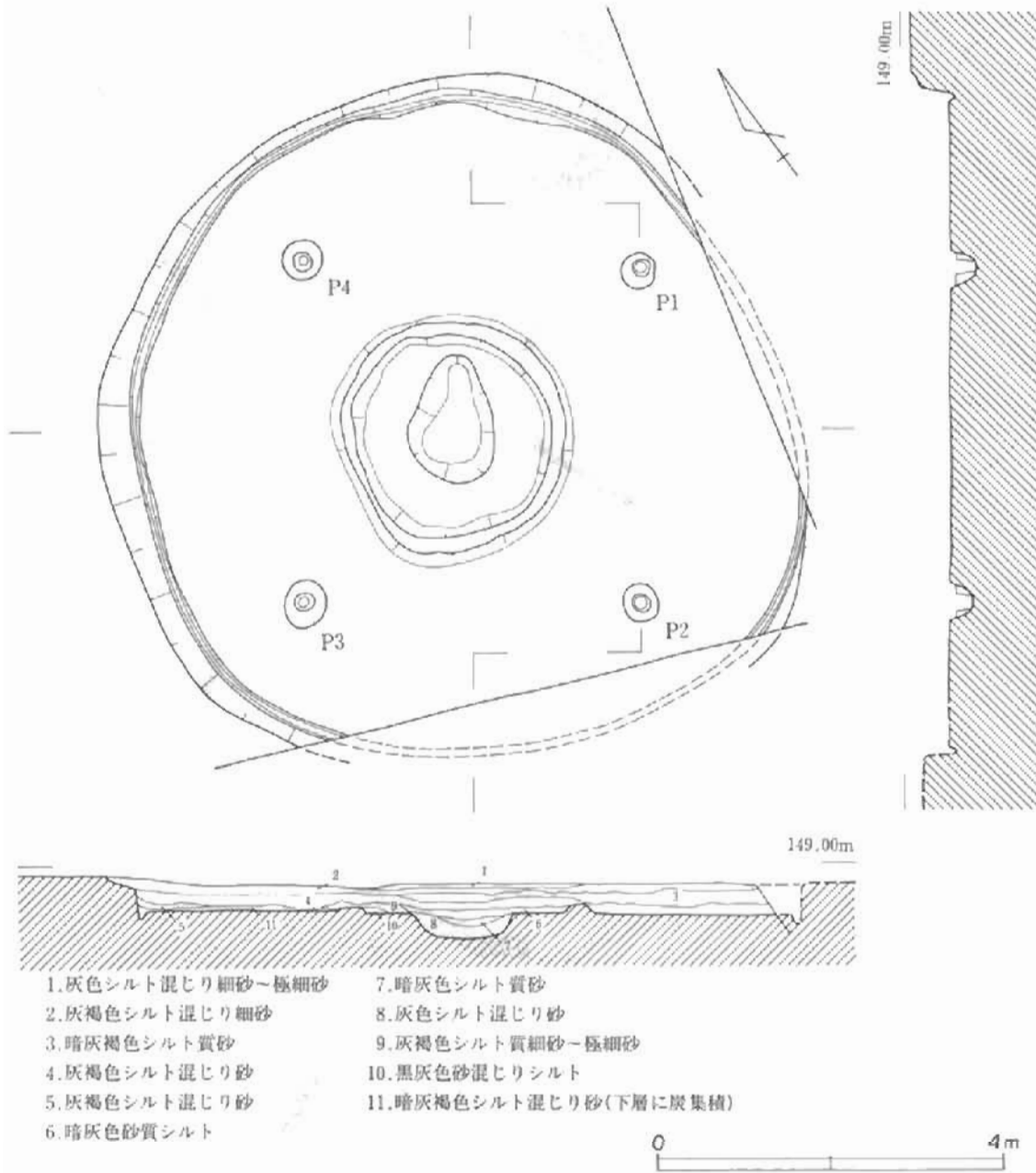
床面中央に設けられた楕円形の土壌であり、その規模は長径152cm、短径104cm、床面から墳底までの深さは30cmを測る。中央土壌の周囲には、地山の削り出しによる高さ5cmの土手が全周している。

土手の平面形はほぼ円形であるが西方がやや直線状になっている。土手の規模は幅30～45cm、直径2.80mを測る。土手を含む中央土壌の面積は6.20㎡であり、床面積に対する面積比は14.0%である。

中央土壌の埋土には炭層が認められず、また墳壁も焼土化していなかった。

出土遺物

土器のみが埋土から出土している。622・624・625・627・628・630・631は床面直上の出土である。



第245図 SH43

壺・甕・高坏・鉢が出土している。

壺 二重口縁壺、広口壺などがあるが、全形の判明する資料はない。

甕 大小二種のものがある。いずれも小片のため図化できなかった。

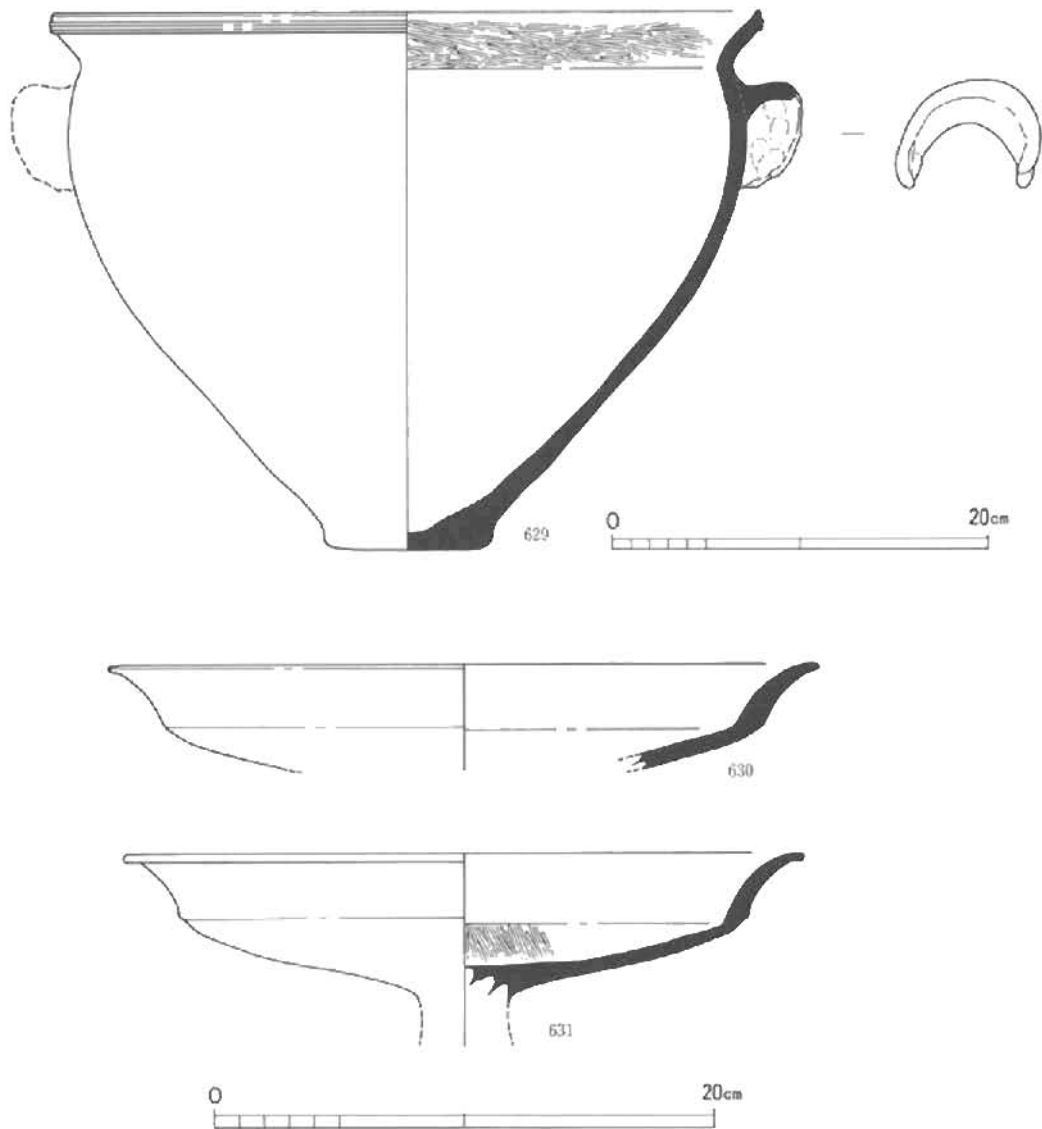
鉢 大型で、体部に逆U字形の把手を二方向にもつもの(629)がある。629は、口縁部にわずかに端面を形成し、そこに2条の凹線を施している。小型の鉢は含まれていないようである。

高坏 いずれも短く外反する口縁部をもつタイプのものである。脚部の形状の判明するものはない。

時期 出土土器から川除5期と考えられる。



第246図 SH43出土土器(1)



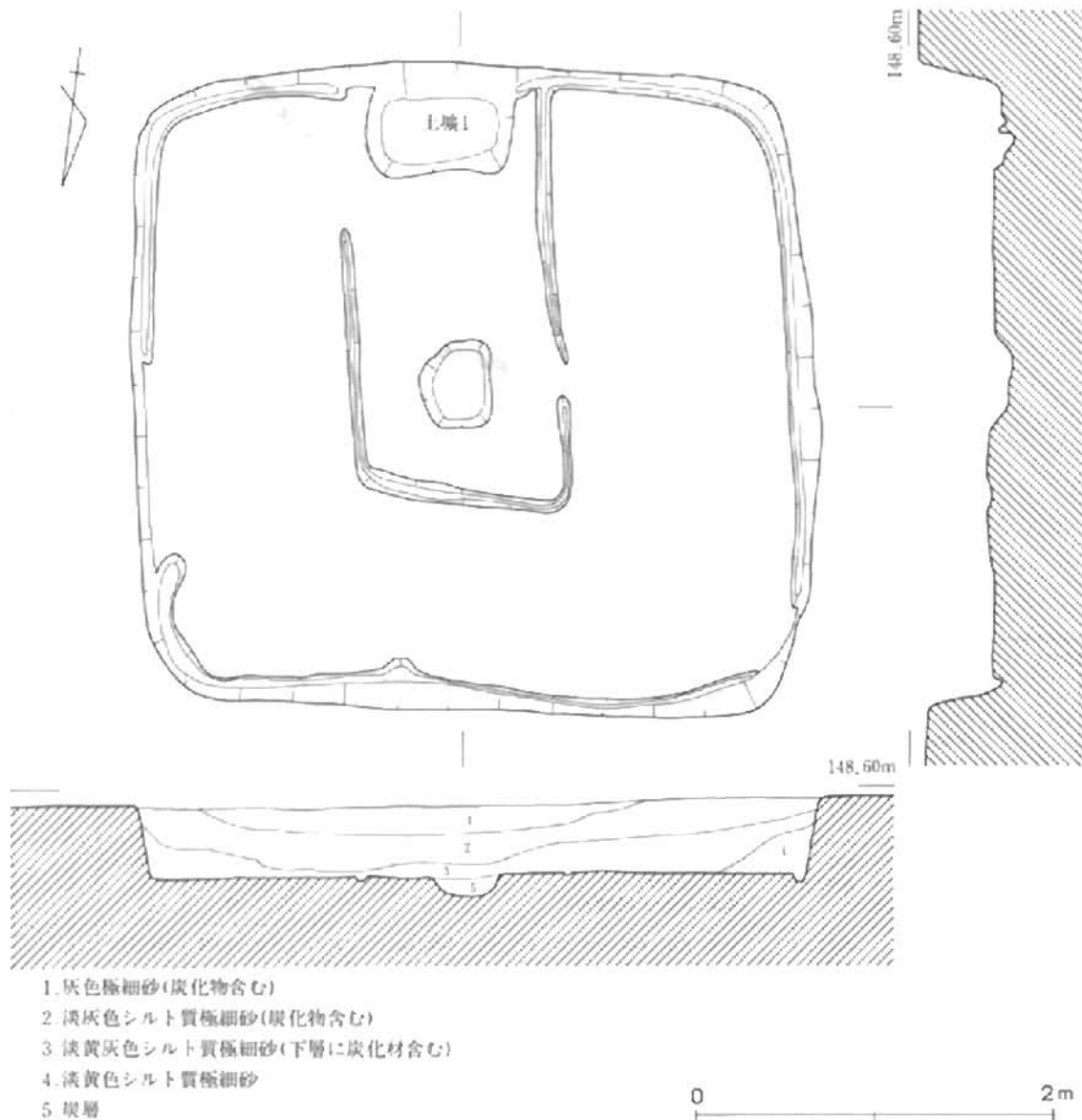
第247図 SH43出土土器(2)

第89表 SH43出土土器観察表(1)

番号	器種	注量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
622	壺	口径 : (22.0) 底径 : 器高 : 残8.8 頸径 : (16.0) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 肩部変帯に割み目 内面 : 口縁部ヨコナデ, 肩部上位は特に強いヨコナデ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部-体部約1/3	
623	壺	口径 : (17.1) 底径 : 器高 : 残6.1 頸径 : (14.0) 体部径 :	外面 : 口縁端部ヨコナデ, 他は磨滅のための調整不明 内面 : 口縁端部ヨコナデ, 他は磨滅のための調整不明	外面 : 灰白 灰褐 内面 : ヲ	口縁部-体部約1/2	
624	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残9.5 頸径 : 体部径 : (23.0)	外面 : 体部下半6cm右よりのち左上りハケ, 上半は磨滅のための調整不明 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 淡橙 内面 : 濃い橙	体部約1/4	
625	壺	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残2.9 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部-体部タタキ, のちタテハケ, のち巾3mm縦ヘラミダキ, 底面ヘラナデ 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 淡黄橙 内面 : 褐灰	底部は完存	
626	壺	口径 : 底径 : 3.0 器高 : 残5.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部は再成形, 他は磨滅のための調整不明 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部-体部約1/3	
627	壺	口径 : 底径 : 4.8 器高 : 残14.4 頸径 : 体部径 : (29.0)	外面 : 体部ナデか 内面 : 体部5cmと10cmのハケ	外面 : 濃い橙 内面 : 濃い橙, 黒	底部完存 体部約1/8	

第90表 S H43出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
628	壺	口径 : 底径 : (33.2) 器高 : 残19.7 頸径 : 体部径 : (23.6)	外面 : 体部3条/cmタテキ、うち底部9条/cmタテハケ、体部上半斜め ヘラミダキ 内面 : 体部7条/cmタテハケのちヨコハケ	外面 : 黄灰 内面 : 灰白	体部一底部 約1/2	
629	鉢	口径 : (37.4) 底径 : 8.4 器高 : 28.5 頸径 : 34.8 体部径 : 36.0	外面 : 口縁部縦凹線、口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部横ヘラミダキ	外面 : 淡黄 内面 : 灰白	底部完全 口縁部一 体部の1/4	
630	高杯	口径 : (28.4) 底径 : 器高 : 残4.1 脚径 : 杯部高 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部ミダキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ミダキ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	杯部の1/8	
631	高杯	口径 : (27.0) 底径 : 器高 : 残6.3 脚径 : 1.5 杯部高 : 5.7	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部ミダキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ミダキ、凹板充填	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/8 体部の1/2	

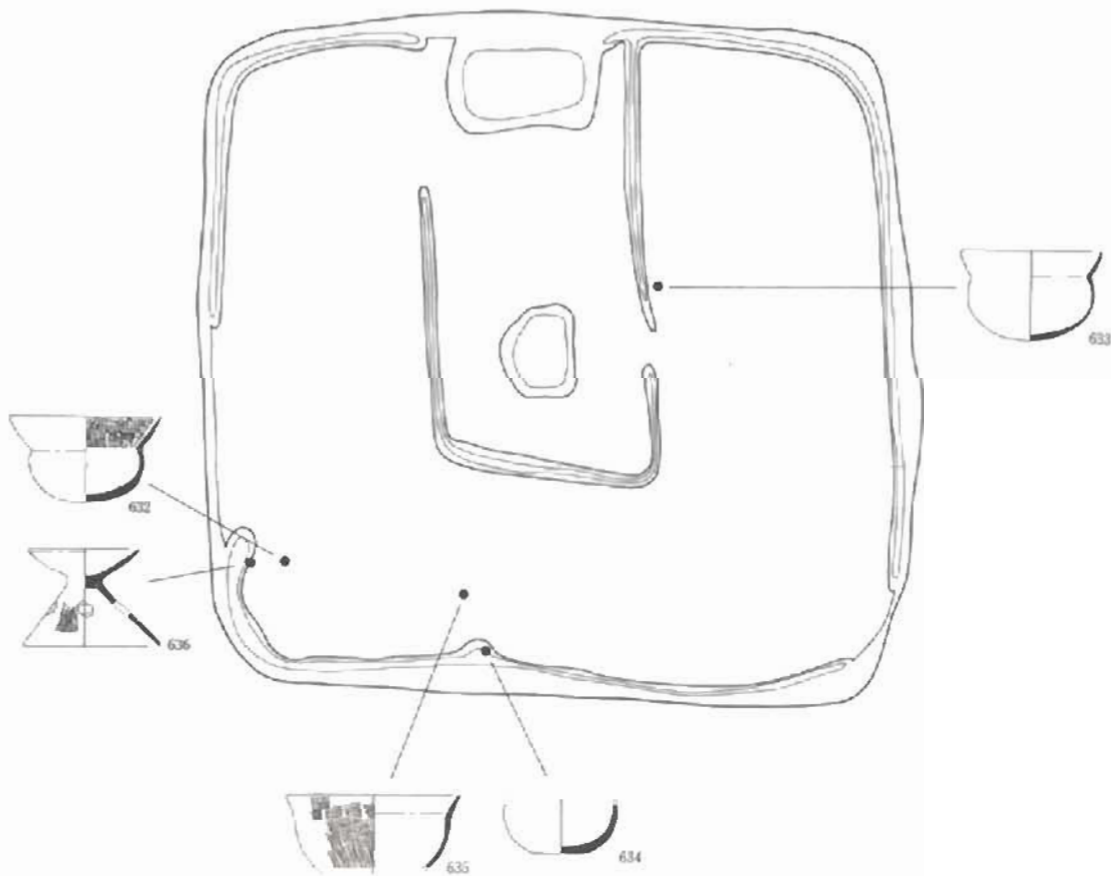


1. 灰色極細砂(炭化物含む)
2. 淡灰色シルト質極細砂(炭化物含む)
3. 淡黄灰色シルト質極細砂(下層に炭化材含む)
4. 淡黄色シルト質極細砂
5. 炭層

第248図 S H44

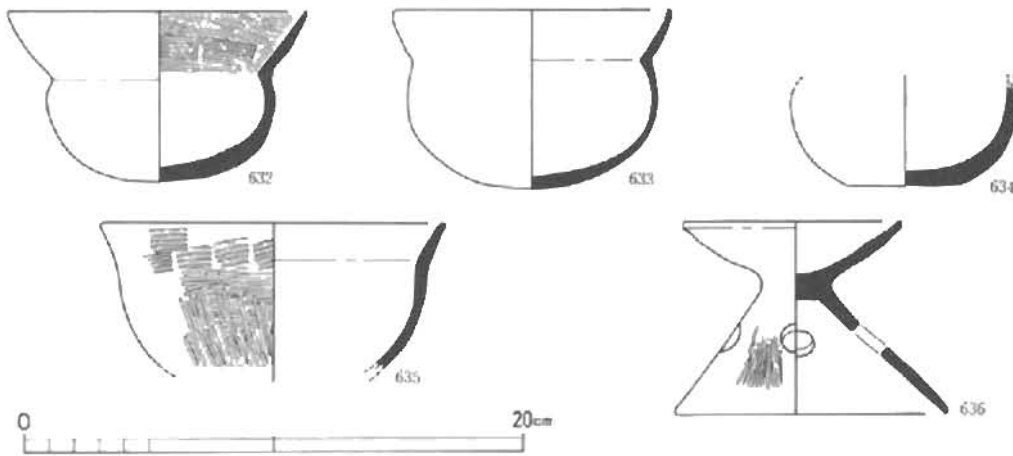
SH44 (図版71・84)

- 検出状況** II-2区の東端で検出している。
- 形状・規模** 平面形は隅円の方形を呈している。北辺3.30m、東辺3.13m、南辺3.45m、西辺3.34mを測る。検出面から、床面までの深さは42cmで床面の標高は148.13mである。検出した床面積は11.3㎡である。
- 埋土** 中央土壌の部分を除いて4層にわたって堆積している。上層から順に炭化物を含む灰色極細砂、炭化物を含む淡灰色シルト質極細砂、下層に炭化材の混じる淡黄灰色シルト質極細砂、淡黄色シルト質極細砂が堆積している。最下層の淡黄色シルト質極細砂は住居跡の壁際に堆積しており、地山と酷似した土質である。比較的早い段階での地山の崩壊土と考えられる。
- 屋内施設** 周壁溝・中央土壌・土壇を検出した。さらに中央土壌と南壁際の土壇を囲むような溝を検出している。
- 周壁溝** 床面での幅8cmを測り、このレベルからの深さは5cmで、底部の幅は4cmである。また検出面からの深さは約47cmである。周壁溝は住居跡の北西コーナー部分、東壁の中央部、南壁の土壇の部分で切れている。
- 中央土壌** 当住居跡のほぼ中心部に位置している。形状は不整形であるが五角形を指向しているものとも考えられる。規模は長軸方向に0.48m、短軸方向に0.40mを測り、深さは0.08mである。埋土は1層で炭化層であるが焼土面は存在しない。面積は0.20㎡で対床面積比は1.8%



第249図 SH44土器出土位置

第4節 II区の調査



第250図 SH44出土土器

である。

土壌 1 南壁のはは中央部で壁に接して土層を検出している。平面形は隅円の長方形を指向している。規模は長軸方向が82cm、短軸方向が60cmを測り、深さは12cmである。検出した位置などから貯蔵穴と考えている。

屋内溝 床面に中央土壌と南壁の貯蔵穴を囲むように細い溝が巡っている。南壁の貯蔵穴の脇の周壁溝から分岐した溝は真っ直ぐ北へのびて中央土壌を囲むようにはほぼ直角に半周して再び南にのびている。溝で区画された部分の規模は南北方向に2.25m、東西方向に1.05mである。溝の床面での幅は5～10cm、深さは約2cmである。

出土遺物 土器のみが出土している。そのうち図化できたものは5点である。

小型丸底壺・小型鉢・小型器台が出土している。小型丸底壺には口縁部が発達しているものと体部の比較的深いものとがみられる。小型鉢は口縁部がやや外反しながら伸びるものである。このうち小型丸底壺(632)、小型器台(636)は北東部コーナー付近で、小型丸底壺(634)、小型鉢(635)は北壁中央部付近で、小型丸底壺(633)は中央土壌の南西約0.7mの位置で出土している。いずれのものも床面直上の資料である。

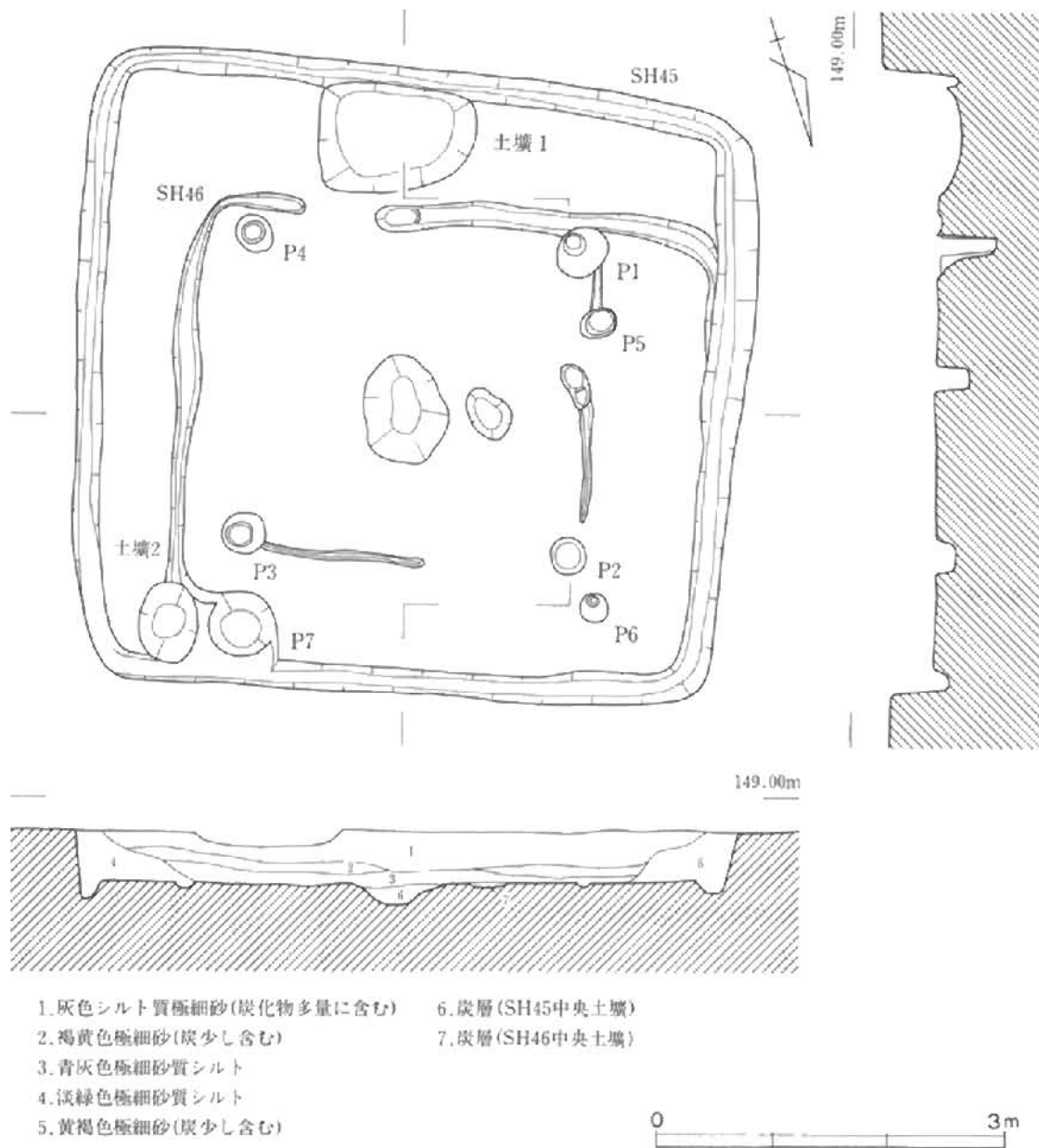
時期 出土土器から川除7期と考えられる。

第91表 SH44出土土器観察表

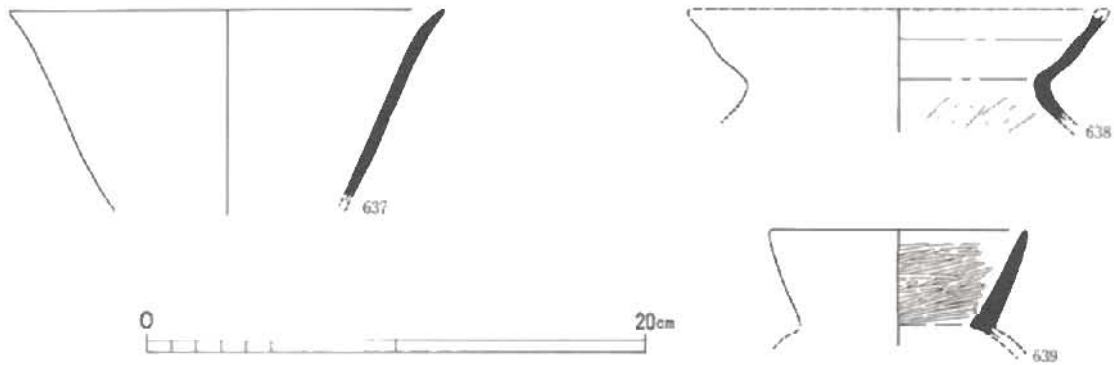
番号	器種	数量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
632	壺	口径 12.0 底径 器高 6.8 胴径 8.8 体部径 9.2	外面 口縁部ヨコナテ、体部不定方向ヘラナテ 内面 口縁部7条/cmヨコナテ、体部不定方向ナテ	外面 灰白 底 黄 内面 灰白	口縁部1/2 他はほぼ完 存	小型丸底壺
633	壺	口径 11.2 底径 器高 残4.9 胴径 9.6 体部径	外面 ヨコナテ 内面 磨減のため調整不明	外面 土に近い 黄褐 内面 土に近い 赤褐	約1/4	小型丸底壺
634	壺	口径 底径 4.6 器高 残3.9 胴径 体部径	外面 体部不定方向ナテ 内面 体部ナテ	外面 浅黄褐 内面 浅黄褐	体部約3/5	小型丸底壺
635	鉢	口径 13.8 底径 器高 残5.8 胴径 体部径	外面 口縁部4条/cmラタキ、のち体部1平横ヘラミダキ、のち細ヘ ラミダキ 内面 口縁部一体部ナテ	外面 灰黄褐 内面 土に近い 黄褐	口縁部～体 部約1/8	
636	器台	口径 18.6 底径 110.8 器高 7.7 胴径 2.8 体部径 2.5	外面 口縁部～体部ヨコナテ、脚部縦ヘラミダキ、脚端部ヨコナテ、 4孔 内面 口縁部ヨコナテ、体部不定方向ナテ、脚部ヨコナテ	外面 暗褐 内面 黒 浅黄褐	口縁部端部 2/3、脚端部 1/4	小型器台

SH45 (図版72・89)

- 検出状況** II-2区の東端で検出している。
- 形状・規模** 平面形は隅田の方形を呈している。北辺5.16m、東辺5.15m、南辺5.52m、西辺4.75mを測る。検出面から、床面までの深さは45cmで床面の標高は148.25mである。検出した床面積は25.2㎡である。
- 埋土** 埋土は中央土壙、土壙の部分を除いて5層にわたって堆積している。上層から順に炭化物を多量に含む灰色シルト質極細砂、炭化物を含む褐黄色極細砂、青灰色極細砂質シルト、淡緑色極細砂質シルト、炭化物を少量含む黄褐色極細砂が堆積している。第4・5層は比較的早い段階での地山の崩壊土と考えられる。
- 屋内施設** 柱穴・周壁溝・中央土壙・土壙を検出した。
- 周壁溝** 床面での幅18~25cmを測り、このレベルからの深さは10cmで、底部の幅は6~12cmであ



第251図 SH45・46



第252図 SH45出土土器

る。また検出面からの深さは約52cmである。周壁溝は住居跡を全周している。

柱穴 4穴検出している。P1は掘り方径42cm、柱痕径20cmを測り、床面からの深さは51cmである。P2は掘り方径31cm、床面からの深さは13cmである。P3は掘り方径38cm、柱痕径22cmを測り、床面からの深さは57cmである。P4は掘り方径30cm、柱痕径19cmを測り、床面からの深さは26cmである。柱間距離はP1～P2が2.70m、P2～P3が2.85m、P3～P4が2.60m、P4～P1が2.78mである。柱穴の配置は方形を呈する。

中央土壌 当住居跡のほぼ中心部に位置している。形状は不定形であるが五角形を指向しているか、とも考えられる。規模は長軸方向に0.95m、短軸方向に0.70mを測り、深さは0.25mである。埋土は1層で炭化層であるが焼土面は存在しない。面積は0.5㎡で、対床面積比は2.0%である。

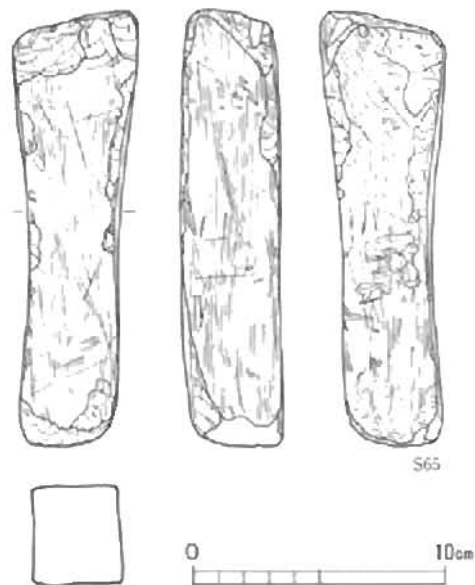
土壌1 南壁のほぼ中央部で壁に接して土壌を検出している。平面形は隅円の長方形を指向している。規模は長軸方向が135cm、短軸方向が90cmを測り、深さは20cmである。検出した位置などから貯蔵穴と考えている。

土壌2 北東部のコーナー近くで土壌を検出している。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸方向に70cm、短軸方向に50cmを測り、深さは29cmである。

屋内溝 P1・P2・P3を結ぶ線上に溝が検出された。床面での幅は5～10cm、深さは3cm程度のものである。P4からP1・P3を結ぶ線上には溝は検出されていない。この溝はベッド状遺構が存在していたことを予想させる。仮に4穴の柱穴の外側の区域にベッドが存在したと仮定すれば、幅は0.90～1.02mで、面積17.2㎡、対床面積比68%程度のものであったと想定できる。

出土遺物 土器・石器が出土している。そのうち図化できたものは3点である。

土器 壺・甕・小型丸底壺を図化している。壺は直線的に外傾する口縁部に丸くおさめる口縁端部をもつ。甕は内湾気味にのびる口縁にお



第253図 SH45出土石器

そらく内面を肥厚させる口縁端部を持つタイプである。小型丸底壺は直線的に外傾する口縁部である。

石器 南壁の周壁溝内で砥石が出土している。中央部が使用のため磨滅した直方体を呈しており、使用面は4面でよく使用されている。非常に細かい擦痕が一定方向に明瞭に認められる。石材は凝灰質泥岩で、仕上げ用の砥石と考えられる。

時期 川除7期である。

第92表 SH45出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
637	壺	口径 : (17.2) 底径 : 器高 : 残7.5 頸径 : (9.9) 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部1/2	
638	甕	口径 : 底径 : 器高 : 残4.4 頸径 : (12.0) 体部径 :	外面 : 口縁部へ体部ヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部ヘラケズリ	外面 : 灰黄褐 内面 : におい 黄橙	口縁部へ 一部体部1/8	
639	壺	口径 : (16.2) 底径 : 器高 : 残4.2 頸径 : (7.8) 体部径 :	外面 : 口縁部横ヘラミダキ 内面 : 口縁部横巾2mmヘラミダキ	外面 : 灰白 におい 橙 内面 : 灰白	口縁部1/4	小型丸底壺

SH46 (図版72)

検出状況 II-2区で検出している。SH45とかさなって検出している。

形状・規模 平面形は隅円の方形を呈している。北辺4.30m、東辺3.90m、南辺4.26m、西辺3.70mを測る。検出面から床面までの深さは、SH45に切られているため測定できない。床面の標高はSH45と同一であり148.25mである。検出した床面積は16.4㎡である。住居跡の北壁と西壁はSH45とはほぼ共有している。

埋土 埋土は周壁溝の部分のみの1層で淡緑色極細砂質シルト層が堆積している。他はSH45に切られているため存在しない。

屋内施設 周壁溝・柱穴・中央土壌を検出している。

周壁溝 周壁溝は東辺と南辺で検出したにとどまる。北辺と西辺はSH45に切られている。床面での幅は13~20cm、底部の幅は5~10cmを測り、このレベルからの深さは約5cmである。検出面からの深さは測定不能である。

柱穴 柱穴は3穴検出したにとどまる。P5は掘り方径31cm、柱痕径25cm、床面からの深さは33cmである。P6は掘り方径24cm、柱痕径10cm、床面からの深さは14cmである。P7は掘り方径50cm、床面からの深さは27cmである。

中央土壌 中央部やや西寄り中央土壌を検出している。平面形は不定形を呈している。規模は長軸方向に50cm、短軸方向に30cmを測り、床面からの深さは約20cmである。面積は0.11㎡で対床面積比は0.67%である。

出土遺物 遺物は出土していない。

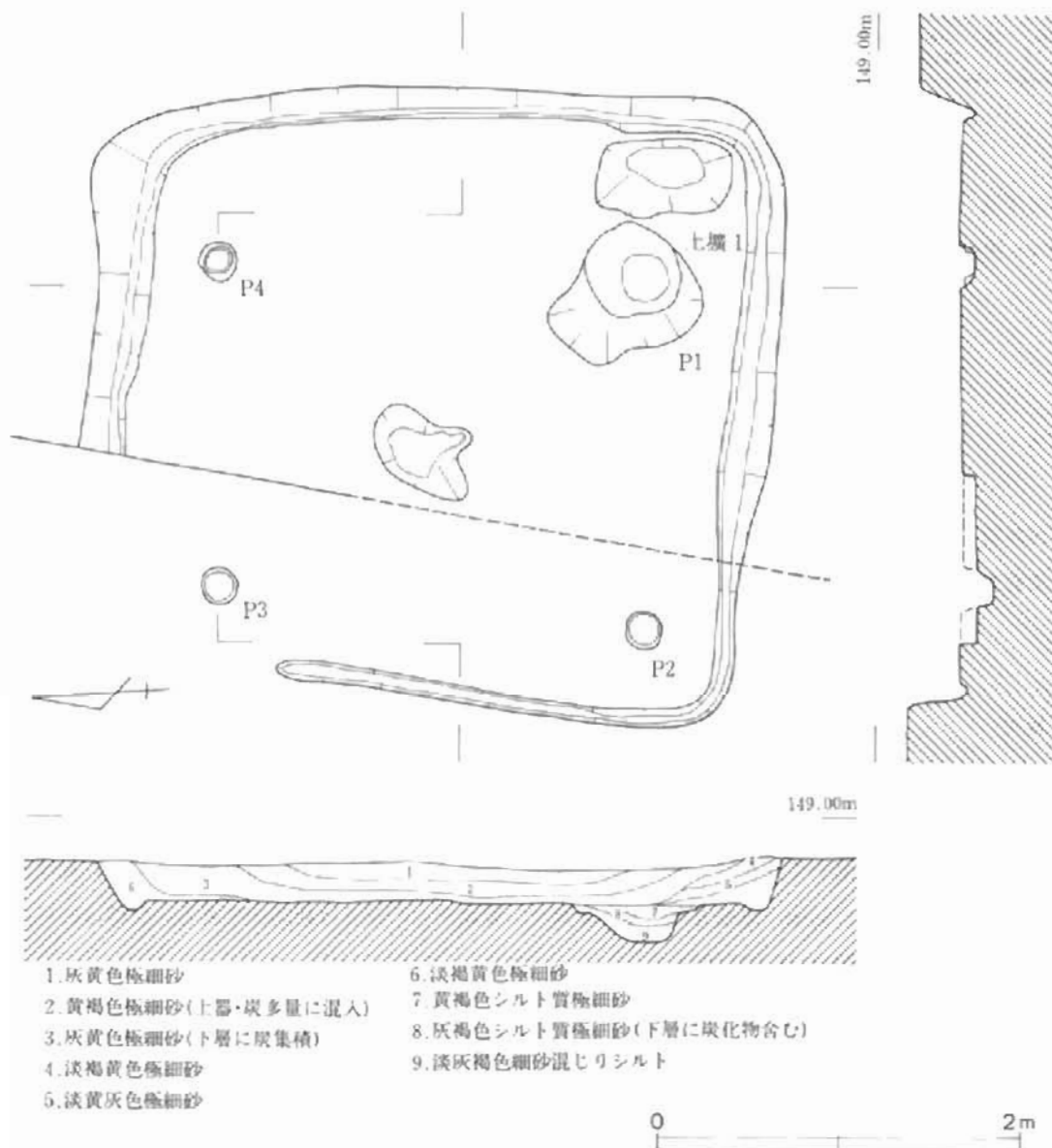
時期 遺物が出土していないため明らかではないが、SH45と二方向の壁を共有していること、床面が同一レベルであること、SH45が当住居跡を切っていることなどからSH45は当住居跡の拡張であると判断できる。したがって当住居跡の時期はSH45の直前の時期と考えられる。

SH47 (図版73・84)

検出状況 II-2区の南端で検出している。

形状・規模 平面形は隅円の方角を呈しているが北辺と南辺を比較すると北辺のほうが若干短く、台形を指向していると表現したほうが正確であろう。当住居跡は確認トレンチで西側の約1/3が削平されており、その部分は住居跡の肩が検出されていない。完全に検出できたのは東辺のみである。規模は東辺が3.55m、南辺が3.25mである。西辺は周壁溝が途中で途切れているため測定は不可能であるが推定で3.50m程度であったと思われる。北辺は確認トレンチで一部が完全に削平されている。検出した長さは1.80mであるが、推定で3m程度であったと考えられる。検出した床面積は、未検出部分を含めると10㎡程度であろう。

埋土 柱穴の部分を除いて6層にわたって堆積している。上層から順に灰黄色極細砂、土器・炭化物が多量に混入する黄褐色極細砂、下層に炭化層の堆積する灰黄色極細砂、淡褐色極細砂、淡黄灰色極細砂、淡褐色極細砂が堆積している。第4～6層は比較的早い段階



第254図 SH47

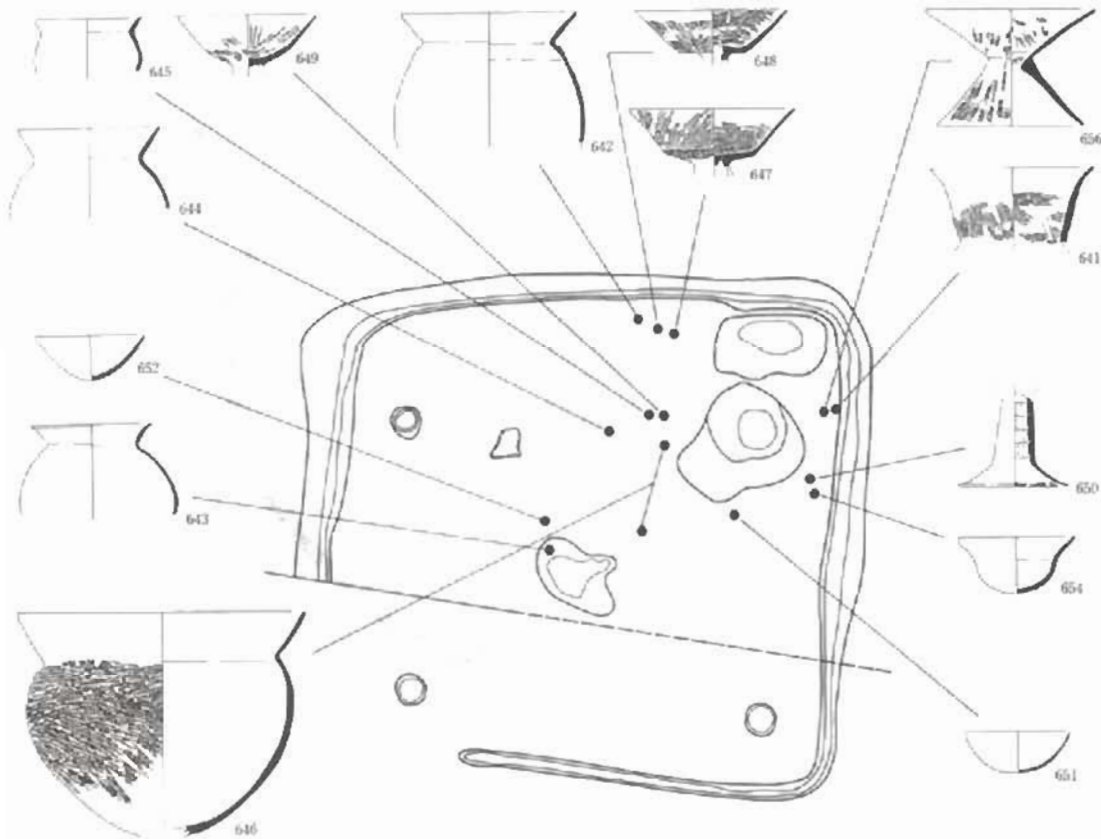
で堆積した地山の崩壊土と考えられる。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土壇・土壇を検出した。

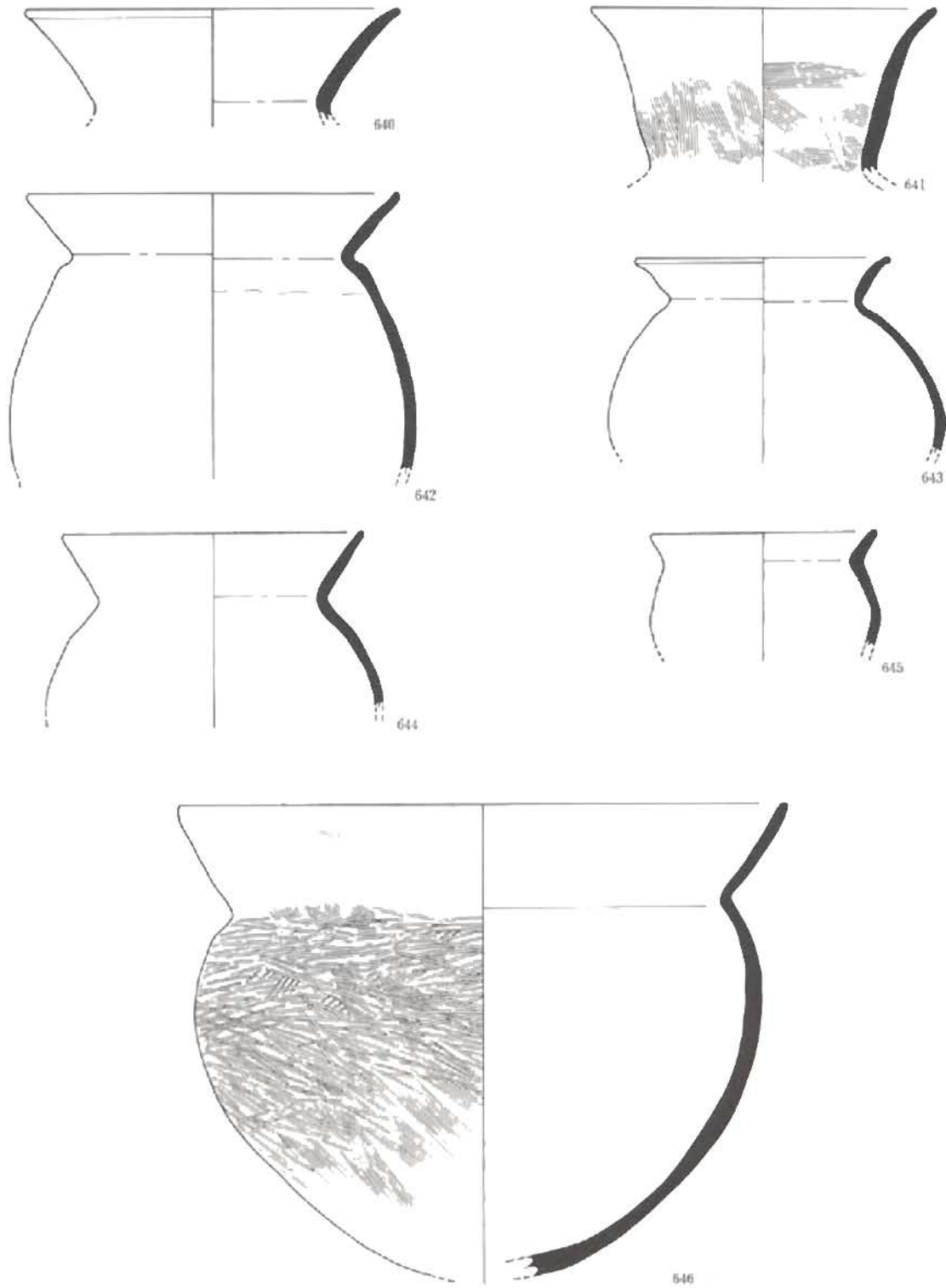
周壁溝 床面での幅14～20cmを測り、このレベルからの深さは4cmで、底部の幅は10～12cmである。また検出面からの深さは約29cmである。周壁溝は東壁から南壁に沿っては完全に巡っている。西壁では検出した長さは約2.4mで、その先は確認トレンチの削平のために途切れている。北壁では検出した長さは約1.8mで、確認トレンチによってその先は削平されている。しかしながら、本来は全周していたものと考えられる。周壁溝のプランも住居跡の検出プランとはほぼ同じくやや台形を指向している。

柱穴 柱穴は4穴検出している。P1は掘り方径50cm、柱痕は検出できなかった。床面からの深さは19cmである。P2は掘り方径20cm、柱痕は検出できなかった。床面からの深さは4cmである。P3は掘り方径20cm、柱痕は検出できなかった。床面からの深さは7cmである。P4は掘り方径20cm、柱痕径15cmを測り、床面からの深さは8cmである。柱間距離はP1～P2が1.90m、P2～P3が2.35m、P3～P4が1.80m、P4～P1が2.37mである。P1は東周壁溝の内側から80cm、南周壁溝の内側から55cmの位置で検出し、P2は南周壁溝の内側から40cm、西周壁溝の内側から45cmの位置で検出し、P3は西周壁溝から推定で40cm、北周壁溝から推定で65cm内側で検出され、P4は北周壁溝の内側から35cm、西周壁溝の内側から70cmの位置で検出している。柱穴の配置は方形を呈する。全体として床面からの深さが浅い傾向にある。

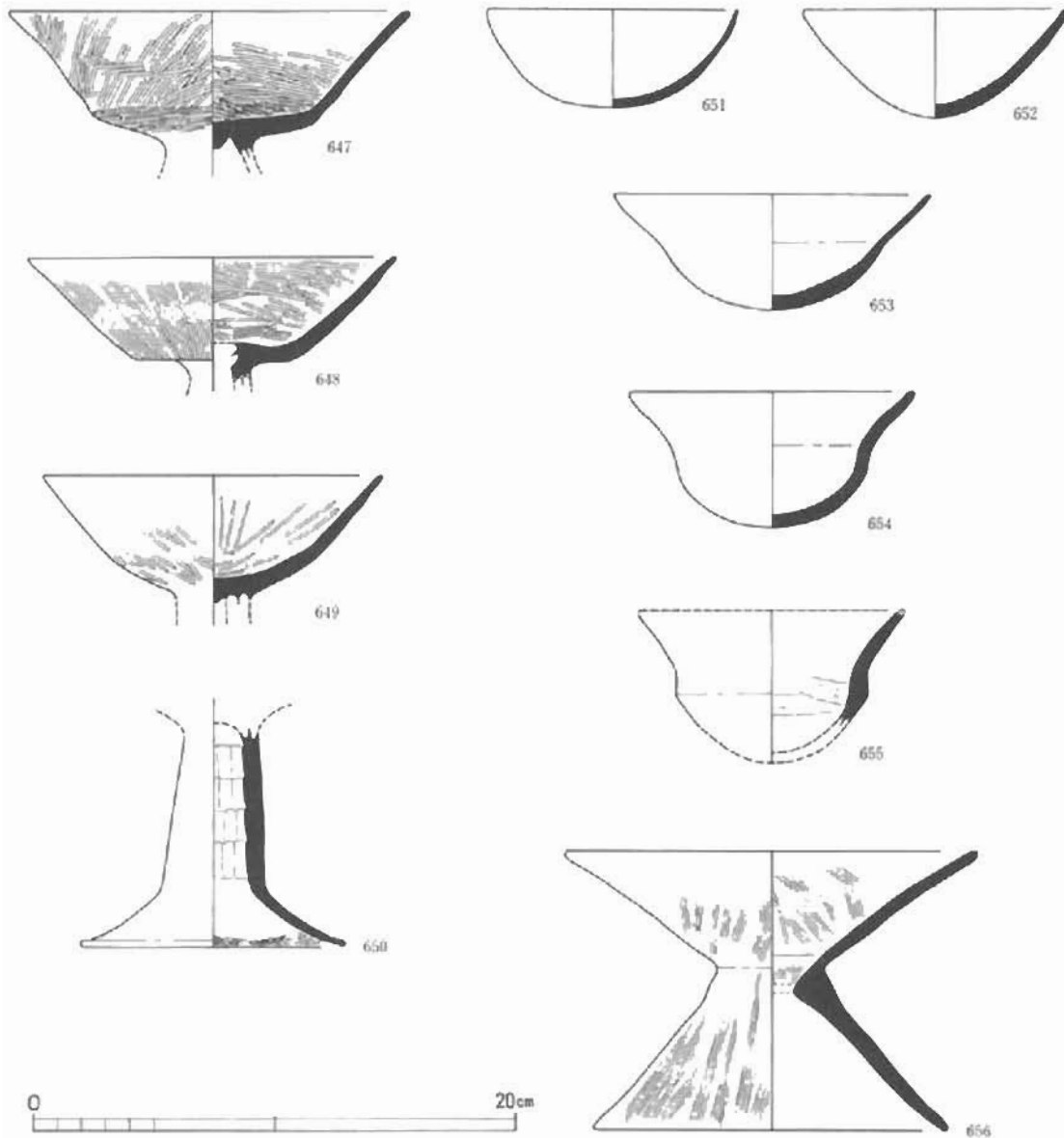
中央土壇 中央土壇は当住居跡の中心部からやや西寄りに位置している。形状は不整形であるが楕



第255図 SH47土器出土位置



第256図 SH47出土土器(1)



第257図 SH47出土土器(2)

円形を指向している。楕円形の中央から南東部に向かって幅20cm、長さ13cmの突出部が検出された。規模は長軸方向に0.65m、短軸方向に0.35mを測り、深さは9cmである。埋土は1層で炭化層が堆積しているが焼土面は存在しない。面積は0.19㎡で対床面積比は1.9%である。

貯蔵穴 南東部のコーナー付近で壁に接して土壌を検出している。平面形は隅円の長方形を指向している。規模は長軸方向が75cm、短軸方向が40cmを測り、深さは20cmである。検出した位置などから貯蔵穴と考えている。

出土遺物 土器が出土している。そのうち図化できたものは17点である。

土器 壺・甕・鉢・高坏・器台を図化している。

壺は広口壺が2点、小型丸底壺が2点である。広口壺は口縁部が直線的に伸びるものと口縁端部が強く外反するものがある。どちらも口縁端部は丸くおさめている。甕は4点図化している。肩部が直線的なものがみられる。鉢は4点図化しており、大型のものが1点、

第4節 日区の調査

小型のものは3点である。高坏は坏部が3点、脚部が1点で坏部はヘラミガキで仕上げているものとハケで仕上げているものがある。器台は鼓形のもので、口縁部、裾部ともに直線的に伸びている。図化している17点のうち14点までが出土位置のおさえられる形で出土した。その他に粘土塊が1点出土している。

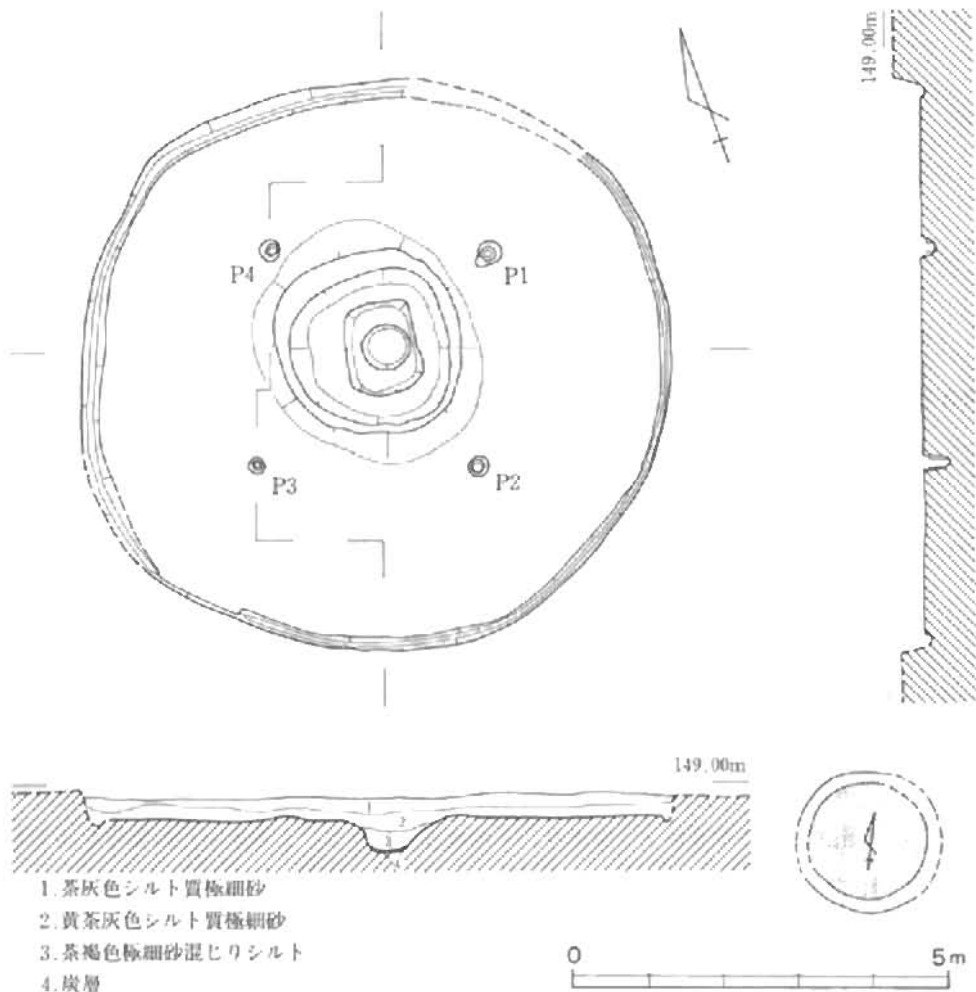
時期 川除7期である。

第93表 SH47出土土器観察表

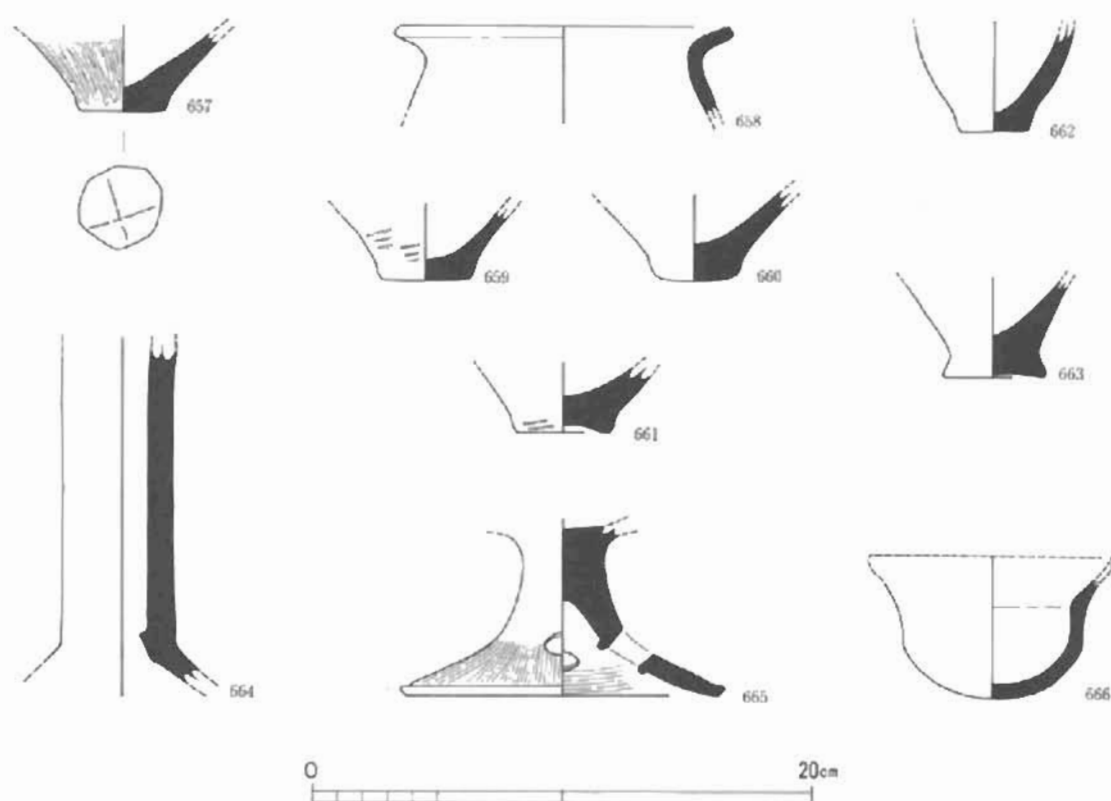
番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
640	甬	口径 (17.4) 底径 器高 残5.0 頸径 (11.0) 体部径	外面 口縁部ヨコナテ 内面 口縁部ヨコナテ	外面：橙 内面：浅黄橙	口縁部1/8	
641	甬	口径 (16.2) 底径 器高 残7.6 頸径 (10.6) 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、頸部7条/cmタテハケ、体部との接合部ヨコハケ 内面 口縁部ヨコナテ、頸部7条/cmヨコハケ、一部タテナテ	外面：土に近い 内面：灰褐	口縁部僅か 頸部1/6	
642	甬	口径 (17.3) 底径 器高 残12.9 頸径 (13.2) 体部径 (19.0)	外面 口縁部ヨコナテ、頸部僅いヨコナテ、体部ナテ、一部ハケ 内面 口縁部ヨコナテ、体部ナテ、粘土結核	外面：所赤 内面：明赤褐	口縁部-体 部約1/4	
643	甬	口径 11.8 底径 器高 残9.0 頸径 9.0 体部径 (15.8)	外面 口縁部ヨコナテ、体部磨減のため調整不明 内面 口縁部ヨコナテ、体部磨減のため調整不明	外面：土に近い 内面：橙	口縁部約 1/4、体部約 1/8	
644	甬	口径 (14.0) 底径 器高 残8.1 頸径 (10.6) 体部径 (15.8)	外面：磨減のため調整不明 内面：	外面：橙 内面：橙	口縁部-体 部約1/8	
645	甬	口径 (10.2) 底径 器高 残5.3 頸径 9.3 体部径 (10.8)	外面 口縁部ヨコナテ、体部ナテ 内面 口縁部ヨコナテ、体部ナテ	外面：明赤褐 内面：淡黄	口縁部-体 部約1/6	
646	鉢	口径 28.3 底径 器高 残21.9 頸径 23.4 体部径 26.0	外面 口縁部ヨコナテ、体部3条/cmタテハケ、のち10条/cmタテハケ、のち横方向ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナテ、体部磨減のため調整不明	外面 明赤褐 内面 橙	約2/3	
647	高坏	口径 16.5 底径 器高 残5.8 脚径残 3.6 坏部高 3.5	外面 口縁部ヨコナテ、のち坏部下位横ヘラミガキ、中・上位縦ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナテ、坏部横ヘラミガキ、円板光埋	外面 灰白 内面 灰白	坏部11/12完 存	
648	高坏	口径 15.2 底径 器高 残5.3 脚径残 2.5 坏部高	外面 坏部8条/cmタテハケ、のち口縁部ヨコナテ 内面 坏部8条/cmヨコハケ、のち横ヘラミガキ、口縁部ヨコナテ	外面 橙 内面 浅黄橙	坏部約3/4	
649	高坏	口径 (14.0) 底径 器高 残5.0 脚径残 3.1 坏部高	外面 坏部一部ヘラミガキ、のち口縁部ヨコナテ 内面 坏部一部ヘラミガキ、のち口縁部ヨコナテ	外面 浅黄橙 内面 土に近い 橙	坏部約4/5 口縁部僅か すか	
650	高坏	口径 底径 (10.6) 器高 残6.9 脚径残 3.0 坏部高	外面 調整のため調整不明 内面 頸部6条/cmヨコハケ、脚径部シボリ目、粘土結核	外面 明赤褐 内面 明赤褐	脚径部完 全破損1/8	
651	鉢	口径 (10.2) 底径 器高 残4.0 頸径 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：	外面：灰褐 内面：橙	口縁部1/4 底部1/2は完 存	
652	鉢	口径 (10.8) 底径 器高 残4.5 頸径 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、体部ヘラナテ 内面 口縁部ヨコナテ、体部ヘラナテ	外面 土に近い 内面 土に近い 橙	口縁部僅か 他は11/12完 存	
653	鉢	口径 (13.2) 底径 器高 残4.7 頸径 体部径	外面 体部下位ヘラナテ、他は磨減のため調整不明 内面 磨減のため調整不明	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	約2/3	
654	鉢	口径 (11.6) 底径 器高 残5.6 頸径 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、体部ヘラナテ、底部ヘラケグリ 内面 口縁部ヨコナテ、体部ヘラナテ	外面：黄灰 内面：黄灰	約1/4	
655	甬	口径 底径 器高 残4.7 頸径 (7.9) 体部径 (8.0)	外面 口縁部ヨコナテ 内面 口縁部ヨコナテ、体部ヘラケグリ	外面 褐 内面 灰褐	約1/4	
656	器台	口径 (17.0) 底径 (14.2) 器高 11.5 頸径 体部径 4.5	外面 全体に12条/cmタテハケ、のち口縁部ヨコナテ 内面 口縁部12条/cmタテハケ、のちヨコナテ、体部ヘラナテ、頸部上 半ヘラナテ、下半ごく一部ハケ	外面：橙 内面：橙	約1/4	

SH48 (図版74・83)

- 検出状況** II-2区の南方、小微高地Cの南縁で検出された。当住居跡は同じ位置にあったSH49の埋没後に、その規模を縮小する形で構築されている。竖穴住居の建て替えにあたっては拡張する例が多いが、本住居跡にあつては土層断面の検討により、明瞭に縮小・建て替えの痕跡を認めることができた。
- 形状・規模** 平面形は円形であり、その直径は7.85mを測る。検出面から床面までの深さは30cm、床面の標高は148.55mであり、建て替え前のSH49の床面を約5cm掘り込んでいる。床面積は43.8㎡を測り、SH49よりも約22㎡狭くなっている。
- 埋土** 茶灰色あるいは黄灰色シルト質極細砂が堆積しており、中央土壌には茶褐色極細砂混じりのシルトが認められた。
- 屋内施設** 周壁溝・柱穴および中央土壌が検出された。
- 周壁溝** 周壁溝は南西の一部で途切れるが、ほぼ全周する。床面での幅10cm、底部での幅5cm、床面から底部までの深さは8cmを測る。
- 柱穴** 支柱穴は4穴が確認された。
- P1は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは55cmである。P2は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径は17cm、床面からの深さは46cmである。P3は、掘り方の



第258図 SH48



第259図 S H48出土土器

直径24cm、柱痕の直径は14cm、床面からの深さは37cmである。P 4は、掘り方の直径27cm、柱痕の直径は16cm、床面からの深さは22cmを測る。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.85m、P 2～P 3間が2.85m、P 3～P 4間が2.92m、P 4～P 1間が2.85mとなっており、これら支柱穴を結ぶ範囲はほぼ正方形を示していることが分かる。

中央土壇 支柱穴を結ぶ範囲をほぼ占める状態で中央土壇が設けられている。

中央土壇の掘り込みは二段になっている。上段の平面形は幅80cm、長さ120cmの長方形であり、これより15cm下にある下段のそれは直径60cmの円形を呈している。床面から土壇の底までの深さは47cmを測る。土壇の肩部は焼土化しているが、埋土には焼土や炭層は認められなかった。

土手を含む中央土壇の面積は7.2㎡であり、対床面積比は16.4%である。

なお、この中央土壇の周囲には盛土による土手が全周している。土手の規模は直径2.90m、幅は55～80cm、高さ3cmである。

出土遺物 遺物は土器のみであり、埋土から甕・高坏・鉢が出土している。

甕 出土量がやや多いようであり、その底部にはへらによる十字形の記号を残すものが含まれている。

高坏 柱状部は、細長い円筒状のものと、短いものの二者がある。

小型丸底甕 1個体出土している。口縁部を欠損している。

時期 川除3期である。

第94表 SH48出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
657	壺	口径 底径 3.2 器高 残3.2 頸径 体部径	外面 体部～底部巾2mm程ヘラミダキ 内面 磨滅のため調整不明	外面：灰黄 内面：灰黄	底部定存 体部わずか	
658	壺	口径 (13.0) 底径 器高 残3.6 頸径 (11.0) 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、体部不定方向ナデ 内面 口縁部ヨコナデ、体部不定方向ナデ	外面 褐灰 内面 灰白 灰	口縁部～体 部の1/8	
659	壺	口径 底径 3.5 器高 残2.8 頸径 体部径	外面 ナメキ 内面 ヘラナデ(工具痕残る)	外面 土い れ 内面 土い れ	底部定存 体部わずか	
660	壺	口径 底径 3.0 器高 残3.7 頸径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 ナデ	外面 灰白 内面 灰白	底部定存 体部わずか	
661	壺	口径 底径 3.6 器高 残2.6 頸径 体部径	外面 底部タタキ一部残る、他は磨滅のため調整不明 内面 ナデ	外面 浅黄褐色 内面 浅黄褐色	底部定存 体部わずか	
662	鉢	口径 底径 2.7 器高 残4.2 頸径 体部径	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 灰白 内面 灰黄褐色	口縁部欠約 1/2	
663	鉢	口径 底径 4.0 器高 残4.0 頸径 体部径	外面 体部ヘラナデ、底部エヒオサエ 内面 体部ナデ	外面 灰黄 内面 灰白	底部一部欠 体部わずか	
664	高坏	口径 底径 器高 残13.8 脚柱径：4.4 坏部高	外面 内面 磨滅のため調整不明	外面 赤褐色 内面 赤褐色	脚柱部(1/2 定存) 坏部 わずか	
665	高坏	口径 底径：13.4 器高 残6.8 脚柱径：5.3 坏部高	外面 脚柱ミダキ、底部アハラのちミダキ、1孔 内面 底部ハナ一部残る、のちナデ	外面 赤褐色 内面 浅黄褐色	脚柱1/6欠	
666	壺	口径 底径 器高 残4.5 頸径 体部径 (7.1)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 黒褐色 内面 土い れ	口縁部欠 約1/4	小型丸底壺

SH49 (図版74・83)

検出状況 II-2区の南、小微高地cの南縁で検出された。当住居跡は同心円状に建て替えが認められるが、支柱穴の位置が変化しているため、建て替え前の古い住居跡をSH49、新しいものをSH48とする。先述したように、この住居跡は縮小・建て替えが行われていることが分かった。

形状・規模 平面形は円形である。直径は約9.5mである。検出面から床面までの深さは30cm、床面の標高は148.60mである。床面積は65.7㎡を測る。

埋土 SH48に切られているため、埋土は周壁際の一部で認められたのみである。茶灰色あるいは茶褐色のシルト混じり極細砂が堆積している。

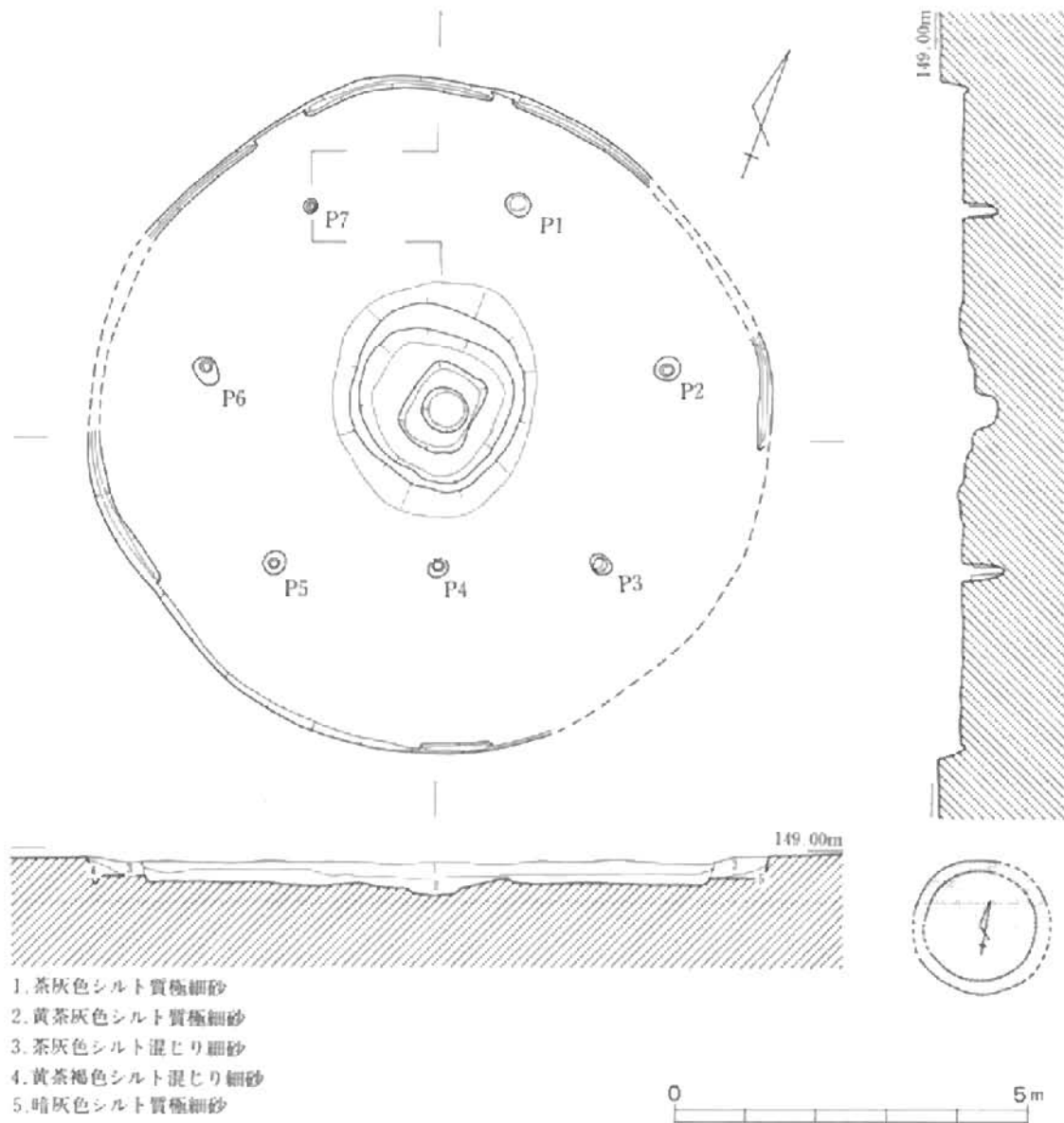
屋内施設 周壁溝・柱穴が検出された。本住居跡の中央土壇は、のちに構築されたSH48に削平されているものと思われ、残存していなかった。

周壁溝 周壁溝は断続的に認められ、周壁に沿って全周している。支柱穴付近に周壁溝の途切れる部分が数ヶ所で認められた。

周壁溝の床面での幅は10cm、底部での幅4cm、床面から溝底部までの深さは約4cmを測る。

柱穴 支柱穴は7穴が確認された。

本遺跡においても、支柱は堅穴住居跡の中心点から等距離にあるものが多いが、当住居



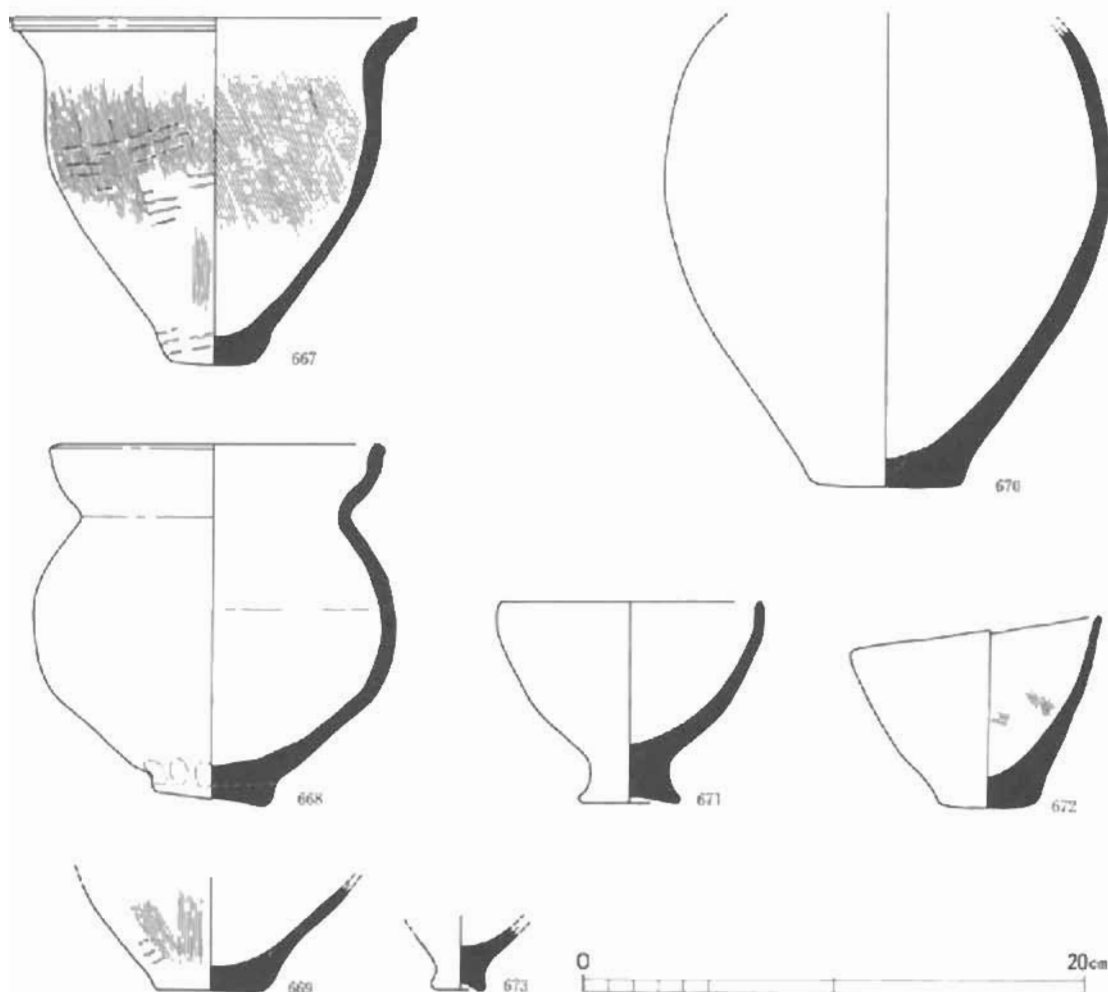
第260図 SH48

跡はP4がやや内側に寄るため、P3・4・5が直線上に並ぶように配列されている。

P1は、掘り方の直径35cm、床面からの深さは41cmである。P2は、掘り方の直径38cm、柱痕の直径は19cm、床面からの深さは46cmである。P3は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径は18cm、床面からの深さは48cmである。P4は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径は15cm、床面からの深さは57cmである。P5は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径は15cm、床面からの深さは48cmである。P6は、掘り方の直径33cm、柱痕の直径は18cm、床面からの深さは33cmである。P7は、掘り方の直径20cm、柱痕の直径は12cm、床面からの深さは18cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間が3.12m、P2～P3間が2.86m、P3～P4間が2.26m、P4～P5間が2.30m、P5～P6間が2.94m、P6～P7間が2.68m、P7～P1間が3.00mとなっている。

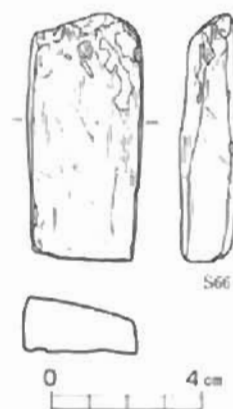
中央土壌 この住居跡に伴う中央土壌は確認できなかった。これを切る住居跡SH48の中央土壌は



第261図 S H49出土土器

整った形態を示し、2つの中央土壌が切り合っているようにはみえないため、完全に削平されている可能性が高い。

- 出土遺物** 遺物は土器と石器であり、すべて床面直上から出土している。
- 土器** 甕および鉢のみが出土している。
- 甕** V様式系のもので口縁端部をわずかにつまみあげて端面を形成するものや、口縁部が内湾するものなどがある。
- 鉢** 成形第一段階の逆円錐台を利用した平底のもの他に、低い脚台の付くものがある。
- 砥石** 北東隅の床面で検出された柱穴より砥石が1点出土している。この柱穴は住居跡に伴う遺構ではなく、また、他の遺構を構成する柱穴でもないことから、この項で記すこととする。S 66は、仕上げ用の小型の砥石である。主に上下の2面を研磨に使用しており、刃傷が多く残っている。一端が折れており、残存長は7.6cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmを測る。石材は凝灰質泥岩である。
- 時期** 川除3期である。



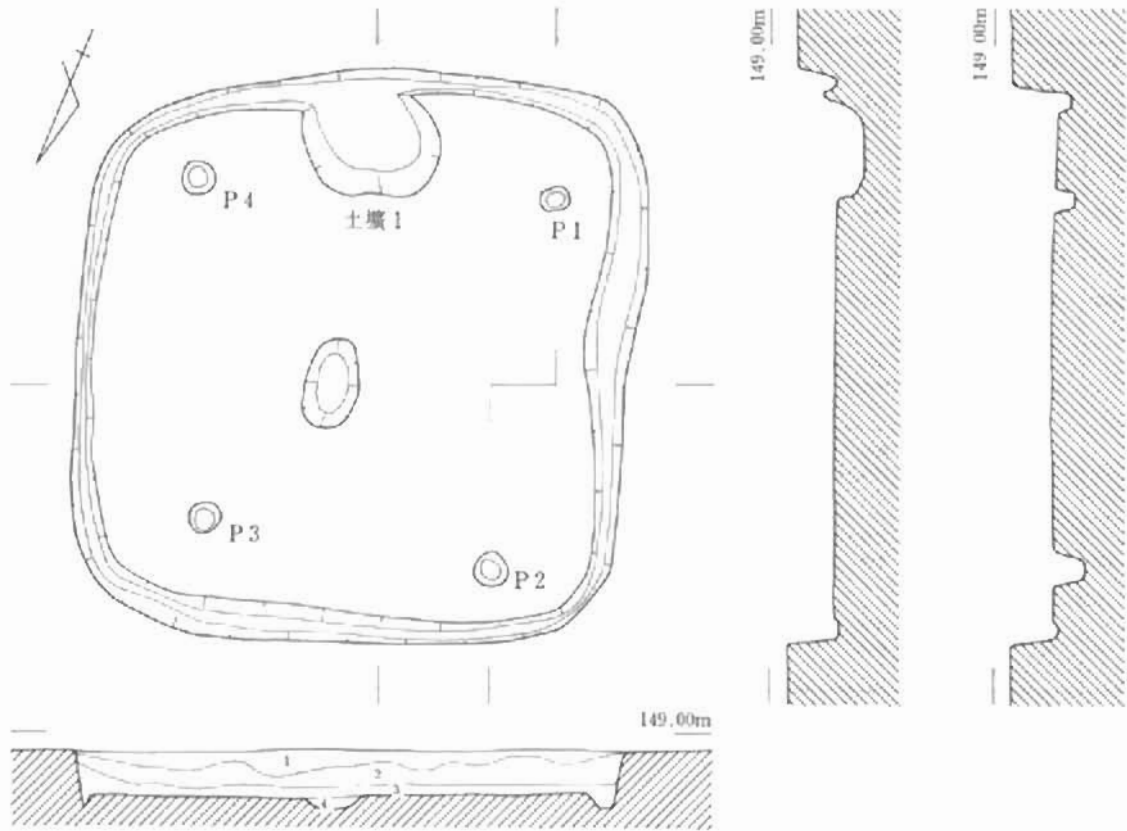
第262図 S H49出土石器

第95表 SH49出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
667	甕	口径 (15.8) 底径 (3.5) 器高 13.8 胴径 (13.5) 体部径 (13.5)	外面：口縁部凹凹部、口縁部ヨコナテ、体部アタキのちり染/cmタテハケ 内面：口縁部ヨコナテ、体部上半10葉/cmタテハケ	外面：にふい 黄褐色 内面：灰白	底部完存 口縁部へ体 部約1/2	
668	甕	口径 (12.5) 底径 (4.5) 器高 (14.4) 胴径 (10.8) 体部径 (14.4)	外面：口縁部ヨコナテ、底部ユビオサエ、他は磨減のため調整不明 内面：口縁部ヨコナテ、体部ナテ、底部ユビオサエ	外面：褐色 内面：にふい 褐色	底部完存 口縁部へ体 部約1/4	
669	甕	口径 () 底径 4.2 器高 残4.2 胴径 体部径	外面 体部アタキのちり染/cmタテハケ 内面 磨減のため調整不明	外面：にふい 褐色 内面：にふい 黄褐色	底部へ体部 約3/4	
670	甕	口径 () 底径 5.8 器高 残18.2 胴径 体部径 (17.7)	外面：磨減のため調整不明 内面：底部ユビオサエ	外面 灰白 内面 浅黄褐色	底部へ体部 約1/2	
671	鉢	口径 (10.4) 底径 (4.0) 器高 8.0 口径 (3.2) 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、他は磨減のため調整不明 内面 口縁部ヨコナテ、他は磨減のため調整不明	外面 褐色 内面 浅黄褐色	約1/2	白付鉢
672	鉢	口径 10.0 底径 4.0 器高 残(7.5) 胴径 体部径	外面 磨減のため調整不明 内面 体部12葉/cmハケ、底部へラナテ(工具痕あり)	外面 浅黄褐色 内面：にふい 黄褐色	底部完存 口縁部へ体 部約1/4	
673	鉢	口径 () 底径 2.2 器高 残2.6 口径 2.0 体部径	外面 () 内面 () 磨減のため調整不明	外面 褐色 内面 褐色	底部完存	

SH50 (図版74・83・84)

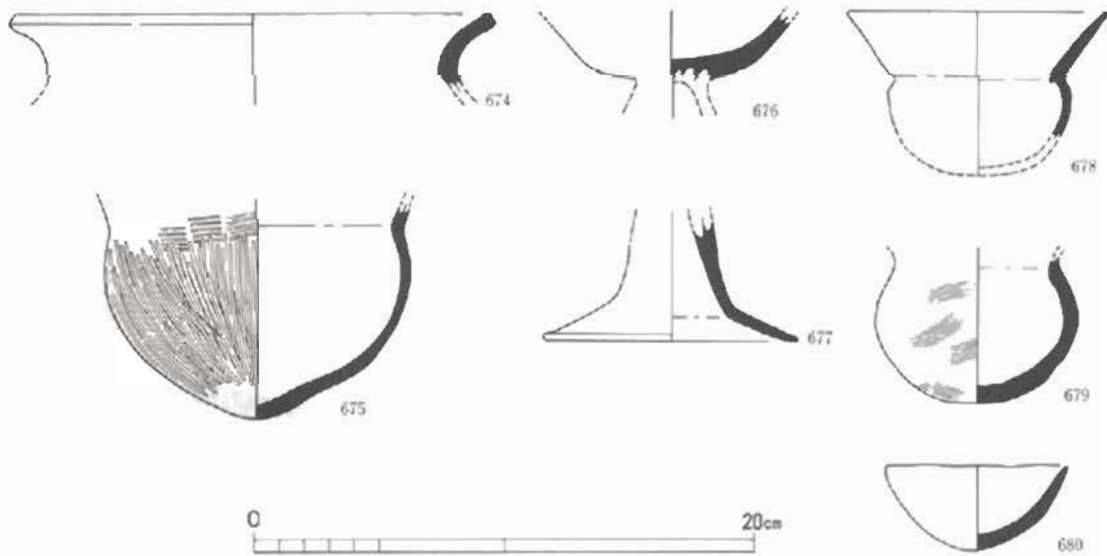
- 検出状況** II-2区の南方、小微高地cの南縁で検出された。SH48・49を切る。
- 形状・規模** 平面形は隅円方形である。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば2.70m・2.60m・2.55m・2.44mである。検出面から床面までの深さは24cm、床面の標高は148.68mである。床面積は6.9㎡と小規模である。
- 埋土** 黄灰色ないしは茶灰色のシルト質極細砂などの細粒の水平堆積が認められる。
- 屋内施設** 周壁溝・柱穴・中央土壇・土壇が検出された。
- 周壁溝** 全周する。床面での幅15cm、底部での幅7cm、床面から底部までの深さは6cmを測る。
- 柱穴** 主柱穴は4穴が確認されたが、いずれも柱痕は確認できなかった。P1は、掘り方の直径13cm、床面からの深さは10cmである。P2は、掘り方の直径17cm、床面からの深さは16cmである。P3は、掘り方の直径16cm、床面からの深さは8cmである。P4は、掘り方の直径18cm、床面からの深さは8cmである。
- 柱穴間の距離は、P1～P2間が2.00m、P2～P3間が1.55m、P3～P4間が1.82m、P4～P1間が1.92mとなっている。
- 中央土壇** 床面中央やや東寄りに設けられた楕円形の土壇であり、その規模は長径48cm、短径30cm、床面から壇底までの深さは6cmを測る。中央土壇の面積は0.12㎡であり、対床面積比は1.7%である。埋土には炭層が認められず、土壇壁も焼土化していなかった。
- 出土遺物** 遺物の量は少なく、土器のみが埋土から出土している。677・679は埋土の下層から、他は上層からの出土である。
- 甕・高坏・小型丸底壺・鉢が出土している。甕はV様式系のものであり、小型丸底壺の口縁部は直線的にのびるものである。
- 時期** 川除7期である。



1. 黄茶灰色シルト質極細砂
2. 黄灰色シルト質極細砂
3. 茶灰色シルト質極細砂
4. 暗褐色シルト質極細砂



第263図 SH50



第264図 SH50出土土器

第96表 SH50出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
674	甕	口径 (19.0) 底径: 器高 残2.9 胴径 体部径	外面:口縁部ヨコナテ 内面:口縁部ヨコナテ	外面:橙 内面:橙	口縁部1/6	
675	鉢	口径 底径: 器高 残6.5 胴径 (11.8) 体部径 (12.3)	外面:体部アタテ、のち底部と胴部を残して廻へラミダキ 内面:ナテ	外面:にふい 黄橙 内面:灰白	体部1/2	
676	高坏	口径 底径: 器高 残2.8 胴径段: 体部径	外面:坏部上半廻へラナテ、胴部との接合部不定方向ナテ 内面:坏部上半ナテ、下半へラケズリ	外面:にふい 橙 内面:淡橙	坏部下位の み	
677	高坏	口径 底径:(19.9) 器高 残5.1 胴径段: 体部径	外面:胴柱部ナテナテ、胴部ヨコナテ 内面:胴柱部横方向ケズリ、胴部ヨコナテ	外面:にふい 橙 内面:淡橙	胴柱部完存 胴部約1/2	
678	壺	口径 (10.4) 底径: 器高 残5.0 胴径 (6.5) 体部径 (7.3)	外面:口縁部ヨコナテ、胴部へラケズリ、体部不定方向ナテ 内面:口縁部ヨコナテ、体部不定方向ナテ	外面:橙 内面:淡黄橙	口縁部一体 部約1/3	小型丸底壺
679	壺	口径 底径:(12.5) 器高 残5.8 胴径段:(6.5) 体部径 (8.0)	外面:体部ナテイコホク、体部上位ヨコナテ 内面:体部エビナテ、体部上位ヨコナテ	外面:淡黄 内面:オリー ブ黒	体部1/2	小型丸底壺
680	鉢	口径 7.2 底径: 器高 残3.4 胴径: 体部径	外面:磨滅のため調整不明 内面:不定方向ナテ	外面:灰白 にふい 橙 内面:明赤黒	ほぼ完存	

SH51 (図版74)

検出状況 II-2区の南西、小微高地Cの南縁で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は長方形である。各辺の規模を北辺から順に示せば、3.45m・4.60m・3.80m・4.80mとなる。検出面から床面までの深さは25cm、床面の標高は148.60mである。床面積は17.3㎡である。

埋土 上下2層に分かれ、上層に黄茶灰色シルト混じりの極細砂～細砂が、下層には暗青灰色シルト質極細砂が堆積している。

屋内施設 周壁溝が検出されたのみであり、支柱穴・中央土壇・焼土面も確認できなかった。

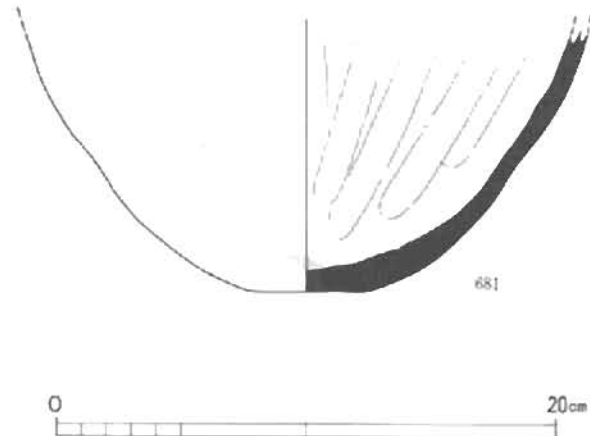
周壁溝 周壁溝は北辺の一部で途切れるが、ほぼ全周している。床面での幅12cm、底部での幅6cm、床面から底部までの深さは10cmを測る。

柱穴 支柱穴は確認されなかった。

周壁外に柱の存在も考えられたが、明瞭な柱穴は認めることができなかった。

出土遺物 遺物は土器のみが埋土から出土している。

壺・甕・高坏・鉢・小型丸底壺が出土している。壺には直口壺が、甕にはV様式系のものと布留式に含まれるものの二者が存在する。鉢は2個体以上、小

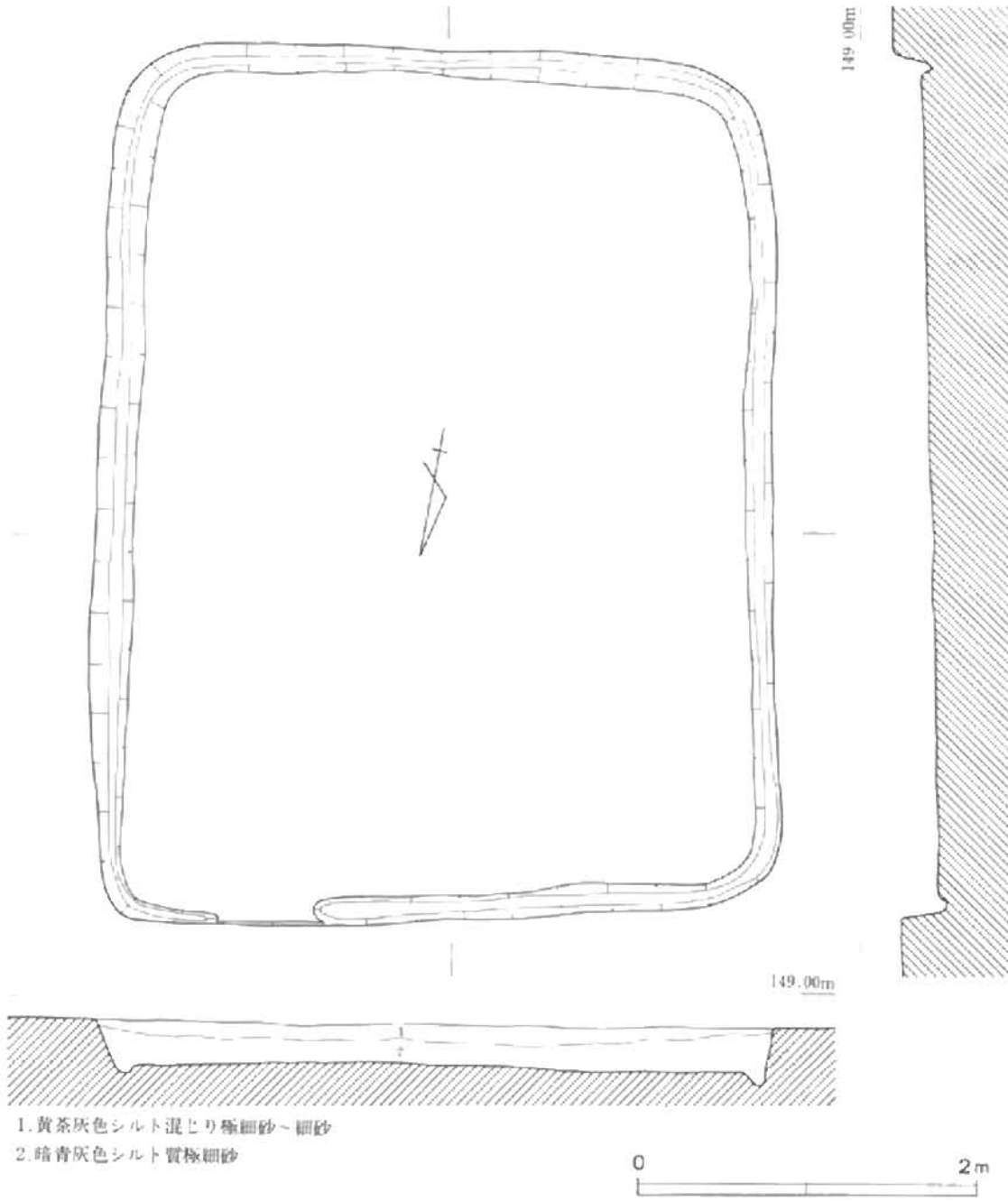


第265図 SH51出土土器

型丸底壺は4個体以上がある。

時期

出土土器から川除7期と考えられる。



第266図 SH51

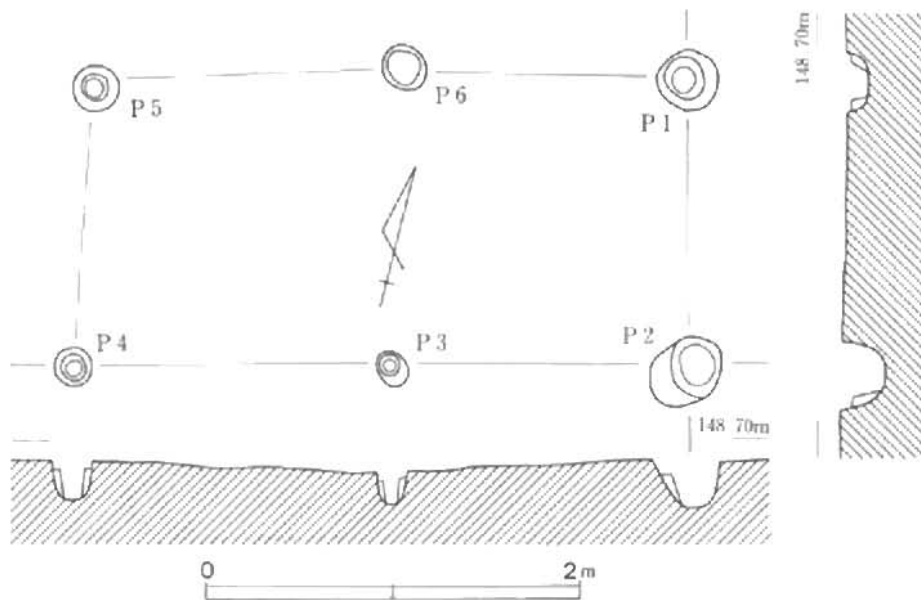
第97表 SH51出土土器観察表

番号	器種	径 (cm)	観察	色調	残存率	備考
661	壺	口径 直径 4.1 器高 残10.2 口径 体部径	外面：磨滅のための調整不明 内面：体部縦方向の筋いへラナド	外面 橙 内面 灰白	体部一底部 約1/3	

(2) 掘立柱建物

SB26

- 検出状況** II-2区の南東部で検出された。
- 規模・形状** N-76-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向が3.23m、梁行方向が1.50mである。面積は4.84㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行が1.62m、梁行が1.50mである。
- 柱穴** 掘り方の直径は20~42cm、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~13cmである。深さは15~23cmを測る。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。従って明確な時期は決定できないが、弥生時代後期~古墳時代前期のものと考えたい。
- 時期** 埋土の類似より、川除2~7期と考えられる。



第267図 SB26

(3) 土壇

SK47

- 検出状況** II-2区の東部で検出された。SH33の北東5mにあたる。SK48に切られている。
- 形状・規模** 平面形は長方形を呈する。検出面における長さは長軸で2.95m、短軸で2.12mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは27cmである。土壇底部における長軸は2.65m、短軸は1.94mを測る。
- 埋土** 上から灰色砂混じりシルト層、暗灰色シルト層の2層が堆積していた。特に第2層は地山の土をブロックで含む淘汰の悪い層で、下層に炭片が集積していた。
- 出土遺物** 土器のみが出土しているが図化できるものはなかった。器種として確認できるのは壺のみである。壺は、広口壺の口縁部で、端部に円形浮文が貼り付けられている。他に壺か甕の底部片が出土している。
- 時期** 出土土器から川除2~6期と考えられる。

SK49

検出状況 D-2区の東部で検出された。SK48に切られている。

形状・規模 平面形は不整形気味の隅円長方形である。SK48に切られているため、長軸については正確な規模は明らかにしえない。残存する規模は1.96mである。これに対して直交方向については確実におさえることができ、1.54mである。また底部においては1.46mである。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは30cmである。

埋土 3層に分れる。上の2層については人為的に埋めたようで、地山の土がブロック状に混入するなど、淘汰の悪い層である。最下層については、有機質を多く含むシルト層で、層中に多くの炭片が含まれていた。

出土遺物 埋土中から土器のみが出土している。器種としては、壺・甕・鉢・器台が出土している。いずれも細片で、図化できたのは壺・鉢・器台の3個体のみである。

壺 図化できたのは、底部片のみである。

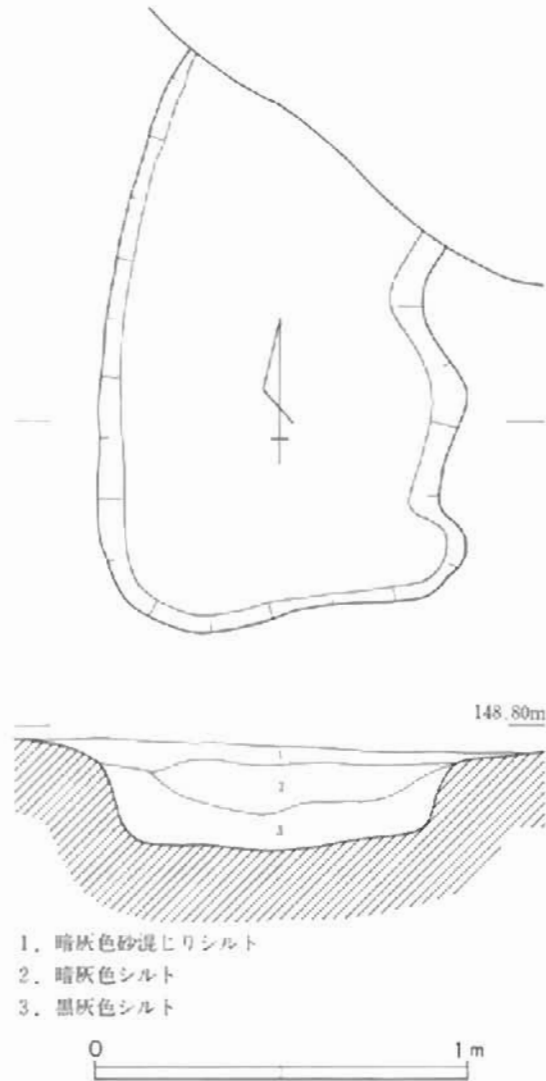
この他に直口壺の口縁部片が出土している。

甕 1点も図化できなかつたが、口縁部片・体部片・底部片が出土している。体部片はタタキ目を有するものである。また底部片は、平底の底部に混じって丸底に近い底部のものも認められる。

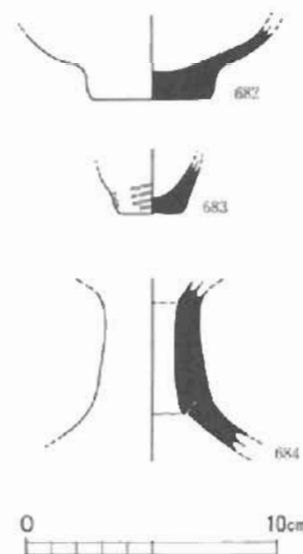
鉢 図化できた土器は小型鉢の底部片のみである。この他に、中型ないし大型の破片が出土している。

器台 図化できたのは筒部片のみで、口縁部と脚部を欠くものである。

時期 出土土器から、弥生時代後期であることは間違いないが、甕の底部片に丸底に近いものが出土していることから、川除6期と考えられる。



第268図 SK49



第269図 SK49出土土器

第98表 SK49出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
682	壺	口径 口径 4.8 器高 残2.9 胴径 体部径	外面：体部～底部へラナデ 内面：ナデ	外面：黒褐 灰白 内面：灰白	底部完存 体部わずか	
683	鉢	口径 口径 2.6 器高 残2.1 胴径 体部径	外面：体部～底部3箇所/cmメタキ、のちナデ 内面 ナデ	外面：にぶい 青 内面：灰白	底部完存 体部わずか	
684	器白	口径 口径 器高 残6.9 胴径 体部径	外面：体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部へラナデ、腹部ヨコナデ	外面：灰白 内面：にぶい 青	体部完存	

SK50 (図版84)

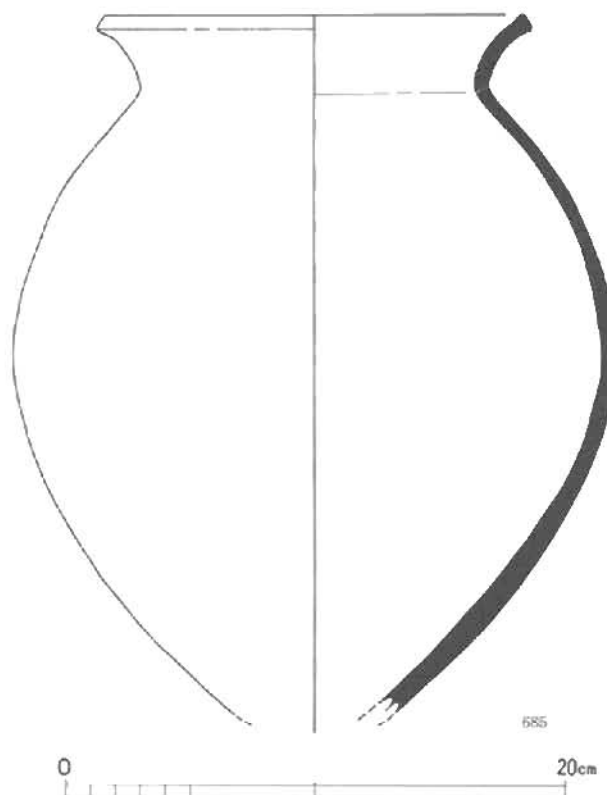
検出状況 II-2区の東部で検出された。SH33の南西部に隣接する位置にあたる。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 平面形はやや不整形気味であるが楕円形を呈する。長軸で1.80m、その直交方向で1.26mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは14cmである。底部の規模は、長軸で1.38m、短軸で0.80mである。

埋土 上から黒灰色シルト層、黄灰色シルト層の2層が堆積していた。

出土遺物 土器のみが出土している。土器は甕の1点のみで、半截された形で土壌底より出土している。

時期 出土土器より川除3期と考えられる。



第270図 SK50出土土器

第99表 SK50出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
685	甕	口径 116.6 底径 器高 残27.5 胴径 114.0 体部径 124.2	外面 内面 唐瓦のため調整不明	外面 灰白 内面 黄灰	口縁部～体部約1/2 底部欠損	スズ付着

SK53 (図版84)

検出状況 II-1区の西側で検出された。SK54の北東2mに位置する。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 平面形は円形に近い楕円形である。検出面における長さは長軸で1.67m、その直交方向で1.54mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは中央部で37cmである。土壌底における長軸は1.46m、その直交方向で1.25mを測る。

埋土 上から、暗黄褐色砂混じりシルト層、褐灰色砂質シルト層、黒灰色シルト層、暗灰色砂混じりシルト層の4層が堆積していた。層相からみて、2層以下は人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物 埋土中、特に第2・3層を中心に土器が出土している。土器の出土状況を詳しく観察すると、北東部で出土した土器のレベルは高く、逆に南西部で出土した土器は土壌底に近い位置で出土している。

このことから、北東側から投棄されたものと考えられる。

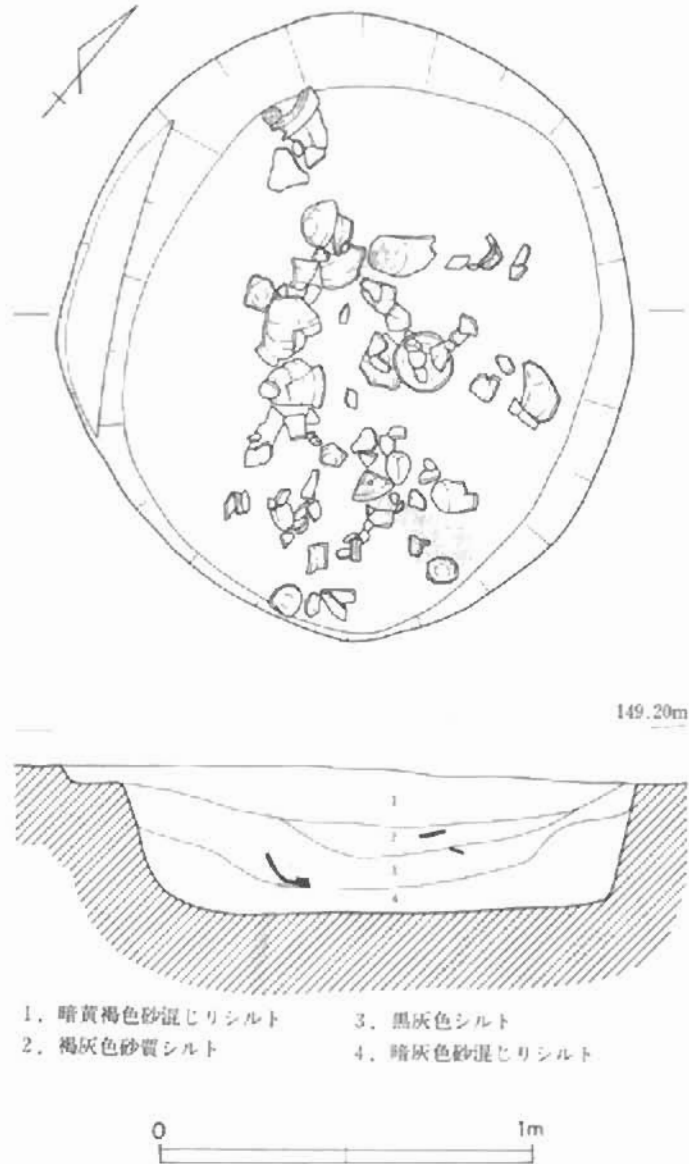
壺 器種としては、壺・甕・高環が出土している。特に甕の出土が目立つ。

量的には少ないが、広口壺と直口壺および底部片が出土している。

甕 法量からみると大型・中型・小型の3タイプが認められる。また、成形技法などからみると、V様式系のものと、口縁部を上方につまみあげ、端面に擬凹線を施す丹波地方によくみられる特徴をもつものが認められる。比率としては前者が圧倒的に多い。また、両タイプとも内面をへら削り調整により仕上げるものは認められない。なお底部片は、すべてV様式系のもので、明瞭な平底を呈するものである。

高環 図化できたのは脚部片の1個体のみである。

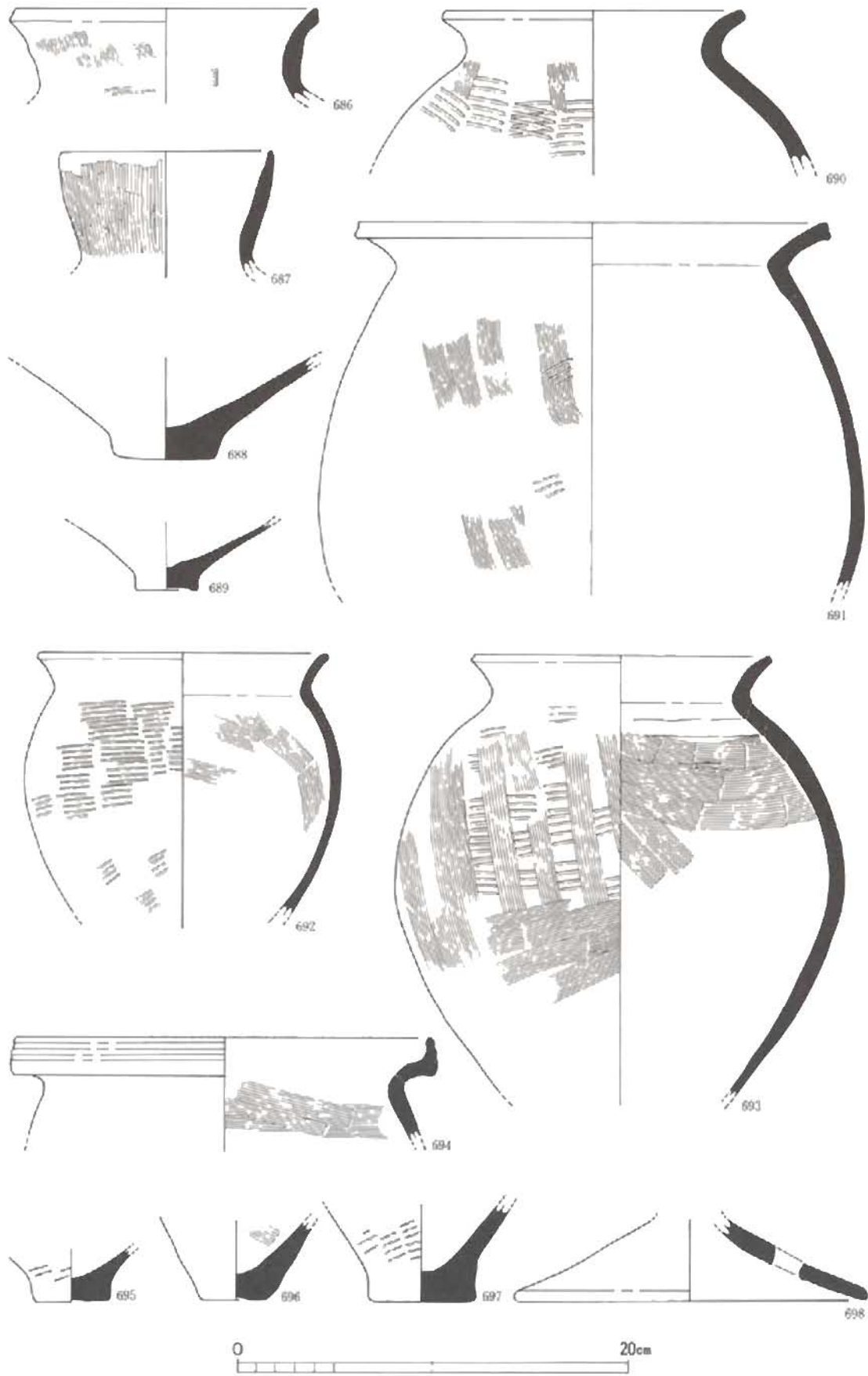
時期 出土土器から川除3期と考えられる。



1. 暗黄褐色砂混じりシルト
2. 褐灰色砂質シルト
3. 黒灰色シルト
4. 暗灰色砂混じりシルト

第271図 SK53

第4節 II区の調査



第272図 SK53出土土器

第100表 SK53出土土器観察表

番号	器種	注量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
686	壺	口径 15.3 底径: 器高 残4.6 頸径:12.6 体部径	外面:口縁部タテハケ, のちヨコナデ 内面:口縁部タテハケ, のちヨコナデ	外面:灰白 赤灰 内面: *	口縁部完存	
687	壺	口径 (19.7) 底径: 器高 残6.2 頸径 (8.8) 体部径	外面:口縁部へ唇部輪ヘラミダシ, のち口縁部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ, 唇部ヘラミダシ	外面:褐灰 内面:褐灰	口縁部へ唇 部の1/8	
688	壺	口径 底径:5.2 器高 残5.2 頸径: 体部径	外面: 内面: 磨滅のための調整不明	外面:にじい 黄橙 内面:淡黄橙	底部完存 体部わずか	
689	壺	口径 底径:3.2 器高 残3.2 頸径: 体部径	外面:底部ヒビオサエ, 他は磨滅のための調整不明 内面:磨滅のための調整不明	外面:橙 内面:橙	底部完存 体部わずか	
690	甕	口径 (15.0) 底径: 器高 残7.7 頸径 (13.0) 体部径	外面:口縁部ヨコナデ, 体部2条/cmタテキのち18条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部4条ナデ	外面:明褐色 内面:明褐色	口縁部一 部の1/4	
691	甕	口径 (23.9) 底径: 器高 残18.3 頸径 (19.9) 体部径 (28.0)	外面:口縁部ヨコナデ, 体部タテキのち10条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部は磨滅のための調整不明	外面:にじい 赤橙 内面:灰白	口縁部一 部の1/6	
692	甕	口径 (14.5) 底径: 器高 残13.2 頸径 (13.2) 体部径 (16.2)	外面:口縁部タテナデ, 体部4条/cmタテキ 内面:口縁部タテナデ, 体部7条/cmタテハケ	外面:黄橙 灰白 内面:褐灰	体部の1/3 口縁部僅か	
693	甕	口径 15.0 底径: 器高 残22.2 頸径 (13.2) 体部径 (23.0)	外面:口縁部ヨコナデ, 体部4条/cmタテキのち5条/cmタテハケ 内面:口縁部ヨコナデ, 体部9条/cmタテハケ	外面:灰白 褐灰 内面:褐灰	口縁部3/4 体部1位以 下欠損	スズ付電
694	甕	口径 (21.4) 底径: 器高 残5.2 頸径 (18.3) 体部径	外面:口縁部曲輪内側, 口縁部ヨコナデ 体部タテキのちナデか 内面:口縁部ヨコナデ, 体部7条/cmタテハケ	外面:灰白 にじい 内面:褐灰	口縁部へ 部の1/6	
695	甕	口径 底径:3.8 器高 残2.6 頸径: 体部径	外面:体部一部タテキ残る, 底部ヒビオサエ 内面:磨滅のための調整不明	外面:明赤灰 灰白 内面:明赤灰	底部完存 体部わずか	
696	甕	口径 底径:3.5 器高 残4.0 頸径: 体部径	外面:体部一部タテキ残る, のちナデか 内面:体部ヨコハケ	外面:灰白 内面:灰白	底部完存 体部わずか	
697	甕	口径 底径:5.5 器高 残4.9 頸径: 体部径	外面:体部3条/cmタテキ, 底部ナデ 内面:タテハケ 部残る	外面:橙 灰白 内面:褐灰	底部完存 体部わずか	
698	高坏	口径 底径 (17.5) 器高 残4.2 頸径 坏部高	外面: 内面: 脚部内孔(個数不明) 磨滅のための調整不明	外面:灰白 内面:にじい 黄橙	脚部の1/4	

SK54 (図版69・84・85・89)

検出状況 II-1区南西部に位置する。SK53の南西2mに位置する。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は楕円形気味の隅円長方形を呈する。検出面における規模は長軸方向で3.90m、その直交方向で1.91mを測る。横断面は皿形を呈し、土壌中央部における検出面からの深さは15cmである。

埋土 灰褐色砂混じりシルト層の1層である。しかし、土壌自体が比較的浅い割りに大変多くの土器片が出土しており、埋土の大半はこの土器片であった。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 土壌内の底部より若干浮いた状態で、細かい土器片が詰め込まれた状態で出土している。このため、出土した土器量は大変多いのであるが、復元・図化された土器は出土量に比べ

るとわずかである。

器種としては、壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している。量的には甕が大半を占めるが、壺・高坏も比較的多く出土している。

壺 完存するものはなく、口縁部片と底部片が大半を占める。

口縁部まで残存するものはほとんど広口壺に分類されるものである。ただし、口縁部の形態にはバリエーションが認められ、いくつかに細分が可能である。

なお、700と701と712はともに、胎土が河内産の特徴を示すものである。これら3個体については、接合することはできなかったが同一個体の可能性もある。そして、同一個体とすると二重口縁壺になる可能性も考えられる。

甕 口縁部まで残存する土器については大半がV様式系であるが、716については山陽地方の特徴が認められる。

特に体部内面にへら削りが施されている点は、他の甕には認められない特徴である。

底部片については、基本的には平底を呈するものであるが、一部タタキ成形により丸底を指向するものも認められる。

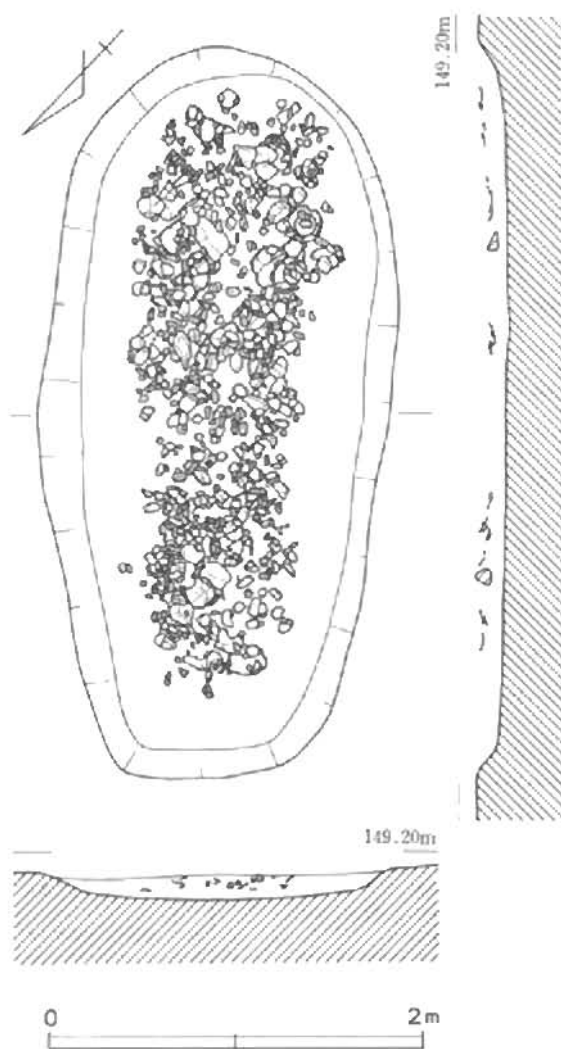
鉢 いずれも中型の鉢で、口縁部を短く外方向に屈曲させ外反させている。ただし719については、端部を上方向につまみ上げる点が他と異なる。図化したものの他に同じく中型の鉢が数個体分出土している。

高坏 図化したものは脚部片のみであるが、坏部片も出土している。脚部については、10数個体分は確認できる。また脚部の形態から、735のように坏部が坏形をなすものと、736のように碗形をなすものの2タイプが認められる。

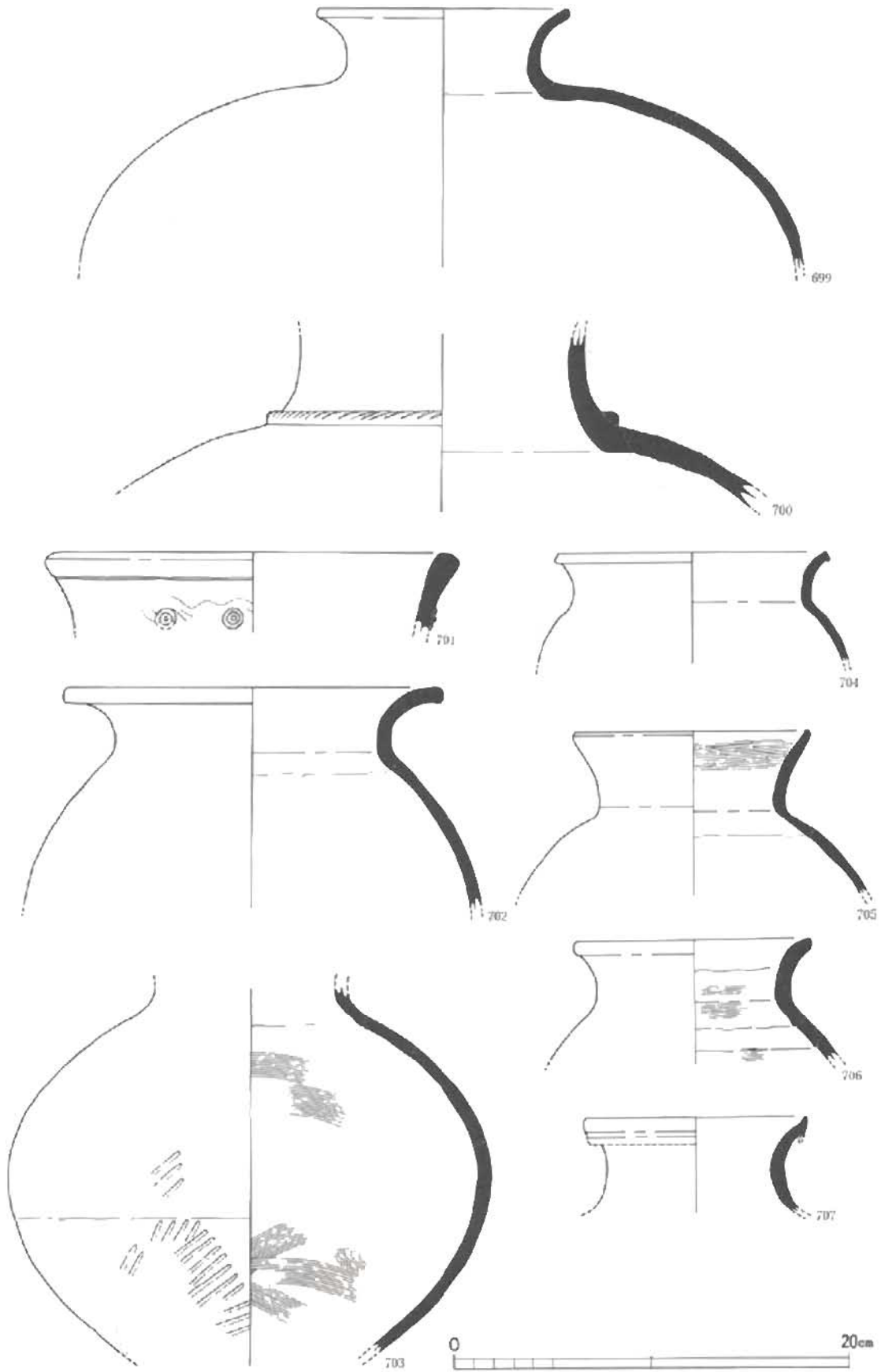
器台 筒部の小片が出土しているのみで、図化できるものはなかった。

石器 土壌底より、石核が1点出土している。材質はリソイダイトである。8cm大の円礫を母岩とするもので、数ヶ所に激しい敲打痕が観察される。

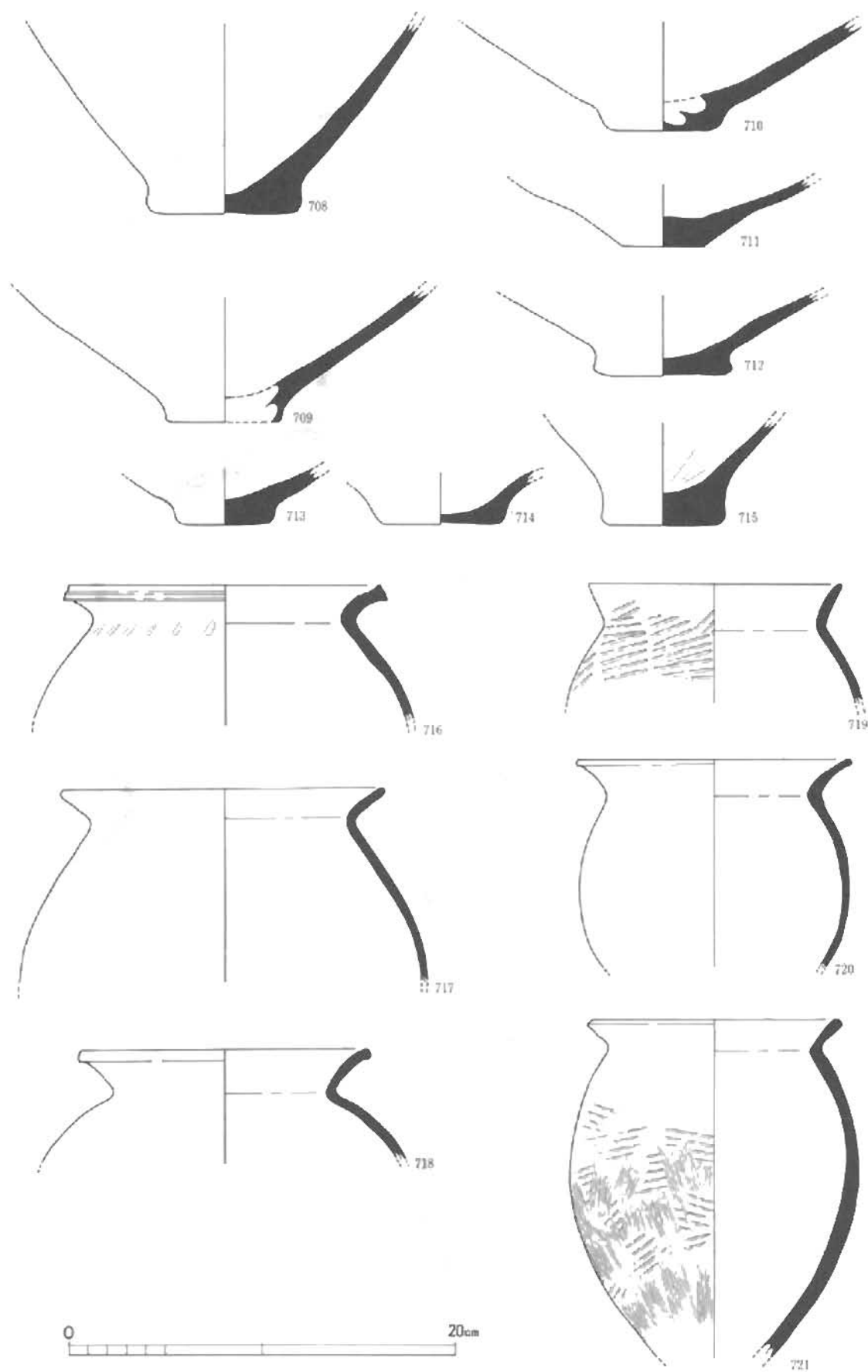
時期 出土土器から川除5期と考えられる。



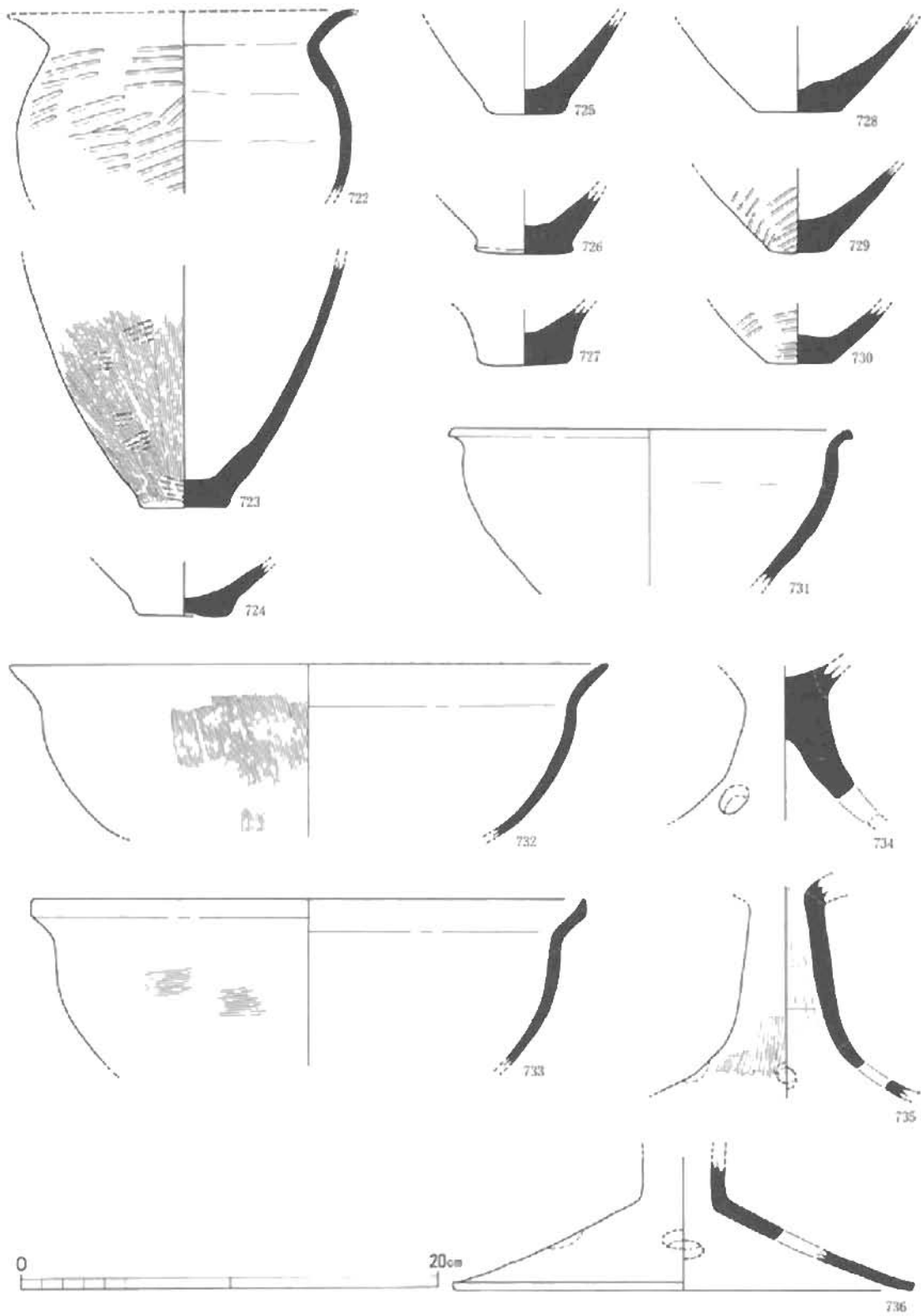
第273図 SK54



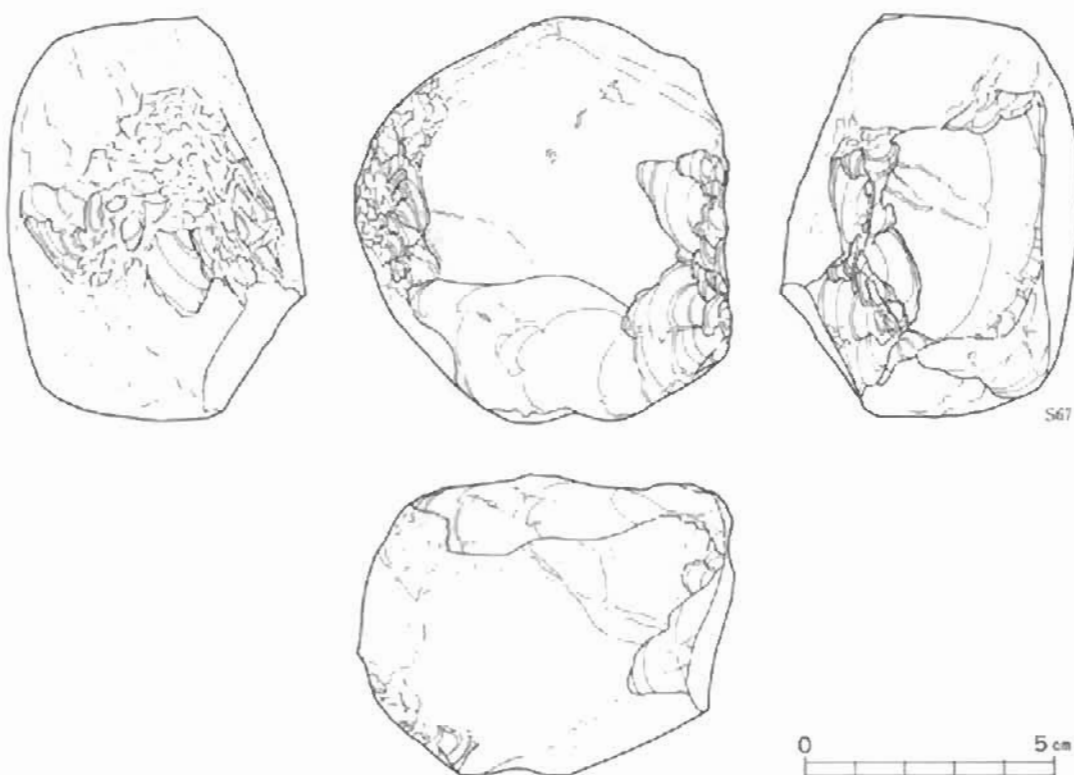
第274図 SK54出土土器(1)



第275図 SK54出土土器(2)



第276図 SK 54出土土器(3)



第277図 SK54出土石器

第101表 SK54出土土器観察表(1)

番号	器種	寸法 (cm)	具 象	色調	残存率	備考
699	壺	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残12.8 胴径 : (11.4) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部~体部約1/3	
700	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残8.9 胴径 : (17.8) 体部径 :	外面 : 胴部に対称目状突起有り。他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 濃い黄褐色 内面 : *	胴部~体部	河内産
701	壺	口径 : (18.8) 底径 : 器高 : 残4.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部波状文のち目影浮文あり有り。他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 濃い黄褐色 内面 : 濃い黄褐色	口縁部1/8以下	河内産
702	壺	口径 : (18.5) 底径 : 器高 : 残11.1 胴径 : (14.0) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ。他は磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 灰白	口縁部~体部約1/4	
703	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残18.4 胴径 : (12.0) 体部径 : (24.4)	外面 : 体部中位3条/cmマフネ。上位は磨滅のため調整不明 内面 : 体部9条/cmマフネ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 褐色	体部約1/6	
704	壺	口径 : (13.4) 底径 : 器高 : 残5.5 胴径 : (12.0) 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 濃い黄褐色 内面 : 灰白	口縁部~体部約1/5	
705	壺	口径 : (11.7) 底径 : 器高 : 残8.2 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部横ヘラミナ。体部ナテ。粘土結着	外面 : 灰白 浅黄褐色 内面 : 灰白	口縁部1/2 体部わずか	
706	壺	口径 : (11.8) 底径 : 器高 : 残6.3 胴径 : (9.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ。体部ハテ 内面 : 口縁部ヨコナテ。胴部~体部マフネ。粘土結着顕著	外面 : 褐色 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/2 体部わずか	
707	壺	口径 : (11.7) 底径 : 器高 : 残4.8 胴径 : (9.2) 体部径 :	外面 : 口縁部縦筋。他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 黄褐色 内面 : 灰	口縁部~胴部1/2以下	

第102表 SK54出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
708	壺	口径 : 底径 : 7.4 器高 : 残9.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ハケおでかに残る 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 土に近い 黄褐色 内面 : *	底部完存 体部わずか	
709	壺	口径 : 底径 : (6.0) 器高 : 残6.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ヘラミダキカ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 黄褐色	体部~底部 1/6以下	西内産か
710	壺	口径 : 底径 : (5.9) 器高 : 残5.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 赤灰 灰白	底部約1/2 体部わずか	
711	壺	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残3.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部完存 体部わずか	
712	壺	口径 : 底径 : 7.0 器高 : 残4.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 土に近い 黄褐色 内面 : *	底部一部欠 体部わずか	西内産
713	壺	口径 : 底径 : 4.6 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部一部欠 体部わずか	
714	壺	口径 : 底径 : 6.0 器高 : 残2.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 土に近い 黄褐色 内面 : 褐灰	底部ほぼ完 存 体部わずか	
715	壺	口径 : 底径 : 5.8 器高 : 残5.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 底部ヘラナデ頸一部残る	外面 : 灰黄 内面 : 灰	底部完存 体部わずか	
716	壺	口径 : 16.0 底径 : 器高 : 残 頸径 : (13.6) 体部径 :	外面 : 口縁部短脚内側, 口縁部ヨコナデ, 頸部工具痕残る(ハケリ) 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部右へ左へラケスリ	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	口縁部完存 体部わずか	
717	甕	口径 : (16.4) 底径 : 器高 : 残10.0 頸径 : (13.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部中位タテハケ一部残る, 上位はナデか 内面 : 体部ナデ, 他は磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	口縁部~体 部の約1/8	
718	甕	口径 : (14.8) 底径 : 器高 : 残6.7 頸径 : (11.4) 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 体部ナデ, 口縁部磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 土に近い 黄褐色	口縁部1/8 以下 体部わずか	
719	甕	口径 : (13.2) 底径 : 器高 : 残6.1 頸径 : (11.4) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部3条/cmタキ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデ	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	口縁部~体 部の約1/4	
720	甕	口径 : (13.8) 底径 : 器高 : 残10.7 頸径 : (11.1) 体部径 : (13.5)	外面 : 口縁部ナデ, 体部タキ 内面 : 口縁部ナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部~体 部の約1/6	
721	甕	口径 : 12.4 底径 : 器高 : 残17.3 頸径 : 10.8 体部径 : 14.8	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部2条/cmタキ, のち中位以下9条/cmタ テハケ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/2 体部ほぼ完 存, 底部欠	
722	甕	口径 : 底径 : 器高 : 残8.7 頸径 : (13.0) 体部径 : (16.0)	外面 : 体部2条/cmタキ, 口縁部磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄褐色 内面 : 灰白	口縁部欠 体部の約1/4	
723	甕	口径 : 底径 : 4.0 器高 : 残11.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3条/cmタキ, のち5条/cmタテハケ 内面 : 体部磨滅のため調整不明, 底部エビスヤス	外面 : 灰黄 内面 : 淡黄	底部完存 体部の約1/4	
724	甕	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残2.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ナデ 内面 : 体部ナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	底部完存 体部わずか	
725	甕	口径 : 底径 : 3.5 器高 : 残4.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 土に近い 橙 内面 : 土に近い 橙	底部完存 体部わずか	
726	甕	口径 : 底径 : 4.6 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 体部ナデ	外面 : 橙 土に近い 内面 : 褐灰	底部完存 体部わずか	
727	甕	口径 : 底径 : 4.1 器高 : 残2.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 土に近い 黄褐色	底部一部欠	

第103表 SK54出土土器観察表(3)

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
728	甕	口径 : 底径 : 3.8 器高 : 残4.1 胴径 体部径	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 灰	底部定存 体部わずか	二次焼成
729	甕	口径 : 底径 : 2.9 器高 : 残3.6 胴径 体部径	外面 : 体部-底部1cmタテキ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 黒 内面 : 灰	底部定存 体部わずか	
730	甕	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残3.1 胴径 体部径	外面 : 体部-底部1cmタテキ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部定存 体部わずか	
731	鉢	口径 : (18.8) 底径 : 器高 : 残7.5 胴径 : (17.5) 体部径	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部-体部1/4以下	
732	鉢	口径 : (18.7) 底径 : 器高 : 残8.3 胴径 : (25.9) 体部径	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部10cmタテキ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 明褐色 に1cm 内面 : 灰白	口縁部-体部約1/3	
733	鉢	口径 : (26.4) 底径 : 器高 : 残8.0 胴径 : (24.4) 体部径	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部10cmタテキ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 明黄褐	口縁部-体部約1/6	
734	高坏	口径 : 底径 器高 : 残7.3 胴径 : 3.9 坏部高	外面 : 内面 : 3孔 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	胴部定存 根脚欠	
735	高坏	口径 : 底径 器高 : 残16.4 胴径 : 3.5 坏部高	外面 : 胴部細ヘラ、サネ、4孔 内面 : 胴部紋目、粘土粒痕	外面 : 灰白 内面 : 灰白 褐灰	胴部定存 根脚欠	
736	高坏	口径 : 底径 器高 : 残4.4 胴径 : 4.1 坏部高	外面 : 内面 : 1孔 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 黄橙 内面 : 灰白	胴部1/3 胴部わずか	

SK55 (図版89)

検出状況 II-1区中央部南側、SH35とSH36の中間に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は不整形な隅円長方形である。検出面における長さは、長軸で184cm、短軸で133cmをはかる。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。底部における規模は、長軸で114cm、短軸で72cmである。

埋土 上から黒褐色砂混じりシルト層、暗黒灰色砂混じりシルト層が堆積していた。特に、第2層においては炭片が含まれていた。

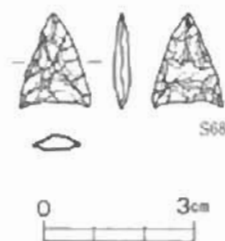
出土遺物 埋土中より土器と石器が出土している。

土器 甕・高坏が出土しているが、いずれも小片で図化できるものはなかった。甕はタタキ目を残す体部片が、高坏は坏部が出土している。

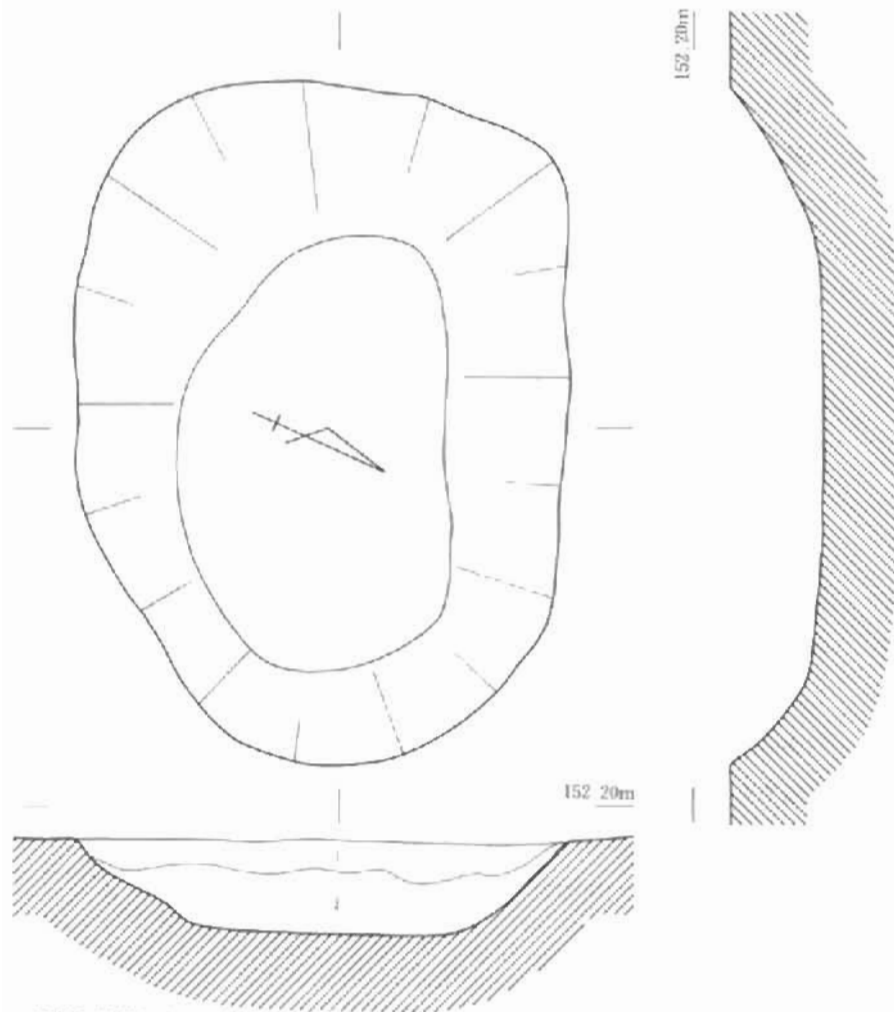
石器 石庖丁と石鏃がそれぞれ1点ずつ出土しているが、図化できたのは石鏃の1点のみである。

石鏃は平基式に分類されるものである。全長2.8cm、基部幅1.4cm、中心部における厚さ0.3cmを測る。重さは0.6gである。サヌカイト製。

時期 出土遺物から川除2～6期と考えられる。



第278図 SK55出土石器



- 1. 黒褐色砂混じりシルト
- 2. 暗黒灰色砂混じりシルト(炭含む)



第279図 SK55

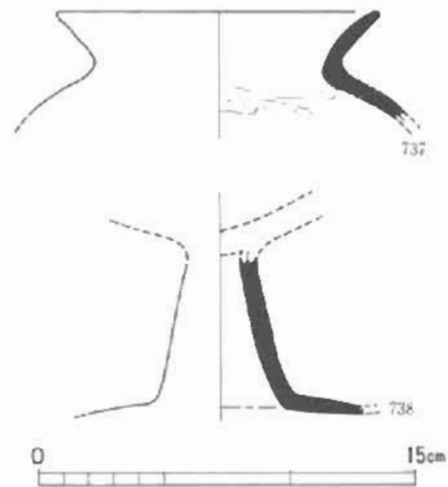
SK56 (図版69)

検出状況 II-1区の東部に位置する。他の遺構との明確な切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は、不整形気味であるが隅円長方形を呈する。検出面における長さは長軸で94cm、短軸で59cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは土壌中央部で6cmである。底部における長軸は80cm、短軸は45cmである。

埋土 黒灰色極細砂混じりシルト層1層のみである。

出土遺物 土器のみが土層埋土上面から出土している。器種としては、壺・甕・高坏が出土しているが、図化できたのは甕と高坏の2個体のみである。



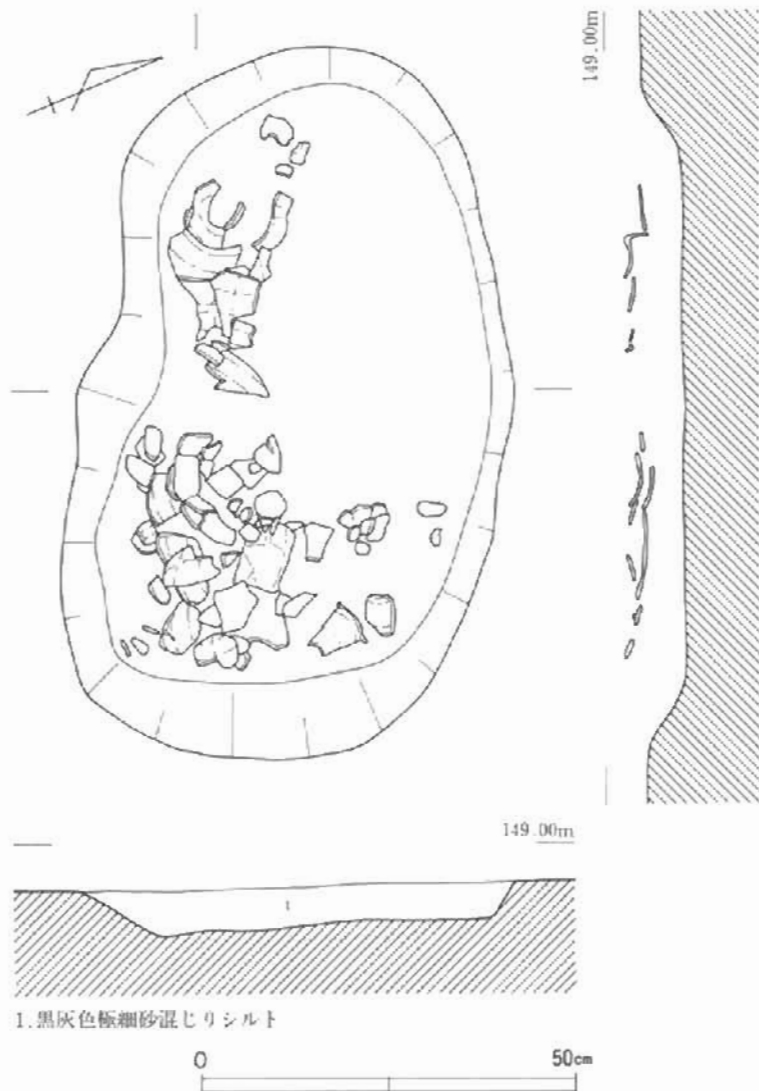
第280図 SK56出土土器

第4節 II区の調査

壺 図化できなかったものの、短頸直口壺と考えられる口縁部片が出土している。

甕 図化できたものの他に内面をヘラケズリ調整により仕上げられた体部片も出土している。

時期 出土土器がわずかであるため、時期を特定するのは困難である。ただし、甕の体部片に内面にヘラケズリを施すものが認められることから、弥生時代後期でも比較的新しい時期、川除6期と考えられる。



第281図 SK56

第104表 SK56出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
737	甕	口径 13.0 口径 器高 残4.2 頸径 19.8 体部径	外面 口縁部ココナデ、体部タタキのチナデ 内面 口縁部ココナデ、体部横ヘラケズリ	外面 橙 浅黄橙 内面 *	口縁部1/3 体部わずか	
738	高坏	口径 口径 器高 残6.4 脚柱径 2.7 坏部高	外面 脚柱部縦ヘラケズリ 内面 脚柱部横ヘラケズリ	外面 灰白 内面 土に近い 橙	脚柱部完全 残部わずか	

SK58

検出状況 II-2区内小微高地bのはば中央部で検出された。SD43を切っている。

形状・規模 平面形は楕円形を呈する。検出面における長さは長軸で80cm、短軸で66cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは土壌中央部で24cmである。土壌底における規模は長軸で55cm、短軸で52cmを測る。

埋土 上から黄褐色シルト混じり灰色砂質シルト層、褐灰色シルト層が堆積していた。なお第1層については、その層相から判断して人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物 土器のみが出土しているが、いずれも小片で図化できるものはなかった。器種として判断できるのは甕のみで、他の土器片については器種についても特定できない。甕は、平底の底部片とタタキ目を有する体部片が出土している。

時期 出土土器から判断して、弥生時代後期であることは確実である。そして、川除3～5期のSD43を切っていることから、川除5～6期と考えられる。

SK63 (図版76・85～87)

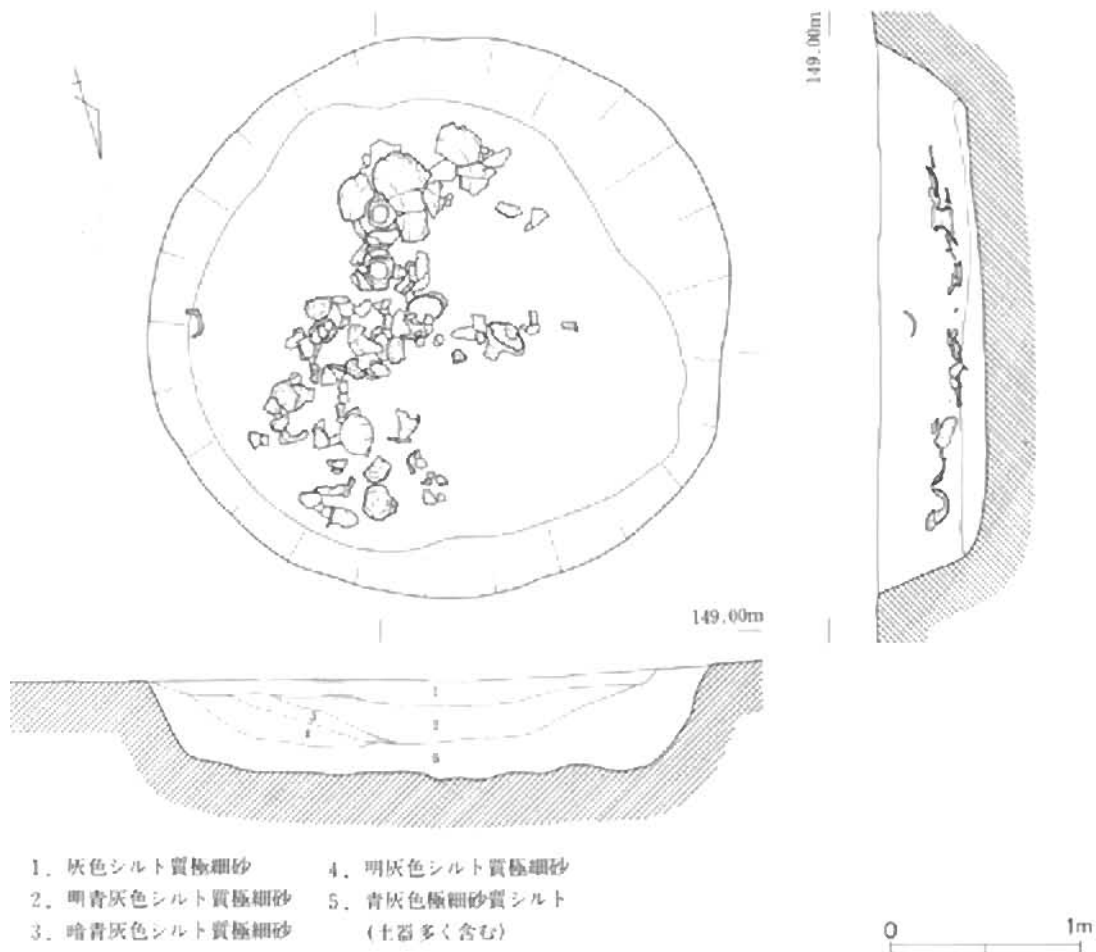
検出状況 II-3区の南東部で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められないが、円形周溝墓SX05や土器棺SX06に近接することから、これらと何らかの関連のある遺構と考えられる。

形状・規模 平面形は正円形を呈する。規模は、検出面での直径が300～316cm、土壙底での直径が240～268cmを測る。壙底は比較的平坦であり、検出面からの深さは50～60cmである。断面形は逆台形である。

埋土 5層に分かれ、灰色あるいは青灰色のシルト質極細砂やシルトなどの細粒の堆積が認められた。最下層からは土器が多量に出土している。

出土遺物 壺・甕・小型丸底壺・高環・器台などが出土した。

壺 二重口縁壺、細頸壺、広口壺などがある。細頸壺は、頸部と体部との境の不明瞭なもの



第282図 SK63

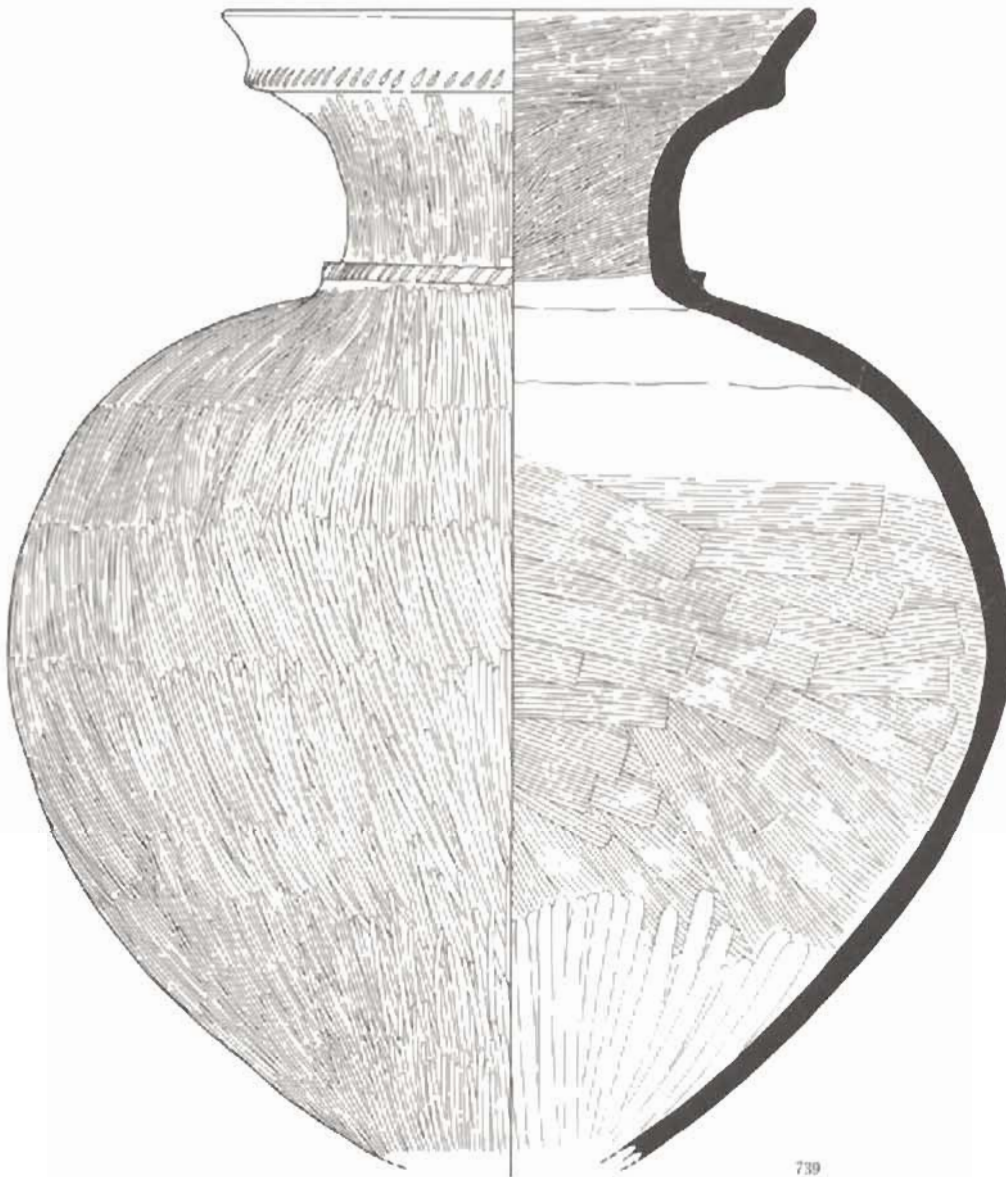
第4節 II区の調査

である。742と748は同一個体の可能性がある。

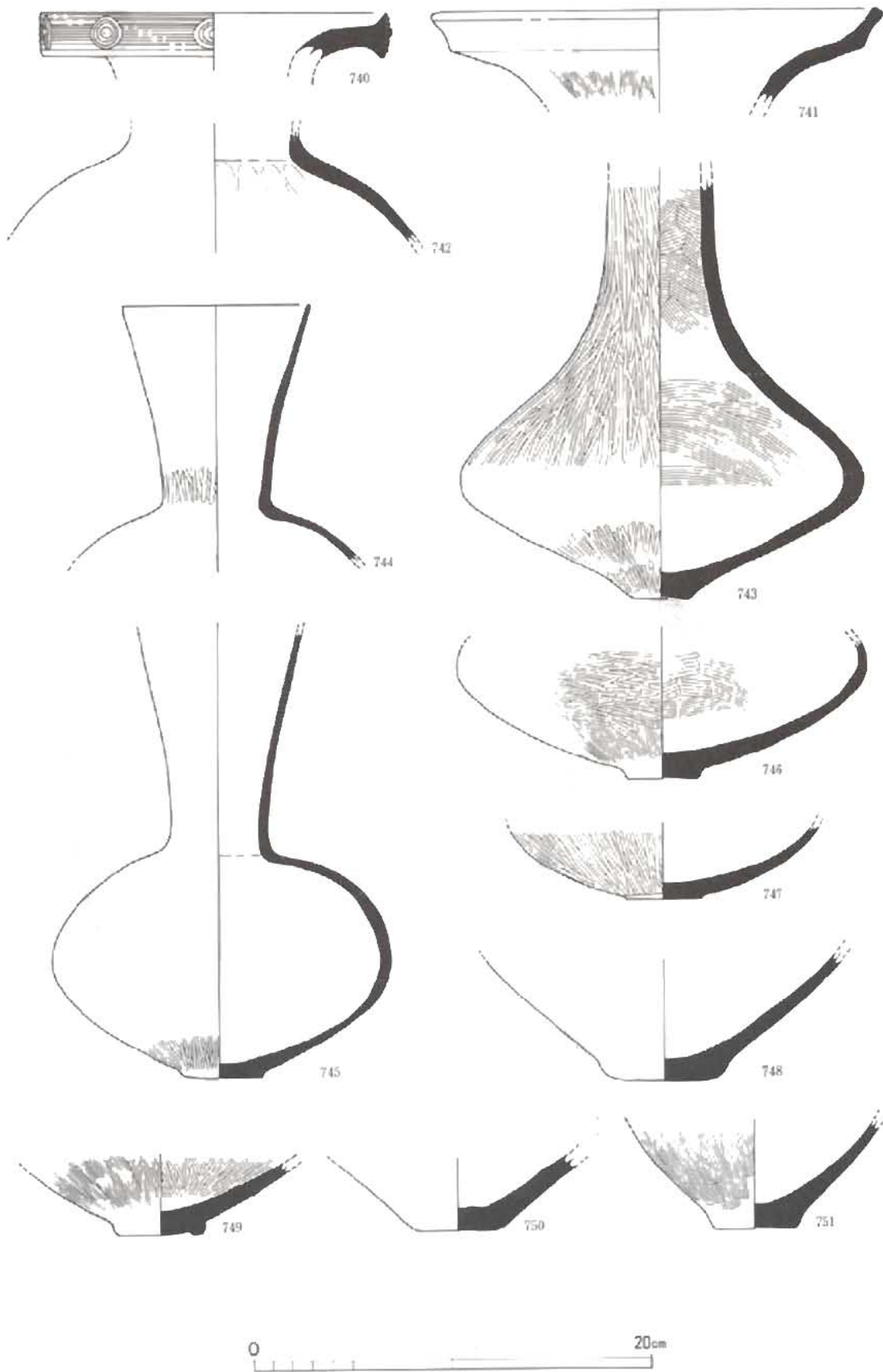
甕 V様式系のもののみで構成される。底部は平底である。内面の調整にはハケメを施すもの、ヘラケズリを行うものの二者があり、体部最大径も肩付近にあるものと中位にあるものが認められる。また、法量の点からもいくつかに分が可能である。

高坏 坏部が浅く、口縁部が大きく外湾するものである。脚部の形態から数個体の存在が確認できる。

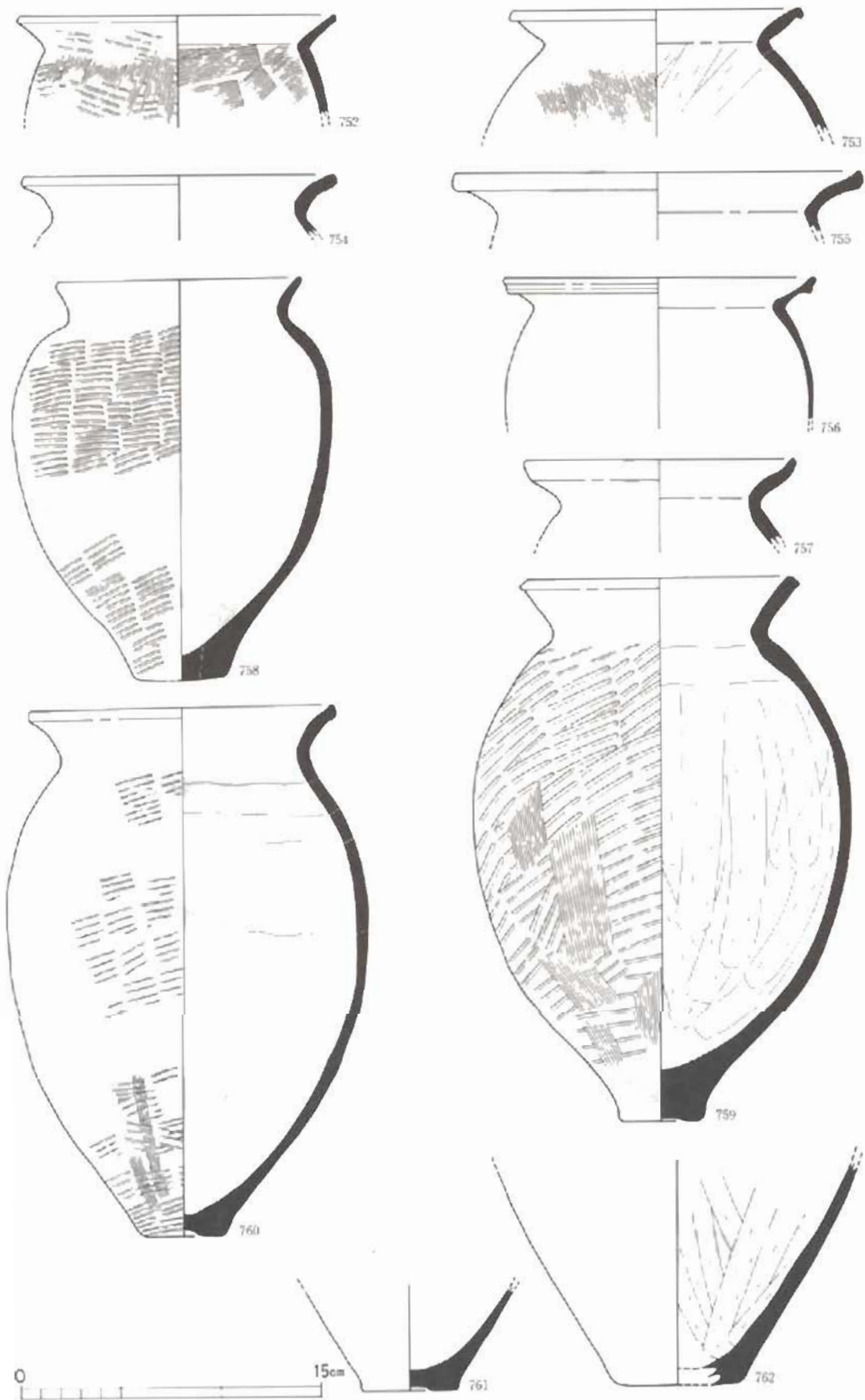
時期 出土土器から川除5期と考えられる。



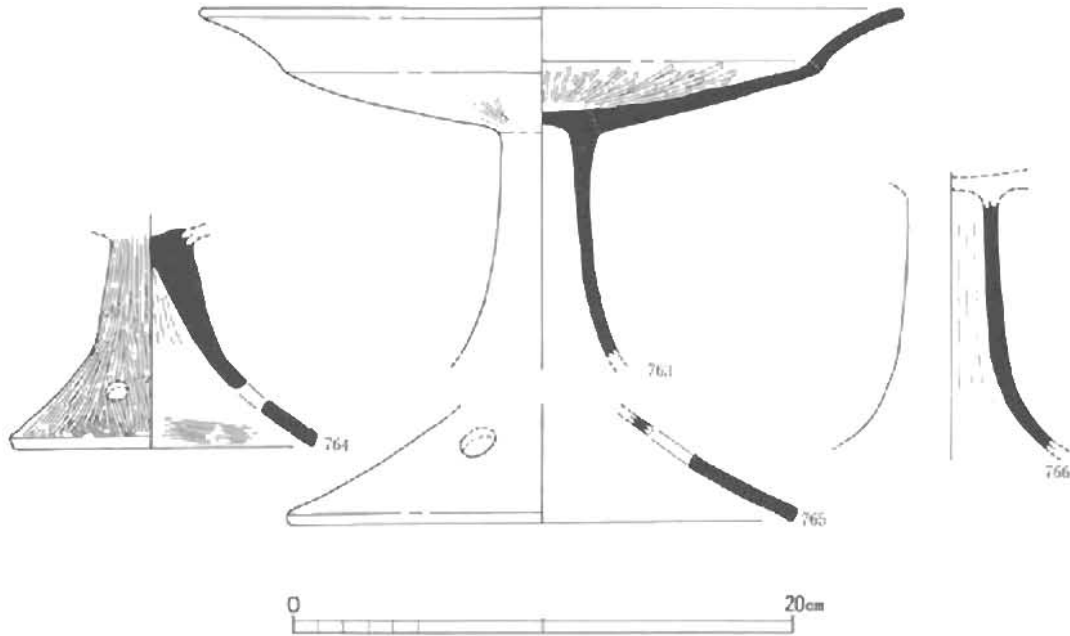
第283図 SK63出土土器(1)



第284図 SK63出土土器(2)



第285図 SK63出土土器(3)



第286図 SK63出土土器(4)

第105表 SK63出土土器観察表(1)

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
739	壺	口径 : 23.4 底径 : 器高 : 残45.4 頸径 : 12.2 体部径 : 10.2	外面 : 口縁部マコナデ、筋目付、頸部縦へうしグキ、筋目付変形跡り付け、体部縦へうしグキ 内面 : 口縁部一筋部縦へうしグキ、体部6条/cmト平タテハケ、中位マコナデ、のち下位筋コビナデ、下位縦へうしグキ、粘土継ぎ	外面 : 灰白 内面 : 黒褐色 内面 : 灰白	口縁部3/4 体部1/2 底部欠	
740	壺	口径 : (17.4) 底径 器高 : 残2.4 頸径 体部径 :	外面 : 口縁部マコナデ、口縁部面輪凹線、9個(復元)の円形浮文貼り付け 内面 : 口縁部マコナデ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部3/5	
741	壺	口径 : (21.7) 底径 器高 : 残4.7 頸径 体部径 :	外面 : 筋部マコナデ、他は磨滅のための調整不明 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 橙 内面 : ぶよい 黄褐色	口縁部一筋 部の約1/4	
742	壺	口径 底径 器高 残5.2 頸径 (9.4) 体部径 :	外面 : 体部へうしグキ 内面 : 体部上位ユビオマエ	外面 : 灰白 内面 : 灰	体部上位約 1/3	
743	壺	口径 底径 3.0 器高 残20.7 頸径 体部径 : (20.2)	外面 : 頸部一底部縦へうしグキ(頸部一体部上半以下・上、体部下位一底部上・下方向) 内面 : 頸部一体部上半6条/cmマコナデ、体部下位一底部マコナデ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 灰	口縁部欠 体部一部欠	長頸壺
744	壺	口径 9.4 底径 器高 残12.7 頸径 5.6 体部径 :	外面 : 頸部縦へうしグキ、体部磨滅のための調整不明 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 淡褐色 内面 : 淡褐色	口縁部1/3 体部わずか	長頸壺
745	壺	口径 底径 3.7 器高 残17.0 頸径 5.4 体部径 :	外面 : 体部下位一底部縦へうしグキ、他は磨滅のための調整不明 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 灰	口縁部欠 体部一部欠	長頸壺
746	壺	口径 底径 : 3.4 器高 : 残6.7 頸径 : 体部径 : (20.1)	外面 : 体部6条/cmマコナデ、のち横へうしグキ 内面 : 体部6条/cmマコナデ、のち下位一底部のみマコナデ	外面 : 橙 内面 : ぶよい 橙	頸部完存 体部わずか	長頸壺

第106表 SK63出土土器観察表(2)

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
747	壺	口径 口径 3.8 器高 残3.5 胴径 体部径	外面：体部ヘラナデ、底面ナデ 内面：体部ナデ	外面：褐灰 内面：灰	底部完存 体部1/10	長頸壺
748	壺	口径 口径 5.7 器高 残6.2 胴径 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：	外面：灰白 内面：灰	底部完存 体部わずか	
749	壺	口径 口径 4.0 器高 残3.5 胴径 体部径	外面：体部2.5cmナデハケ 内面：体部ヘラミダキ	外面：にじい 黄橙 内面：明褐	底部完存 体部わずか	
750	壺	口径 口径 4.2 器高 残3.7 胴径 体部径	外面：体部一底面ナデ 内面：磨減のため調整不明	外面：灰 内面：灰	底部完存 体部わずか	
751	壺	口径 口径 4.0 器高 残5.3 胴径 体部径	外面：体部ナデハケ、裏面木の葉痕 内面：体部ヘラナデ	外面：褐灰 内面：褐灰	底部約2/3 体部わずか	
752	壺	口径 (15.6) 口径 器高 残4.9 胴径 (13.4) 体部径	外面：口縁部一底面2.5cmナデ、のち口縁部ヨコナデ、体部10.5cmナデハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	口縁部一 体部約1/8	
753	壺	口径 (14.2) 口径 器高 残6.1 胴径 (11.2) 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、体部9.5cmナデハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケツリ	外面：灰白 内面：灰白	口縁部1/3 体部わずか	
754	壺	口径 (15.4) 口径 器高 残3.0 胴径 (12.6) 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：	外面：橙 内面：橙	口縁部1/3 体部わずか	
755	壺	口径 (20.0) 口径 器高 残2.9 胴径 (15.8) 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：	外面：灰白 内面：灰白	口縁部1/6 体部わずか	
756	壺	口径 (15.4) 口径 器高 残7.0 胴径 (12.4) 体部径	外面：口縁端面削り跡、他は磨減のため調整不明 内面：磨減のため調整不明	外面：淡黄 内面：淡黄	口縁部一 体部約1/5	
757	壺	口径 (15.1) 口径 器高 残4.0 胴径 (12.9) 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ	外面：褐灰 内面：にじい 黄橙	口縁部一 体部約1/8	
758	壺	口径 (11.9) 口径 (11.5) 器高 29.8 胴径 11.0 体部径 15.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部3.5cmナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面：灰赤 内面：明褐灰 灰赤	口縁部1/4 体部約3/4 底部約1/2	
759	壺	口径 13.0 口径 3.7 器高 26.8 胴径 10.2 体部径 18.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部2.5cmナデ、のち6.5cmナデハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケツリ、体部上段粘土結痕	外面：にじい 橙 内面：褐灰	体部一部欠	
760	壺	口径 15.0 口径 4.1 器高 20.0 胴径 12.5 体部径 18.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部一底面3.5cmナデ、のち体部下平ナデハケ、上平ナデハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ一部残る、体部上段粘土結痕	外面：灰白 内面：灰	体部一部欠	
761	壺	口径 口径 4.5 器高 残5.0 胴径 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：	外面：にじい 橙 内面：にじい 橙	底部完存 体部わずか	
762	壺	口径 口径 (6.0) 器高 残10.8 胴径 体部径	外面：磨減のため調整不明 内面：体部ヘラケツリ	外面：淡黄橙 内面：灰	底部約1/2 体部わずか	
763	高杯	口径 (29.7) 口径 器高 残13.9 胴径 4.0 杯部径 5.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部一脚部ヘラミダキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミダキ、脚部ヘラナデ	外面：淡黄 内面：淡黄	口縁部1/2 体部11/12 脚部欠	
764	高杯	口径 口径 11.8 器高 残8.7 胴径 3.3 杯部径	外面：脚部10.5cm上上げリハケ、のちヘラミダキ、3孔 内面：脚部ヨコナデ、絞り目	外面：灰白 内面：灰白	脚部約2/3 脚部完存	
765	高杯	口径 口径 20.0 器高 残4.3 胴径 杯部径	外面：磨減しいが一部ヘラミダキ残る、3孔 内面：磨減しいが口縁部ヨコナデ残る	外面：淡黄 内面：淡黄	脚部約11/12 完存	763と同 個体か
766	高杯	口径 口径 器高 残10.0 胴径 3.6 杯部径	外面：脚部ヘラミダキ 内面：磨減のため調整不明、絞り目	外面：にじい 橙 内面：にじい 橙	脚部欠	

SK64

検出状況 II-2区の南東隅で検出された。他の遺構との大きな切り合いは認められないが、上層から中世の柱穴に切られている。

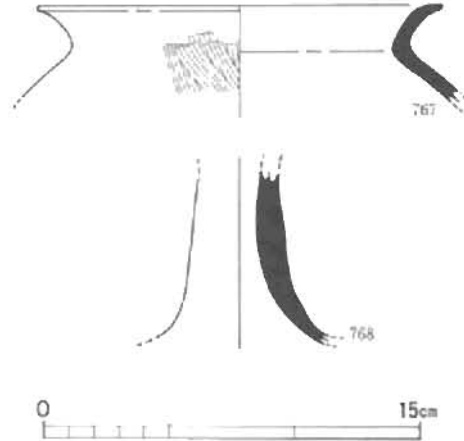
形状・規模 平面形は方形を指向している。規模は検出面で北辺が2.45m、東辺が2.75m、南辺が2.64m、西辺が2.50mで、土壌底では長軸である東西方向が2.40m、短軸である南北方向が2.32mで、深さは8~23cmである。断面形は台形を呈している。

出土遺物 土器のみが出土している。図化できたものは2点である。

甕と高杯を図化している。

甕 口縁部から体部にかけてのもので、口縁部を外方に丸くおさめている。内面頸部には稜線がみられる。

高杯 脚部のみである。脚部中位に最大径をもつもので、大きく外方に開く脚裾部をもつと思われる。



第287図 SK64出土土器

時期 出土土器から川除4~6期と考えられる。

第107表 SK64出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
767	甕	口径 11.8 底径 9.0 器高 4.0 胴径 13.5 体部径	外面：口縁部ヨコナデ、体部5条/cmクワハヤ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハラナデ	外面 褐灰 内面 明褐灰	口縁部1/4 体部わずか	
768	高杯	口径 底径： 器高 4.7 脚径： 杯部高	外面： 器底のため調整不明 内面：	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	脚部ほぼ 完存	

SK65

検出状況 II-2区の南東部で検出された。他の遺構との大きな切り合いは認められないが、上層から中世の柱穴に切られている。

形状・規模 平面形は不整形を呈しているが楕円形を指向しているようである。規模は検出面で長軸方向が2.88m、短軸方向が2.52mである。土壌底では長軸である南北方向が2.32m、短軸である東西方向が2.10mで深さは検出面から35~38cmである。断面形は逆台形を呈している。

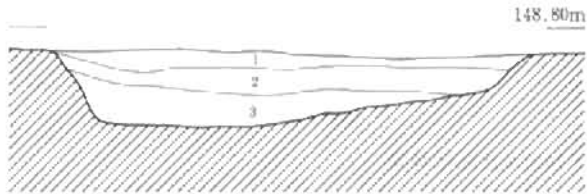
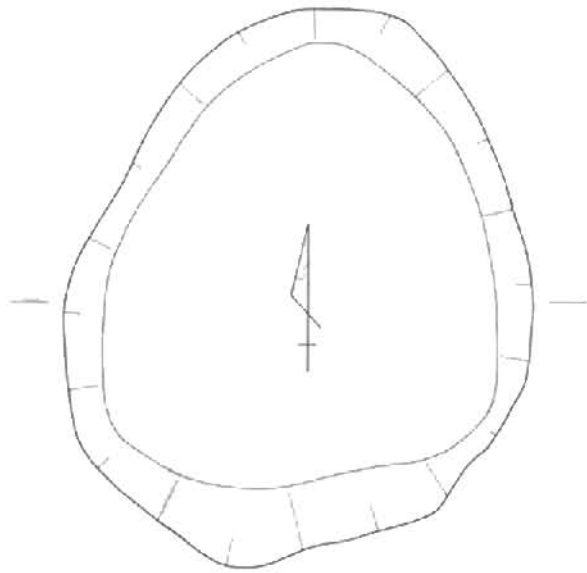
埋土 埋土は3層にわたって堆積している。上層に黄褐色シルト質極細砂、中層に炭化物を含む灰色極細砂質シルト、下層に淡灰色シルト質極細砂と分層することができる。

出土遺物 土器のみが出土している。器種は甕・高杯・その他の細片で、いずれも図化できなかった。

甕 平底の形態のV様式系の特徴をもつものが出土している。

高杯 古墳時代の形態のものが出土している。

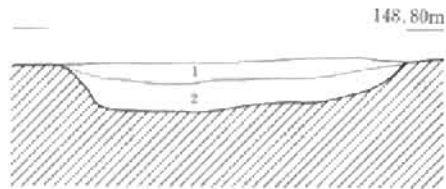
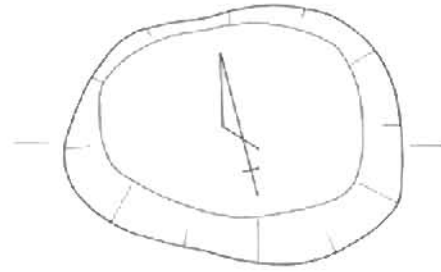
時期 高杯の脚部の形態から川除7期と考えられる。



1. 黄褐色シルト質極細砂
2. 淡灰色シルト質極細砂
3. 灰色極細砂質シルト (炭化物含む)



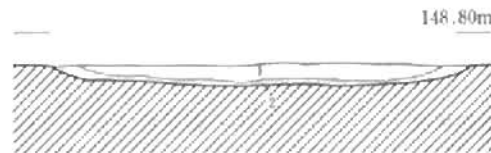
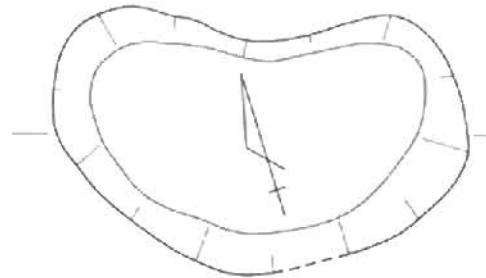
第288図 SK65



1. 褐灰色極細砂
2. シルト質極細砂
(炭・土器片含む)



第289図 SK66



1. 褐灰色極細砂
2. 黄灰色極細砂



第290図 SK67

SK66

検出状況 II-2区の南東部で検出された。他の遺構との大きな切り合いは認められない。SK65のすぐ西側で検出している。

形状・規模 平面形は不整形を呈しているが楕円形を指向しているようである。規模は検出面で

長軸方向が1.80m、短軸方向が1.35mである。土城底では長軸である東西方向が1.40m、短軸である南北方向が1.03mで、深さは検出面から20~24cmである。断面形は皿形を呈している。

埋土 埋土は2層にわたって堆積している。上層に褐灰色極細砂、下層に炭化物と土器片を含むシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 土器のみが出土しているがいずれも細片のため図化できなかった。

時期 出土した土器が細片のため正確な時期はつかめないが、埋土の特徴からも中世の遺構とは異なり、SK65と類似した特徴をもっていることから、川除5~7期のものと考えたい。

SK67

- 検出状況** II-2区の南東部で検出された。他の遺構との大きな切り合いは認められないが、上層から中世の柱穴に切られている。
- 形状・規模** 平面形は不整形を呈しているが中央部のくびれた楕円形を指向しているようである。規模は検出面で長軸方向が225cm、短軸方向が124cmである。土壌底では長軸である東西方向が176cm、短軸である南北方向が92cmで、深さは検出面から10～12cmである。断面形は皿形を呈している。
- 平面形のわりには断面形が浅く、比較的偏平な印象を受ける遺構である。
- 埋土** 2層にあたって堆積している。上層に灰褐色極細砂、下層に黄灰色極細砂が堆積している。上層には若干のマンガンの沈着がみられる。下層の堆積は非常に薄い。
- 出土遺物** 土器のみが出土している。図化できたものはない。
- 甕と器種不明の土器片が出土している。甕は底部にタタキを施しているものである。土器片は土師質のものである。
- 時期** 川除6～7期にかけてのものと考えられる。

その他の土壌

以上に掲載しなかったII区の土壌のうち、弥生時代から古墳時代前期に属することが判明したものの概略を一覧表にまとめることとする。

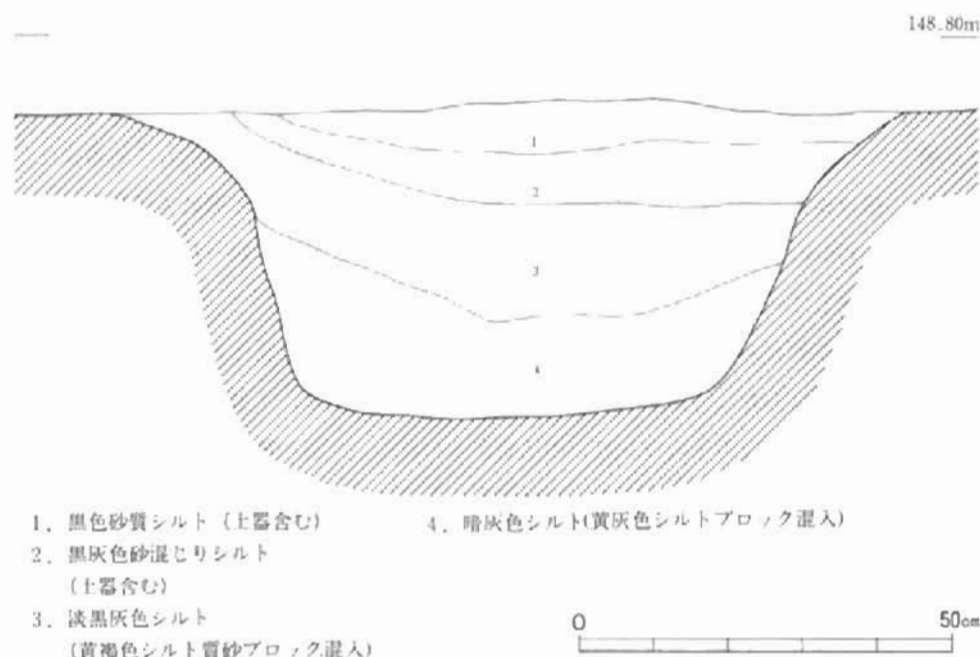
第108表 II区 弥生時代～古墳時代前期その他の土壌一覧表（単位：cm）

遺構名	規模（検出面）		規模（土壌底）		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK48	210	160	190	74	12	楕円形	皿形	後期	鉢
SK57	67	45	48	35	18	不整形	U字形	後期	小片
SK59	153	63	138	32	10	溝状	U字形	後期	小片
SK60	120	59	116	55	9	長方形	皿形	後期	甕
SK61	90	54	77	37	25	長方形	U字形	後期	壺・甕
SK62	390	83	375	72	5	不整形	皿形	後期	甕・高杯

(4) 溝

SD27（図版69・87）

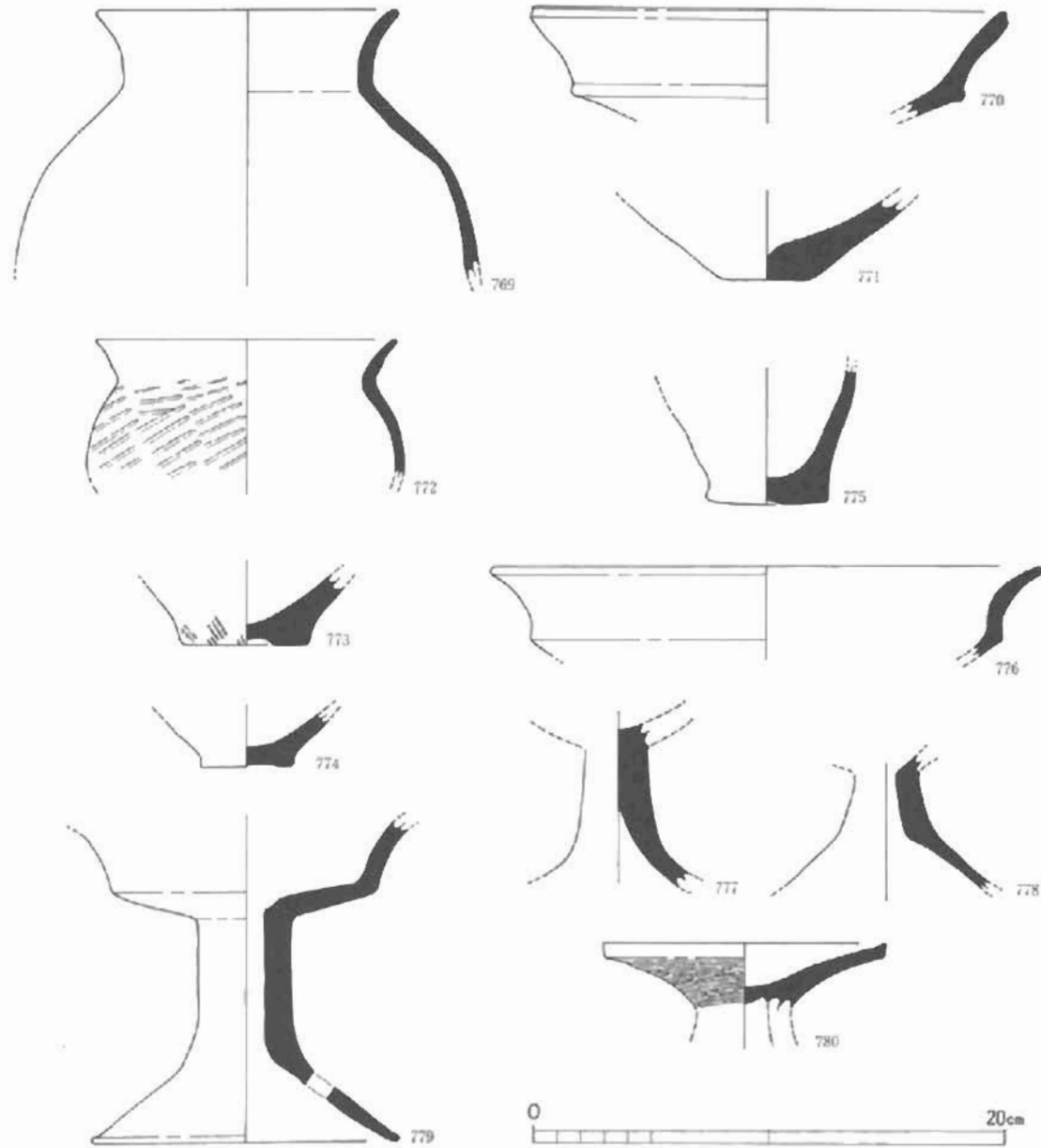
- 検出状況** I区から続き、III区までのびる溝である。小微高地bの南側縁辺部を微高地の等高線に沿うように掘られている。南東から北西方向にはほぼ直線的に走っている。SD43を切り、SD42に切られている。
- 形状・規模** 検出された長さ（II区内で）は、100mである。検出面における幅は1.05mを測る。溝の横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは42cmを測る。そして、溝底における幅は50cmである。
- 埋土** 上から、黒色砂質シルト層、黒灰色砂混じりシルト層、淡黒灰色シルト層、暗灰色シルト層が堆積していた。第3・4層については、黄褐色から黄灰色シルトがブロック状に含



第291図 SD27横断面

まれていることから、人為的に埋められた層と考えられる。

- 出土遺物** 土器のみが、上層（第1・2層）を中心に出土している。器種としては、壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している。100mと長い距離を検出したが、量的に出土量は少なく、細片が目立つ。
- 壺** 広口壺・二重口縁壺および底部片・体部片が出土している。広口壺については、口縁部を「く」字形に外反させるもので、形態的には甕に近い特徴を有するものである。
- 甕** 全てV様式系に分類される甕である。タタキ目を有する体部片のなかに、図化したものより若干細筋のタタキ目のものが認められる。
- 高坏** 図化したものは坏部片と脚部片2個体であるが、脚部については合わせて7個体分出土している。なお、坏部については楕形のもの認められなかった。
- 器台** 2個体ともあまり類例を見ないタイプのものである。779については、形態的には高坏と同じであるが、受部と筒部との接合部において、円盤充填などの痕跡がまったく認められなかったことから、器台と判断した。裾部に円孔を穿っているが、残存するのは1ヶ所のみで、全体で何穴穿たれていたのかは明らかにしえない。
- また、780は小型器台に分類されるもので、外面を丁寧な細筋のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面についても、十分観察することができなかったが、同様なヘラミガキ調整によって仕上げられているものと考えられる。また、受け部と脚部の接合は円板充填法によっている。
- 鉢** 当器種については1個体も図化できなかったが、小片ではあるが大型鉢の一部が出土している。この大型鉢はS K26出土の甕（第157図-422）と同タイプのものである。
- 時期** 出土土器とSD42・43との切り合い関係から、川除5～7期と考えられる。



第292図 S D27出土土器

第109表 S D27出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
769	壺	口径 : (12.6) 底径 : 器高 現11.4 胴径 (10.6) 体部径 :	外面 口縁部ヨコナテ、体部不定方向ナテ 内面 口縁部ヨコナテ、以下は磨滅のため調整不明	外面 灰白 視所 内面 灰白	口縁部-体 部の1/4	
770	壺	口径 : (19.7) 底径 : 器高 現4.5 胴径 : 体部径 :	外面 口縁部ヨコナテ 内面 口縁部ヨコナテ	外面 灰白 視所 内面 灰白	口縁部1/4	
771	壺	口径 底径 器高 現3.5 胴径 3.8 体部径 :	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 灰白 内面 灰白	底部約1/2 体部わずか	
772	甕	口径 : (12.4) 底径 : 器高 現3.8 胴径 (10.8) 体部径 : (13.6)	外面 口縁部ヨコナテ、体部3条/cmタテキ 内面 口縁部ヨコナテ、体部不定方向ナテ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部-体 部の1/4	

第110表 SD27出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
773	甕	口径 : 底径 (15.4) 器高 : 残3.0 胴径 体部径	外面 : 底部左上がりナゲキ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 裏灰 内面 : 灰	底部約1/2 体部わずか	
774	甕	口径 : 底径 3.8 器高 : 残2.3 胴径 体部径	外面 : 底部ユビオサエ, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
775	鉢	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残5.7 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 体部ユビオサエ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部完存 体部約1/4	
776	高杯	口径 : 22.9 底径 器高 : 残3.9 胴径 杯部高	外面 : 口縁部ヨコナゲ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/8	
777	高杯	口径 : 底径 6 器高 : 残2.0 胴径 杯部高	外面 : 胴径部へラナゲキ 内面 : 胴径部・杯部へラナゲキ	外面 : 灰白 内面 : 灰	胴径部11/12 完存 杯部わずか	
778	高杯	口径 : 底径 : 器高 : 残5.6 胴径 : 2.8 杯部高	外面 : 胴径部・杯部ナゲ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 明黄灰	胴径部11/12 完存 杯部約1/8	
779	器台	口径 : 底径 (12.6) 器高 : 残13.6 胴径 体部径 4.0	外面 : 体部ナゲ, 杯部ヨコナゲ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	口縁部欠損 胴部1/6, 体 部ほぼ完存	
780	器台	口径 : 底径 器高 : 残2.8 胴径 体部径	外面 : 口縁部ヨコナゲ, 口縁部横ナゲナゲキ 内面 : 口縁部 : ナゲキ	外面 : 灰白 内面 : 灰	口縁部1/4	

SD28

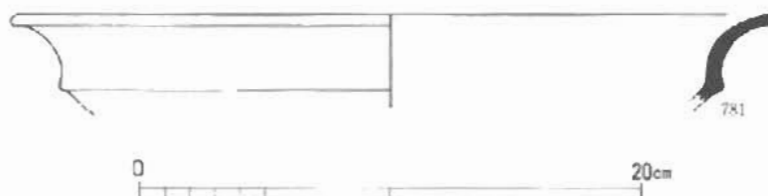
検出状況 II-2区東部で検出された南北に走る溝である。北側は調査区外に延び、南側はSH33に切られている。そしてこの溝がSH33をこえた延長上にSD30が存在するが、溝の規模、埋土の状況、出土遺物などから本溝の続きと考えられる。

形状・規模 検出した長さは4mである。検出面における幅は40~50cmである。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは13cm~18cmを測る。溝底部のレベルはほぼ一定しており、その標高は148.46mである。また底部の幅は34cmである。

埋土 上層から黒灰色シルト層、黄灰色シルトまじり淡黒灰色シルト層が堆積している。特に第2層については地山の土(黄灰色シルト)をブロック状に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器のみが出土している。器種としては甕と高杯が出土しているが、図化できたのは高杯の1点のみである。なお、甕についてはV様式系甕の口縁部と底部が出土している。

時期 SH33に切られていることと、出土遺物、特に高杯の形態から川除3期と考えられる。



第293図 SD28出土土器

第111表 SD28出土土器観察表

番号	器物	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
781	高坏	口径 30.0 底径 20.0 器高 13.5 脚柱径 1.5 坏部高	外面：彫刻のための調整不明 内面：口縁部横へうとケキ一部残る	外面 黄灰 内面 灰白	口縁部1/12	

SD29

検出状況 II-2区の北東部に位置する。東南東から西北西方向に走る溝で、SD27の北側に近接し平行している。この溝は西側は途中で途切れるが、東側はI区との中間部までのびている。しかしI区において本溝に対応する溝を検出できなかったことから、この中間部において途切れるものと推定される。なお、本溝はSH33を切っている。

形状・規模 検出した長さは21.8mである。検出面における幅は1.35m~2.00mである。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは16~20cmを測る。溝底部のレベルはほぼ一定しているが、その標高は東側で148.59m、西側で148.64mと東側の方が若干低くなっている。

埋土 黄灰色シルト混じり黒灰色シルト1層が堆積していた。地山(黄灰色シルト)をブロック状に含む層で、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。器種としては甕と高坏が出土しているが、図化できるものはなかった。甕はいずれもV様式系甕で、底部と体部片が出土している。高坏は、脚部片が出土している。

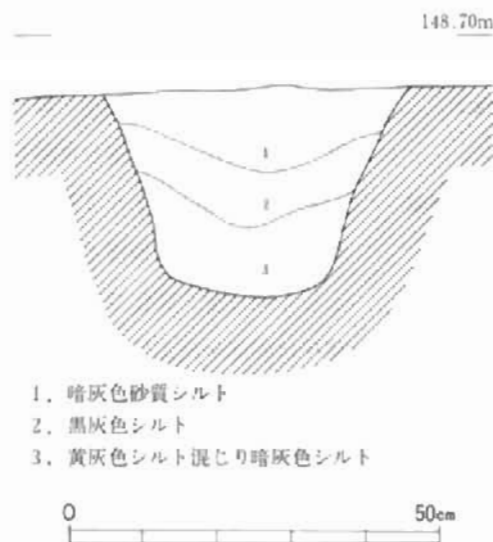
時期 SH33を切ることと、出土遺物から川除3~6期と考えられる。

SD30

検出状況 II-2区の北東部に位置する。ほぼ南北方向にのびる溝であるが、北側はSH33・SD27に切れ、途切れている。また南側については徐々に浅くなり消えている。SD28から続く溝と考えられる。

形状・規模 検出した長さは6.2mである。検出面における幅は30~50cmである。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは20~45cmを測る。底部のレベルはほぼ一定しており、北側での標高は148.20mである。底部における幅は10~20cmである。

埋土 上から、暗灰色砂質シルト層、黒灰色シルト層、黄灰色シルト混じり暗灰色シルト層が堆積していた。特に第3層については、SD28と同様、地山の土(黄灰色シルト)をブロック状に含み、人為的に埋められた層と考えられる。



第294図 SD30横断面

第4節 II区の調査

出土遺物 埋土中、特に第1・2層から土器のみが出土している。器種としては、壺・甕・高坏が出土しているが、図化できるものはなかった。壺は体部片が出土している。甕はV様式系甕の底部と体部片が出土している。そして高坏は脚部片が出土している。

時期 SH33とSD27に切られていることと、出土遺物から川除3期と考えられる。

SD31

検出状況 II-2区の北東部に位置する。北東から南西方向にのびる溝で、北東側はSD27とSD30に切られている。南西側は自然に消えている。

形状・規模 検出した長さは3mと、短い溝である。検出面における幅は55~65cmである。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは5~14cmを測る。溝底部のレベルはほぼ一定しており、北東部での標高は148.53mである。

埋土 黒灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。

出土遺物 埋土中より、土器のみが出土している。器種として確認できるのは高坏のみで、他に器種を特定できない土器片が出土している。図化できるものはなかった。高坏は、脚端部片が出土している。

時期 SD27・30に切られていることと、出土遺物から川除3期と考えられる。

SD32

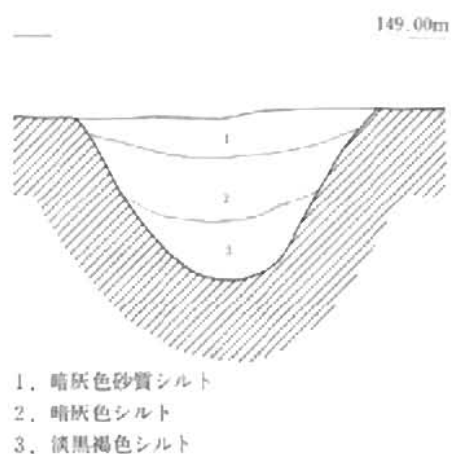
検出状況 II-2区の北東部に位置する。北東から南西方向にのびる溝である。北東部はSD27に切られている。南西部は自然に消えている。

形状・規模 検出した長さは2.90mである。検出面における幅は、30~40cmである。横断面はU字形をなし、溝中央部における検出面からの深さは18cmである。溝底のレベルは南西部ほど低くなっており、標高で北東部は148.45m、南西部は148.32mである。

埋土 上から暗灰色砂質シルト層、暗灰色シルト層、淡黒灰色シルト層が堆積していた。

出土遺物 埋土中、特に第1~3層にかけて土器のみが出土している。器種としては甕・高坏が出土しているが、図化できたのは甕のみである。高坏は脚部が出土している。

時期 SD27に切られていることと、出土土器から川除3期と考えられる。



第295図 SD32横断面



第296図 SD32出土土器

第112表 SD32出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
782	壺	口径 : 口径 3.4 器高 : 残7.4 肩径 : 体部径	外面 : 底部アタキ一部残る 内面 : ナデか	外面 : 上ぶい 黄帯 内面 : 黒褐	底部定存 体部約1/4	

SD33

検出状況 II-2区小微高地b上やや東よりに位置する。北西から南東方向に直線的にのびる溝で両端は自然に消えている。他の遺構との切り合いは認められないが、SD34とはほぼ直交するようにして接している。

形状・規模 検出した長さは3.2mである。検出面における幅は20~30cmを測る。横断面はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは4~8cmである。溝の底部のレベルは一定しており、その標高は148.70mである。

埋土 暗灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。

出土遺物 遺物の出土は全く認められなかった。

時期 埋土および方向性より、川除2~6期と考えられる。

SD34

検出状況 II-2区、小微高地b上に位置する。SD33とその中間部で直交するように、北東から南西方向にのびる溝である。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 検出した長さは2.4mである。検出面における幅は10~20cmを測る。横断面はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは4cmである。底部のレベルはほぼ一定しており、その標高は148.80mである。

埋土 SD33と同じく、暗灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。

出土遺物 遺物の出土は全く認められなかった。

時期 埋土から川除2~6期と考えられる。

SD35

検出状況 II-2区のほぼ中央やや東側よりに位置する。小微高地bの南側縁辺部に近い位置である。この溝は鍵形に屈曲している。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

形状・規模 南東側で2.7m、南西側で2.6m、計5.3m検出した。検出面における幅は20cm~30cmを測る。横断面はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは16~24cmである。溝の底の標高は、北西部端で148.76m、北東部端で148.51mである。

埋土 黒灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土しているが、いずれも小片のため器種も特定できない。

時期 出土土器から川除2~6期と考えられる。

SD36

- 検出状況** II-2区に位置し、小嶺高地b南側縁辺部に立地する。SD35の南西に位置し、北東端はSD35と近接している。ほぼ南北に走る溝である。
- 形状・規模** 検出した長さは1.70mである。検出面における幅は20cmを測る。横断面の形はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは5cmである。溝底部のレベルはほぼ一定しており、その標高は148.75mである。
- 埋土** 黄灰色シルト混じり淡黒灰色シルト層1層が堆積していた。
- 出土遺物** 遺物は全く出土しなかった。
- 時期** 埋土の特徴から川除2～6期と考えられる。

SD37

- 検出状況** II-2区、SD36の西側でSD36とほぼ平行して検出された。
- 形状・規模** 検出した長さは1.50mである。検出面における幅は20～25cmを測る。溝の横断面はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは2～3cmである。溝の底のレベルはほぼ一定しており、その標高は148.80mである。
- 埋土** 灰色砂混じりシルト1層が堆積していた。
- 出土遺物** 遺物は全く出土していない。
- 時期** 埋土の特徴から川除2～6期と考えられる。

SD38

- 検出状況** II-2区の中央部やや東よりで検出された。北東から南西方向に中間部で若干「く」字形に屈曲する溝で、北端部は中世の落ち込みにより切られている。南端部は自然に消滅している。
- 形状・規模** 検出した長さは4.80mである。検出面における幅は30cmを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは4～7cmである。溝の底のレベルはほぼ一定しており、その標高は北端部で148.78m、南端部で148.75mである。
- 埋土** 淡黄灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 埋土、方向性などから川除2～6期と考えられる。

SD39

- 検出状況** II-2区内小嶺高地bの中央部北側に位置する。北東から南西方向にのびる溝で、北東側は調査区外にのびている。南西側は、自然に消滅している。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 検出した長さは2mである。検出面における幅は65～75cmを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは9～15cmである。溝の底の標高はほぼ一定しており、北東部で148.73mである。
- 埋土** 暗灰色砂混じりシルト層の1層が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。
 時期 埋土から川除2～6期と考えられる。

SD40 (図版68)

検出状況 II-2区内、小微高地bのほぼ中央部で検出した。ほぼ南北にのびる溝で、小微高地bの主軸にはほぼ直交するように掘り込まれている。北端は調査区外にのび、南側については小微高地b縁辺部までのび、自然に消滅している。

形状・規模 検出した長さは19mである。検出面における幅は1.00～1.40mを測る。横断面はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは30～38cmである。溝の底のレベルは北側程深く、その標高は北側で148.50m、南側で148.38mである。

埋土 上から暗灰色砂質シルト層、暗灰色シルト層、灰色シルト層の3層が堆積していた。

出土遺物 溝の最下層、底部直上を中心に土器のみが出土している。出土した土器は、壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土しているが、器台については図化できなかった。このなかで甕が量的に最も多く出土している。

壺 広口壺・短頸壺・底部片・体部片が出土しているが、図化できたのは底部片と体部片のみである。図化した体部片(783)については、復元される頸径が小さいため、細頸壺の可能性も考えられる。また、底部片についてはすべて明瞭な平底を呈するものであるが、全体的に小型である。

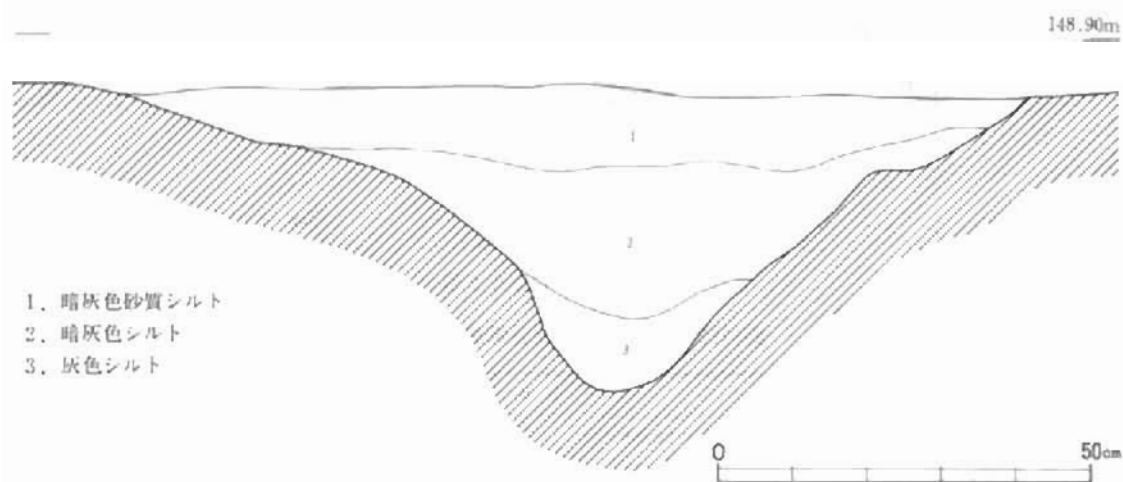
甕 本溝出土土器のなかで最も多く出土した器種である。口縁部の形態により、V様式系と丹波系の二つに分けることができる。底部については、突出した平底のものが少ない点が、他の同時期の遺構出土資料に比べて特徴的である。

鉢 図化できなかったが、丹波系の鉢の口縁部片が出土している。

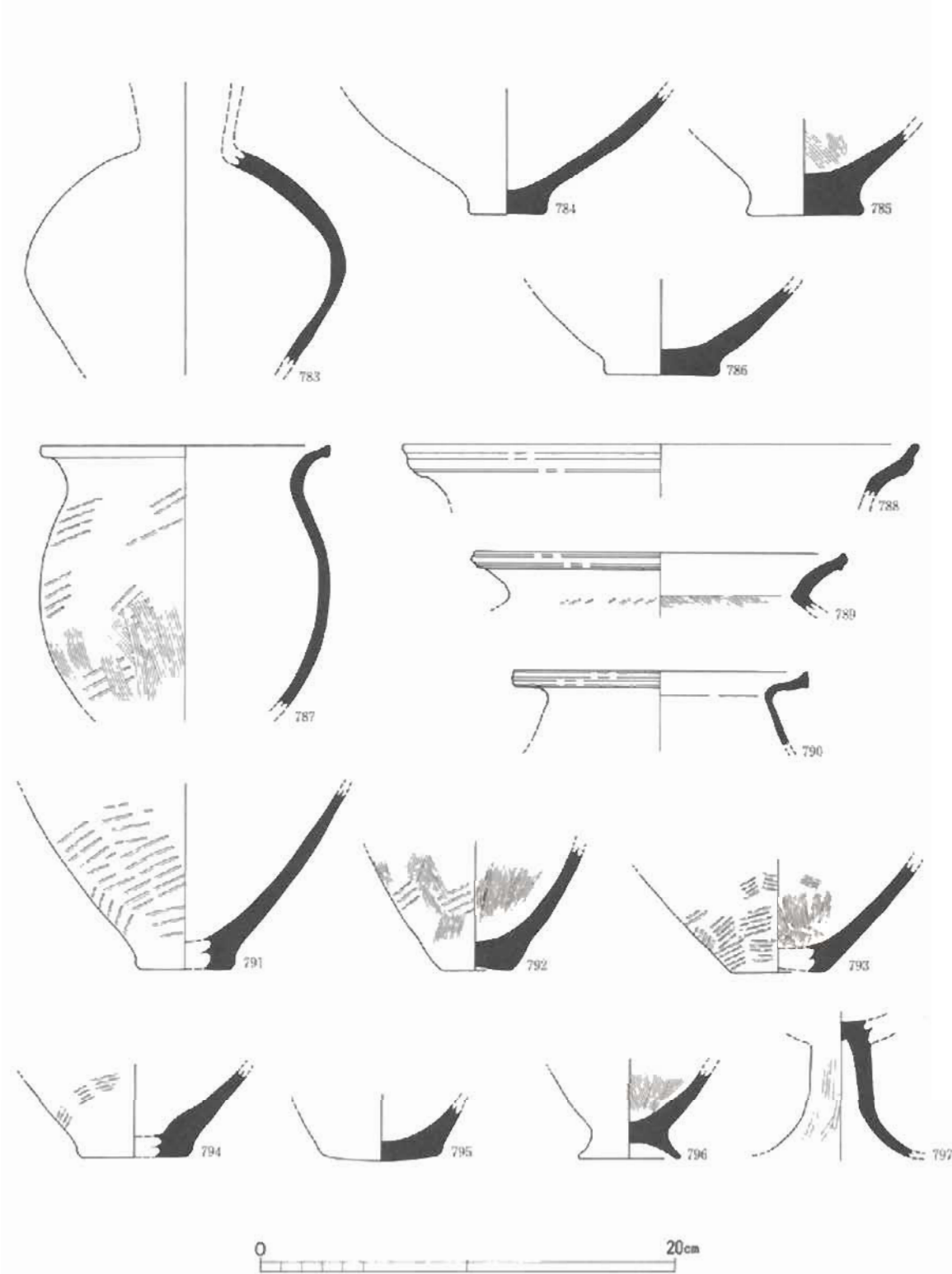
高坏 図化できたのは脚部片のみであるが、坏部片も出土している。

器台 脚端部片が出土している。

時期 出土遺物から川除3～5期と考えられる。



第297図 SD40横断面



第298図 SD40出土土器

第113表 SD40出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
783	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残10.3 胴径 体部径 (15.3)	外面 磨滅のため調整不明 内面 ユヒナテ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	体部約1/5	
784	壺	口径 : 底径 3.4 器高 : 残5.6 胴径 : 体部径 :	外面 底部にタタキ或一部残る, 他は磨滅のため調整不明 内面 ナテ	外面 : 灰白 内面 : 黒黄	底部完存 体部約1/5	

第114表 SD40出土土器観察表(2)

番号	器種	数量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
785	壺	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残3.6 肩径 : 体部径 :	外面 : 底部エビオサエ 内面 : 一部タテハケ残る	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	底部完存 体部わずか	
786	壺	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残4.3 肩径 : 体部径 :	外面 : 体部タテハケおぼろげに残る、底部エビオサエ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 明灰質 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
787	甕	口径 : (14.0) 底径 : 器高 : 残12.6 肩径 : (11.4) 体部径 : (14.0)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタテキ、のち下で7条/cmタテハケ 内面 : 口縁部ヨコナデ、以下は磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄褐色 内面 : 灰白	口縁部僅か 体部約1/6	
788	甕	口径 : (24.8) 底径 : 器高 : 残2.5 肩径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、口縁端面縦四線 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	口縁部1/9	
789	甕	口径 : (17.8) 底径 : 器高 : 残2.8 肩径 : (14.4) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、口縁端面縦四線、体部タテキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ハケ	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	口縁部1/4	
790	壺	口径 : (14.0) 底径 : 器高 : 残3.5 肩径 : (10.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、口縁端面縦四線、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面 : 明灰質 内面 : 灰	口縁部1/8 体部わずか	
791	甕	口径 : 底径 : (4.4) 器高 : 残3.6 肩径 : 体部径 :	外面 : 体部3条/cmタテキ、のちナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	体部~底部 約1/4	
792	甕	口径 : 底径 : 3.4 器高 : 残5.9 肩径 : 体部径 :	外面 : 体部3条/cmタテキ、のち7条/cmタテハケ、底部エビオサエ 内面 : 体部12条/cmタテハケ、底部エビオサエ	外面 : 淡黄 内面 : オリーブ黒	底部完存 体部わずか	
793	甕	口径 : 底径 : 4.4 器高 : 残5.2 肩径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部4条/cmタテキ 内面 : 体部~底部10条/cmタテハケ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	体部~底部 約1/4	
794	甕	口径 : 底径 : (5.0) 器高 : 残4.2 肩径 : 体部径 :	外面 : 体部4条/cmタテキ、のちナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰	体部~底部 約1/3	
795	甕	口径 : 底径 : 5.4 器高 : 残2.7 肩径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部タテハケ、のちナデ、底面ナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 灰	底部完存 体部わずか	
796	鉢	口径 : 底径 : 4.6 器高 : 残4.3 肩径 : 体部径 :	外面 : 脚部エビオサエ、体部ナデか 内面 : 体部10条/cmタテハケ	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	脚部完存 体部わずか	
797	瓦片	口径 : 底径 : 器高 : 残6.6 脚柱径 : 耳部高 :	外面 : 脚柱部縦ヘラミダ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	脚柱部欠 脚柱部3/4	

SD41

検出状況 II-2区北側、小微高地bに立地している。SD40のほぼ中央部から西側へ、SD40と直交するようにのびている。SD40とは明確な切り合い関係は認められなく、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。

形状・規模 検出した長さは5.8mである。検出面における幅は60~85cmを測る。横断面はSD40と同様U字形をなし、溝中央部における検出面からの深さは20cmである。溝の底のレベルはSD40よりはやや深くなっており、西端部でその標高は148.64mである。

埋土 3層にわかれるが、その堆積状況はSD40と全く同じである。

出土遺物 小片ばかりの出土で、明確に器種を特定できるものは出土していない。

時期 SD40と同時期と考えられることから、川除3~5期と考えられる。

SD42 (図版68)

検出状況 II-2区内、小嶺高地bの西半部に位置する。東西方向にはほぼ直線的にはしる溝である。SD40・SD43・SD49を切っている。

形状・規模 検出した長さは44mである。検出面における幅は、西側ほど狭くなる傾向があるため、30~75cmと一定していない。横断面はU字形をなし、溝中央部における検出面からの深さは6~22cmである。溝の底のレベルは東側ほど低くなる傾向にあり、その標高は西側で148.88m、東側で148.60mである。

埋土 上から暗灰色砂質シルト、淡黒灰色砂混じりシルト、黒灰色シルトの3層が堆積していた。

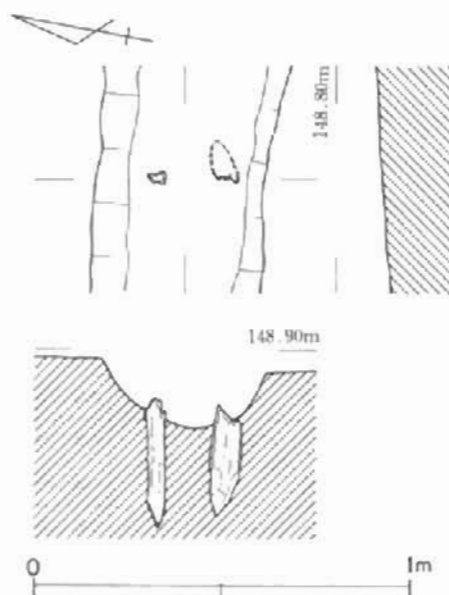
杭 本溝の西側で、板状の杭を2本溝の方向に直交するように打ち込まれているのが検出された。打ち込まれた杭は、上部を欠損しており、検出した際には杭がわずかに認められる程度であった。また、この杭が打ち込まれていた地点の前後において、溝のレベルには差は認められなかった。

W21は残存長29.7cmを測り、最大幅は8.45cmである。厚さは最大で2cmである。先端15cmにわたって鋭角に削り出されている。

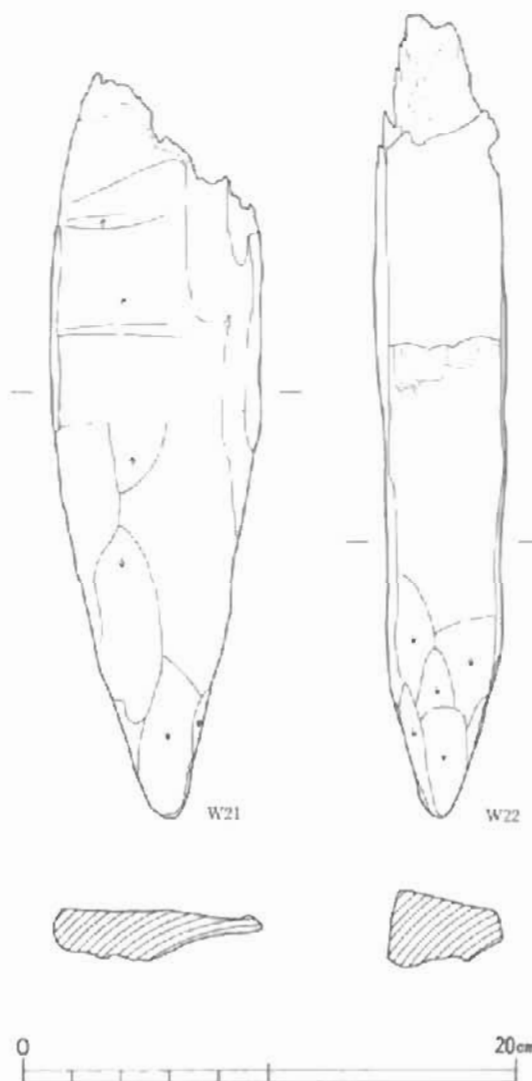
W22は残存長32.1cmを測り、最大幅は5.30cmである。厚さは最大で3.10cmである。先端6.60cmにわたって鋭角に削り出されている。

樹種はコウヤマキである。

出土遺物 土器のみが、埋土中層より多量に出土している。特に、本溝のほぼ中央部で集中して出土している。そのほとんどが細片での出土で、あたかも敷き詰められたかのような出土状況である。このため、量的には多く



第299図 SD42



第300図 SD42出土矢板

出土したにもかかわらず、図化できたのは3個体のみである。

器種

壺・甕・高坏が出土している。

壺

図化できたのは小型丸底壺1個体のみである。口縁端部と底部中央部を欠くが、ほぼ全体を復元できるものである。口径に対して体部最大径が小さいタイプである。なお、小型丸底壺についてはもう1個体出土している。この他、口縁端部に擬凹線と円形浮文を施す広口壺の口縁部片や底部が出土している。

甕

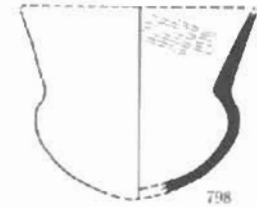
図化した底部も含めていずれも平底をなすものである。底部の他に体部片も出土しているが、いずれもタタキ目を有するものである。

高坏

脚部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期

出土遺物より、川除7期と考えられる。



0 10cm

第301図 S D42出土土器

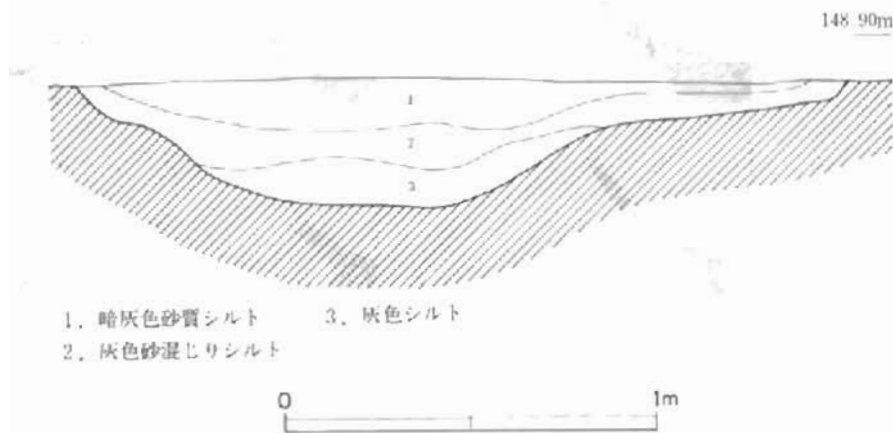
第115表 S D42出土土器観察表

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
798	壺	口径 : 底径 : 口径 : 口径 : 口径 : 口径 : 器高 : 口径 : 口径 : 体部径 : (8.1)	外面 磨滅のため調整不明 内面 口縁部5cmハケ、のちヨコナデカ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁端部欠 以下約1/4 底部欠	小型丸底壺
799	甕	口径 : 口径 : 口径 : 口径 : 器高 : 口径 : 口径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 黄褐色 内面 : 黄褐色	底部完全 体部わずか	
800	甕	口径 : 口径 : 口径 : 口径 : 器高 : 口径 : 口径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 黄褐色 内面 : 黄褐色	底部完全 体部わずか	

S D 4 3 (図版 6 8)

検出状況

II-2区の北西部で検出された、小微高地bから南側の低地へと伸びる溝である。溝は北東から南西方向にのびて消滅する。溝の北端は調査区外である。溝S D27やS D42に切られている。



第302図 S D43横断面

第4節 II区の調査

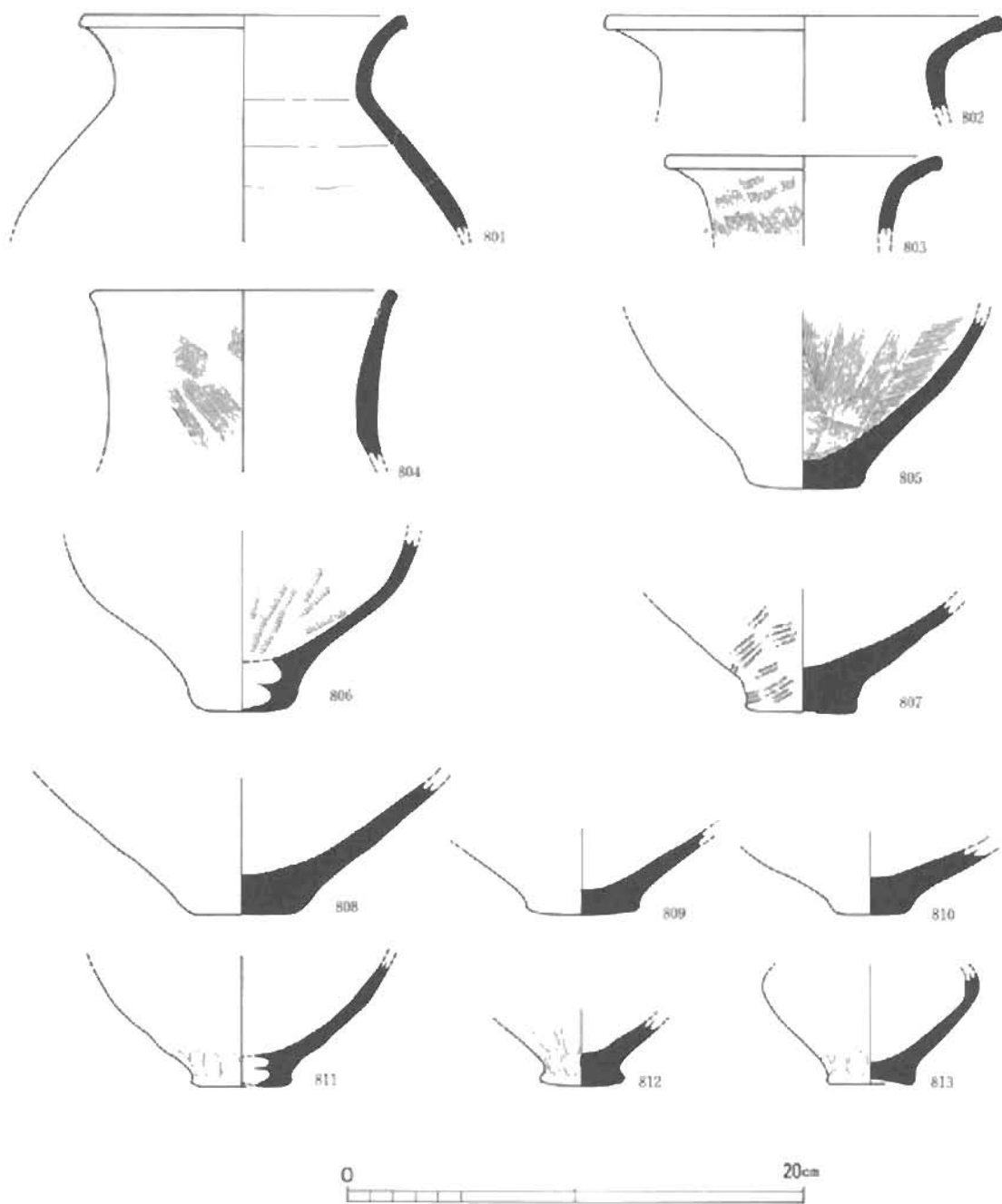
形状・規模 長さは39.0mが確認された。幅は、検出面で2.70m、溝底で50cmを測る。横断面はV字形を呈する。検出面からの深さは11~33cmであり、溝底の標高は北端で148.47m、南端で148.42mと大差ない。

埋土 3層に分かれ、上層から順に暗灰色砂質シルト、灰色砂混じりシルト、灰色シルトとなっている。

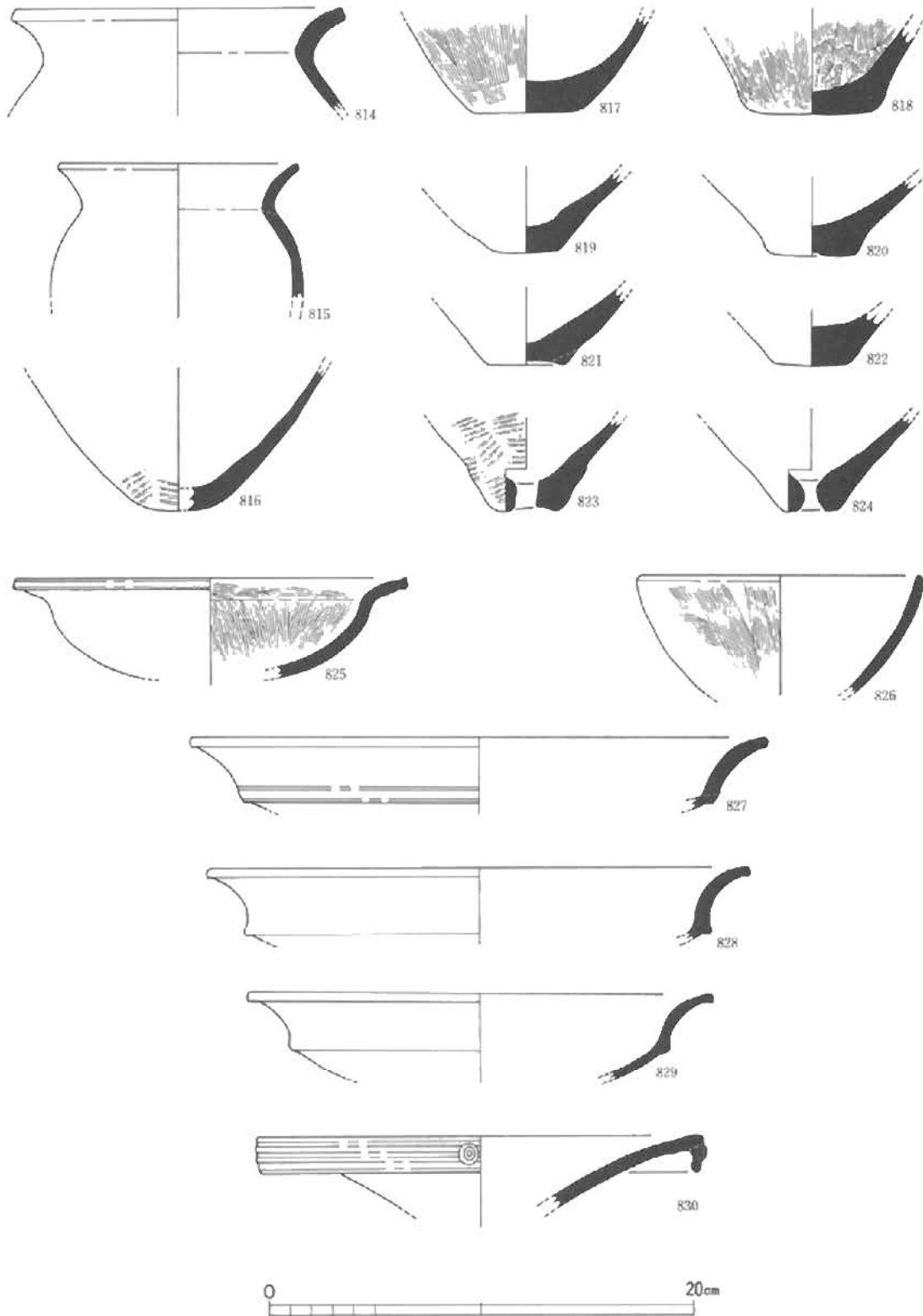
出土遺物 壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している。

壺 長頸壺・短頸壺・広口壺がある。長頸壺は頸部が比較的短いものである。小型の壺が多いようである。

甕 いずれもV様式系のものであるが、外面にタタキメを残すものは比較的少なく、縦方向



第303図 S D43出土土器(1)



第304図 S D43出土土器(2)

のハケメを施すものが見立つ。

鉢 水平に近くのびる口縁部をもつもの、内湾する体部から丸くおさまる口縁部に続くものの二者がある。

高坏 坏部のみを図化している。口縁部は、いずれも短く外反するものである。827は口縁部と

第4節 II区の調査

坏部の境に擬凹線が2条巡っている。

器台 1点のみ出土しており、垂下する口縁部に文様を施している。

時期 出土土器から川除3～5期と考えられる。

第116表 S D43出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存中	備考
801	甗	口径 (11.9) 底径 器高 残9.5 胴径 (11.2) 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 胴部マコハヤ残る。他は磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 黒褐色 灰白	口縁部・体部1/8以下	
802	甗	口径 (16.9) 底径 器高 残4.2 胴径 (12.4) 体部径	外面 内面	外面 灰白 内面 灰白	口縁部1/8	
803	甗	口径 (11.8) 底径 器高 残3.4 胴径 体部径	外面 口縁部マコナデ。胴部10条/cmタテハケ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	口縁部・胴部約1/6	
804	甗	口径 (12.6) 底径 器高 残7.3 胴径 (11.8) 体部径	外面 胴部10条/cm右上がりハケ。のち口縁部マコナデ 内面 口縁部マコナデ。他は磨滅のため調整不明	外面 緑 内面 淡黄	口縁部・胴部約1/6	
805	甗	口径 底径 4.8 器高 残7.5 胴径 体部径	外面 体部・底部ヘラナデ 内面 体部・底部10条/cmタテハケ	外面 淡黄 内面 黒	体部下位のみ 底部完全	
806	甗	口径 底径 (4.2) 器高 残7.4 胴径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 体部・底部一部残る	外面 灰黄褐色 内面 黒褐色	体部・底部1/2	
807	甗	口径 底径 4.8 器高 残5.0 胴径 体部径	外面 体部・底部タタキ。のちマコナデ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰	底部約1/2 体部わずか	
808	甗	口径 底径 (4.2) 器高 残3.5 胴径 体部径	外面 体部・底部マコナデ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰褐色 内面 淡黄	底部約1/2 体部わずか	
809	甗	口径 底径 5.0 器高 残3.7 胴径 体部径	外面 体部ヘラナデのみ。底部木の葉柄 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 黄灰	底部完全 体部わずか	
810	甗	口径 底径 3.5 器高 残2.9 胴径 体部径	外面 底部エビオサエ。他は磨滅のため調整不明 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 黄灰	底部完全 体部わずか	
811	甗	口径 底径 (3.8) 器高 残5.3 胴径 体部径	外面 底部エビオサエ。他は磨滅のため調整不明 内面 体部横ヘラナデ	外面 灰白 黄灰 内面 *	底部約1/3 体部わずか	
812	甗	口径 底径 3.4 器高 残2.8 胴径 体部径	外面 体部・底部エビオサエ 内面 体部・底部エビオサエ	外面 灰白 内面 淡黄	底部完全 体部わずか	
813	甗	口径 底径 3.4 器高 残4.9 胴径 体部径 (9.4)	外面 体部ヘラナデ。底部エビオサエ 内面 体部ヘラナデ。底部エビオサエ	外面 灰白 内面 灰	底部完全 体部わずか	
814	甗	口径 (15.1) 底径 器高 残4.8 胴径 (12.7) 体部径	外面 内面	外面 灰白 淡黄 内面 灰白	口縁部1/6 体部わずか	
815	甗	口径 (11.2) 底径 器高 残6.4 胴径 (9.0) 体部径	外面 口縁部マコナデ。以下磨滅のため調整不明 内面 口縁部マコナデ。体部マコナデ	外面 淡黄褐色 内面 淡黄	口縁部1/8 体部約1/6	
816	甗	口径 底径 器高 残6.3 胴径 体部径	外面 体部・底部2条/cmタタキ 内面 底部エビオサエ。体部磨滅のため調整不明	外面 灰黄褐色 内面 灰	体部・底部約1/4	
817	甗	口径 底径 5.0 器高 残4.4 胴径 体部径	外面 体部・底部7条/cmタテハケ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰褐色 内面 黒褐色	底部完全 体部わずか	
818	甗	口径 底径 5.8 器高 残4.1 胴径 体部径	外面 体部・底部10条/cmタテハケ 内面 体部・底部10条/cmタテハケ	外面 灰白 内面 灰	底部ほぼ完全 体部わずか	

第117表 SD43出土土器観察表(2)

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
819	壺	口径 : 底径 3.0 器高 : 残3.6 胴径 : 体部径 :	外面 体部-底部ナシ 内面 体部ナシ、底部ニヒョウヤム	外面 灰白 黄灰 内面 暗灰	底部完存 体部わずか	
820	壺	口径 : 底径 3.8 器高 : 残4.5 胴径 : 体部径 :	外面 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	底部完存 体部わずか	
821	壺	口径 : 底径 3.8 器高 : 残3.6 胴径 : 体部径 :	外面 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 浅黄橙	底部完存 体部わずか	
822	壺	口径 : 底径 3.7 器高 : 残2.4 胴径 : 体部径 :	外面 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	底部完存 体部わずか	
823	瓶	口径 : 底径 2.8 器高 : 残4.2 胴径 : 体部径 :	外面 体部-底部3条/細タナキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	底部完存 体部わずか	
824	瓶	口径 : 底径 2.7 器高 : 残4.5 胴径 : 体部径 :	外面 ナラハケカ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 浅黄	底部完存 体部わずか	
825	鉢	口径 (18.4) 底径 : 器高 残6.2 胴径 : 体部径 :	外面 口縁部ヨコナシ、体部ヘラミゲキ 内面 口縁部ヘラミゲキ、うちヨコナシ、体部ヘラミゲキ	外面 浅黄 内面 浅黄	口縁部-体 部の約1/10	
826	鉢	口径 (13.0) 底径 : 器高 残5.5 胴径 : 体部径 :	外面 体部10条/細タナキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 土よ い黄 内面 灰白	口縁部-体 部の約1/3	
827	高杯	口径 : (26.7) 底径 : 器高 : 残5.3 胴径 : 杯部高 :	外面 体部ヘラミゲキ、口縁部は磨滅のため調整不明 内面 体部ヘラミゲキ、口縁部は磨滅のため調整不明	外面 土よ い赤 内面 *	口縁部-杯 部の約1/8以下	
828	高杯	口径 (25.3) 底径 : 器高 残3.5 胴径 : 杯部高 :	外面 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 明褐色 内面 灰白	口縁部僅か 杯部の約1/8	
829	高杯	口径 : (21.5) 底径 : 器高 : 残4.1 胴径 : 杯部高 :	外面 内面 } 磨滅のため調整不明	外面 土よ い赤 内面 明赤灰	口縁部-杯 部の約1/8	
830	器台	口径 : (20.8) 底径 : 器高 : 残3.4 胴径 : 体部径 :	外面 口縁部ヨコナシ、口縁部面微凹、円形浮文、他は磨滅のため調整不明 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	口縁部1/6	

SD44

検出状況 II-2区内小高地bのほぼ中央部で検出された。ほぼ東西方向に直線的にはしる溝である。SK59を切っている。

形状・規模 検出した長さは4.30mである。検出面における幅は25~45cmを測る。横断面はU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは5~9cmである。溝の底のレベルはほぼ一定しており、その標高は148.80mである。

埋土 黒灰色砂混じりシルト、暗灰色シルトの2層が堆積していた。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。器種として特定できるのは高杯のみである。また、図化できる土器はなかった。

時期 高杯の杯部の形態より川除3~5期と考えられる。

SD45

検出状況 II-2区の北西部で検出された。小高地bから南側の低地へと伸びる溝である。溝は

第4節 II区の調査

北北東から南南西方向にのびて消滅する。溝の北端はII-1区との境界付近に求められる。SH37を切っている。

形状・規模 長さは12.50mが確認された。幅は、検出面で2.20～3.40m、溝底で2.00～3.05mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは12～15cmである。溝底には比高差がなく、148.82m程度である。

埋土 灰色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 壺・甕・高坏が出土しているが、図化できるものはない。壺はV様式系のものである。

時期 SH37との切り合い関係および出土土器から川除4～6と考えられる。

SD46

検出状況 II-1区の南西隅で検出された。北西から南東方向にややカーブを描きながらはしる溝である。北西側はIII区との境界部にあたるため調査はできなかった。他の遺構との切り合い関係はなかった。

形状・規模 検出した長さは7.00mである。検出面における幅は0.65m～1.10mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは5～13cmである。溝の底のレベルは西側ほど低く、その標高は北西側で148.89m、南東側で148.96mである。

埋土 暗褐色灰色砂混じりシルト1層が堆積していた。

出土遺物 埋土中から土器のみが出土している。器種としては壺ないし甕の底部が出土している。他に器種を特定できない土器片も出土している。

時期 出土遺物などから川除4～6期と考えられる。

SD47

検出状況 II-2区の北西隅の、小微高地b上で検出された溝である。溝は東西にのび、両端は浅くなって消滅する。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 長さは4.60mが確認された。幅は、検出面で40～50cm、溝底で20～25cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは3～5cmであり、溝底の標高は東端で148.98m、西端で148.97mと大差ない。

埋土 灰色シルト質極細砂が堆積する。

出土遺物 V様式系の甕が出土しているが、図化および時期の決定は困難である。

時期 出土土器から川除2～6期と考えられる。

SD48

検出状況 II-2区の北西隅の、小微高地b上で検出された溝である。溝は西北西から東南東へのび、東端は南方の低地へと屈曲する。東端は浅くなって消滅し、西端は調査区外である。他の遺構との切り合いは認められない。

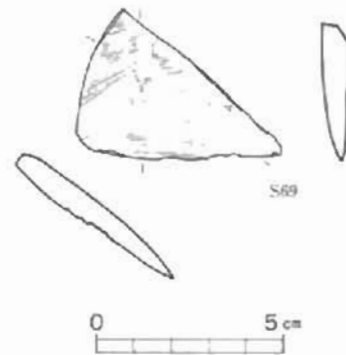
形状・規模 長さは19.0mが確認された。幅は、検出面で20～40cm、溝底で5～16cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは3～5cmであり、溝底の標高は西端で148.87m、東端で148.85mと大差ない。

- 埋土 灰色シルト質極細砂が堆積する。
- 出土遺物 V様式系の甕、丸底に近い甕の底部が出土しているが、図化および時期の決定は困難である。
- 時期 出土土器から川除2～6期と考えられる。

SD49

- 検出状況 II-2区の北西部の、小微高地b上で検出された溝である。溝は低地に向かって南北方向にのびる。両端部とも浅くなって消滅する。SD42・SD27に切られている。
- 形状・規模 長さは9.00mが確認された。幅は、検出面で20cm、溝底で5～10cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは10～15cmであり、溝底の標高は北端で148.67m、南端で148.72mと大差ない。

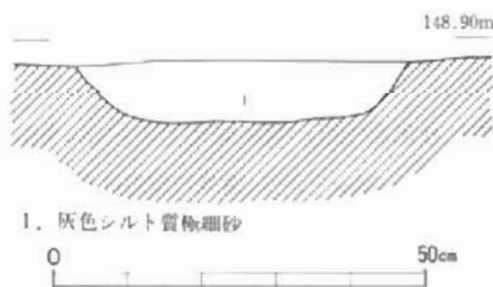
- 埋土 灰色シルト質極細砂が堆積する。
- 出土遺物 土器には、刻目突帯をもつ壺・高杯の脚部片などが出土しているが、図化および詳細な時期の決定は困難である。
- 石庵丁 石庵丁の破片が1点出土している。直線的な刃部を含む端部の破片である。残存長5.5cm、幅0.7cmを測る。石材は凝灰質泥岩である。
- 時期 出土した土器は細片であるが、川除2～6期と考えられる。



第305図 SD49出土石器

SD50

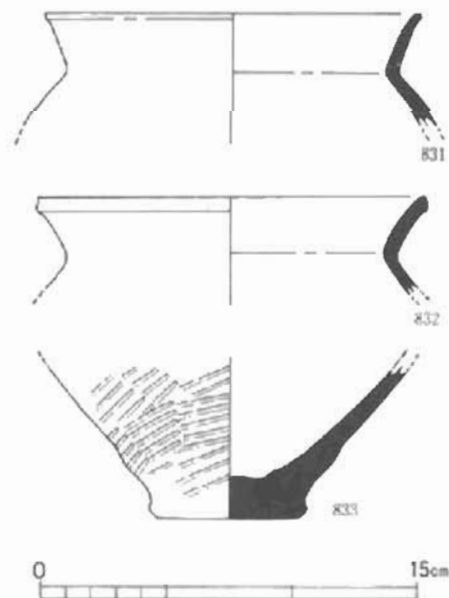
- 検出状況 II-2区の北西部で検出された、小微高地bから南側の低地へと伸びる溝である。溝は南北方向にのびる。両端は浅くなって消滅している。溝SD42に切られている。



第306図 SD50横断面

- 形状・規模 長さは3.60mが確認された。幅は、検出面で45～70cm、溝底で30～50cmを測る。横断面は逆台形を呈する。検出面からの深さは10cmであり、溝底の標高は北端で148.79m、南端で148.76mと大差ない。

- 埋土 灰色シルト質極細砂が堆積する。



第307図 SD50出土土器

第4節 II区の調査

出土遺物 V様式系の甕・高坏の脚部が出土している。833は底部外面にタタキを施したのちナデている。

時期 出土土器から川除3～5期と考えられる。

第118表 SD50出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
831	甕	口径 : (15.0) 底径 : 器高 : 残4.5 頸径 : (13.3) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 以下磨滅のため調整不明 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : によい 黄橙 内面 : 褐灰	口縁部~体部約1/8	
832	甕	口径 : (15.2) 底径 : 器高 : 残3.7 頸径 : (13.2) 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部~体部約1/5	
833	甕	口径 : 5.5 底径 : 5.5 器高 : 残6.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部3葉/cmタタキ, のちナデ 内面 : 体部ナデ, 底部エビオサユ	外面 : 淡橙 内面 : 浅黄橙	底部完存 体部約1/3	

SD51

検出状況 II-2区の北西部、小徴高地b上で検出された溝である。溝は北西から南東方向にのびる。SD27の北肩に重なる位置に掘削されている。西端は調査区外であるが、東端は浅くなって消滅している。

形状・規模 長さは8.20mが確認された。幅は、検出面で30～35cm、溝底で5～15cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは3～12cmであり、溝底の標高は西端で148.79m、東端で148.69mと若干東方に低くなっている。

埋土 灰色シルト質極細砂が堆積する。

出土遺物 弥生土器の破片が出土しているが、図化は困難である。

時期 出土土器から川除2～6期と考えられる。

SD52

検出状況 II-2区の北西部、小徴高地bの南縁に沿って検出された溝である。溝は北北西から南南東方向にのび、SD27と平行している。東端はSD43に切られているが、西端は断続的に西方へのびる可能性がある。

形状・規模 長さは27.4mが確認された。幅は、検出面で20～50cm、溝底で7～20cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは14～30cmであり、溝底の標高は西端で148.46m、東端で148.49mと大差ない。

埋土 明灰色シルト質極細砂が堆積する。

出土遺物 埋土より、V様式系の甕や高坏の坏部などが出土しているが、図化および時期の決定は困難である。

時期 高坏の坏部の形態から判断して、川除4～6期と考えられる。

SD53

検出状況 II-2区の南西部、小徴高地c上で検出された溝である。溝は北北西から南南東方向にのびる。西端はSD54に切れ、東端は浅くなって消滅する。

形状・規模	長さは85.0mが確認された。幅は、検出面で50～120cm、溝底で15～38cmを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは8～45cmである。溝底の標高は東端で148.70m、西端で148.32mを測る。
埋土	明灰色シルト質極細砂が堆積する。
出土遺物	弥生土器の細片が出土しているが、図化および詳細な時期の決定は困難である。
時期	川除2～6期と考えられる。

SD56

検出状況	II-2区の南方、小嶺高地c上で検出された北西から南東方向にのびる溝である。両端は浅くなって調査区内で消滅する。
形状・規模	長さは15.0mが確認された。幅は、検出面で20～50cm、溝底で7～14cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは10～15cmである。溝底の標高は北端で148.76m、南端で148.70mと大差ない。
埋土	茶灰色シルト質極細砂が堆積する。
出土遺物	V様式系の甕など土器の細片が出土しているが、図化および詳細な時期の決定は困難である。
時期	川除2～7期と考えられる。

SD57

検出状況	II-2区の南東隅、小嶺高地c上で検出された西北西から東南東方向にのびる溝である。両端は浅くなって調査区内で消滅するが、西方のSD56が断続的に東へのび、これと同一の溝になる可能性もある。
形状・規模	長さは3.40mが確認された。幅は、検出面で30～40cm、溝底で15～20cmを測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは10cmである。溝底の標高は西端で148.80m、東端で148.78mと大差ない。
埋土	灰色シルト質極細砂が堆積する。
出土遺物	弥生土器の細片が出土しているが、図化および詳細な時期の決定は困難である。
時期	川除2～7期と考えられる。

SD59

検出状況	II-2区の南端、小嶺高地cの南縁から南方調査区外の低地へのびる溝である。北端はSH48・49に切られる。
形状・規模	長さは3.60mが確認された。幅は、検出面で50～70cm、溝底で5～10cmを測る。横断面はV字形を呈する。検出面からの深さは19～35cmである。溝底の標高は北端で148.66m、南端で148.47mと南へ低くなっている。
埋土	灰色シルト質極細砂が堆積する。
出土遺物	弥生土器の細片が出土しているが、図化および詳細な時期の決定は困難である。
時期	川除2～7期と考えられる。

(5) 墓

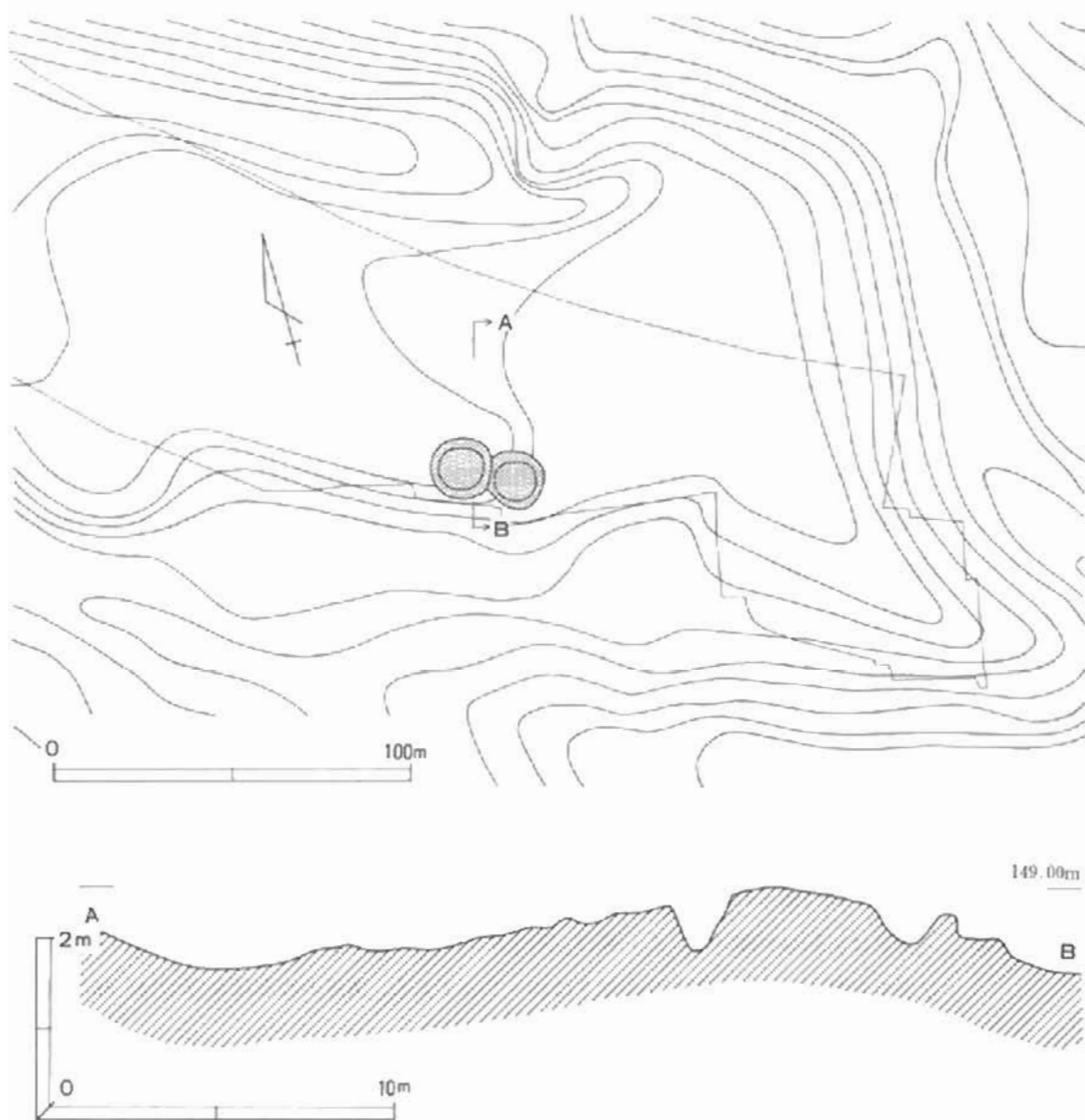
SX04 (図版77・78・87)

検出状況 1-1区南西部からII-3・4区にかけて位置する円形周溝墓である。小微高地cの南東先端部上に立地する。本周溝墓はSX05とはほぼ接しており、周溝の一部はSX05に切られている。

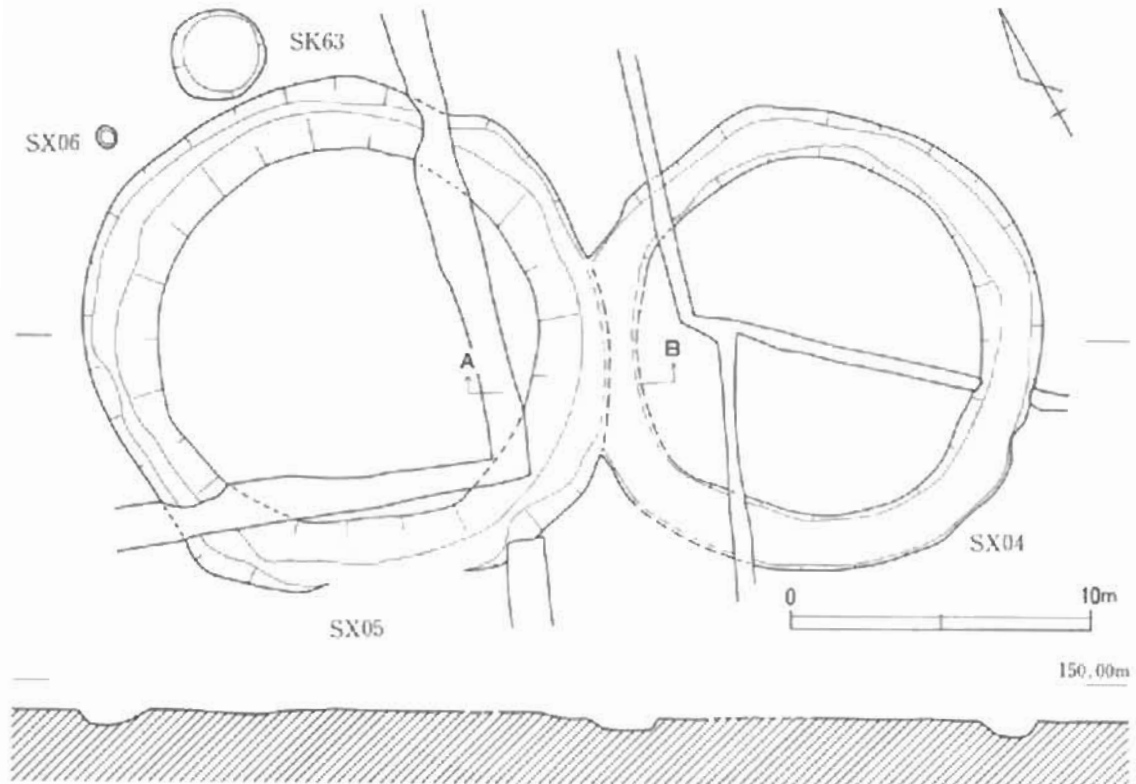
なお、本遺構については円形周溝墓と判断したが、主体部は確認できず周溝を検出したにとどまる。

形状・規模 若干不整形な箇所も認められるが、ほぼ円形に周溝がめぐっている。検出面における周溝の幅は、1.80mから2.00mとほぼ一定している。また、底部における幅はそれぞれ1.40m、1.10mである。

周溝横断面は逆台形をなす。ただし、周溝内側斜面が45°と外側斜面の60°に比べて傾斜が緩やかとなっている。検出面からの深さは、北側で37cm、東側で52cm、南側で16cmと南側



第308図 SX04・05の立地



第309図 S X 04・05

ほど浅くなる傾向が認められる。また周溝底部の標高は、北側で148.20m、東側で148.20m、南側で148.50mと南側ほど高くなっている。

埋土 北側から東側にかけては、上から灰色砂混じりシルト層、暗灰色中砂質シルト～灰色砂混じりシルト層、淡黒灰色～灰色砂質シルトの3層が堆積していた。特に、第1・2層からは土器片などが出土している。また、南側は検出面からの深さが浅いこともあり、北側から東側に比べて1層少なく、上から暗灰褐色砂混じりシルト層、暗灰褐色砂質シルト層が堆積していた。南側の周溝内からは土器片の出土は認められなかった。

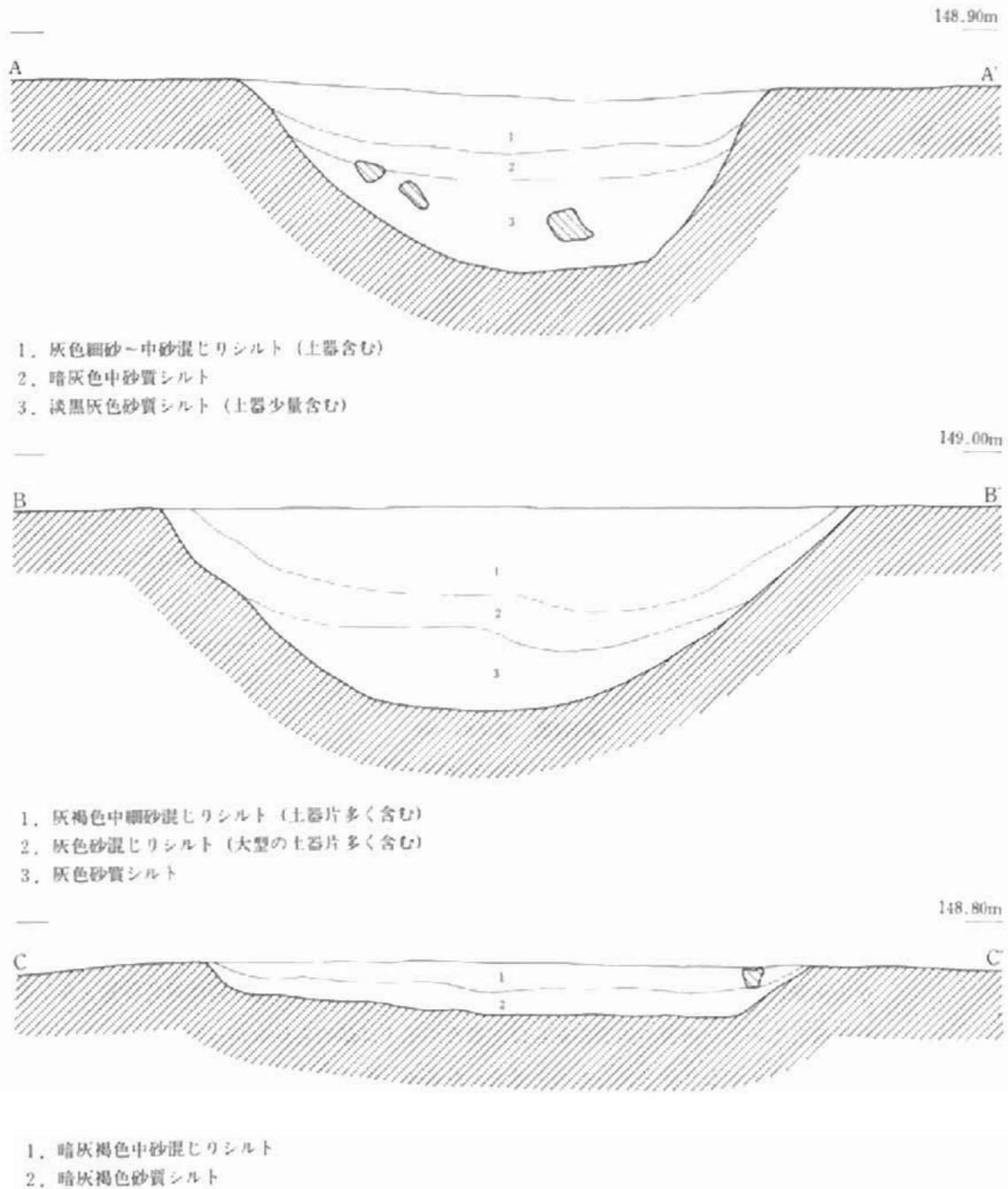
墳丘 本来は盛土がなされていたものと考えられるが、盛土部分は確認できなく、旧表土層以下を検出したにとどまる。検出した墳丘は全て地山の削り出しによって成形されている。周溝底から墳丘への変化点を基準とした墳丘の径は12.4mを測る。

貼石 特に墳丘部北側斜面に拳大の円礫が貼り付けられているのが確認できた。この箇所の断



- 1. 黄灰色極細砂質シルト
- 2. 黄茶灰色極細砂質シルト
- 3. 暗茶灰色シルト質極細砂
- 4. 茶褐色シルト質極細砂(SX05埋土)
- 5. 黄茶褐色シルト質極細砂(SX04埋土)

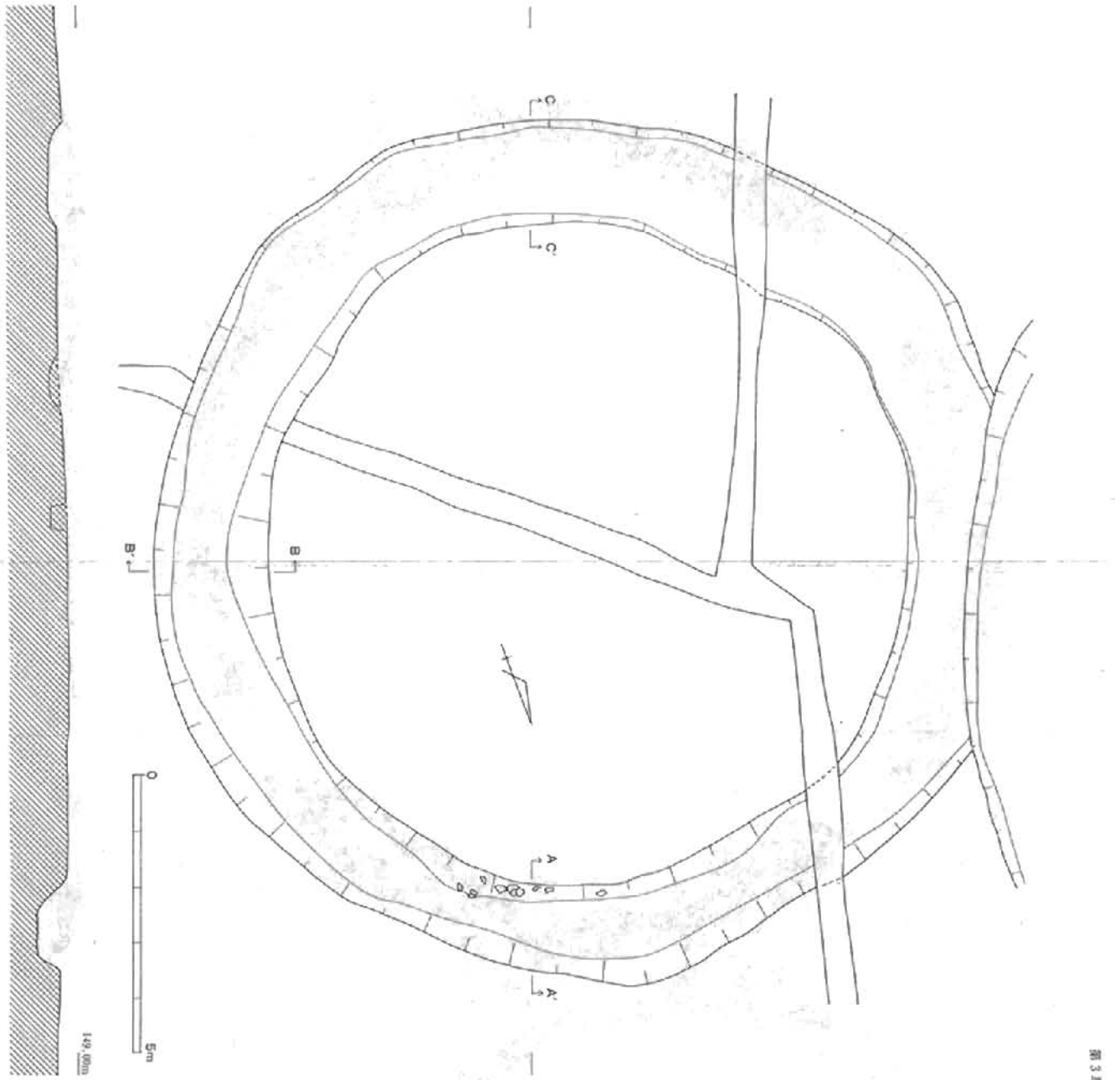
第310図 S X 04と05の切り合い



第311図 SX04周溝横断面

ち割り調査の結果では、明確な塗り込め土は確認できなかった。おそらく墳丘内に埋めこまれたものと考えられる。

ところで、周溝内中・上層において、多くの円礫を確認することができた。これらの円礫は、墳丘斜面で確認された貼石と同じ大きさのものであることから、貼石に用いられたものと考えられる。周溝内埋土中・上層から出土していることから、これらの貼石は丘上部の盛土部分の補強に用いられたもので、盛土部分の削平・崩壊にともなって周溝内に落ち込んだものと考えられる。

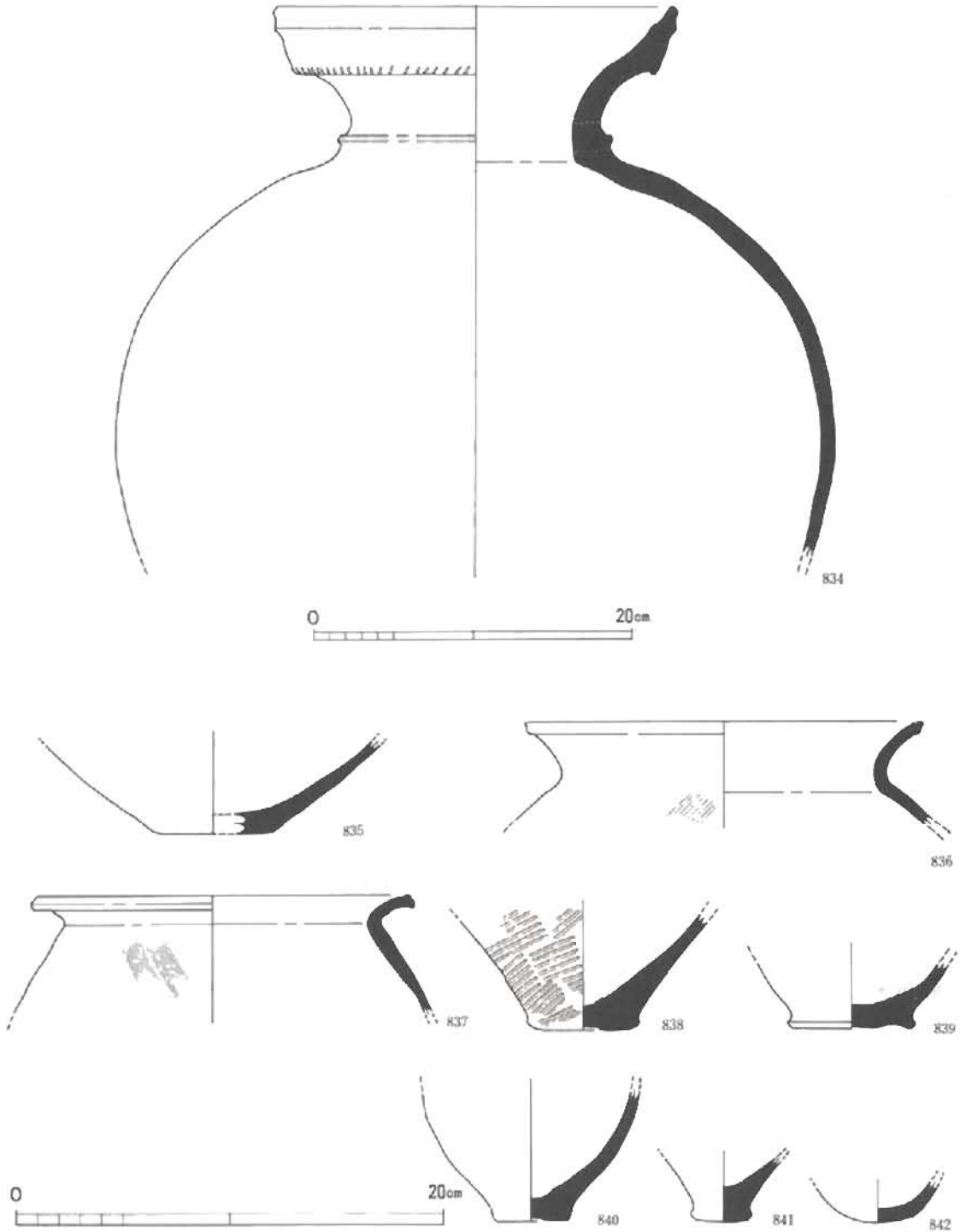


第112圖 S X 04

なお、周溝外側斜面においては貼石は確認できなかった。

埋葬主体 全く確認できなかった。旧表土面で主体部の痕跡を認めることができなかったことから、埋葬主体は墳丘盛土層の範囲内に掘り込まれたもので旧表土面まで達するような主体部ではなかったものと考えられる。

出土遺物 周溝内より土器のみが出土している。出土量は多くはなく、器種としては壺・甕・鉢・鉢・ミニチュア土器が出土している。



第313図 S X 04出土土器

第4節 II区の調査

壺 二重口縁壺・広口壺・底部片が出土している。ただし、広口壺については、小片のため図化できなかった。

特に834の壺については東側から北側の周溝内埋土中・上層から比較的散乱した状況で出土している。中・上層から出土していることから、本来は墳頂部に供献されていたものと推定される。口縁部については、刻み目が認められる以外は装飾は認められなかった。

甕 口縁部と底部片が出土している。いずれもV様式系に分類されるものである。

ミニチュア 底部片が出土しているが、全体像は復元できない。

他 器台の可能性をもつ小片が出土している。ただし断定はできない。

時期 出土土器より、川除6期と考えられる。

第119表 SX04出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
834	壺	口径 : 24.2 底径 : 器高 : 残13.9 胴径 : 17.0 体部径 : (14.8)	外面 : 口縁部刻み目、肩部凸部貼り付け、他は磨減のための調整不明 内面 : 磨減のための調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部はほぼ 完全 体部約1/3	
835	壺	口径 : 底径 : 5.4 器高 : 残4.3 胴径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のための調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部約2/3 体部わずか	
836	甕	口径 : (18.4) 底径 : 器高 : 残4.5 胴径 : (15.2) 体部径 :	外面 : 体部タタキ、のち口縁部-体部上位ヨコナデ 内面 : 口縁部-体部上位ヨコナデ	外面 : にじい 黄 内面 : 灰白	口縁部-体 部約1/8	
837	甕	口径 : (17.4) 底径 : 器高 : 残5.5 胴径 : (14.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部一部7条/cmタテハケ残る 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 明黄褐色 内面 : 灰白	口縁部-体 部約1/8	
838	甕	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残5.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部3条/cmタタキ 内面 : 磨減のための調整不明	外面 : 灰白 内面 : 黄灰	底部完全 体部わずか	
839	甕	口径 : 底径 : 5.4 器高 : 残3.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 底部ユビオサエ、他は磨減のための調整不明 内面 : 磨減のための調整不明	外面 : 灰白 内面 : 黄灰	底部完全 体部わずか	
840	鉢	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残6.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部ナデ 内面 : 体部ナデ、底部ユビオサエ	外面 : にじい 黄 内面 : にじい 黄	底部完全 体部約1/2	
841	ミニチュア 鉢	口径 : 底径 : 2.4 器高 : 残3.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 底部ユビオサエ、他は磨減のための調整不明 内面 : 磨減のための調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部完全 体部わずか	
842	ミニチュア 壺	口径 : 底径 : 器高 : 残1.9 胴径 : 体部径 :	外面 : 底部ハケ 内面 : ナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰黄	底部のみ	

SX05 (図版77・79・97)

検出状況 II-3・4区にかけて検出された円形周溝墓である。I区のSX04とともに、東西方向に長い小微高地Cの東端に立地している。この東方に接するSX04とは周壁を共有するが、明確に切り合い関係が認められ、本円形周溝墓がより新しいことが確かめられた。

また、本周溝墓はSH43の埋没後に構築されていることが判明した。北縁に土器棺SX06が存在することと合わせて考えれば、この小微高地の突端が、当初居住域として使用されていたが、のちには墓域として利用されたことが分かる。また、墳丘の上にはSD58がのちに掘削されている。

周溝の形状 墳丘を全周する周溝はほぼ正円形を呈し、外径は16.5~17.3mを測る。検出面における幅



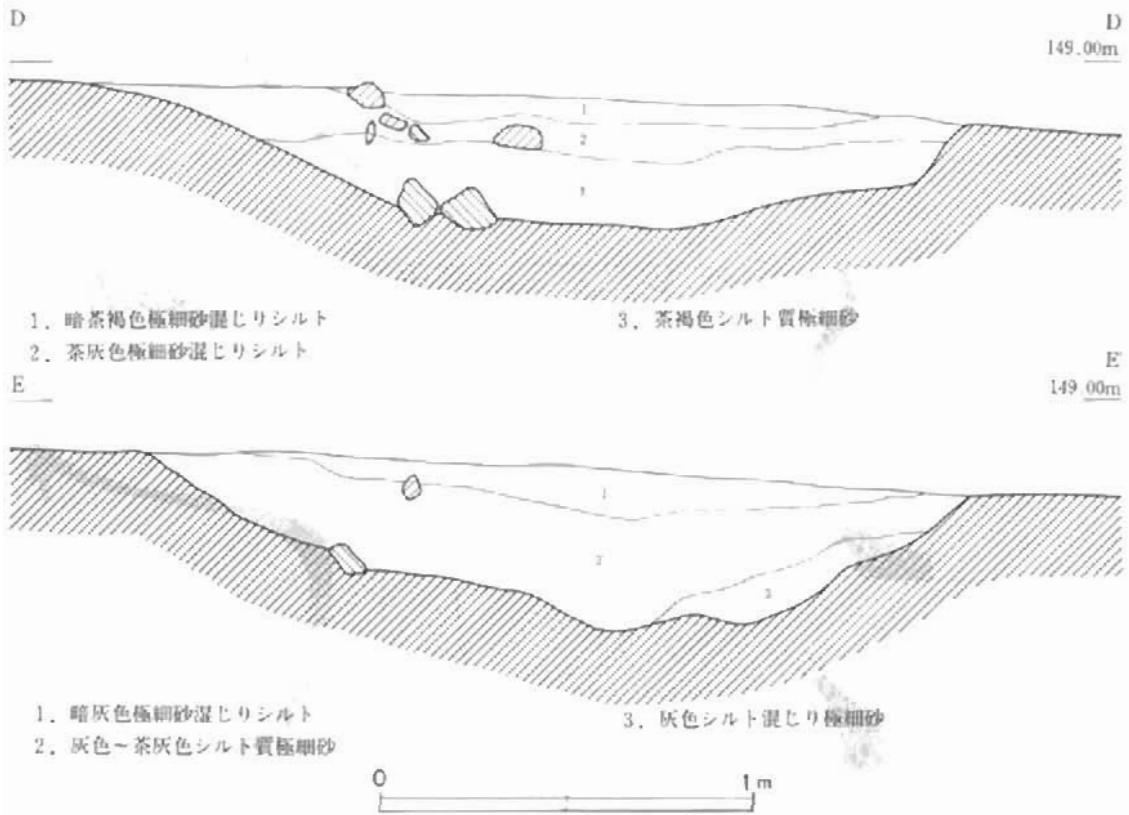
第314図 SX05

は1.97~2.91mを測り、溝底での幅は16~118cmである。

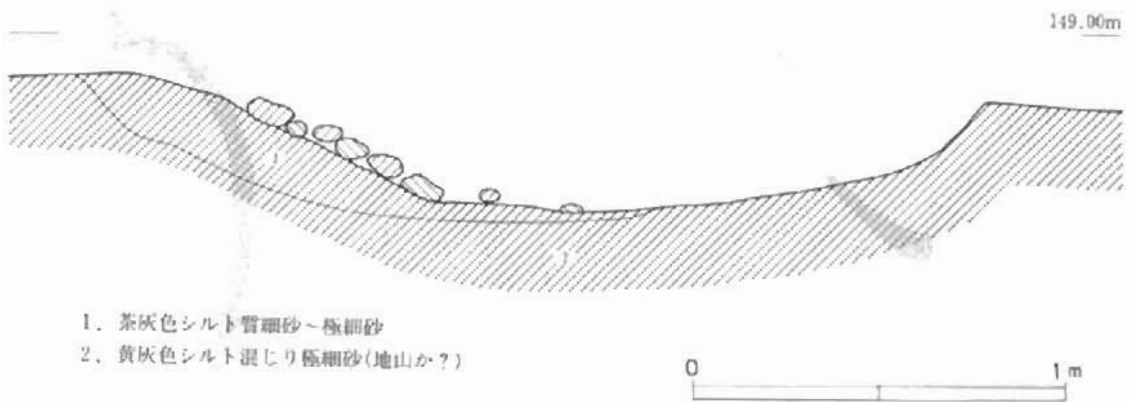
周溝の横断面形は逆台形を呈する。溝底から外側への立ち上がりの角度が約45°であり、墳丘方向の傾斜角度20~30°よりも急傾斜となっている。墳丘上面から周溝底までの深さは35~50cmとはほぼ均一であり、陸橋部などの施設も存在しない。溝底の標高は148.40m前後である。

南縁で周溝が不明瞭になる部分があるが、小微高地の突端という狭い場所への占地の結果、南側へ若干崩落したものと考えられる。

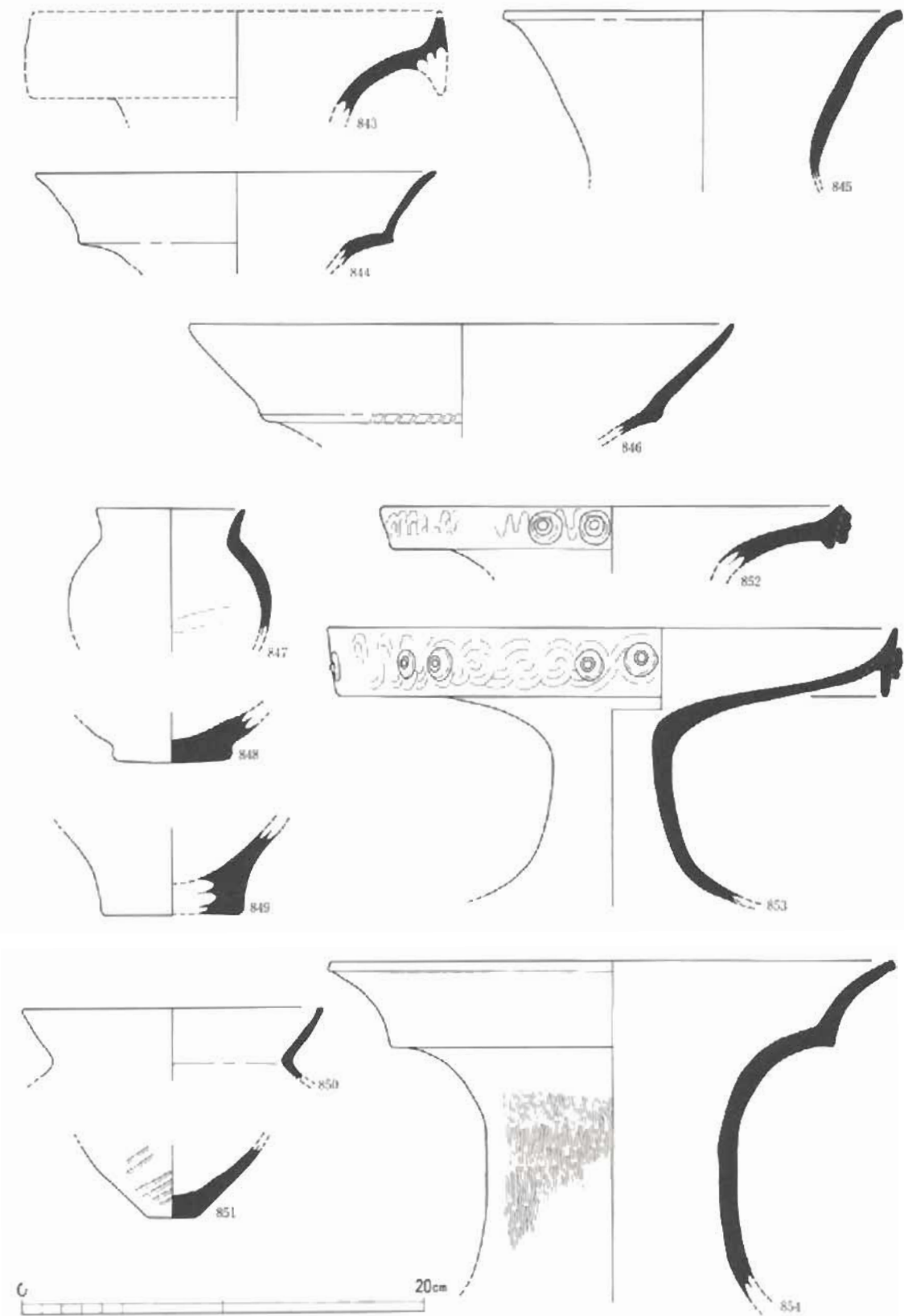
周溝の埋土 基本的に3層に分かれ、上層より順に暗茶灰色極細砂混じりシルト、茶灰色シルト質極細砂、茶褐色シルト質極細砂となっている。埋土中、特に最下層からは墳丘部斜面に貼っていた円礫の転落が多く認められた。また、出土した土器も最下層のものである。



第315図 S X 05周溝横断面



第316図 S X 05貼石



第317図 S X 05出土土器

- 墳丘の形状** 墳丘の平面形は正円形を呈する。墳丘の肩で計測した直径は6.36mであり、裾での直径は7.79mを測る。削平の結果であるが、墳丘の上面は平坦である。
- 墳丘の構築** 墳丘部は、基本的に地山の削り出しによって構築されている。ただし、断面観察によれば、墳丘部斜面に部分的に盛土を施した箇所が確認できた。この盛土は周溝掘削時の排土を利用したものであろう。
- 貼石** 墳丘部の斜面全体には多数の円礫が貼られている。礫の大きさは直径5～15cm程度のものが多く、最大のものでも長さ56cmであり、一人で抱えられない大きさのものは存在しなかった。
- また、最も貼石の遺存状況の良い北側斜面の観察においても貼石の作業単位などは確認できず、斜面の部位と石の大小との間の相関関係も見出せなかった。
- 埋葬施設** 墳丘上面の削平に伴い、木棺墓あるいは土器棺などの埋葬施設は確認できなかった。
- 出土遺物** 土器のみが周溝の底あるいは墳丘斜面の貼石上面から出土している。溝底出土の土器が少ないことから、墳丘上面に供献されていたものの落下を裏付けている。出土土器には、壺・甕・器台がある。
- 壺** 二重口縁壺・広口壺・短頸壺がある。また、器種は不明であるが、河内産の土器片も出土している。二重口縁壺には、口縁部が内湾しながらのびるものと、直線的にのび、頸部との境が不明瞭なもの二者がある。後者については、口縁部と頸部の境に突帯を貼り、刻目を施している。
- 甕** 量は少ないが、すべてV様式系のものである。
- 器台** 二種類、3個体が出土している。852・853は垂下口縁の端部に装飾を施すものであるのに対し、854は、体部と口縁部の境界が明瞭であり、二重口縁壺のように口縁部が内湾しながらのびるタイプである。
- 時期** 出土した土器から川除6期と考えられる

第120表 S X 05出土土器観察表(1)

番号	器種	度量 (cm)	調査	色調	残存率	備考
843	壺	口径 : 無し 器高 : 残4.9 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : 浅黄褐色 内側 : 灰白	口縁部1/4	
844	壺	口径 : (19.8) 器高 : 残6.2 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : 浅黄褐色 内側 : 浅黄褐色	口縁部1/9	
845	壺	口径 : (19.5) 器高 : 残8.2 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : 灰白 内側 : 灰白 浅黄褐色	口縁部一細部約1/2	
846	壺	口径 : (27.0) 器高 : 残5.3 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : 浅黄褐色 内側 : 浅黄褐色	口縁部僅か	
847	壺	口径 : (7.2) 器高 : 残6.2 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : 浅黄褐色 内側 : 浅黄褐色	口縁部~体部約1/2	
848	壺	口径 : 無し 器高 : 残2.4 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : 灰白 内側 : 灰白	底部完存 体部わずか	
849	壺	口径 : 無し 器高 : 残4.2 体部径 : 無し	外側 : 内側 :	外側 : にぶい 内側 : 浅黄褐色	底部約1/2 体部わずか	

第121表 S X 05出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
850	壺	口径 : (15.0) 底径 : 器高 : 残3.5 胴径 : (11.0) 体部径 :	外面 : 内面 : 調整のための調整不明	外面 : ぶい 内面 : ぶい 黄橙	口縁部1/8 体部わてか	
851	壺	口径 : 底径 : 2.6 器高 : 残3.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部3条/cmクワキ 内面 : 調整のための調整不明	外面 : 赤橙 内面 : 灰白	底面完全 体部わてか	
852	器台	口径 : (22.8) 底径 : 器高 : 残3.1 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部周縁状文、のち直径1.5cmの円形浮文2個1対で6ヶ所 (復元) 貼り付け、口縁部はヨコナテ 内面 : 口縁部ヨコナテ、他は調整のための調整不明	外面 : 橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/2	
853	器台	口径 : (28.2) 底径 : 器高 : 残13.6 胴径 : 体部径 : 5.0	外面 : 口縁部周縁状文、のち直径1.5cmの円形浮文2個1対で10ヶ所 (復元) 貼り付け、他は調整のための調整不明 内面 : 調整のための調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/2 体部約3/4 胴部欠	
854	器台	口径 : (28.0) 底径 : 器高 : 残16.8 胴径 : 体部径 : 14.4	外面 : 体部縦ヘラミダキ、他は調整のための調整不明 内面 : 調整のための調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部一 体部約1/4	

S X 0 6 (図版 7 6・8 7)

検出状況 II-3区の円形周溝墓S X 05の北側で検出された土器棺である。S X 05周溝の北縁からの距離は1.20mである。他の遺構との切り合い関係は認められない。

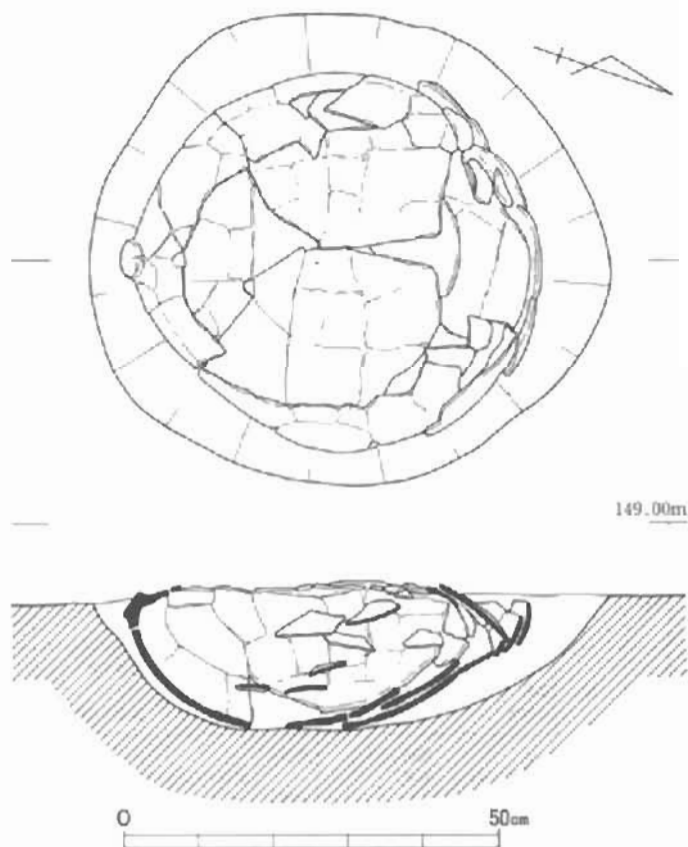
掘り方 平面形は楕円形を呈する。検出面での規模は、長径70cm、短径62cm、底までの深さは20cmを測る。断面形はU字形である。

棺の構造 棺は、身と蓋を組み合わせた構造のもので、掘り方内に横位に納められている。棺身の底部は、S X 05の方向を向いている。棺身には肩部以上を打ち欠いた壺を用い、蓋に壺の底部を転用している。棺身の壺は2個体存在するが、図化した器高40cmの壺を主に使用し、補助的にもう一つの土器を同じく横位に利用している。棺身、蓋とも開口部の直径は約20cmである。

出土遺物 棺内より、人骨や副葬品などの遺物は一切出土しなかった。

棺身 突出した底部と、大きく張った体部をもつ壺である。

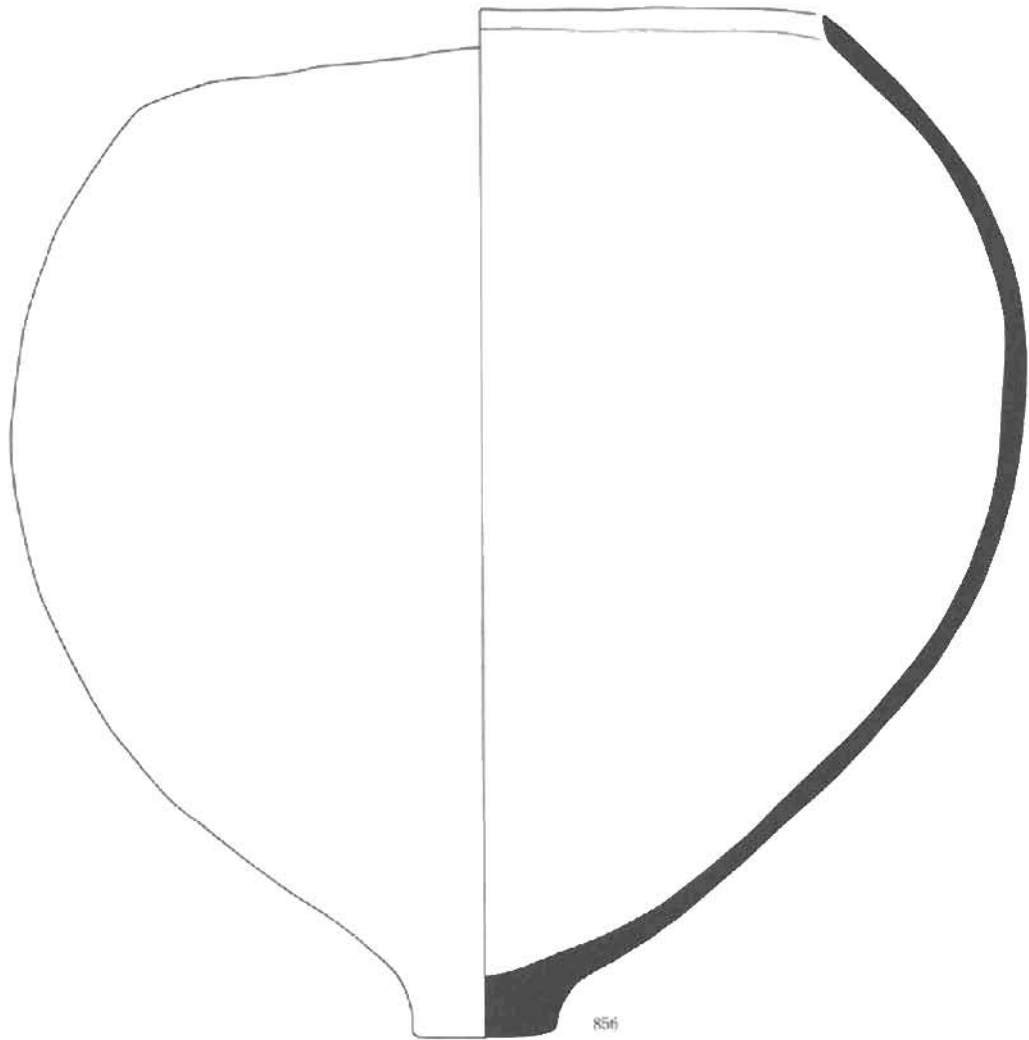
棺蓋 突出した底部をもつ壺



第318図 S X 06

である。
川除6期である。

時期



第319図 S X 06土器棺

第122表 S X 06出土土器観察表

番号	器種	容量 (ml)	調整	色調	残存率	備考
855	壺	口径 底径 4.4 器高 残8.4 相径 体部径	外面：体部7割/cmタテマ、底部ヘラマヤ 内面：体部下位7割/cmタテマ、中位オマヤ	外面 灰白 残燈 内面 明褐色	体部下位一 部残存	土器類番
856	壺	口径 底径 5.7 器高 残40.7 相径 体部径 40.5	外面：体部短ヘラマヤ 内面：磨滅のため調整不明	外面 灰白 帯、灰色 内面	体部上位以 上欠、体部 一部欠	土器類番

(6) 水田址

検出状況 II-2区西端の、小微高地bとcの間の低地で検出された。南方の小微高地cの北縁から北方の約540mにおいて水田土壌の拡がり認められたものである。完掘することができなかつたため、平面形と水口の確認、一筆の標高の確認と断面観察を行った。断面観察の結果、平面的に検出した面の上にもう1面水田があることが部分的に認められた。

水田区画 完結する水田は18筆確認でき、そのいずれもが長方形ないし正方形を呈する。この水田は西から東方向に低くなる傾斜地に立地し、25m離れた区画9と区画14の比高差が最大値であり、7cmを測る。一筆の面積(プランメーター求積による)は、最も狭い区画14で7.7㎡、最も広い区画5で31.3㎡を測る。平均を求めれば18.7㎡となる。

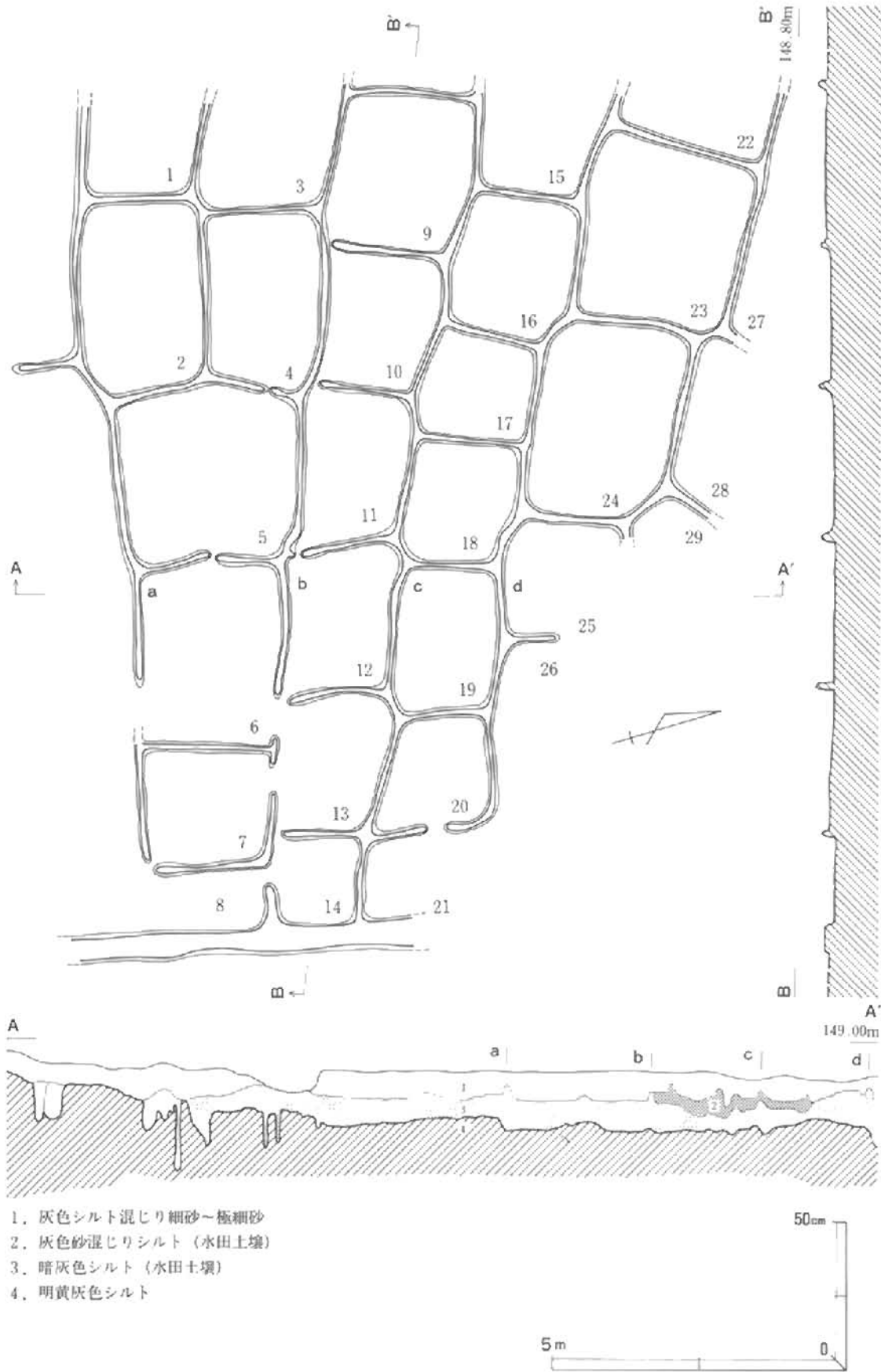
水口 最も高い場所にある区画9から区画14までの間には南北方向の畦畔の南端が途切れている部分が確認され、水口と判断できる。他にも水口は認められるが、それ以外のものについては、田越しによる用排水がなされていたことが考えられる。

出土遺物 水田上層より土器の細片が出土したが、図化および時期の決定には困難な資料である。

時期 層位的には、小微高地cにおける川除2～7期、生活面からの連続性が認められるため、この時期の所産としてよい。水田区画の形態もこれと矛盾しない。

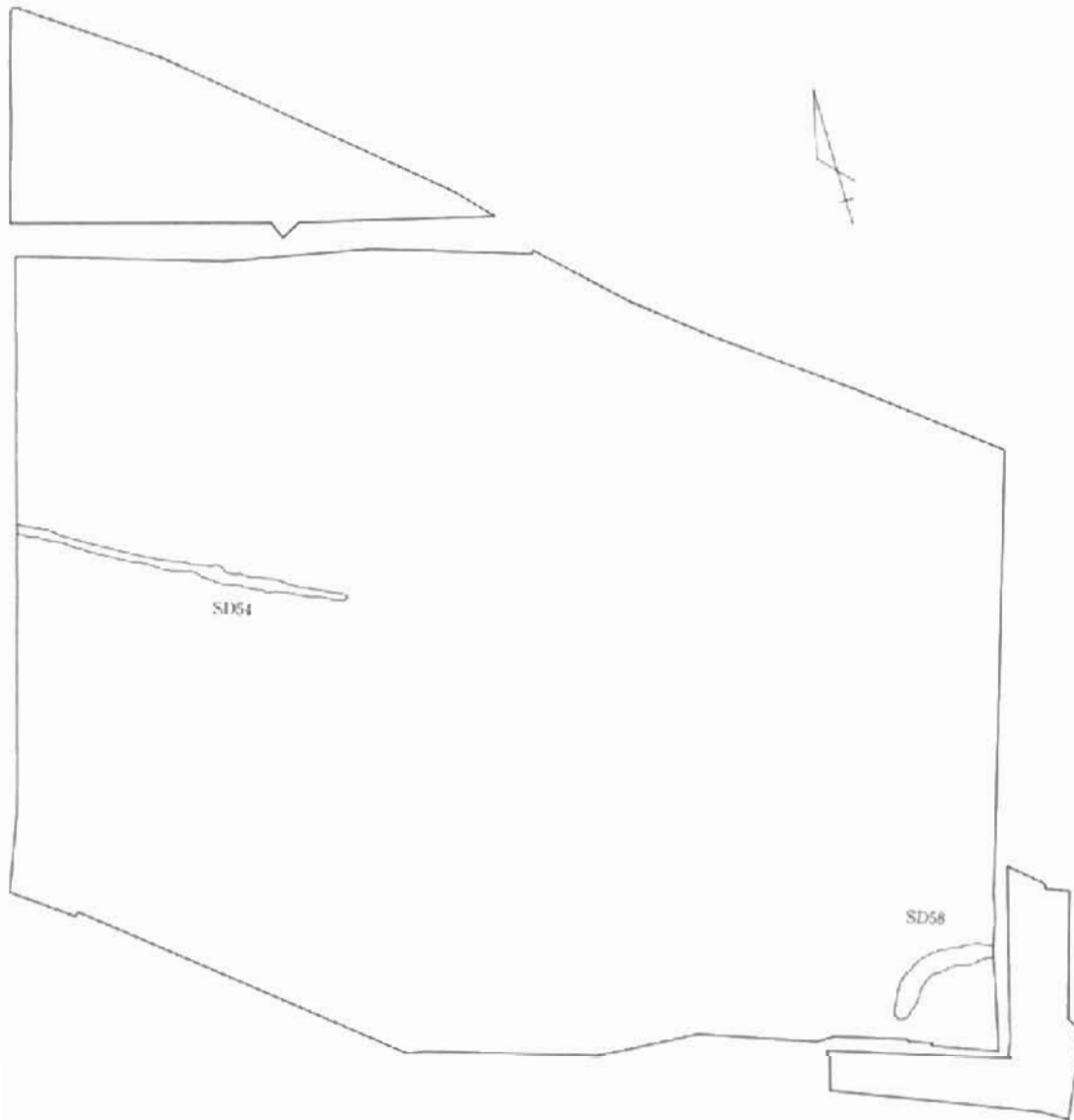
第123表 II区 水田址の区画別面積・標高一覧表

水田区画	面積 (㎡)	標高 (m)	水田区画	面積 (㎡)	標高 (m)
1		148.59	16	16.9	148.57
2	24.0	148.57	17	11.7	148.59
3		148.62	18	12.8	148.59
4	20.3	148.60	19	14.8	148.59
5	31.3	148.57	20	11.6	148.52
6	26.8	148.59	21		
7	15.0	148.59	22		148.62
8			23	30.0	148.56
9	22.2	148.61	24	28.2	148.53
10	15.7	148.60	25		148.53
11	16.5	148.58	26		148.52
12	15.9	148.54	27		148.55
13	15.2	148.59	28		148.54
14	7.7	148.54	29		148.53
15		148.59			



第320図 水田址

3. 古墳時代後期の遺構と遺物



第321図 II区古墳時代後期の遺構

(1) 溝

SD54 (図版88)

検出状況 II-3区の西端の、小微高地bと小微高地cの間の低地で検出された溝であり、東南東から西北西方向に直線的にのびてIII区へと続く。東端は浅くなって消滅している。SD55を切っている。

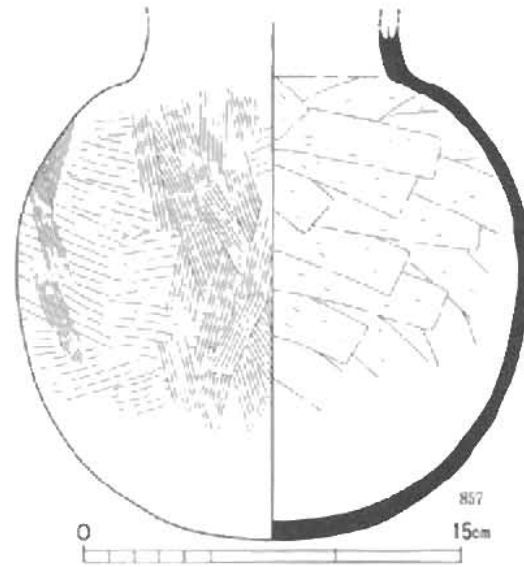
形状・規模 II区では33.6mが確認され、III区を含めた長さは約140mを測る。検出面における幅は80

～120cmであり、溝底で30cmである。横断面は、溝底が逆台形を呈する。検出面からの深さは40cm前後であり、溝底の標高は東端で148.29m、Ⅱ区内での西端で148.34mと東へ向かって低くなる傾斜をもつ。

埋土 4ないし5層に分かれる。埋土は細粒の堆積物で構成されるが、最下層で黄色の中砂～粗砂が認められる部分がある。

出土遺物 Ⅱ区では、埋土より土師器の壺が1点出土しているのみである。この壺は底部が丸底であり、底部外面はナテ仕上げである。

時期 Ⅱ区出土土器からは時期の決定が困難である。Ⅲ区では、布留式の甕が出土しているが、須恵器の坏蓋が含まれており、これは回転ヘラケズリが天井部全面に施される古相を示すものである。この坏からは川除8期に属することがわかる。



第322図 SD54出土土器

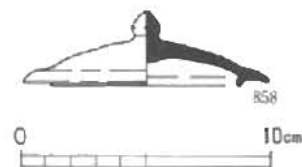
第124表 SD54出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
K57	壺	口径 底径 器高 残20.3 胴径 (170.8) 体部径 (20.2)	外面：細部ヨコナテ、体部3葉/cmヨコナテ、内らる葉/cmナテナテ 内面：体部横ヘラケズリ	外面 灰青褐 内面 灰白	胴部約1/6 体部～底部 約1/2	スズ付蓋

SD58 (図版88)

検出状況 Ⅱ-3区の南端で検出された溝であり、東北東から西南西方向にのびて消滅する。SX05を切っている。

形状・規模 緩く円弧を描きながら12.4mの長さが確認された。幅は、検出面で1.30～2.70m、溝底で1.0～1.8mを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは4～14cmであり、溝底の標高は148.82m前後である。



第323図 SD58出土土器

埋土 灰褐色のシルト質極細砂が堆積する。

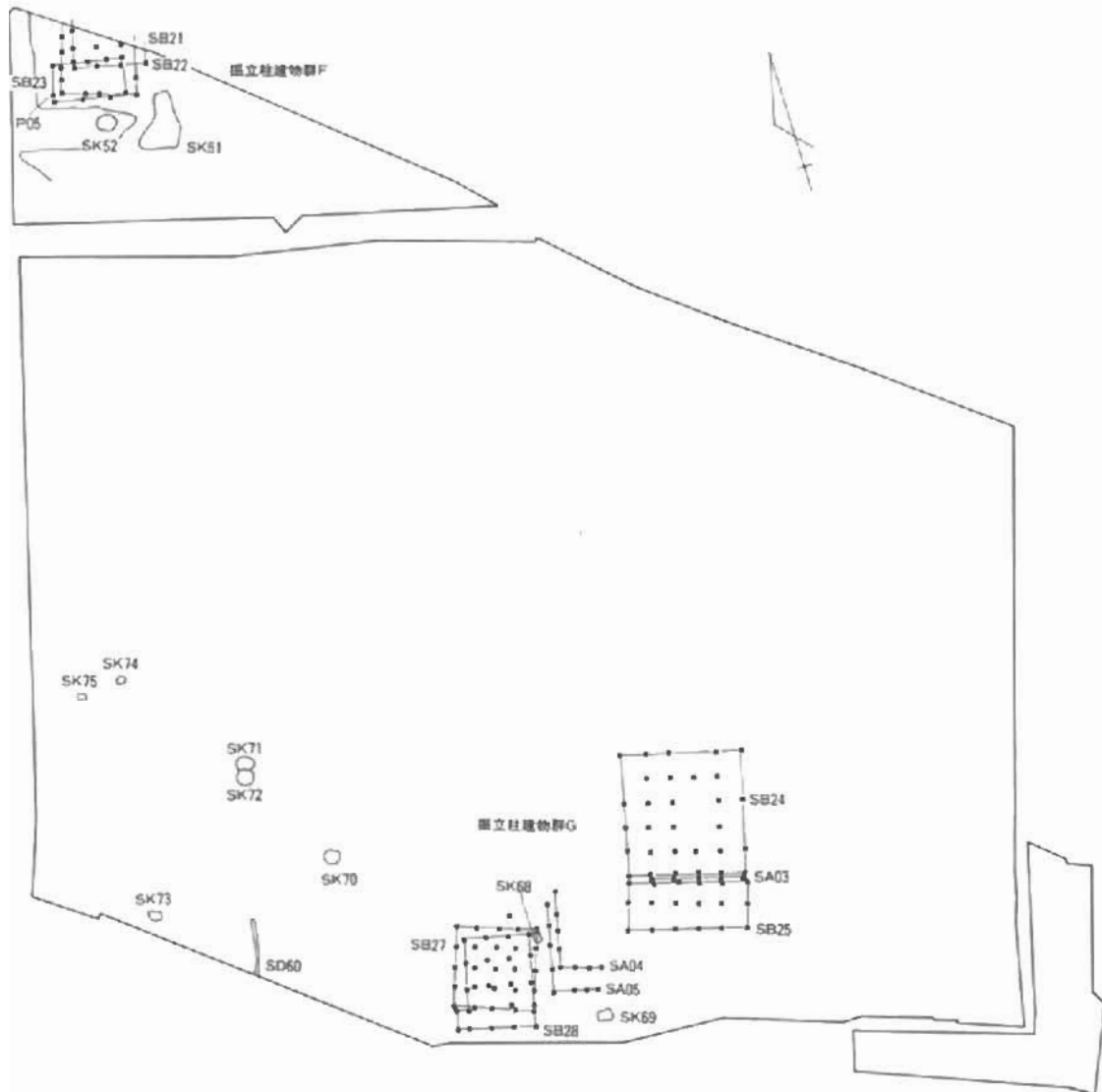
出土遺物 宝珠つまみと内面のかえりをもつ須恵器の蓋が1点出土した。

時期 須恵器の示す時期は、川除9期である。

第125表 SD58出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
K58	須恵器蓋	口径 (10.0) 底径 器高 2.9 胴径 体部径	外面：自然物付着のため調整不明 内面：ヨコナテ	外面 灰色 内面 灰白	約1/4	

4. 平安時代以降の遺構と遺物



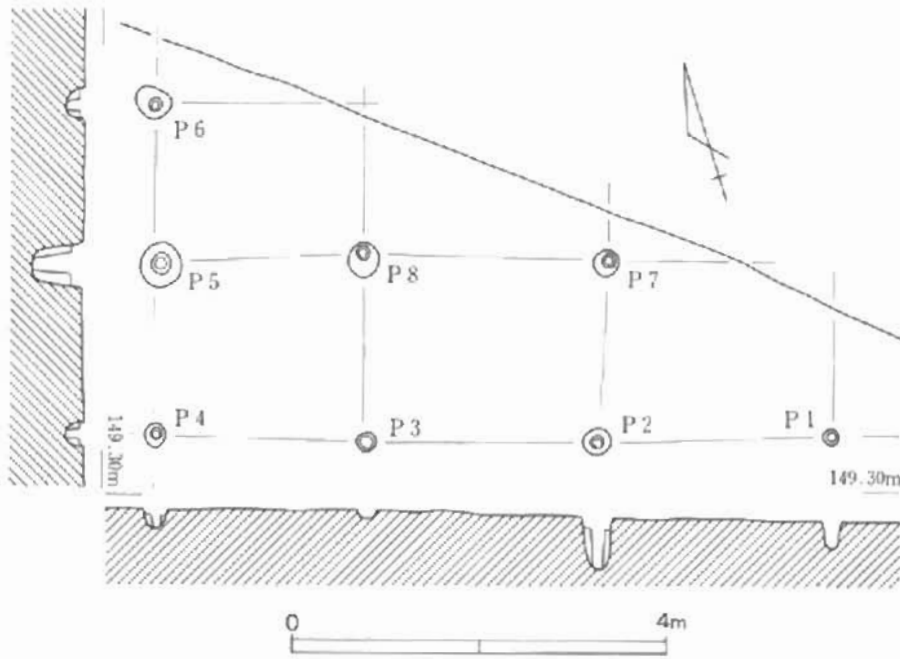
第324図 II区平安時代～鎌倉時代の遺構

(1) 掘立柱建物

SB21

検出状況 II-1区北西部で検出された。小微高地bに立地する。本建物については全体を検出することができず、調査区外まで延びている。SB22と重複しているが、両者の切り合い関係については明らかにすることはできない。

形状・規模 N-14°-Eに棟軸方向をとる建物である。本建物の大半が調査区外にあたるため、桁行・梁行ともその規模を明確にすることはできない。確認できた桁行は3間で、その距離は7.22mを測り、その平均柱間距離は2.41mである。また梁行については2間で、その距離は3.50mを測り、その平均柱間距離は1.75mである。検出した面積は25.3㎡である。

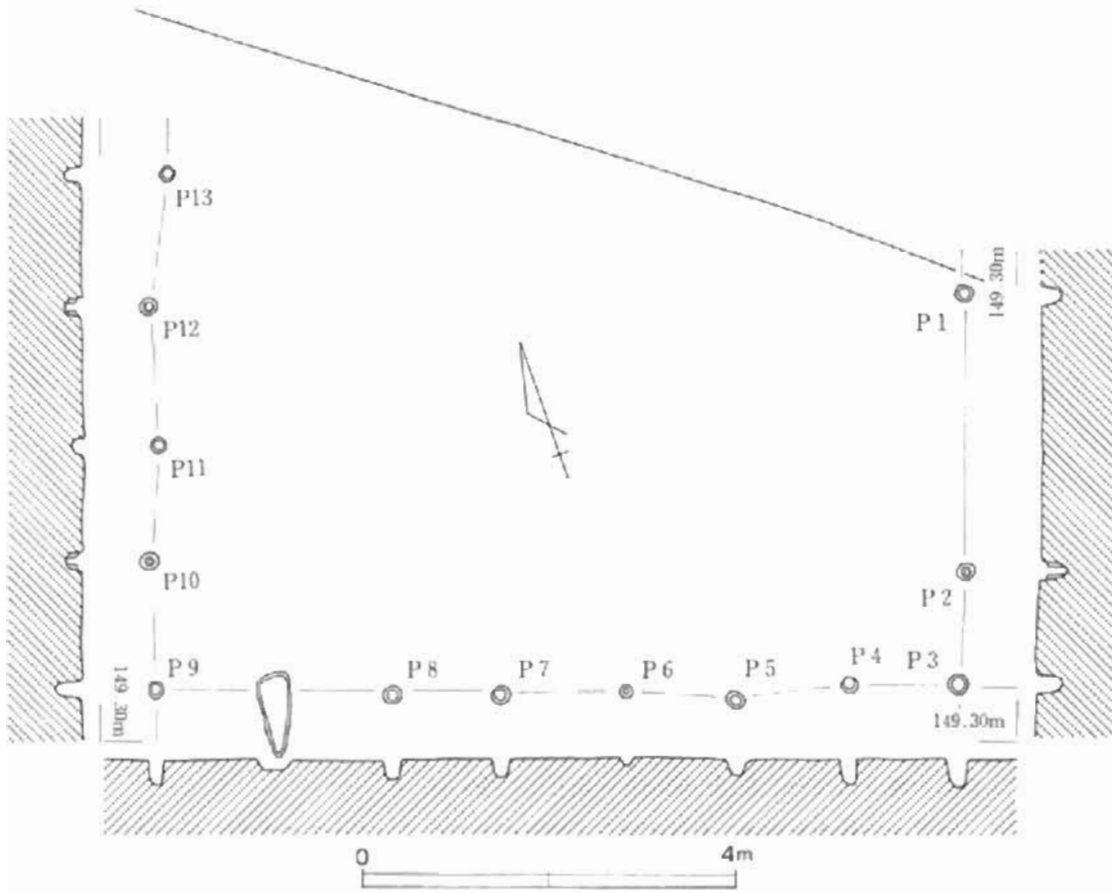


第325図 SB21

- 柱穴** 掘り方の径は15～45cm、柱穴の径は10～25cmと、規模は一定していない。また、検出面からの深さについても10～60cmと一定していない。
- 出土遺物** P5の柱抜き穴内から須恵器と土師器が出土しているのみである。須恵器は柄が出土しているが、小片のため図化できなかった。また土師器については、小片のため器種の特定期も困難である。
- 時期** 柱抜き穴内出土土器から判断して、川除13～14期と考えられる。

SB22

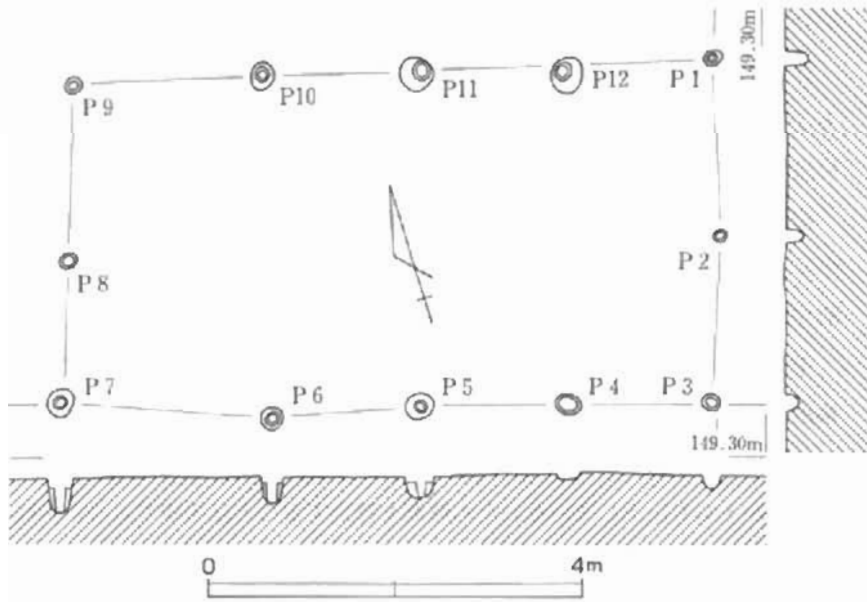
- 検出状況** II-1区の北西部で検出された。小微高地bに立地する。本建物の北東側は調査区外にのびている。SB21と重複しているが、前後関係については判断できない。
- 形状・規模** N-72-Wを棟軸方向とする建物である。建物の規模は、桁行については7間とおさえることができるが、梁行については北東部が調査外にのびているため、明らかにできない。検出した梁行は、南西側で4間分、北東側で3間分である。
- 桁行は、全長8.58mを測り、平均柱間距離は1.23mである。梁行については、5.45mを検出し、その平均柱間距離は1.36mである。他の掘立柱建物に比べて柱間距離が短い点特徴的である。検出した面積は46.76㎡である。
- 柱穴** それぞれの柱穴規模はほぼ一定している。掘り方の径は15～20cm、柱痕の径は10cmで、検出面からの深さは10～30cmである。
- 出土遺物** 本建物に伴う遺物は1点も出土していない。
- 時期** 遺物が1点も出土していないため時期を特定することは困難であるが、柱穴内埋土が他の平安時代以降の掘立柱建物に伴う柱穴の埋土と同じであること、および棟軸方向がSB21・23とはほぼ同じであることから、川除13～14期と考えられる。



第326図 SB22

SB23

検出状況 II-1区の北西部で検出された。小微高地bに立地する。SB21・22と重複するがその



第327図 SB23

前後関係は明らかにできない。

形状・規模 N-76-Wを棟軸とする、桁行4間、梁行2間の掘立柱建物である。桁行方向の距離は6.96mを測り、平均柱穴間距離は1.74mである。梁行方向の距離は3.50mを測り、平均柱穴間距離は1.75mと桁行とはほぼ同じである。検出した面積は24.36㎡である。



0 10cm
第328図 SB23出土土器

柱穴 掘り方の径10~28cm、柱痕の径13~17cm、検出面からの深さ10~36cmと、ほぼ同規模の柱穴から構成されている。

出土遺物 掘り方内と柱抜き穴内より出土しているが、両者ともその出土量はわずかである。

掘り方内 須恵器と土師器そして丹波焼が出土している。P7とP10からの出土である。

須恵器 須恵器は碗と小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器 小片のため器種の特定期も困難である。

丹波焼 掃鉢が出土している。口縁部の一部が残存するのみの小片であるが、端部を上方へつまみ上げている。内面にはおろし目がわずかに残存し、1本1本へら描きしている。

柱抜き穴内 須恵器と土師器が出土している。いずれもP11から出土している。

須恵器 小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器 鍋が出土しているが、須恵器同様小片のため図化できなかった。

時期 掘り方内出土土器などから川除15期と考えられる。

第128表 SB23出土土器観察表

番号	器種	法量 [cm]						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	指数			
850	丹波焼・掃鉢	—	残6.6	—	—	—	—	にじい赤褐	口縁部わずか	へら描きによるおろし目 P10掘り方内出土

SB24 (図版75)

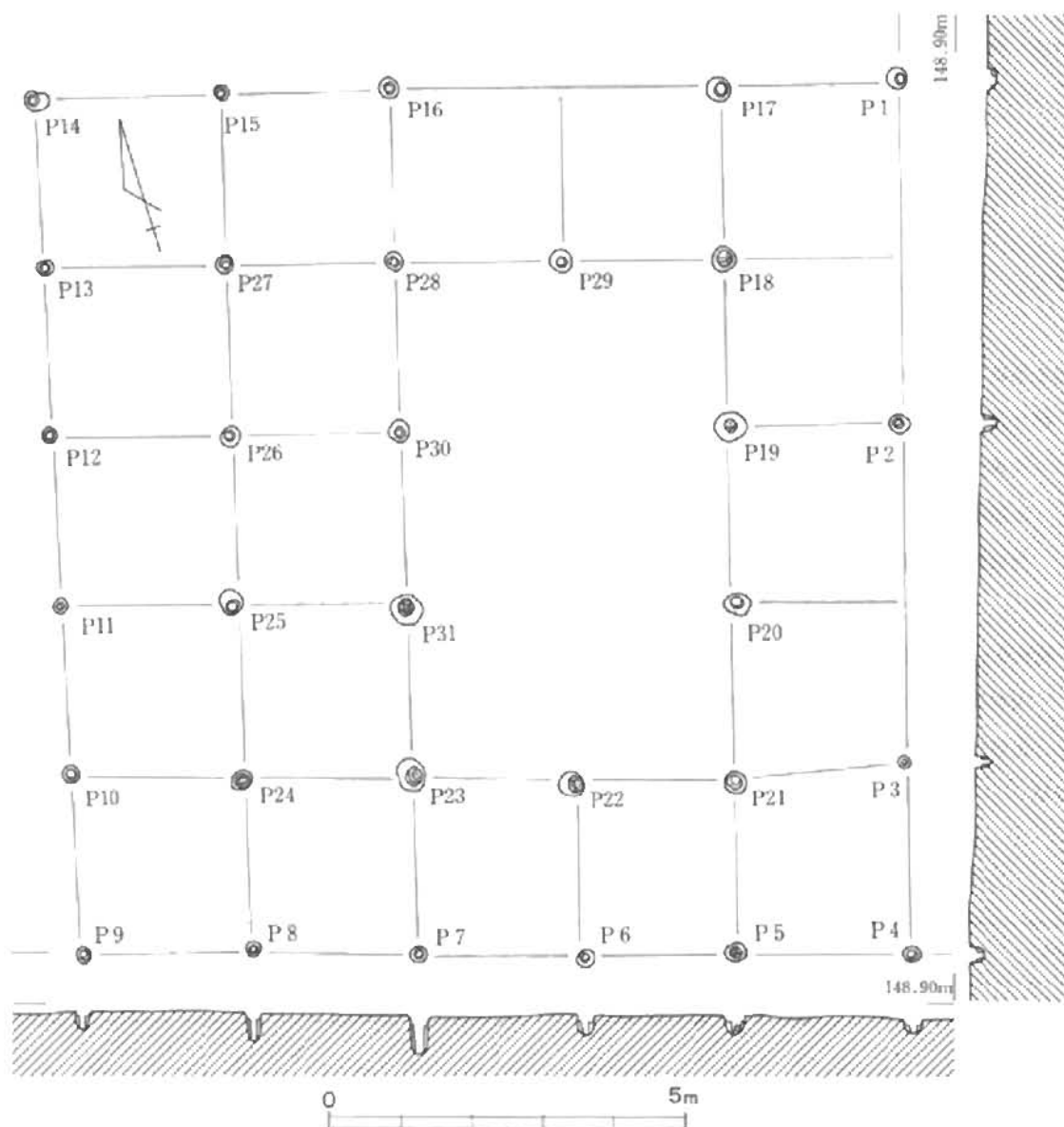
検出状況 II-2区の南東隅で検出された。SH44・SK65・66を切って造られている。中世の掘立柱建物跡であるSB25と棟軸が平行で、南北の柱筋が揃っている。

形状・規模 N-74'-Eに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行5間の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向が12.0m、梁行方向が12.1mであり、面積は145.20㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.40m、梁行が2.40mとはほぼ同一の値を示している。従って全体の形状もほぼ正方形に近い。

柱穴 柱穴の掘り方の形状は円形である。直径は20~45cm、深さは18~55cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~22cmで、深さは18~55cmを測る。P18・19・22・23・31では根石が確認されている。

出土遺物 柱穴の掘り方より土器が出土している。いずれも細片のため図化は出来なかったが、中世の土師器である。

時期 川除13~14期である。



第329図 SB24

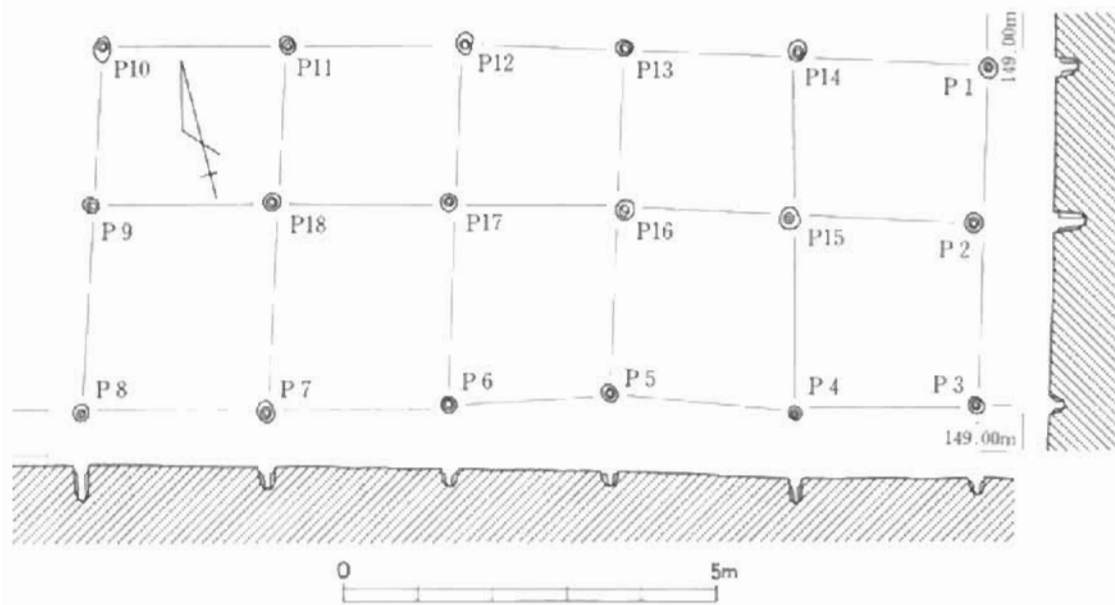
SB25 (図版75)

検出状況 II-2区の南東隅で検出された。平安時代の掘立柱建物跡であるSB24のすぐ南側に存在し、棟軸が平行で、南北の柱筋が揃っている。

形状・規模 N-75°-Eに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向が11.9m、梁行方向が4.7mであり、面積は55.93㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.39m、梁行は北側の一間が2.05mであるのに対し南側の一間は2.60mと距離が長い。

柱穴 掘り方の形状は円形である。直径は18~30cm、深さは25~45cmを測る。柱痕あるいは柱抜き取り痕跡の直径は10~14cmで、深さは25~45cmを測る。根石等は確認されていない。

出土遺物 柱穴の掘り方より土器が出土している。いずれも細片のため図化は出来なかったが、中世の上師器である。



第330図 SB25

時期 川除13~14期である。

SB27 (図版75)

検出状況 II-2区の中央部の南端で検出された。小微高地の単位でいえば、小微高地bの中央部南側に位置している。

中世の掘立柱建物跡であるSB28とはほぼ同じ位置のやや北側に存在しているが、建物の方向に若干の違いをみせる。SB28に切られていることから当住居跡はSB28の建て替え以前の住居跡と考えられる。

形状・規模 N-72°-Wに棟軸の方向をとる南北方向の桁行4間、東西方向の梁行4間の総柱の掘立柱建物跡である。

規模は桁行方向が7.87m、梁行方向が7.90mを測る。面積は62.17㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.97m、梁行は1.98mと、ほぼ同じ値であるが、P6~P7間とP10~P11間は短い。しかし全体的にはほぼ正方形の掘立柱建物跡である。

柱穴 柱穴の掘り方の形状は円形である。直径は22~40cm、深さは20~40cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は12~20cmで、深さは20~40cmを測る。柱根あるいは根石等は確認されていない。

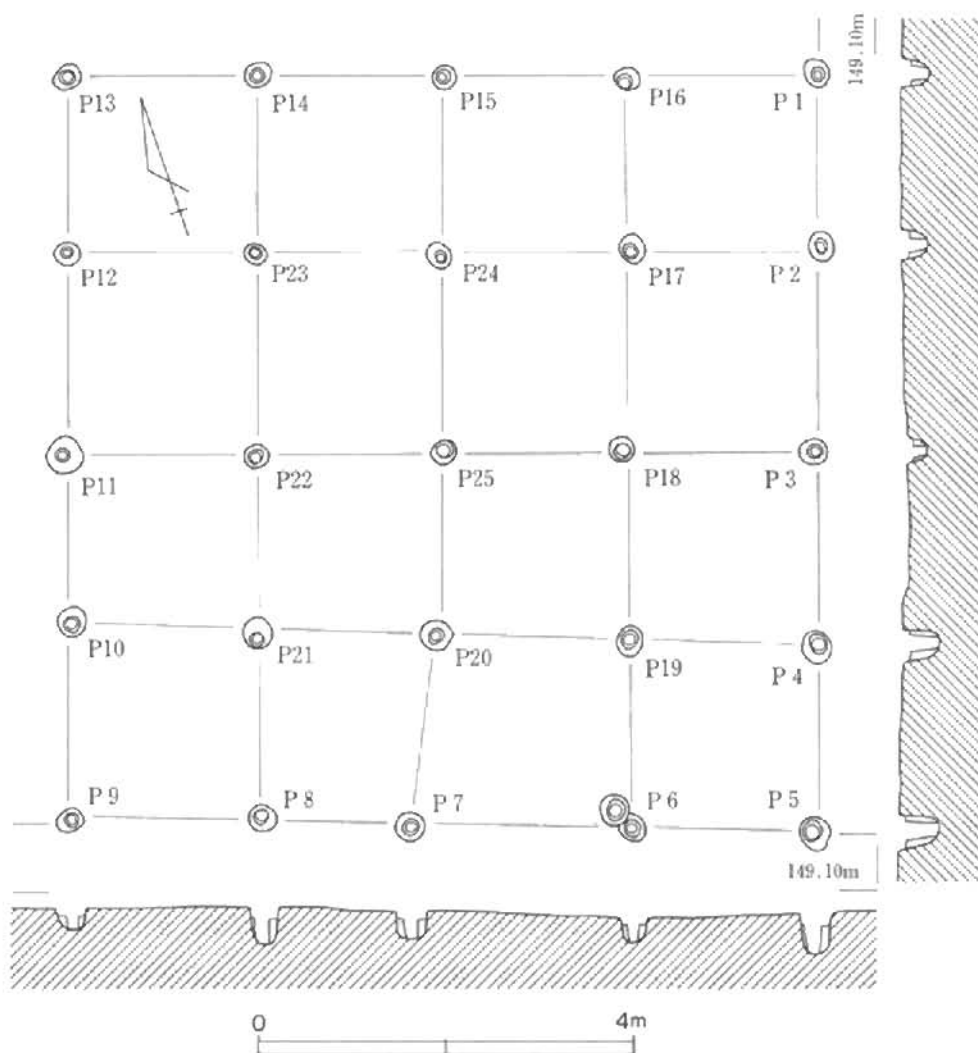
出土遺物 柱穴の掘り方より土師器・須恵器が出土している。P1・2・3・5・6・7・10・11・17・18・19・20・21・22・25より遺物が出上している。そのほとんどのものが細片であり、図化できたものは1点である。

P17より出土している須恵器の碗を図化している。

時期 川除14期である。



第331図 SB27出土土器



第332図 SB27

第127表 SB27出土土器観察表

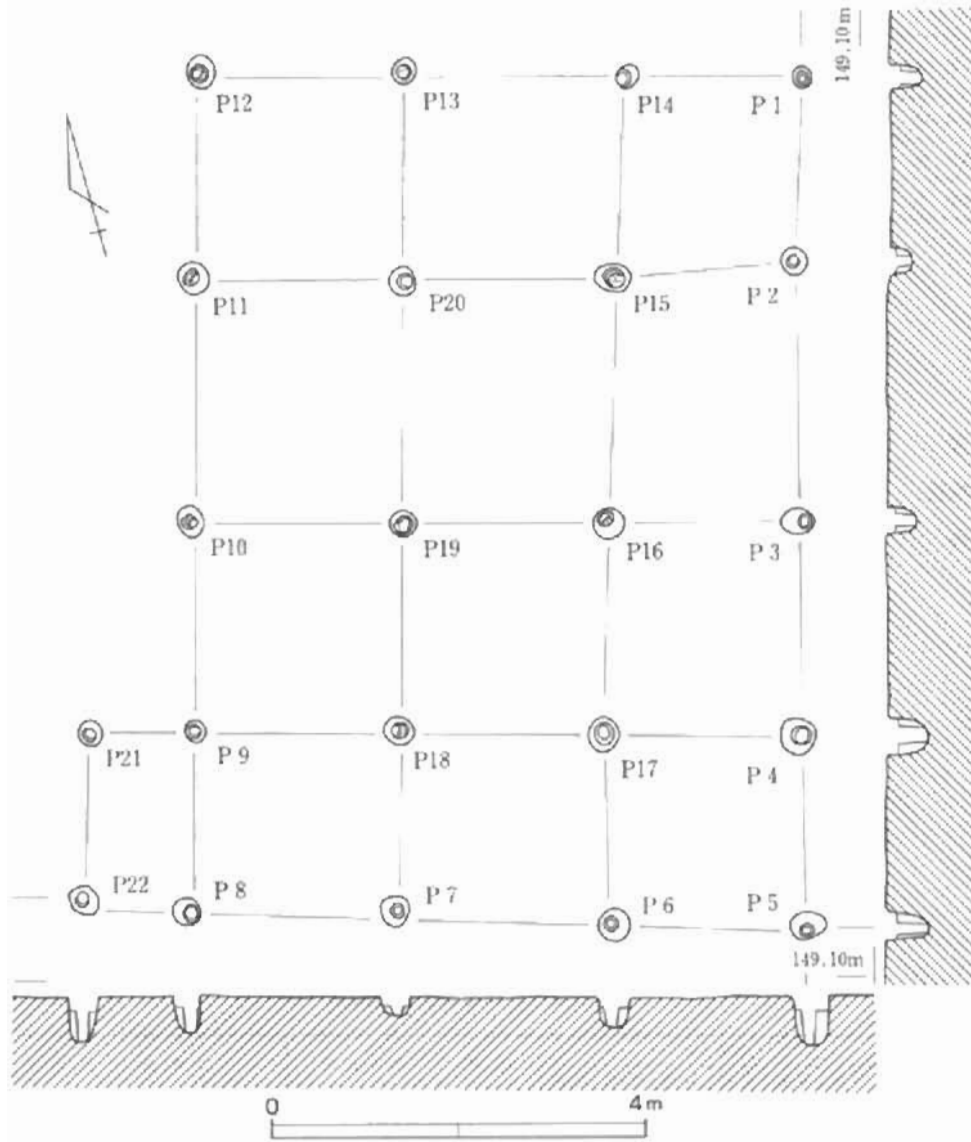
番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	指数			
860	須恵器・甗	(13.6)	4.5	(5.2)	—	—	33	明青灰	1/5	P17柱痕出土

SB28 (図版75・88)

検出状況 II-2区の中央部の南端で検出された。中世の掘立柱建物跡であるSB27のほぼ同じ位置のやや南側に存在している。SB27を切っていることから当住居跡の方が新しいと考えている。

形状・規模 N-13°-Eに棟軸の方向をとる南北方向の桁行4間、東西方向の梁行4間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は桁行方向が9.20m、梁行方向が6.50mであり、面積は59.80㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.30m、梁行は2.16mとかなり近い値であるが、P1~P2間とP8~P9間は短い。長方形の平面形をもつ掘立柱建物跡である。

柱穴 柱穴の掘り方の形状は円形である。直径は20~40cm、深さは18~40cmを測る。柱痕ある



第333図 SB28

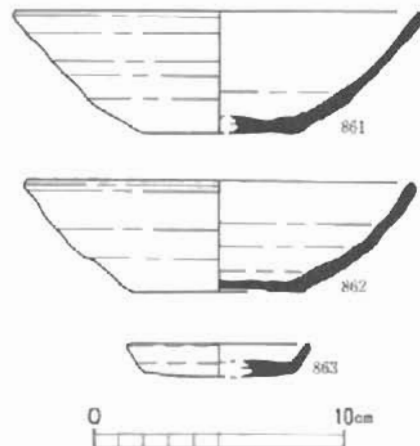
いは柱の抜き取り痕跡の直径は15~20cmで、深さは18~50cmを測る。P10・11・12・13・15・16・18・19で根石が確認されている。

底 P8とP9の延長上に約120cm離れて柱穴が2穴検出された。西向きの一間の底と考えている。底の長さは1.75mである。

出土遺物 柱穴の掘り方より土師器、須恵器が出土している。P2・3・4・5・6・8・9・10・11・13・14・15・16・17・18・19・20より遺物が出土している。そのうち図化できたものは3点である。

P4・6・16より出土している須恵器の椀・小皿を図化している。

時期 川除13期である。



第334図 SB28出土土器

第128表 S B28出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他	
		口径	器高	底径	胴径	最大径				
861	須恵器・甗	(16.2)	4.8	(5.8)	—	—	29	灰	1/3	P6掘り方出土
862	須恵器・甗	15.2	4.5	6.6	—	—	29	明青灰	ほぼ完全	P16掘り方出土
863	須恵器・甗	(7.2)	1.3	(6.0)	—	—	18	明青灰	1/2	P4柱出土

(2) 柱穴

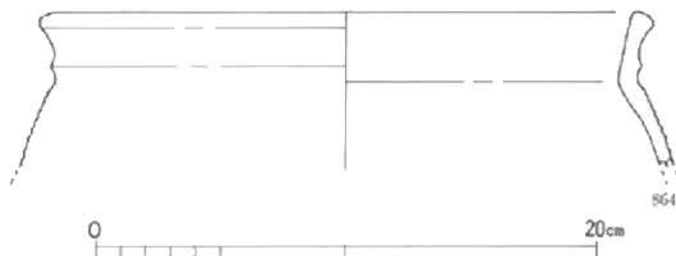
P 0 5

検出状況 II-1区西北部に位置する。S B23のP32の北側に接している。

形状・規模 掘り方の径は30cm、柱痕の径は10cm、検出面からの深さは35cmを測る。

出土遺物 掘り方内より土師器の鍋が出土している。口縁部から肩部まで残存している。体部外面は水平方向のタタキ調整により、他はナデ調整によりそれぞれ仕上げられている。

時期 出土土器より、川除14期と考えられる。



第335図 P05出土土器

第129表 P05出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径			
864	土師器・鍋	(23.0)	横6.1	—	(23.2)	—	—	口縁部僅存	外面にタタキ

(3) 土壇

S K 5 1 (図版67・88)

検出状況 II-1区の中央部よりやや北西よりの位置で検出した。小微高地bに立地している。S H38を切っている。主軸方向はS B21・22とは一致している。

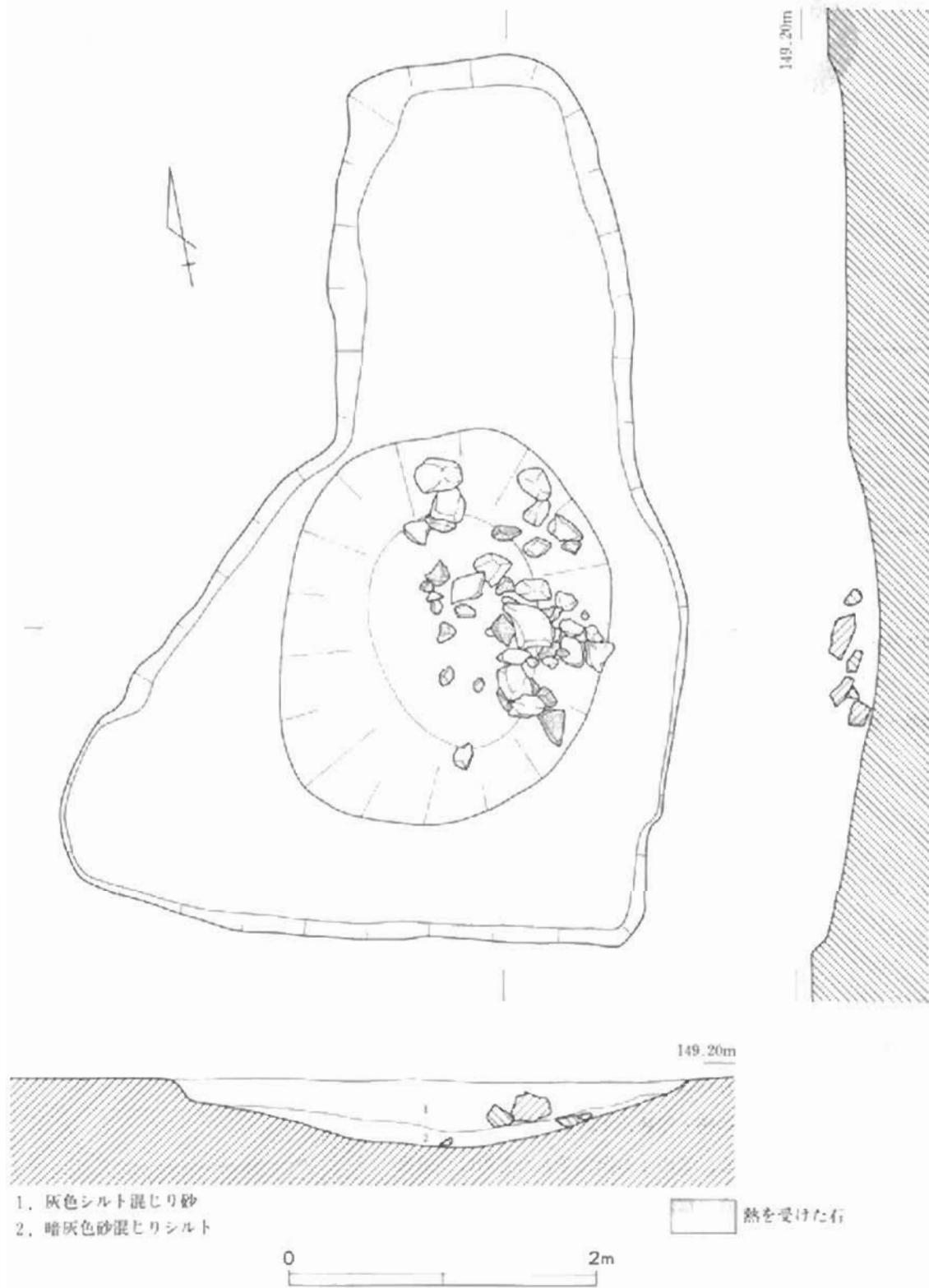
形状・規模 二段に掘り込まれた土壇で、上段では不整形、下段では楕円形を呈する。上段における長軸の長さは5.76mで、その直交方向は3.94mを測る。下段における長軸の長さは2.54mで、その直交方向は2.12mを測る。横断面は皿形を呈し、土壇中央部における検出面からの深さは44cmである。

埋土 上から灰色シルト混じり砂層、暗灰色砂混じりシルト層の2層からなる。特に土壇中央部の一段深く掘り込まれた所では、二次焼成を受けた人頭大の垂角礫が放り込まれた状態で出土している。多くの礫は花崗岩である。

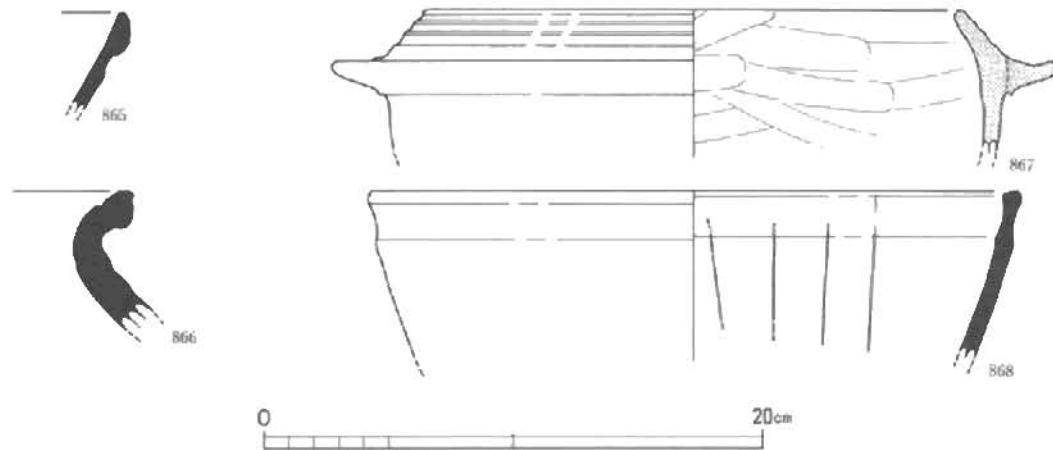
出土遺物 土壇中央部に放り込まれた礫の間から土器のみが出土している。土器は、須恵器・土師器・瓦器・丹波焼が出土している。特に、初期の丹波焼が出土しており、その年代観をお

さえるうえで、重要な一括資料と考えられる。須恵器は、図化できたのは碗の口縁部片のみであるが、この他に捏鉢と甕の小片が出土している。土師器は鍋の小片が出土しているのみで、図化できるものはなかった。

時期 出土土器から川除15期と考えられる。



第336図 SK51



第337図 SK 51出土土器

第130表 SK 51出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	胎厚			
865	須恵器・捏鉢	—	残3.9	—	—	—	灰白～薄灰	口縁部僅か	焼成不目/全体的に磨滅	
866	丹波焼・甕	—	残5.5	—	—	—	暗赤灰～薄灰	口縁部僅か	内外面とも磨滅ナシ	
867	瓦器・羽釜	(21.0)	残5.5	—	—	(29.0)	灰	口縁部1/8	外面磨以下に僅付着	
868	丹波焼・捏鉢	(25.6)	残6.6	—	—	—	橙	口縁部1/8	焼成やや不目/おろし目はへら磨き	

SK 68 (図版76・88)

出土状況 II-2区の中央南部で検出された。SB27・28と重なって検出されている。

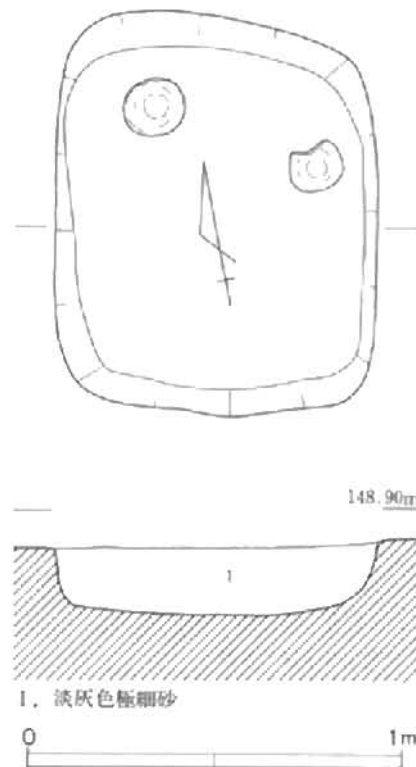
形状・規模 平面形は、北西部がやや突出しているものの、隅円長方形を指向している。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸である南北方向に106cm、短軸である東西方向に87cmである。土壌底では、長軸方向に90cm、短軸方向に78cmである。検出面からの深さは15~18cmで断面形はU字形を呈している。

埋土 埋土は淡灰色極細砂の1層が堆積している。

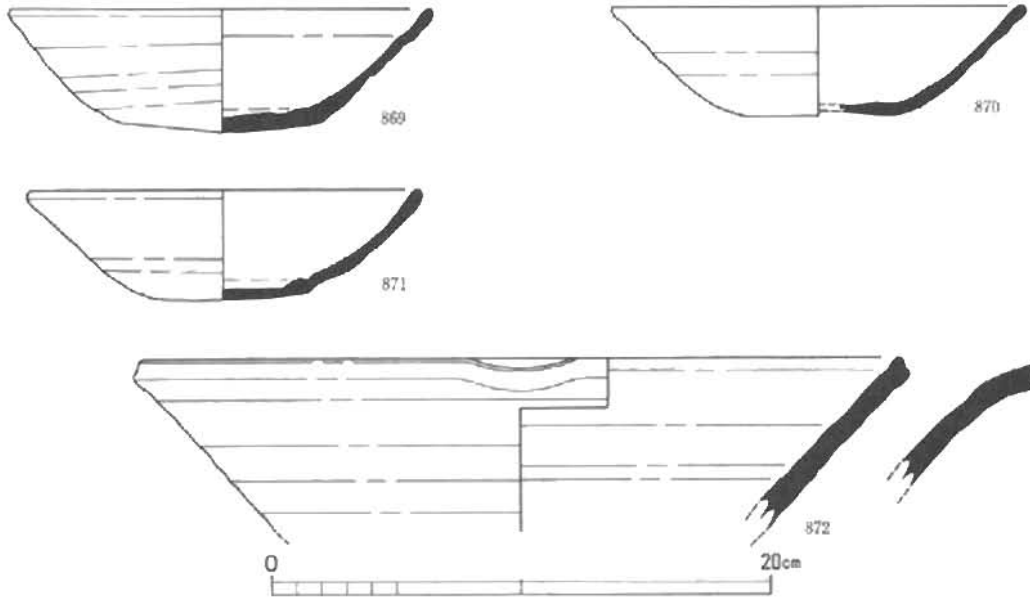
出土遺物 当遺構の北半部分より須恵器の碗が出土位置のおさえられるかたちで出土している。

須恵器の碗・捏鉢、土師器の小皿・細片が出土している。このうち図化できたものは、須恵器の碗3点、捏鉢1点の合計4点である。

時期 川除14期である。



第338図 SK 68



第339図 SK68出土土器

第131表 SK68出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	保存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	指数			
869	須恵器・碗	16.7	4.9	8.1	—	—	29	灰白	完存	
870	須恵器・碗	(16.4)	4.4	(6.0)	—	—	26	灰白	1/4	
871	須恵器・碗	15.3	4.4	6.3	—	—	28	灰-青灰	ほぼ完存	5~6mm大の礫含む
872	須恵器・器鉢	(30.2)	碗6.9	—	—	—	—	灰	口縁部1/8	

SK69

出土状況 II-2区の南端部で検出された。SB27・28から約7m東側で検出している。

形状・規模 平面形は、北西部がやや歪な形であるが、隅円長方形を指向している。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸である東西方向に1.60m、短軸である南北方向に1.08mである。土壌底では、長軸方向に1.24m、短軸方向に0.73mである。検出面からの深さは10~13cmで、断面形は皿形を呈している。

出土遺物 須恵器の坏、細片が出土しているがいずれも細片のため図化することはできなかった。

時期 川除14~15期である。

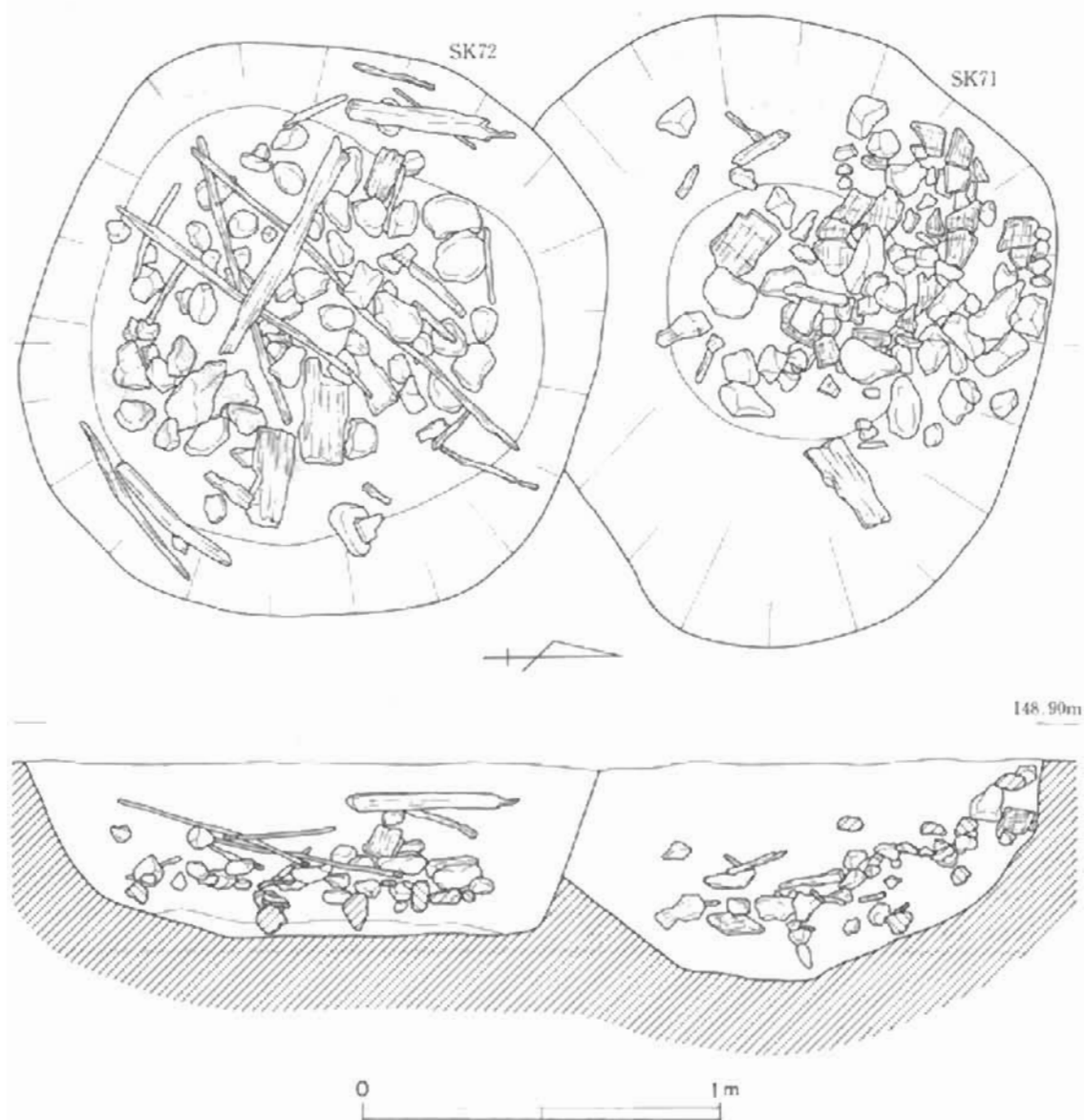
SK71

検出状況 II-2区の西南部で検出された。南接するSK72に切られている。

形状・規模 平面形は正円形を呈する。規模は、検出面での直径が160~175cm、土壌底での直径が65~75cmである。検出面からの深さは60cmを測る。断面形はU字形を呈する。

埋土 3層に分かれ、上から黄灰色極細砂質シルト、灰色シルト質極細砂、暗青灰色極細砂質シルトが認められる。

出土遺物 最下層より木片・平瓦・礫とともに若干の土器が出土している。須恵器の小皿・碗およ



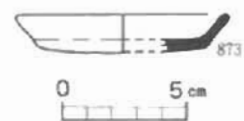
第340図 SK71・72

び土師器の鍋であるが、図化できたのは1点のみである。

873は須恵器の小皿であり、底部は回転糸切りである。

時期

川除14期である。



第341図 SK71出土土器

第132表 SK72出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)					色調	残存状況	特徴 - その他
		口径	器高	底径	幅径	最大径			
873	須恵器 小皿	18.6	1.5	16.8		17	灰白	1/2	

SK72

検出状況 II-2区の西南部で検出された。北接するSK71を切っている。

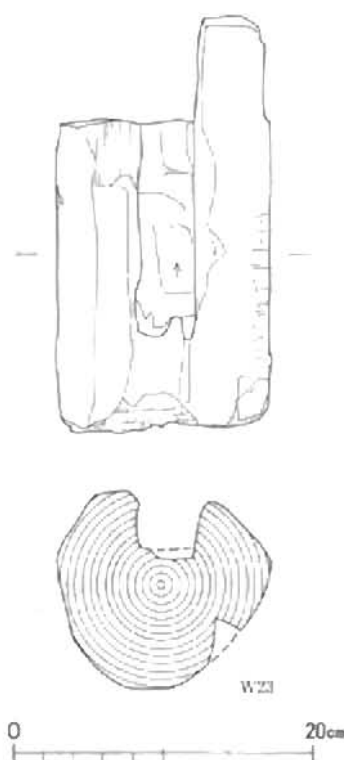
形状・規模 平面形は正円形を呈する。規模は、検出面での直径が160cm、土壌底での直径が125~120cmである。検出面からの深さは40~50cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土 2層に分かれ、上層はSK71の最上層と同じく黄灰色極細砂質シルト、下層に灰色極細砂質シルトの堆積が認められた。

出土遺物 下層より、木片・竹片・円礫・平瓦・木器などが出土している。土器は認められなかった。

木器が1点出土している。心持ちの丸太材の一端に突起を作りだしたものである。突起の幅は5cm、長さは6.7cmを測る。突起に接する側面に幅4cm、長さ13cmの溝を穿つ。直径は14.5cm、突起を含めた長さは28cmを測る。

時期 土器が出土していないため時期決定は困難だが、同様の形態であるSK71と比較的近い時期と判断できる。



第342図 SK72出土木製品

その他の土壌

以上に掲載しなかったII区の土壌のうち、平安時代以降に属することが判明したものの概略を一覧表にまとめることとする。

第133表 II区 中世のその他の土壌一覧表(単位:cm)

遺構名	規模(検出面)		規模(土壌底)		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK52	186	166	160	152	40	円形	逆台形	15期	須恵器・丹波焼
SK70	170	146	120	115	100	円形	逆台形		小片
SK73	150	100	130	70	11	楕円形	皿形		なし
SK74	90	64	50	34	33	楕円形	逆台形		須恵器・土師器
SK75	73	73	50	50	20	円形	皿形		土師器小片

(3) 溝

SD60

検出状況 II-2区の南西部で検出された。小微高地bから南側の低地へと伸びる溝である。溝の北端は浅くなって消滅するが、南端は調査区外である。他の遺構とは切り合わない。

形状・規模 長さは5.4mが確認された。幅は、検出面で30~40cm、溝底で10~18cmを測る。横断面は皿形である。検出面からの深さは2~6cmと浅く、溝底の標高は148.86m前後である。

埋土 灰色シルト質極細砂が堆積する。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 埋土の状況から平安時代以降、川除14~15期の所産とするのが妥当であろう。



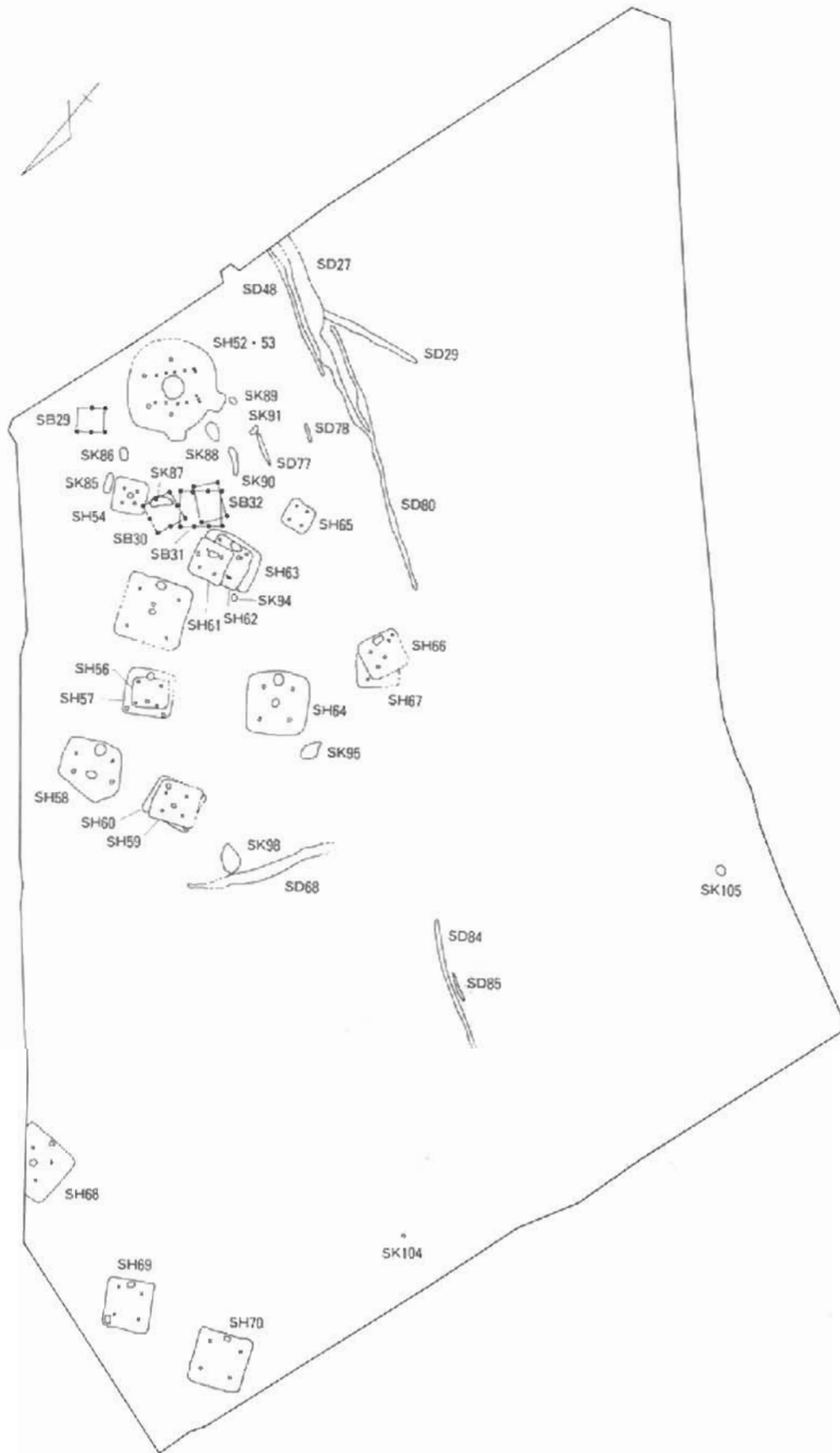
第343図 Ⅲ区の遺構

第5節 III区の調査

1. 概要

- 位置** III区はIV区とII区とのあいだの調査区である。調査面積は約9300㎡である。
- 小徴高地 b** III区の北東側で確認された小徴高地である。当小徴高地で検出された最も古い遺構は弥生時代中期のものである。この時代のもは土壌が疎らに存在するのみで、住居跡等の集落の中心部分を想定させるものは検出されなかった。弥生時代後期の遺構としては、竪穴住居跡16棟、掘立柱建物4棟、溝、土塙等の多くの遺構が検出されている。
- 中世** 弥生時代後期以降は、中世に再び利用されるまでは遺構の存在が確認できない。中世の遺構は、掘立柱建物3棟、井戸3基、溝、土塙等が検出された。
- 小徴高地 d** 当小徴高地に遺構が存在するのは、弥生時代後期以降である。おもに居住域として利用されていた。検出された遺構としては竪穴住居跡3棟、溝、土塙等が確認された。
- 古墳時代** 古墳時代には、数条の溝が検出されている。
- 中世** 中世になると、再び居住域として利用される。遺構としては、掘立柱建物8棟、溝、土塙が検出された。
- 小徴高地 e** 当小徴高地に遺構が存在するのは1期の弥生時代中期の土壌が1基のみで、それ以降古墳時代を含めて遺構は存在しない。本格的に土地利用され始めるのは、中世になってからである。遺構としては、掘立柱建物6棟、井戸1基が検出された。
- 低地** 調査区の北西方向から南東方向にひろがる低地部分は、居住域としては利用されなかった。古墳時代には、低地の方向に沿うように大溝と溜池が掘削されている。その後は低地部分は徐々に埋没してゆく。その過程ではおもに水田として利用されていたようである。





第344図 III区弥生時代～古墳時代前期の遺構

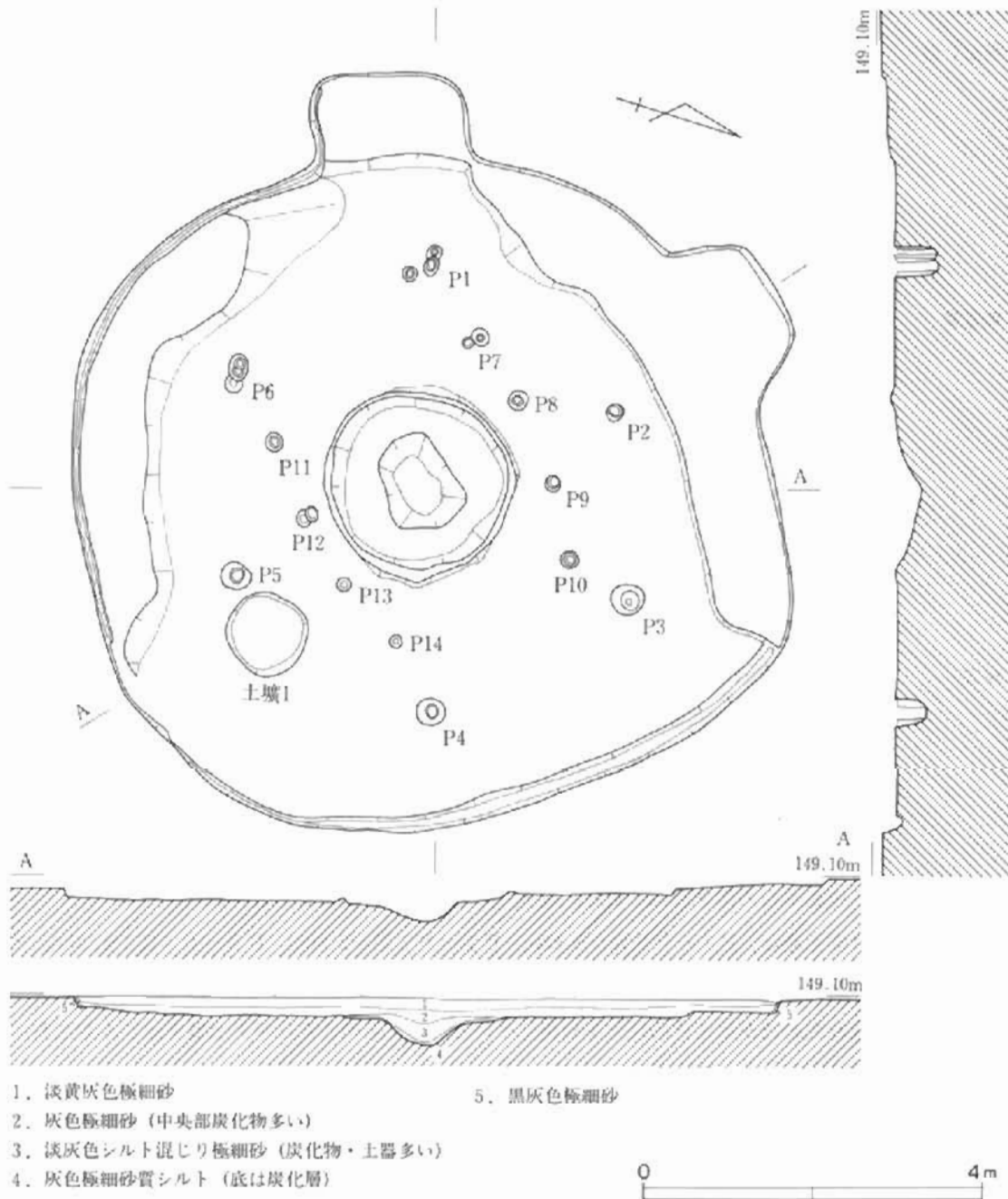
2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SH52 (図版94～96・111～113・123)

検出状況 Ⅲ区の北東隅で検出された。微高地でいえば小微高地bの南西端で検出していることになる。

形状・規模 平面形はやや肩部の張った円形を呈している。北西部にあるSH53から続く張出し部のはかに西部に張出し部をもっている。直径は10.35mを測る。検出面から、床面までの深さ



第345図 SH52

は約26cmで、床面の標高は148.87mである。検出した床面積は、2ヶ所の張出し部を含めて88㎡である。

埋土

住居跡内の埋土は中央土壌の部分の埋土を除いて、3層にわたって堆積している。

上層に淡黄灰色極細砂が堆積し、中層には中央部に炭化物の多い灰色シルト混じり極細砂が堆積している。下層は壁際と周壁溝の部分に堆積していたもので、黒灰色極細砂である。

中層中には炭化材が検出されている。炭化材は住居跡の中心部から外側にむかって放射状に検出された。壁際でも板状の炭化材が検出されていること、焼土粒が多量に混じっていることなどから焼失によって廃棄された住居跡であると考えられる。

屋内施設

張出し部・周壁溝・柱穴・中央土壌・土壌を検出している。

張出し部

当住居跡の西部と北西部で張出し部を検出している。

西部のものは平面形は台形を呈し、規模は、幅は基部で2.70m、先端部で1.55m、長さは1.05mである。深さは約10cmを測る。

北西部のものは平面形は長方形を指向しており規模は、幅は基部で2.40m、先端部で2.15m、長さは1.18mである。深さは先端部で約10cmを測るが、住居跡の中心部に向かう程その深さを増している。

周壁溝

床面での幅5～18cmを測り、このレベルからの深さは8cmで、底部の幅は3～9cmである。また検出面からの深さは28cmである。この周壁溝は全周しておらず、北側のベッドの端から始まって西側の張出し部までで途切れている。全体の約2/3にわたって検出された。東部については現水田の水路によって攪乱されており残存状態は悪い。

ベッド

住居跡の東部を除いてベッドを検出した。平面形は不整形であるが、2ヶ所の張出し部を含んでいる。

幅は1.15m以下で、床との比高差は約10cmである。ベッド部分の面積は18.7㎡で、対床面積比は21.3%である。

柱穴

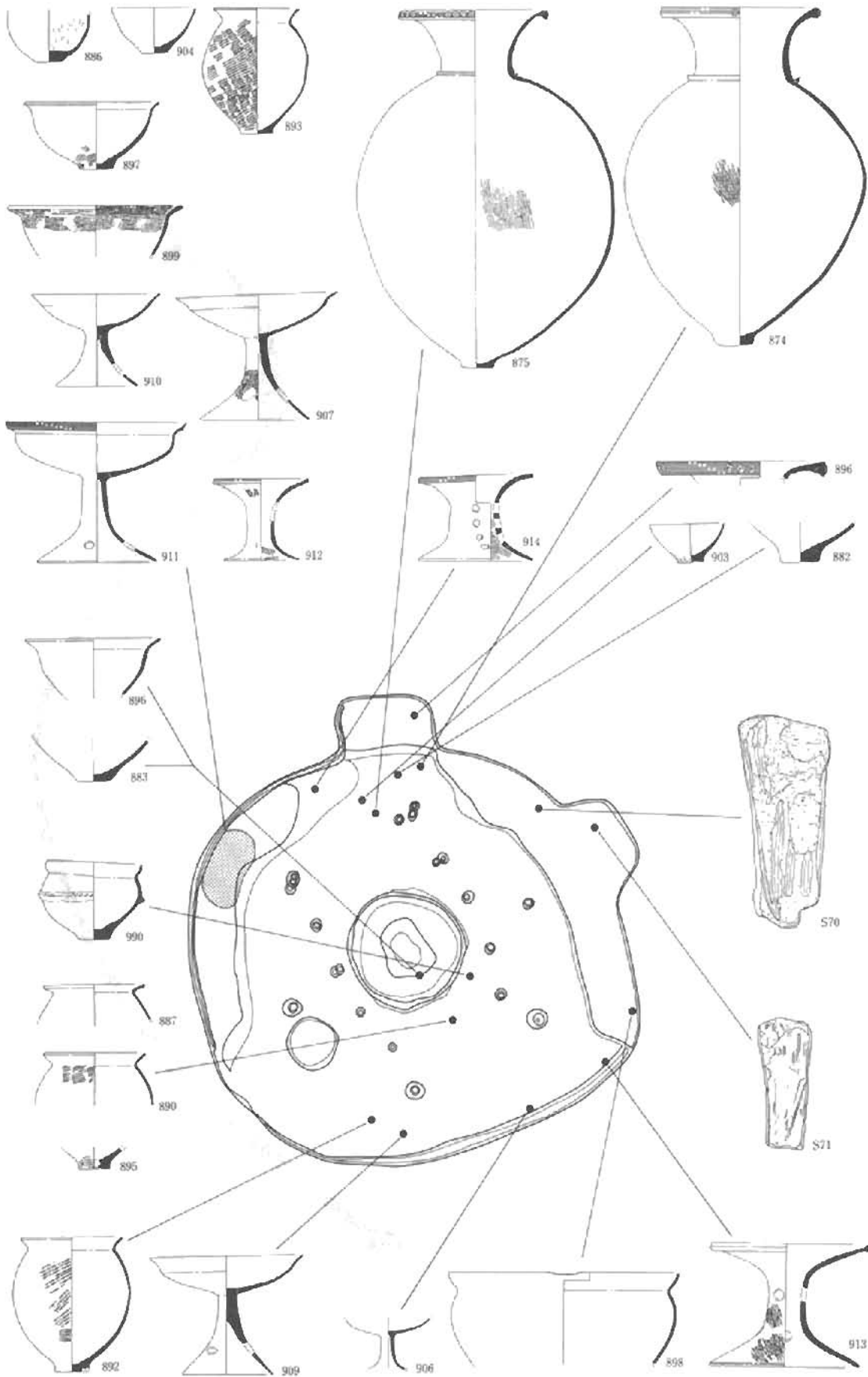
合計14穴検出しているが、主柱穴は6穴である。

P1は掘り方径30cm、柱径径15cm、床面からの深さ23cmである。P2は掘り方径23cm、柱径径17cm、床面からの深さ24cmである。P3は掘り方径50cm、柱径径27cm、床面からの深さ52cmである。P4は掘り方径44cm、柱径径19cm、床面からの深さ44cmである。P5は掘り方径45cm、柱径径22cm、床面からの深さ60cmである。P6は掘り方径28cm、柱径径18cm、床面からの深さ38cmである。以上の6穴が主柱穴を構成している。

柱間距離は、P1～P2間が3.42m、P2～P3間が2.80m、P3～P4間が3.30m、P4～P5間が3.48m、P5～P6間が3.08m、P6～P1間が3.16mである。

主柱穴のはかに8穴の柱穴を検出している。これらの8穴は中央土壌をはさんで左右に4穴ずつ分かれて検出された。

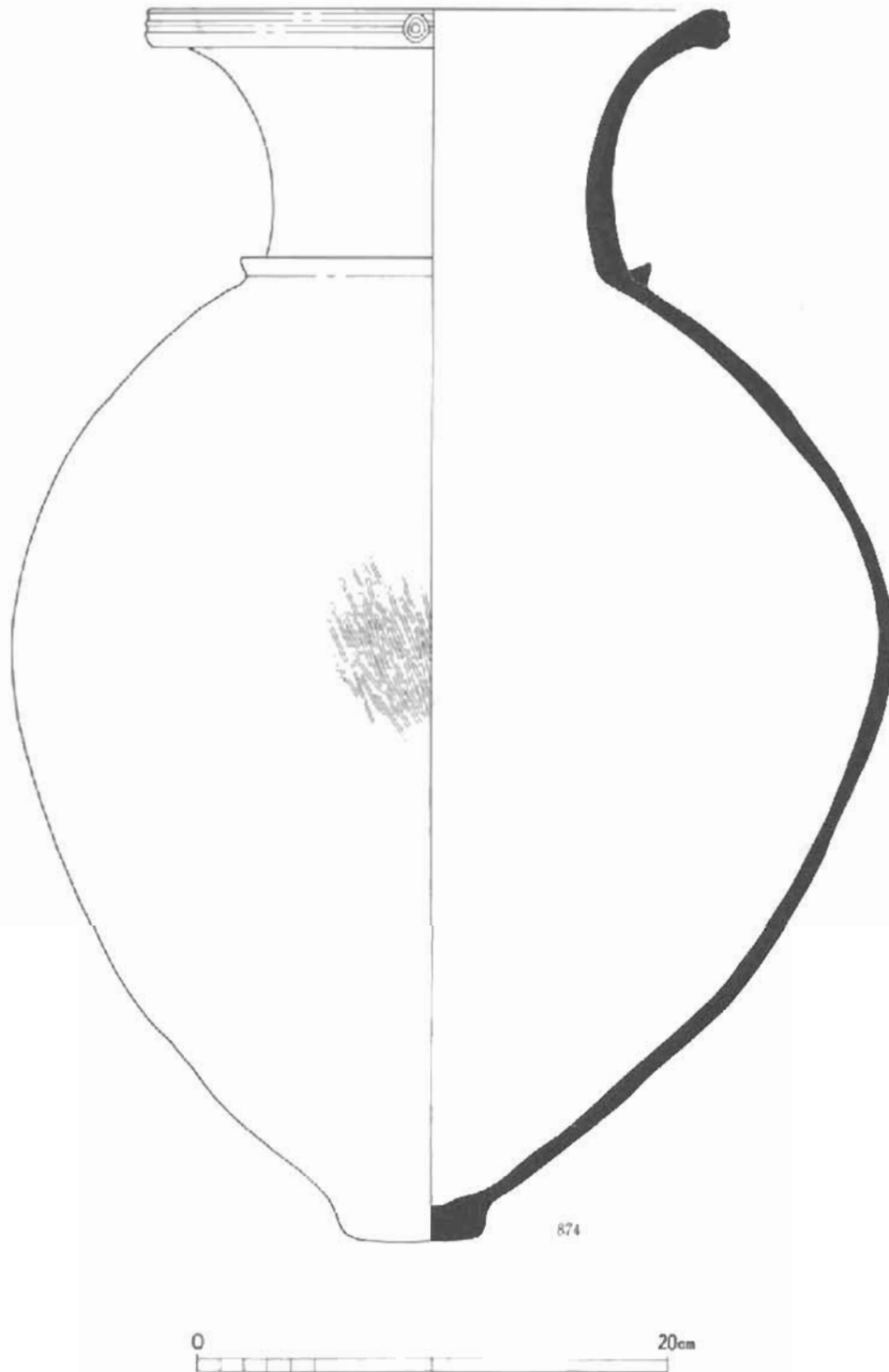
P6～P10は左側に、P11～P14は右側に、それぞれははば一列にならんで検出されている。P7は掘り方径28cm、柱径径11cm、床面からの深さ15cmである。P8は掘り方径30cm、柱径径15cm、床面からの深さ24cmである。P9は掘り方径26cm、柱径径19cm、床面からの深さ9cmである。P10は掘り方径26cm、柱径径18cm、床面からの深さ5cmである。



第346図 SH52遺物出土位置

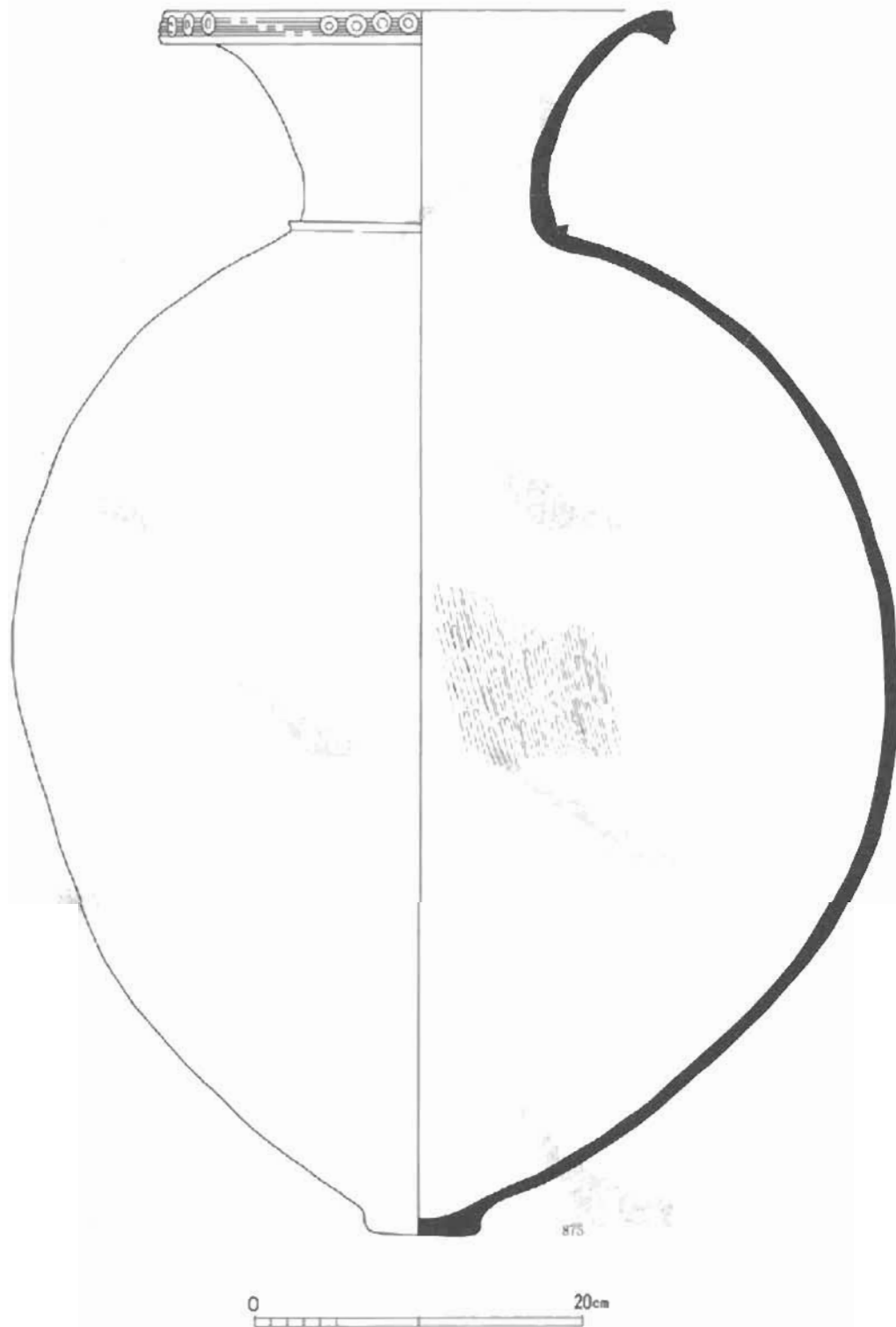
柱間距離は、P7～P8間が1.05m、P8～P9間が1.30m、P9～P10間が1.12mである。P11は掘り方径25cm、柱痕径15cm、床面からの深さ23cmである。P8は掘り方径15cm、床面からの深さ11cmである。P12は掘り方径22cm、床面からの深さ9cmである。P13は掘り方径22cm、床面からの深さ10cmである。柱間距離は、P11～P12間が1.75m、P12～P13間が1.15m、P9～P10間が1.12mである。

中央土壇 当住居跡のほぼ中心部で検出している。平面形は不整形の五角形を指向している。規模

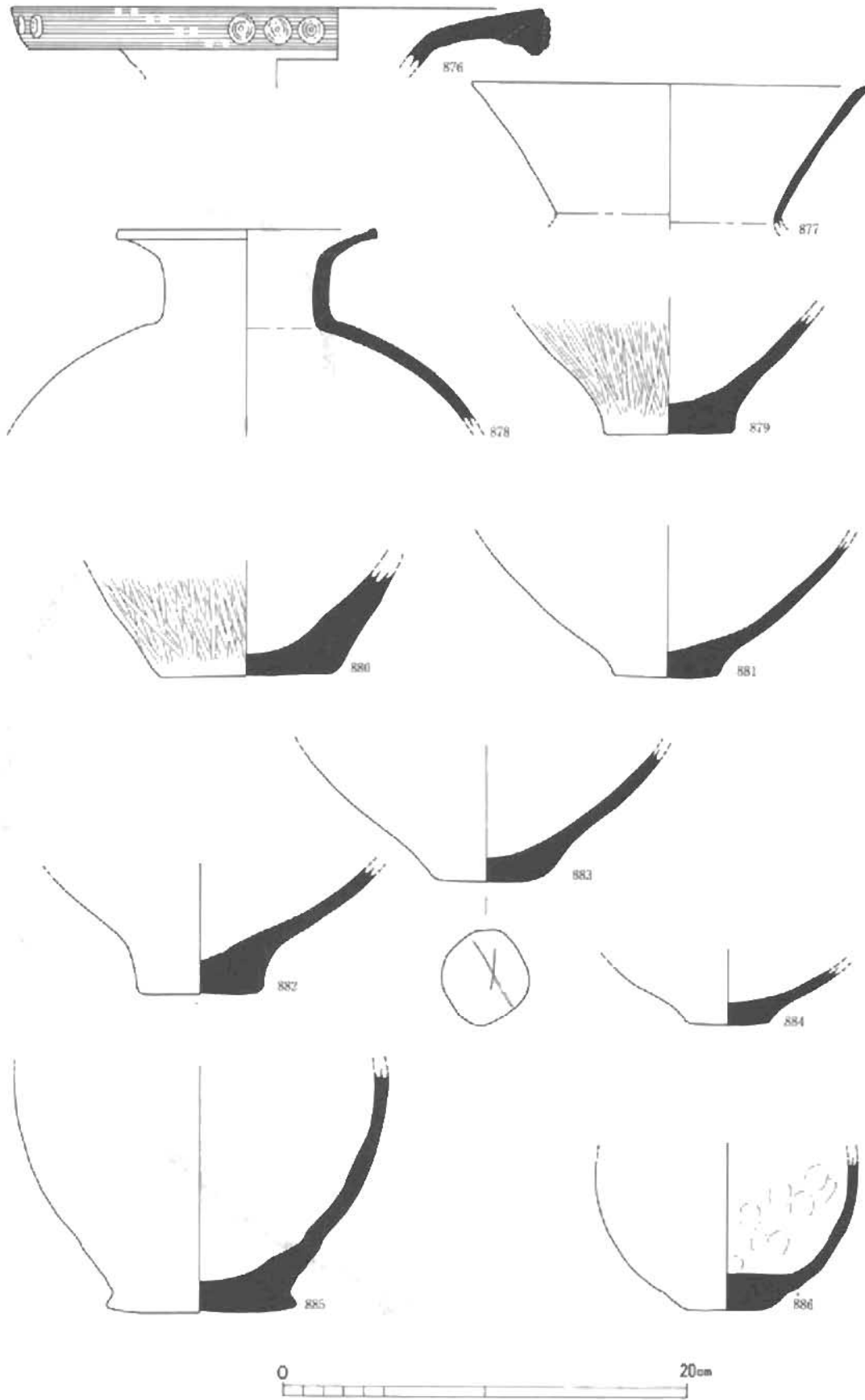


第347図 SH92出土土器(1)

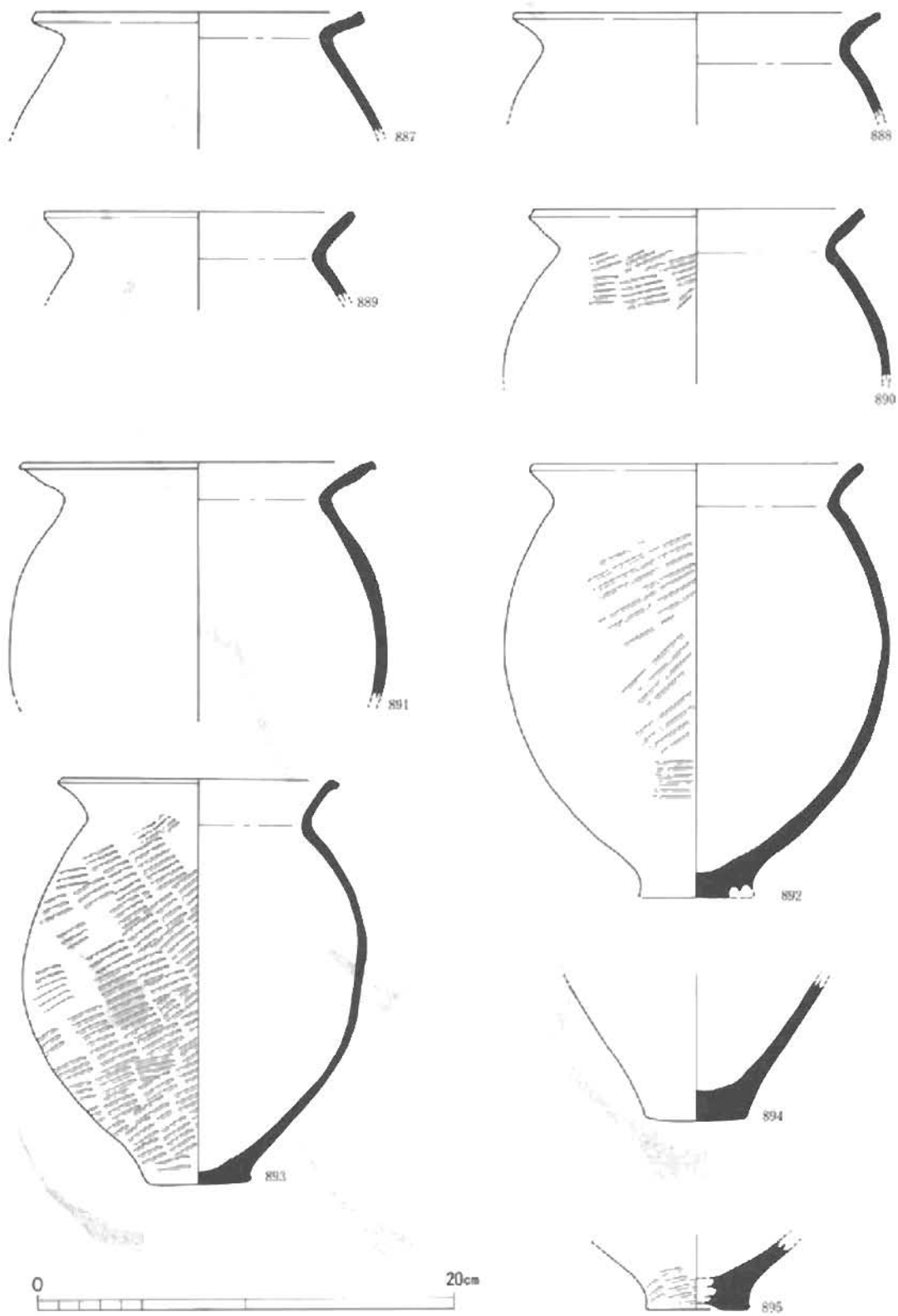
は長軸方向に1.42m、短軸方向に1.00mを測り、深さは0.35mである。中央土壌の外側に土手が全周している。幅は28～40cmで床面からの高さは約5cmである。床面に地山の土を張りつけて造っている。中央土壌の埋土は2層が堆積している。上層に炭化物、土器を多く含むシルト混じり極細砂、下層には底が炭層の灰色極細砂質シルト層である。上手を含む面積は6.6㎡、対床面積比は7.5%である。



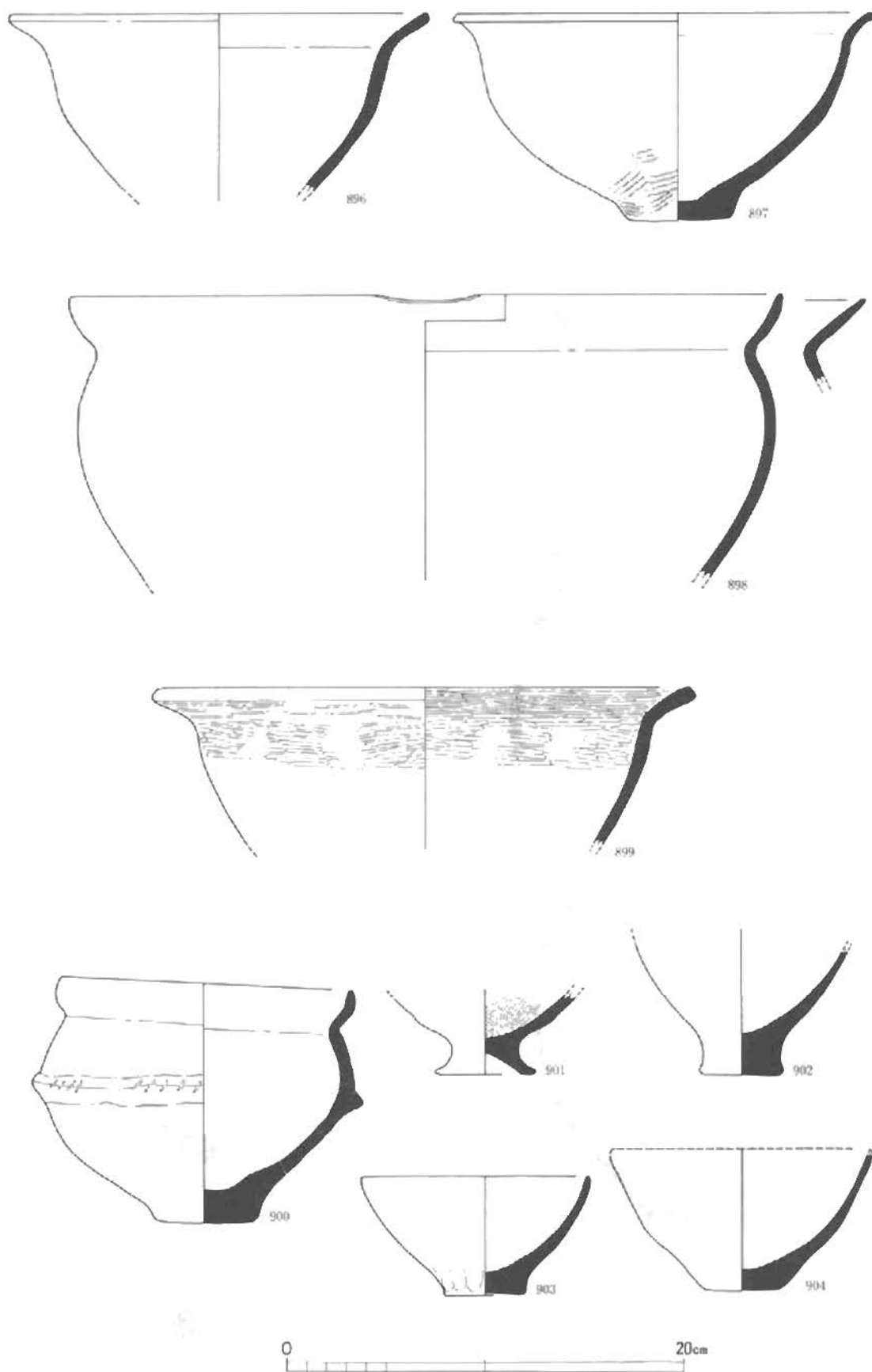
第348図 SH52出土土器(2)



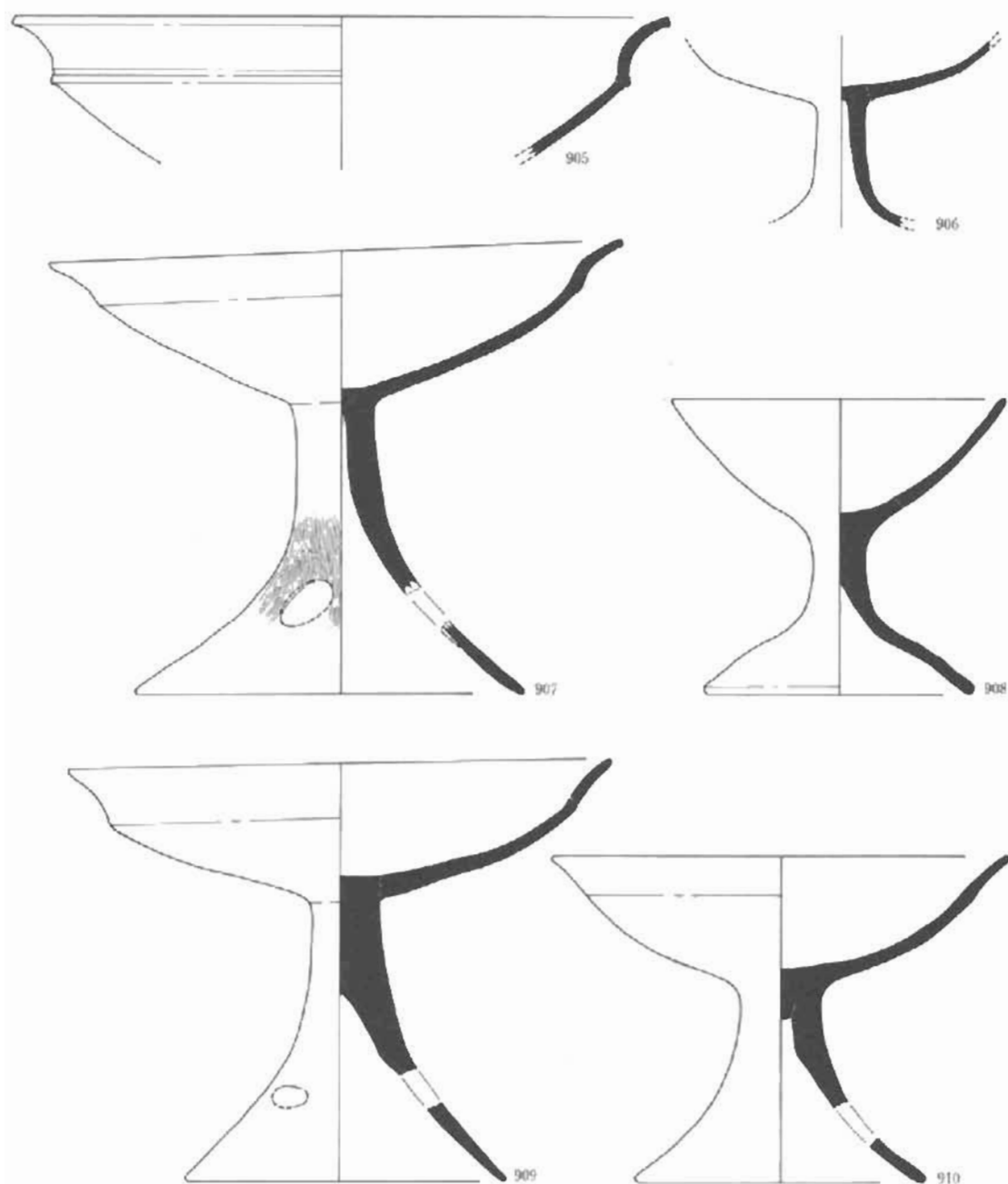
第349図 SH52出土土器(3)



第350図 SH52出土土器(4)



第351図 SH52出土土器(5)



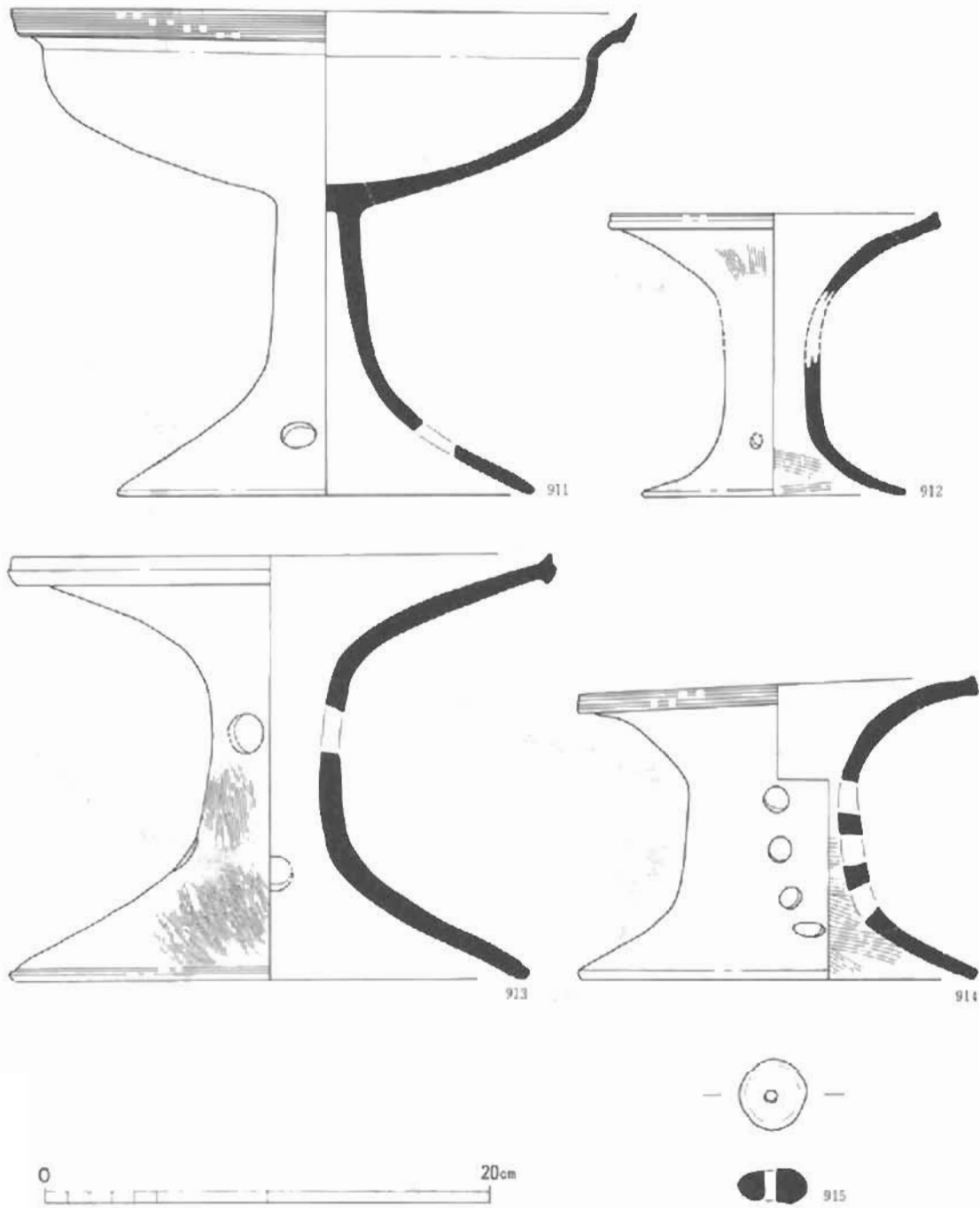
第352図 SH52出土土器(6)

土壌 1 南東部で土壌を検出している。平面形はほぼ円形を呈し、直径は120cmである。深さは12cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物 土器・石器が出土している。そのうち図化できたものは44点である。

土器 42点を図化している。壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している。

壺 口縁部の形態がゆるやかに外方に開くもの、屈曲して開くもの、直線的に外傾するものがある。874・875の2点は土器の胎土がにぶい黄褐色のいわゆるチョコレート色を呈しており河内産のものと思われる。底部は外面を縦方向のヘラミガキで仕上げている2点を除いては磨滅のため調整不明である。



第353図 SH52出土土器(7)

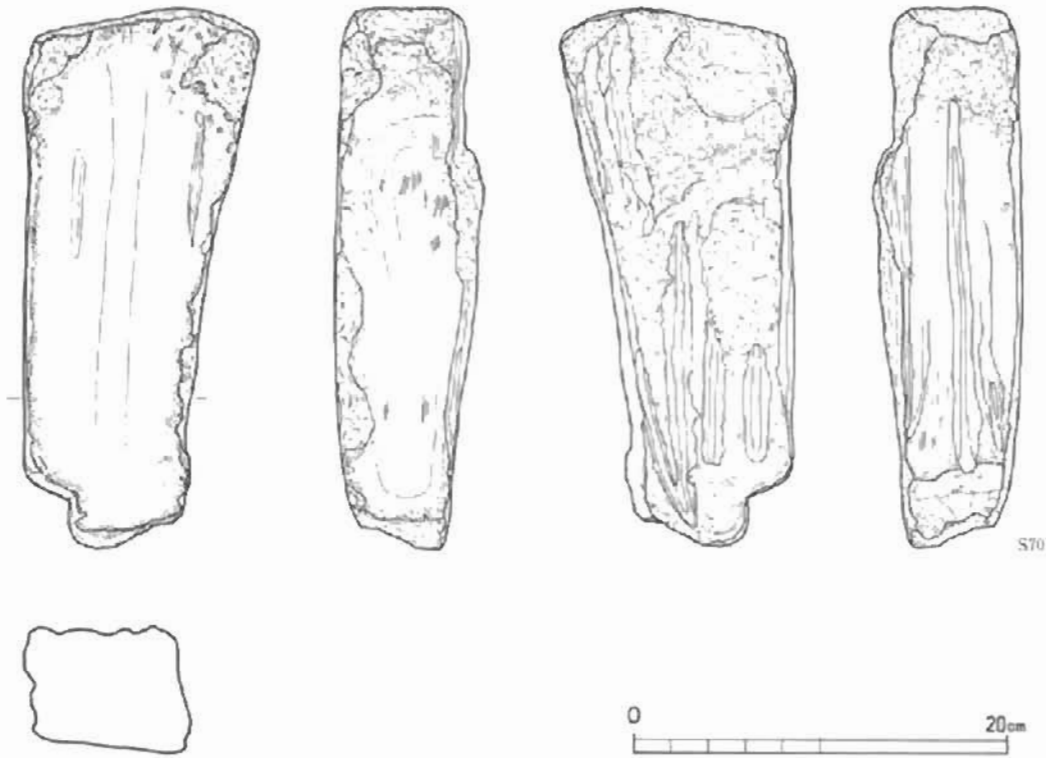
甕 口縁部が大きく開くものとそうでないものに分けられる。

鉢 大・中・小型のものがそれぞれ出土している。

高坏 口縁部は内湾ぎみに外反するものと屈曲して上方につまみ上げているものがあり、後者は丹波地方の影響を受けているものと考えられる。脚部はゆるやかに広がるものと屈曲して広がるものがある。

器台 3点出土している。

紡錘車 1点の出土である。

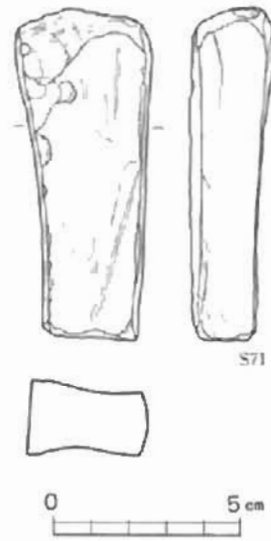


第354図 SH52出土石器(1)

石器 砥石が2点出土している。

砥石 S70は長さ28.5cm、幅12cm、厚さ7.6cmの大型の砥石である。4面とも使用しており、上面と左側面は仕上げ用に、下面と右側面は石庖丁の背部の角落としや、刃部に角度をつけるための溝が認められる。後者の面は火を受けて剥離が激しい。仕上げ用の面は非常に滑らかである。石材は砂岩で粒子は粗い。

S71は途中で折れているが、長さ8.7cm、幅3.7cm、厚さ2.2cmを測る。4面とも使用されているが、石質が粗いために研磨痕ははっきり見えない。石材は粗粒砂岩で、荒砥用の砥石と考えられる。



時期 川除3期である。

第355図 SH52出土石器(2)

第134表 SH52出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
874	壺	口径：(24.0) 底径：6.0 器高：53.0 胴径：14.7 体部径：37.7	外面：口縁端面掘凹線、円形浮文3個単位、8ヶ所?、胴-体部合部貼付凸帯、口縁部-胴部ヨコナデか、体部タテハケのちタテハラミダキか 内面：口縁部-胴部ヨコナデか、体部ナデ、内外面とも磨減激しい	外面：にぶい 黄褐色 内面：*	口縁部1/3 他は一部欠	河内産
875	壺	口径：(30.0) 底径：7.0 器高：73.8 胴径：10.4 体部径：53.5	外面：口縁端面掘凹線、円形浮文4個単位、8ヶ所、胴-体部合部貼付凸帯、体部タテハケのちタテハラミダキか、他は磨減のため調整不明 内面：体部ナデ、他は磨減のため調整不明	外面：にぶい 黄褐色 内面：*	口縁部1/4 体部2/3 胴部完存	河内産

第135表 SH52出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
876	壺	口径 : 26.2 底径 : 器高 : 残3.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 口縁端面縦凹線, 円形浮文3個単位5ヶ所 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 灰褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部1/2 完存	
877	壺	口径 : (19.6) 底径 : 器高 : 残6.9 胴径 : (11.2) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 土色 内面 : 浅黄褐色	口縁部1/4	
878	壺	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残9.5 胴径 : (8.6) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 胴部一底部へラミダキ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 以下は磨滅のため調整不明	外面 : 灰褐色 内面 : 灰褐色	口縁部一胴 部約2/3 体部わずか	
879	壺	口径 : 底径 : 6.5 器高 : 残5.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部へラミダキ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 黒褐色 内面 : 灰白色	底部完存 体部わずか	
880	壺	口径 : 底径 : (8.6) 器高 : 残5.1 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部へラミダキ 内面 : 体部下半ユビナデ, 底部不定方向ナデ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 灰白色	底部約1/4 体部わずか	
881	壺	口径 : 底径 : (5.0) 器高 : 残6.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 底部タテハヤ, のち体部ナデか 内面 : 体部タテハヤ, 底部へラ杖工具痕	外面 : 灰黄褐色 内面 : 灰黄褐色	底部約1/2 体部わずか	
882	壺	口径 : 底径 : 5.8 器高 : 残6.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部タテハヤのちナデ 内面 : 体部一底部タテハヤ一帯残る	外面 : 灰黄 内面 : 土色 黄褐色	底部完存 体部わずか	
883	壺	口径 : 底径 : 4.8 器高 : 残6.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部へラミダキ 内面 : 底部へラ杖工具痕, 他は磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	底部完存 体部わずか	
884	壺	口径 : 底径 : 4.0 器高 : 残7.9 胴径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	底部完存 体部わずか	
885	壺	口径 : 底径 : 9.2 器高 : 残11.8 胴径 : 体部径 : (18.4)	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 褐色 内面 : 褐色	体部一底部 約1/3	
886	壺	口径 : 底径 : 4.0 器高 : 残7.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部磨滅のため調整不明 内面 : 体部ニヒオヤエ	外面 : 灰黄 内面 : 灰白	体部約1/6 底部約1/3	
887	甕	口径 : (15.6) 底径 : 器高 : 残6.0 胴径 : (12.8) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部一 体部約1/6	
888	甕	口径 : (17.4) 底径 : 器高 : 残4.7 胴径 : (14.2) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部3条/cmタテキ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部磨滅のため調整不明	外面 : 灰赤褐色 内面 : 灰赤褐色	口縁部一 体部約1/8	
889	甕	口径 : (14.8) 底径 : 器高 : 残4.1 胴径 : (12.2) 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部一 体部約1/6	
890	甕	口径 : (15.6) 底径 : 器高 : 残8.0 胴径 : (13.2) 体部径 : (18.5)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部3条/cmタテキ, のちナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデか, 粘土研痕	外面 : 赤褐色 内面 : 赤褐色	口縁部僅か 体部約1/3	
891	甕	口径 : (16.8) 底径 : 器高 : 残11.2 胴径 : (12.8) 体部径 : (18.2)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 以下は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ, 以下は磨滅のため調整不明	外面 : 褐色 内面 : 褐色	口縁部一 体部約1/2	
892	甕	口径 : (15.6) 底径 : (5.4) 器高 : 20.6 胴径 : (13.7) 体部径 : (18.4)	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部3条/cmタテキ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデか	外面 : 浅黄褐色 内面 : 褐色	口縁部1/7 体部約1/2 底部完存	
893	甕	口径 : 12.8 底径 : 4.9 器高 : 19.6 胴径 : 10.7 体部径 : 16.4	外面 : 体部3条/cmタテキ, のち口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ, 体部ナデか	外面 : 赤褐色 内面 : 明赤褐色	口縁部2/3 体部一帯欠 底部完存	スズ付着
894	甕	口径 : 底径 : 4.8 器高 : 残6.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰赤褐色 内面 : 灰褐色	底部完存 体部わずか	
895	甕	口径 : 底径 : (5.0) 器高 : 残7.3 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部一底部タテキ 内面 : 体部一底部ナデ	外面 : 灰白色 内面 : 灰白色	底部約1/2 体部わずか	

第136表 SH52出土土器観察表(3)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
896	鉢	口径 : (20.7) 底径 : 器高 : 残8.9 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ, 体部ヘラナテ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部一 体部約1/4	
897	鉢	口径 : (20.7) 底径 : 5.0 器高 : 10.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部下位へ底部3条/cmタテキ, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 体部縦ヘラミダキか, 他は磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 赤橙 内面 : 赤橙	口縁部1/8 他はほぼ定 存	
898	鉢	口径 : (35.8) 底径 : 器高 : 残14.2 胴径 : 体部径 : (35.0)	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部ヘラミダキ一部残る 内面 : 口縁部ヨコナテ, 体部ヘラ状工具痕	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部僅か 体部約1/6	片口鉢
899	鉢	口径 : (26.6) 底径 : 器高 : 残7.8 胴径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ, 口縁部へ体部縦ヘラミダキ 内面 : 口縁部へ体部縦ヘラミダキ	外面 : にぶい 赤橙 内面 : *	口縁部一 体部約1/2	
900	鉢	口径 : (15.0) 底径 : 4.8 器高 : 11.7 体部径 : 16.2	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部磨滅のため調整不明, 凸部貼り付け 内面 : 口縁部へ体部上半ヨコナテ, 体部下半タテナテ	外面 : 灰白 内面 : にぶい 黄橙	口縁部僅か 体部一部欠 底部完全	
901	鉢	口径 : 底径 : 5.0 器高 : 残4.0 胴径 : 3.4 体部径 :	外面 : 体部ナテ, 脚部ヨコナテ 内面 : 体部6条/cmタテハケ	外面 : 黒 内面 : 灰白	底部完全 体部わずか	
902	鉢	口径 : 底径 : 4.0 器高 : 残6.4 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部完全 体部わずか	
903	鉢	口径 : (11.5) 底径 : 3.9 器高 : 6.0 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部ナテ, 底部ヒビオサエ, 底面木の痕 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 褐色 内面 : 褐色	口縁部僅か 底部約2/3 底部完全	
904	鉢	口径 : (17.0) 底径 : 3.8 器高 : 残6.9 胴径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 橙 内面 : 橙	口縁部僅か 体部約2/3 底部完全	
905	高坏	口径 : (28.6) 底径 : 器高 : 残6.0 胴径 : 坏部高 :	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナテ, 体部磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	坏部約1/4	
906	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残8.1 胴径 : 2.2 坏部高 :	外面 : } 内面 : } 4孔か 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白 にぶい 橙	口縁部欠 胴部欠	
907	高坏	口径 : (25.1) 底径 : 17.0 器高 : 19.8 胴径 : 3.5 坏部高 : 7.1	外面 : 体部ミダキ, 脚部縦ヘラミダキ, 3孔 内面 : 磨滅のため調整不明, 胴部縦目	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 赤橙	ほぼ1/2	
908	高坏	口径 : (14.6) 底径 : (11.4) 器高 : 12.9 胴径 : 2.3 坏部高 : 5.5	外面 : 脚部ヒビオサエ, 他は磨滅激しいがハケか 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部僅か 坏部1/3, 脚 部1/2	
909	高坏	口径 : (24.0) 底径 : (14.2) 器高 : 18.4 胴径 : 3.2 坏部高 : 6.2	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部以下ヘラミダキごく一部残る, 3孔 内面 : 口縁部ヨコナテ, 他は磨滅のため調整不明	外面 : 赤橙 内面 : 赤橙	坏部ほぼ定 存 脚部約1/8	
910	高坏	口径 : (20.2) 底径 : (12.4) 器高 : 14.3 胴径 : 3.6 坏部高 : 6.0	外面 : 口縁部ヨコナテ, 他は磨滅のため調整不明, 円孔(数不明) 内面 : 口縁部ヨコナテ, 他は磨滅のため調整不明	外面 : 赤橙 内面 : 赤橙	坏部約1/2 脚部約1/3	
911	高坏	口径 : 28.0 底径 : 18.7 器高 : 22.3 胴径 : 3.8 坏部高 : 8.7	外面 : 口縁部縦面凹線, 磨滅のため調整不明(全面ヘラミダキか), 3 孔 内面 : 磨滅のため調整不明(坏部ヘラミダキか)	外面 : にぶい 赤橙 内面 : *	定存	
912	器台	口径 : 14.6 底径 : 11.7 器高 : 体部径 : 4.3	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部タテハケか, 胴部縦ヘラミダキ, 体部一 部部に2段に3孔(等間隔ではない) 内面 : 口縁部ヨコナテ, 胴部5条/cmヨコハケ	外面 : 灰白 橙 内面 : 灰白	体部欠	
913	器台	口径 : 24.1 底径 : 22.8 器高 : 19.0 体部径 : 6.0	外面 : 口縁部ヨコナテ, 体部縦ヘラミダキ, 口縁部・胴部はナメ ハケ, 脚部凹線, 2段に3孔 内面 : 口縁部ヨコナテ, 口縁部ミダキ, 他は磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	ほぼ定存	
914	器台	口径 : 17.6 底径 : 18.0 器高 : 13.7 体部径 : 7.6	外面 : 口縁部凹線凹線, 口縁部ヨコナテ, 以下は磨滅のため調整不明 4段に4孔 内面 : 口縁部ヨコナテ, 体部へ胴部5条/cmヨコハケ	外面 : にぶい 赤橙 内面 : *	胴部1/2 他はほぼ定 存	
915	結算車	長径 : 3.3 短径 : 3.1 厚さ : 1.6 円孔径 : 0.5	外面 : 内面 :	外面 : オリーブ 黒 内面 : *		

SH53 (図版96)

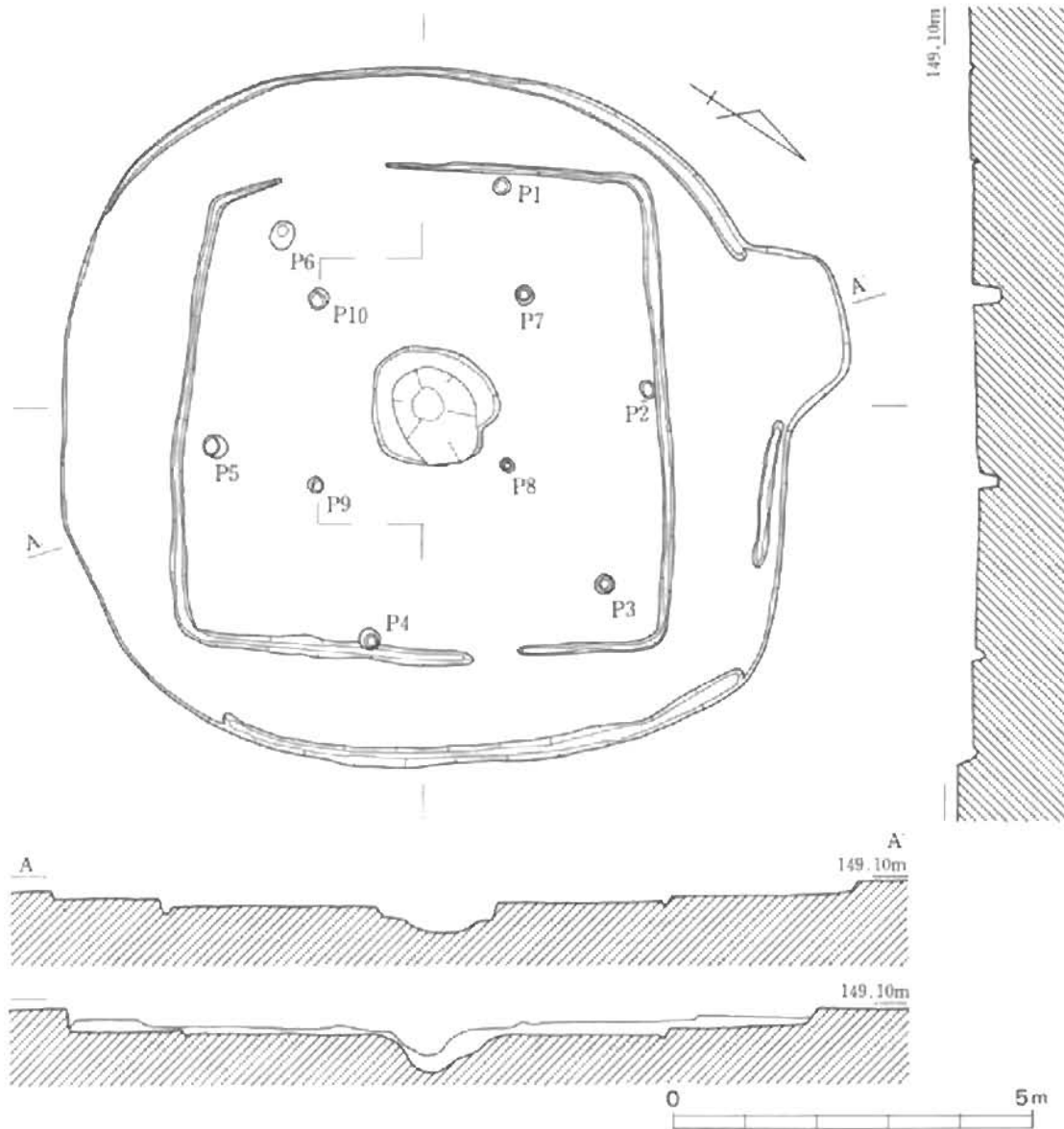
検出状況 田区の北東隅で検出された。微高地でいえば小微高地bの南西端で検出していることになる。

形状・規模 平面形はやや肩部の張った円形を呈している。北西部にあるSH53から続く張出し部のほかに西部に張出し部をもっている。直径は10.35mを測る。検出面から、床面までの深さは約38cmで、床面の標高は148.75mである。検出した床面積は、張出し部を含めて84.0㎡である。

埋土 中央土壌の部分の埋土を除いて、SH52の床面から下に1層堆積している。灰色シルト質極細砂である。

屋内施設 張出し部・周壁溝・柱穴・中央土壌を検出している。

張出し部 当住居跡の北西部で張出し部を検出している。平面形は長方形を指向しており規模は、幅が基部で2.40m、先端部で2.15m、長さが1.18mである。深さは先端部で約10cmを測るが、



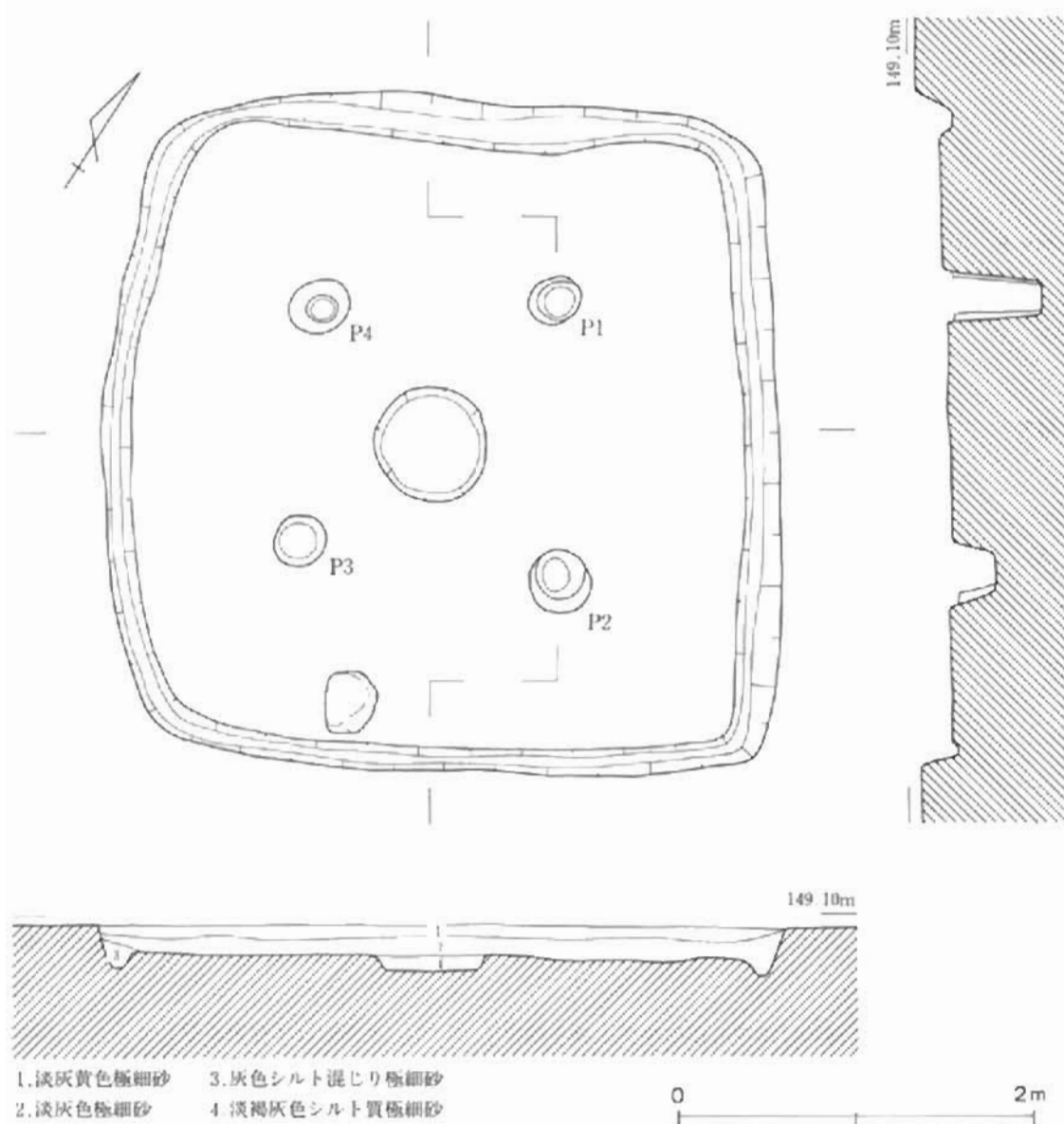
第356図 SH53

住居跡の中心部に向かう程その深さを増している。

- 周壁溝** 床面での幅5～10cmを測り、このレベルからの深さは5cmで、底部の幅は2～4cmである。また検出面からの深さは38cmである。この周壁溝は全周しておらず、全体の約2/3にわたって検出された。南東部については現在の水田の水路によって攪乱されており残存状態は悪い。
- ベッド** 住居跡の東部を除いてベッドを検出した。床面とは四角形に区切られた溝によって区画されている。溝の規模は、長さは各辺6.02m、6.35m、6.60m、6.00mで、幅25cm、床面からの深さは7cmである。張出し部を含んでいる。幅は1.60m以下で、床との比高差は約10cmである。ベッド部分の面積は39.0㎡で、対床面積比は48.8%である。
- 柱穴** 柱穴は合計10穴検出しているが、主柱穴は6穴である。P1は掘り方径22cm、床面からの深さ17cmである。P2は掘り方径25cm、床面からの深さ22cmである。P3は掘り方径27cm、柱痕径17cm、床面からの深さ36cmである。P4は掘り方径30cm、柱痕径17cm、床面からの深さ38cmである。P5は掘り方径35cm、柱痕径22cm、床面からの深さ54cmである。P6は掘り方径40cm、床面からの深さ35cmである。以上の6穴が主柱穴を構成している。柱間距離は、P1～P2間が3.44m、P2～P3間が2.75m、P3～P4間が3.35m、P4～P5間が3.43m、P5～P6間が3.12m、P6～P1間が3.12mである。主柱穴のほかに4穴の柱穴を検出している。これらの4穴は中央土塙のまわりで方形に検出された。P7は掘り方径26cm、柱痕径16cm、床面からの深さ22cmである。P8は掘り方径20cm、柱痕径12cm、床面からの深さ31cmである。P9は掘り方径21cm、柱痕径14cm、床面からの深さ24cmである。P10は掘り方径30cm、柱痕径22cm、床面からの深さ31cmである。柱間距離は、P7～P8間が2.35m、P8～P9間が2.65m、P9～P10間が2.54m、P10～P7間が2.86mである。
- 中央土塙** 当住居跡のほぼ中心部に中央土塙を検出している。平面形は不整形を呈している。規模は上段で長軸方向に1.75m、短軸方向に1.65mを測り、深さは0.12mである。下段で長軸方向に1.40m、短軸方向に0.80mを測り、深さは0.40mである。面積は2.33㎡、対床面積比は2.8%である。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物の出土がないために正確な時期は明らかではないが、SH52と同じプランであること、主柱穴が同じ場所にあることなどから、ほとんど連続して使用されていた住居跡と考えることができる。

SH54 (図版97)

- 検出状況** Ⅲ区の北東隅に存在し、SH52・53の北側約13m、SH61の東側約12mのところ検出された。
- 形状・規模** 平面形は基本的に隅円の長方形を呈している。規模は北辺が3.20m、東辺が3.28m、南辺が3.30m、西辺が3.30mである。北・東・南辺が比較的直線的なのに対して西辺はやや内湾ぎみである。床面までの深さは約17cmで、床面の標高は148.88mである。検出した床面積は11.08㎡である。



第357図 SH54

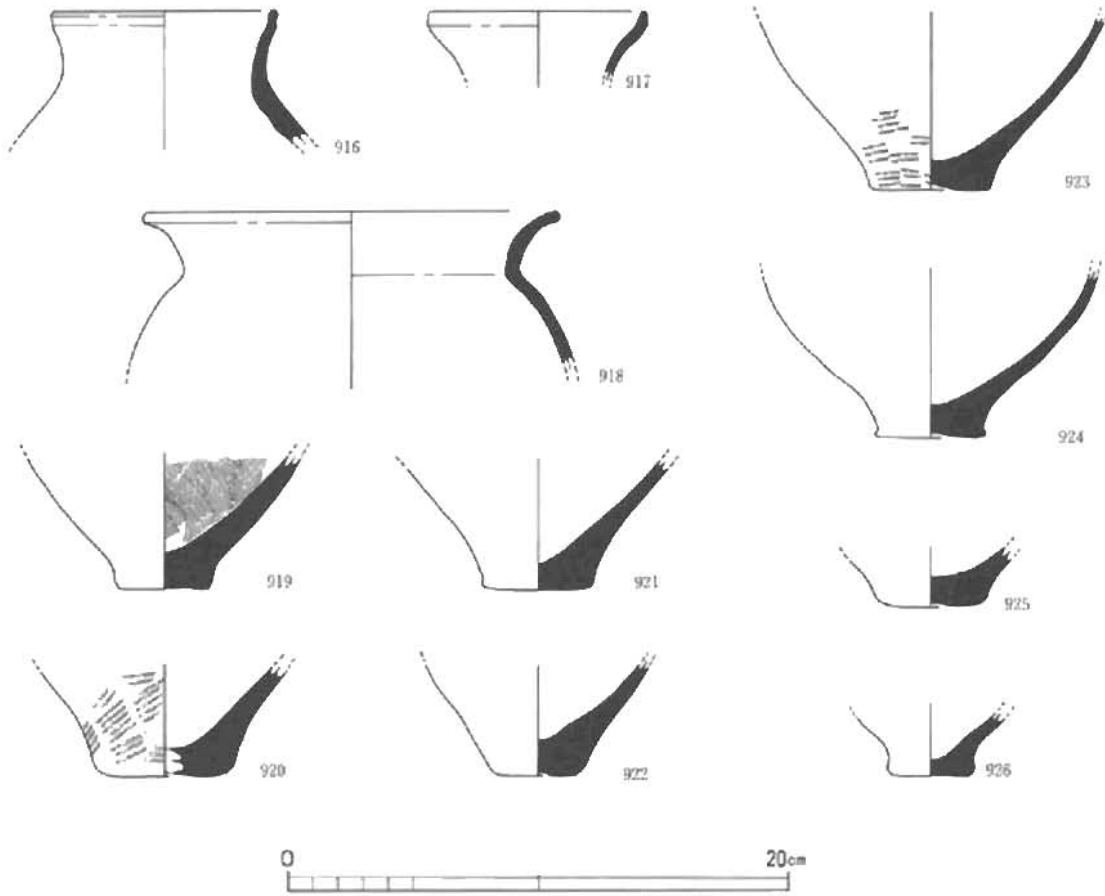
埋土 埋土は中央土壙の部分を除いて3層にわたって堆積している。上層に淡灰黄色極細砂、中層に淡灰色極細砂、下層に灰色シルト混じり極細砂と分層される。

屋内施設 周壁溝・柱穴・中央土壙を検出した。

周壁溝 住居跡を全周している。床面での幅は12~15cm、このレベルからの深さは10cmで、底部の幅は5cmである。また検出面からの深さは26cmである。

柱穴 4穴検出している。P1は、掘り方径32cm、柱痕径24cmを測り、床面からの深さは52cmである。P2は、掘り方径35cm、柱痕径27cmを測り、床面からの深さは24cmである。P3は、掘り方径30cm、床面からの深さは20cmである。P4は、掘り方径33cm、柱痕径18cmを測り、床面からの深さは49cmである。掘り方径はだいたい揃っており30~35cmのなかにおさまっている。深さには差異がみられる。P1・P4は深く50cm前後であるのに対し、P2・P3は比較的浅くそれぞれ24cm、20cmである。

柱間距離はP1~P2間が1.52m、P2~P3間が1.45m、P3~P4間が1.45m、P4



第358図 SH54出土土器

～P1間が1.35mである。柱穴で結ばれる範囲は住居跡の平面形と同様に長方形を呈しているが、P2の柱穴がやや外側に外れたところに検出されている。

中央土壌 住居跡のほぼ中央部の柱穴どうしを結んだ対角線の交差上に中央土壌が検出された。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径0.64mを測り、床面からの深さは0.08mである。面積は0.33㎡で、対床面積比は3%である。

出土遺物 土器のみが出土している。壺・甕・鉢・高坏の各器種が出土しており、そのうち図化しているものは11点である。

壺 2点図化している。短頸壺と広口壺が出土している。いずれも口縁端部を上方につまみ上げている。

甕 9点図化している。体部～口縁部のものが1点と、体部～底部のものが8点である。体部～口縁部のもの(918)は体部が磨滅のため調整不明であるが、口縁部には横方向のナデをほどこしており、口縁端部は丸くおさめている。

鉢 図化できなかったが2点出土している。大型のものと小型のものがみられる。

高坏 脚部が出土している。

時期 川除5期である。

第137表 SH54出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
916	壺	口径 (18.5) 底径 器高 残5.2 胎径 (18.1) 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、他は磨滅のため調整不明 内面 口縁部ヨコナテ、他は磨滅のため調整不明	外面 ほぼ黒 内面 ほぼ黒、黄	口縁部1/4	
917	壺	口径 (18.4) 底径 器高 残2.6 胎径 体部径	外面 口縁部ヨコナテ 内面 口縁部ヨコナテ	外面 明褐色 内面 明褐色	口縁部1/2	
918	壺	口径 (16.4) 底径 器高 残6.9 胎径 (13.4) 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、体部わずかにタテハテ 内面 口縁部ヨコナテ、磨滅のため調整不明	外面 浅黄褐色 内面 灰白	口縁部一体部 わずか	
919	壺	口径 底径 3.7 器高 残5.2 胎径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 10条/cmハテ	外面 灰白 内面 灰白	底部一体部 約3/4	
920	壺	口径 底径 5.2 器高 残4.3 胎径 体部径	外面 体部-底部4条/cmタテキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰	底部約1/3 体部わずか	
921	壺	口径 底径 4.2 器高 残5.1 胎径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 浅黄褐色 内面 浅黄	底部完存 体部わずか	
922	壺	口径 底径 3.5 器高 残4.3 胎径 体部径	外面 タテハテヨコナテ 内面 ナテ	外面 灰白 内面 灰白	底部完存 体部わずか	
923	壺	口径 底径 4.8 器高 残6.8 胎径 体部径	外面 体部-底部タテキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	底部一体部 約2/3	
924	壺	口径 底径 4.0 器高 残6.5 胎径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 オリーブ 黒 内面 黒	底部約1/2 体部わずか	
925	壺	口径 底径 3.8 器高 残2.3 胎径 体部径	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 灰白 内面 灰白	底部完存	
926	壺	口径 底径 3.2 器高 残2.6 胎径 体部径	外面 体部-底部ハテナテ 内面 ヌビナテ	外面 灰白 内面 浅黄	底部完存 体部わずか	

SH55 (図版98・114)

検出状況 山区の北東部、小微高地bの南西部に立地する。SH56・57の南東、SH61・62・63の北側に位置する。調査直前まで使用されていた用水路に切られている以外は、他の遺構との切り合い関係は認められない。

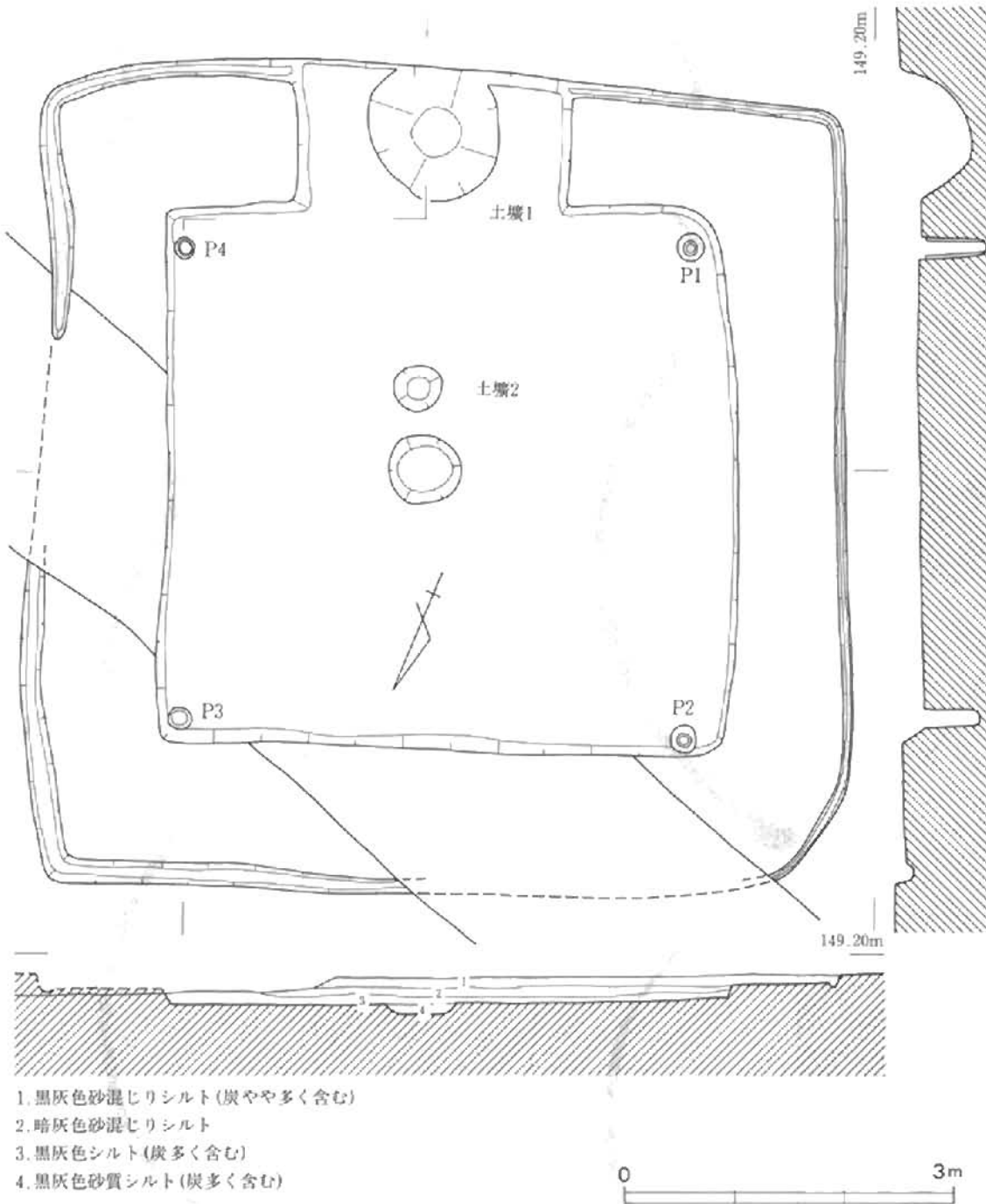
形状・規模 平面形は方形を呈する。南東辺7.10m、南西辺7.00m、北西辺7.20m、北東辺7.15mを測り、ほぼ正方形に近い平面形である。検出面からの深さは25cmで、床面における標高は148.76mである。床面積は50.6㎡である。

埋土 上から黒灰色砂混じりシルト層、暗灰色砂混じりシルト層、黒灰色シルト層が堆積していた。特に、第1層と第3層には多くの炭片が含まれていた。

屋内施設 周壁溝・ベッド・柱穴・土壇・中央土壇を検出した。

周壁溝 ベッドの外側を周壁に沿って検出した。南東辺のベッドの切れている箇所については、周壁溝も確認できなかった。ベッド上面における幅は8cmを測り、この面から溝底までの深さは2cmと大変浅いものである。周壁溝底部における幅は4cmである。

ベッド 土壇1のある南東辺の一部が切れる「コ」字形にめぐるベッドである。幅0.85~1.10mとほぼ一定した幅でめぐっている。このベッドは、地山を削り出して造られており、床面と



第359図 SH55

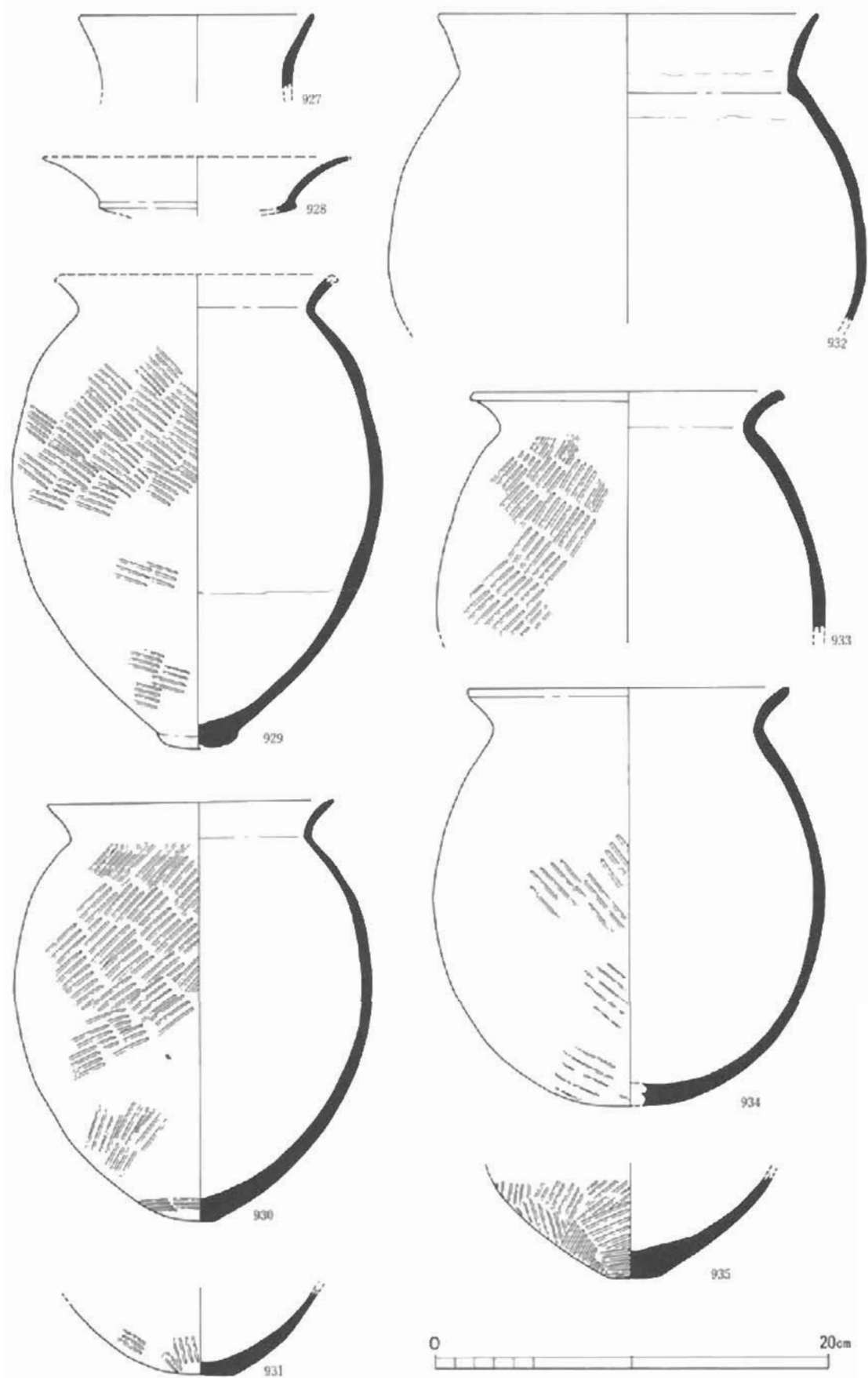
の比高は12cmである。

ベッドの占める面積は22.0㎡で、床面積に占める割合は43%である。

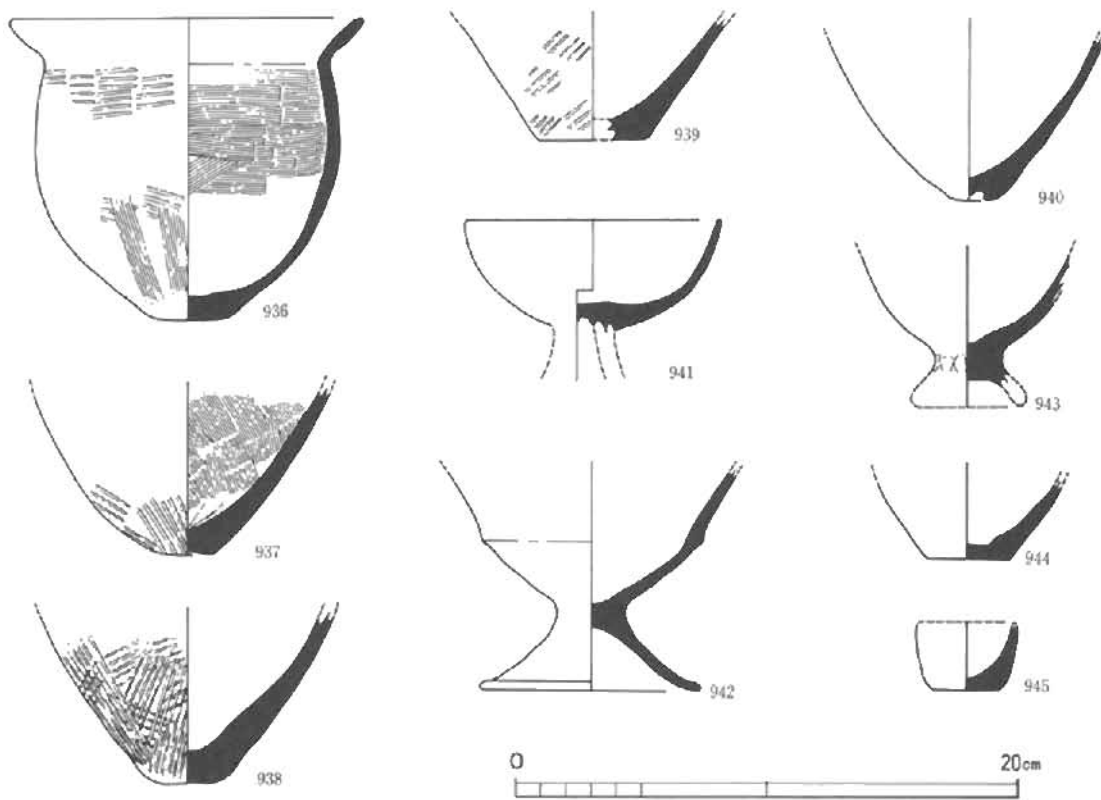
柱穴

ベッドの各コーナー内側で4穴検出した。いずれもほぼ同規模の柱穴である。P1の掘り方の径は25cm、柱痕の径は11cm、床面からの深さは52cmを測る。P2は、掘り方の径25cm、柱痕の径12cm、床面からの深さ64cmを測る。P3は、掘り方の径20cm、床面からの深さ48cmを測る。P4は、掘り方の径18cm、柱痕の径12cm、床面からの深さ67cmを測る。なお、P3においては柱痕の痕跡を確認することができなかった。

P1～P2間の距離は4.42m、P2～P3間の距離は4.60m、P3～P4間の距離は4.25



第360図 SH55出土土器(1)



第361図 SH55出土土器 (2)

m、P4～P1間の距離は4.62mを測る。

土壌 中央土壌を除いて、2基検出した。

土壌1 南東辺のほぼ中間部、南東側周壁に接するように位置する土壌である。平面形は115cm×120cmとほぼ円形に近いものである。横断面はU字形をなし、土壌中央部における床面からの深さは45cmである。この土壌の上面で多くの土器がまとまって出土している。(図版98-2)

土壌2 中央土壌の南東側20cmに位置するほぼ円形に近い土壌である。中央土壌と土壌1を結ぶ本住居跡の主軸ライン上にあたる。床面における規模は40×45cmと、土壌1と比べて小規模である。横断面は皿形を呈し、床面からの深さは8cmと浅いものである。埋土内には、比較的多くの炭片が含まれていた。土器など遺物の出土は認められなかった。

中央土壌 本住居跡のほぼ中央に位置する。平面形は68cm×62cmとほぼ円形に近いものである。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは10cmである。埋土内には炭片を多く含む黒灰色シルト層が堆積していた。

床面における本土壌の面積は0.33㎡で、床面全体に占める割合は1%である。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 比較的多く出土しているが、その大半は土壌1上面での出土である。器種としては壺・甕・高坏・鉢が出土しているが、甕が大半を占めている。

壺 図化できたのは、広口壺と二重口縁壺の口縁部2点のみである。

甕 いずれもV様式系の甕である。特に注目されるのが、底部の大半が尖底ないし丸底を指向するもので、明確な平底をなすものはわずかである点である。いずれもタタキ整形によ

っている。また、体部のタタキ目であるが、左上がりのものと右上がりの2者が認められる点も一つの特徴として指摘できる。法量においては、大型・中型・小型の3タイプのもものが認められるが、中型のもものが大半である。

高坏 坏部が楕形を呈するものと、坏形を呈するものの2タイプが出土している。坏形のもは、受部に対して口縁部の比率が高いもので、本遺跡ではあまり認められない形態のものである。

鉢 いずれも小型のものであるが、全体の形態がわかるものは出土していない。

石器 土壌1から1点出土している。平面長方形の板状を呈するが、短辺のひとつは欠損している。また、長辺に1ヶ所、穿たれた孔が認められるが、この辺は孔を中心に意識的に打ち欠かれたようで約1/2を残すのみである。また、これに対応する長辺と、欠損している短辺に対応する短辺の二辺には刃部が認められる。さらに、欠損する面以外の各面には、擦痕が明瞭に残存している。

以上の特徴から、本石器は、石庖丁を転用した石斧の未製品と考えられる。

4.90cm×2.90cmを測り、厚さは0.90cmである。孔の径は0.60cmと復元される。石材は凝灰岩である。

時期 出土土器から川除6期と考えられる。



第362図 SH55出土石器

第138表 SH55出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
927	壺	口径 : (11.8) 底径 : 器高 残3.8 頸径 : 体部径	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部1/4	
928	壺	口径 : (15.6) 底径 : 器高 残3.0 頸径 : 体部径	外面 : 磨滅のための調整不明 内面 : 口縁部ヘラシカキカ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	口縁部1/8 以下	
929	甕	口径 : 底径 : 3.6 器高 残23.9 頸径 : (12.0) 体部径 (18.9)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ(左上がり)、底面木の葉 模 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	外面 : 淡黄 にぶ黄 内面 : 淡黄	口縁部欠 口縁部僅か 体部約1/2	
930	甕	口径 : 14.6 底径 : 2.5 器高 21.1 頸径 : 12.3 体部径 : 18.1	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ(右上がり) 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面 : にぶい 黄褐色 内面 : 灰黄褐色	体部1/4欠 他はほぼ完 存	
931	甕	口径 : 底径 : 2.7 器高 残4.2 頸径 : 体部径	外面 : 体部~底部タタキ、のちナデ 内面 : 体部~底部ナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
932	甕	口径 : (22.2) 底径 : 器高 残15.5 頸径 : (17.2) 体部径 : (24.2)	外面 : 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 浅黄褐色 内面 : にぶい 黄	口縁部~体 部約1/8	
933	甕	口径 : (15.0) 底径 : 器高 : 残12.2 頸径 : (13.0) 体部径 (19.8)	外面 : 体部3条/cmタタキ(右上がり)、のち口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、のちナデ	外面 : 灰白 淡褐色 内面 : 灰白	口縁部~体 部約1/8	
934	甕	口径 : (16.4) 底径 : 器高 21.0 頸径 : (13.8) 体部径 : (20.0)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cmタタキ(左上がり) 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ナデか	外面 : 浅黄褐色 にぶ黄 内面 : 灰白	体部約1/4 口縁部僅か	
935	甕	口径 : 底径 : 2.4 器高 : 残5.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3条/cmタタキ(右上がり) 内面 : 体部~底部ナデ	外面 : 浅黄褐色 内面 : 浅黄褐色	底部完存 体部わずか	

第139表 SH55出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
936	甕	口径 : 13.81 底径 : 3.0 器高 : 11.9 胴径 : 11.11 体部径 : 12.1	外面 : 口縁部ヨコナデ, 体部上辺方向タタキ, 上辺横方向タタキ, のち上辺はタテハケ 内面 : 体部ナデ, のち上辺斜め/cmヨコナデ	外面 : 明褐色 内面 : 灰白	体部1/3 口縁部僅か	
937	甕	口径 : 2.5 器高 : 残6.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部端方向タタキ, のち体部ナデ 内面 : 体部-底部斜め/cmタテハケ, 底部工具痕	外面 : にぶい 黄褐色 内面 : 灰白	底部完存 体部3/4	
938	甕	口径 : 底径 : 1.8 器高 : 残6.6 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部3cm右側上りタタキ, のち端タタキ 内面 : 体部-底部ナデ	外面 : 淡黄 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	
939	甕	口径 : 底径 : 4.4 器高 : 残4.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部4cm右タタキ(右側) 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部約1/2 体部わずか	
940	甕	口径 : 底径 : 器高 : 残6.5 胴径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部ナデ 内面 : 体部-底部ナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	底部欠 体部わずか	
941	高杯	口径 : 110.01 底径 : 器高 : 残4.4 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のための調整不明 内面 :	外面 : にぶい 褐色 内面 : 褐色	底部約3/5	
942	高杯	口径 : 底径 : 18.61 器高 : 残8.6 胴径 : 2.8 体部径 :	外面 : 杯部ヨコナデ, 他は磨滅のための調整不明 内面 : 杯部ヨコナデ, 他は磨滅のための調整不明	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁端部欠 杯部約1/5 胴部約2/3	
943	鉢	口径 : 底径 : 器高 : 残5.3 胴径 : 2.7 体部径 :	外面 : 脚柱部エビスヤス, 体部はタテハケ一部残る 内面 : 磨滅のための調整不明	外面 : にぶい 赤褐色 内面 : にぶい 褐色	口縁端部欠 約1/3	
944	鉢	口径 : 底径 : 3.2 器高 : 残3.0 胴径 : 体部径 :	外面 : ナデ 内面 : 底部へう状工具の傷いナデ	外面 : 淡黄褐色 内面 : 淡黄褐色	底部完存 体部わずか	
945	鉢	口径 : 底径 : 2.5 器高 : 残2.6 胴径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のための調整不明 内面 : エビスナデ	外面 : 灰 内面 : 灰白	底部完存 体部約1/5	

SH56 (図版99・120)

検出状況 Ⅲ区北東部、小微高地bの西端部に立地する。SH55の北西にあたり、SH57に切られている。このため、当住居跡で検出できたのは床面のレベルにおいてのみで、周壁については検出できなかった。位置的にはSH57とほぼ重複している。SH57とともに南側コーナーは、調査直前まで使用していた用水路により切られていた。

形状・規模 平面形は、北西辺と南東辺が長い長方形である。南東辺で3.84m、南西辺で3.16m、北西辺で4.00m、北東辺で3.22mを測る。検出面は床面とほぼ等しく、床面における標高は148.90mである。推定される床面積は12.4㎡である。

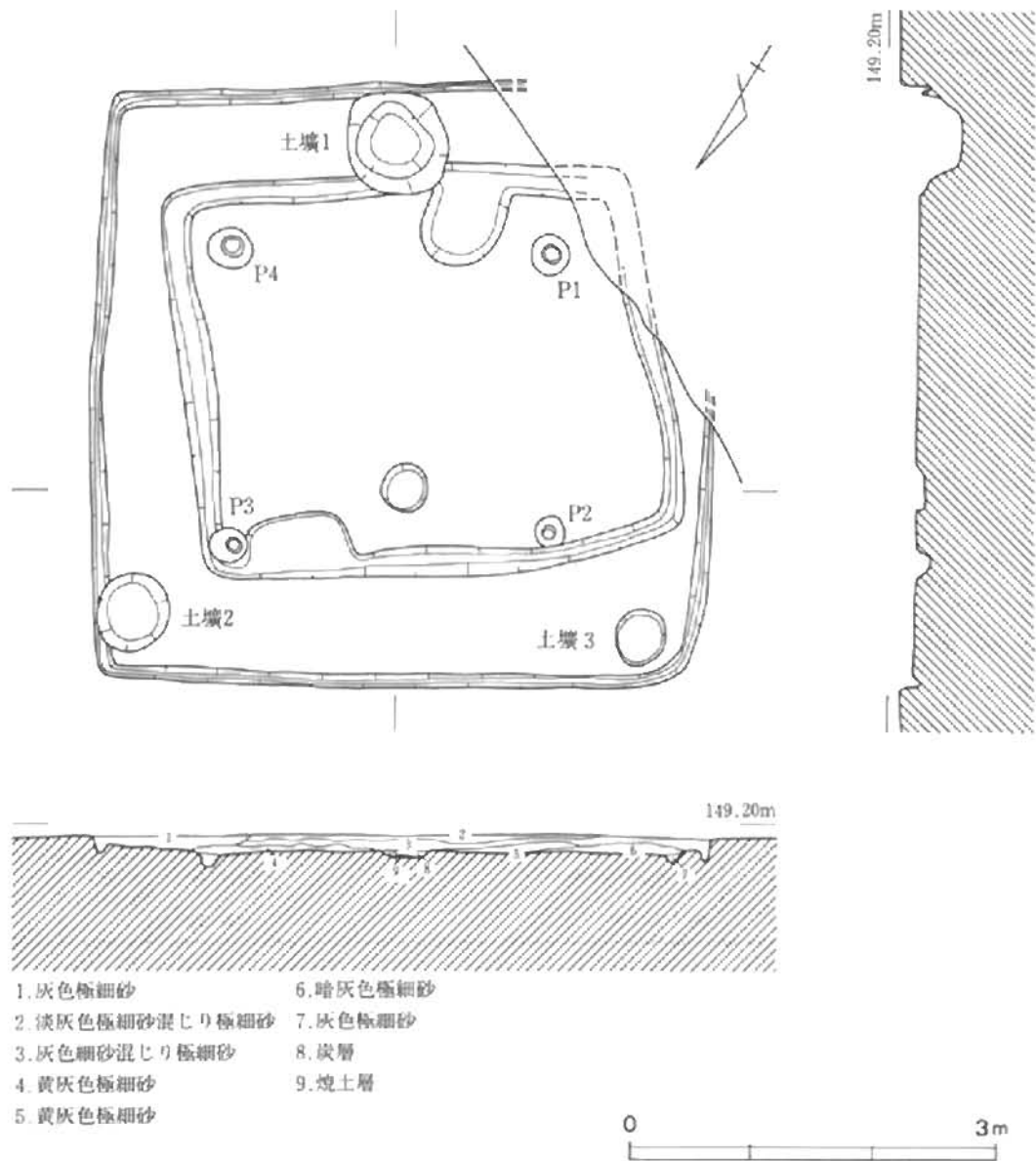
埋土 SH57の床面で検出したため、本住居跡に伴う埋土は確認できなかった。

屋内施設 周壁溝と柱穴・土壘を検出した。

周壁溝 用水路に切られている箇所以外は全周している。床面における幅は25cmで、床面からの深さは10cmを測る。底部における幅は6cmである。

柱穴 4穴検出した。各柱穴は基本的にはコーナー部に掘られたものと考えられるが、きれいに長方形には並ばず、変則的な配置となっている。特にP2については大きくP3側へずれている。

P1は、掘り方の径33cm、柱痕の径15cmを測り、床面からの深さは61cmである。P2は、掘り方の径28cm、柱痕の径11cmで、床面からの深さは56cmである。P3は、掘り方の径32



第363図 SH56・57

cm、柱痕の径13cmで、床面からの深さは60cmである。P4は掘り方の径36cm、柱痕の径18cmを測り、床面からの深さは70cmである。また、P1～P2間の距離は2.26m、P2～P3間の距離は2.58m、P3～P4間の距離は2.44m、そしてP4～P1間の距離は2.62mである。

土壇 北西辺近く、P2とP3のほぼ中間部で検出した。ほぼ円形に近い土壇で、径38cmを測る。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは21cmである。

出土遺物 本住居跡にともなう土器は1点も出土していないが、鉄器が床面直上から1点出土している。

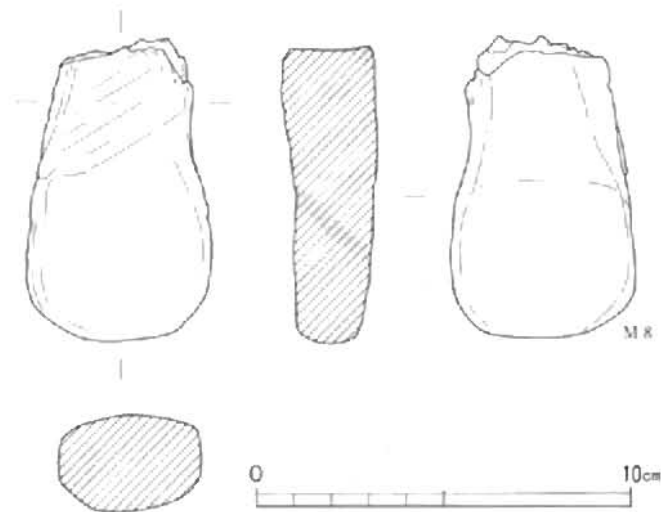
鉄器 鉄斧が1点出土している。刃部から木柄装着部まで残存するものである。装着部には、斜行する木質痕が認められた。

本来なら、刃部は薄くなり片刃ないし両刃をなすものであるが、錆化が著しいことと、錆を全て落とそうとすると、残存する木質まで落とさなければならなくなるため、刃部を十分出すことができなかった。

なお、X線透過試験を行ったが、装着部については袋状を示すものは認められなかった。

残存長8.05cmを測り、刃部幅（最大幅）は4.90cmである。また、厚さは最大で2.05cmである。

時期 SH57との切り合い関係から川除7期と考えられる。



第364図 SH56出土鉄器

SH57 (図版99・114)

検出状況 SH56を切って造られた住居跡で、平面的にはSH56と重複している。南側コーナーを用水路によって切られている以外は、ほぼ全体を明らかにすることができた。

形状・規模 平面形は方形である。北西辺は4.75m、北東辺は4.70mを測り、南東辺は4.80m、南西辺は4.70mと推定される。検出面からの深さは13cmを測り、床面における標高は148.96mである。推定される床面積は21.6㎡である。

埋土 6層に分かれるが、いずれも極細砂を主体とした埋土である。

屋内施設 周壁溝・土塋を検出したが、中央土塋・柱穴は確認できなかった。

周壁溝 用水路で切られた箇所以外は全周している。床面における幅は7cmを測り、床面からの深さは5cmである。底部における幅は3cmである。

土塋 3基検出した。

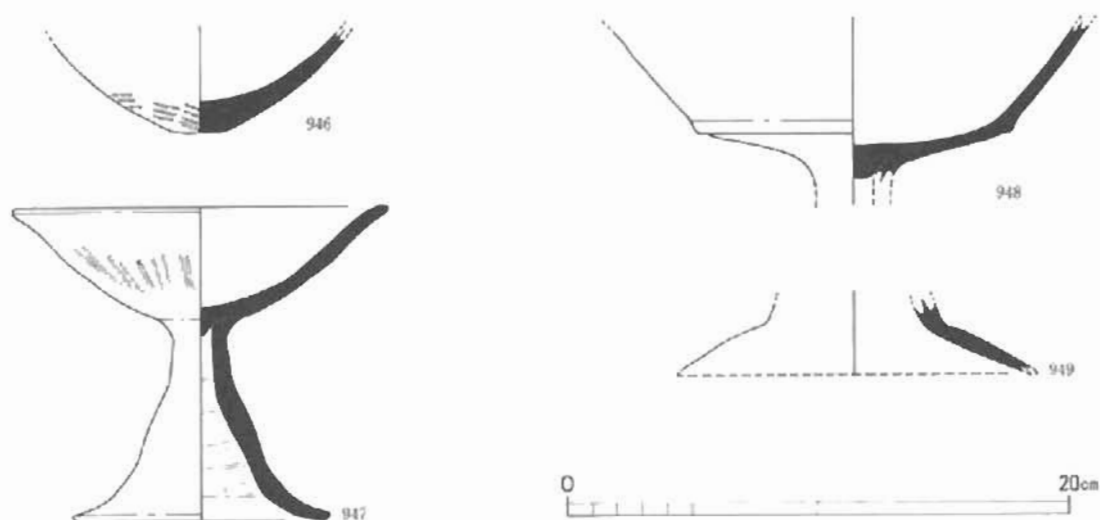
土塋1 南東辺に接する位置で検出された土塋である。南東辺は約2/3検出できたととまる。おそらく南東辺のはほぼ中間部にあたるものと推定される。本土塋は2段に掘り込まれているが、いずれも円形ないしそれに近い平面形を呈している。上段で径80cmを測り、下段で62cm×54cmの規模である。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは28cmである。

土塋2 本住居跡の北側コーナー部で検出された土塋である。平面形は、58cm×62cmとほぼ円形に近い形状である。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは23cmである。本土塋内底部から高坏1個体が出土している。

土塋3 本住居跡の西側コーナー部で検出された土塋である。平面形は、42cm×46cmとほぼ円形に近い形状で、土塋2をひとまわり小さくした規模である。遺物の出土は認められなかった。

出土遺物 土器のみが出土している。いずれも埋土中からの出土で、量的には多くはない。器種としては、甕と高坏が出土している。

なお甕については、図化できた底部片の他に、布留式の特徴を有する土器片が出土している。



第365図 SH57出土土器

時期 出土遺物から川除7期と考えられる。

第140表 SH57出土土器観察表

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
946	甕	口径 口径: 2.5 器高 横4.0 縦径: 体部高	外面: 3化/cmアタリ 内面: 磨滅のため調整不明	外面 淡赤褐色 内面 灰青	体部~底部 約1/2	
947	高杯	口径 14.61 口径 器高 12.4 脚柱径 4.21 杯部高 4.2	外面: 口縁部コウナテ、体部ハヤのもちへラ; ケキ。裾部コウナテ 内面: 口縁部コウナテ、体部ハヤのもちナテ、脚柱部横へラケズリ	外面: によい 赤褐色 内面 淡褐色	杯部1/4 以下は3/5	
948	高杯	口径 口径: 器高 横6.3 脚柱径 3.1 杯部高	外面: 磨滅のため調整不明 内面:	外面 灰白 内面 灰白	体部約1/4	
949	高杯	口径 口径: 器高 横2.8 脚柱径 杯部高	外面 裾部へラナテ 内面 裾部コウナテ	外面 灰白 内面: 灰白	脚柱部3/4	

SH58 (図版100・114)

検出状況 田区の北西部、小微高地bの西半部で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。

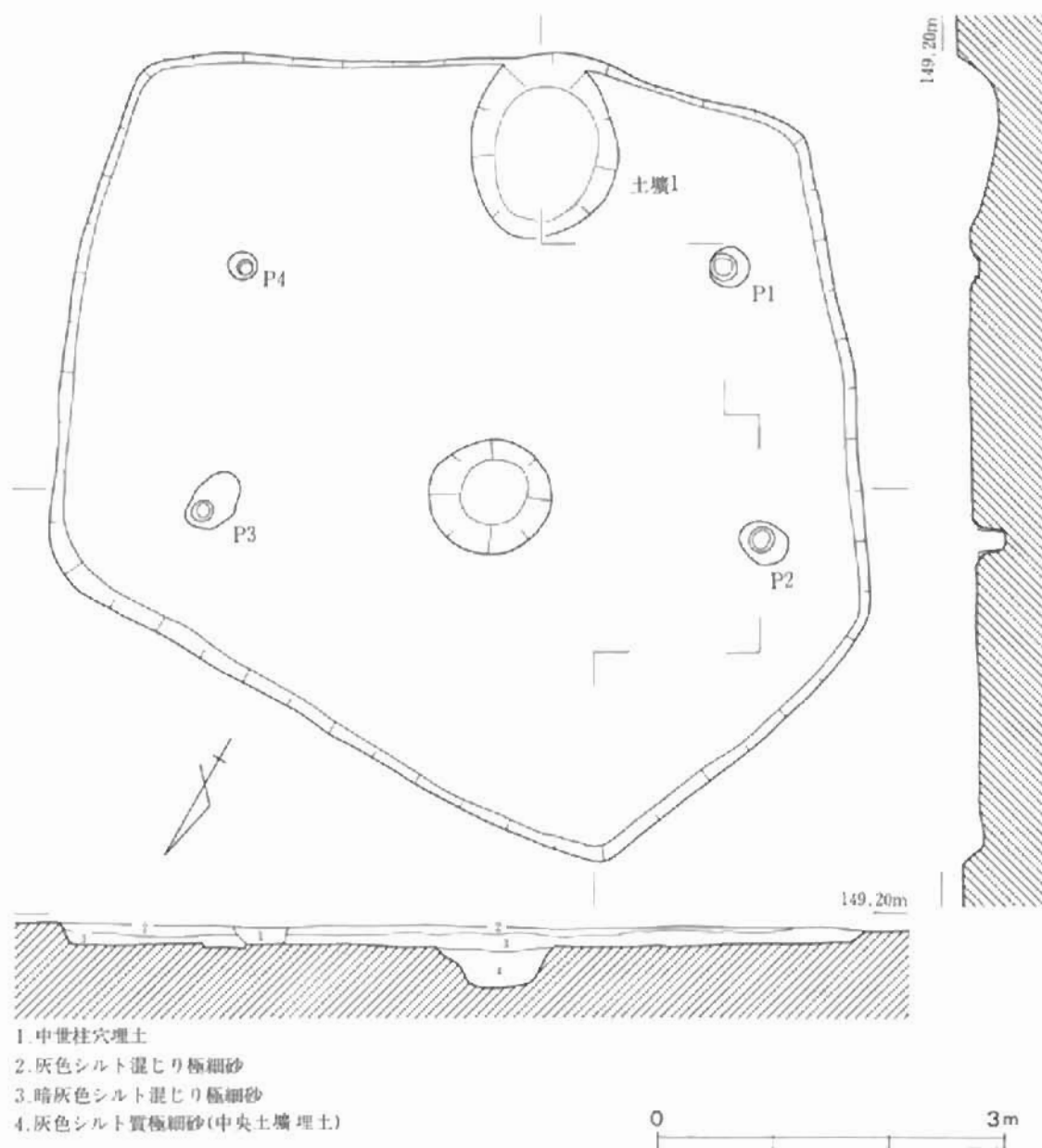
形状・規模 平面形は五角形であるが、各辺の長さは均一ではない。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.32m、4.20m、5.70m、4.10m、3.10mとなる。検出面から床面までの深さは18cm、床面の標高は148.90mである。床面積は36.0㎡である。

埋土 灰色ないしは暗灰色シルト混じり極細砂などの細粒の堆積物が認められる。中央土壌には灰色シルト質極細砂が堆積していた。

屋内施設 柱穴・中央土壌・土壌が検出された。

柱穴 主柱穴は4穴が確認された。4つの主柱穴を結ぶ範囲は、北辺がやや長くなる長方形を呈し、周壁の平面形と相似形の長方形を呈している。

P1は、掘り方の直径34cm、柱痕の直径23cm、床面からの深さは13cmである。P2は、掘り方の直径34cm、掘り方の直径21cm、床面からの深さは25cmである。P3は、掘り方の



第366図 SH58

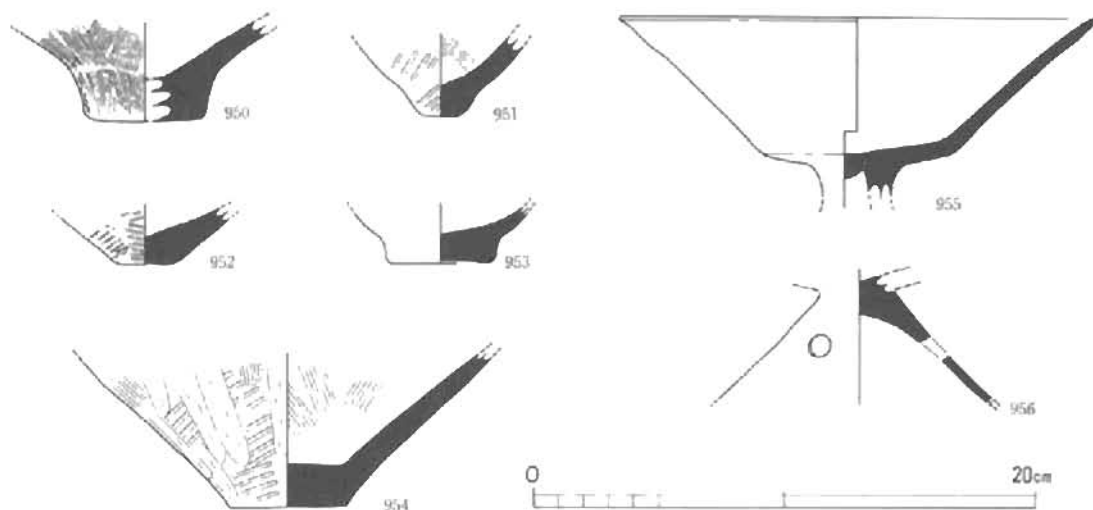
直径38cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは33cmである。P4は、掘り方の直径26cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは10cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間が2.35m、P2～P3間が4.82m、P3～P4間が2.14m、P4～P1間が4.10mとなっている。

中央土壙 床面中央やや北寄りに設けられた円形の土壙であり、その規模は長径105cm、短径100cm、床面から壙底までの深さは31cmを測る。中央土壙の面積は0.80㎡であり、対床面積比は2.2%である。中央土壙の底および土壙壁の焼土化は認められない。

土壙1 南辺やや西寄りの周壁際で円形の土壙が検出されている。規模は、中央土壙よりも大きく、短径130cm、長径152cm、深さ19cmを測る。土壙壁の焼土化は認められない。

出土遺物 壺・甕・高坏・器台などの土器が出土している。954は土壙1からの出土であり、他はいずれも埋土から出土したものである。



第367図 SH58出土土器

甕 V様式系のもののみであり、大小二種が存在する。大型の甕954の体部外面には、タタキのあと縦方向のヘラケズリが施されている。

高杯 杯部の長さに対する口縁部長の比率が高いものであり、杯部中央には粘土塊の上方からの充填が認められる。

時期 川除6期である。

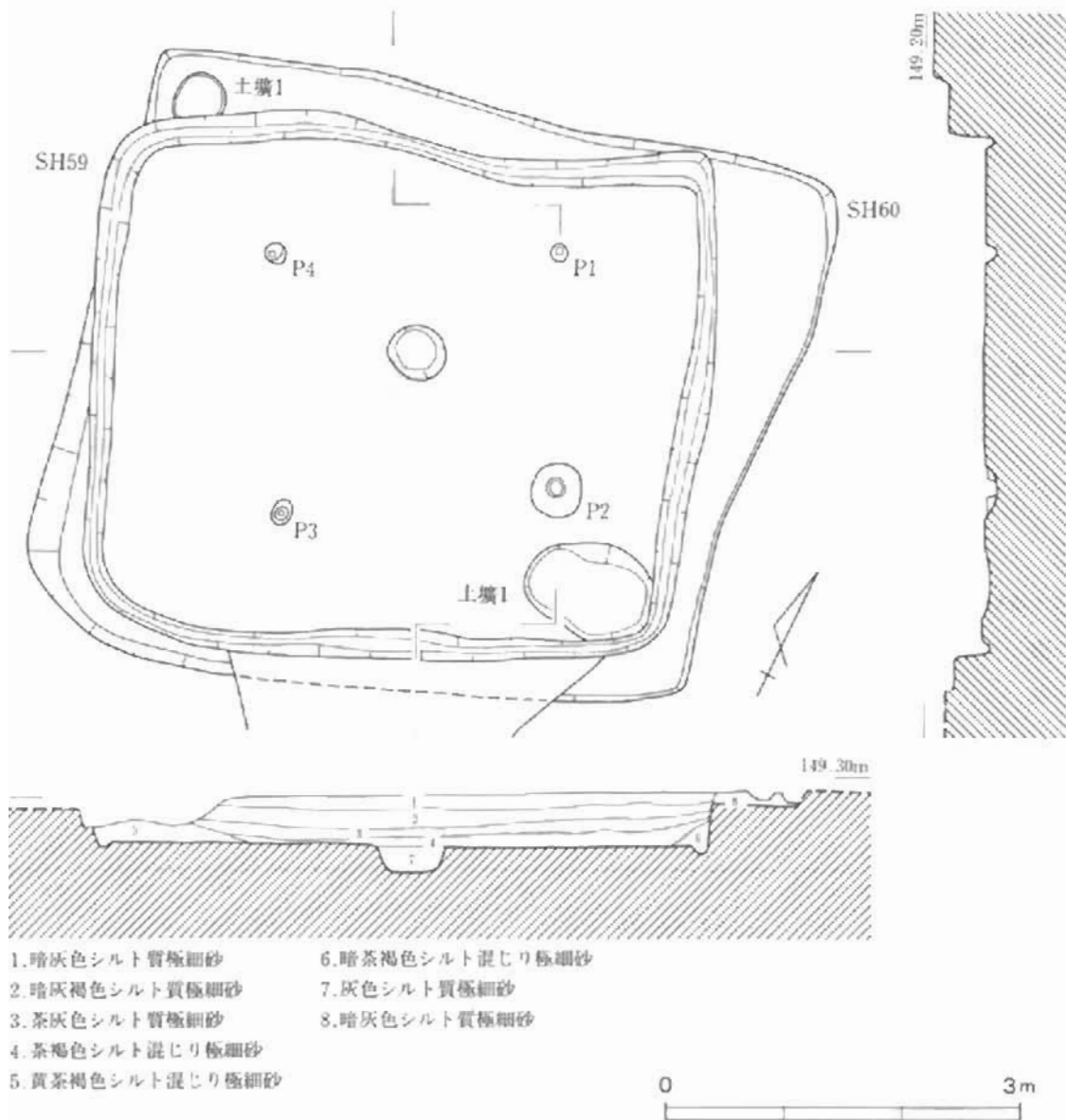
第141表 SH58出土土器観察表

番号	器種	口径・底径・器高・体部径 (cm)	調 整	色調	残存率	備考
950	甕	口径 14.4 底径 9.4 器高 4.3 体部径	外面 体部-底部10条/cmタタキ、底面木の葉痕 内面 ナア	外面 浅黄橙 内面 黄	底面1/2 体部6/10	
951	甕	口径 11.8 底径 7.7 器高 2.7 体部径	外面 体部-底部3条/cmタタキ 内面 体部-底部右ナア	外面 褐 内面 褐	底面完全 体部6/10	
952	甕	口径 11.2 底径 7.2 器高 2.2 体部径	外面 体部-底部1条/cmタタキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 濃い黄橙 内面 〃	底面完全 体部6/10	
953	甕	口径 14.0 底径 9.3 器高 2.3 体部径	外面 底面木の葉痕 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	底面完全 体部6/10	
954	甕	口径 14.6 底径 5.7 器高 5.7 体部径	外面 体部-底部2条/cmタタキ、のちタタキ、のち曲ヘラケズリ 内面 体部-底部ナア	外面 黒褐 内面 濃い黄橙	体部-底面約1/2	
955	高杯	口径 (19.0) 器高 7.1 杯口径 2.7 杯部径 5.8	外面 磨滅のため調整不明 内面	外面 淡橙 内面 濃い黄橙	杯部のみ約1/4	
956	器名	口径 〃 底径 5.0 器高 〃 体部径 〃	外面 3孔 内面 磨滅のため調整不明	外面 浅黄橙 内面 浅黄橙	杯部のみ	

SH59 (図版100・114)

検出状況 田区の北東部、小徹高地bの西縁で検出された。SH60を切っている。

形状・規模 平面形は、東西方向にやや長い長方形である。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.90m、4.10m、4.50m、3.80mとなる。検出面から床面までの深さは45cm、床面の標高は148.70mである。床面積は18.6㎡である。



第368図 SH59・60

埋土 暗灰色ないしは茶灰色シルト混じり極細砂などの細粒の堆積物が認められる。中央土壇には灰色シルト質極細砂が堆積していた。

屋内施設 周壁溝・柱穴・中央土壇・土壇が検出された。

周壁溝 周壁に沿って全周し、床面での幅は13cm、深さは5cm、底部での幅は6cmを測る。また、検出面からの深さは50cmである。

柱穴 主柱穴は4穴が確認された。4つの主柱穴を結ぶ範囲は正方形であり、周壁の平面形と異なる。

P1は、掘り方の直径15cm、床面からの深さは11cmである。P2は、掘り方の直径45cm、掘り方の直径16cm、床面からの深さは10cmである。P3は、掘り方の直径22cm、柱痕の直径10cm、床面からの深さは9cmである。P4は、掘り方の直径20cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは8cmである。

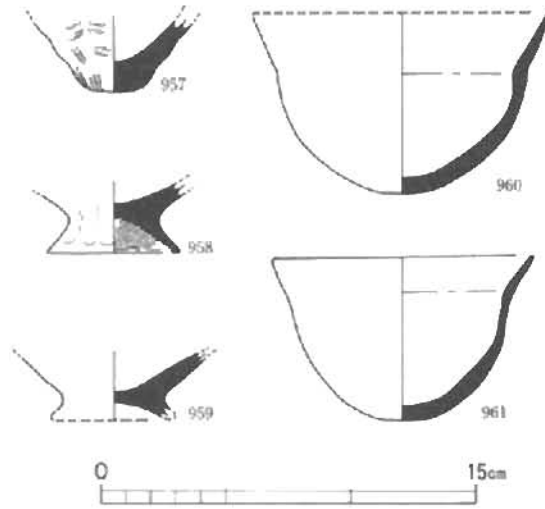
柱穴間の距離は、P1～P2間が2.00m、P2～P3間が2.32m、P3～P4間が2.16m、

第5節 山区の調査

P4～P1間が2.42mとなっている。

中央土壇 床面中央やや北寄りに設けられた円形の土壇であり、その規模は長径50cm、短径44cm、床面から壇底までの深さは18cmを測る。中央土壇の面積は0.17㎡であり、対床面積比は0.9%である。中央土壇の底および土壇壁の焼土化は認められない。

土壇1 東隅の周壁際で円形の土壇が検出されている。規模は、中央土壇よりも大きく、短径54cm、長径60cmを測る。深さは3cmと浅い。土壇壁には焼土化は認められない。



第369図 SH59出土土器

出土遺物 埋土より甕・鉢・小型丸底鉢などの土器が出土している。

甕 V様式系のものであり、底部はやや突出し、丸底化の傾向を示す。

鉢 台付きのものが2点確認された。

小型丸底鉢 体部高が口縁部高を大きく凌ぐものであり、形態の酷似した2点が出土している。

時期 川除7期である。

第142表 SH59出土土器観察表

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
957	甕	口径 底径 器高 残2.7 胴径 体部径	外面 体部-底部4並/cmクマキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 灰黄褐色 内面 白	底部迄有 体部わずか	
958	鉢	口径 底径 : 5.3 器高 残2.8 胴径 : 3.6 体部径	外面 脚縁台部取ヘラナナ 内面 体部ハケ、脚底10並/cmハケ	外面 白 赤褐色 内面 黄灰	脚部1/2定 存	
959	鉢	口径 底径 : 器高 残2.5 胴径 4.0 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 灰黄褐色 内面 灰黄褐色	脚部約1/2	
960	鉢	口径 : 11.0 底径 器高 残7.0 胴径 10.0 体部径	外面 口縁部ヨコナナ、体部不定方向ナナ 内面 口縁部ヨコナナ	外面 白 内面 白	口縁部欠 約4/5	小型丸底鉢
961	鉢	口径 : 10.3 底径 : 1.9 器高 : 6.5 胴径 : 8.7 体部径 :	外面 体部下半部分的にヘラナナのこる 内面 磨滅のため調整不明	外面 黄褐色 内面 浅黄褐色	口縁部2/4 体部完存	小型丸底鉢

SH60 (図版100)

検出状況 山区の北東部、小微高地bの西縁で検出された。主軸方向の異なるSH59に切られている。

形状・規模 平面形は、東西方向にやや長い長方形である。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.78m、4.36m、5.68m、4.20mとなる。検出面から床面までの深さは10cm、床面の標高は149.08mである。床面積は28.3㎡に復元できる。

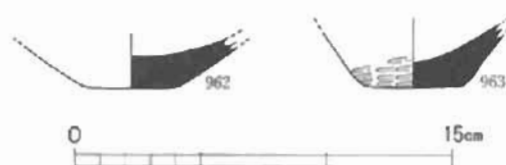
埋土 暗灰色シルト質極細砂が認められる。

屋内施設 SH59に切られているため、柱穴・中央土壇は検出されなかった。周壁際で土壇が1基確認された。周壁溝は存在しない。

土壌 1 北西隅の周壁際で円形の土壌が検出されている。規模は、短径41cm、長径44cm、深さは4cmと浅い。土壌壁には焼土化は認められない。

出土遺物 埋土より壺・甕などの土器の小片が少量出土している。甕はV様式系のものに限定される。

時期 川除5期である。



第370図 SH60出土土器

第143表 SH60出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
962	壺	口径 底径 13.8 器高 残2.0 胴径 体部径	外面: 磨滅のため調整不明 内面	外面 灰 内面 灰	底部約1/3	
963	壺	口径 底径 3.9 器高 残2.6 胴径 体部径	外面 底部に一部アタキ残る 内面 ナデ	外面 橙 内面 褐色	底部約1/2	

SH61 (図版101・114)

検出状況 III区北東部に位置し、小磯高地b南西端に立地する。SH62・SH63とはほぼ重複して検出された住居跡である。SH62を切り、3棟の住居跡のなかで最も新しい住居跡である。

形状・規模 平面形は隅円方形であるが、若干の歪みが認められる。北辺で3.80m、東辺で3.60m、南辺で4.00m、西辺で3.70mを測る。検出面からの深さは18cmを測り、床面における標高は148.80mである。検出した床面積は14.50㎡である。

埋土 暗灰色砂質シルト層が堆積していた。特に下層では炭片が多く認められた。

屋内施設 周壁溝・柱穴・土壌を検出した。

周壁溝 はほぼ全周しているが、北東側コーナーでは途切れている。床面における幅は8～10cmを測り、床面からの深さは6cmである。また底部での幅は2～4cmである。

柱穴 主柱穴を4穴検出した。

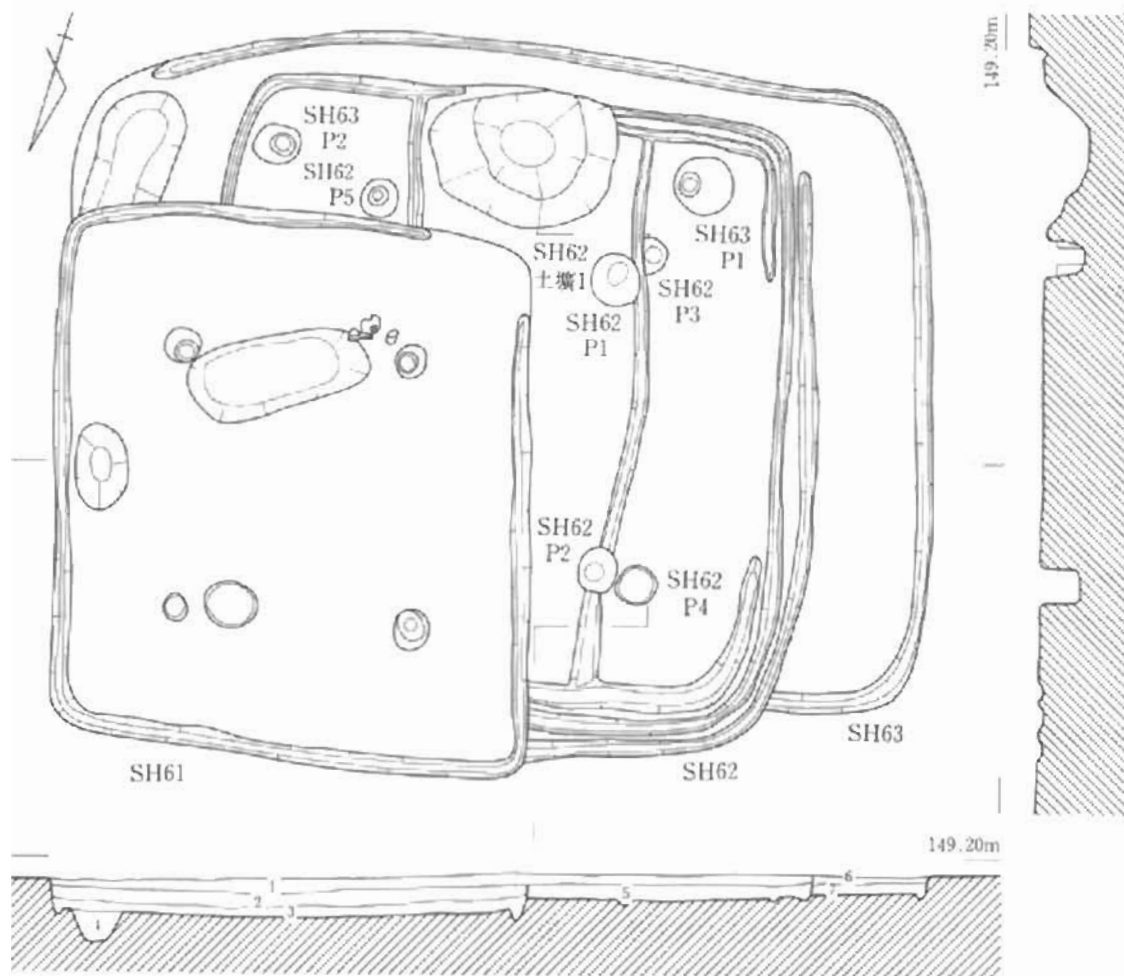
P1は、掘り方の径28cm、柱痕の径は18cm、床面からの深さ85cmを測る。P2は、掘り方の径25cm、柱痕の径15cm、床面からの深さ67cmを測る。P3は、掘り方の径32cm、柱痕の径22cm、床面からの深さ71cmである。P4は、掘り方の径23cm、柱痕の径15cm、床面からの深さ90cmを測る。

土壌 2基検出した。

土壌 1 西辺のほぼ中間部、周壁溝にはほぼ接するようにして検出された土壌である。長軸で68cm、短軸で40cmを測る楕円形を呈し、主軸方向は本住居跡の主軸方向とはほぼ一致している。横断面は逆台形に近いU字形を呈し、床面からの深さは土壌中央部で28cmを測る。

土壌 2 P1とP2を結ぶライン上に位置する。平面形は隅円長方形を呈するが、全体的に歪んでいる。長軸方向で143cm、その直交方向で60cmを測る。横断面は逆台形を呈し、土壌中央部における床面からの深さは33cmを測る。当土壌の埋土中からは、炭化材の小片が多く出土している。

出土遺物 埋土中から土器のみが出土している。器種としては壺・甕・高坏が出土しているが、図



- 1. 灰色砂質シルト
- 2. 暗灰色砂質シルト (SH61埋土)
- 3. 暗灰色砂質シルト (炭多く含む, SH61埋土)
- 4. 暗灰色シルト質極細砂 (SH61・土壌1埋土)
- 5. 灰色砂質シルト (SH62埋土)
- 6. 黄灰色砂質シルト (SH63埋土)
- 7. 暗黄灰色砂質混じりシルト (SH63埋土)

第371図 SH61・62・63

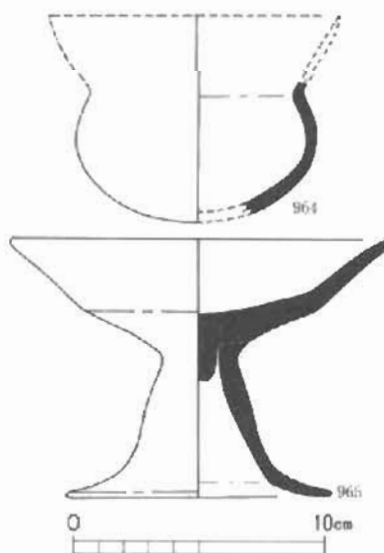
化できたのは高坏と小型丸底壺の2点のみである。

壺 図化できた小型丸底壺1点が出土している。口縁部と底部を欠くため全体の形態を復元できないが、体部最大径は口径よりも小さいものと推定される。

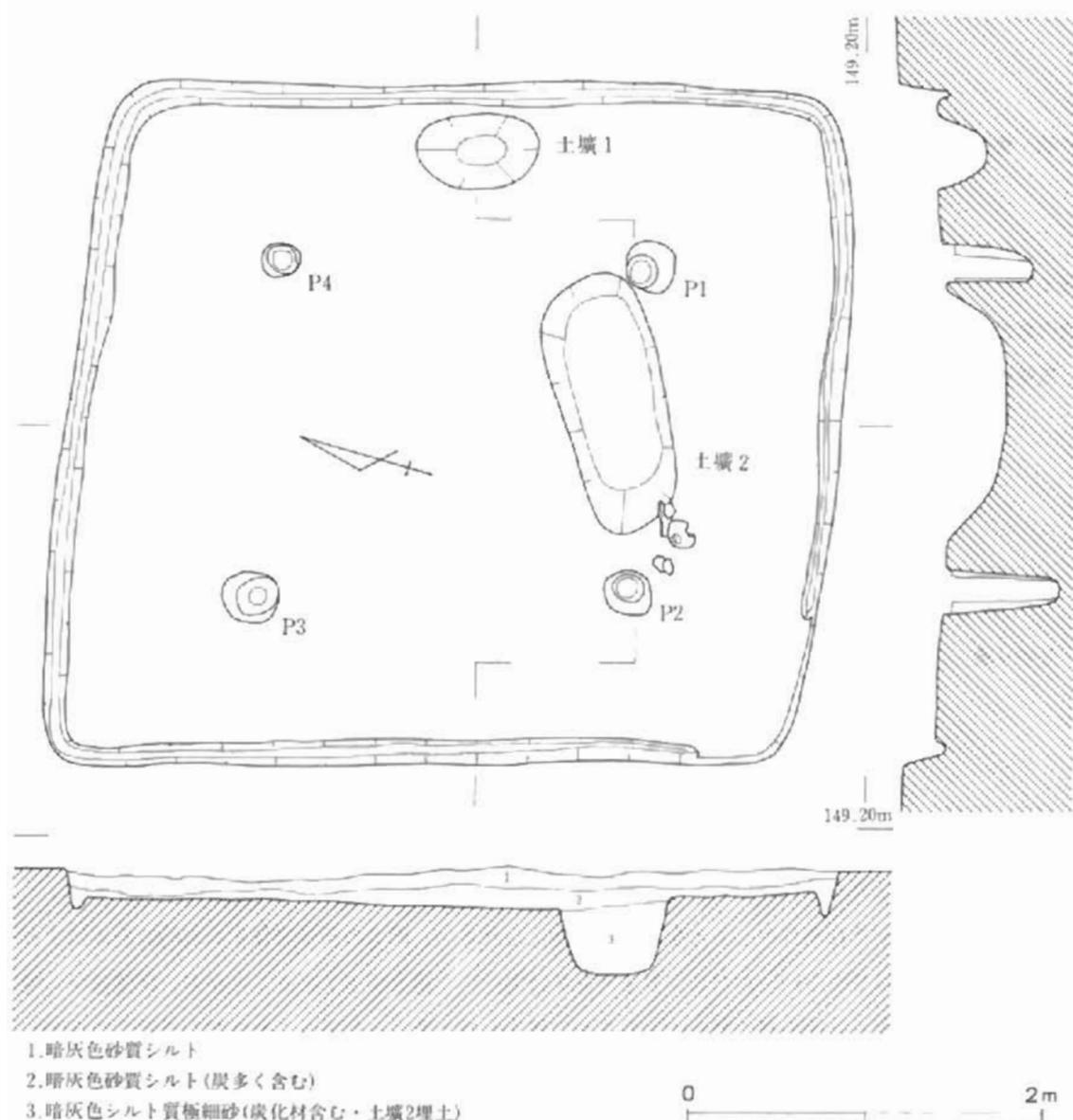
高坏 図化した土器の他に脚部片が3個体分出土している。

甕 V様式系甕の体部・底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期 出土土器およびSH62との切り合い関係より川除7期と考えられる。



第372図 SH61出土土器



第373図 SH61

第144表 SH61出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
964	釜	口径 11.5 底径 9.5 器高 14.5 胴径 18.5 体部径 19.6	外面 磨減のため調整不明 内面	外面 1:2:1 黄褐色 内面 暗赤灰	体部約1/2 口縁部欠	小型丸底赤
965	高杯	口径 11.9 底径 10.6 器高 10.3 胴径 杯部高 4.2	外面 口縁部-体部トキヨコナテ、体部トキナテ、脚部トキナテ 内面 口縁部-体部トキヨコナテ、体部トキナテ、脚部トキナテ、脚部トキナテ、脚部トキナテ、脚部トキナテ	外面 1:2:1 暗褐色 内面 暗	口縁部は定 存 脚部部 約1/2	

SH62 (図版101・115)

検出状況 Ⅲ区北東部に位置し、小微高地b南西端に立地する。SH61・SH63とはほぼ重複して検出された住居跡である。SH61のプランを確認した段階では本住居跡を認識することができず、埋土を一段下げた段階で確認できた住居跡である。したがって、SH61がある程度埋まってから本住居跡が掘り込まれ、廃絶した後、SH61とともに完全に埋もれたものと

考えられる。

S H63を切り、S H62に切られている。特にS H62に切られているため、検出できたのは全体の約1/2強である。

形状・規模 平面形は隅円方形であるが、南辺で4.15m、西辺で4.60mを測り、長方形を指向している。検出面からの深さは20cmを測り、床面における標高は148.88mである。推定される床面積は約20.8㎡である。

埋土 本住居跡に伴う埋土として確認できたのは灰色砂質シルト層1層のみである。

屋内施設 周壁溝・仕切り溝・柱穴・土塙を検出した。

周壁溝 S H62に切られている箇所以外は全周している。ただし、西辺を中心に南辺の西半分と北辺の検出した範囲においては、周壁溝が2重あるいは3重にめぐって検出された。内側の周壁溝は西辺中央部で、外側の周壁溝は南辺で途切れている。住居の建て替えにともなうものと考えられる。

これらの周壁溝はほぼ同規模で、床面における幅は10cm、床面からの深さは5cmを測る。また底部における幅は5cmである。

仕切り溝 南北方向に走る2本の溝である。南辺のほぼ中央部に位置する土塙1を中心に挟み、床面を3分割するように掘り込まれている。間仕切り用の溝と考えられる。ただし、これら2本の溝の両側にベッドがあり、その土止め用の溝と考えることも可能である。

溝の規模は周壁溝とほぼ同規模で、床面における幅は10cm、床面からの深さは3cmを測る。

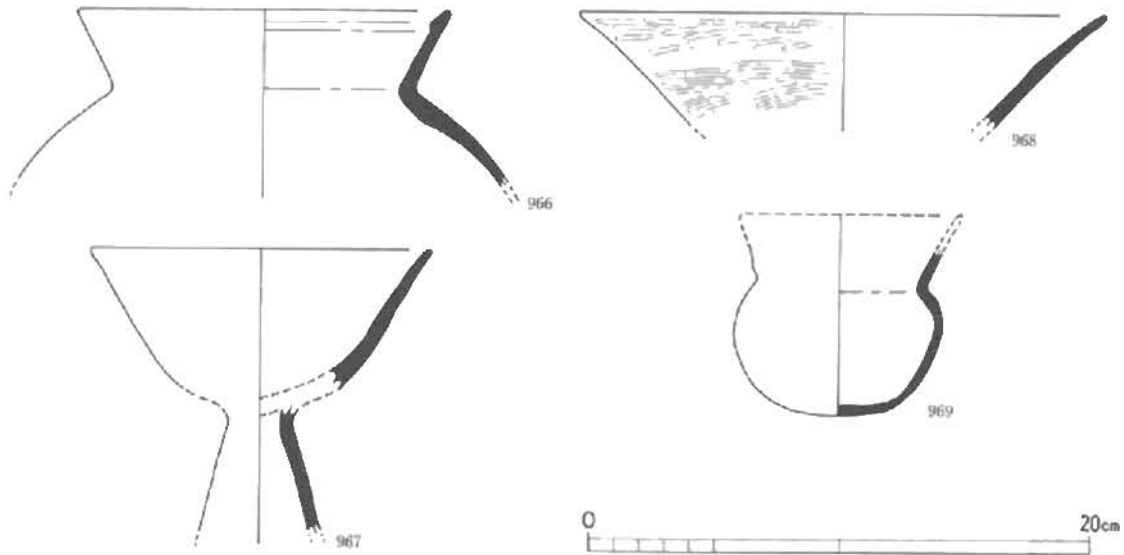
柱穴 主柱穴を5穴検出したが、建て替えに伴う2時期のものからなる。P1・P2とP3～P5がそれぞれセットとなるものと考えられるが、両者の前後関係を直接的に明確にすることはできない。ただし、P1・P2は間仕切り溝を切っていることから、周壁溝から確認できる2回の建て替えのどちらかに伴うものと考えられる。これに対してP3からP5は、P4が間仕切り溝に切られていることから、間仕切り溝が掘られる前の時期のものと考えることができる。以上のことから、本住居跡は、間仕切り溝がなくP3からP5のみの段階、間仕切り溝が存在する段階、P1・P2が掘り直された段階と建て替えられていったものと考えられる。

P1は、掘り方の径は41cm、床面からの深さは26cmを測る。P2は、掘り方の径は36cm、床面からの深さは59cmである。いずれも柱痕を確認することはできなかった。P1～P2間の距離は2.38mである。

P3～P5については、P5のみで柱痕を検出することができた。P3の掘り方の径は29cm、床面からの深さは28cmを測る。P4は、掘り方の径30cm、床面からの深さ3cmである。P5は、掘り方の径31cm、柱痕の径17cm、床面からの深さ20cmである。P4～P3間の距離は2.62m、P5～P3間の距離は2.26mである。

土塙 南辺のほぼ中央部、周壁に接する位置で検出された土塙である。平面形はやや不整形な楕円形を呈している。主軸方向は住居跡の主軸とほぼ一致しており、長軸方向で148cm、その直交方向で108cmを測る。

本土塙は2段にわたって掘り込まれており、横断面は逆台形を呈する。土塙中央部に



第374図 SH62出土土器

ける床面からの深さは34cmを測る。

出土遺物 土器のみが出土している。一部の土器を除いては埋土中からの出土である。器種としては、甕・高環・小型丸底壺が出土している。

甕 図化できたのは、布留式の特徴をもつ1点のみである。この他に、V様式系甕の体部・底部片が出土している。

高環 図化した坏部片2点以外に、脚部片が2个体分出土している。図化した坏部は、いずれも受部に対する口縁部の比率が高く、新しい傾向を示すものである。

壺 図化できたのは小型丸底壺の1個体のみである。口縁部を欠くが、頸部以下は比較的よく残存している。体部は全体的に垂である。

時期 出土土器とSH61・SH63との切り合い関係から、川除7期と考えられる。

第145表 SH62出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
966	甕	口径 (14.6) 口径: 器高 残7.0 脚径 (12.2) 体部径	外面 口縁部ヨコナデ、以下は磨滅のため調整不明 内面 口縁部ヨコナデ、以下は磨滅のため調整不明	外面 橙 内面 橙	口縁部-体部約1/3	
967	高環	口径 (13.4) 口径: 器高 残10.6 脚径 2.6 坏部高	外面 口縁部ヨコナデ、体部わずかにハヤ 内面 口縁部ヨコナデ、以下は磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	坏部約1/4 脚柱部1/2	
968	高環	口径 (21.0) 口径: 器高 残4.5 脚径 坏部高	外面 体部6.5cmヨコナデ、のみ口縁部横ヘラミガキ 内面 磨滅のため調整不明	外面 浅黄橙 内面 橙	坏部約1/3	
969	壺	口径 口径: 器高 残6.9 脚径 6.8 体部径 8.3	外面 全体に施名ハラナデ 内面 ヌビナデ	外面 灰白 内面 淡黄	口縁部欠約1/2	小型丸底壺

SH63 (図版101)

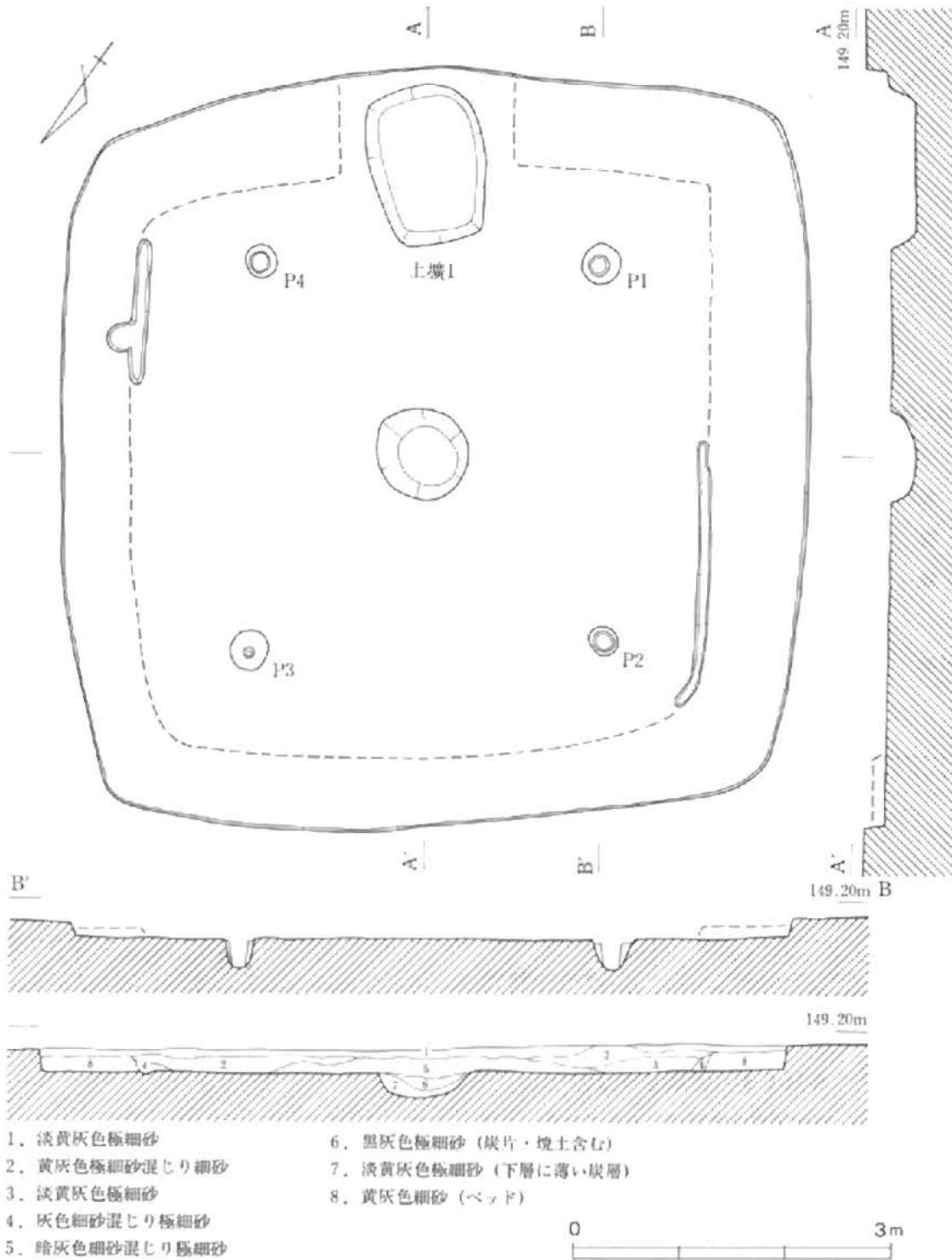
検出状況 Ⅲ区の北東部、小高高地bの南西端に立地している。SH61・SH62とはほぼ重複して検出されたが、向住居跡に切られているため、検出できたのは南辺・西辺と東辺の一部である。

第5節 Ⅲ区の調査

- 形状・規模** 平面形は隅円方形と推定される。南辺で6.10m、西辺で4.80mを測り、長方形を指向している。検出面からの深さは14cmを測り、床面における標高は148.92mである。推定される床面積は約31.8㎡である。
- 埋土** 本住居跡に伴う埋土を確認できたのはごくわずかであるが、上から黄灰色砂質シルト層、暗黄灰色砂混じりシルト層が堆積していた。
- 屋内施設** 周壁溝と柱穴を検出した。
- 周壁溝** 東辺で途切れているが、南辺と西辺においては全周している。床面における幅は8cmを測り、床面からの深さは4cmである。また底部における幅は4cmである。
- 柱穴** P1とP2の2穴を検出した。P1は、掘り方の径は48cm、柱痕の径は16cm、床面からの深さは38cmを測る。P2は、掘り方の径38cm、柱痕の径20cm、床面からの深さ29cmを測る。P1とP2の距離は3.25mである。
- 出土遺物** 埋土中から土器片数片が出土したが、器種を特定できるものはなかった。
- 時期** SH61・SH62との切り合い関係から、川除7期と考えられる。

SH64（図版102）

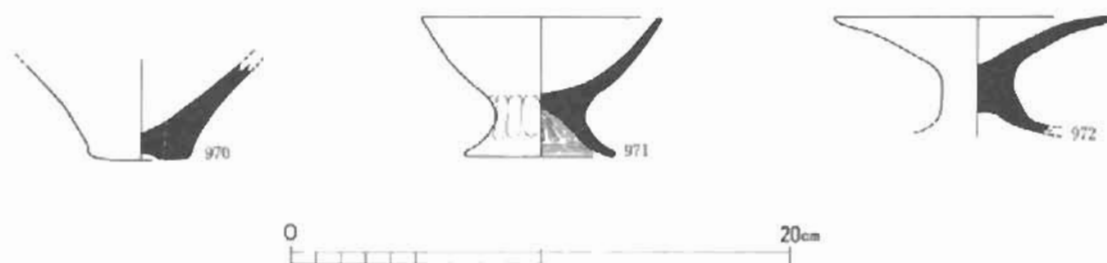
- 検出状況** Ⅲ区の北東部に存在している。
- 形状・規模** 平面形は基本的に隅円の長方形を呈している。規模は南東辺が6.30m、南西辺が6.10m、北西辺が6.05m、北東辺が6.00mである。各辺ともに直線的とはいえずどちらかといえばやや内湾ぎみに伸びている。床面までの深さは約20cmで、床面の標高は148.78mである。検出した床面積は45.26㎡である。
- 埋土** 埋土は中央土壌の部分を除いて5層にわたって堆積している。上層から淡黄灰色極細砂、黄灰色極細砂混じり細砂、淡黄灰色極細砂、灰色細砂混じり極細砂、暗灰色細砂混じり極細砂の順に堆積している。
- 屋内施設** ベッド・柱穴・中央土壌・土壌を検出した。
- ベッド** 平面的な調査ではベッドの部分の部分を削平してしまっており、ベッド自体は平面的に検出していない。断面においてベッドの痕跡を認めた。ベッドは地山の削り出しで整形されているものではなく、黄灰色の細砂を積んで造られている。住居跡の壁から約90cm内側に溝が一部検出されている。これはベッドと床面とを区画する溝と考えられる。以上のことからベッドの規模を推定すれば、幅0.6～0.9m、床面との比高16cmとなる。面積は約15.5㎡、対床面積比は34.3%となる。
- 柱穴** 4穴検出している。
- P1は、掘り方径38cm、柱痕径20cmを測り床面からの深さは30cmである。P2は、掘り方径27cm、柱痕径19cmを測り、床面からの深さは25cmである。P3は、掘り方径30cm、柱痕径10cmを測り、床面からの深さは29cmである。P4は、掘り方径31cm、柱痕径19cmを測り、床面からの深さは27cmである。柱穴の深さは25～30cmとほぼ均等である。
- 柱間距離はP1～P2間が3.50m、P2～P3間が3.32m、P3～P4間が3.64m、P4～P1間が3.20mである。柱間距離はP1～P2間、P3～P4間が長く、P2～P3間、P4～P1間が短い長方形を呈している。



第375図 SH64

中央土壌 住居跡のほぼ中央部の柱穴どうしを結んだ対角線の交差上に中央土壌が検出された。平面形はやや楕円形を呈している。埋土は2層で、上層に炭片・焼土を含む黒灰色極細砂、下層に淡黄灰色の下部に薄い炭層が広がる極細砂が堆積している。規模は長軸方向に0.90m、短軸方向に0.85mを測り、床面からの深さは0.25mである。面積は0.60㎡で、対床面積比は1.3%である。

土壌1 住居跡の南東壁際で土壌を検出している。平面形は隅円の長方形を指向しており、規模



第376図 SH64出土土器

は長軸方向に144cm、短軸方向に110cmを測り、床面からの深さは25cmである。ベッドはこの部分で切れていたものと思われる。この土壌は検出した位置などから貯蔵穴と考えている。

出土遺物 土器のみが出土している。壺・甕・鉢・高杯の各器種が出土している。このうち図化できたものは3点である。

壺 図化していないが口縁部が出土している。

甕 V様式系のものが出土している。

鉢 2点図化している。いずれも台付であるが、坏部が深く内湾ぎみに口縁部がのびるものと坏部が浅く口縁部が大きく開くものがある。

時期 川除6期である。

第146表 SH64出土土器観察表

番号	器種	度量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
970	壺	口径 口径 (4.0) 器高 残3.9 頸径 体部径	外面 } 磨滅のため調整不明 内面	外面 黒褐色 内面 淡黄	底部約1/2 体部約1/6	
971	鉢	口径 9.71 口径 6.2 器高 5.6 頸径 体部径	外面 体部下位接合部ハビオサス、他は磨滅のため調整不明 内面 脚部ハマ、他は磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	体部4/5 以下は1/4	
972	鉢	口径 11.11 口径 器高 残4.6 頸径 体部径	外面 } 磨滅のため調整不明 内面	外面 におい 黄褐色 内面 灰白	約3/4	

SH65 (図版102)

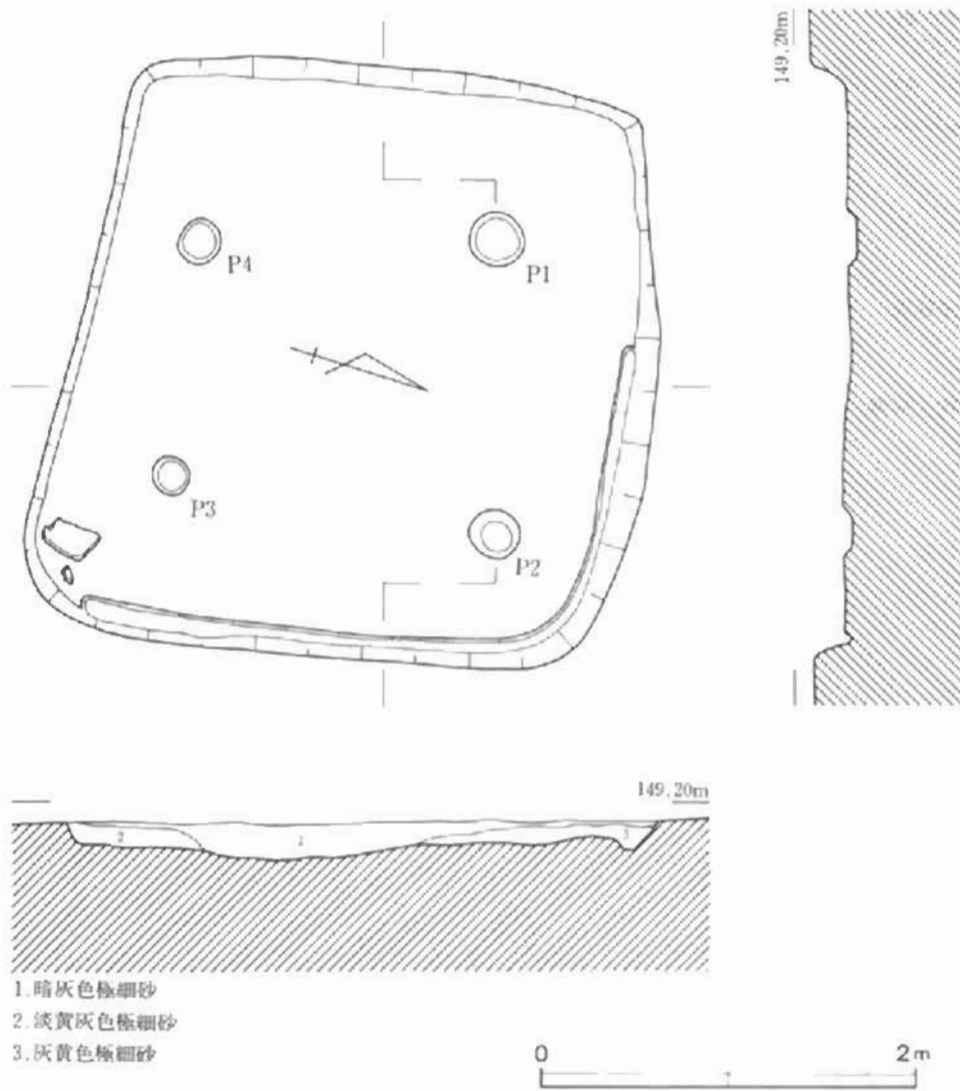
検出状況 III区の北東部に存在している。

形状・規模 平面形は基本的に隅円の長方形を指向しているがいびつな形状をしている。規模は西辺が2.65m、北辺が2.84m、東辺が2.72m、南辺が2.70mである。各辺ともに直線的とはいえない。東辺と西辺は直線的であるが北辺は内湾ぎみ、南辺は外反ぎみである。床面までの深さは約15cmで、床面の標高は149.00mである。検出した床面積は8.01㎡である。

埋土 埋土は3層にわたって堆積している。上層が暗灰色極細砂、中層が淡黄灰色極細砂、下層が灰黄色極細砂と分層される。

屋内施設 周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝 北辺の一部と東辺において周壁溝を検出している。規模は床面でのレベルでの幅10~12cmを測り、このレベルからの深さは5cmで、底部の幅は6cmである。また検出面からの深さは16cmである。



第377図 SH65

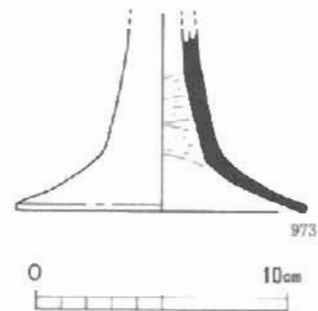
柱穴 4穴検出している。P1は、掘り方径30cm、床面からの深さは6cmである。P2は、掘り方径27cm、床面からの深さは5cmである。P3は、掘り方径20cm、床面からの深さは6cmである。P4は、掘り方径23cm、床面からの深さは7cmである。柱穴の深さは5～7cmと非常に浅い。柱間距離はP1～P2間が1.56m、P2～P3間が1.75m、P3～P4間が1.25m、P4～P1間が1.60mである。

出土遺物 土器のみが出土している。甕・高坏が出土している。このうち図化できたものは1点である。

甕 図化していないが細筋のタタキをもついわゆるV様式系のもので出土している。

高坏 脚部の1点を図化している。脚柱部からやや屈曲ぎみに開く裾部をもっている。外面は磨減のため調整が不明であるが、内面には横方向のヘラケズリがみられる。

時期 川除7期である。



第378図 SH65出土土器

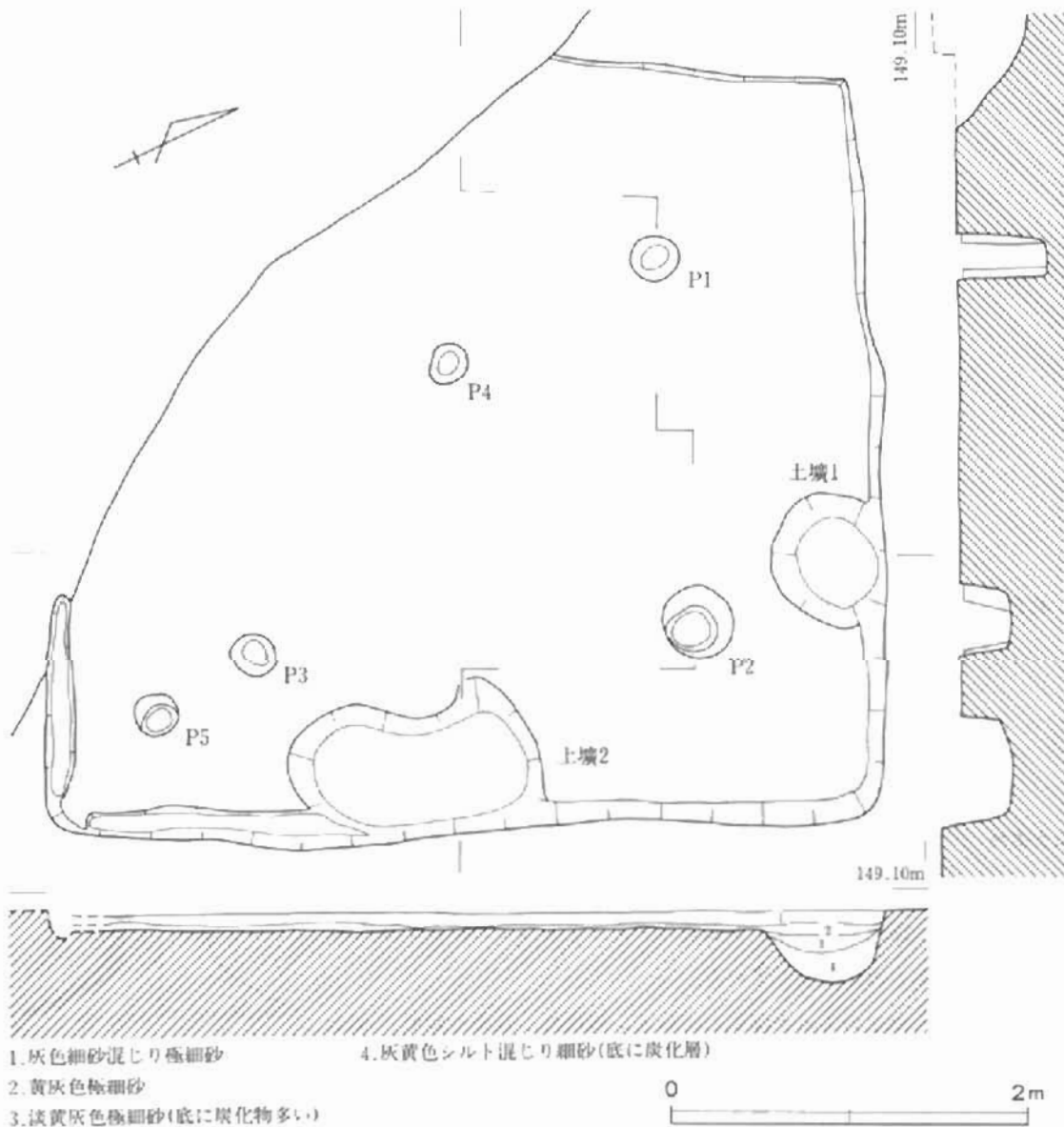
第147表 SH65出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
973	高杯	口径: 底径 (11.5) 器高 47.3 脚径 杯部径	外面 磨滅のため調整不明 内面 脚柱部細ヘケツズリ	外面 淡黄橙 内面 淡黄橙	脚部の1/2	

SH66 (図版102)

検出状況 Ⅲ区の北東部に存在している。住居跡の南西部をSD83に切られている。そのため北西辺と南西辺が一部削平されている。

形状・規模 平面形は基本的に長方形を呈している。規模は北西辺が一部のみ検出で1.70m、北東辺が4.08m、南東辺が4.55m、南西辺が一部のみ検出で1.30mである。各辺ともに直線的な平面形を呈している。基本的に北東辺、南西辺が短く、北西辺、南東辺が長い長方形を呈



第379図 SH66

する。床面までの深さは約9cmで、床面の標高は148.78mである。検出した床面積は14.07㎡である。削平されている面積を考慮した全体の床面積は推定で18㎡程度であったと考えられる。

埋土 土壌の部分を除いて2層にわたって堆積している。上層が灰色細砂混じり極細砂、下層が黄灰色極細砂である。

屋内施設 柱穴・土塙を検出した。

柱穴 5穴検出している。そのうち支柱穴を構成しているものは3穴である。P1は、掘り方径23cm、床面からの深さは51cmである。P2は、掘り方径40cm、柱底径25cmを測り床面からの深さは28cmである。P3は、掘り方径24cm、床面からの深さは36cmである。柱間距離はP1～P2間が2.08m、P2～P3間が2.48mである。柱穴の配置も住居跡の平面形と同様に長方形を呈していると思われる。

土塙 住居跡の南東壁際と北東壁際に土塙を検出している。このうち南東部のものは平面形が不整形を呈している。規模は長軸方向に140cm、短軸方向に66cmを測る。床面からの深さは28cmである。北東部のものは平面形が楕円形を呈している。規模は長軸方向に76cm、短軸方向に68cmを測る。床面からの深さは30cmである。埋土は2層堆積している。上層は底部に炭化物が多く混じる淡黄灰色極細砂、下層には底に炭化層の広がる灰黄色シルト混じり細砂が堆積している。

出土遺物 土器と石器が出土している。このうち図化できたものは1点である。

土器 壺・甕・高坏が出土しているが、小片のため図化していない。

石器 1点図化している。

S73は楔形石器である。長さは4.55cm、幅は最大で1.70cm、厚さは1.10cmである。片面にのみ打撃による剥離痕が顕著である。角度は急角度である。サヌカイト。



第380図 SH66出土石器

時期 川除7期である。

SH67 (図版102)

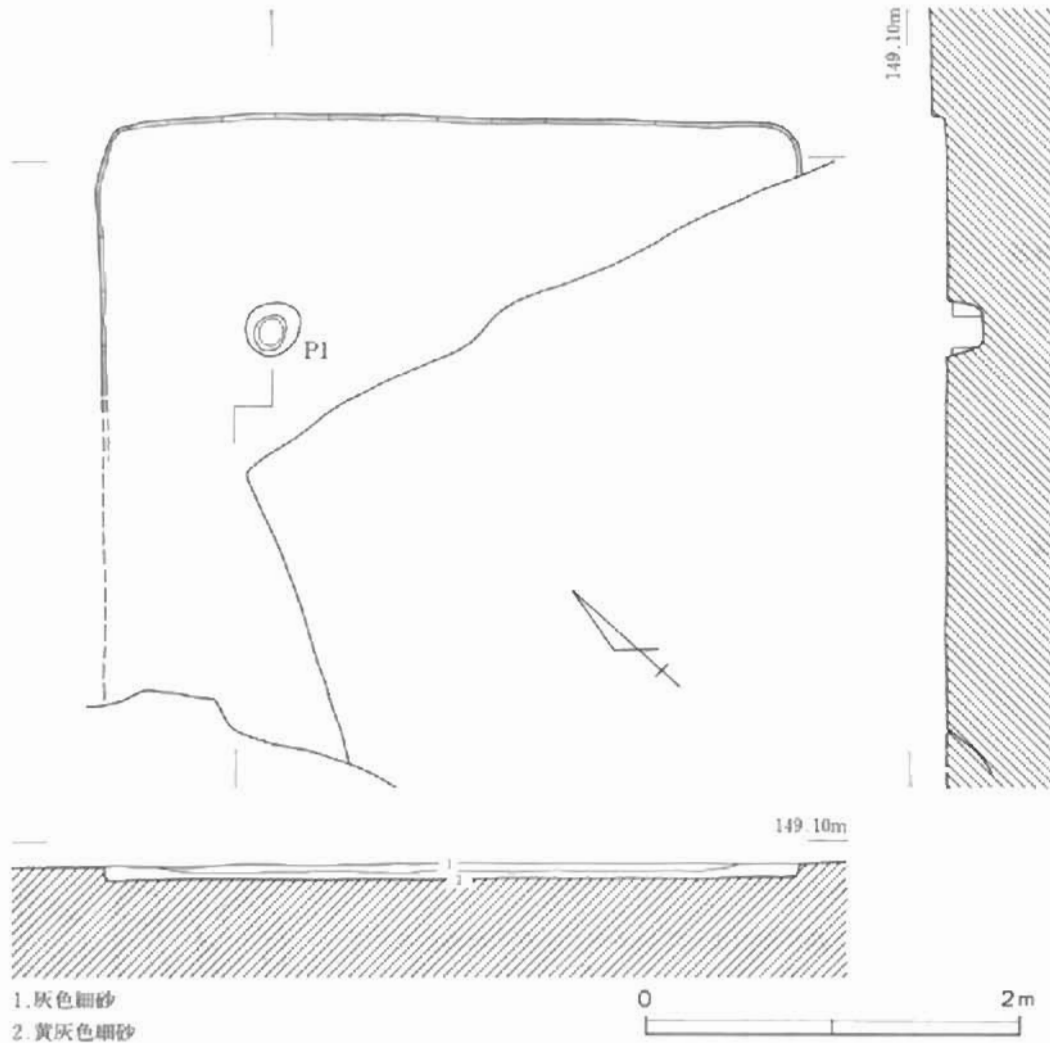
検出状況 Ⅲ区の北東部に存在している。住居跡の大半をSD83とSH66に切られている。そのため北東辺は検出できたものの、北西辺、南東辺はごく一部分のみしか検出できず、残りの一辺については全く検出できなかった。

形状・規模 平面形は基本的に長方形を呈している。規模は北東辺が3.65m、南東辺がごく一部の検出で0.30m、北西辺が一部の検出で1.45mである。床面までの深さは約8cmで、床面の標高は148.90mである。

埋土 2層にわたって堆積している。上層が灰色細砂、下層が黄灰色細砂である。

屋内施設 柱穴を検出した。

柱穴 1穴のみ検出している。掘り方径27cm、柱底径17cmを測り、床面からの深さは17cmである。他の柱穴は切り合いのためか検出することはできなかった。

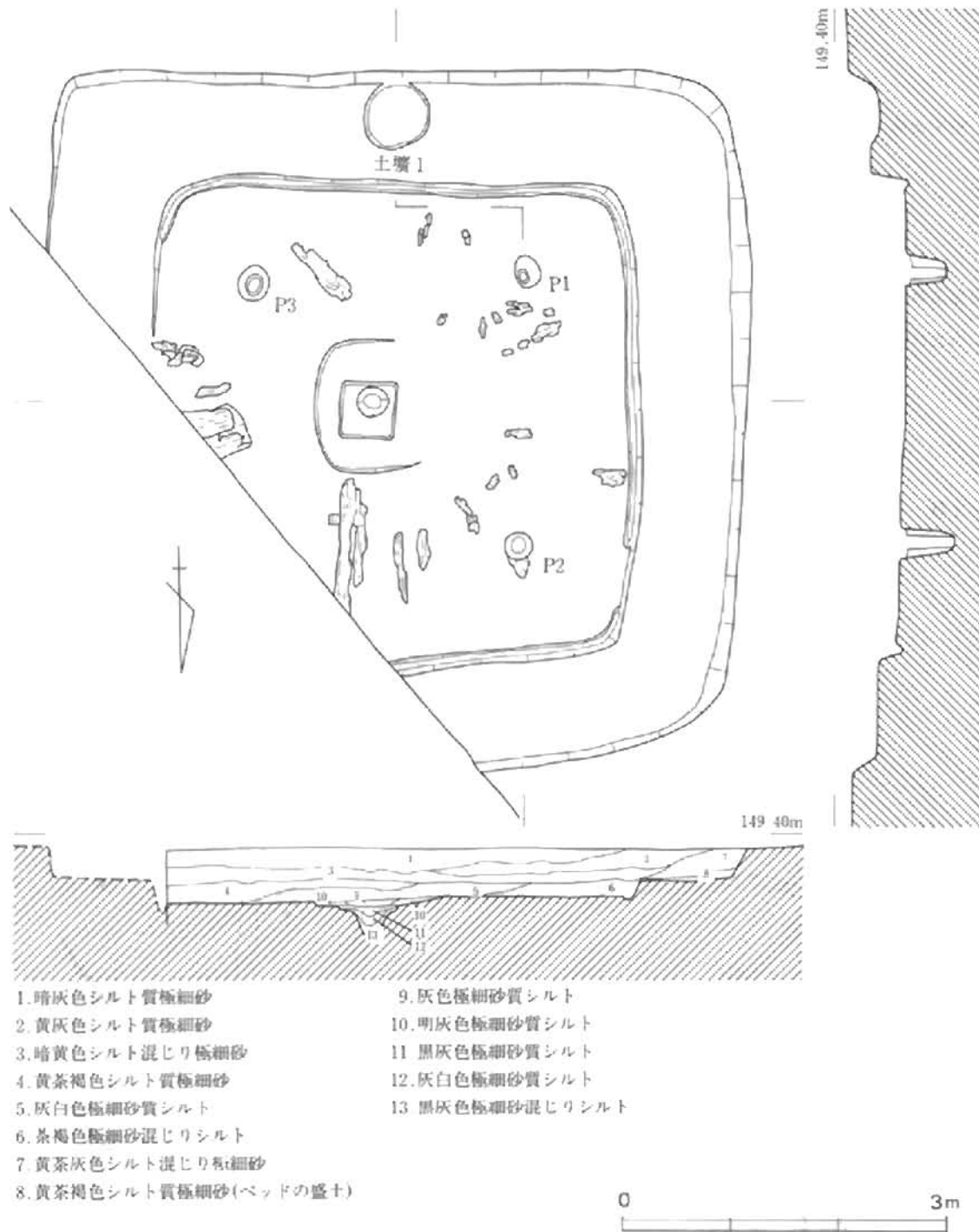


第381図 SH67

出土遺物 遺物は出土していない。
時期 遺物が出土していないため正確な時期は不明であるが、当住居跡を切っているSH66(川除7期)と比較的近い時期におさまるものと考えている。

SH68 (図版107・115)

検出状況 Ⅲ区の北西部、小微高地dの東縁で検出され、北東部は調査区外に続く。他の遺構との切り合い関係は認められない。
形状・規模 平面形は正方形である。南辺の長さ6.00m、西辺の長さ5.80mを測る。検出面から床面までの深さは50cm、床面の標高は148.80mである。床面積は38.2㎡に復元できる。
埋土 暗灰色ないしは茶褐色シルト質極細砂などの細粒の堆積物が認められる。本住居跡は焼失住居跡であるため、炭化材が床面直上で出土した。
屋内施設 ベッド・柱穴・中央土壇・土塙が検出された。周壁溝は存在しない。
ベッド 周壁に沿って全周するベッドが確認された。ベッド内側の平面形は周壁の平面形と相似形の正方形である。ベッド内側で計測した2辺の長さは南辺・西辺とも4.08mを測る。幅は85~95cmであり、床面との比高差は20~30cm、検出面からの深さは20cmを測る。



第382図 SH68

ベッド内側には、これと接する形で、底での幅6cm程度の溝が巡っている。ベッドは主に削り出しにより構築されており、部分的に盛土がなされている。盛土の厚さは10cm未満であり、これは、地山に似た黄茶褐色シルト質極細砂である。

土壘 ベッド南辺の上面では円形の土壘が認められた。規模は直径60cm、深さ10cmである。土壘底・壁とも焼土化しておらず、埋土からの出土遺物は認められなかった。

柱穴 主柱穴は3穴が確認でき、1穴は調査区外である。

P1は、掘り方の直径30cm、柱底の直径10cm、床面からの深さは29cmである。P2は、

掘り方の直径25cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは46cmである。P3は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは37cmである。

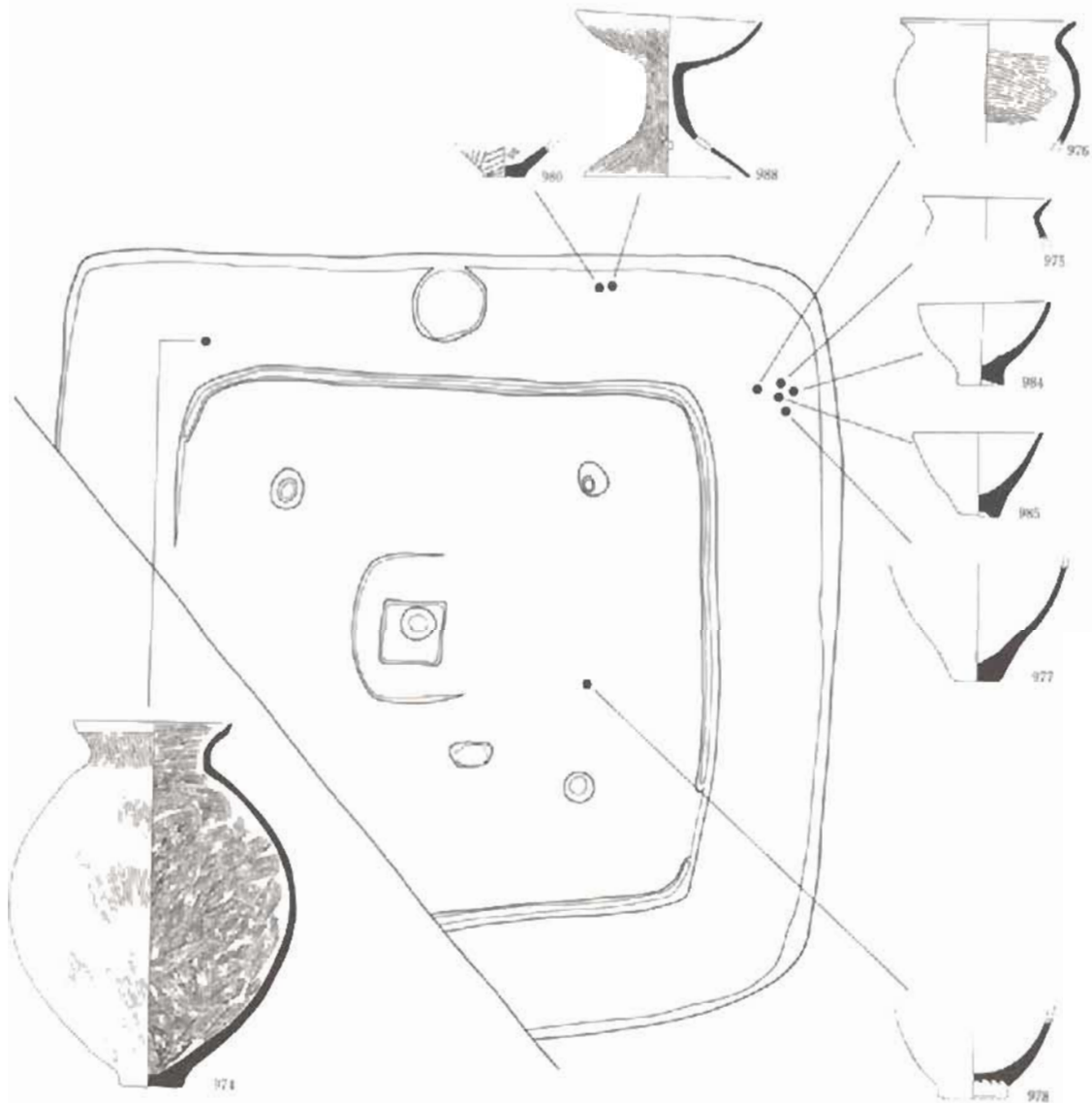
柱穴間の距離はP1～P2間が2.40m、P3～P1間が2.50mである。

中央土壇 床面中央で二段掘りの中央土壇が検出された。上段は一辺50cmの正方形であり、床面からの深さ6cmを測る。下段は直径30cmの円形を呈し、床面からの壇底までの深さは40cmである。土壇の面積は1.0㎡であり、対床面積比は2.6%である。埋土には炭片を含まず、焼土化も観察されなかった。

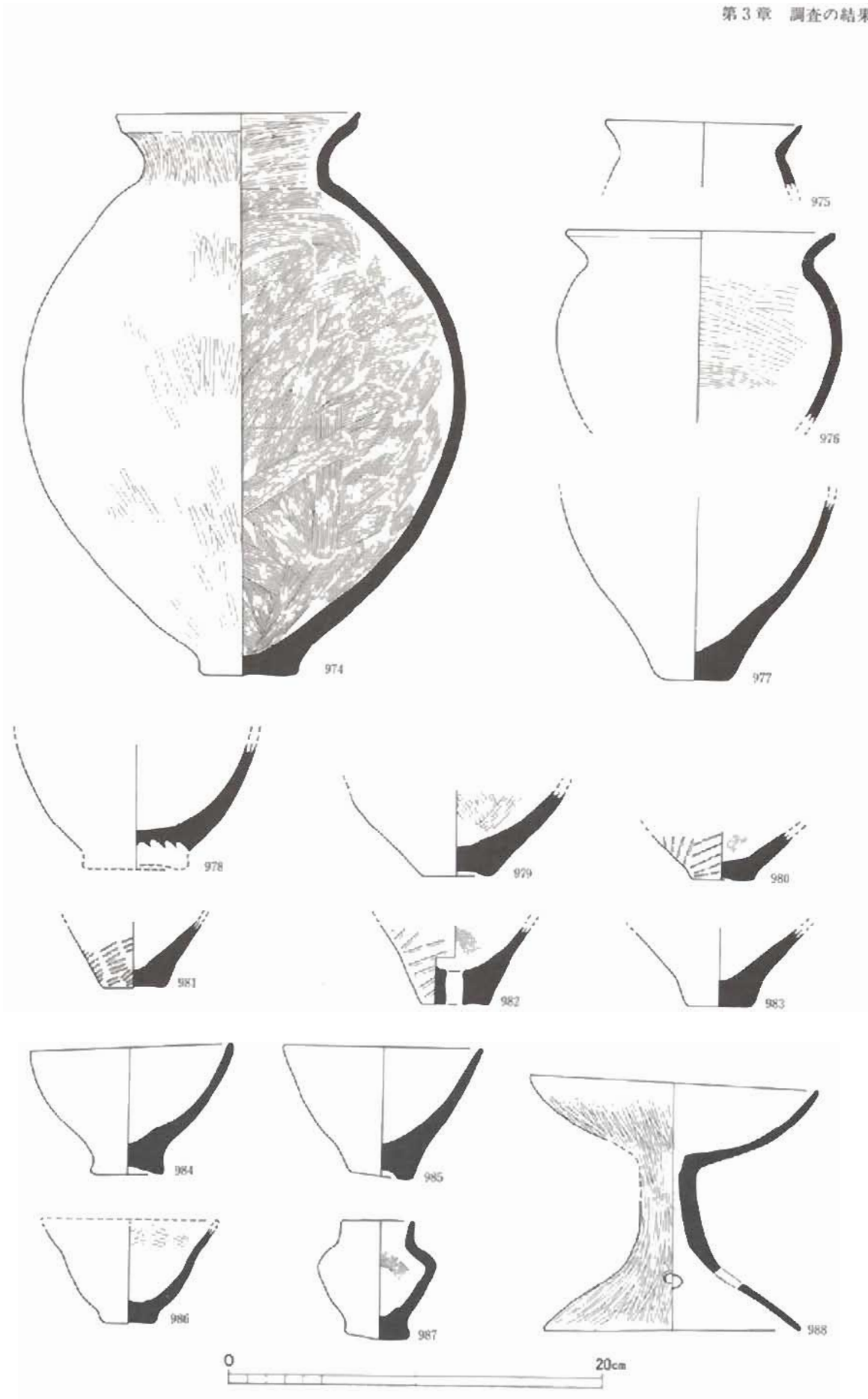
出土遺物 土器のみが出土している。

出土状況 本住居跡は焼失しているため、土器が原位置に近い形で検出された。また、作業台と考えられる台石が中央土壇北西側の床面直上で認められた。遺物の出土位置は、第383図に示すとおりであり、ベッド上面からの出土が目立つ。特にベッド南西隅からは、鉢および甕が集中して出土した。これ以外の遺物はすべて埋土中からの出土である。

土器 壺・甕・鉢・高坏が出土している。



第383図 S H68土器出土位置



第384図 SH68出土土器

第5節 田区の調査

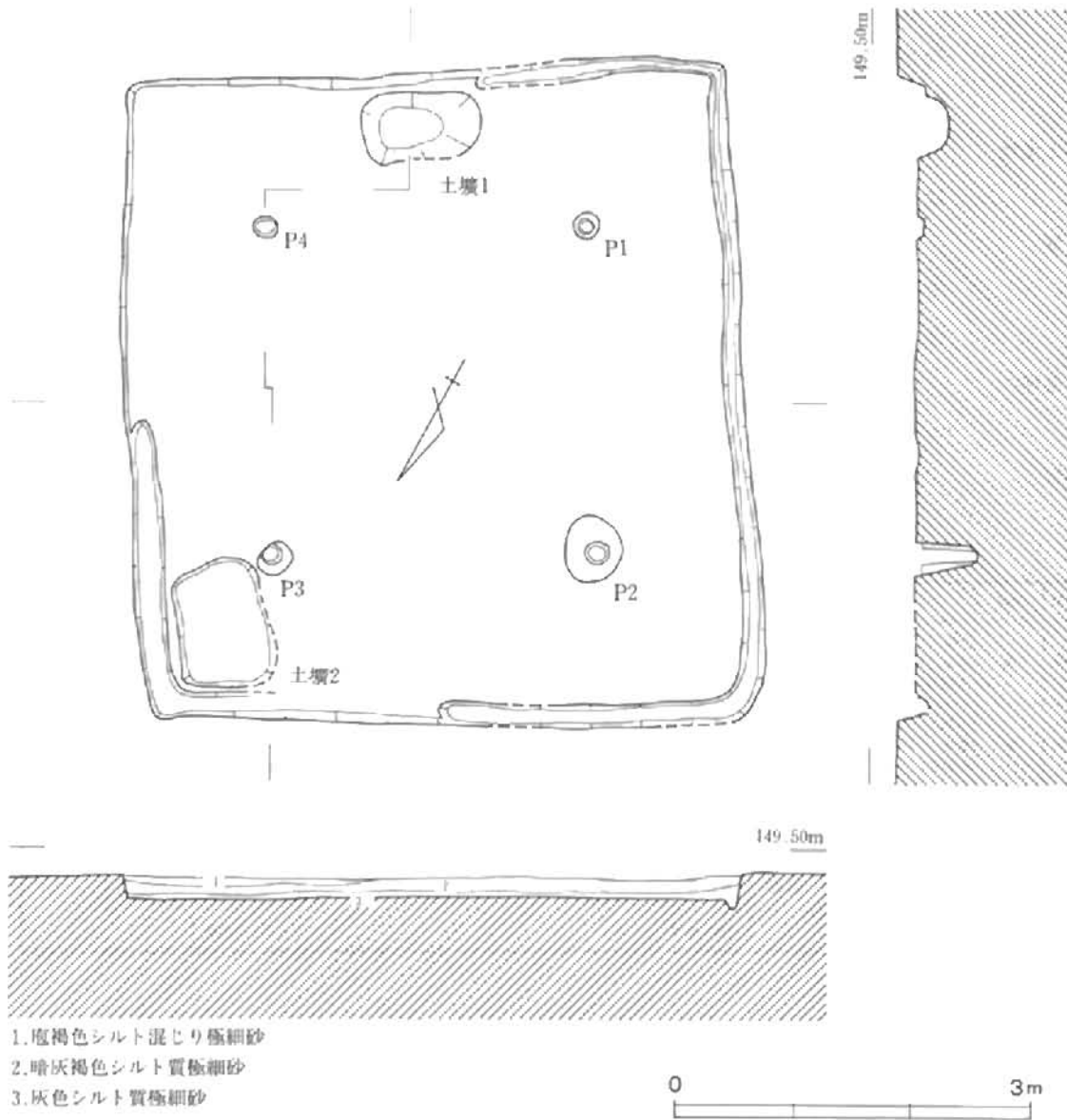
- 壺** 広口壺とミニチュア壺がある。広口壺は、口縁端部に強いナデを施すことにより斜め上方につまみ上げるものであり、外面及び口縁部内面には丁寧なヘラミガキを施している。
- 甕** V様式系のもののみであり、体部内面にはヘラケズリを施すものはなく、すべてハケメ仕上げである。
- 鉢** 大型のものは見当たらず、すべて成形第1段階の逆円錐台を利用した小型の鉢である。3個体以上が出土しているが、口縁部が外湾するタイプのものが1点含まれる。
- 高坏** 1点のみが出土した。坏部は半球状であり、中央には上方から粘土塊を充填した痕跡が認められる。
- 時期** 川除6期である。

第148表 SH68出土土器観察表

番号	器種	度量(cm)	調整	色調	残存率	備考
974	壺	口径 : 13.0 底径 : 器高 : 29.6 頸径 : 4.9 体部径 : 23.8	外面 : 頸部~体部幅2cmの縦方向ヘラミガキ、口縁部傾いココナテ 内面 : 体部右上がり11度/cmハケ、口縁部~頸部縦方向ヘラミガキ	外面 : 浅黄澄 内面 : 浅黄澄	口縁部・底部完存、体部約3/4	
975	壺	口径 : (10.4) 底径 : 器高 : 残3.3 頸径 : (8.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ 内面 : 口縁部ココナテ	外面 : にぶい 内面 : にぶい	口縁部~体部約1/3	
976	壺	口径 : (14.2) 底径 : 器高 : 残10.1 頸径 : (12.0) 体部径 : (16.2)	外面 : 口縁部ココナテ、体部タテナテ 内面 : 口縁部ココナテ、体部上半3度/cmココナテ、下半は細かきハケ	外面 : にぶい 内面 : にぶい	体部約1/3 口縁部僅か	
977	壺	口径 : 底径 : (3.6) 器高 : 残9.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : にぶい 内面 : 淡黄	底部完存 体部わずか	
978	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残5.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 赤澄 内面 : 赤澄	体部約1/8	
979	壺	口径 : 底径 : (4.0) 器高 : 残4.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨減のため調整不明 内面 : 1度/cm螺旋状ハケ	外面 : にぶい 内面 : *	底部1/2以下 体部わずか	
980	壺	口径 : 底径 : 3.4 器高 : 残2.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3度/cmタテキ 内面 : 体部~底部タテキ一部残る	外面 : にぶい 内面 : にぶい	底部完存 体部わずか	
981	壺	口径 : 底径 : 3.5 器高 : 残3.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3度/cmタテキ 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 淡澄	底部完存 体部わずか	
982	甕	口径 : 底径 : 3.6 器高 : 残4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3度/cmタテキ 内面 : 体部~底部7度/cmハケ	外面 : 澄 内面 : 澄	底部約1/2 体部わずか	
983	鉢	口径 : 底径 : 3.7 器高 : 残4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部タテキ、のちヘラナデ 内面 : 磨減のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 浅黄澄	底部完存 体部わずか	
984	鉢	口径 : 10.6 底径 : 3.7 器高 : 6.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、体部磨減のため調整不明、底部ニヒオサエ 内面 : 口縁部~体部ココナテ	外面 : 灰白 内面 : 澄	口縁部完存	
985	鉢	口径 : 10.6 底径 : 3.1 器高 : 7.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ココナテ、体部ナテ 内面 : 口縁部ココナテ、体部ドー上イタナテ	外面 : 灰白 内面 : 澄	口縁部1/8欠、他はほぼ完存	
986	鉢	口径 : 底径 : 2.8 器高 : 残5.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ヘラナテ 内面 : 口縁部5度/cmココナテ、体部ヘラナテ、底部ヘラ状工具痕	外面 : にぶい 内面 : *	口縁部欠、他はほぼ完存	
987	ミニチュア壺	口径 : (3.8) 底径 : 3.3 器高 : 6.5 頸径 : 3.4 体部径 : 6.5	外面 : 口縁部ココナテ、体部ナテ、底部ニヒオサエ 内面 : 口縁部ココナテ、体部上半ココナテ、下半ヘラ状工具ケズリ	外面 : 浅黄澄 内面 : 浅黄澄	口縁部僅か 他はほぼ完存	
988	高坏	口径 : 15.1 底径 : 13.6 器高 : 13.0 脚柱径 : 3.1 坏部径 : 4.5	外面 : 全面に磨ヘラケズリ、のち口縁部ココナテ、4孔 内面 : 口縁部ココナテ、のち坏部幅ヘラミガキ、脚柱部ヘラケズリ、底部磨減のため調整不明、内面充塞	外面 : 淡澄 内面 : 淡澄	坏部約1/2、他はほぼ完存	

SH69 (図版108)

- 検出状況** III区の北西部、小磯高地dの東縁で検出された。SD72・73、中世の掘立柱建物SB36に切られている。
- 形状・規模** 平面形は正方形である。北辺から順に時計回りに各辺の規模を示せば、5.05m、5.48m、4.95m、5.20mとなる。検出面から床面までの深さは20cm、床面の標高は149.12mである。床面積は25.4㎡である。
- 埋土** 暗灰色ないしは灰色のシルト質極細砂などの細粒の堆積物が認められる。
- 屋内施設** 周壁溝・柱穴・土壇が検出された。床面中央では、中央土壇あるいは焼土化した箇所は認められなかった。
- 周壁溝** 周壁に沿って断続的に検出された。東の隅には存在しなかったようである。床面での幅は10cm、深さは8cm、底部での幅は6cmを測る。検出面からの深さは28cmである。
- 土壇** 壁際で2基が検出された。南東辺の中央付近のものを土壇1、北隅で検出されたものを



第385図 SH69

第5節 Ⅲ区の調査

土壇2とする。

土壇1 楕円形であり、長径102cm、短径56cm、深さ27cmを測る。遺物の出土はなく、土壇底・壁の焼土化も認められなかった。

土壇2 平面形は長方形である。長さ108cm、幅75cm、深さ18cmである。埋土からは土器が多く出土し、炭片や焼土粒が検出された。

柱穴 主柱穴は4穴が確認できた。P4は柱痕が確認できなかった。

P1は、掘り方の直径22cm、柱痕の直径11cm、床面からの深さは35cmである。P2は、掘り方の直径47cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは30cmである。P3は、掘り方の直径26cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは55cmである。P4は、掘り方の直径22cm、床面からの深さは5cmである。

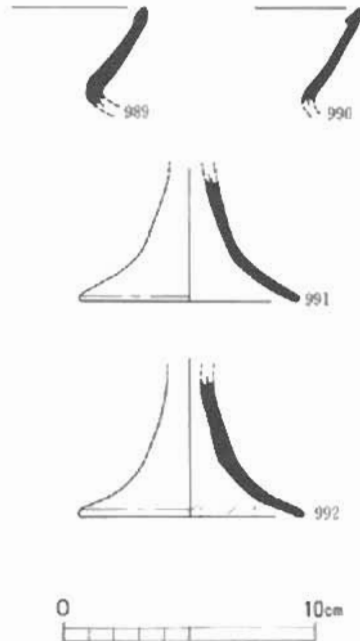
柱穴間の距離はP1～P2間が2.73m、P2～P3間が2.75m、P3～P4間が2.74m、P4～P1間が2.72mとほぼ等間隔である。

出土遺物 甕・高坏などの土器が出土している。990・991・992は土壇2埋土中より出土したものである。

甕 口縁部は内湾気味に外上方にのび、端部は内側に肥厚しておさめるものばかりである。体部片・底部片も出土しており、底部は丸底あるいは尖底である。

高坏 坏部の小片、脚部が出土している。脚部は円孔を持っていない。

時期 川除7期である。



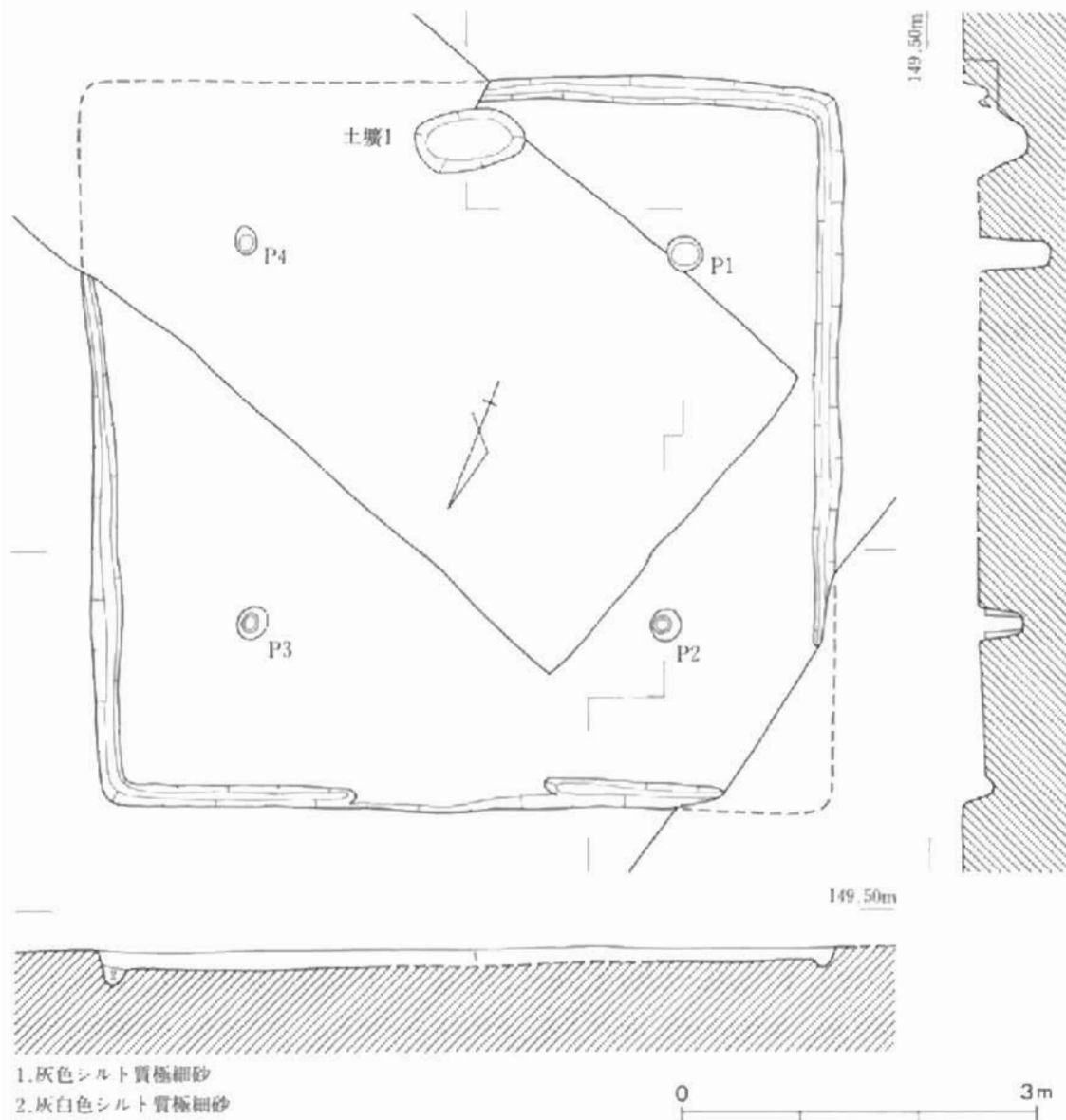
第386図 SH69出土土器

第149表 SH69出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)	調整	色調	残存率	備考
989	甕	口径 : 口径 器高 : 4.0 胴径 体部径 :	外面 : 口縁部コナナゲ 内面 : 口縁部コナナゲ	外面 : 橙 内面 : 橙		口縁部僅少
990	甕	口径 : 口径 器高 : 4.0 胴径 体部径 :	外面 : 口縁部コナナゲ 内面 : 口縁部コナナゲ	外面 : 明赤褐 内面 : 明赤褐		口縁部僅少
991	高坏	口径 : 口径 8.5 器高 : 4.0 胴径 : 坏部高 :	外面 : 内面 : 底縁のための調整不明	外面 : 灰白 内面 : 浅黄橙		脚部完存
992	高坏	口径 : 口径 (9.0) 器高 : 4.5 脚径 : 坏部高 :	外面 : 底縁のための調整不明 内面 : 底縁ヘラッズリ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙		脚部約1/3

SH70 (図版108・115)

検出状況 Ⅲ区の北西隅の、小微高地dの東縁で検出された。トレンチ調査で確認された住居跡であり、床面の半分程度はこのトレンチで削平してしまった。また、周壁の西端は現代の用水路で削られている。

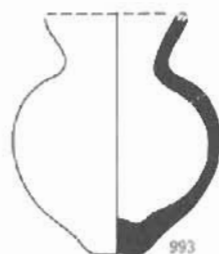


第387図 SH70

- 形状・規模** 平面形は正方形である。北辺から順に時計回りに各辺の規模を示せば、6.32m、5.90m、6.05m、6.00mとなる。検出面から床面までの深さは13cm、床面の標高は149.02mである。床面積は34.4㎡に復元される。
- 埋土** 灰色シルト質極細砂などの細粒の堆積物が認められる。
- 屋内施設** 周壁溝・柱穴・土壙が検出された。床面中央では、中央土壙あるいは焼土化した箇所は認められなかった。
- 周壁溝** 周壁に沿って全周するが、土壙1の対面部分は途切れている。床面での幅は14cm、深さは3cm、底部での幅は10cmを測る。また、検出面からの深さは15cmである。
- 土壙** 南辺の中央の周壁際で検出された楕円形の土壙である。長径は92cm、短径は50cm、深さは42cmである。遺物の出土はなく、土壙底・壁の焼土化も認められなかった。
- 柱穴** 主柱穴は4穴が確認できた。P1・P4は柱痕が確認できなかった。
P1は、掘り方の直径30cm、床面からの深さは60cmである。P2は、掘り方の直径27cm

柱痕の直径15cm、床面からの深さは35cmである。P3は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは38cmである。P4は、掘り方の直径22cm、床面からの深さは50cmである。

柱穴間の距離はP1～P2間が3.10m、P2～P3間が3.47m、P3～P4間が3.15m、P4～P1間が3.70mである。



出土遺物

埋土より壺・甕などの土器が出土している。

993は埋土の上層から出土した小型の壺である。底部はやや突出する。ほかに甕の体部片が出土しており、外面はハケメ仕上げである。



第388図 SH70出土土器

時期

川除7期である。

第150表 SH70出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調査	色調	現存率	備考
993	壺	口径 1.8 器高 9.3 胴径 4.2 体部径 8.2	外面 口縁部ユビオサエのみ、胴へウナデ、体部不定方向へウナデ 内面 口縁部ユビオサエのみ、胴へウナデ、体部ユビナデ	外面 灰白 内面 灰白	口縁端部欠損はほぼ完全	

(2) 掘立柱建物

SB29

検出状況

III区の北東隅で検出された。一部を現在の用水路によって削平されている。このため北東隅の柱穴を欠失している。

形状・規模

N-53°-Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.00m、梁行方向が2.70mである。面積は8.10㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が1.50m、梁行方向が2.70mである。

柱穴

掘り方の形状は円形で、直径は26～34cmである。深さは8～27cmを測る。

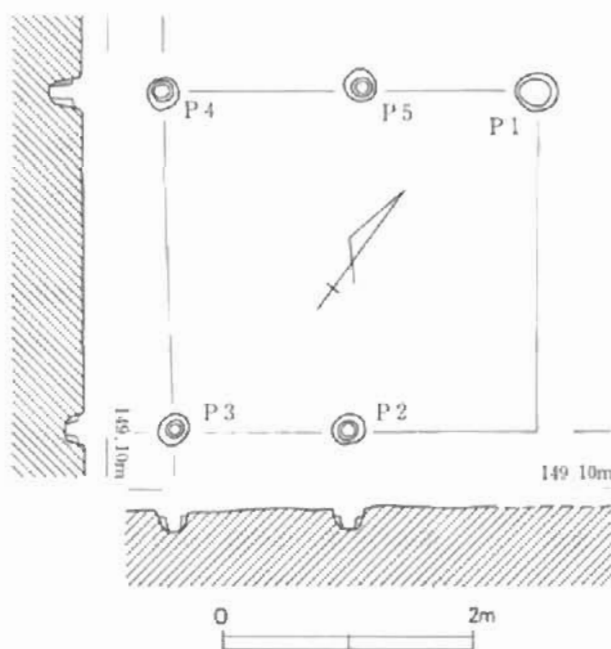
柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は14～16cmである。深さは8～27cmを測る。

出土遺物

P1より弥生時代と思われる土器の細片が出土している。

時期

出土している土器が細片であるため正確な時期は明らかでないが、川除6期の遺構と考えておきたい。

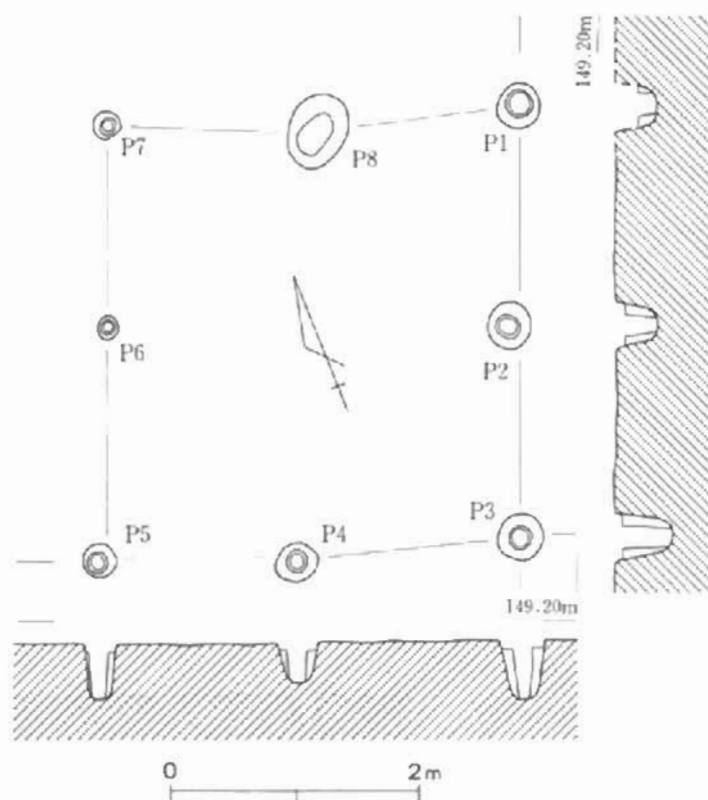


第389図 SB29

SB30

検出状況 III区の北東隅で検出された。北東隅のP1が弥生時代後期の住居跡であるSH54に切られている。

形状・規模 N-22°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.45m、梁行方向が3.30mである。面積は11.4㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が1.73m、梁行方向が1.65mである。中央部の東柱は存在しない。



第390図 SB30

柱穴 掘り方の形状は円形

で、直径は18~35cmである。深さは9~52cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~20cmである。深さは9~52cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかでないが、弥生時代後期の遺構であるSH54に切られていることから、川除1~5期のものであるとしかいえない。

SB31

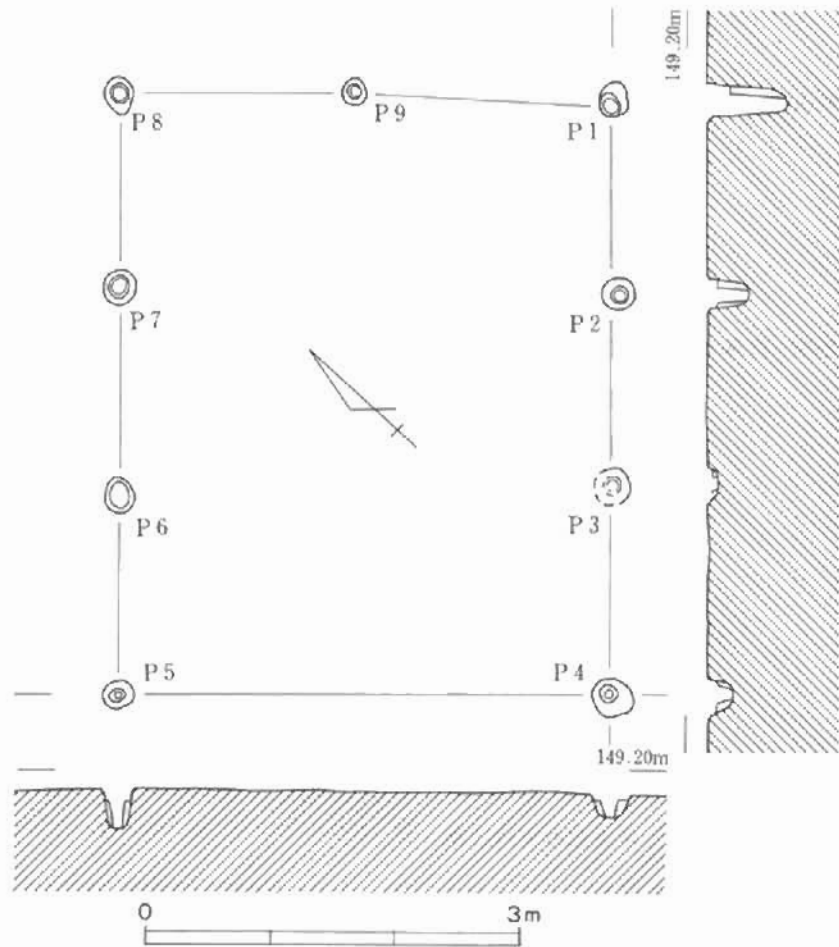
検出状況 III区の北東部で検出された。一部SB32と重複して検出された。

形状・規模 N-47°-Eに棟軸の方向をとる、桁行3間、梁行2間の東柱の存在しない掘立柱建物である。規模は桁行方向が4.68m、4.76m、梁行方向が3.92mである。面積は18.5㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が1.57m、梁行方向が1.96mである。

柱穴 掘り方の形状は円形で、直径は20~35cmである。深さは17~67cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~15cmである。深さは17~67cmを測る。掘り方の直径は比較的揃っているが、その深さにはかなりの差異が認められる。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかでないが、川除1~6期のものであろうと考えている。



第391図 SB31

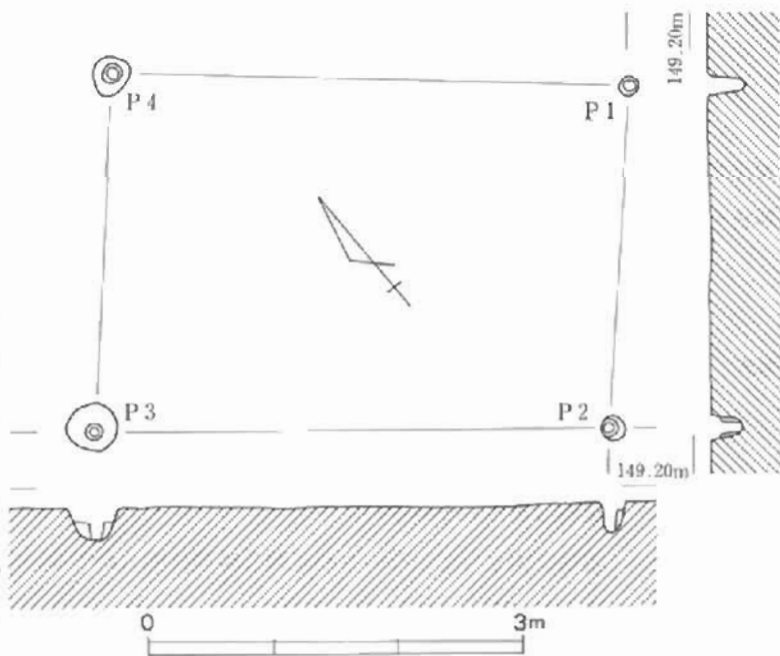
SB32

検出状況

III区の北東部で検出された。SB31と一部重複して検出された。

形状・規模

N-52°-Wに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が4.15m、梁行方向が2.74m、2.85mである。面積は11.6㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が全長と同じ



第392図 SB32

4.15m、梁行方向が2.79mである。

柱穴 掘り方の形状は円形で、直径は15～40cmである。深さは20～28cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10～14cmである。深さは20～28cmを測る。

出土遺物 P1より弥生時代の土器と思われる細片が出土している。

時期 出土した遺物が細片であるため正確な時期は明らかでないが、川除1～6期のものであろうと考えている。

(3) 土壌

SK85

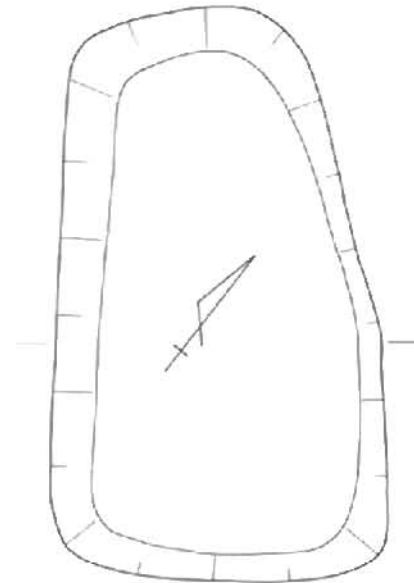
検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。一部分をSH54に切られている。

形状・規模 形状は西側の一部分が切り合いのため明らかではないが、いびつな長方形を指向している。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に224cm、短軸方向に72～97cmを測る。土壌底では長軸方向に150cm、短軸方向に73cmである。検出面からの深さは46～50cmで、断面形はU字形を呈している。

埋土 埋土は3層にわたって堆積している。上層に底部に炭層の広がる淡黄灰色極細砂、中層に淡灰色シルト混じり極細砂、下層に灰色シルト質極細砂の順に堆積している。

出土遺物 上層より中世の遺物と考えられる須恵器の細片と土師器の鍋が出土している。中層以下からは弥生時代の甕の体部と底部が出土している。以上のことから、遺構自体は弥生時代のもので、上層に中世の包含層がかぶってきているものと考えられる。

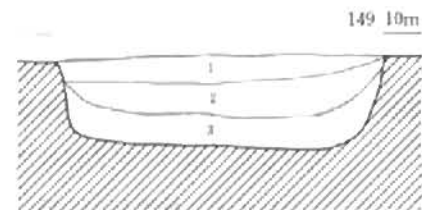
時期 川除1期である。



SK86

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。SH54とSH52・53とのほぼ中間のあたりで検出された。当遺構と他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 形状は基本的には不整形の部類に入ると思われるが、強いていえば台形を指向しているともいえる。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に224cmである。短軸方向については、北西側の短い方の軸で65cm、南東側の長い方の軸で90cmを測る。土壌底では長軸方向に133cm、短軸方向に45～75cmである。検出面からの深さは20～25cmで断面形はU字形を呈しているが、



- 1. 淡灰色極細砂
- 2. 灰黄色極細砂
- 3. 淡灰色極細砂



第393図 SK86

底の部分は比較的平坦面が広い。
壁面の傾斜角度は急である。

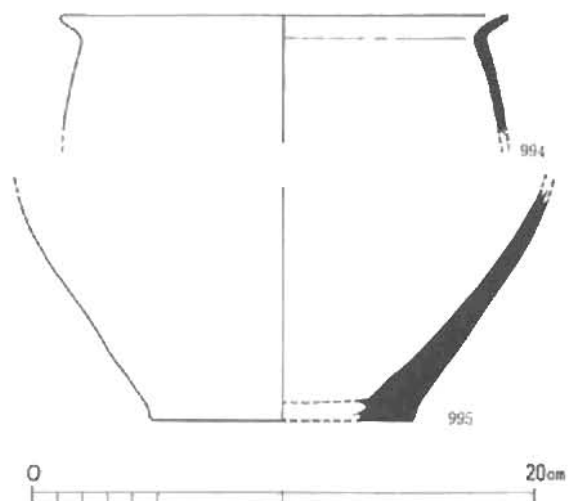
埋土 埋土は3層にわたって堆積している。上層に淡灰色極細砂、中層に土器・炭化物を含む淡灰色極細砂、下層に灰黄色極細砂が堆積している。

出土遺物 中層より壺の口縁部と甕の口縁部～体部と体部下位～底部の3点が出土している。そのうち図化しているものは2点である。

壺 図化していないが、口縁内部に波状文を施しているものである。

甕 口縁部～体部のものは短く外反する口縁部に、肩の張らない体部をもっている。口縁部に横方向のハケを施している。全体に磨滅のため調整は明らかではない。体部下位～底部のものは外面に縦方向のヘラケズリが施されていたと思われるが、これも磨滅のため調整は明らかではない。

時期 川除1期である。



第394図 SK 86出土土器

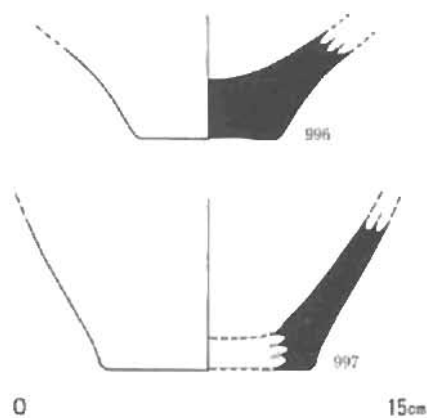
第151表 SK 86出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
994	壺	口径 : (17.8) 底径 : (14.0) 器高 : 4.8 胴径 : (16.0) 体部径	外面 : 口縁部コナデ, 他は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部コナデ, 他は磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部～体部わずか	
995	甕	口径 : (10.4) 器高 : 9.3 胴径 : (10.4) 体部径	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 底部ユビオサエ, のち縦ヘラナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 褐灰	底部約1/7 体部わずか	

SK 87

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。SH54のすぐ西側で検出されている。当遺構と他の遺構との切り合いは、柱穴が当遺構を切っている。

形状・規模 形状は基本的には不整形の部類に入ると思われるが、強いていえば長楕円形を指向しているともいえる。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に300cmである。短軸方向には85～105cmを測る。土壌底では長軸方向に258cm、短軸方向に50～90cmである。検出面からの深さは35～42cmで、断面形はU字形を呈しているが、底の部分は比較的平坦面が広い。壁面の傾斜



第395図 SK 87出土土器

角度はやや急である。

埋土 埋土は3層にわたって堆積している。上層に淡灰色細砂混じり極細砂、中層に淡黄灰色極細砂、下層に土器・炭化物を含むシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 土器のみの出土で、下層より甕の体部下位～底部が出土している。遺物はこの2点のみである。

甕は磨滅が激しく遺存状態は悪い。外面は調整が不明である。内面は底部にユビオサエ、体部に横方向のヘラナデを施している。

時期 川除1期である。

第152表 SK87出土土器観察表

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
996	壺	口径 : 底径 : (5.4) 器高 : 残3.4 煎径 : 体部径 :	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 }	外面 灰白 内面 灰白	体部～底部 わずか	
997	甕	口径 : 底径 : (8.6) 器高 : 残6.0 煎径 : 体部径 :	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 } 底部ユビオサエ、体部横ヘラナデ	外面 灰白 内面 淡黄橙	体部～底部 約1/4	

SK88

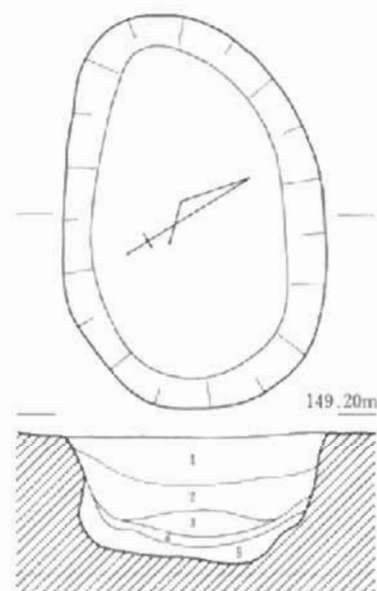
検出状況 III区の北東部で検出している。SH54とSH52・53のすぐ西側に検出されている。当遺構と、他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 形状は基本的には不整形の部類に入ると思われるが、強いていえば楕円形を指向しているとも言える。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に2.14mで、短軸方向に1.42mを測る。土壙底では長軸方向に1.77m、短軸方向に0.95～1.03mである。検出面からの深さは64～68cmで断面形は不定形ながらU字形を呈しているが、底の部分は比較的起伏に富んでいる。壁面の傾斜角度は急で、一部オーバーハングしている部分も認められた。したがって土壙底の面積は比較的広い。主軸と考えている長軸は西北西の方向を指している。

埋土 埋土は5層にわたって堆積している。上層から順に、淡灰色極細砂、炭化物を含む黄灰色極細砂、炭化物を含み細砂ブロックの混入している灰色シルト質極細砂、淡青灰色シルト質極細砂、炭化物を含む灰色極細砂混じりシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 最上層をのぞいてすべての土層より土器が出土している。しかしながらいずれも細片のため図化することができなかった。

時期 出土している土器が細片であるため、正確な時期は



1. 淡灰色極細砂
2. 黄灰色極細砂(木灰含む)
3. 灰色シルト質極細砂
(細砂ブロック状混入・灰含む)
4. 淡青灰色シルト質極細砂
5. 灰色極細砂混じり
シルト質極細砂(炭含む)



第396図 SK88

明らかではない。しかし土器の特徴が弥生時代のものであることや、埋土がSK85・86・87などと比較的にていることなどから、当遺構は川除1期の遺構であると考えている。

SK91

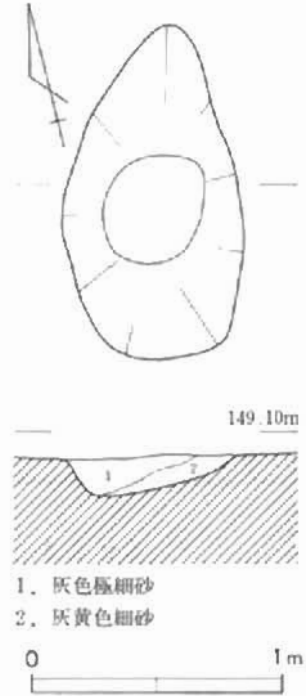
検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。小徴高地bの南へ落ちるところの落ち際に存在している。SH52・53の西側約5mに検出されている。当遺構と、他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 形状は基本的には不定形の部類に入るとされる。検出した平面形は主軸方向の北北西側が突出しており、南南西側が広がっている。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に133cmで、短軸方向に70cmを測る。土壌底では長軸方向に43cm、短軸方向に39cmである。検出面での平面形が不整形であるのに対し、土壌底では円形に近い形状をしている。検出面からの深さは12~15cmで、断面形は不定形ながらU字形を呈している。土壌底は水平ではなく傾斜している。壁面の傾斜角度は西側は比較的急で、東側は緩やかである。主軸と考えている長軸は北北西の方向を指している。

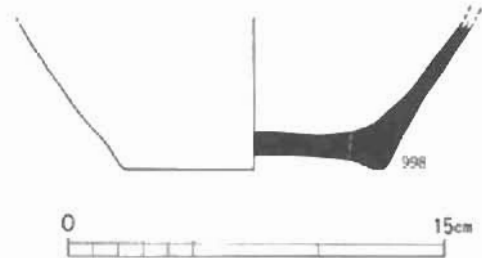
埋土 2層にわたって堆積している。上層に灰色極細砂、下層に灰黄色細砂が堆積している。

出土遺物 上層より甕が1点出土している。
出土した甕は磨滅のため調整が明らかではないが、底部に粘土を充填して成形している。底部内面はユビオサエ痕がかるうじて認められる。

時期 川除1期である。



第397図 SK91



第398図 SK91出土土器

第153表 SK91出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
998	甕	口径 底径 10.5 器高 : 残5.8 胴径 体部径 :	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 }	外面 : 赤褐色 灰白 内面 : 浅黄褐色	底部完全 体部わずか	

SK95

検出状況 Ⅲ区の中央部やや北西寄りで検出している。小徴高地bの南東隅に存在している。SH64のすぐ西側で検出している。当遺構と他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模 形状は基本的には不整形の部類に入るとされる。検出した平面形は主軸方向の南側が突出しており、中央部で広がって、北側でふたたびせまくなっている。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に294cmで、短軸方向に169cmを測る。土壌底では長軸方向に150cm、短軸方向に70cmである。検出面での平面形が不整形であるのに対し、土壌底でも不整形であるが台形を指向しているようである。土壌底の中心部は全体として北側に偏っている。検出面からの深さは65~70cmで断面形は不整形ながらU字形を呈している。土壌底は水平ではなくやや傾斜している。壁面の傾斜角度は比較的急であるが、2段になって角度に変化のみられるところも認められる。当遺構の主軸と考えている長軸はほぼ南北方向を指している。

埋土

6層にわたって堆積している。

上層から順に、黄灰色シルト混じり極細砂、灰色シルト質極細砂、明青灰色シルト質極細砂、炭化物を含む暗青灰色シルト質極細砂、炭化物を含む青灰色極細砂質シルト、明青灰色極細砂が堆積している。

出土遺物

埋土中より土器・石器が出土している。そのうち図化できたものは石器の1点のみである。

土器

壺が出土しているが図化はしていない。口縁部と底部の細片が出土している。

石器

石庖丁が出土している。折れた先端部のみである。長さは3.5cm、幅は最大部分で3.7cm、厚さは0.7cmである。直線片刃の石庖丁で刃部と平行に研磨痕が観察される。背の部分は面取りされたものと思われ、丸味をおびている。石材は砂質頁岩である。

時期

川除1期である。

SK98 (図版116)

検出状況

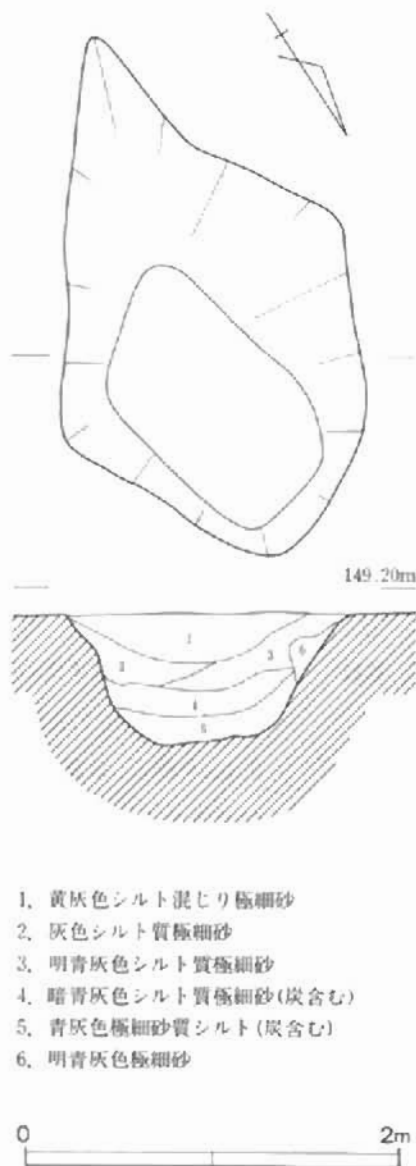
Ⅲ区北西部の小高台bの南西縁で検出された。SD65に切られている。

形状・規模

平面形は不整形である。規模は、検出面での長軸の長さは342cm、短軸の長さは230cmであり、土壌底での長軸の長さは246cm、短軸の長さは144cmを測る。検出面からの深さは65cmである。断面形はU字形である。

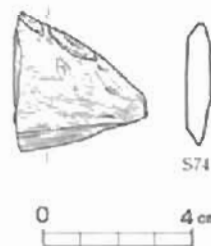
埋土

9層に分かれ、灰色ないし明黄灰色のシルト質極細砂などの細粒の堆積が認められた。



1. 黄灰色シルト混じり極細砂
2. 灰色シルト質極細砂
3. 明青灰色シルト質極細砂
4. 暗青灰色シルト質極細砂(炭含む)
5. 青灰色極細砂質シルト(炭含む)
6. 明青灰色極細砂

第399図 SK95



第400図 SK95出土石器

出土遺物 土器およびサヌカイト製の石器が出土した。

土器 壺・甕・高坏が出土している。

壺 広口壺などがある。底部から体部下半にかけての破片が多く、外面には縦方向のヘラミガキを施している。文様の判明するものが少ないが、1000は飾描の波状文と直線文および竹管文を施文している。

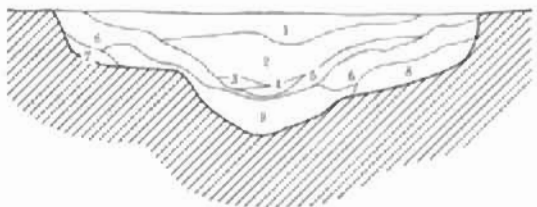
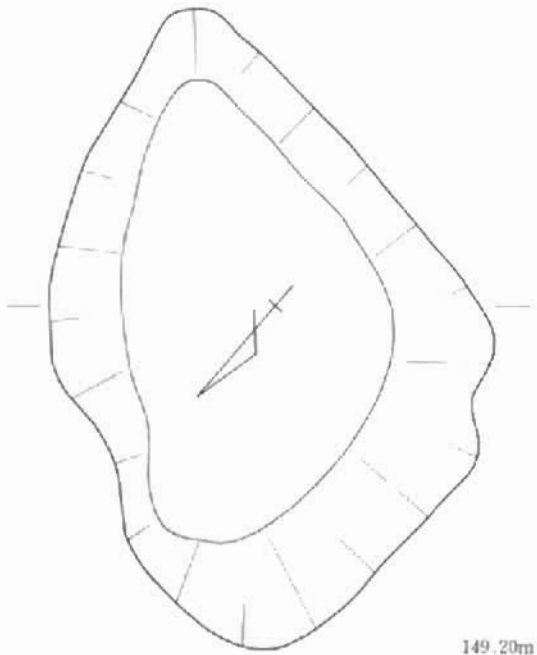
甕 全体の形態が判明するものはない。法量の点から大小2種のものがあったことは確実である。

高坏 脚部の小片であり、図化できなかった。

石器 S75は平基無基式の石鎌である。完形であり、長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。重量は1.3gである。石材はサヌカイトである。

S76は細部調整剥片である。下端に自然面を残している。長さ4.9cm、幅2.7cm、厚さ0.5cmである。縁には刃こぼれ状の微細な剥離が認められる部分がある。サヌカイトを素材にしている。

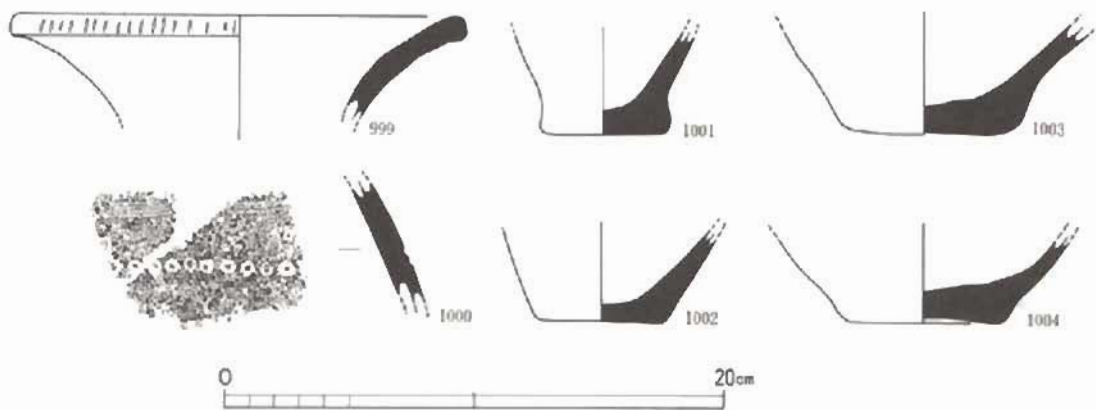
時期 川除1期である。



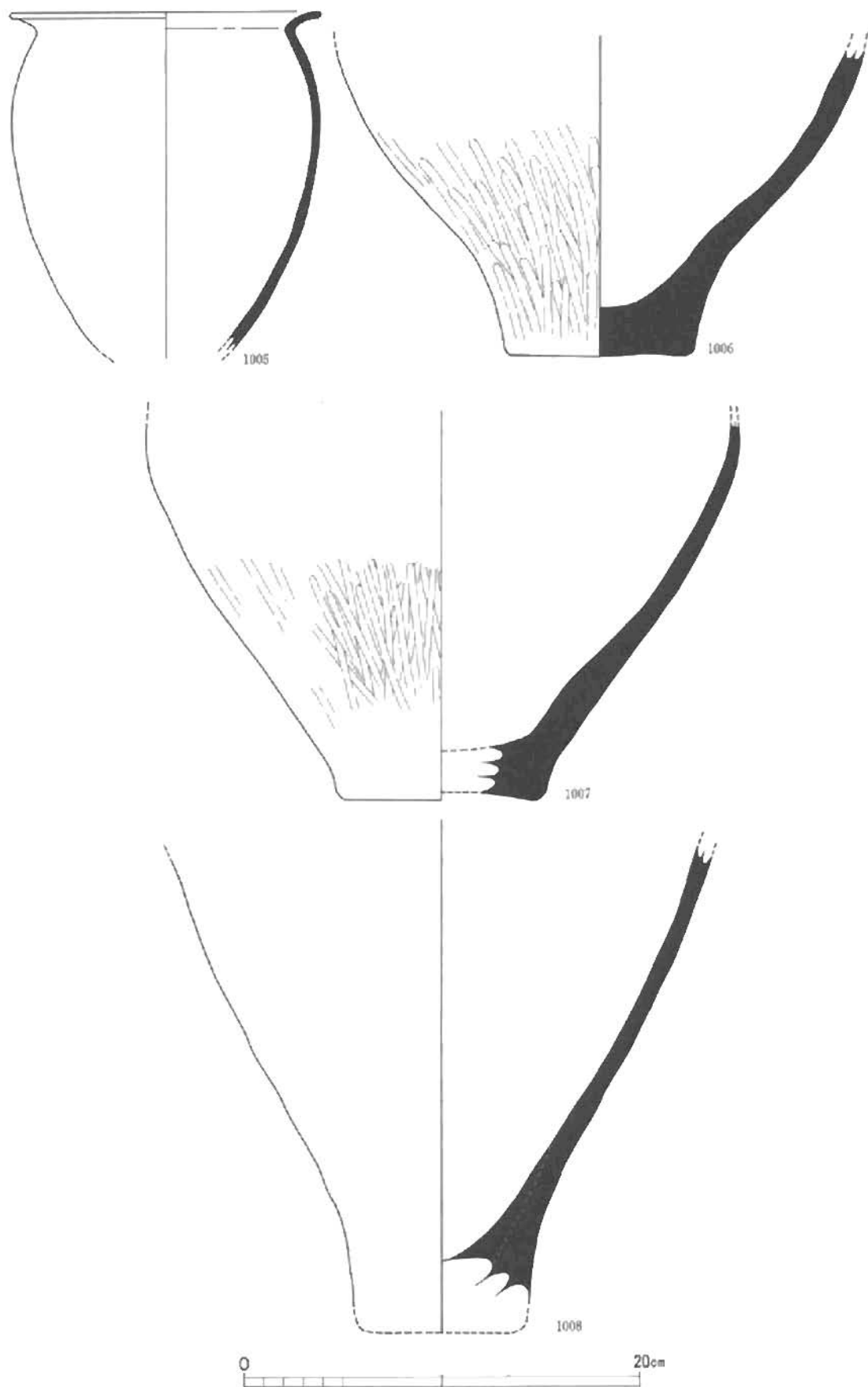
1. 灰色シルト混じり極細砂
2. 明黄灰色シルト混じり極細砂
3. 灰色シルト質極細砂
4. 明黄灰色シルト質極細砂
5. 茶灰色-灰色シルト質極細砂(炭多く含む)
6. 明黄灰色シルト質極細砂
7. 黄褐色シルト質極細砂
8. 明黄灰色シルト質極細砂
9. 暗青灰色極細砂質シルト(炭多く含む)



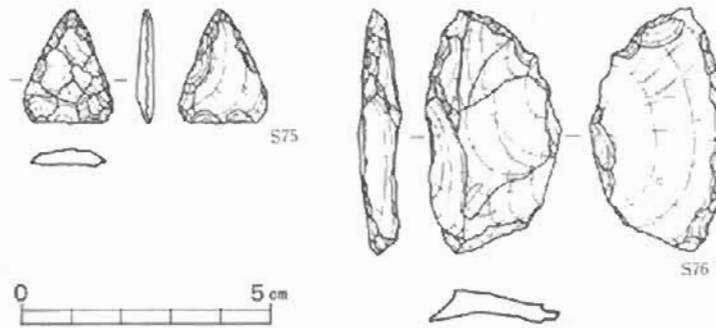
第401図 SK98



第402図 SK98出土土器(1)



第403図 SK98出土土器(2)



第404図 SK98出土石器

第154表 SK98出土石器観察表

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
999	壺	口径 : (17.8) 底径 : 器高 : 残4.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部磨み目, 口縁部-頸部ヘラミダキ 内面 : 口縁部ナテ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部-頸部約1/8	
1000	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部に5条の帯状直線文と波状文が上下段に, その下に竹管文(直径5.5mm)を施す 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 灰白 内面 : 褐灰	破片	
1001	壺	口径 : 底径 : 4.9 器高 : 残4.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部磨滅のため調整不明, 底面ナテ 内面 : 体部-頸部ヘラナテ	外面 : 灰白 内面 : 黄灰	底部完存 体部わずか	
1002	壺	口径 : 底径 : 5.2 器高 : 残3.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 赤 内面 : 黒褐	底部完存 体部わずか	二次焼成
1003	壺	口径 : 底径 : 6.1 器高 : 残4.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 赤 灰褐 内面 : 灰白	底部完存 体部わずか	二次焼成
1004	壺	口径 : 底径 : 5.8 器高 : 残3.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 赤 赤褐 内面 : 褐灰	底部完存 体部わずか	二次焼成
1005	壺	口径 : (15.5) 底径 : (13.1) 器高 : 残16.9 頸径 : 体部径 : (15.5)	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 明褐色 内面 : 灰	口縁部僅か 体部約1/4 底部欠	
1006	壺	口径 : 底径 : 9.0 器高 : 残15.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部磨へラミダキ 内面 : 体部-底部ナテ	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰褐	底部完存	
1007	壺	口径 : 底径 : (10.0) 器高 : 残19.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部磨へラミダキ, 底面ナテ 内面 : 体部ナテ, 底部ヒビオサエ	外面 : 褐灰 灰白 内面 : 明褐色	体部-底部約1/3	
1008	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残23.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部-底部磨へラミダキヘラナテ 内面 : 体部-底部磨へラナテ	外面 : 灰黄 内面 : 灰黄	体部-底部約1/4以下	

SK105

検出状況

田区の南西部で検出している。当遺構と他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模

形状は基本的には円形を呈している。検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に110cmで、短軸方向に105cmを測る。土壌底では長軸方向に65cm、短軸方向に63cmである。検出面での平面形と同様に土壌底もまた円形を呈する。土壌底の中心部は全体として北側に偏っている。検出面からの深さは15~20cmで、断面形は皿形を呈している。壁面の傾斜角度は全体としてゆるやかである。

埋土

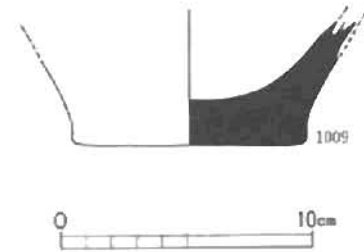
埋土は2層にわたって堆積している。上層に灰黄色粗砂~小礫混じり極細砂、下層に土

器を含むシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 埋土の下層より土器が出土している。そのうち凶化できたものは1点のみである。

土器は甕の底部が出土している。磨滅のため調整は不明であるが、外面に縦方向のへらケズリを施していたようである。

時期 川除1期である。



第405図 SK105出土土器

第155表 SK105出土土器観察表

番号	器種	法量 [cm]	調整	色調	残存率	備考
1009	甕	口径 口径(9.2) 器高 残5.0 器径 体部径	外面 } 磨滅のため調整不明 内面 }	外面：灰白 内面：灰白	底部約1/2 体部約1/4	

(4) 溝

SD27

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。小徴高地の単位でいえば、小徴高地bの南西端にあたり、この小徴高地の南側の落ち際に位置している。溝の方向は小徴高地の方向に平行に検出され、東南東から西北西の方向をとる。検出状況はⅢ区の東側の壁際から検出され、Ⅱ区から続いている遺構であることは確実である。SD80と一部重複して検出されているが切り合い関係ははっきりしない。

規模・形状 長さはⅢ区で検出された部分に限っては、24.5mが検出された。幅は検出面で0.70~1.90m、溝底で0.45~1.70mを測る。断面形は最も広い所で皿形に近いU字形を呈する。検出面からの深さは6~34cmであり、溝底の標高は東側で148.80m、西側で148.82mとほとんど差が認められない。

出土遺物 埋土中より土器が出土している。

弥生土器の甕、土師器の高坏、須恵器の坏蓋・甕など時期に幅のあるものが出土しているが、上層より須恵器が、下層より弥生土器が出土している。

時期 川除2~6期と考えている。

SD48

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。小徴高地の単位でいえば、小徴高地bの南西端にあたり、この小徴高地の南側の落ち際に位置し、SD27のすぐ北側に位置している。溝の方向は小徴高地の方向に平行に検出され、東南東から西北西の方向をとる。検出状況はⅢ区の東側の壁際から検出され、Ⅱ区から続いている遺構であることは確実である。当遺構の東側の一部は現在の用水路によって削平を受けている。

規模・形状 長さはⅢ区で検出された部分に限っては、15.5mが検出された。幅は検出面で0.25~0.65m、溝底で0.15~0.45mを測る。断面形はU字形を呈する。検出面からの深さは6~32cmであり、溝底の標高は東側で148.80m、西側で148.90mとなっており、西側から東側に向かっ

て流れていたものと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、S D 27と同じ方向であることから川除 2～6期の遺構と考えたい。

S D 6 8

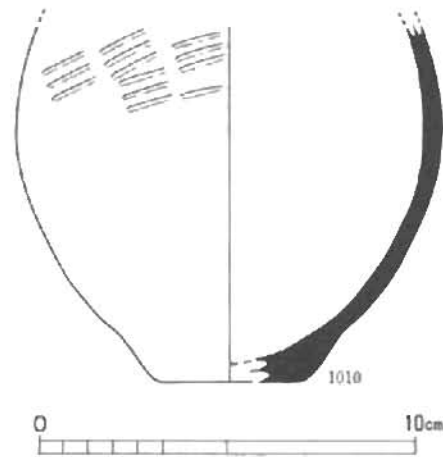
検出状況 Ⅲ区の北東部で検出された。小微高地bの西縁にあたり、南方の低地に向かってのびる溝である。溝は北東から南西方向にのびており、南端はS D 83に切られている。北端は浅くなって消滅する。S K 100に切られている。

形状・規模 長さは16.0mが確認された。幅は、検出面で0.30～1.30m、溝底で0.20～1.25mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは6～23cmである。溝底の標高は、北端で148.84m、南端で148.70mである。

埋土 灰色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 V様式系の甕や高坏の脚部が出土しているが、図化できたのは甕のみである。

時期 川除 3～5期である。



第406図 S D 68出土土器

第156表 S D 68出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1010	甕	(口部 直径 (6.0) 器高 残14.1 胴径 体部径 (17.1))	外面 体部上位タタキ、他は磨滅のため調整不明 内面：磨滅のため調整不明	外面 灰白 内面 灰白	体部～底部 約1/4	

S D 7 7

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地bの南西部に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行に検出され、東南東から西北西の方向をとる。検出状況は東側の一部がS K 91と重複して検出されているが、切り合い関係は明らかではない。

規模・形状 長さは4.3mが検出された。幅は検出面で0.20～0.30m、溝底で0.05～0.20mを測る。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは1～3cmであり、溝底の標高は東側で148.94m、西側で148.90mとなっており比高差は認められない。

出土遺物 遺物は土器のみが出土している。いずれも細片であるため図化はできなかった。

時期 出土した遺物が細片であるため正確な時期は明らかではないが、中世、古墳時代の遺物とは考えられないこと、S D 27と同じ方向であることや、S K 91との切り合いが明確ではないことから、川除 2～6期の遺構と考えたい。

SD78

- 検出状況** Ⅲ区の北東部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地bの南西部の縁辺付近に位置している。溝の方向は等高線に平行に検出され、東南東から西北西の方向をとる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 規模・形状** 長さは2.2mが検出された。幅は検出面で0.40～0.45m、溝底で0.30～0.35mを測る。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは7～10cmであり、溝底の標高は東側で149.00m、西側も149.00mとなっており比高差は認められない。
- 出土遺物** 遺物は土器のみが出土している。いずれも細片であるため図化はできなかった。
- 時期** 出土した遺物が細片であるため正確な時期は明らかではないが、中世・古墳時代の遺物とは考えられないこと、SD27と同じ方向であることなどから川除2～6期の遺構と考えたい。

SD79

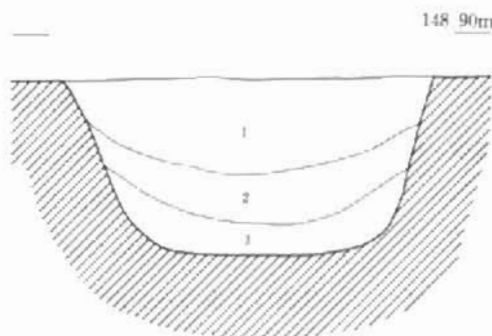
- 出土状況** Ⅲ区の北東部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地bの南西部の縁辺付近に位置している。溝の方向は小微高地の方向から西方向に斜めに検出され、東北東から西南西の方向をとる。他の遺構との切り合い関係は認められないがSD27から分岐している。
- 規模・形状** 長さは12.2mが検出された。幅は検出面で0.60～1.00m、溝底で0.15～0.45mを測る。断面形はU字形を呈する。検出面からの深さは16～18cmであり、溝底の標高は東北東側で148.70m、西南西側も148.67mとなっており東北東方向から西南西方向に流れている。
- 出土遺物** 遺物は土器のみが出土している。いずれも細片であるため図化はできなかった。
- 時期** 出土した遺物が細片であるため正確な時期は明らかではないが、中世・古墳時代の遺物とは考えられないことなどから川除2～6期の遺構と考えたい。

SD80

- 出土状況** Ⅲ区の北東部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地bの南西部の南側の落ち際に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行方向に検出され、東南東から西北西の方向をとる。当遺構はSD27とほぼ中央付近で重複して検出されているが、切り合い関係は明らかでない。
- 規模・形状** 長さは32.0mが検出された。幅は検出面で0.25～0.85m、溝底で0.15～0.55mを測る。断面形はU字形を呈する。検出面からの深さは10～19cmであり、溝底の標高は東南東側で148.80m、西北西側も148.70mとなっており東北東方向から西南西方向に流れていたようである。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、SD27とほぼ同じ方向で検出されたことから川除2～6期の遺構と考えたい。

SD84

出土状況 III区の西部のはほぼ中央で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南東部の南側の落ち際に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行方向に検出され、東南東から西北西の方向をとる。当遺構は古墳時代の遺構である溜池と重複して検出されている。切り合い関係は明らかで溜池に切られている。



1. 灰色砂質シルト
2. 暗灰色砂混じりシルト(上面に土器集積)
3. 黒灰色シルト



第407図 SD84横断面

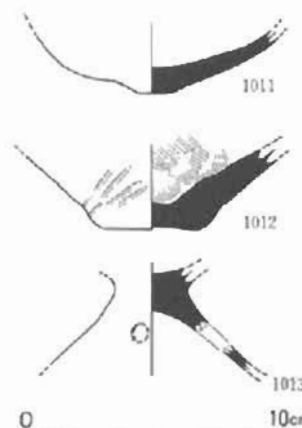
規模・形状 長さは14.3mが検出された。幅は検出面で0.30~0.50m、溝底で0.13~0.30mを測る。断面形はU字形を呈する。検出面からの深さは10~15cmであり、溝底の標高は東南東側で148.90m、西北西側は148.80mとなっており東南東方向から西北西方向に流れていたようである。

出土遺物 土器のみが出土している。壺・甕・高坏が出土しており、そのうち図化できたのは3点である。

壺 底部から体部にかけてのものが出土している。底部は安定さに欠くものでやや突出している。

甕 底部から体部にかけてのものが出土している。外面にタキ、内面にハケを施す。

高坏 脚部が出土している。中空で、脚柱部が短く、裾部は直線的にひろがる。



第408図 SD84出土土器

時期 出土土器から川除6期の遺構と考えたい。

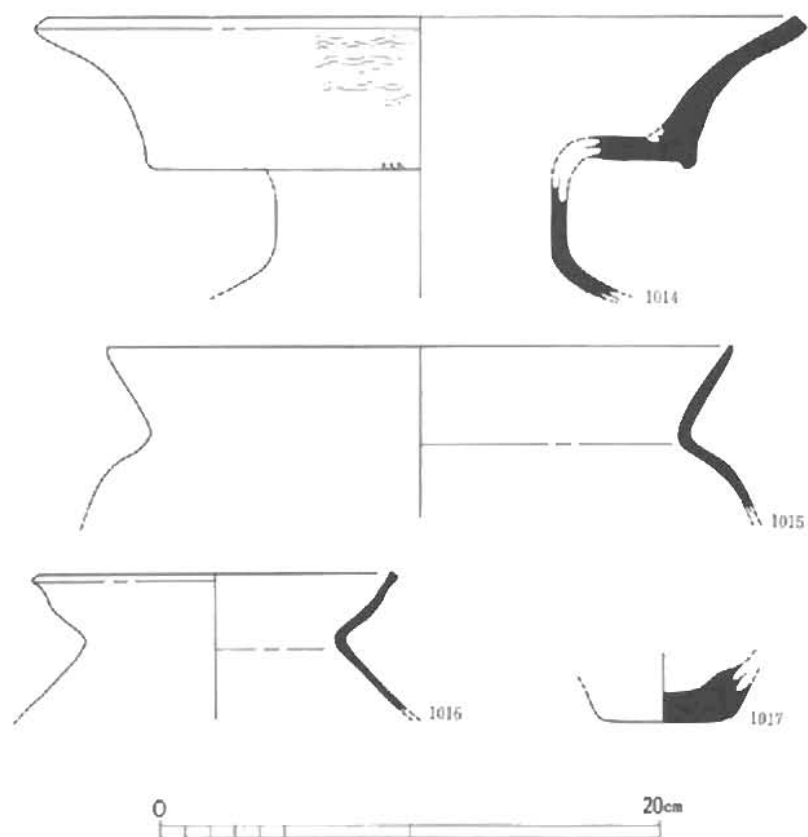
第157表 SD84出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1011	壺	口径 : 底径 : 1.4 器高 : 残2.7 総径 : 体部径 :	外面 : 内面 :	外面 : 浅灰色 内面 : 淡黄	体部 - 底部 わずか	
1012	甕	口径 : 底径 : (3.8) 器高 : 残3.2 総径 : 体部径 :	外面 : 体部 - 底部タキ 内面 : 体部 - 底部7.5/cmヨコハケ	外面 : 灰白 内面 : 濃い 調整	底部 - 体部 約1/2	
1013	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残4.0 脚柱径 (2.5) 坏部高 :	外面 : 内面 :	外面 : 濃い 内面 : 濃い 磨	脚部 約1/4 以下 裾部欠	

SD85

出土状況 III区の西部のはほぼ中央で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南東部の南側の落ち際に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行方向に検出され、東南東から西北西の方向をとる。当遺構と他の遺構との切り合い関係は認められない。

規模・形状 長さは4.0mが検出された。幅は検出面で0.12~0.25m、溝底で0.07~0.25mを測る。断



第409図 S D85出土土器

面形は皿形を呈する。検出面からの深さは3～12cmであり、溝底の標高は東南東側で148.90m、西北西側は148.80mとなっており、東南東方向から西北西方向に流れていたようである。

出土遺物 土器のみが出土している。壺・甕が出土しており、図化できたのは4点である。

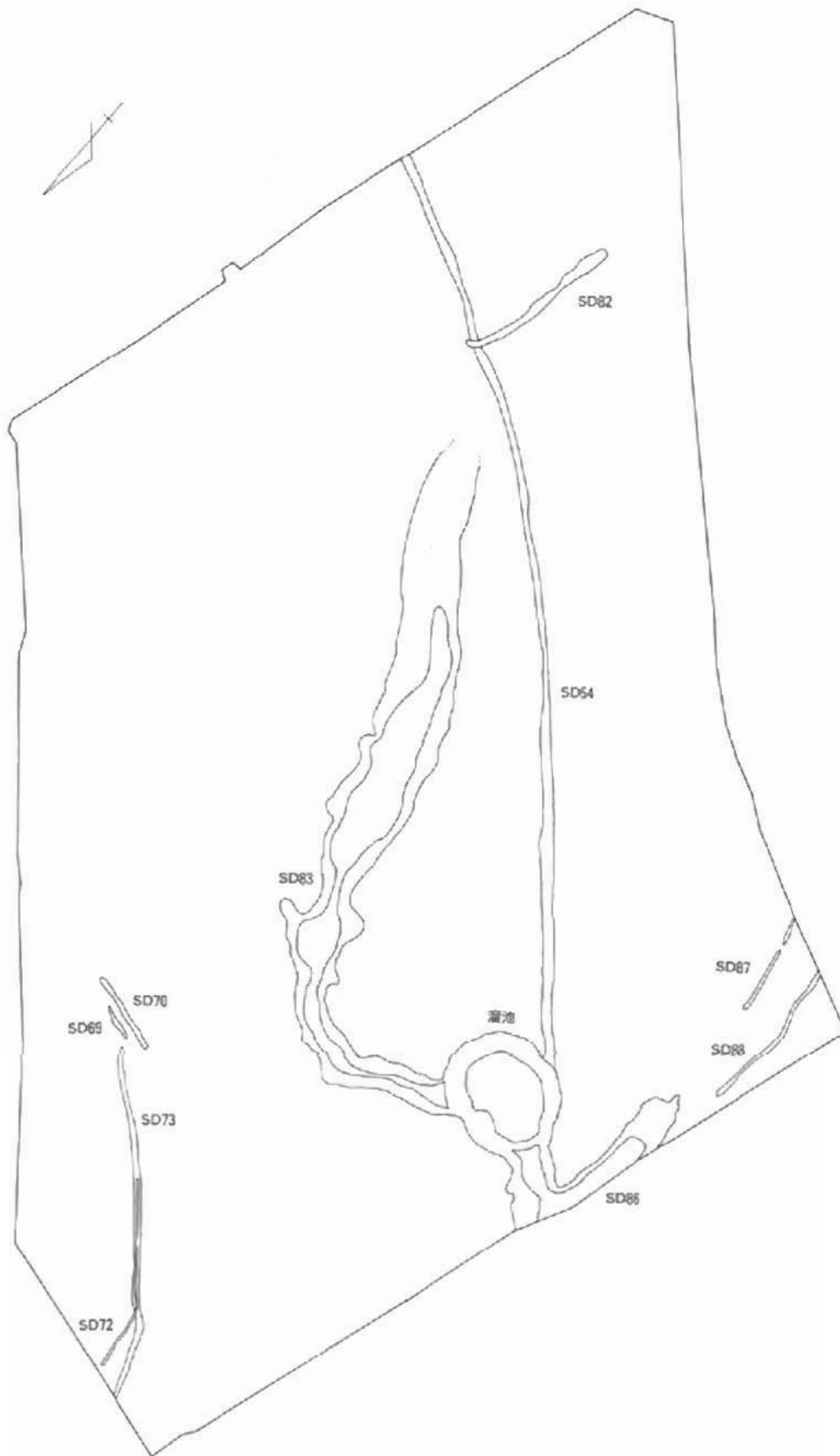
壺 1点図化している。口縁部がやや外反する二重口縁壺である。口縁部外面に磨滅しているが、波状文が施されているのが観察できる。

甕 3点図化している。口縁部が残存しているものは2点である。残りの1点は底部のみの残存である。口縁部は直線的にのびるものと、内湾気味に立ち上がるものがある。

時期 出土土器から川除6期である。

第158表 S D85出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1014	壺	口径 (29.8) 底径 器高 残11.1 胴径 (11.8) 体部径	外面 口縁部波状文、下部に刻み目 内面 磨滅のため調整不明	外面 橙 淡黄橙 内面 〃	口縁部～胴部 約1/4	
1015	甕	口径 (24.9) 底径 器高 残6.6 胴径 (21.5) 体部径	外面 体部上位十字 内面 磨滅のため調整不明	外面 淡黄橙 内面 灰白	口縁部～体部 約1/4	
1016	甕	口径 (14.1) 底径 器高 残5.4 胴径 (10.4) 体部径	外面 口縁部ヨコナテ、体部磨滅のため調整不明 内面 口縁部ヨコナテ、体部ヘラケズリカ	外面 淡黄 内面 淡黄	口縁部～体部 約1/3	
1017	壺	口径 〃 底径 5.0 器高 残2.3 胴径 〃 体部径 〃	外面 〃 内面 〃 磨滅のため調整不明	外面 淡黄橙 内面 褐色	底部のみ 残存	



第410図 III区古墳時代後期～奈良時代の遺構

3. 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物

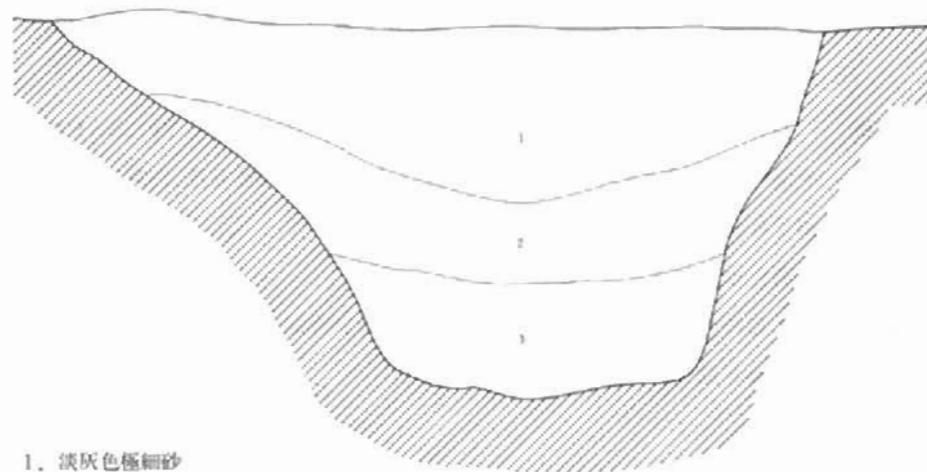
(1) 溝と溜池

SD54 (図版109)

検出状況 Ⅲ区の南部を横切るように検出している。小微高地cの北側の落ち際から低地の方向にむかっている。溝の方向は北西から南東の方向をとる。当遺構と他の遺構との切り合い関係では、溜池に切られている。

形状・規模 長さは104mが検出された。幅は検出面で0.50～1.40m、溝底で0.30～0.50mを測る。断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは30～50cmであり、溝底の標高は北西側で148.55m、南東側は148.60mとなっておりほとんど差は認められないが、地形的なものを考えれば、

149.10m



1. 淡灰色極細砂
2. 淡黄灰色極細砂混じりシルト質極細砂
3. 黄灰色極細砂質シルト (底に炭化層)

0 50cm

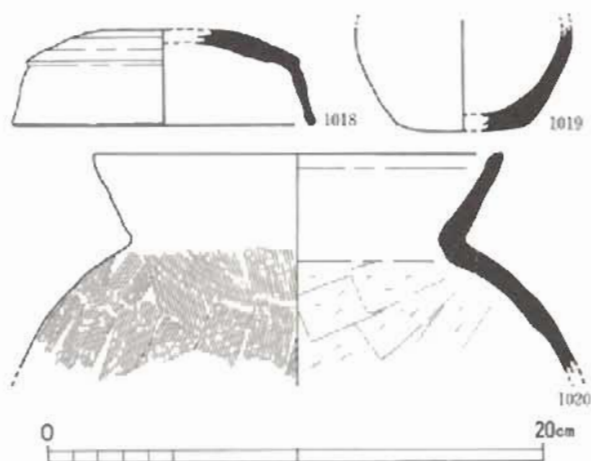
第411図 SD54横断面

やはり北西から南東の方向に流れていたものであろう。

出土遺物 土器のみが出土している。須恵器の坏蓋、土師器の甕・高坏・小型壺・壺が出土しているが、そのうち図化しているものは3点である。

須恵器 須恵器の坏蓋は、体部が外方に開ききみで、天井部との境の稜はややあまい。

土師器 土師器の甕は口縁部がわずかに



第412図 SD54出土土器

第5節 Ⅲ区の調査

内湾してたちあがり、口縁端部を微妙に肥厚させている。

時期 出土した土器から川除8期と考えられる。

第159表 S D54出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1018	須恵器 壺	口径 : 111.9 器高 : 13.8 底径 : 体部径 :	外面 天耳部全体に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部ヨコナテ 内面 ナテ、体部はヨコナテ	外面 灰白 内面 灰白	約1/8	
1019	土師器 壺	口径 : 114.2 器高 : 14.2 底径 : 8.6 体部径 :	外面 内面	外面 黄 内面 黄	体部・底部 約1/5	
1020	土師器 壺	口径 : 116.2 器高 : 14.7 底径 : 13.3 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナテ、体部8番/cmの廻り向のハケ 内面 : 口縁部ヨコナテ、体部横方向の時計回りヘラケズリ	外面 黄 内面 黄澄	口縁部・体 部約1/4	

S D 6 9

検出状況 Ⅲ区の北西部で検出された、小徴高地dの東縁にあたり、東方の、小徴高地bとの間の低地に向かっている溝である。溝は西北西から東南東方向にのびており、両端とも浅くなって消滅する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 長さは4.0mが確認された。幅は、検出面で0.50m、溝底で0.20mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは10～13cmである。溝底の標高は、西端で149.10m、東端で148.90mである。

埋土 灰色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、図化および時期の詳細な決定には困難な資料である。

時期 川除8期と考えられる。

S D 7 2

検出状況 Ⅲ区の北西部で検出された、小徴高地dの東縁にあたり、小徴高地bとの間の低地に向かっている溝である。溝は北西から南東方向にのびており、両端とも浅くなって消滅する。S H69・S D73を切り、S B36などの中世の掘立柱建物に切られている。

形状・規模 長さは22.0mが確認された。幅は、検出面で0.20～0.35m、溝底で0.05～0.10mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは5～7cmである。溝底の標高は、西端で149.40m、東端で149.25mである。

埋土 灰色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 土器の細片が出土しているが、図化および時期の詳細な決定には困難な資料である。

時期 川除8期と考えられる。

S D 7 3

検出状況 Ⅲ区の北西部で検出された、小徴高地dの東縁にあたり、小徴高地bとの間の低地に向かっている溝である。溝は北西から南東方向にのびており、東端は浅くなって消滅する。西端は調査区外である。S H69を切り、S D72・S B36などに切られている。

形状・規模 長さは39.0mが確認された。幅は、検出面で0.30～0.70m、溝底で0.10～0.20mを測る。

横断面はU字形を呈し、検出面からの深さは12~20cmである。溝底の標高は、西端で149.50m、東端で149.15mである。

埋土

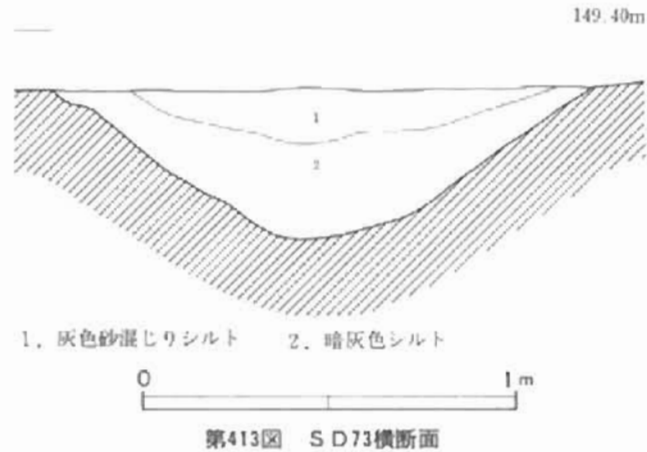
2層に分かれ、上層に灰色砂混じりシルトが、下層に暗灰色シルトが堆積する。

出土遺物

埋土より須恵器の小片、土師器の布留式に属する甕・高坏が出土している。図化は困難である。

時期

川除8期である。



SD82

検出状況

Ⅲ区の南東部隅で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地bの南西部の南側の落ちの下がりきったところに位置している。溝の方向は小微高地の方向にたいしてほぼ直交方向に検出され、北北東から南南西の方向をとる。当遺構と他の遺構との切り合い関係では、SD54を切って検出された。

形状・規模

長さは19.0mが検出された。幅は検出面で0.80~1.60m、溝底で0.30~1.20mを測る。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは16~20cmであり、溝底の標高は北北東側で148.62m、南南西側は148.50mとなっており北北東方向から南南西方向に流れていたようである。

出土遺物

遺物は出土していない。

時期

遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、古墳時代の遺構と考えているSD83と同じ方向とっており、またその延長上に存在していることから、川除9期であると考えたい。

SD83 (図版105・106・116・121・122)

検出状況

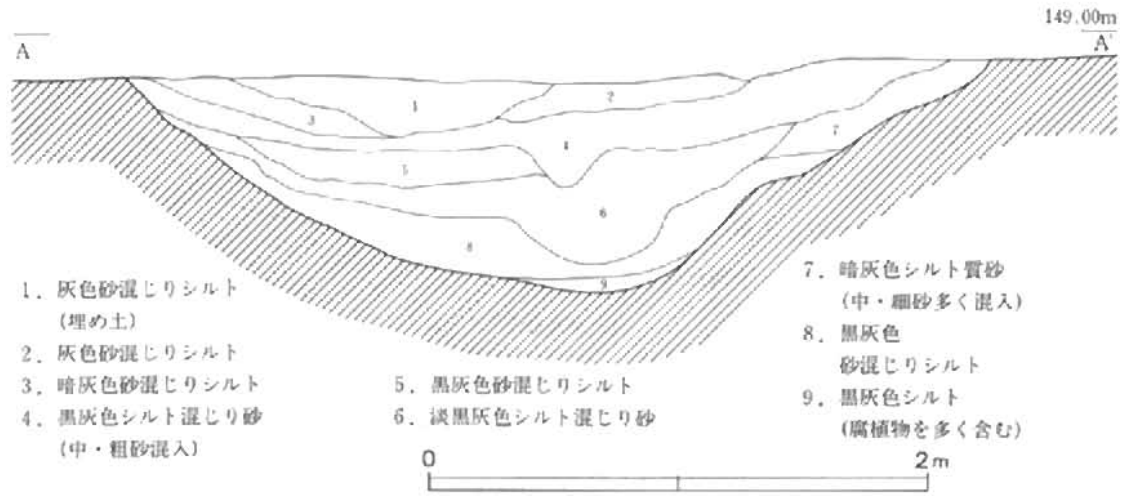
Ⅲ区西部、小微高地b・dと小微高地eの中間部の低地に立地する。西側で東西方向、東側で北西から南東方向に屈曲して掘り込まれた溝である。西端は溜池にとりついており、東側は小微高地bの南縁部、Ⅲ区東端手前で自然に消えている。途中、SD67・SD68・SH66を切り、SD80に切られている。

形状・規模

検出した長さは71mである。検出面における溝の幅は一定していないが、南東方向へ行くほど広がる傾向があり、4.5m~9mを測る。これに対応して、溝の横断面は、幅の狭いところはU字形を呈し、幅の広いところは逆台形を呈している。溝中央部における検出面からの深さは、最も深いところで85cmを測る。また底部における幅は、0.25mから6mを測る。

埋土

9層からなるが、第1層は人為的に埋められた層である。以下は自然に堆積した層と考えられ、シルトを主体とした層が堆積している。また、土層断面の観察から、本溝は少な



第414図 SD83横断面

くとも数回は掘り返されたようである。

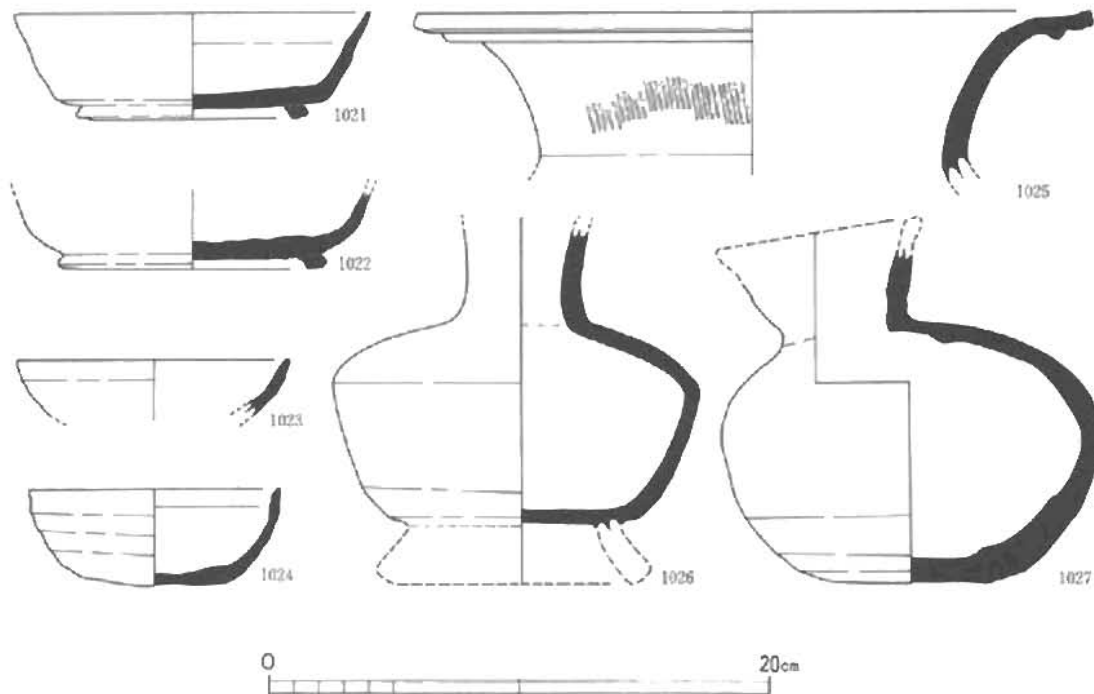
出土遺物 土器と木製品が出土している。

土器 土器は、埋土中および溝底より須恵器と土師器が出土している。

須恵器 坏A・坏B・長頸壺・横瓶・甕が出土している。このうち図化できたのは、坏・甕・平瓶の7個体分である。

坏B 底部から体部への屈曲が明瞭で、高台はこの屈曲部より内側に貼り付けられている。なお1022の内面には墨痕が認められ、硯に転用されていたようである。

坏A 2個体出土しているが、完存するのは1024の1個体のみである。底部をヘラ起こしによって切り離されている。口縁端部は強いナデ調整により、内傾する端面をもつ。内外面ともナデ調整により仕上げられているが、底部内面は不定方向のナデ調整により仕上げられ



第415図 SD83出土土器

ている。

甕 口縁部のみの残存である。大きく外反する口縁端部をナデ調整により端面をなし、断面方形を呈する。口縁端部近くの外面に断面三角形の凸帯をめぐらす。外面は縦方向を主体としたタタキ整形の後、ナデ調整により仕上げられている。内面は、頸部付近をへら状工具によるナデ調整、口縁部をナデ調整により仕上げられている。

壺 口縁部と底部を欠くが、長頸壺と推定される。また、底部下面に高台の剝離痕が認められることから、高台が付くタイプであることがわかる。

平瓶 口縁部を欠くが、他は完存している。

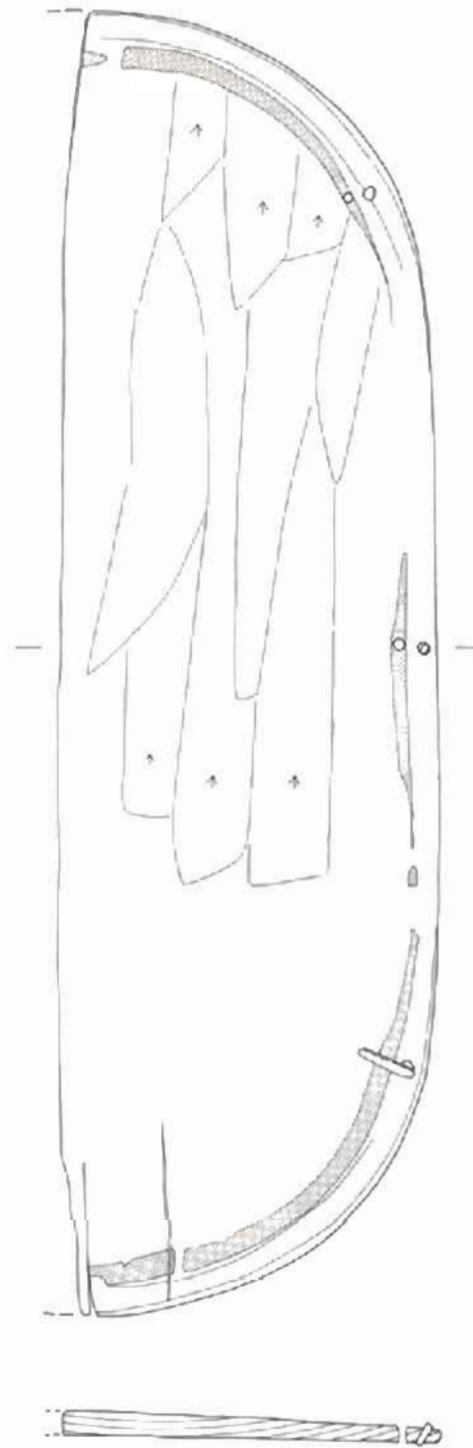
土師器 小片のため器種の特定も困難であった。

時期差 出土遺物特に須恵器の形態から、3時期に分けることができる。古い順に、甕の示す時期、杯Aと壺・平瓶の示す時期、杯Bの示す時期である。

木製品 埋土上層から折敷が出土している。全体の約1/4が残存している。一辺約52.2cmを測り、厚さは7～9mmである。3ヶ所で、2穴で一対となる縦じ穴が認められ、そのうちの2ヶ所では桜皮を利用した紐が遺存していた。また、これらの縦じ穴の位置から、側板が折敷外縁部から1.8cmのところにつけられていたと推定できる。さらに、この推定される側板の内側のラインに沿うように黒色の付着物が認められる。また、この外側では、コーナー部分を中心に針書刻線が認められる。樹種はヒノキである。

時期 出土土器から判断すると古墳時代中期まで遡るが、当該期の遺物はほぼ同時期のS D54などの遺構を掘削したことによるものと考えたい。したがって、他の遺物から川除9期と考えられる。

遺構の性格 本溝については、本来はS D86・溜池と一体となって機能していたものと考えられ、水田への水利施設の役割を果たしていたものと考えられる。



第416図 S D83出土木製品

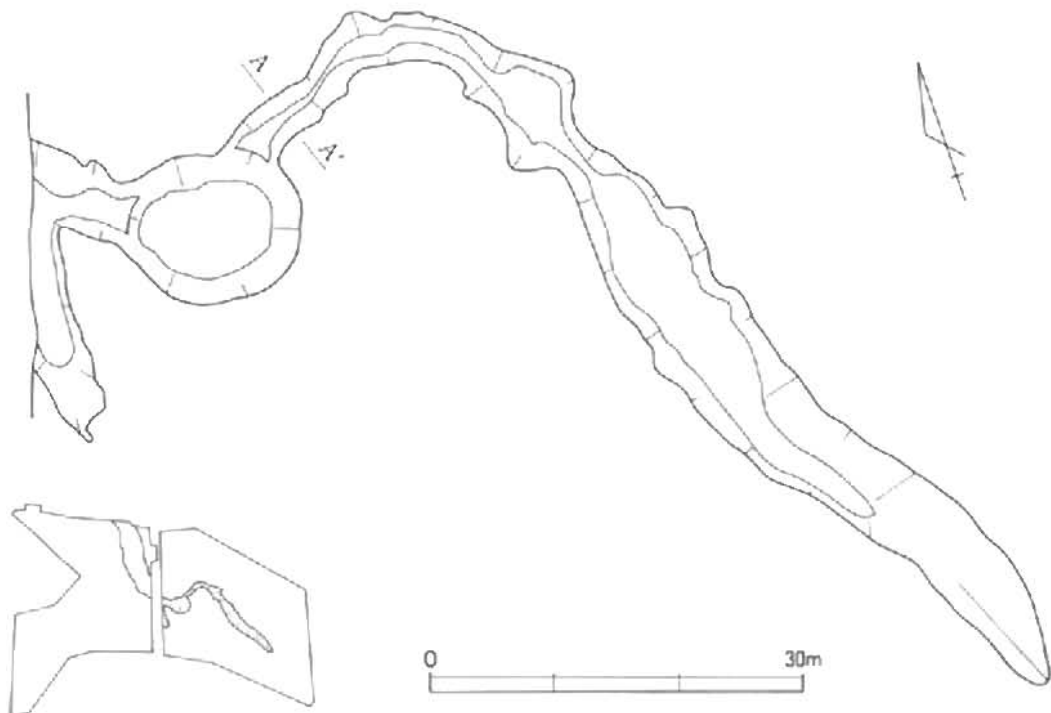
第160表 S D83出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1021	須恵器 平	口径 (14.3) 底径 (9.2) 器高 4.3 胴径: 体部径	外面: 体部ヨコナテ, 底部はヘラナテのみ高台貼付けに伴うヨコナテ 内面: ヨコナテ	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部1/8 体部1/3 底部完全	
1022	須恵器 平	口径 (10.4) 底径 (6.4) 器高 4.0 胴径: 体部径	外面: ヨコナテ 内面: ヨコナテ	外面: 灰白 内面: 灰白	体部1/10 底部完全	底部に巻付着
1023	須恵器 平	口径 (10.8) 底径: 器高 2.5 胴径: 体部径	外面: ヨコナテ 内面: ヨコナテ	外面: 灰白 内面: 灰白	口縁部1/8	
1024	須恵器 平	口径 (19.9) 底径 (5.7) 器高 4.9 胴径: 体部径	外面: 体部ヨコナテ, 底部はヘラコンののみ不定方向の粗いナテ 内面: ヨコナテ, 中央に不定方向のナテ	外面: 灰 内面: 灰	完全	
1025	須恵器 甕	口径 (25.6) 底径: 器高 19.7 胴径 (17.1) 体部径	外面: 口縁部ヨコナテ, 胴部5cmのタタキのみヨコナテ 内面: ヨコナテ	外面: 暗灰 内面: 暗灰	胴部・口縁部約1/4	
1026	須恵器 長頸壺	口径: 器高 12.1 胴径 5.0 体部径 (14.7)	外面: 胴部から肩部ヨコナテ, 体部下半ヘラケズリ, 底部は高台貼付けに伴うヨコナテ 内面: 胴部ヨコナテ, 体部は不明	外面: 暗オリーブ 内面: 暗灰	胴部約1/2 体部完全 高台欠失	胴部から肩部に自然釉
1027	須恵器 平瓶	口径 6.6 底径 6.6 器高 12.2 胴径 5.0 体部径 15.0	外面: 胴部ヨコナテ, 体部上半カキメ, 体部下半ヘラケズリ, 底部ナテ 内面: 胴部ヨコナテ, 体部は不明	外面: 灰 内面: 灰白	胴部約1/2 体部完全	体部に自然釉・土器小片附着

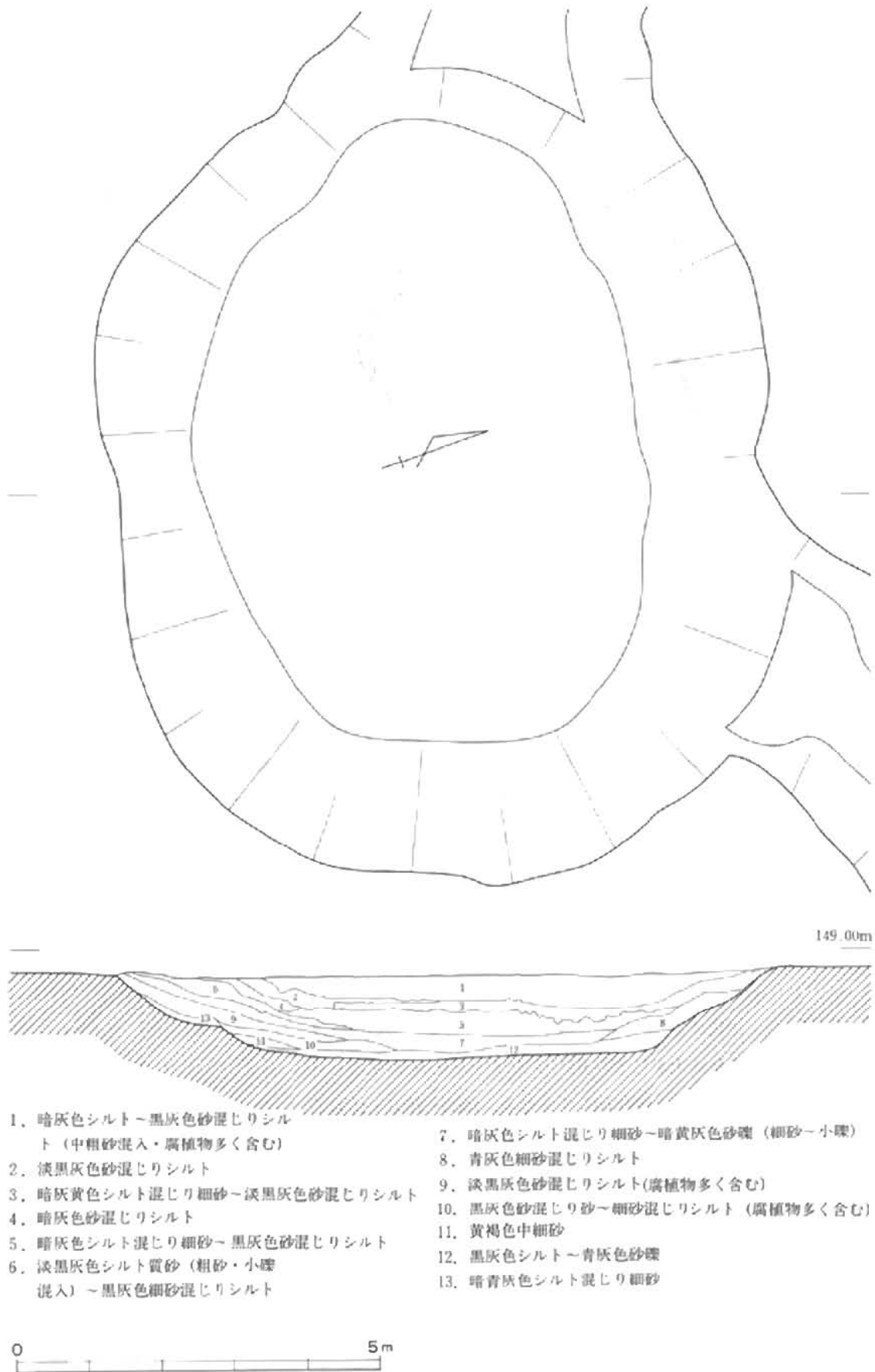
溜池 (図版105・106・117・121)

検出状況 Ⅲ区の西端部に位置し、小微高地dと小微高地eの間の小低地に立地する。西側でS D86と、東側でS D83とそれぞれ接続している。またS D54を切っている。

形状・規模 平面形は円形に近い楕円形を呈する。検出面における長軸の長さは13.5mを測り、その直交方向では10.5mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.30mである。また

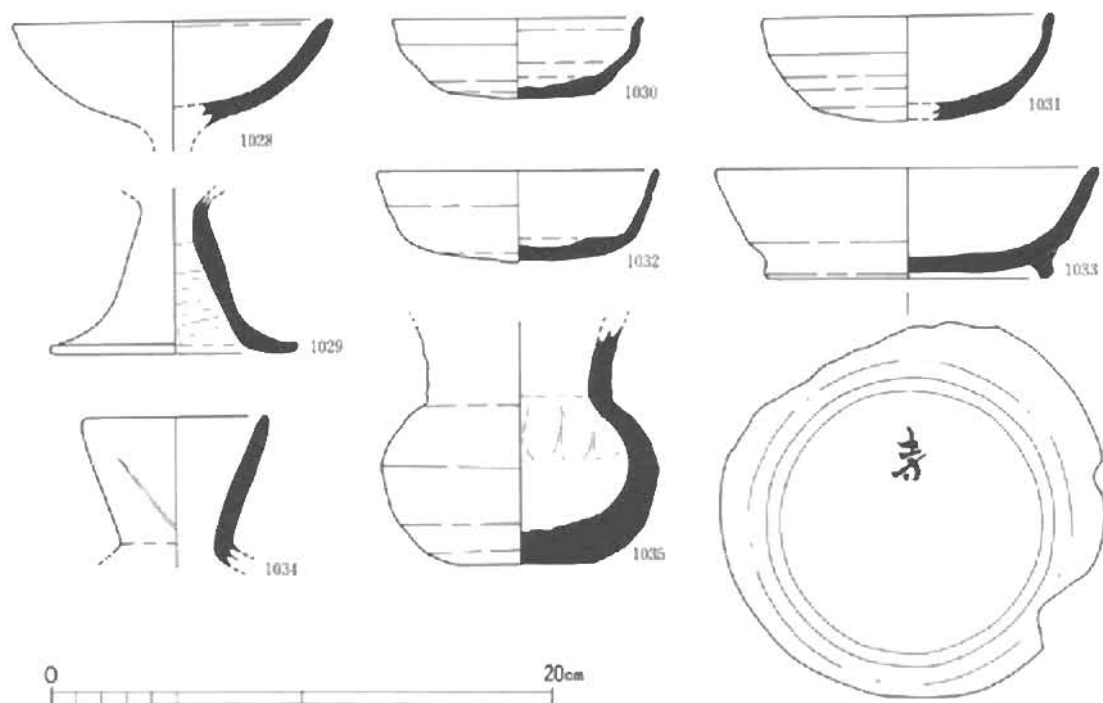


第417図 S D83・溜池・S D86



- | | |
|--|---|
| <p>1. 暗灰色シルト～黒灰色砂混じりシルト (中粗砂混入・腐植物多く含む)</p> <p>2. 淡黒灰色砂混じりシルト</p> <p>3. 暗灰黄色シルト混じり細砂～淡黒灰色砂混じりシルト</p> <p>4. 暗灰色砂混じりシルト</p> <p>5. 暗灰色シルト混じり細砂～黒灰色砂混じりシルト</p> <p>6. 淡黒灰色シルト質砂 (粗砂・小礫混入)～黒灰色細砂混じりシルト</p> | <p>7. 暗灰色シルト混じり細砂～暗黄灰色砂礫 (細砂・小礫)</p> <p>8. 青灰色細砂混じりシルト</p> <p>9. 淡黒灰色砂混じりシルト (腐植物多く含む)</p> <p>10. 黒灰色砂混じり砂～細砂混じりシルト (腐植物多く含む)</p> <p>11. 黄褐色中細砂</p> <p>12. 黒灰色シルト～青灰色砂礫</p> <p>13. 暗青灰色シルト混じり細砂</p> |
|--|---|

第418図 溜池



第419図 溜池出土土器

底部における幅は8.50mである。本遺構の容積は積分法によると約73m³である。

埋土 13層に分かれるが、基本的には有機質・腐植物を多く含むシルト層と流れ込みによる砂層ないし砂礫層との互層になっている。これらの堆積の多くはS D86から流れ込こんだものと考えられる。各層とも淘汰の悪い攪乱層で、かつ多くの層でラミナが観察されることから、かなりの勢いで流れ込んだものと推定される。特に溜池の西側ほどその傾向が顕著である。

出土遺物 土器と木製品が出土している。いずれも埋土中からの出土である。

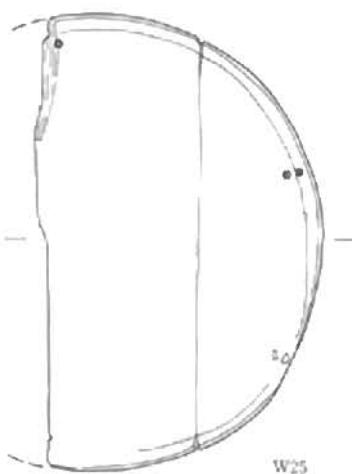
土器 須恵器の坏A・坏B・壺・提瓶および土師器の高坏・甕が出土しているが、図化できたのは土師器の一部と須恵器の各器種である。

土師器 図化できたのは高坏の2点のみである。この他に甕の小片が出土している。

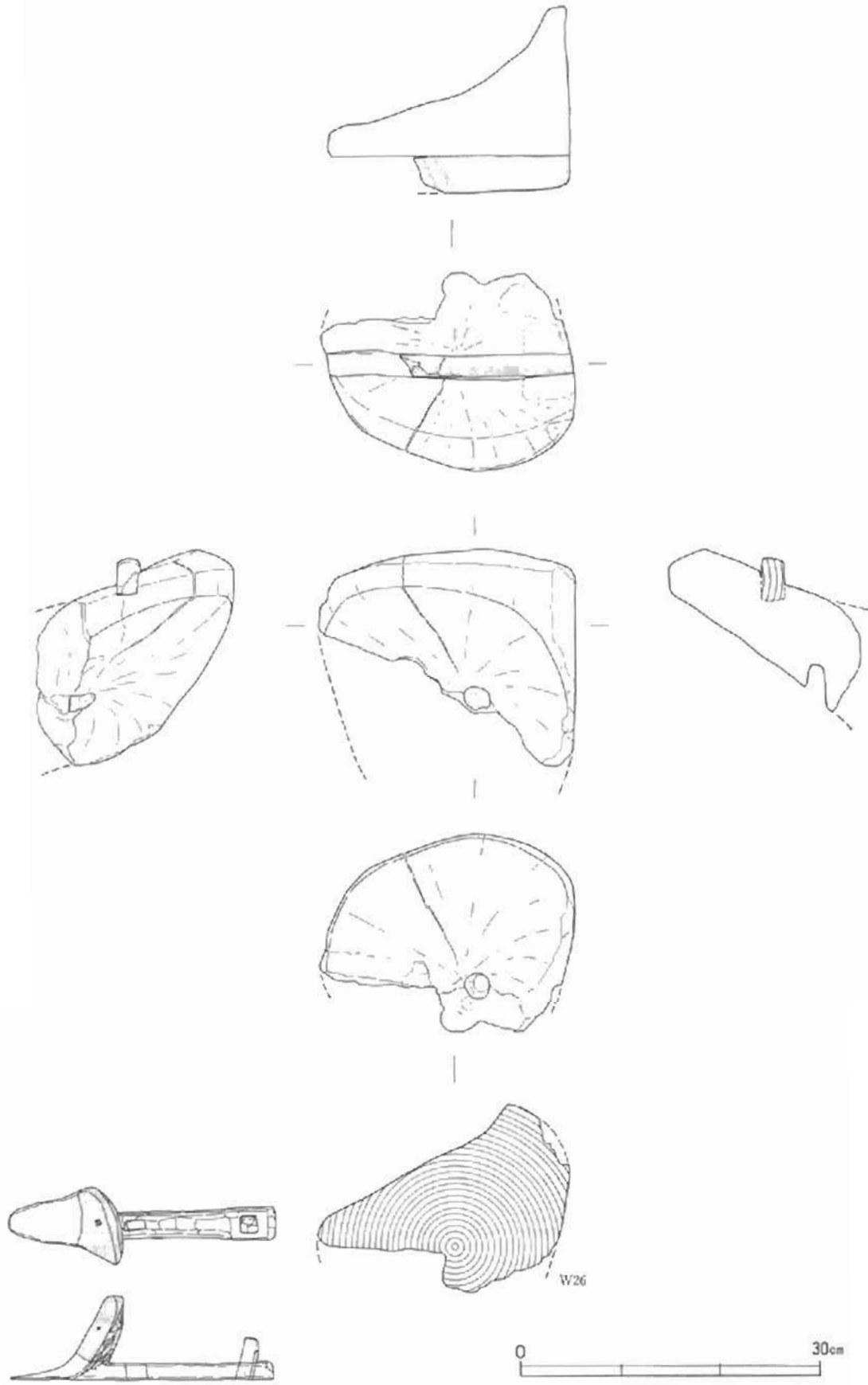
須恵器 坏Aは、3個体図化できたが、1030・1031と1032では時期差が認められる。また1033の坏Bについても1032の坏Aに対応するものと考えられる。特に1033については、底部に「寺」と墨書されている点が注目される。提瓶は口縁部のみの残存である。また1035の壺は、全体的に仕上げが雑で、器壁が大変厚い点が特徴的である。

木製品 曲物蓋と犁（カラスキ）が埋土中より出土している。

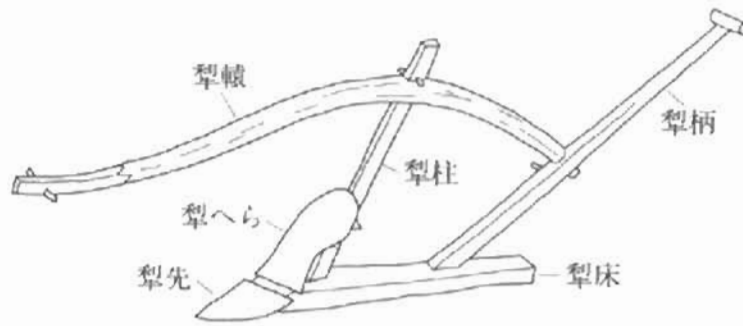
曲物蓋 1/2強残存しており、復元される径は18.4cmである。



第420図 溜池出土木製品（1）



第421図 溜池出土木製品(2)



第422図 民具資料の犁と部分名称

厚さは7mmを測る。4ヶ所に側板を接合するための綴じ穴が認められる。樹種はヒノキである。

犁 河野通明氏の指摘により犁の一部であることがわかったもので、へらの一部と考えられる破片である。耕作者の進行方向に向かって右縁より左縁の方が厚く作られている。また、平面形も左縁が前方に出ているため、耕作土を右側に反転する機能があったものと考えられる。

へらの幅は25cmを測り、へら床の厚さは最大で4.5cmである。また、へらの傾斜角度は10～25°である。

時期 出土遺物およびS D83・S D86との関係から川除9期と判断される。

遺構の性格 S D86から供給された水を一端本遺構に貯え、S D83へ配水する溜池として機能していたものと考えられる。詳しくは、S D83と合わせて章を改めて検討するつもりである。

第161表 溜池出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調 整	色調	残存率	備考
1028	土師器 高杯	口径 (17.6) 底径: 器高 4.2 胎径: 体部径:	外面 口縁部ココナテ、肩部は不明 内面 腹方向のハケスリのみココナテ	外面 土に近い 内面 灰黄	肩部約1/3	
1029	土師器 高杯	口径 : 底径:9.8 器高 : 4.1 胎径: 体部径:	外面:ココナテ 内面:特設器りのヘラケスリ	外面:灰白 内面:灰白	柱状部完存 肩部約3/4	
1030	土師器 杯	口径 : (9.8) 底径: (6.1) 器高 : 3.2 胎径: 体部径:	外面 体部ココナテ、底部ヘラケスリのまま 内面 ココナテ	外面:灰 内面:灰	約2/3	
1031	土師器 杯	口径 : (11.4) 底径: (8.0) 器高 : 4.2 胎径: 体部径:	外面 口縁部ココナテ、体部下半部方向のヘラケスリのみココナテ 底部ヘラケスリのまま 内面 ココナテ	外面 灰白 内面 灰白	約1/3	
1032	土師器 杯	口径 : 11.1 底径 6.9 器高 : 3.6 胎径: 体部径:	外面:体部ココナテ、底部ヘラケスリのまま 内面 ココナテ	外面:オリーブ 内面:オリーブ 灰	体部完存 口縁部約3/4	
1033	土師器 杯	口径 15.1 底径 10.9 器高 4.4 胎径: 体部径:	外面 ココナテ 内面:ココナテ、中央に不定方向ナテ	外面 灰黄褐色 内面 灰黄	体部完存 口縁部約3/3	底部に「寺」 の墨書あり
1034	土師器 平鉢か	口径 17.2 底径 器高 4.6 胎径 5.0 体部径:	外面:ココナテ、肩部にへらによる割線あり 内面:ココナテ	外面 オリーブ 灰 内面 暗灰	口縁部1/4	自然破片着
1035	土師器 盃	口径 底径 5.2 器高 4.6 胎径 7.4 体部径 11.0	外面 肩部ココナテ、体部下半部のみ、体部下半は不連続ヘラケスリ 内面 肩部ココナテ、体部は上半にエビヤサエのみ全体をココナテ	外面 灰 内面 灰	肩部約1/5 体部完存	

SD86 (図版105・121)

検出状況 Ⅲ区の西端に位置し、小微高地dと小微高地eの中間の小低地に立地する。西側はⅣ区へのび、東端は溜池に接続している。このため、Ⅲ区においてはわずかしこ検出できず、多くはⅣ区内に位置している。また、本溝の支流が西側調査区側壁に沿って南側へ約18.0mほど流れている。

形状・規模 検出した長さは8mである。検出面における幅は5.50mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.90mである。また底部における幅は1.50～2.50mである。

埋土 大きく2層からなり、上層は黒灰色シルト層が、下層は砂礫層が堆積していた。下層の砂礫層については拳大よりやや大きめの礫も含まれていた。特に支流部分の埋土の大半はこの砂礫層であった。

出土遺物 土器は出土しなかったが、木製品が出土している。

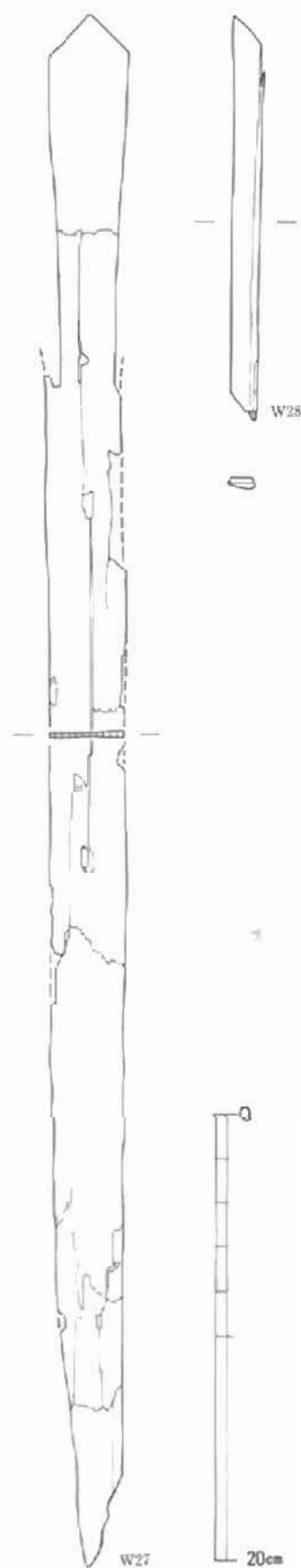
木製品

2点出土しておりいずれも齧串である。2点とも確認調査で出土したものであるが、この齧串が出土したグリッドが本遺構の中央部にあたることから、全面調査の時点で本遺構に伴う遺物と判断したものである。

W27は、確認調査で取り上げた際にすでにいくつかの小片となっており、それらを接合させてかろうじて全体が復元できるものである。頭部は圭頭をなし、頸部で削り出しの痕跡が認められる。C型式(『木器集成図録 近畿古代篇』)に分類されるものである。先端は、左右対象とはなっていないが、削り出しによって鋭角となっている。全長69.1cmを測り、最大幅は3.5cmである。また厚さは0.3cmである。樹種はヒノキである。

W28は、W27と比べて小型のもので、A型式(『木器集成図録 近畿古代篇』)に分類されるものがある。頭部および先端部はともに一方向のみに切り出したもので、全体として平行四辺形をなしている。全長18.1cmを測り、最大幅は1.3cmである。樹種はヒノキである。

時期 当遺構に伴う遺物は出土しなかったが、SD83・溜池との関係から川除9期に機能していたものと考えられる。また、Ⅳ区で検出した本溝の上流部の埋土上層およびその上面から出土した土器から川除11期に完全に埋没したものと考えられる。



第423図 SD86出土木製品

S D 8 7

検出状況 Ⅲ区の南西部隅で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の南側の落ちの下がりきったところに位置している。溝の方向は小微高地の方向に対してほぼ直角方向に検出され、北から南の方向をとる。当遺構と他の遺構との切り合い関係はないが、溝は南側の調査区範囲外にまでのびている可能性がある。

規模・形状 長さは11.5mが検出された。幅は検出面で0.15～0.45m、溝底で0.10～0.20mを測る。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは3～5cmであり、溝底の標高は北側で149.06m、南側は149.06mとなっており両者の比高差はほとんど認められない。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、古墳時代の遺構と考えているSD86と同じ方向をとっており、またその延長上に存在していることから、川除9期の遺構であると考えたい。

S D 8 8

検出状況 Ⅲ区の南西部隅で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の南側の落ちの下がりきったところに位置している。溝の方向は小微高地の方向にたいしてほぼ直角方向に検出され、北から南の方向をとる。SD87とはほぼ平行して検出されている。当遺構と他の遺構との切り合い関係はないが、溝は南側の調査区範囲外にまでのびている可能性がある。

規模・形状 長さは18.0mが検出された。幅は検出面で0.30～0.50m、溝底で0.15～0.20mを測る。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは10～13cmであり、溝底の標高は北側で149.00m、南側は148.98mとなっており両者の比高差はほとんど認められない。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、古墳時代の遺構と考えているSD86と同じ方向をとっており、またその延長上に存在していることから、川除9期の遺構であると考えたい。

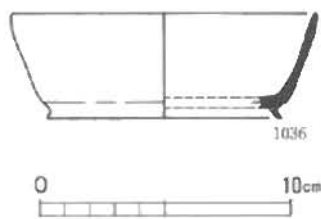
S D 7 0

検出状況 Ⅲ区の北西部で検出された、小微高地dの東縁にある。溝は西北西から東南東方向にのび、小微高地bとの間の低地に向かう。両端は浅くなって消滅する。

形状・規模 長さは9.60mが確認された。幅は、検出面で0.45～0.60m、溝底で0.45～0.55mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは5～7cmである。溝底の標高は、149.15m程度で高低差はあまりない。

埋土 灰白色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 須恵器の坏B・長頸壺・甕、土師器の小片が出土している。図化できたのは坏B1点のみである。小片であるため不確定であるが、径高指数は34程度である。高台の高さは0.4cm、接地面は外側である。

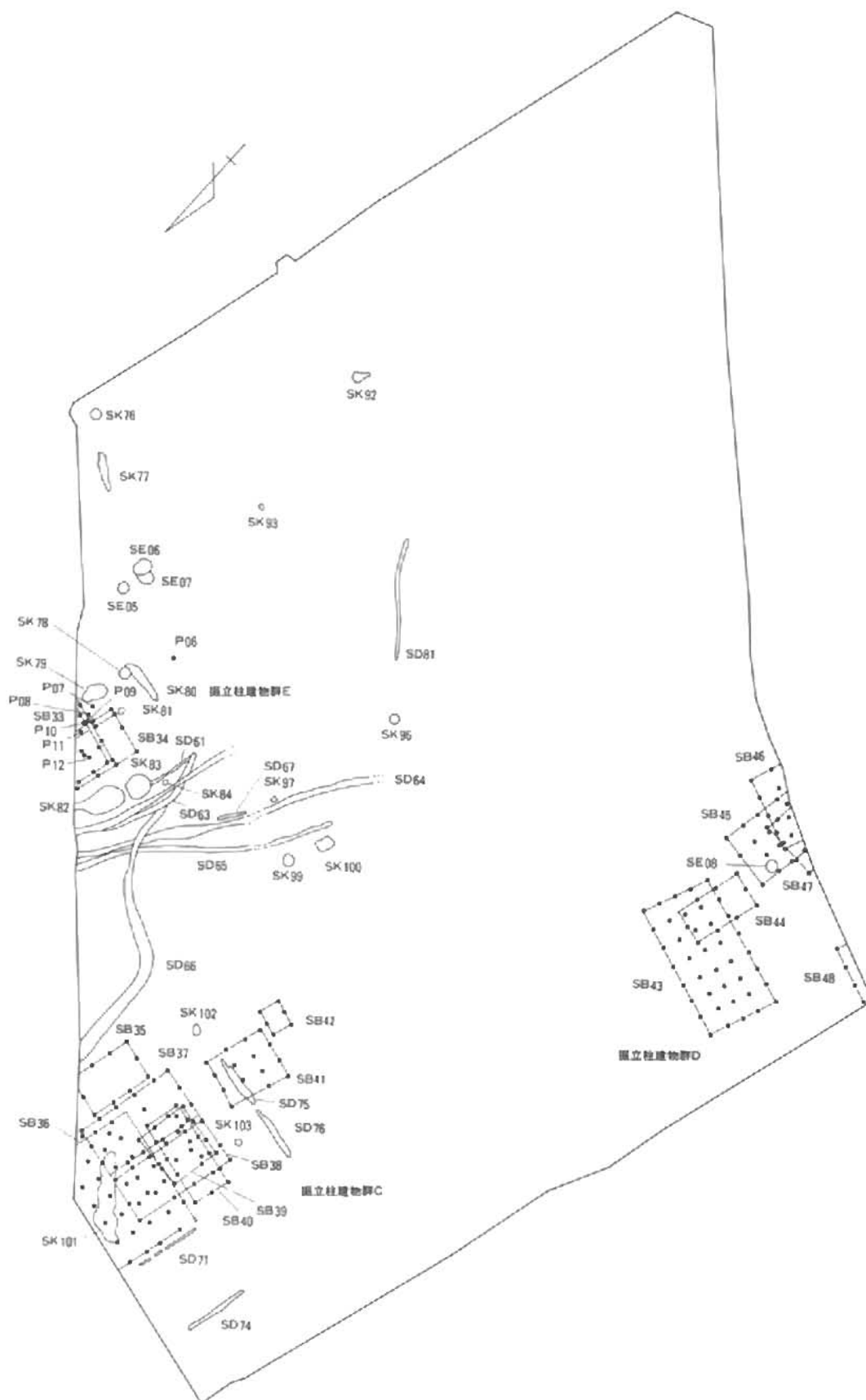


第424図 S D 70出土土器

時期 川除10期である。

第162表 S D70出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1036	須恵器 埴	口径 12.2 底径 9.3 器高 4.2 胴径 体部径 9.4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	外面：明オリ 一ツ灰 内面：灰	約1/8	



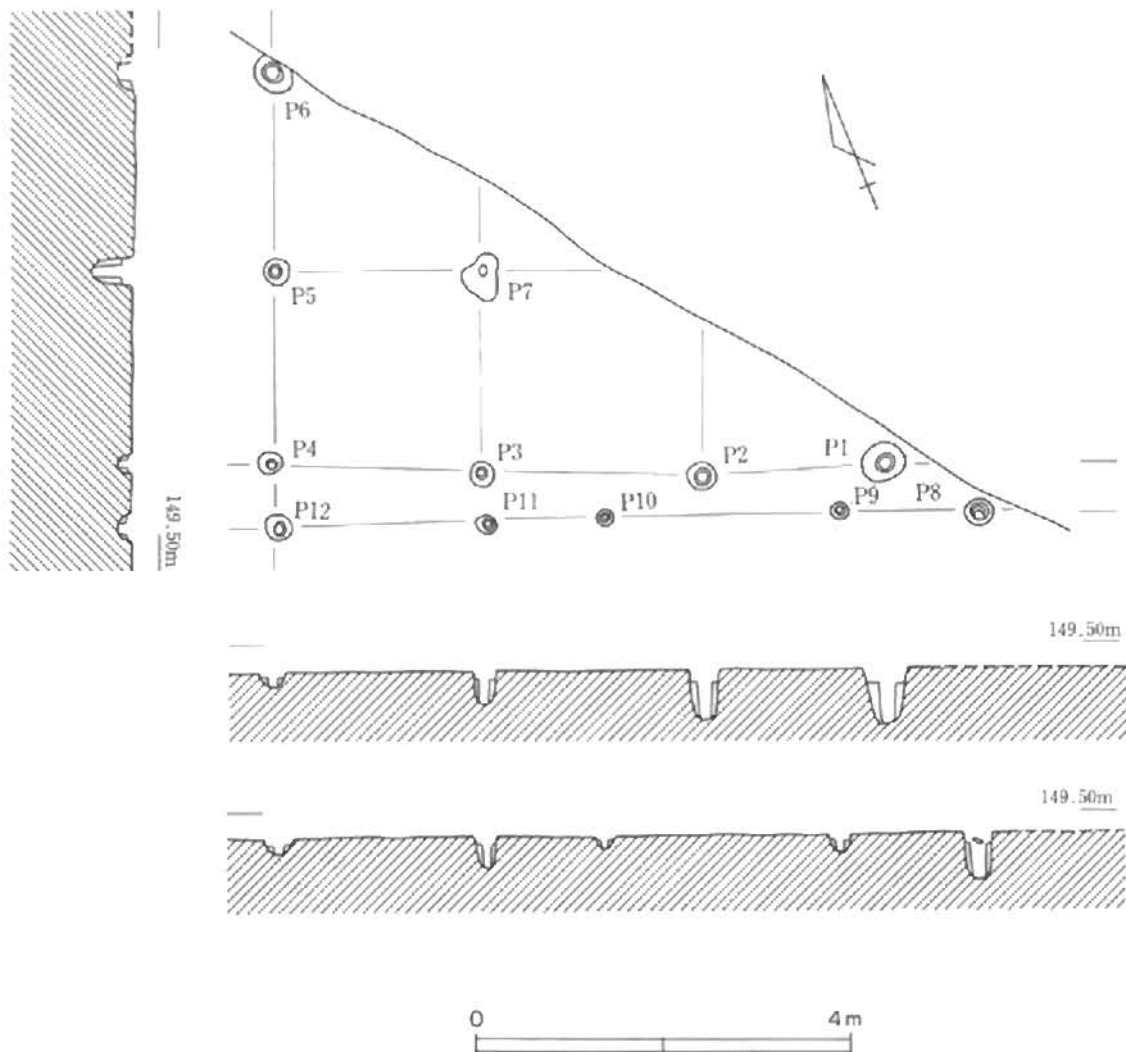
第425図 Ⅲ区平安時代～鎌倉時代の遺構

4. 平安時代以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB33

- 検出状況** Ⅲ区の北東部、小磯高地bの西端で検出された。北東部が調査区外にあるため、全容は不明である。SB34と切り合っている。
- 形状・規模** N-18°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間以上、梁行2間以上の掘立柱建物である。規模は桁行方向が6.56m以上、梁行方向が4.15m以上である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.18mであり、梁行は2.08mを測る。
- 底** 南方方向に底が確認された。長さは7.50m以上である。4間が確認できたが、柱穴間の距離は不均等である。最も西側の1間は、身舎の柱筋と合致している。
- 柱穴** 身舎を構成する柱穴の掘り方は円形であり、その直径は28~42cm、柱痕の直径は10~16cmである。深さは25~57cmを測る。
- 底を構成する柱穴も直径15~28cmの円形であり、身舎のそれに比べて若干小さいもので



第426図 SB33

ある。柱痕の直径は10～25cm、深さは15～53cmである。

出土遺物 土器は出土していない。

時期 同一方向をもって切り合うSB34と近い時期のものであろう。

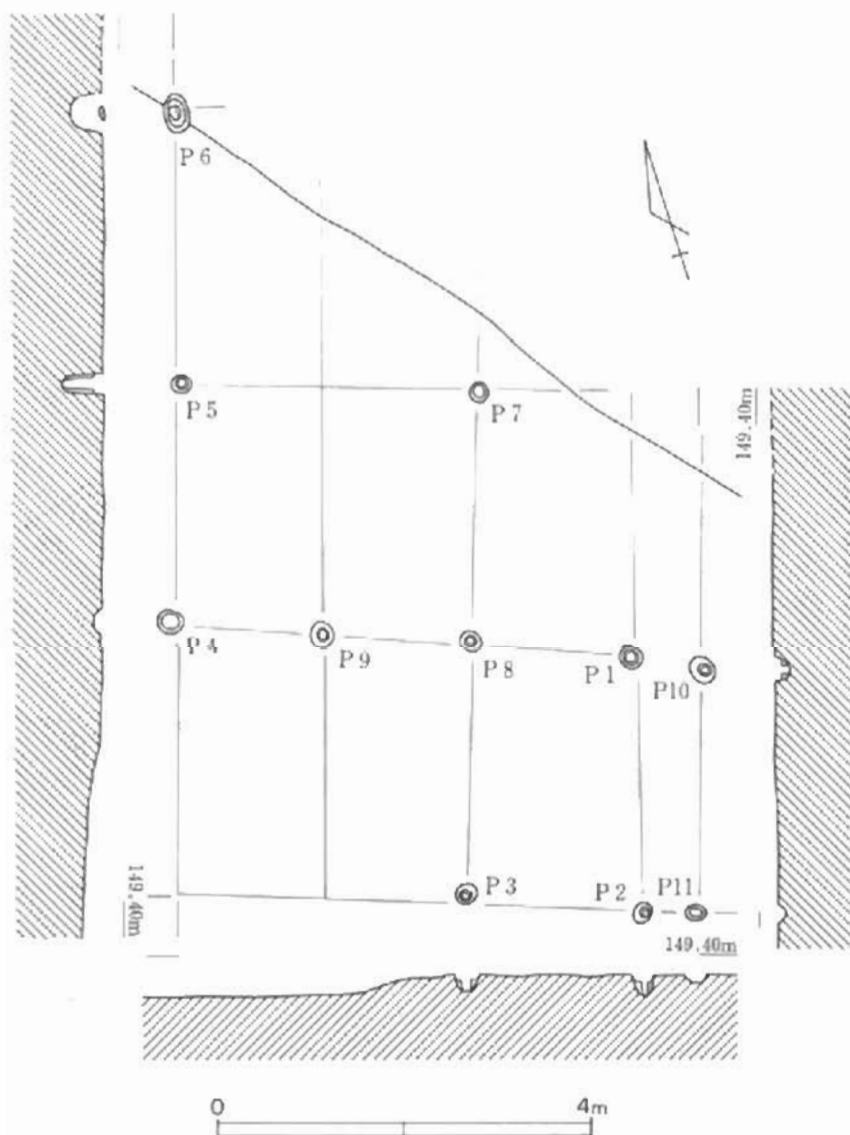
SB34

検出状況 III区の北東部、小微高地bの西端で検出された。北東部が調査区外にあるため、全容は不明である。SB34と切り合っている。

形状・規模 N-15°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間以上、梁行3間以上の掘立柱建物である。規模は桁行方向が8.25m以上、梁行方向が2.50m以上である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.75mであり、梁行は2.50mを測る。

庇 東方向に庇が確認された。長さは2.50m以上である。1間分しか確認できなかった。

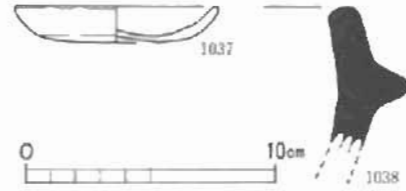
柱穴 身舎を構成する柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～30cm、柱痕の直径は12～15cmである。深さは5～49cmを測る。



第427図 SB34

底を構成する柱穴も掘り方は円形であり、その直径は20~30cmであり、柱痕の直径は12cm、深さは18cmである。

出土遺物 身舎を構成する柱穴P1より土器および石鍋が、P7・9から土師器の小片が、P6から瓦器の小片が出土している。



第428図 SB34出土土器

土師器 1037は土師器の小皿であり、手捏ねによる整形後、ヨコナデを施している。

石鍋 1038は滑石製の石鍋の小片である。

時期 出土土器から川除12~13期と考えられる。

第163表 SB34出土土器観察表

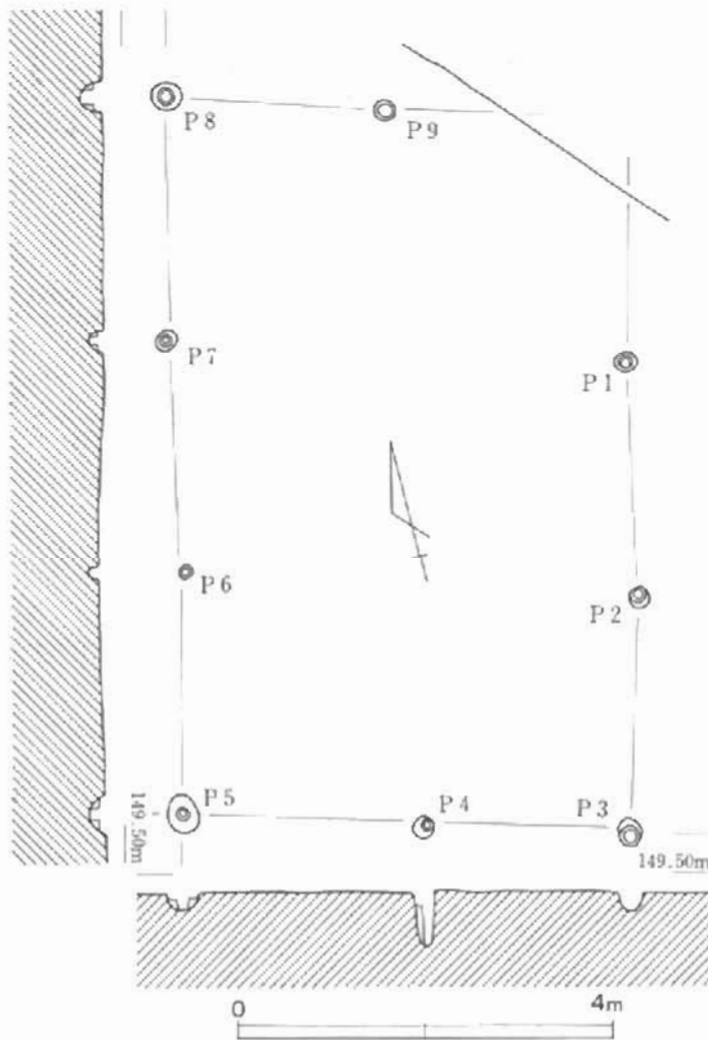
番号	器種	法量 (cm)						色調	現存状況	特徴・その他
		口径	器高	胴径	胴径	最大径	胎数			
1037	土師器・小皿	(8.1)	1.5				18	明褐色~灰白	1/4	P1掘り方出土
1038	石鍋		残5.2			(8.7)			小片	外面に煤多く付着 P1掘り方出土

SB35

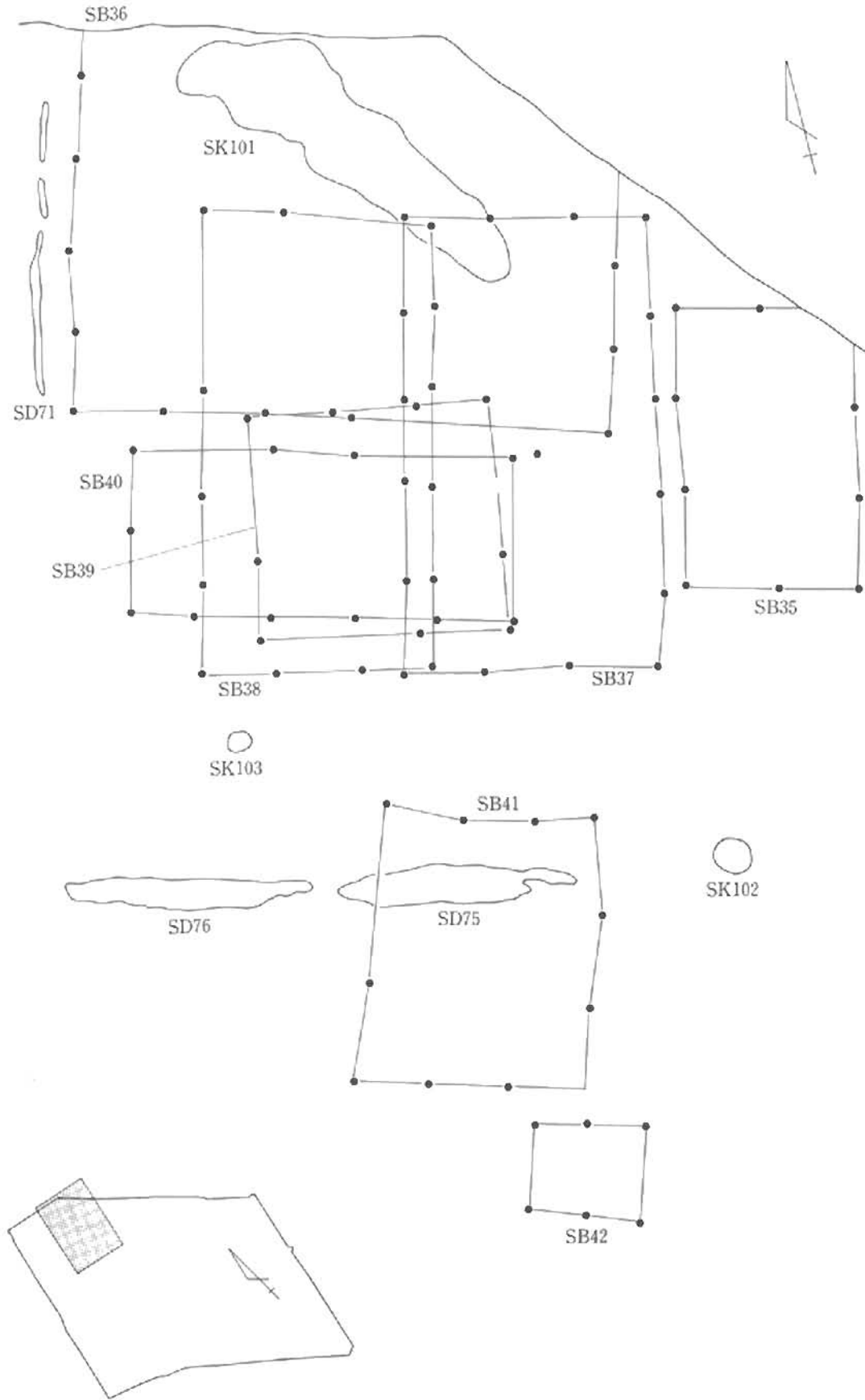
検出状況 Ⅲ区の北西部、小高い地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cのなかでも最も東に位置する建物であり、SH68を切っている。北東隅の柱穴は調査区外である。

形状・規模 N-14°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の掘立柱建物である。東柱は持たない。規模は桁行方向が7.60m、梁行方向が4.78mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.53mであり、梁行は2.39mを測る。推定される面積は36.3㎡である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22



第429図 SB35



第430図 掘立柱建物群C

～35cm、柱痕の直径は12～16cmである。深さは10～60cmを測る。

出土遺物 P4より須恵器の椀が、P7より土師器、須恵器の椀・甕が、P8より土師器の椀がそれぞれ出土しているが、図化および時期の詳細な決定には困難な資料である。

時期 出土土器から川除11～13期と考えられる。

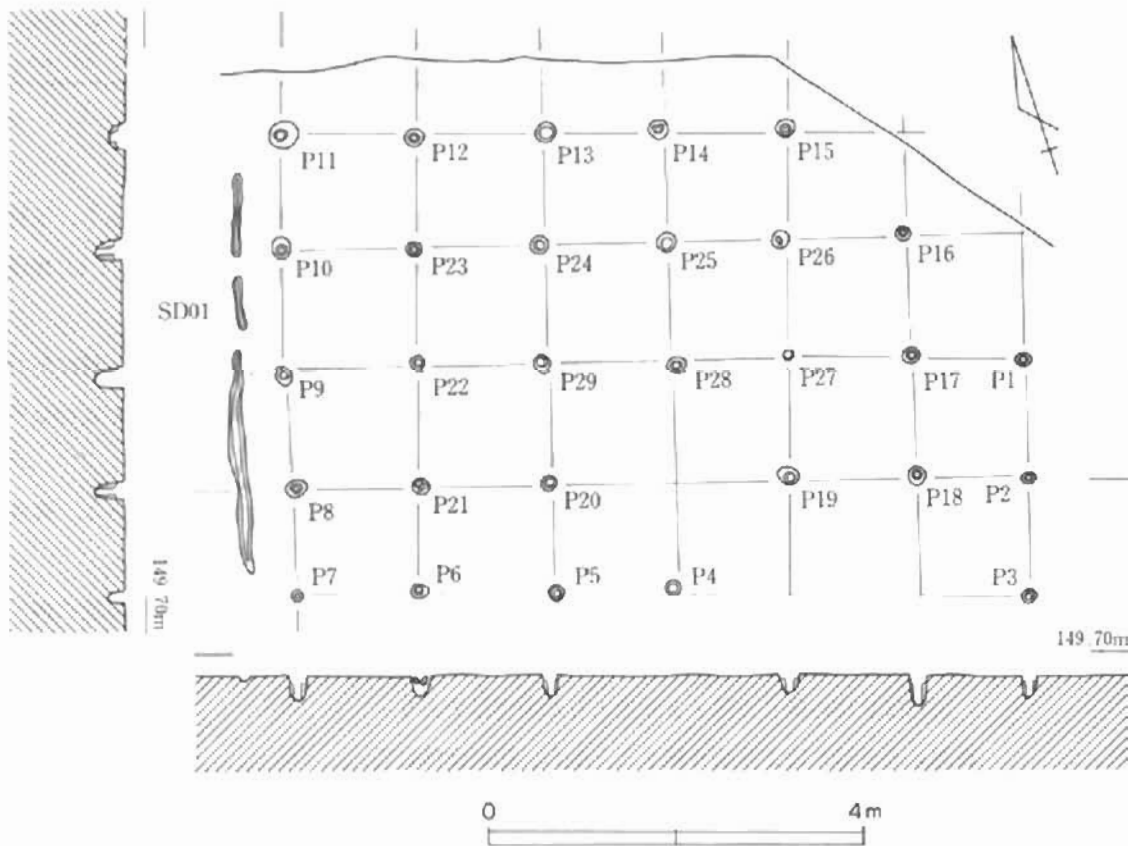
SB36

検出状況 Ⅲ区の北西部、小微高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cのなかでも最も北に位置する最大規模の総柱の掘立柱建物である。SH68・SK101を切っている。北半部は調査区外であるため、全容は不明である。

形状・規模 N-15°-Eに棟軸の方向をとる桁行4間以上、梁行6間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が9.15m以上、梁行方向が14.7mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.29mであり、梁行は2.45mを測る。

雨落溝 身舎の西側に棟軸方向と平行する雨落溝SD71が検出された。身舎の東側には、削平のためか、雨落溝は検出されなかった。SD71とSB36の最も西側の柱筋との間隔は70cmを測る。長さは8.00mが断続的に確認され、検出面における幅は20～30cm、溝底における幅は5～10cmを測る。深さは2～3cmと浅く、溝底の標高は149.25mである。溝内からは遺物の出土をみなかったが、埋土の類似から同一時期と考えてよい。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25～60cm、柱痕の直径は15～30cmである。深さは24～64cmを測る。



第431図 SB36

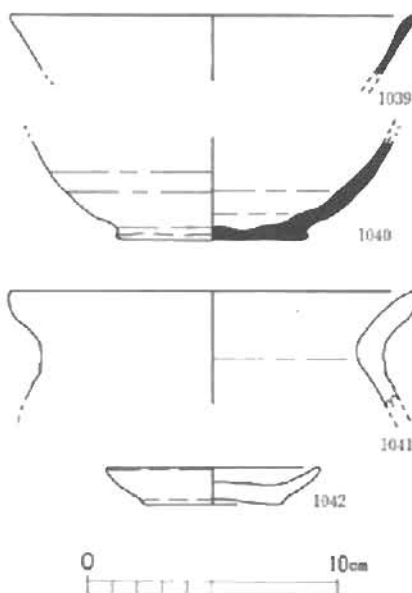
第5節 III区の調査

出土遺物 P 4・5・10・11・12・15より土師器、須恵器碗が出土している。P 2・3・6・8・18・19・22・23・25・26の各柱穴より土師器の小片が出土している。

1040および1042の底部の切離しには、回転糸切り手法を用いている。

1041は、P 26の掘り方より出土したもので、図示できなかったが、体部外面には平行タキの痕跡が認められる。

時期 出土土器から川除13期と考えられる。



第432図 S B36出土土器

第164表 S B36出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	指差			
1039	須恵器・碗	16.0	残2.4	—	—	—	—	灰白	口縁部1/6	P26掘り方出土
1040	須恵器・碗	—	残4.1	(7.5)	—	—	—	灰-黄灰	底部1/2・底部僅か	他成や干良/底部糸切り P26掘り方出土
1041	土師器・壺	16.0	残4.7	—	(15.6)	—	—	灰黄期	口縁部1/6	内面に汚れあり P26掘り方出土
1042	土師器・小皿	18.4	1.5	5.4	—	—	17	灰白-浅黄期	口縁部1/6・底部完存	底部糸切り P26柱痕出土

S B37

検出状況 III区の北西部、小微高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cのなかにある。SH 68・SK 101を切っている。重複しながら西接するS B38とは棟軸の方向を同じくし、規模も同一と考えられるため、建て替えが行われたとしてよい。

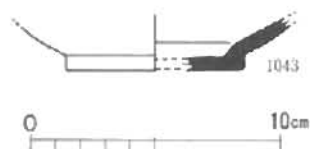
形状・規模 N-17-Eに棟軸の方向をとる桁行5間以上、梁行3間の総柱建物である。規模は桁行方向が12.32m、梁行方向が6.88mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.46mであり、梁行は2.29mを測る。面積は84.76㎡である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~36cm、柱痕の直径は12~20cmである。深さは12~45cmを測る。P 5・12・19の柱痕埋土中には円礫が含まれていた。

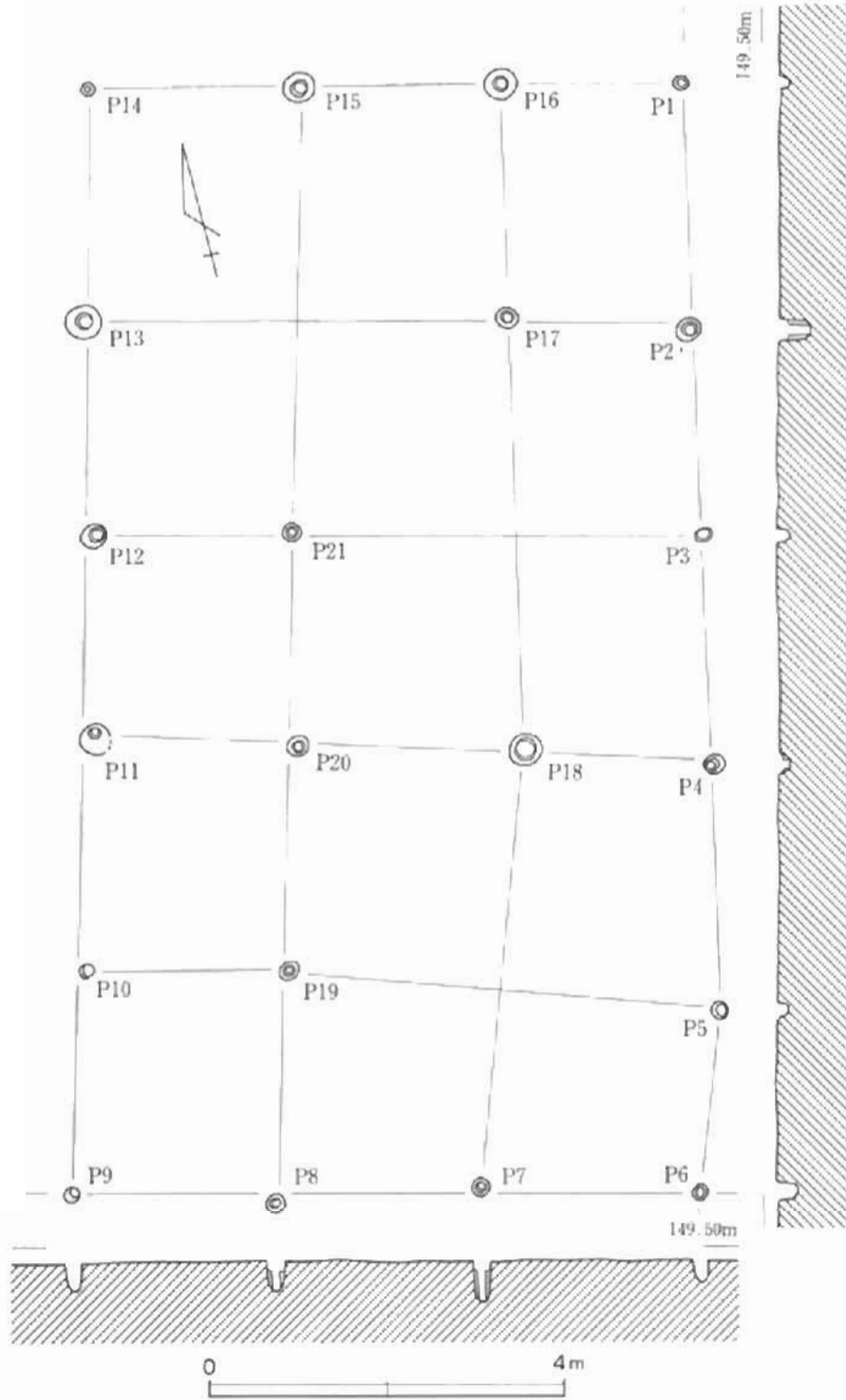
出土遺物 P 3・5・11・12・13・14・17・18の柱痕埋土より土師器の皿・甕・碗、須恵器の碗・皿および黒色土器が出土している。P 18の掘り方埋土より須恵器の碗が出土している。

1043はP 18の掘り方埋土より出土した須恵器であり、底部をへら切りにより切り離すことから、相野窯跡群の産である可能性がある。

時期 出土土器から川除11期である。



第433図 S B37出土土器



第434図 SB37

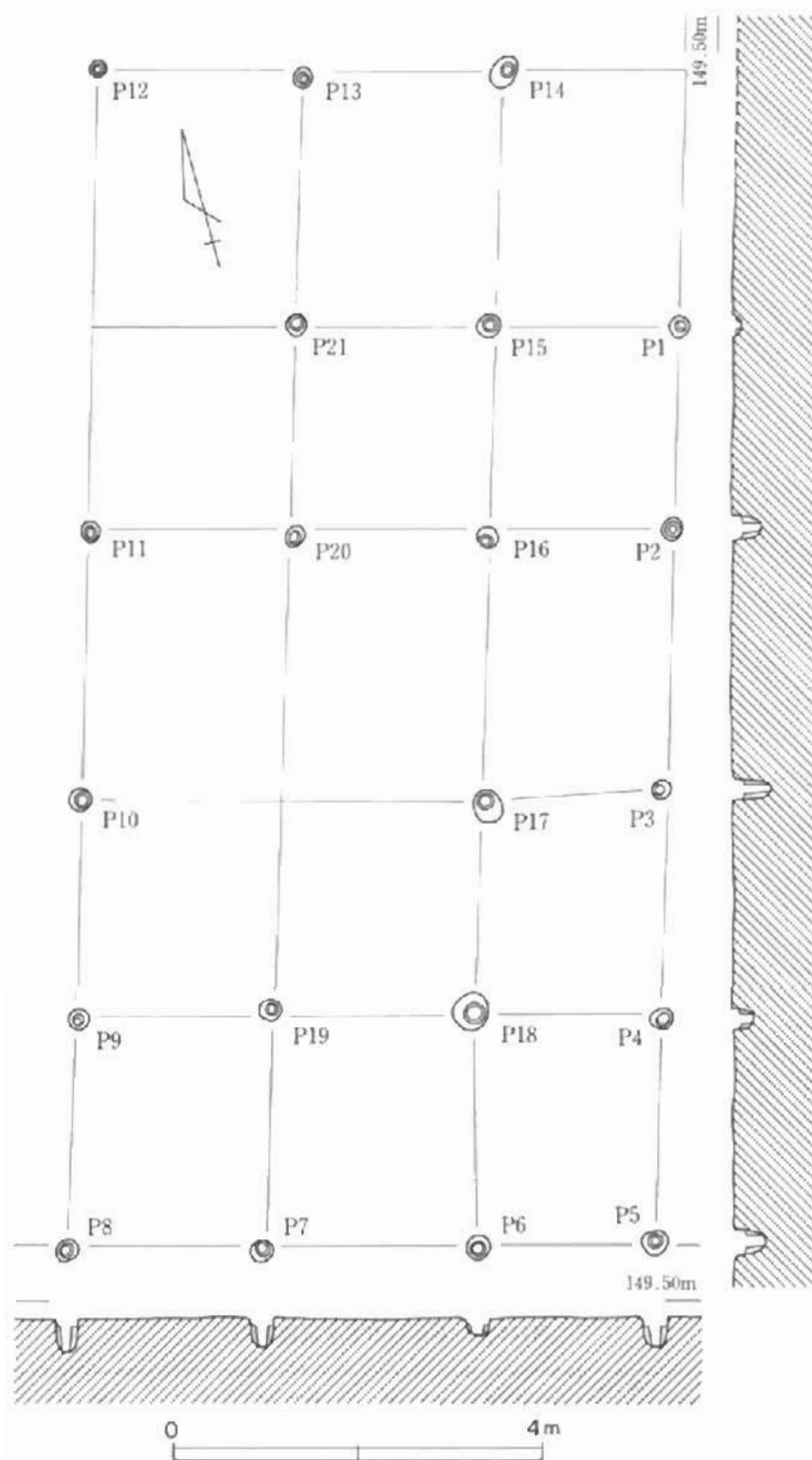
第165表 SB37出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	保存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	胎厚			
1043	須臾器・柄	—	残2.1	7.0	—	—	—	灰白	底部1/5・底部僅か	底部へラ破こし

SB38 (図版118)

検出状況 Ⅲ区の北西部、小徴高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cのなかにある。SK101を切っている。若干重複しながら東接するSB37とは棟軸の方向をほぼ同じくし、規模も同一であることから、建て替えが行われた可能性がきわめて高いといえる。

形状・規模 N-16'-Eに棟軸の方向をとる桁行5間以上、梁行3間の総柱建物である。規模は桁行



第435図 SB38

方向が12.70m、梁行方向が6.42mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.54mであり、梁行は2.14mを測る。

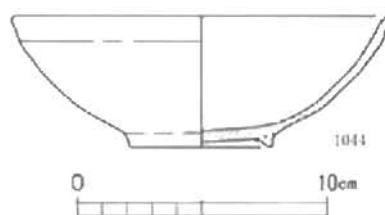
本建物の桁行の柱間距離は均一ではなく、中央の1間のみが2.80mと広いことが注意され、これを除いた他の柱間距離の平均は2.48mとなる。この値はS B37の桁行の柱間距離と同一であることが分かり、先に記したS B37との関係を裏付ける要素のひとつになると思われる。なお、梁行の柱間距離はS B37よりやや狭い値を示している。面積は81.53㎡である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は19～42cm、柱痕の直径は10～22cmである。深さは10～45cmを測る。

出土遺物 P6より黒色土器、土師器の小片が、P7より土師器、須恵器の碗・甕が、P9より土師器の小片、須恵器の小片が、P11より須恵器の皿が、P13より瓦器碗が、P19より土師器の皿が、P21より土師器、須恵器の碗が出土している。

S B37との関係 S B37との先後関係については、両者の柱穴から出土した土器の比較によれば、S B37が古く、本遺構の方がより新しいとすることができる。

時期 出土土器から川除12期と考えられる。



第436図 S B38出土土器

第166表 S B38出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径			
1044	瓦器・碗	14.8	5.2	15.6	—	35	灰	瓦部完全・口縁部僅少	P13出土

S B 3 9

検出状況 Ⅲ区の北西部、小徴高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cのなかにある。

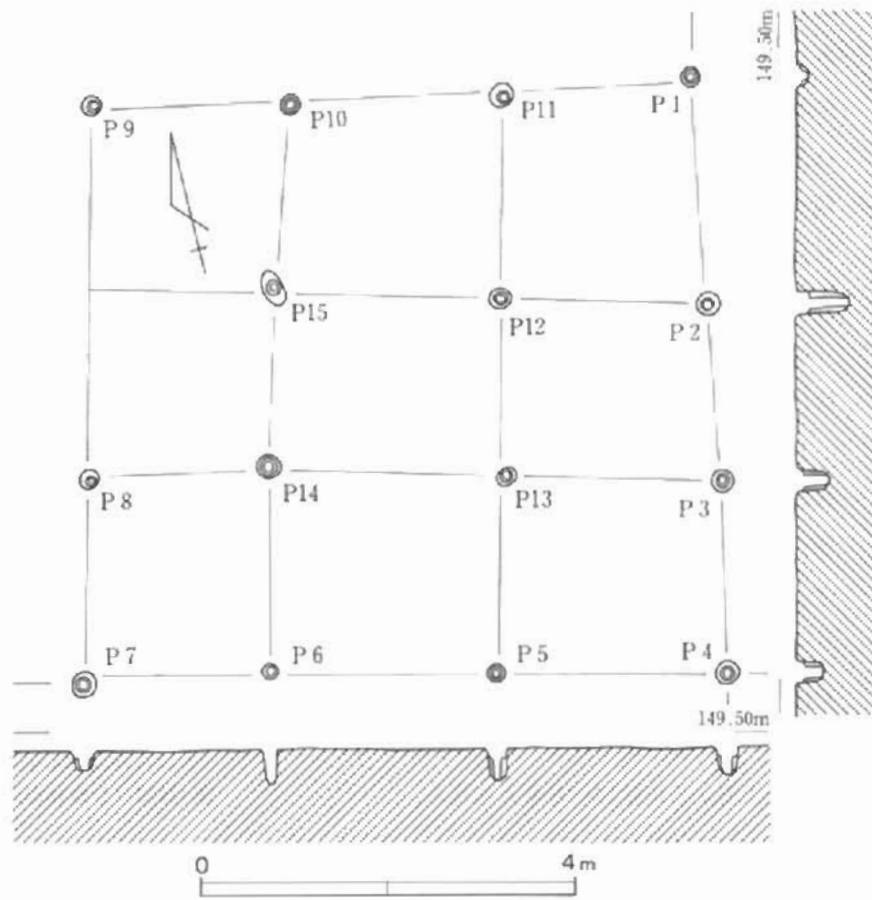
形状・規模 N-14-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の総柱建物である。P8とP9の間には柱穴は確認できなかった。規模は桁行方向が6.65m、梁行方向が6.21mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.22mであり、梁行は2.07mを測る。なお面積は41.3㎡である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～27cm、柱痕の直径は10～16cmである。深さは15～55cmを測る。

出土遺物 P2より黒色土器・須恵器の碗が、P3・6・10より須恵器の碗が、P12・15より土師器の小片が出土している。

いずれの土器も小片であり、調整や形態の観察は行えない。P2出土の須恵器の碗は口縁部の破片であり、焼成が不良である。

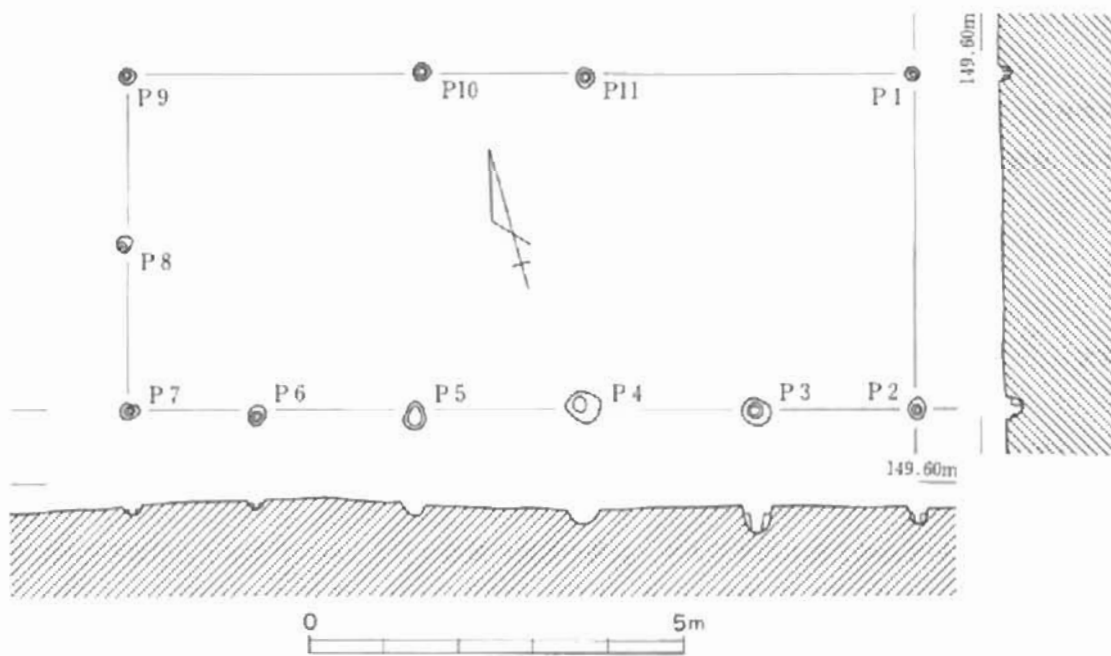
時期 出土土器から川除11～12期と考えられる。



第437図 SB39

SB40

検出状況 III区の北西部、小微高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cのなかにある。



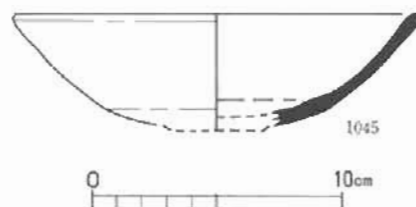
第438図 SB40

形状・規模 N-74°-Wに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行2間の掘立柱建物である。東柱は持たない。規模は桁行方向が10.50m、梁行方向が4.45mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.10mであり、梁行は2.23mを測る。なお、面積は46.73㎡である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~40cm、柱痕の直径は10~20cmである。深さは4~33cmを測る。

出土遺物 P2・6より土師器の小片が、P4より土師器、須恵器の小片が、P5より須恵器の椀、土師器椀・甕が、P9より須恵器椀が、P10より土師器の小片および須恵器捏鉢が出土している。

時期 出土土器から川除13~14期と考えられる。



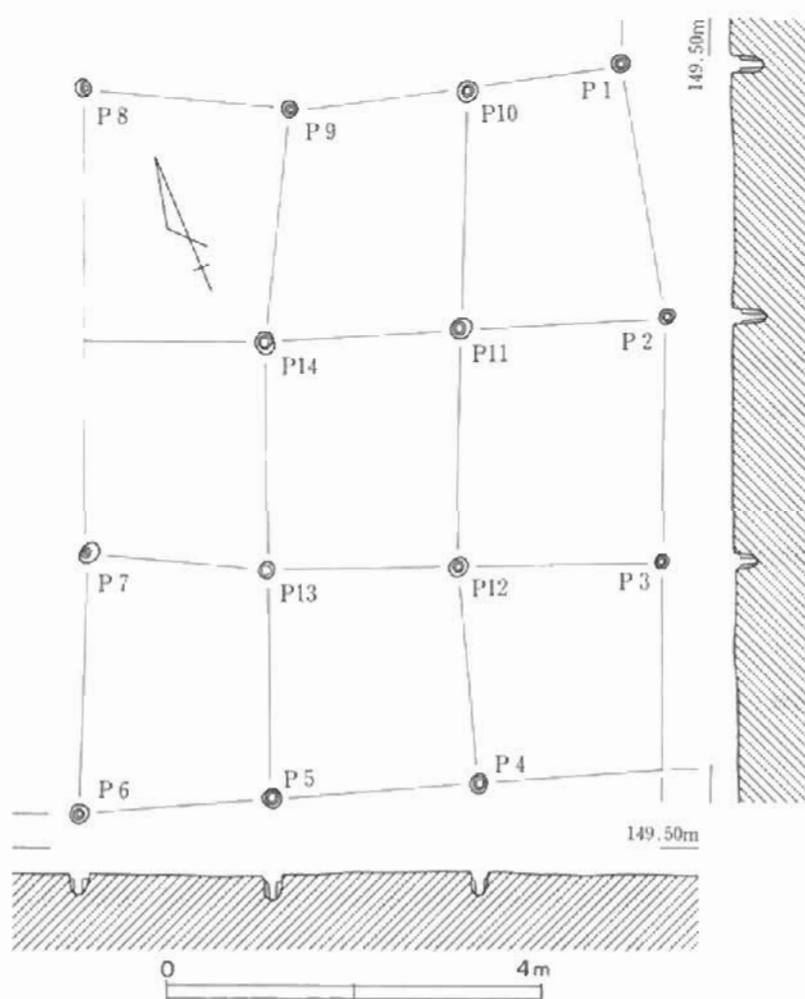
第439図 SB40出土土器

第167表 SB40出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	皿径	最大径	胎数			
1045	須恵器・椀	16.0	残4.5	—	—	—	—	灰	口縁部1/10	P9掘り方出土

検出状況 III区の北西部、小微高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cの南方に占地しており、他の建物とは棟軸方向を違えている。

形状・規模 N-23°-Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の総柱建物である。規模は桁行方向が7.51m、梁行方向が6.08mである。柱穴間の心々距離



第440図 SB41

の平均値は、桁行が2.50mであり、梁行は2.03mを測る。面積は45.66㎡である。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は17～22cm、柱痕の直径は10～12cmである。深さは20～37cmを測る。

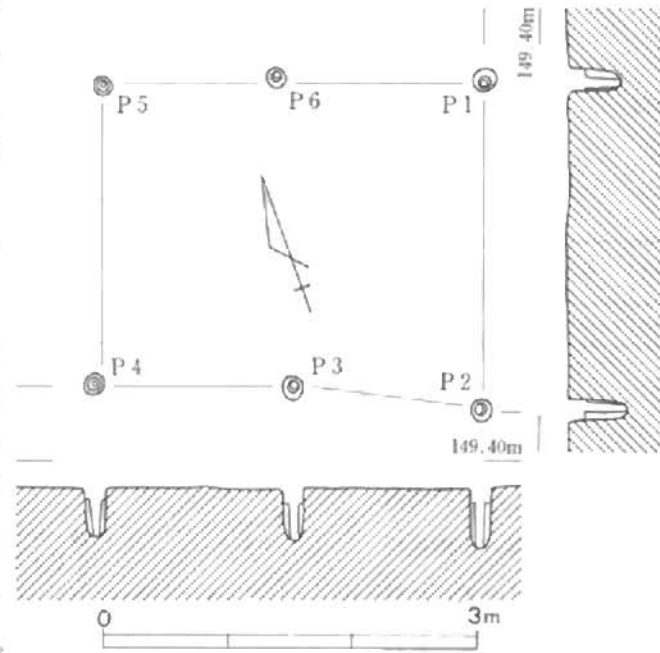
出土遺物 P4の柱痕より土師器の小片が出土している。

時期 川除11～14期と考えられる。

SB42

検出状況 Ⅲ区の北西部、小徴高地dの東端に位置する中世の掘立柱建物群Cの最も南に位置する小規模な掘立柱建物である。

形状・規模 N-72°-Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。規模は桁行方向が3.09m、梁行方向が2.46mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.55mである。なお、面積は7.59㎡と、この建物群のなかには最小である。



第441図 SB42

柱穴 柱穴の掘り方は円形であ

り、その直径は14～16cm、柱痕の直径は8cmである。深さは30～46cmを測る。

出土遺物 P4より土師器の皿が出土している。

時期 川除11～14期と考えられる。

SB43

検出状況 Ⅲ区の南西隅で検出された。小徴高地eの東端に立地する。第2次の確認調査のトレンチで確認された掘立柱建物である。他の遺構との切り合い関係ではSB44と重複して検出されている。

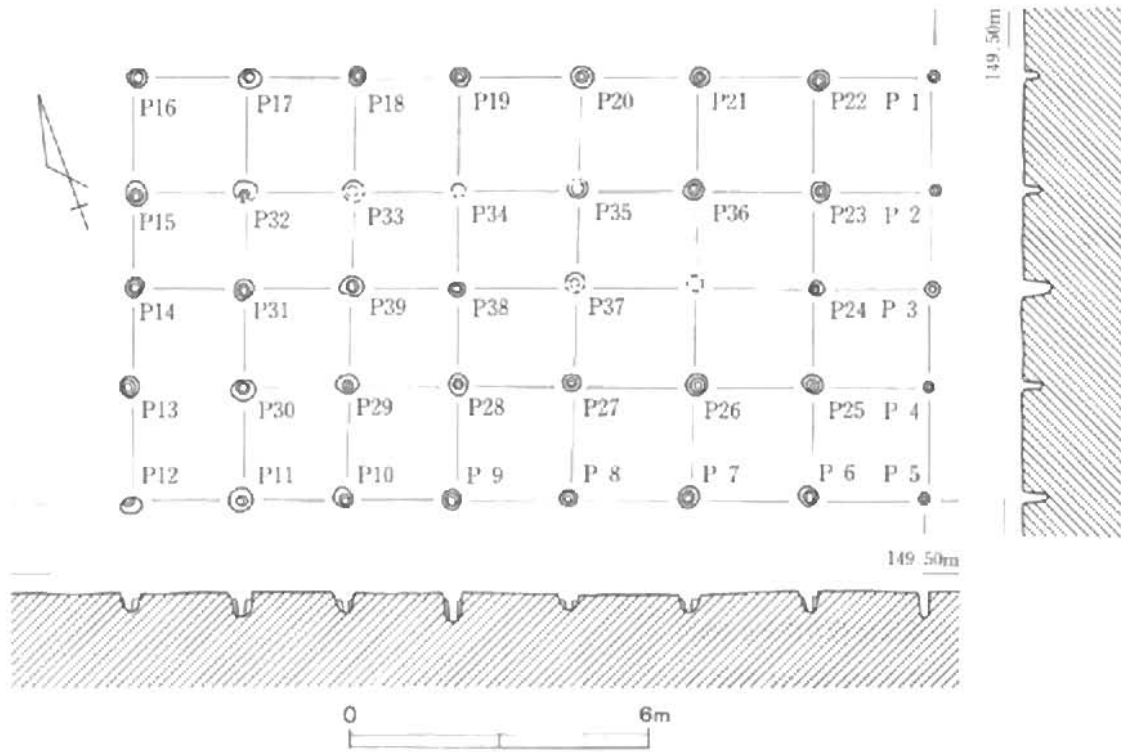
形状・規模 N-68°-Wに棟軸の方向をとる桁行7間、梁行4間の掘立柱建物である。確認トレンチで束柱の何本かが削平されているが、総柱の掘立柱建物である。

規模は桁行方向が15.98m、梁行方向が8.40mと確認された。面積は134.23㎡である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.28m、梁行が2.10mであるが、南北両サイドの桁行柱列とその内側の桁行柱列との距離は中心部の距離よりも全体として長い。

柱穴 柱穴の掘り方の直径は37～41cmである。深さは20～48cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は18～27cmである。深さは20～48cmを測る。

柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡は全体にわたって確認されているが、最も東側の梁行柱



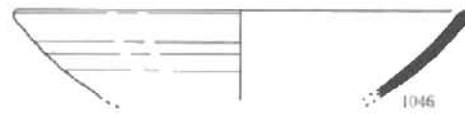
第442図 SB43

列に限っては、それが確認できていない。柱穴間の距離としては、他の柱穴と大差ないが、掘り方の直径は相対的に小さい。柱の建て方として別の構造のものであった可能性も指摘できる。底のようなものの存在が想定できる。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物 遺物は土器のみが出土している。P3・6・8・11・13・15・16の柱穴の掘り方より、須恵器・土師器が出土している。

そのうち図化しているものは1点のみである。P3より出土している須恵器の椀である。



0 10cm

時期 出上土器から川除14期と考えられる。

第443図 SB43出土土器

第188表 SB43出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)					色澤	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径			
1046	須恵器・椀	118.0	43.5	—	—	—	灰白	口縁部1/8	焼成不良 P3柱穴出土

SB44

検出状況 III区の南西隅で検出された。第2次の確認調査のトレンチで確認された欄立柱建物であ

る。他の遺構との切り合い関係ではS B43と重複して検出されている。P 8・9は確認トレンチの範囲で検出している。

形状・規模

N-17-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の掘立柱建物である。確認トレンチで削平されているためか北東隅の柱穴は検出されていない。東柱を持っていない掘立柱建物である。

規模は桁行方向が8.00m、梁行方向が4.36mと確認された。面積は34.88㎡である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.67m、梁行が2.18mである。

柱穴

柱穴の掘り方の直径は22~28cmである。深さは26~41cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は16~20cmである。深さは26~41cmを測る。

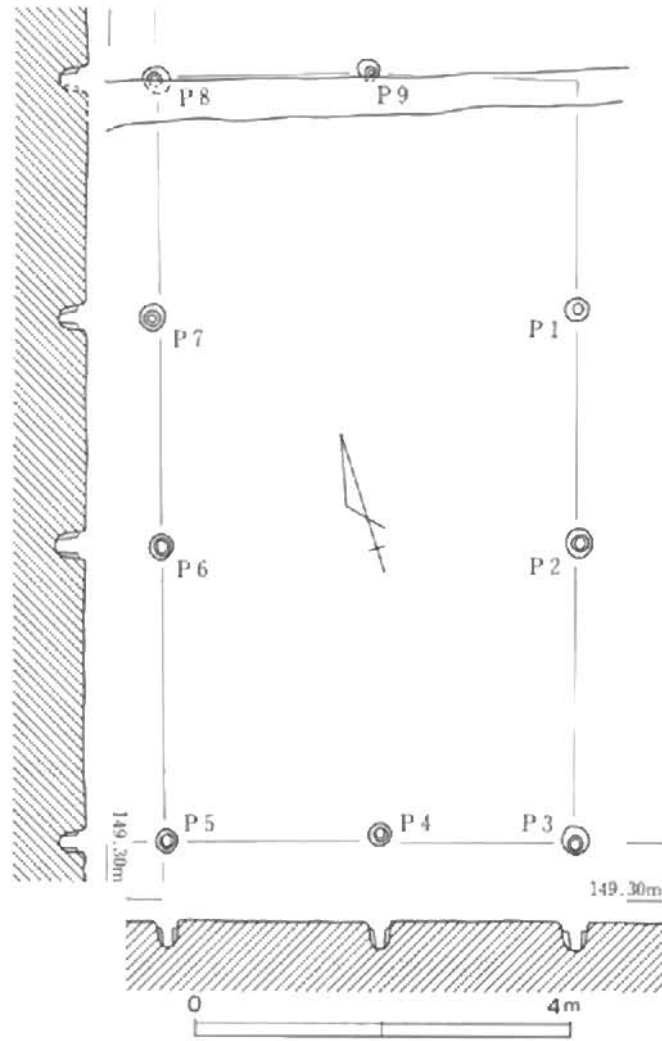
柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物

遺物は出土していない。

時期

遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、川除13~14期と考えられる。



第444図 S B44

S B 4 5 (図版 1 0 9)

検出状況

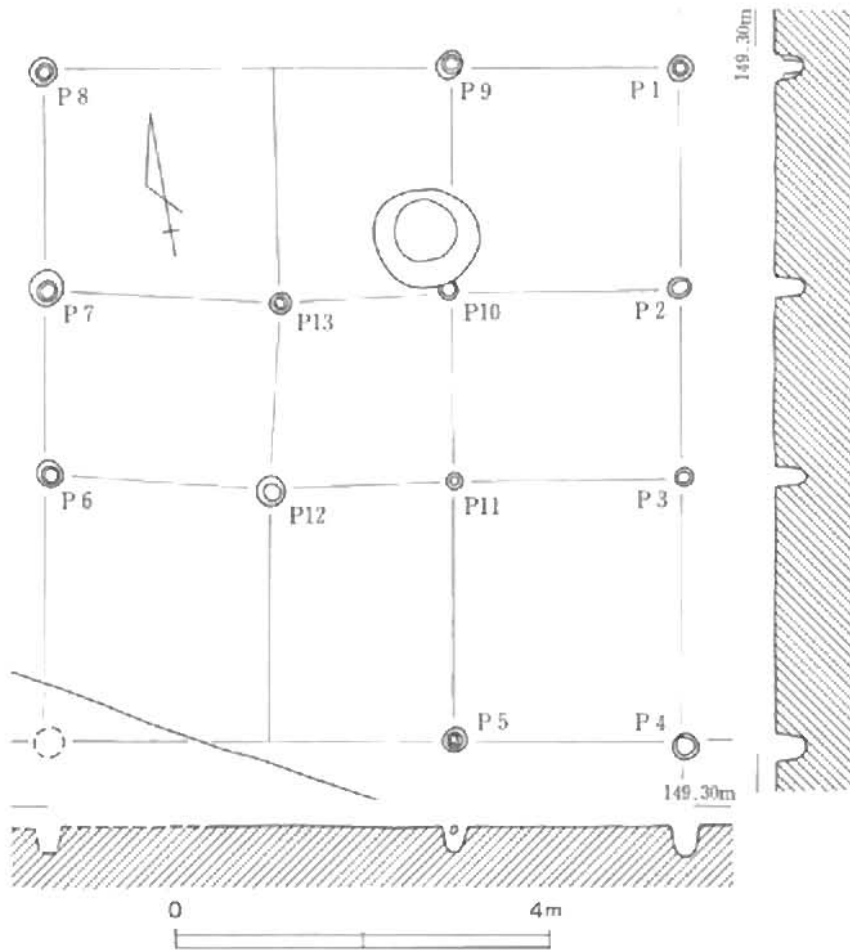
Ⅲ区の南西隅で検出された。他の遺構との切り合い関係ではS B46・S B47と重複して検出されている。南西隅の柱穴は調査区外に位置している。桁筋方向の西側から第2列の北側の柱穴と南側の柱穴は検出されていない。

形状・規模

N-11-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行3間の総柱の掘立柱建物である。

規模は桁行方向が7.15m、梁行方向が6.80mと確認された。面積は48.62㎡である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.67mであるが、各柱穴間の柱間の間隔は不揃いである。北側から順に2.30m、2.00m、2.80mとなっている。梁行は2.18mであるが、これもまた揃っていない。中央の1間が1.80mでその両サイドの各1間は2.50mである。

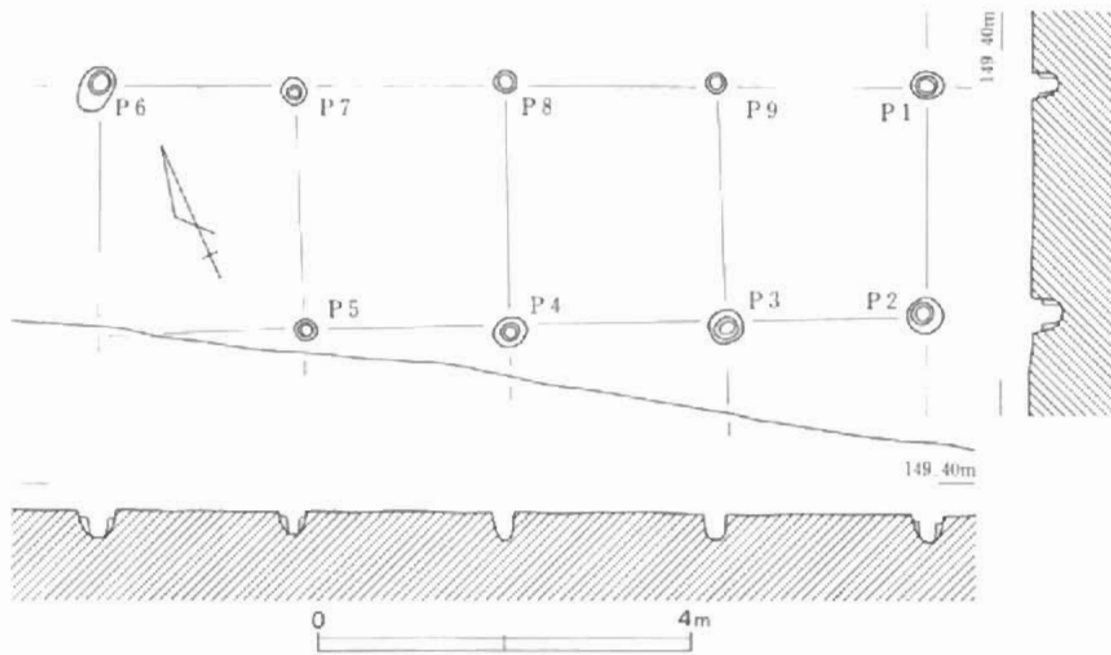


第445図 SB45

- 柱穴** 柱穴の掘り方の直径は24～38cmである。深さは28～35cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は13～21cmである。深さは28～35cmを測る。
- 柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、川除13～14期と考えられる。

SB46 (図版109)

- 検出状況** III区の南西隅で検出された。他の遺構との切り合い関係ではSB45・SB47と重複して検出されている。遺構は調査区外の南側にのびているものと考えられる。
- 形状・規模** N-24-Eに棟軸の方向をとる。検出された範囲では桁行1間、梁行4間の総柱の掘立柱建物である。
- 規模は桁行方向が3.80m、梁行方向が8.84mと確認された。面積は検出されている範囲でいえば28.29㎡である。
- 柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1間分しか確認されていないため平均値は求められない。したがって検出された1間分の値になっているが2.67mである。梁行は2.21mである。梁行方向の柱穴間の距離は比較的揃っている。

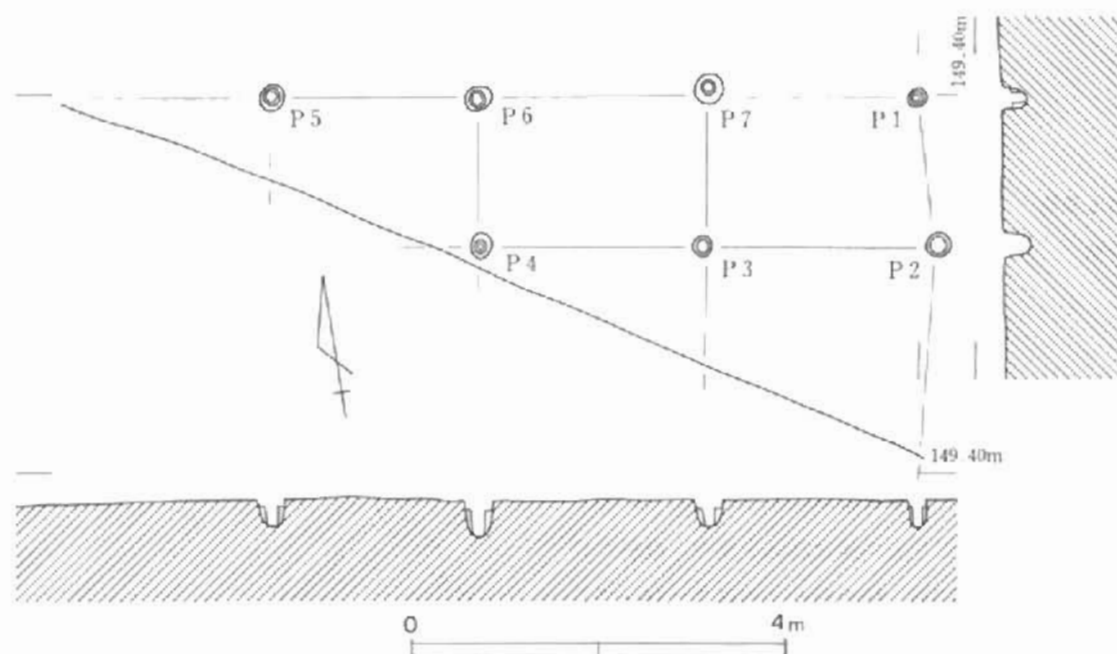


第446図 SB46

- 柱穴** 柱穴の掘り方の直径は23～40cmである。深さは25～33cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は14～21cmである。深さは25～33cmを測る。
柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、川除13～14期と考えられる。

SB47 (図版109)

- 検出状況** III区の南西隅で検出された。他の遺構との切り合い関係ではSB45・SB46と重複して検出されている。遺構は調査区外の両側にのびているものと考えられる。
- 形状・規模** N-81°-Wに棟軸の方向をとる。検出された範囲では桁行3間、梁行1間の総柱の掘立柱建物である。
規模は桁行方向が6.90mかそれ以上、梁行方向が3.80mかそれ以上と確認された。面積は検出されている範囲でいえば16.21㎡である。
柱穴間の心々距離の平均値は、梁行が1間分しか確認されていないため平均値は求められない。したがって検出された1間分の値になっているが1.60mである。桁行は2.30mである。梁行方向の柱穴間の距離は比較的揃って検出された。
- 柱穴** 柱穴の掘り方の直径は20～30cmである。深さは29～31cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は13～15cmである。深さは29～31cmを測る。
柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。
- 出土遺物** 遺物は土器のみがP5より出土している。しかし細片のため図化することはできなかったが土師質の土器である。



第447図 SB47

時期 出土した遺物が細片であるため正確な時期は明らかではないが、土器の胎土の特徴などから川除13～14期と考えられる。

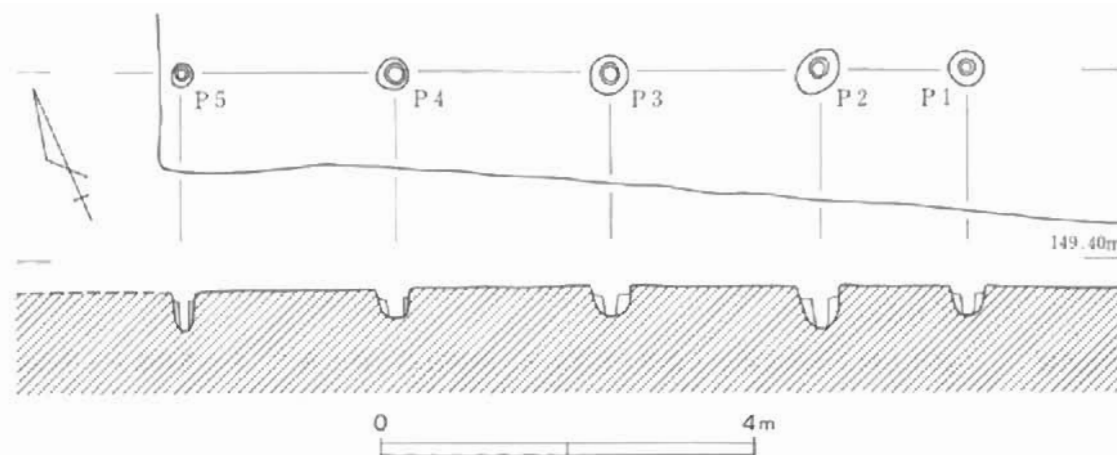
SB48

検出状況 Ⅲ区の南西隅で検出された。他の遺構との切り合い関係ではSD88と重複して検出されている。遺構は調査区外の南側あるいは西側にのびているものと考えられる。

形状・規模 N-23°-Eに棟軸の方向をとる。検出された範囲では梁行4間の掘立柱建物である。桁行方向の柱穴は調査範囲内では検出することはできなかった。

規模は梁行方向が8.40mかそれ以上と確認された。面積は桁行方向が未検出のため計測は不可能である。

柱穴間の心々距離の平均値は、梁行が東端の1間分の柱間に限って1.60mである。その他の3間分はほぼ揃っており、2.30m平均である。



第448図 SB48

柱穴 柱穴の掘り方の直径は24～42cmである。深さは34～48cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は15～21cmである。深さは34～48cmを測る。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、川除13～14期と考えられる。

(2) 柱穴

P06 (図版123)

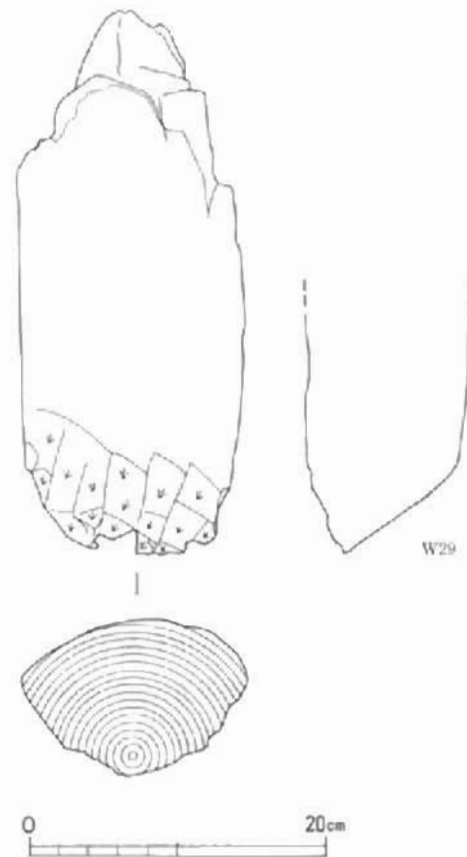
検出状況 Ⅲ区北東部、小嶺高地b西端部に立地し、SH57の北東壁と接している。

形状・規模 掘り方の径は20cmを測り、柱痕の径は15cm、検出面からの深さは16cmである。

柱痕内には柱材そのものが遺存していた。(第449図) 残存長は36cmを測り、最大径は15cmである。柱材の下部を整形しており、下部を中心に手斧の痕跡が顕著に認められる。

出土遺物 本柱穴からは遺物の出土は認められなかった。

時期 本柱穴からは土器が出土していないため、直接的に時期を判断することは困難である。本柱穴の北側にある平安時代以降の掘立柱建物の柱穴とはほぼ同じ埋土をもち、規模もほぼ同じであることから、掘立柱建物とはほぼ同じ時期川除12～13期と考えられる。



第449図 P06柱根

P07

検出状況 Ⅲ区北東部、小嶺高地b西端部に立地する。SK79の北西部に隣接する位置にあたる。2穴の柱穴に切られているため、全体の約2/3を検出したにとどまる。

形状・規模 柱痕を確認することはできなかった。掘り方の径は20cmを測り、検出面からの深さは4cmである。

出土遺物 掘り方内より須恵器が1点出土している。器種は高台付の椀で、その高台部分を中心に残存している。内外面とも回転ナデにより仕上げられており、内面見込み部分においては仕上げナデが認められる。相野窯跡群で焼成されたものと考えられる。

時期 掘り方内出土須恵器より、川除11期と考えられる。

P 0 8

- 検出状況** Ⅲ区北東部の掘立柱建物群Eに位置し、S B33とはほぼ重複している。ほぼ同時期の柱穴に切られている。
- 形状・規模** 平面形はほぼ円形を呈する。掘り方の径は22cm、柱痕の径は10cmを測り、検出面からの深さは12cmである。
- 出土遺物** 掘り方内より須恵器の壺1個体分が出土している(第450図1052)。底部から体部下半にかけての部分しか残存しないが、双耳壺に分類されるものである。また、底部の切離し方法がへら起こしによること、体部内外面を横ナデ調整により仕上げていること、底部内面を強いユビナデ調整により仕上げていることなどから、相野窯跡群産と考えられる。
- 時期** 掘り方内出土土器から、川除11期と考えられる。

P 0 9 (図版118)

- 検出状況** Ⅲ区北東部掘立柱建物群Eに位置し、P08同様S B33とはほぼ重複している。P08の北西約1mにあたる。他の遺構との切り合いはない。
- 形状・規模** 平面形はほぼ円形を呈する。掘り方の径は35cm、柱痕の径は16cmを測り、検出面からの深さは23cmである。
- 出土遺物** 掘り方内より、ほぼ完形の須恵器の碗が1個体出土している(第450図1048)。内外面とも回転ナデ調整で仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。他の須恵器の碗に比べて、器壁が全体的に厚い傾向にある。
- 時期** 掘り方内出土土器より、川除13期と考えられる。

P 1 0

- 検出状況** Ⅲ区北東部掘立柱建物群Eに位置し、S B33とはほぼ重複している。ほぼ同時期の柱穴を1穴切っている。
- 形状・規模** 平面形はほぼ円形を呈する。掘り方の径は32cm、柱痕の径は18cmを測り、検出面からの深さは24cmである。
- 出土遺物** 掘り方内より須恵器の碗1個体が出土している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 時期** 掘り方内出土土器より、川除12~13期と考えられる。

P 1 1

- 検出状況** Ⅲ区北東部掘立柱建物群Eに位置し、S B33とはほぼ重複している。ほぼ同時期の柱穴と掘り方が接しているが、切り合い関係は明らかにできなかった。
- 形状・規模** 平面形は、若干方形を指向する円形である。掘り方の径は54cm、柱痕の径は24~28cmを測り、柱穴としては大型である。検出面からの深さは20cmである。また、柱痕底部においては、根固めの石が入れられていた。
- 出土遺物** 掘り方内より須恵器の碗1個体が出土している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

第5節 Ⅲ区の調査

時期 掘り方内出土土器より、川除12～13期と考えられる。

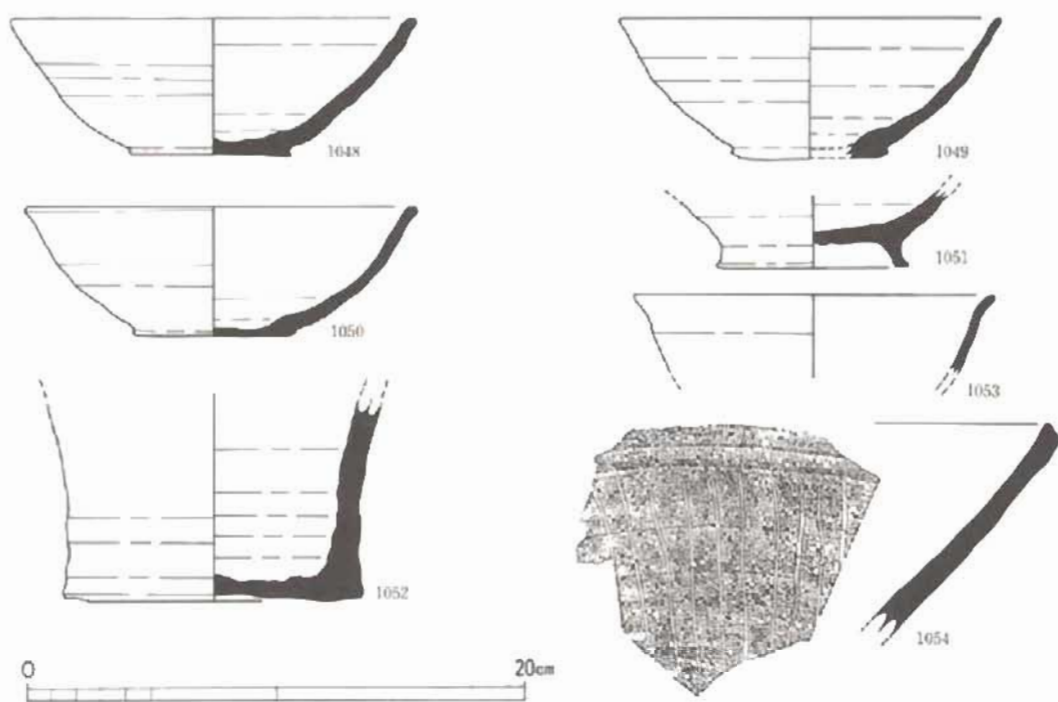
P12

検出状況 Ⅲ区北東部掘立柱建物群Eに位置し、SB33とはほぼ重複している。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 平面形は円形を呈する。掘り方の径は20cm、柱痕の径は16cmを測り、検出面からの深さは14cmである。

出土遺物 柱痕内より青磁碗1個体が出土している（第450図1053）。口縁部がわずかに残存する小片である。釉は明緑灰色を呈する。

時期 柱痕内より出土している青磁碗は、他のほぼ同時期と考えられる柱穴・掘り方内出土土器より若干新しい傾向をもつものである。ただし、この青磁碗は当柱穴の埋没時期を示すものと考えられる。したがって、本柱穴についても他の柱穴同様、川除12～13期と考えたい。



第450図 柱穴出土土器

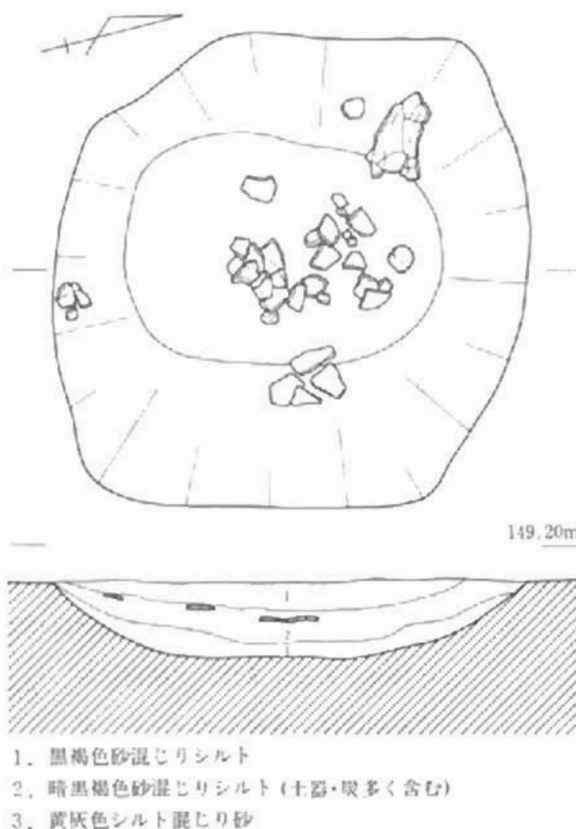
第169表 柱穴出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	胎数			
1048	須恵器・碗	16.0	5.5	6.2	—	—	34	灰白	ほぼ完存	体部外面から内面の一部にかけて茶褐色の付着物あり
1049	須恵器・碗	(15.2)	5.5	(6.2)	—	—	34	明緑灰	1/3	
1050	須恵器・碗	(15.5)	5.1	(6.4)	—	—	32	灰白	口縁部1/4・底部3/4	ほぼ完全な胎土
1051	須恵器・碗	—	残7.8	(7.2)	—	—	—	灰	底部3/4	
1052	須恵器・蓋	—	残7.9	(11.6)	—	—	—	灰白一灰	底部1/2・体部僅か	底部へうねこし
1053	青磁・碗	(14.2)	残3.2	—	—	—	—	明緑釉	口縁部僅か	
1054	片流地・器鉢	—	残8.5	—	—	—	—	いぶい・赤陶	口縁部僅か	

(3) 土坑

SK78

- 検出状況** Ⅲ区北東部に位置し、小微高地b南西端に立地する。SK80に切られている。
- 形状・規模** 平面形は、やや不整形気味ではあるが方形を呈する。検出面における規模は、主軸方向およびその直交方向とも127cmを測る。横断面は皿形を呈し、土坑中央部における検出面からの深さは20cmである。また、底部における規模は、長軸方向で85cm、短軸方向で60cmを測る。
- 埋土** 3層に分かれ、上から黒褐色砂混じりシルト層、暗黒褐色砂混じりシルト層、黄灰色シルト混じり砂層が堆積していた。特に第2層において、土器の出土が認められ、また炭片も多く含まれていた。
- 出土遺物** 図化できるものはなかったが、土師器の甕の底部片が出土している。この底部は、丸底を指向するものである。
- 時期** 出土土器から川除14～15期と考えられる。



第451図 SK78

SK80 (図版118)

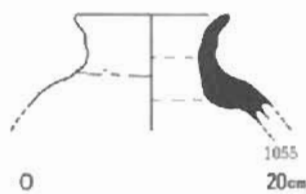
- 検出状況** Ⅲ区北東部、小微高地b南西端に立地する。SB33・SB34の南に位置し、SK78を切っている。
- 形状・規模** 平面形は不整形な溝状を呈する土坑である。検出面における規模は、長軸で553cm、その直交方向で110cmを測る。横断面は皿形を呈し、土坑中央部における検出面からの深さは12cmである。また土坑底における規模は長軸で515cm、その直交方向で78cmを測る。
- 埋土** 細かく観察すると2層に分けることも可能であるが、基本的には灰色シルト混じり極細砂層1層が堆積していた。
- 出土遺物** 埋土中より土器のみが出土している。須恵器・丹波焼・白磁が出土しているが、図化できたのは丹波焼の小壺1個体のみである。
- 須恵器** 椀・小皿・甕の各器種が出土している。
- 丹波焼** 図化できた小壺の他に摺鉢が摺鉢の口縁部片が出土している。なお、図化した小壺につ

第5節 III区の調査

いては、本遺跡の北西約11kmに所在する三本峠北窯跡で焼成されたものと考えられる。

白磁 最後に白磁については、体部の小片のため具体的な形式については明らかにできない。

時期 出土土器より、川除15期と考えられる。



第452図 SK80出土土器

第170表 SK80出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	腹径	最大径	胎数			
1055	丹波焼・小壺	16.0	残4.4	—	(5.1)	—	—	褐灰	口縁部・体部僅か	内外面ともロクロナデ/胴部4に輪付帯

SK81 (図版118)

検出状況 III区北東部に位置し、小微高地b南西端に立地する。III区北東部の掘立柱建物群Eのすぐ南側にあたる。本土壇の北端部ではほぼ同時期と考えられる柱穴と接するものの、他の遺構との明確な切り合いは認められない。

形状・規模 平面形は楕円形を呈する。検出面における規模は、長軸で75cm、その直交方向で37cmと比較的小型の土壇である。横断面はU字形を呈し、土壇中央部における検出面からの深さは19cmである。また、土壇底における規模は、長軸で40cm、その直交方向で14cmを測る。

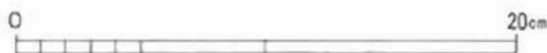
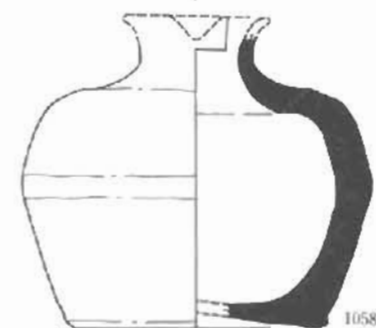
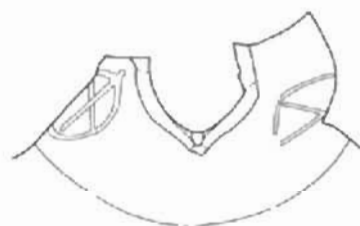
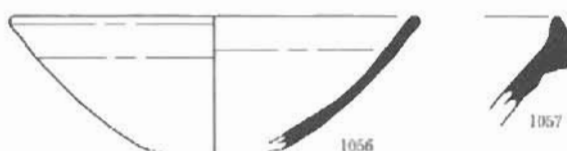
埋土 灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。器種としては、須恵器・土師器・丹波焼・青磁が出土しているが、図化できたのは須恵器と丹波焼である。

須恵器 碗と捏鉢・甕が出土している。図化できたのは碗と捏鉢のみで、甕については小片のため図化できなかった。いずれも魚住古窯跡群産と考えられる。

土師器 量的に少なくしかも小片のため、図化どころか器種についても明らかにできない。

丹波焼 甕と小瓶が出土している。甕は、口縁部を「N」字形に短く屈曲さ



第453図 SK81出土土器(1)



第454図 SK81出土土器(2)

せている。焼成は不十分である。

小壺 1058の小壺は、口縁端部を欠くものの、底部から口縁部付近まで残存している。頸部から口縁部にかけては、ロクロをもちいた回転ナデにより仕上げられているが、肩部以下については紐づくりによって仕上げられている。このため、底部から肩部にかけての器壁はかなり厚く造られているが、頸部から口縁部にかけては薄く造られている。そして底部はヘラにより切り離されている。

また口縁端部まで残存しないため明確にはしえないが、頸部内面にV字形の凹みが認められることから、口縁部は片口をなしていたものと推定される。さらに、肩部外面の2ヶ所において鏡描による刻印が認められる。両者とも「○」と「×」を組み合わせた印のようであるが、完存していないため、その内容・性格については明らかにしえない。

刻印

青磁

青磁については、小片のためより詳しい形式については明らかにしえない。

時期

出土土器から、川除15期と考えられる。

第171表 SK81出土土器観察表

番号	器種	度量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	口径	頸径	最大径	胎厚			
1056	直立器・甗	(16.1)	残5.3	—	—	—	—	灰白	口縁部1/4	
1057	直立器・甗鉢	—	残3.7	—	—	—	—	灰-灰赤	口縁部僅か	
1058	丹波地・小壺	—	残11.3	(10.6)	(4.0)	(11.0)	—	陶灰-灰白	体部1/3	口縁部片口の痕跡あり/肩部に鏡描の刻印あり
1059	丹波地・壺	(37.4)	残10.5	—	(34.0)	—	—	赤-灰赤	口縁部僅か	体部下半は紐作り

SK82 (図版103・118)

検出状況

Ⅲ区北東部に位置し、小磯高地bの西端部に立地する。SK83の北東部側に隣接する位置にあたる。また、掘立柱建物群Eの西端に位置する。SK83と接する以外は、他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模

平面形は、不整形な楕円形を呈し、北東側は溝状に北側の調査区外にのびている。検出面における規模は、長軸で476cm、その直交方向で286cmを測る。横断面は、東側を2段に掘り込んでいるため、変則的な逆台形を呈する。土壌下段における検出面からの深さは60cmである。また、土壌下段における規模は、長軸で334cm、その直交方向で100cmである。

埋土

上から、灰色シルト混じり砂層・暗灰色シルト混じり砂層・暗灰色砂混じりシルト層、暗灰色砂質シルト層・淡黒灰色シルト層・黒灰色シルト層の6層からなる。このうち1～3層の砂とシルトが混じった層は、自然堆積というより人為的に埋められた層と考えられる。

これに対して、4～6層については、自然に堆積した層と考えられる。

出土遺物

埋土中より土器のみが出土している。器種としては、須恵器・土師器・丹波焼・瓦器が出土しているが、図化できたのは土師器のみである。

須恵器

碗と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

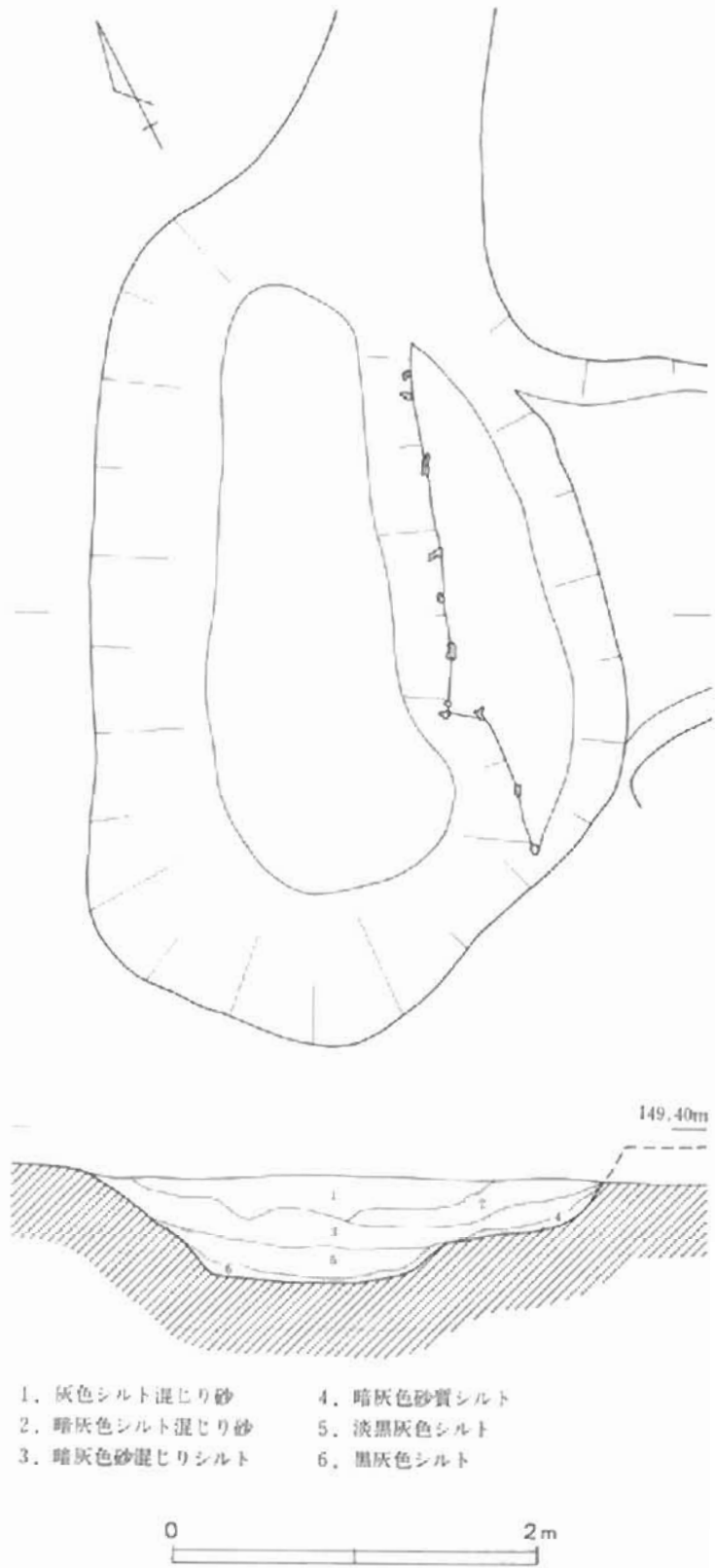
土師器

図化した2個体分の鍋の他は、器種の特定できない小片が出土しているのみである。

鍋

図化した鍋について

では、1060は埋土上層から、1061は埋土下層からの出土であるが、基本的な形態上・調整上の特徴はほぼ一致している。すなわち、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、体部外面についてはほぼ水平方向のタタキ整形により仕上げられている。ただし体部



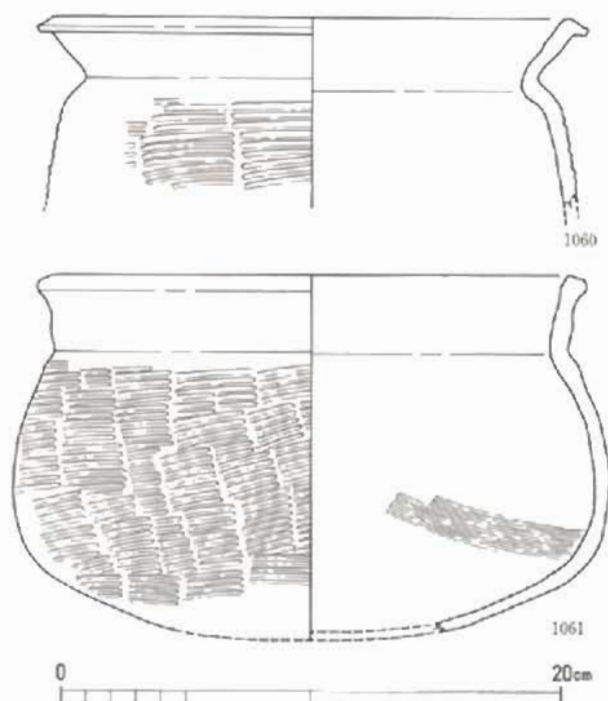
第455図 SK82

内面については若干異なり、1060ではヘラナテ調整により、1061ではユヒナテ調整あるいはハケ調整により仕上げられている。また、口縁部の形態も若干異なり、1060では口縁端部を明確に外方につまみ出しているのに対して、1061ではその意識は認められるが1060ほど強くない。

丹波焼 摺鉢と甕か壺の口縁部片が出土している。いずれも小片のため、器種の特定が精一杯であった。

瓦器 羽釜片が出土している。

時期 出土土器から、川除15期と考えられる。



第456図 SK82出土土器

第172表 SK82出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	器径	最大径	指数			
1060	土師器・甕	(20.4)	残7.5	—	(18.0)	—	—	赤橙～灰褐	1/2	
1061	土師器・甕	(20.5)	残14.1	—	(20.6)	(23.9)	—	明褐色～灰白	1/2	外面に刷付帯

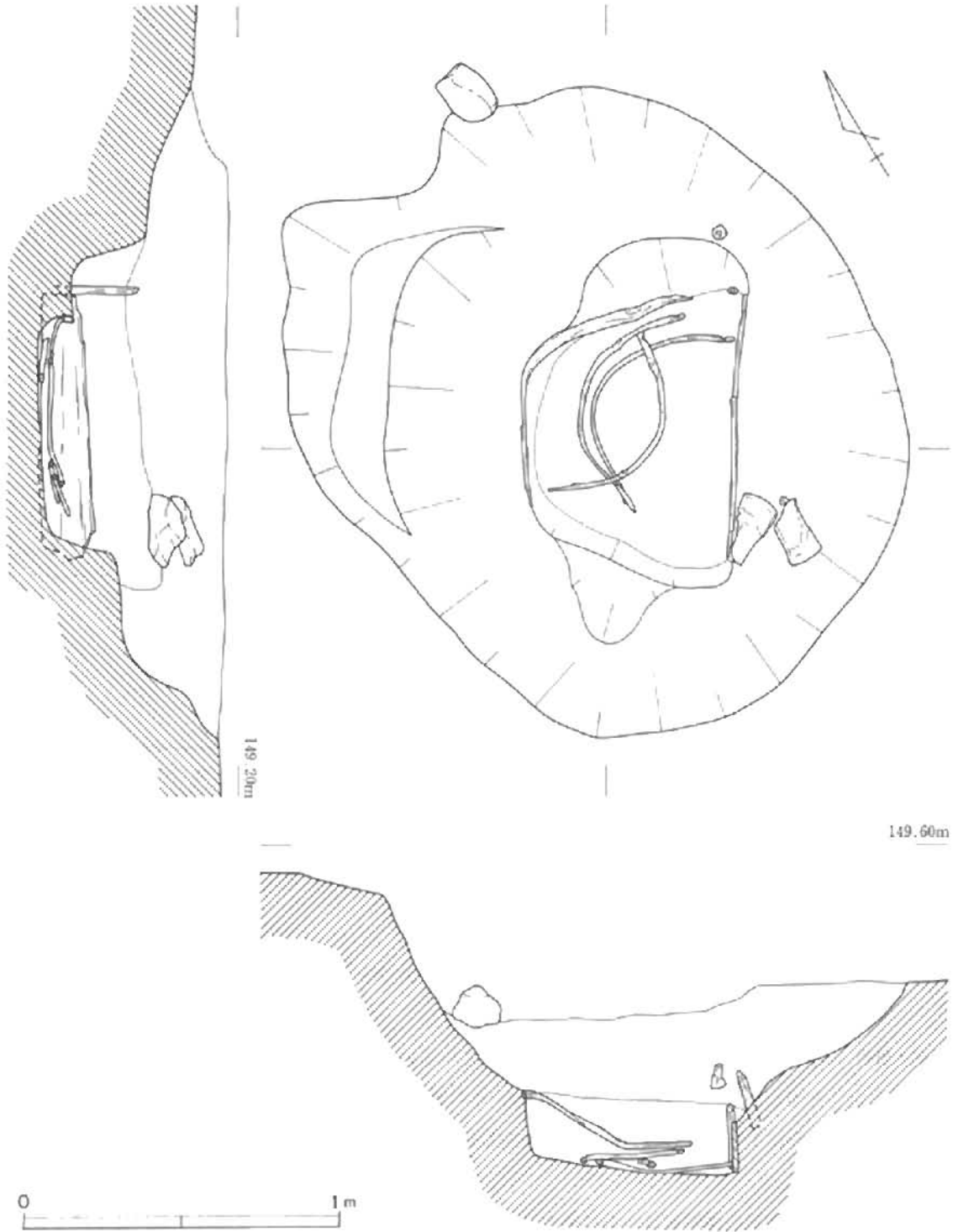
SK83 (図版103・118・122)

検出状況 Ⅲ区北東部に位置し、小微高地bの西端に立地する。SK82の南西側に隣接しており、SD61を切っている。

形状・規模 本土壙は、大きく2段に掘り込まれている。検出面における平面形は、不整形な楕円形を呈し、その規模は、長軸で205cm、その直交方向で195cmを測る。また、下段における平面形は不整形ながらも長方形を指向し、その規模は長軸で128cm、その直交方向で65cmを測る。

本土壙の横断面は、上段部が逆台形、下段部が方形を呈し、底部は平坦に仕上げられている。検出面からの深さは、検出面そのもののレベルが土壙の西側と東側とでは約30cm程の差が認められるため一定しないが、最もレベルの高い西側を基準とした値は90cmを測る。また東側を基準とすると60cmである。

本土壙の下段部は、先述したとおり断面方形に掘り込まれているが、南東側壁面のみ120×30cmの板を横長に設置し、その北東側は杭で固定されていた。おそらく当初は、南東側も杭で固定されていたものと推定される。他の3面については、板を設置した痕跡は認められず、掘り込まれたままの状態であった。



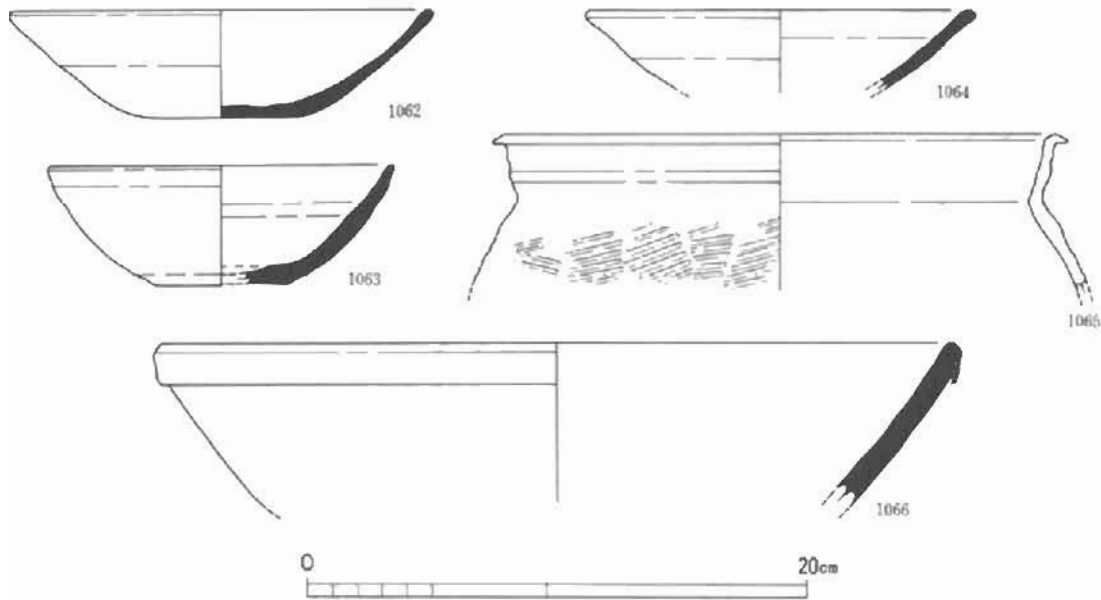
第457図 SK83

埋土 上段部は、灰色砂混じりシルト層、下段部は黒灰色～青灰色シルト層が堆積していた。上段部の埋土は、その層相から人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器と木製品が出土している。

土器 埋土中より須恵器・土師器・瓦器・丹波焼が出土している。量的には比較的多く出土しているが、小片のため図化できたのは5個体に限られる。

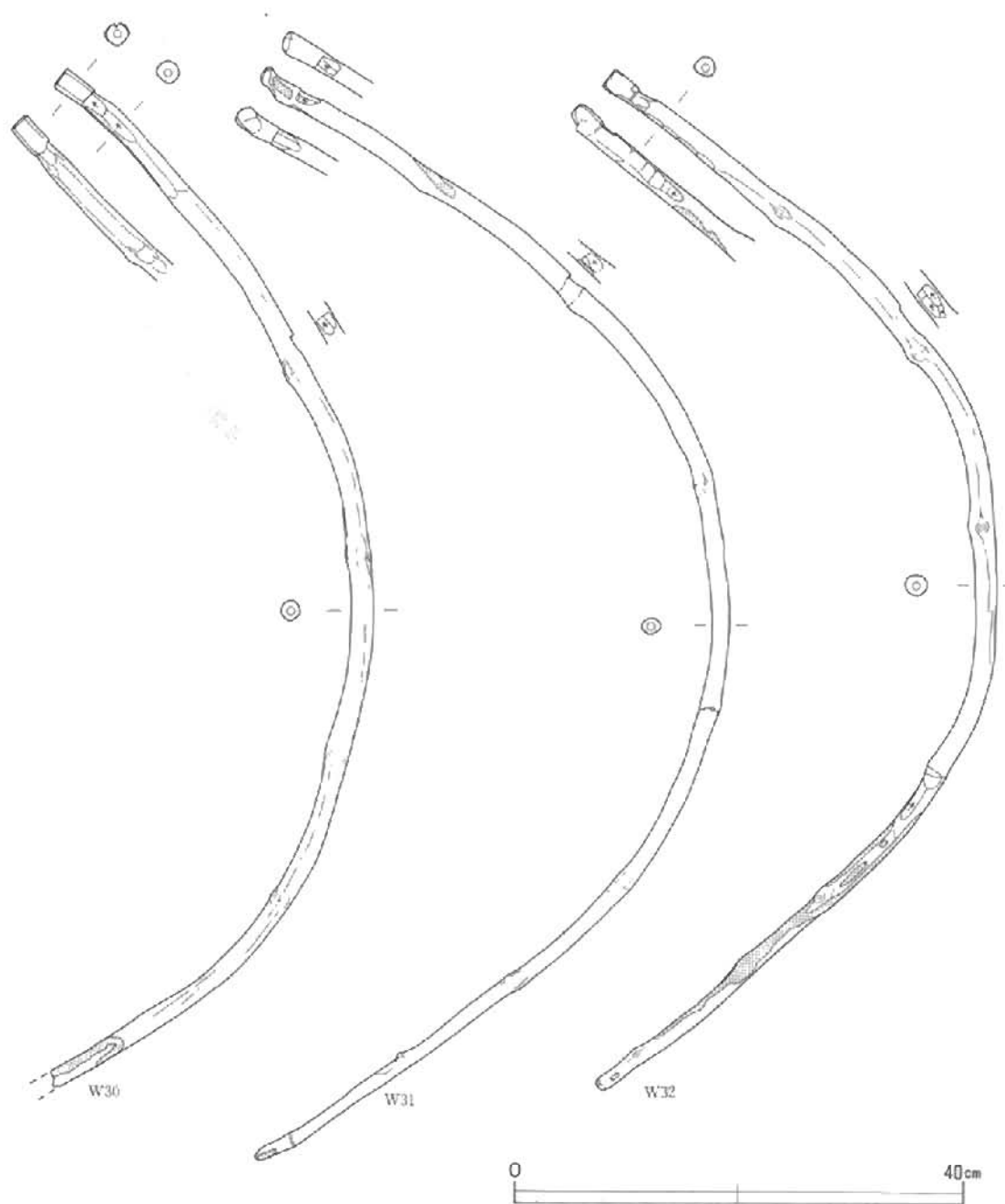
須恵器 椀と甕・捏鉢が出土しているが、図化できたのは椀に限られる。このなかで1063の椀に



第456図 SK83出土土器

については、体部が内湾して立ち上がり、口径が小さく、口縁端部が肥厚せず、器壁が全体的に厚いなど、いくつかの点で他の須恵器の碗と特徴を異にしている。

- 土師器** 鍋と羽釜と器種の特定できない小片が出土しているが、図化できたのは1065の鍋だけである。口頸部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はやや右上がり方向のタタキ整形により、内面は横方向のナデ調整により仕上げられている。
- 瓦器** 碗の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。比較的しっかりとした輪高台をもつものである。
- 丹波焼** 捏鉢と甕が出土しているが、図化できたのは捏鉢のみである。口縁端部を外側下方に折り返して外端面を形成している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられているが、内面は使用による磨減が顕著である。
- 木製品** 環かんじき型大足の輪が3個体分出土している。いずれも下段底部に重なり合うように大足が置かれた状態で出土している。(第457図)
- W30を除いて、完形の状態で出土している。3点とも弓状に湾曲させ、一方の端部外面に「レ」状に削り出し接合部を形成するなど、共通した特徴を備えている。また、途中端部から32cmのところも、わずかに削り出している。ただし、削り出す面は前者と約90°異なる。樹種もカヤと共通している。
- W30は、残存長108cmを測り、径は1.8cmである。W31は、残存長130cmを測り、径は1.5cmである。W32は、残存長118cmを測り、径は1.5~1.8cmである。
- 時期** 出土土器より、川除15期と考えられる。
- 遺構の性格** 本土壇については、深く掘られた下段部が方形を呈し、一面ではあるが側板を備えていることから、井戸の可能性も考えられる。しかし、本土壇の下層は周囲と同じシルト層中であり、下段部の平面形が井戸にしては重であることなどから、井戸とするのは困難ではないかと考えられる。大足が出土していることから、これらを保管するための施設と考えたい。



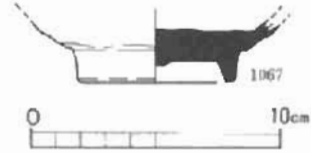
第459図 SK83出土木製品

第173表 SK83出土土器観察表

番号	器種	注量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	指数			
1062	須恵器・碗	(16.6)	4.3	(6.8)	—	—	24	灰白	口縁部1/4・底部1/2	
1063	須恵器・碗	(13.7)	4.8	(5.5)	—	—	35	灰白	1/4	
1064	須恵器・碗	(15.1)	残3.2	—	—	—	—	灰～灰白	口縁部1/8	
1065	土師器・楕	(22.0)	残6.2	—	(21.0)	—	—	にじみ槽	口縁部1/4	体部外面タキ整形/口頸部内外面ヨコナデ
1066	丹波焼・控鉢	(31.6)	残5.4	—	—	—	—	暗赤～暗赤灰	口縁部1/8弱	内外面ともヨコナデ/内面に使用痕あり

SK84

- 検出状況** Ⅲ区北東部、小徴高地b西端部に位置する。SK83の南西に位置し、SD61の西側に接している。他の遺構との切り合いはない。
- 形状・規模** 平面形は不整形な楕円形を呈する。検出面における規模は、長軸で83cm、その直交方向で70cmを測る。横断面は皿形を呈し、土壌中央における検出面からの深さは28cmを測る。
- 埋土** 灰色砂混じりシルト1層が堆積していた。
- 出土遺物** 土器のみが出土している。丹波焼と白磁が出土しているが、図化できたのは白磁碗1個体分のみである。
- 丹波焼** 甕か壺の口縁部片が出土している。
- 白磁** 図化した白磁は、IV類碗の底部と考えられる。
- 時期** 出土土器から川除15期と考えられる。



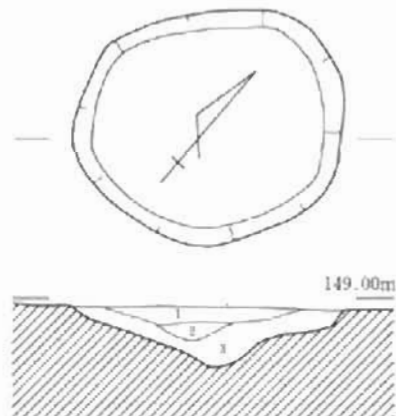
第460図 SK84出土土器

第174表 SK84出土土器観察表

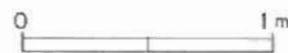
番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	胎厚			
1067	白磁・碗	—	残2.5	6.3	—	—	—	灰白	底部定存	

SK96

- 検出状況** Ⅲ区のはは中央部やや北西寄りで見出している。小徴高地bの南東の隅に存在している。SH64のすぐ西側、SD83のすぐ東側で見出している。当遺構と他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 形状はいびつな楕円形を呈する。検出した規模は以下のとおりとなる。
検出された部分は、長軸方向に108cmで、短軸方向に94cmを測る。土壌底では長軸方向に94cm、短軸方向に78cmである。検出面からの深さは20~24cmで、断面形は不定形ながら皿形を呈しているが、中央部では窪んでやや深くなっている。土壌底は水平ではなく傾斜している。壁面の傾斜角度は比較的緩やかである。当遺構の主軸と考えている長軸は北東-南西方向を指している。
- 埋土** 3層にわたって堆積している。上層に黄灰色シルト混じり極細砂、中層に明黄灰色シルト混じり極細砂、そして下層に灰色極細砂質シルトが堆積している。
- 出土遺物** 埋土中より土器が出土している。いずれも細片のため図化できなかつた。
弥生時代のものと思われる壺の口縁部と中世のものと考えられる須恵器の碗の底部が出土している。



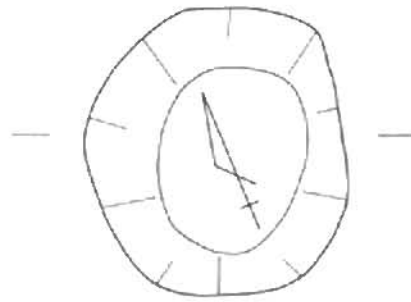
1. 黄灰色シルト混じり極細砂
2. 明黄灰色シルト混じり極細砂
3. 灰色極細砂質シルト



第461図 SK96

第5節 Ⅲ区の調査

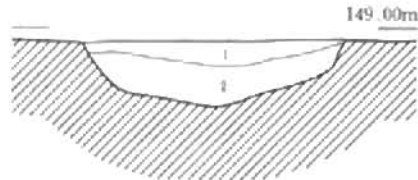
時期 出土している土器が弥生時代のもの中世のも
のとであり、時期にかなりの年代幅が認められる。
埋土の特徴などを勘案してみれば、当遺構は川除
13～14期と考えられる。



SK 97

検出状況 Ⅲ区の北東部の小徴高地bの南西縁で検出され
た。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は楕円形である。規模は、検出面での長
径は176cm、短径は69cmであり、土壌底での長径は
50cm、短径は39cmを測る。検出面からの深さは17
cmを測る。断面形は皿形を呈している。



- 1. 灰色シルト混じり極細砂
- 2. 暗灰色シルト混じり極細砂

埋土 2層に分かれ、灰色あるいは暗灰色のシルト混
じり極細砂の堆積が認められた。

出土遺物 土師器の甕が出土している。体部の破片のみで
あり、外面には縦方向のハケメが認められる。



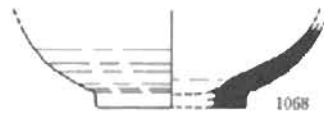
第462図 SK 97

時期 出土土器から川除13～14期と考えられる。

SK 100

検出状況 Ⅲ区の北東部の小徴高地bの南西縁で検出された。SD68を切っている。

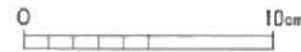
形状・規模 平面形は不整形である。規模は、検出面での長さ
は210cm、幅は145cmであり、土壌底
での長さは200cm、幅は132cmである。検出面からの深さは
25cmを測る。断面形は皿形を呈している。



埋土 灰色のシルト混じり極細砂の堆積が認められた。

出土遺物 埋土より須恵器の碗(1068)が出土している。

時期 川除11期と考えられる。



第463図 SK 100出土土器

第175表 SK 100出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	腹径	頸径	器大径	胎厚			
1068	須恵器・碗	—	残3.2	(5.6)	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	底部へリ起こし

SK 101

検出状況 Ⅲ区北西部の小徴高地dの東端、調査区の北端で検出された。SB36・37・38に切られ
ている。

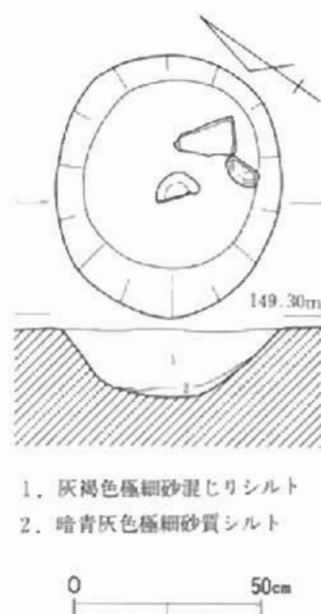
形状・規模 平面形は溝状を呈する。規模は、検出面での長さは10.5m、幅は2.70mであり、土壌底で
の長さは7.62m、幅は1.80mである。検出面からの深さは16～41cmを測る。断面形は皿形を

呈している。

- 埋土** 灰色シルト混じり極細砂の堆積が認められた。
- 出土遺物** 埋土より椀などの須恵器小片や、土師器の小片が出土しているが、図化できなかった。
- 時期** 川除11期である。

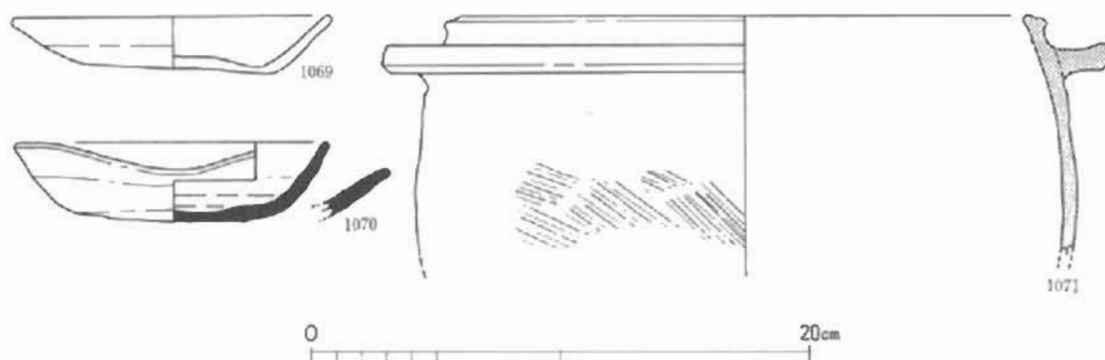
SK103 (図版118・119)

- 検出状況** 田区北東部の小嶺高地dの東端で検出された。周辺には中世の掘立柱建物が集中的に営まれている。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形である。規模は、検出面での長径68cm、短径60cmであり、土壌底での長径50cm、短径40cmを測る。検出面からの深さは18cmである。断面形はU字形である。
- 埋土** 2層に分かれ、上層に灰褐色の極細砂混じりシルトが、下層に薄く暗青灰色の極細砂質シルトが堆積している。



1. 灰褐色極細砂混じりシルト
2. 暗青灰色極細砂質シルト

第464図 SK103



第465図 SK103出土土器

- 出土遺物** 土壌底に接して土師器の皿、須恵器の椀、瓦器の羽釜が各1点出土している。
- 1070は、見込みに一定方向の仕上げナデが施されている。
- 1071は、瓦器の羽釜であり、銜端面にわずかに2条の擬凹線が巡っている。体部外面には2条/cmの左上がりタタキを施し、銜接合部以上は横方向のナデ仕上げである。
- 時期** 川除15期である。

第176表 SK103出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)					色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径			
1069	土師器・皿	12.5	2.4	7.3	—	—	19	ほぼ完全	底部手掘り
1070	須恵器・椀	12.3	3.1	5.6	—	—	25	灰白~灰	底部へラ起こし/外面に傾付角/ 部を片口
1071	瓦器・羽釜	(12.4)	既9.4	—	—	29.0	—	灰	口縁部1/4

その他の土壌

以上に掲載しなかったⅢ区の土壌のうち、平安時代～鎌倉時代に属すると判明したものの概略を一覧表にまとめることとする。

第177表 Ⅲ区 中世のその他の土壌一覧表（単位：cm）

遺構名	規模（検出面）		規模（土壌底）		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK76	123	113	78	67	25	楕円形	皿形	15期	須恵器・丹波焼
SK77	462	95	433	87	10	溝状	皿形		須恵器・土師器
SK79	318	148	275	100	62	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK92	215	114	186	66	22	不整形	皿形		土師器
SK93	62	40	23	15	35	楕円形	U字形		須恵器・土師器
SK99	137	123	97	94	56	円形	逆台形	15期	須恵器・陶器・磁器
SK102	108	83	105	80	45	円形	U字形		須恵器・土師器・緑釉

(4) 溝

SD61

検出状況 塚区北東部に位置する。ほぼ南北にのびる溝で、小徴高地bの西端のラインに沿っている。北側はSK83に、南側はSD63に切られている。

形状・規模 検出した長さは5.40mである。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは4～6cmと大変浅い溝である。検出面における幅は0.35～0.40mである。また、溝底部における標高は149.60mである。

埋土 灰色砂混じりシルト層1層が堆積していた。

出土遺物 全く出土していない。

時期 埋土および溝の方向から川除11～14期と考えられる。

SD62

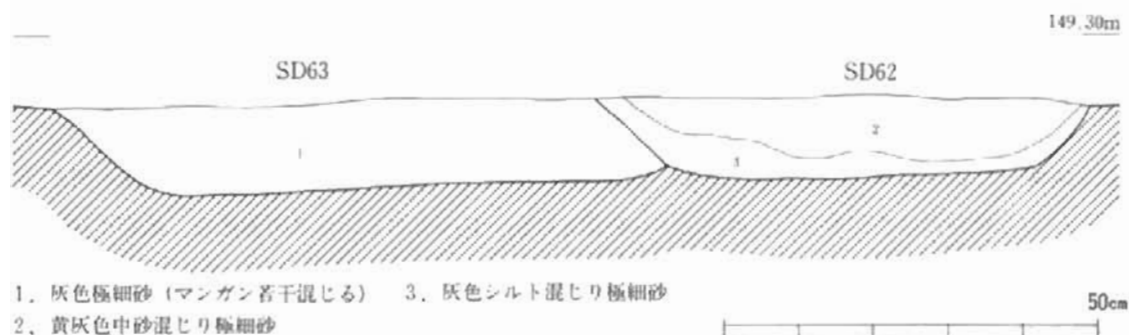
検出状況 Ⅲ区北東部、小徴高地b西端部に位置する。小徴高地bの西端ラインに沿ってのびており、わずかに弧を描いている。基本的には北東から南西方向にのびている。北東部は調査区北側までのび、南西部は調査直前まで使用されていた用水路によって切られ、途切れている。途中、SD63およびSH59・60を切っている。

形状・規模 検出した長さは19.5mである。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは12～15cmを測る。また検出面における幅は0.35～0.50mである。溝底部のレベルはほぼ一定しており、南端部で149.11mである。

埋土 灰色極細砂1層が堆積していた。

出土遺物 埋土中より、土器のみが出土している。器種としては、須恵器・土師器・白磁が出土しているが、いずれも小片で図化できるものはなかった。

須恵器 椀・捏鉢・甕が出土している。椀は、底部が内面見込みで一段落ち、口縁部を薄くおさめるタイプのものである。底部の切離しは糸切りによっている。



第466図 SD62・63横断面

土師器	器種の特定できるのは鍋に限られ、他の破片は器種が特定できない。
白磁	口縁端部の釉を削り落とす、いわゆる口禿タイプの皿に分類されるものである。
時期	出土土器が小片ばかりで、具体的な時期を特定することは困難であるが、白磁の特徴から、川除15期と考えられる。

SD63

検出状況	Ⅲ区北東部、小微高地b西端に位置する。SD62とはほぼ同じ位置にあたる。SD62同様小微高地b西端ラインに沿ってのびる溝で、基本的には南北方向に弧を描いてのびている。SD62に2ヶ所で切られており、北端はSD62に切られて途切れている。また南端はSH59・60の東側で自然に消滅している。
形状・規模	検出した長さは17mである。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは5～15cmである。検出面における幅は0.50～0.70mを測る。底部のレベルは南側ほど若干低くなっており、南端で149.07m、北端で149.12mである。
埋土	上から、黄灰色中砂混じり極細砂層、灰色シルト混じり極細砂層が堆積していた。
出土遺物	埋土中より土器のみが出土している。器種としては、須恵器の碗・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は、SD66出土の須恵器とはほぼ同タイプのものである。
時期	出土土器がSD66とほぼ同じであることから、川除11期と考えられる。

SD64

検出状況	Ⅲ区の北東部で検出された、小微高地bの西縁を限るような位置にある。溝は北東から南西方向にのび、小微高地bの南の低地に向かう。北端は調査区外であり、南端はSD83付近で消滅する。
形状・規模	長さは29.5mが確認された。幅は、検出面で0.65～1.65m、溝底で0.25～0.50mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは13～27cmである。溝底の標高は、北端で149.14m、南端で148.70mである。
埋土	灰白色極細砂質シルト層が堆積する。
出土遺物	土器は出土していない。
時期	埋土の特徴から川除11～14期と考えられる。

SD65

検出状況 III区の北東部で検出された、小徴高地bの西縁を限るような位置にある。溝は北東から南西方向にのび、小徴高地bの南の低地に向かう。北端は調査区外であり、南端はSD83付近で消滅する。

形状・規模 長さは24.0mが確認された。幅は、検出面で0.40～0.70m、溝底で0.15～0.55mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは10～15cmである。溝底の標高は、北端で149.13m、南端で148.79mである。

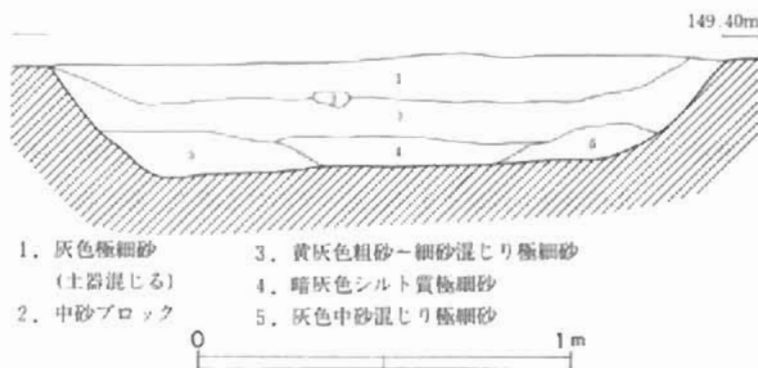
埋土 灰白色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 土器は出土していない。

時期 埋土の特徴から川除11～14期と考えられる。

SD66 (図版119)

検出状況 III区の北東部で検出された、小徴高地bの西縁を限るような位置にある。溝は北から南方向にのびたあと、幅を減じながら、南東方向に屈曲



第467図 SD66横断面

している。北端は調査区外であり、南端はSD63に切られている。SD64・SD65を切っている。

形状・規模 長さは32.0mが確認された。幅は、検出面で0.60～1.60m、溝底で0.50～1.00mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは10～32cmである。溝底の標高は、北端で149.06mである。

埋土 シルト系の細粒の堆積物が認められた。

出土遺物 埋土より、須恵器の碗・壺・杯・羽釜、土師器の杯・小皿・碗、黒色土器の碗が出土している。

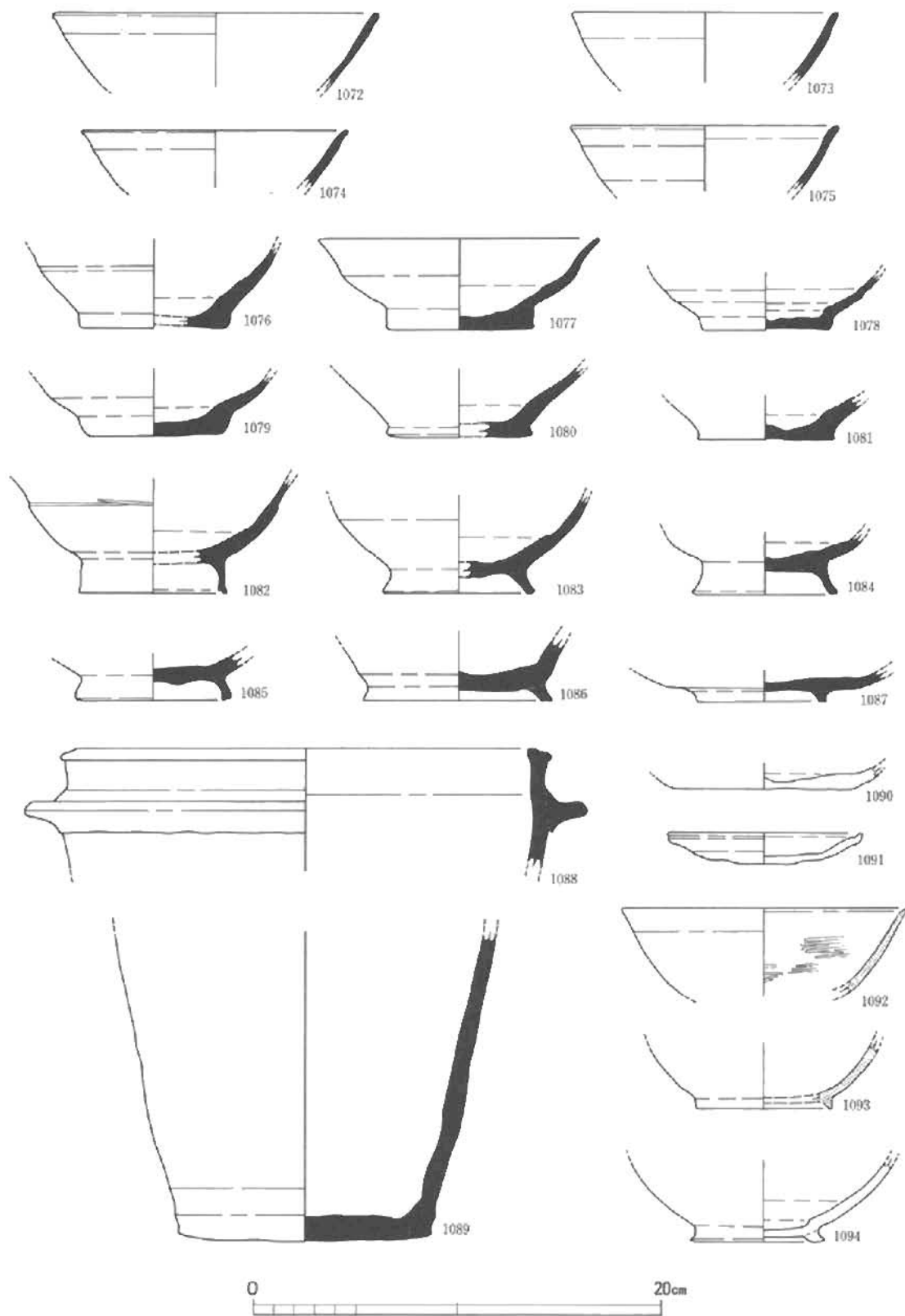
須恵器 碗の出土量が最も多い。体部には、中位に1条のヘラ描き沈線をもつものと、緩い段を形成するものがある。他に図化できなかったが、突帯碗(1095—図版119)も出土している。

底部の形状には、平底のもの、高台をもつものがある。前者には突出の強弱により二者に分けられ、後者は、垂直に下るものと外方に張るものがある。

調整については、口縁端部に強いヨコナデを施すものが多くみられ、これらの多くは相野窯跡群産と考えられる。

底部の切り離しには、ヘラ起こしのものが大半を占め、1078のように見込み部分が一段下がり、底部を回転糸切り手法をもって切り離すものがごく少数含まれている。

1087は杯である。底部からゆるやかに立ち上がる体部にかけての破片である。底部には



第468図 S D66出土土器

垂直に下がる小さな貼り付け高台がある。

1088は須恵器の羽釜である。やや斜め上方にのびる鋳をもつもので、口縁端部には、若干外傾する広い端面をもつ。

第5節 Ⅲ区の調査

1089は須恵器の壺である。やや大きめの粘土板を用いて底部とし、そこから比較的急に直立する体部を形成している。

1090は土師器の杯である。底部の切離しは回転糸切り手法を用いていると思われる。

1091は、土師器の小皿である。小さな底部と低い器高をもつ。口縁部には二段のヨコナデを施し、端部には一条の擬凹線を巡らしている。

1092・1093は、黒色土器A類の碗である。1092は内面に横方向のヘラミガキが認められる。1093の底部には、断面三角形の貼り付け高台を付す。

1094は土師器の碗である。小さく外方に踏ん張る高台をもつ。底部の切離しには、回転糸切り手法を用いている。

時期 出土土器の特徴から、川除11期と考えられる。

第178表 S D66出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	口径	最大径	出数			
1072	須恵器・碗	(15.7)	残3.6	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	
1073	須恵器・碗	(13.0)	残3.4	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	口縁部一割分を強い横ナデ
1074	須恵器・碗	(12.8)	残2.7	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	口縁部一割分を強い横ナデ
1075	須恵器・碗	(12.9)	残3.1	—	—	—	—	灰白	1/4	
1076	須恵器・碗	—	残3.9	(7.2)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部僅か	体部外面に一条の沈線/底部へラ起こし
1077	須恵器・碗	(13.8)	4.5	7.0	—	—	32	灰オリーブ	底部完全・口縁部僅か	底部へラ起こし
1078	須恵器・碗	—	残3.2	(6.2)	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	底部回転糸切り
1079	須恵器・碗	—	残3.2	(6.6)	—	—	—	灰白	底部3/4・体部僅か	底部へラ起こし
1080	須恵器・碗	—	残3.3	(7.2)	—	—	—	—	底部1/2	底部へラ起こし
1081	須恵器・碗	—	残2.1	(6.6)	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	底部へラ起こし
1082	須恵器・碗	—	残5.5	(7.1)	—	—	—	灰白	体部1/4・底部僅か	体部中に1本のへラ横沈線
1083	須恵器・碗	—	残4.7	(7.8)	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	
1084	須恵器・碗	—	残3.9	6.4	—	—	—	灰白-黄灰	底部1/2・体部僅か	
1085	須恵器・碗	—	残2.2	(7.6)	—	—	—	灰白	底部1/4	
1086	須恵器・碗	—	残3.1	9.1	—	—	—	灰白-灰	底部完全	内面にも自然輪付着
1087	須恵器・杯	—	残1.5	6.5	—	—	—	灰白	底部3/4	
1088	須恵器・羽釜	(21.8)	残5.9	—	—	(27.6)	—	灰白	1/4	口縁部内外面・体部外面ナデ/体部内面ナデ
1089	須恵器・壺	—	残14.9	12.2	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	底部へラ起こし/体部内外面ともナデ仕上げ
1090	土師器・杯	—	残1.2	8.6	—	—	—	灰白-黄灰	底部完全	底部糸切り/焼成やや小目
1091	土師器・小皿	(9.4)	1.5	—	—	—	16	にぶい赤橙	底部1/2	口縁部2段の横ナデ/口縁部端部に1本の擬凹線
1092	黒色土器・碗	(13.9)	残4.2	—	—	—	—	黒	口縁部1/8	内面のみに横方向のヘラミガキ
1093	黒色土器・碗	—	残3.2	(6.5)	—	—	—	黒陶-灰白	1/4	内面は磨滅のため調整不明/外面はナデとユビオヤエ
1094	土師器・碗	—	残3.8	(6.6)	—	—	—	灰白-灰黄	底部1/2完全	底部糸切りの後高台貼り付け/内外面とも横ナデ

S D 6 7

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出された、小徴高地bの西縁を限るような位置にある。溝は北東から南西方向にのび、小徴高地bの南の低地に向かう。北端は浅くなって消滅し、南端は現代の用水路によって切られている。

形状・規模	長さは3.30mが確認された。幅は、検出面で0.30～0.40m、溝底で0.20～0.30mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは7～10cmである。溝底の標高は、北端で149.07m、南端で149.03mである。
埋土	灰白色極細砂質シルトが堆積する。
出土遺物	土器は出土していない。
時期	埋土の特徴から川除11～14期におさまるものと考えられる。

SD74

検出状況	Ⅲ区の北西部で検出された、小徴高地dの東縁にある。溝は南北方向にのび、小徴高地d南側の低地に向かう。両端とも浅くなって消滅する。
形状・規模	長さは7.50mが確認された。幅は、検出面で0.40～0.50m、溝底で0.15～0.30mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは6～9cmである。溝底の標高は、149.14m程度で高低差はあまりない。
埋土	灰茶褐色極細砂質シルトが堆積する。
出土遺物	遺物は出土していない。
時期	埋土の状況および、掘立柱建物群との方向の共通などから、川除11～14期と考えるのが妥当であろう。

SD75

検出状況	Ⅲ区の北西部で検出された、小徴高地dの南東縁にある。溝は西北西から東南東方向にのび、等高線とはほぼ平行している。両端とも浅くなって消滅する。
形状・規模	長さは6.60mが確認された。幅は、検出面で0.35～1.00m、溝底で0.20～0.95mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは2～6cmである。溝底の標高は、149.20m程度で高低差はあまりない。
埋土	茶褐色極細砂質シルトが堆積する。
出土遺物	遺物は出土していない。
時期	埋土の状況および、掘立柱建物群との方向の共通などから川除11～14期と考えるのが妥当であろう。

SD76

検出状況	Ⅲ区の北西部で検出された、小徴高地dの南東縁にある。先述したSD75と同一の溝である可能性が高い。溝は西北西から東南東方向にのび、等高線とはほぼ平行している。両端とも浅くなって消滅する。
形状・規模	長さは6.70mが確認された。幅は、検出面で0.40～0.90m、溝底で0.32～0.70mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは4～13cmである。溝底の標高は、東端で149.20m、西端で149.10mと大差ない。
埋土	灰色極細砂質シルトが堆積する。
出土遺物	遺物は出土していない。

第5節 Ⅲ区の調査

時期 埋土の状況および、掘立柱建物群との方向の共通などから川除15期と考えるのが妥当であろう。

SD81

検出状況 Ⅲ区の北東部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地bの南西部の縁辺付近に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行に検出され、南東から北西の方向をとる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 長さは14.3mが検出された。幅は検出面で0.25～0.45m、溝底で0.15～0.27mを測る。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは4～7cmであり、溝底の標高は北西側で148.94m、南東側は149.08mとなっており、南東側から北西の方向に流れていたものと思われる。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。

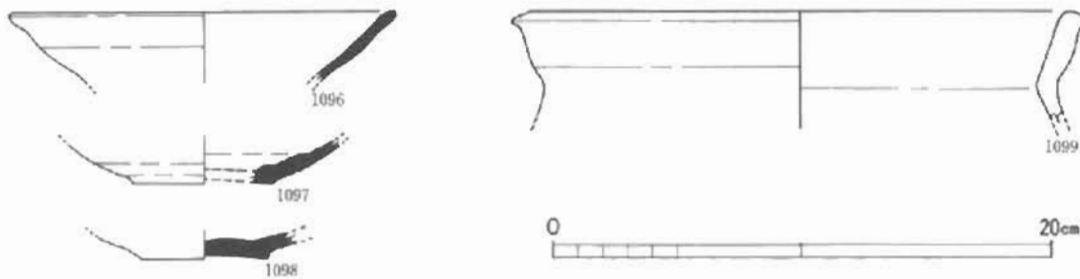
須恵器 碗の口縁部と底部および甕の小片が出土している。そのうちの3点を図化している。

土師器 鍋の口縁部が出土しているが、細片のため図化できなかった。

丹波焼 甕の口縁端部が出土しているが、細片のため図化できなかった。

この他、古墳時代の遺物と考えられる須恵器、土師器が若干出土しているが埋没時の混入と思われる。

時期 出土した遺物から川除14期と考えられる。



第469図 SD81出土土器

第179表 SD81出土土器観察表

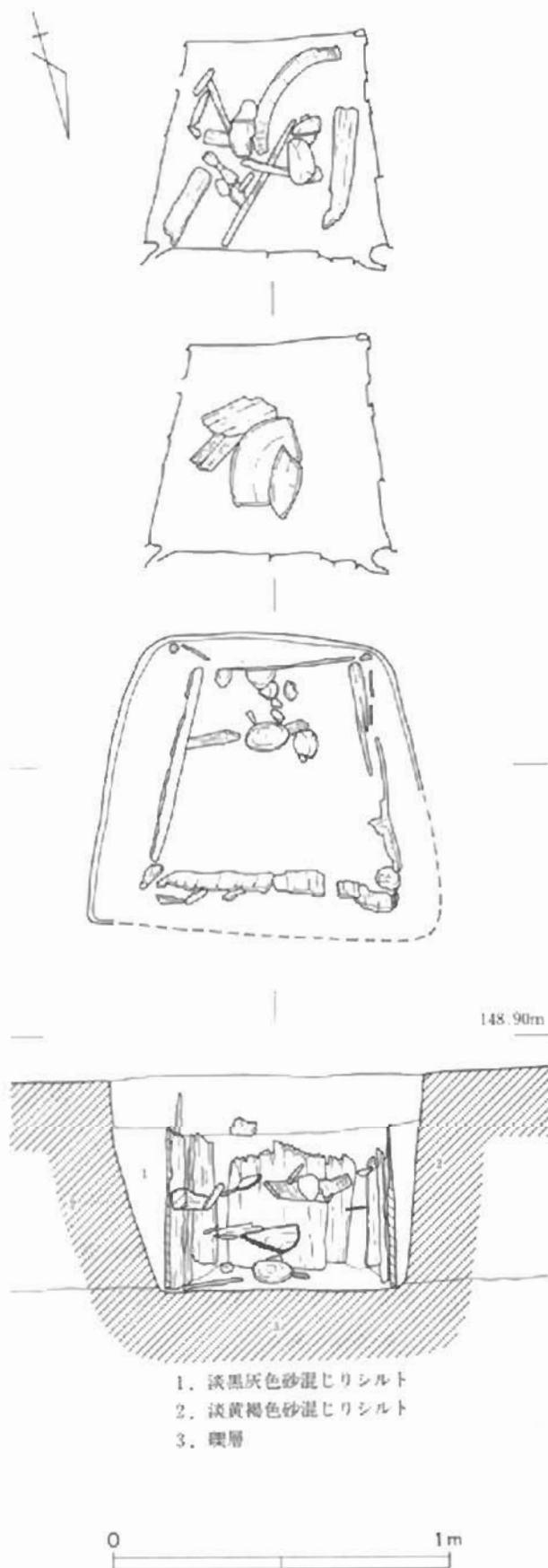
番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	器径	最大径	冊数			
1096	須恵器・碗	(14.8)	残2.8	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	
1097	須恵器・碗	—	残1.7	(5.6)	—	—	—	灰白	底部・体部僅か	底部回転糸切り
1098	須恵器・碗	—	残1.1	5.2	—	—	—	灰白	底部完存	底部回転糸切り
1099	土師器・鍋	(21.5)	残4.4	—	(20.6)	—	—	灰白～浅黄褐色	口縁部1/8	1～2mm大の砂粒を多く含む

(5) 井戸

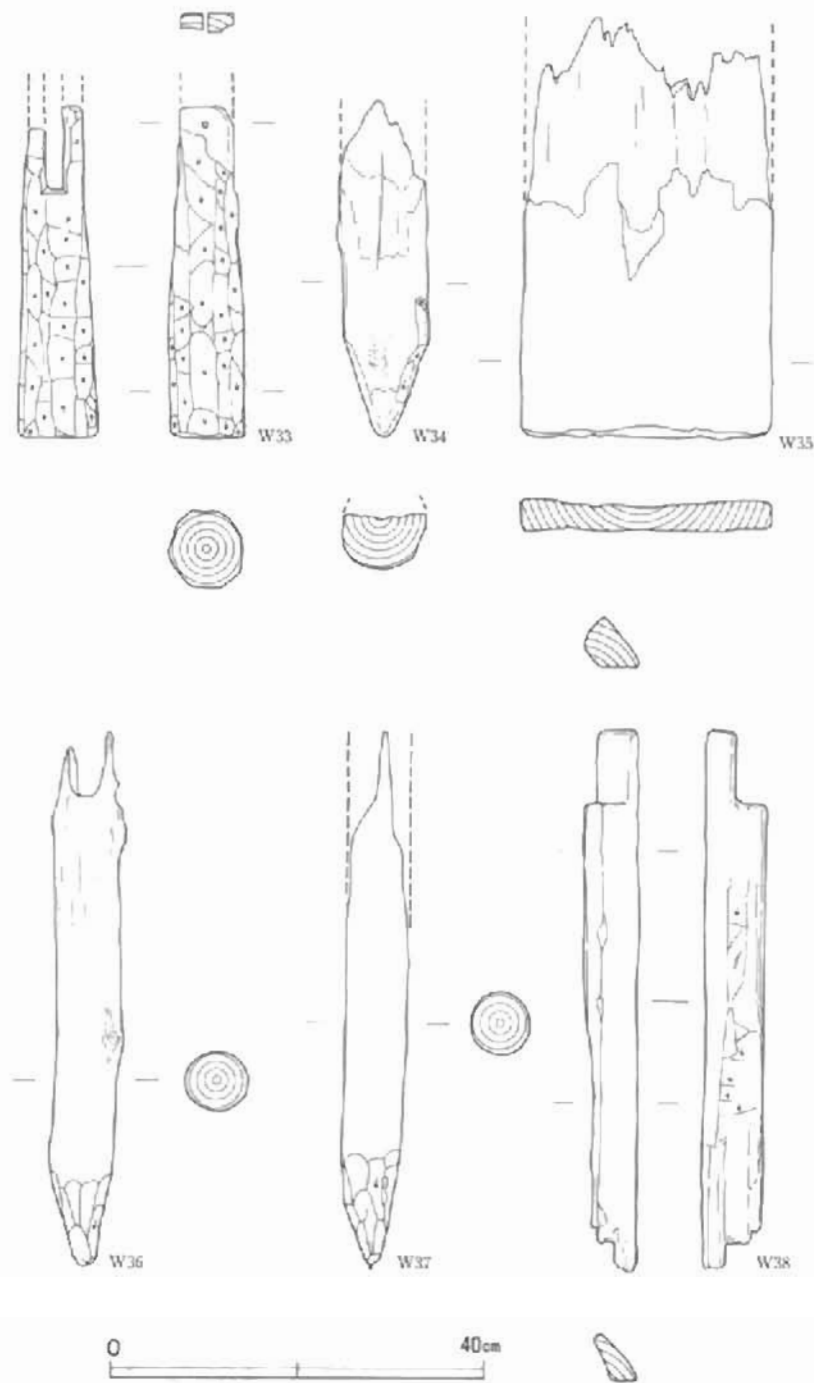
SE05

検出状況 Ⅲ区の北東隅、小微高地bの西端で検出された。SE06・07の北に隣接しており、他の遺構との切り合い関係は認められない。当遺構は、完掘することができなかったため、詳

- 掘り方 掘り方については不明とせざるをえない。
- 井戸側 掘り方内に組まれた井戸側は、隅柱に固定した棧で縦板を支持するものであり、規模は一辺約50cmである。
- 水溜 確認できなかった。
- 埋土 井戸側内の埋土については、下層の検討ができなかったが、上層は灰色ないしは暗灰色のシルトやシルト混じり砂などが堆積していた。
- 出土遺物 埋土上層より須恵器の碗が出土した。
- 時期 川除12~14期と考えられる。
- SE06 (図版104・120・122)
- 検出状況 Ⅲ区北東隅の小微高地bの西端に位置し、SE07を切る。
- 掘り方 一辺70~90cm程度の方形を呈している。掘り方の底は礫層に達しており、検出面からの深さは65cm、井戸底の標高は148.14mである。
- 井戸側 掘り方内に組まれた井戸側は、隅柱に固定した棧で縦板を支持するものであり、規模は一辺約50~70cmである。
- 隅柱 先端を杭状に削るものと、平坦なものとの二者がある。いずれも、心持ち丸太材を使用している。
- 棧 底より26cmの場所にあったことが判り、これと隣り合う辺の棧およびそのほぞ穴は確認でき



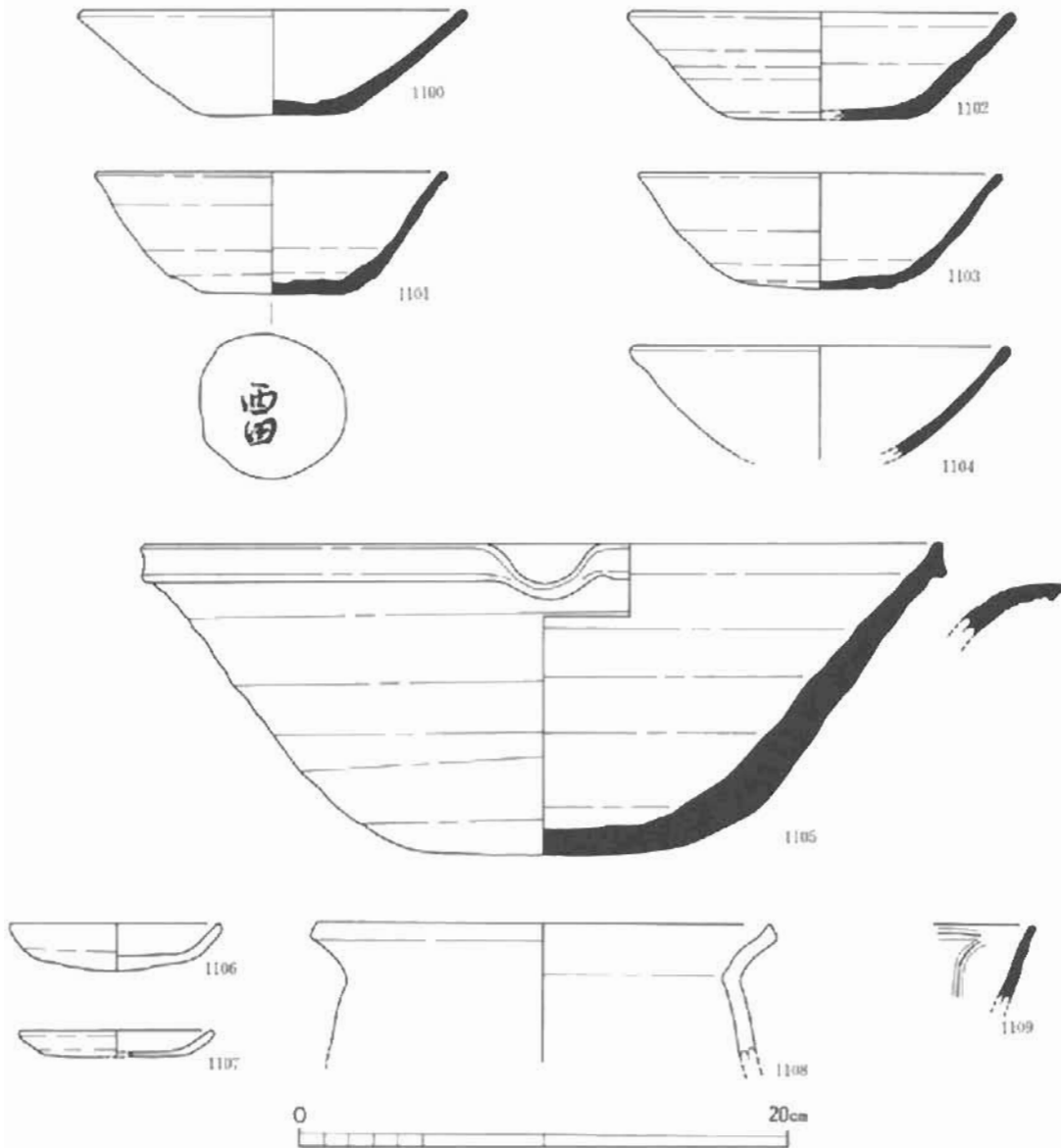
第470図 SE06遺物出土状況



第471図 SE06井戸材

なかったため、これより上方に存在したと思われる。

- 縦板 幅26cmを測る。
- 水溜 存在しない。
- 埋土 井戸側内の埋土には、灰色シルトが堆積している。掘り方の埋土には淡黒灰色砂混じりシルトが認められた。
- 出土遺物 井戸側内の埋土より、土器および木製品が出土している。
- 土器 須恵器の碗・捏鉢、土師器の小皿・甕、青磁碗などが出土している。1100は上層、1105は下層、1101・1106は最下層からの出土である。



第472図 SE06出土土器

須恵器 碗の1100・1102・1103には、底部内面に不定方向の仕上げナデがみられる。また、1101の底部外面には墨書がみられ、「西田」と判読できる。

土師器 小皿はナデ仕上げであり、1106は底部にユビオサエが認められる。1108の体部外面にはタタキの痕跡が、内面にはハケメが観察できる。

青磁 1109は青磁の碗である。小片であるが、内面に鎚蓮弁をもつ。

木製品 曲物蓋・木製鍾・用途不明品が出土している。

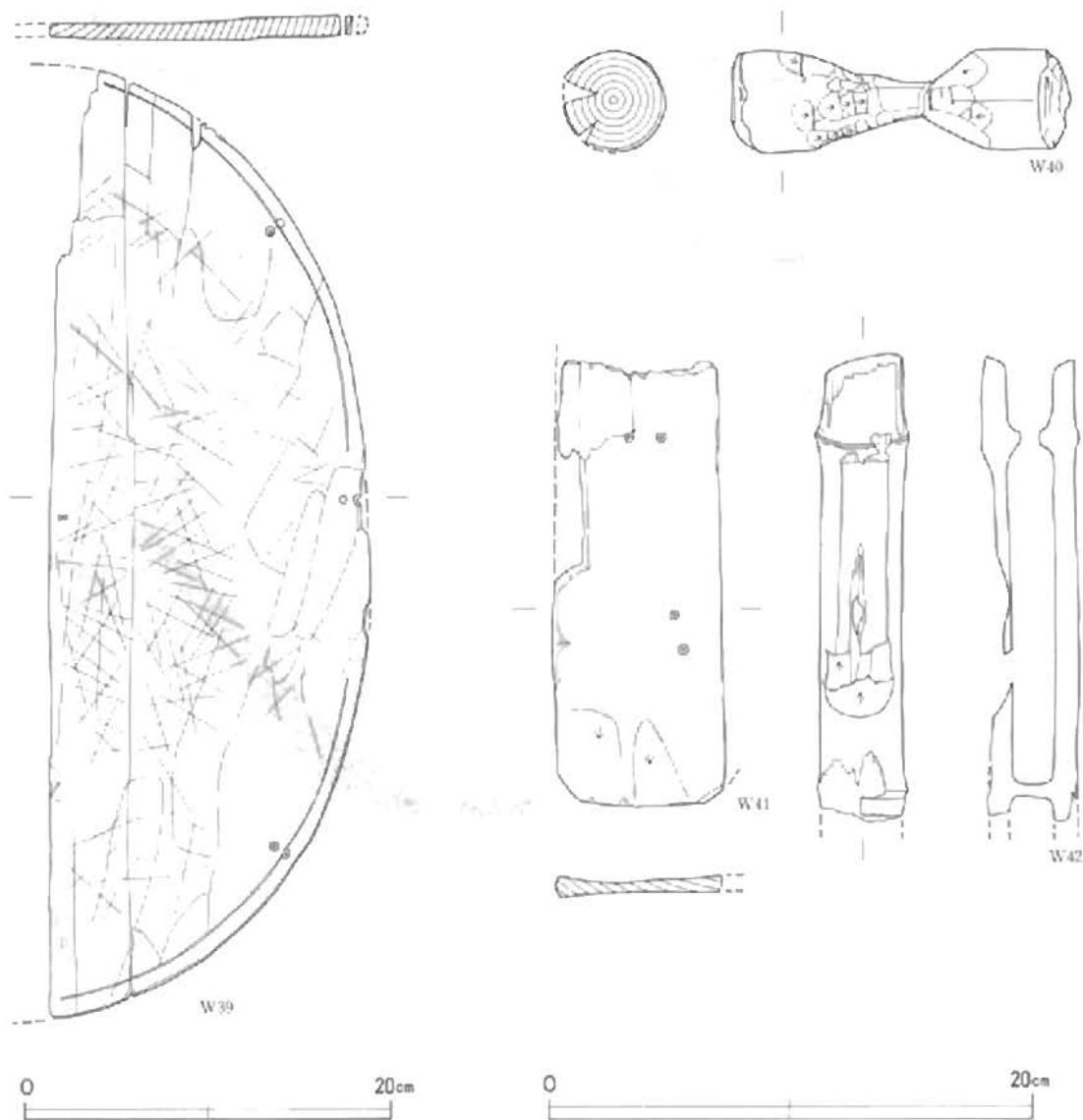
曲物蓋 W39は曲物の蓋であり、補修孔が認められる。内面には刃傷が多く残っている。復元される直径は55cmである。

木製鍾 W40は木製鍾である。長さは14.1cmを測る。

不明品 W41は用途不明の板状の木製品である。2個一対の円孔が2ヶ所に認められる。W42は竹である。節と節の間に削り痕がみられる。残存する長さは18.9cmである。

時期 川除14期である。

第5節 Ⅲ区の調査



第473図 SE06出土木製品

第180表 SE06出土土器観察表

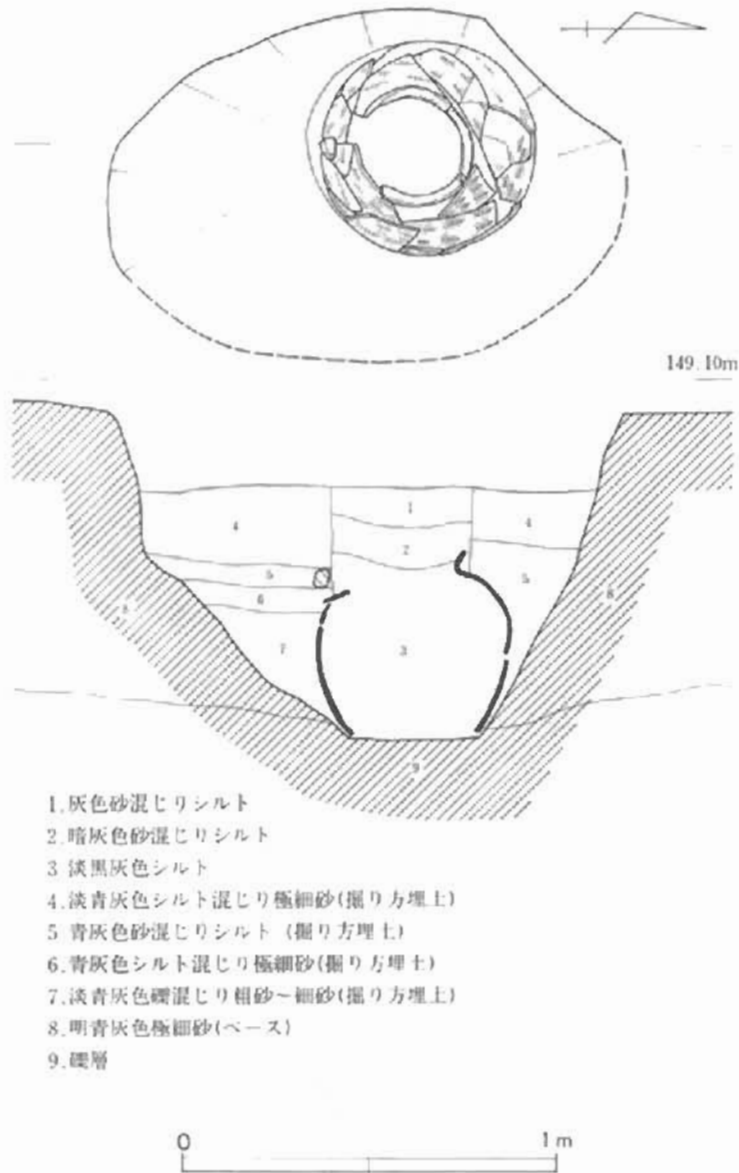
番号	器種	寸法 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	最大径	重量			
1100	甲虫器・筒	15.0	4.2	5.9	—	—	26	灰白	1/4	底部糸切りノコ2-3mmの残存
1101	甲虫器・筒	14.2	5.0	5.8	—	—	35	灰-灰白	完全	底部に墨書「西田」あり
1102	甲虫器・筒	15.2	4.4	7.0	—	—	28	灰	口縁部1/4	内面に墨痕ありノ二次焼成をうけている
1103	甲虫器・筒	14.5	4.7	6.7	—	—	32	灰白	1/2	二次焼成をうけている
1104	甲虫器・筒	15.0	残4.5	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	—
1105	甲虫器・段鉢	32.4	12.6	10.0	—	—	38	褐赤	1/5	底部根ナキ仕上げ
1106	土師器・小皿	8.4	2.0	—	—	—	25	灰黄	口縁部1/2	ほぼ精良な粘土
1107	土師器・小皿	7.9	1.1	5.0	—	—	13	灰白	口縁部1/4	ほぼ精良な粘土ノ底部ナキ仕上げ
1108	土師器・甕	108.6	残5.5	—	16.1	—	—	灰白	1/10	—
1109	青磁・筒	—	残3.2	—	—	—	—	灰オリーブ	口縁部僅か	内面に鉛遺存あり

SE07 (図版104・120)

検出状況 Ⅲ区の北東隅、小
微高地bの西端で検
出された。SE06を
切っている。

掘り方 短径47cm、長径70
cmの楕円形を呈する。
掘り方の底は礫層に
達しており、検出面
からの深さは86cm、
標高は148.15mであ
る。

井戸側 本遺跡で通常見ら
れる木組みの井戸側
ではなく、土器およ
び板材を井戸側に使
用するものである。
掘り方内に、底部を
打ち欠かれた須恵器
の甕が立位に据えら
れており、またこの
甕の肩部から上方に
は板材が数枚立った
状態で円形に巡って
いる。この両者が井
戸側を構成していた
ものと考えられる。



1. 灰色砂混じりシルト
2. 暗灰色砂混じりシルト
3. 淡黒灰色シルト
4. 淡青灰色シルト混じり極細砂(掘り方埋土)
5. 青灰色砂混じりシルト(掘り方埋土)
6. 青灰色シルト混じり極細砂(掘り方埋土)
7. 淡青灰色礫混じり粗砂～細砂(掘り方埋土)
8. 明青灰色極細砂(ベース)
9. 礫層

第474図 SE07

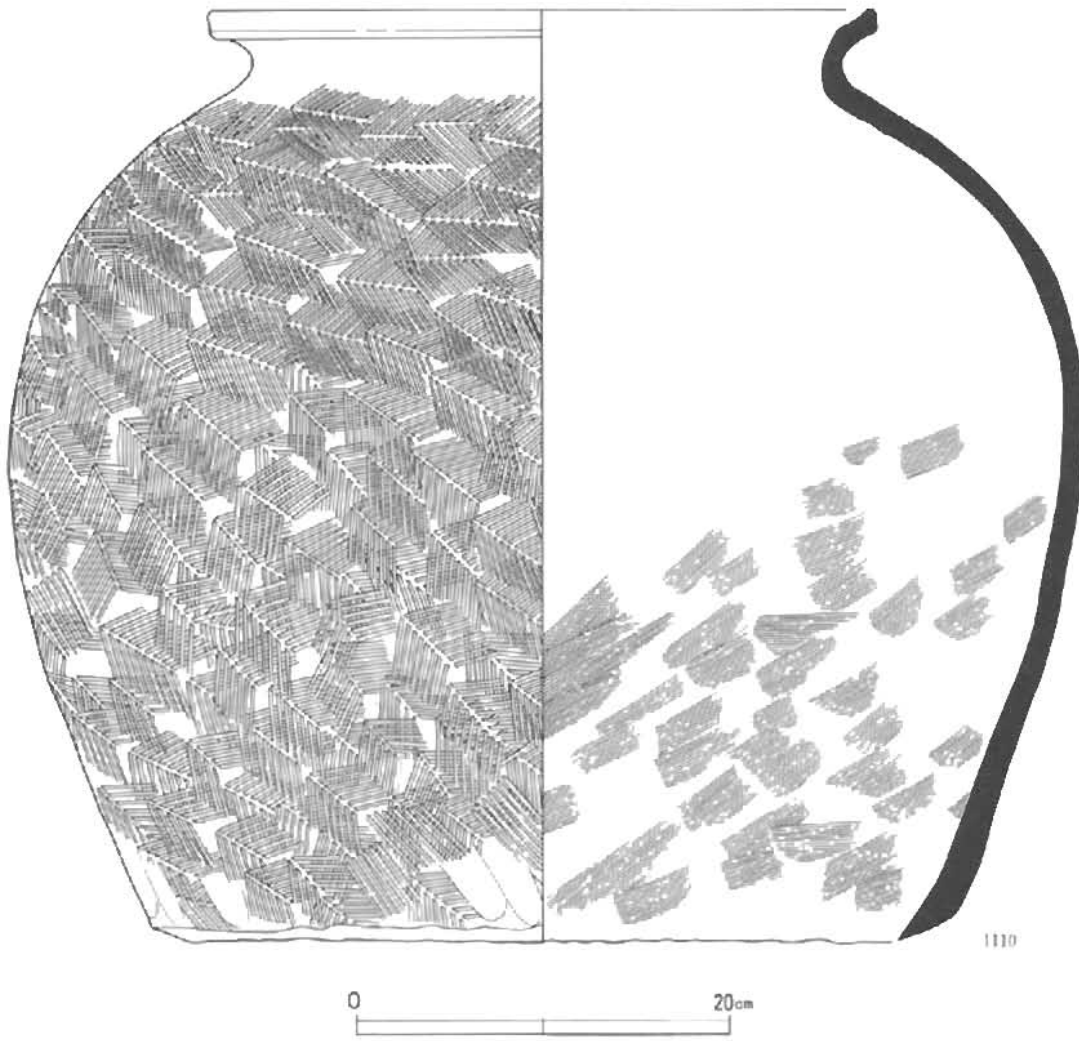
上部 井戸側の上部にあたる板材は、残存状況が不良のため、その構造などの詳細は不明である。土層断面の観察によれば、円形に並べた板材は、直径40cmの上部井戸側を形作っているようである。

下部 下部井戸側の須恵器の甕は、器高49.3cm、口径35.0cmを測る。また、底部には打ち欠きにより、直径38cmの開口部が形成されている。

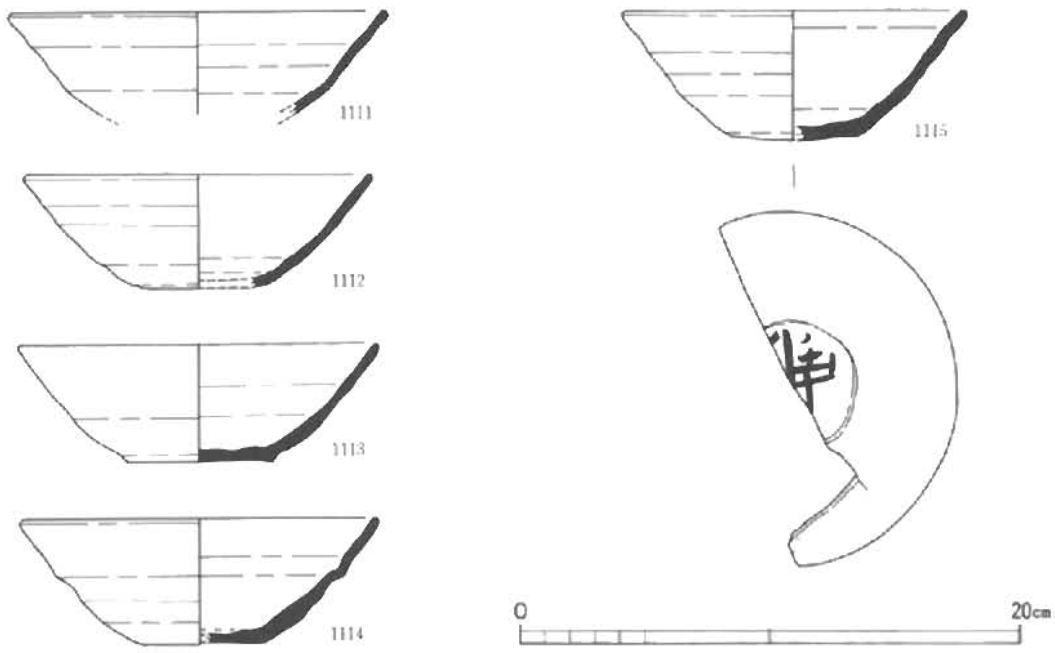
水溜 確認できなかった。

埋土 井戸側内の埋土には、上層に灰色あるいは暗灰色の砂混じりシルトが、下層の土器内には、淡黒灰色シルトの堆積が認められた。掘り方内にはシルト混じり砂などが堆積し、ブロック状のシルトなどが顕著に見受けられた。

出土遺物 埋土より須恵器の甕が5点出土している。底部の欠損する1111以外はすべて底部外面に糸切り痕が見られる。1114は、体部中位につまむように強くなでられたため、屈曲する部



第475図 SE07井戸側転用土器



第476図 SE07出土土器

分がある。1115は底部外面に墨書があるが、判読不明である。

1110は、井戸側に転用されていた須恵器の甕である。体部外面には綾杉状のタタキが全体に施され、下半には2条/cmの平行タタキが部分的に認められる。また、底部近くの外面には、板状工具により下から上方になでられた痕跡も観察できる。体部内面には5～6条/cmの右上がりのハケメが施され、上半から口縁部外面にかけてはさらに横方向のナデで仕上げられている。体部外面に施された綾杉状のタタキの1単位は、軸長が5cmであり、左右にのびる各11本の枝の長さは約3cmを測る。

時期 川除14期である。

第181表 SE07出土土器観察表

番号	器種	寸法 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	口径	口径	器大径	胎数			
1110	須恵器・甕	35.0	49.3	—	22.5	37.5	—	灰～灰白	体部以上だけ完存	焼成やや不食/体部下半を打ち欠き井戸本間に転用
1111	須恵器・甕	(14.8)	4.1	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	
1112	須恵器・甕	(14.4)	4.6	(3.6)	—	—	31	灰～灰白	口縁部1/8	
1113	須恵器・甕	(14.2)	4.7	5.9	—	—	33	灰白	1/2	
1114	須恵器・甕	(14.1)	5.0	(5.1)	—	—	35	灰	1/4	
1115	須恵器・甕	(13.6)	5.1	(3.6)	—	—	37	灰白	1/2	底部に墨書あり(判読不明)

SE08 (図版110)

検出状況 Ⅲ区の南西部で検出された。SB43・SB46・SB48にかこまれた場所に位置している。SB45と重複して検出されているが、他の遺構との切り合い関係は認められない。面的に言えば掘立柱建物と同一面で検出している。

掘り方 掘り方の平面形はややいびつながら円形を呈している。規模は直径145cmを測る。検出面から底面までの深さは155cmを測り、曝層にまで達している。掘り方の断面形は不定形を呈している。すなわち、西側の部分はほぼ直に掘り下げており、水溜の部分のみさらに掘り下げておいて、東側の部分では約85cmを先ず直に掘り下げ、やや水平にテラスの部分を作り出したのち、約40cmをさらに直に掘り下げておいて、さらに水溜の部分掘り下げておいたため、都合、3段の掘り下げが観察される。2段目の掘り下げの段では、井戸枠の底部を支えている。

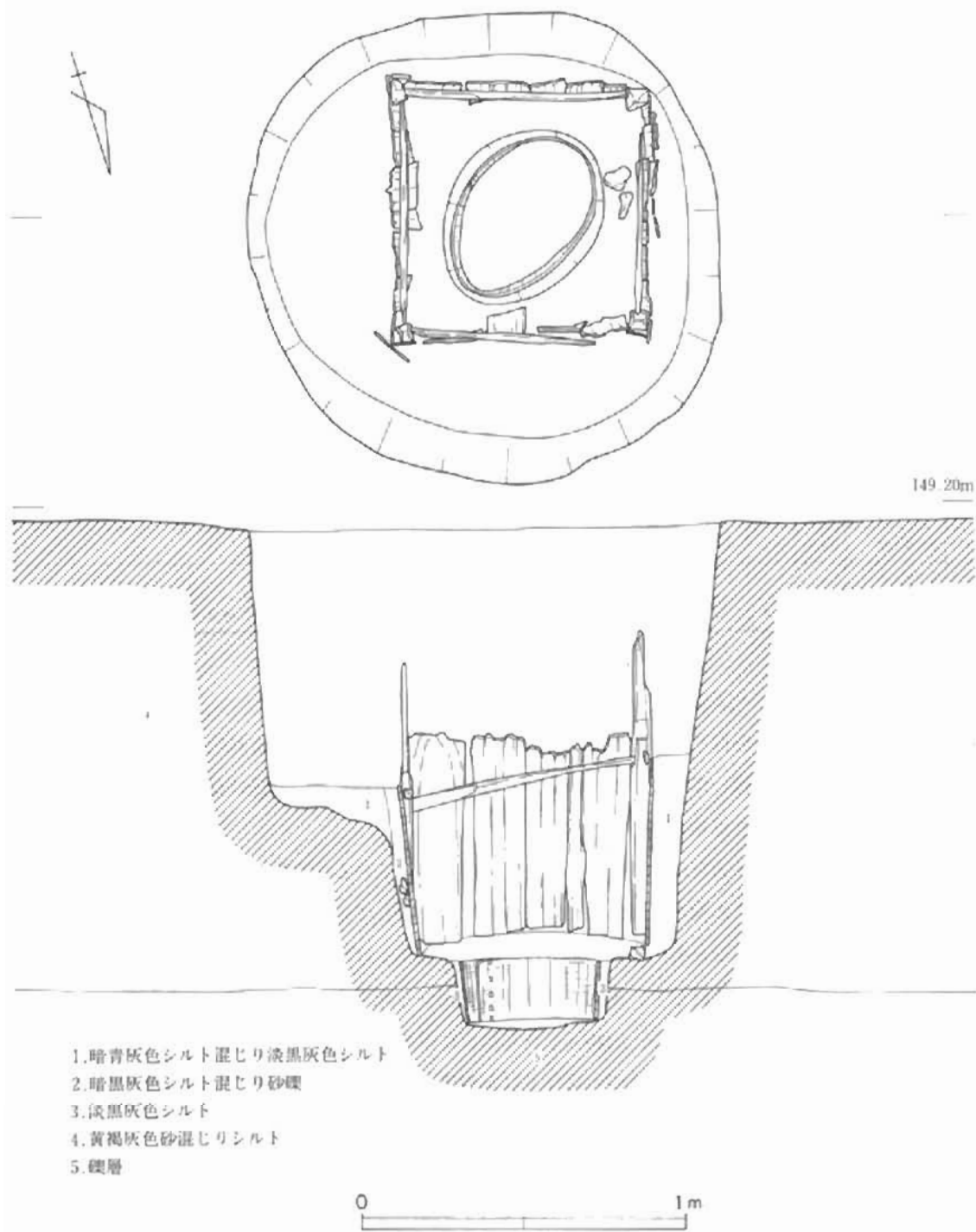
井戸側 掘り方の中心から少しずれ、南西部に偏って組まれている。平面形は方形を呈する。井戸側は、隅柱に固定した棧で縦板を支持するものであり、規模は一辺約80cmを測る。

隅柱 心持ちの丸太材でありそれを方形に整形している。棧を固定するほぞ穴を2方向に穿っているのが認められた。

縦板 幅約15～20cmのものを4～5枚並べて井戸側の一辺となしている。厚さは約3cm程度で、残存長は最大で70cm程度である。

棧 縦板を支持している棧は、方形の井戸側のすべての辺にみられる。底面から45～60cmの位置に1段確認されている。これらの棧は心持ち材を方形に整形しているもので、隅柱のほぞ穴に挿入できるように両端を細く削り出している。

埋土 井戸側内の埋土は、人為的に埋めた土である。以下は3層にわたって堆積している。暗



1. 暗青灰色シルト混じり淡黒灰色シルト
2. 暗黒灰色シルト混じり砂礫
3. 淡黒灰色シルト
4. 黄褐灰色砂混じりシルト
5. 礫層

第477図 SE08

青灰色シルト混じり淡黒灰色シルト、暗黒灰色シルト混じり砂礫、淡黒灰色シルトの堆積が認められる。

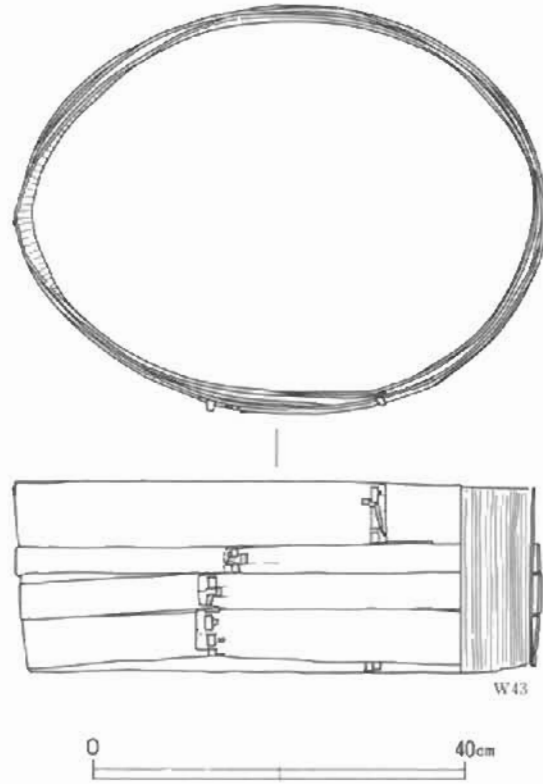
水溜 掘り方は水溜の部分のみ、最終的に掘り下げており礫層まで達している。その掘り方内に曲物を据え付けている。曲物の平面形は楕円形を呈する。

曲物 平面形が楕円形を呈している。長軸方向に54.5cm、短軸方向に39.0cmで、高さが20cmである。底板はもっていない。側板の縦じは1ヶ所、縦じ方は2列前上内下外9段縦じである。底板がないため、曲物本体を補強する意味で籠が3段につけられている。上段の籠の

縦じは2列前外2段後内1段縦じである。中段の籠の縦じは2列前外2段後内1段縦じである。下段の籠の縦じは2列前外3段後内2段縦じである。それぞれ縦じは1ヶ所である。側板の底面には垂直方向のケビキがいられている。

出土遺物 井戸側内より、須恵器の小片が1点出土している。

時期 同じ屋敷地を構成すると考えられるS B 43～S B 48と時期的に一致するものと考え、川除13～14期と考えられる。



第478図 SE08水溜

兵庫県文化財調査報告 第104冊

かわ よげ ・ ふじ の き
川 除 ・ 藤 ノ 木 遺 跡

— 武庫川河川改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成4年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2-1-5
発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下入手通5-10-1
印刷 日本写真印刷株式会社
〒604 京都市中京区壬生花井町3
